上コブケ遺跡

― 西関東連絡道路第Ⅱ期建設工事に伴う発掘調査報告書 ―

２０１４．３

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

上コブケ遺跡 C 区南側調査区全景（北より）

上コブケ遺跡 C 区北側調査区全景（南より）

上コブケ遺跡 C 区全景

上コブケ遺跡 D 区全景（南から）

あらまし

上コブケ遺跡は、山梨市北・南地内にあります。西関東連絡道路の建設のため、13,667㎡の道路予定地内について、平成23年5月から平成24年8月にわたって発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代中期(約5000年前）と奈良・平安時代のムラの跡が発見されました。また、「東京陸軍兵器補給廠山梨分廠」として掘削された兵器貯蔵庫とされる防空壕の調査や、ナウマン象化石が発見された兄川河床遺跡の自然科学調査もあわせて実施しました。ここでは、縄文時代と奈良・平安時代のムラの調査成果を解説します。

人面装飾付土器

● 縄文時代のムラ

縄文時代のムラは調査範囲の西側にありました。縄文時代の家は竪穴住居です。竪穴住居跡は、地面を円形に掘り窪め、床を敲き占めて、中央に石で囲った炉を設けてあります。竪穴住居跡は、4軒発掘されました。その、家に囲まれた場所に、配石が築かれていました。配石は、人の頭ほどの大きな石を並べたもので、上コブケ遺跡では、これに石棒と立石が組みこまれていました。石棒は、男根形に加工された石の棒で、縄文人の信仰の対象とされています。

埋　甕

一方、立石は加工されていませんが、細長い棒の形の石です。さらに、配石のそばから、水晶を加工した跡が2か所発見されました。ここでは、おそらく金峰山南麓などの沢筋から採ってきた水晶原石を加工して、石鏃（せきぞく）などを作っていました。石鏃とは、狩りに使う弓矢の先に付けた石のやじりのことです。上コブケ遺跡では、約1.4kgもの水晶が発掘されました。縄文時代の遺跡では一般的に黒曜石を使って石鏃などを作ります。黒曜石は主に長野県の霧ケ峰周辺などでたくさん採取でき、上コブケ遺跡でも約2.7kg出土し、石器全体の約7割は黒曜石ですが、残り3割が水晶というのは他の遺跡には見られない多さであり、大きな特徴です。さらに、注目されるのは人面付き土器の埋甕です。埋甕とは、縄文土器を立てて埋めたもので、こどものお墓などと考えられています。その土器のおなかの部分にかわいい顔がついていました。

水晶製石器（手前が石鏃、後方が剝片、石核、原石）

黒曜石製石器（手前が石鏃、後方が剝片、石核、原石）

● 奈良・平安時代のムラ

上コブケ遺跡の調査範囲の東半分で奈良・平安時代のムラが発掘されました。奈良時代中頃（8世紀中頃）から平安時代中頃（10世紀後半）までの竪穴住居跡が24軒、掘立柱建物跡が21棟、発掘されました。掘立柱建物跡とは、四角の範囲に柱を配置して、柱を地

中に埋めて立てる建物で、竪穴住居跡とは違い、倉庫などとして利用されたものと考えられます。その数の多さは県内ではあまり例がなく、注目されます。また、奈良・平安時代の竪穴住居はカマドをもっています。そのカマドの下に埋め込まれて須恵器の小壷が出土したり、竪穴住居跡の四隅から完全な形の坏（つき：お椀）が出土するなど、信仰に関わる資料が発掘されました。さらに、火事で焼けた竪穴住居跡もあり、注目されます。この集落は、平安時代の書物に記述され、朝廷から供物が届けられる有力な神社である大井俣窪八幡神社が近くにあり、その維持・管理のために働いている人々に関連するムラではないかと推定されます。

竪穴住居跡

堀立柱建物跡

上コブケ遺跡西側を流れる兄川に架かる橋の工事に際して地層の自然科学分析を行いましたが、平安時代前半の９～10世紀の地層が厚く堆積していることが確認されました。その堆積物の中から、種実

や花粉化石が発見され、イネ、コムギ、アワ、ソバ属、エゴマの栽培されていた植物の存在が確認されました。なかでもイネが圧倒的に多いのですが、こうした内容の食糧の生産が、上コブケ遺跡の平安時代のムラで行われていたことが確認されたことは大きな成果となりました。

須恵器の小壺

● 旧石器時代のやり先

また、旧石器時代の2万年ほど前と思われるナイフ形石器が発見されたことも重要です。やり先に付けて、狩りの道具などとして使われました。峡東地域では釈迦堂遺跡群でまとまった資料が得られているものの、あまり発見例がありません。

旧石器時代のナイフ形石器（長さ 3.5 ㎝）

序

本書は、西関東連絡道路の建設のため、山梨市北・南地内で発掘調査した上コブケ遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は、平成23年5月から平成24年8月にわたって13,667㎡の道路予定地内で実施しました。その結果、縄文時代中期と奈良・平安時代のムラの跡を発見できました。

また、上コブケ遺跡の南西に伸びる道路用地内には、戦中に「東京陸軍兵器補給廠山梨分廠」として掘削された兵器貯蔵庫とされる防空壕跡及びナウマン象化石が発見された兄川河床遺跡が存在しますので、これらの調査もあわせて行いました。

調査範囲の西側にありました縄文時代のムラでは、人の頭ほどの大きな石を並べた配石遺構を取り囲んでいるような位置関係にあった4軒の竪穴住居を調査しました。配石遺構の中央部には石棒と立石が組みこまれていました。さらに、配石のそばから、2カ所の水晶を加工した場所を発見しました。本遺跡では、約1.4kg もの水晶が出土しましたので、おそらく金峰山南麓などの沢筋から採ってきた水晶原石を加工して、石鏃（せきぞく）などを作っていたと考えています。一般に使用される黒曜石は上コブケ遺跡でも約2.7kg 出土しておりますが、水晶と黒曜石の比率が1:2であり、水晶の多さが注目されます。また、土器の胴部にかわいい顔がついた縄文時代中期後半の埋甕が出土したことも注目されます。

調査範囲の東半分では、奈良・平安時代のムラを調査しました。奈良時代中頃（８世紀中頃）から平安時代中頃（10世紀後半）までの竪穴住居跡が24軒、掘立柱建物跡が21棟を発掘しました。調査面積に対する掘立柱建物跡の遺構数の多さは県内ではあまり例がなく、注目されます。また、竪穴住居のカマドの下からは、須恵器の小壷が出土し、住居跡の四隅から完全な形の坏（つき：お椀）が出土するなど、信仰に関わる資料も発見されました。この集落跡は、平安時代の記録に登場する有力な神社である大井俣窪八幡神社が近くに位置するため、神社との関連が推定される山梨の古代史上で重要な遺跡と思われます。

本遺跡西側を流れる兄川に架かる橋の工事に際して地層の自然科学分析を行いましたが、平安時代前半の９～ 10世紀の地層が厚く堆積しており、その堆積物の中から、種実や花粉化石が発見され、イネ、コムギ、アワ、ソバ属、エゴマ等の栽培植物の存在が確認されたことも大きな成果です。

以上、本調査報告書の概要を紹介しましたが、本書が掲載する旧石器時代から近代までの調査データ及び分析は、複数の担当職員が現場作業と室内作業をリレーしながらまとめたものでありますので、これからの歴史的研究に大いに役立つことを願っております。

平成26年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長　八巻　與志夫

例　言

1．本書は、山梨県山梨市北および南地内に所在する上コブケ遺跡の発掘調査報告書である。また、上コブケ遺跡の西側に隣接した地点で実施した兄川河床遺跡調査と防空壕３次元測量調査の成果についても合わせて報告する。

2．本調査は、県土整備部の依頼を受けて山梨県教育委員会が実施した、西関東自動車道路第Ⅱ期建設工事に伴う発掘調査である。

3．発掘調査および整理作業、報告書刊行は、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

4．本書の執筆は､以下のとおりに分担した｡第１章を保坂康夫と笠原みゆき､須長愛子､第２章を保坂と青木真一、第３章を保坂、第４章第１節を保坂と笠原、同章第２節を塩谷風季、同章第３節を柴田亮平、同章第４節を田口明子、第６章を保坂、第７章３（１）を御山亮済、それ以外の第７章を保坂が執筆した。また、第５章は、委託先がそれぞれ執筆し、会社名を各節の冒頭に掲示した。全体の編集は、保坂が行った。

5．発掘調査や整理作業にあたり､以下の事項について作業を委託し実施した。基準点測量を昭和測量株式会社、空中写真撮影・全体図及び遺物微細図写真実測を株式会社シン技術コンサル、鉄器保存処理を公益財団法人山梨文化財研究所、自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社加速器分析研究所、兄川河床遺跡調査をパリノ・サーヴェイ株式会社、防空壕３次元測量調査を昭和測量株式会社に委託した。

6．本書にかかわる出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管する。

7．本書をまとめるにあたり、次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げるしだいである。
櫛原功一、平野修、三沢達也、室伏徹

凡　例

1　各遺構の層序は現地調査段階での番号を踏襲した。

2　全体図は 1/200 を基準とし、遺構実測図は 1/60・1/40・1/30、遺物実測図は 2/3・1/3 の縮尺とし各々スケールを付した。

3　遺構観察表及び遺物観察表中において（　）内の数値は残存値・推定値を表す。

4　遺構図版の網点は焼土、石を表す。

5　遺物図版では須恵器は断面黒塗り、灰釉陶器は断面網点、内面黒色土器は黒色処理面を黒塗りとした。

目　次

あらまし
第１章　調査の経緯と経過
　第１節　発掘調査に至る経緯と経過…… 1
　第２節　調査の組織
　　（１）平成 23 年度調査体制 …… 2
　　（２）平成 24 年度発掘調査および本格的整理作業 …… 2
　　（３）平成 25 年度本格的整理作業 …… 3

第２章　遺跡周辺の環境
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 4

第３章　調査の方法および基本層序と概要
　第１節　発掘調査の方法…… 8
　第２節　基本層序…… 10
　第３節　調査の概要…… 11

第４章　発掘された遺構と遺物
　第１節　Ａ区
　　Ａ－１区…… 12
　　（１）土坑…12　　（２）溝…12　　（３）ピット…12
　　（４）グリッド出土遺物…12
　　Ａ－２区…… 12
　　（１）土坑…12　　（２）溝…13　　（３）ピット…13
　　（４）グリッド出土遺物…13
　　Ａ－３区…… 13
　　（１）竪穴住居跡…13　　（２）掘立柱建物跡…15　　（３）土坑…16
　　（４）溝…16　　（５）ピット…16　　（６）グリッド出土遺物…16

　第２節　Ｂ区…… 60
　　（１）調査の方法と成果…60　　（２）基本層序…60
　　（３）発見された遺構と遺物…60　　（４）埋甕…63
　　（５）土器集中範囲…66　　（６）焼土…66　　（７）土坑…67
　　（８）ピット…70　　（９）遺構外出土遺物…75　　（10）土偶…75
　　（11）その他土製品…76　　（12）ミニチュア土器…77
　　（13）土製円盤…77　　（14）台形土器…77　　（15）石器・石製品…77

第３節　Ｃ区……187
（１）竪穴住居跡…187　（２）掘立柱建物跡…189　（３）焼土跡…192
（４）土坑…192　（５）ピット…195　（６）溝…196
（７）集石…198　（８）遺構外出土遺物…198　（９）旧石器時代石器…202

第４節　Ｄ区……285
（１）遺構 ……285
1　住居跡…285　2　掘立柱建物跡…285　3　焼土跡…285
4　土坑…285　5　ピット…285　6　溝…285
7　暗渠　285

（２）遺物 ……285

第５章　自然化学分析
第１節　上コブケＡ遺跡出土炭化材の樹種……341
第２節　上コブケＡ遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）……343
第３節　上コブケ遺跡Ｂ区の自然化学分析（１）……346
第４節　上コブケ遺跡Ｂ区の自然化学分析（２）……349
第５節　上コブケ遺跡Ｂ区出土縄文土器の胎土分析……353
第６節　上コブケ遺跡Ｃ区の自然化学分析……360
第７節　上コブケ遺跡Ｄ区の自然化学分析……365

第６章　兄川河床遺跡の調査
第１節　国道１４０号西関東連絡道路建設に伴う兄川河床遺跡の現地調査……371
第２節　兄川河床遺跡の自然化学分析……385

第７章　防空壕３次元測量調査……419
第８章　総括……426

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　上コブケ遺跡調査区配置と西関東道路工事区域(№1 ～ 4は、兄川河床遺跡調査地点) …… 1
第２図　上コブケ遺跡調査区と周辺地形図（№1 ～ 4は、兄川河床遺跡調査地点）…… 4
第３図　峡東地域の縄文時代遺跡分布…… 6
第４図　峡東地域の地形別遺跡数…… 6
第５図　峡東地域の後期古墳と平安時代遺跡分布…… 6
第６図　峡東地域の条里プラン…… 6
第７図　上コブケ遺跡全体図・グリッド配置図…… 9
第８図　上コブケ遺跡基本土層図…… 10
第９図　上コブケ A 区遺構全体図 …… 27
第10図　上コブケ A 区竪穴住居跡・掘立柱建物跡配置図 …… 28
第11図　上コブケ A 区土坑・溝配置図 …… 29
第12図　上コブケ A 区ピット配置図 …… 30
第13図　上コブケ A 区土坑（A-1区） …… 31
第14図　上コブケ A 区溝（A-1区） …… 32
第15図　上コブケ A 区ピット (A-1区) …… 33
第16図　上コブケ A 区土坑・溝 (A-2区) …… 34
第17図　上コブケ A 区竪穴住居跡　(1)　(A-3区) …… 35
第18図　上コブケ A 区竪穴住居跡　(2)　(A-3区) …… 36
第19図　上コブケ A 区竪穴住居跡　(3)　(A-3区) …… 37
第20図　上コブケ A 区竪穴住居跡　(4)　(A-3区) …… 38
第21図　上コブケ A 区竪穴住居跡　(5)　(A-3区) …… 39
第22図　上コブケ A 区掘立柱建物跡　(1)　(A-3区) …… 40
第23図　上コブケ A 区掘立柱建物跡　(2)　(A-3区) …… 41
第24図　上コブケ A 区掘立柱建物跡　(3)　(A-3区) …… 42
第25図　上コブケ A 区掘立柱建物跡　(4)・土坑　(A-3区) …… 43
第26図　上コブケ A 区溝　(1)　(A-3区) …… 44
第27図　上コブケ A 区溝　(2)　(A-3区) …… 45
第28図　上コブケ A 区ピット　(1)　(A-3区) …… 46
第29図　上コブケ A 区ピット　(2)　(A-3区) …… 47
第30図　上コブケ A 区ピット　(3)　(A-3区) …… 48
第31図　上コブケ A 区ピット　(4)・焼土址　(A-3区) …… 49
第32図　上コブケ A 区出土遺物　(1) …… 50
第33図　上コブケ A 区出土遺物　(2) …… 51
第34図　上コブケ A 区出土遺物　(3) …… 52
第35図　上コブケ A 区出土遺物　(4) …… 53
第36図　上コブケ A 区出土遺物　(5) …… 54
第37図　上コブケ A 区出土遺物　(6) …… 55
第38図　上コブケ A 区出土遺物　(7) …… 56
第39図　上コブケ A 区出土遺物　(8) …… 57
第40図　上コブケ A 区出土遺物　(9) …… 58
第41図　上コブケ A 区出土遺物　(10) …… 59
第42図　上コブケ遺跡 B 区全体図 ……102
第43図　I 区遺構図 ……103
第44図　II 区遺構図……104
第45図　III・IV 区遺構図 ……105
第46図　V区遺構図……106
第47図　I 区土器・土製品出土状況 ……107
第48図　I 区石器・石製品出土状況 ……108
第49図　III・IV 区土器・土製品出土状況 ……109
第50図　III・IV 区石器・石製品出土状況 ……110
第51図　V区土器・土製品出土状況……111
第52図　V区石器・石製品出土状況……112
第53図　1号竪穴住居跡 ……113
第54図　2号竪穴住居跡 ……114
第55図　3号竪穴住居跡 ……115
第56図　4号竪穴住居跡 ……116
第57図　1 ～ 6号埋甕 ……117
第58図　7 ～ 10号埋甕 ……118
第59図　11 ～ 13号埋甕・1号集石遺構・1号配石遺構内石棒 …119
第60図　1 ～ 9号土坑 ……120
第61図　10 ～ 19号土坑……121
第62図　20 ～ 23号土坑、1 ～ 7号ピット ……122
第63図　8 ～ 20号ピット ……123
第64図　21 ～ 35号ピット……124
第65図　36 ～ 38号 Pit・調査区壁セクション ……125
第66図　1号竪穴住居跡・2号竪穴住居跡　(1) 出土遺物 ……126
第67図　2号竪穴住居跡　(2) 出土遺物 ……127
第68図　2号竪穴住居跡　(3) 出土遺物 ……128
第69図　3号竪穴住居跡・4号竪穴住居跡・1号埋甕出土遺物……129
第70図　2 ～ 6号埋甕出土遺物 ……130
第71図　7号・8号・10号埋甕出土遺物 ……131
第72図　9号埋甕出土遺物 ……132
第73図　11 ～ 13号埋甕出土遺物……133
第74図　1号配石遺構・1号集石遺構出土遺物 ……134
第75図　1号集石遺構・土器集中出土遺物 ……135
第76図　土器集中 1 ・2出土遺物 ……136
第77図　土器集中2・1 ～ 14号土坑出土遺物……137
第78図　14 ～ 23号土坑・1 ～ 33号 Pit・遺構外出土遺物　(1)　138
第79図　遺構外出土遺物　(2) ……139
第80図　遺構外出土遺物　(3) ……140
第81図　遺構外出土遺物　(4) ……141
第82図　遺構外出土遺物　(5) ……142
第83図　遺構外出土遺物　(6) ……143
第84図　遺構外出土遺物　(7) ……144
第85図　遺構外出土遺物　(8) ……145
第86図　遺構外出土遺物　(9) ……146
第87図　遺構外出土遺物　(10)……147
第88図　遺構外出土遺物　(11)……148
第89図　遺構外出土遺物　(12)……149
第90図　遺構外出土遺物　(13)……150

第91図　遺構外出土遺物　(14)……151
第92図　遺構外出土遺物　(15)……152
第93図　遺構外出土遺物　(16)……153
第94図　遺構外出土遺物　(17)……154
第95図　遺構外出土遺物　(18)……155
第96図　遺構外出土遺物　(19)……156
第97図　遺構外出土遺物　(20)……157
第98図　遺構外出土遺物　(21)……158
第99図　遺構外出土遺物　(22)……159
第100図　遺構外出土遺物　(23)……160
第101図　遺構外出土遺物　(24)……161
第102図　遺構外出土遺物　(25)……162
第103図　遺構外出土遺物　(26)……163
第104図　遺構外出土遺物　(27)……164
第105図　遺構外出土遺物　(28)……165
第106図　遺構外出土遺物　(29)……166
第107図　遺構外出土遺物　(30)……167
第108図　遺構外出土遺物　(31)……168
第109図　遺構外出土遺物　(32)……169
第110図　遺構外出土遺物　(33)……170
第111図　遺構外出土遺物　(34)……171
第112図　遺構外出土遺物　(35)……172
第113図　遺構外出土遺物　(36)・土偶　(1)……173
第114図　土偶　(2)……174
第115図　土偶　(3)……175
第116図　土偶　(4)・土製品……176
第117図　ミニチュア土器・土製円盤　(1)……177
第118図　土製円盤　(2)・土製装飾品・台形土器　(1)……178
第119図　台形土器　(2)・石器　(1)……179
第120図　石器　(2)……180
第121図　石器　(3)……181
第122図　石製品　(1)……182
第123図　石製品　(2)・石器　(4)……183
第124図　石器　(5)……184
第125図　石器　(6)……185
第126図　石器　(7)……186
第127図　C区全体図・グリッド配置図……231
第128図　C区全体図①・グリッド配置図……232
第129図　C区全体図②・グリッド配置図……233
第130図　C区全体図③・グリッド配置図……234
第131図　C区全体図④・グリッド配置図……235
第132図　C区全体図⑤・グリッド配置図……236
第133図　C区1号住居跡……237
第134図　C区2号住居跡1……238
第135図　C区2号住居跡2……239
第136図　C区4号住居跡……240
第137図　C区5号住居跡1・42号土坑……241
第138図　C区5号住居跡2……242
第139図　C区6号住居跡……243
第140図　C区1号掘立柱建物跡……244
第141図　C区2号掘立柱建物跡……245
第142図　C区3号掘立柱建物跡……246
第143図　C区4号掘立柱建物跡……247
第144図　C区5・6号掘立柱建物跡・1溝……248
第145図　C区7号掘立柱建物跡……249
第146図　C区8号掘立柱建物跡1、81・83・85・86・89・92・93・95・97号土坑、80～82・88・89・94ピット……250
第147図　C区8号掘立柱建物跡2……251
第148図　C区9号掘立柱建物跡・1号焼土跡周辺……252
第149図　C区10号掘立柱建物跡……253
第150図　C区11号掘立柱建物跡……254
第151図　C区12号掘立柱建物跡1、69号土坑、67～70・73・74ピット…255
第152図　C区12号掘立柱建物跡2、69号土坑……256
第153図　C区3～7溝、43・44号土坑、42～45・51・60～64ピット…257
第154図　C区8～10・12溝、55・59号土坑……258
第155図　C区1～31号土坑……259
第156図　C区32～72号土坑……260
第157図　C区74～111号土坑……261
第158図　C区112～136号土坑、84ピット……262
第159図　C区8号土坑、34ピット……263
第160図　C区137号土坑……264
第161図　C区1号集石……265
第162図　C区　出土遺物1　(1・2号住居跡……266
第163図　C区出土遺物2　(2・4号住居跡)……267
第164図　C区出土遺物3　(4・5号住居跡)……268
第165図　C区出土遺物4　(5・6号住居跡、1号焼土跡)……269
第166図　C区出土遺物5　(6号住居跡、1号焼土跡)……270
第167図　C区出土遺物6　(6号住居跡、1号焼土跡、1・2号掘立柱建物跡)……271
第168図　C区出土遺物7　(2・3・4・5・6・7号掘立柱建物跡) 272
第169図　C区出土遺物8　(8・9・12号掘立柱建物跡、8・11・12・55・65号土坑)……273
第170図　C区出土遺物9　(12号掘立柱建物跡、80・81・86・88号土坑)……274
第171図　C区出土遺物10　(88・95・105・129号土坑、25・34ピット)…275
第172図　C区出土遺物11　(52・79・86・107・108ピット、137号土坑、1溝)……276
第173図　C区出土遺物12　(1・3・6・8号溝)……277
第174図　C区出土遺物13　(12・13・14号溝)……278
第175図　C区出土遺物14　(遺構外)……279
第176図　C区出土遺物15　(遺構外)……280
第177図　C区出土遺物16　(遺構外)……281
第178図　C区出土遺物17　(遺構外、土製品、鉄製品、石器)…282
第179図　C区出土遺物18　(石器)……283
第180図　C区出土遺物19　(石器)……284
第181図　全体図 (1/200)……305～306
第182図　1号住居跡……307
第183図　1号住居跡カマド……307

第184図　2号住居跡 ……308
第185図　2号住居跡カマド ……308
第186図　4号住居跡 ……309
第187図　5号住居跡 ……309
第188図　6号住居跡 ……310
第189図　6号住居跡微細図 ……310
第190図　7号住居跡 ……311
第191図　9・10号住居跡 ……311
第192図　10号住居跡カマド ……311
第193図　12号住居跡 ……312
第194図　13号住居跡 ……312
第195図　1号掘立柱建物跡 ……313
第196図　2号掘立柱建物跡 ……314
第197図　3号掘立柱建物跡 ……315
第198図　5号掘立柱建物跡 ……315
第199図　6号掘立柱建物跡 ……316
第200図　7号掘立柱建物跡 ……316
第201図　焼土跡 ……317
第202図　土坑（1） ……317
第203図　土坑（2） ……318
第204図　土坑（3） ……319
第205図　土坑（4） ……320
第206図　ピット (1) ……320
第207図　ピット (2) ……321
第208図　ピット (3) ……322
第209図　ピット (4) ……323
第210図　ピット (5) ……324
第211図　溝（1） ……324
第212図　溝（2） ……325
第213図　溝（3） ……326
第214図　溝（4） ……327
第215図　溝（5） ……328
第216図　1号住居跡出土遺物 ……329
第217図　2号住居跡出土遺物（1） ……329
第218図　2号住居跡出土遺物（2） ……330
第219図　4号住居跡出土遺物 ……330
第220図　5号住居跡出土遺物（1） ……330
第221図　5号住居跡出土遺物（2） ……331
第222図　5号住居跡出土遺物（3） ……332
第223図　6号住居跡出土遺物（1） ……332
第224図　6号住居跡出土遺物（2） ……333
第225図　7号住居跡出土遺物 ……334
第226図　10号住居跡出土遺物 ……334
第227図　13号住居跡出土遺物（1） ……334
第228図　13号住居跡出土遺物（2） ……335
第229図　8号焼土跡出土遺物 ……335
第230図　土坑出土遺物（1） ……335
第231図　土坑出土遺物（2） ……336
第232図　ピット出土遺物 ……336
第233図　溝出土遺物（1） ……336
第234図　溝出土遺物（2） ……337
第235図　暗渠出土遺物 ……337
第236図　暗渠出土遺物 ……338
第237図　遺構外出土遺物（1） ……338
第238図　遺構外出土遺物（2） ……339
第239図　遺構外出土遺物（3） ……340
第240図　炭化材 ……342
第241図　［参考］略年較正年代グラフ ……345
第242図　腐植含量とリン酸含量の相関図 ……351
第243図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成 ……356
第244図　砕屑物・基質・孔隙の割合 ……357
第245図　胎土薄片 ……359
第246図　種実遺体 ……363
第247図　暦年較正結果（1σ）の確率分布 ……367
第248図　植物珪酸体含量 ……369
第249図　花粉化石・植物珪酸体 ……370
第250図　1地点西面の断面図 ……375
第251図　1地点東面の断面図 ……375
第252図　1地点南面の断面図 ……376
第253図　2地点北面の断面図 ……377
第254図　2地点西面の断面図 ……377
第255図　3地点北面の断面図 ……378
第256図　4地点南面の断面図 ……378
第257図　4地点北面（東端）の断面図 ……379
第258図　4地点北面（西側）の断面図 ……379
第259図　4地点西面の断面図 ……380
第260図　模式断面図 ……380
第261図　1地点（1）（2） ……381
第262図　1地点（3）・2地点（1） ……382
第263図　2地点（2）・3地点 ……383
第264図　4地点（1）（2）（3） ……384
第265図　重軽鉱物組成（1） ……408
第266図　重軽鉱物組成（2） ……408
第267図　主要珪藻化石群集の層位分布 ……409
第268図　主要花粉化石群集の層位分布 ……410
第269図　主要種実遺体の層位分布 ……410
第270図　礫（1） ……411
第271図　礫（2） ……412
第272図　重軽鉱物 ……413
第273図　珪藻化石 ……414
第274図　花粉化石 ……415
第275図　種実遺体（1） ……416
第276図　種実遺体（2） ……417
第277図　木材 ……418
第278図　防空壕調査箇所位置図 ……419
第279図　調査箇所全景 ……420
第280図　調査箇所全景 ……420
第281図　防空壕跡A　坑口 ……420

第282図　防空壕跡Ｂ　坑口 ……420
第283図　防空壕跡Ａ・Ｂ　計測点群データによる平面・側面表示（1）…421
第284図　防空壕跡Ａ・Ｂ　計測点群データによる平面・側面表示（2）…422
第285図　防空壕跡Ａ・Ｂ　計測点群データによる平面・側面表示（3）…423
第286図　防空壕跡Ａ・Ｂ　計測点群データによる平面・側面表示（4）…424
第287図　防空壕跡Ａ・Ｂ　計測点群データによる平面・側面表示（5）…425
第294図　A-1区出土の柏峠産黒曜石製の掻器 ……426
第295図　上コブケＢ区配石実測図 ……427
第296図　配石と水晶・黒曜石・土器の分布 ……428
第297図　グリッド別の水晶出土量 ……429
第298図　グリッド別の黒曜石出土量 ……429
第299図　もえさし ……431
第300図　上コブケ遺跡の竪穴住居跡主軸方位 ……432
第301図　上コブケ遺跡の掘立柱建物跡主軸方位 ……432
第302図　上コブケⅠ期の集落像 ……433
第303図　上コブケⅡ期の集落像 ……433
第304図　上コブケⅢ期の集落像 ……433
第305図　上コブケⅣ期の集落像 ……433
第306図　県内全体と上コブケ遺跡の掘立柱建物跡の規模 ……434

表　目　次

第１表　A-1区土坑観察表 …… 17
第２表　A-1区溝観察表 …… 17
第３表　A-1区ピット観察表 …… 17
第４表　A-2区土坑観察表 …… 17
第５表　A-2区溝観察表 …… 17
第６表　A-2区ピット観察表 …… 17
第７表　A-3区住居観察表 …… 18
第８表　A-3区掘立柱建物観察表 …… 18
第９表　A-3区土坑観察表 …… 18
第10表　A-3区溝観察表 …… 18
第11表　A-3区ピット観察表（掘立柱建物跡以外） ……19 ～ 20
第12表　上コブケ遺跡Ａ区　土器類観察表 ……21 ～ 26
第13表　上コブケＡ区　石器観察表 …… 26
第14表　上コブケＢ区　遺構観察表 ……79 ～ 81
第15表　上コブケ遺跡Ｂ区　遺物観察表 …… 81 ～ 101
第16表　掘立柱建物跡一覧……203
第17表　焼土跡一覧……203
第18表　溝状遺構一覧……203
第19表　土坑一覧（古墳～平安） …… 204 ～ 206
第20表　ピット一覧…… 206 ～ 208
第21表　集石土坑一覧……208
第22表　上コブケ遺跡Ｃ区　土器観察表 …… 209 ～ 228
第23表　土製品観察表……229
第24表　鉄製品観察表……229
第25表　銭貨計測表……229
第26表　上コブケＣ区　石器観察表 ……230
第27表　住居跡一覧……239
第28表　住居跡観察表……286
第29表　掘立柱建物跡観察表……287
第30表　焼土跡観察表……288
第31表　土坑観察表…… 288 ～ 290
第32表　ピット観察表…… 290 ～ 292
第33表　溝観察表…… 292 ～ 293
第34表　暗渠観察表……293
第35表　遺物観察表（1）…… 294 ～ 303
第36表　遺物観察表（2）……304
第37表　遺物観察表（3）……304
第38表　樹種同定結果……341
第39表 ……344
第40表 ……344
第41表　土壌化学分析結果……347
第42表　土壌化学分析結果……350
第43表　胎土分析試料一覧……353
第44表　ガラスビード作成条件……354
第45表　蛍光Ｘ線装置条件 ……354
第46表　蛍光Ｘ線定量測定条件 ……354
第47表　薄片観察結果……356
第48表　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）……357
第49表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果……364
第50表　種実遺体分析結果……364
第51表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果……366
第52表　花粉分析結果……368
第53表　植物珪酸体含量……368
第54表　兄川河床遺跡現地調査　採取試料一覧……374
第55表　分析試料一覧……402
第56表　放射性炭素年代測定結果……403
第57表　暦年較正結果……403
第58表　重軽鉱物組成……404
第59表　火山岩類の構成物量比……404
第60表　深成岩類の構成物量比……404
第61表　珪藻分析結果……405
第62表　花粉分析結果……406
第63表　微細物分析結果……407
第64表　奈良・平安時代竪穴住居跡の主軸方位……431
第65表　掘立柱建物跡の主軸方位および面積……431

付　　図

第288図　防空壕跡Ａ・Ｂ実測平面図（１／200） …… 付図１
第289図　防空壕跡Ａ平面図および内部写真 …… 付図２
第290図　防空壕跡Ｂ平面図および内部写真 …… 付図３
第291図　防空壕跡Ａ断面図（１／200） …… 付図４
第292図　防空壕跡Ｂ断面図（１）（１／200） …… 付図５
第293図　防空壕跡Ｂ断面図（２）（１／200） …… 付図６

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯と経過

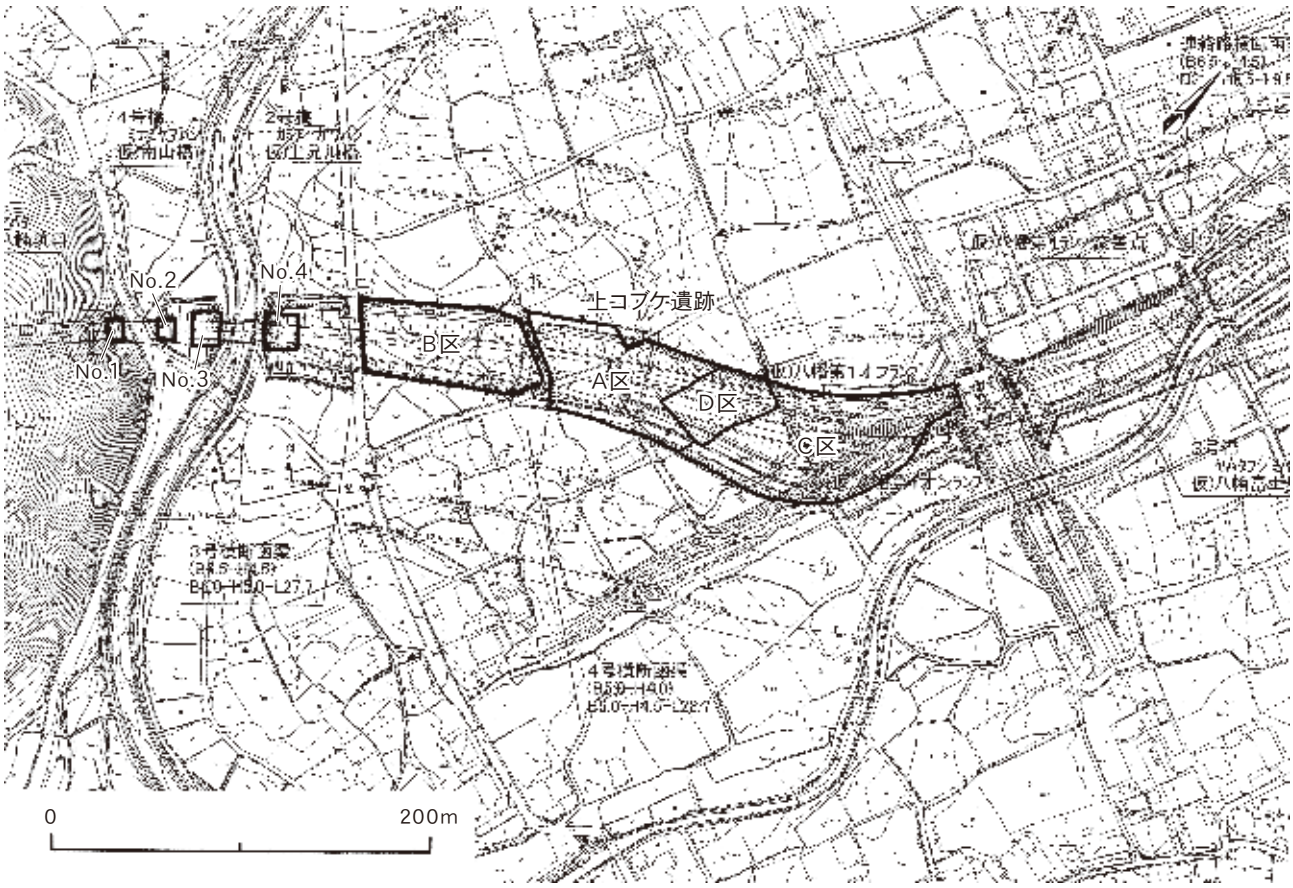
上コブケ遺跡は、西関東連絡道路建設に伴って発掘調査を実施した。本格的調査の調査区域は平成22年度に路線内の試掘調査によって、遺跡南側に範囲が確認され（保坂和博・小澤美和子2011「西関東連絡道路（第Ⅱ期）建設事業試掘《山梨市万力地内外》」『山梨県内分布調査報告書（平成22年１月～ 12月）』山梨県教育委員会）、平成23・24年度にかけて発掘調査を実施した。調査にあたっては、対象地面積が大きいことから工事工程の優先順位に従って調査を進めることとし、既存の道路を生かすこととなった山梨市道を境界として、調査区をＡ～Ｄの４区画に分け調査を実施した（第１図）。平成23年度の調査はＡ～Ｃの3区について実施し、調査面積はＡ区3844㎡、Ｂ区3563㎡、Ｃ区4876㎡である。残りのＤ区は平成24年度に発掘調査を実施し、調査面積は1384㎡である。

発掘調査は、Ａ・Ｂ・Ｃ区が平成23年5月18日～ 10月31日、Ｄ区が平成24年6月4日～ 8月8日に実施した。引き続き基礎的整理をＡ区が平成23年9月～平成24年3月、Ｂ区が平成23年9月～平成24年3月、Ｃ区が平成23年11月～平成24年3月、Ｄ区が平成24年12月～平成25年3月に実施した。

本格的整理作業は、Ａ・Ｃ区が平成24年6月4日～平成25年3月29日、Ｂ区が平成24年6月5日～平成24年9月10日、Ｄ区が平成25年8月5日～平成25年11月29日に実施した。

また、ナウマンゾウ化石が産出した兄川河床遺跡について、兄川をまたぐ両岸の橋脚掘削工事に際して、平成22年11月～平成23年３月にかけて土層観察と自然科学分析資料採取作業を行い、平成23年12月～平成24年３月にかけて、自然科学分析を委託実施した。

なお、調査に係わる事務手続きについては、以下のとおりである。



第1図　上コブケ遺跡調査区配置と西関東道路工事区域（No.１～４は、兄川河床遺跡調査地点）

上コブケA・B・C区

平成23年５月17日　文化財保護法第99条　第２項に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成23年９月７日　文化財保護法第100条　第２項に基づく発見通知を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成23年11月15日　終了報告を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成24年３月22日　発掘調査・整理作業の実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出

上コブケD区

平成24年５月30日　文化財保護法第99条　第２項に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成24年８月13日　文化財保護法第100条　第２項に基づく発見通知を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成24年９月３日　終了報告を山梨県教育委員会教育長へ提出
平成25年３月14日　発掘調査・整理作業の実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出

第２節　調査の組織

上コブケ遺跡の調査組織は以下のとおりである。

（１）平成23年度調査体制

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所長　平賀孝雄
次長　八巻與志夫
調査研究課長　高野玄明
調査第二担当　リーダー　吉岡弘樹（A区）・小澤美和子（A区）・塩谷風季（B区）
調査第三担当　主査文化財主事　笠原みゆき（C区）・非常勤嘱託職員　加々美鮎実（C区）
発掘調査非常勤嘱託職員
雨宮久美子　飯室恵子　飯室恵　池谷千代子　出月正敏　伊藤知子　大石清美　小澤正臣　小澤美幸　小幡敬一　河西元彦　勝田美和　岸本美苗　北野礼子　河野直美　輿石邦次　小菅衛　小菅春江　小林としみ　齋藤里美　坂本行臣　桜田美代子　佐藤昇　佐藤あけみ　塩沢昌和　清水征二　清水忠次　志村由未　高原南洋　武井美和子　武田素子　田中健二　千野富子　土屋常子　筒井聡　角田勇雄　角田三良　角田武子　直井光江　中澤保　長澤晴雄　中島辰子　中山かよ子　萩原忠　原義仁　廣瀬侯子　樋川芳久　広瀬智恵子　深澤友子　保坂悌司　前田悦郎　松本榮一　水上喜正　三森喜直　宮下善雄　村田勝利　望月明　望月孝次　望月敏子　森秋夫　山上和　横内光夫　渡辺麗子　飯野金雄　井上國勝　岩崎誠至　窪寺康一　河野敏彦　鮫田勝夫　新海治　末木富夫　内藤敏夫　中込榊　藤原さつき　若杉保　若月あい子　河野直美　萩原忠　広瀬智恵子　山上和　米山孝子　窪田圭
整理作業非常勤嘱託職員
飯室恵　小池幹子　矢崎緑　保延初巳　山上和　川手勇太　長田州人　五味勝子　米山孝子

（２）平成24年度発掘調査および本格的整理作業

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所長　八巻與志夫
次長　福島一雄
資料普及課長　山本茂樹
調査研究課長　米田明訓
調査第二担当　文化財主事　須長愛子（A・D区）・文化財主事　青木真一（A・D区）

調査第三担当　主査文化財主事　笠原みゆき（C・D 区）・文化財主事　柴田亮平（C・D 区）
資料第一担当　非常勤嘱託職員　塩谷風季（B 区）
発掘調査非常勤嘱託職員（D 区）
　飯室恵子　窪寺康一　輿石邦次　小菅春江　土屋常子　内藤敏夫　直井光江　中込榊　花形裕　前田悦朗　松本榮一　宮下善雄　望月明　望月孝次　水上善正
整理作業非常勤嘱託職員
　神田久美子　五味勝子　佐藤あけみ　保坂理恵子　矢崎緑　垣内律子　清水真弓　土井みさほ　梶原初実　平川涼子　川住たまみ　新津多恵　石坂恵理　猪股順子

（3）平成25年度本格的整理作業
調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所長　八巻與志夫
次長　福島一雄
資料普及課長　山本茂樹
調査研究課長　保坂康夫（A 区）
調査第一担当　非常勤嘱託職員　塩谷風季（B 区）
調査第二担当　主査文化財主事　田口明子（D 区）・文化財主事　柴田亮平（C 区）
整理作業非常勤嘱託職員（D 区）
　土井みさほ　新津多恵　新谷和美

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

山梨県は県土の80％が山岳地帯という内陸県である。県土の中心には甲府盆地があり、それを取り囲むようにして北を秩父山地、東を大菩薩嶺の山塊、南を御坂山地、西を南アルプスの峰々が広がっている。また北西部には八ヶ岳、南東部には富士山という火山地が存在し、起伏の大きい地形をしている。

上コブケ遺跡が所在する山梨市も、このような山梨県の地形的特徴を典型的に表現している。山梨市は甲府盆地中心から見て北東部に位置し、西は甲府市、南は笛吹市、東は甲州市、北は埼玉県秩父市・長野県川上村に接している。市の北部は甲武信ヶ岳・国師ヶ岳・笠取山といった2000メートル級の奥秩父の山々が広がる山岳地帯である。特に笠取山は関東平野と甲信地方との分水嶺となっており、これらの山々は首都圏の治山治水において重要な役割を果たしている。一方で、南部は標高300m 程度の平坦地であり、甲府盆地の一部を構成している。

この結果、山岳地帯を源流とする笛吹川、重川が市を北東から南西に縦断するように流れ、市南部において扇状地や氾濫原といった河川地形を発達させている。市街地は大半がこのような河川地形上に展開されており、現在では河川の流れと並行するように国道140号・JR 中央線といった交通網も発達している。また、山梨市には日本三大峠と呼ばれた雁峠が存在し、山梨県における交通の難関地となっていたが、平成10年に雁坂トンネルが完成したことによってその障害も解消し、他県との交流はますます活発化している。

気候は典型的な内陸性気候で、夏季の平均気温は約27度まで上昇するが、冬季の平均気温は約3度まで低下するなど年較差が大きい。また、降水は夏季に多い傾向が見られ、年間通した降水量は約1100ミリである。

上コブケ遺跡は笛吹川右岸に位置し、前述した北部山岳地帯と南部低平地との境界線上にある。遺跡の西側を兄川、東側を弟川といった笛吹川の支流が流れており、遺跡はそれらが形成した河岸段丘面上に存在している。調査地点の標高は約372m ～ 374m で日当たりはよい。このあたりの地域はモモ、ブドウなどの果樹園として

利用されている割合が高く、全国的にも果樹生産地として有名であり、調査区も調査前は果樹園として利用されていた区画である。調査着手前は果樹園の小区画ごとに段差が存在し、全体として南側に低くなっていた。調査地から笛吹川までは直線距離で南東方向に約500m であり、ＪＲ山梨市駅は直線距離で南方向に約1,500m の位置にある。

第２図に遺跡周辺の地形図を示した。上コブケ遺跡は、地形分類では砂礫台地に位置する（吉村稔・平川一臣1985「地形分類図」『土地分類基本調査　御岳昇仙峡』山梨県企画管理局土地水対策課）。砂礫台地は上コブケ遺跡付近から山梨市江曽原を経て大工地域にひろく展開する。第２図に見るように、砂礫台地上には条里型土地割を広く良好に残している。上コブケ遺跡の東側には、南西－北東に砂礫台地を区画する高さ３～４ｍほどの崖線が走り、遺跡はその肩部にある。砂礫台地は南辺を兄川（あにがわ）、北辺を弟川（おとうとがわ）で区画されている。弟川は砂礫台地の北東端部で90度方向を変え、砂礫台地の崖線に沿って南流し、上コブケ遺跡の眼下を流れ､笛吹川に架かる亀甲橋手前で兄川と合流した上で､笛吹川に入る。上コブケ遺跡から見下ろす地形は、谷底平野である。弟川周辺では条里型土地割が見られるものの、大井俣窪八幡神社の前面を北東－南西方向に走る低い崖線を境に、笛吹川側は土地割りが不定形となっている。しかし、この両地形面ともに、等高線は北西－南東方向に走り、笛吹川の形成した地形面と考えられる。

第２節　歴史的環境

上コブケ遺跡西側の兄川河床遺跡では、昭和36年に集中豪雨によって破損した兄川右岸の用水堰の修理を行っている最中に、河床よりナウマンゾウの化石骨が発見されている（第２図)。その後、昭和49年から平成2年にかけて新たにナウマンゾウの化石骨の発見のほか、クリーニング・同定などの資料や研究史の整理が行われ、さらに平成6年に埋蔵文化財センターにより、河川改修工事に伴う発掘調査が実施され、大臼歯や右座骨、シカ属

第２図　上コブケ遺跡調査区と周辺地形図（No.１～４は、兄川河床遺跡調査地点）

角片などの資料が追加された。平成8年にはこれらの化石の全点が、「兄川から出土したナウマン象等の化石」という名称で山梨県天然記念物に指定された。平成13年には山梨市史編纂事業でナウマンゾウ化石の再整理と詳細な記載が行われた（間島信男2001『山梨市兄川産ナウマンゾウ化石』山梨市史編纂委員会、間島信男2005「兄川河床遺跡（兄川から産出したナウマンゾウ化石）」『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』山梨市、保坂康夫2007「ナウマンゾウ化石と最古の遺跡」『山梨市史　通史編　上巻』山梨市）。分析の結果、３個体分のナウマンゾウ化石と判断され、①31 ～ 36歳、②36 ～ 50歳、③肩高1.8 ～ 1.85m と小形の若年ゾウの少なくとも３体分の化石と判断された。今回、上コブケ遺跡西側の兄川河床遺跡を調査したが、平安時代前半の厚い堆積層を確認することになり、ナウマンゾウ化石産出層を確認することはできなかった。

人類が残した旧石器時代遺跡は、峡東地域では釈迦堂遺跡群でナイフ形石器を中心としたまとまった資料が得られているものの、中尾条里遺跡や銚子原遺跡で各１点が知られている程度である。今回報告する上コブケ遺跡C区のナイフ形石器は、山梨市でははじめての出土例であり峡東地域でも稀少な発見となった。

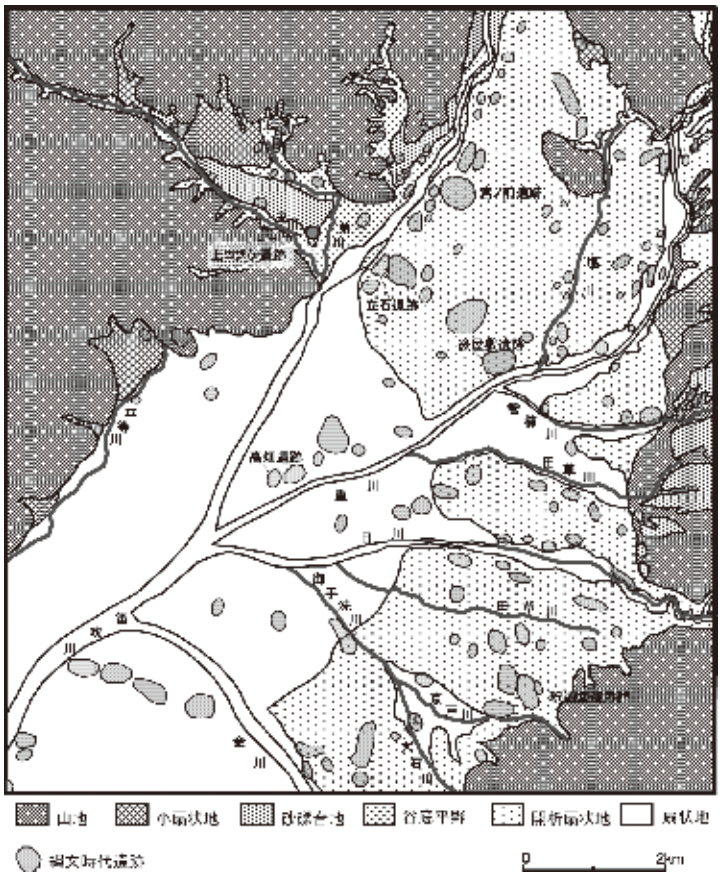
縄文時代の遺跡としては、まず、草創期の掻器が出土した東後屋敷遺跡がある。また、市内での最古の土器としては、上手原遺跡より検出された早期中頃の山形押型文の土器片が確認されている。前期の遺跡としては、三ヶ所遺跡・東後屋敷遺跡天神地点から諸磯式土器が出土している。中期になると五領ヶ台式期になると窪八幡神社社家坊中群日影地点、宮ノ前遺跡、三ヶ所遺跡、東後屋敷遺跡、堀ノ内遺跡が発掘調査されている。さらに、中期中葉になると東後屋敷遺跡のほか、高畑遺跡などが発掘調査されている。後期の遺跡は、市内では屋敷添遺跡であり、ここからは、後期初頭の称名寺式土器が確認されている。晩期では大洞式土器片が出土している延命寺遺跡がある。

上コブケ遺跡Ｂ区で確認された縄文時代遺跡の峡東地域での分布状況を、地形との関連で確認してみると（第３図）、最も多く立地するのが、開析扇状地であることが分かる。開析扇状地は笛吹川や重川、日川、金川などが形成した扇状地の内、扇頂側の古い地形面であるが、第３図の図幅にある縄文遺跡149遺跡中63％が開析扇状地に立地する（第４図；保康夫2007「縄文文化と豊かな定住生活」『山梨市史　通史編　上巻』山梨市）。上コブケ遺跡近辺では、笛吹川東岸の開析扇状地崖線肩部に遺跡が帯状に分布し、宮ノ前遺跡や立石遺跡といった大形遺跡が立地している。しかし、上コブケ遺跡が立地するような狭隘な谷間に形成された砂礫台地には縄文遺跡はあまり占地していない。同じく狭隘な谷間にある小扇状地、谷底平野なども含め、20％しかないが、第４図に示されたように、平安時代までの各時代別に遺跡分布を見た場合は、縄文時代が最も多く見られる。このことは、縄文時代の生活資源が開析扇状地において最も豊富に得られたこと、他の時代の生業形態と比較して、縄文時代の生業で砂礫台地が最も多く活用できたことを示している。近隣で見た場合、縄文時代においては、上コブケ遺跡の立地する地形環境が供給できる生活資源では、笛吹川東岸の開析扇状地崖線肩部ほどには、多くの居住地が形成できなかった可能性を示唆するものと思われる。

弥生時代では、堀ノ内遺跡の住居内より磨製石包丁が3点出土しており、複数点の出土は県内ではこの堀ノ内遺跡例しかない。これは、現在の所、市内の遺跡からは水田祉の報告はないが水田経営の展開があったことの裏付けとなろう。また、弥生時代中期とされている宗高東遺跡からは大型の石鍬が５点出土している。大型石鍬の出土例は低地にある遺跡からの発見例が多いことから水田耕作等の農機具の一種ではないかとの説もある。このことから、扇状地において、水田経営が盛んに行われていたことが想定できよう。

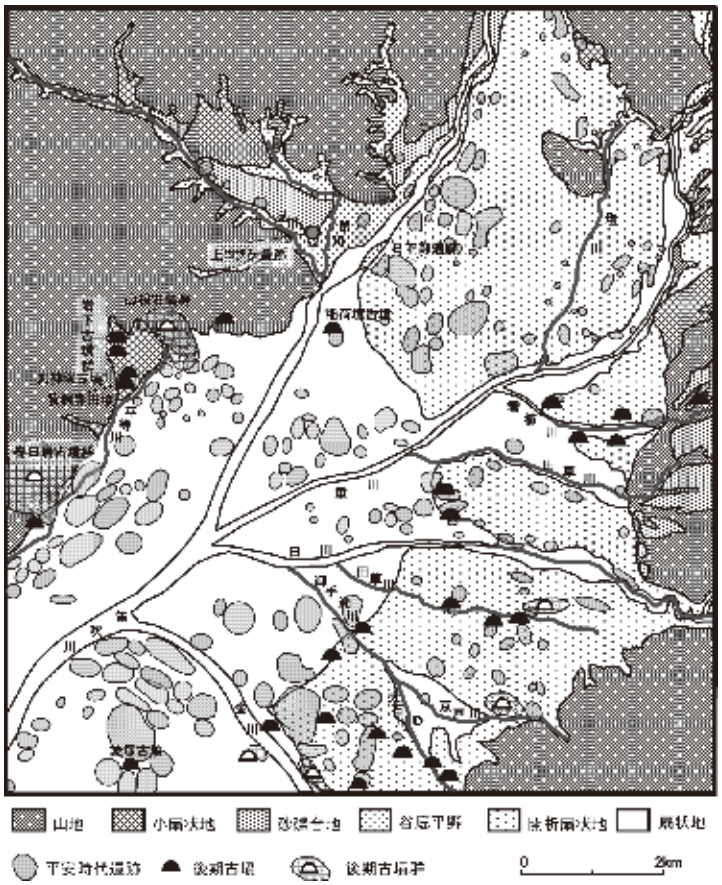
古墳時代では、Ｓ字状口縁台付甕などを伴う前期の遺跡が西関東道路建設に伴った中沢・武家遺跡（山梨県埋蔵文化財センター 2004『中沢遺跡・武家遺跡』）や足原田遺跡（いしはらだ；山梨県埋蔵文化財センター 2005・2007『足原田遺跡』Ⅰ・Ⅱ）、延命寺遺跡（山梨県埋蔵文化財センター 2008『延命寺遺跡』）と、山梨市内で多数調査され、上コブケ遺跡も含め、この時期に遺跡の増加があることが確認されつつある。しかし、古墳時代中期や後期の集落遺跡は限定的にしか把握されていない。こうした状況は、峡東地域全体に敷衍できる可能性がある。

一方、６世紀後半代以降の横穴式石室を伴う後期古墳は、少なからず確認されている。山梨市南西部の兜山の

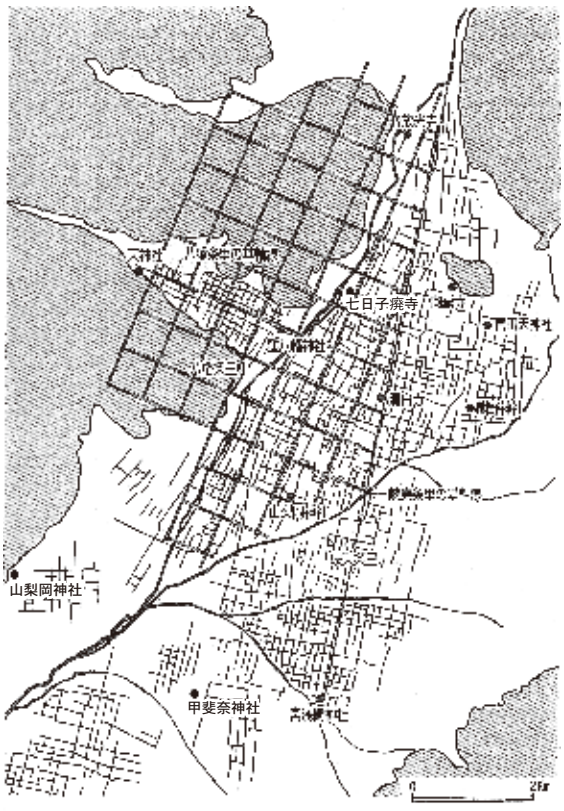


第3図　峡東地域の縄文時代遺跡分布
（地形分類は吉村・平川1985より）

第4図　峡東地域の地形別遺跡数
（第3・5図の範囲内；保坂 2007より）



第5図　峡東地域の後期古墳と平安時代遺跡分布
（地形分類は吉村・平川1985より）



第6図　峡東地域の条里プラン
（中山2005より、一部改変）

東斜面山裾に展開する岩下古墳群では、牧洞寺古墳が石室長が10.6m と、横穴式石室としては県下で５指に入る規模である。また、隣接して天神塚古墳も石室長は9.2m あり、牧洞寺古墳につぐ規模をほこる。また、山梨市史編纂時の分布調査で発見された山根古墳群は岩下古墳群に隣接し、46基にもおよぶ後期古墳の存在が推定され、甲府盆地内では有数の群集墳であったことが確認された（宮沢公雄2005「山根古墳群」『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』山梨市、宮沢公雄2007「古墳時代」『山梨市史　通史編　上巻』山梨市）。数十基におよぶ大規模な古墳群を擁し、大形の横穴式石室をもつ後期古墳が存在し、その規模から甲府盆地でも加牟那塚古墳、万寿森古墳のある甲府市千塚周辺、姥塚古墳のある笛吹市御坂町の金川扇状地地域についで、政治力や生産力を誇る集団が立地した地域と言える。しかし、上コブケ遺跡のある八幡地域周辺には後期古墳の立地がみられない点が注目される（第５図）。この地域の本格的な開発は平安時代以降であることを了解できる。

奈良時代では、遺跡の所在はほとんど確認されていないものの、奈良県の正倉院に伝世された白施に和銅７年（714）銘の「甲斐国山梨郡可美里日下」の墨書が確認され、奈良県平城宮の宮内省大膳職跡出土の天平宝字６年（762）銘の木簡には「『甲斐』山梨郡雑役胡桃子一古」とあり、平城宮東南隅の南面大垣北の溝内から天平宝字８年（764）銘の木簡には「山梨郡加美郷丈部宇万呂六百文」と、上コブケ遺跡の所在する山梨郡関連の文字資料が圧倒的に多い現状がある。『和妙抄』に記載された郷名では、上コブケ遺跡のある八幡地区は「山梨郡加美郷」の比定地となっている（坂本美夫1983「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要　１』山梨県埋蔵文化財センター・山梨県立考古博物館　ほか）。木簡銘にあるように、８世紀前半には「可美里」ないしは「加美郷」が成立していたことになる。

平安時代遺跡の遺跡分布をみると、扇状地地域への進出・開発が展開したことが理解される（第４・５図）。水田耕作地の確保のための進出であり、条里型土地割の展開は、この平安時代遺跡の分布と関連することと考えられる。上コブケ遺跡周辺には条里型土地割が明瞭に遺存している（第２図）。第６図に見るように、地割の南北軸が真北から東に24度傾き、八幡地区を出て甲州市塩山藤木付近から笛吹川・重川合流点のある山梨市大野付近までの笛吹川東岸一帯にこの条里が展開することから、これを「八幡条里」と呼び、地割の南北軸が真北から12度東に傾く「峡東条里」と区別し、近隣遺跡の発掘調査事例などを引用しながら八幡条里が、９世紀前半までに成立していたと考えられる峡東条里に先行する可能性は低いこと、「峡東条里とは別の開発主体が新たに独自の条里プランを成立させた」とする考え方を示した上で、八幡条里の分布範囲が甲斐源氏の安田義定の勢力範囲と重なるとして、「八幡条里は、古代からあった条里地割を、安田氏が八幡荘の荘園経営にあたって再編したことによって成立した」との説が提示されている（第６図;中山誠二2005「条里」『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』山梨市）。

ところで、峡東地域の扇状地地域の開発については、後期古墳の立地との関連性が読み取れることから、その初源を古墳時代後期に遡源させうる（第５図）。後期古墳は、東部では開析扇状地に多く立地している。鬢櫛川流域、北の田草川と日川に挟まれた地域、南の田草川流域、御手洗川と金川に挟まれた地域と、川・扇状地・開析扇状地・後期古墳がひとつの単位を形成しているように見える。西部では、上コブケ遺跡前面の亀甲橋付近を扇頂として、笛吹川が形成した新規の扇状地が展開し、その頂部付近には石室長8.6mの稲荷塚古墳が位置し、扇頂部で取水したその流末地域の水利権の所在を、その地域の開発主体として誇示しているように見える。そして、岩下古墳群などが立地する山地部分には、春日居古墳群にかけて多数の後期古墳が立地し、平等川流域の扇状地の開発主体の存在を指し示している。

ところが、上コブケ遺跡の所在する砂礫扇状地や、その東方に広く展開する開析扇状地には後期古墳は見当たらない。上コブケ遺跡の対岸の開析扇状地上に展開する平安時代遺跡群には、学史的に有名な日下部遺跡が９～10世紀であり、古代瓦などが採集された七日子廃寺は８世紀末～９世紀前半とされる（櫛原功一1992「平安時代の寺院址」『山梨県考古学協会誌』第５号、山梨県考古学協会）。奈良時代に開発に着手され、平安時代に進出が活発化した地域であることが想定できる。その際、その地域に隣接し、後期古墳を構築する在地勢力（八幡地区・笛吹川東岸地域は、稲荷塚古墳が象徴する上神内川・上石森・大野を含む笛吹川開析扇状地南西辺と笛吹川・

重川に挟まれた三角形の地域を拠点とする地域集団、於曽・後屋敷などの重川流域地域は、重川支流の鬢櫛川沿いに展開する古墳群が象徴する甲州市勝沼町休息を拠点とした地域集団）が開発主体となり、それぞれ近接した地域から占拠していったため、八幡条里と峡東条里が別々に成立していった可能性が考えられる。

上コブケ遺跡の東方眼下には、10世紀初めに成立した『延喜式』に記載された式内社である大井俣神社の有力比定社である大井俣窪八幡神社が鎮座する。山梨郡に９座ある式内社のひとつであり、神階制度により神階を授かった神社でもある。貞観５年（863）に官社に列するとともに、従５位下の階位を受け、貞観７年（865）に正５位下、天慶３年（940）には従４位下に昇叙されている（原正人2004「富士山と甲斐の神々」『山梨県史　通史編１　原始・古代』山梨県）。県内で、平安時代前半までに従４位以上の階位を持つ神社は山梨郡の物部神社（笛吹市石和町；第５図の西端の山梨岡神社の西方に隣接）と美和神社（笛吹市御坂町；第５図南西隅やや東よりに隣接）と大井俣神社の３社のみである。重要な点は、大井俣神社を式内社に引き上げ、官位を継続的に申請・要求した地域主体が存在すること、しかも強力に中央に働きかけ実現させた政治力を持つ主体である点である。条里プランは、八幡地区と大野地区とが一体であり、この一体となった地域の領有者が申請・要求の主体者である可能性が高い。大井俣神社は、位置的に笛吹川が段丘を形成している開析扇状地地域を出て、氾濫しながら新規の扇状地を形成する頂部にある。大野地域への取水地点であるとともに、その地域への氾濫を起因するもっとも有用にして危険なポイントである。その地点に神を頼みとする祈願所を設けるのは理にかなった行為というべきであろう。

なお、上コブケ遺跡北東方に位置する荒神山では、11世紀後半から12世紀前半の坏・皿・脚高高台坏・柱状高台坏などの土師質土器を生産した荒神山窯跡が確認されている。

第３章　調査の方法および基本層序と概要

第１節　発掘調査の方法

調査区域全体を覆う形で１辺５ｍのグリッドを設定した（第７図）。グリッド基軸は南北方向に設定し、北端部の行（東西方向）をＤとし、順次南へアルファベットを割り振り、Ｚ行の次はＡＡとして、南端部をＡＭと命名した。西端部については、列名（南北方向）を２とし、順次東へ算用数字を割り振り、最東端を50と命名した。各グリッドはＸ-20グリッドなどと呼ぶ。

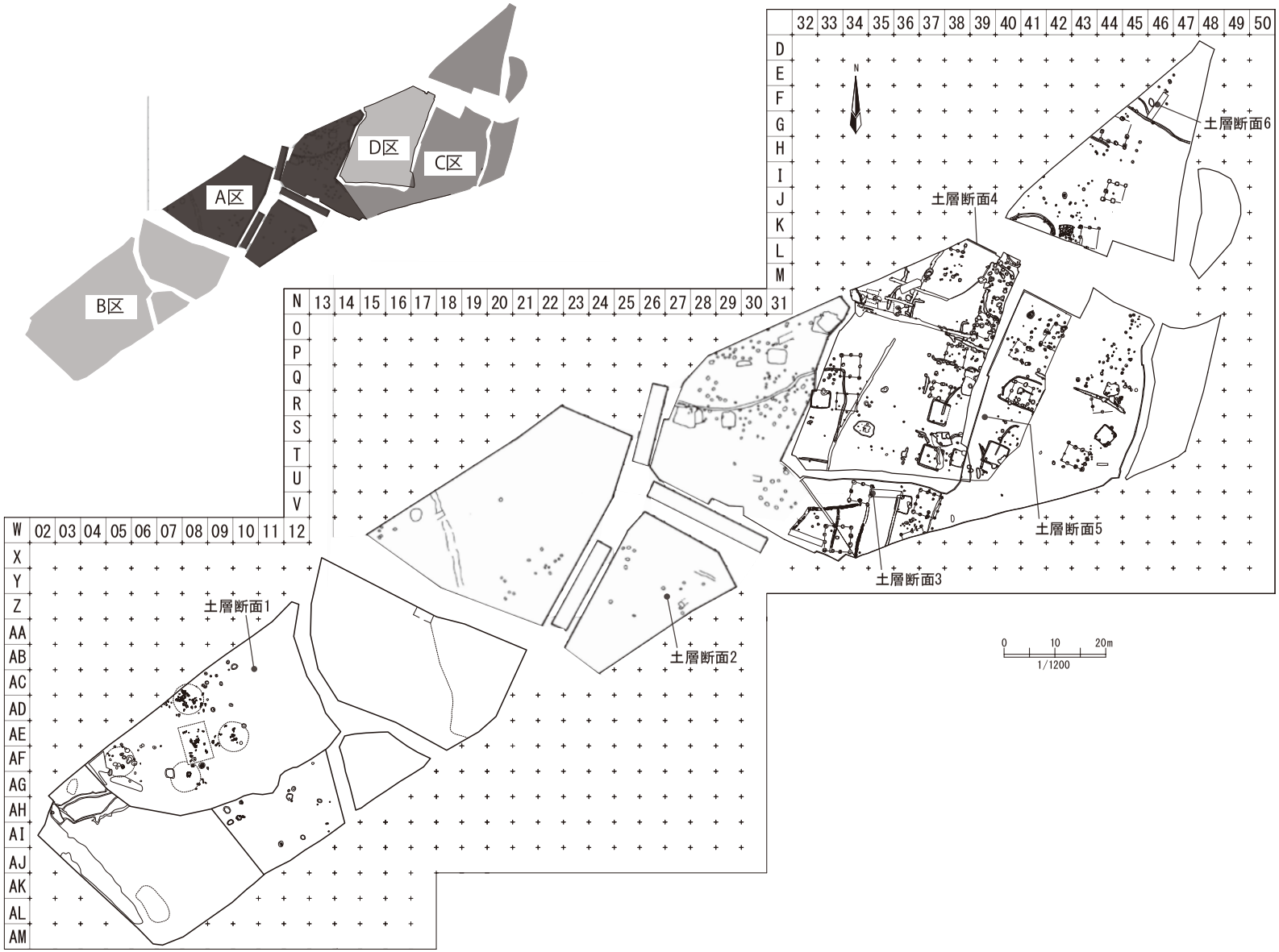
世界測地系国土座標は、AM-2グリッド南東隅の杭の数値で、X=-33025、Y=16485である。

調査は、試掘成果を参考に、遺構検出面直上まで重機により表土除去作業を行い、その後、ジョレン等により人力にて遺構確認精査作業を行った。

遺構の調査は土層セクション、エレベーション作図、遺構内レベリング等を行い、遺物については直径５cm程度以上の資料について位置データを計測した。測量法は、Ａ区のみ遣り方測量で、グリッド杭を利用して水糸を張り、測量基準線とした。B･C･D区については、トータルステーションとコンピュータを利用した測量法で、遺構・遺物の測点・実測を行った。

なお、Ａ区６号竪穴住居跡で出土した炭化材については、現地でパラロイドB72を塗布し、表面をある程度硬化させたうえで、No. １～６について下部の土ごと取り上げた。この資料については、樹種同定と炭素14年代測定を委託実施した。また、Ｂ・Ｃ・Ｄ区でもそれぞれ自然科学分析を委託実施した。

さらに、遺跡西方の兄川では、ナウマンゾウ化石の産出が知られ、人類活動との関連性も指摘されていることから（兄川河床遺跡；保坂2007「ナウマンゾウ化石と最古の遺跡」『山梨市史　通史編　上巻』山梨市）、西関東道路万力トンネル八幡坑口に構築する道路橋脚掘削に伴う兄川河床遺跡の４ヶ所の掘削坑を調査坑として、兄川河床遺跡の地層断面記載と自然科学分析を実施した。



第７図　上コブケ遺跡 全体図 全体図・グリッド配置図

第２節　基本層序

上コブケ遺跡全体で共通した土層は認識できない。試掘調査の成果によると、地点によって変化に富む土層堆積を示す（保坂和博・小澤美和子2011「西関東連絡道路（第Ⅱ期）建設事業試掘《山梨市万力地内外》」『山梨県内分布調査報告書（平成22年１月～ 12月）』山梨県教育委員会）。試掘調査の報告で示された土層図を中心に基本土層について記載する（第７・８図）。

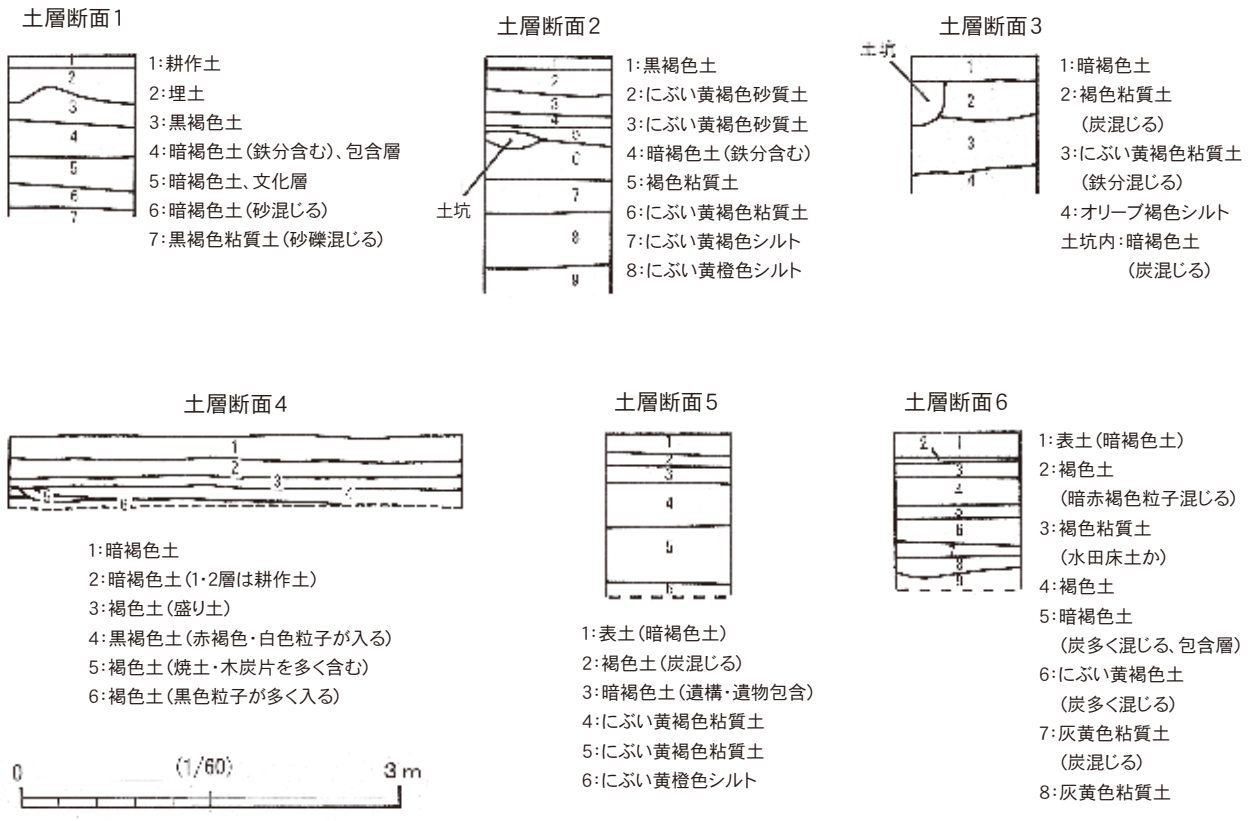
まず、西端部のＢ区では、試掘調査の14Ｔの土層断面をこの区域の代表土層として例示する（土層断面１）。地表下30 ～ 80cm に堆積している暗褐色土や黒褐色粘土質土から遺物が出土し、砂が混じる暗褐色土層の上面を遺構確認面としている。

A･C･D区では､地表下30 ～ 70cm に堆積している黄褐色粘質土や暗褐色土から平安時代遺物を検出している。隣接するA-1区は地表下１m程度で湧水し、湿地であったと判断されている。本格調査の段階では、あまり多くの遺構は確認できなかったものの、先端を焼いた「もえさし」３点が確認され、祭祀の場であったことが推定された。A-2区では26T を代表土層とした（土層断面２）。にぶい黄褐色砂質土､暗褐色土､褐色粘土などが堆積し、黄褐色粘質土層上面が平安時代の遺構確認面となっている。A-3区では33T を代表土層とした（土層断面３）。遺構確認面までが20cm 程度と非常に浅く、遺構確認面まで暗褐色土が堆積し、褐色粘質土層上面が遺構確認面といなっている。

Ｃ区では、本格的調査の段階で、北東端部で土層断面を作図した（土層断面４）。地表下60cm で暗褐色土の上面を遺構確認面としている。黒褐色土層が平安時代遺物の包含層である。

Ｄ区では調査区南西部の37T と北東部の41T を代表土層とした。37T（土層断面５）では、褐色土層の直下に暗褐色土に遺物が包含され、地表下40cm の黄褐色粘質土層上面が遺構確認面といなっている。41T（土層断面６）では、黄褐色土の遺構確認面が地表下60cm と厚く、褐色土層直下の暗褐色土が遺物包含層となっていた。

なお、Ｂ区西辺部に北西－南東方向に帯状に確認された自然流路とした砂礫層は、兄川河床遺跡における自然



第８図　上コブケ遺跡基本土層図

科学分析で詳述するように、平安時代前半の９～ 10世紀に形成された砂礫層に対応するものと考えられ、その兄川の氾濫区域東岸がＢ区西縁にあると判断できる。

西関東道路万力トンネル八幡坑口に構築する道路橋脚掘削に伴う兄川河床遺跡の４ヶ所の掘削坑を調査坑として地層断面記載と、自然科学分析を実施したところ、兄川東岸側は平安時代の堆積物が厚く堆積していることが確認された。上コブケ遺跡Ｂ区西端部に兄川に沿って分布していた礫層がこの堆積層東辺にあたると考えられ、その南延長線上にある砂礫台地南端部の南西－北東方向の崖線の切れ目までが平安時代の氾濫堆積物によって埋積されていると推定される。

第３節　調査の概要

Ａ・Ｃ・Ｄ区では、平安時代前半（９・10世紀）の竪穴住居跡が24軒、掘立柱建物跡が21棟検出され、掘立柱建物跡の検出数の多さが注目される。また、溝25条、土坑206基、ピット412基を検出した。大半が平安時代前半と思われるが、古墳時代前期の溝や縄文時代の土坑や集石などが少数みられた。なお、Ａ区では焼失住居が確認された点特筆される。Ｃ区ではカマドの下層部分から須恵器の小壷が、四隅から完形の坏が出土するなど、祭祀に関わる資料が確認された。Ｄ区では、主に平安時代の住居が確認され、灰釉陶器や転用硯が出土している。調査区東端部に南北方向に伸びる崖線があり、その肩部に帯状に展開する集落の一部を確認したものと思われる。

Ｂ区では、縄文時代中期後半である曽利式期の竪穴住居跡４軒と多量の出土品があり、曽利Ⅰ式古段階の人面付き土器の埋甕が逆位で確認されるなど、貴重な資料が確認された。おそらく、調査区北側に展開する縄文時代中期集落の南端部にあたるものと思われる。

兄川河床遺跡の自然科学分析では、兄川東岸側において平安時代前半の９～ 10世紀の堆積物が厚く堆積していることが確認された。上コブケ遺跡Ｂ区西端部に兄川に沿って分布していた礫層がこの堆積層東辺にあたると考えられ、その南延長線上にある砂礫台地南端部の南西－北東方向の崖線の切れ目までが、上コブケ遺跡の平安時代集落が形成されたころに氾濫堆積物によって埋積されたと推定される。また、その堆積物中から検出された種実や花粉化石の分析から、イネ、コムギ、アワ、ソバ属、エゴマの栽培種が確認された。量的にはイネが圧倒的に多いものの、こうした内容の食糧生産が、９～ 10世紀の上コブケ遺跡形成時期にこの地域で実施されていたことが確認された意義はきわめて大きい。

なお、Ｃ区で確認されたナイフ形石器は稀少な発見であり、峡東地域では釈迦堂遺跡群でまとまった資料が得られているものの、中尾条里遺跡や銚子原遺跡で各１点が知られている程度である。この地域の地盤が少なくとも約２万年前には安定した地形面を形成していたことを示す。

第４章　発掘された遺構と遺物

第１節　A区

A－１区

土坑３基、溝１条、ピット 19 基を検出した。

（１）土坑（第 13 図）

１～３号の３基の土坑を検出した。位置、形態については第１表のとおりである。１号土坑から出土土器は、おおむね同一個体と思われる土器小片が 40 点ほど出土し、この土坑の帰属時期を示す資料である。著しく風化しているため文様などは不明であるが、隆線などの装飾は見られず平板で、器形は直線的で単純に開く深鉢形土器と思われる。図示しなかったが小突起状の口縁部装飾片や粗い縄文らしき文様が読み取れる破片が１点ずつあり、雲母片を含む花崗岩系の粒子を大量に含む胎土などの様相から、縄文前期後半の諸磯期の深鉢形土器である可能性を考えたい。また、第 33 図 27 ～ 30 の石器は、１号土坑内出土である。27 は拳大の円礫を素材とした磨敲石である。両端に弱い敲打痕が、側面には磨面が、それぞれ確認できる。磨石（28・29）は２点とも円礫を素材としている。28 はやや扁平な礫の平坦面に、磨面が顕著に確認できる。磨面の中央はやや凹んでいる。29 は小型の礫の末端部に磨面が確認できる。30 は、ノッチド・スクレイパーで、やや幅広な縦長剥片を素材とした資料である。左側縁から末端にかけて、鋸歯状の刃部を作出している。また、右側縁には二次加工によって大きな抉状の刃部を作出している。31 はラウンド・スクレイパーで、小型の資料である。素材剥片の末端から右側縁にかけて、二次加工による刃部を作出している。末端の刃部が厚みを有するのに対して、右側縁の刃部は厚みがなく、やや鋸歯状を呈する。32 は石鏃で、脚を有する石鏃である。全長２cmを超える資料と推定されるが、上半部が折損しているため詳細は不明である。

２・３号土坑には出土遺物がなく、時期不明である。

（２）溝（第 14・32・33 図）

北北西から南南東方向に直線的に延びる溝１条を検出した。出土土器は、風化が著しく、時期決定に苦慮するが、五領ヶ台式期など縄文中期と思われる土器片数片と、須恵器小形壺と思われる小片１点はあるが、平安の土師器坏片としてよいものは全くみられず、S 字状口縁台付甕や壺、鉢などの古墳前期と思われる土器片が卓越する。古墳前期の遺構として良いものと判断される。

（３）ピット（第 15 図）

直径 30cm 程度を中心に大きいもので直径 60cm 程度、深さ 10 ～ 20cm 程度のピットがランダムに分布していた。特にグリッドで X ～ Y － 20 ～ 23 の範囲に集中分布しているが、特に配列性がみられない。ピット内からは、古墳～平安にかけての土器が出土しているが、少量であり、時期決定する要素としては弱い材料である。

（４）グリッド出土遺物（第 32・33 図）

図示した遺物は、比較的時期の明確な土器・陶磁器である。帰属時期は、古墳時代前期、平安時代前半（9 ～ 10 世紀）、中世、近世～近代である。また、図示しなかったが、黒曜石を中心に水晶やチャート、赤玉石の剥片があり、打製石斧片などもみられることから、縄文時代の遺物も一定量確認できる。

A－２区

土坑８基、溝１条、ピット５基を検出した。

（１）土坑（第 16 図）

直径 50 ～ 70cm、10 ～ 30cm 程度の浅い土坑が、不規則に分布していた。出土土器は、甕破片と思われる厚手の土器片が若干確認でき、いずれも古墳時代前期を中心とする土器の可能性はあるが、時期決定要素としては弱い。

（2）溝（第 16 図）

幅 50cm、深さ 10cm 程度と浅い溝が確認されたが、出土土器などはなく、時期決定要素となる資料は確認できなかった。

（3）ピット（第 16 図）

直径 30cm 前後、深さ 15cm 程度で、不規則に分布し、配列性などは認められない。出土土器などはなく、時期決定要素となる資料は確認できなかった。

（4）グリッド出土遺物（第 34 図）

図示した遺物は、比較的時期の明確な土器･陶磁器である。帰属時期は、縄文時代（石鏃 2 点、打製石斧 1 点、磨石 1 点）、古墳時代前期、平安時代前半（9 ～ 10 世紀）、中世、近世～近代である。石鏃（55・56）は、2 点とも脚を有する石鏃である。55 はやや幅広で大型であり、56 は細身で小型の資料である。2 点とも上半部と片側の脚部を折損している。57 は打製石斧（57）の基部である。全体的に風化が激しく、剥離面の一部は判然としない。下半部が折損しており、全体形状は不明だが、短冊形もしくは撥形であることが推定される。58 は小型の円礫を素材とした磨石である。礫面の一部が平坦になっており、使用の痕跡が顕著に窺える。

A－3 区

竪穴住居跡 7 軒、掘立柱建物跡 4 棟、土坑 4 基、溝 1 条、ピット 107 基が検出された。

（1）竪穴住居跡

1 号竪穴住居跡（第 17・18、35 図）

（位置）R-27・28、S-27・28

（形態）長軸（南－北方向）4.4 m、短軸（東－西方向）4.2 m、深さ 7㎝の隅丸長方形で、北東コーナーにカマドがあると調査段階では判断された。しかし、甲斐地域の平安段階の竪穴住居跡で北東コーナーカマドは奇異であり、むしろこのカマドを 2 号竪穴住居跡のカマドとし、69 などの甲斐型甕を出土したピットとその東側に隣接する焼土をカマドの片鱗とし、周溝掘り込みのみが残存したものを 1 号竪穴住居跡ととらえることで、いずれの竪穴住居跡も北カマドとなる。西壁が図中に描かれているが、A-A´ ラインのエレベーションを見ると西壁の立ち上がりが確認できない。D 区では周溝掘り込みのみの住居跡が確認されており、上記の考え方が妥当と思われるが、遺構計測値などは調査段階の所見に従い記述することとする。

（カマド）住居北東コーナーに焼土が広がる部分があり、遺物が多く出土していることから、形態は不明だが、カマドと調査段階で判断された。

（遺物）甲斐型土器が中心で、坏は、推定口径が 10 ～ 11cm 程度、推定可能な個体が 1 個体しかないものの、推定底径 5 cm で、甲斐編年Ⅷ～Ⅹ期であるが、特に口縁部が尖形を中心としており、より古い要素を持つ。加えて、豊富に出土した甕について、いずれも薄口縁であり、大形甕の口縁長と厚さから、71 が長 29mm、厚 5 mm、72 が長 27mm、厚 5 mm といずれも薄く、保坂 2000 の第 2 図に当てはめてみると、甲斐編年Ⅷ期以前の様相をもつことから、出土土器全体の評価としてⅧ期と判断した。

なお、上記のようにカマドを 2 号竪穴住居跡帰属と考えた場合、69 の甲斐型甕のみが 1 号竪穴住居跡出土品となり、2 号より古くなるが、69 は薄口縁でありこうした考え方に矛盾しない。

2 号竪穴住居跡（第 17 図）

（位置）R・S - 28

（形態）長軸（南－北方向）3.0 m、短軸（確認できた部分の長さ、東－西方向）1.5 m、最大壁高（深さ）15㎝。

1 号竪穴住居跡に遺構の西側を切られ、床面深度も 1 号竪穴住居跡とほぼ同じため、全体を確認することができなかったとするのが調査段階の所見である。しかし、1 号竪穴住居跡で記述したとおり、1 号竪穴住居跡のカマドが 2 号竪穴住居跡の北カマドである可能性が高いと思われる。

（カマド）確認できなかった。

（遺物）目だった遺物は、確認できなかった。なお、上記のとおり 1 号竪穴住居跡カマドを本住居帰属と考えた場合、59 ～ 68、70 ～ 73 が 2 号竪穴住居跡帰属となる。

3 号竪穴住居跡（第 18、36 図）

（位置）P -29・30

（形態）南側が畑の段掘削により消失している。長軸を東―西方向とすると 3.1 m、短軸は 0.7m が残存するのみである。最大壁高さ（深さ）は 6 cm である。

（遺物）甲斐編年Ⅻ期と思われる隆玉縁の甲斐型坏片（74）や皿（77）が時期決定要素である。

4 号竪穴住居跡（第 19、36 図）

（位置）P -31

（形態）南側が畑の段掘削により消失している。長軸を東―西方向とすると 3.6 m、短軸は 2.9m が残存する。隅丸方形と思われる。最大壁高さ（深さ）は 12cm である。

（カマド）東壁に構築されている。焼土や土器片の集中からカマドと判断した。

（遺物）出土遺物は比較的豊富である、甲斐編年Ⅷ～Ⅸ期と思われる甲斐型の高台坏（81）や暗文が残存する坏（83）、丸形や玉縁口縁を特徴とする甲斐型坏片などが時期決定要素である。

5 号竪穴住居跡（第 20、36 図）

（位置）R・S -29

（形態）長軸（南－北方向）2.9 m、短軸（東－西方向）2.6 mの隅丸方形で、最大壁高（深さ）24cm と比較的残りがよい。

（カマド）北壁中央部に構築されている。掘り方と皿状に窪んだ面をなす焼土層とが確認できた。

（遺物）甲斐編年Ⅷ～Ⅸ期の甲斐型坏（98 ～ 100）と、須恵器甕肩部破片（101）がある。

6 号竪穴住居跡（第 21、37 図）

（位置）O-33

（形態）長軸（北西－南東方向）3.7 m、短軸（北東－南西方向）3.3 m、最大深さ 20㎝の隅丸方形で、北東壁中央部にカマドがある。また、北側は 1 号溝に切られていて、1 号住居の北壁、カマドの一部を確認することはできなかった。

（カマド）住居北東コーナーに焼土が広がる部分があり、遺物が多く出土している。このことから、形態は不明だが、カマドと判断した。

（遺物）甲斐型土器の坏を中心に、甕片などが出土した。坏は、玉縁口縁、手持ちヘラ削りが見られるが、表面の風化が著しく、暗文の観察ができない。しかし、推定口径が 15cm 程度の大形の坏（111）が見られる点や、甲斐型甕の口縁部の厚さが 10mm の厚口縁が見られる点などから、甲斐編年Ⅹ～Ⅺ期のものと判断した。なお、

羽釜（116）の存在を認めるとすると、Ⅺ期以降の新しい要素となる。また、122 は拳大の亜円礫であるを素材とした砥石である。左側面の一部に平滑な面が確認されており、砥石の可能性が考えられる。礫の末端部にタール状の黒色付着物が確認できるが、礫そのものの被熱は確認できない。

炭化材が多量に出土している。一部の炭化材について、C- 1 ～ 6 の番号を付け取り上げ、自然科学分析（樹種同定、炭素 14 年代測定）を実施した。C- 2 は特に大形で、長さ 60cm、幅 14cm、厚さ 3 cm が残存し、かなり大きな木の加工材と思われる。他の材は、幅 7 ～ 4 cm、厚さ 4 ～ 2 cm と C- 2 より小形であるが、C- 2 より 1 cm ほど厚みのある材もある。年輪については、材の幅方向にほぼ水平に重積する状況がすべての材で観察でき､かなりの樹齢の大木を加工したものと思われるが､表皮や加工面は確認できなかった。出土状態を見ると、床直上というよりも、 5 cm 程度浮いた状態で出土している。焼土が分布するカマド周辺にはなく、竪穴住居中央やや南西側に偏り、直径 2.5 mほどの範囲で出土している。材の方向は、住居の壁方向と平行する北東－南西方向と壁方向よりやや内側方向に傾く北西－南東方向の 2 種類が明瞭である。カマド付近に集中出土している遺物は、木炭レベルよりもさらに高い位置から出土している。

7 号竪穴住居跡（第 21・38 図）

（位置）O-32・33

（形態）6 号竪穴住居跡に東半部を切られており､カマドも欠失している。長軸（東－西方向）3.6 m､短軸（南－北方向）3.3 m、最大深さ 12㎝の隅丸方形で、東壁にカマドがあったものと推定される。

（遺物）甲斐編年Ⅺ～Ⅻ期の甲斐型皿（123・124）、内黒坏（125）、須恵器甕胴部破片（126）がある。須恵器甕片は内面中央に弱い研磨痕があり、転用硯の可能性が高い。

（2）掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（C 区 2 号掘立柱建物跡）（第 22・38 図）

（位置）W-33・34、X--33・34

（形態）3 間×３間で、ピット端部相互の距離で計測した長軸（東－西方向）5.8 m、短軸（南－北方向）5.5 mの長方形である。ピットは円形ないしは不整円形で、直径が 91 ～ 77cm、深さが 47 ～ 71cm である。

なお、本遺構は C 区調査時に全体が掘り上げられ、正式名称を C 区 2 号掘立柱建物跡と表記する。

（遺物）ピット 1 内から 2 点（129、131）、ピット 5 内から 1 点（130）出土した坏の口縁部は、表面がかなり風化しているものの、尖形でやや内湾する点、ロクロを使用した成形痕跡、赤褐色の色調、胎土の緻密さなどから、奈良時代前半から甲斐型初期の段階の坏と判断できる。いずれも小形破片であり、口径の復元には不安定要素が強いものの、１29 が 16cm と大ぶりで甲斐型Ⅴ期以前と考えられる。130・131 は 12・13cm でいわゆる盤状坏か甲斐型坏Ⅵ期いずれの可能性も考えられる。A 区内で奈良時代の希少な出土資料である。また、132 は小形壷の可能性があり、宮の前遺跡（韮崎市）では奈良時代住居跡３軒から出土していることから、これも奈良時代に帰属する可能性がある。

ただし、この遺構の帰属時期は最も新しい時期である 132 ～ 135 の内面黒色坏であり、時期の限定はできないものの、甲斐編年Ⅸ～Ⅻ期で、実年代で 840 ～ 960 年と考えられる。

なお、本遺構の南西コーナーに位置するピット 4 から、陽物である水晶結晶体（141）が出土しており、地鎮の意味をもつ遺物である可能性が高い。

また、ピット 1 より小型の打製石斧（140）が出土している。平面形状は撥形を呈しており、厚みの少ない資料である。表面は二次加工が顕著であるのに対して、裏面は素材剥片の元の面を広く残している。

2 号掘立柱建物跡（第 23 図）

（位置）U-30・31、V-30・31

（形態）２間×１間で、長軸（南西－北東方向）4.6 m、短軸（南東－北西方向）4.2 mの長方形である。北端辺の２つのピットは、ピット端部相互の距離で計測した場合 3.6m と短軸より短い。ピットは円形ないしは不整円形で、直径が 50 ～ 84cm、深さが 27 ～ 45cm である。なお、２号土坑が南端辺中央部に位置し、これを構成ピットとすると２間×２間の可能性があるが、深さが 13cm とごく浅いことから、これを除いている。

（遺物）目だった遺物は確認されていない。

３号掘立柱建物跡（第 24、38 図）

（位置）R-30・31、S-30・31

（形態）２間×１間で、長軸（南西－北東方向）4.6 m、短軸（南東－北西方向）4.0 mの長方形である。構成ピットは隅丸方形ないしは不整円形で、直径が 66 ～ 89cm、深さが 28 ～ 55cm である。

（遺物）古墳時代前～中期の壺片が確認されている。

４号掘立柱建物跡（第 25 図）

（位置）P -29・30

（形態）北半部分が調査区外にあり、また一部を消失している可能性もあり、形態は不明であるが、東西軸の柱間は２間であると思われる。残存長軸（東－西方向）3.6 m、残存短軸（南－北方向）2.1 mである。構成ピットは円形ないしは楕円形で、直径が 57 ～ 71cm、深さが 22 ～ 28cm である。

（遺物）目だった遺物は確認されていない。

（３）土坑（第 25 図）

直径 41 ～ 92cm、深さ 7 ～ 14cm 程度の浅い土坑が、点在していた。目だった出土遺物はみられなかった。

（４）溝

１号溝（第 26・27・39 図）

東西方向にゆるく南側に張り出しながら長さ約 30m にわたって幅 50cm、深さ 30cm 程度の溝が確認された。出土遺物は、Ｓ字状口縁台付甕（144・149）、折返し口縁の壺片（148）などがみられる。この他、土器片が多量に出土しているが、ほとんどが古墳時代前期と思われる。

（５）ピット（第 28 ～ 31、38 図）

ピットは、掘立柱建物跡の構成ピットを除くと 107 基確認できた。直径 20 ～ 70cm、深さ 10 ～ 50cm 程度である。A- ３区北半部に集中しているが、配列性はみられず、団塊状に分布する。

出土遺物は、古墳時代前期、平安時代の土器がほとんどである。

（６）グリッド出土遺物（38 ～ 41 図）

古墳時代前期、平安時代前半（9 ～ 10 世紀）の所産の遺物がほとんどである。

黒色高台皿（198）は、韮崎市宮ノ前遺跡に類例があり、宮の前Ⅶ～Ⅸ期（甲斐型編年Ⅸ～Ⅻ期）と思われ、色調が白褐色で、胎土に長石や輝石粒子を多く含み、古代巨摩郡の北部あるいは信濃国産である可能性を考慮する必要がある。また、須恵器突帯付壺（209）は信濃国産で、塩尻付近の窯で生産されたものと考えられる。

第 1 表　A-1 区土坑観察表　　() 内は推定

No.	グリッド	図版	平面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	V・W-17	13	不整円形	262	213	20	あり	縄文（前期？）	甕
2	W-16	13	楕円形	83	56	33			
3	V-20	13	不整円形	58	56	14			

第 2 表　A-1 区溝観察表

No.	グリッド	図版	断面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	V-17,V・W・X・Y-18,Y-19	A-6	皿型	2000	70	13	あり	古墳（前期）	S 字状口縁台付甕、壷など

第 3 表　A-1 区ピット観察表

No.	グリッド	図版	平面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	W-15	15	不整円形	30	25	22	あり	古墳～奈良	坏 , 壷
2	W-15	15	不整円形	32	30	20	あり	古墳	S 字状口縁台付甕
3	W-15	15	不整長方形	55	35	21	あり	平安	甕
4	W-15	15	楕円形	63	49	19			
5	Y-19	15	円形	30	29	15	あり	奈良～平安	坏 , 蓋
6	Y-19	15	楕円形	34	26	15	あり	奈良	坏
7	Z-19	15	不整円形	40	33	16			
8	Z-19	15	楕円形	45	31	15			
9	Z-19	15	不整円形	36	30	14			
10	Y-21	15	円形	28	26	11			
11	X-21	15	不整円形	33	31	12			
12	Y-22	15	不整円形	31	30	18			
13	X・Y-22	15	不整円形	39	34	23			
14	Y-22	15	円形	23	22	30			
15	Y-22	15	不整円形	34	31	15			
16	X-22	15	円形	32	31	15			
17	X-22	15	不整円形	37	34	17			
18	X-22	15	楕円形	45	30	31			
19	X-22	15	楕円形	32	27	22			

第 4 表　A-2 区土坑観察表　　() 内は推定

No.	グリッド	図版	平面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	Z-27	16	不整円形	53	49	23			
2	Z-27	16	不整円形	59	56	18			
3	Z-24	16	不整円形	70	61	18	あり	古墳（前期）？	甕？
4	X-25	16	楕円形	60	31	16	あり	古墳（前期）	壷
5	X-25	16	楕円形	67	48	29	あり	古墳（前期）？	甕？
6	X-25	16	楕円形	71	49	10	あり	古墳（前期）？	甕？
7	Y-25	16	不整円形	70	53	19			
8	Z-25	16	楕円形	50	22	23			

第 5 表　A-2 区溝観察表

No.	グリッド	図版	平面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	Y-28	16	皿型	420	50	12		不明	

第 6 表　A-2 区ピット観察表

No.	グリッド	図版	平面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	遺物の有無	時　代	備　　考
1	X-25	16	円形	29	28	16			
2	Y-26	16	円形	39	37	27			
3	Y-27	16	円形	26	22	14			
4	Y-27	16	不整円形	31	27	15			
5	Y-28	16	円形	25	24	16			

第 7 表　A-3 区住居観察表　　（）内は推定

No.	グリッド	図版	形状	規模cm			遺物の有無	時　代	施　　設
				長軸	短軸	深さcm			
1	R・S-27・28	17・18	隅丸方形	450	420	7	あり	平安	ピット 5 基・北東の隅にカマド
2	R・S-28	17	不明	300	残 150	15	あり	平安	
3	P・Q-29・30	18	不明	320	残 80	6	あり	平安	
4	P-31	19	不明	370	残 290	12	あり	平安	東にカマド・西にピット 1 基隣接
5	R・S-29	20	隅丸長方形	370	270	24	あり	平安	北にカマド・西にピット 1 基・南にピット 1 基隣接
6	N・O-33	21	隅丸方形	370	370	20	あり	平安	北にカマド
7	O-32・33	21	隅丸長方形	残 370	330	12	あり	平安	

第 8 表　A-3 区掘立柱建物観察表

No.	グリッド	図版	ピット番号	形状	規模cm			隣接ピット間隔 a	隣接ピット間隔 b	遺　物	備　　考
					長軸	短軸	深度				
1	W・X-33・34	22	1	不整円形	83	80	58	/	90	器台・坏・壺・甕	調査区上コブケ C 区で北東半部を調査。正式名称を C 区2号掘立柱建物跡と呼称する。平安
			2	円形	67	61	53	90	77	S 字甕・坏・甕	
			3	不整円形	76	56	47	77	86	坏・甕	
			4	不整円形	90	80	59	86	87	坏・甕・灰釉陶器	
			5	円形	71	62	49	80	116	S 字甕・坏・蓋・甕	
			6	楕円形	91	75	71	116	/	台付甕・坏・甕	
			102	円形	74	69	57	87	80	坏・小甕	
2	U・V-30・31	23	15	円形	50	48	30	133	246	坏	南西に土坑 1 基、北東にピット 1 基隣接。平安
			16	不整円形	69	56	37	117	133		
			17	楕円形	84	61	27	275	117		
			18	不整円形	72	66	42	127	275	坏	
			19	不整円形	61	51	45	142	127	坏	
			20	不整円形	75	63	36	246	142	坏・甕	
3	R・S-30・31	24	22	不整円形	76	58	28	272	107	坏・甕	平安
			23	不整円形	78	77	54	107	97	壺	
			24	不整円形	89	69	43	97	245	坏・壺・甕	
			25	不整円形	82	54	55	245	138	坏・甕	
			26	隅丸方形	74	59	55	138	132		
			27	隅丸方形	66	56	42	132	272	壺・甕	
4	P-29・30	25	77	円形	57	57	27	88	/	S 字甕・甕	平安
			78	楕円形	65	56	28	84	88	坏・甕	
			80	楕円形	63	49	26	/	94	坏・甕	
			82	円形	71	69	22	94	84	坏・甕	

第 9 表　A-3 区土坑観察表

No.	グリッド	図版	平面形状	規模cm			遺物の有無	時　代	備　　考
				長軸	短軸	深度			
1	W-33	25	楕円形	78	60	14	あり	平安	壺・甕
2	V-30・31	25	不整円形	92	64	13	2 号掘立柱建物に隣接。		
3	U-31	25	不整円形	50	40	10			
4	Q-32	25	不整円形	41	33	7			

第 10 表　A-3 区溝観察表

No.	グリッド	図版	断面形状	規模cm			遺物の有無	時　代	備　　考
				長軸	短軸	深度			
1	Q・R-31・32、R-27・28・29・30	26・27	鍋底形	2900	50	30	あり	平安	S 字甕・壺・台付甕・長胴甕・坏・灰釉陶器

第 11 表　A-3 区ピット観察表（掘立柱建物跡以外）

No.	グリッド	図版	平面形状	規模cm			遺物の有無	時　代	備　　考
				長軸	短軸	深度			
7	U-31	28	不整円形	60	34	13	2 号掘立柱建物に隣接。		
8	W-33	28	円形	34	29	15			
9	V・W-32・33	28	円形	69	60	27			
10	W-32・33	28	円形	48	47	22			
11	W-32	28	隅丸方形	46	39	28			
12	V-32	28	円形	26	24	6			
13	V-32	28	楕円形	49	35	15			
14	V-31	28	円形	45	36	19			
21	T-29	28	隅丸方形	55	54	34	あり	古墳	S 字甕・甕
28	S-30	28	円形	27	22	13			
29	S-30	28	隅丸方形	26	25	12			
30	S-31	28	楕円形	42	34	21			
31	R-32	28	円形	32	31	25	あり	平安	甕・坏
32	R-32	28	不整円形	32	22	12	あり	平安	坏
33	R-31	28	不整円形	45	42	27	あり	平安	坏・甕
34	R-31	28	円形	23	22	20	あり	平安	坏・甕
35	R-31	28	不整円形	31	29	22	あり	古墳	高坏・甕
36	R-31	28	円形	26	24	18			
37	R-31	28	不整円形	77	14	25	あり	古墳	甕
38	R-30	28	円形	23	21	21	あり	平安	坏
39	R-30	28	円形	24	23	11			
40	R-30	28	楕円形	29	23	20	あり	平安	甕
41	S-30	28	円形	21	20	11			
42	R-32	28	楕円形	20	14	16			
43	R-32	29	円形	21	20	18	あり	平安	坏
44	Q-30・31	29	不整円形	36	32	17	あり	古墳	S 字甕
45	Q-30	29	円形	32	31	18	あり	平安	甕
46	Q-31	29	不整円形	68	39	26	あり	平安	坏
47	Q-31	29	円形	46	38	38	あり	平安	坏・甕
48	Q-31	29	不整円形	49	34	12	あり	平安	坏・甕
49	Q-31	29	円形	34	31	23			
50	Q-31	29	円形	28	26	23			
51	Q-31	29	円形	35	32	24			
52	Q-32	29	円形	29	23	16			
53	Q-32	29	円形	24	20	19			
54	Q-32	29	円形	28	25	32	あり	平安	S 字甕・坏・壺
55	R-32	29	楕円形	26	20	27			
56	R-30	29	不整楕円形	46	30	18	あり	平安	坏・甕
57	R-30	29	楕円形	33	23	26			
58	S-30	29	円形	32	30	14			
59	Q-32	29	円形	35	33	25	あり	平安	坏
60	Q-32	29	円形	32	31	9	あり	平安	甕
61	Q-32	29	楕円形	40	25	21			
62	Q・R-31	29	円形	36	34	35	あり	平安	坏・甕
63	R-29	29	不整円形	39	20	20			
64	R-28	29	円形	32	28	18	あり	平安	坏・甕
65	R-28	29	不整円形	70	59	44			
66	S-28	29	楕円形	36	32	11			
67	S-28	29	円形	26	25	13			
68	R-28	29	不整円形	32	23	8			
69	P-31	30	不整円形	77	46	23			
70	P-31	30	円形	68	60	32	あり	平安	坏
71	P-31	30	円形	75	70	51	あり	平安	坏・甕
72	P-30・31	30	円形	40	40	37	あり	古墳	高坏・甕

No.	グリッド	図版	平面形状	規模cm			遺物の有無	時 代	備　　考
				長軸	短軸	深度			
73	P-30	30	円形	58	57	23	あり	平安	坏・甕
74	P-30	30	楕円形	59	44	12	あり	古墳	坏
75	P-30	30	楕円形	56	48	22			
76	P-30	30	円形	35	35	33			
79	P-30	30	円形	30	27	19	あり	古墳	甕
81	P-29	30	円形	30	27	7			
83	P-29	30	楕円形	48	42	42	あり	平安	坏・甕
84	P-29	30	円形	30	28	36			
85	P-29	30	不整円形	54	45	45	あり	平安	坏・甕
86	P-29	30	隅丸長方形	48	26	37	あり	平安	坏
87	P-29	30	不整円形	51	28	62	あり	平安	高坏・坏・甕
88	P-29	30	円形	50	47	17	あり	平安	坏・甕
89	P=31	30	円形	40	36	32			
90	O-31	30	不整円形	28	22	16			
91	P-28	30	円形	9	7	不明			
92	P-29	30	円形	26	25	12			
93	Q-28	30	円形	71	67	23	あり	古墳	台付甕
94	Q-28・29	30	楕円形	70	52	21	あり	平安	坏・甕
95	Q・R-28	30	円形	64	60	33	あり	平安	坏・甕
96	R-28	30	不整円形	82	66	24	あり	平安	甕
97	R-28	31	楕円形	55	42	22		平安	甕
98	R-29	31	楕円形	85	73	43	あり	平安	甕
99	R-29	31	円形	72	67	36	あり	平安	甕
100	Q-28	31	不整円形	52	47	30	あり	古墳	甕
101	R-29	31	楕円形	45	32	18			
103	R-29	31	円形	28	26	17			
104	S-30	31	円形	26	24	26			
105	W・X-32	31	楕円形	48	36	14		平安	柱状高台
106	S-30	31	円形	20	19	18			
107	O-31	31	不整円形	55	48	15	あり	古墳	甕
108	O-31	31	楕円形	72	34	25	あり	古墳	甕
109	O-32	31	不整円形	74	71	40	あり	古墳	坏・壺・甕
110	N-33	31	円形	36	34	17			
111									欠番
112	R-27	17	不整円形	46	21	7			1住内
113	R-27	17	不整円形	29	21	5			1住内
114	R-28	17	円形	22	21	4			1住内
115	R-28	18	円形	27	20	7			1住内
116	R-28	18	不整円形	15	11	6			1住内
117	R-28	18	隅丸方形	19	18	7			1住内
118	R-28	18	不整円形	28	20	6			1住内
119									欠番
120	U-31	31	楕円形	42	33	4			
121	Q-30・31	31	不整円形	26	24	8			
122	Q-31	31	円形	22	20	6			
123	Q-32	31	円形	19	19	7			
124	R-32	31	楕円形	27	20	10			
125	Q-32	31	円形	17	16	9			
126	Q-32	31	円形	21	20	8			
127	S-30	31	隅丸五角形	25	25	8			
128	S-29・30	31	楕円形	33	25	8			
129	S-29	31	不整円形	51	41	5			
130	S-29	31	不整円形	44	43	18			
131	S-29	31	円形	29	27	17	あり	古墳	甕

第12表　上コブケ遺跡A区土器類観察表

図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
32	1	1号土坑	A–1区	縄文（前期？）	土器	深鉢	–	–	–				明黄褐		白・黒色粒子　粗	破片	良好	P–15	口縁部
32	2	1号溝	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.6	–	斜めハケ			にぶい黄橙		白・黒・赤色粒子、金雲母、やや密	破片	良好	P–10	S字状口縁台付甕
32	3	1号溝	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.8	(6.8)				明赤褐		白色粒子、金雲母、石英、やや密	破片	良好	P–36	脚台部内面折り返し、S字状口縁台付甕
32	4	1号溝	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 6.2	11.8	ハケ目	指ナデ		にぶい褐		白・黒・赤色粒子、やや粗	破片	良好	P–38	脚台部内面折り返し、指頭痕、S字状口縁台付甕
32	5	1号溝	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.6	(7.4)		指ナデ		明赤褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	P–50	脚台部内面折り返し、S字状口縁台付甕
32	6	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	高坏	–	–	–				褐		白・黒色粒子、やや粗	破片	良好	P–3	胎土が粗く、小形精製土器ではない
32	7	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	高坏？	–	残 1.6	(12.6)				明褐		白・黒・赤色粒子、石英密	破片	良好	一括	壷口縁部の可能性のある
32	8	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 1.9	–				黄褐		白・黒・赤色粒子、金雲母、やや粗	破片	良好	一括	S字状口縁台付甕
32	9	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.0	–				明褐		白・黒・赤色粒子、やや粗	破片	良好	P–5	
32	10	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.2	–	ハケ目			明黄褐		白・黒色粒子、金雲母　粗	破片	良好	P–4	S字状口縁台付甕
32	11	遺構外	A–1区	古墳（前期）	土師器	小形甕	–	残 1.0	3.4	ハケ目	ハケ目		赤褐		白・黒色粒子、やや粗	破片	良好	P–7	
32	12	遺構外	A–1区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(12.8)	残 3.6	–				にぶい黄橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	
32	13	遺構外	A–1区	平安（Ⅹ Ⅲ期）	土師器	坏	–	残 2.5	(6.0)			回転糸切り無調整	にぶい黄橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	
32	14	遺構外	A–1区	平安（Ⅹ Ⅲ期）	土師器	坏	–	残 1.3	(6.4)			回転糸切り無調整？	明黄褐		白・赤色粒子　密	破片	良好	P–1	底部やや突出
32	15	遺構外	A–1区	中世末～近世初頭	灰釉陶器	蓋？	21.4	残 3.6	–	灰釉	灰釉		灰釉		灰色	破片	良好	一括	皿か鉢の可能性もある
32	16	遺構外	A–1区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 1.0	–				灰黄		白色粒子	破片	良好	一括	壷頸部の可能性もある
32	17	遺構外	A–1区	中世	陶器	甕	–	残 4.7	–	タタキ目			灰		白・黒色粒子	破片	良好	一括	幾何形の押印
32	18	遺構外	A–1区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 7.0	–	タタキ目			灰黄		白・黒色粒子	破片	良好	一括	
32	19	遺構外	A–1区	中世？	陶器	甕	–	残 5.7	–	タタキ目			灰		白色粒子	破片	良好	一括	
32	20	遺構外	A–1区	中世？	陶器	甕	–	残 4.9	–				暗灰黄	灰白	白色粒子	破片	良好	一括	
32	21	遺構外	A–1区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 5.7	–	タタキ目			灰		白色粒子	破片	良好	一括	
32	22	遺構外	A–1区	中世？	陶器	甕	–	残 2.4	–	タタキ目			灰	灰白	白・黒色粒子	破片	良好	P–5	
32	23	遺構外	A–1区	近世（幕末？）	磁器	中碗	–	残 2.6	–	草文？			白		白	破片	良好	一括	染付　青み強い山呉須
32	24	遺構外	A–1区	近代（大正～昭和初期）	磁器	中碗	(8.2)	残 2.5	–	花文			白		白	破片	良好	一括	丸形　染付　ゴム印判
32	25	遺構外	A–1区	近代（大正～昭和初期）	磁器	中碗	(11.4)	残 2.3	–	四方襷松文　口紅	雷文				白	破片	良好	一括	平形　染付　口紅　ゴム印判
32	26	遺構外	A–1区	近世（幕末）	磁器	蓋	–	残 12	–	草文	一重圏線内に宝珠文？		白		白	破片	良好	一括	染付　透明釉　つまみ内に銘あり　古伊万里
34	33	遺構外	A–2区	古墳（前・中期）	土師器	壺	–	残 3.4	(8.4)				赤褐		白・黒・赤色粒子　粗	破片	良好	P–1	底部中央くぼみあり
34	34	遺構外	A–2区	古墳（前期）	土師器	小型壺	–	残 1.1	4.0				褐		白色粒子　粗	破片	良好	P–11	底部
34	35	遺構外	A–2区	古墳（前期）	土師器	高坏？	(13.0)	残 3.2	–				明赤褐		白・赤色粒子　粗	破片	良好	一括	高坏・鉢などの口縁部
34	36	遺構外	A–2区	平安（Ⅹ～Ⅺ期）	土師器	坏	–	残 1.4	(4.0)	ヘラ削り			にぶい黄褐		白・黒色粒子　密	破片	良好	一括	底部径が小さく、暗文なし？
34	37	遺構外	A–2区	平安（前半）	土師器	坏	–	残 1.1	(4.4)				明黄褐		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	表面風化顕著
34	38	遺構外	A–2区	平安（Ⅹ Ⅴ期）	土師器	坏	–	残 1.1	(8.0)			回転糸切り痕無調整	明赤褐		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	12世紀前半

図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
34	39	遺構外	A–2 区	平安（ＸＶ期）	土師器	柱状高台付坏	(4.6)	残 4.1	–				にぶい黄褐		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	１２世紀前半
34	40	遺構外	A–2 区	平安（前半）	土師器	長胴甕	–	残 3.3	–	削り	ハケ目		赤褐		白・黒色粒子　長石　粗	破片	良好	P–3	口縁部、厚口縁、１０世紀中頃
34	41	遺構外	A–2 区	中世（後半）	土器	内耳土器	–	残 2.3	(13.5)				黄褐	明赤褐	白・黒色粒子　　粗	破片	良好	P–4	底部蒔き砂
34	42	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	壺	(22.0)	残 3.6	–				灰白	黄灰	白・黒色粒子	破片	良好	P–5	口縁部
34	43	遺構外	A–2 区	中世	陶器	壺	–	残 5.5	–				黄灰		白・黒色粒子	破片	良好	一括	
34	44	遺構外	A–2 区	中世	陶器	壺	–	残 1.5	–				灰黄		白・黒色粒子	破片	良好	一括	
34	45	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 6.2	–	タタキ目			灰		白・黒・赤色粒子	破片	良好	一括	
34	46	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.2	–	タタキ目			灰白		白・黒色粒子	破片	良好	P–1	
34	47	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.5	–	タタキ目			灰		白・黒色粒子	破片	良好	P–3	
34	48	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 3.2	–	タタキ目			灰		白・黒・赤色粒子	破片	良好	一括	
34	49	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.8	–	タタキ目			灰		白・黒色粒子	破片	良好	P–1	
34	50	遺構外	A–2 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 6.3	–	タタキ目	ヘラナデ		灰		白・黒色粒子	破片	良好	P–5	
34	51	遺構外	A–2 区	中世（後半）	灰釉陶器	皿	–	残 1.1	(8.0)				灰白	にぶい黄	白	破片	良好	P–4	内面前面灰釉
34	52	遺構外	A–2 区	近世（幕末）	磁器	鉢	–	残 4.4	–	連子に丸文	草文		灰白		白	破片	良好	一括	手描き　山呉須　古伊万里
34	53	遺構外	A–2 区	近代（明治）	磁器	小鉢	(13.0)	残 3.2	–	丸文	格子に丸文		白		白	破片	良好	一括	手描き　コバルト呉須、瀬戸
34	54	遺構外	A–2 区	近世	磁器	土瓶	–	残 2.3	–	山水文			灰白	にぶい黄橙	黄土	破片	良好	一括	手描き　貫入あり　益子
35	59	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	(10.8)	4.0	(5.0)				橙		白・赤色粒子　石英　密	20	良好	カマド P–10	尖形口縁
35	60	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	(10.9)	残 2.7	–				にぶい橙		黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマド一括	尖形口縁
35	61	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	(11.9)	残 3.2	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマド P–14	尖形口縁
35	62	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	(10.2)	残 2.9	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	20	良好	カマド P–16	丸形口縁
35	63	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	(9.8)	残 3.2	–				浅黄橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	尖形口縁
35	64	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	10.0	残 3.2	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	尖形口縁
35	65	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	高台坏	–	残 4.2	7.6		内黒		橙	黒褐色	白・黒・赤色粒子　密	20	良好	P–2,3, 一括	削り出し高台
35	66	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	蓋	17.4	残 2.0	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	焼土一括	
35	67	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	蓋	16.4	残 1.6	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	焼土一括	
35	68	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	大形鉢	(35.6)	残 14.6	–	ハケ目	ハケ目		明赤褐		白・黒色粒子　金雲母　やや密	20	良好	カマド P–7,12,19	薄口縁
35	69	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	甕	(34.6)	残 7.3	–	ハケ目	ハケ目		灰褐	赤褐	白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–42	薄口縁
35	70	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	甕	18.0	残 7.4	–	ハケ目	ハケ目		赤褐		白・黒色粒子　金雲母　石英　やや密	破片	良好	カマド P–8	薄口縁
35	71	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	甕	(23.5)	残 5.0	–	ハケ目	ハケ目		赤褐		白・黒・赤色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	カマド P–19,22,23	薄口縁
35	72	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	甕	(25.4)	残 5.2	–	ハケ目	ハケ目		にぶい赤褐		白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	カマド P–1	薄口縁
35	73	1 住	A–3 区	平安（Ⅷ期）	土師器	甕	–	残 3.7	7.9	ハケ目	ハケ目		褐		白・黒・赤色粒子　石英　金雲母　やや粗	破片	良好	カマド P–1	底部
36	74	3 住	A–3 区	平安（ＸⅡ期）	土師器	坏	(13.5)	残 1.9	–				橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	隆玉縁
36	75	3 住	A–3 区	平安（ＸⅠ～ＸⅡ期）	土師器	坏	(13.0)	残 1.8	–				明赤褐		白・黒色粒子　密	破片	良好	P–13	玉縁　口唇部黒色化
36	76	3 住	A–3 区	平安（ＸⅠ～ＸⅡ期）	土師器	坏	(13.0)	残 1.7	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	玉縁
36	77	3 住	A–3 区	平安（ＸⅡ期）	土師器	皿	10.8	2.1	5.0	ヘラ削り			明赤褐		白・黒・赤色粒子　密	90	良好	P–8,11	
36	78	3 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	小形壷	–	残 2.1	(4.0)				明赤褐		白・黒色粒子　やや粗	破片	良好	P–2	底部
36	79	3 住	A–3 区	平安？	灰釉陶器	壺	–	残 5.4	–				灰黄		黒色粒子	破片	良好	一括	中世の可能性もあり
36	80	3 住	A–3 区	平安（前半）	土師器	置きカマド？	–	残 4.3	–	ナデ	ナデ		赤褐		白・黒色粒子　長石　やや粗	破片	良好	P–3	

図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
36	81	4住	A–3区	平安（Ⅸ期）	土師器	高台坏	(16.4)	6.5	(7.2)	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	25	良好	P–5	削り出し高台
36	82	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(12.0)	3.6	(5.5)	ナデ			橙		赤色粒子　密	15	良好	P–11,12	玉縁口縁
36	83	4住	A–3区	平安（Ⅸ期）	土師器	坏	11.8	3.8	4.0	ヘラ削り	ミガキ		褐		白・赤色粒子　密	80	良好	P–26	内面暗文　丸形口縁
36	84	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(12.0)	残 3.0	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	丸形口縁
36	85	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(12.0)	残 3.2	–	ナデ	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	P–1	玉縁口縁
36	86	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(12.0)	残 2.7	–				明褐		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–10	丸形口縁
36	87	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(13.0)	2.9	–				橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	P–14	丸形口縁
36	88	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(13.0)	残 2,5	–				橙		赤色粒子　密	破片	良好	一括	丸形口縁
36	89	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(10.0)	残 2.8	–				にぶい橙		黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–9	丸形口縁
36	90	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	–	残 2.0	(4.0)	ヘラ削り	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–5	底部
36	91	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	–	残 2.0	(4.0)	ヘラ削り	ナデ		にぶい赤褐		黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマド一括	底部
36	92	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	–	残 2.1	(5.0)	ナデ	ナデ		橙		黒・赤色粒子　密	20	良好	P–25	底部
36	93	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	–	残 2.0	(6.0)				にぶい黄橙	橙	黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	底部
36	94	4住	A–3区	平安？	土師器	鉢？	–	残 2.3	(6.0)				橙	明黄褐	白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	底部
36	95	4住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	蓋	(24.0)	残 1.6	–	ナデ	ナデ		明赤褐		赤色粒子　密	破片	良好	P–24,28	
36	96	4住	A–3区	平安（前半）	須恵器	蓋	–	残 1.5	–				灰		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	P–19	
36	97	4住	A–3区	平安（前半）	土師器	小甕	(14.0)	残 3.7	–	ハケ目	ハケ目		暗赤褐	灰褐	白・黒色粒子　金雲母　粗	破片	良好	カマドP–6	
36	98	5住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	(10.8)	残 2.9	–	ナデ	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–1	丸形口縁
36	99	5住	A–3区	平安（Ⅷ～Ⅸ期）	土師器	坏	–	残 2.1	(5.9)	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–2	底部
36	100	5住	A–3区	平安（Ⅷ期？）	土師器	坏	–	残 1.7	(5.8)	ヘラ削り	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	みこみ部暗文あり？
36	101	5住	A–3区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 8.3	–				灰黄褐		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	P–1	
37	102	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(11.8)	4.1	4.6	ヘラ削り	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	80	良好	P–11	玉縁口縁
37	103	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(13.4)	残 4.3	–	ヘラ削り	ナデ		明赤褐		白・赤色粒子　密	15	良好	一括	隆玉縁口縁
37	104	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(12.8)	残 3.4	–	ヘラ削り	ナデ		明赤褐		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	玉縁口縁
37	105	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(11.8)	残 3.6	–	ミガキ 指頭圧痕			明黄褐		黒・赤色粒子　密	20	良好	カマドP–11	玉縁口縁
37	106	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(11.8)	残 2.8	–	ナデ	ナデ		明褐		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	玉縁口縁
37	107	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(17.5)	残 2.2	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–1	隆玉縁口縁
37	108	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	(12.4)	残 1.6	–	ナデ	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–6	玉縁口縁
37	109	6住	A–3区	平安（ⅨⅩ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	(14.6)	5.0	(6.0)	ヘラ削り	内黒		にぶい黄橙	黒	白・黒・赤色粒子　密	25	良好	カマドP–11	玉縁口縁
37	110	6住	A–3区	平安（ⅨⅩ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	(13.6)	残 3.5	–		内黒		にぶい黄橙	黒	黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	玉縁口縁
37	111	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	–	残 4.3	6.0	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	25	良好	カマドP–1,4,9	大形坏
37	112	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	–	残 4.8	(5.6)	ヘラ削り	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	カマドP–1	大形坏
37	113	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期？）	土師器	皿	(13.4)	残 1.8	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	丸形口縁
37	114	6住	A–3区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期？）	土師器	皿	–	残 1.9	(3.9)	ナデ	ナデ		にぶい黄橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–3	底部
37	115	6住	A–3区	平安（Ⅹ期）	土師器	甕	(27.4)	残 4.5	–	ハケ目 指頭圧痕	ナデ		褐		白・黒・赤色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–8, 一括	口縁部暑 7 mm で薄口縁
37	116	6住	A–3区	平安（ⅨⅩ～ⅩⅡ期？）	土師器	羽釜？	15.0	残 3.5	–	ハケ目	ナデ		明赤褐		白・黒色粒子　金雲母　石英　やや粗	破片	良好	一括	口縁部
37	117	6住	A–3区	平安（Ⅹ期）	土師器	甕	–	残 2.3	–	ハケ目	ハケ目		褐		白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	口縁部暑 7 mm で薄口縁
37	118	6住	A–3区	平安（ⅩⅠ期）	土師器	甕	–	残 3.1	–	ハケ目	ナデ		褐		白・黒・赤色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	カマド	口縁部暑 10mm で厚口縁
37	119	6住	A–3区	古墳（前期）	土師器	小型甕？	–	残 1.8	(4.0)	ナデ	ナデ		明赤褐		白・黒色粒子　密	破片	良好	一括	甲斐型の胎土と異なる
37	120	6住	A–3区	平安（前半）	土師器	甕	–	残 1.7	(8.0)			木葉痕	褐		白・黒色粒子　金雲母　やや粗	破片	良好	カマドP–5	底部
37	121	6住	A–3区	平安（前半）	灰釉陶器	甕	–	残 3.5	–				黄褐	浅黄色	黒色粒子	破片	良好	P–4	外面全体に厚く施釉

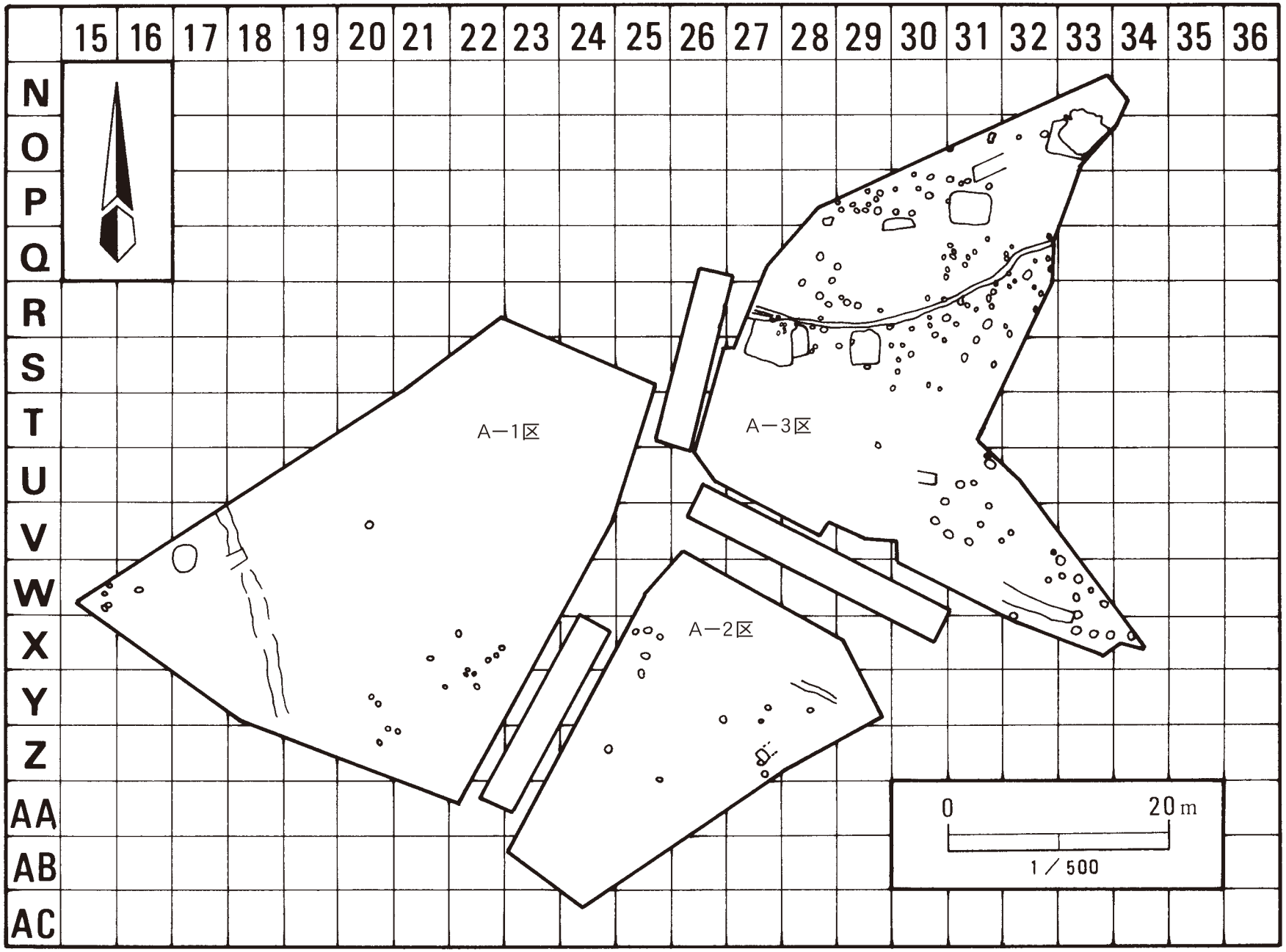
図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
38	123	7住	A–3区	平安（XⅠ～XⅡ期）	土師器	皿	（12.6）	2.6	（3.2）	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	45	良好	P–1	回転ではないが横ヘラ削り
38	124	7住	A–3区	平安（前半）	土師器	皿	–	残 0.5	4.3	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–10	底部
38	125	7住	A–3区	平安（IX～XⅡ期）	土師器	坏	–	残 2.1	（8.0）	ヘラ削り	暗文　内黒		浅黄橙	黒	白・赤色粒子　密	破片	良好	P–10	内面放射状暗文　みこみにも暗文
38	126	7住	A–3区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 14.4	–	タタキ目			灰		白・黒色粒子	破片	良好	P–11	内面中央に弱い研磨痕があり、転用硯の可能性が高い
38	127	1号掘立柱	A–3区	弥生（後期）～古墳（前期）	土師器	壺	（16.0）	残 1.8	–				橙		白・赤色粒子　やや粗	破片	良好	一括	折り返し口縁　ピット1内出土
38	128	1号掘立柱	A–3区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（11.0）	残 1.9	–				橙		白色粒子　やや密	破片	良好	一括	S字状口縁台付甕　ピット2内出土
38	129	1号掘立柱	A–3区	奈良（Ⅰ～Ⅴ期）	土師器	坏	（16.0）	残 3.8	–	ナデ	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	P–2	ピット1内出土
38	130	1号掘立柱	A–3区	奈良（Ⅰ～Ⅵ期）	土師器	坏	（13.0）	残 3.3	–	ナデ	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	P–2, 一括	ピット5内出土
38	131	1号掘立柱	A–3区	奈良（Ⅰ～Ⅵ期）	土師器	坏	（12.0）	残 3.3	–	ナデ	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	一括	ピット1内出土
38	132	1号掘立柱	A–3区	奈良？	土師器	小形壷？	–	残 3,4	（6.0）	ナデ	ナデ		橙	にぶい橙	白・赤色粒子　密	破片	良好	P–2	薬壷底部か　ピット6内出土
38	133	1号掘立柱	A–3区	平安（IX～XⅡ期）	土師器	坏	15.4	5.4	5.6	ヘラ削り	内黒		浅黄橙	黒	赤色粒子　密	50	良好	P–5,6	ピット5内出土
38	134	1号掘立柱	A–3区	平安（IX～XⅡ期）	土師器	坏	（14.0）	4.8	4.4	ヘラ削り	内黒		灰黄褐	黒褐	赤色粒子　密	25	良好	P–2	ピット102内出土
38	135	1号掘立柱	A–3区	平安（IX～XⅡ期）	土師器	坏	–	残 2.5	4.8	ナデ	内黒		橙	灰褐	白・赤色粒子　密	40	良好	P–1	ピット102内出土
38	136	1号掘立柱	A–3区	古墳（前期）？	土師器	壷？	–	残 2.5	（8.0）	ハケ目			赤褐		白・赤色粒子　やや粗	破片	良好	一括	底部　ピット3内出土
38	137	1号掘立柱	A–3区	平安（Ⅶ～X期）	土師器	蓋	–	残 1.4	–				橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	宝珠部分　ピット5内出土
38	138	1号掘立柱	A–3区	平安（前半）	土師器	甕	–	残 1.8	（7.6）	ハケ目	ハケ目	木葉痕	黒褐		白色粒子　金雲母　粗	破片	良好	P–7	ピット5内出土
38	139	1号掘立柱	A–3区	平安（Ⅵ～X期）	土師器	小形甕	（12.0）	残 4.2	–	ハケ目	ハケ目		褐		白色粒子　金雲母　やや粗	破片	良好	P–3, 一括	ピット102内出土
38	142	3号掘立柱	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	壺	–	残 3.5	–	ナデ	ナデ		赤褐		白・黒色粒子　やや粗	破片	良好	p–1	3C後半～5C前半
39	143	1溝	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	壺	（13.0）	残 6.5	–				橙		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	P–8	3C後半～5C前半
39	144	1溝	A–3区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（14.0）	残 2.5	–	ハケ目	ハケ目		橙		白色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–3	S字状口縁台付甕口縁部
39	145	1溝	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	甕	（16.0）	残 1.7	–	ナデ	ナデ		赤褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	口縁部
39	146	1溝	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	甕	（24.0）	残 3.2	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	P–17	口縁部
39	147	1溝	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	台付甕	–	残 2.1	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–16	底部
39	148	1溝	A–3区	古墳（前～中期）	土師器	甕	–	残 3.5	–	ハケ目	ハケ目		暗赤褐		白・赤色粒子　やや粗	破片	良好	P–11	折り返し口縁
39	149	1溝	A–3区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.1	（12.0）	ナデ			橙		白・赤色粒子　やや密	破片	良好	一括	S字状口縁台付甕折り返し高台部
39	150	pit33	A–3区	平安（前半）	須恵器	甕？	–	残 4.0	–	タタキ目			オリーブ灰		白色粒子	破片	良好	P–1	胴部
39	151	pit34	A–3区	平安（前半）	土師器	坏	（12.0）	残 3.2	–				にぶい橙		赤色粒子　密	破片	良好	P–1	丸形口縁　Ⅷ期以降
39	152	pit40	A–3区	平安（前半）	土師器	甕	–	残 1.6	（6.5）		ハケ目	木葉痕	赤褐		白色粒子　金雲母　粗	破片	良好	一括	甲斐型甕底部
39	153	pit56	A–3区	平安（前半）	土師器	坏	（12.0）	残 3.2	–	ヘラ削り	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	P–2	丸形口縁　Ⅷ期以降
39	154	pit62	A–3区	平安（Ⅷ期）	土師器	坏	–	残 1.5	5.4	ヘラ削り	ナデ		明赤褐		赤色粒子　密	破片	良好	P–1	みこみが広い
39	155	pit85	A–3区	平安（前半）	土師器	甕	–	残 2.7	（7.0）	ハケ目			黒褐		白色粒子　金雲母　粗	破片	良好	P–4	甲斐型甕底部
39	156	pit109	A–3区	平安？	土師器	柱状高台付皿？	–	残 3.5	4.5	ハケ目			明赤褐		白色粒子　粗	破片	良好	P–1	非ロクロ成形　甕類の粗い胎土　古墳前期の蓋の可能性あり

図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
39	157	pit87	A–3 区	古墳（前期）	土師器	高坏	–	残 4.0	–	ナデ	ナデ		橙		赤色粒子　密	破片	良好	P–2	脚部
39	158	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	高坏	（23.0）	残 10.0	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	50	良好	P–1	坏部
39	159	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	高坏	–	残 2.6	–	ナデ			明黄褐		黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	脚部
39	160	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	高坏	–	残 5.5	9.8	ナデ	ナデ		明赤褐		白・黒・赤色粒子　石英　密	50	良好	P–1	脚部穿孔 3 ケあり
39	161	6 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	（9.7）	残 2.6	–	指頭圧痕			灰黄褐		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	一括	単純口縁
39	162	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 3.5	–	ナデ	ナデ		明赤褐		白・黒色粒子　やや粗	破片	良好	P–12	有段口縁
39	163	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 1.3	（8.6）		ハケ目		黒褐		白色粒子　石英　粗	破片	良好	S–1	底部中央凹む
39	164	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 2.1	（6.8）	ナデ			明褐	にぶい黄橙	白・黒・赤色粒子　粗	破片	良好	P–10	底部
39	165	4 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 2.1	（8.5）	指頭圧痕			にぶい赤褐		白・黒色粒子　粗	破片	良好	P–11	底部
39	166	1 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 1.3	（5.8）				明褐		白・黒・赤色粒子　石英　金雲母　やや密	破片	20.0	焼土一括	内面磨き　底部中央凹む
39	167	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 1.5	（7.2）	ナデ			赤褐		白・黒色粒子　粗	破片	良好	P–2	底部中央凹む
40	168	4 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（16.0）	残 2.2	–				明褐		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	169	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（15.8）	残 3.7	–	ハケ目	ナデ		橙		白・黒色粒子　金雲母　石英　やや密	破片	良好	P–4	S 字状口縁台付甕口縁部
40	170	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（14.4）	残 2.0	–				黄褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	171	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（11.8）	残 2.1	–				明黄褐		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	172	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（15.8）	残 1.9	–				にぶい橙		白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	173	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	（15.6）	残 1.8	–				にぶい黄褐		白色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	174	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.8	–	ハケ目			にぶい黄橙		白・赤色粒子　やや密	破片	良好	P–4	S 字状口縁台付甕口縁部
40	175	6 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 1.4	–	ハケ目			橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	176	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.0	–	ハケ目			にぶい橙	にぶい黄褐	白色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕口縁部
40	177	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.3	–	ハケ目			にぶい黄橙		白色粒子　金雲母　密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕底部
40	178	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.6	–	ハケ目	ハケ目		明赤褐		白・黒色粒子　やや粗	破片	良好	一括	底部
40	179	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.1	–	ハケ目　指頭圧痕	ハケ目		橙		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	底部
40	180	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.0	–				にぶい赤褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	底部
40	181	4 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.6	（8.0）				明赤褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕折り返し高台部
40	182	4 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 4.3	（9.0）		指頭圧痕		橙		白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–10	S 字状口縁台付甕折り返し高台部
40	183	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.4	12.5	ナデ	ナデ		明黄褐		白色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	P–21	S 字状口縁台付甕折り返し高台部
40	184	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 3.4	（11.0）	ナデ	ナデ		にぶい黄橙		白・黒色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕折り返し高台部
40	185	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	台付甕	–	残 2.8	（11.0）	ナデ	指頭圧痕		にぶい橙		白色粒子　金雲母　やや密	破片	良好	一括	S 字状口縁台付甕折り返し高台部
40	186	6 住	A–3 区	古墳（前期）	土師器	高坏	（13.0）	残 5.3	–				にぶい橙		白・黒色粒子　石英　やや粗	破片	良好	一括	坏部
40	187	遺構外	A–3 区	平安（前半）	土師器	坏	（12.0）	残 4.2	–		ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–1	尖形口縁　Ⅷ期か
40	188	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	（11.6）	残 3.0	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　やや密	破片	良好	一括	隆玉縁口縁
40	189	遺構外	A–3 区	平安（Ⅸ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	（13.6）	残 5.6	–	ナデ	内黒		黄褐	オリーブ黒	白色粒子　密	破片	良好	P–4	隆玉縁口縁
40	190	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ～ⅩⅠ期）	土師器	坏	（11.0）	3.6	4.8	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	40	良好	P–1	隆玉縁口縁
40	191	遺構外	A–3 区	古墳（前期）？	土師器	高坏？	（116.4）	残 2.2	–	ナデ	ナデ		にぶい褐		白色粒子　密	破片	良好	P–1	口縁部
40	192	遺構外	A–3 区	平安（Ⅷ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	（11.8）	残 2.7	–	ナデ	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	P–1	丸形口縁
40	193	遺構外	A–3 区	古墳（前期）？	土師器	坏？	（11.8）	残 2.3	–	ナデ	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	高坏脚部の可能性も
40	194	遺構外	A–3 区	平安（Ⅷ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	–	残 1.1	4.5	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　やや密	40	良好	一括	手持ちヘラ削り
41	195	遺構外	A–3 区	平安（Ⅸ～ⅩⅡ期）	土師器	坏	–	残 0.8	（5.0）	ナデ	内黒	回転糸切り痕	明黄褐	褐灰	赤色粒子　密	破片	良好	一括	底部

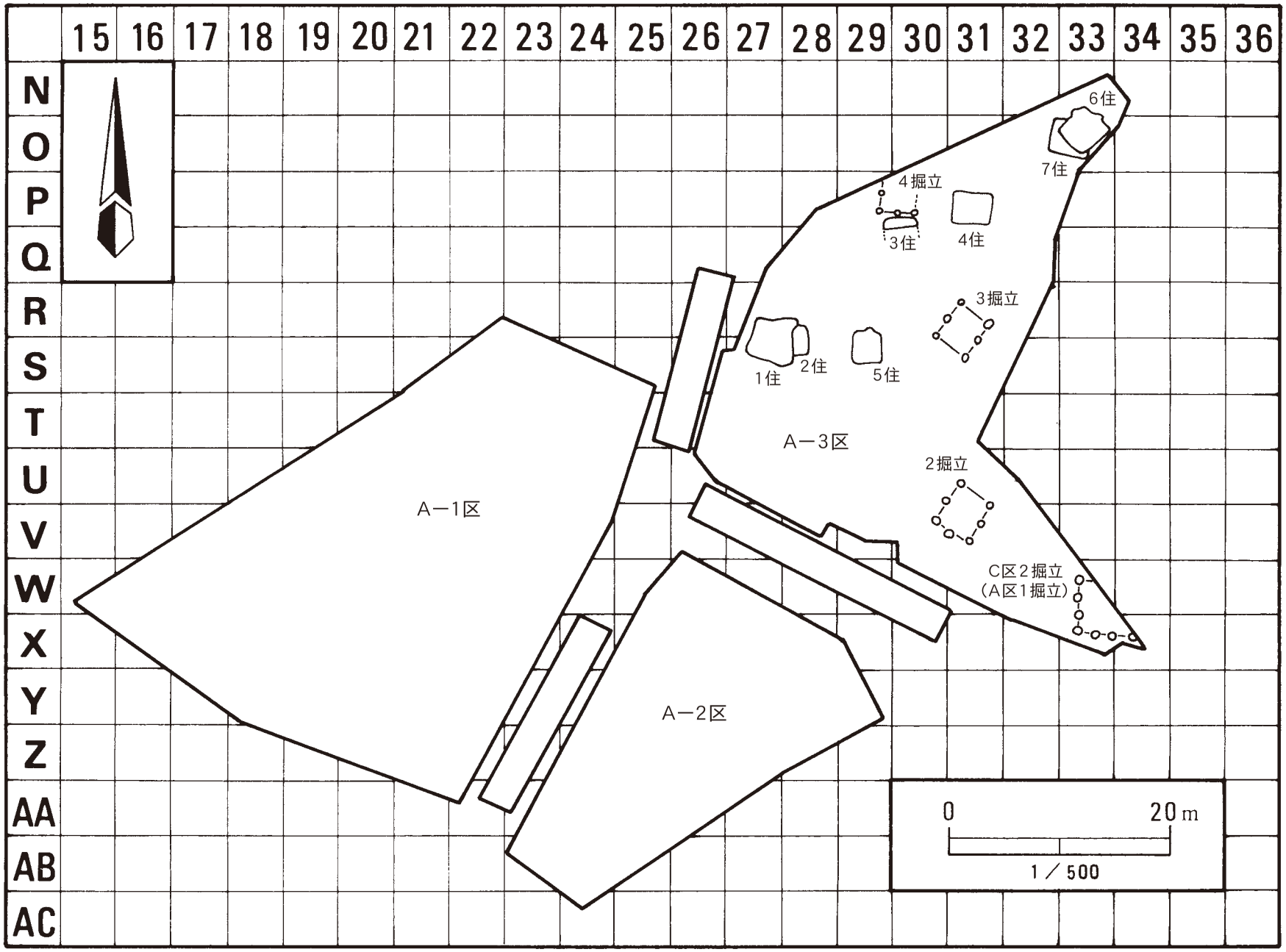
図版	遺物No.	遺構	調査区	時　期	種　別	器　種	法量cm（）内は推定			整形			色調		胎　土	残存率%	焼成	注記	備　考
							口径	器高	底径	外面	内面	底面	外面	内面					
41	196	遺構外	A–3 区	平安（Ⅸ～Ⅹ Ⅱ 期）	土師器	坏	–	残 0.8	(4.0)	ナデ	ナデ		橙		黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	底部
41	197	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅲ 期？）	土師器	坏	–	残 0.8	(5.0)	ナデ	ナデ		橙		黒・赤色粒子　密	破片	良好	一括	底部やや突出
41	198	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅰ～Ⅹ Ⅲ 期）	土師器	皿	–	残 1.5	5.2	ナデ	内黒		浅黄橙	黒褐	白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–1	黒色高台皿
41	199	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ～Ⅹ Ⅱ 期）	土師器	皿	(12.8)	2.4	(4.0)	ヘラ削り	ナデ		橙		黒・赤色粒子　密	15	良好	一括	玉縁口縁
41	200	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ～Ⅹ Ⅱ 期）	土師器	皿	(12.6)	2.5	(3.2)	ヘラ削り	ナデ		橙		白・黒・赤色粒子　やや密	20	良好	一括	玉縁口縁
41	201	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅲ 期？）	土師器	皿	–	残 0.5	(5.4)	ナデ	ナデ	回転糸切り痕	にぶい黄褐		白・赤色粒子	破片	良好	P–2	底部
41	202	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅲ 期？）	土師器	皿	–	残 0.4	(5.0)	ナデ	ナデ	回転糸切り痕	褐		黒色粒子　密	破片	良好	一括	底部やや突出
41	203	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	小形甕	(13.8)	残 3.1	–	ナデ	ナデ		橙		白・赤色粒子　密	破片	良好	一括	口縁部
41	204	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅱ 期）	土師器	甕	–	残 4.3	–	ハケ目	ハケ目		褐		白色粒子　金雲母　やや粗	破片	良好	P–3	厚口縁
41	205	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	小形甕	–	残 2.8	(3.4)	ナデ	ハケ目		明赤褐		白・黒色粒子　石英　やや密	破片	良好	一括	底部
41	206	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	壺	–	残 2.4	(10.2)	ハケ目	ハケ目	木葉痕	褐		白・黒色粒子　金雲母　粗	破片	良好	P–1	底部
41	207	遺構外	A–3 区	古墳（前期）	土師器	甑	–	残 6.2	(4.0)				明赤褐		白・黒色粒子　石英　粗	破片	良好	P–3	底部
41	208	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅰ～Ⅹ Ⅲ 期）	土師器	羽釜	–	残 1.9	–				褐		白・黒色粒子　やや密	破片	良好	一括	タガ部
41	209	遺構外	A–3 区	平安（Ⅷ～Ⅹ Ⅱ 期）	須恵器	壺	–	残 3.7	–				暗灰黄		白色粒子　密	破片	良好	P–2	突帯付四耳壺肩部
41	210	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	壺	–	残 1.8	–	タタキ目			褐灰		白・黒・赤色粒子　密	破片	良好	P–19	肩部
41	211	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 6.3	–	タタキ目	ナデ		灰	灰黄褐	密	破片	良好	P–11	胴部
41	212	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 3.5	–	タタキ目	ナデ		灰褐	灰	密	破片	良好	一括	胴部
41	213	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.5	–	タタキ目	ナデ		灰		密	破片	良好	一括	胴部
41	214	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 1.9	–	タタキ目	ナデ		灰		密	破片	良好	一括	胴部
41	215	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.0	–	タタキ目	ナデ		灰		白色粒子　金雲母　密	破片	良好	P–20	胴部
41	216	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 5.4	–	タタキ目	ナデ		灰白	黄灰	密	破片	良好	P–18	胴部
41	217	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 4.0	–	タタキ目	ナデ		灰		白・黒色粒子	破片	良好	P–15	胴部
41	218	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 2.6	–	タタキ目	ナデ		灰		密	破片	良好	P–2	胴部
41	219	遺構外	A–3 区	平安（前半）	須恵器	甕	–	残 3.3	–	タタキ目	ナデ		黒	灰	密	破片	良好	一括	胴部
41	220	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅰ 期？）	灰釉陶器	碗	(16.0)	残 2.4	–				灰白	黄褐	密	破片	良好	一括	灰釉内面全面流し掛け　K 14 か
41	221	遺構外	A–3 区	平安（Ⅹ Ⅲ 期？）	灰釉陶器	碗	–	残 2.4	(5.4)				灰白		密	破片	良好	一括	底部釉薬なし　漬け掛けか
41	222	遺構外	A–3 区	平安（後半？）	灰釉陶器	壺	–	残 1.5	(10.0)				灰黄		密	破片	良好	一括	底部内面灰釉

第13表　上コブケA　石器観察表

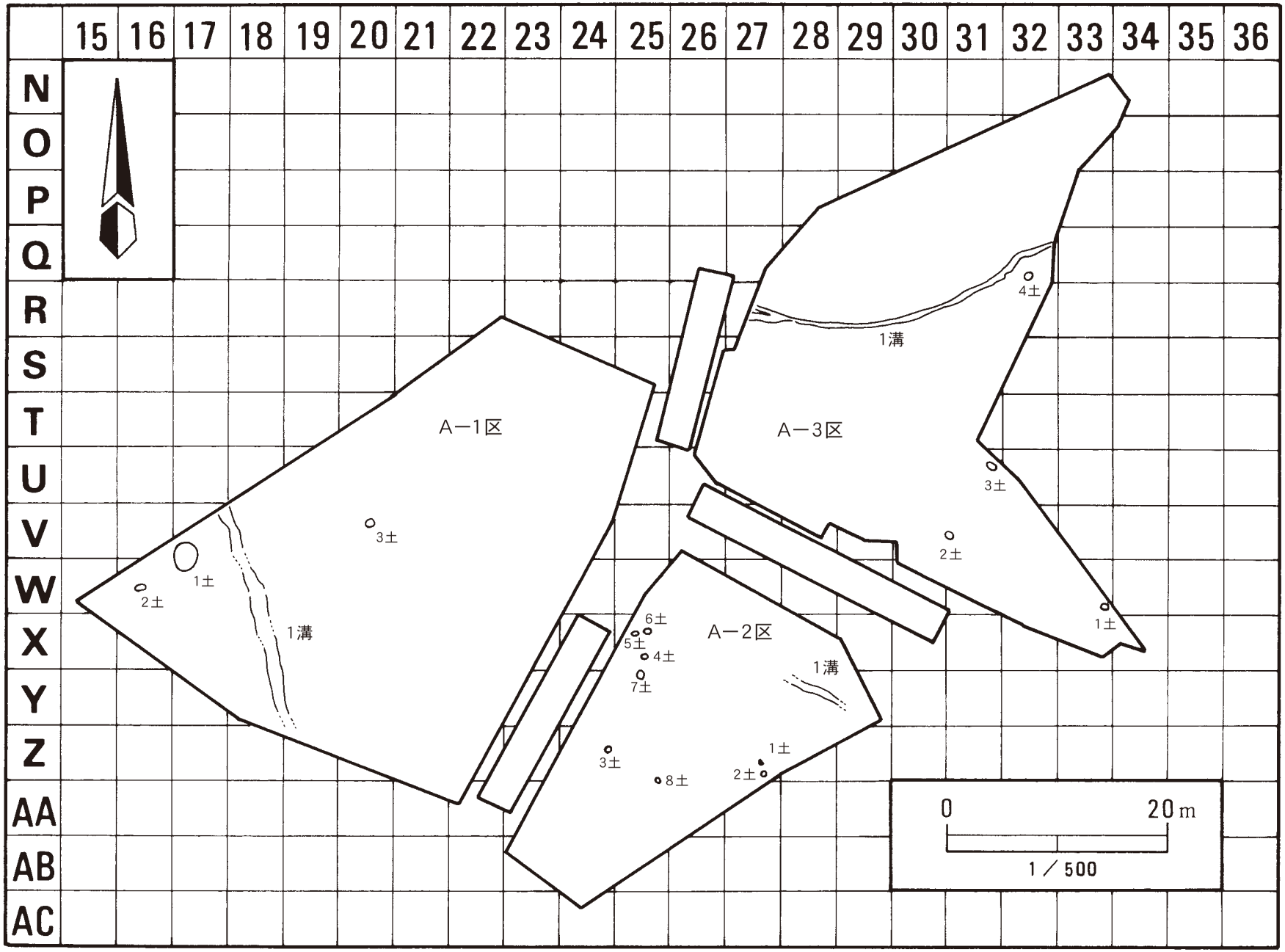
図　版	遺物No.	遺　構	調査区	器　種	石　材	時　期	法量cm（）内は推定			重量（g）	注　記	備　考
							最大長	最大幅	最大厚			
33	27	1 号土坑	A–1 区	磨敲石	花崗岩		8.5	6.3	5.0	358.6	一括	
33	28	1 号土坑	A–1 区	磨石	花崗岩		10.4	10.0	6.1	826.3	S–3	
33	29	1 号土坑	A–1 区	磨石	安山岩		5.8	4.4	3.9	115.4	一括	
33	30	1 号土坑	A–1 区	ノッチド・スクレイパー	珪質頁岩		2.9	3.4	0.6	6.8	S–1	
33	31	遺構外	A–1 区	ラウンド・スクレイパー	黒曜石		1.8	1.8	0.5	1.5	W–20G 一括	
33	32	表採	A–1 区	石鏃	黒曜石		1.4	2.0	0.3	0.5	表採	
34	55	遺構外	A–2 区	石鏃	黒曜石		2.0	2.2	0.5	1.8	X–25G S–2	
34	56	遺構外	A–2 区	石鏃	黒曜石		1.6	1.2	0.3	0.4	X–25G S–1	
34	57	遺構外	A–2 区	打製石斧	ホルンフェルス		4.8	4.1	1.1	23.6	AA–23G S–1	
34	58	遺構外	A–2 区	磨石	安山岩		4.7	4.1	3.3	87.5	Z–24G 一括	
37	122	6 号住居	A–3 区	砥石	細粒砂岩		11.1	5.6	5.4	419.3	一括	
38	140	Pit1	A–3 区	打製石斧	頁岩		10.2	6.5	0.9	71.1	S–1	
38	141	Pit4	A–3 区	原石	水晶		5.2	1.7	1.0	10.4	一括	



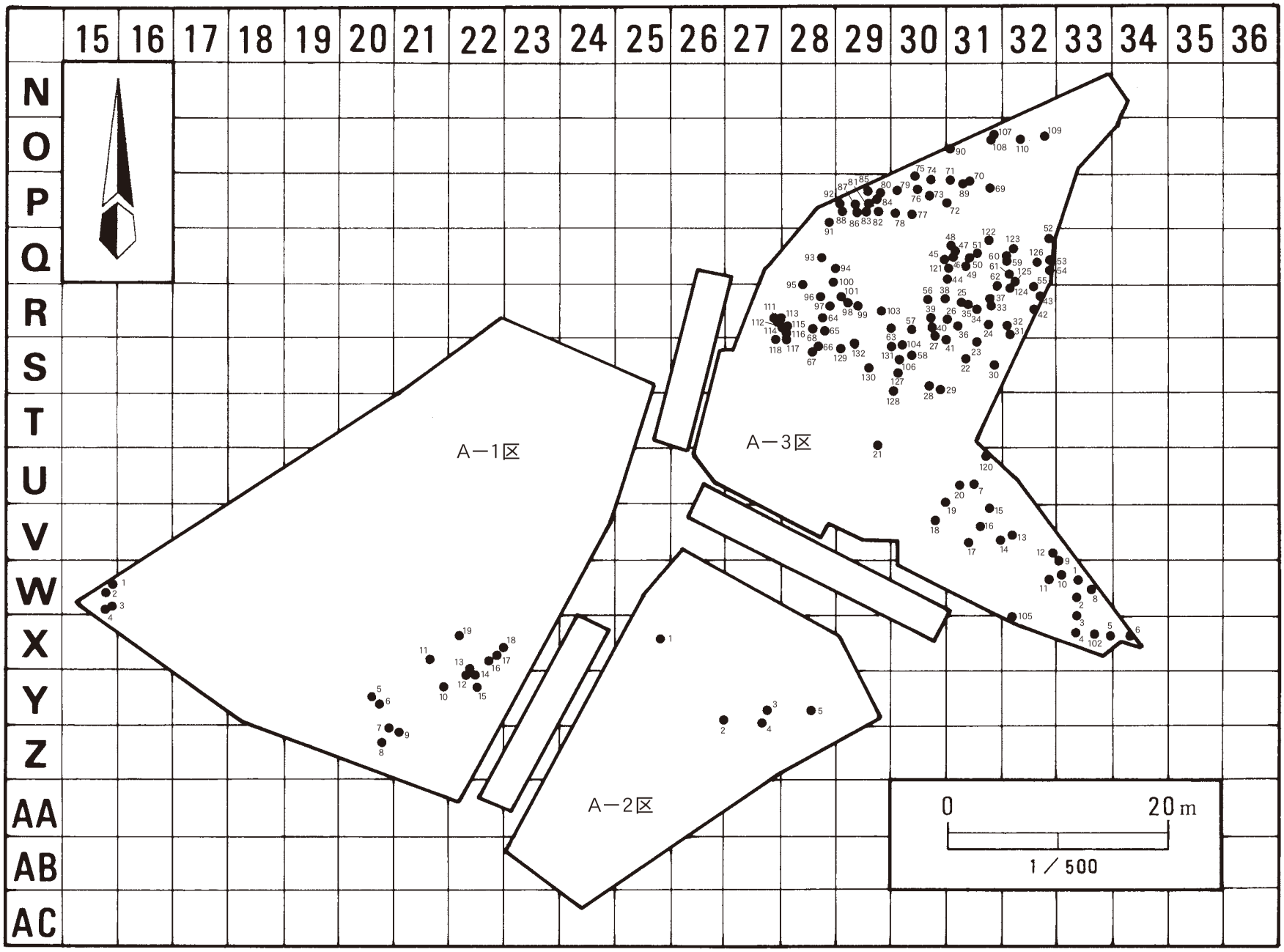
第9図　上コブケA区遺構全体図



第10図　上コブケA区竪穴住居跡・掘立柱建物跡配置図

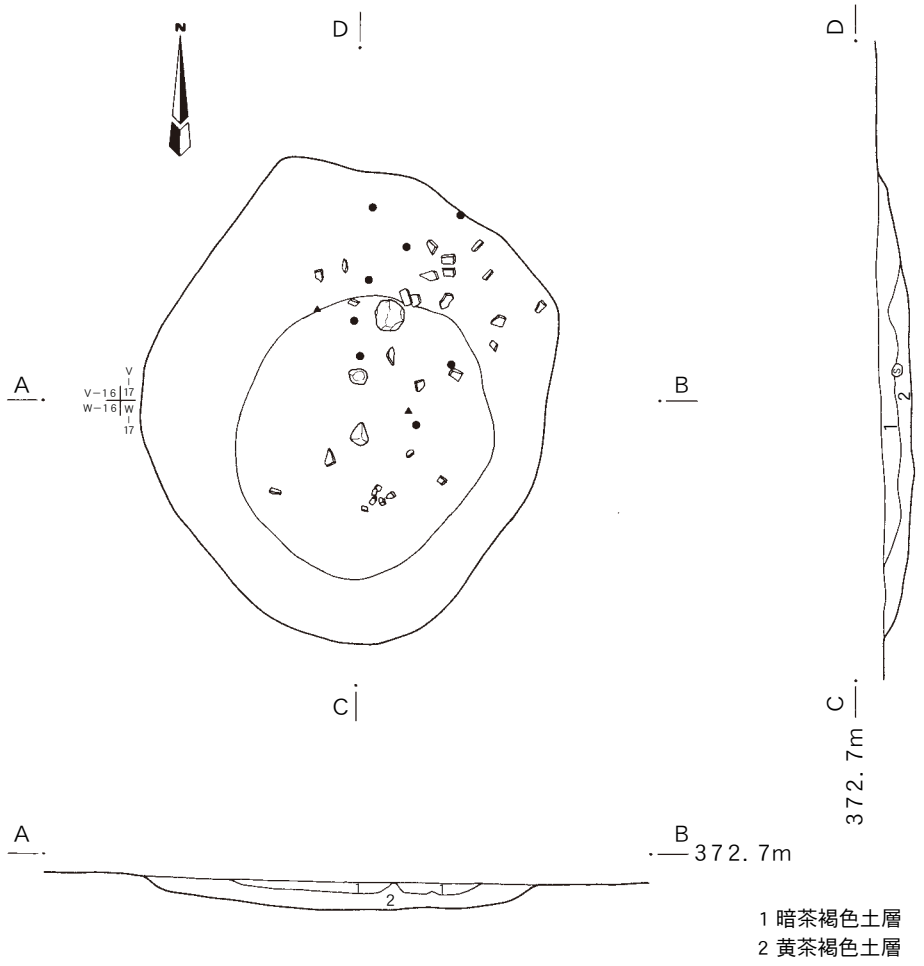


第11図　上コブケA区土坑・溝配置図

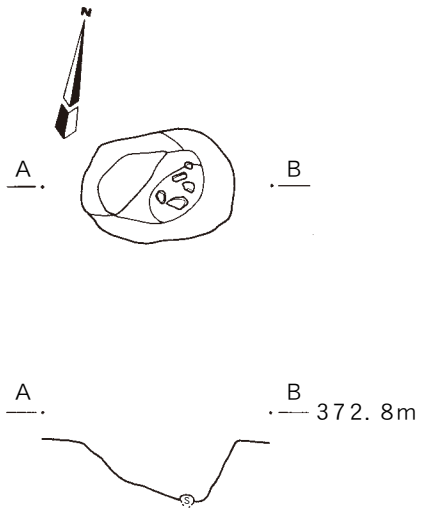


※A－3区　ピット111と132は欠番

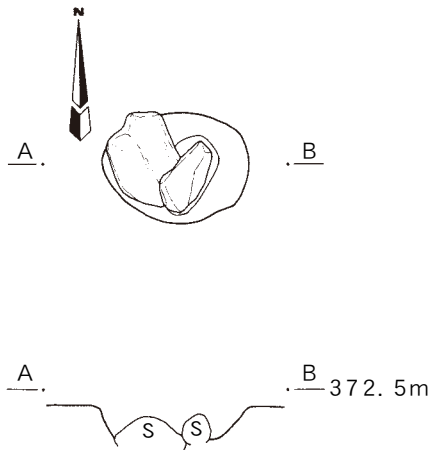
第12図　上コブケA区ピット配置図



A－1区1号土坑

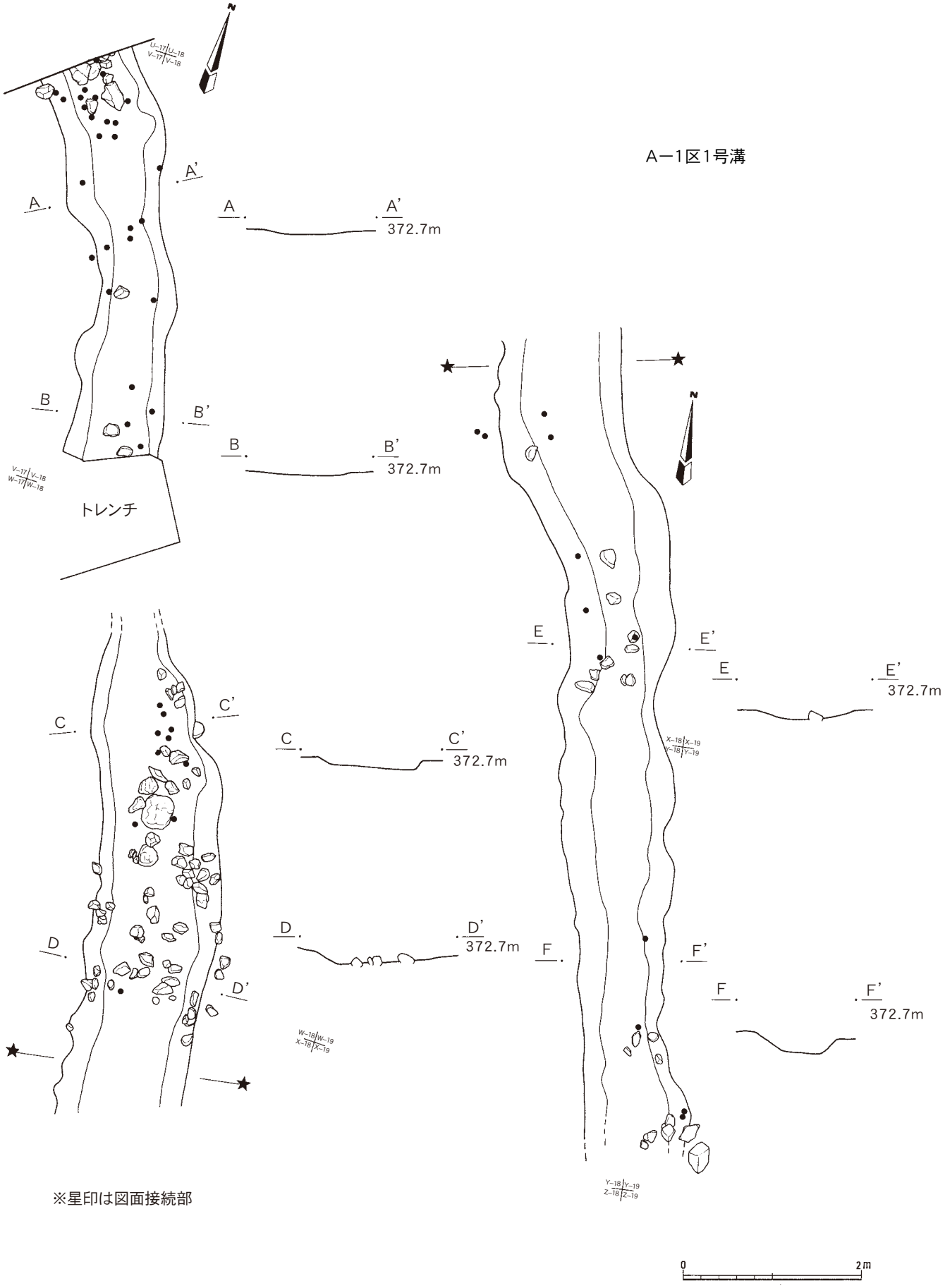


A－1区2号土坑

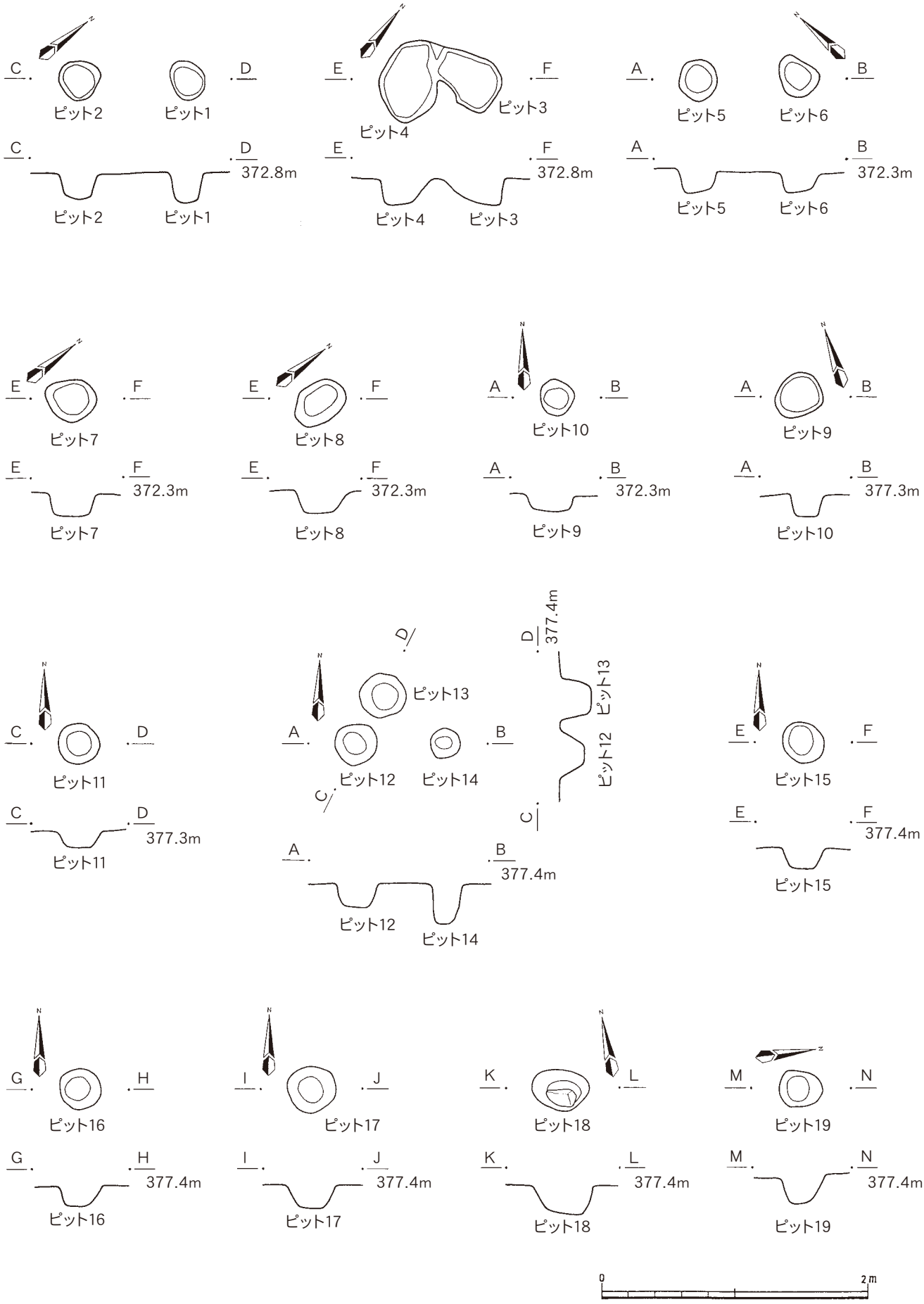


A－1区3号土坑

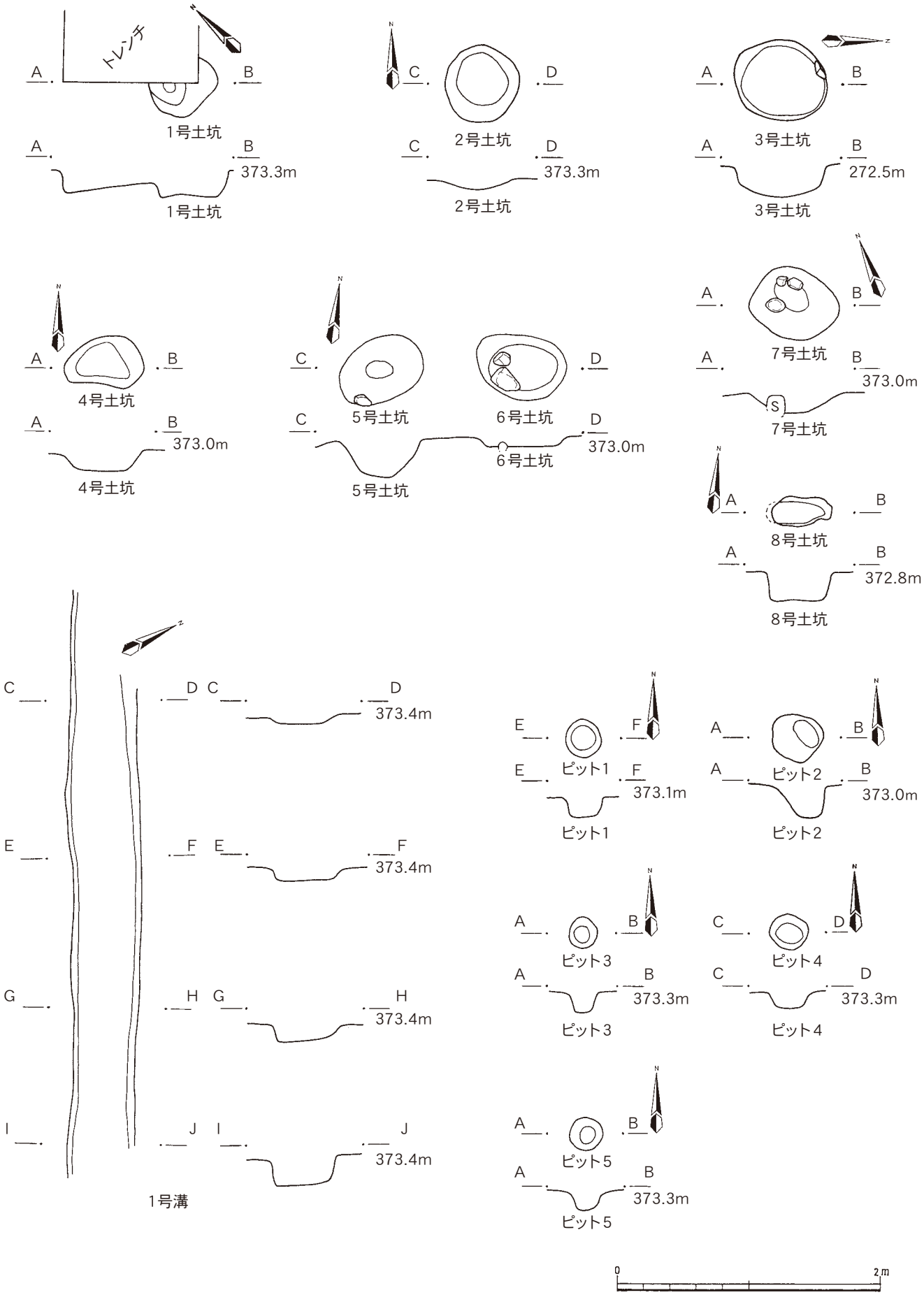
第13図　上コブケA区土坑（A－1区）



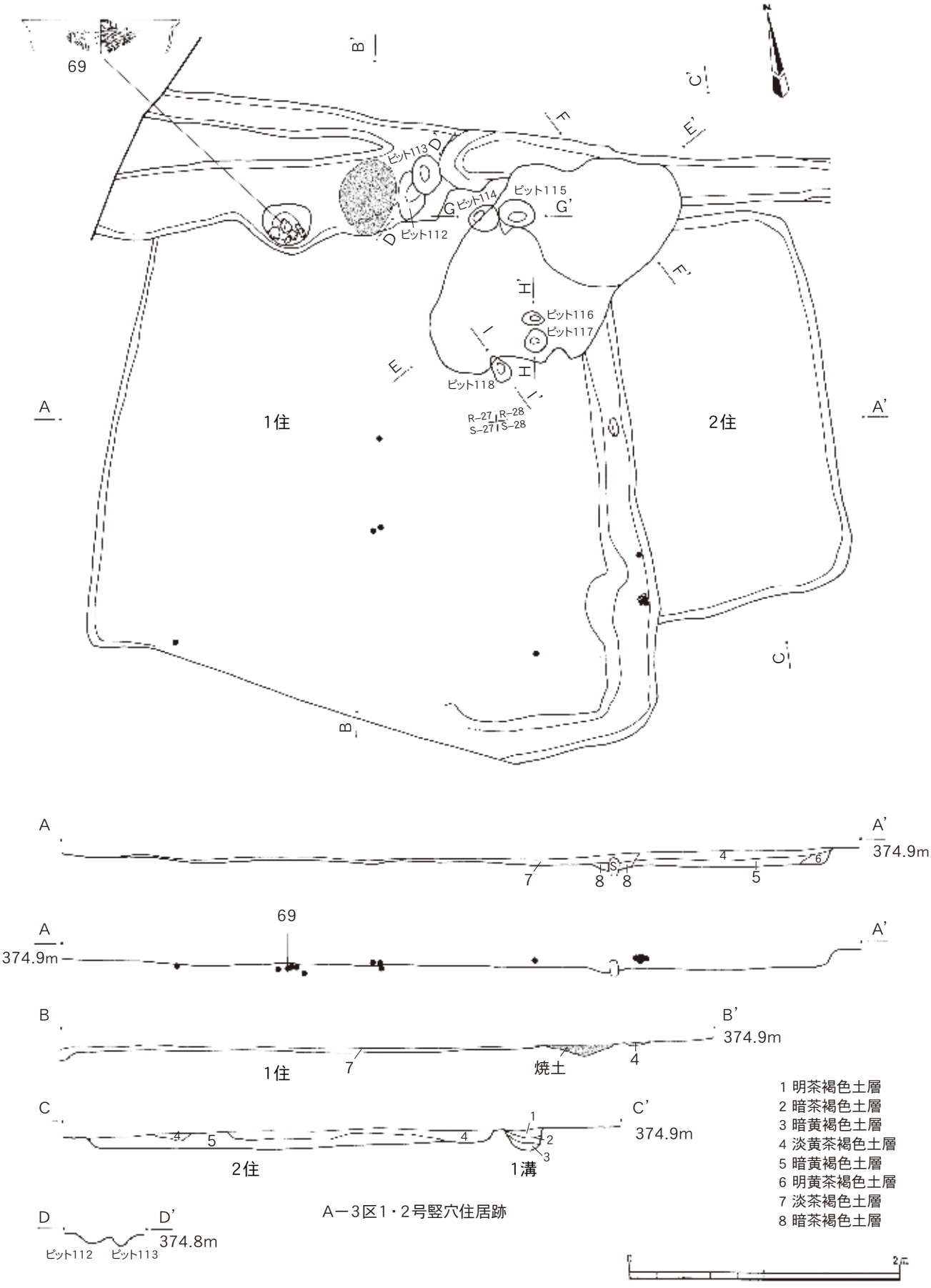
第14図　上コブケA区溝（A－1区）



第15図　上コブケA区ピット（A－1区）

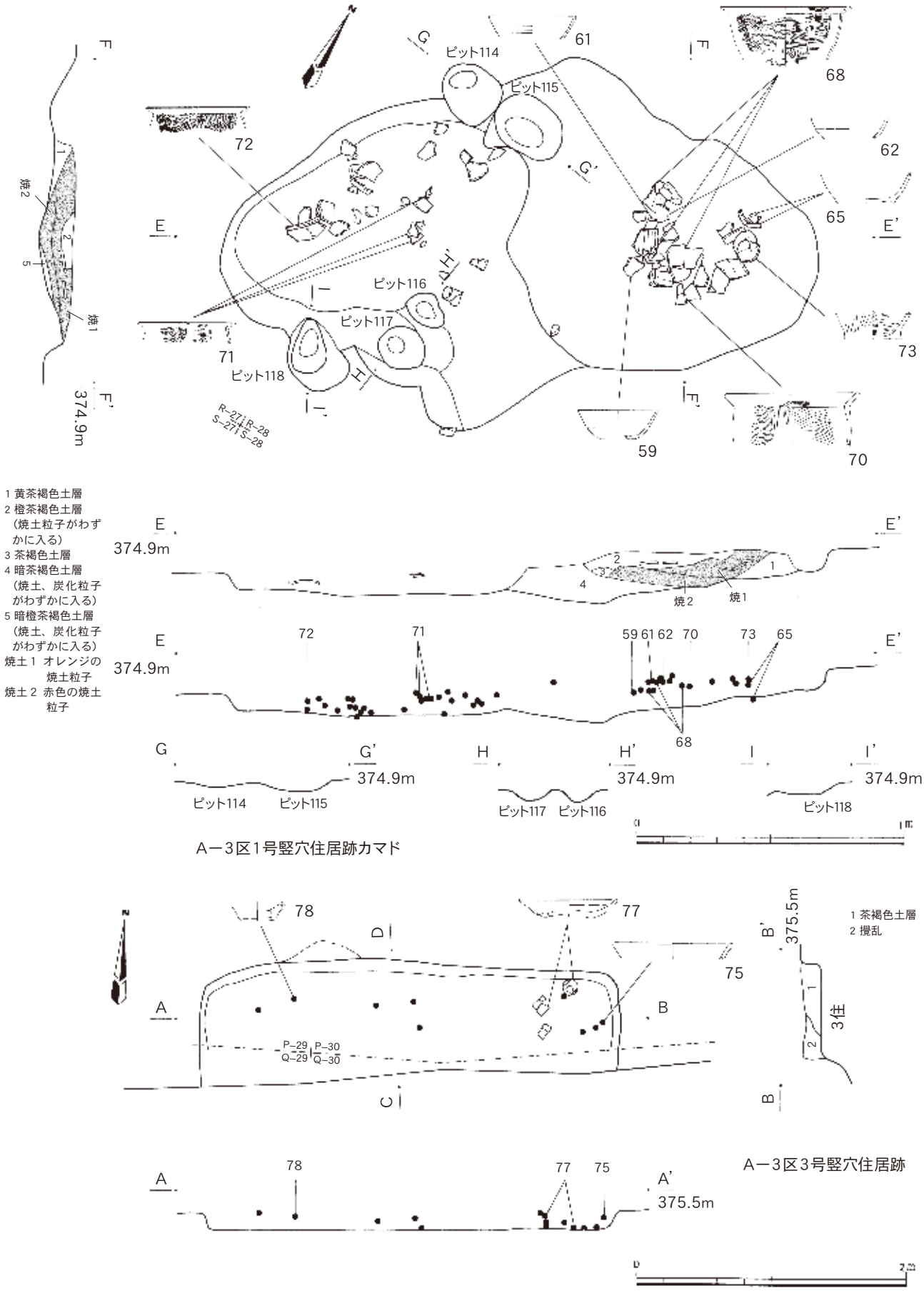


第16図　上コブケA区土坑・溝（A－2区）



A－3区1・2号竪穴住居跡

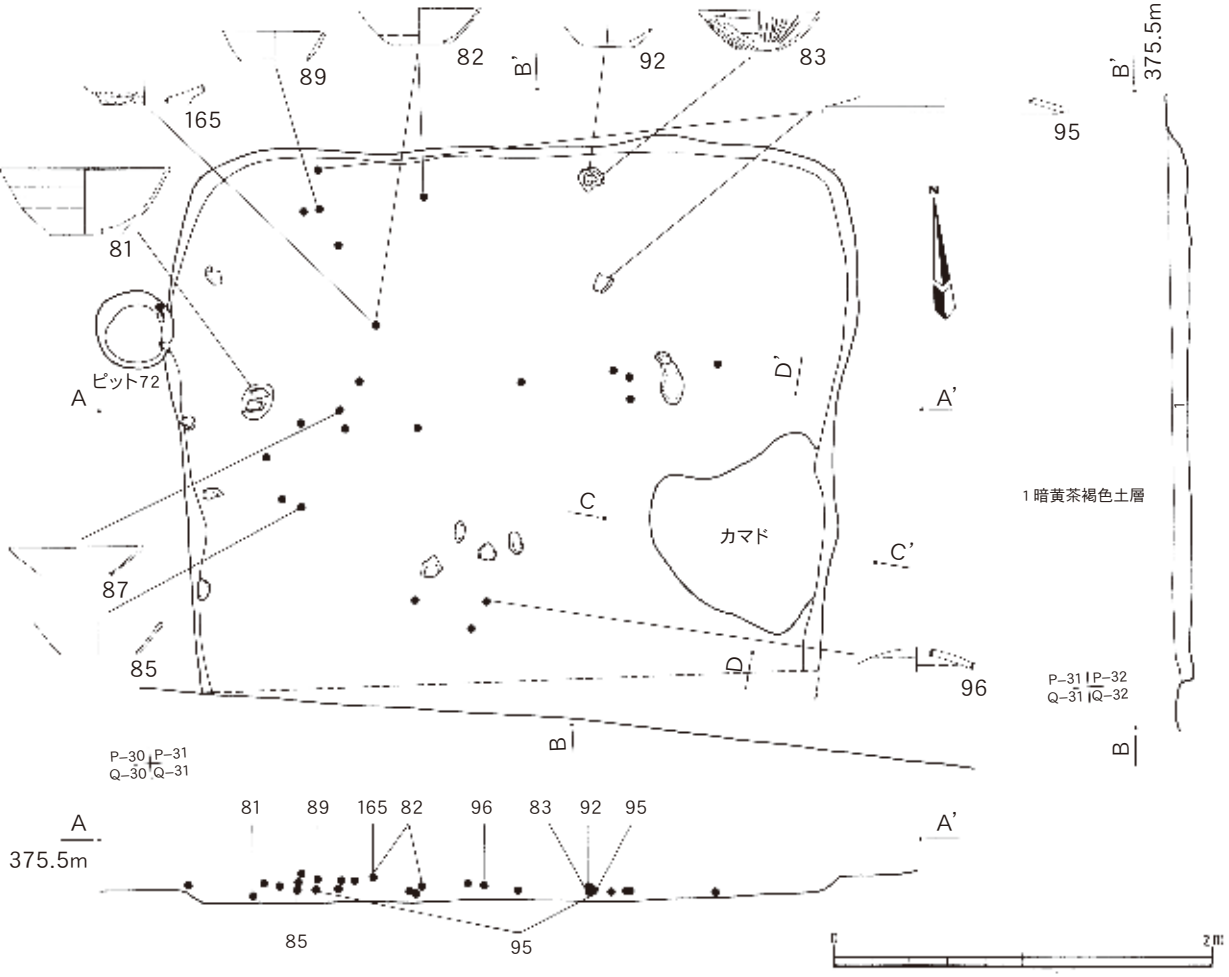
第17図　上コブケA区竪穴住居跡（1）（A－3区）



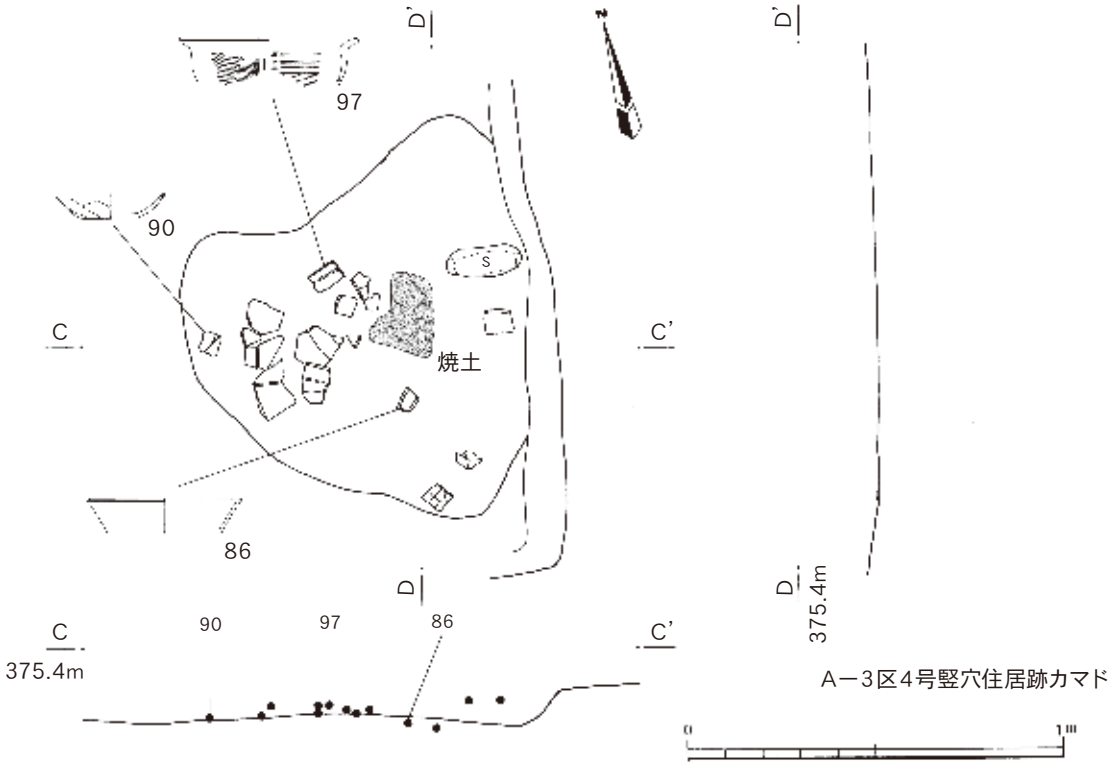
A－3区1号竪穴住居跡カマド

A－3区3号竪穴住居跡

第18図　上コブケA区竪穴住居跡（2）（A－3区）

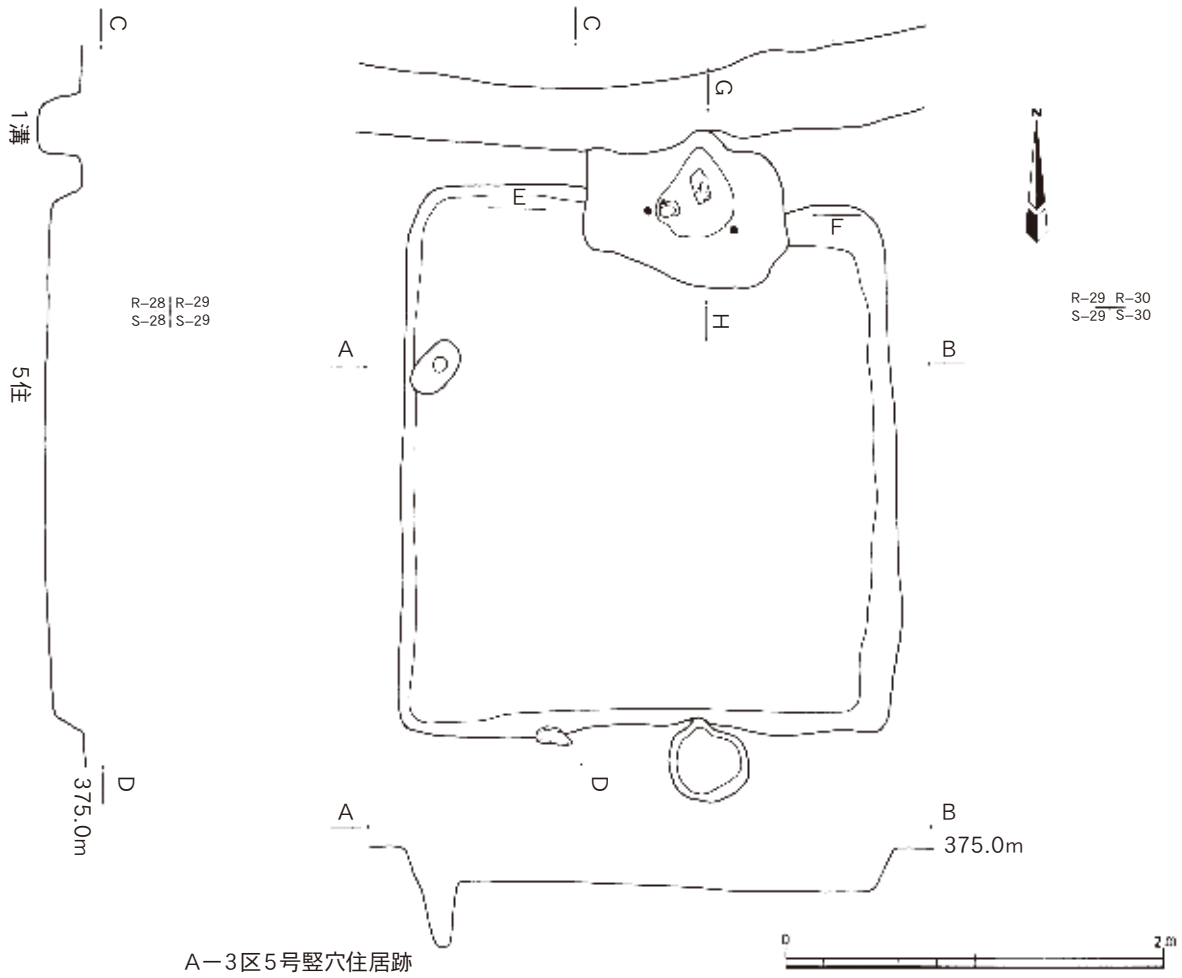


A－3区4号竪穴住居跡

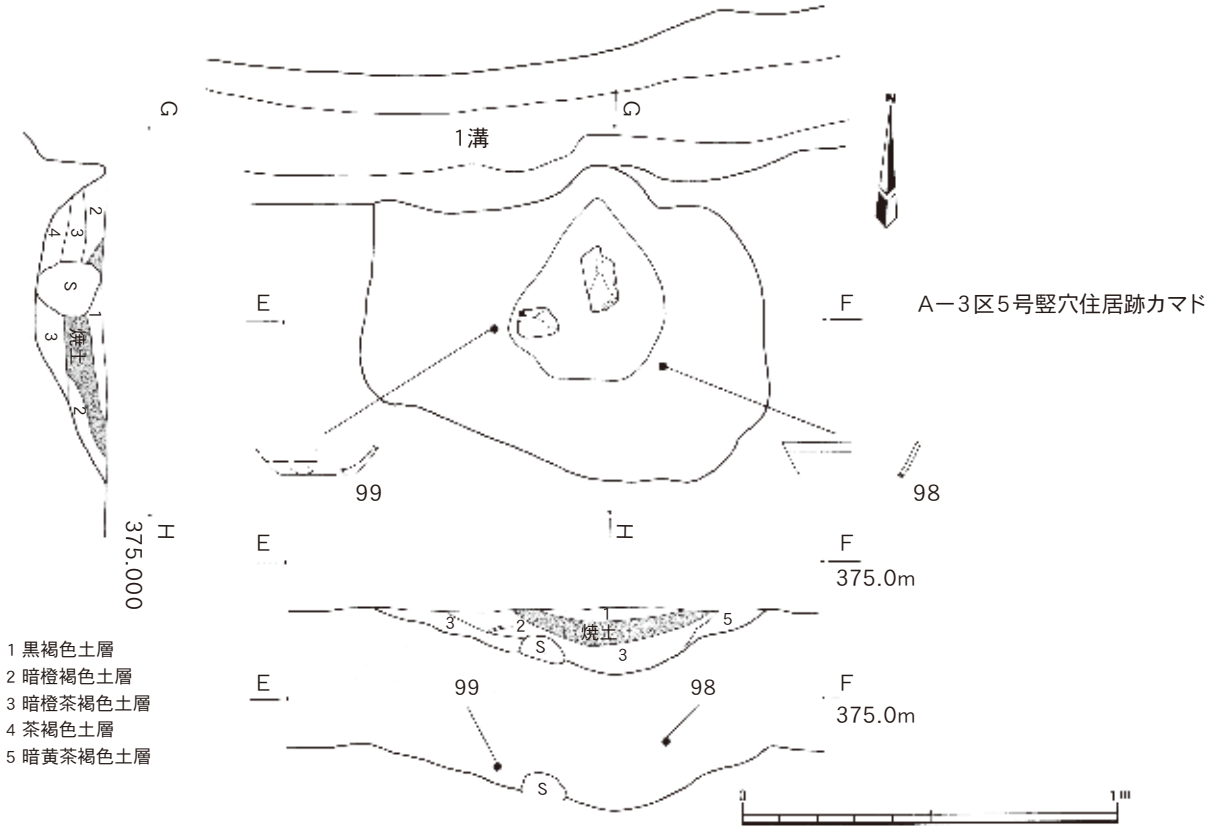


A－3区4号竪穴住居跡カマド

第19図　上コブケA区竪穴住居跡（3）（A－3区）

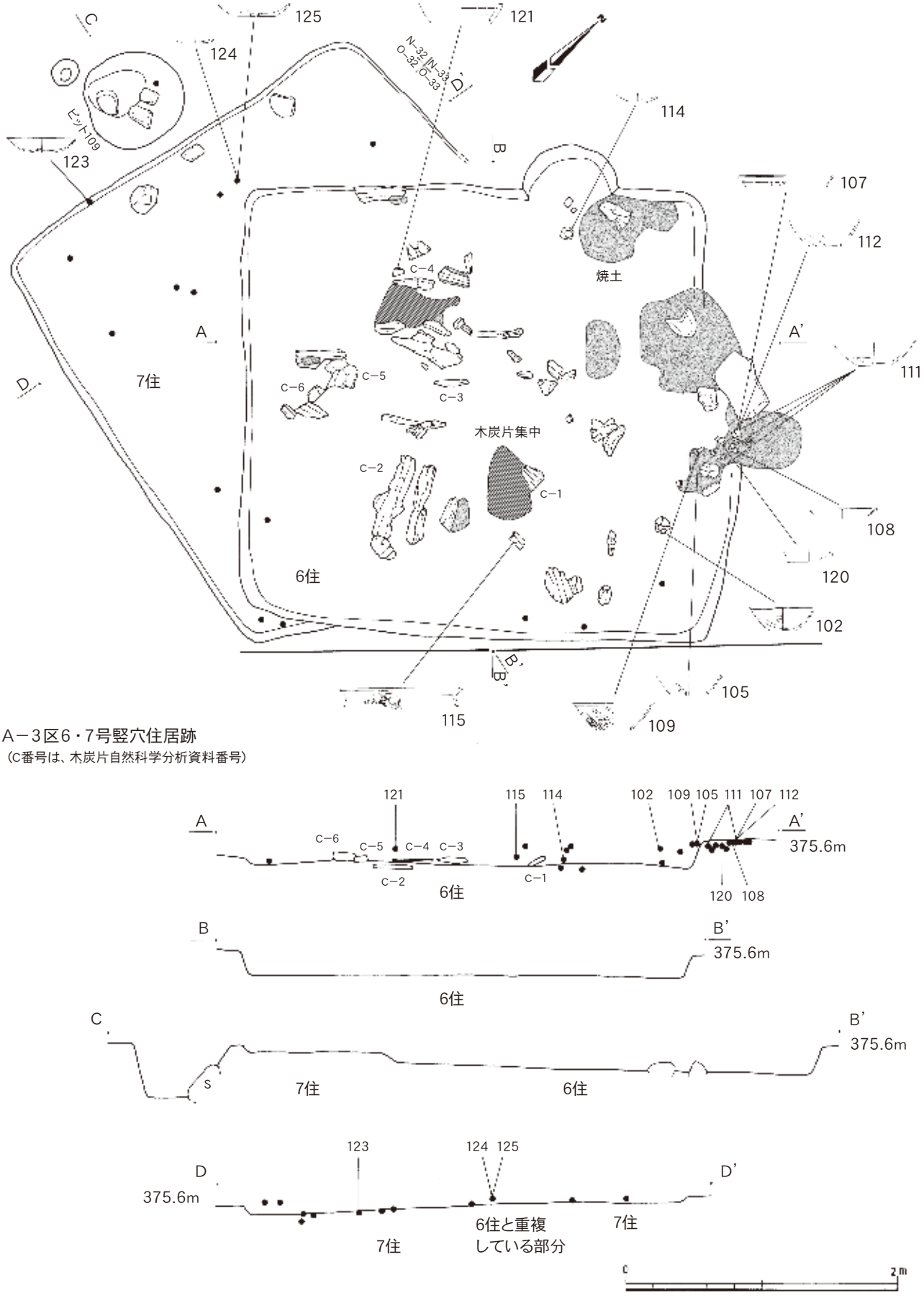


A－3区5号竪穴住居跡



A－3区5号竪穴住居跡カマド

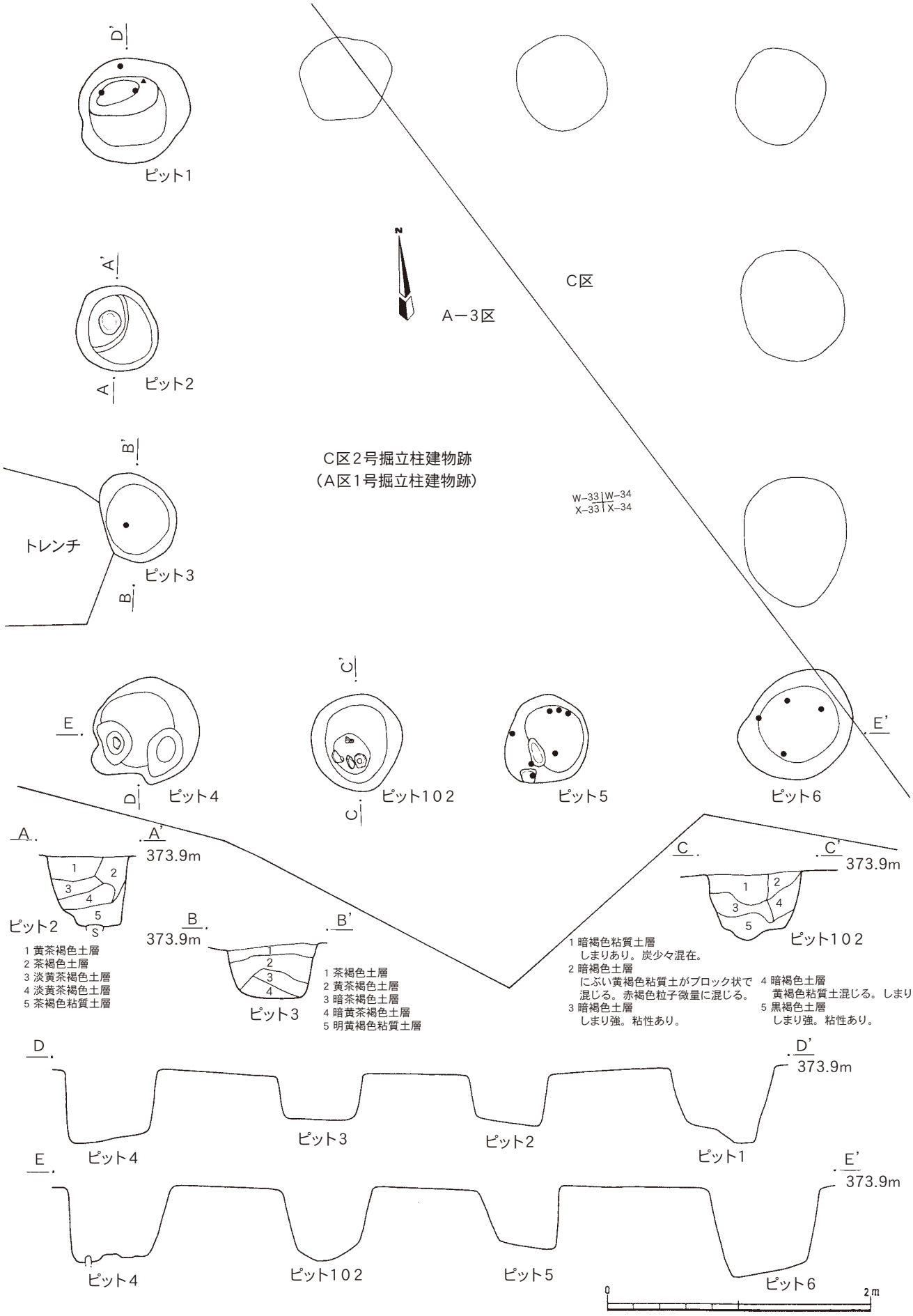
第２０図　上コブケA区竪穴住居跡（４）（A－３区）



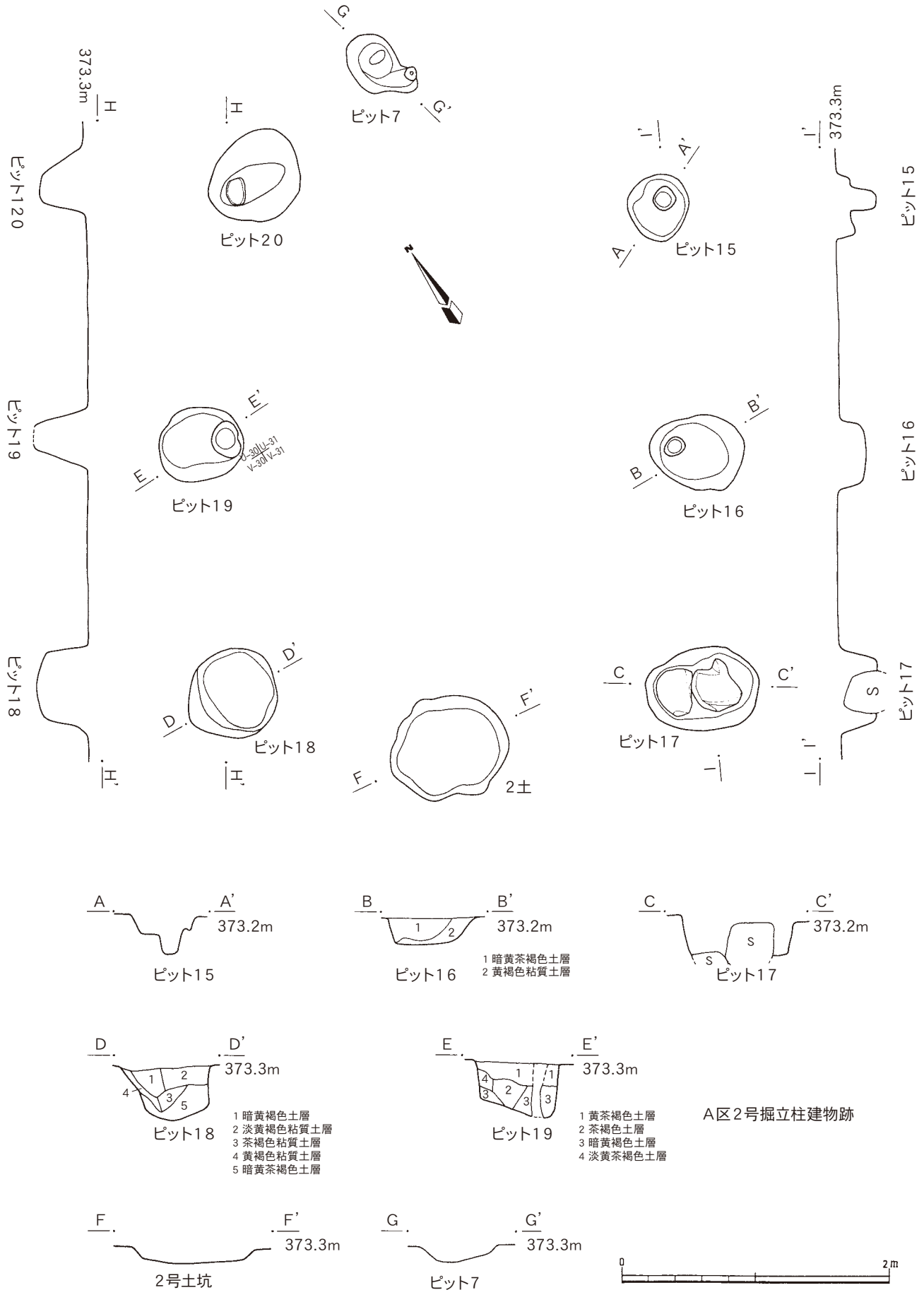
A－3区6・7号竪穴住居跡

（C番号は、木炭片自然科学分析資料番号）

第21図　上コブケA区竪穴住居跡（5）（A－3区）

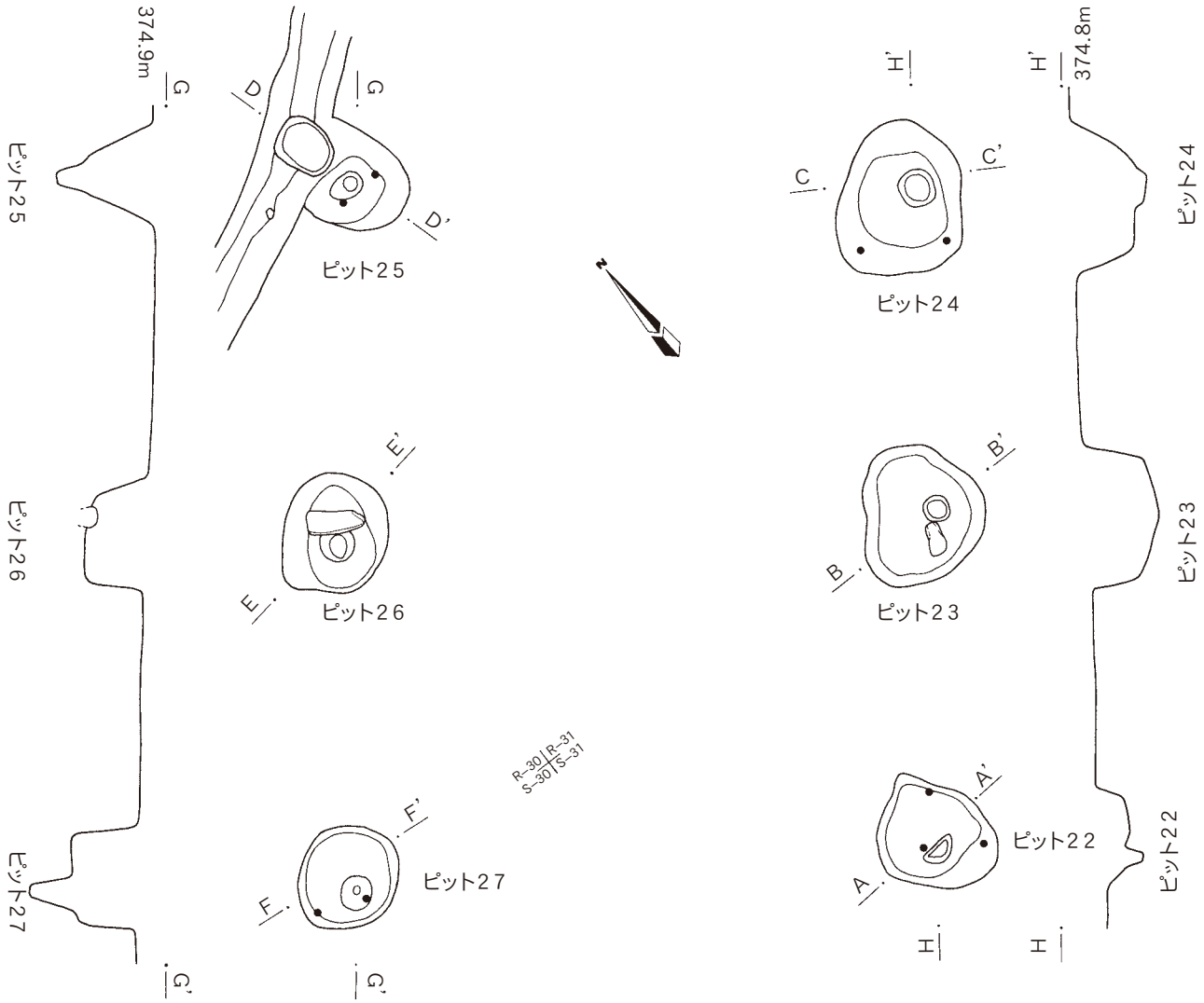


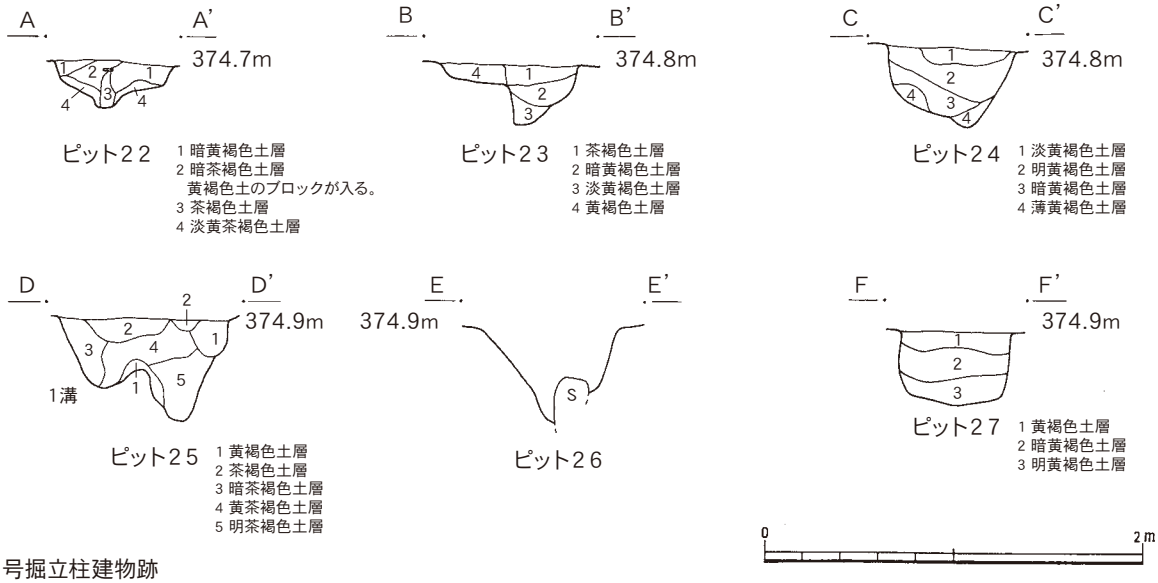
第２２図　上コブケＡ区掘立柱建物跡（１）（Ａ－３区）



A区2号掘立柱建物跡

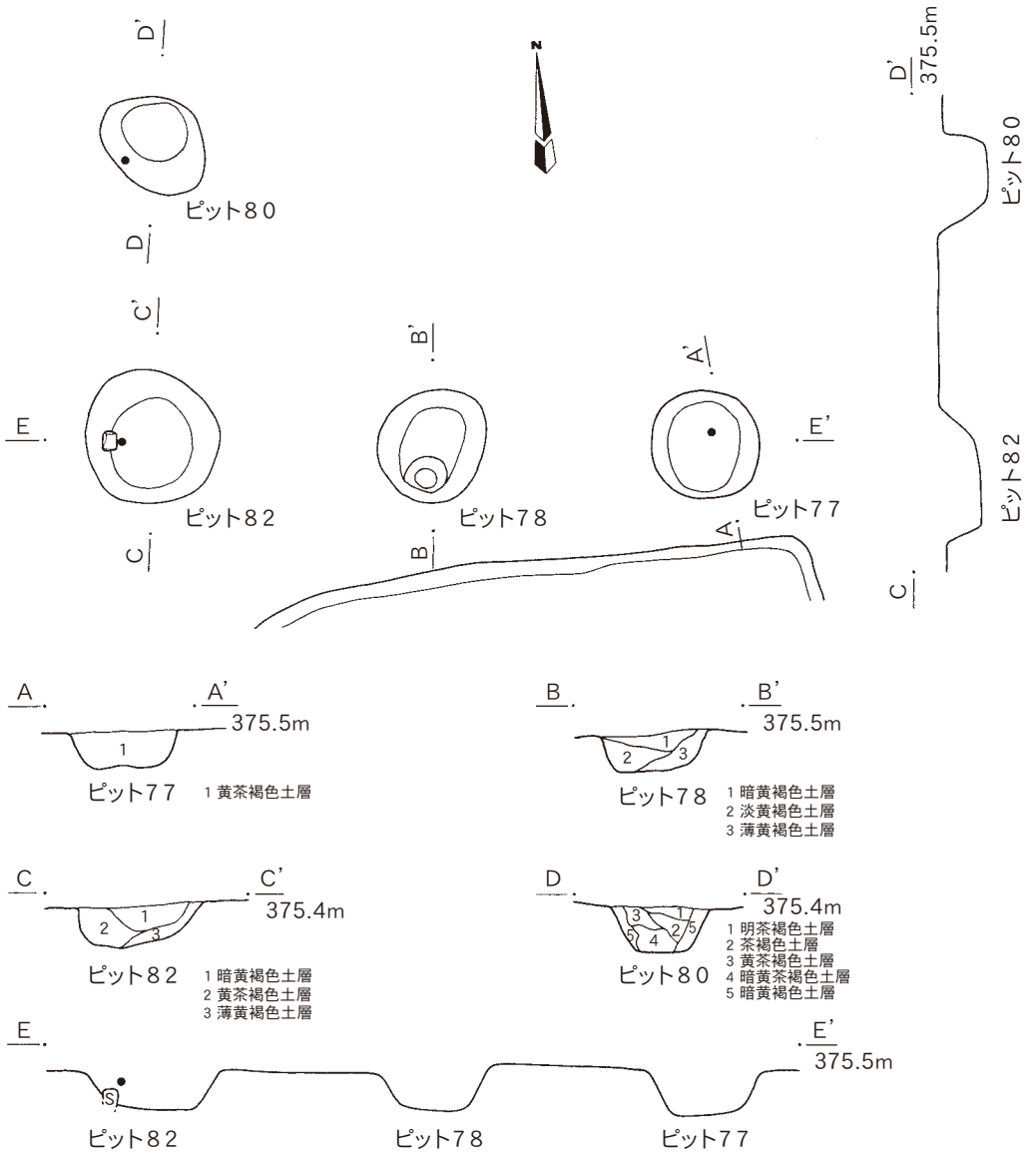
第23図　上コブケA区掘立柱建物跡（2）（A－3区）



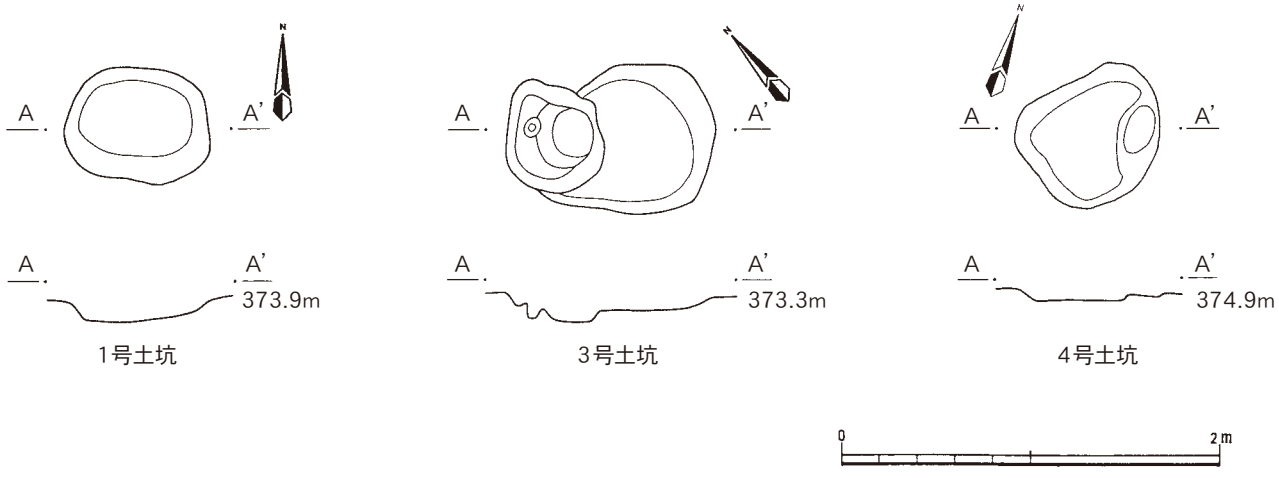


A区3号掘立柱建物跡

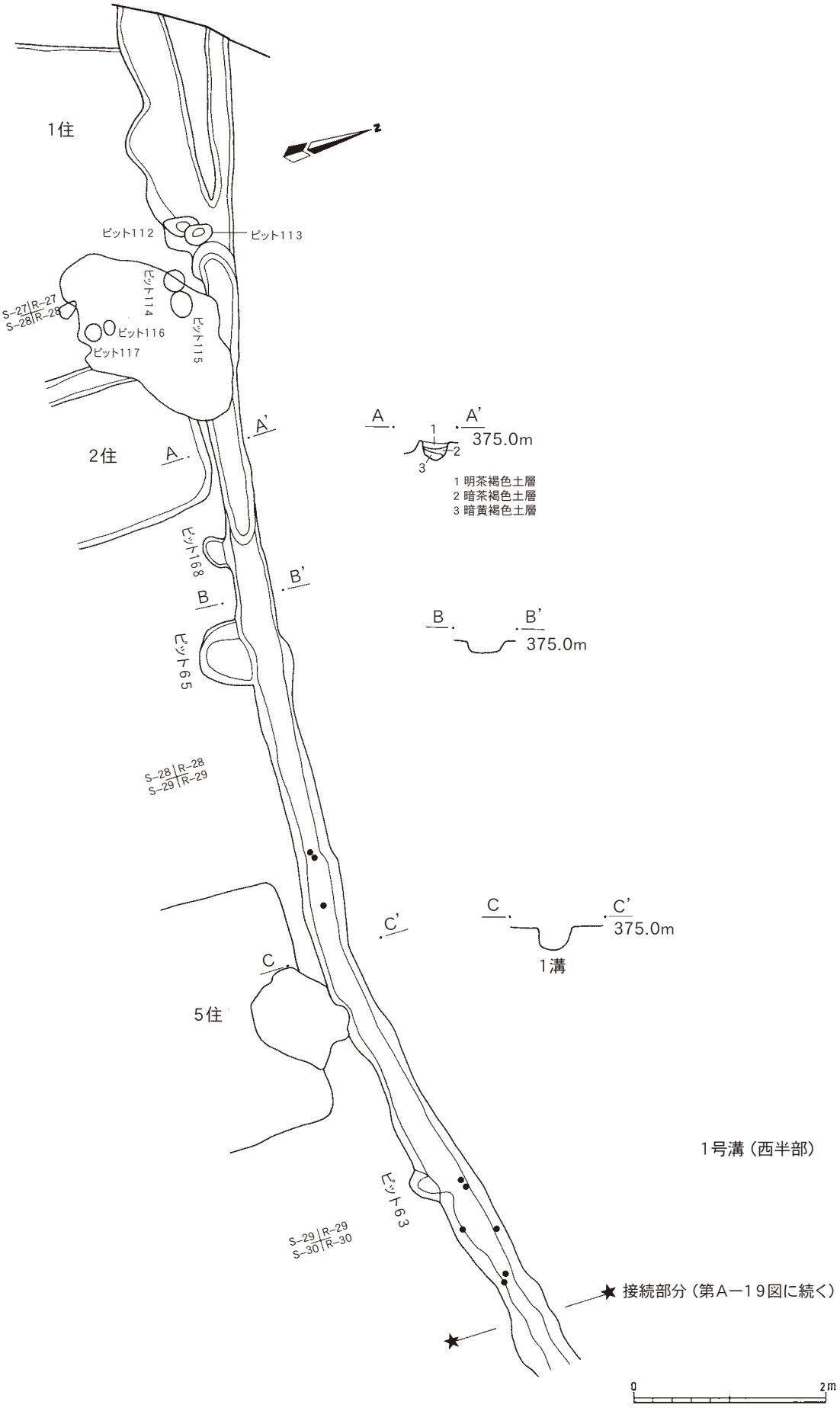
第24図　上コブケA区掘立柱建物跡（3）（A－3区）



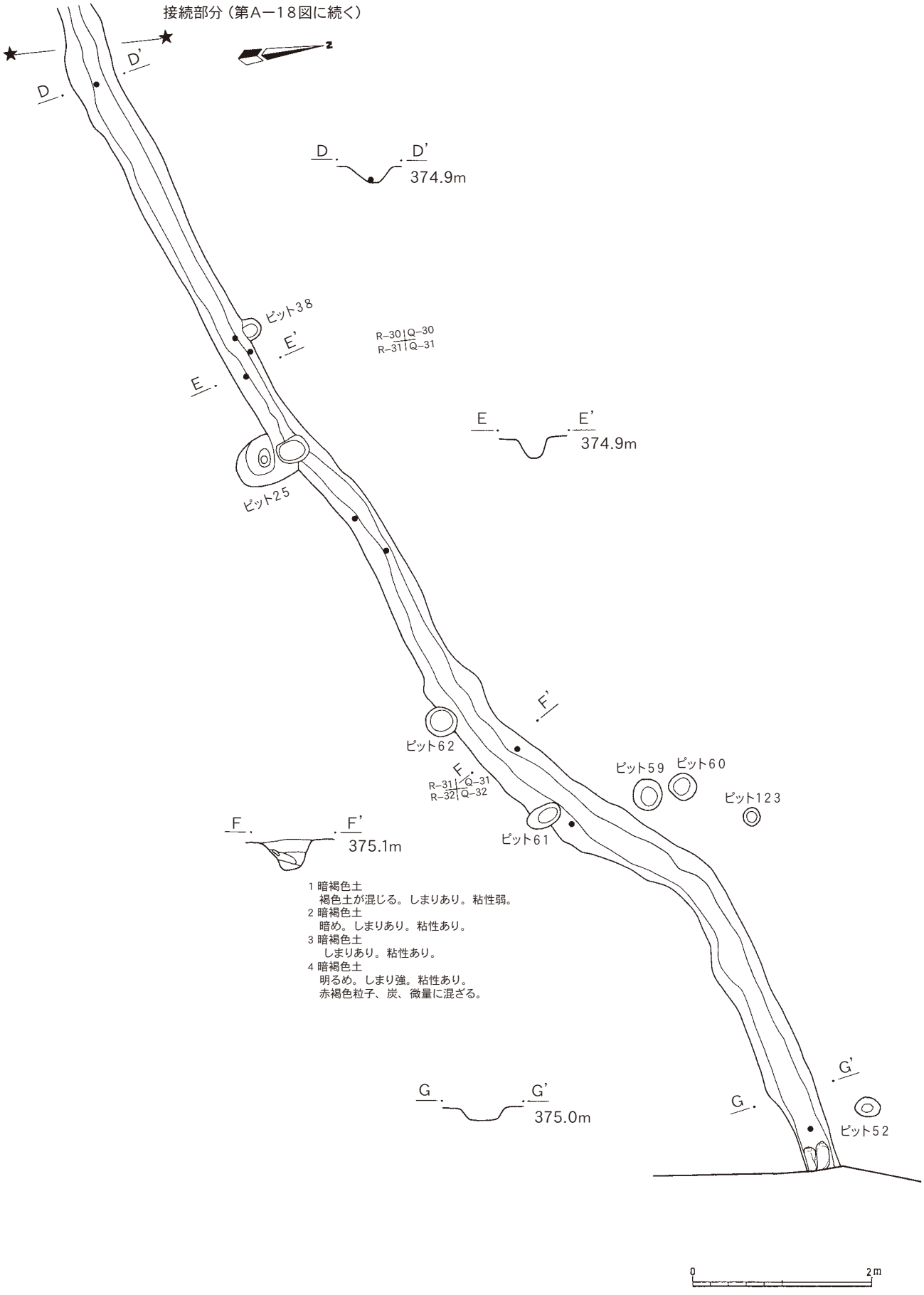
A区4号掘立柱建物跡



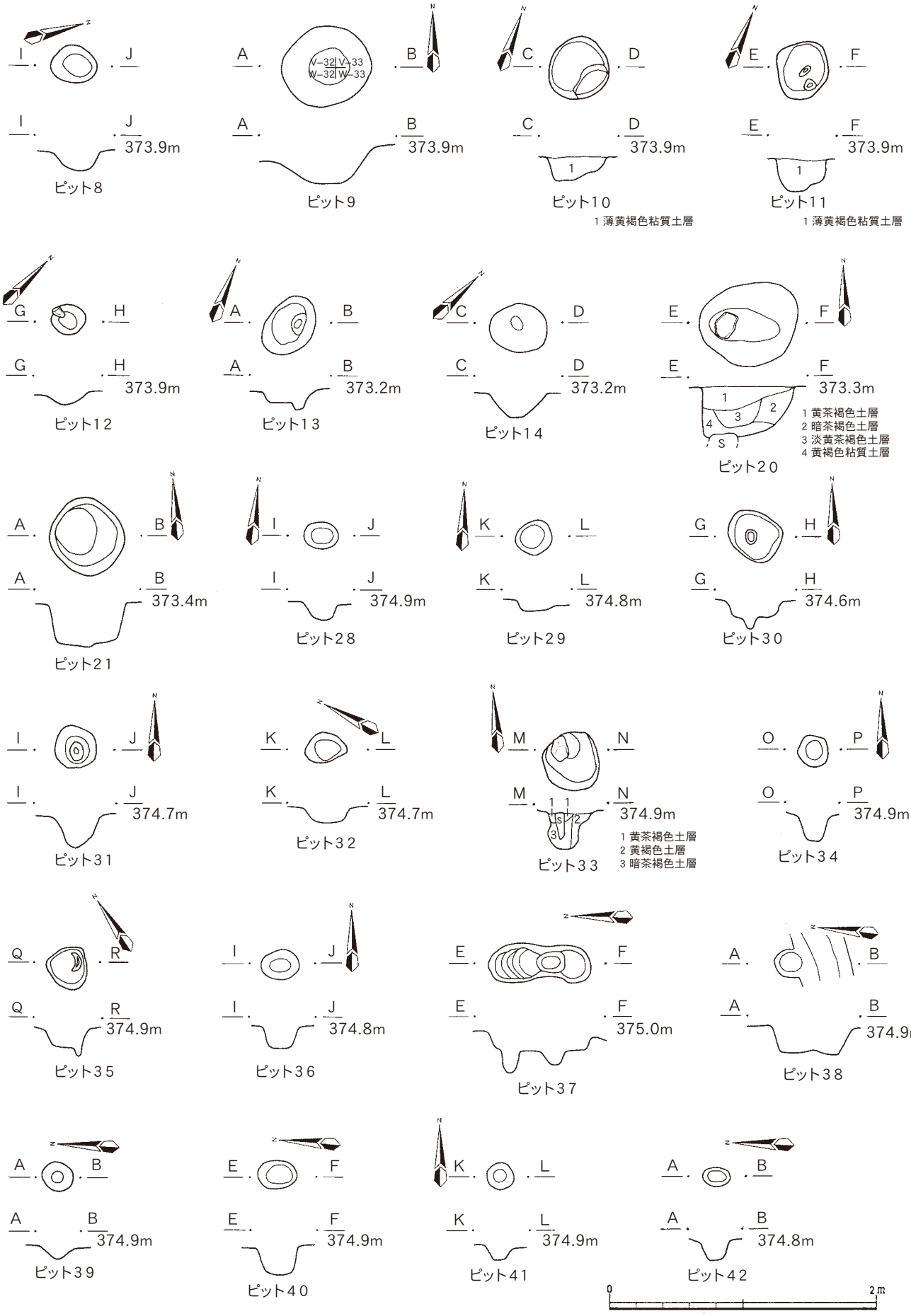
第25図　上コブケA区掘立柱建物跡（4）・土坑（A－3区）



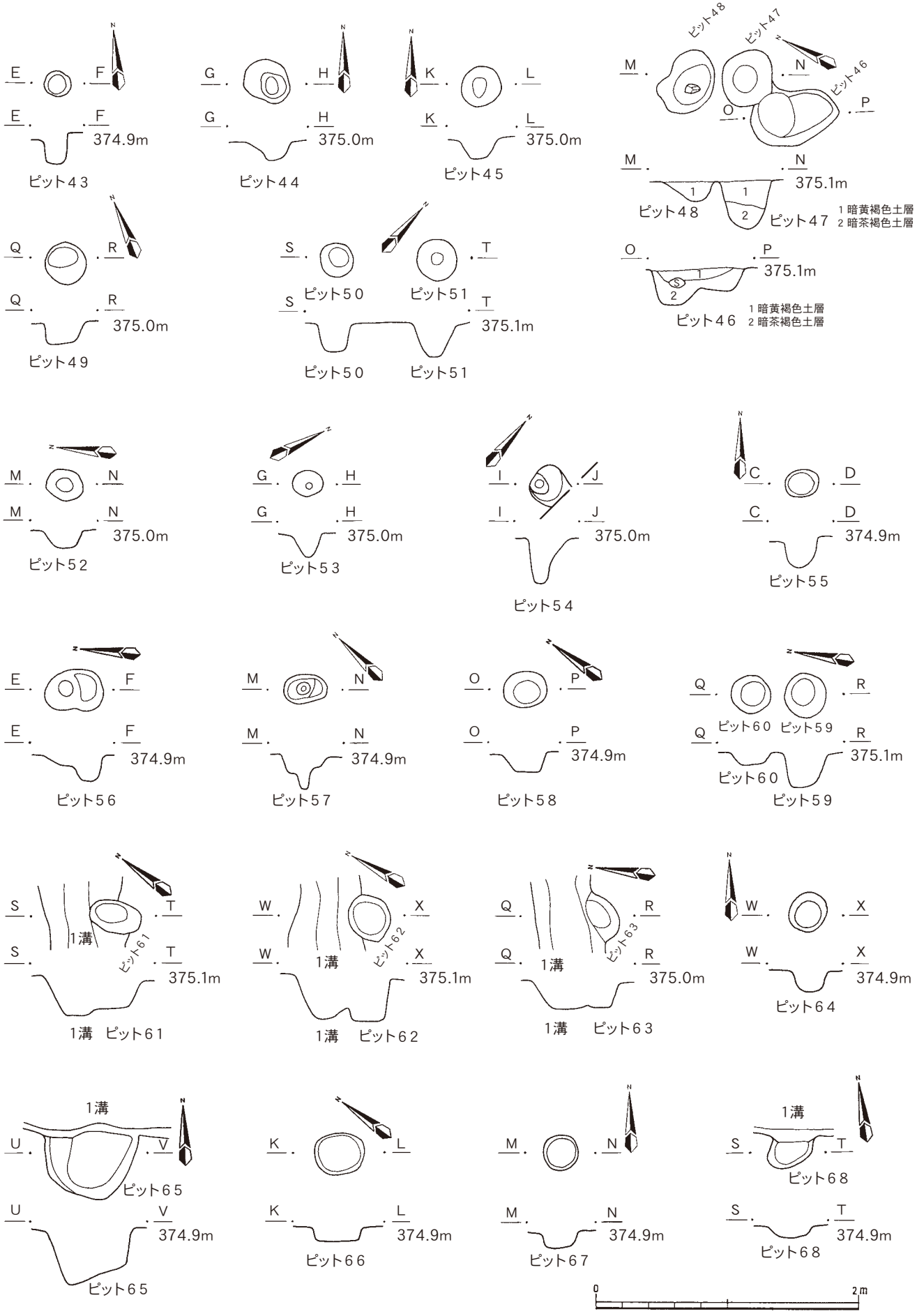
第26図　上コブケA区溝（1）（A－3区）



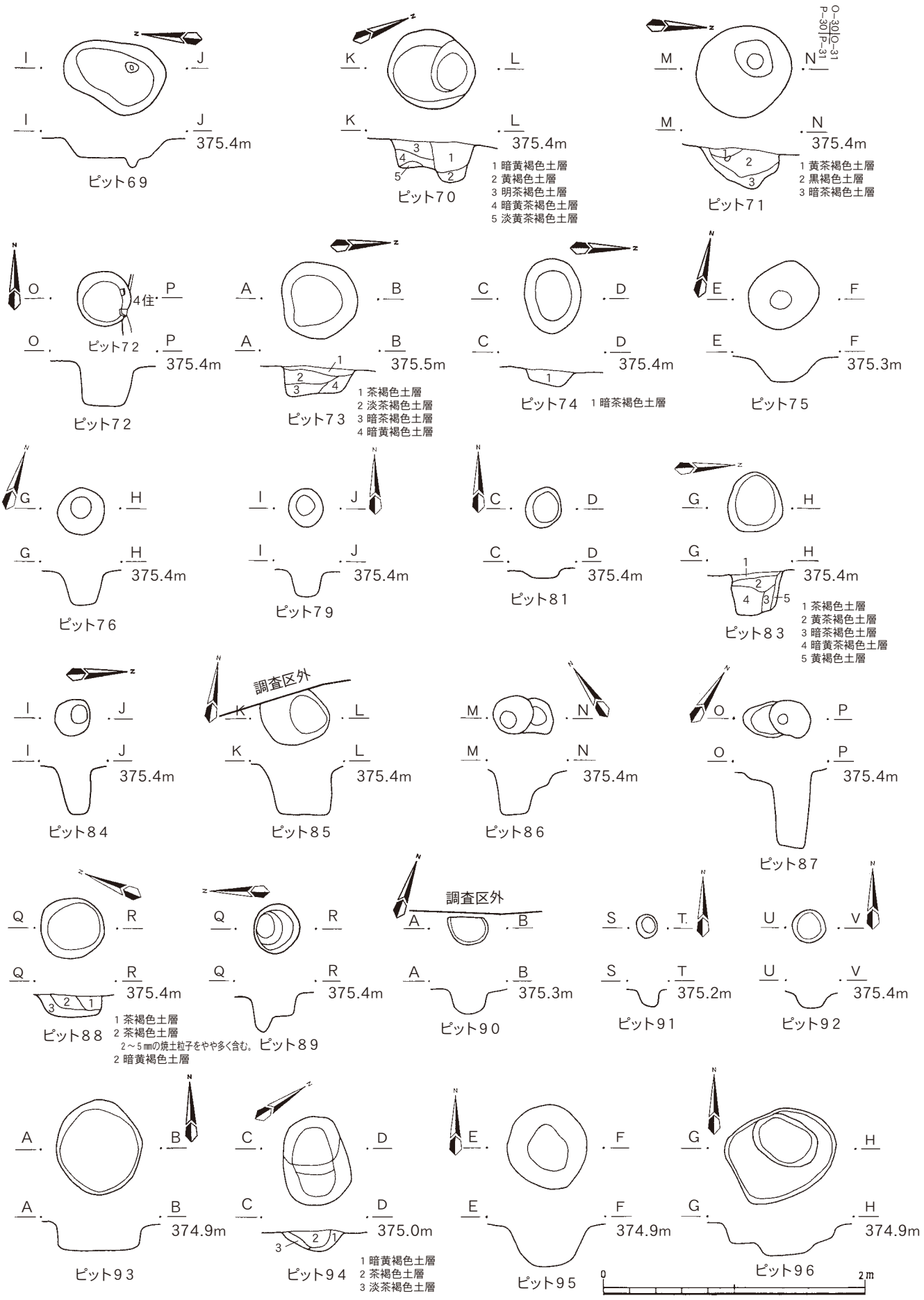
第27図　上コブケA区溝（2）（A－3区）



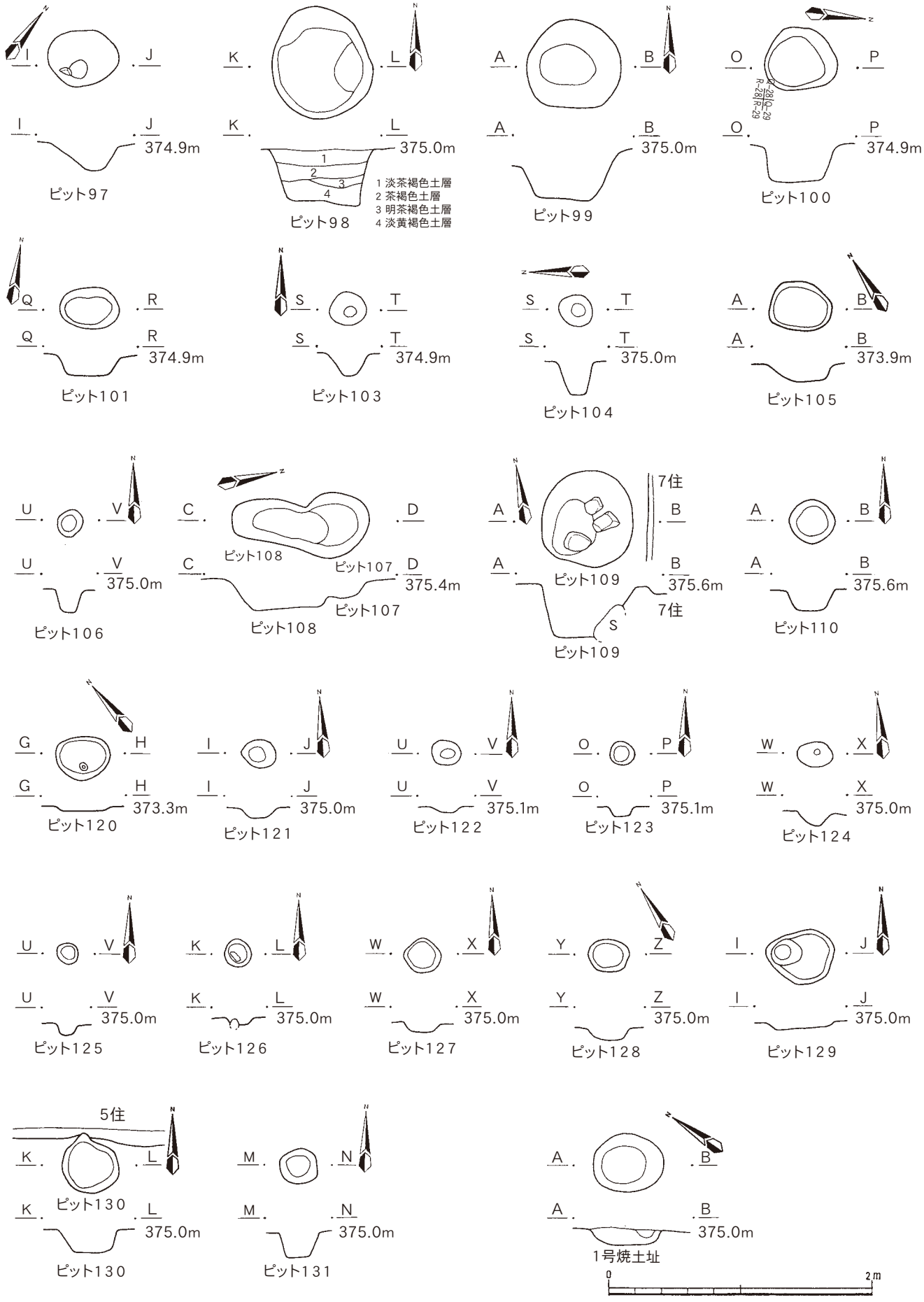
第２８図　上コブケＡ区ピット（１）（Ａ－３区）



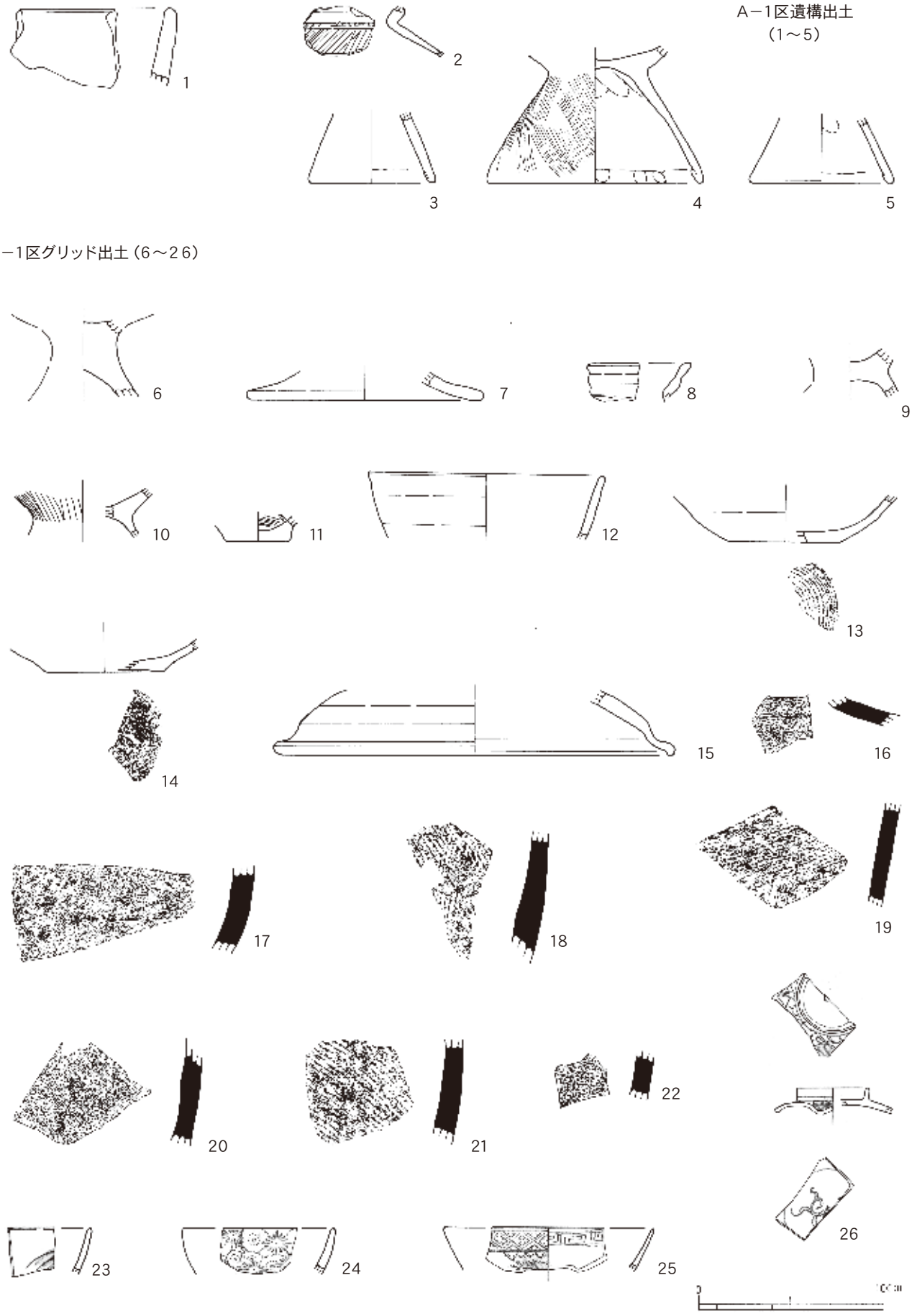
第２９図　上コブケA区ピット（２）（A－３区）



第３０図　上コブケＡ区ピット（３）（Ａ－３区）

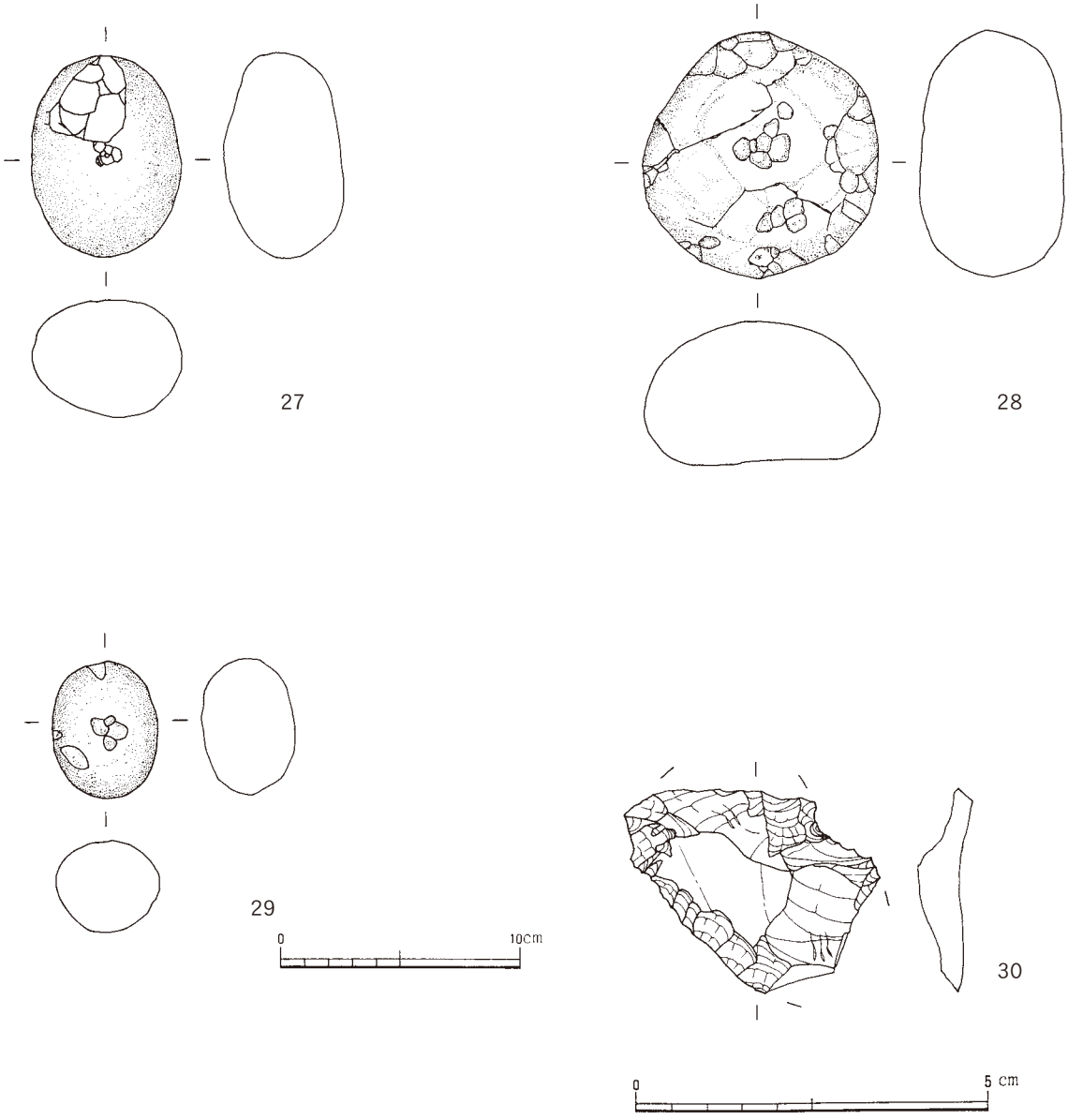


第31図　上コブケA区ピット（4）・焼土址（A－3区）

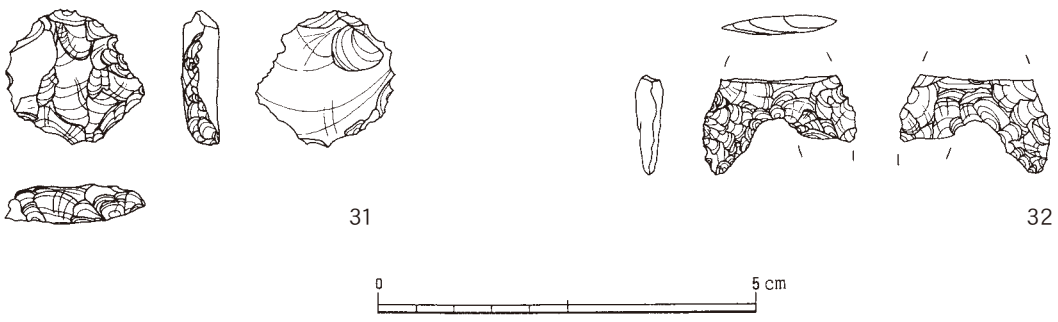


第３２図　上コブケＡ区出土遺物（１）

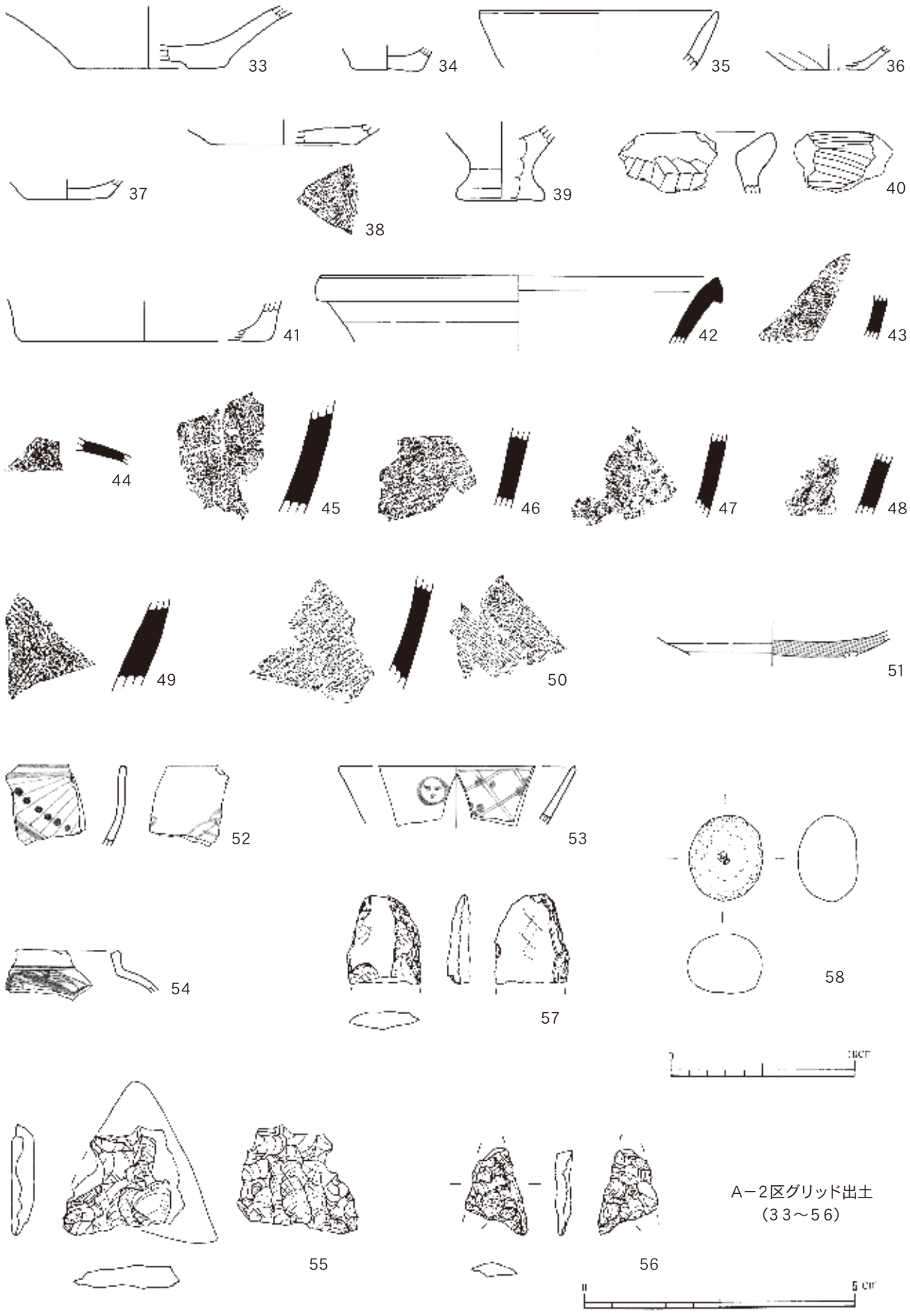
A－1区遺構出土（27～30）



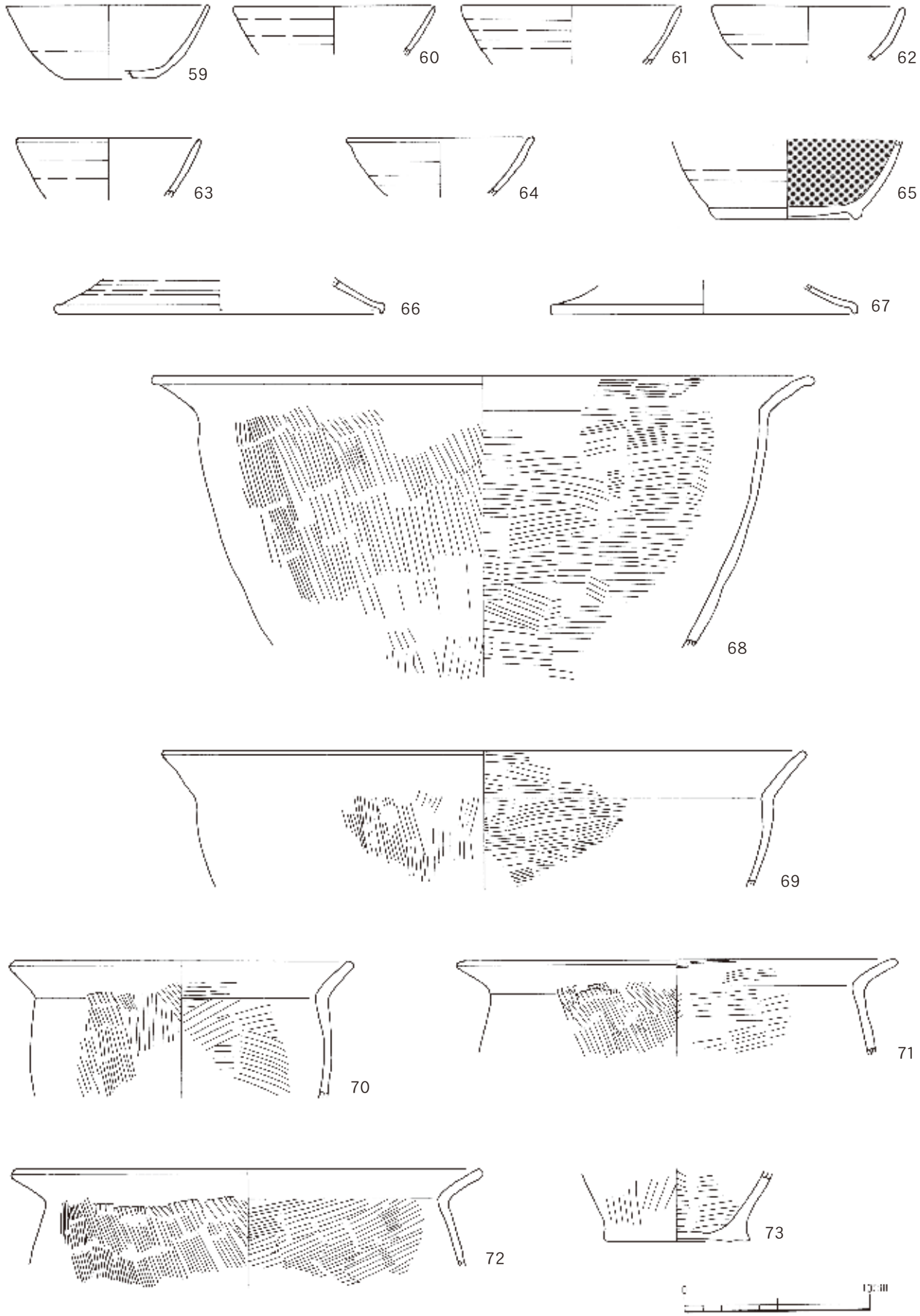
A－1区グリッド出土（31・32）



第３３図　上コブケＡ区出土遺物（２）

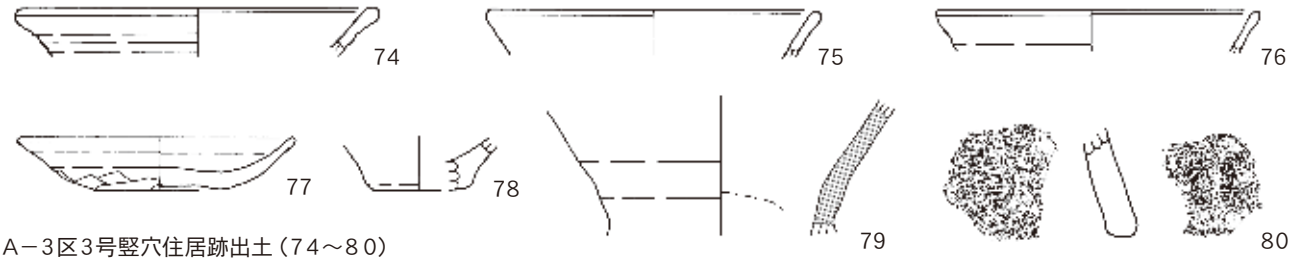


第34図　上コブケA区出土遺物（3）

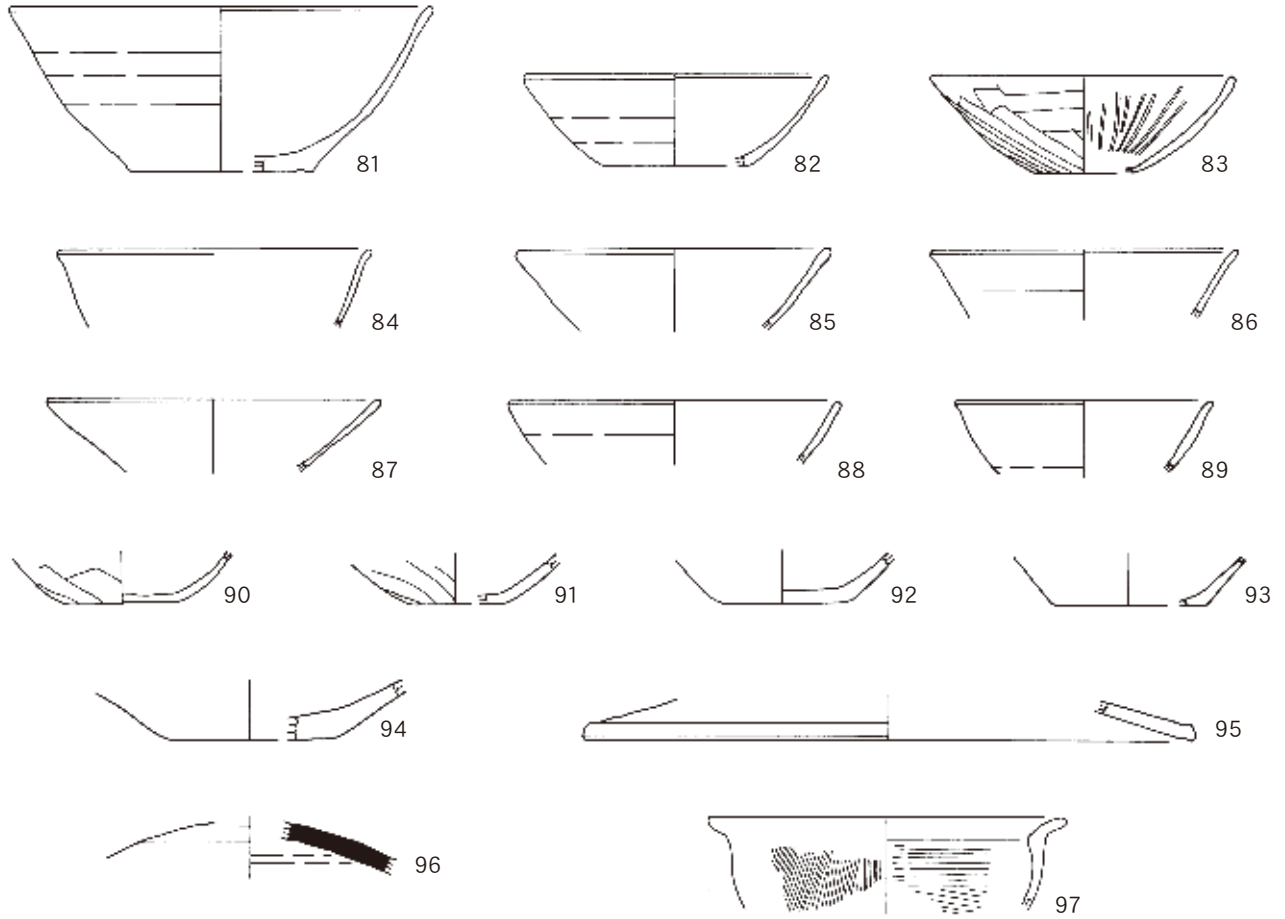


A－3区1号竪穴住居跡出土（59～73）

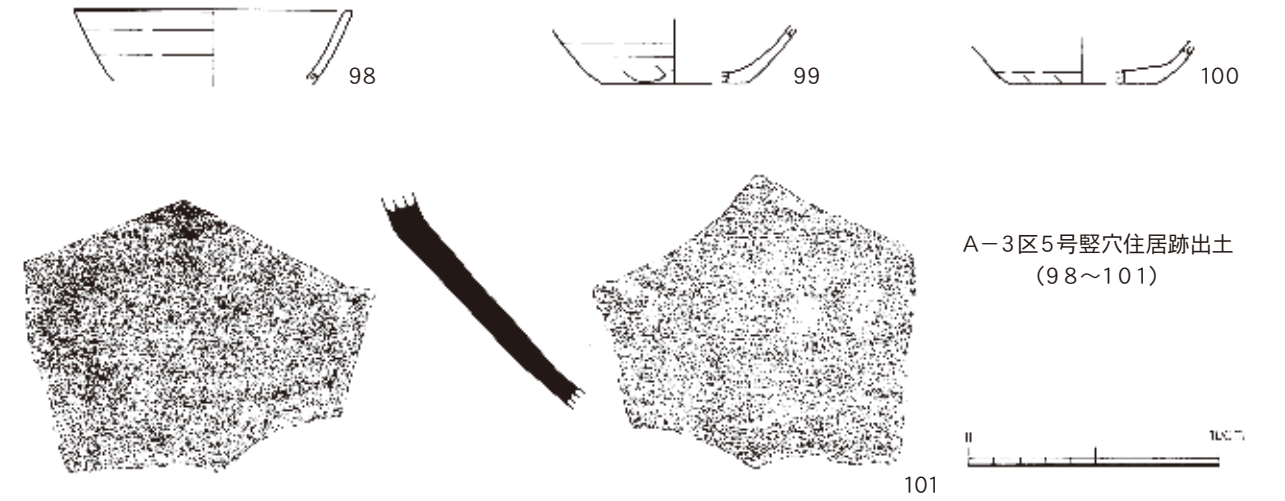
第35図　上コブケA区出土遺物（4）



A－3区3号竪穴住居跡出土（74～80）

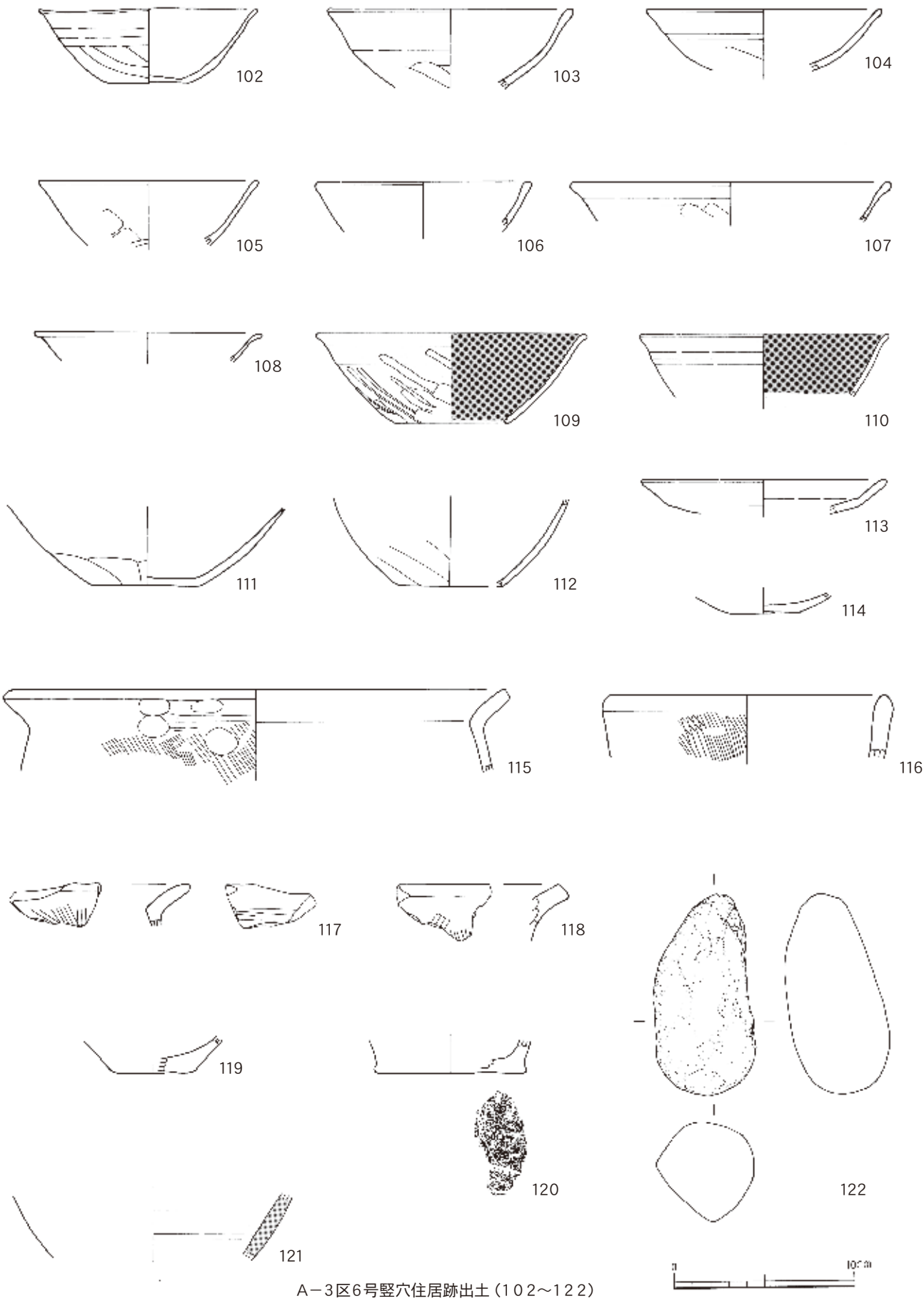


A－3区4号竪穴住居跡出土（81～97）



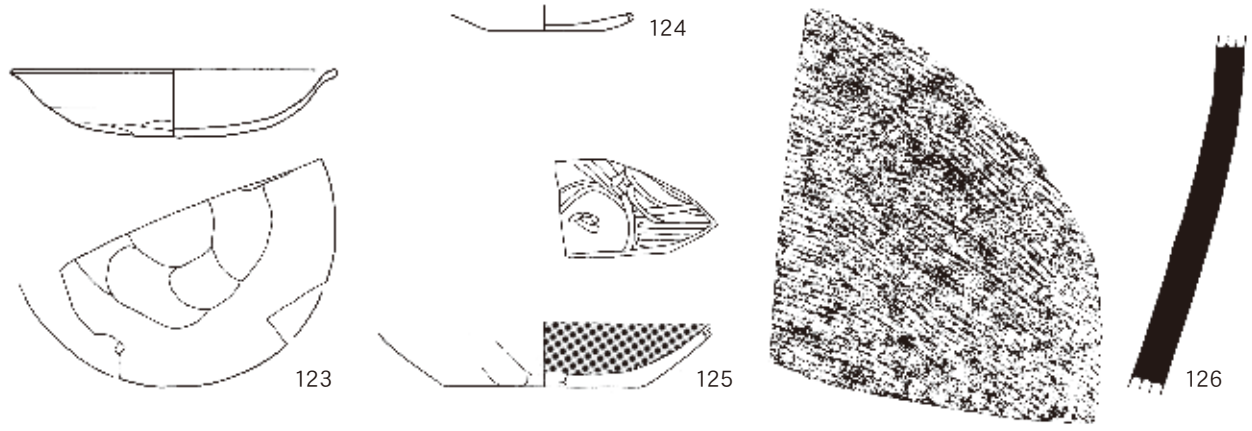
A－3区5号竪穴住居跡出土
（98～101）

第36図　上コブケA区出土遺物（5）

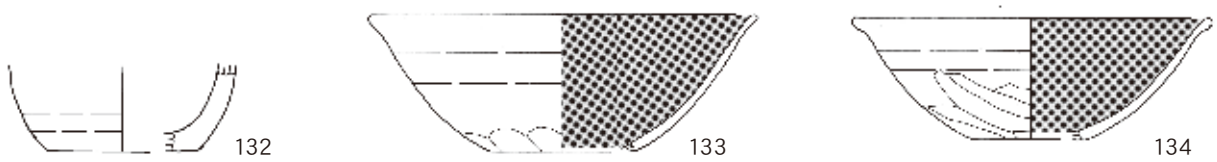


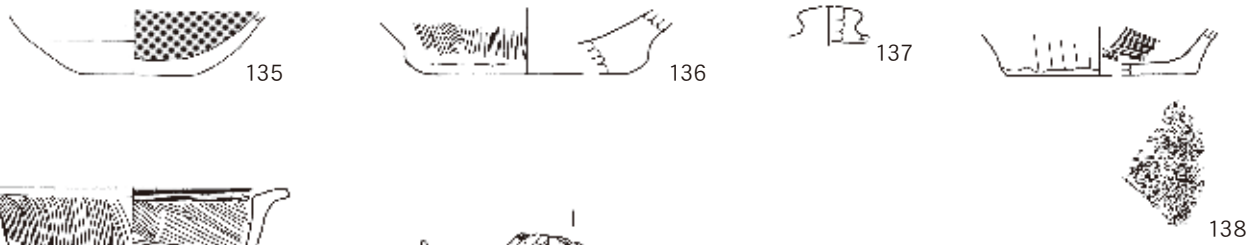
A－3区6号竪穴住居跡出土（102～122）

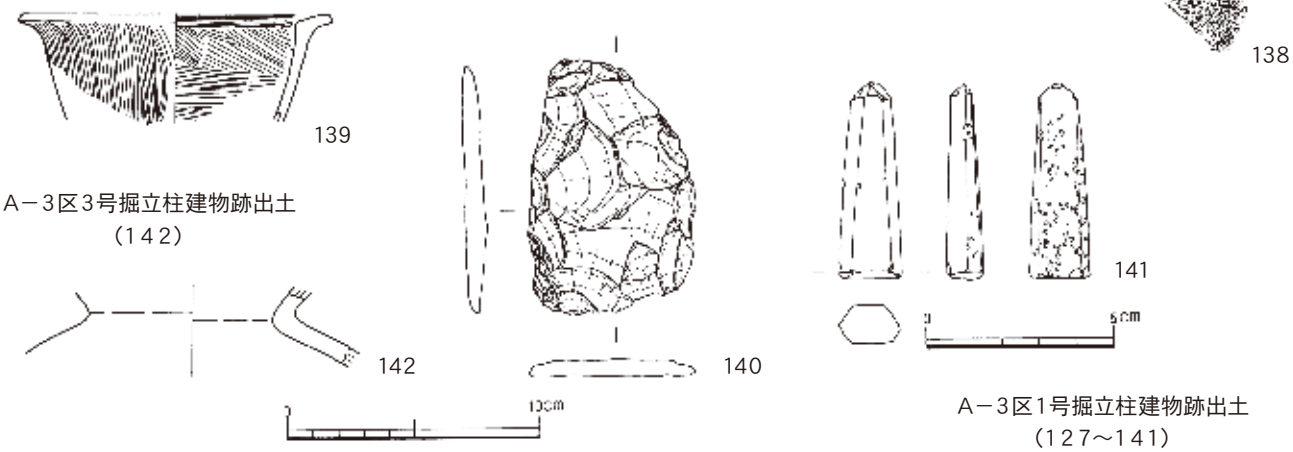
第37図　上コブケA区出土遺物（6）



A－3区7号竪穴住居跡出土（123～126）



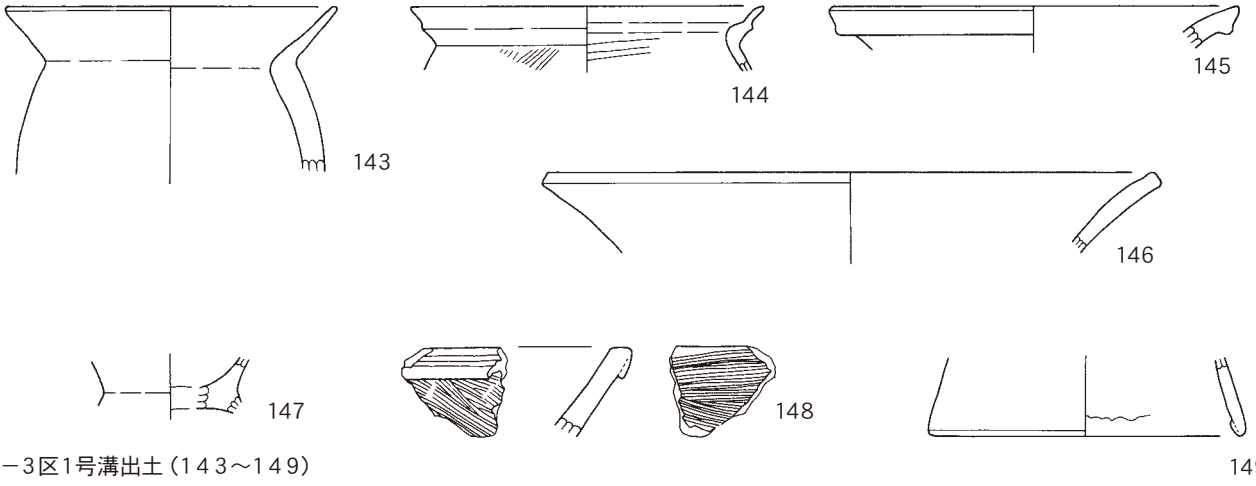




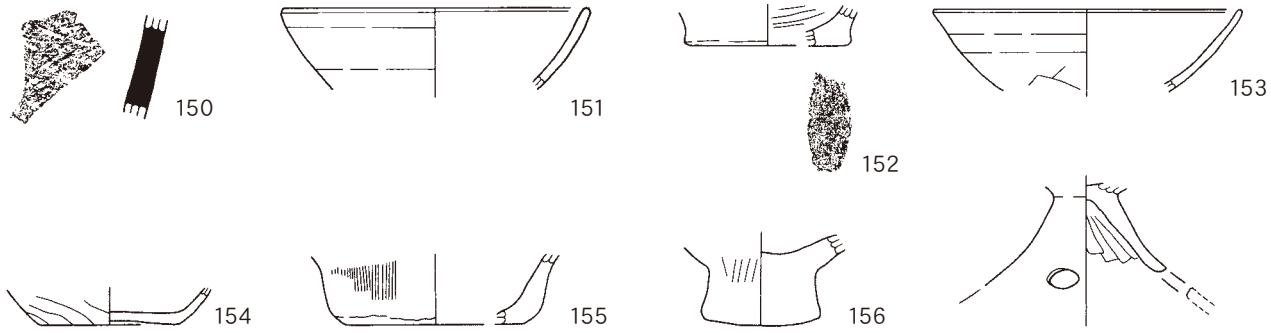
A－3区3号掘立柱建物跡出土
（142）

A－3区1号掘立柱建物跡出土
（127～141）

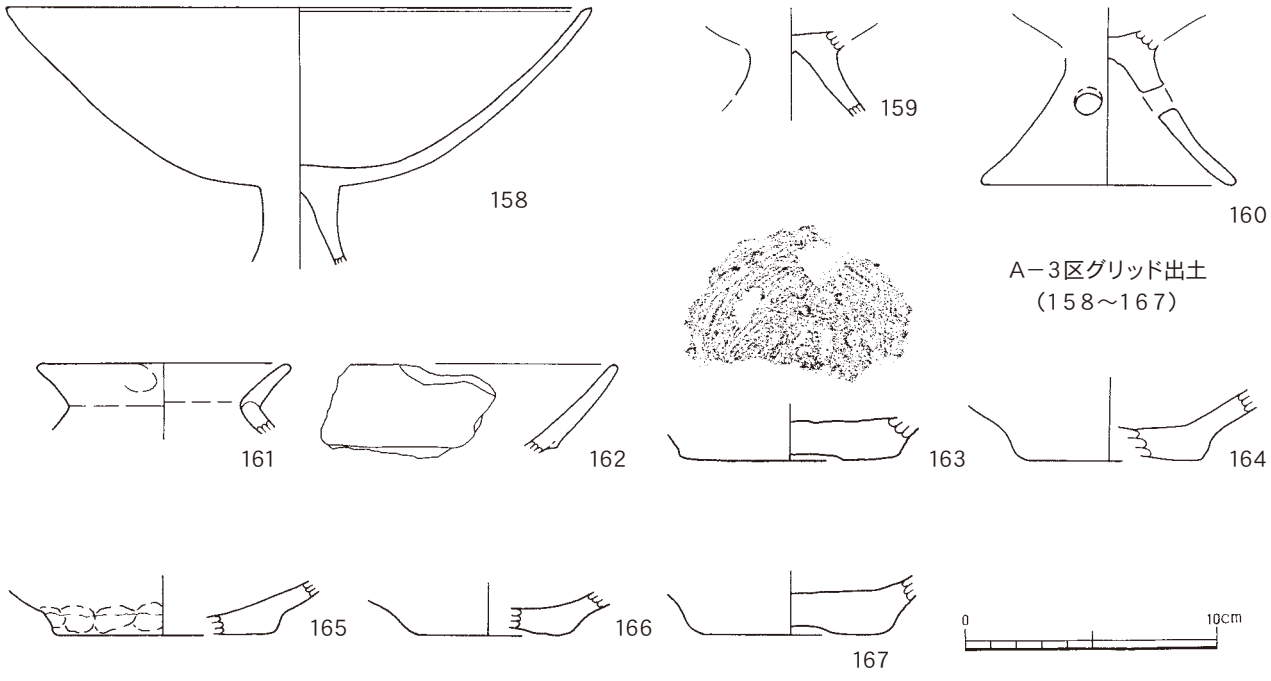
第38図　上コブケA区出土遺物（7）



A－3区1号溝出土（143～149）

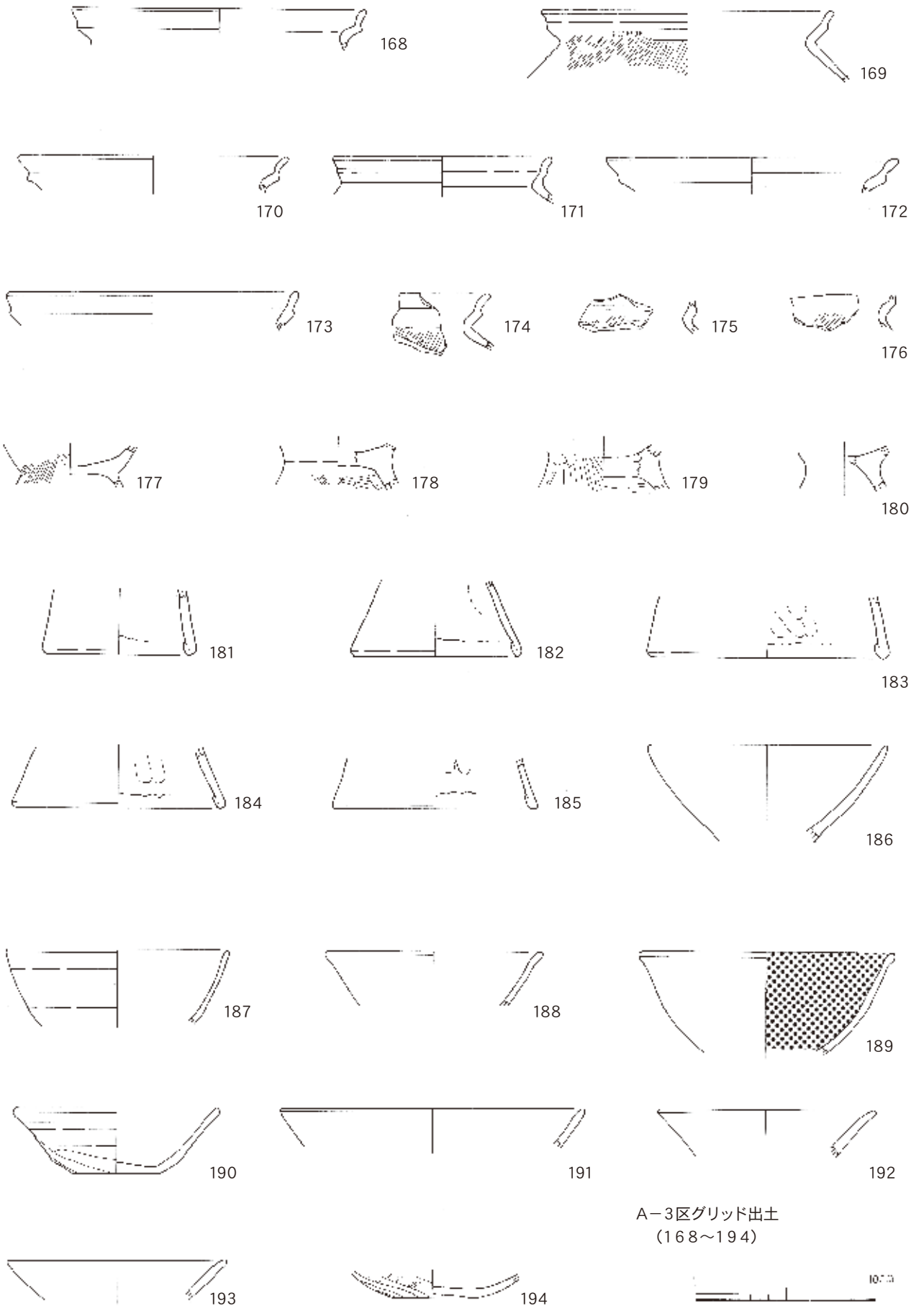


A－3区ピット出土（150～157）



A－3区グリッド出土
（158～167）

第39図　上コブケA区出土遺物（8）



A－3区グリッド出土
（168～194）

第40図　上コブケA区出土遺物（9）

A－3区グリッド出土（195～222）

第41図　上コブケA区出土遺物（10）

第２節　Ｂ区

（１）調査の方法と成果

調査区域は西関東連絡道路建設事業に伴い、本調査を実施した。上コブケ遺跡Ａ区と同様に連絡道路建設が急務であったため、建設工事の工程に基づき建設工事へ引き渡す順に調査区を５ブロックに分割し、ローマ数字を用いてⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区と振り与えた（第Ｂ- １図）。調査区内には世界測地系座標に基づく５ｍ四方のグリッドを設定し、調査区の南北方向に北からアルファベットのＡ・Ｂ・Ｃ・・・、東西方向に西からアラビア数字で１・２・３・・・の順で記号を付し、それぞれが交差する地点をA-1 グリッドと表す。また隣接するＡ区やＣ区、Ｄ区とはグリッド番号が連続し、グリッド名が重複することはない。Ｂ区はＸ～ＡＭ、２～21 グリッドに位置する。

平成 22 年度の試掘結果をもとに重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行い、測量のための基準杭を打設、国家座標を付けた。遺構確認面を鋤簾により精査し、竪穴などの掘り込みを確認したのち掘り下げ、遺構は光波測量機およびノートパソコンによる図化システム（アイシン精機製「遺構くん」）により３次元データを記録しながら平面図化を行い、遺物も同様に３次元データを記録しながら取り上げた。図化を行い、平面図化を行った。掘りあがった遺構は､脚立を用いて俯瞰撮影を行った。その他､記録写真は一眼レフカメラ（リバーサル･白黒)、小型カメラ（カラー)、デジタルカメラにより適宜撮影を行った。出土遺物については、遺跡全体で遺構内外に関わらず通し番号とし、図化システムのデータから台帳を作成し、遺構名等の情報を確認できるようにした。

（２）基本層序

試掘結果からＢ区における基本的な層序は以下の通りである。現地表はしまりのない黒色の耕作土（表土）が約 20㎝厚であり、その下にはしまり及び粘性のないにぶい黄褐色砂質土（1 層）が約 10㎝厚あり、その下にはしまりが強く粘性がややある暗褐色土（2 層）が約 15㎝厚ほど認められる。その下からはしまりが強く粘性のあり鉄分を多く含む暗褐色土（3 層）が約 5㎝厚と薄く堆積し、その下層に暗褐色土がブロック状に混じったしまり及び粘性の強い褐色土（4 層）の水田床土層が約 20㎝厚で認められた。調査区域は、調査前は畑地であったが畑地以前は水田であったのだろう。この 4 層を剥がすと、しまり及び粘性が強く炭化物の混在した約 15㎝厚の黄褐色土（5 層）が縄文時代の遺物包含層である。下層の暗褐色粘質土（6 層）は、しまりがあり粘性が強く鉄分を多量に含んでいる。6 層は遺物が認められず、また約 10㎝程度の厚さで南側へいくにつれ砂質へと移行する傾向が認められ、5 層と 7 層の間層であろう。7 層はしまりがあり粘性が強く鉄分を多量に含んだ黒褐色粘質土（7 層）で、約 20㎝厚の縄文時代の遺物包含層であり、5 層と比べると主に縄文時代中期の遺物を多く含んでいる。5 層上部～ 7 層上部にかけて部分的に、しまりが強く粘性がやや弱い暗褐色土の撹乱が入る。その下からは、しまりが弱く粘性の強い黒褐色シルト層（8 層）が約 20㎝厚で遺物は確認されなかった。その下層のしまりが弱く粘性の強い黒色粘質土（9 層）が約 10 ～ 20㎝厚で北から南側へ低くなるように傾斜して堆積しており、9 層下部から湧水が認められた。しまりが弱く粘性の強い青灰色粘質土（10 層）には、砂と礫が多く混入した湧水層である。湧水のため約 20㎝厚より掘り下げていないが、9 層と同様に北から南側へ傾斜していると思われる。調査区域は耕作地の旧地割が起因すると思われるが、調査区域の中でⅤ区が 1 段高く、遺構・遺物数が他の区と比べて多く検出された。Ⅰ区は畑地であった時のゴミ穴によって、部分的に深く撹乱を受けている。Ⅱ区は試掘調査後に、現代の瓦が多量かつ広域に廃棄されおり、本調査でトレンチを 5 ヶ所設定して 10 層まで重機による掘り下げを実施したが 10 層上部まで現代の瓦が確認され、遺構・遺物を確認することができなかった。

（３）発見された遺構と遺物

調査区域は建設工事の工程に基づき、5 つのブロックに設定した。5 ブロックで検出された遺構は以下の通り

である。

竪穴住居跡 4 軒、 配石遺構 1 基、 集石遺構 1 基、 埋甕 10 基（11・12・13 号は除外）、 土器集中 2 箇所、焼土遺構 4 箇所、 土坑 23 基、ピット 38 基である。

これ以外に畑作に関連すると思われるⅠ区の 1・2 号暗渠と溜池状遺構、Ⅴ区の 1・2 号礫層範囲はⅤ区を区画するために近代に築かれた石垣は撹乱として扱い、分布図の遺物及び遺物出土位置は 1・2 号暗渠及び溜池状遺構を除去した後の下層のものである。Ⅰ区西側の旧河道は、平成 22 年度の試掘後の自然科学分析の結果から、およそ平安期に遺跡の西を南北に流れる兄川の氾濫の痕跡であった。またⅡ区の瓦捨て場範囲は、平成 22 年度の試掘調査後から平成 23 年度の本調査開始前の間に廃棄されたものと考えられる。本調査では努めて遺構・遺物の検出に努めたが、広範囲に深い撹乱（地表面から約－ 90㎝）を受けたために遺構・遺物を確認することはできなかった。

調査区域の中で住居（1 ～ 4 号住居）が検出したのは、他の区より石垣で一段高く区画されたⅤ区のみである。本遺跡で検出された 1 号埋甕を除くすべての埋甕は地山層を掘り込んで埋設したものではなく、7 層の黒褐色粘質土を掘り込んで埋設してあったことから、当時の生活面は黒褐色粘質土の 7 層上部であったと考えられる。住居の壁、柱穴やその他の遺構も同様の 7 層の黒褐色粘質土であり遺構確認が困難であった。

本調査区は市道を挟んで隣接する上コブケ遺跡Ａ・Ｃ・Ｄ区とは異なる特徴として、平安期の文化層がないことが挙げられる。縄文時代の遺物は、時期によって粗密はあるものの縄文時代前期前半の黒浜式土器期から縄文時代中期後半の曽利式土器期まで出土しており、相対的にみると曽利Ⅱ式の土器片が主体的であるが、これは曽利Ⅱ式土器期に住居 4 軒を形成して集落として営まれたことに起因すると考えられる。また集石遺構からは黒浜式土器に併行する在地系土器の釈迦堂 Z3 式土器が主に出土しており、集落が営まれていた曽利Ⅱ式期よりも時期が遡ることから、本遺跡が使用されていたのは曽利Ⅱ式期のみではないと考えられ、周辺に該期の集落がみつかる可能性が推察される。この他に縄文時代後期初頭の土器片、古墳時代の須恵器片、近世期の陶磁器類の小片がわずかにみつかっている。

竪穴住居跡 （第 46・51・52 図）

・1 号竪穴住居跡（第 53 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ．ＡＧ -4．5 グリッドに位置する。

（形態）1 号竪穴住居跡の石囲炉は、主軸方向が北西－南東で 8 個の楕円形や方形の礫をＵ字形に並べ平置きしたもので、北西側の炉石が欠失している。炉内は 3 層の堆積が認められたが 1 層と 2 層に焼土は含有せず、焼土が堆積していたのは最下層の 3 層のみであった。Ⅴ区は一段高く、壁が石垣状に呈していたためか、南西側が石垣（1 号礫層範囲）によって撹乱を受けていた。掘り込みが浅く、出土遺物は少ない。約 6.2m × 6m の円形の住居プランは、遺構確認時のもので住居の床及び壁が判然としなかった。

（遺物）調査段階では遺物が出土しなくなった段階で仮の床面とし、サブトレンチを設定して下層を確認すると床面から約－ 12㎝で砂礫層となり湧水が認められた。土器は床面直上から曽利Ⅰ～Ⅲ式期が出土しており、曽利Ⅱ式が若干多く出土しているが、住居の使用時期決定は難しい。1 号竪穴住居跡の柱穴の 14 号土坑の覆土中からは諸磯ｂ式期の土器片が 1 点のみ出土している。炉以外から約 50 × 30㎝の不整楕円形の焼土がみられた。焼土は薄く、掘り込みは認められず、炉に伴う土器はみられない。

・2 号竪穴住居跡（第 54 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ．ＡＤ -7．8 グリッドに位置する。

（形態）2 号竪穴住居跡の石囲炉は、主軸方向が西－東で 6 個の楕円形や方形の礫をＵ字形に並べ平置きしたもので、炉の東側が開口している。2 号竪穴住居跡の出入り口と考えられる南側から 7 号埋甕（第 58 図）は、正位で埋設され、方形の礫 3 個が囲うように配されており、住居内に伴う埋甕（埋設土器）とみなした。1 号竪

穴住居跡と同様に掘り込みは浅く、約 6.9 × 6.8 m円形のプランは、遺構確認時のもので住居の床及び壁が判然としなかった。

（遺物）2 号竪穴住居跡内からは台形土器（第 118 図 763）が、また住居周辺でも台形土器片が出土している。調査段階では遺物が出土しなくなった段階で仮の床面としたが、7 号埋甕上部で湧水が認められ、住居内の床面は包含層と捉えていた暗褐色土であったと推測される。床面直上の土器は曽利Ⅱ式期のみで、住居の年代は曽利Ⅱ式期であろう。住居遺構を確認できる前の上層（遺物包含層）からは井戸尻式期の土器片が 1 点出土している。

・3 号竪穴住居跡（第 55 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ．ＡＧ -7.8 グリッドに位置する。

（形態）3 号竪穴住居跡の石囲炉は、主軸方向が西－東で 13 個の楕円形や方形の礫を方形に並べ、平置きしたもの。炉の四隅には小さな礫が配せれているが、南東部は欠失している。1・2 号竪穴住居跡と同様に掘り込みが浅く、約 5.9 × 6.2m の円形プランは遺構確認時のもので住居の床及び壁が判然としなかった。

（遺物）遺物が出土しなくなった段階で仮の床面とし、サブトレンチを設定して床面を探ったが、仮の床面下約－ 15㎝の暗褐色土から湧水が認められた。西側は 1 号集石遺構と重複するが、3 号住居跡の遺構プランが明瞭としないことから、遺構プランの切り合いが明瞭としない。出土遺物から先後関係を見ると 1 号集石遺構を古く見ておきたい。床面直上の土器は井戸尻式期と曽利Ⅰ式期がともに 1 点ずつ出土しているが、あとは曽利Ⅱ式期の土器片であり、住居の年代は曽利Ⅱ式期であろう。住居遺構を確認する前の上層（遺物包含層）からは縄文前期前半の黒浜式期が 1 点、前期後半の諸磯ｂ式期が 1 点、中期初頭の五領ヶ台式期が 2 点、中期前半の藤内式期が 2 点、井戸尻式期が 1 点、近世期の磁器が 1 点出土している。

・4 号竪穴住居跡（第 56 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ．ＡＦ -9.10 グリッドに位置する。

（形態）4 号竪穴住居跡の石囲炉は、主軸方向が北－南で 4 個の楕円形の礫をＵ字形に並べて平置きしたもの。炉の南側が開口している。他の住居と同様に掘り込みが浅く、約 5.9 × 6.0 ｍの円形プランとは遺構確認時のもので住居の床及び壁が判然とせず、遺物が出土しなくなった段階で仮の床面とした。柱穴は 21 号土坑と、縄文前期後半の諸磯式期と中期初頭の五領ヶ台式期の土器が出土した 23 号土坑が柱穴と思われるが、他の柱穴は確認できなかった。

（遺物）床面直上の土器は中期前半の井戸尻式期が 3 点と中期後半の曽利Ⅰ式期が 1 点、曽利ⅠまたはⅡ式期の土器片 1 点が出土しており、住居と 23 号土坑には時期的な幅があり、住居に伴う柱穴ではない可能性がある。他の住居と比べ、4 号竪穴住居跡内の覆土及び住居遺構を確認する前の上層（遺物包含層）からは水晶が突出して出土している。4 号竪穴住居跡北側の 2 号竪穴住居跡との間と、4 号竪穴住居跡西側の配石遺構との間からの 2 ヶ所から水晶片が多く出土しており、4 号竪穴住居跡を中心とした出土分布が見られ、水晶の加工に関連する施設である可能性が考えられる。

・1 号配石遺構（第 46・51・52・56 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ．ＡＦ -8．9 グリッドに位置する。

（形態）不整形

（遺物）石棒（第 59 図、第 123 図 788）、立石（第 122 図 787）、磨製石斧（第 120 図 774）、11 号埋甕（第 59 図、第 73 図 77）、土偶の頭部（第 113 図 718）、土製品（第 116 図 737）とともに、配石の形は不整形ながら同等の標高から礫が平らな面を上にして検出された。石棒には被熱の痕跡と思われる変色がある。調査時に石棒と立石の間に礫が配されていたことと、磨製石斧の破片の出土分布から配石遺構の周辺を配石遺構範囲とした。遺物は縄文中期前半の藤内式期から曽利Ⅱ式期（第 74 図 83 ～ 95）まで見られる。4 号竪穴住居跡との間

から水晶片が多く出土している。４号竪穴住居とともに水晶に関連する祭祀行為がおこなわれた可能性がある。

・1 号集石遺構（第 46・51・52・59 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ．ＡＧ -7 グリッドに位置する。

（形態）集石は円形状、遺構プランは不整方形。断面は箱型。遺構下部に集石の痕跡はなく、礫は上部で一様に集められたように見られる。

（遺物）遺物は諸磯式期と釈迦堂 Z3 式期（第 74 図 96 ～ 75 図 110）が検出され、相対的に見ると釈迦堂Ｚ３式期の土器片が多く出土した。集石の礫に加熱の痕跡は見られなかった。

（４）埋甕

・1 号埋甕 人面装飾付土器（第 57・65・69 図）

（位置）Ⅰ区ＡＦ．ＡＧ -3 グリッドに位置し、調査区Ⅰの東西壁寄り、調査区外にかかるように出土した。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 72 × 66㎝、深さはおよそ 46㎝、平面形は不明。

（遺物）時期は曽利Ⅰ式古段階。器形は胴部がやや張りながら立ち上がり、口縁部が内湾しながら大きく開く長胴甕タイプ。文様は口縁部が無文、頸部に棒状工具を押し付けた刻みがついた隆線が横方向にめぐらせ、その下には横方向に太い隆線を貼付し、棒状工具を横におしつけ沈線を引いて隆線を２本表出させ、先の刻みのついた隆線とで隆帯を区画し、その区画内には粘土紐による斜行隆線をめぐらせ、さらに斜行隆線をずらして斜格子状の文様帯を表出する。胴部地文は棒状工具または半裁竹管内面による条線をめぐらせ、胴部文様はＵ字状文をモチーフにした人面部のみの人体文となる。胴部に施された人面装飾は対となる２面あったが、1 面は剥落しており貼付されていた痕跡のみ確認できる。逆位で埋設されていたが、底部の破片が見つからなかったため、底部穿孔の有無は不明である。

Ⅰ区を工事業者へ受け渡す前日に出土したが、急遽調査区を拡張し、同一個体の土器片を回収することを主目的とした掘削を実施したため、埋甕の掘り方は不正確である。5 層の黄褐色粘質土の上層を掘り込み、埋設していると思われる。1 号埋甕の直上の３層黒褐色土には埋甕の掘り方は確認されなかった。底部を回収するために表土２から３層まで掘り抜いたが､底部を発見するには至らなかった｡３層に掘り方が確認されなかったことと、底部が欠失していたことから、底部を打ち欠いた後に埋設した可能性が推測される。

・2 号埋甕（第 57・70 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 34 × 32㎝、深さ 12㎝、平面形は円形。時期は曽利Ⅱ式期で、正位で出土。

（遺物）底部が無いため底部穿孔の有無は不明である。文様は半裁竹管内側による条線と隆線が施されている。遺構確認時に円形の遺構と土器が一周して出土したことから、２号埋甕を付したが、調査を進めていく過程で胴下部や底部が無く、残存率が低いことが判明したが欠番とはせずに、調査時のままに取り扱った。整理作業において周辺グリッドから接合するものは無かった。

・3 号埋甕（第 57・70 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 58 × 52㎝、深さ 42㎝、平面形は不整円形。逆位で出土しており、底部穿孔がある。

（遺物）器形は口縁部に丸みを持ち、頸部ですぼまり底部に至る深鉢形。文様は地文の縄文を全体に施し、口縁部に横Ｓ字文の隆帯を貼付し、棒状工具による刺突がある。文様構成から加曽利Ｅ式の異系統土器と思われ、時期もそれに相当するものと考えられる。

・4 号埋甕（第 70 図）

（位置）Ⅴ区ＡＢ -11 グリッド、試掘 14 トレンチ内に位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 48 × 42㎝、深さ 7㎝、平面形は円形。

（遺物）時期は曽利Ⅰ式からⅡ式期。5 号埋甕と近接して出土した。文様は地文の縄文のみ。平成 22 年度の試掘調査の 14 トレンチから胴上部が検出し、残りを埋設保存とした。本調査で同地点から残りの胴下部が検出され、試掘調査の結果を踏襲し、埋甕（4 号埋甕）とした。しかし、同一個体ではあるが試掘調査時の土器と本調査の土器との接合面がないため、本報告では本調査で検出された土器を掲載した。本調査で底部まで検出できるかと思われたが、胴下部のみ出土した。

・5 号埋甕（第 70 図）

（位置）Ⅴ区 AB-11 グリッド、試掘 14 トレンチ内に位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 47 × 39㎝、深さ 17㎝、平面形は円形。出土状況から正位で埋設されたものと考えられ、底部は出土しなかったため不明である。

（遺物）時期は曽利Ⅱ式期。4 号埋甕と近接して出土した。文様は粘土紐が貼付されている。平成 22 年度の試掘調査の 14 トレンチから胴部が検出し、残りを埋設保存とした。本調査で同地点から残りの胴下部が検出され、試掘調査の結果を踏襲し、埋甕（5 号埋甕）とした。しかし、同一個体ではあるが試掘調査時の土器と本調査の土器との接合面がないため、本報告では本調査で検出された土器を掲載した。本調査で底部まで検出できるかと思われたが、胴下部のみ出土した。

・6 号埋甕（第 70 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ -7 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 57 × 54㎝、深さ 38㎝、平面形は円形。

（遺物）時期は曽利Ⅱ式期。底部穿孔は無い。底部を一周するように割り、底部を逆位にし、その上から「入れ子状」になるように土器本体を正位の状態で埋設された特殊な出土例である。器形は口縁が直線的で頸部がくびれ、胴部が張る深鉢形で、文様は口縁部で半裁竹管内面による弧状隆線を 2 本めぐらせ、弧線内に刺突文が施文される。口縁部から胴部にかけても半裁竹管内面による隆線 2 本で縦位に区画される。刺突文と沈線が施された箇所以外は全体的に縄文が施文される。検出の初期段階では土器本体と底部は別個体を考えていたが、図面測量後に取り上げると接合し、同一個体であることが判明した。土器の本体は正位であったので、正位として扱う。

・7 号埋甕（第 71 図）

（位置）Ⅴ区ＡＤ -8 グリッド、2 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 49 × 47㎝、深さ 40㎝、平面形は円形。正位で出土しており、底部穿孔がある。

（遺物）時期は曽利Ⅱ式期。器形は鉢形。文様は頸部から胴上部に、横に隆線 3 本を貼付した隆帯を表出し、隆帯内に渦巻状の隆線を貼付して横位の区画を作り、区画内には縄文を施す。

・8 号埋甕（第 71 図）

（位置）Ⅴ区ＡＤ -8 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 59 × 56㎝、深さ 31㎝、平面形は円形。正位で出土しており、底部穿孔は底部が欠失しているため不明。

（遺物）時期は曽利Ⅱ式期。器形は口縁が内湾し、頸部がくびれ、胴部がやや張る深鉢形。文様は口縁から頸

部は無文で、頸部から胴部にかけて地文に縄文を施して、頸部と頸部から胴部にかけて隆線を貼付し、頸部は棒状工具を押し付けた刻みがついた隆線が横方向にめぐる。

・9 号埋甕（第 72 図）

（位置）Ⅴ区ＡＤ -8 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 62 × 61㎝、深さ 54㎝、平面形は円形。逆位で出土しており、底部穿孔は底部が欠失しているため不明。

（遺物）時期は曽利Ⅰ式新段階からⅡ式古段階期。出土の初期段階では小さな土器片を 1 ヶ所に廃棄した土器集積遺構と捉えたが、図面測量後に遺物を取り上げると下から 9 号埋甕の胴下部が検出した。整理作業段階で土器集積遺構として取り上げた土器片から 9 号埋甕とは接合しない別個体（第 72 図 76）が含まれることが判明した。別個体は曽利Ⅱ式期の鉢形土器である。土器集積遺構として取り上げた土器片はすべて接合しなかった点から、9 号埋甕の蓋として土器が別個体の 1 点のみではなく、複数個体の土器片が用いられた可能性がある。また別個体取り上げ後に 9 号埋甕内には覆土が充填されており、中からは 9 号埋甕と接合する破片のみであった。9 号埋甕の埋設段階で別個体を蓋とした可能性と、埋甕を埋設した上から土器集積遺構を築いた可能性が考えられる。

器形は口縁が内湾しながら大きく開き、頸部でくびれ、胴部は直線的ではなくやや張り出す長胴甕タイプ。文様は口縁部が無文、頸部には横方向の波状隆線が 1 本と隆線が 2 本めぐり、横位隆帯により区画し、区画内は半裁竹管内面による斜行沈線を充填し、その上から斜行沈線に隆線をずらして斜格子状とする。区画内の隆線は主に直線の隆線であるが、波状隆線が混在する。胴部には隆線 2 本を横方向にめぐらせ、それに連結させてＮ字状をモチーフにした隆帯で渦巻を表出する。地文には縦方向に半裁竹管文内面で条線を充填する。

・10 号埋甕（第 71 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -9 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 102 × 89㎝、深さ 57㎝、平面形は楕円形。逆位で出土しており、底部穿孔あり。

（遺物）時期は曽利Ⅱ式期。器形は長胴甕タイプ。文様は頸部に棒状工具を押しつけて刻みを持つ隆線 2 本を横方向にめぐらせ、その隆帯区画内に半裁竹管内面で斜行沈線を引く。胴部は棒状工具を押しつけて刻みを持つ隆帯で、十字文を 2 単位とＮ字文 2 単位を表出している。頸部と胴部の隆帯は連結している。胴部の地文には、半裁竹管内面による条線を充填させる。

・11 号埋甕（第 73 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -8 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 79 × 69㎝、深さ 32㎝、平面形は隅丸方形。正位で出土しており、底部穿孔は底部が欠失しているため不明。

（遺物）時期は藤内式期。調査時に隅丸方形の遺構と土器片が見られ、11 号埋甕と付したが調査を進めていく過程で、鉢形土器であることが判明したが、遺構断面で他の遺構と違い、黄色がかった土色だったため欠番とはせずに調査時のままに取り扱った。器形は鉢形。文様は口縁部から胴部にかけて隆帯で重三角区画文を施し、区画内は主に無文だが、棒状工具で縦方向に連続沈線が施されており、重三角区画文の隆帯上には連続爪形文がめぐっている。

・12 号埋甕（第 73 図）

（位置）Ⅴ区ＡＤ -6 グリッドに位置する。調査区Ⅴの南北壁寄り、調査区外にかかるように出土した。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 87 × 76㎝、深さ 34㎝、平面形は楕円形。逆位で出土。

（遺物）遺構確認時に円形の遺構と土器が一周して出土したことから、12 号埋甕と付したが調査を進めていく過程で、正位ではなく逆位であることが判明し、残存しているのは口縁部のみであったが欠番とはせずに、調査時のままに取り扱った。器形は頸部から下が残存していないため、キャリパー形の深鉢と思われる。文様は口縁部には孔の開けられた三角状把手と、接合面はないがヘビ状把手（第 73 図 80）がある。頸部には粘土紐を横方向に貼付し、その上に綾杉文を横方向にめぐらせ、胴部には棒状工具による縦方向の条線が施文される。

・13 号埋甕（第 73 図）　Ⅴ区ＡＧ -7 グリッドに位置する。

（形態）埋甕の掘り方はおよそ径 58 × 53㎝、深さ 32㎝、平面形は不整円形。正位で出土しており、底部穿孔は底部が欠失しているため不明。

（遺物）時期は五領ヶ台式Ⅱ式期。器形は口唇部で内側に少し厚くなった平縁の深鉢形。文様は口縁部には横方向に隆帯をめぐらせ、胴部には地文に縄文を充填し、連続した弧状隆帯を施し、縦方向の隆線と沈線が弧状隆帯に連結する。13 号埋甕と付したが調査を進めていく課程で埋甕でないことが判明したが、欠番とはせずに、調査時のままに取り扱った。

（5）土器集中範囲

・土器集中 1（第 43・47・48 図）

（位置）Ⅰ区ＡＧ -3 グリッドに位置する。

（形態）約 3.1 × 1.8m、深さ 32㎝、平面形は不整楕円形。

（遺物）狢沢式と新道式を除く、黒浜式期から曽利Ⅱ式期（第 75 図 111 ～ 76 図 131）までの土器片が集中して出土しているが、相対的に見ると五領ヶ台式が主体である。暗褐色の包含層中から出土したため、遺構及び分層ラインが明確に引けず、土器片が集中した範囲を土器集中 1 とした。出土遺物として打製石斧（第Ｂ -78 図 770）と特殊遺物として匙状土製品（第Ｂ -75 図 738）とミニチュア土器（第Ｂ -76 図 753）が出土している。

・土器集中 2（第 43・47・48 図）

（位置）Ⅰ区 AK-6.AL-6.7 グリッドに位置する。

（形態）約 7.9 × 4.3m、深さ 26㎝、平面形は不整楕円形。

（遺物）五領ヶ台式期、井戸尻式期（第 76 図 132 ～ 77 図 144）が多く出土し、五領ヶ台式が相対的に多い。暗褐色の包含層中から出土したため、遺構及び分層ラインが明確に引けず、土器片が集中した範囲を土器集中 2 とした。

（6）焼土（第 46 図）

・ＡＤ -8 焼土

（位置）Ⅴ区ＡＤ -8 グリッドに位置する。

（形態）約 45 × 35㎝小規模な不整形の焼土がみられた。焼土は薄く、掘り込みはみられない。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・ＡＦ -6 焼土

（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）約 30 × 30㎝の小規模な円形の焼土がみられた。焼土は薄く、掘り込みはみられない。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・ＡＧ -6 焼土

（位置）Ⅴ区ＡＧ -6 グリッドに位置する。

（形態）約 40 × 30㎝の小規模な不整形の焼土がみられた。焼土は薄く、掘り込みはみられない。
（遺物）伴出する土器はみられない。

（7）土坑

・1 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ．ＡⅠ -9.10 グリッドに位置する。
（形態）約 1.3 × 0.9m の楕円形の土坑で、深さ 15㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）諸磯 a 式期（第 77 図 145）と黒曜石片。

・2 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -10 グリッドに位置する。
（形態）約 1.1 × 1.0m の不整形の土坑で、深さ 20㎝。断面は不整形。主軸方向は東西。3 号土坑と 1 号 Pit に近接している。覆土は黒褐色土。3 ヶ所の掘り込みがあるが性格不明。
（遺物）五領ヶ台式期と曽利Ⅱ式期（第 77 図 147．148）。

・3 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -10 グリッドに位置する。
（形態）約 0.5 × 0.4m の円形の土坑で、深さ 23㎝。断面は不整形。主軸方向は東西。2 号土坑と 1 号 Pit に近接している。1 号 Pit と重複しており、先後関係は 1 号 Pit が新しい。覆土は黒褐色土。
（遺物）五領ヶ台式期と新道式期（第 77 図 149.150）。

・4 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -9 グリッドに位置する。
（形態）約 1.5 × 1.2m の楕円形の土坑で、深さ 46㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）ミニチュア土器（第 117 図 743）と時期不明の縄文土器片（第 77 図 151）。

・5 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -10 グリッドに位置する。
（形態）約 0.8 × 0.7m の不整形の土坑で、深さ 21㎝。断面は不整形。主軸方向は東西。2 ヶ所の掘り込みがあるが性格不明。覆土は黒褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・6 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -11 グリッドに位置する。
（形態）約 1.2 × 0.9m の楕円形の土坑で、深さ 30㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は黒褐色土。7 ～ 20㎝の礫を含む。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・7 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＧ．ＡＨ -12 グリッドに位置する。
（形態）約 1.4 × 1.3m の不整形の土坑で、深さ 11㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。周囲には 8 号土坑、2・3 号 Pit が位置する。覆土暗褐色粘質土。

（遺物）時期不明の縄文土器片（第 77 図 152）。

・8 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＧ -12 グリッドに位置する。

（形態）約 0.9 × 0.8m の円形の土坑で、深さ 30㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。周囲には 7 号土坑、2・3 号 Pit が位置する。覆土は黒褐色粘質土。

（遺物）諸磯 a 式期（第 77 図 153）。

・9 号土坑（第 60 図）

（位置）Ⅲ区ＡＨ -13 グリッドに位置する。

（形態）約 1.0 × 0.7m の楕円形の土坑で、深さ 21㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。周囲には 4 号 Pit が位置する。

（遺物）時期不明の縄文土器片（第 77 図 154）。

・10 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅲ区ＡＩ -12 グリッドに位置する。

（形態）約 1.0 × 0.9m の不整形の土坑で、深さ 25㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色粘質土。

（遺物）時期不明の縄文土器片（第 77 図 155）。

・11 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.7 × 0.7m の円形の土坑で、深さ 71㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は 2 層で暗褐色土と黒褐色土。

（遺物）五領ヶ台式期、狢沢式期、藤内式期の土器片（第 77 図 156 ～ 160）。

・12 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.7 × 0.5m の楕円形の土坑で、深さ 21㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。

（遺物）出土遺物は井戸尻式期（第 77 図 161）。

・13 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅴ区ＡＧ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 1.3 × 0.8m の不整楕円形の土坑で、深さ 59㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。

（遺物）諸磯式期、狢沢式期、藤内式期（第 77 図 162 ～ 166）で狢沢式期が多い。

・14 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5.6 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 1.8 × 1.3m の不整形の土坑で、深さ 52㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土の 2 層。2 層に 5 ～ 10㎝の礫を含む。

（遺物）出土土器は諸磯式期、狢沢式期、井戸尻式期（第 77・78 図 167 ～ 173）で井戸尻式期が多い。

・15 号土坑（第 61 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5.6 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 1.0 × 0.8m の楕円形の土坑で、深さ 76㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・16 号土坑（第 61 図）
（位置）Ⅴ区ＡＥ -7 グリッド、1 号配石遺構内に位置する。
（形態）約 0.9 × 0.5m の楕円形の土坑で、深さ 14㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）諸磯ｂ式期（第 78 図 174）。

・17 号土坑（第 61 図）
（位置）Ⅴ区ＡＤ．ＡＥ -9 グリッドに位置する。
（形態）約 0.9 × 0.5m の楕円形の土坑で、深さ 14㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。周囲には 4 号竪穴住居跡、18 号土坑、16 号 Pit が位置する。覆土は黒褐色土と暗褐色土の 2 層。
（遺物）五領ヶ台式期（第 78 図 175 ～ 177）。

・18 号土坑（第 61 図）
（位置）Ⅴ区ＡＤ -9 グリッドに位置する。
（形態）約 0.6 × 0.3m の楕円形の土坑で、深さ 16㎝。断面は箱形。主軸方向は南北。周囲には 4 号竪穴住居跡、17 号土坑、16 号 Pit が位置する。覆土は黒褐色土。
（遺物）時期不明の縄文土器。（第 78 図 178）

・19 号土坑（第 61 図）
（位置）Ⅴ区ＡＤ -9 グリッドに位置する。
（形態）約 0.8 × 0.5m の不整形の土坑で、深さ 19㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土と暗褐色土の 2 層。
（遺物）出土土器は諸磯式期（第 78 図 179）。

・20 号土坑（第 62 図）
（位置）Ⅴ区ＡＦ -8 グリッドに位置する。
（形態）約 1.2 × 1.2m の円形の土坑で、深さ 32㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。周囲には 3 号竪穴住居跡と 1 号配石遺構が位置する。
（遺物）五領ヶ台式期（第 78 図 180 ～ 181）。

・21 号土坑（第 62 図）
（位置）Ⅴ区ＡＥ -10 グリッド、4 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.8 × 0.7m の不整形の土坑で、深さ 22㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土と暗褐色土の 2 層。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・22 号土坑（第 62 図）
（位置）Ⅴ区ＡＢ -9.10 グリッドに位置する。
（形態）約 1.3 × 1.1m の不整円形の土坑で、深さ 11㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。周囲には 34・35

号 Pit が位置する。
（遺物）時期不明の縄文土器（第 78 図 182）。

・23 号土坑（第 62 図）
（位置）Ⅴ区ＡＥ -10 グリッド、4 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.5 × 0.5m の円形の土坑で、深さ 18㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は暗褐色土層。
（遺物）諸磯式期の有孔土器片や五領ヶ台式期（第 78 図 183 ～ 187）。

（8）ピット

・1 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＨ -10 グリッドに位置する。
（形態）約 0.5 × 0.3m の不整形の Pit で、深さ 24㎝。断面は不整形。主軸方向は東西。2 号土坑と 1 号 Pit に近接している。1 号 Pit と重複しており、先後関係は 1 号 Pit が新しい。覆土は黒褐色土。
（遺物）五領ヶ台式期（第 78 図 188）。

・2 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＨ -12 グリッドに位置する。
（形態）約 0.4 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 37㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色粘質土。
（遺物）時期不明の縄文土器（第 78 図 189）。

・3 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＨ -12 グリッドに位置する。
（形態）約 0.5 × 0.4m の楕円形の Pit で、深さ 6㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は暗褐色粘質土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・4 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＨ -13 グリッドに位置する。
（形態）約 0.2 × 0.2m の円形の Pit で、深さ 10㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 9 号土坑がある。覆土は黒褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・5 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＩ -13 グリッドに位置する。
（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 19㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。6 号 Pit と重複しており、先後関係は 6 号 Pit が新しい。覆土は黒色土、暗褐色土、暗褐色粘質土の 3 層。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・6 号 Pit（第 62 図）
（位置）Ⅲ区ＡＩ -13 グリッドに位置する。
（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 17㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。5 号 Pit と重複しており、先後関係は 6 号 Pit が新しい。覆土は黒色土、暗褐色粘質土の 2 層。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・7 号 Pit（第 62 図）

（位置）Ⅲ区ＡＩ -13 グリッドに位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の不整円形の Pit で、深さ 17㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土、褐色土、黒褐色土の 3 層。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・8 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅲ区 AH-13 グリッドに位置する。

（形態）約 0.2 × 0.2m の円形の Pit で、深さ 10㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は黒褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・9 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 15㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は暗褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・10 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 16㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は暗褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・11 号 Pit（第 63 図）

（形態）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.4 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 23㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・12 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ．ＡＦ -5 グリッドに位置する。

（形態）約 0.5 × 0.4m の円形の Pit で、深さ 19㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 1 号竪穴住居跡がある。覆土は暗褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・13 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ -5 グリッドに位置する。

（形態）約 0.5 × 0.5m の円形の Pit で、深さ 19㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 1 号竪穴住居跡がある。覆土は暗褐色土。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・14 号 Pit（第 63 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 12㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。覆土は暗褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・15 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。
（形態）約 0.4 × 0.3m の不整円形の Pit で、深さ 23㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・16 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。
（形態）約 0.4 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 13㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・17 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区ＡＣ -8 グリッド、2 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.4 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 13㎝。断面は箱形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土。
（遺物）五領ヶ台式期、藤内式期（第 78 図 190.191）の土器。

・18 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.6 × 0.4m の不整楕円形の Pit で、深さ 6㎝。断面は箱形。主軸方向は南北。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・19 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.9 × 0.6m の不整楕円形の Pit で、深さ 17㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。20 号 Pit に近接する。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・20 号 Pit（第 63 図）
（位置）Ⅴ区 AF-5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。
（形態）約 0.7 × 0.6m の不整円形の Pit で、深さ 14㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。19 号 Pit に近接する。
（遺物）伴出する土器はみられない。

・21 号 Pit（第 64 図）
（位置）Ⅴ区ＡＧ -5 グリッドに位置する。
（形態）約 0.5 × 0.3m の不整楕円形の Pit で、深さ 7㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。
（遺物）時期不明の縄文土器（第 78 図 192）。

・22 号 Pit（第 64 図）
（位置）Ⅴ区ＡＧ -6 グリッドに位置する。
（形態）約 0.5 × 0.3m の不整楕円形の Pit で、深さ 7㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 1 号竪穴住居跡がある。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・23 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.9 × 0.8m の不整形の Pit で、深さ 28㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。24 号 Pit と重複しており、先後関係は 23 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・24 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -5 グリッド、1 号竪穴住居跡内に位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 16㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。23 号 Pit と重複しており、先後関係は 23 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・25 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ．ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）約 0.5 × 0.4m の楕円形の Pit で、深さ 12㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。26 号 Pit と重複しており、先後関係は 25 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・26 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＥ．ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）約 0.5 × 0.5m の円形の Pit で、深さ 14㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。25 号 Pit と重複しており、先後関係は 25 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・27 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -8.9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.7 × 0.7m の円形の Pit で、深さ 22㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・28 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -8 グリッドに位置する。

（形態）約 0.5 × 0.5m の円形の Pit で、深さ 8㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 2 号竪穴住居跡がある。29 号 Pit と重複しており、先後関係は 28 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・29 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -8 グリッドに位置する。

（形態）約 0.7 × 0.5m の楕円形の Pit で、深さ 24㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。付近に 2 号竪穴住居跡がある。28 号 Pit と重複しており、先後関係は 28 号 Pit が新しい。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・30 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -8 グリッドに位置する。

（形態）約 0.6 × 0.6m の円形の Pit で、深さ 20㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・31 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.4 × 0.4m の円形の Pit で、深さ 21㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・32 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.6 × 0.5m 隅丸方形の Pit で、深さ 19㎝。断面はＵ字形。主軸方向は東西。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・33 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＣ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.8 × 0.5m の不整楕円形の Pit で、深さ 10㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）釈迦堂Ｚ 3 式期（第 78 図 192）の土器片。

・34 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＢ．ＡＣ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の不整円形の Pit で、深さ 14㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・35 号 Pit（第 64 図）

（位置）Ⅴ区ＡＢ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.8 × 0.6m の楕円形の Pit で、深さ 6㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・36 号 Pit（第 65 図）

（位置）Ⅴ区 AF-6 グリッドに位置する。

（形態）約 0.6 × 0.5m の不整円形の Pit で、深さ 42㎝。断面はＶ字形。主軸方向は東西。覆土は黒褐色土、暗褐色土の 2 層。

（遺物）3 号埋甕（第 70 図 67）で加曽利Ｅ式の異系統土器。

・37 号 Pit（第 65 図）

（位置）Ⅴ区ＡＤ -9 グリッドに位置する。

（形態）約 0.9 × 0.8m の円形の Pit で、深さ 26㎝。断面はＵ字形。主軸方向は南北。

（遺物）伴出する土器はみられない。

・38 号 Pit（第 65 図）

（位置）Ⅴ区ＡＦ -6 グリッドに位置する。

（形態）約 0.3 × 0.3m の円形の Pit で、深さ 12㎝。断面は不整形。主軸方向は東西。

（遺物）伴出する土器はみられない。

（9）遺構外出土遺物

・縄文時代前期（第 78 ～ 81 図）

縄文時代前期前半の土器として、関東地方の土器編年の黒浜式土器と、黒浜式併行式土器である在地系土器の釈迦堂 Z3 式土器がある。黒浜式土器は調査区域のⅠ区とⅤ区から散在して出土する。釈迦堂 Z3 式土器はⅤ区の集積遺構に伴って出土しているほか、これ以外からはⅠ、Ⅴ区から少量ながらも散在的にみられる。

縄文時代前期後半の土器として諸磯式土器があり、諸磯ａ式土器は諸磯ｂ式土器と比べると少量であるものの調査区域Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ区から出土している。結節浮線文系統や貼付文系統の諸磯ｃ式土器は調査区域全体から出土しなかった。縄文時代前期後半の土器の主体は諸磯ｂ式期であり、Ⅱ区を除く調査区域全体で散在し、有孔浅鉢もみられる。

・縄文時代中期初頭（第 82 ～ 94 図）

縄文時代中期初頭の土器として、五領ヶ台式土器が土器集中 1・2 にまとまりがみられるほか、Ⅱ区を除く調査区域全体で散在する。

・縄文時代中期前半（第 94 ～ 103 図）

中期前半の土器として勝坂式土器があるが、ここでは狢沢式期、新道式期、藤内式期、井戸尻式期の 4 期に分けた。報告書に掲載したのは実測・拓本が可能なものというバイアスがかかるものの、井戸尻式期の土器が多くみられた。井戸尻式期の土器はⅤ区から多く出土した傾向があるが、狢沢式期、新道式期、藤内式はⅡ区を除く調査区域全体で散在していた。

・縄文時代中期後半（第 104 ～ 113 図）

中期後半の土器として、曽利式土器を 5 期に分けた。大部分が曽利Ⅱ式期のものである。曽利Ⅲ式土器片は 1 点、曽利Ⅳ式土器片は 3 点のみで、曽利Ⅴ式期の土器片はみられなかったが、曽利Ⅱ式期の土器片はⅡ区を除く調査区域全体で散在していた。また完形の加曽利 E2 式の浅鉢が 1 点、加曽利Ｅ 4 式土器片が 1 点出土している。加曽利Ｅ式の異系統土器は 3 号埋甕にも使われているが少量である。

・縄文時代後期（第 113 図 712）

遺構外ではあるが後期初頭の土器として、称名寺式期の土器片が 1 点のみ出土している。

・その他（第 113 図）

古墳時代の須恵器小片がⅠ区の暗渠から 1 点みられたほか、3 号住居跡の上層から明治期の染付の磁器小片が 1 点出土している。

（10）土偶（第 113 ～ 116 図）

本遺跡の土偶は総計 18 点である。形態的分類すると勝坂式期、井戸尻式期、曽利式期の 3 つの時期に分類できそうであるが、土器に伴って出土していないため、帰属する時代は縄文時代中期としたい。出土部位は頭部（頭部から胴部を含む）2 点、胴部（胸部から腕部、腹部・臀部～脚部を含む）12 点、腕部 1 点、脚部 3 点である。

土偶は廃棄時に意図的に破砕する行為を含めた祭祀の道具として考えられており、遺跡内で接合する例もある。本遺跡で接合するのはⅠ区ＡＧ-3 グリッド一括遺物の第 114 図 721 のみである。祭祀色の強い土偶の特徴としては土偶に赤彩を施すことや、または笛吹市釈迦堂遺跡、北杜市酒呑場遺跡、山梨市高畑遺跡のように土偶の腹部などの印刻文に白色粘土を付着させる例もあるが本遺跡からはみられなかった。

土偶の製作技法としては縄文時代中期前半では分割塊製作法が多い傾向があり、その際に粘土塊どうしを串状の棒でつなぐ芯棒痕（木芯痕）がみられる。本遺跡からは第 113 図 720、第 114 図 721.723.724、第 115 図 734 の合計 5 点から芯棒痕がみられた。

遺構外ではあるが2号竪穴住居跡と1号配石遺構の中間のＡＤ-8グリッドから出土した720は芯棒痕があり、芯棒の炭化物の付着がみられ、また後頭部には紐を通してつり下げられるように貫通孔があけられている。耳栓の表現として右耳には貫通孔があいており、左耳には前方と後方から貫通しない孔が穿たれている。第Ｂ -74 図 727 は胴部と脚部を一体とし、表現が省略されている。脚部は一部欠損しているが立像する。底部に貫通しない孔を持つ。土笛の機能を持つ土偶には貫通した孔を持つ特徴があるが、727 は円錐状の貫通しない孔であるため土笛の機能を持つ土偶とはしない。718 は 1 号配石の石棒の周辺から出土している。

（11）その他土製品

本遺跡から土製品は 33 点出土しており、種別に出土点数を列記する。

動物形土製品－ 1（イノシシ形土笛）
匙状土製品－ 1
土製装飾品－ 1
ミニチュア土器－ 15
土製円盤－ 7
台形土器－ 7
用途不明の土製品－ 1

・動物形土製品（第 116 図 736）

736 は県内では釈迦堂遺跡と高畑遺跡しか出土例のない極めて珍しいイノシシ形土製品である。イノシシと判断する背中の逆立つ毛の表現や、牙や鼻などの頭部の表現が施されていないが、頭部に貫通しない孔をイノシシの鼻の表現とし、四足を持つことと体形からイノシシ形とした。また頭部の貫通しない孔は奥部がやや広がっており、息を吹き込むと低い音が鳴り、土笛の機能を持つと考えられる。イノシシ形土製品の土笛という特徴だけではなく、後肢と臀部が平らに整形されているため、「ヒトやサルのように座る」など従来の動物形土製品と比べ、非常に特異な特徴がある。また腹部にやや膨らみがあり、妊娠を表現していると考えられる。

・用途不明の土製品（第 116 図 737）

737 は用途不明な土製品である。中央に丸みを持った円柱状をなしており、切断面はなく、上下部は少し凹んで整形されている。赤彩やススなども付着していない。孔がないので装飾品の可能性は低く、中央部に丸みがあるので装飾性のない土製耳飾である可能性も低い。中央部の丸みが指と指の間に丁度収まることから、粘土を両手ですり合わせて、いたずらに製作したのだろうか。また 1 号配石から出土しているので、祭祀に関する可能性も考えられる。

・匙状土製品（第 116 図 738）

738 は匙状土製品である。匙部は欠損しているが、柄部に欠損や切断面はなく、これで完成品だと考えられる。所々、面取りしたように平らな面があるがヘラケズリのような胎土の動きはみられない。

・土製装飾品（第 116 図 738）

761 は隅丸二等辺三角形を呈し、短辺に 3 つの貫通孔があることから装飾品と考えられる。貫通孔は一部欠損しているがほぼ完存である。施文や赤彩などは施されておらず、紐を貫通孔に通した使用痕も明瞭にはみられ

ない。

（12）ミニチュア土器（第 117 図）

本遺跡から 15 点のミニチュア土器が出土している。741 は楕円形のバスケット状の浅鉢形を模し、口縁部は突起状の装飾が施されている。742 は口唇部に棒状工具による刻み目が施され、胴部には棒状工具による横方向の刻み目をつけた貼付文が対に配置され、底部は丸底。744 は脚付である。口縁部が欠失しているため、どのような器形であったかは不明。753 は底部のみであるが、底部側面に指頭圧痕と思われる痕跡があり、四隅がやや張り出す方形を意識して製作されていると考えられる。

（13）土製円盤（第 117・118 図）

本遺跡から 7 点の土製円盤が出土している。755 は沈線、759 には縄文があるが、あとの 5 点は無文である。周囲に研磨が施されており、754 と 760 は隅丸四角形で、あとの 5 点は円形である。土錘として使われたと推測できるような紐の使用痕を残す資料は無かった。

（14）台形土器（第 118・119 図）

本遺跡から 7 点の台形土器が出土している。台形土器は土器を製作する際に用いられた台と考える見方もあるが、異論もあり、用途が判然としない性格をもった遺物である。762 が 2 号住居跡、767 は 2 号住居跡の炉の上面から出土しており、7 点のうち 2 点が 2 号住居跡から出土している。764 は 3 号埋甕の遺構上面で出土している。

（15）石器・石製品（第 119 ～ 126 図）

本遺跡から出土し、石器・石製品として図化し、表にあげた資料は 65 点であり、器種別に出土点数と石材を列記し、整理しておく。

① **打製石斧　合計 4 点（第 119 図 769 ～ 772）**
ホルンフェルス 3 点と頁岩 1 点、比較する点数は 4 点と少ないが、打製石斧の石材はホルンフェルス及びそれに類する頁岩など板状に剥離しやすい石材を選択している。

② **打磨製石斧　合計 2 点（第 120 図 773．774）**
緑色岩 2 点と緑色岩のみ使用されている。

③ **石匙　合計 8 点（第 125 図 827 ～ 126 図 834）**
黒曜石 3 点、チャート 1 点、泥岩安山岩 1 点、頁岩 1 点、ホルンフェルス 2 点、比較する点数は少ないが、石匙の石材は黒曜石が約 4 割を占め、ホルンフェルス及びそれに類する頁岩など加工・調整がしやすい石材を選択している。

④ **石皿　合計 6 点はすべて安山岩。（第 121 図 780 ～ 785）**

⑤ **台石　合計 1 点。安山岩。（第 122 図 786）**

⑥ **凹み石　合計 1 点。安山岩。（第 120 図 779）**

⑦ **磨り石　合計 4 点。（第 120 図 775 ～ 778）**
安山岩 3 点、花崗岩 1 点。台石、石皿、凹み石、磨り石の使用する上でのセット関係を考慮すると、安山岩以外は磨り石に花崗岩が 1 点用いられているのみであり、この 4 つの器種では安山岩を選択的に用いているように思われる。

⑧ **石鏃　合計 3 7 点（第 123 図 789 ～ 84 図 825）**
黒曜石 2 5 点で 6 8 %、水晶 9 点で 2 4 %（799.802.808.812.813.814.817.820.822）、チャート 2 点で 5 %（807.824）、安山岩 1 点で 3 %（809）であり、黒曜石が全体の約 7 割を占めており、黒曜石が選択的に

用いられている。また水晶は非常に硬質であり、微細な加工・調整が必要な石鏃製作には不向きな石材と思えるが、本遺跡には図化していない水晶片が 4 号竪穴住居跡と 1 号配石周辺に集中的に出土しており、石鏃製作において加工・調整のしやすさだけで石材を選択しているのではなく、水晶を用いる何らかの志向性が働いている可能性がある。

⑨　エンドスクレイパー

合計 1 点。黒曜石。（第 121 図 826）

⑩　石棒　合計 1 点。安山岩。（第 123 図 788）

1 号配石が出土している。安山岩製で赤褐色に変色した箇所があり、被熱を受けた痕跡と思われる。起立した状態ではなく、やや倒れて埋没していた。周辺からは土偶の 718 が出土している。

⑪　立石　合計 1 点。安山岩。（第 123 図 787）

1 号配石から出土している。安山岩製で被熱痕はない。部分的ではあるが磨られている面が上に向いていたこと、配石を挟んで石棒と対になるように配置されていること、他の配石は平らに配置されている中で、やや起立した状態が確認されたことから立石とした。

第14表　上コブケB区遺構観察表

遺構名	調査区	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）。（　）内の数字は復元値。			時　期	主　軸	備　考
				長　軸	短　軸	深　さ			
1号竪穴住居跡	Ⅴ区	AF-5・6・AG-4・5	円形か	(595)	(585)	(55)	縄文中期後半	南北	−
2号竪穴住居跡	Ⅴ区	AC-7・8・AD-7・8	円形か	(600)	(580)	(35)	縄文中期後半	南北	−
3号竪穴住居跡	Ⅴ区	AF-7・8・AG-7・8	円形か	(605)	(593)	(56)	縄文中期後半	−	−
4号竪穴住居跡	Ⅴ区	AE-9・10・AF-9・10	円形か	(600)	(598)	(30)	縄文中期後半	−	−
遺構名	調査区	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）。（　）内の数字は復元値。			時　期	主　軸	備　考
				長　軸	短　軸	深　さ			
1号埋甕	Ⅰ区	AF-3・AG-3	円形か	(72)	(66)	(46)	曽利Ⅰ式期古段階	逆位	人面装飾付土器
2号埋甕	Ⅴ区	AF-6	円形	34	32	12	曽利Ⅱ式	正位	
3号埋甕	Ⅴ区	AF-6	不整円形	58	52	42	加曽利Ｅ式の異系統	逆位	底部穿孔
4号埋甕	Ⅴ区	AB-11	円形	48	42	7	曽利Ⅰ～Ⅱ式初頭	正位	試掘14トレンチ内
5号埋甕	Ⅴ区	AB-11	円形	47	39	17	曽利Ⅱ式	正位	試掘14トレンチ内
6号埋甕	Ⅴ区	AE-7	円形	57	54	38	曽利Ⅱ式	正位	底部は逆位で入れ子状
7号埋甕	Ⅴ区	AD-8	円形	(49)	47	40	曽利Ⅱ式	正位	2号竪穴住居跡内 底部穿孔
8号埋甕	Ⅴ区	AD-8	円形	59	56	31	曽利Ⅱ式	正位	−
9号埋甕	Ⅴ区	AD-8	円形	62	61	54	曽利Ⅰ式期新段階からⅡ式	逆位	フタの浅鉢形土器は別個体で曽利Ⅱ
10号埋甕	Ⅴ区	AC-9	楕円形	102	89	57	曽利Ⅱ式	逆位	底部穿孔 口縁部は打ち欠いている
11号埋甕	Ⅴ区	AF-8	隅丸方形	79	69	32	藤内式	正位か	配石遺構範囲内 浅鉢
12号埋甕	Ⅴ区	AD-6	楕円形か	87	(76)	34	井戸尻式	逆位	ヘビの頭
13号埋甕	Ⅴ区	AG-7	不整円形	(58)	53	32	五領ヶ台Ⅱ式	正位	−
遺構名	調査区	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）。（　）内の数字は復元値。			時　期	主　軸	備　考
				長　軸	短　軸	深　さ			
1号配石	Ⅴ区	AE．AF 8.9	不整形	(800)	(620)	−	藤内式から曽利Ⅱ式期	南北	−
1号集石	Ⅴ区	AF．AG .7	円形	385	258	58	釈迦堂Z3式期	南北	−
1号土坑	Ⅲ区	AH.AI9.10	楕円形	128	86	15	諸磯ａ式期	東西	−
2号土坑	Ⅲ区	AH10	不整形	108	100	20	五領ヶ台式期．曽利Ⅱ式期	東西	3号土坑 .1号ピット付近
3号土坑	Ⅲ区	AH10	円形	46	44	23	五領ヶ台式期．新道式期	東西	1号ピットと重複 .2号土坑付近
4号土坑	Ⅲ区	AH9	楕円形	151	120	46	時期不明	東西	−
5号土坑	Ⅲ区	AH10	不整形	81	68	21	―	東西	−
6号土坑	Ⅲ区	AH11	楕円形	116	92	30	―	南北	−
7号土坑	Ⅲ区	AG.AH12	不整形	136	131	11	時期不明	南北	8号土坑 .2.3号ピット付近
8号土坑	Ⅲ区	AG12	円形	93	84	30	諸磯ａ式期	南北	7号土坑 .2.3号ピット付近
9号土坑	Ⅲ区	AH13	楕円形	99	71	21	時期不明	東西	4号ピット付近
10号土坑	Ⅲ区	AI12	不整円形	101	87	25	時期不明	東西	9号ピット付近

11 号土坑	Ⅴ区	AF5	円形	74	68	71	五領ヶ台式期．狢沢式期．藤内式期	東西	1号竪穴住居跡内
12 号土坑	Ⅴ区	AF5	楕円形	75	48	21	井戸尻式期	東西	1号竪穴住居跡内
13 号土坑	Ⅴ区	AG5	不整楕円形	132	80	59	諸磯式期．狢沢式期．藤内式期	東西	1号竪穴住居跡内
14 号土坑	Ⅴ区	AF5.6	不整形	177	127	52	諸磯式期．狢沢式期．井戸尻式期	東西	1号竪穴住居跡内
15 号土坑	Ⅴ区	AF5.6	楕円形	104	81	76	―	東西	1号竪穴住居跡内
16 号土坑	Ⅴ区	AE7	楕円形	90	50	14	諸磯ｂ式期	東西	配石遺構内
17 号土坑	Ⅴ区	AD.AE9	円形	73	57	30	五領ヶ台式期	東西	4 号竪穴住居跡 .18 土 .16P
18 号土坑	Ⅴ区	AD9	楕円形	61	25	16	時期不明	南北	4 号竪穴住居跡 .17 土 .16P
19 号土坑	Ⅴ区	AD9	不整形	76	51	19	諸磯式期	東西	－
20 号土坑	Ⅴ区	AF8	円形	121	119	32	五領ヶ台式期	東西	3 号竪穴住居跡、配石遺構付近
21 号土坑	Ⅴ区	AE10	不整形	82	71	22	―	東西	4 号竪穴住居跡内
22 号土坑	Ⅴ区	AB9.10	不整円形	134	106	11	時期不明	東西	34.35 号ピット付近
23 号土坑	Ⅴ区	AE10	円形	53	52	18	諸磯式期、五領ヶ台式期	南北	4 号竪穴住居跡内
遺構名	調査区	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）。（　）内の数字は復元値。			時　期	主　軸	備　考
				長　軸	短　軸	深　さ			
1 号 Pit	Ⅲ区	AH10	不整形	46	29	24	五領ヶ台式期	東西	3 号土坑と重複
2 号 Pit	Ⅲ区	AH12	円形	38	31	37	―	東西	7 号土坑付近
3 号 Pit	Ⅲ区	AG12	楕円形	52	36	6	―	南北	7.8 号土坑付近
4 号 Pit	Ⅲ区	AH13	円形	24	22	10	―	東西	9 号土坑付近
5 号 Pit	Ⅲ区	AI13	円形	29	28	19	―	東西	6 号ピットと重複
6 号 Pit	Ⅲ区	AI13	円形	29	28	17	―	東西	5 号ピットと重複
7 号 Pit	Ⅲ区	AI13	不整円形	29	26	17	―	東西	―
8 号 Pit	Ⅲ区	AH13	円形	24	22	10	―	南北	―
9 号 Pit	Ⅴ区	AF5	円形	32	28	15	―	南北	1 号住居内
10 号 Pit	Ⅴ区	AF5	円形	29	28	16	―	東西	1 号住居内
11 号 Pit	Ⅴ区	AF5	円形	36	30	23	―	東西	1 号住居内
12 号 Pit	Ⅴ区	AE.AF5	円形	45	42	14	―	東西	1 号住居付近
13 号 Pit	Ⅴ区	AE5	円形	54	49	19	―	東西	1 号住居付近
14 号 Pit	Ⅴ区	AF5	円形	31	29	12	―	南北	1 号住居内
15 号 Pit	Ⅴ区	AF6	不整円形	36	34	23	―	東西	1 号住居内
16 号 Pit	Ⅴ区	AF6	円形	37	31	13	―	東西	―
17 号 Pit	Ⅴ区	AC8	円形	20	17	13	五領ヶ台式期．藤内式期	東西	2 号住居内
18 号 Pit	Ⅴ区	AF5	不整楕円形	56	39	6	―	南北	1 号住居内
19 号 Pit	Ⅴ区	AF5	不整楕円形	86	64	17	―	東西	1 号住居内
20 号 Pit	Ⅴ区	AF5	不整円形	72	62	14	―	南北	1 号住居内
21 号 Pit	Ⅴ区	AG5	不整楕円形	47	32	7	―	東西	―
22 号 Pit	Ⅴ区	AG6	楕円形	48	32	7	―	東西	1 号住居付近
23 号 Pit	Ⅴ区	AF5	不整形	93	75	28	―	東西	1 号住居内 .24 号ピットと重複
24 号 Pit	Ⅴ区	AF5	円形	(33)	32	16	―	東西	1 号住居内 .23 号ピットと重複

25 号 Pit	Ⅴ区	AE.AF6	楕円形	52	40	12	―	南北	26 号ピットと重複
26 号 Pit	Ⅴ区	AE.AF6	円形	56	(52)	14	―	南北	25 号ピットと重複
27 号 Pit	Ⅴ区	AC8.9	円形	74	73	22	―	東西	―
28 号 Pit	Ⅴ区	AC8	円形	53	53	8	―	東西	2 号住居付近 .29 号ピットと重複
29 号 Pit	Ⅴ区	AC8	楕円形	71	(54)	24	―	東西	2 号住居付近 .28 号ピットと重複
30 号 Pit	Ⅴ区	AC8	円形	59	55	20	―	南北	―
31 号 Pit	Ⅴ区	AC9	円形	36	36	21	―	南北	―
32 号 Pit	Ⅴ区	AC9	隅丸方形	56	53	19	―	東西	―
33 号 Pit	Ⅴ区	AC9	不整楕円形	79	54	10	釈迦堂 Z3 式期	南北	―
34 号 Pit	Ⅴ区	AB.AC9	不整円形	31	31	14	―	南北	―
35 号 Pit	Ⅴ区	AB9	楕円形	76	61	6	―	南北	―
36 号 Pit	Ⅴ区	AF-6	不整円形	58	52	42	加曽利 E 式の異系統	東西	―
37 号 Pit	Ⅴ区	AD9	円形	93	82	26	―	南北	―
38 号 Pit	Ⅴ区	AF6	円形	31	25	12	―	東西	―
遺構名	調査区	位置（グリッド）	平面形	規模 (cm)。（　）内の数字は復元値。			時　期	主　軸	備　考
				長 軸	短 軸	深 さ			
土器集中 1	Ⅰ区	AG-3	不整楕円	(310)	(180)	(32)	黒浜～曽利Ⅱ	―	―
土器集中 2	Ⅰ区	AK-6、AL-6・7	不整楕円	(790)	(430)	(26)	五領ヶ台式、井戸尻式	―	―

第15表　上コブケ遺跡B区遺物観察表

図版番号	遺物番号	時　期	器　種	口径・底径・器高 (cm) ( ): 復元値			色　調	胎　土	部位・形態	整形・施文技法	残存率（%）	注　記	備　考
66	1	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	4.3	褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2334	1 号竪穴住居跡
66	2	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	4.5	にぶい褐色	白・赤・黒色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2577	1 号竪穴住居跡
66	3	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	4.2	褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	2319	1 号竪穴住居跡
66	4	曽利Ⅰ式	浅鉢	(24.0)	(8.0)	11.6	明黄褐色	雲母、白色粒子	口縁部～底部	無文	破片	2337・2340	1 号竪穴住居跡
66	5	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.2	明褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2351	1 号竪穴住居跡
66	6	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.7	褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2302	1 号竪穴住居跡
66	7	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.1	褐色	白色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	2357	1 号竪穴住居跡
66	8	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.5	橙色	白・赤色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	2320	1 号竪穴住居跡
66	9	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.0	暗赤褐色	白・黒色粒子	口縁部	貼付文 半裁竹管内面による条線	破片	2346	1 号竪穴住居跡
66	10	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	14.0	赤褐色	白・赤色粒子	胴部～底部	無文	破片	2353	1 号竪穴住居跡
66	11	曽利Ⅲ式	深鉢	–	–	6.9	褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2533	1 号竪穴住居跡
66	12	曽利Ⅱ式	深鉢	(48.0)	–	9.6	明赤褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	2841	2 号竪穴住居跡
66	13	曽利Ⅱ式	深鉢	(55.8)	–	9.0	明赤褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	3509	2 号竪穴住居跡
66	14	曽利Ⅱ式	深鉢	15.8	–	16.9	明黄褐色	白・黒色粒子	口縁部～胴部	連弧文	70	3302・3137・3304・AD8 一括	2 号竪穴住居跡
67	15	曽利Ⅱ式	深鉢	(31.0)	–	16.3	褐色	白色粒子	口縁～胴部	連弧文	破片	2732	2 号竪穴住居跡
67	16	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.0	褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	3130	2 号竪穴住居跡
67	17	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.5	橙色	白色粒子、雲母	口縁部～胴部	沈線	破片	2934	2 号竪穴住居跡

67	18	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	3134	2号竪穴住居跡
67	19	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.6	赤褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	3348	2号竪穴住居跡
67	20	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.8	褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	3120	2号竪穴住居跡
67	21	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.9	にぶい黄褐色	白色粒子	口縁部	縄文 沈線	破片	2642	2号竪穴住居跡
67	22	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.2	褐色	白色粒子、長石	口縁部	刺突文	破片	2639	2号竪穴住居跡
67	23	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.4	褐色	雲母、白色粒子	口縁部	縄文	破片	2695	2号竪穴住居跡
67	24	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.2	赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	口唇部に棒状工具による沈線	破片	2765	2号竪穴住居跡
67	25	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.6	黄褐色	白色粒子	口縁部	連弧文　押引文	破片	3337	2号竪穴住居跡
67	26	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.2	褐色	雲母、白色粒子	口縁部	刺突文	破片	3315	2号竪穴住居跡
67	27	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	2.8	黄褐色	長石、金雲母	口縁部	沈線 刺突文	破片	2925	2号竪穴住居跡
67	28	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.3	褐色	赤・白色粒子	口縁部	沈線 縄文 貼付文	破片	2791	2号竪穴住居跡
67	29	曽利Ⅱ式	深鉢	18.4	–	8.8	赤褐色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文	破片	3253	2号竪穴住居跡
67	30	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.5	明赤褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	2782	2号竪穴住居跡
68	31	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.3	にぶい橙色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による押引文	破片	2700	2号竪穴住居跡
68	32	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.4	褐色	雲母、白色粒子	胴部	粘土紐を波状に貼付	破片	3301	2号竪穴住居跡
68	33	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.1	明赤褐色	雲母、白色粒子	胴部	粘土紐を波状に貼付　縄文	破片	2686	2号竪穴住居跡
68	34	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.3	明褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線	破片	3129	2号竪穴住居跡
68	35	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.2	黄褐色	金雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線　粘土紐貼付	破片	2716	2号竪穴住居跡
68	36	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.7	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐貼付	破片	2762	2号竪穴住居跡
68	37	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.8	明褐色	金雲母	胴部	沈線 粘土紐貼付 箆状工具による押引	破片	3296	2号竪穴住居跡
68	38	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.3	黄橙色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	3124	2号竪穴住居跡
68	39	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.2	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内面による隆帯と粘土紐貼付	破片	2637	2号竪穴住居跡
68	40	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	11.0	赤褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線　粘土紐貼付	破片	2930	2号竪穴住居跡
68	41	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.1	褐色	雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線　粘土貼付後、半裁竹管内面による隆帯	破片	3246	2号竪穴住居跡
68	42	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.2	明褐色	白・黒色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	2644	2号竪穴住居跡
68	43	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	14.5	黄褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯　粘土紐貼付	破片	3331	2号竪穴住居跡
68	44	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.4	明褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	2740	2号竪穴住居跡
68	45	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.7	黄橙色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	2624	2号竪穴住居跡
68	46	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.0	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	3279	2号竪穴住居跡
68	47	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.2	褐色	雲母、白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	2691	2号竪穴住居跡
68	48	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.4	明褐色	雲母	胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐貼付	破片	2713	2号竪穴住居跡
68	49	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	13.7	赤褐色	大小の白色粒子	胴部	棒状工具による隆帯文	破片	2711	2号竪穴住居跡
68	50	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.3	明褐色	白色粒子	胴部	棒状工具による隆帯文 粘土紐を貼付	破片	2659	2号竪穴住居跡
68	51	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.3	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線　粘土貼付後、半裁竹管内面による隆帯	破片	2623	2号竪穴住居跡
69	52	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	9.3	褐色	雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐を貼付後、棒状工具による刻み	破片	2942	3号竪穴住居跡
69	53	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.2	褐色	白色粒子	口縁部	半裁竹管内面による隆帯 棒状工具による押引沈線	破片	2372	3号竪穴住居跡
69	54	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.2	褐色	金雲母	口縁部	半裁竹管内面による条線 粘土貼付	破片	3 炉一括	3号竪穴住居跡
69	55	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.0	明褐色	白色粒子	口縁部	粘土紐貼付	破片	3370	3号竪穴住居跡
69	56	曽利Ⅱ式	深鉢	(48.0)	–	9.6	明褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	2908・2909	3号竪穴住居跡
69	57	曽利Ⅱ式	深鉢	–	(6.0)	12.1	にぶい黄橙色	白色粒子	胴部～底部	縄文 沈線	破片	3117	3号竪穴住居跡
69	58	曽利Ⅱ式	深鉢	–	8.0	2.2	赤褐色	金雲母	底部	外面に縄文 底に木葉痕	破片	3493	3号竪穴住居跡
69	59	井戸尻式	深鉢	–	–	3.2	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	縄文	破片	4 炉一括	4号竪穴住居跡

69	60	井戸尻式	深鉢	–	–	5.6	明赤褐色	白色粒子	胴部	押捺隆帯	破片	3004	4 号竪穴住居跡
69	61	井戸尻式	深鉢	–	–	7.9	明赤褐色	白色粒子	胴部	押捺隆帯 篦状工具による押引 内面に磨き	破片	3003	4 号竪穴住居跡
69	62	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.8	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	無文	破片	3260	4 号竪穴住居跡
69	63	曽利Ⅰ式	深鉢	–	(10.0)	2.6	明赤褐色	白色粒子	底部	無文	破片	2874	4 号竪穴住居跡
69	64	曽利Ⅰ or Ⅱ式	深鉢	–	–	4.9	明赤褐色	白・黒色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線	破片	2874	4 号竪穴住居跡
69	65	曽利Ⅰ式古段階	深鉢	(46.0)	(14.5)	(67.0)	明赤褐色	白色粒子、長石、石英、黒雲母	口縁部～胴部	刻みの隆線 粘土紐貼付 粘土貼付 半裁竹管内面による条線	40	1410・1411	1 号埋甕 人面装飾付土器
70	66	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	(5.2)	にぶい黄橙色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と隆線	破片	2 埋	2 号埋甕
70	67	中期	深鉢	(22.5)	(10.0)	(27.4)	にぶい褐色	白色粒子	口縁部～底部	地文に縄文 粘土紐貼付し、連弧文を表出 棒状工具による刺突	70	2601	3 号埋甕
70	68	中期	深鉢	–	–	7.4	橙色	白色粒子	胴部	縄文	破片	2535	4 号埋甕
70	69	中期	深鉢	–	–	5.0	橙色	白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	2635	4 号埋甕
70	70	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.9	黄褐色	白色粒子、雲母	胴部	粘土紐貼付	破片	2636	5 号埋甕
70	71	曽利式	深鉢	(36.0)	(40.9)	(11.6)	赤褐色・黄褐色	石英、長石、角閃石、雲母、凝灰石、スコリア、砂粒	口縁部～底部	地文に縄文 沈線で連弧文を表出。棒状工具による刺突	90	6 埋 3396	6 号埋甕 スス付着
71	72	中期	鉢	(34.5)	11.6	30.9	赤褐色	石英、長石、角閃石、雲母、凝灰石	口縁部～底部	撚糸文 粘土紐貼付 底部に焼成後穿孔	90	3102	7 号埋甕 2 号住居跡 スス付着
71	73	曽利Ⅱ式	深鉢	(30.0)	(11.5)	(37.5)	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	縄文 粘土紐貼付 頚部に粘土紐で隆線を貼付し、棒状工具による刻み	40	3104	8 号埋甕
71	74	曽利Ⅱ式	深鉢	–	15.4	(49.8)	赤褐色・黄褐色・灰褐色	石英、長石、雲母、凝灰石、スコリア、チャート	胴部～底部	半裁竹管内面による条線 粘土紐で隆線を貼付し、棒状工具による刻み 底部に焼成前穿孔	85	10 埋 3512	10 号埋甕 スス付着
72	75	曽利式	深鉢	46.8	(55.5)	(55.5)	褐色・赤褐色・暗褐色	石英、長石、角閃石、凝灰石	口縁部～胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐貼付	75	3103	9 号埋甕
72	76	曽利式	浅鉢	(43.0)		(22.2)	橙色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文 半裁竹管内面による隆帯	破片	3103	9 号埋甕 No.75 とは別個体
73	77	藤内式	鉢	40.0	–	(17.5)	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	粘土紐貼付し、篦じ状工具による押引して、三角形の区画内に沈線	30	3471	11 号埋甕
73	78	井戸尻式	深鉢	29.0	–	(12.4)	赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア・砂粒	口縁部	粘土紐に刻み 棒状工具による沈線	70	3504・12 埋一括	12 号埋甕
73	79	井戸尻式	深鉢	–	–	(6.6)	褐色	白色粒子・雲母	口縁部	粘土紐に刻み 半裁竹管内面による条線	破片	3504・12 埋一括	12 号埋甕
73	80	井戸尻式	深鉢	–	–	(9.3)	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	粘土を貼付し、篦状工具による連続刺突	破片	12 埋一括	12 号埋甕
73	81	井戸尻式	深鉢	–	–	(9.2)	にぶい褐色	白色粒子	胴部	粘土紐に刻み 粘土貼付	破片	3504・12 埋一括	12 号埋甕
73	82	五領ヶ台式	深鉢	(32.0)	–	(18.5)	赤褐色	白色粒子・金雲母	口縁部～胴部	地文に縄文 半裁竹管内面による隆帯で弧状を表出 沈線	破片	3485	13 号埋甕
74	83	藤内式	深鉢	–	–	6.0	黒褐色	白色粒子	口縁部	撚糸文 刻み	破片	2857	1 号配石
74	84	藤内式	深鉢	–	–	8.4	赤褐色	白色粒子	胴部	粘土紐に刻み	破片	2854	1 号配石
74	85	井戸尻式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白・赤色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2849	1 号配石
74	86	井戸尻式	深鉢	–	–	7.0	褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	胴部	玉抱き三叉文	破片	3026	1 号配石
74	87	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	縄文 粘土紐	破片	2914	1 号配石
74	88	井戸尻式	深鉢	–	–	8.6	褐色	白色粒子、石英	口縁部	棒状工具による沈線 刻み	破片	3307	1 号配石
74	89	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	褐色	白色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	3024	1 号配石
74	90	井戸尻式	深鉢	–	–	8.5	褐色	白色粒子、雲母	胴部	粘土紐に刻み	破片	3454	1 号配石
74	91	井戸尻式	深鉢	–	–	10.5	にぶい褐色	白・赤色粒子、雲母	胴部	粘土を貼付し、篦状工具による刻み	破片	3147	1 号配石
74	92	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	8.1	にぶい褐色	白色粒子、長石、雲母	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	3406・3407・3411	1 号配石
74	93	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.5	橙色	白・赤色粒子、雲母、長石、石英	胴部	半裁竹管内面による隆線	破片	3404・3412	1 号配石
74	94	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.5	にぶい褐色	白色粒子、長石、石英、雲母	胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐貼付	破片	3407	1 号配石
74	95	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.6	橙色	白色粒子、長石、石英	胴部	半裁竹管内面による条線と隆帯	破片	3405	1 号配石
74	96	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	14.8	褐色	白色粒子	口縁部～胴部	羽状縄文	破片	3523	1 号集石
74	97	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白色粒子	口縁部	正反の合の縄文	破片	1 集一括	1 号集石

74	98	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	5.1	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	正反の合の縄文 内面に指頭圧痕	破片	1 集一括	1 号集石
74	99	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	10.9	にぶい赤褐色	金雲母	口縁部～胴部	正反の合の縄文	破片	3535	1 号集石
75	100	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	10.0	明赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	正反の合の縄文 内面に指ナデ	破片	1 集一括	1 号集石
75	101	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	14.8	褐色	白色粒子	口縁部～胴部	羽状縄文	破片	3523	1 号集石
75	102	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	12.0	明赤褐色	白色粒子、雲母	胴部	正反の合の縄文 内面に指頭圧痕	破片	1 集一括	1 号集石
75	103	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	6.5	明赤褐色	金雲母	胴部	正反の合の縄文	破片	3535	1 号集石
75	104	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	6.3	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	正反の合の縄文 内面に指ナデ	破片	1 集一括	1 号集石
75	105	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	(5.8)	3.7	にぶい褐色	白色粒子	胴部～底部	正反の合の縄文	破片	1 集一括	1 号集石
75	106	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	(6.4)	4.9	にぶい赤褐色	金雲母、白色粒子	底部	底部に木葉痕 正反の合の縄文 内面に指ナデ	破片	1 集一括	1 号集石
75	107	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	7.6	3.9	褐色	金雲母、白色粒子	底部	正反の合の縄文 底部に木葉痕	破片	1 集一括	1 号集石
75	108	諸磯式	深鉢	–	–	7.5	明赤褐色	白色粒子	口縁部	縄文 棒状工具による刻み	破片	1 集一括	1 号集石
75	109	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	2.3	褐色	金雲母	胴部	棒状工具による刻みと沈線	破片	1 集一括	1 号集石
75	110	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	3.0	褐色	金雲母	胴部	縄文	破片	1 集一括	1 号集石
75	111	黒浜式	深鉢	–	–	3.8	黄褐色、褐色	白色粒子	底部	無文	破片	1320	土器集中 1
75	112	諸磯ｂ式	深鉢	(46.0)	–	6.0	褐黒色	白・赤色粒子	口縁部	縄文 棒状工具による沈線と刻み	破片	1303	土器集中 1
75	113	諸磯ｂ式	深鉢	(32.0)	–	5.3	黄褐色	白色砂子	口縁部	縄文 棒状工具による刻み	破片	1386	土器集中 1
75	114	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	明赤褐色	雲母、白色粒子	口縁部	縄文 棒状工具による沈線と刻み 粘土貼付	破片	1091	土器集中 1
75	115	五領ヶ台式	深鉢	(28.0)	–	9.6	明赤褐色	白色砂粒、雲母	口縁部～胴部	半裁竹管内面による条線 粘土貼付 棒状工具による刻み	破片	1073	土器集中 1
75	116	五領ヶ台式	深鉢	(16.0)	–	7.8	明赤褐色	雲母、白色粒子	口縁部	縄文 沈線	破片	1101	土器集中 1
75	117	五領ヶ台式	深鉢	(19.6)	–	8.5	赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	縄文 粘土貼付 棒状工具による沈線と刻み	破片	1072	土器集中 1
75	118	五領ヶ台式	深鉢	(26.0)	–	7.5	褐色、明赤褐色	金雲母	口縁部	縄文 沈線	破片	935・1183	土器集中 1
75	119	五領ヶ台式	深鉢	(15.4)	–	12.9	赤褐色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文 粘土貼付 棒状工具による沈線と刻み	破片	1123・1129・1131・1151	土器集中 1
75	120	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.0	褐色	白色砂粒、雲母	口縁部～胴部	縄文 沈線	破片	1302	土器集中 1
75	121	五領ヶ台式	深鉢	(16.0)	–	7.2	橙色	白色粒子	口縁部	粘土貼付	破片	1172・1181	土器集中 1
76	122	五領ヶ台式	深鉢	–	–	17.9	褐色	雲母、白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	1231・1232・1245・1255・1315	土器集中 1
76	123	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	オリーブ褐色	白色粒子、雲母	胴部	縄文 沈線	破片	1301	土器集中 1
76	124	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.5	にぶい赤褐色	雲母、白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	1121・1122	土器集中 1
76	125	五領ヶ台式	深鉢	–	15.8	10.6	明褐色	白色粒子、雲母	胴部～底部	縄文 沈線底面内側に指頭圧痕、胴部内側に横調整	破片	1274・1275・1279・1281・1285・1287	土器集中 1
76	126	五領ヶ台式	深鉢	–	9.4	25.5)	褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	胴部～底部	縄文 棒状工具による沈線 連弧文	50	1133・1199	土器集中 1
76	127	井戸尻式	深鉢	–	–	8.3	明褐色	白色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	1088	土器集中 1
76	128	井戸尻式	深鉢	–	–	8.2	明褐色	白色粒子	胴部	押捺隆帯 棒状工具による沈線	破片	1066	土器集中 1
76	129	井戸尻式	深鉢	–	5.0	13.4	にぶい赤褐色	白色粒子	胴部～底部	縄文	破片	868・982	土器集中 1
76	130	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	8.0	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	沈線 粘土紐	破片	1089	土器集中 1
76	131	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.5	赤褐色	白色粒子	胴部	粘土紐 隆帯	破片	1100	土器集中 1
76	132	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	褐色	金雲母	口縁部	縄文 棒状工具による沈線と刻み	破片	1144	土器集中 2
76	133	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	棒状工具による刻みと刺突	破片	694	土器集中 2
76	134	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.0	暗褐色	金雲母	胴部	沈線	破片	1188	土器集中 2
76	135	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.5	明赤褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1195	土器集中 2
76	136	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.8	赤褐色	金雲母	胴部	粘土紐 刻み	破片	1152	土器集中 2
76	137	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	暗赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	沈線	破片	1042	土器集中 2
77	138	五領ヶ台式	深鉢	–	14.0	21.2	赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部～底部	縄文 沈線	破片	1142・1195	土器集中 2

77	139	五領ヶ台式	深鉢	–	15.0	5.8	赤褐色	金雲母、白色粒子	底部	無文	破片	904	土器集中 2
77	140	新道式	深鉢	–	–	5.0	赤褐色	雲母	胴部	三角押引	破片	703	土器集中 2
77	141	井戸尻式	深鉢	–	–	3.8	明褐色	金雲母	胴部	粘土紐に刻み	破片	732	土器集中 2
77	142	井戸尻式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	金雲母	胴部	沈線	破片	741	土器集中 2
77	143	井戸尻式	深鉢	–	–	4.9	暗赤褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	744	土器集中 2
77	144	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.2	明赤褐色	金雲母	胴部	半裁竹管内面による条線 粘土紐貼付	破片	679	土器集中 2
77	145	諸磯ａ式	深鉢	–	–	4.1	明赤褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1846	1 号土坑
77	146	五領ヶ台式	深鉢	(43.0)	–	25.8)	明赤褐色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文 粘土紐に刻み	破片	1665・1855・1865	1 号土坑
77	147	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.4	にぶい赤褐色	金雲母	胴部	半裁竹管内面による条線	破片	1973	2 号土坑
77	148	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.6	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	沈線	破片	1994	2 号土坑
77	149	五領ヶ台式	深鉢	–	–	2.6	にぶい赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	刻み	破片	3 土一括	3 号土坑
77	150	新道式	深鉢	–	–	4.8	灰黄褐色	白・黒・赤色粒子、雲母	胴部	爪形文 縄文	破片	3 土一括	3 号土坑
77	151	不明	深鉢	–	–	4.3	明赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	無文	破片	1992	4 号土坑
77	152	不明	深鉢	–	–	4.9	橙色	金雲母、白色粒子	胴部	縄文	破片	7 土一括	7 号土坑
77	153	諸磯ａ式	深鉢	–	–	2.0	にぶい赤褐色	金雲母	胴部	縄文	破片	8 土一括	8 号土坑
77	154	不明	深鉢	–	–	2.5	明赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	縄文	破片	9 土一括	9 号土坑
77	155	不明	深鉢	(18.0)	–	4.7	橙色	金雲母、白色粒子	口縁部	縄文	破片	1997	10 号土坑
77	156	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.1	赤褐色	白・黒色粒子	口縁部	隆線	破片	11 土一括	11 号土坑
77	157	五領ヶ台式	深鉢	–	–	2.7	褐色	白・赤色粒子、石英	胴部	沈線	破片	11 土一括	11 号土坑
77	158	狢沢式	深鉢	–	–	2.7	赤褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部	角押文	破片	11 土一括	11 号土坑
77	159	狢沢式	深鉢	–	–	4.7	オリーブ黒色	白色粒子、長石、雲母	口縁部	爪形文	破片	11 土一括	11 号土坑
77	160	藤内式	深鉢	–	–	2.2	褐色	白・黒色粒子	胴部	沈線 押引	破片	11 土一括	11 号土坑
77	161	井戸尻式	深鉢	–	–	3.3	にぶい赤褐色	白色粒子	胴部	箆状工具による押引	破片	12 土一括	12 号土坑
77	162	諸磯式	有孔土器	–	–	2.5	明赤褐色	白色粒子	口縁部	有孔	破片	13 土一括	13 号土坑 有孔
77	163	狢沢式	深鉢	–	–	3.1	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、雲母、石英	胴部	角押文	破片	13 土一括	13 号土坑
77	164	狢沢式	深鉢	–	–	5.1	にぶい赤褐色	白色粒子、長石、雲母	胴部	角押文 沈線	破片	13 土一括	13 号土坑
77	165	狢沢式	深鉢	–	–	2.9	褐色	白・赤色粒子、長石	胴部	角押文	破片	13 土一括	13 号土坑
77	166	藤内式	深鉢	–	–	2.2	褐色	白・赤色粒子、長石	胴部	沈線	破片	13 土一括	13 号土坑
77	167	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	4.9	明赤褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部	縄文	破片	14 土一括	14 号土坑
77	168	狢沢式	深鉢	–	–	2.9	暗褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部	角押文	破片	14 土一括	14 号土坑
78	169	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	褐色	白・赤色粒子、長石、石英	口縁部	刻み 沈線	破片	14 土一括	14 号土坑
78	170	井戸尻式	深鉢	–	–	5.2	褐色	白・赤色粒子、長石	口縁部	無文	破片	14 土一括	14 号土坑
78	171	井戸尻式	深鉢	–	–	5.2	褐色	白・赤色粒子・石英	胴部	沈線	破片	14 土一括	14 号土坑
78	172	井戸尻式	深鉢	–	–	3.3	赤褐色	白・黒色粒子	胴部	縄文	破片	14 土一括	14 号土坑
78	173	井戸尻式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白色粒子、石英、雲母	底部	無文	破片	14 土一括	14 号土坑
78	174	諸磯ｂ式	浅鉢	(18.0)	–	4.0	橙色	白色粒子	口縁部	無文	破片	16 土一括	16 号土坑
78	175	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	赤褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	17 土一括	17 号土坑
78	176	五領ヶ台式	深鉢	–	–	2.5	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	無文	破片	17 土一括	17 号土坑
78	177	五領ヶ台式	深鉢	–	12.0	2.3	明赤褐色	白色粒子	底部	無文	破片	17 土一括	17 号土坑
78	178	不明	深鉢	–	–	4.4	明赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	無文	破片	18 土一括	18 号土坑
78	179	諸磯式	深鉢	–	–	7.9	褐色	白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	19 土一括	19 号土坑
78	180	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.7	明赤褐色	金雲母	口縁部	刻み 沈線	破片	20 土一括	20 号土坑
78	181	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	明赤褐色	金雲母	胴部	刻み 沈線	破片	20 土一括	20 号土坑
78	182	不明	深鉢	–	–	3.2	明赤褐色	金雲母	口縁部	無文	破片	22 土一括	22 号土坑

78	183	諸磯式	有孔土器	(16.0)	–	1.0	にぶい赤褐色	金雲母	口縁部	有孔	破片	23 土一括	23 号土坑 有孔
78	184	諸磯式	深鉢	–	–	5.0	暗赤褐色	金雲母	胴部	無文	破片	3432	23 号土坑
78	185	諸磯式	深鉢	–	–	8.0	明赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	無文	破片	3462	23 号土坑
78	186	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.8	明赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	押引	破片	23 土一括	23 号土坑
78	187	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	赤褐色	金雲母、白色粒子	胴部	縄文	破片	23 土一括	23 号土坑
78	188	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.1	にぶい褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線と沈線	破片	1996	Pit1
78	189	不明	深鉢	–	–	3.7	にぶい赤褐色	白色粒子	胴部	無文	破片	12Pit 一括	Pit2
78	190	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.5	にぶい赤褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内面による条線	破片	2Pit 一括	Pit17
78	191	藤内式	深鉢	–	–	2.3	黒褐色	白色粒子	胴部	押引	破片	17Pit 一括	Pit17
78	192	不明	深鉢	–	–	2.9	にぶい褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	21Pit 一括	Pit21
78	193	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	7.4	15.3	明赤褐色	白色砂粒	胴部～底部	外面に縄文 内面一面に指頭圧痕	40	2815	Pit33
78	194	早期	深鉢	–	–	13.6	明褐色	白色粒子	胴部	条痕文、内面 – 条痕	破片	2880・2950	
78	195	黒浜式	深鉢	–	–	7.7	橙色	白色粒子・繊維	胴部	条痕文	破片	2575	繊維土器
78	196	黒浜式	深鉢	–	–	11.0	黒褐色	白色粒子・繊維	胴部	条痕文	破片	2575	繊維土器
78	197	黒浜式	深鉢	–	–	0.8	灰黄褐色	白色粒子・繊維	底部	条痕文	破片	3115	繊維土器
79	198	黒浜式	深鉢	–	(15.0)	6.4	明褐色	白色粒子・繊維	胴部～底部	外面に縄文で正反の合	破片	3255	繊維土器
79	199	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	6.4	褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	外面に縄文 内面にわずかに指頭痕	破片	2014	
79	200	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	8.5	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	縄文	破片	3401	
79	201	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	(7.3)	6.3	明褐色	金雲母・白色粒子	胴部～底部	外面に縄文で正反の合 内面にわずかに指頭痕	破片	962	
79	202	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	8.0	9.7	褐色	金雲母・白色粒子	胴部～底部	外面に縄文で正反の合　内面に指頭痕　底部に木葉痕	破片	2836	木葉痕
79	203	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	4.4	暗赤褐色	大小の白色粒子	胴部～底部	縄文	破片	2008	
79	204	釈迦堂 Z3 式	深鉢	–	–	6.0	褐色	大小の白色粒子・雲母	胴部～底部	無文	破片	2990	
79	205	諸磯ａ式	深鉢	–	–	4.2	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	竹管先端の押圧による円形刺突文	破片	1272	
79	206	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	3.5	明赤褐色	白色粒子	口縁部	平行沈線	破片	1772	
79	207	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	3.3	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	浮線文の上に斜めの刻み	破片	1870	スス付着
79	208	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	4.6	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	平行沈線 浮線文の上に斜めの刻み	破片	1 暗 –1350	1 号暗渠
79	209	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.0	橙色	白・赤色粒子	胴部	沈線	破片	1743	
79	210	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.7	明赤褐色	金雲母	胴部	縄文 浮線文の上に斜めの刻み	破片	1407	
79	211	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白・黒色粒子	胴部	浮線文	破片	3458	
79	212	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.7	黒褐色	白色粒子・雲母	胴部	浮線文	破片	1929	
79	213	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	7.6	橙色	白色粒子	胴部	縄文 浮線文の上に斜めの刻み	破片	1150	
79	214	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白色粒子	胴部	浮線文の上に刻み	破片	1942	
79	215	諸磯ｂ式	小型鉢	–	–	4.0	明褐色	白・赤色粒子	胴部	浮線文の上に刻み	破片	1734	
79	216	諸磯ｂ式	深鉢	(29.0)	–	10.7	にぶい黄褐色	白色粒子	口縁部～胴部	沈線	破片	1448	
79	217	諸磯ｂ式	鉢	–	–	4.0	明褐色	白色粒子	口縁部	縄文 平行沈線	破片	2789	
79	218	諸磯ｂ式	深鉢	(22.0)	–	23.1	暗褐色	白・赤色粒子	口縁部～胴部	縄文 平行沈線 貼付文	破片	2632	
80	219	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	8.6	にぶい黄褐色	白色粒子、金雲母	口縁部～胴部	沈線	破片	1400	
80	220	諸磯ｂ式	鉢	–	–	2.7	明褐色	白・赤色粒子	口縁部	沈線	破片	1735	
80	221	諸磯ｂ式	深鉢	(32.0)	–	6.7	暗褐色	白・黒色粒子	口縁部	沈線	破片	1214	
80	222	諸磯ｂ式	鉢	–	–	5.0	暗褐色	白色粒子	口縁部	縄文 沈線　刻み	破片	1156	
80	223	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	3.3	にぶい褐色	白色粒子、雲母	口縁部	縄文 沈線	破片	1797	
80	224	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	4.7	明赤褐色	白色粒子	口縁部	縄文 沈線	破片	3439	
80	225	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.0	明褐色	白・赤色粒子	胴部	平行沈線 浮線文	破片	1507	
80	226	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.3	黒褐色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	1834	

80	227	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	7.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	3474	
80	228	諸磯ｂ式	鉢	–	–	6.4	明褐色	白・赤色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	993	
80	229	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	10.0	橙色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	1729	
80	230	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.7	褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1451	
80	231	諸磯ｂ式	鉢	–	–	5.5	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1778	
80	232	諸磯ｂ式	鉢	–	–	3.5	暗褐色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	1762	
80	233	諸磯ｂ式	鉢	–	–	3.4	明褐色	白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	1762	
80	234	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.7	褐色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1483	
80	235	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.6	にぶい褐色	白色粒子、金雲母	胴部	平行沈線	破片	2876	
80	236	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.3	にぶい褐色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	1784	
80	237	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	8.4	黒褐色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線	破片	1455	
80	238	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	6.8	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	平行沈線	破片	1492	
80	239	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	10.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	1725	
80	240	諸磯ｂ式	浅鉢	–	–	7.6	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	平行沈線	破片	2005	
80	241	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	7.9	橙色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	2535	
80	242	諸磯ｂ式	深鉢	–	(7.8)	5.1	にぶい褐色	大小の白色粒子	胴部～底部	平行沈線	破片	1674	
80	243	諸磯ｂ式	深鉢	(38.0)	–	7.3	明褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	2590	
80	244	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	2.9	明赤褐色	白色粒子	口縁部	縄文	破片	3464	
81	245	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	5.2	明褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	3484	
81	246	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	8.4	褐色	白・黒色粒子	胴部	縄文	破片	1460	
81	247	諸磯ｂ式	深鉢	–	–	4.1	にぶい橙色	白色粒子、金雲母	胴部～底部	無文	破片	3071	
81	248	諸磯ｂ式	ﾐﾆﾁｭｱ土器	–	5.0	1.0	明褐色	白色粒子、金雲母	底部	手づくね　無文	破片	3485	ミニチュア土器
81	249	諸磯ｂ式	深鉢	–	10.0	7.4	明赤褐色	白色粒子	胴部～底部	無文	破片	1928	
81	250	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	3.0	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	無文 有孔	破片	1515	有孔 スス付着
81	251	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	2.3	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	無文 有孔	破片	1482・1485	有孔
81	252	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	(26.0)	–	4.7	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	外面と内面の器壁に横方向の磨き　有孔	破片	1262	有孔
81	253	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	2.7	明褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	無文 有孔	破片	3 住 –3121	3 号竪穴住居有孔
81	254	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	2.3	橙色	白色粒子	口縁部	無文 有孔	破片	4 住 –2831	4 号竪穴住居跡 有孔
81	255	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	2.9	暗褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	沈線 有孔	破片	1799	有孔
81	256	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	–	–	3.7	明褐色	白色粒子	口縁部	沈線 有孔	破片	1022	有孔
81	257	諸磯ｂ式	有孔浅鉢	(24.0)	–	7.7	明褐色	白色粒子	口縁部～胴部	無文 有孔	破片	2617	有孔 スス付着
81	258	諸磯ｂ式	浅鉢	–	3.9	–	にぶい褐色	白・赤・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	縄文 沈線	破片	1 暗 –1348	1 号暗渠
81	259	諸磯ｂ式	鉢	–	–	(6.2)	暗褐色	白色粒子、金雲母	胴部	内面に横ミガキ調整	破片	2630	スス付着
81	260	諸磯ｂ式	浅鉢	–	(9.0)	2.7	にぶい黄褐色	白色粒子、金雲母	胴部～底部	無文	破片	3343	
81	261	諸磯ｂ式	浅鉢	–	9.5	3.7	にぶい赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部～底部	無文	30	2511	
81	262	諸磯ｂ式	浅鉢	–	(10.0)	(3.3)	にぶい黄橙色	白色粒子	胴部～底部	沈線	破片	1443	
81	263	諸磯ｂ式	浅鉢	–	–	2.1	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	無文	破片	2 炉一括	2 号竪穴住居跡
82	264	五領ヶ台式	鉢	(14.0)	–	5.3	褐色	白色粒子	口縁部	沈線 浮線文 刻み	破片	1880	
82	265	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.6	赤褐色	黒色粒子、長石	口縁部	沈線 浮線文 刻み	破片	3338	
82	266	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.2	灰褐色	白・赤・黒色粒子、金雲母	口縁部	沈線 縄文 刻み 貼付文	破片	1389	
82	267	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.7	黒褐色	白・赤・黒色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線 波状口縁に刻み	破片	1106	
82	268	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.6	褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線 口唇部に刻み	破片	1047	
82	269	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.3	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	沈線 刻み	破片	1044	
82	270	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.5	明褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	沈線 三角印刻文	破片	2 暗 –315	2 号暗渠
82	271	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.7	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部～胴部	沈線 縄文 貼付文	破片	1 暗 –1433	1 号暗渠

82	272	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.4	黒褐色	白色粒子、雲母	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	1961	
82	273	五領ヶ台式	深鉢	17.2	–	23.0	暗褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部～胴部	沈線 縄文 貼付文 口縁に刻み	90	2 暗	
82	274	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.0	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部～胴部	沈線　口縁に刻み	破片	1170	
82	275	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.3	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部	沈線	破片	1190	
82	276	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.2	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	沈線	破片	1899	
82	277	五領ヶ台式	深鉢	(39.4)	–	11.4	暗褐色	白色粒子、金雲母	口縁部～胴部	沈線　口縁に刻み	破片	2000	
82	278	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英、長石	口縁部	縄文 沈線	破片	2 暗 –43	2 号暗渠
82	279	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.3	赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	沈線 貼付文 刻み	破片	1973	
82	280	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.3	にぶい黄褐色	黒雲母、白色粒子	口縁部	沈線	破片	2375	
82	281	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	明褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部	沈線	破片	2 暗 –328	2 号暗渠
83	282	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.6	明赤褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	口縁に刻み	破片	1066	
83	283	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.5	褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	縄文 沈線 口縁に刻み	破片	1099	
83	284	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.1	明赤褐色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文 口縁に刻み	破片	2551	
83	285	五領ヶ台式	深鉢	(29.8)	–	25.7	橙色	大小の白色粒子、金雲母	口縁部～胴部	沈線 刺突	破片	2616	
83	286	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.7	にぶい赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	縄文 沈線 刺突	破片	1063	
83	287	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	968	
83	288	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.1	にぶい赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	沈線 刻み 口縁に刻み	破片	1181	
83	289	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.2	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	縄文 沈線	破片	1295	
83	290	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.1	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石、石英	口縁部	縄文 沈線 口縁に刻み	破片	3225	
83	291	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.5	にぶい褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	縄文 沈線 口縁に刻み	破片	1029	
83	292	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.7	にぶい黄褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線 刻み 波状口縁	破片	1212	
83	293	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.8	明褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	縄文 沈線 刻み 口縁に刻み	破片	2 暗一括	2 号暗渠
83	294	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	沈線 縄文 波状口縁に刻み	破片	1043	
83	295	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.9	赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英	口縁部	縄文 沈線 刻み 波状口縁に刻み	破片	1104	
83	296	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.8	褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	2 暗 –371	2 号暗渠
84	297	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.0	褐色	金雲母	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	1270・1222	
84	298	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.0	にぶい黄褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	沈線	破片	1002	
84	299	五領ヶ台式	深鉢	26.8	–	23.7	明赤褐色	金雲母、白色粒子	口縁部～胴部	縄文 沈線 口縁に刻み	破片	1091	
84	300	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.4	にぶい褐色	白・黒色粒子	口縁部	縄文 沈線	破片	1438	
84	301	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.2	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線 口縁に刻み	破片	1251	
84	302	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	沈線 刻み 波状口縁	破片	2 暗 –368	2 号暗渠
84	303	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.6	赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	縄文 沈線 口縁内面に縄文	破片	1 暗一括	1 号暗渠
84	304	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.1	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線	破片	1294	
84	305	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	褐色	白色粒子	口縁部	縄文 沈線 内面の器壁に横磨き調整	破片	1446・1447	
84	306	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.5	暗褐色	白・黒色粒子、石英	口縁部	沈線 刻み	破片	1284	
84	307	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.3	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線	破片	1223	
84	308	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.4	赤褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	縄文 沈線	破片	1 ト 571	
84	309	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.8	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	沈線 刻み 口縁に刻み	破片	1289	
84	310	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部	縄文 沈線	破片	1445	
85	311	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	黄褐色	白色粒子	口縁部	沈線 刻み 波状口縁	破片	1351	
85	312	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.5	橙色	金雲母、白色粒子	口縁部	沈線 刻み 波状口縁に刻み	破片	1444	
85	313	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	暗褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	沈線 縄文 隆帯に刻み	破片	2 暗 –372	2 号暗渠
85	314	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.3	明赤褐色	白色粒子	口縁部	沈線 刻み	破片	2415	
85	315	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.7	褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	沈線 押引 口縁に刻み	破片	2 暗 –44	

85	316	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	暗褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	沈線 刻み	破片	2 暗 –293	2 号暗渠
85	317	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	暗褐色	白色粒子、石英、金雲母	口縁部	沈線 縄文 刻み 口縁に刻み	破片	1220	
85	318	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.6	黄褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	沈線	破片	995	
85	319	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.1	橙色	白色粒子、金雲母	口縁部	沈線 刻み 縄文 波状口縁	破片	2 炉内	2 号竪穴住居跡 炉内
85	320	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.7	褐色	白色粒子、金雲母	口縁部～胴部	沈線 縄文 刻み 波状口縁に刻み	破片	1299	
85	321	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.2	赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	沈線 縄文 貼付文	破片	965	
85	322	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.0	赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	沈線 縄文 貼付文	破片	971	
85	323	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.7	黒褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	沈線 縄文 刻み 貼付文	破片	1309	前期末の五領ヶ台式
85	324	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.7	褐色	金雲母、白色粒子	口縁部	沈線 刻み 口縁に刻み	破片	1449	
85	325	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.2	暗褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	縄文 沈線 貼付文 隆帯に刻み 波状口縁	破片	2 暗 –327・335・336	2 号暗渠
85	326	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.1	褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	沈線 貼付文 口縁に刻み	破片	803	
85	327	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.9	明赤褐色	大小の白色粒子	口縁部	沈線 縄文 貼付文	破片	1120	
85	328	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.6	明褐色	白・黒色粒子	口縁部	沈線 貼付文	破片	2 暗一括	2 号暗渠
86	329	五領ヶ台式	深鉢	–	–	19.8	明赤褐色	白・赤色粒子	口縁部～胴部	沈線 縄文 刻み	破片	1288	
86	330	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.8	赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	沈線 刻み 口縁に刻み	破片	2 暗 –97	2 号暗渠
86	331	五領ヶ台式	深鉢	20.4	–	12.9	褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部～胴部	縄文 縄文圧痕 沈線 刻み	破片	2 暗 –345	2 号暗渠
86	332	五領ヶ台式	深鉢	29.4	–	10.9	橙色	金雲母、白色粒子	口縁部～胴部	縄文 沈線	破片	1447	
86	333	五領ヶ台式	深鉢	12.8	–	5.5	暗褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部～胴部	口縁に刻み	破片	1 暗 –1358・1359	1 号暗渠
86	334	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	口縁に刻み	破片	1945	
86	335	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	口縁に刻み	破片	1031	
86	336	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	1トレ –409	
86	337	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.8	褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	991	
86	338	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.3	褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	口縁に刻み	破片	1335	
86	339	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.7	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	沈線 口縁に刻み	破片	2 暗一括	2 号暗渠
86	340	五領ヶ台式	深鉢	–	–	14.8	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石、石英	口縁部～胴部	沈線 縄文 貼付文	破片	2 暗 –235・334	2 号暗渠
86	341	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.3	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	胴部	径の小さな半裁竹管内側による山形沈線。浮線文の上から篦状工具による押引。棒状工具による沈線。	破片	2 暗 –370	2 号暗渠
86	342	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.6	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	径の小さな半裁竹管内側による平行沈線	破片	3302	
87	343	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.9	褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	径の小さな半裁竹管内側による山形沈線。棒状工具による沈線。角押文。	破片	2 暗 –481	2 号暗渠
87	344	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.7	明赤褐色	白色粒子	胴部	縄文 沈線	破片	1091	北陸系土器
87	345	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.6	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文 半裁竹管内側による沈線と綾杉文	破片	1130	
87	346	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.2	黒褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と半裁竹管内側で刺突し波状隆線を表出	破片	1 暗 –232	1 号暗渠
87	347	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.1	褐色	白色粒子	胴部	平行沈線	破片	3036	
87	348	五領ヶ台式	深鉢	–	–	15.0	褐色	大小の白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	884・910	
87	349	五領ヶ台式	深鉢	–	–	13.2	褐色	大小の白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	571・909	
87	350	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.5	褐色	金雲母、白色粒子	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	3 炉一括	3 号竪穴住居跡　炉内
87	351	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.7	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による斜格子目沈線	破片	1545	
87	352	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.8	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	1122	
87	353	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	棒状工具による沈線と刺突 縄文圧痕	破片	1008	
87	354	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.8	にぶい褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	2 暗 –372	2 号暗渠
87	355	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	横方向に押捺隆帯 縄文 縄文圧痕	破片	2 暗 –335	2 号暗渠
87	356	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.0	にぶい褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部	横方向に押捺隆帯 縄文 縄文圧痕 沈線	破片	2 暗 –372・一括	2 号暗渠
87	357	五領ヶ台式	深鉢	–	–	21.5	赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英	胴部	縄文 半裁竹管内側による沈線	破片	2 暗 –103	2 号暗渠

87	358	五領ヶ台式	深鉢	–	–	12.1	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線 縄文 縄文圧痕	破片	1441・1461	
88	359	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.8	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部	押圧隆帯。半裁竹管内側による沈線と円形刺突。棒状工具による沈線と刻み。縄文圧痕。	破片	2 暗 –482	2 号暗渠 前期末の五領ヶ台式
88	360	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.3	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕	破片	1178	
88	361	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.8	橙色	大小の白色粒子、金雲母	胴部	平行沈線	破片	2591	
88	362	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.1	褐色	金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と綾杉文	破片	975	
88	363	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.8	明褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と棒状工具による格子目状沈線	破片	2000	
88	364	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.2	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文 半裁竹管内側による沈線 棒状工具による刺突	破片	1431	
88	365	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.5	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	平行沈線	破片	2864	
88	366	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.6	褐色	白・赤・黒色粒子	胴部	半裁竹管内側による沈線 縄文	破片	1 暗 –1355	1 号暗渠
88	367	五領ヶ台式	深鉢	–	–	12.5	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と刺突 縄文圧痕	破片	160・1061	
88	368	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.1	赤褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	胴部	縄文 沈線	破片	2254	
88	369	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.9	にぶい赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線 縄文	破片	1 暗一括	1 号暗渠
88	370	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	暗赤褐色	黒、・金雲母、白色粒子	胴部	棒状工具による沈線 縄文	破片	1827	
88	371	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.7	褐色	金雲母	胴部	棒状工具による沈線 縄文	破片	1218	
88	372	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.0	明赤褐色、黒褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と刺突	破片	784	
88	373	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.3	暗赤褐色	金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線 縄文圧痕	破片	1157	
88	374	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線 縄文	破片	1 トレ –586	
88	375	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.6	橙色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	1 暗 –400	1 号暗渠
88	376	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.2	赤褐色	雲母	胴部	半裁竹管内側による沈線と刻み	破片	2 炉内	2 号住居跡 炉内
88	377	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.4	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側と棒状工具による沈線	破片	1 暗 –354	1 号暗渠
88	378	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	にぶい赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み	破片	1238	
88	379	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.5	赤褐色	金雲母	胴部	棒状工具による沈線 縄文	破片	1447	
88	380	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.1	赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側と棒状工具による沈線 縄文 刺突	破片	1253	
89	381	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.5	暗赤褐色	金雲母	胴部	縄文	破片	1130	
89	382	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	赤褐色	金雲母	胴部	棒状工具による沈線 縄文	破片	1321	
89	383	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.5	褐色	白・黒色粒子	胴部	半裁竹管内側と棒状工具による沈線 縄文	破片	1146	
89	384	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.4	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側と棒状工具による沈線 縄文	破片	1321	
89	385	五領ヶ台式	深鉢	–	–	9.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文	破片	1835	
89	386	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.2	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半裁竹管内側と棒状工具による沈線 縄文	破片	1 トレ –588	
89	387	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.5	暗褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	1447	
89	388	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.6	明赤褐色	金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕	破片	1373・1379	
89	389	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕	破片	1 暗 –1350	1 号暗渠
89	390	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	にぶい赤褐色	金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕 沈線 刻み	破片	1776	
89	391	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.8	にぶい赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文	破片	1093	
89	392	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.0	赤褐色	金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕	破片	1399	
89	393	五領ヶ台式	深鉢	–	–	11.0	暗赤褐色	金雲母	胴部	縄文 縄文圧痕 沈線	破片	1295	
89	394	五領ヶ台式	深鉢	–	–	11.2	明赤褐色	大小の白色粒子	胴部	縄文	破片	2013	
89	395	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文 沈線 交互刺突	破片	1058	
89	396	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.8	にぶい褐色	白色粒子	胴部	沈線 刻み	破片	1098	
89	397	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.5	褐色	大小の白色粒子	胴部	沈線 刻み 縄文	破片	2455	
89	398	五領ヶ台式	深鉢	–	–	10.6	明褐色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み 縄文	破片	1949	
90	399	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.3	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み	破片	1374	

90	400	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.6	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み	破片	1454	
90	401	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み 縄文	破片	1110	
90	402	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.6	明褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み 縄文	破片	1879	
90	403	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.1	暗赤褐色	白色粒子	胴部	沈線 刻み 綾杉文	破片	3351	
90	404	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.3	明褐色	白色粒子	胴部	沈線 押引	破片	1377	
90	405	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.8	暗褐色	白色粒子、金雲母	胴部	貼付文 半裁竹管内面による沈線 刻み	破片	1273	
90	406	五領ヶ台式	深鉢	–	–	6.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	1080	
90	407	五領ヶ台式	深鉢	–	–	4.0	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み	破片	970	
90	408	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.1	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	沈線 刻み 押引	破片	1 暗 –240	1 号暗渠
90	409	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.6	にぶい赤褐色	白色粒子、金雲母、石英	胴部	交互刺突文 沈線	破片	1 住 –2730	1 号竪穴住居跡
90	410	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.5	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	交互刺突文 沈線	破片	1078	
90	411	五領ヶ台式	深鉢	–	(16.0)	5.5	褐色	白色粒子	胴部～底部	沈線 刺突 底部が末広がり。	破片	1887	
90	412	五領ヶ台式	深鉢	–	(11.6)	3.5	明褐色	白色粒子	底部	縄文	破片	1292	
90	413	五領ヶ台式	深鉢	–	10.4	5.3	明褐色	白色粒子、金雲母	胴部～底部	縄文 沈線	破片	1889	
90	414	五領ヶ台式	深鉢	–	14.0	9.3	褐色	白色粒子、石英	胴部～底部	沈線 縄文 底部が末広がり。	破片	3433	
91	415	五領ヶ台式	深鉢	–	16.0	6.0	明赤褐色	白色粒子、石英	胴部～底部	指頭痕	破片	1315	
91	416	五領ヶ台式	深鉢	–	12.8	5.0	明褐色	白色粒子、石英	胴部～底部	無文	破片	1124	
91	417	五領ヶ台式	深鉢	–	6.6	5.0	褐色	金雲母	胴部～底部	縄文 底部に木葉痕	破片	2194	
91	418	五領ヶ台式	深鉢	–	8.2	4.2	暗褐色	雲母	胴部～底部	沈線	破片	660	
91	419	五領ヶ台式	深鉢	–	(11.0)	5.5	明赤褐色	白色粒子	胴部～底部	沈線	破片	246	
91	420	五領ヶ台式	深鉢	–	(12.2)	15.0	褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部～底部	縄文 縄文圧痕	破片	2 暗 –324・323	2 号暗渠
91	421	五領ヶ台式	深鉢	–	(17.4)	6.9	明赤褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部～底部	縄文 縄文圧痕	破片	1 暗 –1346・1347	1 号暗渠
92	422	五領ヶ台式	深鉢	–	7.1	5.6	褐色	白色粒子、金雲母	胴部～底部	縄文	破片	2038	
92	423	五領ヶ台式	深鉢	–	16.0	4.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	底部	縄文	破片	969	
92	424	五領ヶ台式	深鉢	–	13.2	4.5	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	底部	無文	破片	2 暗 –2875・AE–9 一括	2 号暗渠
92	425	五領ヶ台式	深鉢	–	(13.6)	3.8	にぶい赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	底部	無文	破片	2 暗 –29	2 号暗渠
92	426	五領ヶ台式	深鉢	–	(14.0)	7.7	褐色	雲母	胴部～底部	無文	破片	880	
92	427	五領ヶ台式	深鉢	–	(9.0)	8.1	明褐色	白色粒子、石英	胴部～底部	沈線	破片	1959	
92	428	五領ヶ台式	深鉢	–	(12.8)	6.3	暗褐色	白色粒子	胴部～底部	無文	破片	1459	
92	429	五領ヶ台式	深鉢	–	(9.7)	5.7	褐色	金雲母	胴部～底部	無文	破片	1 号集石一括	1 号集石
92	430	五領ヶ台式	深鉢	–	(12.6)	4.3	明赤褐色	金雲母、白色粒子	底部	無文	破片	1888	
92	431	五領ヶ台式	深鉢か	–	10.0	1.0	明褐色	金雲母	底部	無文	破片	339	
92	432	五領ヶ台式	深鉢	–	(19.2)	1.9	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	底部	交互刺突文	破片	2 暗 –269	2 号暗渠
93	433	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	10.8	明褐色	白色粒子	口縁部～胴部	口縁に刻み 縄文	破片	1280・1261	
93	434	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	11.1	橙色	大小の白色粒子	口縁部～胴部	口縁に刻み 縄文	破片	1087	
93	435	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	11.1	にぶい黄褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部～胴部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	3343	
93	436	五領ヶ台Ⅱ式末	深鉢	–	–	11.8	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部～胴部	口縁に刻み 縄文 押引	破片	1093	
93	437	五領ヶ台式	深鉢	–	–	8.2	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部～胴部	半裁竹管内面による隆線の上に交互刺突	破片	1950・1952	
93	438	五領ヶ台式	深鉢	–	–	7.3	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部	粘土貼付 交互刺突	破片	1063	
93	439	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	9.3	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部～胴部	折り返し口縁に半裁竹管による連続刺突 平行沈線	破片	3222	
93	440	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	3.7	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部	折り返し口縁に半裁竹管による連続刺突 平行沈線	破片	3221	
94	441	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	6.0	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部	半裁竹管による押引	破片	1063	

94	442	五領ヶ台式	浅鉢	–	–	5.5	にぶい赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部	沈線 押引	破片	1854	
94	443	五領ヶ台式	浅鉢	(20.0)	(10.0)	7.5	褐色	白色粒子	口縁部～胴部	口縁に刻み 縄文 沈線	破片	1415・1092 スス付着	
94	444	五領ヶ台式	深鉢	–	–	3.8	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	沈線	破片	1282	
94	445	五領ヶ台式	深鉢	–	–	5.8	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部	内外に横方向の磨き	破片	1918	
94	446	五領ヶ台式	小型鉢	(14.6)	–	7.3	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部～胴部	口縁に刻み 縄文 沈線 綾杉文	破片	1440	
94	447	狢沢式	深鉢	–	–	7.1	褐色	白・黒色粒子、金雲母、スコリア	口縁部	波状口縁、角押文	破片	2534	
94	448	狢沢式	深鉢	–	–	7.5	橙色	白色粒子	口縁部	押引	破片	1702	
94	449	狢沢式	深鉢	–	–	7.0	明赤褐色	白色粒子	口縁部	押引	破片	1697	
94	450	狢沢式	深鉢	–	–	4.7	橙色	白色粒子	口縁部	押引	破片	2144	
94	451	狢沢式	深鉢	–	–	5.1	赤褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	口唇部に沈線	破片	1011	
94	452	狢沢式	深鉢	–	–	9.0	褐色	白・黒色粒子	口縁部	粘土貼付 沈線 刻み	破片	2179	
94	453	狢沢式	深鉢	–	–	5.2	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	粘土貼付 押引	破片	1641	
94	454	狢沢式	深鉢	–	–	6.0	褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付	破片	2917	
95	455	狢沢式	深鉢	–	–	4.1	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、長石、石英	口縁部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	1 住 –2683	1 号竪穴住居跡
95	456	狢沢式	深鉢	–	–	3.6	暗赤褐色	白色粒子	胴部	押引	破片	1598	
95	457	狢沢式	深鉢	–	–	4.9	明赤褐色	白色粒子	胴部	押引	破片	1538	
95	458	狢沢式	深鉢	–	–	6.5	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付 刻み	破片	1723	
95	459	狢沢式	深鉢	–	–	9.0	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	押引	破片	1591	
95	460	狢沢式	深鉢	(41.4)	–	8.0	褐色	白色粒子、雲母	口縁部～胴部	沈線の上に交互刺突	破片	1063	
95	461	新道式	深鉢	–	–	3.5	にぶい赤褐色	白・黒色粒子、雲母、石英	口縁部	三角押文	破片	1 住一括	1 号竪穴住居跡
95	462	新道式	深鉢	–	–	6.3	暗赤褐色	白色粒子	口縁部	折り返し口縁 押引	破片	1751	
95	463	新道式	深鉢	–	–	6.5	橙色	白色粒子	胴部	押引	破片	2088	
95	464	新道式	深鉢	–	–	7.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付 刻み 押引	破片	1740	
95	465	新道式	深鉢	–	–	6.8	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	押引	破片	1787・1797	
95	466	新道式	深鉢	–	–	5.2	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	押引	破片	1761	
95	467	新道式	深鉢	–	–	3.6	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	押引	破片	1749	
95	468	新道式	深鉢	–	–	4.2	橙色	白色粒子	胴部	押擦隆線 押引	破片	2 住 –2734	2 号竪穴住居跡
95	469	新道式	深鉢	–	–	4.0	赤褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 押引 沈線	破片	1726	
95	470	新道式	深鉢	–	–	4.0	黒褐色	白色粒子、金雲母	胴部	押引	破片	3303	
95	471	新道式	深鉢	–	–	7.5	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土紐貼付	破片	2070	
95	472	新道式	深鉢	–	–	6.8	橙色	白色粒子	胴部	沈線	破片	1722	
95	473	藤内式	深鉢	(21.6)	–	11.0	にぶい黄褐色	白色粒子	口縁部～胴部	縄文 沈線	破片	2 住 –3355	2 号竪穴住居跡
95	474	藤内式	深鉢	–	–	11.0	褐色	白色粒子	口縁部～胴部	無文	破片	4 住 –2987	4 号竪穴住居跡
95	475	藤内式	深鉢	–	–	5.4	褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	縄文 沈線	破片	1 トレ –551	
96	476	藤内式	深鉢	–	–	4.8	明褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	波状口縁 刻み	破片	1748	
96	477	藤内式	深鉢	–	–	7.2	褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	波状口縁 刻み 沈線	破片	996	
96	478	藤内式	深鉢	–	–	5.3	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	粘土紐貼付	破片	3 炉一括	3 号竪穴住居跡　炉内
96	479	藤内式	深鉢	–	–	3.6	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	無文	破片	2979	
96	480	藤内式	深鉢	–	–	4.5	赤褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	沈線 刻み	破片	1 トレ –583	
96	481	藤内式	深鉢	–	–	6.1	明褐色	白・黒色粒子、長石、石英	胴部	粘土貼付 刻み	破片	1 トレ –414	
96	482	藤内式	深鉢	–	–	6.7	橙色	白・黒色粒子	胴部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	2 住 –2997	2 号竪穴住居跡
96	483	藤内式	深鉢	–	–	6.8	赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	胴部	粘土貼付 刻み	破片	3416	
96	484	藤内式	深鉢	–	–	3.8	褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 刻み	破片	2 炉内	2 号竪穴住居跡 炉内
96	485	藤内式	深鉢	–	–	3.9	褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	2 住 –2344	2 号竪穴住居跡

96	486	藤内式	深鉢	–	–	3.2	赤褐色	白色粒子、長石	胴部	キャタピラ文 粘土貼付	破片	2 住 –2351	2 号竪穴住居跡
96	487	藤内式	深鉢	–	–	8.5	褐色	白色粒子、雲母	胴部	沈線 押引	破片	2 住 –2650	2 号竪穴住居跡
96	488	藤内式	深鉢	–	–	4.6	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	胴部	粘土貼付 刻み	破片	1547	
96	489	藤内式	深鉢	–	–	6.1	明褐色	白色粒子	胴部	押引	破片	3 炉一括	3 号竪穴住居跡
96	490	藤内式	深鉢	–	–	4.9	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	胴部	隆線 押引	破片	984	
96	491	藤内式	深鉢	–	–	5.9	褐色	白色粒子、金雲母、石英	胴部	隆線 押引	破片	1 号集石一括	1 号集石
96	492	藤内式	深鉢	–	–	6.6	褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英	胴部	隆線 押引	破片	778	
96	493	藤内式	深鉢	–	–	4.2	赤褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英、長石	胴部	粘土貼付 刻み 沈線	破片	1812	
96	494	藤内式	深鉢	–	–	4.5	褐色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部	隆線 押引	破片	3324	
96	495	藤内式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	胴部	隆線 押引	破片	1626	
96	496	藤内式	深鉢	–	–	3.7	褐色	白色粒子	胴部	隆線 沈線	破片	3 炉一括	3 号竪穴住居跡　炉内
96	497	藤内式	深鉢	–	–	4.4	にぶい褐色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部	隆線 押引	破片	2134	
96	498	藤内式	深鉢	–	–	4.0	明褐色	白・黒色粒子、石英	胴部	粘土貼付 沈線	破片	2434	
96	499	藤内式	深鉢	–	–	5.1	褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	沈線 交互刺突文	破片	3377	
96	500	藤内式	深鉢	–	–	5.5	明赤褐色	白・黒色粒子、石英	胴部	沈線 隆線 押引	破片	2280	
96	501	藤内式	深鉢	–	–	4.3	褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	胴部	沈線	破片	1593	
96	502	藤内式	深鉢	–	6.6	(10.2)	褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	2542	
97	503	井戸尻式	深鉢	–	–	5.9	明褐色	白色粒子	口縁部	粘土を貼付した隆線上に刻み	破片	578	
97	504	井戸尻式	深鉢	–	–	5.0	明褐色	白色粒子	口縁部	押捺隆線	破片	2517	
97	505	井戸尻式	深鉢	–	–	6.5	明赤褐色	白・黒・赤色粒子	口縁部	隆帯上に刻み	破片	1 住一括	1 号竪穴住居跡
97	506	井戸尻式	深鉢	–	–	7.2	明褐色	雲母	口縁部	粘土貼付 沈線 刻み	破片	3119	
97	507	井戸尻式	深鉢	–	–	5.5	黄褐色	白色粒子、雲母	口縁部	粘土貼付 刻み	破片	3027	
97	508	井戸尻式	深鉢	–	–	5.7	橙色	白色粒子	口縁部	半裁竹管内面による沈線と棒状工具による沈線	破片	1534	
97	509	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	褐色	白色粒子	口縁部	隆線上に斜行状沈線	破片	3198	
97	510	井戸尻式	深鉢	–	–	5.6	オリーブ褐色	白色粒子	口縁部	沈線	破片	2450	
97	511	井戸尻式	深鉢	–	–	6.7	にぶい黄褐色	白色粒子、長石	口縁部	沈線 刻み 押引	破片	2 住 –3136	2 号竪穴住居跡
97	512	井戸尻式	深鉢	–	–	7.4	明褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付 沈線	破片	3190	スス付着
97	513	井戸尻式	深鉢	–	–	5.3	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付 刻み	破片	2 炉内	2 号住居跡 炉内出土
97	514	井戸尻式	深鉢	–	–	5.5	にぶい黄橙色	白色粒子	口縁部	沈線と粘土を貼付して隆線	破片	424	
97	515	井戸尻式	深鉢	–	–	8.7	明褐色	白色粒子	口縁部	無文	破片	957	
97	516	井戸尻式	深鉢	–	–	5.8	黄褐色	白色粒子	口縁部	外面は無文、内面に横ナデ	破片	2559	
97	517	井戸尻式	深鉢	–	–	5.4	褐色	白色粒子	口縁部	棒状工具による沈線	破片	653	
97	518	井戸尻式	深鉢	–	–	3.9	明褐色	白色粒子	口縁部	波状口縁	破片	3286	
97	519	井戸尻式	浅鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白色粒子	口縁部	沈線	破片	586	
97	520	井戸尻式	深鉢	–	–	6.5	明褐色	白色粒子、金雲母	口縁部	粘土貼付 沈線 刻み	破片	3319	
97	521	井戸尻式	深鉢	–	–	10.7	橙色	白色粒子、金雲母	口縁部	粘土を貼付した隆線上にハ字状沈線と交互刺突棒状工具による沈線	破片	3240	
98	522	井戸尻式	深鉢	–	–	10.1	明黄褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部	粘土を貼付した隆線上に篦状工具による刻み棒状工具による沈線	破片	3489	
98	523	井戸尻式	深鉢	–	–	8.5	暗灰褐色	白色粒子	口縁部	粘土を貼付した隆線上に交互刺突 棒状工具による沈線 メガネ状把手 蛇体文	破片	1430	
98	524	井戸尻式	深鉢	–	–	7.6	にぶい黄橙色	白・赤色粒子	口縁部	粘土を貼付した隆線上に刻み 棒状工具による沈線	破片	315	
98	525	井戸尻式	深鉢	–	–	9.5	橙色	白色粒子	口縁部	粘土を貼付した隆線上に刻み 棒状工具による沈線	破片	3198	
98	526	井戸尻式	深鉢	–	–	7.2	にぶい黄褐色	白・黒色粒子、金雲母、石英	口縁部	粘土を貼付した隆線上に刻み 棒状工具による沈線 メガネ状把手	破片	1 暗 –230	1 号暗渠

98	527	井戸尻式	深鉢	–	–	7.0	にぶい黄橙色	白色粒子、雲母	口縁部	粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	2442	
98	528	井戸尻式	深鉢	–	–	18.6	にぶい赤褐色	白色粒子	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	3472・3489	
99	529	井戸尻式	深鉢	–	–	8.6	明褐色	白色粒子、雲母	口縁部	隆線の上に斜行状沈線と交互刺突 鎖状隆線	破片	3239	
99	530	井戸尻式	深鉢	–	–	7.5	明褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付 鎖状隆線	破片	1500	
99	531	井戸尻式	深鉢	–	–	7.3	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 鎖状隆線 篦状工具による交互刺突 棒状工具による沈線	破片	3240	
99	532	井戸尻式	深鉢	–	–	7.6	暗褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	粘土貼付 棒状工具による沈線 刻み 交互刺突	破片	3241	
99	533	井戸尻式	深鉢	–	–	9.9	褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付 ハ字状沈線	破片	630	
99	534	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	にぶい褐色	白色粒子、雲母	口縁部	粘土貼付 棒状工具による沈線 刻み	破片	645	
99	535	井戸尻式	深鉢	–	–	10.3	褐色	金雲母	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	1トレ –500	
99	536	井戸尻式	深鉢	–	–	6.8	にぶい褐色	白色粒子	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	3213	
99	537	井戸尻式	深鉢	–	–	12.0	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	3472	
99	538	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	明褐色	白色粒子	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	412	
100	539	井戸尻式	深鉢	–	–	13.5	褐色	白・黒色粒子、雲母	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	3472	
100	540	井戸尻式	深鉢	–	–	13.5	明褐色	白色粒子	口縁部	ドーム状把手 粘土貼付 棒状工具による沈線	破片	3105	
100	541	井戸尻式	深鉢	–	–	7.0	褐色	白色粒子	胴部	沈線 刻み	破片	2323	
100	542	井戸尻式	深鉢	–	–	5.1	明褐色	白色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線 篦状工具によるハ字状沈線	破片	1088	
100	543	井戸尻式	深鉢	–	–	6.7	明褐色	白色粒子	胴部	棒状工具による沈線 篦状工具によるハ字状沈線	破片	780	
100	544	井戸尻式	深鉢	–	–	7.6	褐色	白色粒子、雲母	胴部	半截竹管内側による隆線 刻み 刺突	破片	1820	
100	545	井戸尻式	深鉢	–	–	4.6	褐色	大小の白色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2583	
100	546	井戸尻式	深鉢	–	–	6.4	にぶい褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 棒状工具による沈線と刻み	破片	619	
101	547	井戸尻式	深鉢	–	–	4.9	にぶい黄褐色	金雲母	胴部	粘土貼付 鎖状隆線	破片	1307	
101	548	井戸尻式	深鉢	–	–	5.7	明褐色	大小の白色粒子	胴部	鎖状隆線の中に刺突 篦状工具による刻み	破片	635	
101	549	井戸尻式	深鉢	–	–	6.5	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	鎖状隆線 棒状工具による沈線	破片	1553	
101	550	井戸尻式	深鉢	–	–	4.1	褐色	白色粒子	胴部	鎖状隆線 棒状工具による沈線	破片	2475	
101	551	井戸尻式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白色粒子	胴部	押捺隆線 半裁竹管による沈線	破片	584	
101	552	井戸尻式	深鉢	–	–	5.9	赤褐色	白色粒子	胴部	沈線 半裁竹管内側による押引	破片	919	
101	553	井戸尻式	深鉢	–	–	8.4	褐色	白色粒子、黒雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	2住 –3945	2号竪穴住居跡
101	554	井戸尻式	深鉢	–	–	5.3	明褐色	白色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	1472	
101	555	井戸尻式	深鉢	–	–	6.8	明褐色	白色粒子、金雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	785	
101	556	井戸尻式	深鉢	–	–	8.1	褐色	白色粒子	口縁部	ドーム状把手 棒状工具による沈線	破片	2070	
101	557	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	にぶい褐色	黒・白色粒子	胴部	棒状工具と篦状工具による沈線と刻み	破片	3180	
101	558	井戸尻式	深鉢	–	–	5.7	褐色	白色粒子	胴部	棒状工具による沈線	破片	2住 –2761	2号竪穴住居跡
101	559	井戸尻式	深鉢	–	–	7.0	橙色	白色粒子	胴部	棒状工具と篦状工具による沈線と刻み	破片	3324	
101	560	井戸尻式	深鉢	–	–	4.4	にぶい褐色	大小の白色粒子	胴部	粘土貼付 篦状工具による刻み	破片	642	
101	561	井戸尻式	深鉢	–	–	4.8	にぶい褐色	白色粒子、雲母	胴部	沈線 刻み	破片	2763	
101	562	井戸尻式	深鉢	–	–	5.2	橙色	白色粒子	胴部	粘土貼付 沈線 篦状工具による交互刺突と刻み	破片	3502	
101	563	井戸尻式	深鉢	–	–	5.5	褐色	大小の白色粒子、雲母	胴部	縄文圧痕 粘土貼付 押引	破片	2475	
101	564	井戸尻式	深鉢	–	–	7.1	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付して隆線の上に篦状工具による交互刺突とハ字状沈線	破片	3351	
101	565	井戸尻式	深鉢	–	–	9.0	赤褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付して隆線の上に篦状工具による刻み	破片	1135	
101	566	井戸尻式	深鉢	–	–	15.5	にぶい黄褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付 棒状工具による沈線 篦状工具による刻み	破片	1暗 –357	1号暗渠
102	567	井戸尻式	深鉢	–	(15.8)	35.0	赤褐色	黒・白色粒子	胴部～底部	縄文圧痕 粘土貼付して隆線の上に篦状工具による交互刺突とハ字状沈線と刻み	30	3351	

102	568	井戸尻式	深鉢	–	–	5.5	明褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 棒状工具による沈線 篦状工具による ハ字状沈線	破片	3228	
102	569	井戸尻式	深鉢	–	–	8.9	明褐色	白色粒子（細）、雲母	胴部	粘土貼付 篦状工具によるハ字状沈線と刻み 棒状工具による沈線	破片	3351	
102	570	井戸尻式	深鉢	–	–	5.3	にぶい橙色	大小の白色粒子	胴部	棒状工具による沈線と刻み	破片	1550	
102	571	井戸尻式	深鉢	–	–	6.5	褐色	白色粒子（細）	胴部	粘土貼付 篦状工具によるハ字状沈線と刻み 棒状工具による沈線	破片	1559	
102	572	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	明赤褐色	白色粒子（細）	胴部	粘土貼付 篦状工具による交互刺突 とハ字状沈線と刻み 棒状工具による沈線	破片	3352	
102	573	井戸尻式	深鉢	–	–	7.6	赤褐色	白色粒子、雲母	胴部	粘土紐貼付して隆線の上に篦状工具による交互刺突 とハ字状沈線	破片	3325	
102	574	井戸尻式	深鉢	–	–	5.6	暗褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土紐貼付して隆線の上に篦状工具による刻み 棒状工具による沈線	破片	2345	
102	575	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 鎖状隆線及び隆線の上と中に篦状工具による沈線	破片	2269	
102	576	井戸尻式	深鉢	–	–	7.7	にぶい黄褐色	白色粒子、雲母	胴部	粘土貼付して隆線の上に篦状工具によるハ字状沈線 棒状工具による沈線	破片	1983	
102	577	井戸尻式	深鉢	–	–	6.6	明褐色	白色粒子、雲母	胴部	粘土貼付して隆線の上に篦状工具によるハ字状沈線	破片	1096	
102	578	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	にぶい褐色	白色粒子、雲母	胴部	縄文 粘土紐貼付して隆線の上に篦状工具によるハ字状沈線と刻み	破片	2940	
102	579	井戸尻式	深鉢	–	–	7.0	明赤褐色	大小の白色粒子	胴部	縄文 粘土紐貼付して隆線の上に棒状工具による刺突	破片	1977	
102	580	井戸尻式	深鉢	–	–	7.9	赤褐色	大小の白色粒子、雲母	胴部	粘土貼付して隆線の上に篦状工具による刻み 半裁竹管内側による条線	破片	594	
103	581	井戸尻式	深鉢	–	–	7.9	明褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	2795	
103	582	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	にぶい褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	3127	
103	583	井戸尻式	深鉢	–	–	5.7	褐色	白色粒子、雲母	胴部	縄文	破片	1427	
103	584	井戸尻式	深鉢	–	–	4.8	褐色	黒・白色粒子	胴部	縄文	破片	2 住 –2791	2 号竪穴住居跡
103	585	井戸尻式	深鉢	–	–	3.9	明褐色	大小の白色粒子	胴部	縄文	破片	992	
103	586	井戸尻式	深鉢	–	–	4.6	赤褐色	白色粒子、雲母	胴部	縄文	破片	2478	
103	587	井戸尻式	深鉢	–	–	4.6	明褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	2557	
103	588	井戸尻式	深鉢	–	5.8	3.0	褐色	白色粒子	底部	縄文	破片	2847	
103	589	井戸尻式	深鉢	–	13.0	4.7	赤褐色	白色粒子	底部	底部に圧痕か	破片	2512	
103	590	井戸尻式	小型壺	–	5.4	9.0	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母	胴部～底部	無文	50	2593	
103	591	井戸尻式	深鉢	–	–	7.2	黄褐色	白色粒子	口縁部	粘土紐貼付	破片	3267・3000	
103	592	井戸尻式	深鉢	–	–	5.7	明褐色	白色粒子	口縁部	鎖状隆線	破片	3326・3240	
103	593	井戸尻式	深鉢	–	–	8.0	明褐色	白色粒子、雲母	口縁部	押捺隆線	破片	3159	
103	594	井戸尻式	深鉢	–	–	6.0	黄褐色	白色粒子	口縁部	鎖状隆線	破片	2064	
104	595	曽利Ⅰ式	小型深鉢	10.0	–	4.3	褐色	白・黒・赤色粒子	口縁部	無文	破片	967	
104	596	曽利Ⅰ式	浅鉢	–	–	5.7	黄褐色	白・黒色粒子	口縁部	棒状工具による沈線	破片	1428	
104	597	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	9.5	褐色	白色粒子	口縁部	粘土紐貼付	破片	2 住 –2906	2 号竪穴住居跡
104	598	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.5	明赤褐色	白・黒・赤色粒子	口縁部	無文	破片	2684	
104	599	曽利Ⅰ式	深鉢	(59.4)	–	9.0	にぶい黄橙色	白色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2 住 –2654	2 号竪穴住居跡
104	600	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	13.5	赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部	棒状工具による沈線	破片	2526	
104	601	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.1	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付後に刻み 半裁竹管内側による条線	破片	2384	
104	602	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	7.5	黒褐色	白色粒子、雲母、石英	胴部	粘土貼付後に刻み 半裁竹管内側による条線	破片	2773	
104	603	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	8.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	半裁竹管内側による条線	破片	1414	
104	604	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	6.3	明赤褐色	白色粒子、石英	胴部	粘土貼付後に刻み 棒状工具による沈線	破片	563・577	

105	605	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	6.9	褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部	粘土貼付後に棒状工具による刻み 半裁竹管内側による条線	破片	2132	
105	606	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.9	明赤褐色	白・黒色粒子、石英	胴部	粘土貼付後に半裁竹管内側による沈線と棒状工具による刻み	破片	724	
105	607	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	3.7	褐色	白色粒子、石英	胴部	地文に細い半裁竹管内側による条線 粘土貼付 粘土紐貼付	破片	2531	
105	608	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	3.8	赤褐色	白・黒色粒子	胴部	半裁竹管内側による平行条線と斜行条線	破片	972	
105	609	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	(6.1)	褐色	白・黒色粒子	胴部	粘土貼付後に半裁竹管による刻み 地文に縄文か	破片	2542	
105	610	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.3	明赤褐色	白・黒・赤色粒子	胴部	半裁竹管内側による条線と押引	破片	1473	
105	611	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.4	褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付 半裁竹管による条線	破片	1463	
105	612	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	6.1	褐灰色	白・黒色粒子	胴部	三角押文 粘土紐貼付後に刻み 棒状工具による沈線	破片	150	
105	613	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	8.0	暗褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付後に半裁竹管外側による調整 粘土紐貼付	破片	2 住 –3271	2 号竪穴住居跡
105	614	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	4.9	明褐色	雲母	胴部	粘土紐貼付	破片	2 住 –2656	2 号竪穴住居跡
105	615	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	3.9	褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部	地文に細い半截竹管内側による条線 粘土貼付 粘土紐貼付	破片	1414	
105	616	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.5	にぶい赤褐色	白・黒色粒子、雲母	胴部	粘土紐貼付	破片	3475	
105	617	曽利Ⅰ式	深鉢	–	–	5.0	褐色	白・黒色粒子	胴部	粘土貼付による隆線 粘土紐貼付	破片	1491	
105	618	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	17.1	褐色	白・黒色粒子、石英、長石	口縁部～胴部	地文に縄文 ボタン状粘土貼付と半裁竹管内側による連弧状沈線の間に棒状工具による刺突 半裁竹管内側による隆線	破片	2289	
105	619	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.6	にぶい黄褐色	白色粒子	胴部	X 字状把手 棒状工具による沈線 粘土紐貼付	破片	1 ﾄﾚ –415	
105	620	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白色粒子、雲母	口縁部	半裁竹管内側による隆線	破片	723	
106	621	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.0	暗褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部	口縁部内側に屈曲 無文	破片	3398	
106	622	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.7	にぶい黄橙色	白・黒・赤色粒子	口縁部～胴部	半裁竹管内側による沈線	破片	3318	
106	623	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	15.2	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部～胴部	口縁部内側に屈曲 無文	破片	3366	
106	624	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.6	にぶい黄橙色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部～胴部	地文に縄文 半裁竹管内側による隆線と沈線	破片	2245	
106	625	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.2	にぶい褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	口縁部に刺突 棒状工具による沈線 地文は縄文か	破片	2938	
106	626	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.2	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母	口縁部	地文に縄文 半截竹管内側による沈線	破片	2245	
106	627	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.4	褐色	白・黒・赤色粒子	口縁部～胴部	縄文 半截竹管内側による沈線と押引	破片	3427	
106	628	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.4	褐色	白・黒色粒子、金雲母、長石	口縁部	縄文	破片	2562	
106	629	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	12.9	褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部～胴部	地文に縄文 口縁部に半截竹管による刺突	破片	2484・2461・2456	
106	630	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.0	褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	地文に縄文 棒状工具による刺突	破片	2441	
106	631	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.4	黄褐色	黒・白色粒子	口縁部	口縁部に刺突 半截竹管内側による沈線	破片	2 住 AD–8 一括	2 号住居跡 AD–8 区
106	632	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.3	褐色	白色粒子	口縁部	口縁部に半截竹管による刺突	破片	2 住 AD–8 一括	
106	633	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.9	赤褐色	白色粒子	口縁部	粘土貼付後に棒状工具による隆線	破片	1488	
106	634	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.0	赤褐色	白色粒子	口縁部	半截竹管内側による隆線	破片	2581	
107	635	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.2	明褐色	白・黒色粒子、長石	口縁部	半截竹管内側による条線と隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2306・2307	
107	636	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.3	明褐色	白色粒子	口縁部	半截竹管内側による条線と隆線 波状に粘土紐貼付	破片	787	
107	637	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.0	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石	口縁部	地文に縄文 粘土紐貼付	破片	2449	
107	638	曽利Ⅱ式	深鉢	(27.0)	–	15.1	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	口縁部～胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付	破片	2846	
107	639	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.0	褐色	白色粒子	口縁部	波状に粘土紐貼付	破片	2184	スス付着
107	640	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.8	明褐色	白色粒子	胴部	波状に粘土紐貼付	破片	2707	
107	641	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.3	褐色	白色粒子、雲母	胴部	半截竹管内側による沈線 波状に粘土紐貼付	破片	2795	

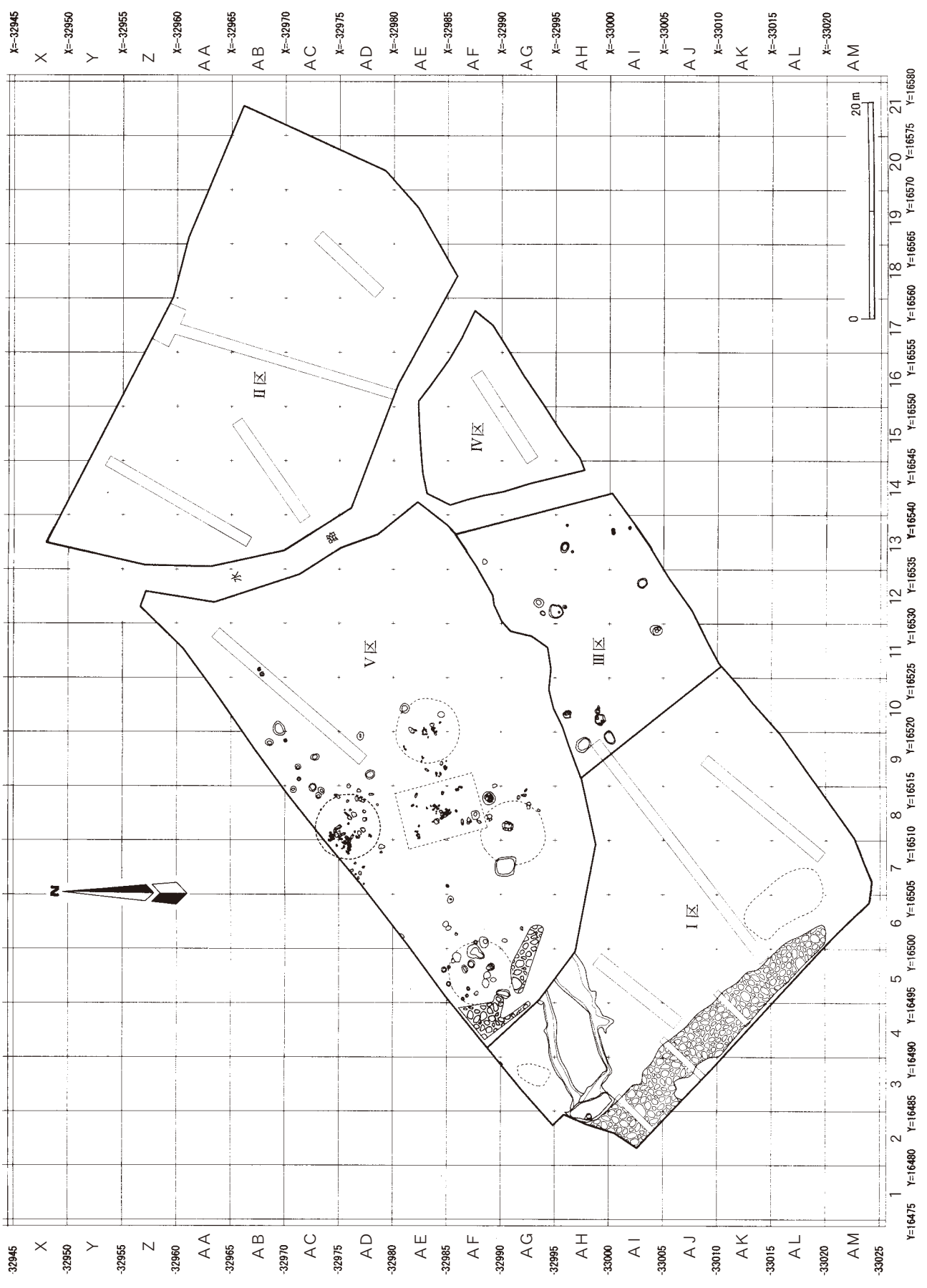
107	642	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.3	黄褐色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2397	
107	643	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.2	褐色	白色粒子	胴部	波状に粘土紐貼付 地文に縄文	破片	3353	
107	644	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.5	褐色	白色粒子、雲母	胴部	波状に粘土紐貼付	破片	2426	
107	645	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.5	明褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付	破片	1530	
107	646	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.9	にぶい橙色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による条線と隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2215	
107	647	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による条線と隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2255	
107	648	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.0	赤褐色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による条線 波状に粘土紐貼付	破片	2723	
107	649	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.3	赤黒色	白色粒子	胴部	斜行条線に直交するように粘土紐貼付 波状に粘土紐貼付	破片	1515	
107	650	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.8	橙色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による条線と隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2283	
107	651	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.7	橙色	白色粒子	胴部	斜行条線に直交するように粘土紐貼付 波状に粘土紐貼付	破片	721	
108	652	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による条線と隆線 粘土紐貼付	破片	3507	
108	653	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.3	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石、石英	胴部	粘土貼付後に半截竹管内側による隆線 半截竹管内側による沈線	破片	3222	
108	654	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.2	橙色	白色粒子	胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付 棒状工具による沈線	破片	3283	
108	655	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.0	明赤褐色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2250	
108	656	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.1	赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	波状に粘土紐貼付 半截竹管内側による隆線	破片	3198	
108	657	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.6	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	地文に半截竹管内側による条線 粘土紐貼付 波状に粘土紐貼付	破片	2437	
108	658	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.1	褐色	白色粒子、雲母	胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付 粘土紐貼付	破片	3339	
108	659	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.5	明赤褐色	白色粒子	胴部	粘土貼付後に半截竹管内側による隆線 地文は条線	破片	2380	
108	660	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.3	暗赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土紐貼付 半截竹管内側による隆線	破片	2397	
108	661	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.8	明褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付 半截竹管内側による隆線	破片	2382	
108	662	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	13.8	明褐色	白色粒子	胴部	縄文 波状に粘土紐貼付 半截竹管内側による隆線	破片	3135・3133	
108	663	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	4.7	明褐色	白・黒色粒子、長石、石英	胴部	半截竹管内側による隆線	破片	2259	
108	664	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.5	赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	粘土貼付 半截竹管内側による隆線	破片	3232	
108	665	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.5	赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による隆線	破片	1960	
108	666	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.0	極暗褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による隆線と沈線	破片	997	
108	667	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	21.2	明赤褐色	白色粒子	胴部	地文に半截竹管内側による条線と隆線	破片	2383・2258	
109	668	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.1	明褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	地文に縄文 半截竹管内側による隆線	破片	2729	
109	669	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.6	橙色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線	破片	1554	
109	670	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.2	褐色	白色粒子、雲母、長石	胴部	半截竹管内側による条線	破片	1住一括	
109	671	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.0	にぶい赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による隆線と条線	破片	2519	
109	672	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.4	橙色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線 波状に粘土紐貼付	破片	858	
109	673	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.7	赤褐色	白色粒子、角閃石	胴部	半截竹管内側による条線 波状に粘土紐貼付	破片	2975	
109	674	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.0	褐色	白色粒子	胴部	波状に粘土紐貼付 粘土紐貼付	破片	774	
109	675	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.2	橙色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線	破片	2512	
109	676	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.6	褐色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部	粘土貼付 半截竹管内側による隆線	破片	2281	
109	677	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	18.1	にぶい黄橙色	白色粒子、金雲母、長石、石英	胴部	半截竹管内側による隆線 波状に粘土紐貼付	破片	2814	
109	678	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	17.7	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	縄文 波状に粘土紐貼付	破片	3415	
109	679	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.7	褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	地文に縄文 粘土貼付後に半截竹管内側による押引	破片	3438	

109	680	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.5	橙色	白色粒子	胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付	破片	3137	
109	681	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.5	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	地文に縄文 波状に粘土紐貼付	破片	2564	
110	682	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.0	褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 沈線	破片	2578	
110	683	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.5	明赤褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 波状沈線	破片	3160	
110	684	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	3.5	明褐色	白色粒子、雲母	胴部	棒状工具による沈線	破片	1 住一括	
110	685	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	24.6	明赤褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 波状沈線	破片	2563	
110	686	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	5.6	褐色	白色粒子、金雲母	胴部	半截竹管内側による条線	破片	2230	
110	687	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	10.8	褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	3139	
110	688	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	6.0	暗褐色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部	条線 沈線	破片	2507	
110	689	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.8	褐色	白色粒子、雲母	胴部	地文に縄文 沈線による連弧文　半截竹管内側による隆線	破片	2262	
110	690	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	11.3	明赤褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 半截竹管内側による隆線	破片	2512	
110	691	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.4	明赤褐色	白色粒子	胴部	地文に縄文 半截竹管内側による沈線	破片	2207	
110	692	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.4	明赤褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	縄文 半截竹管内側による隆線	破片	2270	
111	693	曽利Ⅱ式	小型深鉢	–	8.0	12.3	赤褐色	白色粒子	胴部～底部	半截竹管内側による隆線と押引	80	2813	内面にスス付着
111	694	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.6	明赤褐色	白色粒子、雲母	胴部	半截竹管内側による隆線と押引	破片	1 住 –AE–5 一括	1 号住居跡
111	695	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	9.8	暗赤褐色	白色粒子	胴部	半截竹管内側による隆線と押引	破片	2362 3201	
111	696	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	12.3	黄褐色	白色粒子	胴部	縄文か	破片	2550	スス付着
111	697	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.4	褐色	白・黒色粒子、金雲母	胴部	縄文	破片	565	
111	698	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	7.2	明赤褐色	白色粒子	胴部	縄文	破片	2580	
111	699	曽利Ⅱ式	深鉢	–	(7.0)	13.0	褐色	白色粒子	胴部～底部	地文に条線 半截竹管内側による隆線と連弧状沈線	30	3367	スス付着
111	700	曽利Ⅱ式	深鉢	–	9.7	14.5	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英	胴部～底部	縄文 ミガキ	70	2845	
111	701	曽利Ⅱ式	深鉢	15.9	7.5	16.6	橙色	白・黒・赤色粒子、長石	胴部～底部	無文 ミガキ	60	2577	
112	702	曽利Ⅱ式	深鉢	–	(9.5)	1.8	浅黄橙色	白色粒子	底部	木葉痕	破片	1 号集石一括	
112	703	曽利Ⅱ式	深鉢	–	–	8.5	褐色	白色粒子	胴部	波状に粘土紐貼付 縄文	破片	3357	
112	704	曽利Ⅱ式	深鉢	–	13.4	11.8	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英、長石	胴部～底部	無文	破片	3377	
112	705	曽利Ⅱ式	台付土器	–	9.8	6.2	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石	底部（台部）	粘土貼付 棒状工具による沈線 ナデ	破片	2583	
112	706	曽利Ⅲ式	鉢	–	–	4.9	褐色	白色粒子、雲母	口縁部	無文	破片	2 住 –3505	
112	707	曽利Ⅳ式	壷	–	–	5.7	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	胴部	棒状工具による沈線	破片	1542	
112	708	曽利Ⅳ式	深鉢	–	–	5.8	にぶい赤褐色	白・黒色粒子、長石	胴部	半截竹管内側による条線 粘土紐貼	破片	1936	
112	709	曽利Ⅳ式	深鉢	–	(7.6)	12.2	明赤褐色	白色粒子	胴部～底部	無文	40	3512	
112	710	加曽利 E2 式	浅鉢	14.0	6.4	7.9	黒褐色	白色粒子、雲母	口縁部～底部	地文に縄文 粘土紐貼付後に半截竹管内側による隆線	100	2653	異系統土器
113	711	加曽利 E4 式	深鉢	–	–	7.4	橙色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	胴部	縄文	破片	3485	
113	712	称名寺式	深鉢	–	–	5.7	明赤褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、石英	胴部	縄文 沈線	破片	1216	
113	713	不明	鉢	–	(8.6)	4.2	にぶい黄褐色	白色粒子	底部	無文	破片	2 住 –2972	2 号住居跡
113	714	不明	鉢	–	(9.2)	5.3	明褐色	白色粒子	胴部～底部	無文	破片	2 住 –2935	2 号住居跡
113	715	不明	鉢	–	(9.4)	10.5	明褐色	白・黒色粒子	胴部～底部	無文	破片	2 住 –2929	2 号住居跡
113	716	不明	坏または皿	(10.0)	(15.4)	3.0	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	底部に棒状工具による凹み	20	3 住 –3358	3 号住居跡
113	717	近世	段重	(15.2)	–	3.0	灰白色	緻密、均一	口縁部～底部	磁器・染付・たこ唐草文様	破片	3 炉一括	3 号住居跡
113				横	厚さ	縦							
113	718	中期	土偶	3.3	3.0	3.2	赤褐色	金雲母	頭部	目・口は刺突 沈線	破片	2852	1 号配石 石棒の横
113	719	中期	土偶	3.8	3.4	3.5	褐色	白色粒子、雲母	胴部	沈線	破片	1551	AK–9 区

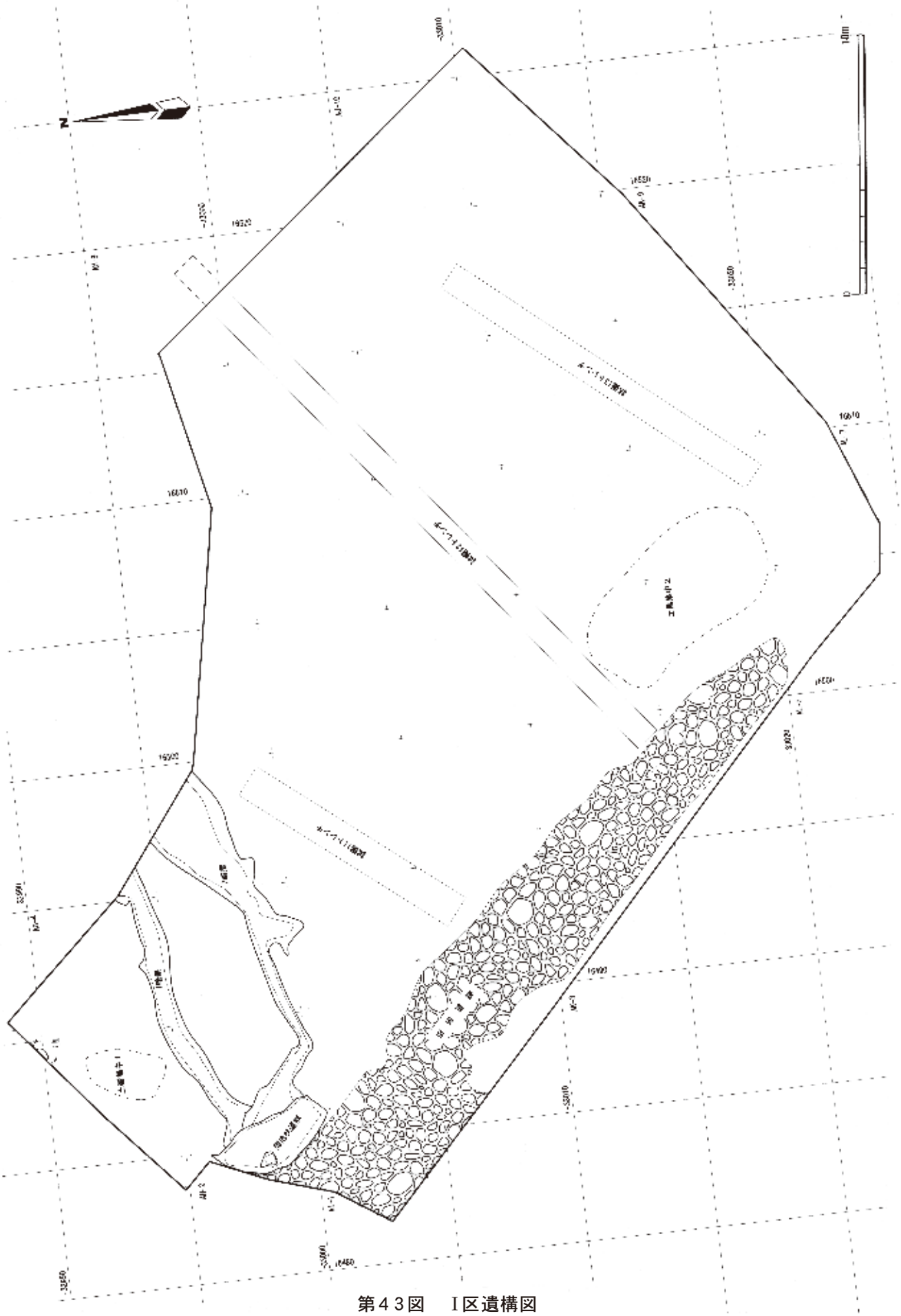
113	720	中期	土偶	7.1	3.9	8.9	褐色	白色粒子	頭部～胴部	頭部に棒状圧痕、沈線、胸部に乳房貼付と胸帯文、背中に紋付文、左耳に貫通しない孔、右耳に貫通孔	40	2821	木質の芯棒あり スス付着 AD–8 区
114	721	中期	土偶	8.0	3.5	6.2	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	角押引文	60	一括	AG–3 区 接合資料 木芯痕
114	722	中期	土偶	5.0	3.0	6.7	明赤褐色	白色粒子、雲母	胴部	ナデ	30	546	AK–6 区 木芯痕
114	723	中期	土偶	6.0	4.3	7.1	明赤褐色	白色粒子	胴部	ナデ、沈線、正中線、へそ貼付、デルタ文 胸部と臀部に芯棒痕	50	2217	1 号住居跡 木芯痕
114	724	中期	土偶	5.7	3.3	6.4	褐色	白色粒子	胴部	沈線、乳房貼付	50	一括	AD–6 区 スス付着 木芯痕
114	725	中期	土偶	3.7	2.7	5.6	明褐色	白色粒子	胴部	沈線、正中線、乳房貼付、へそ貼付	50	666	2 暗渠 AH–4
115	726	中期	土偶	5.7	5.1	8.0	明赤褐色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線	破片	3212	
115	727	中期	土偶	6.3	4.7	5.9	明赤褐色	白色粒子	胴部～脚部	隆線で臀部を表現、へそ剥落 底部に貫通しない孔 胴部と脚部が一体の立像土偶	破片	2268	AG–7 1 号集石の横
115	728	中期	土偶	3.8	1.6	3.1	褐色	白色粒子	胴部	乳房貼付 板状土偶か	破片	一括	AC–9 区
115	729	中期	土偶	3.3	2.9	5.9	橙色	白色粒子、金雲母	胴部	沈線、へそ剥落	破片	一括	AF–8 区
115	730	中期	土偶	3.6	1.8	2.5	明赤褐色	白色粒子	腕部	ナデ	破片	一括	
115	731	中期	土偶	7.2	1.9	2.4	明赤褐色	白色粒子	胴部～腕部	沈線、乳房貼付	破片	一括	AF–5 区
116	732	中期	土偶	4.4	2.9	5.9	明褐色	白色粒子、雲母	胴部～脚部	ナデ 腹部が膨らみ、妊娠を表現	破片	一括	AC– 12 区
116	733	中期	土偶	3.5	2.5	2.1	橙色	白色粒子、金雲母	脚部	ナデ	破片	一括	
116	734	中期	土偶	3.8	4.2	2.8	明赤褐色	白色粒子、雲母	脚部	ナデ	破片	3920	木芯痕
116	735	中期	土偶	2.5	3.8	4.7	明褐色	白色粒子	右脚	沈線 芯棒痕あり	破片	一括	AG–8 区
116	736	中期	イノシシ型土笛	3.0	2.3	6.6	褐色	白色粒子	頭部～足部	ナデ 臀部と足を平らに整形 腹部に膨らみあり妊娠を表現 頭部の表現はなく孔が深く穿たれている	100	3101	イノシシ形土笛 臀部と足部を平らに整形 妊娠の表現あり AE–11 区
116	737	中期	土製品か	1.2	1.2	3.7	褐色	白色粒子、雲母	–	手捏ねか　ナデ	100	2855	用途不明の土製品
116	738	中期	匙状土製品	3.3	1.5	8.7	褐色	白色粒子、雲母	匙部	ヘラ削りか ナデ	80	1119	欠損は匙部のみ
		中期		口径	底径	器高							
117	739	中期	ミニチュア土器	(2.9)	(2.4)	4.1	にぶい褐色	白色粒子	口縁部～底部	縦方向に波状沈線	30	一括	AG–8 区
117	740	中期	ミニチュア土器	(5.2)	(3.2)	1.4	明褐色	金雲母	口縁部～底部	口唇部に沈線による刻み目、横方向に沈線、折り返し口縁 指頭痕	30	一括	AF–9 区
117	741	中期	ミニチュア土器	5.2	2.6	2.9	明赤褐色	白・黒色粒子	口縁部～底部	バスケット状の浅鉢形を模し、口縁部は突起状の装飾が施されている 器形が楕円形 突起状の装飾は欠損・磨耗	70	1424	AG–4 区
117	742	中期	ミニチュア土器	2.6	–	2.5	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	口唇部に棒状工具による刻み目、胴部に棒状工具による横方向の刻み目がある貼付文が 2 単位	40	3519	Pit29
117	743	中期	ミニチュア土器	5.3	–	3.1	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	ナデ	40	1993	4 号土坑
117	744	中期	ミニチュア土器	4.4	(2.6)	2.3	明赤褐色	白色粒子	口縁部～底部	ナデ、脚付	40	43	2 号暗渠
117	745	中期	ミニチュア土器	–	(5.5)	(2.7)	褐色	金雲母	脚部	ナデ	破片	一括	AB–3
117	746	中期	ミニチュア土器	–	4.4	(4.0)	明褐色	白色粒子	胴部～底部	ナデ	30	3220	
117	747	中期	ミニチュア土器	–	(2.5)	(3.8)	褐色	白色粒子	胴部～底部	無文 内面に炭化物付着	30	一括	AG–7 区
117	748	中期	ミニチュア土器	–	(4.8)	(1.9)	にぶい褐色	白色粒子	胴部～底部	縦・斜め方向に沈線 内面に炭化物付着	破片	一括	AE–8 区
117	749	中期	ミニチュア土器	–	(3.8)	(3.9)	褐色	白色粒子、雲母	胴部～底部	沈線	破片	一括	AG–2 区
117	750	中期	ミニチュア土器	–	(4.0)	(1.3)	明褐色	白色粒子、雲母	底部	無文	破片	一括	AH–2 区
117	751	中期	ミニチュア土器	–	(4.2)	(1.7)	褐色	白色粒子、雲母	底部	無文	破片	一括	AI–3 区
117	752	中期	ミニチュア土器	–	–	(3.5)	明赤褐色	白色粒子	胴部～底部	縦方向に沈線	破片	一括	AG–7 区
117	753	中期	ミニチュア土器	–	4.3	(2.2)	明赤褐色	白色粒子	胴部～底部	底部が方形 底部側面に指頭圧痕か	40	1200	土器集中 1

		中期		横	厚さ	縦							
117	754	中期	土製円盤	4.5	1.1	4.8	明褐色	白色粒子、金雲母	–	周囲研磨、欠損、隅丸四角形か	90	1008	土器集中 2
117	755	中期	土製円盤	4.0	0.8	4.0	明褐色	白色粒子、雲母	–	沈線 周囲研磨	100	一括	AE–10 区
117	756	中期	土製円盤	4.8	1.0	4.4	明褐色	白色粒子、雲母	–	無文 周囲研磨弱い	100	一括	21 号土坑
117	757	中期	土製円盤	4.5	1.2	4.6	褐色	白色粒子、雲母	–	無文 周囲研磨	100	一括	AD–8 区
117	758	中期	土製円盤	3.1	0.8	3.0	橙色	白色粒子	–	無文 周囲研磨	100	一括	AG–7 区
118	759	中期	土製円盤	3.6	1.0	3.9	明褐色	白・黒色粒子、雲母	–	縄文 周囲研磨	90	一括	AF–5 区
118	760	中期	土製円盤	4.2	1.4	4.1	褐色	白色粒子、雲母	–	無文 周囲研磨弱い 隅丸四角形	100	一括	AE–3 区
118	761	中期	土製装飾品	3.1	0.9	4.8	明褐色	白色粒子	–	ナデ 逆二等辺三角形に整形 貫通孔が 3 つ（1 つ欠損）	90	3143	AG–8 区 土製装飾品
118	762	中期	台形土器	–	–	–	黄褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	受け面～脚部	ナデ 受け面使用痕、脚部摩滅弱い	70	2691	2 号住居跡
118	763	中期	台形土器	–	–	–	明褐色	白・黒・赤色粒子、金雲母、長石	受け面～脚部	ナデ 脚部摩滅弱い	50	3185	
119	764	中期	台形土器	–	–	–	褐色	白・黒色粒子、金雲母	受け面	ナデ 受け面のみ、受け面使用痕弱い	40	2601	AF–6 区 3 号埋甕付近
119	765	中期	台形土器	–	–	–	明褐色	白・黒・赤色粒子、長石	受け面	ナデ 受け面のみ、受け面断面が算盤状	破片	2244	AG–7 区
119	766	中期	台形土器	–	–	–	褐色	白・黒・赤色粒子	受け面	ナデ	破片	3308	AF–7 区
119	767	中期	台形土器	–	–	–	明黄褐色	白・黒・赤色粒子	受け面	ナデ	破片	3136	2 号住居跡炉上
119	768	中期	台形土器	–	–	–	褐色	白・黒色粒子、金雲母	受け面	ナデ 受け面に使用痕	破片	610	AH–4 区
図版番号	遺物番号	時期	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	石　　材	–	–	残存率（%）	注　　記	備　　考
119	769	縄文時代	打製石斧	10.4	4.7	1.4	87	ホルンフェルス	–	–	100	S2587	
119	770	縄文時代	打製石斧	10.6	3.7	0.9	49	頁岩	–	–	100	S1079	土器集中 1
119	771	縄文時代	打製石斧	14.2	5.0	2.2	184	ホルンフェルス	–	–	100	S3065	
119	772	縄文時代	打製石斧	19.5	8.9	2.9	613	ホルンフェルス	–	–	100	S2506	
120	773	縄文時代	磨製石斧	10.3	3.1	2.4	113	緑色岩	–	–	70	S1536	
120	774	縄文時代	磨製石斧	14.8	5.1	3.3	368	緑色岩	–	–	95	S2529	
120	775	縄文時代	磨り石	15.3	6.9	6.1	1006	安山岩	–	–	100	S3492	
120	776	縄文時代	磨り石	11.8	7.8	5.0	733	安山岩	–	–	100	S3422	20 土坑
120	777	縄文時代	磨り石	6.3	6.0	5.6	266	安山岩	–	–	100	S3342	
120	778	縄文時代	磨り石	8.9	6.8	6.0	499	花崗岩	–	–	100	S2634	
120	779	縄文時代	凹み石	7.4	4.7	4.9	267	安山岩	–	–	100	S2905	
121	780	縄文時代	石皿	10.9	10.9	4.2	724	安山岩	–	–	100	S3145	
121	781	縄文時代	石皿	24.3	27.2	5.5	5500	安山岩	–	–	80	20 土 –3421	20 土坑
121	782	縄文時代	石皿	26.5	22.5	7.0	7250	安山岩	–	–	100	S3515	1 号配石
121	783	縄文時代	石皿	23.5	18.0	6.5	3500	安山岩	–	–	40	S1509	AK–9 区
121	784	縄文時代	石皿	18.2	18.6	7.7	3000	安山岩	–	–	50	S3334	2 号住居跡
121	785	縄文時代	石皿	29.2	26.5	15.5	11000	安山岩	–	–	50	S131	暗渠
122	786	縄文時代	台石	47.5	19.5	13.7	23000	安山岩	–	–	100	S3514	1 号配石と 4 号住居跡の間の AE–9 区
122	787	縄文時代	立石	55.4	19.0	19.5	34000	安山岩	–	–	100	S3537	1 号配石
123	788	縄文時代	石棒	43.5	17.5	14.0	16500	安山岩	–	–	100	S3513	1 号配石 被熱痕あり
123	789	縄文時代	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	黒曜石	–	–	100	S248	先端部欠損
123	790	縄文時代	石鏃	2.1	1.6	0.5	1.1	黒曜石	–	–	100	S796	先端部欠損
123	791	縄文時代	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.5	黒曜石	–	–	100	S1406	先端部欠損
123	792	縄文時代	石鏃	1.8	1.4	0.4	0.7	黒曜石	–	–	100	S1662	基部欠損
123	793	縄文時代	石鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	黒曜石	–	–	100	S3235	基部欠損

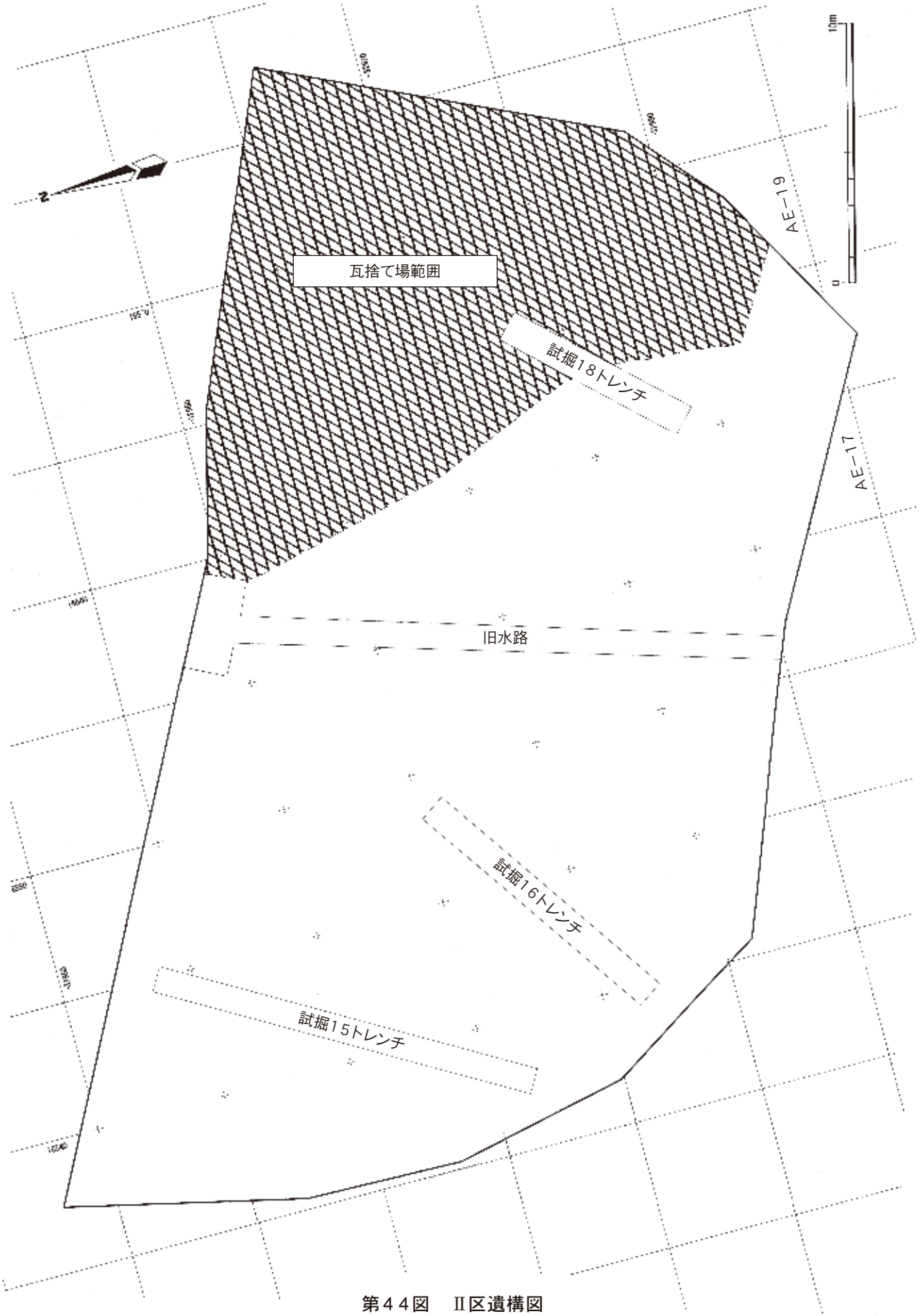
123	794	縄文時代	石鏃	1.9	1.4	0.6	1.0	黒曜石	–	–	100	S2025	基部欠損
123	795	縄文時代	石鏃	2.0	1.5	0.3	0.5	黒曜石	–	–	100	S2028	基部欠損
123	796	縄文時代	石鏃	1.6	1.6	0.4	0.5	黒曜石	–	–	100	S2546	基部欠損
124	797	縄文時代	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.5	黒曜石	–	–	100	S3443	基部欠損
124	798	縄文時代	石鏃	1.8	1.4	0.4	0.7	黒曜石	–	–	100	S2676	基部欠損
124	799	縄文時代	石鏃	1.6	1.7	0.4	0.7	水晶	–	–	100	S2882	基部欠損
124	800	縄文時代	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.3	黒曜石	–	–	100	表採一括	基部欠損
124	801	縄文時代	石鏃	2.1	1.4	0.5	1.0	黒曜石	–	–	100	S3150	基部欠損
124	802	縄文時代	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.4	水晶	–	–	100	AC–7 一括	先端部欠損
124	803	縄文時代	石鏃	2.7	2.3	0.4	1.3	黒曜石	–	–	100	S1920	先端部欠損
124	804	縄文時代	石鏃	1.6	1.4	0.4	0.5	黒曜石	–	–	100	S3114	先端部欠損
124	805	縄文時代	石鏃	2.5	2.3	0.4	1.4	黒曜石	–	–	90	S2589	基部欠損
124	806	縄文時代	石鏃	1.5	1.2	0.5	0.3	黒曜石	–	–	90	AD–8 一括	基部欠損
124	807	縄文時代	石鏃	1.3	1.4	0.5	0.4	チャート	–	–	90	AC–7 一括	基部欠損
124	808	縄文時代	石鏃	2.0	1.4	0.5	0.7	水晶	–	–	90	S2933	基部欠損
124	809	縄文時代	石鏃	2.2	1.9	0.4	0.7	安山岩	–	–	90	S3085	基部欠損
124	810	縄文時代	石鏃	1.9	1.3	0.5	0.4	黒曜石	–	–	80	S1769	基部欠損
124	811	縄文時代	石鏃	1.3	1.3	0.4	0.3	黒曜石	–	–	90	S1265	基部欠損
124	812	縄文時代	石鏃	1.6	1.3	0.5	0.6	水晶	–	–	90	2 暗渠一括	基部欠損
124	813	縄文時代	石鏃	2.4	1.6	0.5	1.1	水晶	–	–	60	S2496	基部欠損 未製品か
124	814	縄文時代	石鏃	2.3	1.5	0.5	0.8	水晶	–	–	70	AD–9 一括	基部欠損
124	815	縄文時代	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.5	黒曜石	–	–	80	S3062	基部欠損
124	816	縄文時代	石鏃	1.9	1.1	0.4	0.7	黒曜石	–	–	80	S3088	基部欠損
125	817	縄文時代	石鏃	1.8	2.0	0.5	1.6	水晶	–	–	70	S2500	基部欠損
125	818	縄文時代	石鏃	1.4	1.4	0.5	0.5	黒曜石	–	–	80	S3174	先端部欠損
125	819	縄文時代	石鏃	1.5	1.6	0.3	0.3	黒曜石	–	–	80	AK–7 一括	先端部欠損
125	820	縄文時代	石鏃	1.2	1.6	0.4	0.5	水晶	–	–	80	S3171	先端部欠損
125	821	縄文時代	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.6	黒曜石	–	–	70	2 暗渠一括	基部欠損
125	822	縄文時代	石鏃	2.2	1.6	0.6	1.2	水晶	–	–	80	S2870	水晶製石鏃 基部欠損
125	823	縄文時代	石鏃	2.6	1.8	0.5	1.6	黒曜石	–	–	80	S2726	基部欠損
125	824	縄文時代	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.5	チャート	–	–	60	AE–9 一括	
125	825	縄文時代	石鏃	2.3	1.6	0.5	1.2	黒曜石	–	–	80	2 暗渠一括	
125	826	縄文時代	削器	3.5	1.5	0.9	3.6	黒曜石	–	–	90	S3139	
125	827	縄文時代	石匙	3.0	4.4	0.7	6.2	黒曜石	–	–	100	S2837	
125	828	縄文時代	石匙	2.2	2.6	0.6	2.0	黒曜石	–	–	70	2 暗渠一括	
125	829	縄文時代	石匙	3.2	4.5	0.9	7.5	黒曜石	–	–	100	S2594	未製品か
125	830	縄文時代	石匙	2.9	3.6	0.6	4.3	チャート	–	–	100	S3176	
126	831	縄文時代	石匙	10.1	2.1	8.3	96	泥岩安山岩	–	–	100	S622	
126	832	縄文時代	石匙	8.0	1.1	7.7	63	頁岩	–	–	90	S3156	
126	833	縄文時代	石匙	9.2	0.9	4.3	34	ホルンフェルス	–	–	100	S1332	
126	834	縄文時代	石匙	6.2	1.3	5.1	40	ホルンフェルス	–	–	100	S1537	



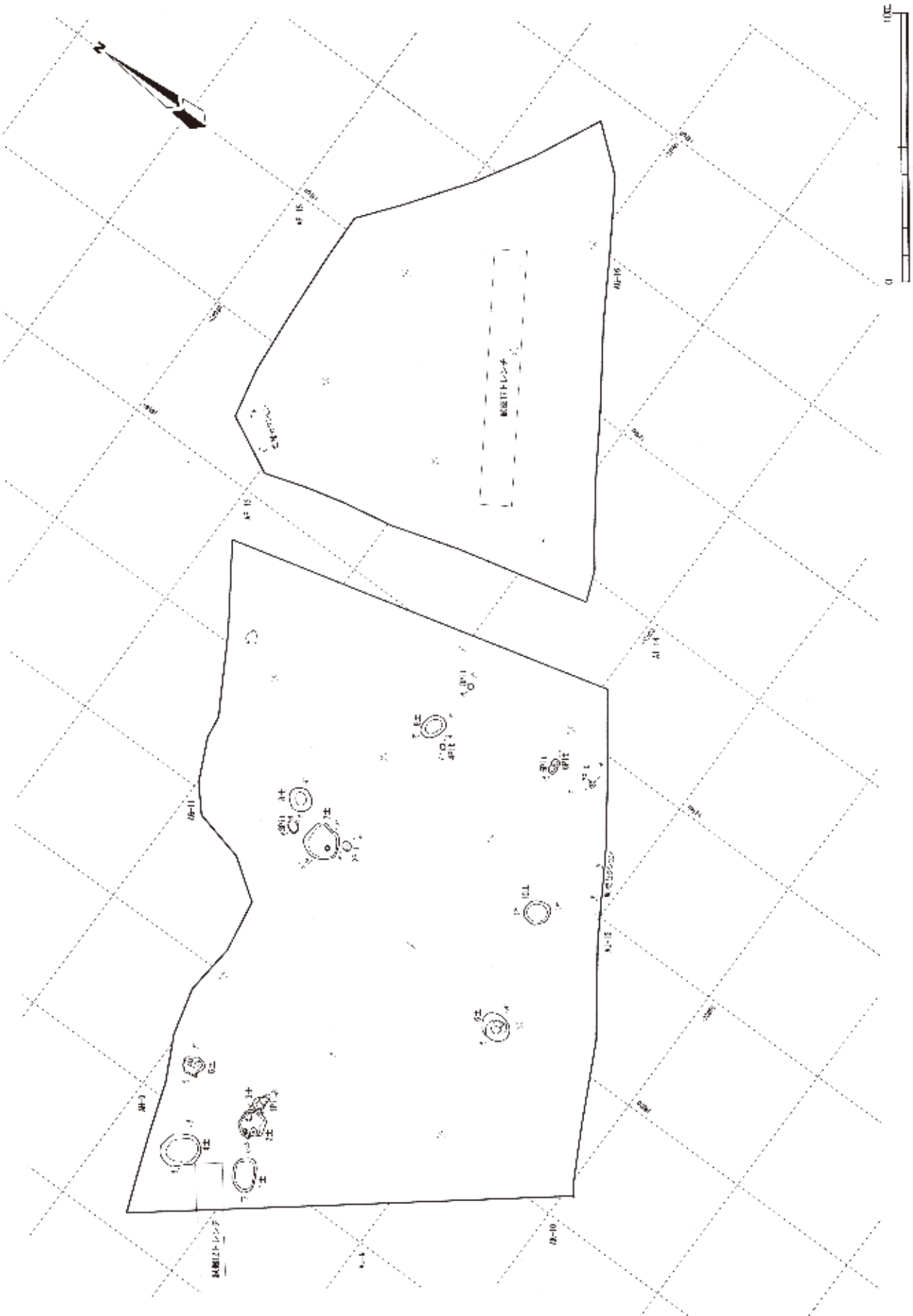
第４２図　上コブケ遺跡Ｂ区全体図



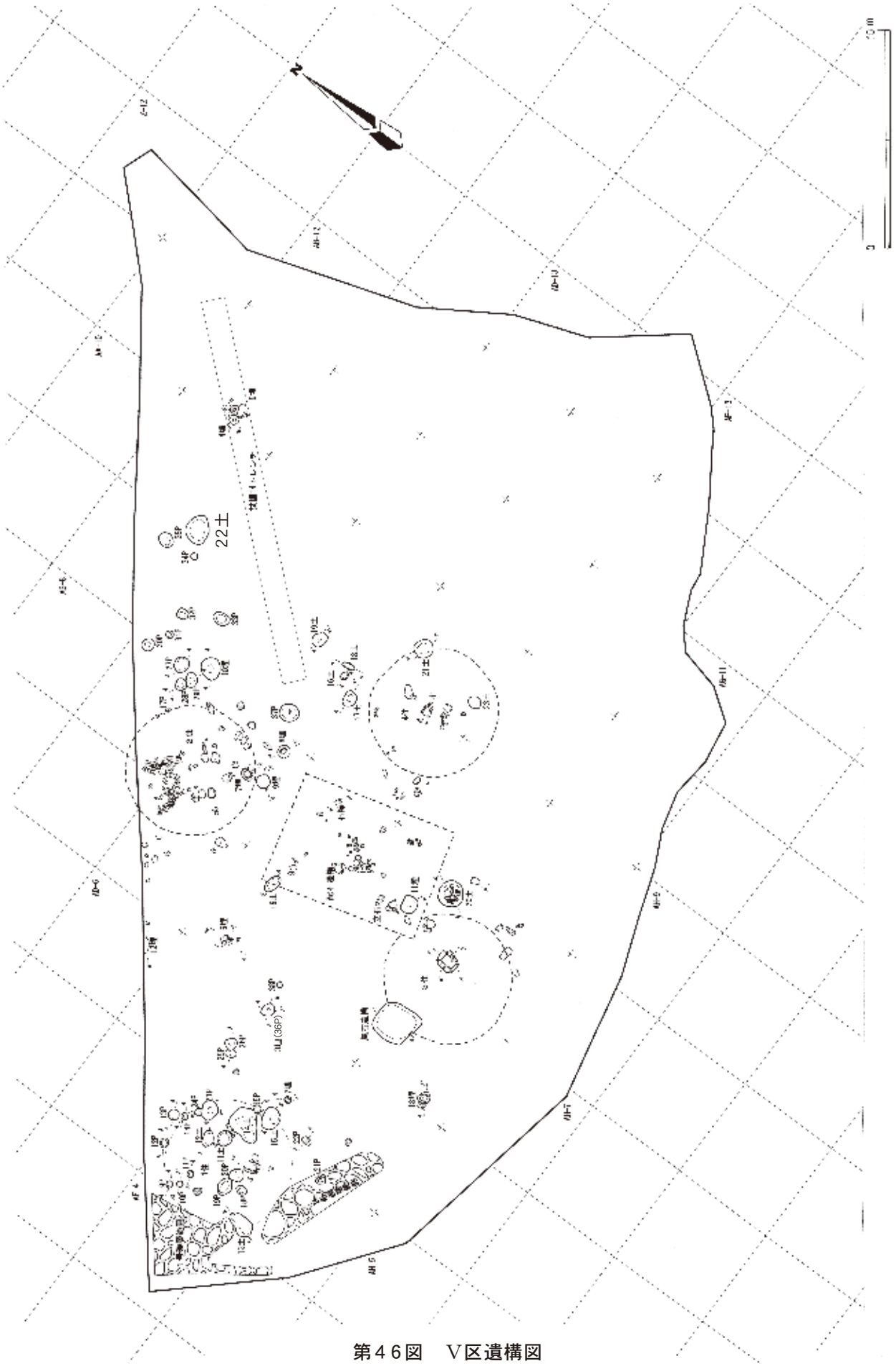
第４３図　Ｉ区遺構図



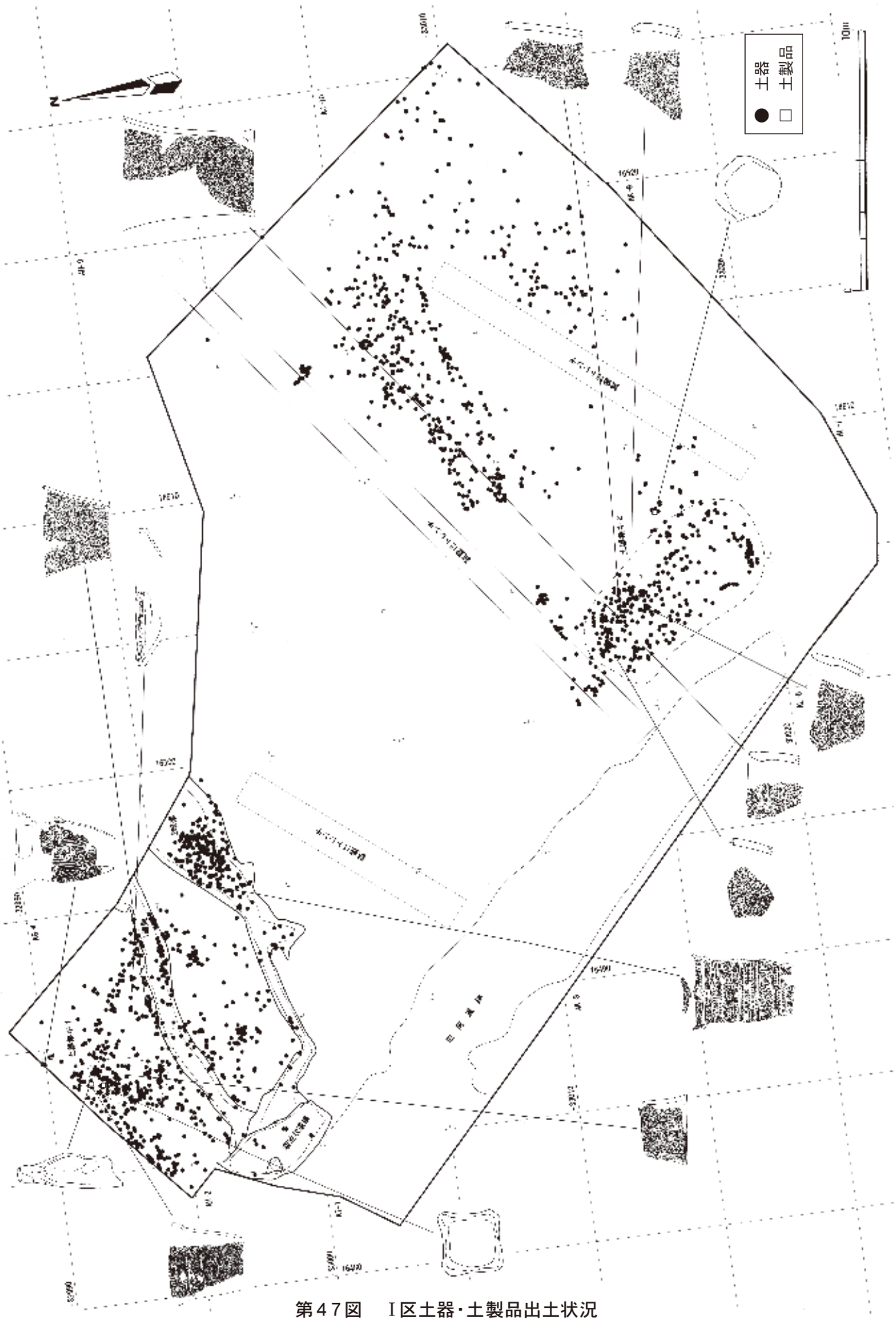
第４４図　Ⅱ区遺構図



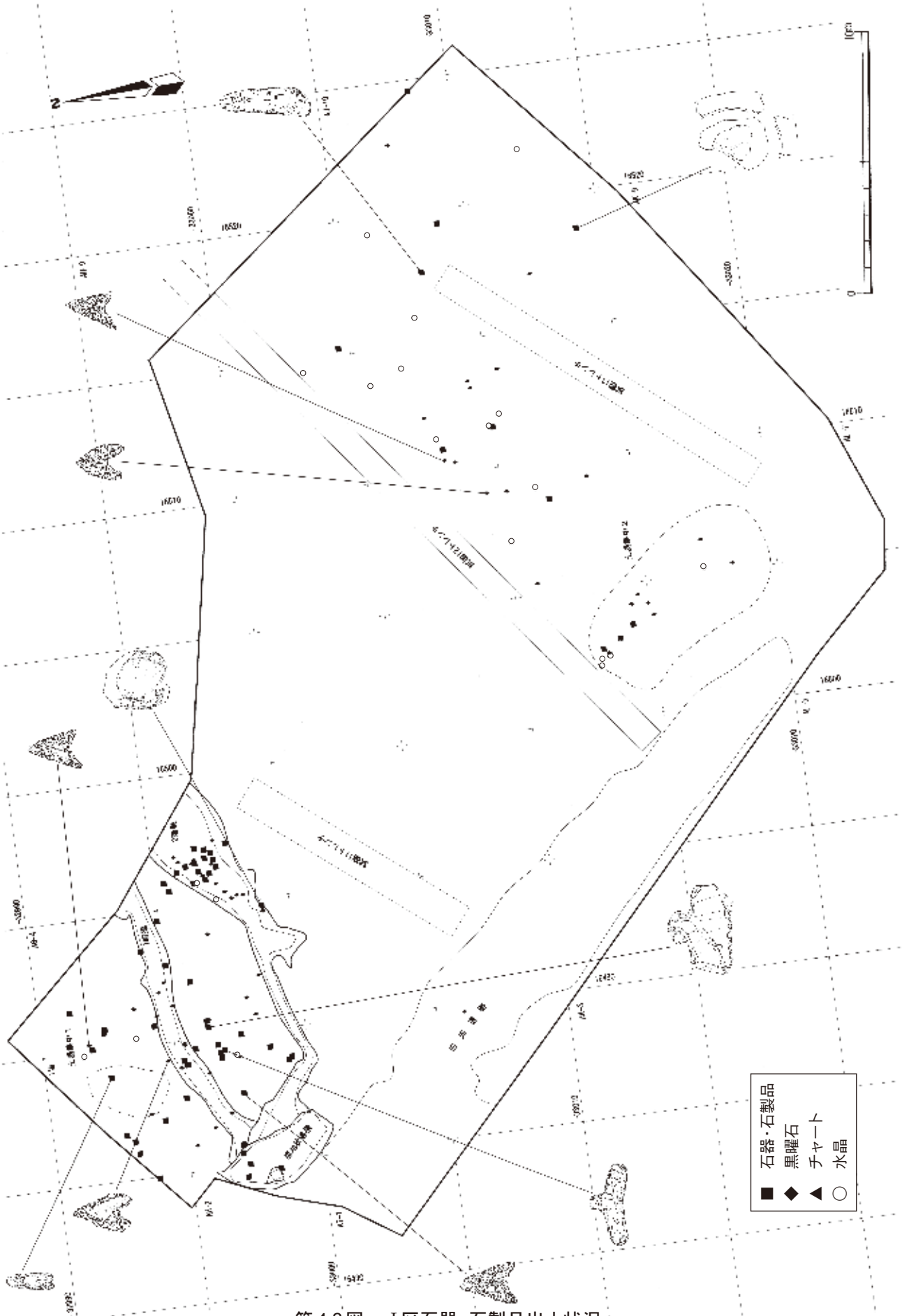
第４５図　Ⅲ・Ⅳ区遺構図



第４６図　Ｖ区遺構図

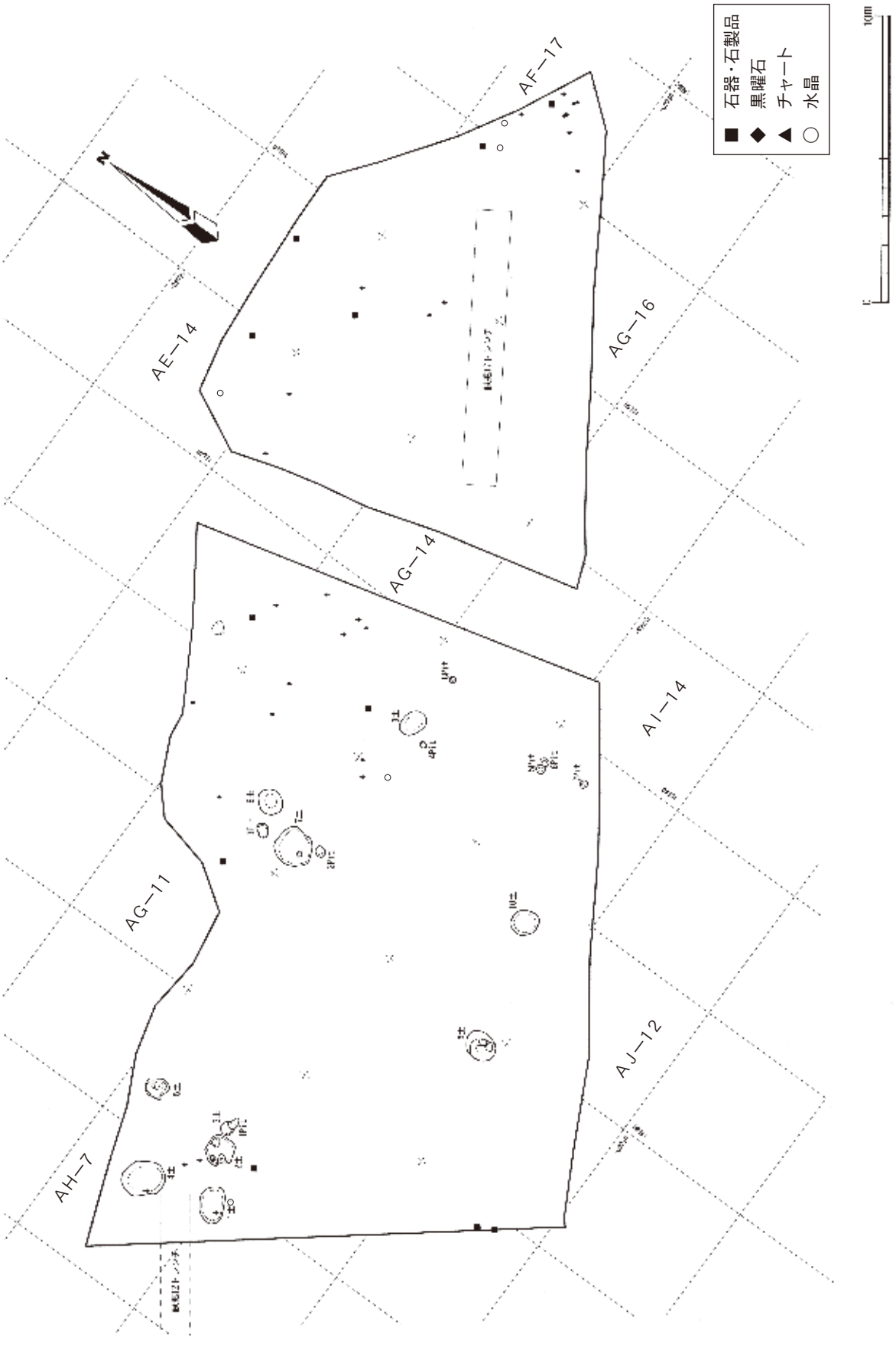


第47図　Ⅰ区土器・土製品出土状況

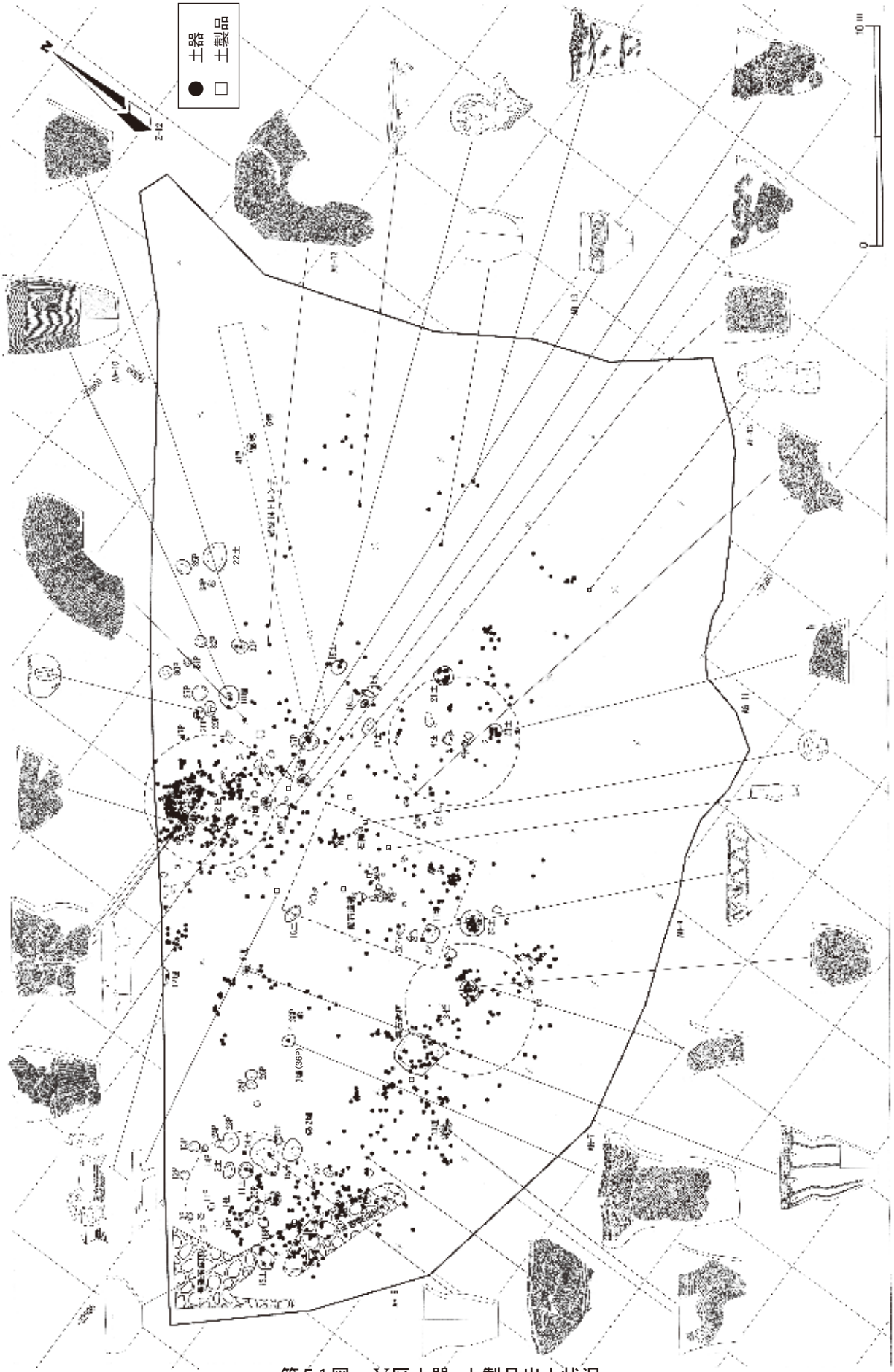


第４８図　Ⅰ区石器・石製品出土状況

第４９図　Ⅲ・Ⅳ区土器・土製品出土状況

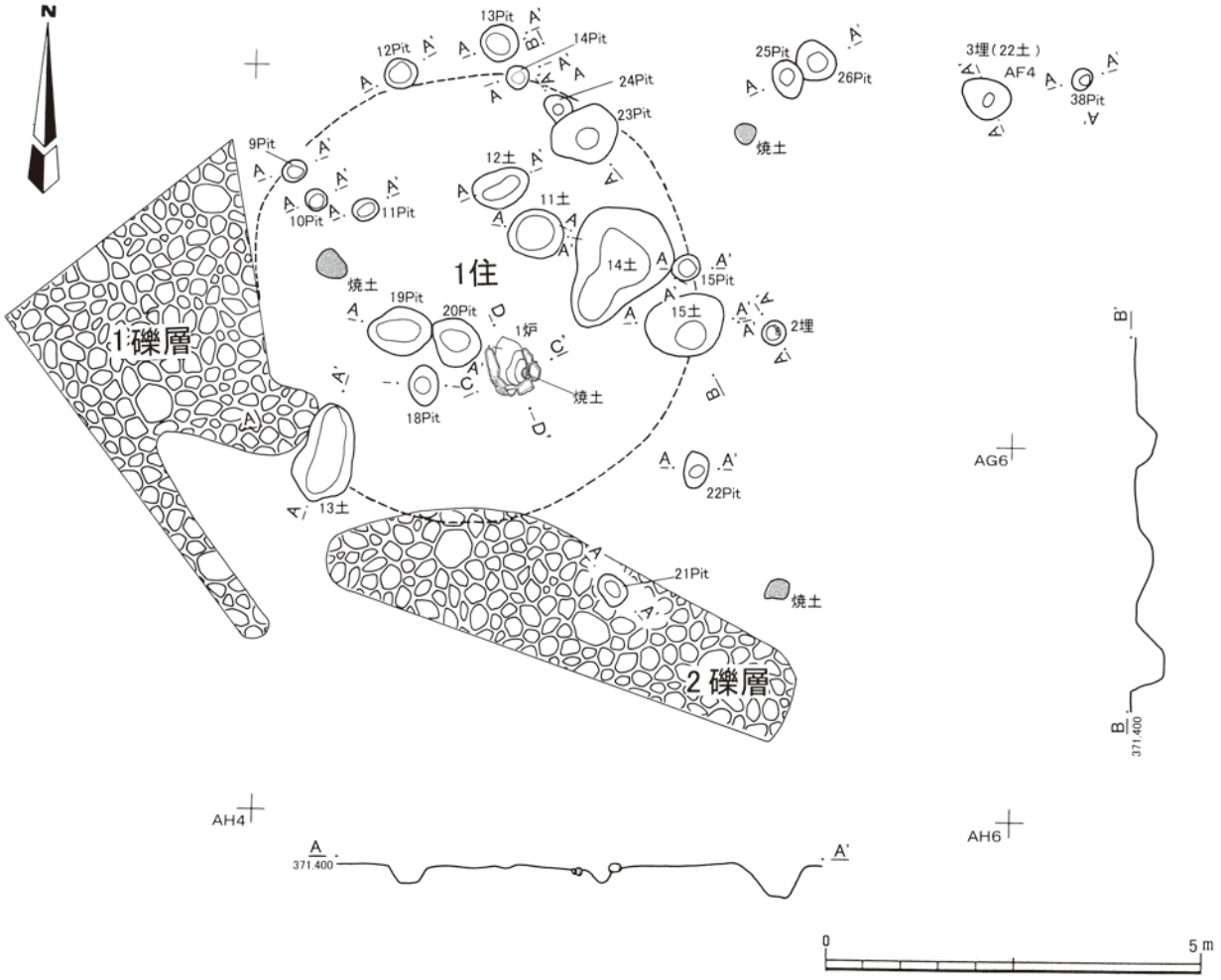


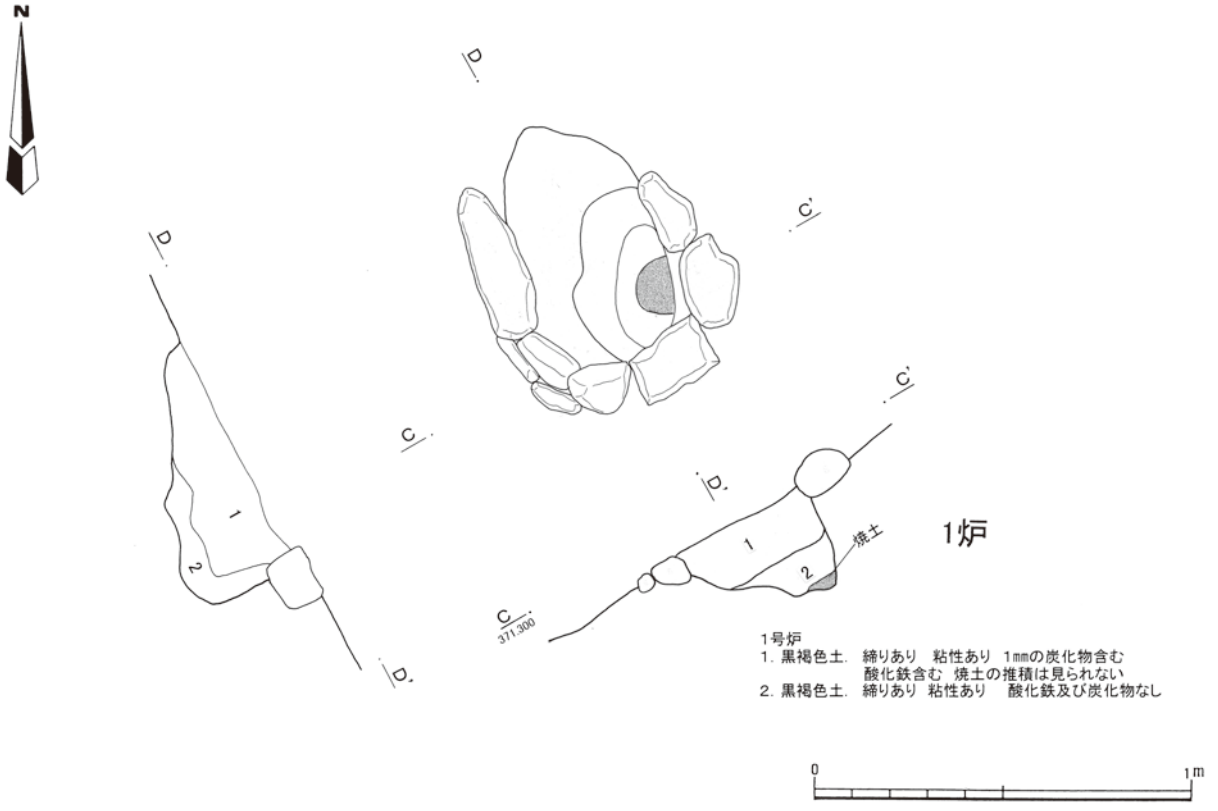
第５０図　Ⅲ・Ⅳ区石器・石製品出土状況



第51図　Ⅴ区土器・土製品出土状況

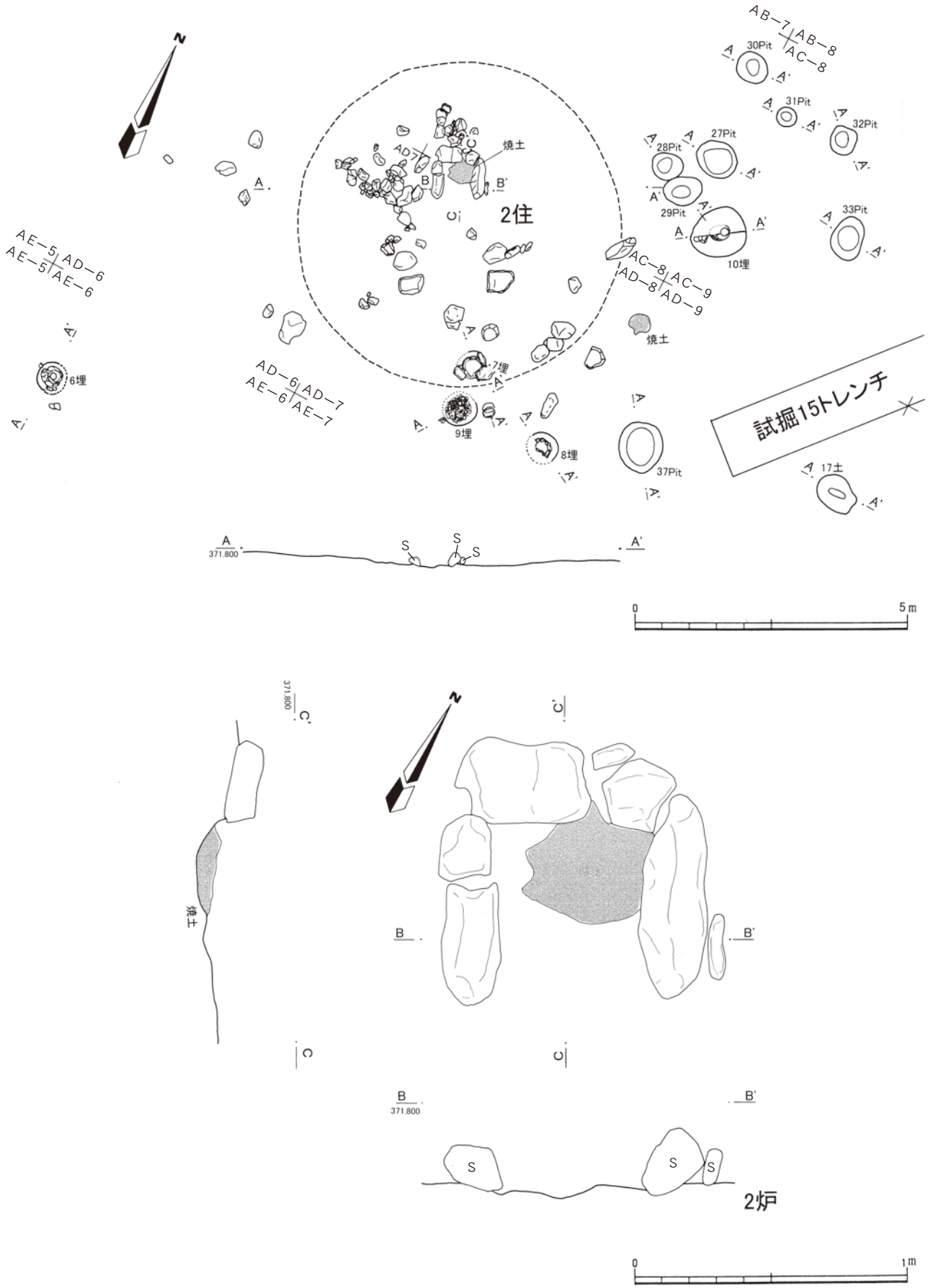
第52図　V区石器・石製品出土状況



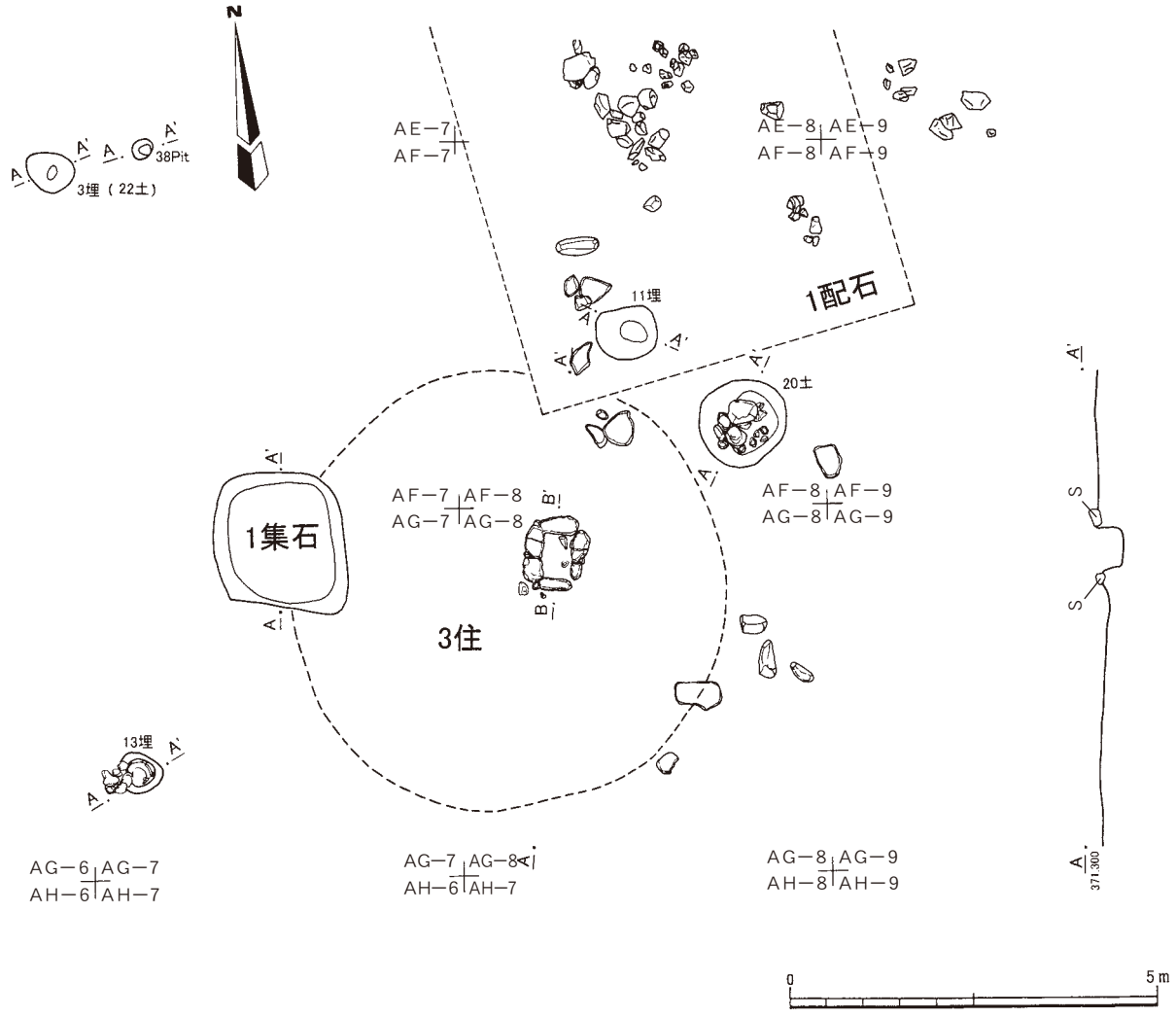


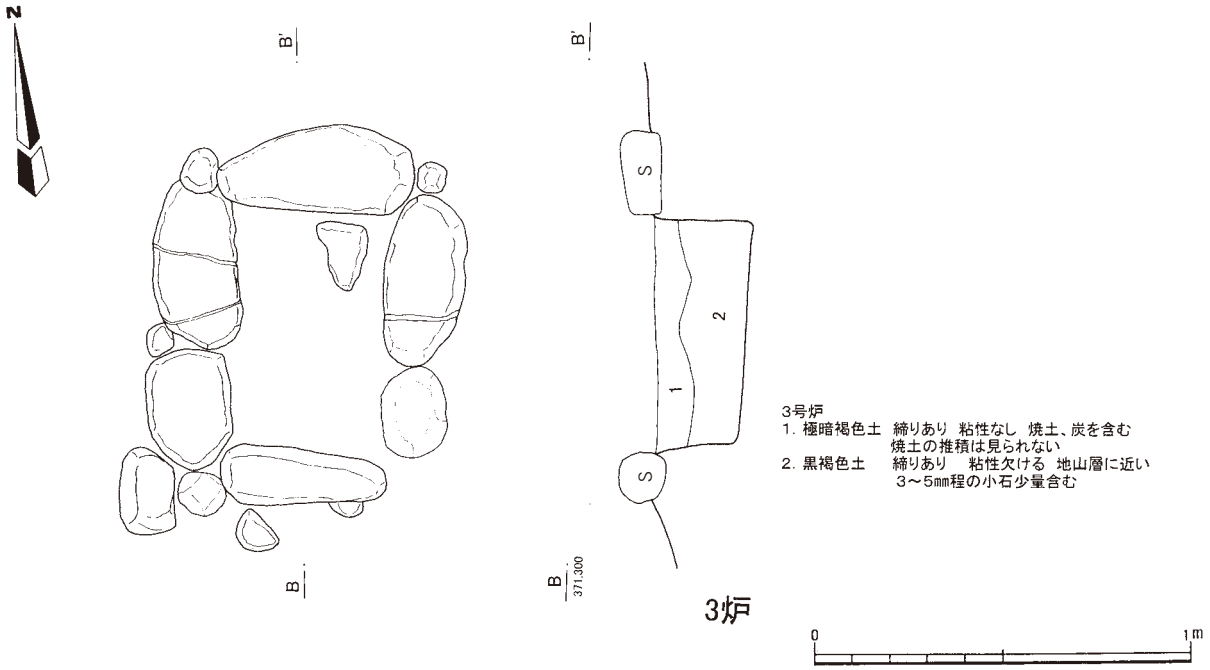
1号炉
1. 黒褐色土. 締りあり 粘性あり 1㎜の炭化物含む
酸化鉄含む 焼土の推積は見られない
2. 黒褐色土. 締りあり 粘性あり 酸化鉄及び炭化物なし

第５３図　1号竪穴住居跡

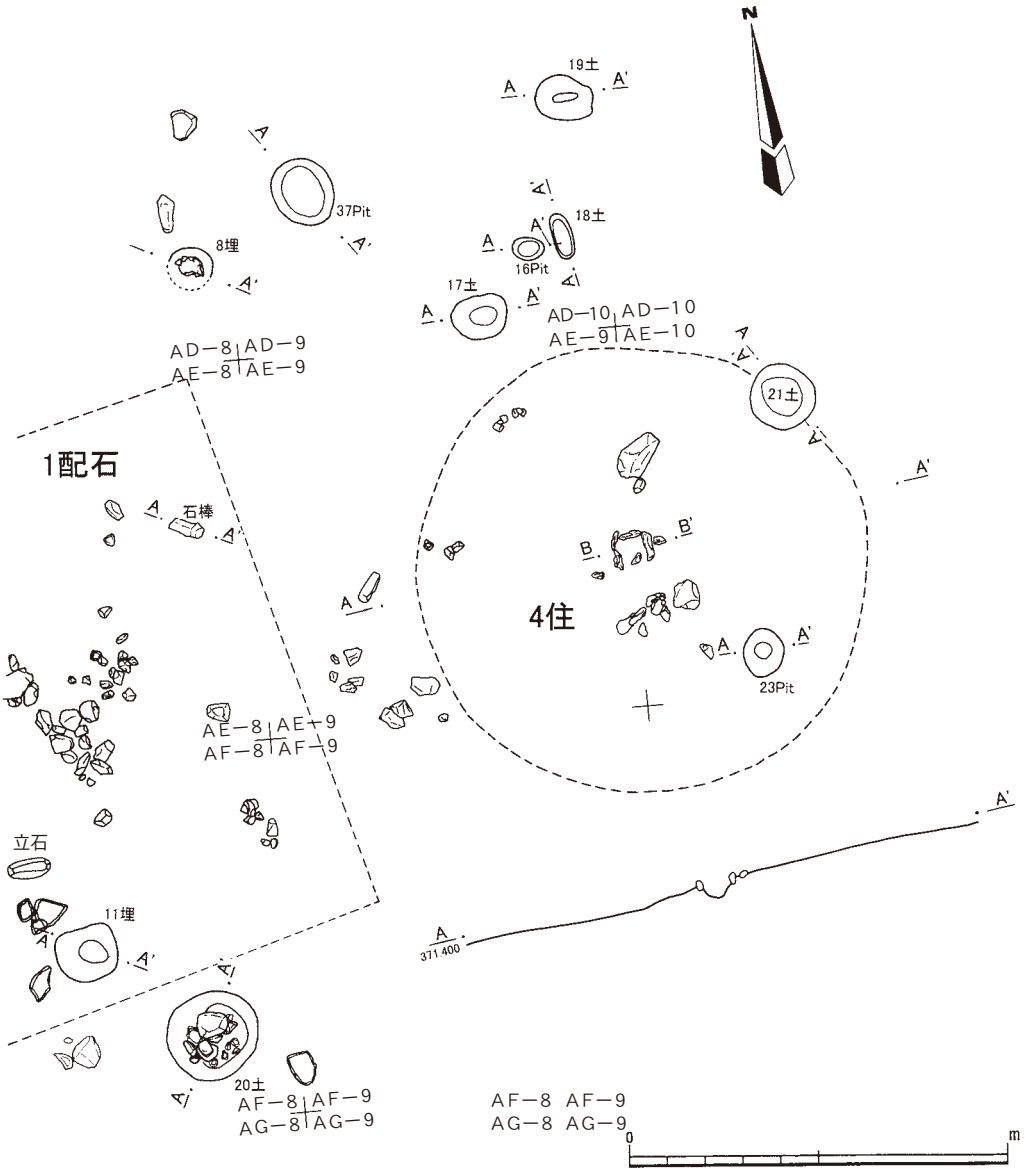


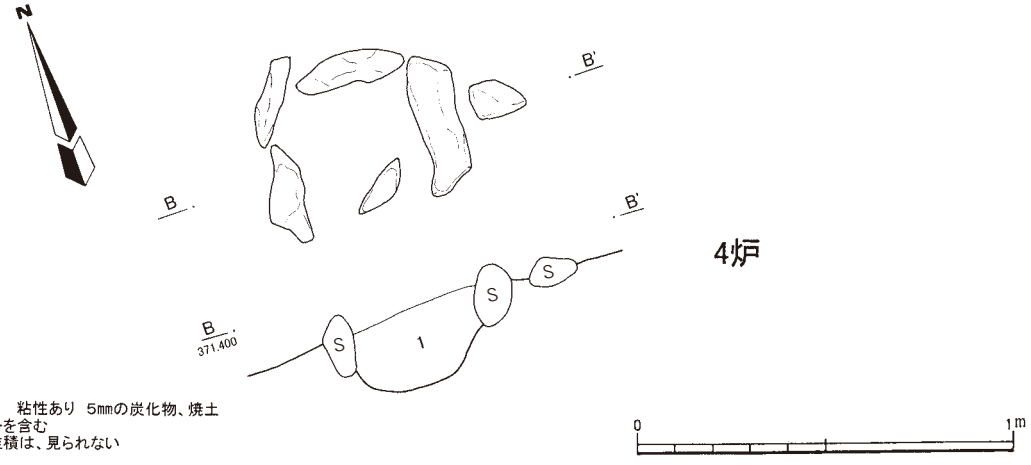
第５４図　２号竪穴住居跡





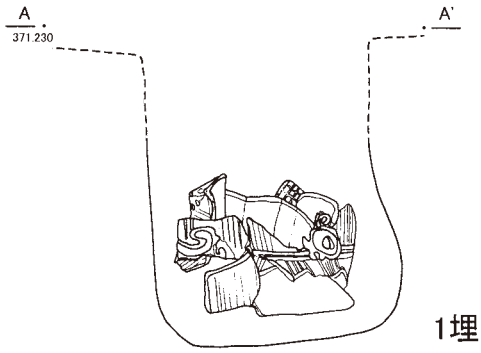
第５５図　３号竪穴住居跡



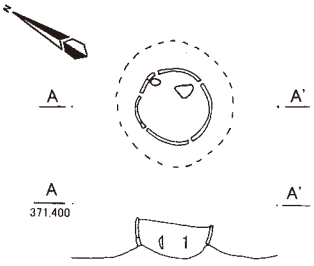


4号炉
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　5㎜の炭化物、焼土
黄色粒子を含む
焼土の推積は、見られない

第５６図　４号竪穴住居跡

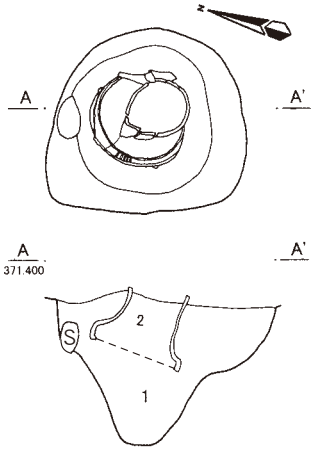


1埋



2埋

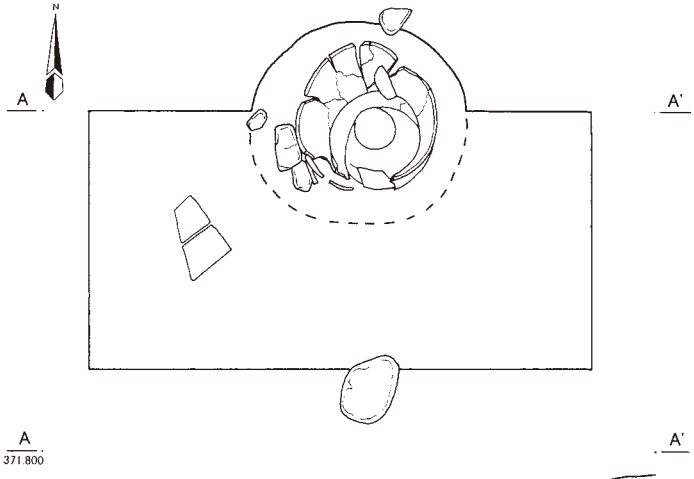
2号埋甕
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子含む
黄色粒子を微量含む　埋甕内覆土

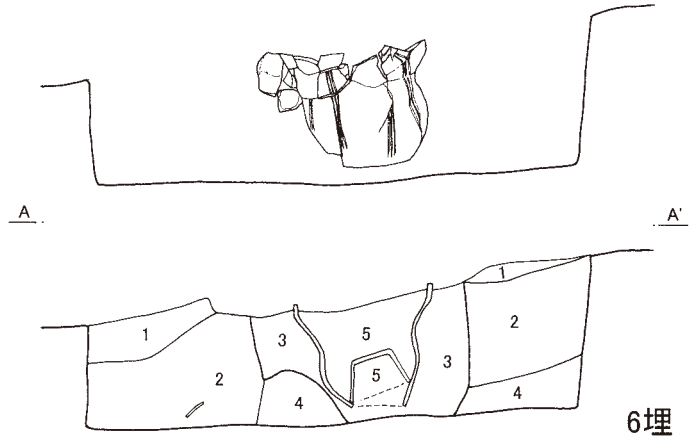


3埋

3号埋甕
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子含む
赤色、黄色粒子含む　埋甕内覆土

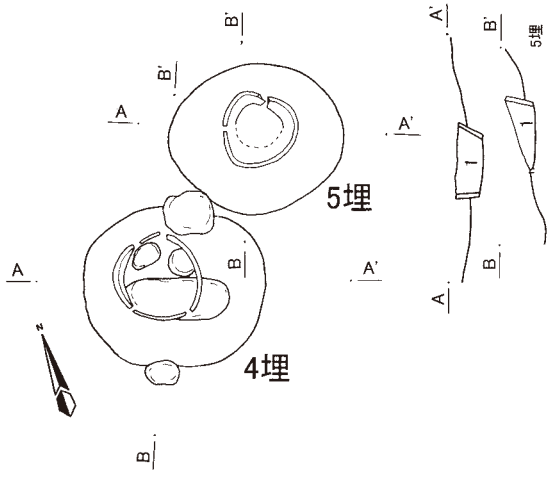
2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり
5mm炭化物微量含む
1～2cm黄色ブロック微量含む
赤色粒子微量含む





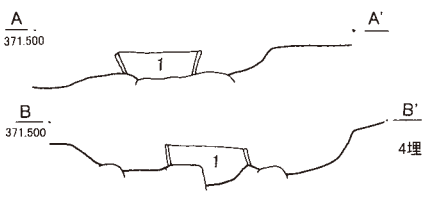
6埋

6号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子微量含む
赤色粒子微量含む　黄色粒子を含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5mm含む
赤色、黄色粒子を微量含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5mm含む
赤色、黄色粒子含む
4. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化粒子を極微量含む
黄色粒子を微量含む　地山ブロック含む
5. 黒色土　締りあり　粘性あり　炭化物3mm大微量含む
3mm大少礫含む



5埋

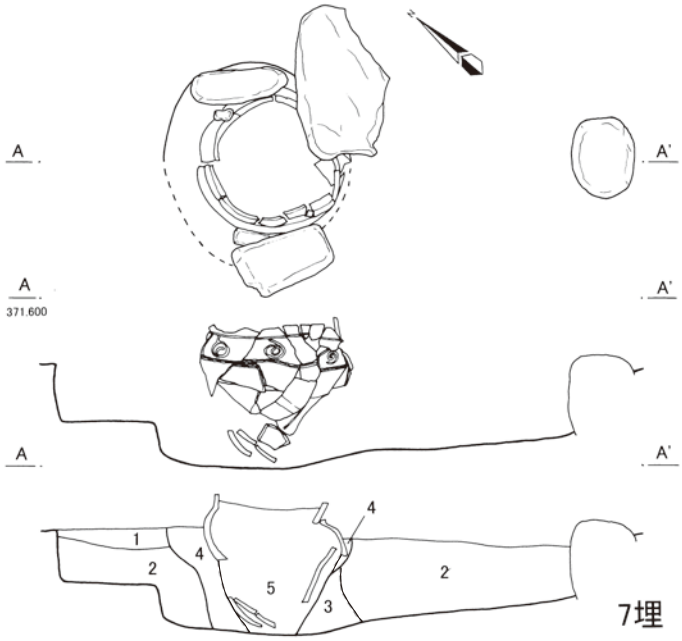
4埋



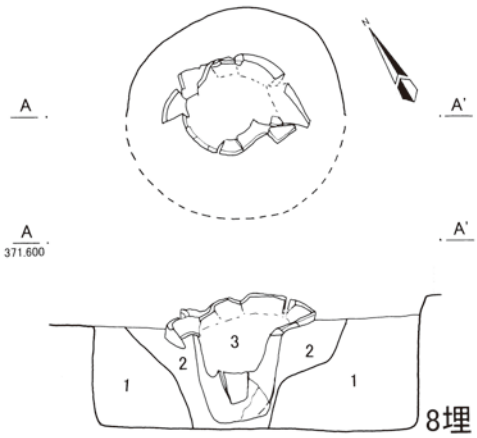
4号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化粒子を微量含む
黄色粒子多量含む　5mmの礫を微量含む

5号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化粒子を微量含む
黄色粒子多量含む　5mmの礫を微量含む

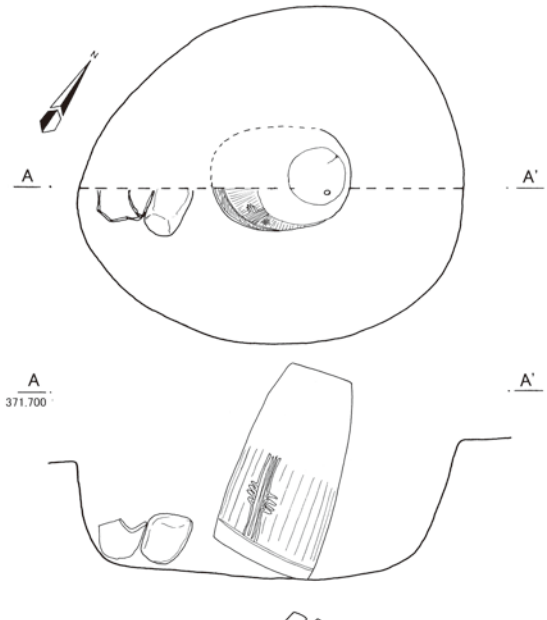
第57図　1～6号埋甕



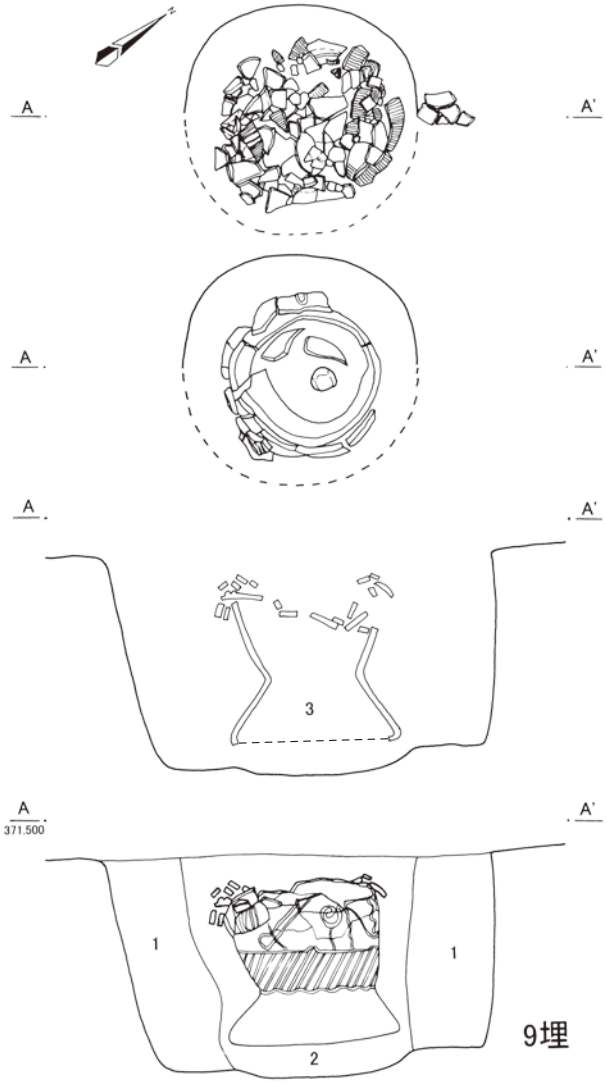
7号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子含む
赤色粒子、黄色粒子を微量含む
2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5㎜含む
黄色粒子を含む
3. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5㎜含む
黄色粒子を含み、少し黄色みが強い
4. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5㎜含む
赤色、黄色粒子を微量に含む
5. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～5㎜含む
赤色、黄色粒子を微量含む



8号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜を微量含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜を微量含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物3～10㎜少量含む

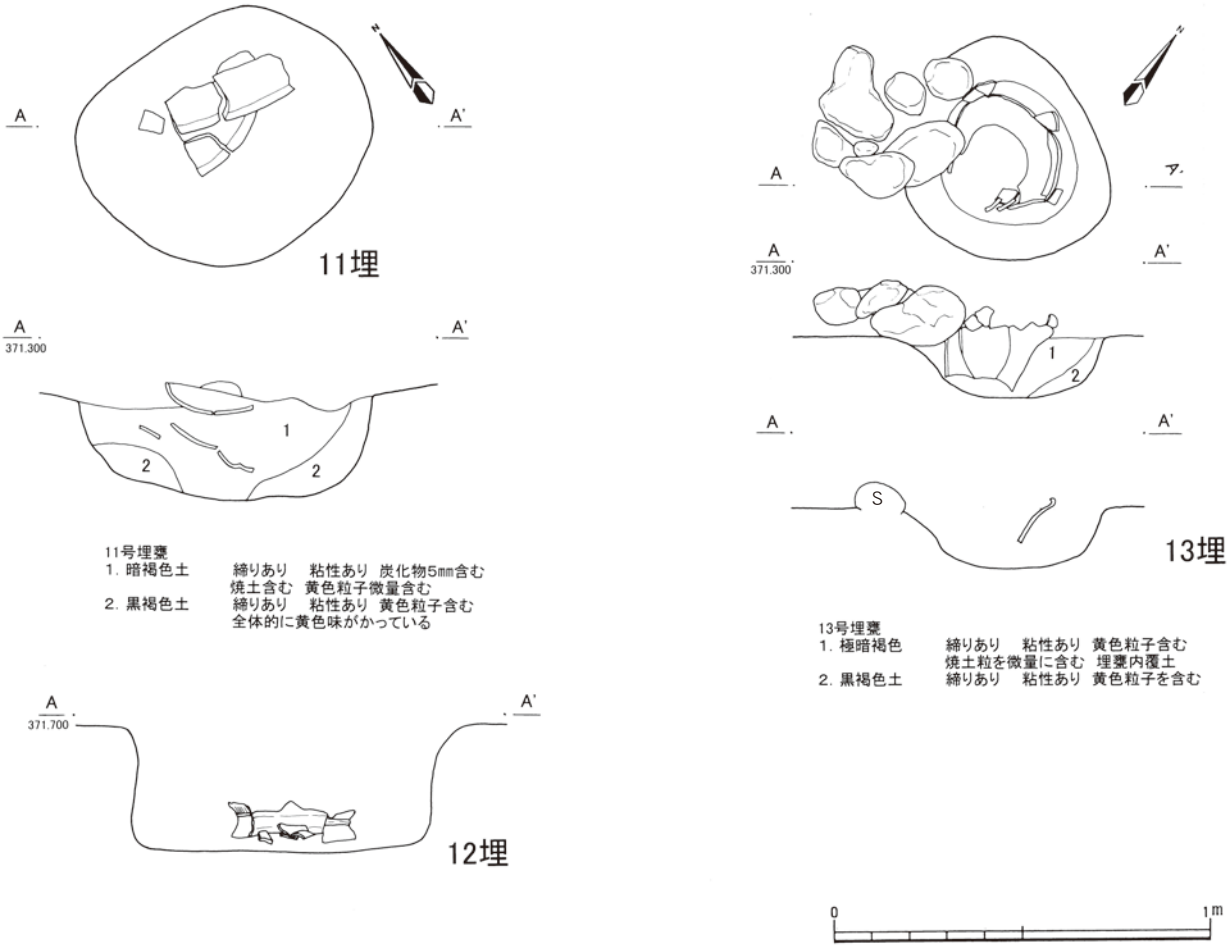


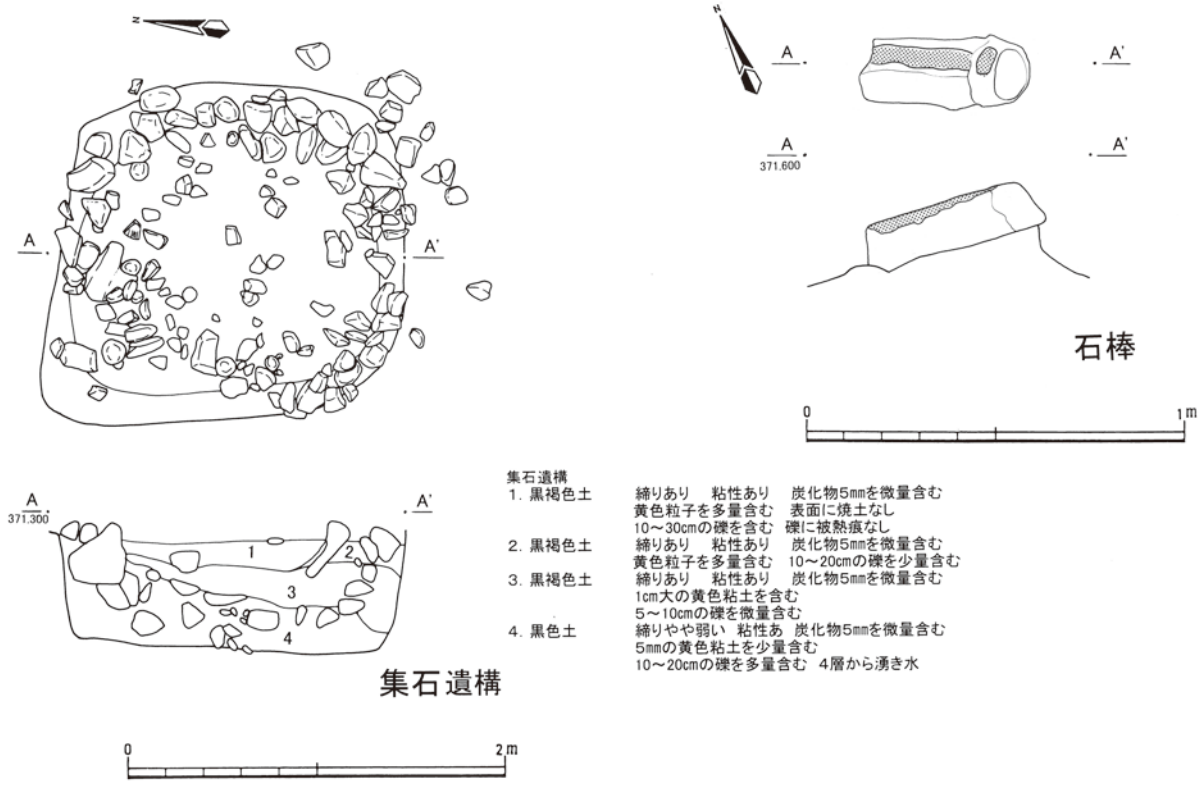
10号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜大及び小礫を含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜大含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物1㎜大含む



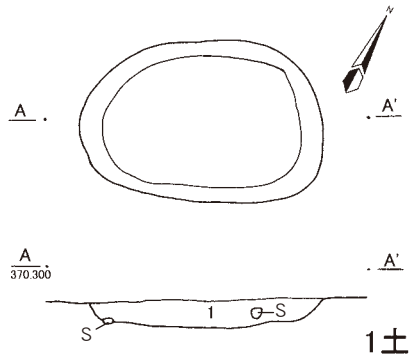
9号埋甕
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜微量含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜微量含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5㎜少量含む

第５８図　７～１０号埋甕

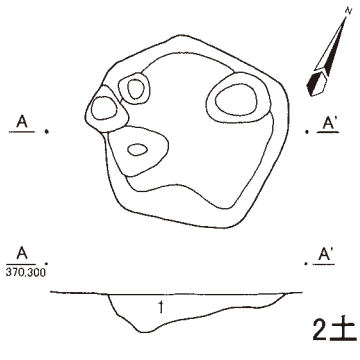




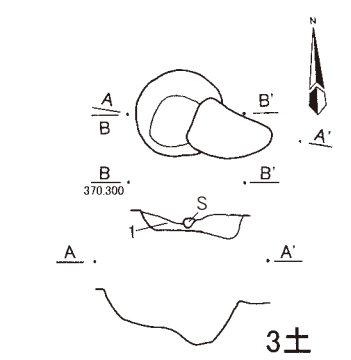
第５９図　１１～１３号埋甕・１号集石遺構・１号配石遺構内石棒



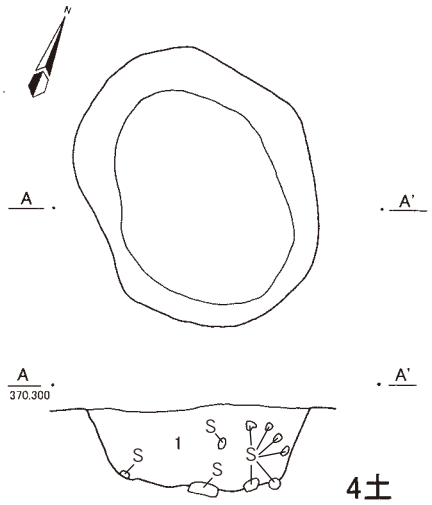
1号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い
明褐色の粘土1cm大のブロック含む
炭化物1mm大少量含む　赤色粒子微量含む
黄色粒子、酸化鉄粒子少量含む



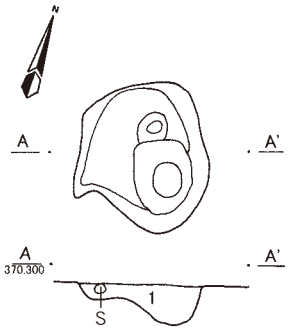
2号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い　炭化物1mm少量含む
明褐色の粘土1cm大のブロック含む
赤色粒子微量含む
黄色粒子、酸化鉄粒子少量含む



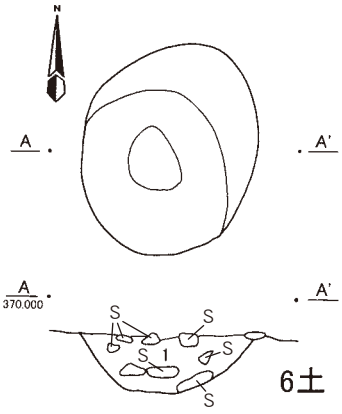
3号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い
炭化物1mm少量含む
明褐色の粘土1cm大のブロック含む
赤色粒子微量含む
黄色粒子、酸化鉄粒子少量含む



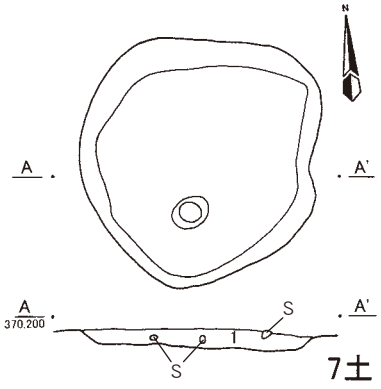
4号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い　炭化物1mm少量含む
明褐色の粘土1cm大のブロック含む
赤色粒子微量含む
黄色粒子、酸化鉄粒子少量含む



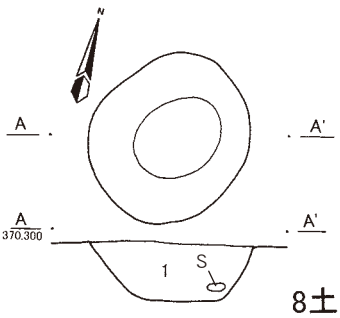
5号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い　炭化物
1mm少量含む
明褐色の粘土1cm大のブロック含む
赤色粒子微量含む
黄色粒子、酸化鉄粒子少量含む



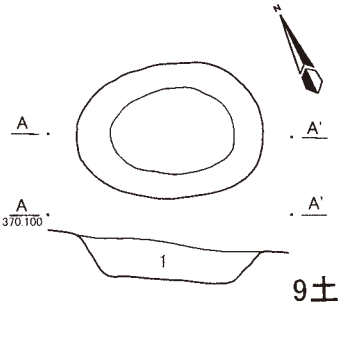
6号土坑
1. 黒色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄を含む
炭化物　赤色スコリア微量含む



7号土坑
1. 暗褐色粘質土　締り強い　粘性あり　炭化物3mm多量に含む
赤色スコリア微量、黄色スコリア含む

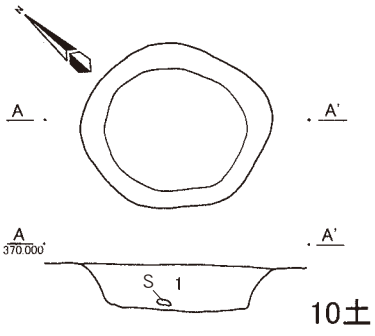


8号土坑
1. 黒褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い
赤色、黄色粒子含む
1cm大の炭化物を微量含む

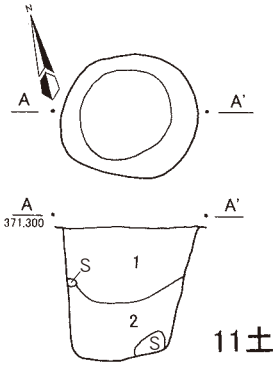


9号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄、
黄色粒子含む
赤色粒子微量含む

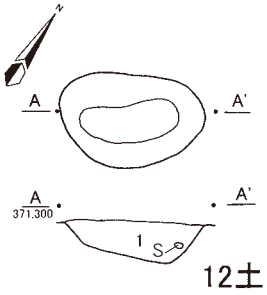
第60図　1～9号土坑



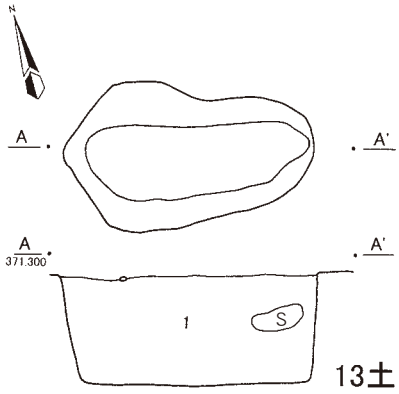
10号土坑
1. 黒褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い
赤色粒子、黄色粒子微量　酸化鉄含む
炭化物粒子微量に含む



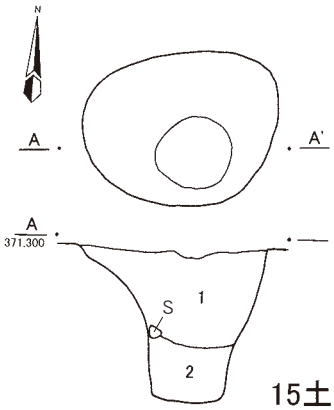
11号土坑
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり
5～10mmの焼土　5mmの炭化物含む
黄色粒子を微量に含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり
酸化鉄、黄色粒子含む



12号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり
酸化鉄、黄色粒子含む

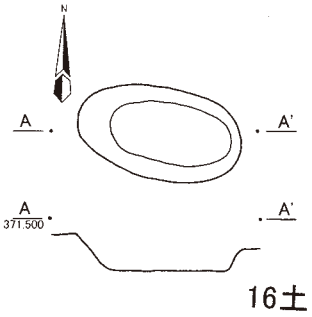


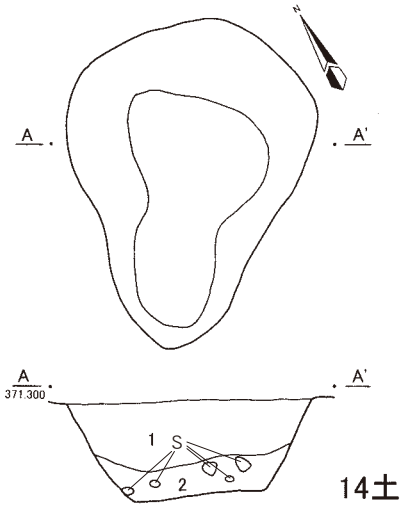
13号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い
1～2cmの炭化物微量含む
酸化鉄及び黄色粒子少量含む



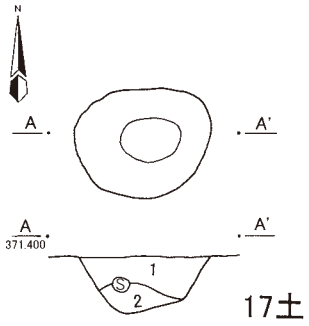
15号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　5mm炭化物含む
1～5mm酸化鉄　黄色粒子を含む

2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　5mm酸化鉄含む
炭化物、黄色粒子含む

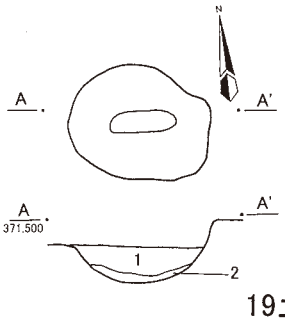




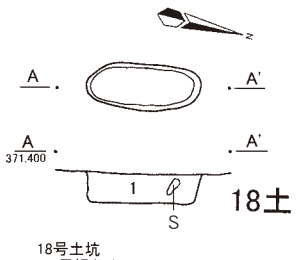
14号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　1cm焼土微量
5mm炭化物及び黄色粒子微量含む
酸化鉄、5cmの炭化物微量含む
2. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　5～10cm礫含む
5mm炭化物、酸化鉄、黄色粒子含む



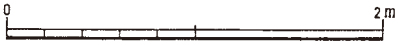
17号土坑
1. 黒褐色土　炭化物5mmを含む
2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　黄色粒子あり



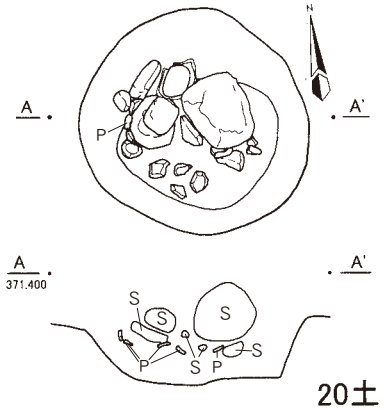
19号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　3～5mm炭化物を含む
2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　黄色粒子含む

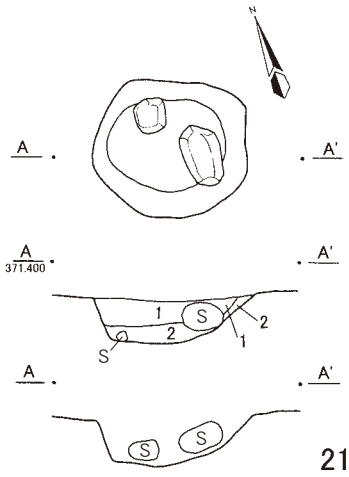


18号土坑
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり
炭化物5mmを含む

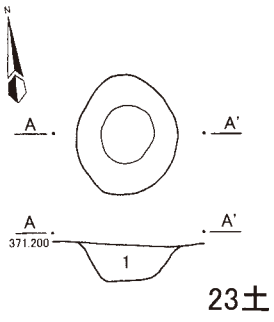


第61図　10～19号土坑

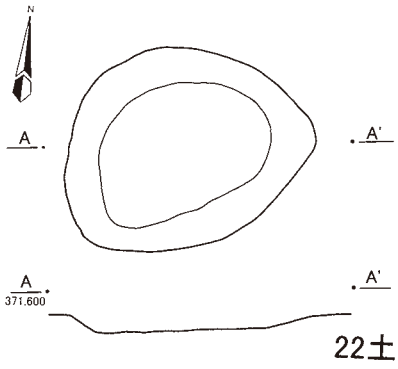


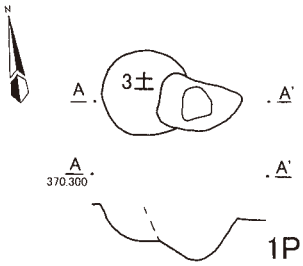


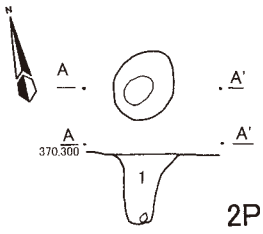
21号土坑
1. 黒褐色土　締りやや弱い　粘性なし
2. 暗褐色土　締りやや弱い　粘性なし



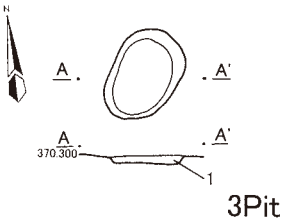
23号土坑
1. 暗褐色土　締りあり　粘性あり
5mm炭化物含む



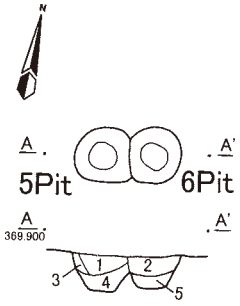




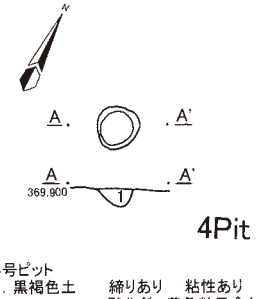
2号ピット
1. 黒褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い
炭化物、酸化鉄、黄色粒子微量含む



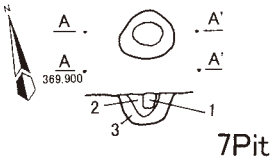
3号ピット
1. 暗褐色粘質土　締り強い　粘性あり　炭化物3mm多量含む
赤色スコリア微量、黄色スコリア含む



5号 6号ピット
1. 黒色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄、炭化物含む
2. 黒色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄少量含む、炭化物含む
3. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄含む　黄色粒子少量含む
4. 暗褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い　酸化鉄微量
5. 暗褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い

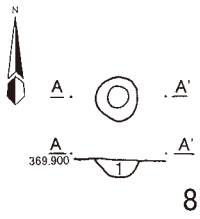


4号ピット
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり
酸化鉄、黄色粒子含む
赤色粒子 微量含む

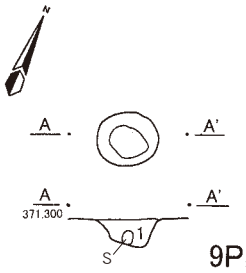


7号ピット
1. 黒褐色土　締りあり　粘性やや強い　炭化物粒子含む
2. 褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子含む
酸化鉄多量含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子、酸化鉄含む

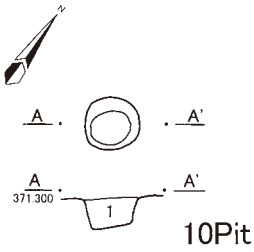
第62図　20～23号土坑、1～7号ピット



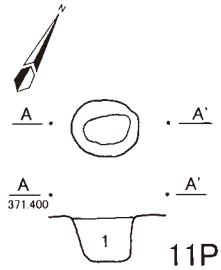
8号ピット
1．黒褐色土　締りあり　粘性あり　酸化鉄含む
黄色、赤色粒子微量含む



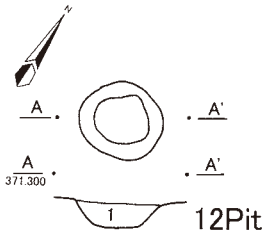
9号ピット
1．暗褐色土　黄色粒子、1cm大の礫含む
炭化物粒子微量含む



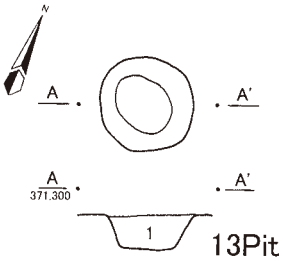
10号ピット
1．暗褐色土　炭化物粒子、黄色粒子含む
酸化物粒子微量含む



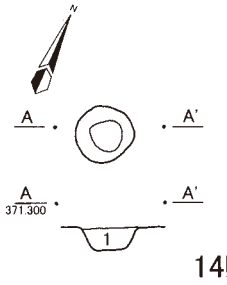
11号ピット
1．黒褐色土　締りあり　粘性あり　黄色粒子多量含む
酸化鉄、炭化物粒子含む



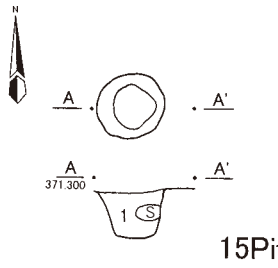
12号ピット
1．暗褐色土　締りあり　粘性あり　1mmの炭化物含む
5～10mmの　粘土ブロックを微量含む
黄色粒子微量含む



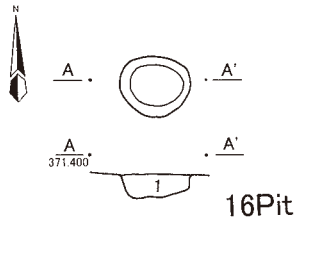
13号ピット
1．暗褐色土　締りあり　粘性あり
1mm炭化物含む
10mm粘土ブロック　微量含む



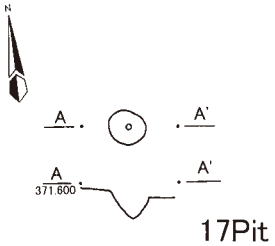
14号ピット
1．暗褐色土　締りあり　粘性あり　1～10mmの炭化物を含む
黄色粒子多量に含む



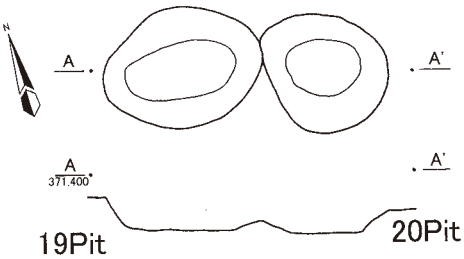
15号ピット
1．黒褐色土　締りあり　粘性あり　1mm炭化物含む
酸化鉄、黄色粒子を含む

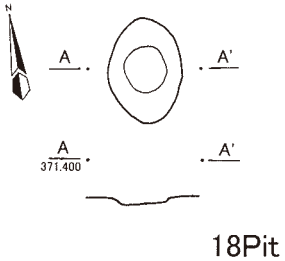


16号ピット
1．黒褐色土　締りあり　粘性あり
炭化物粒子3～5mm含む

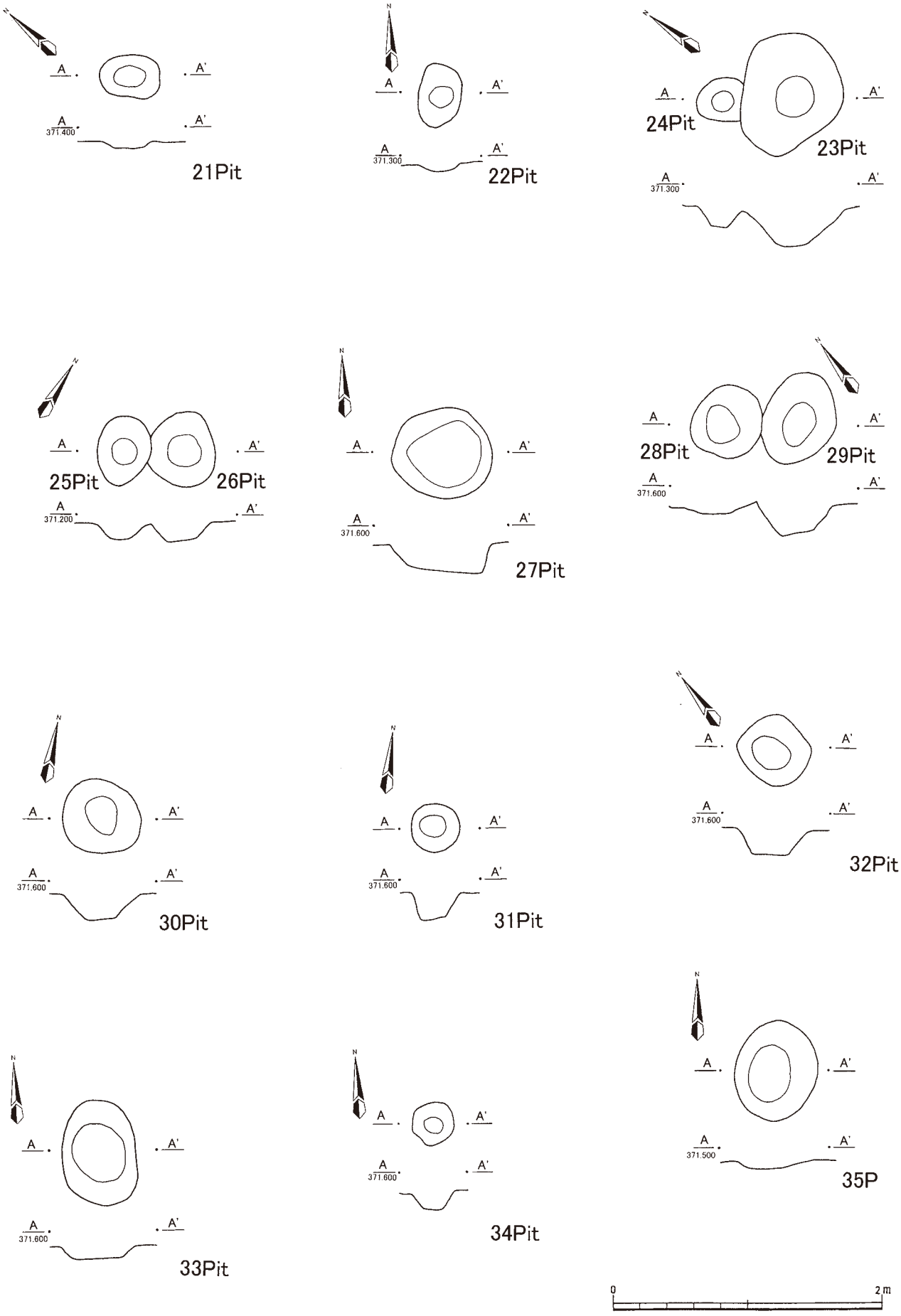


17号ピット
1．黒褐色土　締りあり　粘性あり
炭化物5mm微量含む

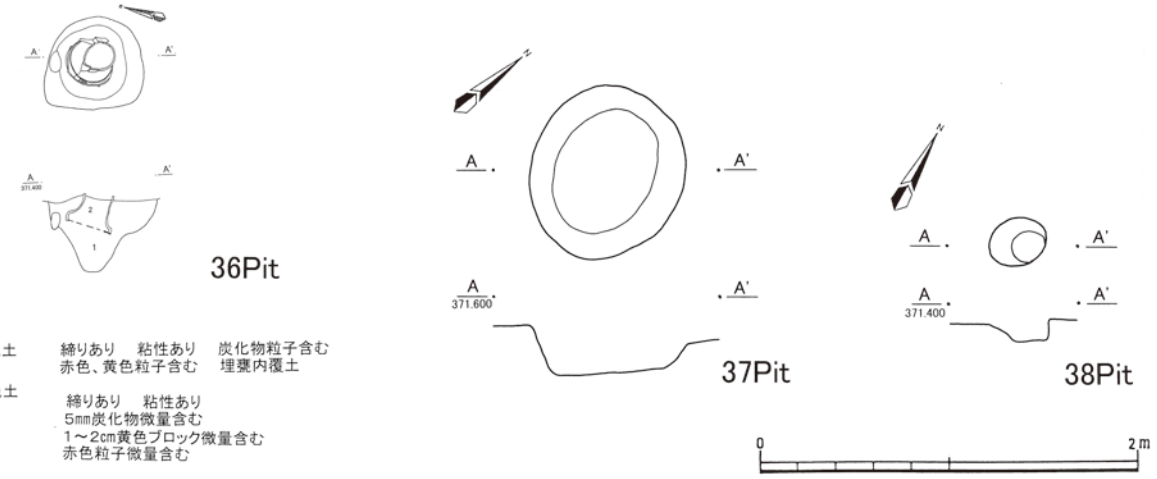




第６３図　８～２０号ピット



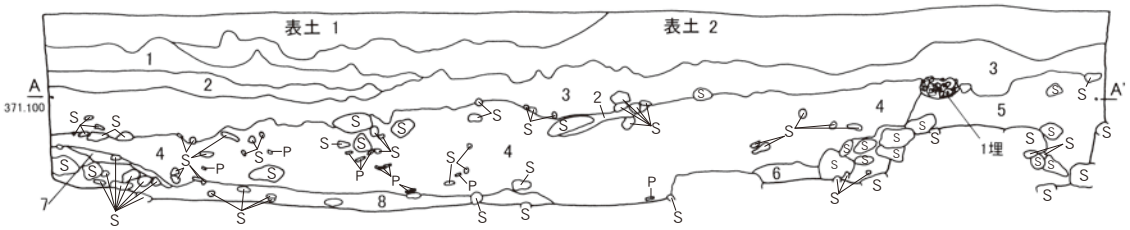
第６４図　２１～３５号ピット



36Pit

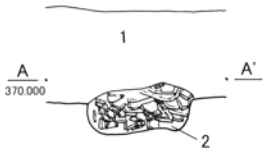
1. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子含む
赤色、黄色粒子含む　埋甕内覆土

2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり
5mm炭化物微量含む
1～2cm黄色ブロック微量含む
赤色粒子微量含む



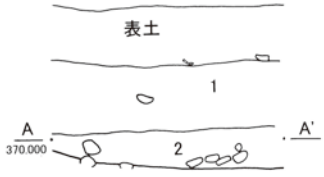
調査区Ⅰ　東西セクション

調査区Ⅰ　東西セクション
表土(耕作土)1　灰黄褐色土　締り弱い　粘性弱い
1cm大の礫少量含む　木の根多い
表土(耕作土)2　灰黄褐色土　締り弱い　粘性弱い
1cm大の礫多量含む　木の根多い
1. 明黄褐色土　締りあり　粘性あり　黄色粒子含む
2. 褐色土　締りあり　粘性あり　赤色、黄色粒子含む
3. 黒褐色土　締りあり　粘性弱い　炭化物少量含む
4. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物含む
赤色粒子やや多く含む　黄色粒子含む
30cm大の礫含む
5. 黄褐色粘質土　締り強い　粘性あり　炭化物含む
赤色粒子少量、黄色粒子多量含む
50～60cm大の礫を含む
6. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物5mm大含む
赤・黄色粒子少量含む
7. 黒褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物、赤色、黄色粒子含む
8. 黒褐色土　締りあり　粘性強い　炭化物、赤色粒子含む
黄色粒子微量含む　20cm大の礫多く含む



Ⅲ区　南壁セクション

Ⅲ区　南壁セクション
1. 黒褐色土　締りやや強い　粘性あり
重機による撹乱層
2. 黒褐色土　締り弱い　粘性あり
重機によって瓦が廃棄された層

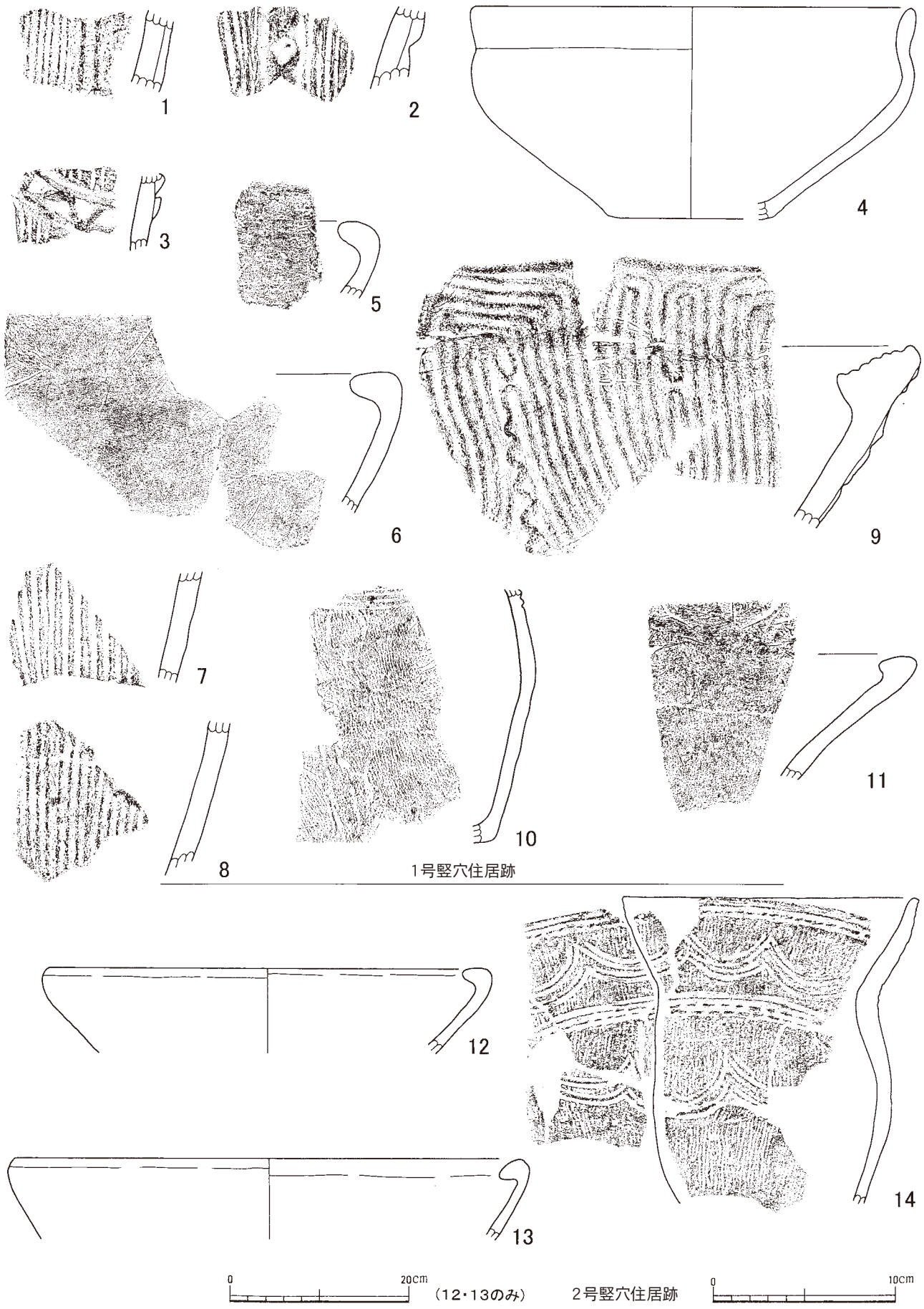


Ⅳ区　北壁セクション

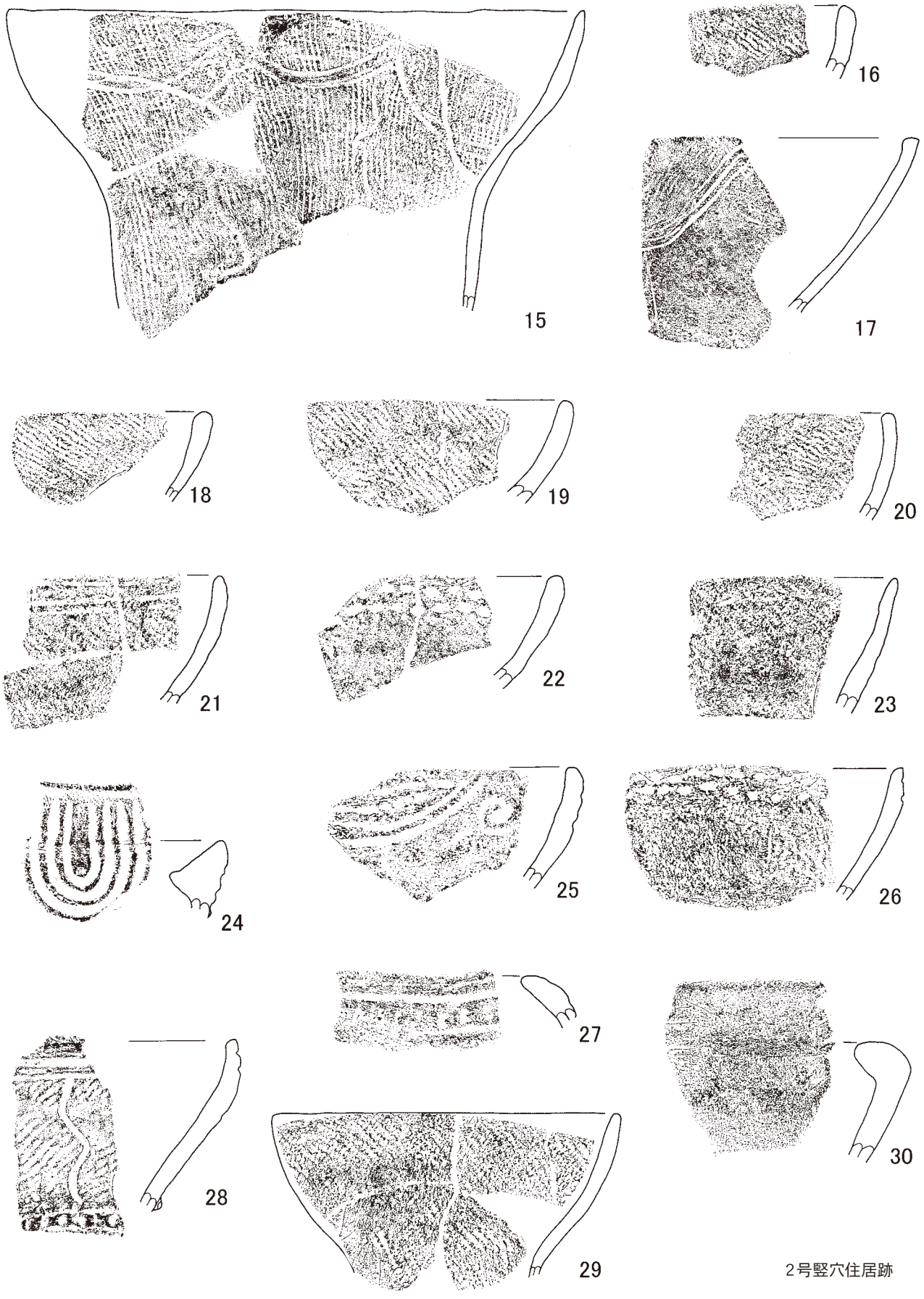
Ⅳ区　北壁セクション
1. 暗褐色粘質土　締りあり　粘性やや強い　炭化物粒子含む
明赤褐色の酸化鉄を多量含む
10cm大の礫を少量含む
一部砂質土を含む
2. 暗褐色土　締りあり　粘性あり　炭化物粒子を微量含む
明赤褐色の酸化鉄を多量含む
1～10cm大の礫を含む

0　3m

第６５図　３６～３８号Pit・調査区壁セクション

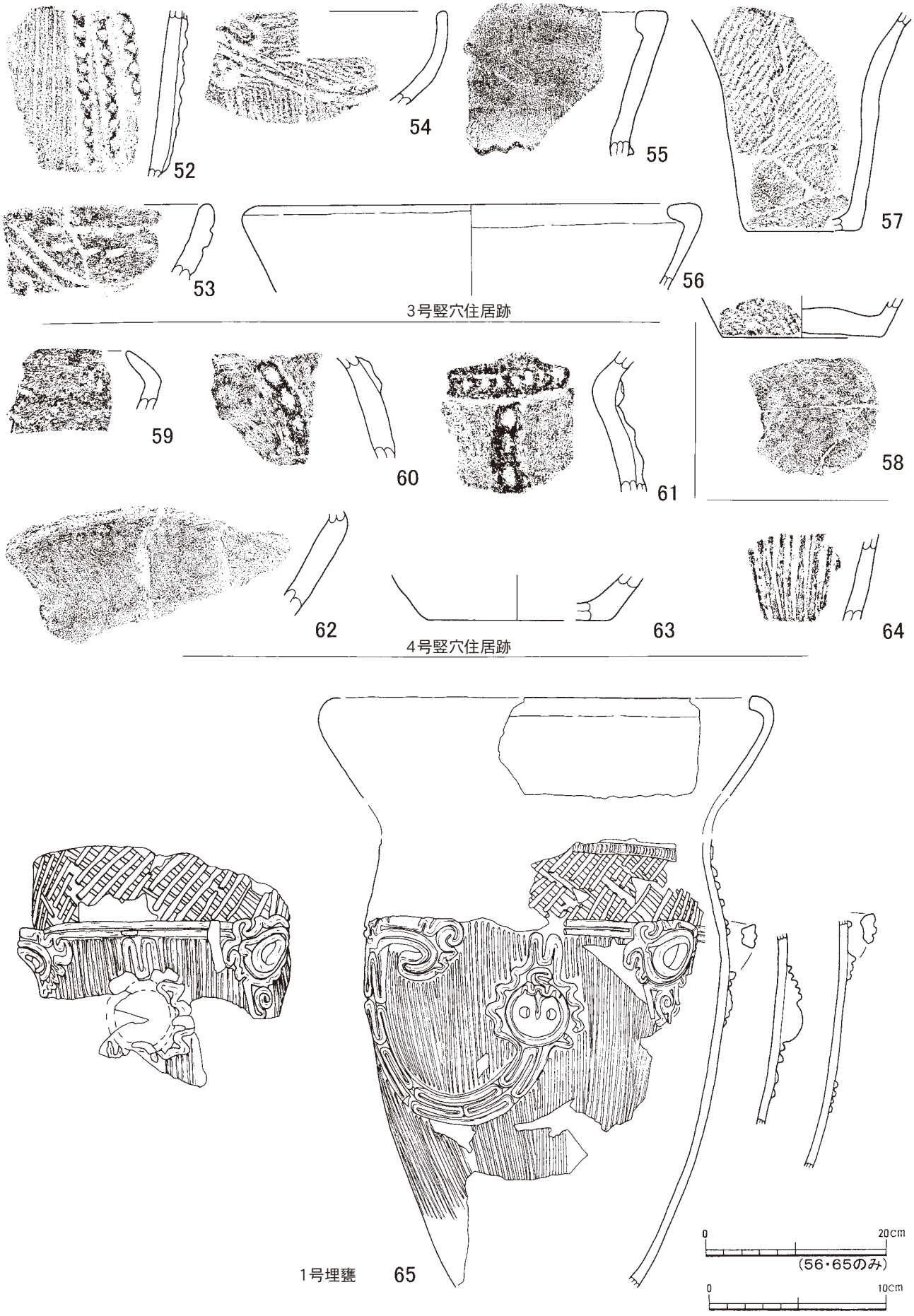


第６６図　１号竪穴住居跡・２号竪穴住居跡（１）出土遺物

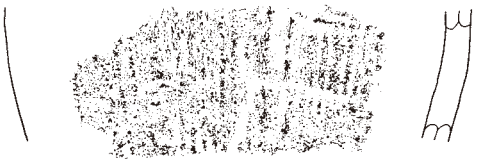


第６７図　２号竪穴住居跡（２）出土遺物

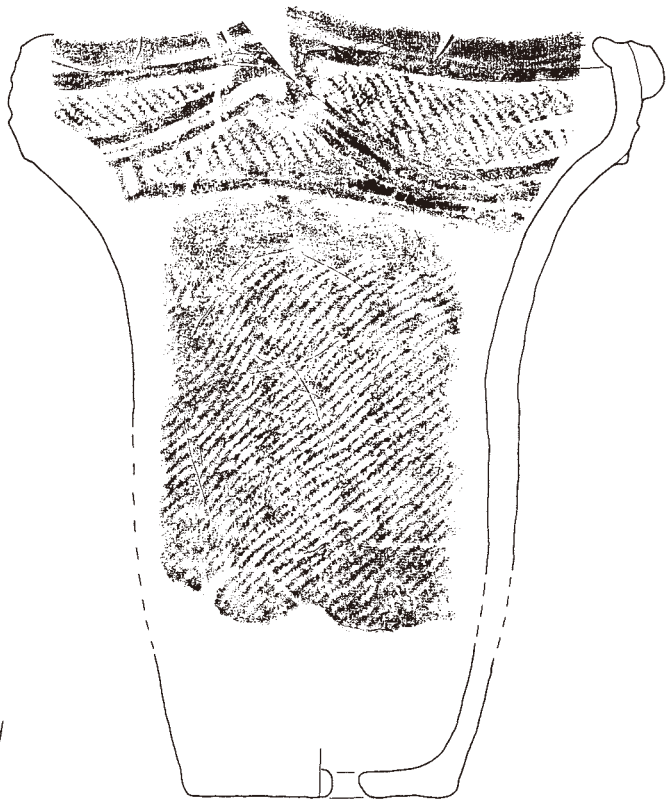
第６８図　２号竪穴住居跡（３）出土遺物



第６９図　３号竪穴住居跡・４号竪穴住居跡・１号埋甕出土遺物

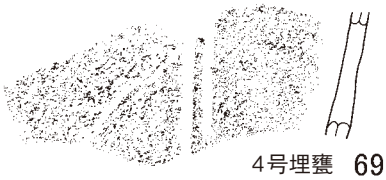


2号埋甕　66

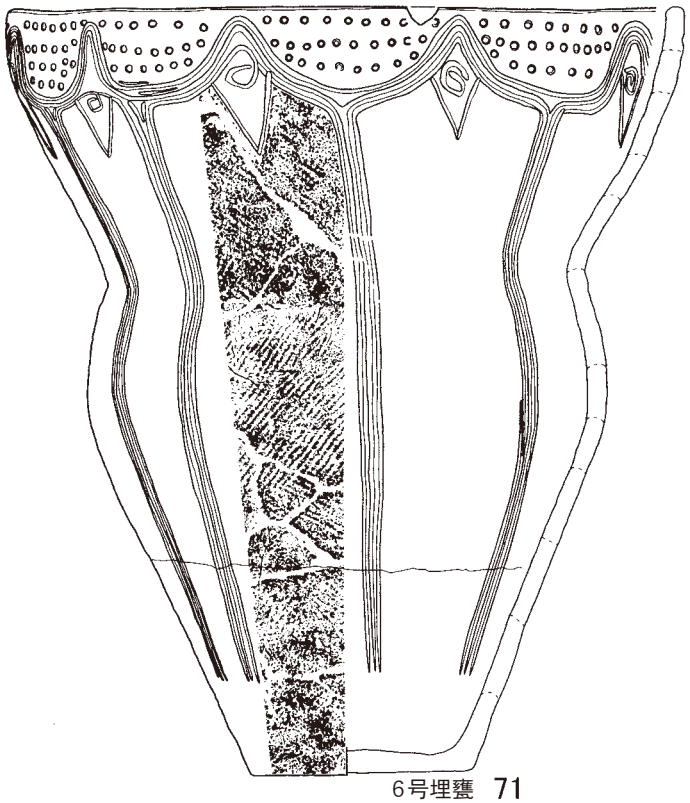


3号埋甕　67

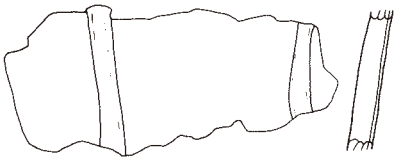
4号埋甕　68



4号埋甕　69

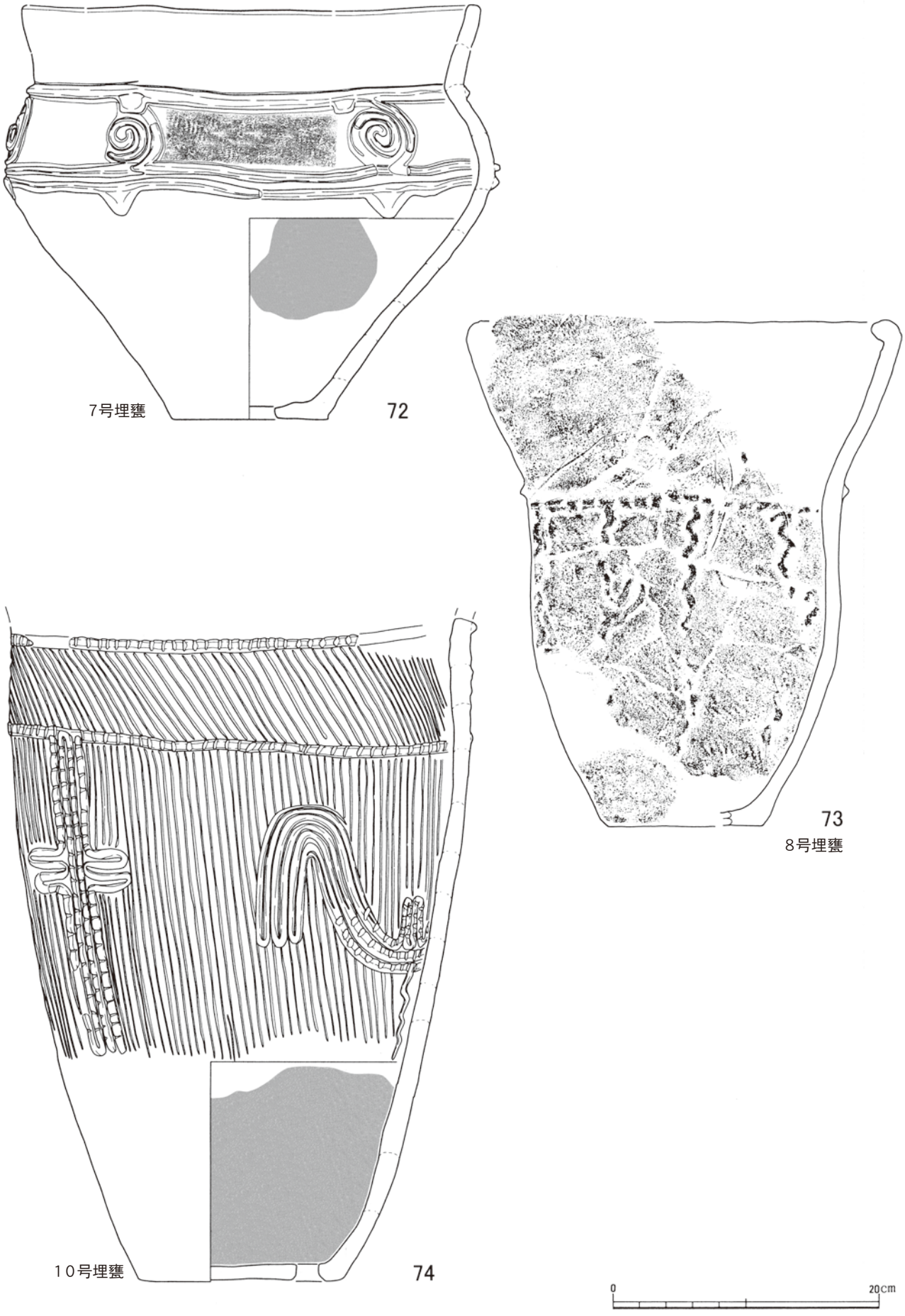


6号埋甕　71

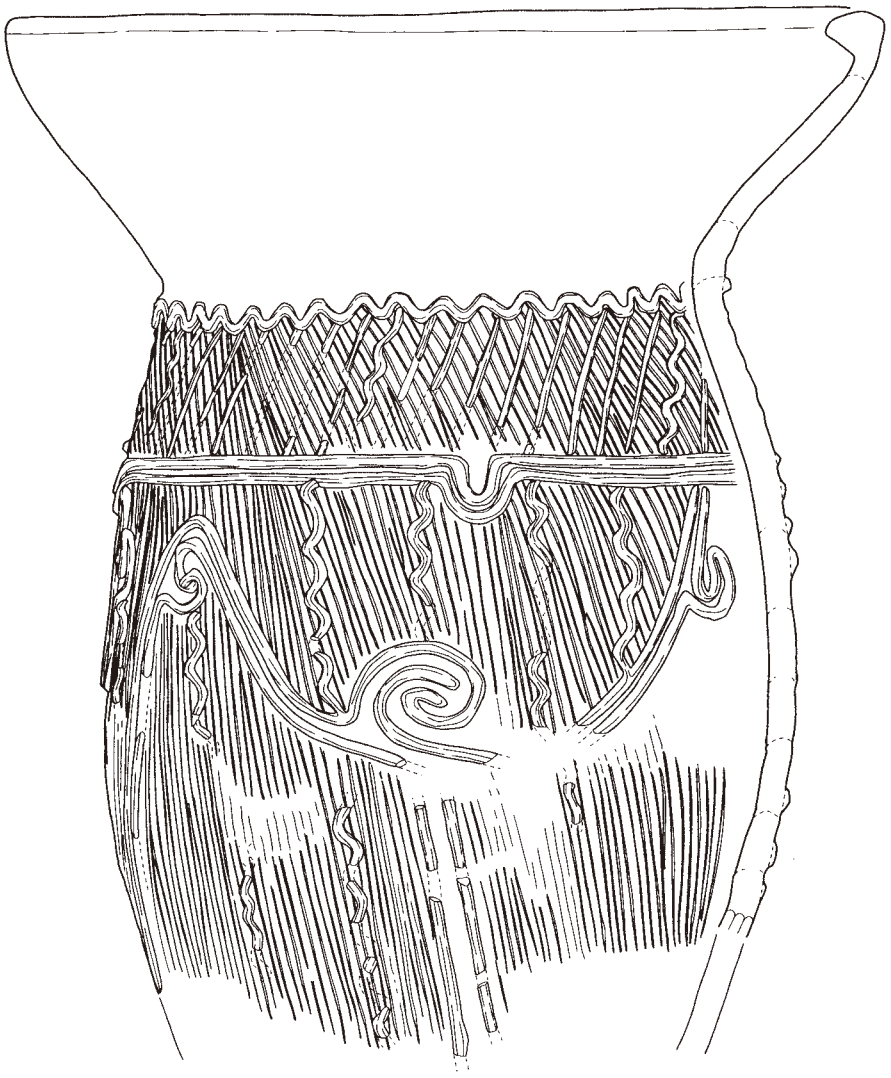


5号埋甕　70

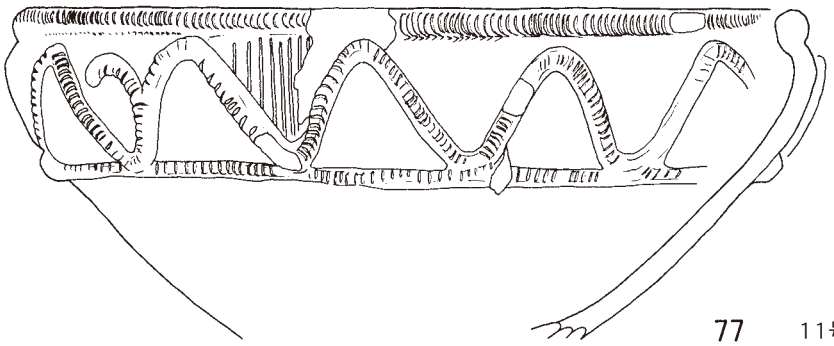
第７０図　２～６号埋甕出土遺物



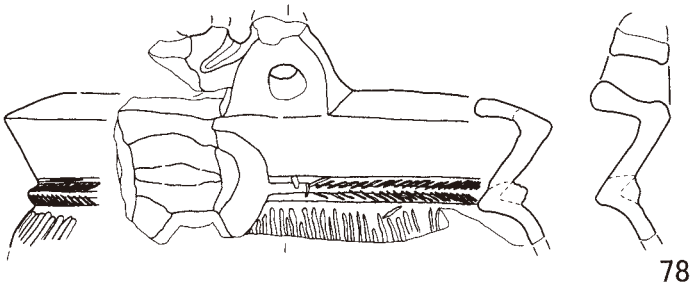
第71図　7号・8号・10号埋甕出土遺物



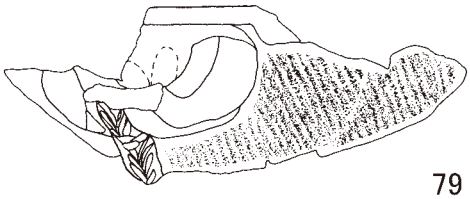
第７２図　９号埋甕出土遺物



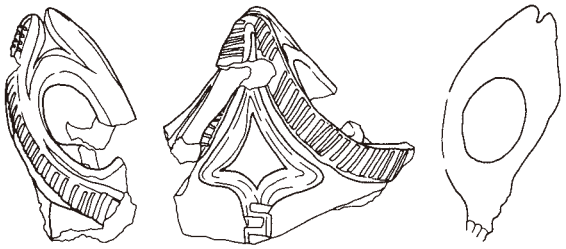
77　11号埋甕



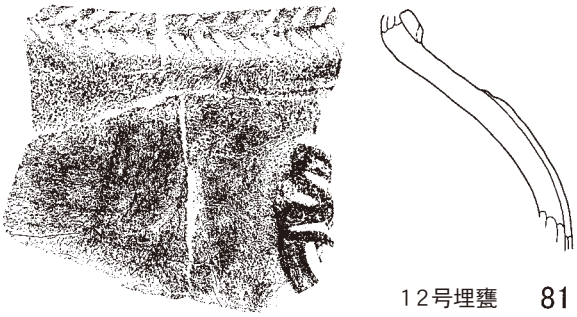
78



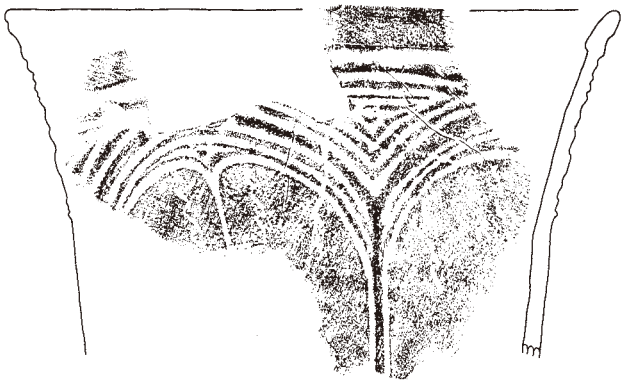
79



80



12号埋甕　81



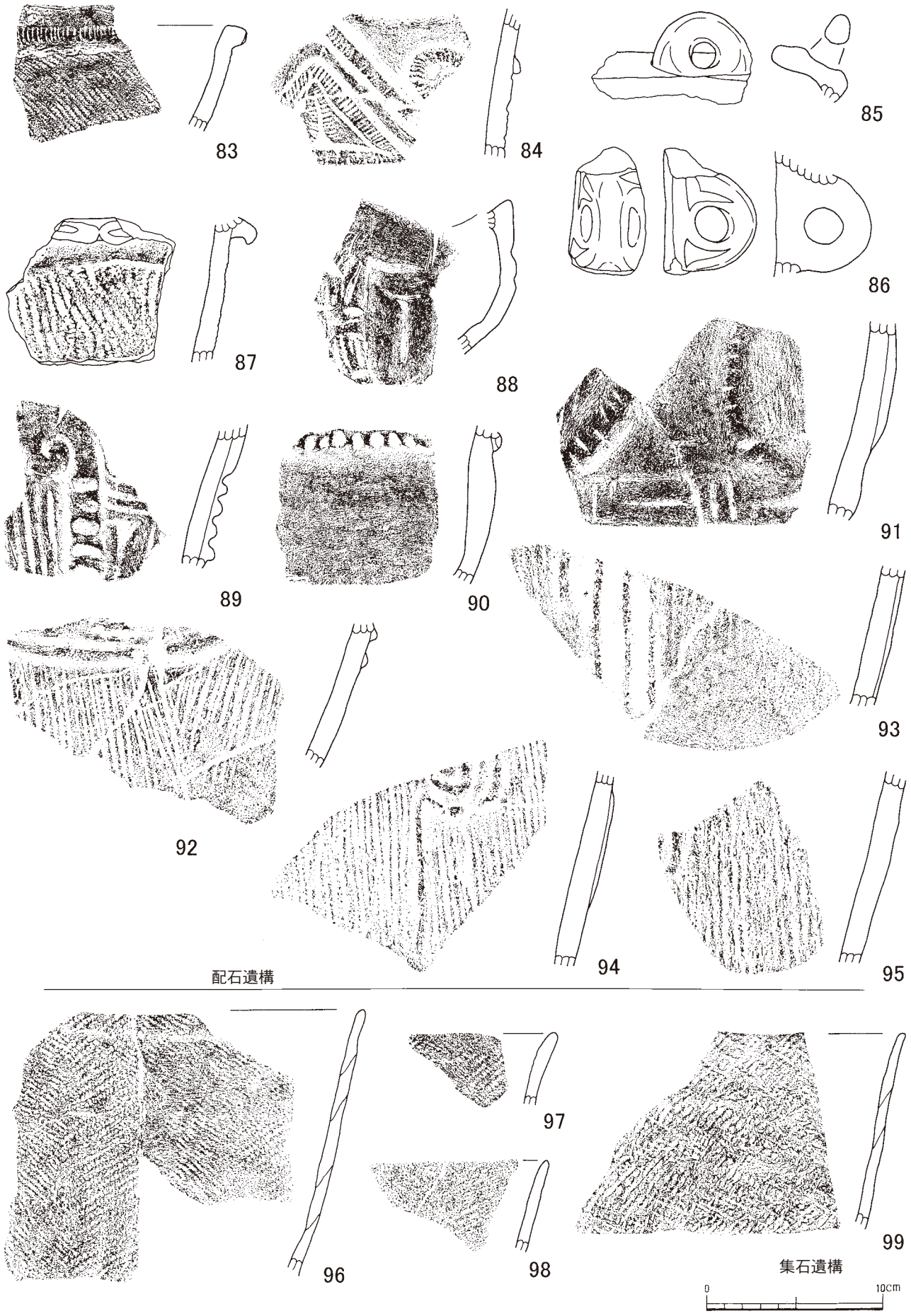
13号埋甕　82

0　10cm

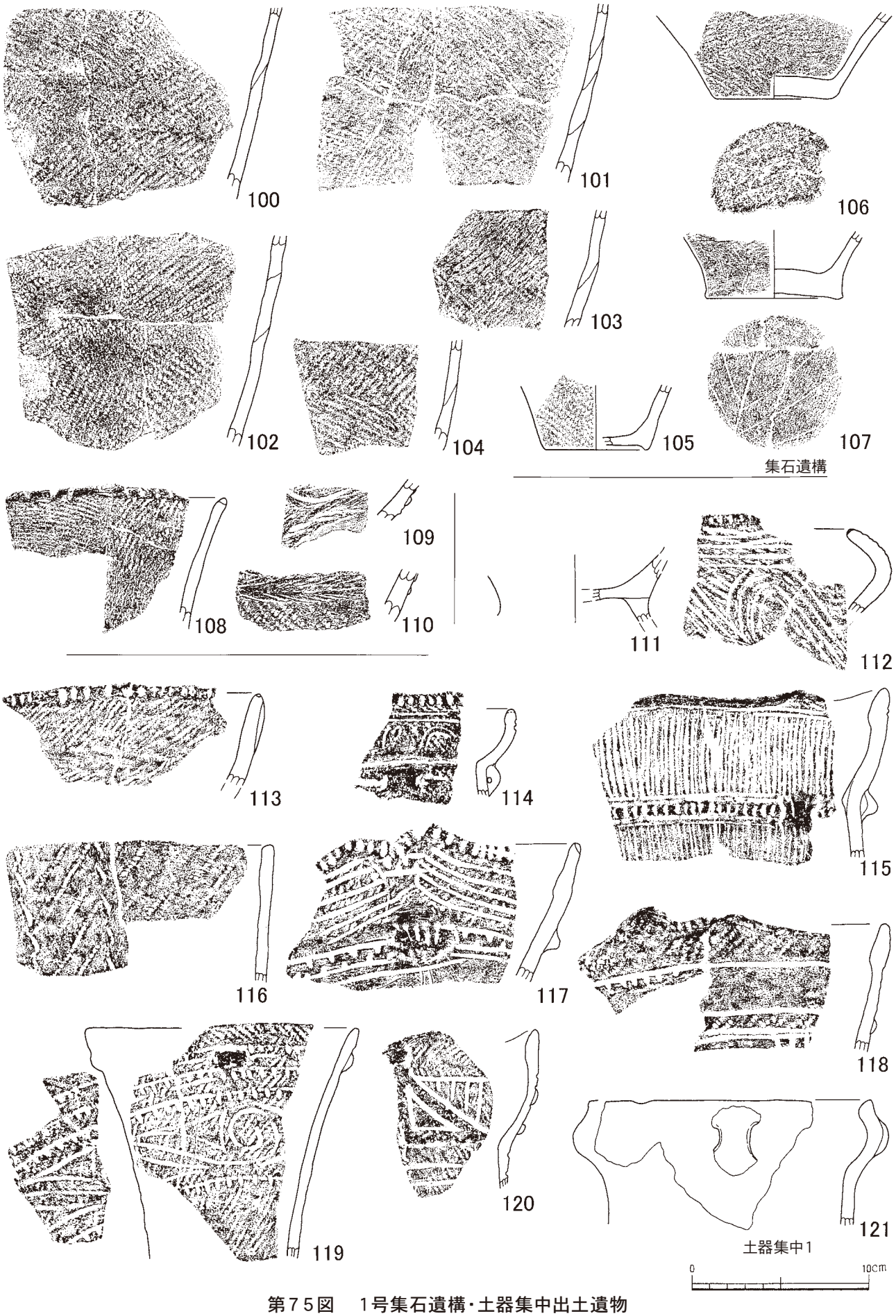
0　20cm

（77・82のみ）

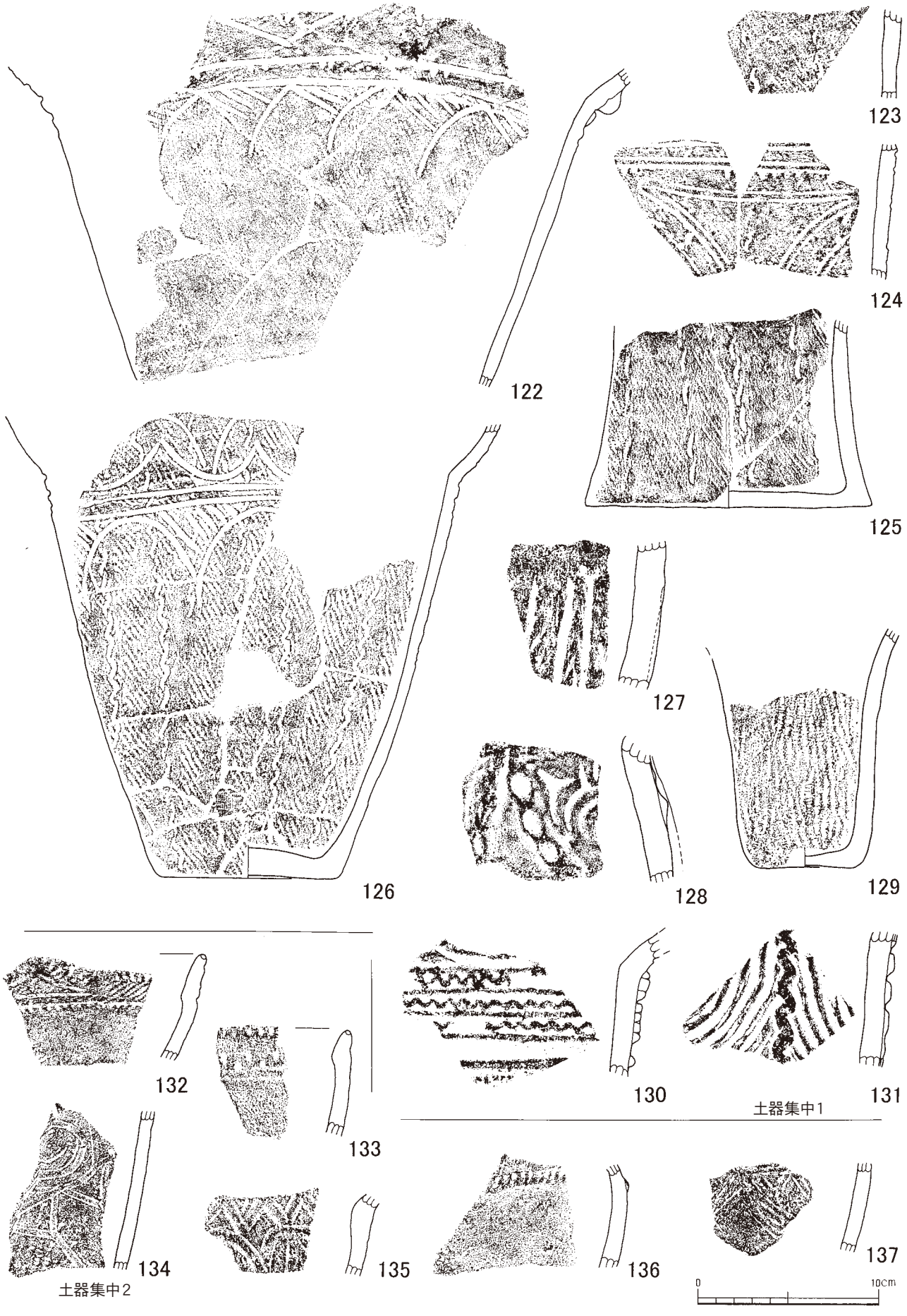
第７３図　１１～１３号埋甕出土遺物



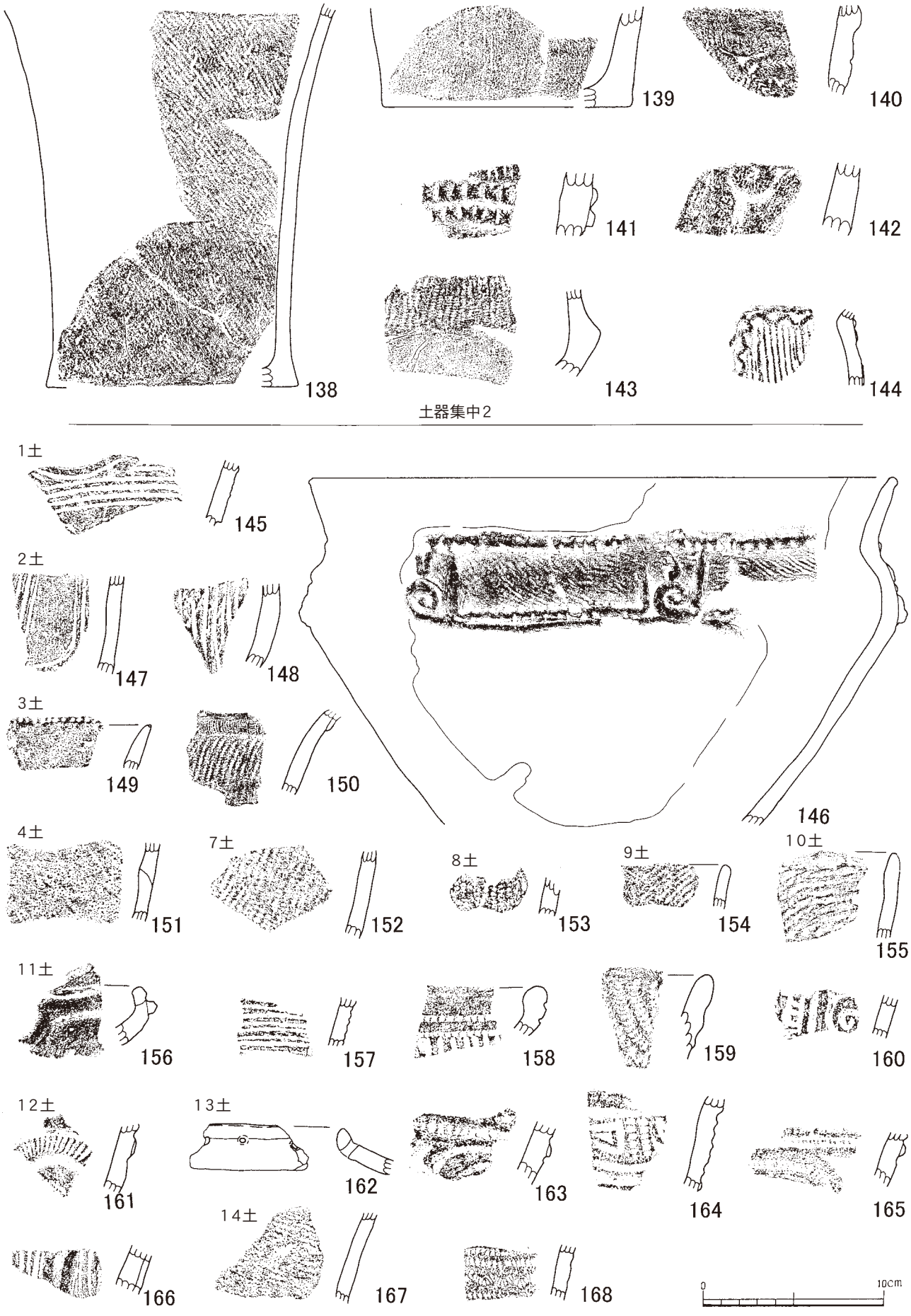
第７４図　１号配石遺構・１号集石遺構出土遺物



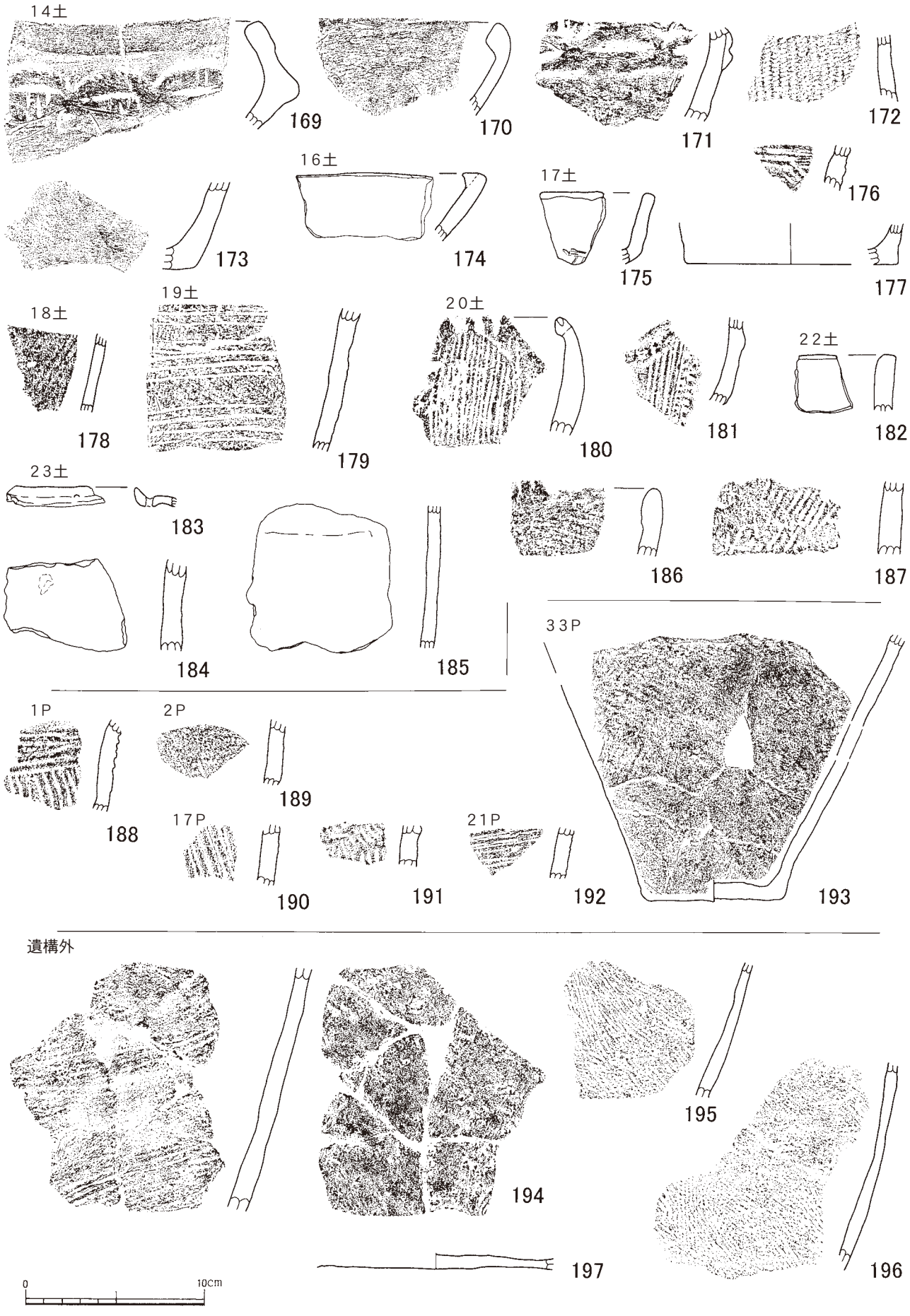
第７５図　１号集石遺構・土器集中出土遺物



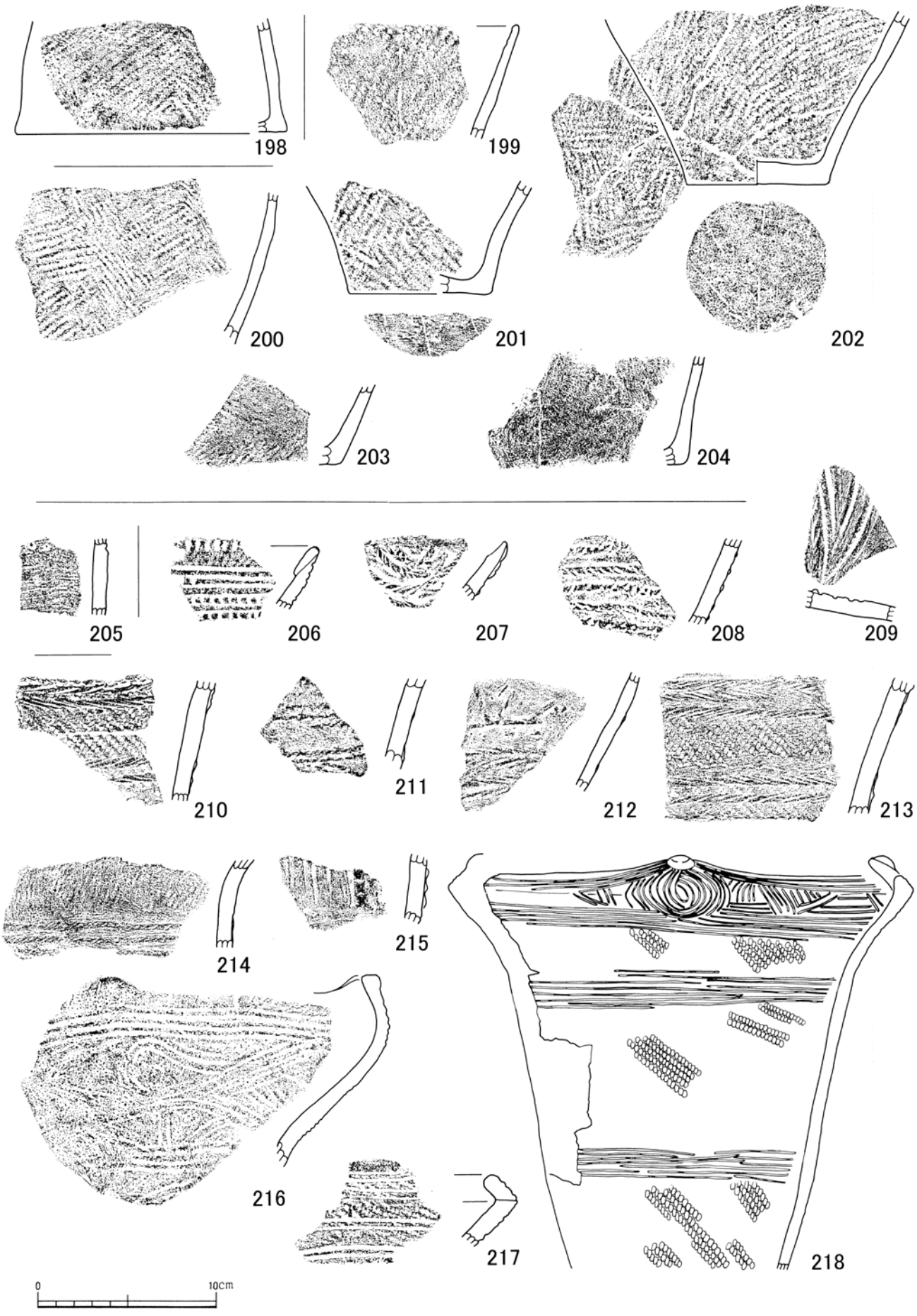
第７６図　土器集中１・２出土遺物



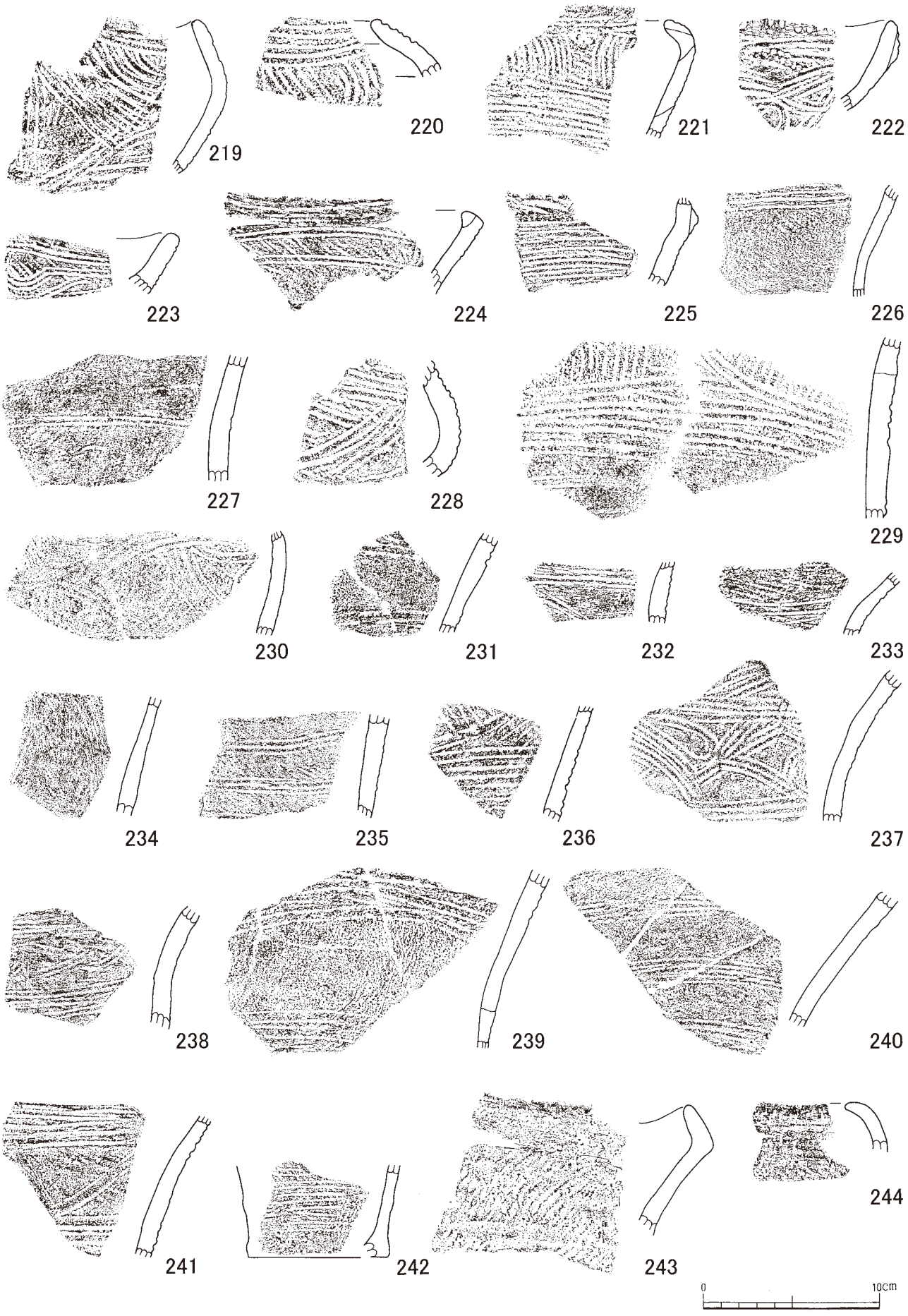
第７７図　土器集中２・１～１４号土坑出土遺物



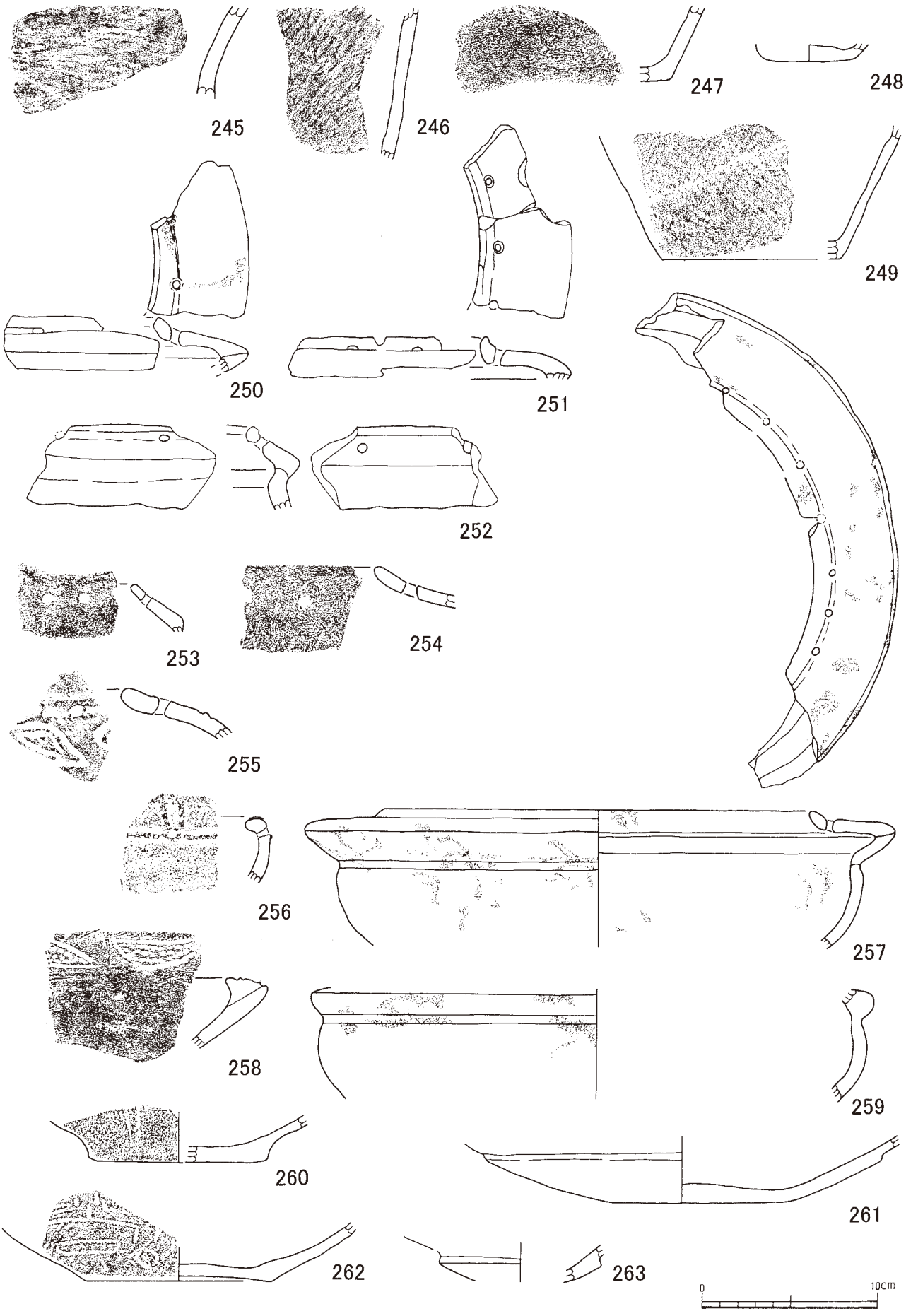
第７８図　１４～２３号土坑・１～３３号Ｐｉｔ・遺構外出土遺物（１）



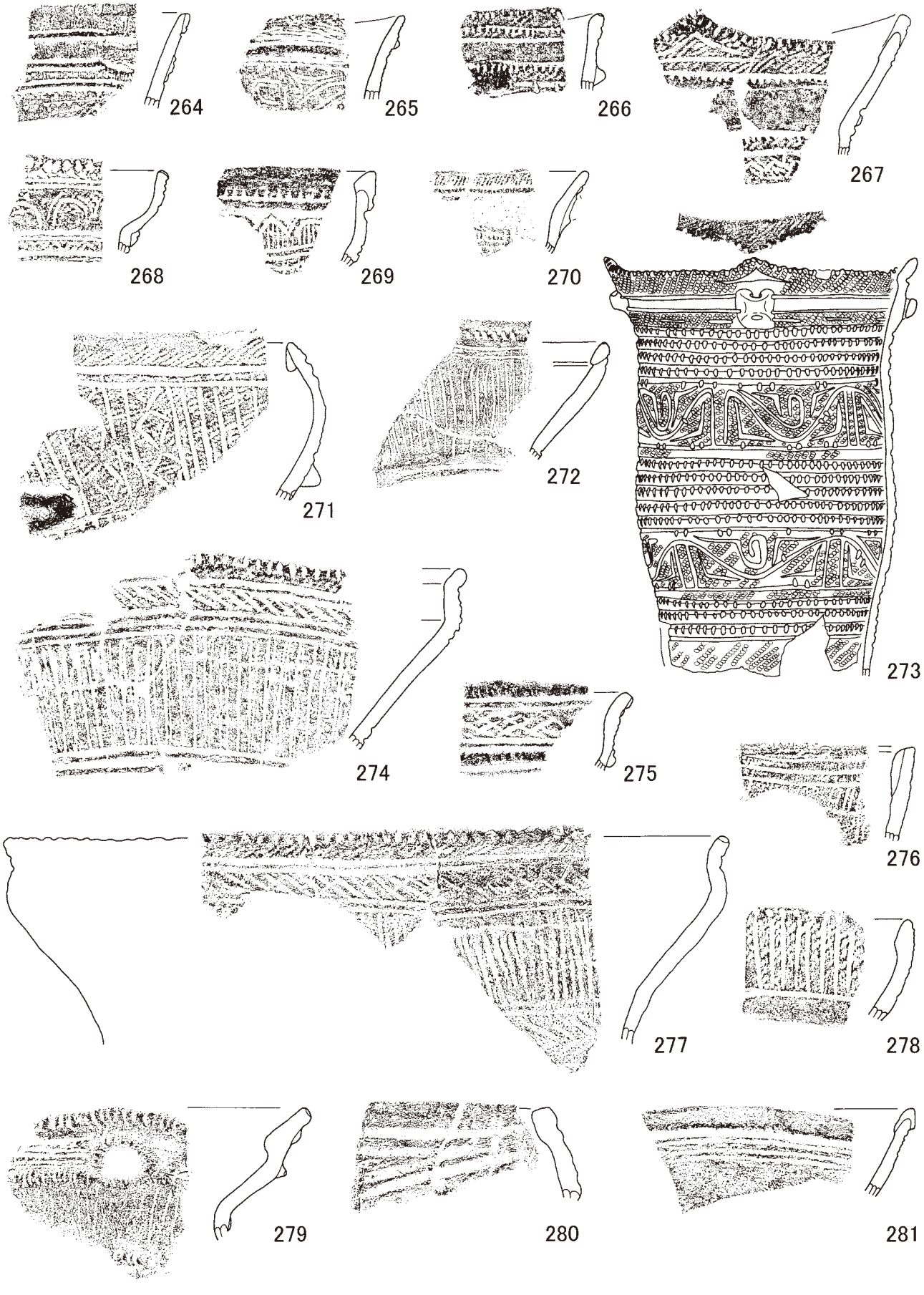
第７９図　遺構外出土遺物（２）



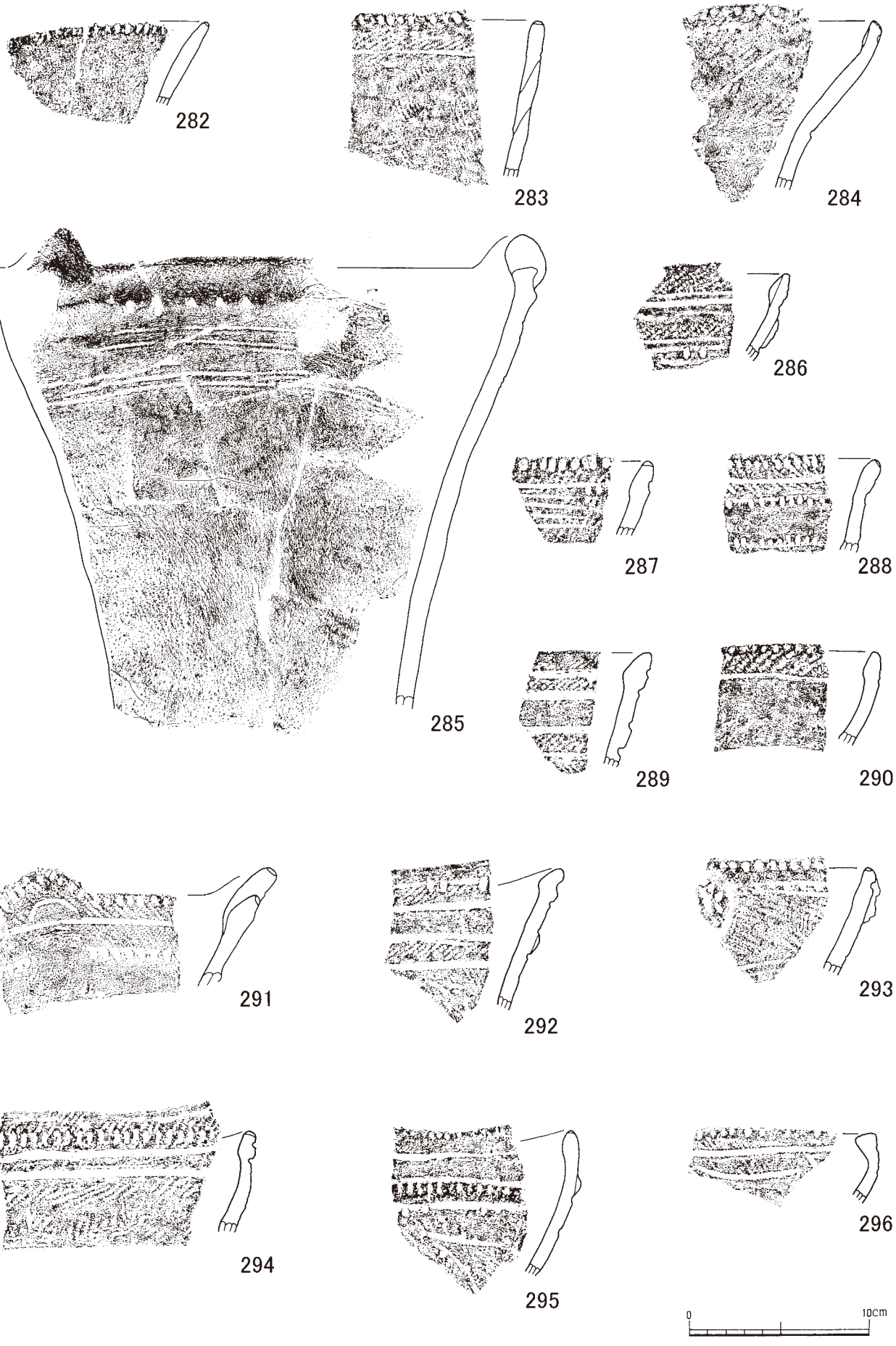
第８０図　遺構外出土遺物（３）



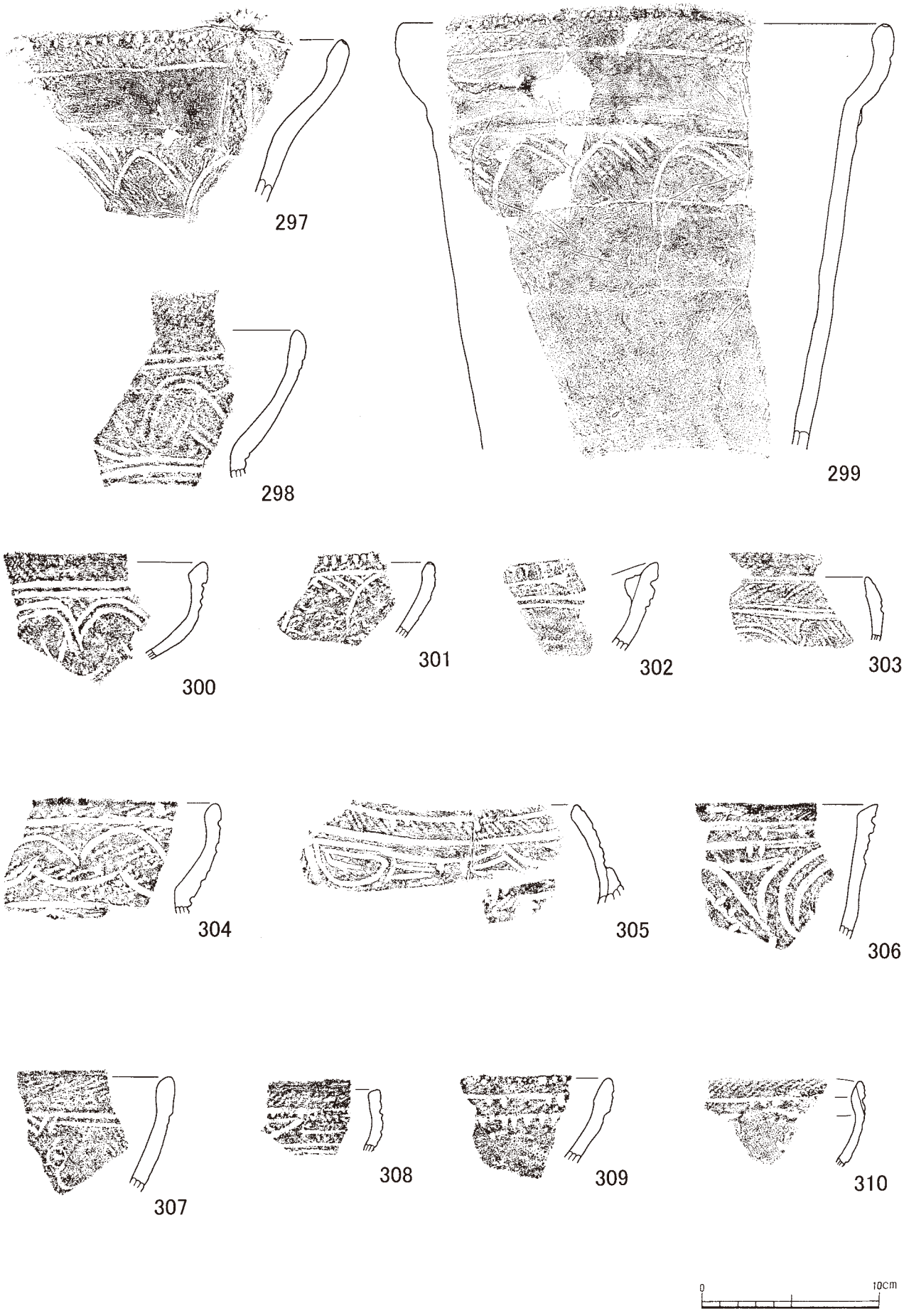
第８１図　遺構外出土遺物（４）



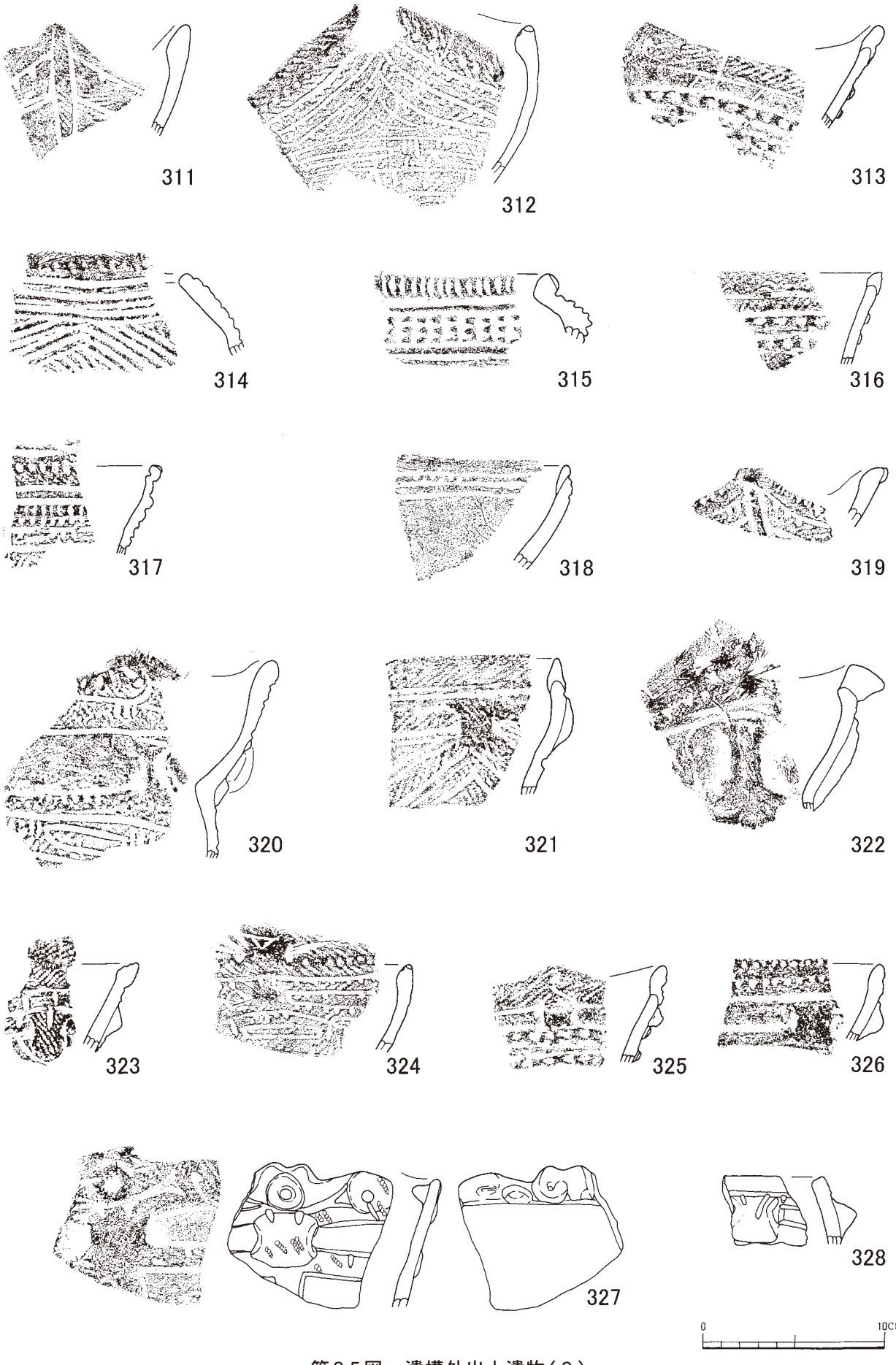
第８２図　遺構外出土遺物（５）



第８３図　遺構外出土遺物（６）

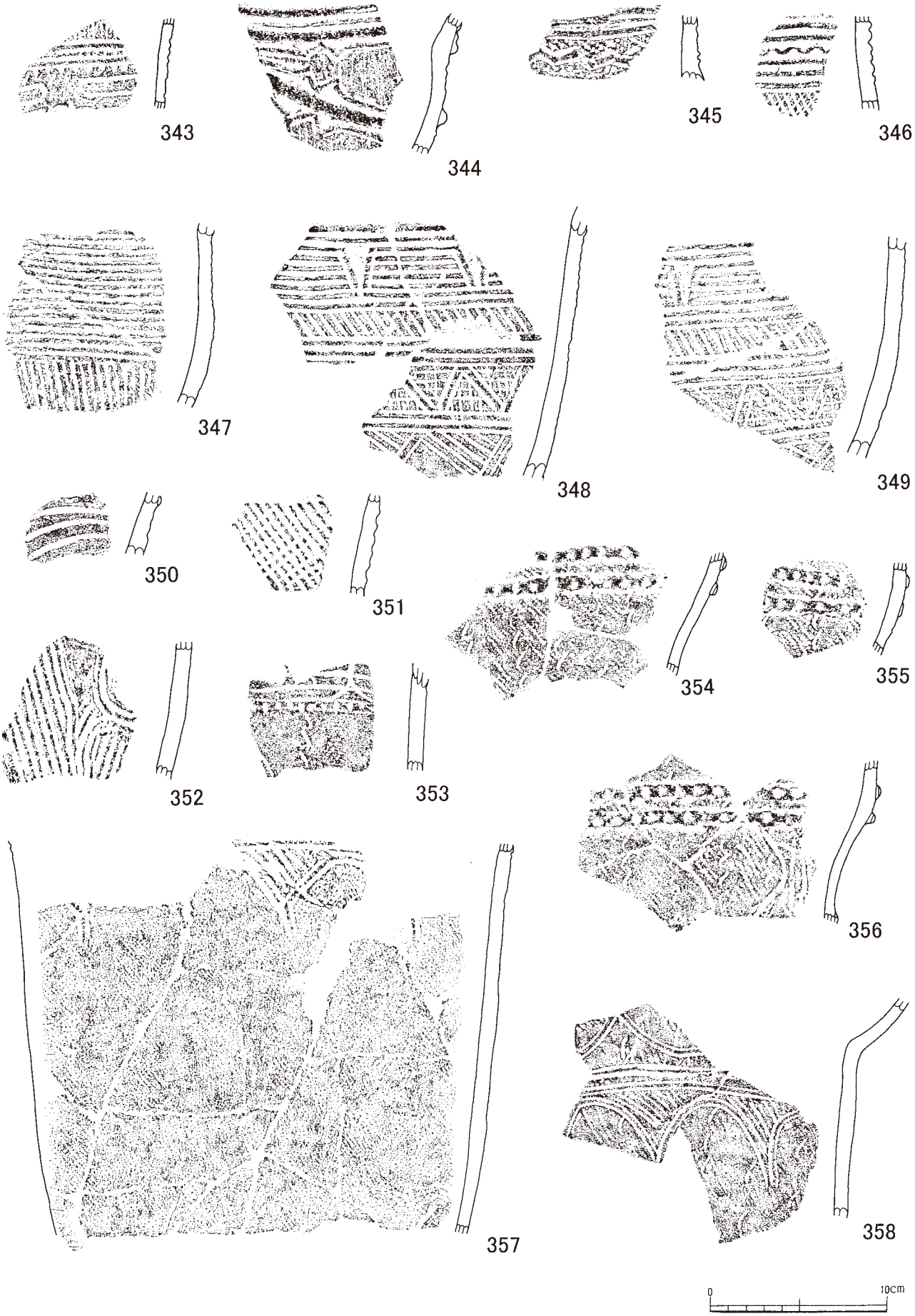


第８４図　遺構外出土遺物（７）



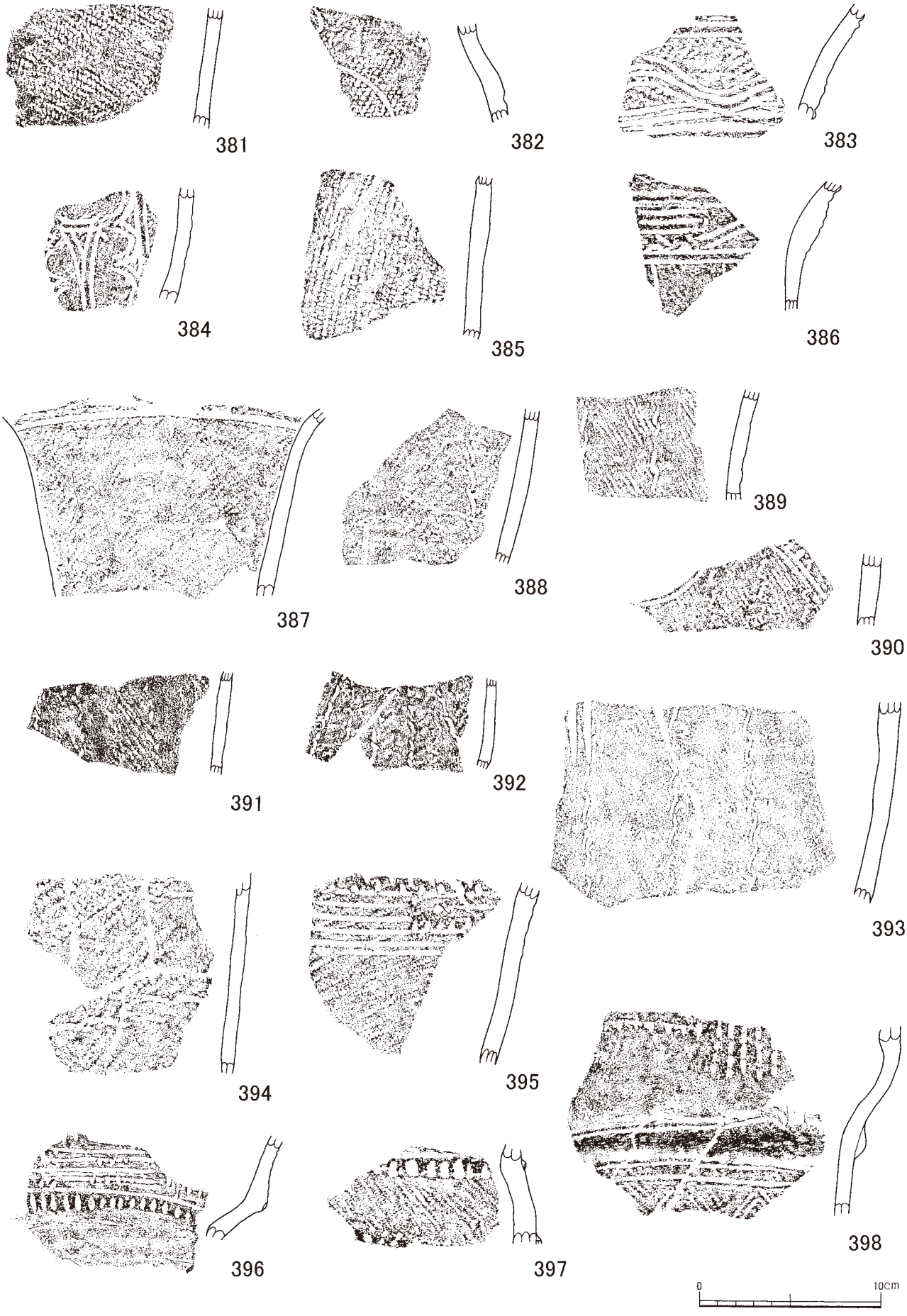
第８５図　遺構外出土遺物（８）

第８６図　遺構外出土遺物（９）

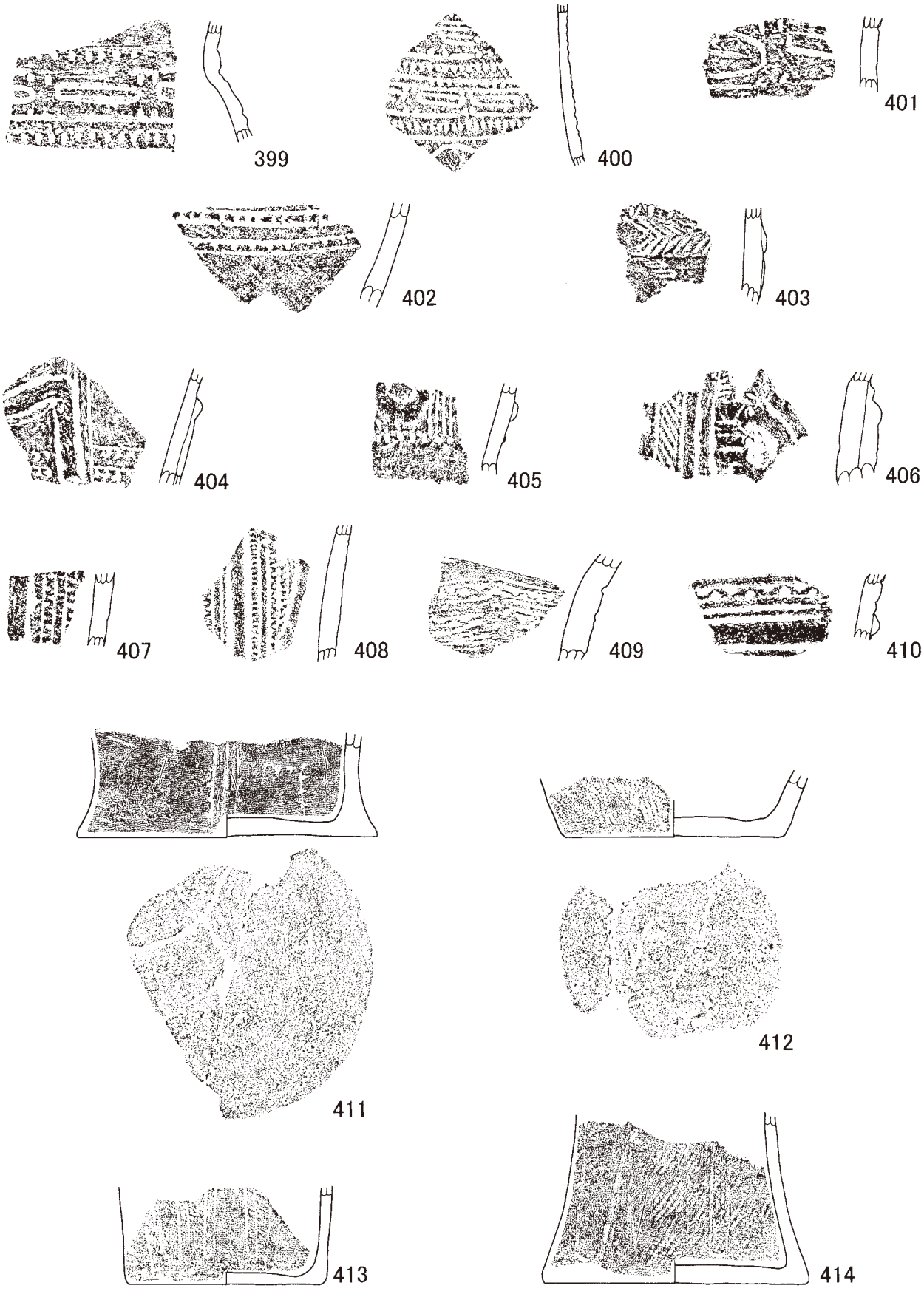


第８７図　遺構外出土遺物（１０）

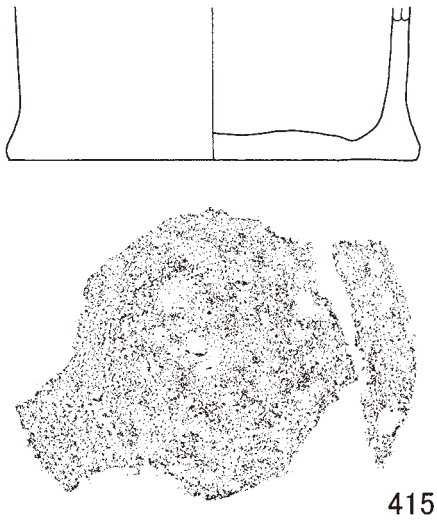
第８８図　遺構外出土遺物（１１）

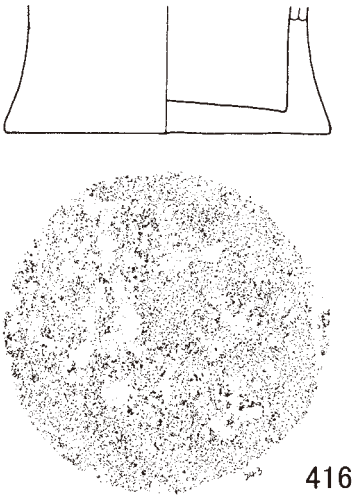


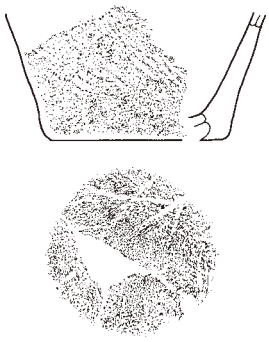
第８９図　遺構外出土遺物（１２）

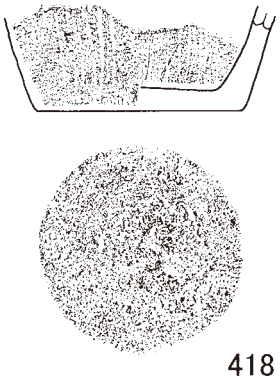


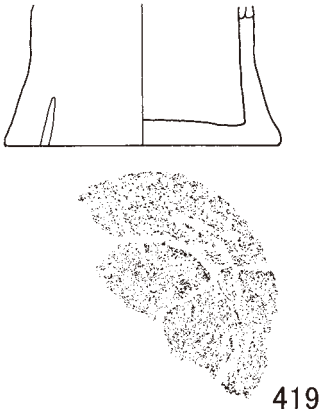
第９０図　遺構外出土遺物（１３）

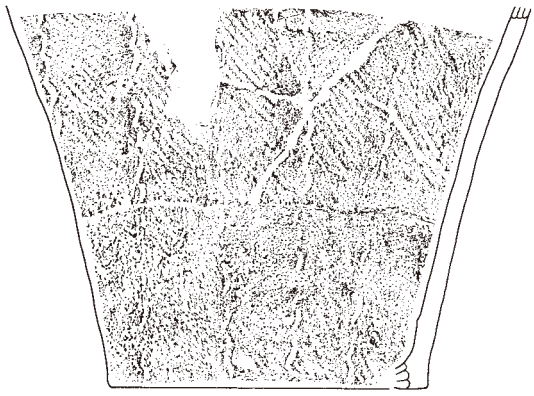


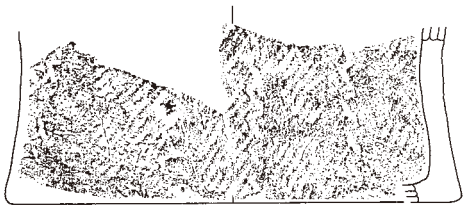




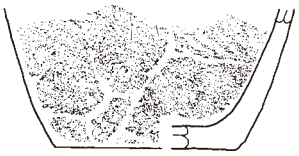






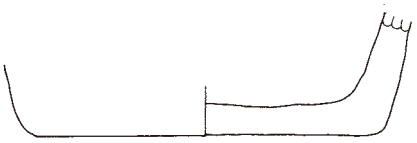


第９１図　遺構外出土遺物（１４）

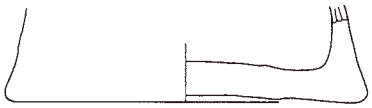


422

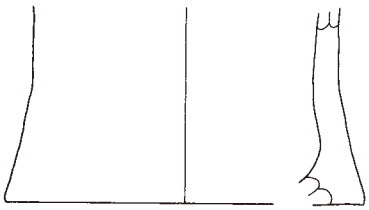
423



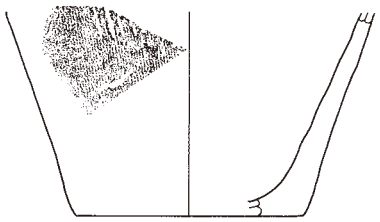
424



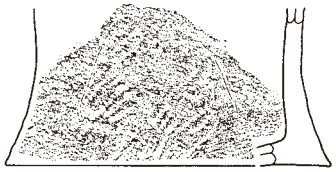
425



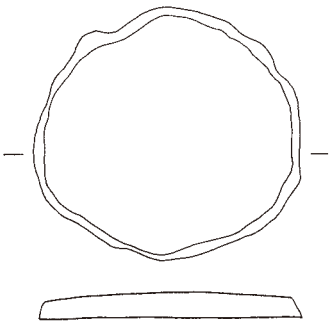
426

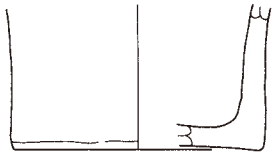


427

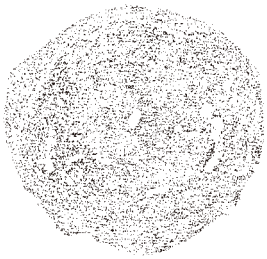


428

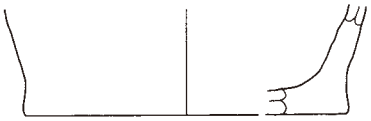




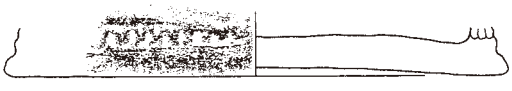
429



431

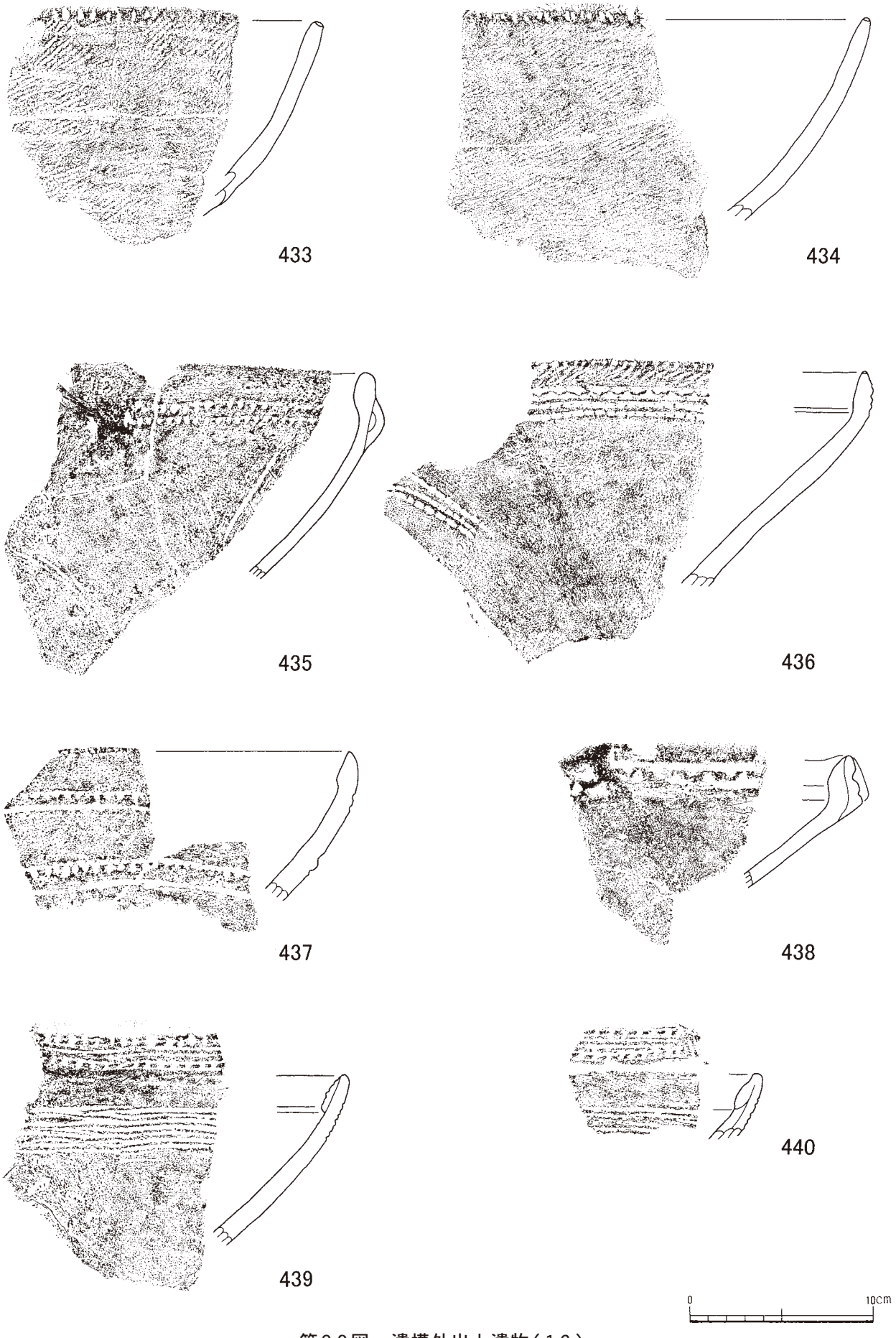


430

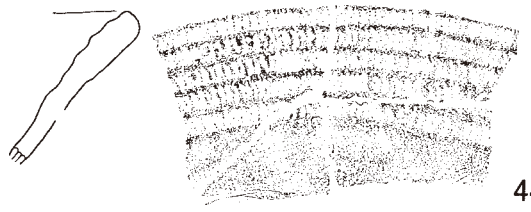


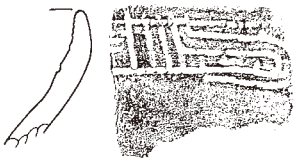
432

第９２図　遺構外出土遺物（１５）



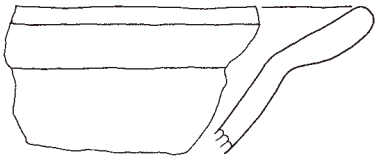
第９３図　遺構外出土遺物（１６）

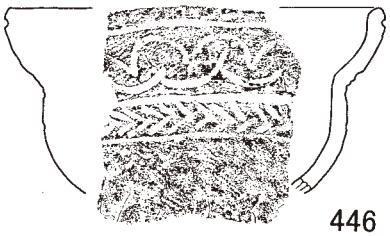

441

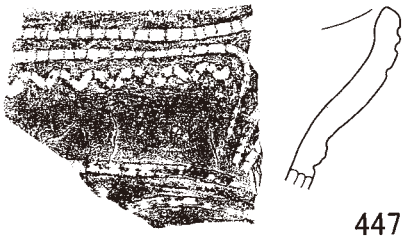

442

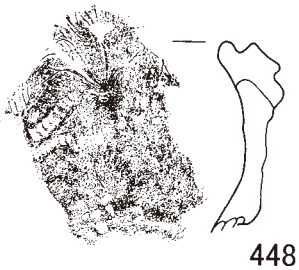
443

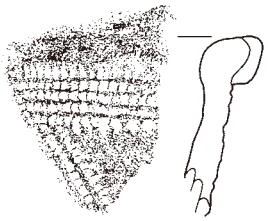
444


445

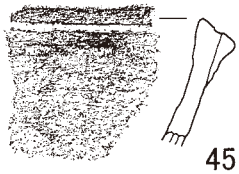

446

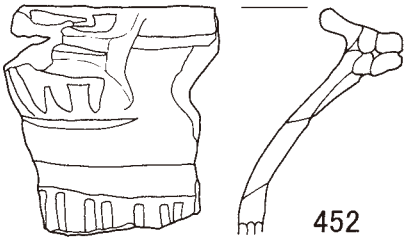

447

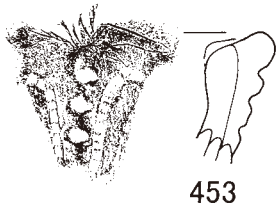

448

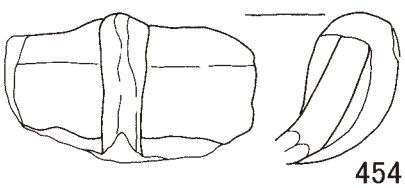

449

450

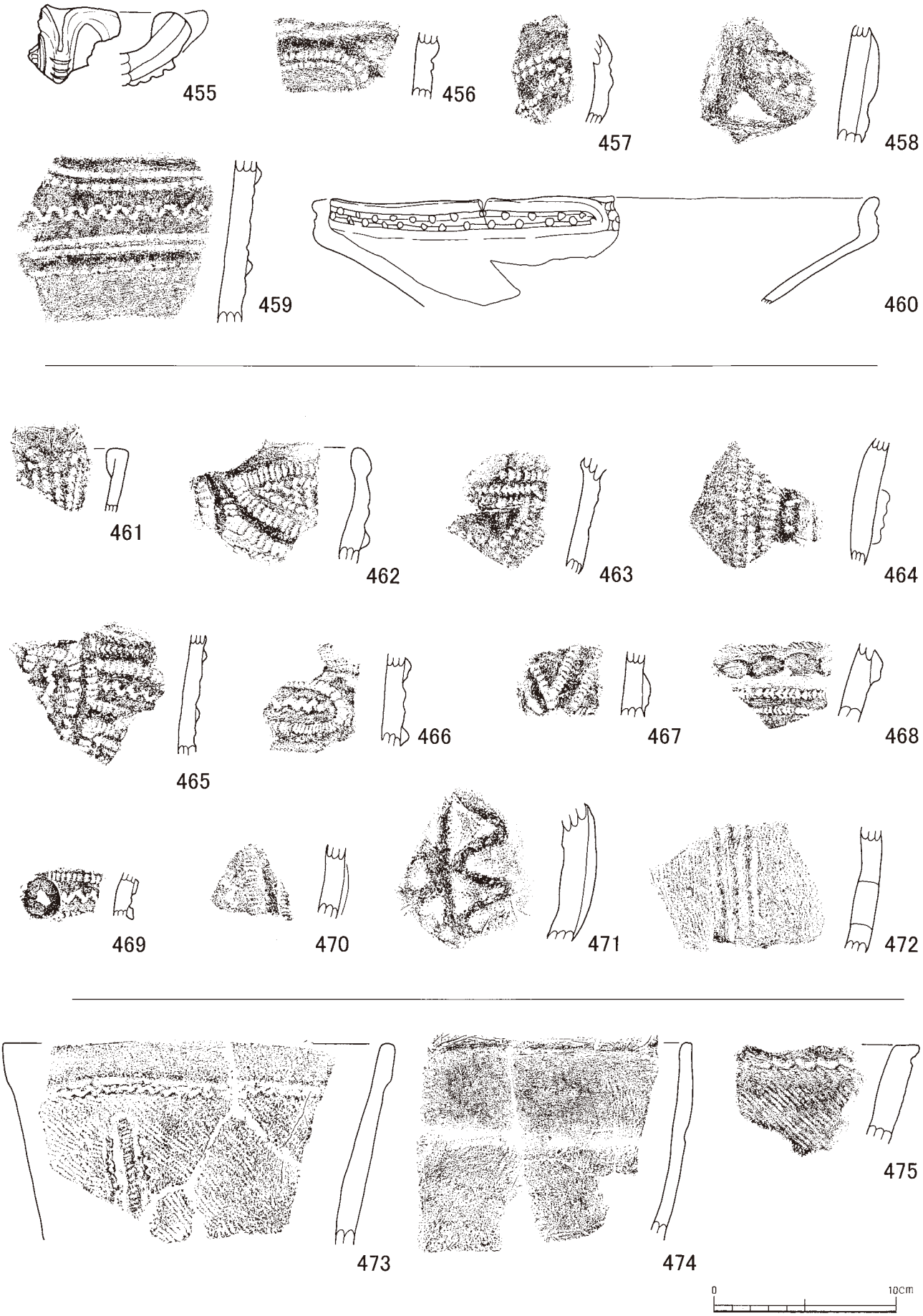

451


452

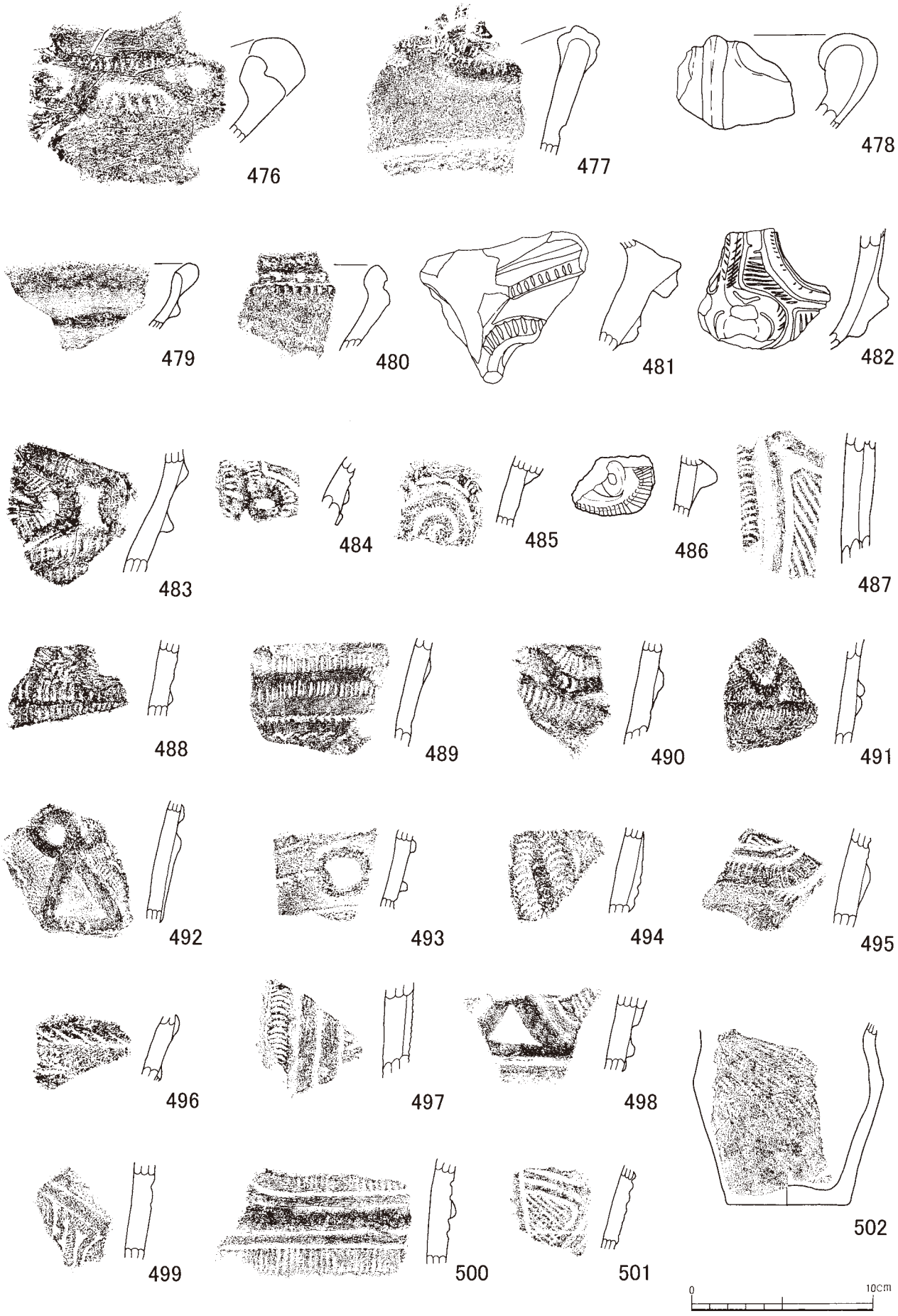

453


454

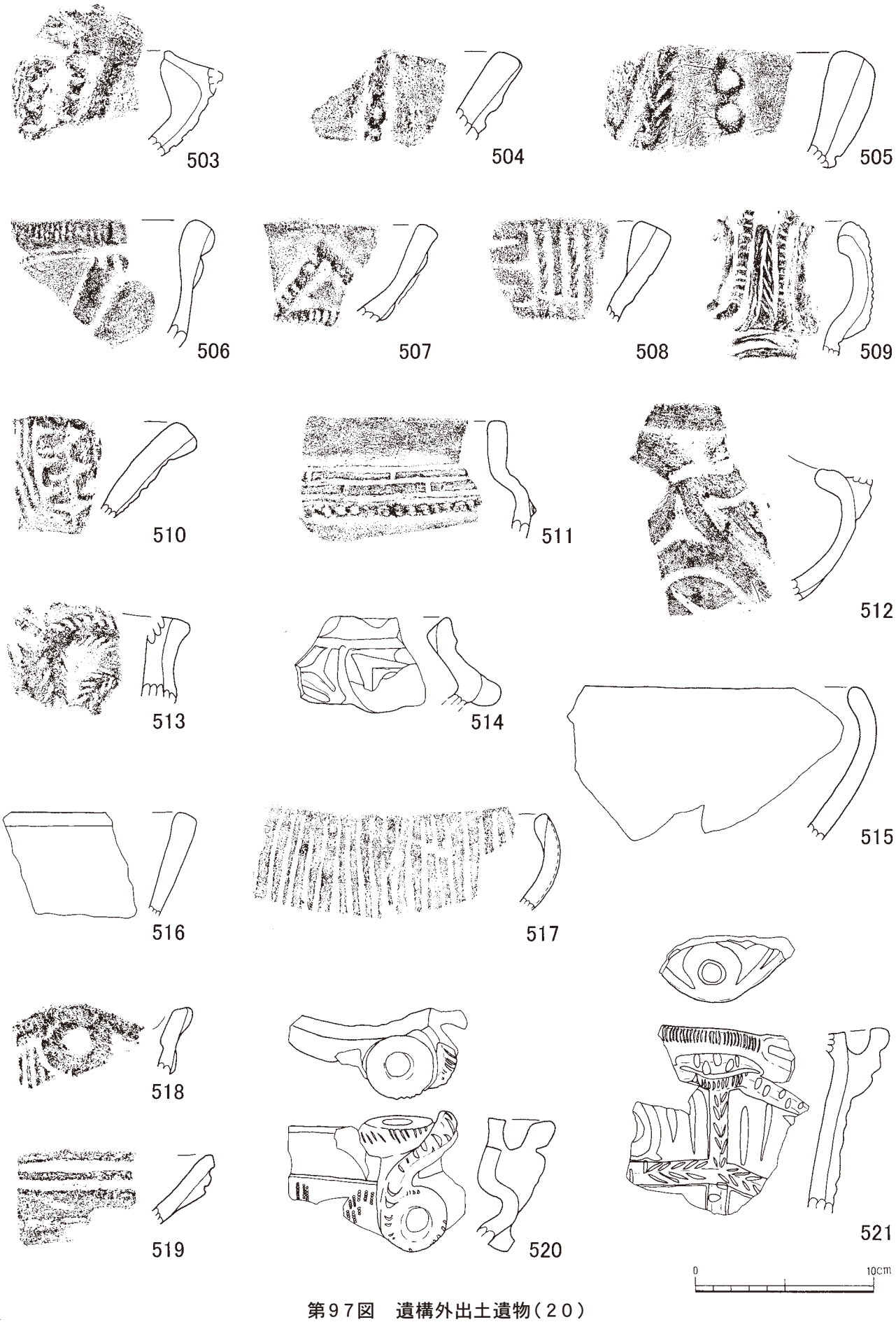
第９４図　遺構外出土遺物（１７）



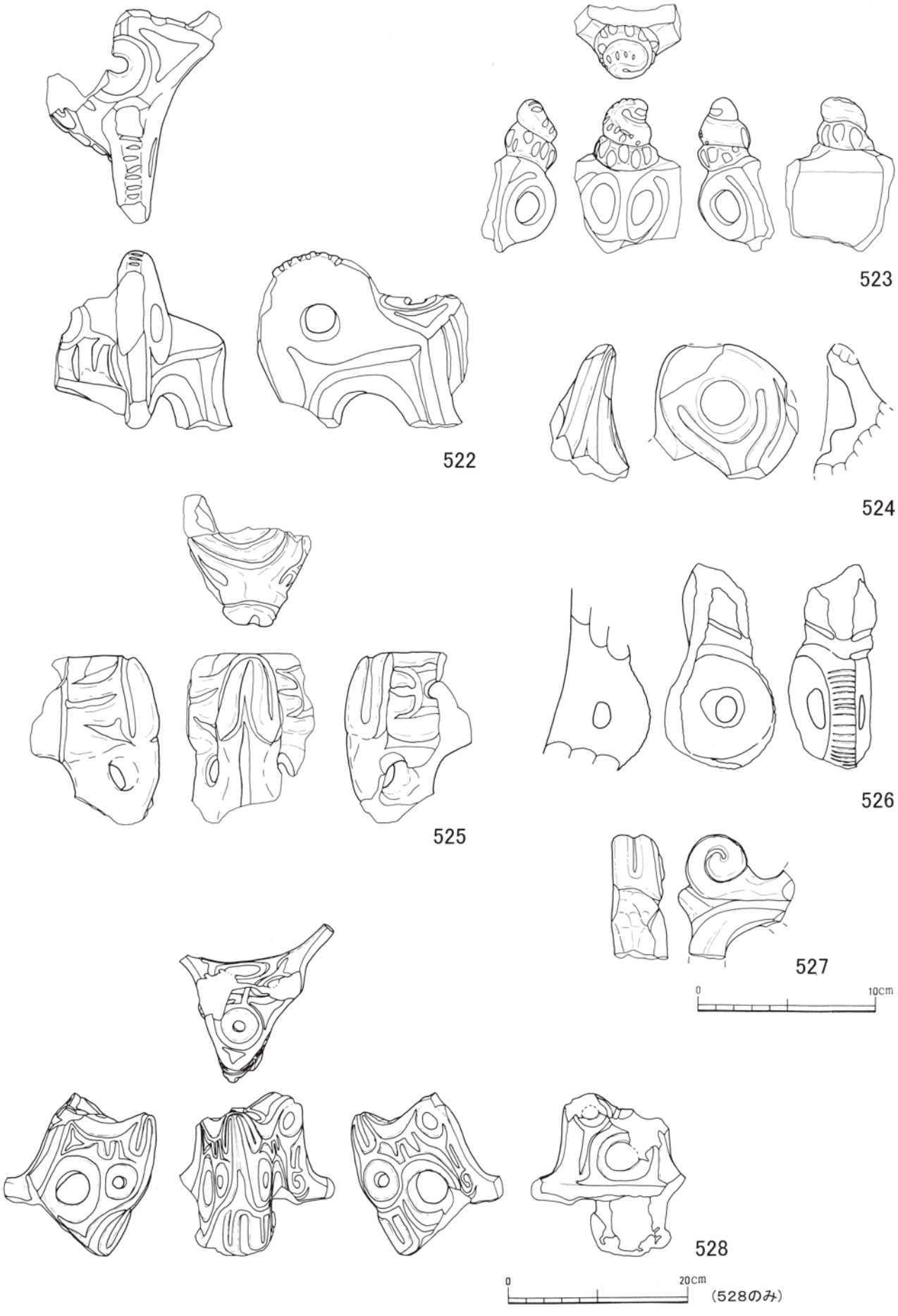
第９５図　遺構外出土遺物（１８）



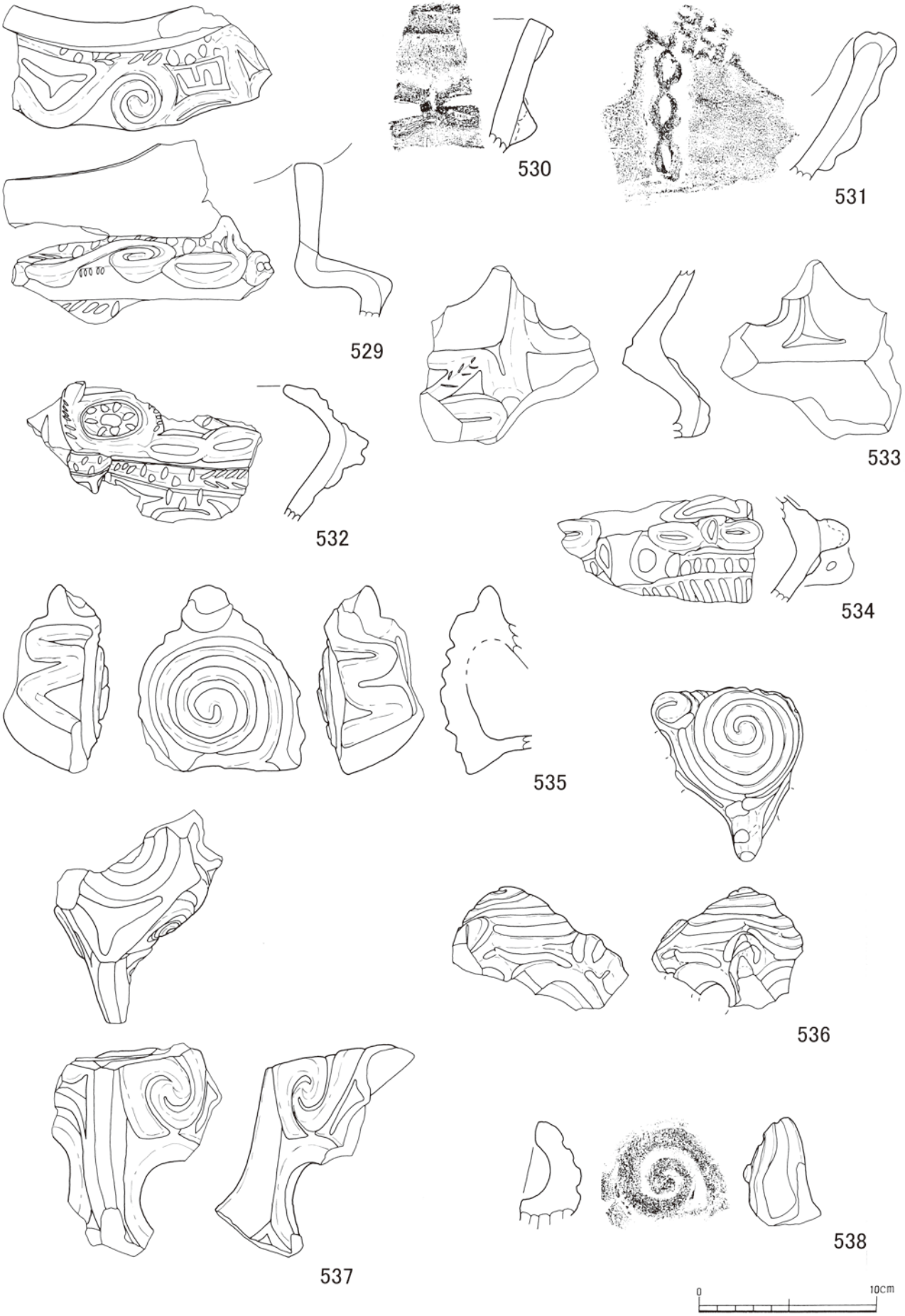
第９６図　遺構外出土遺物（１９）



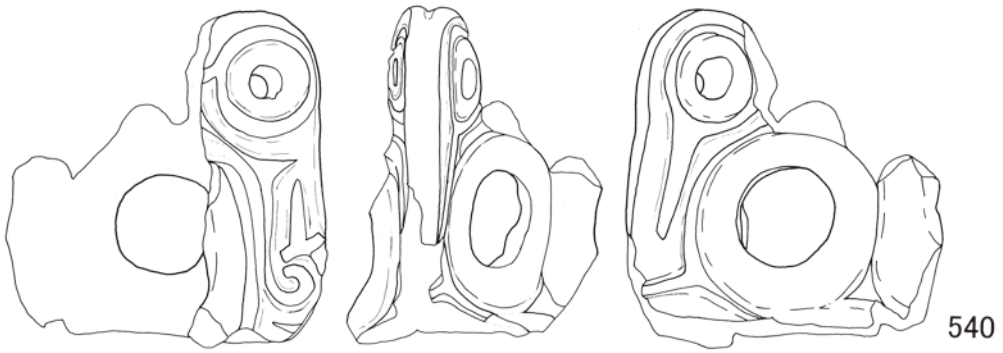
第９７図　遺構外出土遺物（２０）

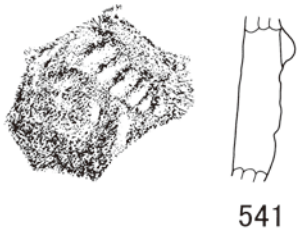


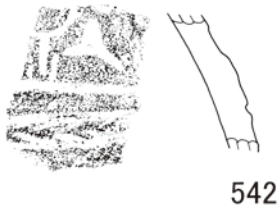
第９８図　遺構外出土遺物（２１）

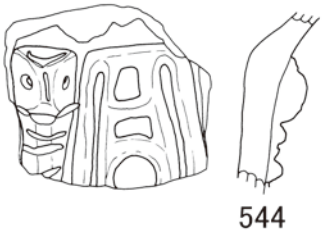


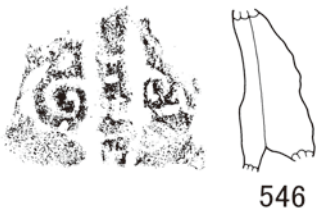
第９９図　遺構外出土遺物（２２）

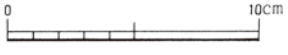




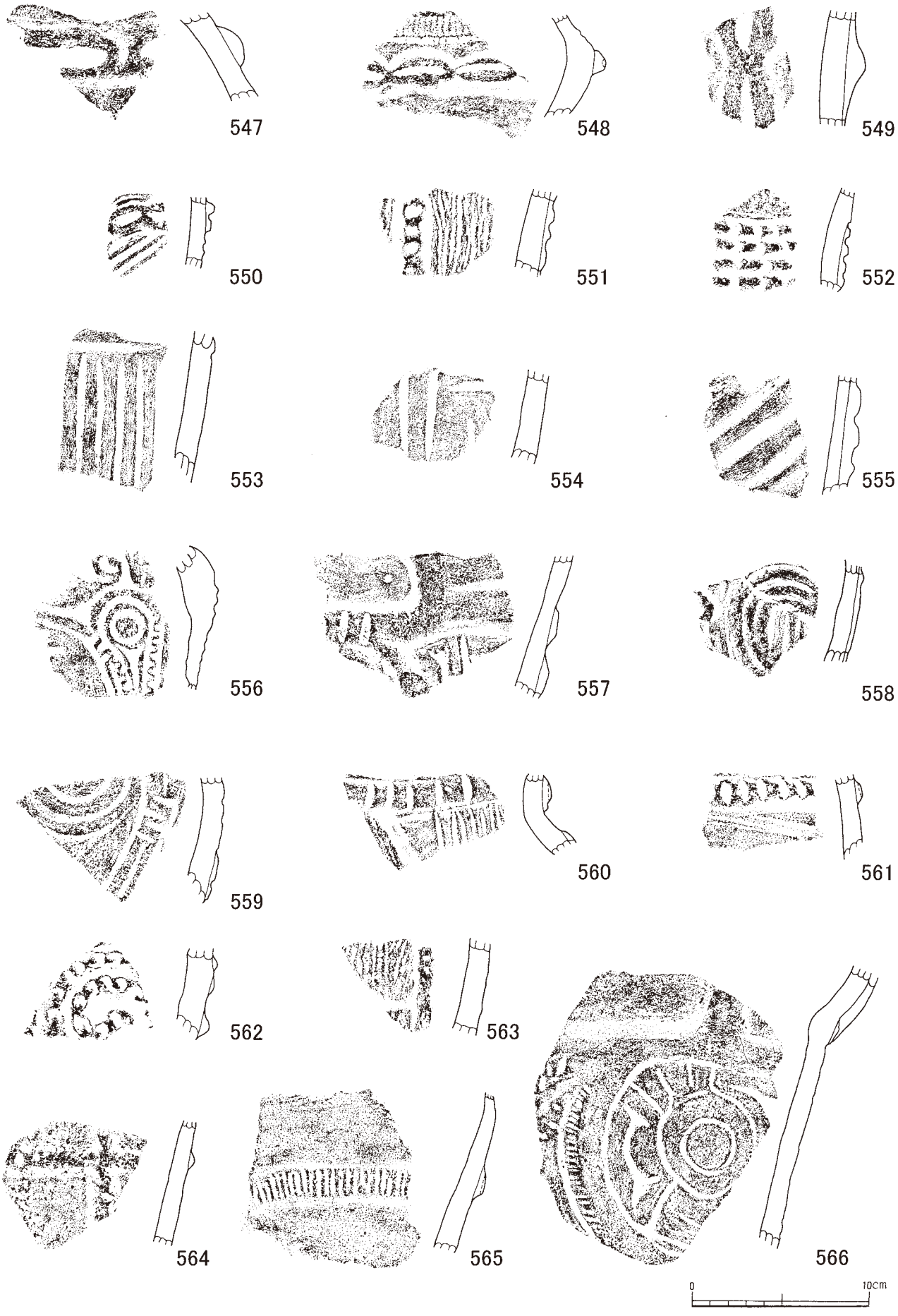




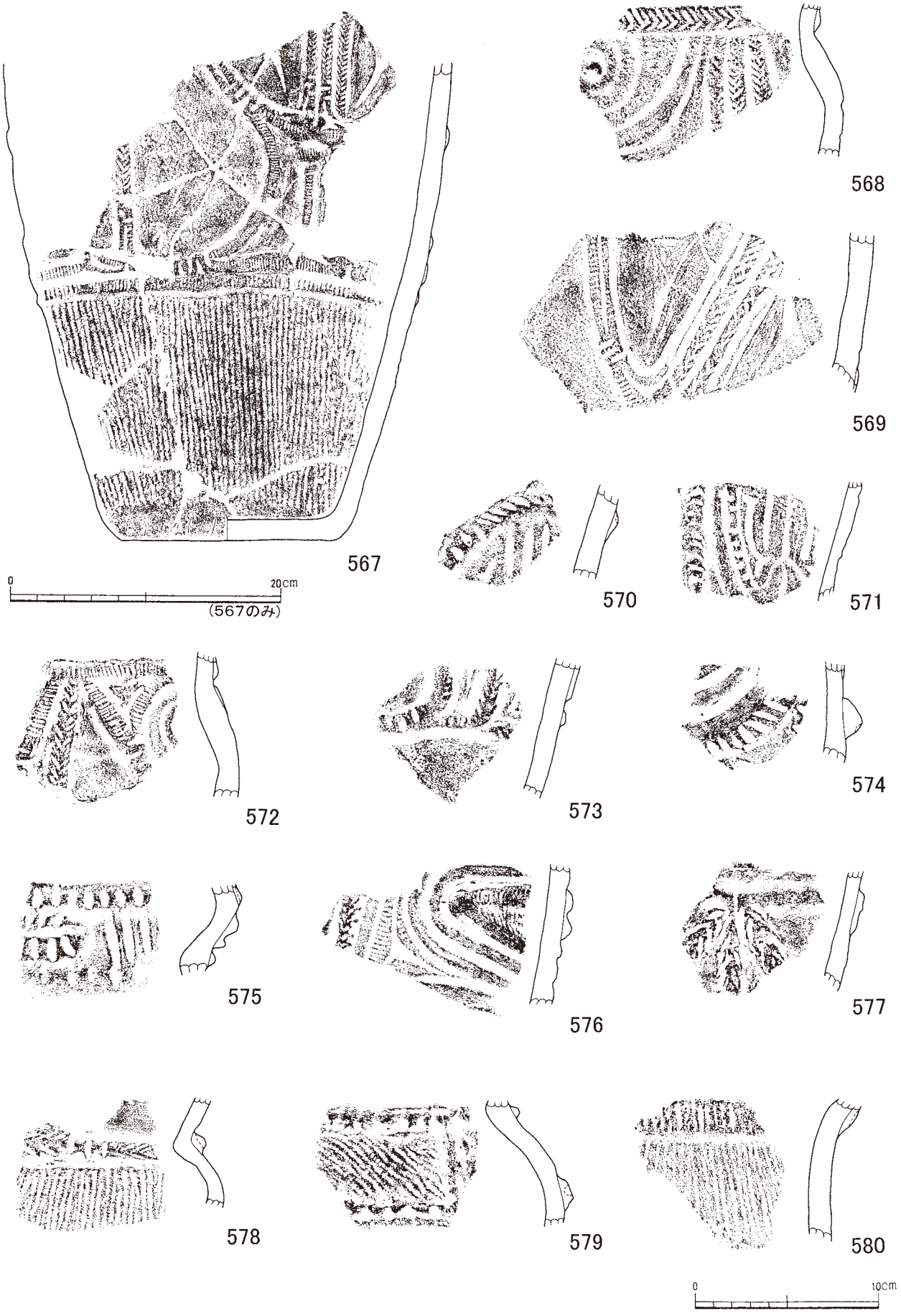




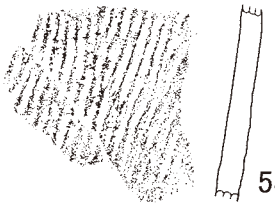
第１００図　遺構外出土遺物（２３）



第１０１図　遺構外出土遺物（２４）



第１０２図　遺構外出土遺物（２５）


581

582

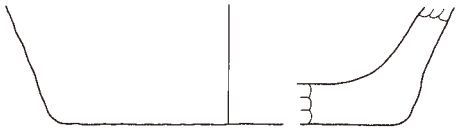
583

584

585

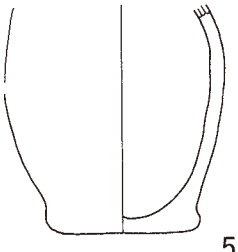
586

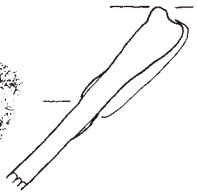
587



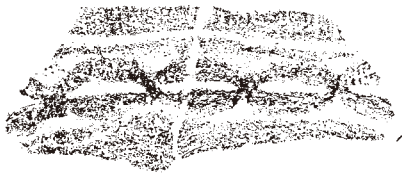
588

589

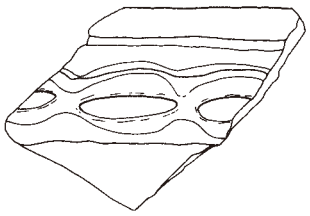

590



591



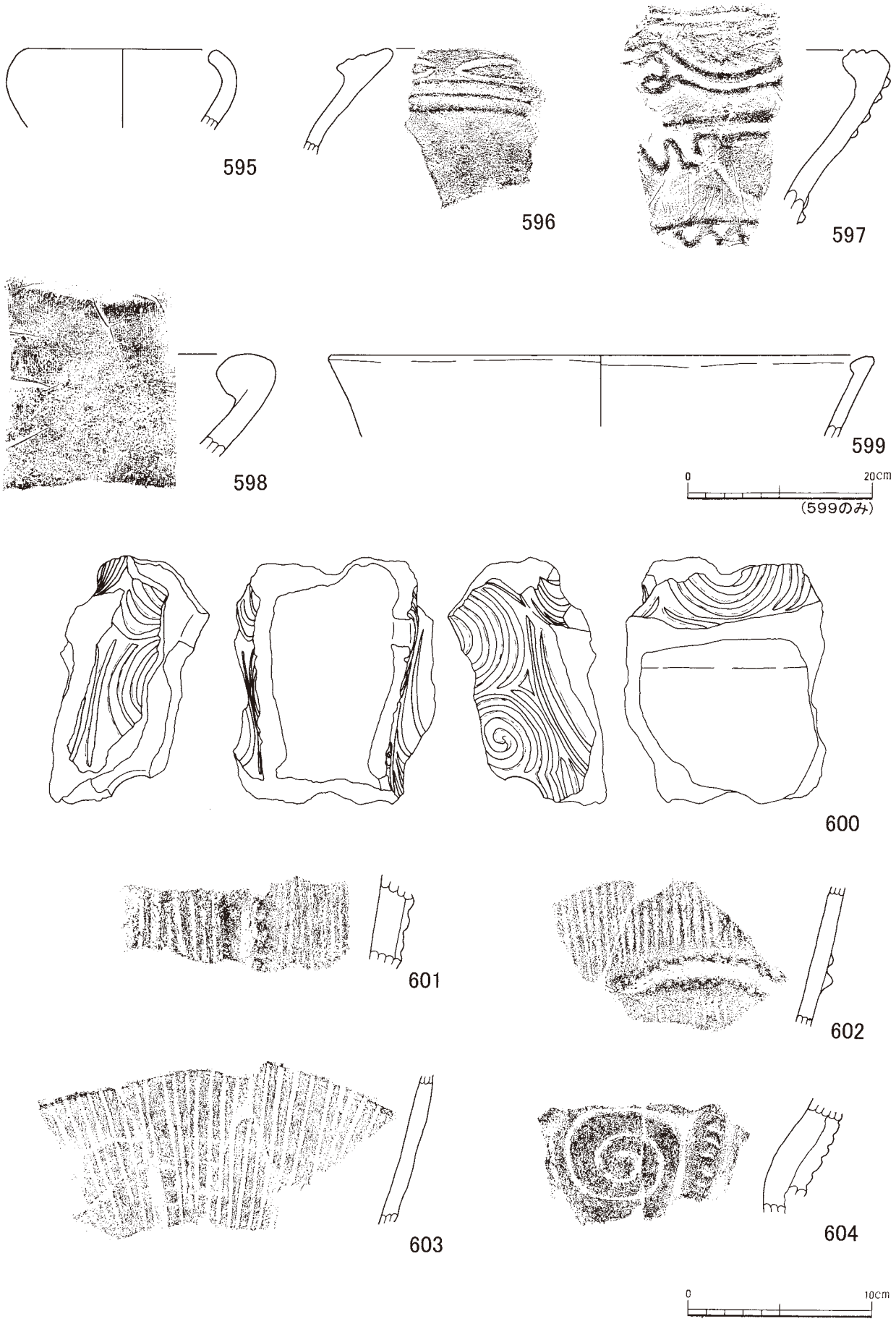
592



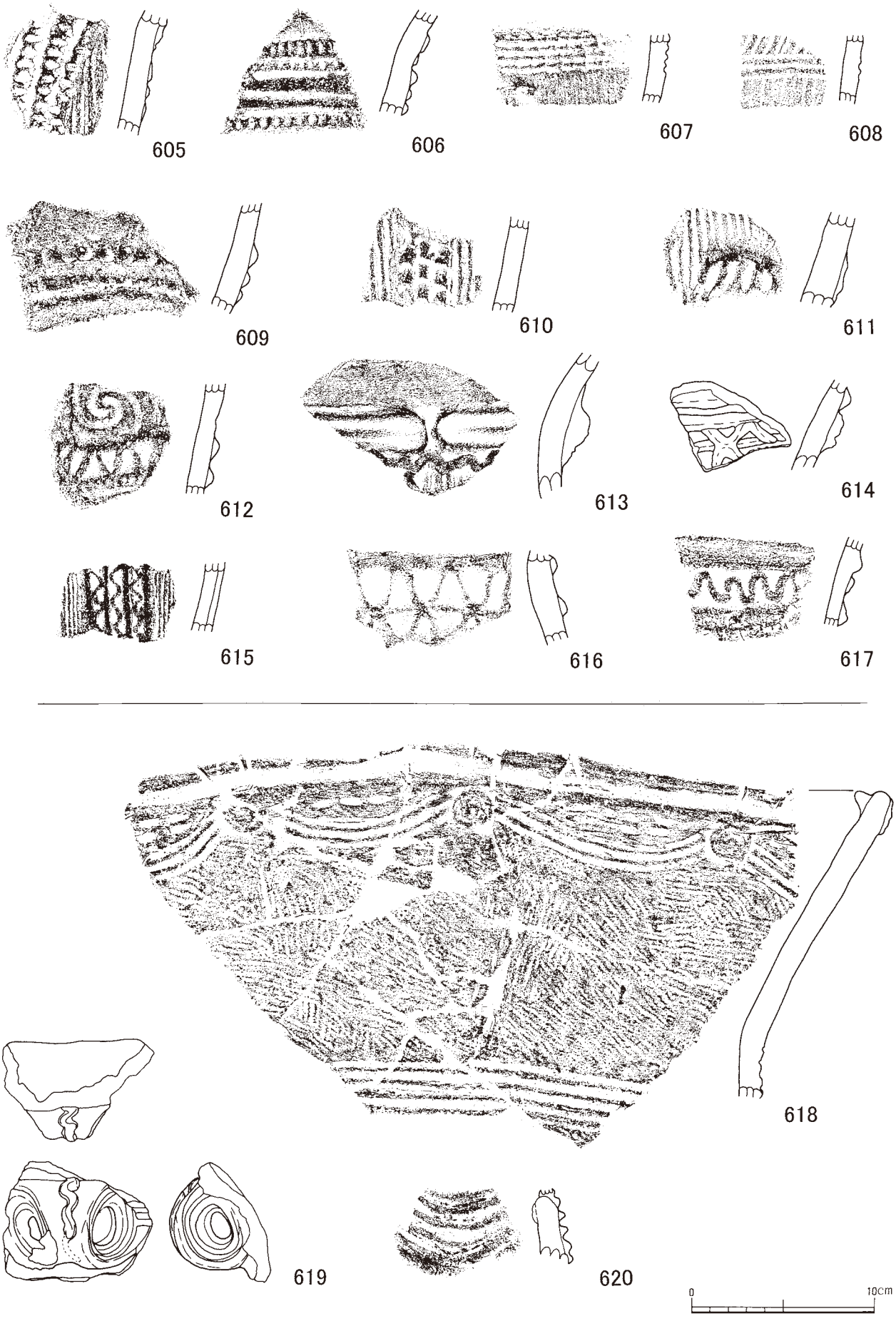
593

594

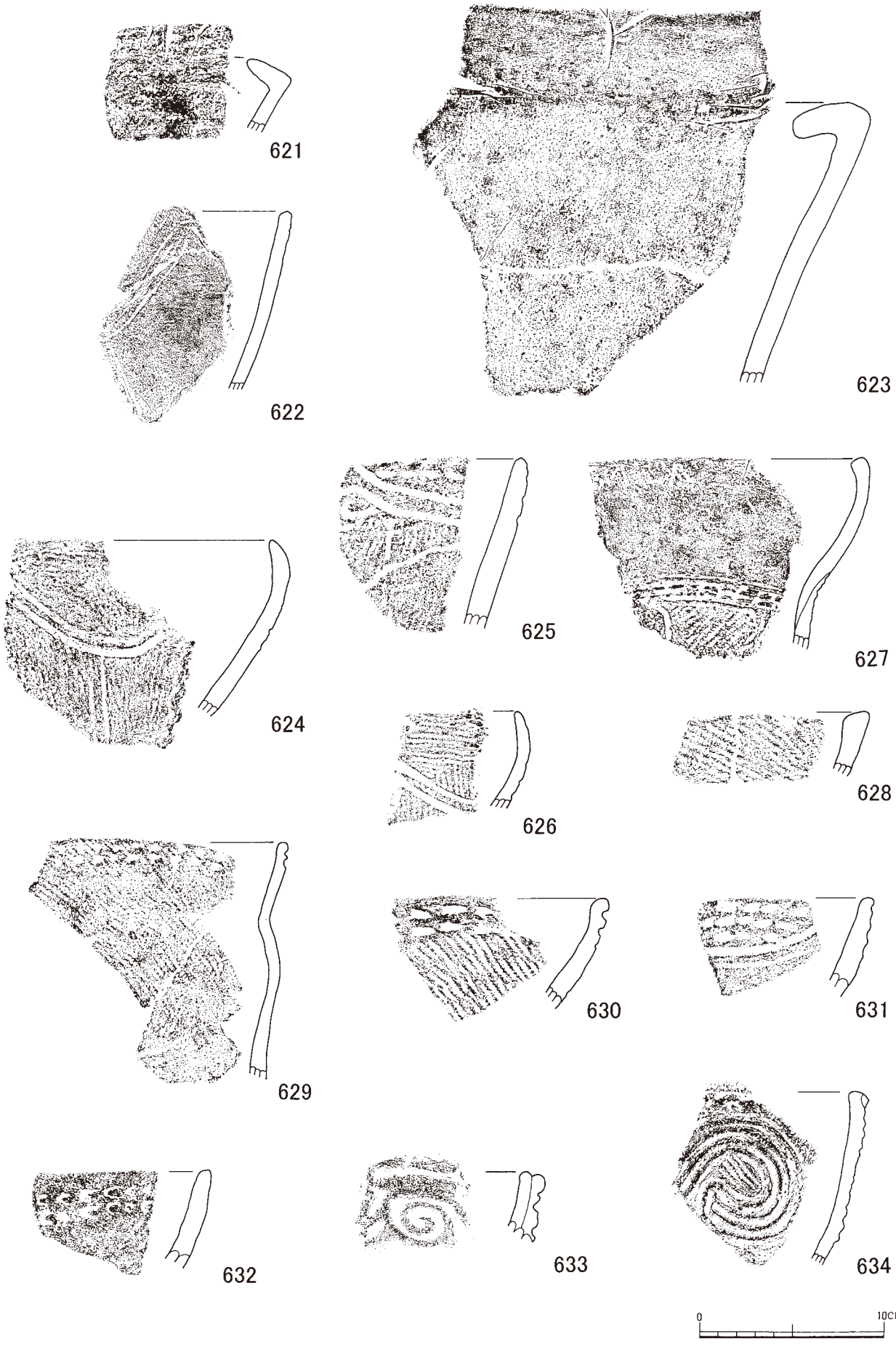
第１０３図　遺構外出土遺物（２６）



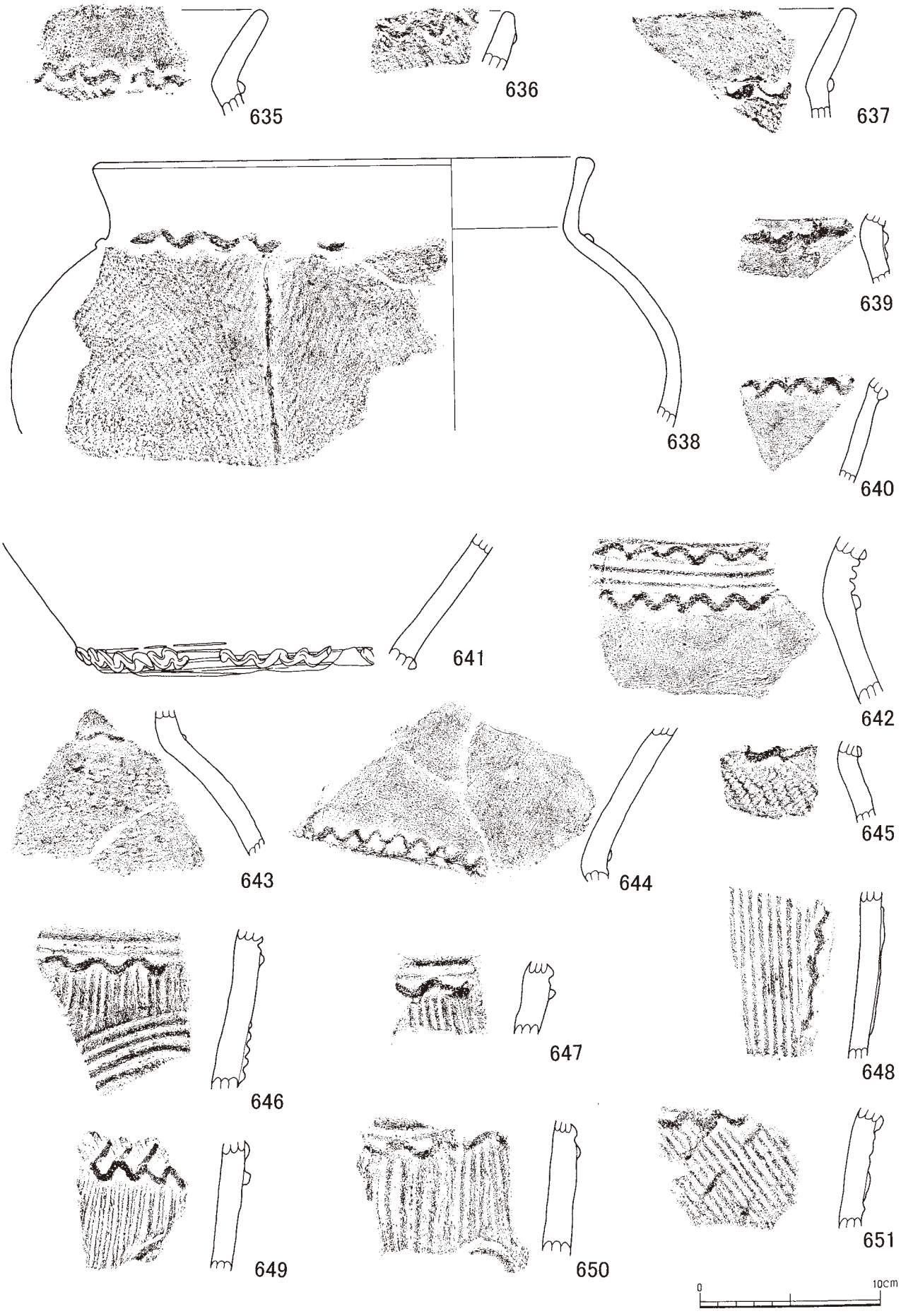
第１０４図　遺構外出土遺物（２７）



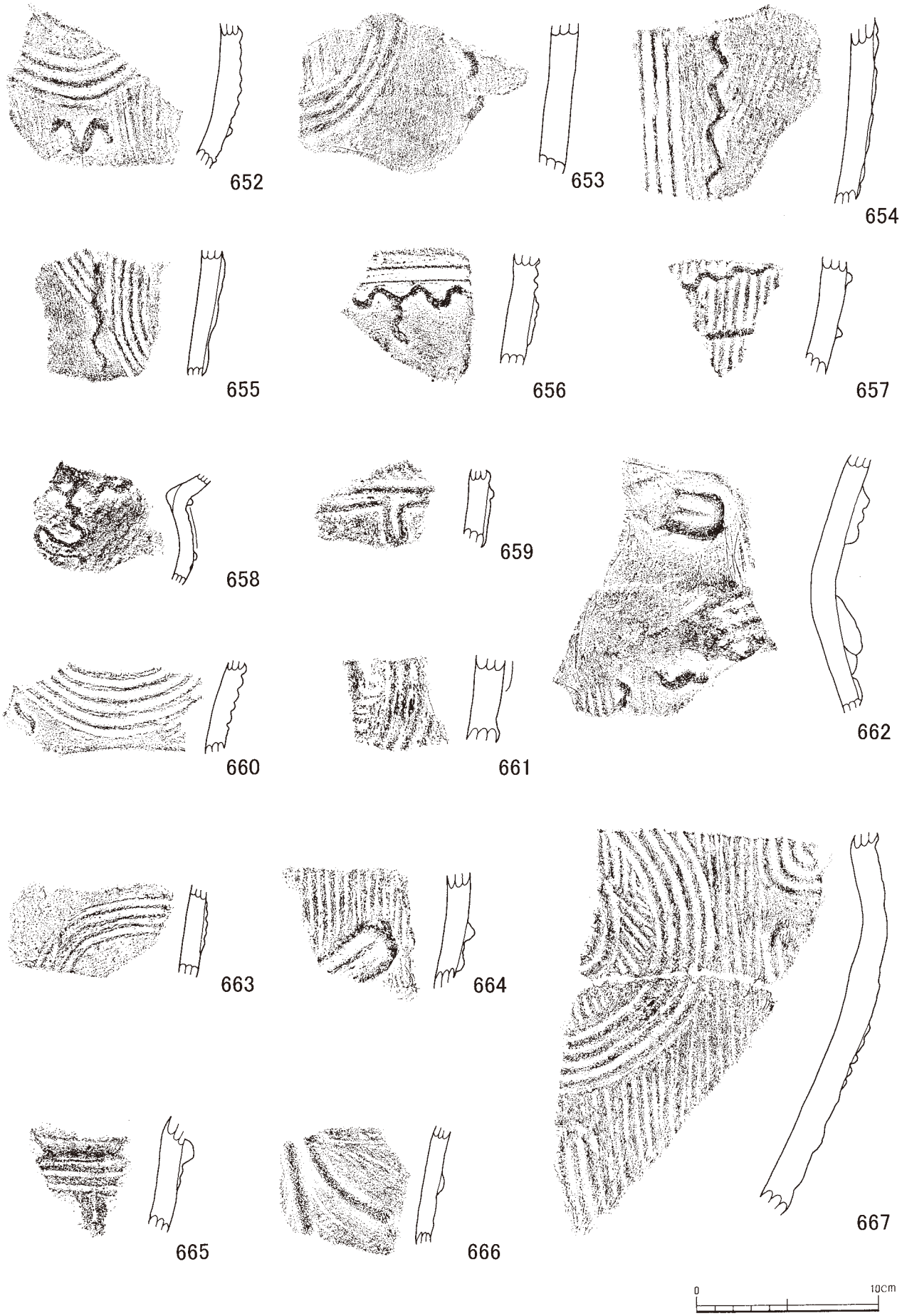
第１０５図　遺構外出土遺物（２８）



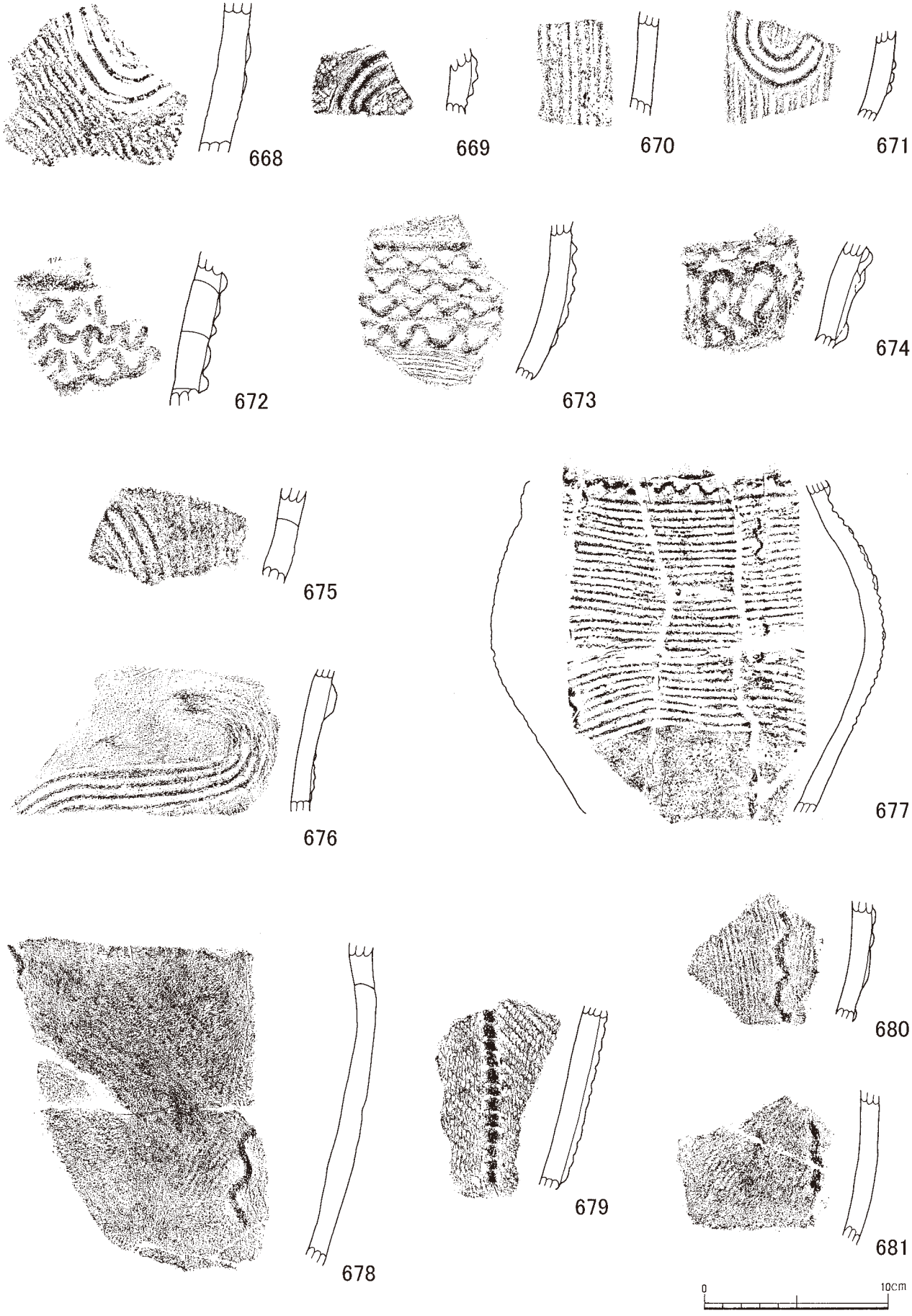
第１０６図　遺構外出土遺物（２９）



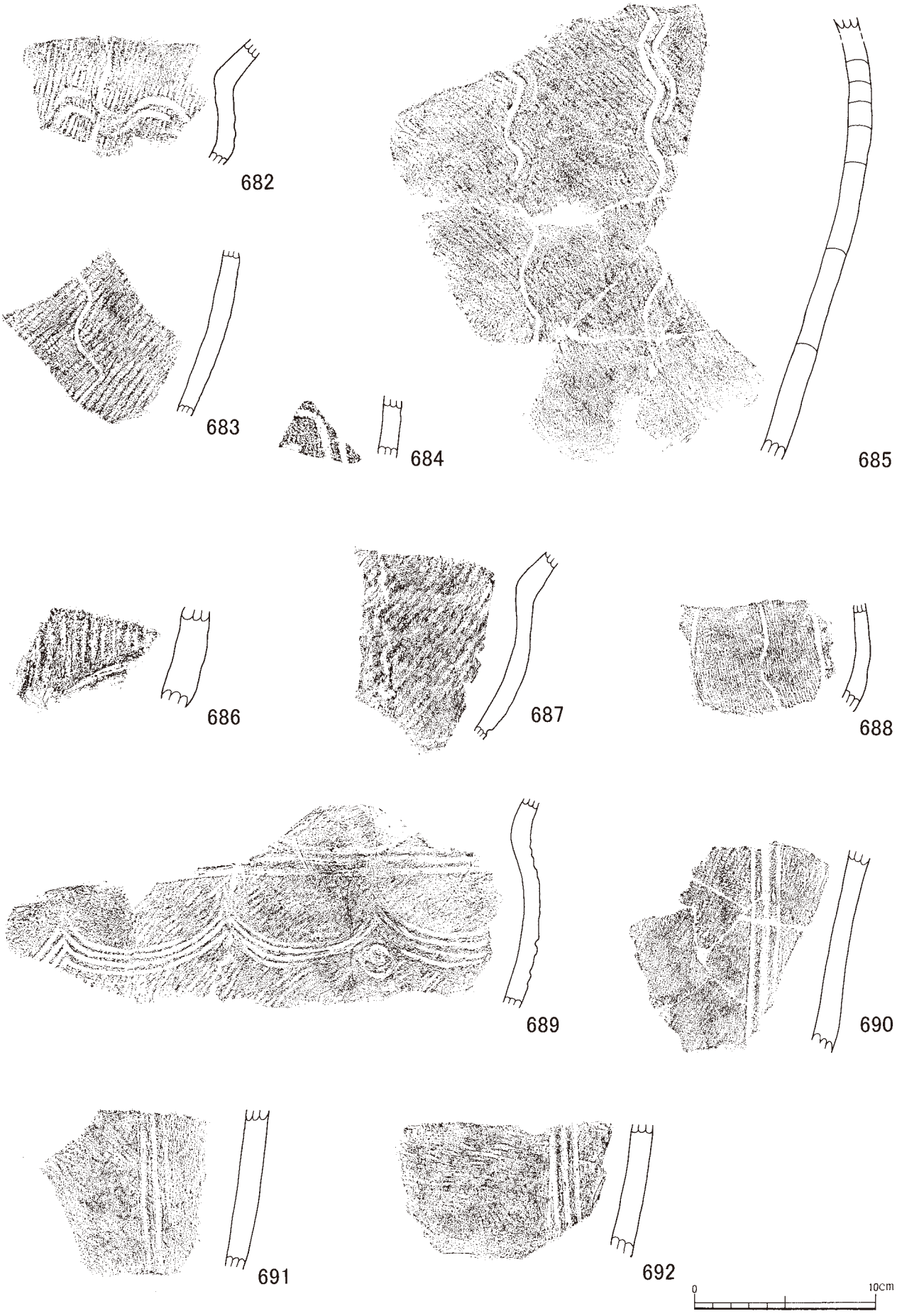
第１０７図　遺構外出土遺物（３０）



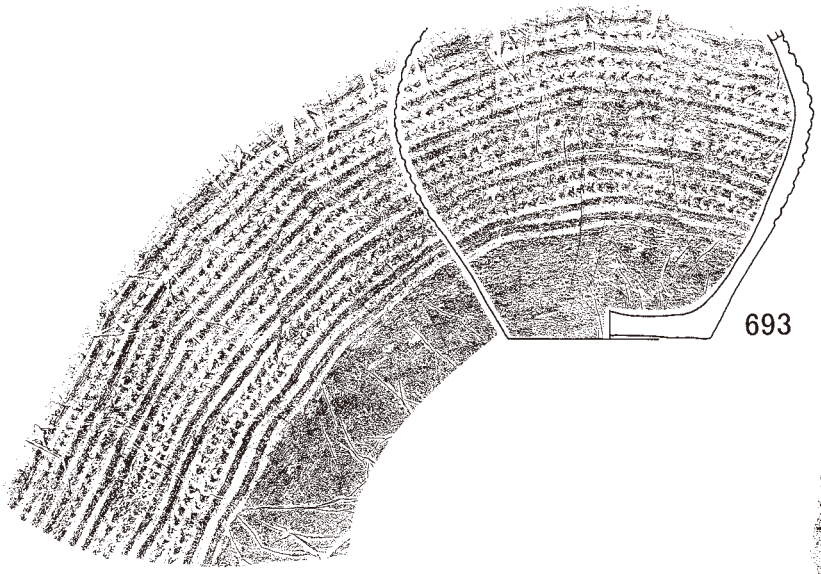
第１０８図　遺構外出土遺物（３１）

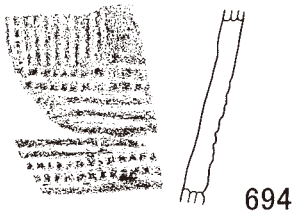


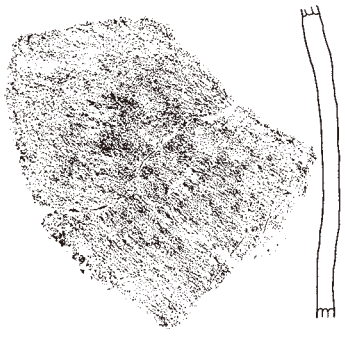
第１０９図　遺構外出土遺物（３２）

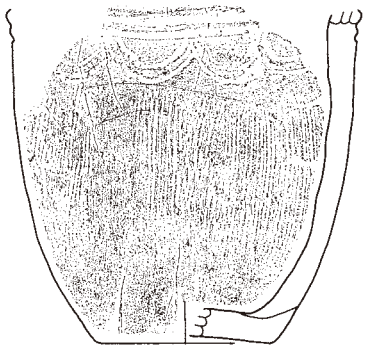


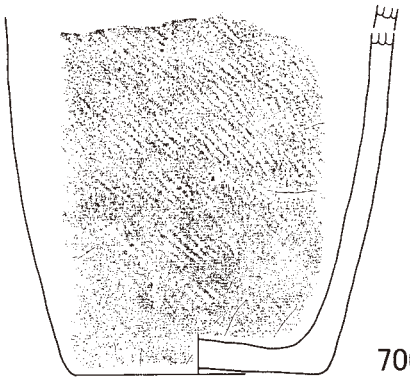
第１１０図　遺構外出土遺物（３３）

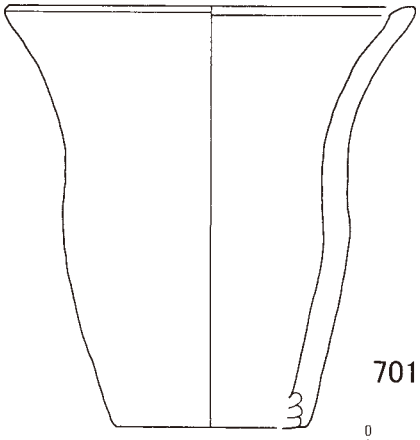




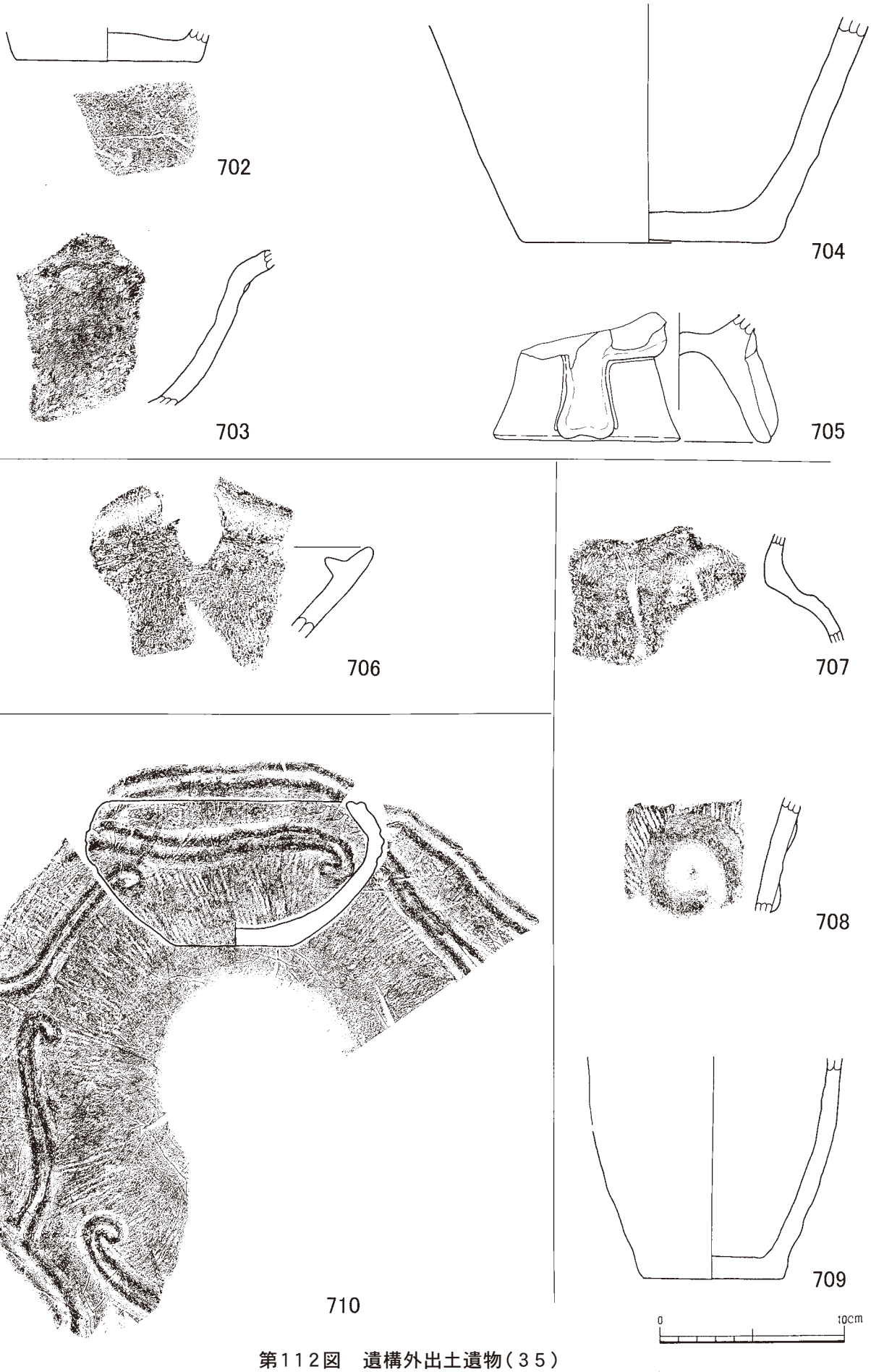




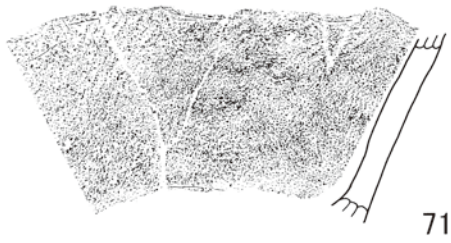


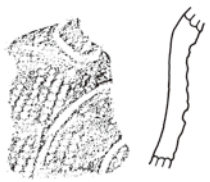


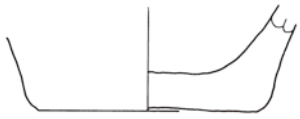
第111図　遺構外出土遺物（34）

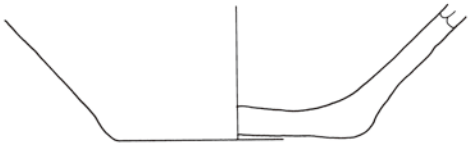


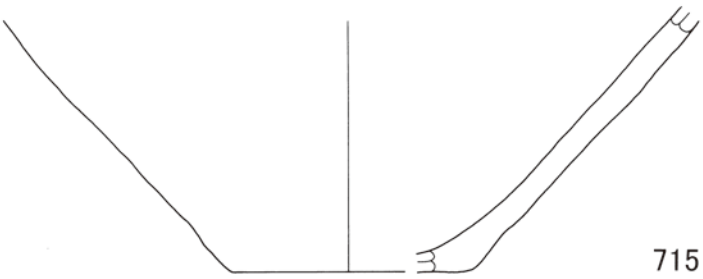
第112図　遺構外出土遺物（35）

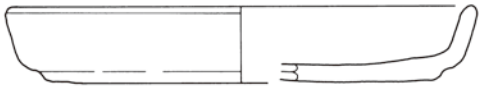

711


712


713


714

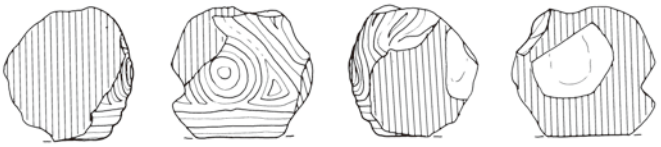

715

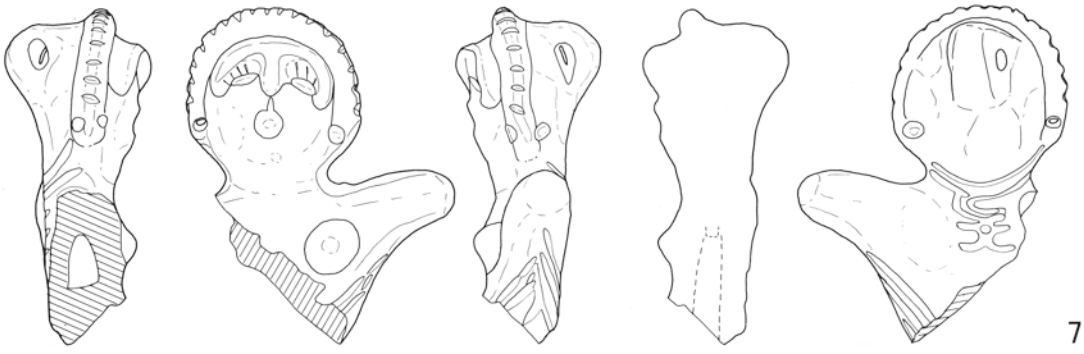

716

717

0 10cm

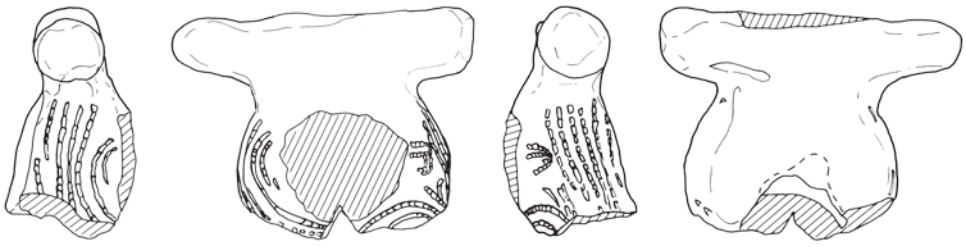
718

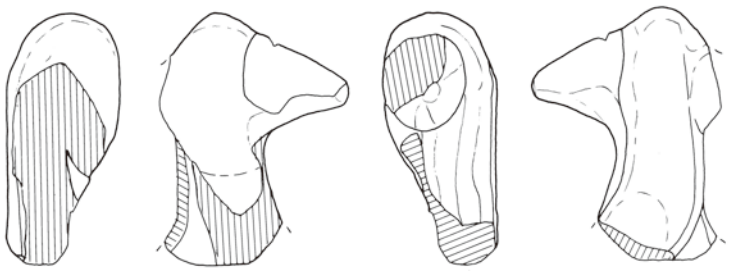

719

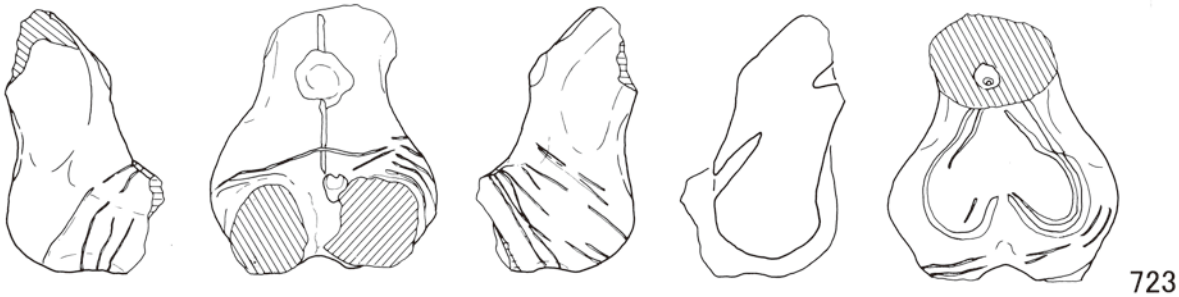

720

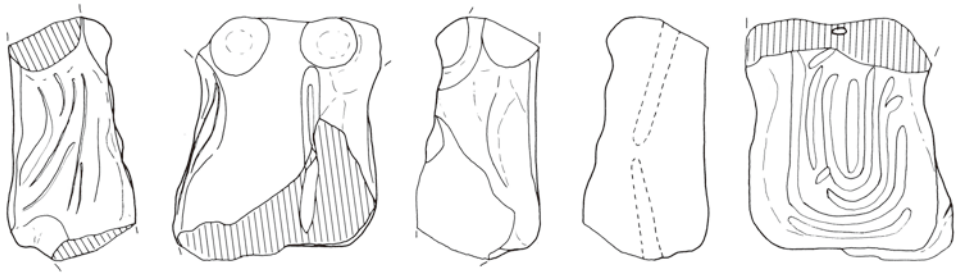
0 10cm

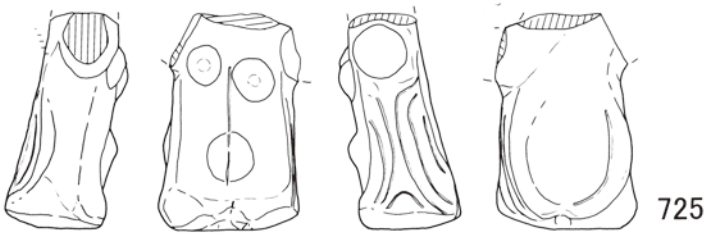
第113図　遺構外出土遺物（36）・土偶（1）

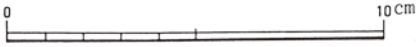




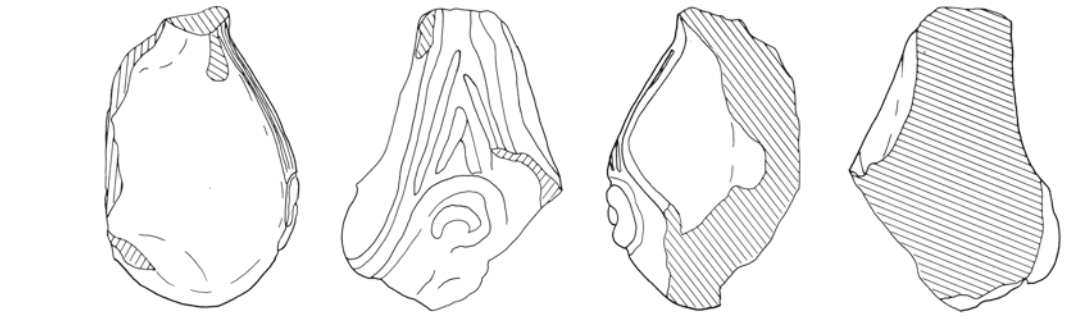


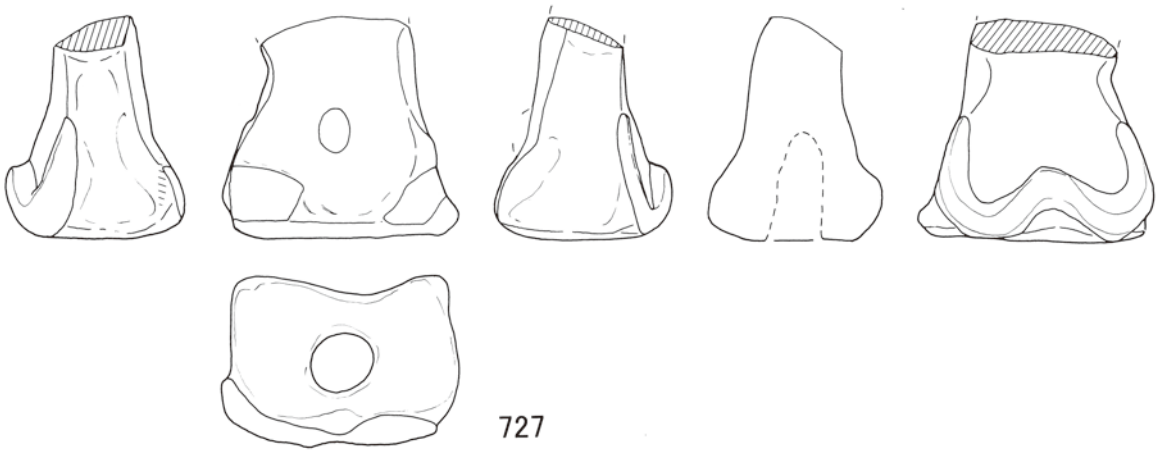


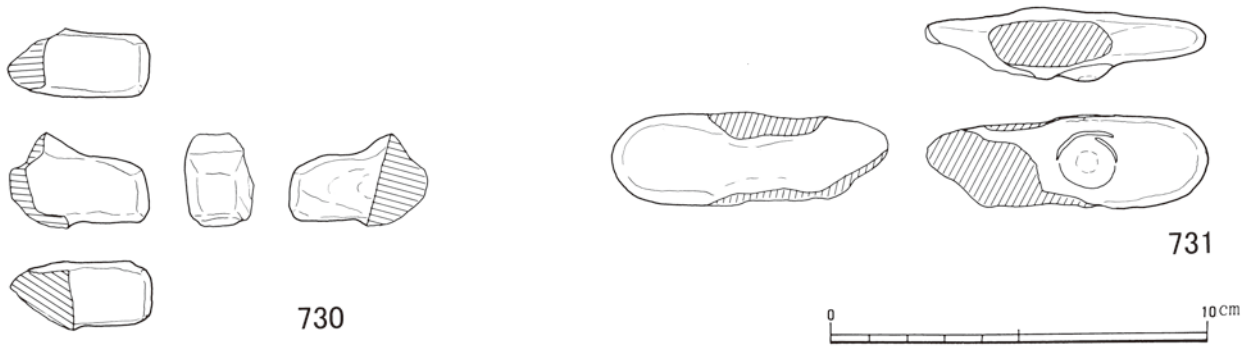




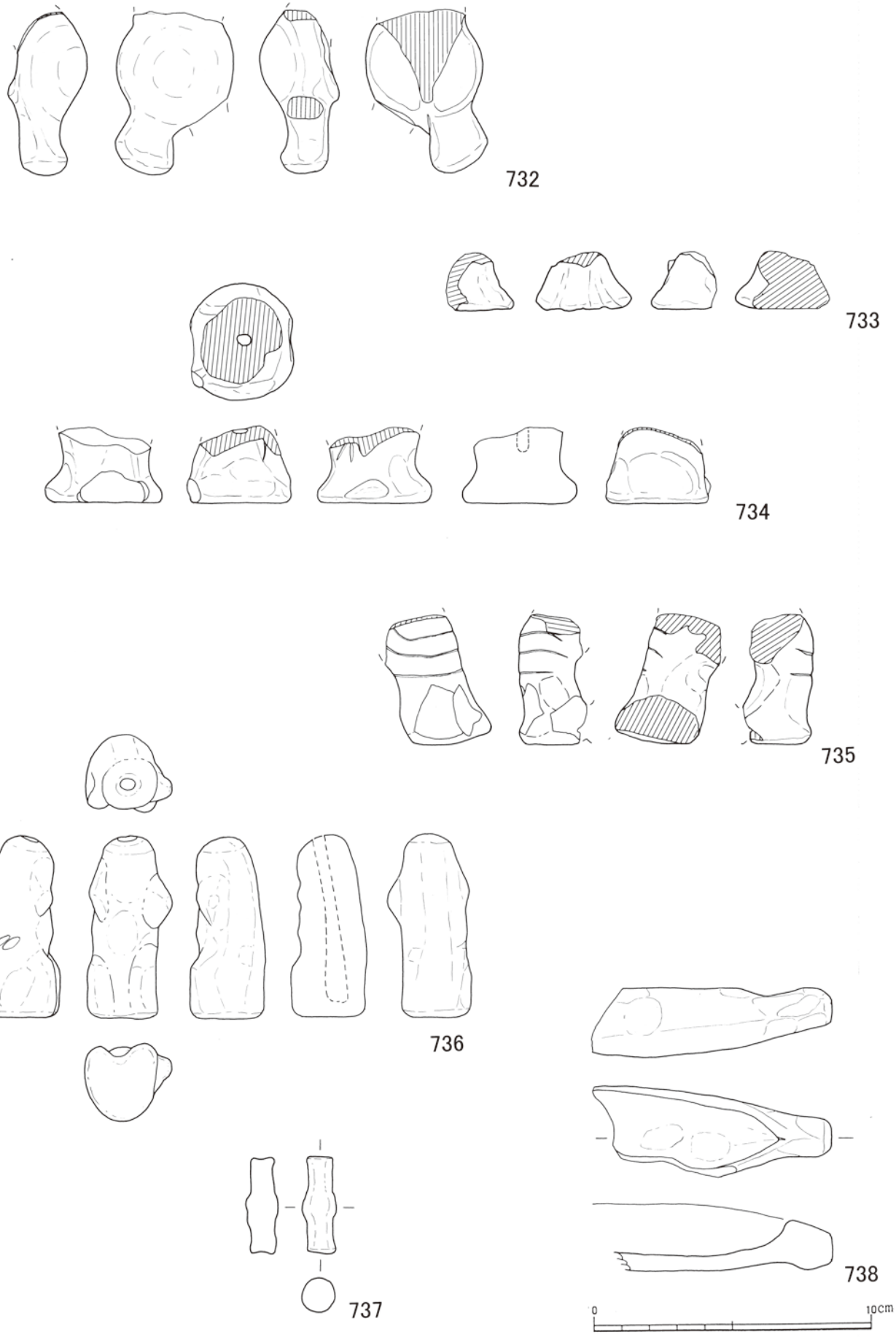
第１１４図　土偶（２）



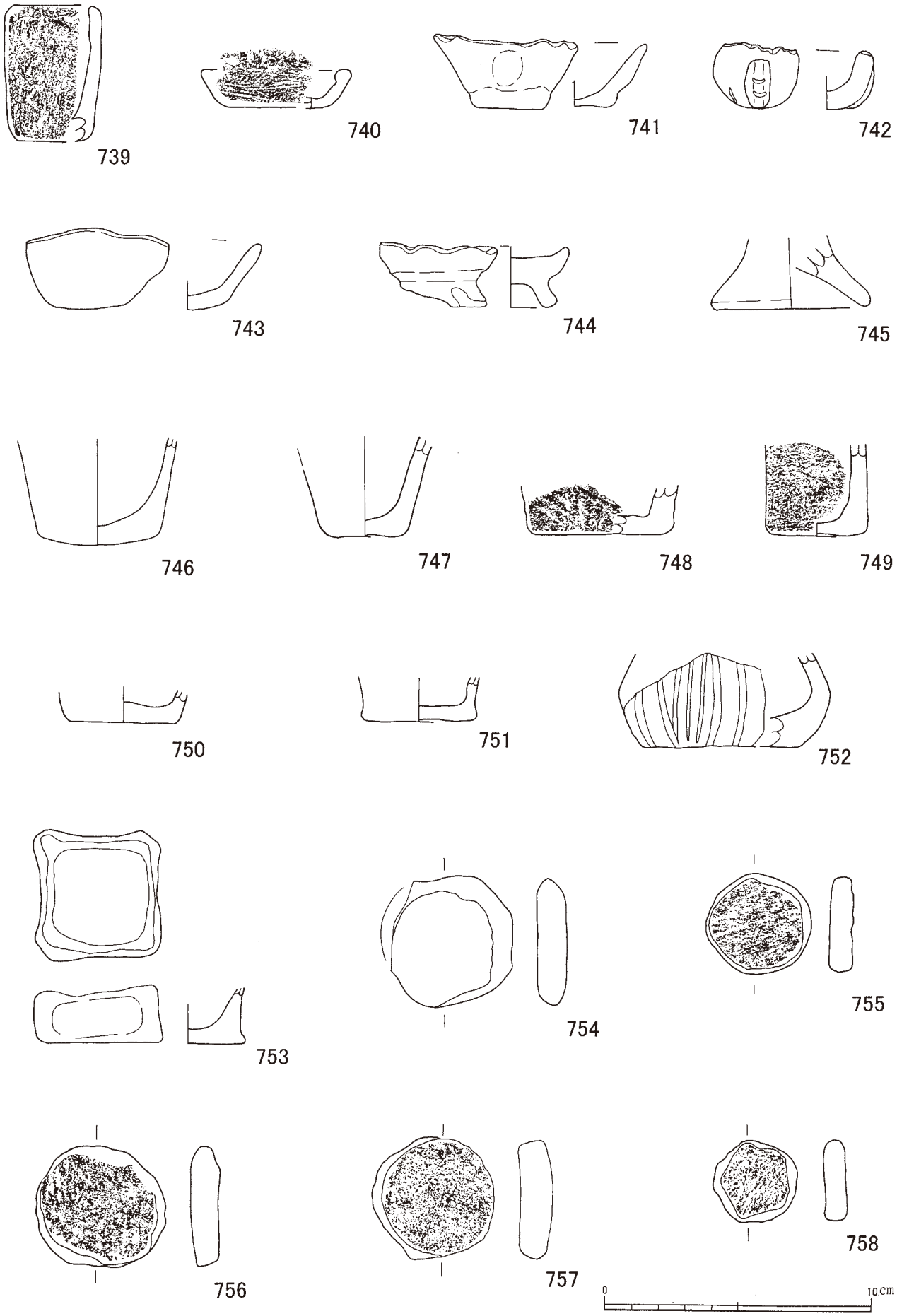




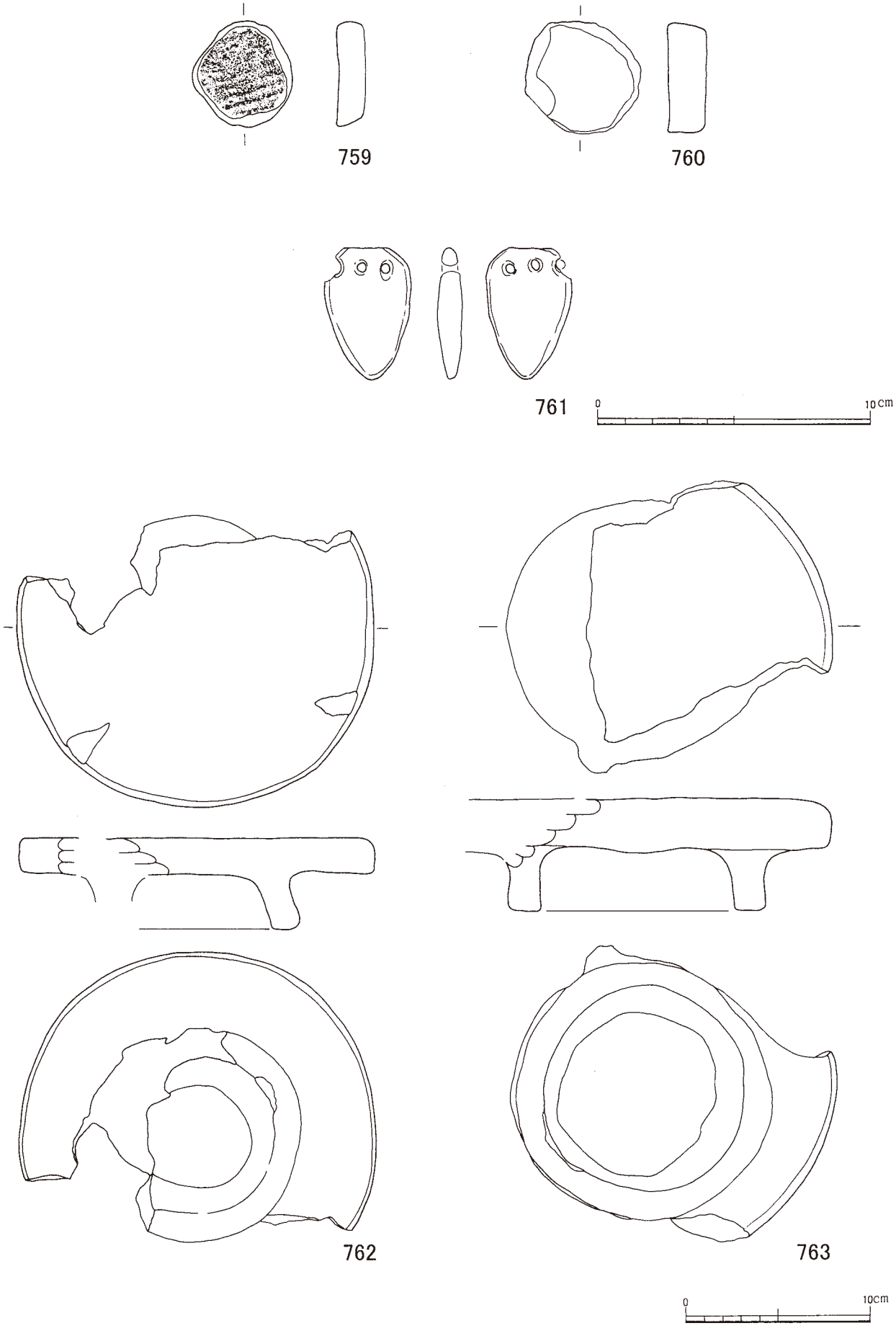
第115図　土偶（3）



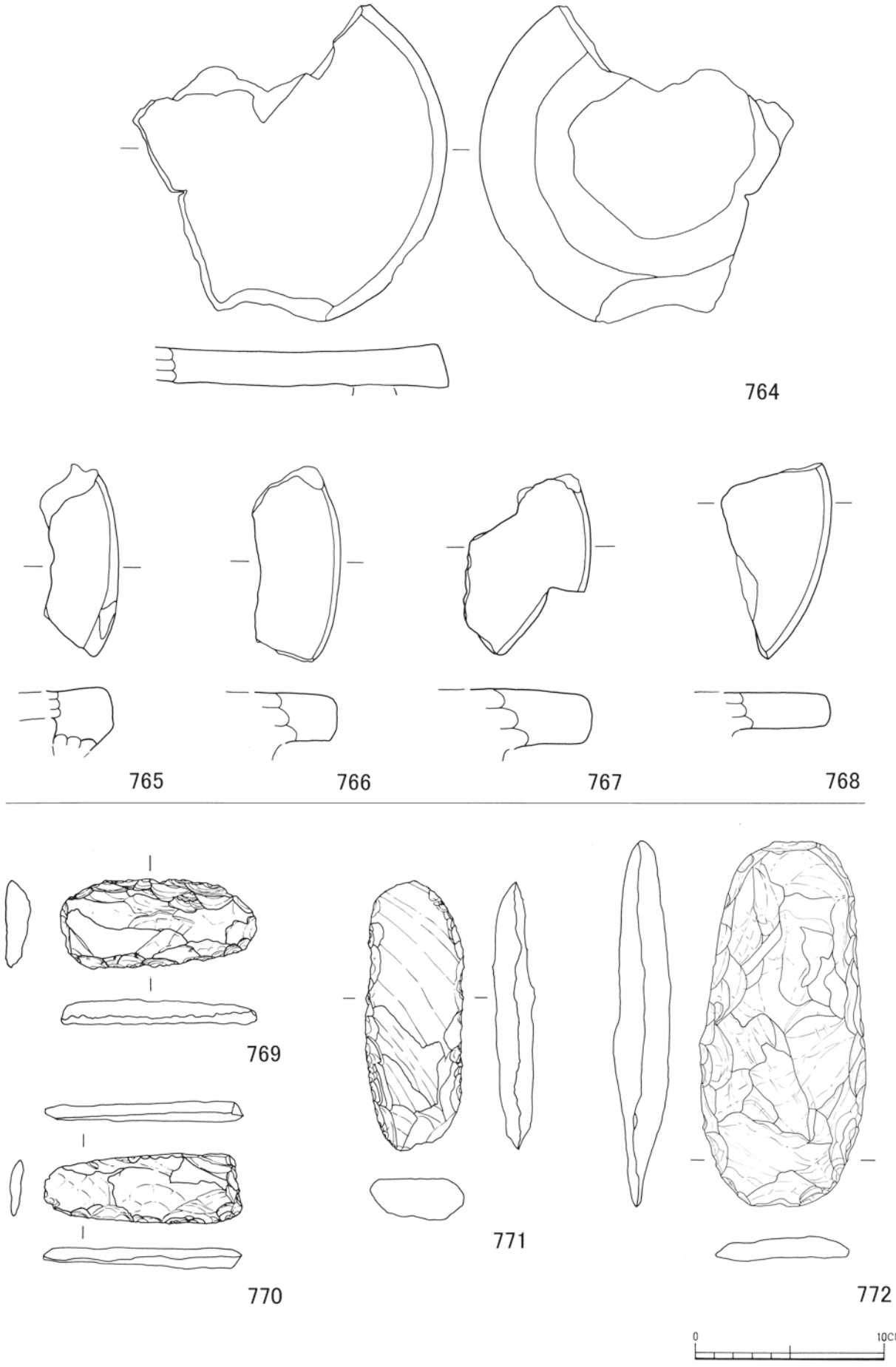
第116図　土偶(4)・土製品



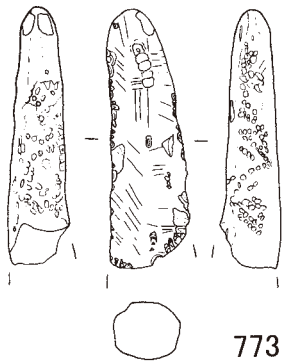
第117図　ミニチュア土器・土製円盤（1）

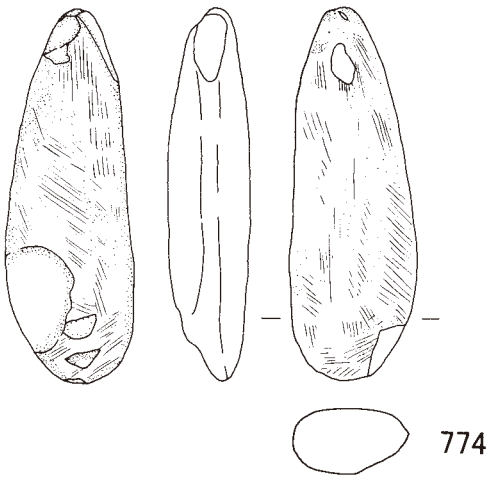


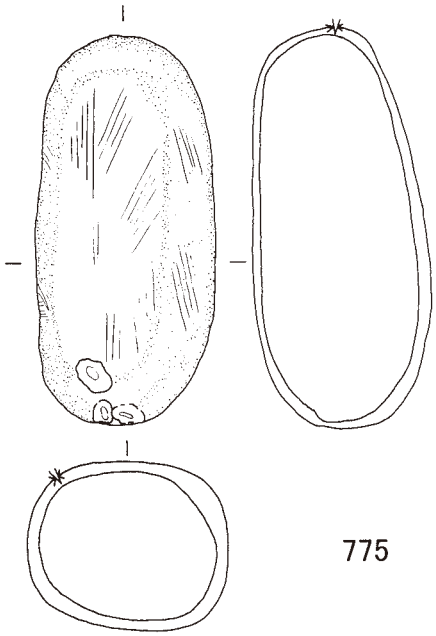
第118図　土製円盤(2)・土製装飾品・台形土器(1)

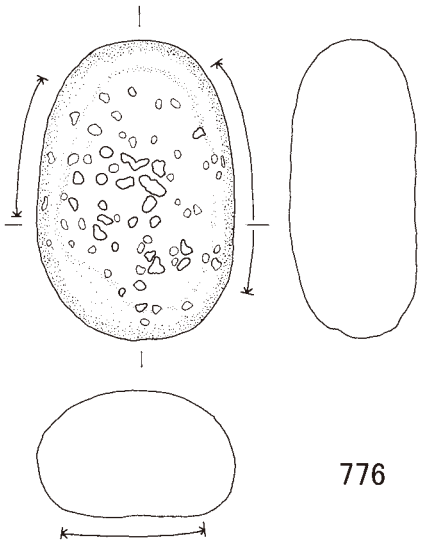


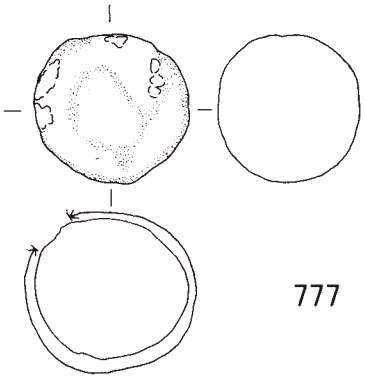
第119図　台形土器（2）・石器（1）

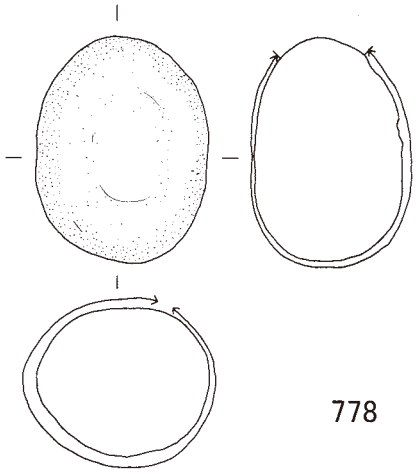


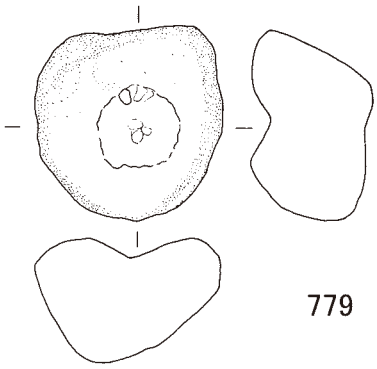


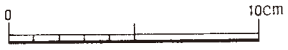




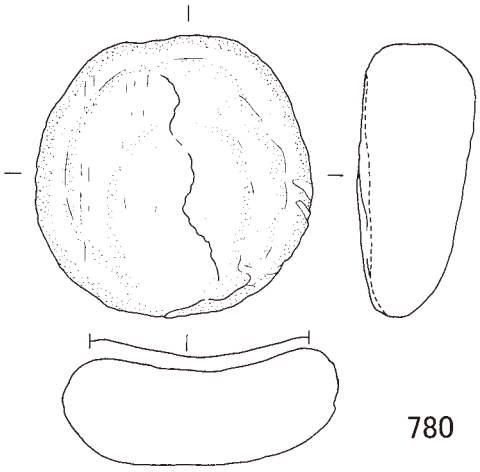


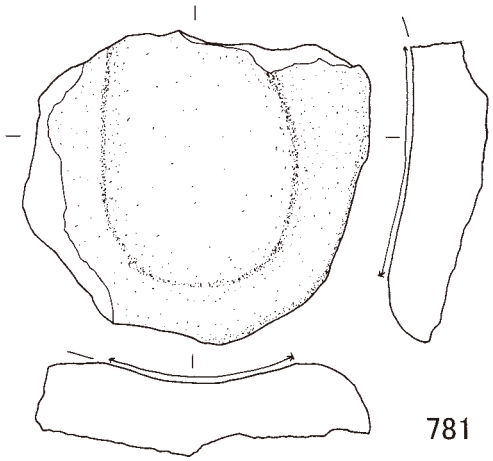


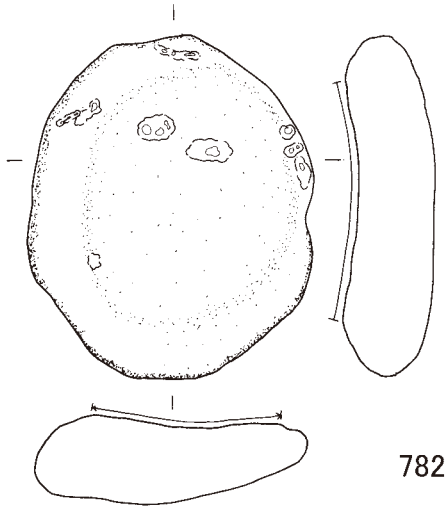


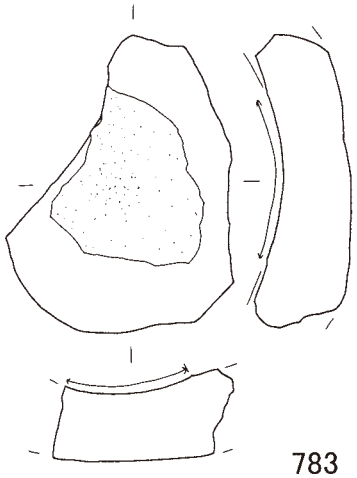


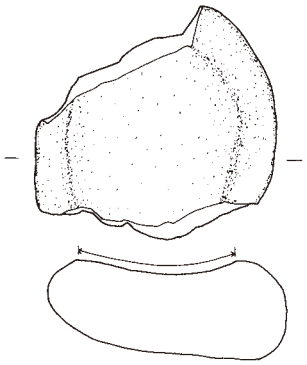
第１２０図　石器（２）

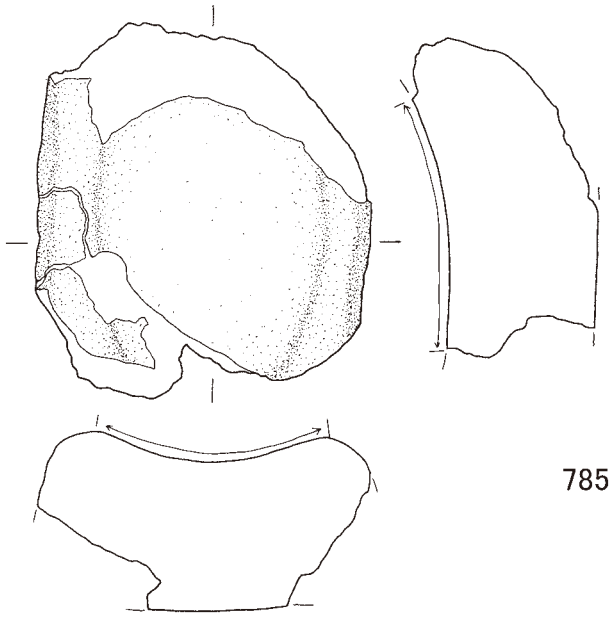


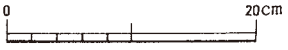




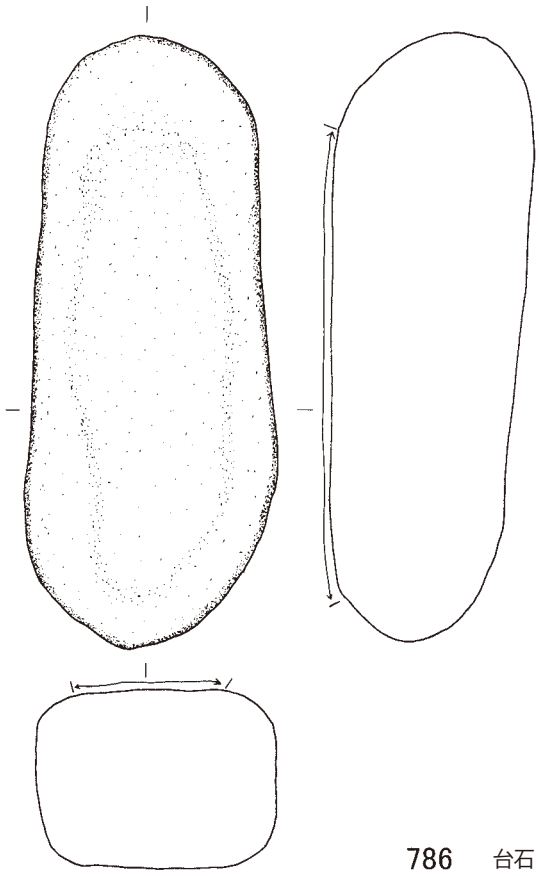




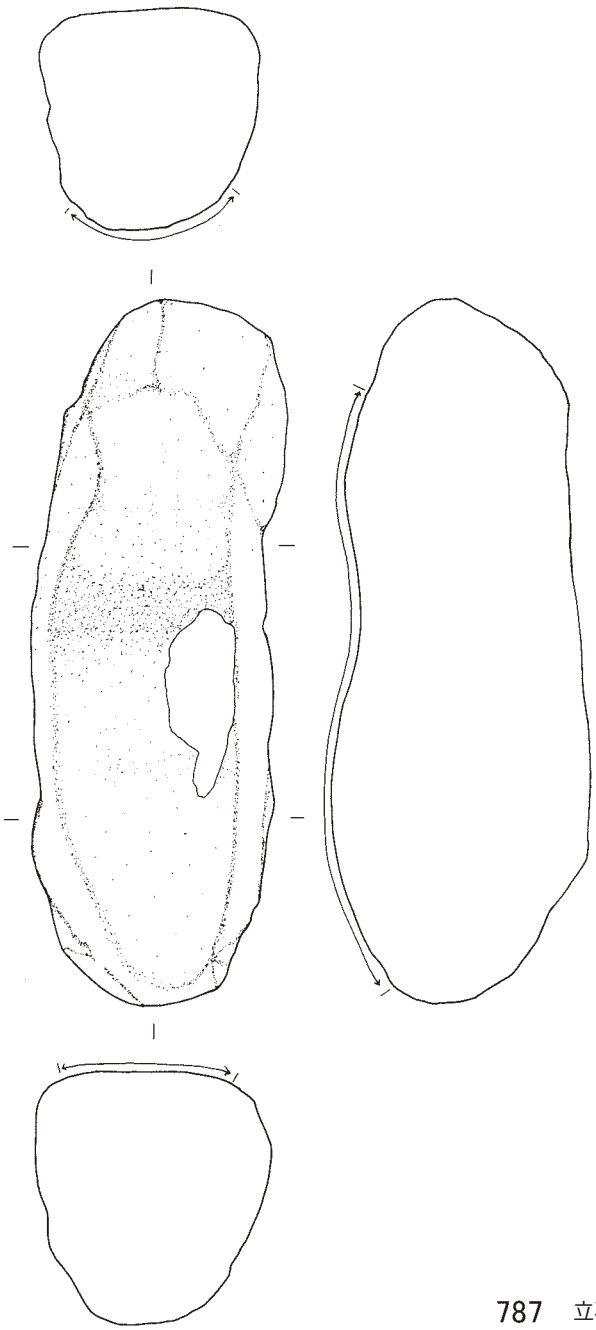




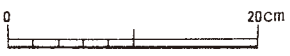
第121図　石器(3)



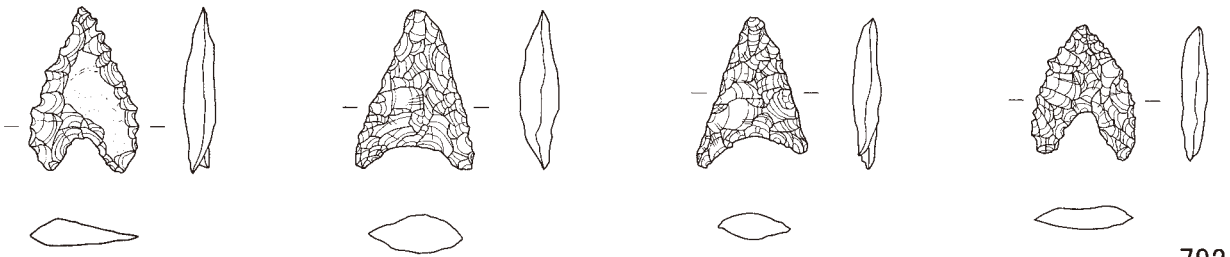
786　台石

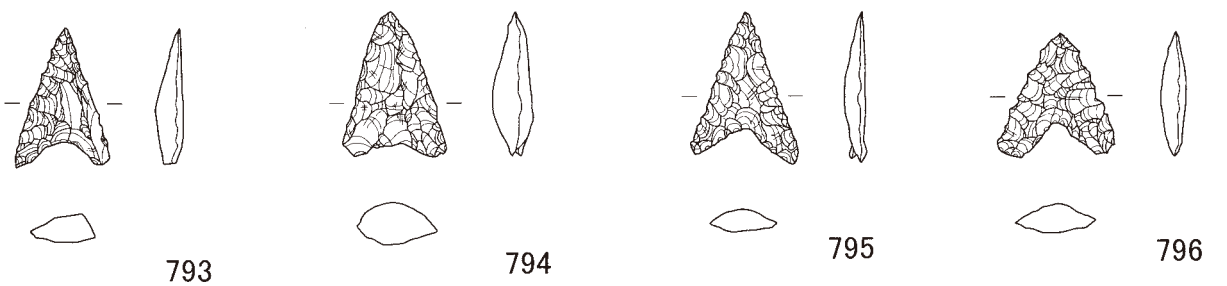


787　立石

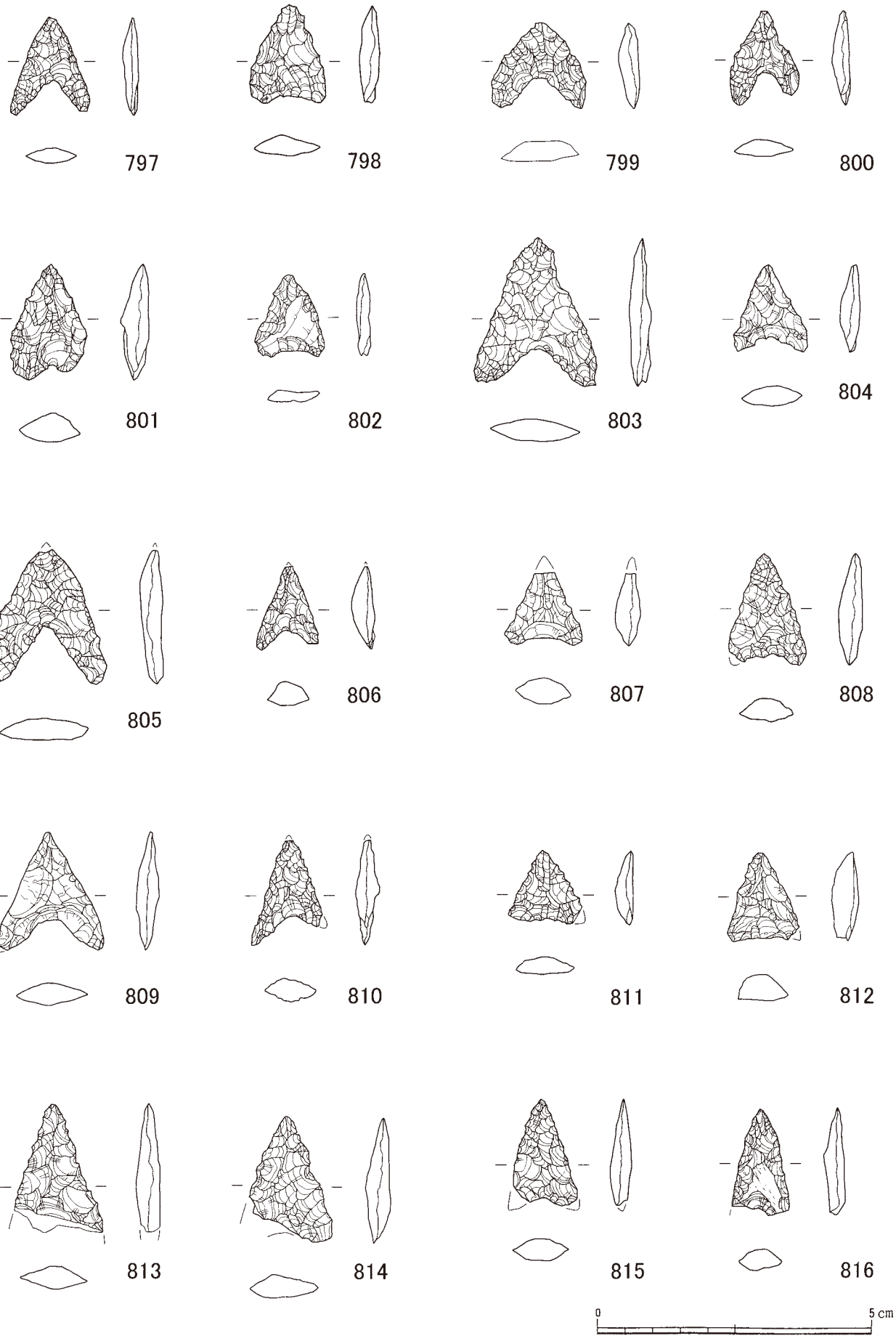


第１２２図　石製品（１）

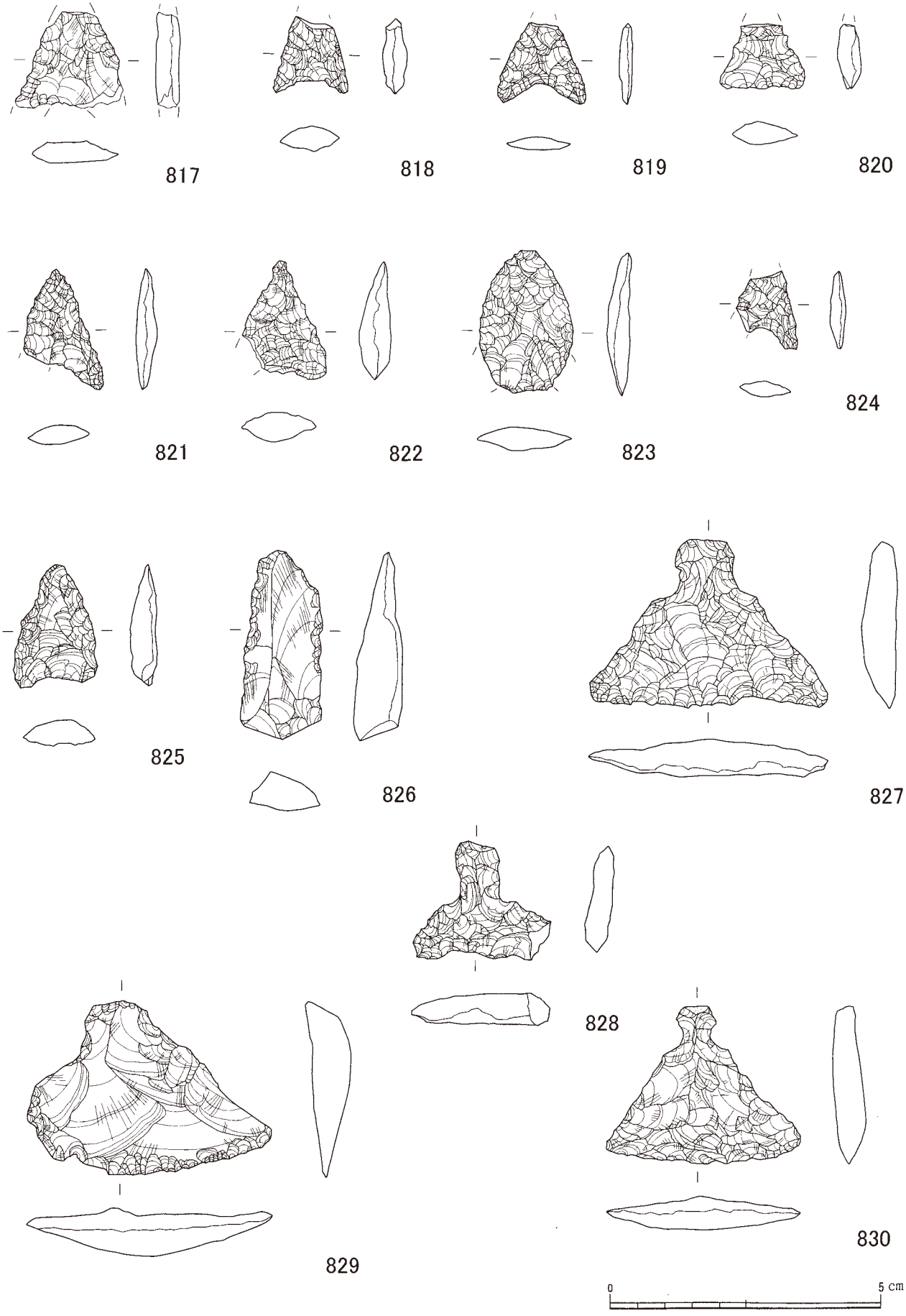




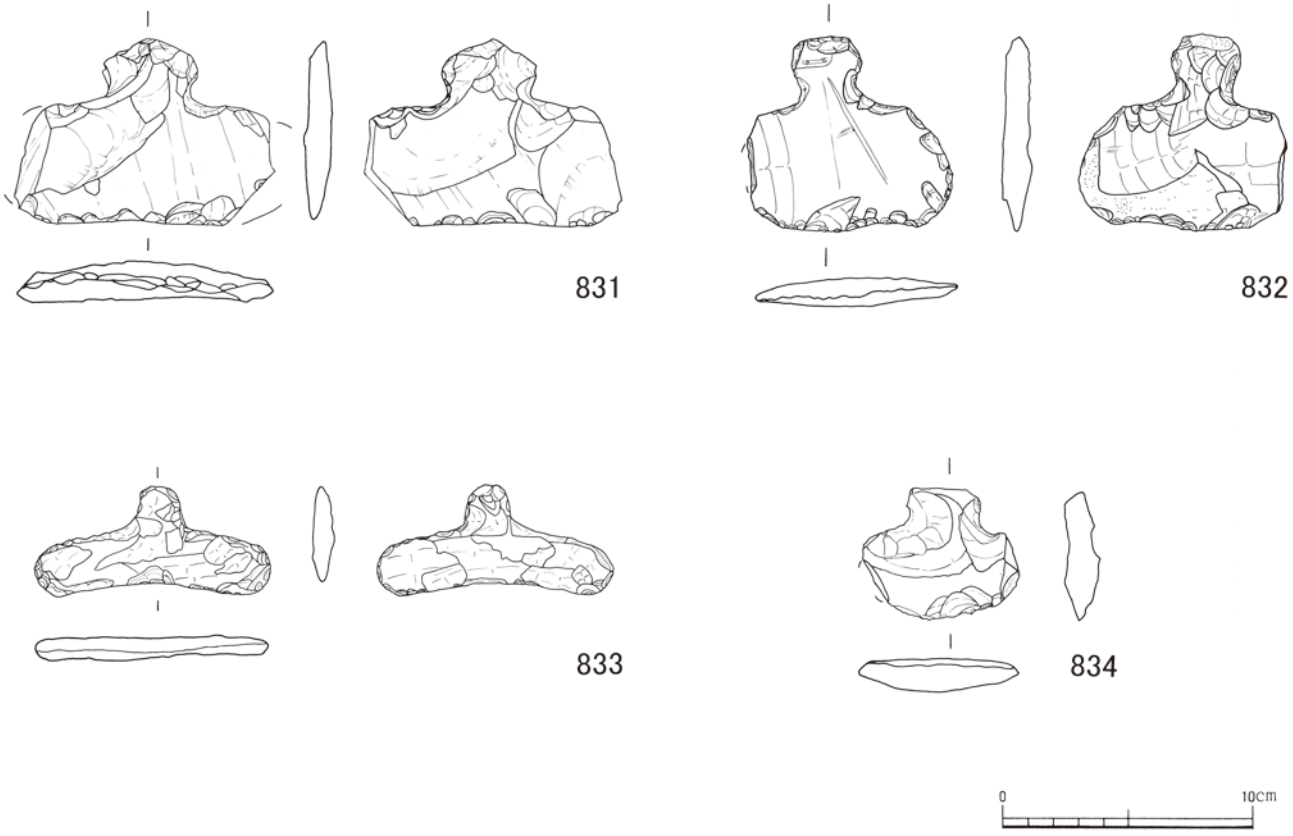
第123図　石製品(2)・石器(4)


797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
0
5 cm

第１２４図　石器（５）



第125図　石器(6)



第１２６図　石器（７）

第３節　C区

以下に遺構・遺物について記載をおこなっていく。なお、土器編年については特別のことわりがない限り（坂本ほか 1983）を、年代観については瀬田正明氏の論考（山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ 1992）を参考としている。

（１）竪穴住居跡

１号住居跡（第 133 図）

V-36 グリッドから検出された。大きさは 3.4m × 3.0m であり、主軸の傾きは N － 103° － E である。平面形は隅丸方形であるが、北西側の一部を 33 トレンチに切られている。また、西側が２溝と重複しているが、住居跡の方が古い遺構である。かまどは東壁の中央付近に確認された。周辺には石が散在しており、石組みであったことが推測される。かまど周辺は他と比べて遺物の出土量が多く、甕の底部や破片が多数出土している。遺構内から４基のピットが検出されているが、住居跡に伴う遺構かどうかは判然としない。後述するように出土遺物から９世紀初頭に属すると考えられ、本調査区で最も古い平安時代の遺構と考えられる。なお、覆土から確認された炭化材（IAAA-112755）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で８世紀後半～９世紀末葉の値を示している。両者の値は一部重複しており、帰属時期判断の妥当性を有している。

出土遺物（第 162 図１～ 10）

土師器坏は底部径が大きく、口唇部は尖形に近い資料である。器体部下半に斜めヘラ削り、底部にヘラ削りが施され、みこみ部には暗文が確認される（1・２）。蓋は外面にナデが施されている。甕はハケ目調整が施された資料である。やや外側に膨らむ長胴甕が確認されている（５）。また、甑が出土しているが、底部の小片であり器形などは確認できない（10）。

上記の特徴から、出土遺物はⅦ期の資料として、概ね一括性を有していると考えられる。

２号住居跡（第 134・135 図）

S-43･44､T-44 グリッドから検出された。大きさは 3.4m × 3.2m であり､主軸の傾きは N － 43° － E である。平面形は隅丸方形である。かまどは南東壁南側に確認された。周辺にはソデ石が散在しており、石組みであったことが確認された。かまど周辺からは完形の坏が複数出土しており、甕よりも坏の出土量が多くなっている。遺構内から４基のピットが検出されており、柱穴と考えられる。後述するように出土遺物から 10 世紀後半に属すると考えられるが、覆土から確認された炭化材（IAAA-112756）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で９世紀～ 10 世紀前半の値を示している。両者の値はやや開きがあり、炭化材の絶対年代が古くなっている。そのため、帰属時期の判断については慎重な検討が必要である。

出土遺物（第 162 図 11 ～ 13・第 163 図 14 ～ 37・第 177 図 441・第 178 図 468）

土師器坏・皿は器体外面にナデ調整が施され、底面が回転糸切り未調整の資料である。口唇部は丸縁が主体であるが、玉縁の資料も確認される。甕はハケ目整形が施された資料であり、器厚の厚い資料と薄い資料が確認される。大半は小片であるため、形状・大きさは判然としないが、薄手の資料は小型の甕の可能性が推測される。また、須恵器蓋・坏・壺、灰釉陶器壺の小片が出土している。

上記の特徴から、出土遺物はⅩⅢ期の資料として、概ね一括性を有していると考えられる。しかし、須恵器などの一部資料は時代が遡ると考えられ、遺構の埋没過程で混入した可能性が強い。

４号住居跡（第 136 図）

Q-44、R-44 グリッドから検出された。大きさは 2.8m × 2.7m であり、主軸の傾きは N － 8° － W である。平面形は不定形であるが、元は隅丸方形であった可能性も考えられる。かまどは北コーナーに確認された。奥側

にソデ石が残存しており、石組みであったことが確認された。炭の分布範囲もカマドの範囲と重複している。かまど付近からは遺物が集中して出土しているが、出土しているのは甕よりも坏が多い。遺構内から３基のピットが検出されているが、住居跡に伴うものかどうかは判然としない。後述するように出土遺物からは 10 世紀中葉に属すると考えられるが、かまど中から確認された炭化材（IAAA-113357）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で８世紀～９世紀または 10 世紀前半の値を示している。両者の値はやや開きがあり、炭化材の絶対年代が古くなっている。そのため、帰属時期の判断については慎重な検討が必要である。

出土遺物（第 163 図 38 ～ 50・第 164 図 51 ～ 73）

土師器坏・皿は口唇部が玉縁の資料である。器体外面にはヘラ削りが確認できるものとナデ調整のみのものの２種類がある。また、底面もヘラ削りが確認できるものと回転糸切り未調整の２種類がある。器形はやや外反して広がる資料が多い。甕はハケ目調整が施された資料であり、器厚の厚い資料と薄い資料が確認される。大半は小片であるが、薄手の資料は小型の甕である。その他には羽釜・鉢が出土している。羽釜は鍔の破片のため、詳細は判然としない(67)。鉢は坏系の資料であり、回転糸切りの後に高台を貼り付けている(62)。また、須恵器坏・甕、灰釉陶器壺が確認されている。

上記の特徴から、出土遺物はⅩⅡ～ⅩⅢ期の資料として、概ね捉えられる。器体下半部、底面のヘラ削りの有無を基準としてⅩⅡ・ⅩⅢ期を区分した。しかし、胎土や焼成などが同一であることから、時期差を有しているかについては不明である。また、須恵器などの資料は、やや時代が遡ると考えられる。

５号住居跡（第 137・138 図）

S-39、T-39・40、U-39・40 グリッドから検出された。大きさは 4.4m × 4.4m であり、本調査区の中で最も大きい住居跡である。主軸の傾きは N － 113° － E である。平面形は隅丸方形であるが、南東端が調査区外であり、完全な形では確認できなかった。石組みは確認されなかったが、南東部で検出した凹みを、かまどであったと判断した。ただし、凹みの範囲が大きいことから、外部からの影響があったことは否定できない。かまど付近は遺物が集中しており、底からは須恵器の小壺（102）が出土した。かまどの祭祀に関わる遺物であった可能性も考えられる。南端が 42 号土坑と重複しているが、住居跡の方が新しい。後述するように出土遺物から９世紀後半に属すると考えられる。

出土遺物（第 164 図 74 ～ 84・第 165 図 85 ～ 104、第 175 図 404・405、第 176 図 417・424、第 177 図 430、第 178 図 473・475）

土師器坏は器体部下半に斜めヘラ削り、底部にヘラ削りが施されている資料である。79 には内面に暗文が確認される。口唇部は玉縁の資料が大半だが、丸縁の資料も散見する。81 の高台付坏は灰白色で胎土に輝石・石英を多く含む資料である。口唇部は尖形であり、内面を黒色にしようとした痕跡があるなど、他の資料と特徴を異にしている。異系統の搬入品である可能性も考えられる。皿は底部を回転糸切りの後にヘラ削りした資料である。どの資料も底部と内面のくびれは非常に弱くなっている。84 はヘラ削り出しの高台付皿である。甕はハケ目調整の資料が大半であり、薄手で小型のものが主体となっている。蓋はやや外反する資料が確認されている。また前述のとおり、須恵器の小型壺がかまどの底から出土している。その他に置きカマド、須恵器坏・甕・壺、灰釉陶器高台付坏・壺が出土した。

上記の特徴から、出土遺物はⅩ期の資料として、概ね一括性を有していると考えられる。ただし、須恵器の一部については時期が遡る可能性がある。

６号住居跡（第 139 図）

K-42・43、L-42 グリッドから検出された。大きさは（3.0）m × 2.6m である。平面形は隅丸方形であるが、南端が調査区外であり、完全な形では確認できなかった。かまどは検出されなかったが、南東側から焼土が確認されており、かまどが存在した可能性が高い。遺構内部に幼児の頭大より大きい礫が多数入り込んでいる。

遺構内から１基の土坑、３基のピットが検出されているが、住居跡に伴うものかどうかは判然としない。後述するように出土遺物からは９世紀中葉に属すると考えられるが、南東側の焼土中から確認された炭化材（IAAA-113358）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で９世紀末葉～ 10 世紀後半の値を示している。両者の値はやや開きがあり、炭化材の絶対年代が新しくなっている。そのため、帰属時期の判断については慎重な検討が必要である。

出土遺物（第 165 図 106 ～ 109・111・112、第 166 図 114 ～ 118・120 ～ 123・125 ～ 127・129 ～ 137、第 167 図 138）

土師器坏は器体部下半に斜めヘラ削り、底部にヘラ削りが施されている資料である。口唇部は丸縁の資料が大半だが、玉縁の資料も散見する。暗文はどの資料にも確認できない。123 は高台付坏である。皿は底部を回転糸切りの後にヘラ削りした資料が主体である。どの資料も底部と内面のくびれは非常に弱くなっている。甕はハケ目調整の資料が大半であり、薄手で小型のものが主体となっている。口縁部の屈曲は緩くなっており、段状を形成するまでには至っていない。137 は須恵器甕の破片であるが、内面の一部がやや摩耗しており、転用硯として使用された可能性も考えられる。その他に羽釜、置きカマド、須恵器高台付皿、灰釉陶器甕が出土している。上記の特徴から、出土遺物はⅨ期の資料として、概ね一括性を有していると考えられる。

（２）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第 140 図）

U-36・37、Ⅴ -36・37、W-37 グリッドから検出された。東西３間（3.00m）、南北３間（3.08m）であり、主軸の傾きはＮ－ 18°－Ｅである。掘り方は円形であり、一部を除いて柱痕は確認できない。しかし、穴の中央が凹んで断面がやや突起状になっているものが見られる。東側の柱穴は径が小さく、配置もやや中央に寄っている。後述するように出土遺物から９世紀初頭に属すると考えられる。

出土遺物（第 167 図 162 ～ 164）

162 は外面下半部に横位のヘラ削り、底面に糸切り後ヘラ削りが施された皿である。底径が大きいのが特徴である。163 は底面に糸切り後ヘラ削りが施されたであり、口唇部は尖形である。164 は小型で薄い甕であり、外面にはハケ目調整が確認できる。

小片を除いては、皿と甕しか確認できなかった。また、図化した資料も破片であることから時期を明確にするのは困難ではあるが、上記の特徴から概ねⅦ期の資料に相当することが推測される。

２号掘立柱建物跡（第 141 図）

W-33・34、X-33・34 グリッドから検出された。東西３間（3.40m）、南北３間（3.20m）であり、主軸の傾きはＮ－ 3°－Ｅである。掘り方は円形であり、一部の穴には柱痕や礎石が確認できる。遺構の南東側は上コブケ遺跡Ａ区の範囲内であり、Ａ区では１号掘立柱建物跡で報告されている。Ａ区では南東側の柱穴から水晶の原体が出土しており、祭祀などの痕跡の可能性も推測される。後述するように出土遺物から９世紀前半に属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 167 図 165 ～ 167・第 168 図 168 ～ 173）

土師器坏は口縁部の小片のみしか確認されていないため、形状は判然としないが、口唇部は尖形である。甕も小片のみであるが、器厚が薄く、ハケ目調整が施された資料が多い。羽釜は薄型であり、鍔が狭い資料である。

坏・甕は９世紀前半の様相を見せるが、羽釜はやや新しめの形態であり、複数の時期の遺物が混入している可能性が挙げられる。

なお、Ａ区範囲内では黒色土器が出土しており９世紀前半とした当遺構の様相と矛盾しない。

３号掘立柱建物跡（第 142 図）

U-34・35、Ⅴ -34・35 グリッドから検出された。東西２間（2.52m）、南北２間（2.52m）であり、主軸の傾

きはＮ－16°－Ｅである。掘り方は円形であり、柱痕は確認できない。しかし、穴の中央が凹んで断面がやや突起状になっているものが見られる。後述するように出土遺物から９世紀前半に属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 168 図 174 ～ 176）

土師器坏は、口唇部が丸縁の資料である。甕も薄い資料が多い。

上記の特徴から、概ね９世紀前半の資料と推測されるが、いずれも小片のため判然としない。

４号掘立柱建物跡（第 143 図）

S-42、T-42・43、U-43 グリッドから検出された。東西３間（3.04m）、南北３間（2.44m）であり、主軸の傾きはＮ－24°－Ｅである。掘り方は円形が主体であるが、方形も確認できる。柱痕は確認できず、一部を除いて礎石も確認できない。３間・３間であるが、東西の柱穴の間隔が狭いことから、南北にやや長い形状になっている。後述するように出土遺物から９世紀前半～中葉に属すると考えられる。

出土遺物（第 168 図 177 ～ 183）

土師器坏は底部にヘラ削りを行っている。蓋は器形がやや外反する資料が確認されている。甕は薄い資料が多い。須恵器坏は回転糸切り痕未調整である。その他に須恵器壺が出土している。

上記の特徴から、概ね９世紀前半～中葉の資料と推測されるが、いずれも小片のため判然としない。また、一括の資料であるのか、複数時期の資料が混入しているのかについても不明である。

５号掘立柱建物跡（第 144 図）

R-43・44 グリッドから検出された。北側は１溝に切られており、残存しているのが南西側のみである。そのため、大きさ等は判然としない。主軸の傾きはＮ－7°－Ｗである。掘り方は円形である。柱痕、礎石は確認できない。出土遺物からは時期の特定は困難であった。

出土遺物（第 168 図 184）

184 は須恵器壺の口縁部片である。焼成不良の為、割れ面は赤褐色をしている。断片的な資料のため、詳細は不明である。

６号掘立柱建物跡（第 144 図）

W-36・37 グリッドから検出された。南側は調査区外となっており、残存しているのは北東部のみである。東西２間（2.68m）であり、主軸の傾きはＮ－21°－Ｗである。掘り方は円形である。柱痕、礎石は確認できない。後述するように出土遺物から９世紀前半～中葉に属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 168 図 185 ～ 188）

土師器坏は口唇部が尖形のもの（185）、丸縁のもの（188）、横位の斜めヘラ削りを施し暗文を有するもの（186）が確認されている。甕は薄い資料が確認されている。

上記の特徴から、概ね９世紀前半～中葉の資料と推測されるが、いずれも小片のため判然としない。また、一括の資料であるのか、複数時期の資料が混入しているのかについても不明である。

７号掘立柱建物跡（第 145 図）

Q-40・41、R-40・41 グリッドから検出された。２間・２間であるのか、３間・２間であるのか判然としない。南西側に焼土が確認されており、これが建物の中にあったと考えると３間・２間、隣接する形で外にあったと考えると２間・２間となる。東西２間（2.52m）もしくは３間（3.44m）、南北２間（2.60m）であり、主軸の傾きはＮ－24°－Ｅである。掘り方は円形である。柱痕、礎石は確認できない。後述するように出土遺物から９世紀に属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 168 図 189 ～ 198、第 176 図 408、第 177 図 444・460、第 178 図 470）

土師器坏は口唇部が玉縁の資料が主体だが、一部に尖形、丸縁のものも確認できる。外面下半部には斜めヘラ削りが、底部にはヘラ削りが、それぞれ施されている。190 は黒色土器である。器形や調整は坏に準じる。甕は薄型でハケ目調整を施した資料が確認されている。また、408 は頸部が緩やかであることから、古手の資料の可能性も考えられる。その他に須恵器壺、灰釉陶器甕が出土している。上記の特徴から、概ね９世紀の資料と推測されるが、いずれも小片のため判然としない。また、一括の資料であるのか、複数時期の資料が混入しているのかについても不明である。

８号掘立柱建物跡（第 146・147 図）

O-41・42、P-41・42 グリッドから検出された。東側は調査区外となっている。南北２間（5.09m）であり、本調査区で確認されている掘立柱建物跡の中では大型に属する。柱穴間の距離も広く、やや異質な印象を受ける。主軸の傾きはＮ－37°－Ｅである。掘り方は円形である。柱痕は確認できないが、一部に礎石が確認できる。また、遺構の中央付近で確認された 86 号土坑からは焼土・炭が確認されているが、本遺構との関係は判然としない。後述するように出土遺物は複数時期にわたっており、帰属する時期は不明である。

出土遺物（第 169 図 199 ～ 207、第 175 図 393、第 176 図 411、第 177 図 445、第 178 図 472）

複数時期の遺物が混在している。

200・201 は土師器坏である。底面に全面ヘラ削りを施している。201 には外面下半部にヘラ削りを施している。この２点はＸ期に相当し、411 の薄型の甕、203 の蓋もこれと同時期にあたると推測される。

393 は黒色土器である。外面下半部に斜めヘラ削り、底面にヘラ削りをそれぞれ施している。口唇部がやや外反している。この資料はＸⅠ・ＸⅡ期にあたると推測される。

204 は甕の口縁部片である。口縁部が肥厚しており、ＸⅡ期にあたると推測される。

199 は土師器坏である。外面はヨコナデされ、底部は台状を形成し、回転糸切り未調整となっている。口唇部は丸縁である。202 は脚高高台付皿である。全体的に厚ぼったく、口唇部は丸縁である。焼成に失敗したのか、やや器形が傾いている。この２点はＸⅢ～ＸⅣ期に相当すると推測される。

その他に甕底部片、須恵器坏・甕、灰釉陶器壺が出土している。須恵器坏は８世紀後半以前の資料と推測される。

９号掘立柱建物跡（第 148 図）

K-43・44、L-43・44 グリッドから検出された。南西側は１号焼土跡に切られており、南側は調査区外となっている。東西２間（2.48m）、南北２間（2.72m）であり、主軸の傾きはＮ－7°－Ｅである。掘り方は円形と方形の両方がある。柱痕、礎石は確認できない。後述するように出土遺物から 10 世紀前半に属すると考えられる。

出土遺物（第 169 図 208 ～ 211）

複数時期の遺物が混在している。208・209 は土師器坏である。208 は口唇部が玉縁であり、10 世紀前半の資料と推測される。209 は底部が広く、ヘラ削りを施している。

その他に蓋、須恵器坏が出土しているが、これらは上記２点よりも古い資料と推測される。

10 号掘立柱建物跡（第 149 図）

I-44・45、J-44・45 グリッドから検出された。東西２間（2.28m）、南北２間（2.52m）であり、主軸の傾きはＮ－20°－Ｅである。掘り方は方形である。柱痕は確認できず、礎石も一部を除いて確認できない。後述するように出土遺物から９世紀前半～中葉に属する可能性が考えられる。

出土遺物（第 169 図 279）

279 は土師器坏である。器体下半部に横位のヘラ削りを、底面は糸切り後、ヘラ削りを施している。断片的な資料のため詳細は不明だが、９世紀前半～中葉の資料と推測される。

11 号掘立柱建物跡（第 150 図）

G-44・45、H-44・45 グリッドから検出された。北西側は調査区外となっている。東西３間（3.32m）、南北３間（3.36m）であり、主軸の傾きはＮ－ 14°－Ｅである。掘り方は方形である。柱痕は確認できず、礎石も一部を除いて確認できない。なお、遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

12 号掘立柱建物跡（第 151・152 図）

O-40、P-40・41、Q-41 グリッドから検出された。北西側は調査区外となっている。東西３間（4.48m）、南北２間（3.52m）であり、主軸の傾きはＮ－ 31°－Ｅである。掘り方は円形である。礎石は確認できない。後述するように出土遺物から 10 世紀初頭に属すると考えられる。

出土遺物（第 169 図 225 ～ 228、第 170 図 229 ～ 245）

土師器坏・皿は 216 を除いて、全て玉縁である。外面下半部に斜めヘラ削りを施している。底面は小さく、全面にヘラ削りを施している。239・240・245 は黒色土器である。口唇部は坏と同様に玉縁である。甕は薄型でハケ目調整を施した資料が確認されている。その他に灰釉陶器甕が出土している。

上記の特徴から概ねＸⅠ期の資料に相当することが推測される。

（３）焼土跡

１号焼土跡（第 148 図）

L-42・43 グリッドに位置しており、長さ 1.5m の範囲にやや不定型な楕円状に焼土が広がっている。２カ所の遺物集中箇所が認められるが、両方とも凹みが確認できる。見方によっては、９号掘立柱建物跡の南西隅から突き出すような形で焼土跡が広がっている。

後述するように出土遺物から 10 世紀前半～中葉に属すると考えられるが、これは９号掘立柱建物跡から出土している出土遺物と大きくは矛盾しない。

出土遺物（第 165 図 105・110・113、第 166 図 119・124・128、第 167 図 139 ～ 161、第 175 図 395・397）

土師器坏は底部前面にヘラ削りが施されている資料が大半である。113 のみ回転糸切り痕が残っている。ただし、105 と 113 は１号焼土跡の範囲から外れており、他の遺物と時期が異なる可能性も考えられる。外面の斜めヘラ削りを確認できる資料もあるが、ほとんどが顕著ではない（105・113・124・144 ～ 146・395・397）。口唇部は大半が玉縁であり、暗文はどの資料にも確認できない。143 は黒色土器であるが、外面のわずかなヘラ削り、口唇部の玉縁など、土師器坏と同様の特徴を有している。皿も坏と同様に底部を前面ヘラ削りした資料である。119 は高台付皿である。器形の外反が激しい資料であり、高台が高くやや開く形状である。一見するとＸⅡ期よりも新しい資料に見えるが、胎土が密であり、整形も他の資料と似ている。そのため、同時期の資料と判断した。蓋は外反のある資料が３点確認されているが、いずれも小片のため、119 の様な外反の激しい皿である可能性も考えられる。甕は大型で口縁が肥大した資料（128）と、小型で薄い資料（153）が確認されている。いずれもハケ目調整が施されている。その他に羽釜、鉢、須恵器甕、灰釉陶器坏が出土している。

上記の特徴から、出土遺物はＸⅡ期の資料として、概ね一括性を有していると考えられる。

（４）土坑

土坑については出土遺物を中心に記載していく。遺構の特徴は第○表にまとめてある。

８号土坑（第 159 図）

W-36 グリッドに位置しており、1.2m × 0.8m の瓢箪形を呈している。深さは 0.3m である。底面から古墳時代前期の土器片が多く出土しており、当該期に帰属すると判断した。

出土遺物（第 169 図 212 ～ 219）

212 は複合口縁の壺の口辺部である。外面には櫛描き横線文が施され、内面には段差が確認できる。213・

214 は壺の胴部片、215 は底部片、216 は口縁部片である。217 は台付甕の脚部である。脚の内側にヘラ状の工具を押しつけた痕が確認できる。218・219 は甕の底部である。219 は外面にハケ目調整を施しており、器形から平安時代の所産であることが推測される。

上記の特徴から、一部を除いて概ね古墳時代前期の資料に相当することが推測される。

11 号土坑（第 155 図）

出土遺物（第 169 図 220）

220 は土師器坏である。口唇部は尖形であり、外面をナデで調整している。断片的な資料のため詳細は不明だが、8 世紀後半以前の資料と推測される。

12 号土坑

出土遺物（第 169 図 221）

221 は器台の口縁部である。内外面はナデ調整が丁寧に施されており、口辺部外側に段が確認できる。

22 号土坑（第 155 図）

出土遺物（第 176 図 421）

421 は須恵器碗の底部片である。高台が高く、体部の立ち上がりが高台を境として、やや外開きになっているため碗と判断したが、断片的な資料のため坏の可能性も考えられる。付け高台であり、高台の底部外側がやや立ち上がり、内側は緩やかに内湾している。器体にはロクロナデ調整を施している。

55 号土坑（第 154 図）

出土遺物（第 169 図 222 ～ 224）

222 は土師器坏である。底部にヘラ削りを施している。223 は土師器皿である。外面下半部に横位のヘラ削り、底部に削りを施している。口唇部は丸縁である。224 はハケ目調整を施した甕である。上記の特徴から 9 世紀前半～中葉の資料であることが推測されるが、同時期の資料であるかは判然としない。

80 号土坑（第 157 図）

出土遺物（第 170 図 246）

246 は甕の口縁部片である。薄手で口縁部がやや長い資料である。

81 号土坑（第 146 図）

出土遺物（第 170 図 247・248）

247 は土師器坏である。外面下半部に斜めヘラ削りを施し、口唇部は玉縁である。248 はやや外反する器形の蓋である。2 点とも小片であるが、10 世紀前半の資料であることが推測される。ただし、同時期の資料であるかは判然としない。

85 号土坑（第 146 図）

O-41 ～ 42 グリッドに位置しており、1.3m × 0.8m の楕円形を呈している。深さは 0.4m である。8 号掘立柱建物跡に隣接しており、それに付随する遺構の可能性が強い。

出土遺物（第 176 図 427）

大型の須恵器甕の胴部である。外面に自然釉が大量に付着している。

86 号土坑（第 146・147 図）

O-42 グリッドに位置しており、0.6m × 0.5m の方形を呈している。深さは 0.1m である。8 号掘立柱建物跡の中に位置しており、それに付随する遺構の可能性が強い。覆土は被熱しており、焼土や炭が大量に混じっている。北西側に偏る様にして坏や甕の破片が出土しており、これらは底面から出土している。

出土遺物（第 170 図 249 ～ 251・第 176 図 414・416）

249・250 は土師器坏である。249 は口縁部片で、口唇部は玉縁である。250 は底部片で、外面下半部に斜めヘラ削りを、底面にヘラ削りをそれぞれ施している。251 はハケ目調整を施した薄手の甕である。414・416 は甕の破片である。414 は肥厚した口縁部片である。全て小片であるが、9 世紀後半～ 10 世紀前半の資料であることが推測される。ただし、同時期の資料であるかは判然としない。

88 号土坑（第 157 図）

N-41・O-41 に位置しており、1.5m × 1.3m の円形を呈している。深さは 0.7m である。他の土坑と比べて非常に大きく、出土した遺物の量も多い。土師器坏・甕のみではなく、黒色土器や灰釉陶器なども出土していることから、特別な意図の元で構築された可能性が推測される。後述するように、出土遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀前半に属すると考えられるが、覆土から確認された炭化材（IAAA-112759）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で 8 世紀後半～ 9 世紀後半の値を示している。両者の値は一部重複しており、帰属時期判断の妥当性を有している。

出土遺物（第 170 図 252 ～ 257・第 171 図 258 ～ 277）

土師器坏は口唇部が玉縁で、外面下半部に斜めヘラ削りを施している。底面にもヘラ削りを施しているが、254 は糸切り痕の一部が残っている。257・258 は黒色土器である。器形・調整は坏に準じるが、258 は内面に暗文が施されている。皿も坏と同様、外面下半部に斜めヘラ削りを施している。底面もヘラ削りを施しているが、254 は糸切り痕の一部が残っている。また、口唇部は丸縁と玉縁が認められる。甕はハケ目調整を施した資料だが、口縁部が薄いものと厚いものが認められる。

271 は鉢である。外面に縦ハケ、内面にナデ調整を施しており、胎土もいわゆる甲斐型の甕に準拠する。器形はやや内湾しており、鉄鉢の可能性が考えられる。鉄鉢は坏系の胎土で製作される場合が大半であり、珍しい事例である。また、本調査区で出土した唯一の仏具である。ただし、断片的な資料のため、別の器種である可能性も否定できない。。

260 は外反が激しいため蓋と判断したが、小片のため皿の可能性も考えられる。

その他には灰釉陶器甕・壺が出土している。

上記の特徴から、概ね 9 世紀後半～ 10 世紀の資料で一括性を有していると推測される。

95 号土坑（第 146 図）

出土遺物（第 171 図 278）

278 は土師器坏の口縁部片である。口唇部が玉縁となっている。9 世紀後半～ 10 世紀前半の資料と推測される。

137 号土坑（第 160 図）

Q-45 ～ R-45 グリッドに位置しており、0.6m × 0.6m の円形を呈している。深さは 0.1m である。288 の坏に 289・290 の蓋を二重にして逆位の状態で出土した。ただし、蓋は多少ずれた状態であった。土坑の底面から出土しており、意図的に土器を納めたと考えられる。坏の中からは何も出土せず、どのような意図かは不明だが、儀礼的な意味合いがあったことが推測される。

出土遺物（第 172 図 288 ～ 290）

288 は土師器の高台付坏である。外面下半部には斜めヘラ削りが施され、内面に放射状暗文が認められる。

底部には削り出しによる短い高台が作出されている。口唇部は丸縁だが、やや外側に外反する。289・290 は蓋である。器形は外反しながら開く資料であり、内面には渦巻状暗文を有している。削り出しで作られた環状のつまみ部を有している。

上記の特徴から概ね 9 世紀中葉～ 10 世紀初頭の資料で一括性を有していると推測される。

（5）ピット

ピットについては出土遺物を中心に記載していく。遺構の特徴は第○表にまとめてある。

19 ピット

出土遺物（第 178 図 465）

465 は須恵器甕の口縁部片である。口が大きく開いている。色調が灰白色に近く、灰釉陶器である可能性も考えられる。断片的な資料のため、時期の特定は困難である。

34 ピット（第 159 図）

P-44 グリッドに位置しており、径 0.4m の円形を呈している。深さ 0.2m の検出面に近い位置から灰釉陶器高台付坏が出土した。置かれているような状態で出土したが、底面ではないことから、ピットに納める意図があったかどうかについては判然としない。

出土遺物（第 171 図 282）

282 は灰釉陶器高台付坏である。つくりは全体的に厚い。底部はナデ調整が施されているが、一部に回転糸切り痕が残存している。高台は幅が広く、高さが低い。また、外側下半にわずかに稜をつくり、内側はわずかに内湾する。浸し掛けされた釉が薄いためか、内外面ともに釉の痕跡のみ確認される。上記の特徴から 10 世紀の資料と推測される。

52 ピット

出土遺物（第 172 図 283）

283 は土師器坏の口縁部片である。口唇部は玉縁に近い丸縁である。

79 ピット

出土遺物（第 172 図 284）

284 は甕の底部片である。底部には木葉痕が確認できる。

81 ピット（第 146 図）

出土遺物（第 172 図 285）

285 は甕の底部片である。底部はやや台状を呈している。

107 ピット

出土遺物（第 172 図 286）

286 は須恵器坏である。底部と体部の間は腰が出ており、稜が形成されている。高台は削り出しであり、断面は台形状に近い。底部はヘラナデが施されている。

108 ピット

出土遺物（第 172 図 287）

287 は土師器坏である。みこみ部と内面の間にくびれが形成されている。底部はヘラ削りが施されている。

125 ピット

出土遺物（第 172 図 281）

281 は土師器坏の底部片である。底部に糸切り後ヘラ削りを施している。

（6）溝

1 溝

Q-41・43、R-43 ～ 45 グリッドに位置しており、西から東にかけて一直線に伸びている。間に未調査域があるが、長さは 7.6m、幅 0.5m、深さ 0.1m である。複数時期の資料が出土しているため、遺構の帰属時期は不明である。

出土遺物（第 172 図 291 ～ 298、第 173 図 299 ～ 318、第 176 図 415・423）

複数時期の遺物が混在している。

291 ～ 300・302 ～ 304・306 ～ 310 は土師器坏である。口唇部が玉縁の資料が大半だが、丸縁の資料も確認できる。底面は糸切り後ヘラ削りを施している資料が大半である。どの資料も器体下半部にヘラ削りは確認できない。307 ～ 309 の高台付坏はすべて削りだし高台である。甕は薄出で口縁が長いもの（312）、肥厚なもの（313・415）など、いくつかのバリエーションが見られるが、いずれも断片的な資料である。301 は黒色土器である。やや摩耗が激しいため詳細は不明だが、坏と同様のつくりと推測される。その他に皿・蓋・羽釜・灰釉陶器碗が出土している。

複数時期の遺物が出土しているが、上記の特徴から多くは 9 世紀末～ 10 世紀前半に属する資料であることが推定される。

2 溝

V-35・36、W-35・36、X-35 グリッドに位置しており、北北東から南南西に向かって直線に伸びている。長さは 9.7m、幅は 0.6m である。1 号住居跡よりも新しいことが切り合い関係から分かっているが、遺物が出土しなかったため、帰属時期については判然としない。近現代の所産である可能性も考えられる。

3 溝（第 153 図）

出土遺物（第 173 図 319 ～ 335）

319・320・322 ～ 327 は土師器坏である。320 は口唇部が玉縁、319、322 は丸縁である。323 を除いて、底部は回転糸切り未調整である。また、323 ～ 326 は底部がやや台状を呈する。328 は高台付坏である。脚高高台付坏の可能性も推定される。甕は胴部片、底部片しか確認されていないが、厚手と薄手の 2 種類の資料が確認できる。その他に皿、黒色土器、置きカマドが出土している。

複数時期の遺物が出土しているが、上記の特徴から主体となっている遺物は 10 世紀前半と 11 世紀前半の二種類が存在すると推定される。

4 溝（第 153 図）

T-39、U-39 グリッドに位置しており、北～南に向かってやや弧を描くように伸びており、長さは 5.0m、幅は 0.4m である。5 号住居跡より古いことが切り合い関係から分かっているが、遺物が出土しなかったため、帰属時期については判然としない。

5 溝（第 153 図）

U-39 グリッドに位置しており、西北西～東南東に向かって一直線に伸びており、長さは 1.3m、幅は 0.2m で

ある。43 ピットよりも新しいことが切り合い関係から分かっているが、遺物が出土しなかったため、帰属時期については判然としない。近現代の所産である可能性も考えられる。

6 溝（第 153 図）

T-39 グリッドに位置しており、北西～南東に向かって一直線に伸びている。5 号住居跡に切られており、全体像は判然としないが、長さは（1.8）m、幅は 0.2m である。5 号住居跡より古いが、帰属時期については判然としない。

出土遺物（第 173 図 336）

336 は灰釉陶器壺である。頸部から肩にかけての断片的な資料のため詳細は不明だが、頸部の径が 10cm 前後の資料である。

7 溝（第 153 図）

S-40、T-40 グリッドに位置しており、北東～南西に向かってやや弧を描くように伸びており、長さは 5.5m、幅は 0.4m、深さ 0.2m である。43 号土坑よりも古いことが切り合い関係から分かっているが、遺物が出土しなかったため、帰属時期については判然としない。近現代の所産である可能性も考えられる。

8 溝（第 154 図）

R-40･41 グリッドに位置しており、西北西～東南東に向かって一直線に伸びており、長さは 5.5m、幅は 0.2m である。7 号掘立柱建物跡の南側に沿って伸びている。8 ・ 9 溝で 7 号掘立柱建物跡を囲っている様にも捉えられるため、それに付随する遺構である可能性も推測されるが、帰属時期については判然としない。

出土遺物（第 173 図 337・338）

337 は土師器付の口縁部片である。口唇部は尖形に近い丸縁である。338 は甕の胴部片である。ハケ目調整を施した薄手の資料である。

いずれも断片的な資料のため、帰属時期は判然としない。

9 溝（第 154 図）

Q-40･41､R-40 グリッドに位置しており､東～西にかけてへの字状に屈曲しながら伸びている。長さは 6.5m、幅は 0.2m である。7 号掘立柱建物跡の北から西へ周るように配置されており、それに付随する遺構である可能性も推測される。遺物が出土しておらず、帰属時期については判然としない。

10 溝（第 154 図）

Q-40･41、R-40･41 グリッドに位置しており、西北西～東南東にかけて伸びている。長さは 2.1m、幅は 0.2m である。キセルのような形状をしており、7 号掘立柱建物跡の中央に位置している。遺物が出土して折らず、帰属時期については判然としない。

12 溝（第 154 図）

K-40 ～ 42 グリッドに位置しており、西～東にかけてやや急な弧を描くように伸びている。長さは 7.6m、幅は 0.5m、深さは 0.1m である。出土遺物は概ね 9 世紀前半の様相を呈しており、遺構もその時期の所産の可能性が推測される。しかし、時期が異なった遺物も確認されており判然としない。また、底面から確認された炭化材（IAAA-112758）の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で 6 世紀後半～ 7 世紀前半の値を示している。両者の値は大きく開きがあり、炭化材の絶対年代が古くなっている。そのため、帰属時期の判断については慎重な検討が必要である。

出土遺物（第 174 図 339 ～ 359）

土師器坏は口唇部が尖形もしくは丸縁の資料である。器体下半部は斜めヘラ削り、底面に全面ヘラ削りを、それぞれ施している。341 は内面に放射状暗文を有している。甕はすべてハケ目調整が施された資料である。薄手の土器が中心だが、348 のような厚手の資料も確認できる。その他に蓋、須恵器坏・蓋、灰釉陶器壺、置きカマドが出土している。

上記の特徴から、概ね 9 世紀前半の資料として一括性を有していると推定される。特に坏はⅦ期の資料と考えられるが、灰釉陶器壺については、それより後世の遺物であり、異なった時期の資料が一部混在していると推定される。

13 溝

F-45、G-45 ～ 47、H-47 グリッドに位置しており、北西から南東にかけてやや蛇行しながら伸びている。長さは 14.5m、幅は 0.7m である。出土遺物は土師器坏については 8 世紀前半、灰釉陶器壺は 9 世紀後半以降の様相をみせており、帰属時期は判然としない。

出土遺物（第 174 図 360 ～ 364）

360 ～ 363 は土師器坏である。盤状を呈し、底部の端が角張って口縁部に至る形態の資料である。器体部下半には横位のヘラ削り、底部は全面ヘラ削りを施している。ただし、360 はヘラ切り後ヘラ削りを行っている。口唇部は尖形である。362 はみこみ部に放射状暗文が施されている。

364 は灰釉陶器壺の底部である。内面に自然釉が確認できる。

上記の特徴から、土師器坏は 8 世紀前半の資料として一括性を有していると推測される。灰釉陶器壺は断片的な資料のため詳細は不明だが、早くとも 9 世紀後半以降の資料と推測されることから、異なった時期の資料が混在していると推測される。

14 溝

F-45・46、G-45・46 グリッドに位置しており、北西から南東にかけて蛇行しながら伸びている。41 トレンチに切られているが、長さは（3.8）m、幅は 0.5m である。出土遺物は 9 世紀後半（X期）の資料として一括性を有しており、遺構の帰属時期もその可能性が推測される。

出土遺物（第 174 図 365 ～ 370）

土師器坏は口唇部が丸縁の資料である。器体下半部に横位のヘラ削り、底部に糸切り後ヘラ削りをそれぞれ施している。367 は黒色土器である。つくりは坏に準じるが、内面に暗文を有している。甕はハケ目調整を施した、薄手で小型の資料である。

上記の特徴からX期の資料として一括性を有していると推測される。

（7）集石

1 号集石土坑（第 161 図）

J -42 グリッドで検出された。長さ 1.2m、幅 1.0m の楕円形を呈しており、深さ 0.3m の掘りこみを有している。構成礫の中には赤化が激しいものも見られる。土器や石器が出土しておらず、帰属時期は判然としない。なお、遺構中から確認された炭化材（IAAA-112757）の放射性炭素年代測定では補正年代で 5,013 ± 29 の値を示している。この値は縄文時代前期後半の諸磯式期に相当する。

（8）遺構外出土遺物

複数の時期の資料が混在しているため、各時代・器種ごとに記載していく。

古墳時代前期の土器

坏（第 175 図 383）

外面下半部に横方向のヘラ削り調整を施している。断片的な資料のため、詳細は判然としない。そのため、時期が新しくなる可能性も考えられる。

高坏（第 175 図 374 ～ 376・378・380）

脚部の破片が複数確認されている。376・378 は外面にヘラナデ調整を施している。この 2 点はつくりが精緻である。

甕（第 175 図 382・386）

382 は口縁部片である。やや外反しながら外に開いていく。386 は底部片である。胴部がやや急に立ち上がっている。外面には削り調整が施されているようだが、摩耗しており判然としない。

台付甕（第 175 図 373・377・379・381・387 ～ 389・391）

脚部の破片が多く確認されている。377 は内面に、379 は外面にそれぞれヘラ削りが施されている。また、379 は指による調整痕が確認できる。器厚は薄手の資料が多いが、377 のような厚手の資料も確認できる。

387 ～ 389･391 はいわゆる S 字状口縁を持つ台付甕である。口辺部が屈曲し、断面が S 字状になっている。また、器厚は薄く、胴部外面にはハケ目調整が施されている。

器台（第 175 図 371・372）

372 は内外面にヘラ削り調整を施している。371 は甕系の胎土であるが、372 は坏系の胎土である。いずれも断片的な資料のため、全体像は判然としない。

壺（第 175 図 384・385・390）

384 は口縁部、385 は胴部、390 は頸部付近の胴部の、それぞれ破片である。内外面にナデ調整を施している資料が多い。いずれも断片的な資料のため、他の器種である可能性も考えられる。

甑（第 175 図 392）

底部から胴部にかけてやや開きながら立ち上がる。内外面にハケ目が確認できるが、やや不鮮明である。底部付近は内外面ともにススが付着している。

手捏土器（第 175 図 480）

小型のミニチュア土器である。整形した際についたと思われる指頭痕が内外面に残されている。

土師器

坏（第 175 図 394・398 ～ 400）

外面下半部に斜めヘラ削り、底部にヘラ削りを施している資料が主体となっており、10 世紀初頭～中葉（ⅩⅠ・ⅩⅡ期）に相当すると推定される。しかし、399・400 のような、外面下半部に横位のヘラ削りを施したⅦ期と目される資料も確認されている。また、底部が台状を呈する 398 はⅩⅢ期の資料と推定される。

黒色土器（第 175 図 396）

396 は口唇部が尖形に近い丸縁の資料である。Ⅹ期に相当すると推定される。

皿（第 175 図 401 ～ 403）

401 は外面下半部に斜めヘラ削り、底部に斜めヘラ削りをそれぞれ施した資料である。ＸⅠ・ＸⅡ期に相当すると推定される。402・403 は口唇部が丸縁の資料である。402 は器体にくびれが確認できる。403 は底部にヘラ削りを施している。Ⅸ期に相当すると推定される。

蓋（第 175 図 406）

つまみ部のみの断片的な資料である。

壺（第 175 図 407）

短頸の小壺である。底部をヘラ切りして、外面はナデ調整を施している。他の土器との共伴関係が不明なため、時期・年代などは判然としない。

甕（第 171 図 280、第 176 図 409 ～ 414・416）

409 ～ 414 は口縁部片、280・416 は底部片である。内外面共にハケ目調整を施している資料が大半である。口縁部に厚みを有した資料が多いことから 10 世紀前半の資料が主体となっていると推定されるが、409 ～ 411 のような比較的薄い資料も確認でき、時期が複数にわたっていることが伺える。

須恵器

坏よりも甕や壺などの大型品が多く出土しているのが、本調査区の特徴であると言える。しかし、断片的な資料が多く、また土師器との共伴関係も不明であることから、形状・時期の特定が困難な資料が大半であった。

坏（第 176 図 418・419・422）

418 を除いて全て底部片であり、高台付坏である。いずれも高台は低く、扁平な印象をうける。付け高台であり、底部は平坦に近い。坏として図示した資料は全て断片的な資料であり、他の器種に分類される可能性も考えられる。

碗（第 176 図 420）

高台が高く、体部の立ち上がりが高台を境として、やや外開きになるものを碗とした。断片的な資料であるため、坏である可能性も考えられる。付け高台であり、高台の底部外側がやや立ち上がり、内側は緩やかに内湾している。器体にはロクロナデ調整を施している。

蓋（第 176 図 425・426）

425 は天井部が扁平である。426 は口辺部がやや外反したのち下方へ折り返されている。いずれも断片的な資料のため、全体像は判然としない。

甕（第 177 図 434 ～ 436・438・442・443・446・447）

434 ～ 436・438 は口縁部、442・443 は頸部、446・447 は胴部の破片である。口縁部～頸部にかけては内外面にナデ、胴部にはタタキ調整を施している。口縁部については断片的な資料が多いことから、壺である可能性も考えられる。

壺（第 178 図 428、第 177 図 429・431 ～ 433・440・448）

440 は口縁部、428･444･448 は胴部、429･431 ～ 433 は底部の破片である。底部が多く出土しているが、有台の資料（429・432）と無台の資料（431・433）がある。

448 は凸帯付四耳壺である。肩に近い部分の胴部片と推定され、断面がやや丸みを帯びた三角形状の凸帯が確認できる。凸帯付四耳壺は長野県塩尻で生産されていたと考えられており、山梨県下では甲斐型編年のⅦ～ⅩⅢ期に共伴している事例が多い。おおよそ９～ 10 世紀に相当すると考えられる。なお出土位置は８号掘立柱建物跡のすぐ脇である。

灰釉陶器

坏よりも甕や壺などの大型品が多く出土しているのが、本調査区の特徴であると言える。また、釉が薄いためか、発色が良くない資料が多い。断片的な資料が多く、また土師器との共伴関係も不明であることから、形状・時期の特定が困難な資料が大半であった。

坏（第 177 図 449 ～ 454・456 ～ 458）

449 ～ 453 は口縁部片、454・456 ～ 458 は底部片である。451・453 は口縁部がやや外反している。452 は体部がやや屈曲して、段が確認できる。454・456 ～ 458 は、いずれも付け高台である。高台は低い資料が多いが、454 のみやや高い。器形は緩やかに外に開く資料が多い。いずれも断片資料のため、碗などの別器種の可能性も考えられる。

碗（第 177 図 455）

455 は底部片である。器体が急に立ち上がっており、碗と判断した。高台の底部が平坦である。

甕（第 177 図 459、第 178 図 461 ～ 464・469・471）

459･461 ～ 464 は口縁部片、469 は頸部、471 は胴部の破片である。いずれも断片的な資料が多いことから、別の器種である可能性も考えられる。

壺（第 178 図 467・470・474・476 ～ 478）

467 は薬壺の口縁部から頸部にかけての破片である。外面が施釉されている。477 は短頸壺の口縁部である。470 は頸部、474・476 は底部の破片である。474 は釉の付着が多く発色が良いことから、中世の資料である可能性も考えられる。

478 は把手のついた胴部である。形状から肩の張った瓶や水注の可能性も考えられるが、断片的な資料のため詳細は判然としない。時期は不明だが、中世の資料である可能性も推測される。

焙烙（第 178 図 479）

口縁～底部片である。口縁～胴部は低く、全体的にやや開く形をしている。胎土は密で陶器質であり、硬い印象を受ける。上記の特徴から近世の資料と推測される。

土錘（第 178 図 481 ～ 483）

３点出土した。482 は孔が手前で止まっており、貫通していない。

鉄製品（第 178 図 484 ～ 488）

485 ～ 488 は棒状の鉄製品である。断面が四角形であり、先端にいくにつれて細くなっていくことから釘だと推定される。484 はクサビ状の資料である。小型で扁平な板状をしている。

打製石斧（第 179 図 495 ～ 500）

495 ～ 497・499 は短冊形、498 は分銅形の資料である。500 は折損しており、全体形状が確認できない。縁辺部にのみ二次加工を施して、中央部付近は未加工の例が多い。器体は厚みを有している場合が多いが、495・497 のように薄い資料も確認できる。全体的に風化が激しい例が多いが、498 は着柄痕や使用による潰れと推定される箇所が残存している。

磨石（第 179 図 501・502、第 180 図 503 ～ 505）

すべて円礫を素材として、広い平坦部を使用面としている。501・503・505 は使用面が顕著に平滑になっており、砥石の可能性も考えられる。502 は使用面が凹んでおり、小型の石皿のような印象を受ける。すべて縄文時代の資料として報告するが、帰属時期は判然としない。

両面調整体（第 180 図 506）

器体の表裏両面に二次加工を施した資料である。最初に粗い加工で形状を整えたのち、縁辺に微細な加工を施している。左側縁は未加工部位を多く残している。全体的に厚みを有しており、右側縁の加工は石匙のような印象を受ける。

サイド・スクレイパー（第 180 図 508）

小型の石刃状の縦長剥片を素材としている。両側縁に微細な二次加工を施して刃部としている。二次加工が微細なため刃部として機能するかどうかは疑問だが、加工が明確に連続しているためスクレイピングエッジと判断した。上半部が折損しているため、全体形状は不明である。小型石刃を素材とした先土器時代の資料である可能性も考えられる。

石鏃未製品（第 180 図 507）

幅広剥片を素材として、右側縁に二次加工を施している。二次加工が石鏃を製作するように微細で平坦なものであることから、石鏃未製品と判断した。

石鏃（第 180 図 509 ～ 512）

４点とも脚を有している。509 は抉りが深く、脚が長い。510 は器体が薄く、整形が精緻な印象を受ける。また、表裏両面に磨ったような痕が確認できる。縄文時代後・晩期に関東地方を中心に見られる局部磨製石鏃の可能性が考えられる。

（9）旧石器時代石器

ナイフ形石器（第 178 図 494）

横長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片は同方向の剥離を連続して行なっているが、下面から 90°の打面転移をおこなっていることが読み取れる。黒曜石で横長剥片を連続して剥離する例は珍しい。器体下側には元の面が残存しており、剥離の痕跡が伺える。そこから見ると本来の作業面は下面であり、この素材剥片は打面調整剥片であった可能性も考えられる。二次加工は素材剥片の打点を切る形で施されており、末端の一部にも加工が確認できる。やや斜刃であり、平面形状は切出形に近い印象を受ける。横長剥片を素材として、切出形に近いナイフ形石器というと、武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ層段階の資料を想定させるが、加工には高さがなく鋸歯状ではない。いわゆる砂川期に属する資料であろうと推測される。なお、石材は前述のとおり黒曜石だが、透明度が高く、信州産（おそらくは諏訪星ヶ台群）であることが推測される。

第16表　掘立柱建物跡一覧

No.	図	位　置	規模（m）		主軸方位	帰属時期	備　　考
			東西	南北			
1	140	U-36・37、V-36・37、W-37	3間（3.00m）	3間（3.08m）	N－18°－E	Ⅷ期（9世紀初頭）	
2	141	W-33・34、X-33・34	3間（3.40m）	3間（3.20m）	N－3°－E	9世紀前半？	南東側はA区調査範囲（A区では1号掘立柱建物跡で報告）
3	142	U-34・35、V-34・35	2間（2.52m）	2間（2.52m）	N－16°－E	9世紀前半？	
4	143	S-42、T-42・43、U-43	3間（3.04m）	3間（2.44m）	N－24°－E	9世紀前半～中葉？	
5	144	R-43・44	－	－	N－7°－W	不明	北側が1溝に切られている
6	144	W-36・37	2間（2.68m）	－	N－21°－W	9世紀前半～中葉？	南側が調査区外
7	145	Q-40・41、R-40・41	2間？（2.52m） 3間？（3.44m）	2間（2.60m）	N－24°－E	9世紀？	
8	146・147	O-41・42、P-41・42	－	2間（5.09m）	N－37°－E	不明	東側が調査区外
9	148	K-43・44、L-43・44	2間（2.48m）	2間（2.72m）	N－7°－E	10世紀前半？	南西側が1号焼土跡に切られている・調査区外
10	149	I-44・45、J-44・45	2間（2.28m）	2間（2.52m）	N－20°－E	9世紀前半～中葉？	
11	150	G－44・45、H-44・45	3間（3.32m）	3間（3.36m）	N－14°－E	不明（遺物なし）	北西側が調査区外
12	151	O-40、P-40・41、Q-41	3間（4.48m）	2間（3.52m）	N－31°－E	Ⅹ Ⅰ期（10世紀初頭）	

第17表　焼土跡一覧

No.	図	位　置	帰属時期	長さ（m）	幅（m）	備　　考
1	148	L-42～43	ⅩⅡ期（10世紀前半～中葉）	（1.5）	（1.5）	南側は調査区外

第18表　溝状遺構一覧

No.	図	位　置	帰属時期	断面形状	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	備　　考
1	－	Q-41～R-45	不明	－	－	－	－	一部が93ピットに切られている
2	－	V－35・36、W-35・36、X-35	不明	箱形	9.7	0.6	－	1号住居跡と重複
3	153	U-39	不明	－	2.1	0.8	－	
4	153	T-39～U-39	平安以前？	－	5.0	0.4	－	一部が5号住居跡に切られている
5	153	U-39	不明	－	1.3	0.2	－	43ピットに切られている
6	153	T-39	平安以前？	－	（1.8）	0.2	－	南半部が5号住居跡に切られている
7	153	S-40～T-40	不明	不定形	5.5	0.4	0.2	一部が43号土坑に切られている
8	154	R-40～41	不明	－	5.5	0.2	－	一部が55・61・64号土坑に切られている・7号掘立柱跡に付随？
9	154	Q-40・41、R-40	不明	－	6.5	0.2	－	一部が59号土坑に切られている・7号掘立柱跡に付随？
10	154	Q－40・41、R-40・41	不明	－	2.1	0.2	－	57・58ピットに切られている
11	－	－	－	－	－	－	－	9溝と同一であるため欠番
12	－	K-40～42	9世紀前半？	不定形	7.6	0.5	0.1	
13	－	F-45・G-45～47・H-47	不明	－	14.5	0.7	－	一部が133号土坑・130・140ピットに切られている
14	－	F－45・46、G-45・46	不明	－	（3.8）	0.5	－	試掘トレンチに切られている

第19表　土坑一覧（古墳～平安）

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備　考
1	155	W-37	不明	円形	0.4	0.3	0.2	
2	144	W-36	9 世紀前半～中葉？	円形	0.4	0.4	0.4	6 号掘立柱建物跡
3	144	W-37	9 世紀前半～中葉？	円形	0.4	(0.2)	0.2	6 号掘立柱建物跡・南半部が調査区外
4	144	W-37	9 世紀前半～中葉？	円形	0.4	0.4	0.3	6 号掘立柱建物跡
5	155	W-36 ～ 37	不明	円形	0.3	0.3	0.3	
6	144	W-36	9 世紀前半～中葉？	円形	0.4	0.3	0.1	6 号掘立柱建物跡
7	155	W-36	不明	方形？	0.8	0.4	0.2	
8	159	W-36	古墳前期か？	瓢箪形？	1.2	0.8	0.3	古墳時代前期の土器片が出土
9	155	R-44	不明	円形？	(0.7)	0.7	0.1	10 号土坑に切られている
10	155	R-44	不明	方形？	0.8	0.7	0.3	9 号土坑と重複
11	155	R-44	平安？	楕円形	0.6	0.4	0.1	土師器坏片が出土
12	－	T-41	古墳・古代？	楕円形？	0.6	0.4	－	器台の破片が出土
13	155	Q-43	不明	方形	0.6	0.5	0.1	
14	155	Q-43	不明	方形	0.8	0.7	0.1	
15	155	Q-43	不明	円形	0.6	0.6	0.3	
16	144	R-44	不明	－	－	－	－	土坑ではないか？
17	－	P-44	不明	円形	0.5	0.4	－	
18	155	Q-44 ～ 45	不明	円形	0.6	0.5	0.3	
19	－	Q-44 ～ 45	不明	円形	0.5	0.5	－	
20	155	Q-45	不明	円形	0.8	0.7	0.1	
21	155	Q-45	不明	円形	0.6	0.5	0.4	
22	155	Q-45 ～ R-45	平安？	円形	0.5	0.4	0.3	須恵器碗の破片が出土
23	－	Q-44 ～ 45	不明	円形	0.5	0.3	－	
24	－	P-45	不明	円形	0.5	0.4	－	
25	155	Q-44	不明	円形	0.5	0.5	0.3	
26	－	Q-44	不明	方形？	0.7	0.6	－	
27	155	Q-44	不明	円形	0.4	0.4	0.3	
28	－	P-44	不明	円形	0.5	0.4	－	
29	－	P-44	不明	円形	0.5	0.4	－	
30	155	P-44	不明	方形	0.4	0.3	0.2	
31	155	P-45 ～ Q-45	不明	円形	0.6	0.6	0.3	
32	156	P-44	不明	円形	0.6	0.4	0.3	
33	－	Q-44	不明	円形	0.4	0.3	－	
34	－	P-45	不明	円形？	0.8	0.6	－	
35	156	O-44 ～ P-44	不明	円形	0.4	0.4	0.3	
36	－	－	－	－	－	－	－	欠番
37	－	－	－	－	－	－	－	欠番
38	－	－	－	－	－	－	－	欠番
39	－	－	－	－	－	－	－	欠番
40	156	U-38 ～ 39	不明	円形	0.8	0.7	0.1	
41	156	T-38 ～ U-39	不明	円形	0.9	0.8	0.1	
42	137	T-39 ～ U-40	不明	円形	(1.0)	(1.0)	－	5 号住居跡に切られている
43	153	S-40	不明	円形	0.7	0.6	0.3	7 溝と重複
44	153	S-40	不明	円形	0.7	0.6	0.3	
45	156	S-40	不明	楕円形	0.4	0.2	0.3	
46	156	S-40	不明	円形	0.5	0.5	0.2	
47	156	O-45	不明	円形	0.6	0.5	0.2	
48	156	N-45 ～ O-45	不明	円形	0.5	0.5	0.3	
49	156	O-45	不明	円形	0.6	0.6	0.2	
50	156	O-45	不明	円形	0.5	0.5	0.1	
51	156	O-45	不明	円形	0.3	0.3	0.1	
52	156	O-45	不明	円形	0.4	0.4	0.3	
53	156	O-45	不明	方形	0.5	0.3	0.1	8 溝と重複
54	145	R-40	9 世紀？	円形	0.4	0.4	0.2	7 号掘立柱建物跡
55	154	R-40	平安？	方形	0.5	0.5	0.1	8 溝と重複・土師器坏・甕の破片が出土
56	145	R-40	9 世紀？	円形	0.4	0.4	0.1	7 号掘立柱建物跡
57	156	R-40	不明	円形	0.6	0.6	0.1	
58	145	Q-40 ～ R-40	9 世紀？	円形	0.4	0.4	0.2	7 号掘立柱建物跡

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備　　考
59	154	Q-40	不明	円形	0.3	0.3	0.1	9 溝と重複
60	145	R-41	9 世紀？	円形	(0.4)	0.4	0.1	7 号掘立柱建物跡
61	145	R-41	9 世紀？	円形	0.4	0.4	0.2	7 号掘立柱建物跡　8 溝と重複
62	145	Q-41	9 世紀？	円形	0.4	0.3	0.2	7 号掘立柱建物跡
63	145	Q-41	9 世紀？	円形？	0.6	0.5	0.2	7 号掘立柱建物跡
64	154	Q-40	不明	方形	0.3	0.3	－	8 溝と重複
65	151	P-40	ＸＩ期（10 世紀初頭）	楕円形	1.0	0.4	0.2	12 号掘立柱建物跡
66	151	P-40	不明	楕円形	0.7	0.5	－	
67	151	P-40	ＸＩ期（10 世紀初頭）	楕円形？	0.5	0.3	－	12 号掘立柱建物跡
68	151	P-41	ＸＩ期（10 世紀初頭）	方形	1.4	0.7	0.2	12 号掘立柱建物跡
69	151	O-41	平安？	円形	0.6	0.4	0.2	
70	151	P-40 ～ 41	ＸＩ期（10 世紀初頭）	方形	0.7	0.4	0.1	12 号掘立柱建物跡
71	151	P-41 ～ Q-41	ＸＩ期（10 世紀初頭）	方形？	(0.8)	0.6	0.3	87 号土坑に切られている
72	156	R-41	不明	円形	0.9	0.8	0.2	
73	145	Q-40	9 世紀？	楕円形？	0.7	0.4	0.2	7 号掘立柱建物跡
74	157	R-41	不明	円形	0.6	0.5	0.2	
75	157	O-41	不明	円形	0.5	0.5	0.3	
76	157	Q-41	不明	円形	0.5	0.5	0.1	
77	157	Q-41	不明	円形	0.6	0.6	0.2	
78	157	Q-41	不明	円形	0.4	0.3	0.2	
79	－	－	－	－	－	－	－	欠番
80	157	P-41 ～ 42	平安？	円形	0.6	0.5	0.3	甕の破片が出土
81	146	P-41 ～ 42	平安？	方形	1.4	1.1	0.3	坏と蓋の破片が出土
82	146・147	P-42	平安	楕円形？	1.1	0.6	0.4	8 号掘立柱建物跡・礎石？
83	146	P-42	不明	円形	0.4	0.4	0.3	
84	146	O-42	平安	円形	0.7	0.5	0.3	8 号掘立柱建物跡
85	146	O-41 ～ 42	平安？	楕円形	1.3	0.8	0.4	須恵器甕の破片が出土
86	146	O-42	平安？	方形	0.6	0.5	0.1	土師器坏・甕の破片が出土
87	151	P-41 ～ Q-41	ＸＩ期（10 世紀初頭）	円形	0.6	0.6	0.3	71 号土坑と重複
88	157	N-41 ～ O-41	9 世紀後半～10 世紀初頭	円形	1.5	1.3	0.7	土師器坏・甕・灰釉陶器甕・壺などの破片が出土
89	146	O-42	不明	円形	0.6	0.5	0.2	
90	146	O-42	平安	円形	0.7	0.7	0.2	8 号掘立柱建物跡・礎石
91	146	O-42	平安	楕円形？	1.0	0.8	0.5	8 号掘立柱建物跡・礎石？
92	146	O-42	不明	円形	0.6	0.5	0.1	
93	146	O-42	不明	円形	0.7	0.7	0.3	礎石？
94	157	O-42	不明	円形	0.5	0.5	0.1	
95	146	O-42	不明	楕円形	0.4	0.3	0.1	
96	157	O-42	平安？	円形	0.4	0.4	0.1	土師器坏の破片が出土
97	146	O-42	平安	楕円形？	1.0	0.7	0.4	8 号掘立柱建物跡・礎石？
98	157	O-42	不明	円形	0.5	0.5	0.2	
99	－	－	－	－	－	－	－	欠番
100	148	K-44	10 世紀前半？	方形？	0.4	0.3	0.1	9 号掘立柱建物跡
101	148	K-43	10 世紀前半？	方形？	0.4	0.3	0.1	9 号掘立柱建物跡
102	148	K-43	10 世紀前半？	方形？	0.5	0.5	0.2	9 号掘立柱建物跡
103	148	K-43	10 世紀前半？	円形	0.5	0.4	0.2	9 号掘立柱建物跡
104	148	L-43	10 世紀前半？	方形？	0.5	(0.1)	0.1	9 号掘立柱建物跡
105	149	J-44	9 世紀前半～中葉？	方形	0.6	0.6	0.2	10 号掘立柱建物跡
106	149	J-44	9 世紀前半～中葉？	方形	0.6	0.5	0.2	10 号掘立柱建物跡
107	149	J-44	9 世紀前半～中葉？	方形	0.5	0.5	0.2	10 号掘立柱建物跡・礎石
108	149	I-44	9 世紀前半～中葉？	方形	0.5	0.4	0.2	10 号掘立柱建物跡
109	149	I-44	9 世紀前半～中葉？	方形	0.6	0.5	0.2	10 号掘立柱建物跡
110	149	I-45	9 世紀前半～中葉？	方形？	0.5	0.4	0.1	10 号掘立柱建物跡

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備　考
111	157	J-41	不明	楕円形	0.6	0.4	0.2	
112	158	J-42	不明	楕円形	0.7	0.4	0.5	
113	150	H-44	不明	方形	0.4	0.4	0.3	11 号掘立柱建物跡
114	150	H-44	不明	円形	0.6	0.4	0.3	11 号掘立柱建物跡・礎石
115	150	H-44	不明	方形	0.5	0.4	0.3	11 号掘立柱建物跡
116	−	−	−	−	−	−	−	欠番（117 号土坑と統合）
117	150	H-45	不明	楕円形	0.8	0.5	0.3	11 号掘立柱建物跡・礎石
118	150	G-44	不明	方形	0.5	0.4	0.4	11 号掘立柱建物跡
119	150	G-44 ～ 45	不明	方形	0.6	0.5	0.3	11 号掘立柱建物跡
120	150	G-45 ～ H-45	不明	方形	0.6	0.5	0.4	11 号掘立柱建物跡
121	158	H-45	不明	円形	0.5	0.5	0.5	
122	158	H-45 ～ I-45	不明	円形	0.6	0.5	0.2	
123	158	F-46	不明	楕円形	1.8	1.0	0.1	
124	−	−	−	−	−	−	−	欠番
125	158	F-46	不明	円形	0.4	0.4	0.3	
126	−	E-46	不明	円形	0.6	0.5	0.4	130 号土坑と重複
127	−	F-46	不明	円形	(0.4)	0.4	−	41 トレンチに切られている
128	158	E-46 ～ 47	不明	円形	0.5	0.5	0.4	
129	−	−	−	−	−	−	−	欠番
130	158	E-46	不明	円形	(0.6)	0.5	0.1	126 号土坑に切られている
131	158	H-45	不明	円形	0.6	0.6	0.5	
132	−	−	−	−	−	−	−	欠番
133	−	E-45 ～ G-45	不明	円形？	0.6	0.5	−	13 溝と重複
134	158	I-43	不明	円形	0.4	0.4	0.1	
135	158	J-43	不明	円形	0.4	0.3	0.2	
136	158	J-43	不明	円形	0.6	0.6	0.1	
137	160	Q-45 ～ R-45	9 世紀中葉～10 世紀初頭	円形	0.6	0.6	0.1	坏と蓋が逆位に出土

第20表 ピット一覧

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	径 (m)	深さ (m)	備　考
1	−	U-37	不明	円形	0.2	0.2	
2	−	U-37 ～ V-37	不明	円形	0.2	0.2	
3	−	−	−	−	−	−	欠番
4	−	V-37	不明	円形	0.3	−	1-9 土に切られている
5	143	T-43	不明	円形	0.2	−	
6	143	T-43	不明	円形	0.2	−	
7	−	T-43	不明	円形	0.1	−	
8	143	T-43	不明	円形	0.2	−	
9	−	T-43	不明	円形	0.1	−	
10	143	T-43	不明	円形	0.2	−	
11	−	T-43	不明	円形	0.1	−	
12	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
13	−	W-36	不明	円形	0.3	−	
14	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
15	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
16	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
17	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
18	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
19	−	W-36	平安？	円形	0.2	−	須恵器甕の破片が出土
20	−	W-36	不明	円形	0.3	−	
21	−	W-36	不明	円形	0.3	−	
22	−	−	−	−	−	−	欠番
23	−	W-36	不明	円形	0.2	−	
24	−	T-44	不明	円形	0.2	−	
25	−	Q-43	不明	楕円形？	0.3	−	
26	−	Q-43	不明	円形	0.3	−	
27	−	Q-43	不明	円形	0.2	−	
28	−	Q-44	不明	円形	0.4	−	
29	−	Q-44	不明	円形	0.3	−	4 号住居に切られている

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	径(m)	深さ(m)	備　考
30	−	Q−45	不明	方形？	0.3	−	
31	−	P−45	不明	円形	0.3	−	
32	−	P−45	不明	円形	0.2	−	
33	−	Q−43	不明	楕円形	0.3	−	13 号土坑に切られている
34		P−44	平安？	円形	0.4	0.2	完形の灰釉陶器坏が出土
35	−	P−44	不明	円形	0.2	−	
36	−	P−44	不明	円形	0.3	−	
37	−	P−44	不明	円形	0.4	−	
38	−	−	−	−	−	−	欠番
39	−	−	−	−	−	−	欠番
40	153	T−39	不明	円形	0.3	−	4 溝と重複　5 号住居に切られている
41	−	U−38	不明	円形	(0.2)	−	西半部が調査区外となっている
42	153	U−39	不明	円形	0.2	−	
43	153	U−39	不明	円形	0.3	−	5 溝と重複
44	153	S−40	不明	円形	0.3	0.1	
45	153	S−40	不明	円形	0.3	0.2	
46	−	O−45	不明	円形	0.2	−	
47	−	O−45	不明	円形	0.3	−	
48	−	O−45	不明	円形	0.2	−	
49	−	O−45	不明	楕円形	0.4	−	
50	−	O−45	不明	円形	0.2	−	
51	153	T−40	不明	円形	0.3	0.2	
52	−	S−40	不明	円形	0.3	−	土師器坏の破片が出土
53	145	R−40	9 世紀？	円形	0.4	0.2	7 号掘立柱建1物跡
54	−	Q−40	不明	円形	0.1	−	
55	145	R−41	9 世紀？	円形	0.4	0.2	7 号掘立柱建物跡
56	145	R−41	9 世紀？	円形	0.2	0.2	7 号掘立柱建物跡
57	154	R−40 ～ 41	不明	円形	0.3	−	10 溝と重複
58	154	R−41	不明	円形	0.2	−	10 溝と重複
59	−	Q−41	不明	円形	0.3	−	
60	153	S−40	不明	円形	0.3	−	
61	153	T−40	不明	円形	0.3	−	
62	153	T−40	不明	円形	0.3	−	
63	153	T−40	不明	円形	0.3	−	
64	153	S−40	不明	円形	0.2	−	
65	−	S−40	不明	円形	0.2	−	
66	151	P−40	ＸⅠ期（10 世紀初頭）	円形	0.3	−	12 号掘立柱建物跡
67	151	P−40	不明	楕円形	0.3	−	
68	151	P−40	不明	円形	0.4	−	
69	151	O−40 ～ P−40	不明	円形	0.5	−	
70	151	O−40	不明	円形	0.4	−	
71	151	O−40 ～ P−40	ＸⅠ期（10 世紀初頭）	円形	0.4	0.1	12 号掘立柱建物跡
72	151	P−41	ＸⅠ期（10 世紀初頭）	円形	0.5	0.2	12 号掘立柱建物跡
73	151	P−41	不明	円形	0.3	−	
74	151	P−41	不明	円形	0.2	−	
75	151	P−41	ＸⅠ期（10 世紀初頭）	楕円形	0.5	0.2	12 号掘立柱建物跡
76	−	R−40	不明	円形	0.2	−	
77	145	Q−41	9 世紀？	円形	0.3	0.2	7 号掘立柱建物跡
78	−	R−41	不明	円形	(0.3)	−	南東半部が調査区外となっている
79	−	R−41	不明	円形	(0.3)	−	南東半部が調査区外となっている・甕の破片が出土
80	146	P−42	不明	円形	0.4	−	
81	146	P−42	不明	円形	0.3	−	甕の破片が出土
82	146	O−42	不明	円形	0.4	−	
83	−	O−41	不明	円形	0.4	−	
84	158	O−41	不明	円形	0.4	0.2	
85	−	O−41	不明	円形	0.2	−	
86	−	R−40 ～ 41	不明	円形	0.3	−	
87	−	O−41	不明	円形	0.2	−	
88	146	O−42	不明	円形	0.2	−	
89	146	O−42	不明	円形	0.2	−	

No.	図	位　置	帰属時期	平面形状	径 (m)	深さ (m)	備　　考
90	−	N−42	不明	円形	0.2	−	
91	−	N−41	不明	円形	0.2	−	
92	−	R−40	不明	円形	0.2	−	
93	144	Q−41	不明	円形	0.3	−	1 溝と重複
94	146	P−41	不明	円形	0.2	−	
95	−	−	−	−	−	−	欠番
96	−	−	−	−	−	−	欠番
97	−	−	−	−	−	−	欠番
98	−	−	−	−	−	−	欠番
99	−	−	−	−	−	−	欠番
100	−	J−41	不明	円形	0.3	−	
101	−	J−41	不明	円形	0.2	−	
102	−	I−41 ～ J−41	不明	円形	0.5	−	
103	−	J−41 ～ 42	不明	円形	0.4	−	
104	−	I−42	不明	円形	(0.4)	−	北西半部が調査区外となっている
105	−	J−42	不明	楕円形	0.4	−	
106	−	J−42 ～ K−42	不明	円形	0.3	−	
107	−	K−42	不明	円形	0.2	−	須恵器坏の破片が出土
108	−	K−42 ～ 43	不明	円形	0.4	−	土師器坏の破片が出土
109	−	K−43	不明	楕円形	0.5	−	
110	−	K−43	不明	円形	0.3	−	
111	−	J−43 ～ K−43	不明	円形	0.2	−	
112	−	J−43 ～ K−43	不明	円形	0.2	−	
113	−	K−43	不明	円形	0.2	−	
114	−	K−43	不明	円形	0.2	−	
115	−	K−43	不明	円形	0.2	−	
116	−	K−43	不明	円形	0.2	−	
117	−	H−43	不明	円形	0.2	−	
118	−	H−43	不明	円形	0.2	−	
119	−	H−43	不明	円形	0.5	−	
120	−	H−43 ～ 44	不明	楕円形	0.5	−	
121	−	H−44	不明	円形	0.5	−	
122	−	H−44	不明	円形	0.4	−	
123	−	G−45	不明	円形	0.2	−	
124	−	G−45	不明	円形	0.3	−	
125	−	I−43	不明	円形	0.2	−	土師器坏の破片が出土
126	−	J−43	不明	円形	0.3	−	
127	−	J−43	不明	円形	0.4	−	
128	−	I−43	不明	円形	0.3	−	
129	−	H−44	不明	円形	0.3	−	
130	−	F−45	不明	円形	0.5	−	13 溝と重複
131	−	−	−	−	−	−	欠番
132	−	−	−	−	−	−	欠番
133	−	−	−	−	−	−	欠番
134	−	−	−	−	−	−	欠番
135	−	−	−	−	−	−	欠番
136	−	−	−	−	−	−	欠番
137	−	−	−	−	−	−	欠番
138	−	−	−	−	−	−	欠番
139	−	−	−	−	−	−	欠番
140	−	G−46	不明	円形	0.6	−	13 溝と重複
141	−	F−46	不明	円形	0.5	−	
142	−	F−46	不明	円形	0.3	−	41 トレンチに切られている

第21表　集石土坑一覧

No.	図	位　置	平面形状	帰属時期	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備　　考
1	161	J−42	楕円形	縄文時代（諸磯式期か？）	1.2	1.0	0.3	

第22表　上コブケ遺跡Ｃ区　土器観察表

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
162	1	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	坏	(12.2)	(0.8)	4.7	橙色	緻密	良好	ヘラ削り	ナデ	手持ヘラ削り	15%	口縁～底部	1住 H50	
162	2	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	坏	—	(7.8)	(1.6)	明黄褐色	緻密	良好	ヘラ削り	みこみ部暗文	手持ヘラ削り	10%	底部	1住カマド H4	
162	3	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	蓋	(16.0)	—	(2.6)	橙色	緻密	良好	ナデ			20%	口縁～体部	1住 H6	
162	4	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	蓋	(15.0)	—	(2.1)	明褐色	緻密	良好	ナデ			15%	口縁～体部	1住 H3. 1住カマド H10	
162	5	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甕	—	(13.0)	(20.0)	褐色	白色粒子・石英・長石	良好		ハケ	木葉痕	40%	胴部～底部	1住カマド H11,H13^19	
162	6	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・長石・黒雲母	良好				5%	口縁部	1 住 H41	
162	7	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英・長石	良好	ナデ			5%	口縁部	1 住 H27	
162	8	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	1住 H34	
162	9	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甕	—	—	—	明褐色	黒雲母・白色粒子	良好		横ハケ		5%	胴部	1住 H24	
162	10	1号住居跡	V36	Ⅶ期	土師器	甑	—	(4.0)	(1.5)	黒褐色	白色粒子・砂礫	良好	削り		穿孔あり	5%	底部	1住床直	
162	11	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	11.6	5.4	3.6	橙色	白色粒子	良好	ナデ	スス付着	回転糸切り	85%	口縁～底部	2住カマド P55	
162	12	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	11.6	5.4	3.1	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ・スス付着	スス付着	回転糸切り	85%	口縁～底部	2住カマド P57	
162	13	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	11.6	5.4	3.3	にぶい黄橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	スス付着	回転糸切り	90%	口縁～底部	2 住カマド H3.7.8.10~13.15.16.19~21.40.42.43. カマド一括・2住一括	
163	14	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	(11.6)	(6.2)	3.6	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	スス付着	回転糸切り	40%	口縁～底部	2住カマド P51	
163	15	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	11.6	6.0	3.5	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子・砂礫	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	95%	口縁～底部	2住カマド P58	
163	16	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	(11.0)	(5.1)	3.4	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	25%	口縁～底部	2住 H24.64	
163	17	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	(11.8)	4.8	3.4	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	65%	口縁～底部	2住カマド P56.64.66.67	
163	18	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	(12.0)	(6.0)	3.1	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	40%	口縁～底部	2住カマド H1. 5.14.17.18.29.46	
163	19	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	4.4	(1.7)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	30%	底部	2住 H13.16	
163	20	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	(5.6)	(2.7)	明赤褐色	赤色粒子・砂礫	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	40%	体部～底部	2住カマド P52	
163	21	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	(5.6)	(1.5)	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	30%	底部	2住 H49	
163	22	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	皿	10.8	5.2	2.0	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	100%	完形	2住カマド P54	
163	23	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	皿	9.4	5.2	2.0	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	90%	口縁～底部	2住 H30.51~53.62.79	
163	24	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	(6.6)	(1.6)	褐色	白色粒子・石英	良好				5%	底部	2住 H42	
163	25	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	(8.4)	(4.0)	褐色	白色粒子・黒雲母・長石・石英	良好	斜めハケ	斜めヘラナデ	木葉痕	30%	底部	2住カマド P53	
163	26	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	橙色	白色粒子・石英	良好				5%	口縁部	2住 H89	
163	27	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・小石・石英	良好				5%	口縁部	2住 H74	
163	28	2号住居跡	S43・44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英	良好				5%	口縁部	2住 H11	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
163	29	2号住居跡	S43･44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	明赤褐色	白色粒子・黒雲母	良好				5%	口縁部	2住 H106	
163	30	2号住居跡	S43･44、T44	平安	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・砂礫	良好	ナデ	横ハケ		5%	口縁部	2住 P68	
163	31	2号住居跡	S43･44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英・長石	良好		横ハケ		5%	口縁部	2住 H87.88	
163	32	2号住居跡	S43･44、T44	平安	土師器	甕	—	—	—	明黄褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ			5%	胴部	2住 H40	
163	33	2号住居跡	S43･44、T44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	ハケ	横ハケ		5%	胴部	2住	
163	34	2号住居跡	S43･44、T44	平安	土師器	甕	—	—	—	黒褐色	白色粒子・黒色粒子	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	2住ピット 3 －P 1	
163	35	2号住居跡	S43･44、T44	平安	須恵器	蓋	(15.0)	—	(1.8)	灰色	密	良好				5%	口縁部	2住 SU3	
163	36	2号住居跡	S43･44、T44	平安	須恵器	坏	—	—	—	灰色	密	良好				5%	胴部	2住カマド SU1	
163	37	2号住居跡	S43･44、T44	平安	須恵器	壺	—	—	—	灰色	密	良好				5%	口縁部	2住 SU1	
163	38	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	14.0	4.6	(3.7)	にぶい赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ	ナデ	ヘラ削り	60%	口縁～底部	4住カマド P24. 4住 H53.55.4 住一括	
163	39	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	12.0	(4.0)	3.2	橙色	黒色粒子・長石	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	30%	口縁～底部	4住カマド H5.4 住 H9	
163	40	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	12.4	5.4	2.4	にぶい黄褐色	赤色粒子	良好	ロクロ	ナデ	ヘラ削り	15%	口縁～底部	4住カマド H4	
163	41	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	12.0	5.0	2.6	浅黄橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	20%	口縁～底部	4住 H8.10.56.70.4 住一括	
163	42	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(13.6)	—	(3.5)	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	ロクロ	ナデ		20%	口縁～体部	4住 H78.112	
163	43	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	皿？	12.0	4.4	2.1	橙色	赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ロクロ	ナデ	回転糸切り	25%	口縁～底部	4住カマド P15	底部に穿孔あり
163	44	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	12.0	—	(2.7)	にぶい橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ	ナデ		15%	口縁～体部	4住 H44.107	
163	45	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(8.8)	—	(2.2)	明褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ		15%	口縁～体部	4住カマド P8	
163	46	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	5.0	(1.6)	にぶい黄橙色	赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	20%	口縁部	4住 H123	
163	47	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	4.4	(2.0)	にぶい橙色	赤色粒子・黒色粒子	不良	ロクロ	ナデ	糸切り後ヘラ削り	20%	体部～底部	4住 H40	
163	48	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	(5.6)	(1.1)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・長石・石英	良好	ロクロ	ナデ	回転糸切り	30%	底部	4住 H89	
163	49	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	皿？	—	5.0	(12.0)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・長石・雲母	良好	ロクロ	ナデ	回転糸切り	30%	体部～底部	4住カマド P19	
163	50	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	(5.2)	(1.6)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ	ナデ	回転糸切り	20%	底部	4住 H82	
164	51	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	6.0	(2.6)	橙色	赤色粒子・長石・雲母	良好	ロクロ	ナデ・スス付着	回転糸切り	30%	体部～底部	4住 H110	
164	52	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	6.4	(1.0)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	30%	底部	4住 H121	
164	53	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	5.0	(1.8)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	30%	体部～底部	4住 H46	
164	54	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	3.8	(1.0)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子・長石・雲母	良好	ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	35%	底部	4住カマド P20	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
164	55	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	5.0	(1.6)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ヘラ削り	ナデ・スス付着	回転糸切り	15%	底部	4住 H77	
164	56	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅲ期	土師器	皿	14.0	7.0	2.3	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	ロクロ	ナデ	回転糸切り	30%	口縁～底部	4住 H41	
164	57	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	12.8	5.4	1.6	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	ヘラ削り	ナデ		30%	口縁部	4住カマド P13. H59.60.67	
164	58	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	14.0	—	(1.5)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ	ナデ		20%	口縁部	4住 H124.125	
164	59	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	13.8	—	(1.8)	にぶい橙色	赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	40%	口縁部～底部	4住 H117.118	
164	60	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	(12.6)	—	(1.6)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ロクロ	ナデ		30%	口縁部	4住カマド H2.P18.21	
164	61	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	12.0	—	(1.5)	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ロクロ	ナデ		30%	口縁部	4住カマド P16	
164	62	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	高台付鉢	—	10.0	(5.4)	橙色	赤色粒子・長石・雲母	良好	ロクロ	ナデ	糸切り後付け高台	20%	底部	4住 H11.101~103	
164	63	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	—	—	赤褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母・長石	良好		横ハケ		5%	口縁部	4住 H128	
164	64	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	18.0	—	(2.5)	にぶい赤褐色	雲母・長石	良好	縦ハケ	ナデ、横ハケ		5%	口縁部	4住 H83. 4住一括	
164	65	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	6.4	(1.3)	褐色	雲母・長石	良好	削り	ハケ目？・スス付着	木葉痕	5%	底部	4住一括	
164	66	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	4.4	(2.0)	にぶい黄褐色	雲母・石英	良好			木葉痕	5%	底部	4住 H79	
164	67	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	羽釜	—	—	—	赤褐色	白色粒子・雲母・長石	良好				5%	鍔部分	4住 H35	
164	68	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	6.4	(5.5)	赤褐色	雲母・長石・石英	良好	縦ハケ	ナデ	木葉痕	30%	胴部～底部	4住 H 1.3.4	
164	69	4号住居跡	Q44、R44	平安	須恵器	坏	—	6.4	(2.2)	灰白色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好				5%	底部	4住 SU10	
164	70	4号住居跡	Q44、R44	平安	須恵器	甕	—	—	—	褐灰色	白色粒子	不良	タタキ			3%	胴部	4住 SU4	
164	71	4号住居跡	Q44、R44	平安	須恵器	甕	—	—	—	灰色	白色粒子・赤色粒子・長石	良好	タタキ			3%	胴部	4住 SU13	
164	72	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	灰釉陶器？	甕	—	—	—	にぶい黄色	白色粒子	良好	タタキ・釉			3%	胴部	4住 SU6	
164	73	4号住居跡	Q44、R44	Ⅹ Ⅱ期	灰釉陶器	長頸壺	—	(4.0)	—	浅黄色	赤色粒子・黒色粒子・白色粒子	良好	自然釉	自然釉		5%	頸部	4住 T1	
164	74	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	13.5	4.2	4.5	橙色	赤色粒子・長石	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	90%	口縁部～底部	5住カマド H1~4. カマド一括 .5 住 H9. 一括	
164	75	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	(12.0)	4.4	4.8	浅黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	50%	口縁部～底部	5住 H45	
164	76	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	11.2	3.8	4.2	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ・スス付着	糸切り後ヘラ削り	100%	完形	5住 H31	
164	77	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	11.4	4.8	3.9	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	100%	完形	5住 H35	
164	78	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	(12.0)	(5.0)	3.3	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	50%	口縁部～底部	5住床下 H1	
164	79	5号住居跡	T39・40	Ⅹ期	土師器	坏	(12.2)	(5.2)	3.6	にぶい黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	30%	口縁部～底部	5住床下 H2	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
164	80	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	坏	(12.0)	(4.4)	3.8	にぶい黄橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り?	30%	口縁部～底部	5住床下 H3.6.10	
164	81	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	高台付坏	(12.4)	(5.6)	3.0	灰白色	白色粒子・赤色粒子・輝石・石英	不良	ナデ	ナデ・黒色?	付け高台	50%	口縁部～底部	5住 H36	異系統か?
164	82	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	13.6	4.8	2.1	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	糸切り後ヘラ削り	100%	完形	5住 H32	
164	83	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	12.4	6.0	2.5	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	糸切り後ヘラ削り	95%	口縁部～底部	5住 H34	
164	84	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	―	(6.0)	(1.9)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	削りだし高台	40%	体部～底部	5住床下 H4.5. 一括	
165	85	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	13.2	(4.6)	2.2	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	90%	口縁部～底部	5住 H33	
165	86	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	(12.0)	―	2.6	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ		20%	口縁部～体部	5住 H42	
165	87	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	(12.4)	―	(1.8)	橙色	赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ		20%	口縁部～体部	5住 H39	
165	88	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	(12.0)	―	(1.9)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ		20%	口縁部～体部	5住カマド H18. カマド一括	
165	89	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	皿	―	5.0	(1.0)	橙色	赤色粒子・石英	良好	ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	30%	底部	5住 H43	
165	90	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	蓋	(17.2)	―	(1.7)	黄橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁～体部	5住床下 H4	
165	91	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	蓋	(15.0)	―	(2.5)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		15%	口縁～体部	5住カマド H19	暗文あり
165	92	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	蓋	(16.4)	―	(1.9)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部	5住カマド H13	
165	93	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	13.4	7.0	12.0	黒褐色	白色粒子・石英・長石	良好	ナデ	横ハケ	木葉痕	80%	口縁部～底部	5住カマド H5.5 住一括	
165	94	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	―	―	明褐色	白色粒子・石英・長石	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	5住 H15	
165	95	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	―	―	外面・暗褐色 内面・黄褐色	白色粒子・石英	良好	ナデ	横ハケ		5%	口縁部	5住 H13	
165	96	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	―	―	暗褐色	白色粒子・黒雲母	良好	ハケ	ハケ		5%	口縁部	5住 H30	
165	97	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	―	―	外面・明褐色 内面・黒褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	5住 H24	
165	98	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	(7.4)	―	外面・黒褐色 内面・褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	粗い横ハケ	木葉痕	5%	底部	5住カマド H7・8	
165	99	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	(10.4)	(2.3)	暗褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ		木葉痕	5%	底部	5住H 3	
165	100	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	甕	―	(9.6)	(2.4)	褐色	白色粒子・石英	良好	縦ハケ	横ハケ	木葉痕	5%	底部	5住カマド H10	
165	101	5号住居跡	T39・40	X期	土師器	置きカマド	―	(5.5)	―	明褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好	縦ハケ			5%	底部	5住カマド H15.5 住 H38	
165	102	5号住居跡	T39・40	平安	須恵器	小壺	4.0	―	(6.8)	青灰色	密	良好	ロクロ・ナデ	ナデ		60%	口縁部～胴部	5住カマド SU1	
165	103	5号住居跡	T39・40	X期	須恵器	甕	―	―	―	灰白色	密	良好	タタキ	ナデ		3%	胴部	5住 SU2	
165	104	5号住居跡	T39・40	X期	灰釉陶器	高台付杯	―	(6.8)	―	灰白色	密	良好	自然釉	ナデ	削りだし高台	10%	底部	5住 SU1	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
165	105	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	杯	14.0	3.0	3.8	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ・スス付着	糸切り後ヘラ削り	50%	口縁部～底部	6住 H65	
165	106	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(12.4)	(4.0)	3.1	橙色	赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	40%	口縁部～底部	6住 H40.45.68.90	
165	107	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(15.4)	—	(4.5)	橙色	赤色粒子	良好	ロクロ	ナデ		40%	口縁部～体部	6住 H93~95	
165	108	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(14.4)	—	(4.2)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ロクロ	ナデ		20%	口縁部～体部	6住 H32	
165	109	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(14.0)	—	(2.7)	明赤褐色	赤色粒子・長石	良好	ロクロ	ナデ		10%	口縁部～体部	6住カマド H6	
165	110	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(14.8)	—	(3.7)	明赤褐色	赤色粒子・長石	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	6住 H10	
165	111	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(14.8)	—	(3.7)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	6住一括	
165	112	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	(12.0)	—	(2.4)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ			10%	口縁部～体部	6住 H30	
165	113	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	(5.8)	(3.1)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	回転糸切り	40%	口縁部～底部	6住 H65-P2	
166	114	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	—	(5.0)	(1.2)	にぶい橙色	赤色粒子	良好		ナデ		10%	体部～底部	6住カマド	
166	115	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	—	4.6	(1.1)	橙色	赤色粒子・長石	良好		ナデ	回転糸切り？	40%	底部	6住 H28	
166	116	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	—	(5.4)	(1.7)	橙色	赤色粒子	良好		暗文		15%	体部～底部	6住 H22	
166	117	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	—	5.6	(1.1)	橙色	赤色粒子	良好		暗文？	糸切り後ヘラ削り	25%	口縁部～体部	6住カマド H2	
166	118	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	坏	—	(5.4)	(1.1)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ヘラ削り		糸切り後ヘラ削り	20%	底部	6住一括	
166	119	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	高台付皿	(14.4)	—	(3.8)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ロクロ・ナデ・ヘラ削	ナデ	付け高台	80%	口縁部～底部	H2063.2065.2066.6 住 H11.L42 ショウ土 H36	
166	120	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	皿	(14.0)	(10.8)	2.0	橙色	赤色粒子	良好			糸切り後ヘラ削り	30%	口縁部～底部	6住 H92	
166	121	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	皿	14.4	—	(2.2)	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ		20%	口縁部～体部	6住 H19.20	
166	122	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	皿	(9.4)	(5.0)	(1.5)	橙色	赤色粒子・長石	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	削り	30%	口縁部～底部	6住一括 20110928	
166	123	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	高台付杯	(9.0)	—	(2.4)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	付け高台	20%	口縁部～底部	6住 H34	
166	124	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	鉢？	(22.2)	—	(2.9)	にぶい橙色	雲母・長石	良好	削り	ナデ		5%	口縁部	6住 H1	
166	125	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	(20.0)	—	(3.2)	明褐色	雲母・長石	良好	ナデ・縦ハケ	ナデ・横ハケ		5%	口縁部	6住 H72	
166	126	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	—	(1.7)	にぶい橙色	長石	良好	ナデ	横ハケ		5%	口縁部	6住 H70	
166	127	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	—	(4.0)	明褐色	長石・石英・雲母	良好	ナデ・横ハケ	縦ナデ		5%	口縁部	6住 H53	
166	128	1号焼土跡	L42	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	(27.5)	—	(4.4)	明赤褐色	長石・雲母	良好	ナデ・縦ハケ	ナデ・横ハケ		5%	口縁部	6住 H2	
166	129	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	—	(4.1)	明褐色	長石	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	6住 H73.6 住 4 ピット H1	
166	130	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	—	(3.9)	褐色	長石・雲母・砂礫	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	6住 H91	
166	131	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	—	(6.4)	明褐色	長石・雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	6住 H77	
166	132	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	甕	—	(7.0)	(2.6)	明赤褐色	長石・雲母・砂礫	良好	ナデ	ハケ		10%	底部	6住 H38	
166	133	6号住居跡	K42・L42	Ⅸ期	土師器	羽釜	—	—	(2.0)	明赤褐色	長石・石英・雲母	良好	ナデ	ナデ		10%	鍔部分	6住 H27	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
166	134	6号住居跡	K42･L42	Ⅸ期	土師器	置きカマド	—	—	(4.8)	明褐色	長石・雲母	良好	縦ハケ	ヘラナデ		10%	底部	6住カマド H12	
166	135	6号住居跡	K42･L42	Ⅸ期	土師器	置きカマド	—	—	(4.9)	明褐色	長石・雲母	良好	縦ハケ	ヘラナデ		10%	底部	6住 H83	
166	136	6号住居跡	K42･L42	古代	須恵器	高台付皿？	—	(8.0)	(1.3)	灰色	長石	良好		ナデ	削りだし高台	15%	底部	6住 P4	
166	137	6号住居跡	K42･L42	9世紀？	須恵器	甕	—	—	(7.0)	灰色	長石	良好	タタキ	ナデ		5%	胴部	6住 P1	転用硯か？
167	138	6号住居跡	K42･L42	Ⅸ期	灰釉陶器	甕	—	—	(6.9)	灰黄色	長石	良好	当て具痕	ナデ		5%	胴部	6住 P 2	
167	139	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(12.6)	(5.0)	(2.5)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ	ナデ	回転糸切り	25%	口縁部～底部	L42 ショウ土 H9	
167	140	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(14.0)	—	(2.4)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ロクロ	ナデ		10%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H18	
167	141	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(12.4)	—	(3.2)	橙色	赤色粒子・白色粒子・砂粒子	良好	ロクロ	ナデ		15%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H25	
167	142	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	—	—	にぶい黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ロクロ	ナデ		5%	口縁部	L42 ショウ土一括	
167	143	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	黒色土器	—	—	—	橙色	赤色粒子	良好	削り	ナデ・黒色		10%	口縁部～底部	H2062・L42 ショウ土 H34	
167	144	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	(4.8)	(2.0)	明黄褐色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	40%	体部～底部	L42 ショウ土 H14.19.38	
167	145	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	(3.6)	(2.0)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	50%	体部～底部	L42 ショウ土一括	
167	146	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	杯？	—	(4.4)	(1.4)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	45%	体部～底部	L42 ショウ土 H10	
167	147	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	高台付杯	—	—	(2.1)	明褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	付け高台	15%	体部～底部	L42 ショウ土一括	
167	148	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(13.6)	—	(2.5)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	H2076	
167	149	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	(12.0)	(5.6)	2.0	赤褐色	赤色粒子・砂礫	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	30%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H3	
167	150	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	蓋	(14.0)	—	(2.0)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H8	119のような外反の大きい皿の可能性あり
167	151	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	蓋	—	—	(1.5)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	L42 ショウ土一括	119のような外反の大きい皿の可能性あり
167	152	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	蓋	(15.0)	—	(1.5)	黄褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H21	119のような外反の大きい皿の可能性あり
167	153	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	(17.8)	—	(4.2)	褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ナデ		25%	口縁部～体部	L42 ショウ土 H13.27	
167	154	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色	白色粒子・黒雲母・石英	良好				2%	口縁部	L42 ショウ土一括	
167	155	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	L42 ショウ土 H12	
167	156	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	—	—	暗褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	L42 ショウ土 H4	
167	157	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	L42 ショウ土 H20	
167	158	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	土師器	羽釜	—	—	—	灰色	白色粒子・黒雲母	良好	ナデ	ナデ		5%	鍔部分	L42 ショウ土 H11	
167	159	1号焼土跡	L42 ～ 43	Ⅹ Ⅱ期	須恵器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒雲母	良好	布目痕			2%	胴部	L42 ショウ土 SU1	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
167	160	1号焼土跡	L42 ～ 43	XII期	灰釉陶器	坏	(15.0)	—	(2.1)	灰白色	密	良好	釉付着	釉付着		5%	口縁部	L42 ショウ土ジキ 1	
167	161	1号焼土跡	L42 ～ 43	XII期	灰釉陶器	坏	(14.0)	—	(1.6)	灰白色	密	良好	ナデ	釉付着		5%	口縁部	L42 ショウ土一括	
167	162	1号掘立柱建物跡	U36･37 ～ V36･37	VII期	土師器	皿?	—	(8.0)	(1.2)	橙色	赤色粒子・長石・石英	良好	削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	20%	底部	1掘立 6 土 H2	
167	163	1号掘立柱建物跡	U36･37 ～ V36･37	VII期	土師器	皿	(9.4)	(7.0)	(0.9)	橙色	赤色粒子	良好	削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	15%	口縁部～底部	1掘立 11 土 H 1	
167	164	1号掘立柱建物跡	U36･37 ～ V36･37	VII期	土師器	甕	—	(8.0)	(2.0)	赤褐色	長石	良好	縦ハケ	ナデ		15%	底部	1掘立 5 土 H11	
167	165	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	坏	(13.0)	—	(3.0)	橙色	赤色粒子・雲母	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	2掘立 1 土 H9	
167	166	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	坏	(12.0)	—	(1.5)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	2掘立 5 土 H9	
167	167	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	—	—	明赤褐色	長石・雲母	良好	ナデ	ハケ		5%	頸部	2掘立 3 土 H10	
168	168	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	—	(3.2)	にぶい黄褐色	白色粒子・黒色粒子・黒雲母	良好	ハケ	ハケ		5%	胴部	2掘立 3 土 H19	
168	169	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.5)	明赤褐色	白色粒子・黒色粒子	良好	ハケ			5%	胴部	2掘立 3 土 H13	
168	170	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.9)	にぶい褐色	白色粒子	良好	ハケ			5%	胴部	2掘立 3 土 H11	
168	171	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	—	(5.5)	褐色	長石・雲母	良好	ハケ	ナデ		5%	胴部	2掘立 3 土 H8	
168	172	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	9 世紀前半	土師器	甕	—	(8.0)	(2.0)	明赤褐色	長石・雲母	良好	ハケ			10%	底部	2掘立 3 土 H14	
168	173	2号堀立柱建物跡	W33･34 ～ X34	平安末	土師器	羽釜	—	—	(4.1)	明赤褐色	白色粒子	良好	ハケ			5%	鍔部分	2掘立 3 土 H4	
168	174	3号堀立柱建物跡	U34･35 ～ V34･35	9 世紀前半？	土師器	坏	—	—	(2.0)	橙色	赤色粒子・石英	良好				2%	口縁部	3掘立 6 土	
168	175	3号堀立柱建物跡	U34･35 ～ V34･35	9 世紀前半？	土師器	甕	—	(4.0	(1.3)	赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好		ナデ		2%	底部	3掘立 8 土 H9	
168	176	3号堀立柱建物跡	U34･35 ～ V34･35	9 世紀前半？	土師器	甕	—	(6.0)	(2.9)	明黄褐色	白色砂礫	良好		ハケ		2%	底部	3掘立 7 土 H4	
168	177	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	土師器	坏	—	(7.0)	(0.8)	にぶい褐色	赤色粒子	良好		ナデ	削り	10%	底部	4掘立 7 土 H1	
168	178	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	土師器	蓋	(12.0)	—	(1.5)	橙色	赤色粒子・雲母	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	4掘立 14 土一括	
168	179	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	土師器	甕	—	—	(3.2)	橙色	雲母・白色砂礫	良好	ナデ	横ハケ		5%	口縁部	4掘立 8 土 H2	
168	180	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	土師器	甕	—	—	(3.6)	褐色	雲母・長石	良好	縦ハケ	横ハケ		2%	胴部	4掘立 2 土 H3	
168	181	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	土師器	甕	—	(8.0)	(3.5)	褐色	白色粒子・黒色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ	木葉痕	2%	底部	4掘立 6 土 H1	
168	182	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半？	須恵器？	坏	—	(7.0)	(2.4)	灰白色	長石	良好	ナデ	ナデ	糸切り	20%	体部～底部	4掘立 2 土 SU2.3	
168	183	4号堀立柱建物跡	T42･43 ～ U42･43	9 世紀前半～中葉？	須恵器	壺	—	—	(2.2)	灰黄色	密	良好	タタキ・自然釉	ナデ		2%	胴部	4掘立 1 土 SU1	
168	184	5号堀立柱建物跡	R43･44	10 世紀後半	須恵器	長頸壺	—	—	(7.1)	にぶい黄橙色	白色粒子・赤色粒子	不良	ナデ	ナデ		2%	口縁部	5掘立 2 土 H1	
168	185	6号堀立柱建物跡	W36･37	9 世紀前半～中葉	土師器	坏	(15.6)	—	(4.9)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ		30%	口縁部～体部	4土 P6	

図	番号	遺構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色調	胎土	焼成	特徴			残存率	部位	注記	備考
							口径	底径	器高				外面	内面	底部				
168	186	6号堀立柱建物跡	W36･37	9世紀前半～中葉	土師器	坏	—	(5.8)	(1.5)	橙色	赤色粒子・黒雲母	良好	削り	暗文	ヘラ削り	35%	底部	6土 P1	
168	187	6号堀立柱建物跡	W36･37	9世紀前半～中葉	土師器	甕	—	—	—	暗赤褐色	白色粒子・石英・長石	良好				2%	口縁部	4土 P8	
168	188	6号堀立柱建物跡	W36･37	9世紀前半～中葉	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英・長石	良好				2%	口縁部	6土一括	
168	189	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	(10.0)	—	(2.5)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ		5%	口縁部～体部	58 土 H5	
168	190	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀中葉？	土師器	黒色土器	(10.8)	—	(2.8)	外面・灰黄色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	内黒		5%	口縁部～体部	63 土 H2	
168	191	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	(13.2)	—	(2.2)	橙色	白色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	63 土一括	
168	192	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	(11.2)	—	(1.8)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		2%	口縁部	73 土一括	
168	193	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	—	—	(1.6)	明赤褐色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		2%	口縁部	73 土一括	
168	194	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	—	—	(1.9)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ		2%	口縁部	56 土一括	
168	195	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	—	(4.0)	(1.1)	にぶい黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	削り	ナデ	削り	5%	底部	54 土 H1	
168	196	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	坏	—	(6.0)	(1.4)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	削り	ナデ	削り	5%	底部	54 土 H2	
168	197	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	甕	—	—	(8.5)	明褐色	白色粒子・砂粒子・黒雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	58 土 H2.3	
168	198	7号堀立柱建物跡	Q40･41～R40･41	9世紀？	土師器	甕	—	—	(2.1)	明褐色	白色粒子・赤色粒子	良好				2%	口縁部	56 土一括	
169	199	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	XIII～XIV期	土師器	坏	10.8	4.6	3.5	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・ナデ	ナデ	糸切り	90%	口縁部～底部	82 土 H2.6.7.10.11	
169	200	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	X期	土師器	坏	—	(7.0)	(2.2)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好		ナデ	ヘラ削り	15%	底部	82 土 H4	
169	201	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	X期	土師器	坏	—	(6.0)	(2.0)	橙色	白色粒子	良好	削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	10%	底部	82 土 H1	
169	202	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	XIII～XIV期	土師器	脚高高台付皿	10.6	6.6	3.9	橙色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	付け高台	99%	口縁部～底部	82 土 H9	
169	203	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	X期？	土師器	蓋	—	—	—	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好				2%	つまみ部	82 土 H14	
169	204	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	XII期	土師器	甕	(24.0)	—	(2.8)	赤褐色	白色粒子・黒雲母・長石	良好	ナデ	横ハケ		5%	口縁部	91 土 H2	
169	205	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	10世紀後半	土師器	甕	—	(8.8)	(4.1)	外面・暗褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好	ナデ	ナデ・横ハケ		2%	底部	97 土 H3	
169	206	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	平安	須恵器	甕	—	—	—	灰白色	密	良好	タタキ	ナデ		10%	胴部	90 土 SU1.2	
169	207	8号堀立柱建物跡	O42～P41･42	8世紀後半？	須恵器	高台付杯	—	(7.4)	(1.8)	灰色	密	良好	削り	ナデ	削りだし高台	15%	底部	91 土 SU2	
169	208	9号堀立柱建物跡	K43･44～L43･44	10世紀前半	土師器	坏	(11.8)	—	(4.0)	橙色	赤色粒子	良好				10%	口縁部～体部	103 土 P3	
169	209	9号堀立柱建物跡	K43･44～L43･44	10世紀前半	土師器	坏	—	(6.0)	(0.8)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好			削り	20%	底部	151 土 H1	
169	210	9号堀立柱建物跡	K43･44～L43･44	平安	土師器	蓋	(16.6)	—	(3.0)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ	ナデ		10%	口縁部～天井部	102 土 H2.3	

図	番号	遺構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色調	胎土	焼成	特徴			残存率	部位	注記	備考
							口径	底径	器高				外面	内面	底部				
169	211	9号堀立柱建物跡	K43･44～L43･44	平安	須恵器	杯	(12.0)	—	(3.3)	灰色	白色粒子・密	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部～体部	150土SU1	
169	212	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	壺	—	—	(2.5)	褐色	白色粒子	良好	口縁櫛描き横線文	段あり		5%	口縁部	8土P4	
169	213	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	壺	—	—	(5.9)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	胴部	8土P3.7	
169	214	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	壺	—	—	(2.8)	外面・明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	胴部	8土P16	
169	215	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	壺	—	(7.8)	(2.6)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ		調整不明	10%	底部	8土P2	
169	216	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	壺?	(17.8)	—	(3.3)	赤褐色	長石	良好		櫛描き?		2%	口縁部	8土P18	
169	217	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	台付甕?	—	—	(3.2)	褐色	長石・石英	良好		脚ヘラ状工具痕		10%	脚部	8土P17	
169	218	8号土坑	W36	古墳時代前期	土師器	甕	—	(6.0)	(2.4)	にぶい橙色	長石・石英	良好	ナデ	ナデ	ヘラ削	15%	底部	8土P15	
169	219	8号土坑	W36	平安?	土師器	甕	—	(6.4)	(2.6)	赤褐色	石英	良好	縦ハケ		木葉痕	2%	底部	8土P14	
169	220	11号土坑	R44	8世紀後半以前	土師器	坏	(11.8)	—	(3.3)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ			5%	口縁部	11土H1.2	
169	221	12号土坑	T41	古墳時代?	土師器	器台?	(8.5)	—	(1.6)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	12土H3	
169	222	55号土坑	R40	平安	土師器	坏	—	(6.4)	(0.8)	にぶい黄褐色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	削り	2%	底部	55土一括	
169	223	55号土坑	R40	9世紀前半～中葉	土師器	皿	(11.6)	—	(1.7)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	削り	ナデ		5%	口縁部～体部	55土一括	
169	224	55号土坑	R40	平安	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英・長石・黒雲母	良好	ナデ	ナデ		5%	胴部	55土H1	
169	225	65号土坑	P40	平安	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好				5%	口縁部～頸部	65土一括	
169	226	12号堀立柱建物跡	P41	10世紀初頭	土師器	坏	(12.4)	—	(2.4)	にぶい赤褐色	赤色粒子・白色粒子	良好				5%	口縁部	68土H1	
169	227	12号堀立柱建物跡	P41	XⅠ期	土師器	皿	(14.0)	—	(2.3)	にぶい黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	削り			5%	口縁部～体部	68土H2	
169	228	12号堀立柱建物跡	P41	10世紀初頭	土師器	甕	—	—	—	赤褐色	白色粒子・石英・長石・黒雲母	良好	ハケ	ハケ		5%	胴部	68土H3	
170	229	12号堀立柱建物跡	P40	XⅠ期	土師器	坏	(10.6)	—	(2.7)	赤褐色	赤色粒子・白色粒子・黒色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	削り	10%	口縁部～底部	70土H7	
170	230	12号堀立柱建物跡	P40	XⅠ期	土師器	坏	—	(6.0)	(1.3)	橙色	赤色粒子・白色粒子・黒色粒子	良好		ナデ		10%	体部～底部	70土H4	
170	231	12号堀立柱建物跡	P40	10世紀初頭	土師器	甕	(8.8)	—	(3.4)	明赤褐色	石英	良好	縦ハケ	横ナデ		10%	口縁部	70土H5	
170	232	12号堀立柱建物跡	P40	10世紀初頭	土師器	甕	—	—	—	暗褐色	白色粒子・黒色粒子	良好	縦ハケ	横ナデ		5%	胴部	70土H 1	
170	233	12号堀立柱建物跡	P41	XⅠ期	土師器	坏	(12.4)	(4.5)	4.2	にぶい橙色	赤色粒子	良好	削り	ナデ	削り	35%	口縁部～底部	71土H39.40	
170	234	12号堀立柱建物跡	P41	XⅠ期	土師器	皿	(12.6)	(5.0)	2.7	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ	削り	60%	口縁部～底部	71土H2.34.36	
170	235	12号堀立柱建物跡	P41	XⅠ期	土師器	坏	(16.4)	—	(3.5)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		15%	口縁部～体部	71土H35	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
170	236	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(12.0)	—	(3.6)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	71 土 H3.4	
170	237	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(12.0)	—	(2.6)	橙色	赤色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		10%	口縁部	71 土 H29	
170	238	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(13.8)	—	(3.2)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		15%	口縁部～体部	71 土 H38	
170	239	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	黒色土器	(19.2)	—	(2.7)	外面・浅黄色 内面・黒色	白色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ	内黒		10%	口縁部～体部	71 土 H27	
170	240	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	黒色土器	(17.4)	—	(4.4)	外面・浅黄色 内面・黒色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ	内黒		15%	口縁部～体部	71 土 H42	
170	241	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	—	(2.4)	にぶい黄橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		5%	口縁部	71 土 H9	
170	242	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	(5.0)	(2.7)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ	削り	15%	体部～底部	71 土 H29	
170	243	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	(5.0)	(2.5)	橙色	赤色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ	削り	25%	体部～底部	71 土 H31	
170	244	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	(4.0)	(1.4)	橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ	削り	25%	体部～底部	71 土 H10.30	
170	245	１２号堀立柱建物跡	P41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	黒色土器	—	(6.0)	(1.3)	外面・黒色 内面・橙色	赤色粒子	良好	ナデ	内黒		5%	底部	71 土 H8	
170	246	８０号土坑	P42	平安	土師器	甕	(13.1)	—	(3.1)	外面・橙色 内面・褐色	白色粒子・黒雲母	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		5%	口縁部	80 土一括	
170	247	８１号土坑	P42	10 世紀前半	土師器	坏	(11.0)	—	(3.5)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	削り・ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	81 土 H1.2	
170	248	８１号土坑	P42	10 世紀前半	土師器	蓋	(14.2)	—	(1.9)	明赤褐色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	81 土 H3	
170	249	８６号土坑	O42	Ⅹ Ⅰ～Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	(12.0)	—	(2.6)	にぶい黄橙色	赤色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～体部	86 土 H1	
170	250	８６号土坑	O42	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	(6.0)	(1.8)	にぶい黄橙色	赤色粒子・長石	良好	削り・ナデ	ナデ		15%	体部～底部	86 土 H12	
170	251	８６号土坑	O42	Ⅹ Ⅰ～Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	—	(12.0)	(4.0)	赤褐色	白色粒子・黒色粒子	良好	縦ハケ	横ナデ		5%	底部	86 土 H2	
170	252	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	皿	12.3	4.6	2.5	橙色	白色粒子・砂粒子	良好	ロクロ・削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	100%	完形	88 土 H32	
170	253	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	皿	13.0	5.0	2.8	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ・削り	ナデ	糸切り後ヘラ削り	85%	口縁部～底部	88 土 H33. 一括	
170	254	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	14.8	4.5	4.4	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	削り・ナデ	ナデ	糸切り後ヘラ削り	80%	口縁部～底部	88 土 H13.30	
170	255	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(16.0)	—	(1.9)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部	88 土 H5	
170	256	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(14.0)	—	(2.2)	にぶい黄褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部～底部	88 土 H19?	
170	257	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	黒色土器	(13.0)	—	(2.3)	明褐色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ・内黒		10%	底部	88 土 H7	
171	258	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	黒色土器	—	(6.0)	(2.2)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	内黒・暗文		20%	体部～底部	88 土 H6	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
171	259	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	—	(4.2)	(2.2)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	削り	20％	体部～底部	88 土 H34	
171	260	８８号土坑	N41 ～ O41	平安	土師器	蓋	(14.0)	—	(1.3)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		10％	口縁部～体部	88 土 H12	
171	261	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	高台付杯	—	—	(1.5)	明赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好			付け高台	25％	底部	88 土 H25	
171	262	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・黒色粒子	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		5％	口縁部	88 土 H35	
171	263	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	—	明褐色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		5％	口縁部	88 土 H23	
171	264	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	(19.2)	—	(4.1)	外面・赤褐色 内面・黒褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		10％	口縁部～頸部	88 土 H2	
171	265	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	(14.8)	—	(4.0)	赤褐色	白色粒子・赤色粒子	良好		横ハケ		10％	口縁部～頸部	88 土 H1	
171	266	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	—	明赤褐色	白色粒子・黒雲母・石英・小石	良好	横ハケ	ナデ		5％	口縁部	88 土 H11	
171	267	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄褐色	白色粒子・石英・長石・黒雲母・小礫	良好	横ハケ	ナデ		5％	口縁部	88 土 H14	
171	268	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	—	にぶい赤褐色	白色粒子・石英・長石・黒雲母	良好	横ハケ	ナデ		5％	口縁部	88 土 H26	
171	269	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	—	(3.3)	黒褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好	横ハケ	縦ハケ		5％	頸部	88 土 H10	
171	270	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	土師器	甕	—	(8.6)	—	明褐色	白色粒子・黒雲母・石英	良好		横ハケ	木葉痕	15％	底部	88 土 H3	
171	271	８８号土坑	N41 ～ O41	平安	土師器	鉄鉢？	(16.4)	—	(7.5)	褐色	白色粒子・黒雲母・石英・長石	良好	縦ハケ	ナデ		15％	口縁部～体部	88 土 H21	甕系（甲斐型）の胎土で製作・他の器種の可能性あり
171	272	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	壺	(10.0)	—	—	灰色	密	良好	自然釉	自然釉		5％	口縁部	88 土 SU2	
171	273	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	壺	—	—	—	灰色	密	良好		自然釉		5％	口縁部	88 土一括	
171	274	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	甕	—	—	—	灰白色	密	良好	自然釉			5％	胴部	88 土 SU6	
171	275	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	甕	—	—	—	灰白色	密	良好	自然釉	自然釉		5％	胴部	88 土 SU3	
171	276	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	壺	—	—	—	灰白色	密	良好	自然釉			5％	胴部	88 土 SU4	
171	277	８８号土坑	N41 ～ O41	Ⅹ Ⅰ期	灰釉陶器	甕	—	—	—	灰白色	密	良好	自然釉			5％	胴部	88 土 SU1	
171	278	９５号土坑	O42	9 世紀後半～ 10 世紀前半	土師器	坏	(11.2)	—	(2.0)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好				10％	底部	95 土 H2	
171	279	１０号掘立柱建物跡		9 世紀前半～中葉	土師器	坏	—	(6.4)	(1.9)	橙色	赤色粒子・砂粒子	良好			糸切り後ヘラ削り	10％	底部	105 土 H1	
171	280	遺構外	J44	平安	土師器	甕	—	—	(1.1)	赤褐色	白色粒子・黒色粒子	良好		ナデ	木葉痕	5％	底部	129 土 H1	
171	281	２５ピット	Q43	9 世紀	土師器	坏	—	(4.8)	(1.3)	明赤褐色	赤色粒子・長石	良好		ナデ	糸切り後ヘラ削り	10％	底部	25 ピット一括	
171	282	３４ピット	P44	10 世紀	灰釉陶器	高台付杯	14.2	6.5	3.4	灰白色	白色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ・釉薬痕	ナデ・釉薬痕	付け高台	100％	完形	34 ピット SU1	
172	283	５２ピット	S40	9 世紀後半？	土師器	坏	—	—	(2.5)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ロクロ	ナデ		10％	口縁部～体部	52 ピット H1	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
172	284	79ピット	R41	平安	土師器	甕	—	(8.6)	(4.8)	褐色	白色粒子・砂粒子	良好	ナデ	ナデ	木葉痕	10%	胴部～底部	79 ピット H1	
172	285	86ピット	R40	平安	土師器	甕	—	(5.0)	(2.3)	明赤褐色	白色粒子・石英	良好				10%	底部	86 ピット H1	
172	286	107ピット	K42	8世紀後半～9世紀中葉	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(3.9)	灰色	白色粒子・密	良好	ナデ	ナデ	削りだし高台	10%	底部	107 ピット SU1	
172	287	108ピット	K42	9 世紀	土師器	坏	—	(6.0)	(3.2)	明赤褐色	赤色粒子・石英	良好		ナデ		20%	体部～底部	108 ピット H1	
172	288	137号土坑		Ⅸ・Ⅹ期	土師器	高台付坏	16.9	6.0	5.8	明褐色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	暗文・ナデ	削りだし高台	100%	完形	R45 P2	
172	289	137号土坑		8世紀中葉～後葉	土師器	蓋	17.1	6.0	3.7	明赤褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	暗文・ナデ		90%	口縁部～天井部	R45 P4.5	
172	290	137号土坑		9 世紀	土師器	蓋	16.5	5.0	3.0	明褐色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	暗文・ナデ		90%	口縁部～天井部	R45 P1.3	
172	291	1溝	Q41・Q43～R45	Ⅹ Ⅱ期?	土師器	坏	12.8	6.0	4.8	赤褐色	白色粒子・長石	良好	ナデ・ヘラ削り?		ヘラ削り	35%	口縁部～底部	1溝 H54.102	
172	292	1溝	Q41・Q43～R45	Ⅹ Ⅱ期?	土師器	坏	11.6	5.8	3.4	橙色	赤色粒子・石英	良好	ナデ・ヘラ削り?	ナデ	糸切り後ヘラ削り	95%	口縁部～底部	1溝 H98	
172	293	1溝	Q41・Q43～R45	Ⅹ Ⅱ期?	土師器	坏	(11.4)	(5.0)	3.6	明赤褐色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り?		ヘラ削り	30%	口縁部～底部	1溝 H101	
172	294	1溝	Q41・Q43～R45	10 世紀前半?	土師器	坏	(12.0)	—	(3.1)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ			15%	口縁部～体部	1溝 H89.90	
172	295	1溝	Q41・Q43～R45	10 世紀前半?	土師器	坏	(13.8)	—	(3.2)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ			15%	口縁部～体部	1溝 H96	
172	296	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	(11.4)	—	(3.3)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ	ナデ		15%	口縁部～体部	1溝 H48	
172	297	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	(9.2)	—	(2.9)	橙色	赤色粒子	良好				15%	口縁部～体部	1溝 H81	
172	298	1溝	Q41・Q43～R45	10 世紀前半?	土師器	坏	(10.6)	—	(2.6)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ロクロ	ナデ		15%	口縁部～体部	1溝 H5	
173	299	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	—	—	(2.3)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ		10%	口縁部～体部	1溝 H85	
173	300	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	—	(4.4)	(1.3)	橙色	赤色粒子	良好				10%	底部	1溝 H31	
173	301	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	黒色土器	—	(7.5)	(1.7)	橙色	雲母	良好		内黒・ナデ		10%	底部	1溝 H77	
173	302	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	—	(6.0)	(0.7)	橙色	赤色粒子	良好		ナデ	ヘラ削り	10%	底部	1溝 H6	
173	303	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	—	(6.5)	(0.9)	外面・橙色 内面・にぶい橙色	赤色粒子	良好		ナデ	ヘラ削り	10%	底部	1溝 H20	
173	304	1溝	Q41・Q43～R45	9 世紀末～10 世紀前半	土師器	坏	—	(5.5)	(1.3)	橙色	砂粒子	良好		ナデ	糸切り後ヘラ削り	10%	底部	1溝 H19	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
173	305	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	皿	—	(5.0)	(0.7)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ		ヘラ削り	10%	底部	1溝 H73	
173	306	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	坏	—	(4.5)	(0.6)	外面・暗褐色 内面・橙色	赤色粒子	良好			ヘラ削り	10%	底部	1溝 H100	
173	307	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	高台付坏	—	(6.6)	(1.2)	橙色	赤色粒子	良好			削りだし高台	15%	底部	1溝 H103	
173	308	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	高台付坏	—	(6.5)	(1.0)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好			削りだし高台	15%	底部	1溝 H46	
173	309	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	高台付坏	—	(6.5)	(0.8)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好			削りだし高台	15%	底部	1溝 H99	
173	310	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	坏	(12.8)	—	(1.4)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ			10%	口縁部	1溝 H7	
173	311	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	蓋	(13.4)	—	(1.2)	橙色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	1溝 H64	
173	312	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.3)	明赤褐色	白色粒子・石英・長石	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	1溝 H66	
173	313	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	(22.0)	—	(2.9)	明赤褐色	黒雲母・長石・石英	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	1溝 H69	
173	314	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	羽釜	(23.0)	—	(3.1)	外面・明赤褐色 内面・赤褐色	白色粒子・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	ナデ		5%	口縁部	1溝 H75.80	
173	315	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(3.0)	外面・暗赤褐色 内面・黒褐色	黒雲母・長石・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	口縁部	1溝 H88	
173	316	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.6)	赤褐色	長石・石英	良好		ナデ		5%	口縁部	1溝 H2	
173	317	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	—	(7.8)	(1.6)	にぶい赤褐色	白色粒子・黒色粒子・黒雲母	良好		ナデ	木葉痕	5%	底部	1溝 H60	
173	318	1溝	Q41・Q43 ～ R45	9 世紀末～ 10 世紀前半	土師器	甕	—	(8.4)	(1.7)	赤褐色	白色粒子・黒雲母	良好		ナデ	木葉痕	5%	底部	1溝 H40	
173	319	3溝	U39	XⅣ期	土師器	坏	3.8	6.0	3.8	明褐色	白色粒子・黒色粒子	良好		ナデ	糸切り	40%	口縁部～底部	3溝 H22	
173	320	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	坏	(13.0)	—	(2.4)	にぶい黄褐色	赤色粒子・黒色粒子	良好				10%	口縁部	3溝 H12	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
173	321	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	黒色土器	(14.0)	—	(1.8)	にぶい黄褐色	赤色粒子	良好		内黒？		10%	口縁部	3溝 H27	
173	322	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	坏	(11.4)	—	(1.5)	橙色	赤色粒子・白色粒子	良好	ナデ	ナデ		10%	口縁部	3溝 H41	
173	323	3溝	U39	XIV期	土師器	坏	—	4.5	(1.7)	明褐色	白色粒子・黒色粒子	良好				25%	底部	3溝 H29	
173	324	3溝	U39	XIV期	土師器	坏	—	(4.2)	(1.2)	明褐色	黒色粒子・赤色粒子	良好			糸切り	15%	底部	3溝 H28	
173	325	3溝	U39	XIV期	土師器	坏	—	(4.8)	(1.0)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・石英	良好			糸切り	25%	底部	3溝 H34	
173	326	3溝	U39	XIV期	土師器	坏	—	(5.4)	(1.4)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	ナデ	ナデ	糸切り	20%	底部	3溝 H24	
173	327	3溝	U39	11 世紀前半？	土師器	坏	—	(6.6)	(1.0)	橙色	白色粒子・赤色粒子	良好	ロクロ	ナデ	糸切り	20%	底部	3溝 H10	
173	328	3溝	U39	11 世紀前半	土師器	高台付杯	—	—	(3.3)	明赤褐色	赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	付け高台	15%	底部	3溝 H32	
173	329	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	皿	—	—	(2.0)	橙色	白色粒子・黒色粒子	良好	ロクロ？	ナデ		5%	口縁部	3溝 H5	
173	330	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(4.0)	明褐色	黒色粒子・長石・雲母	良好	縦ハケ			5%	口縁部	3溝 H9	
173	331	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.9)	暗褐色	白色粒子・雲母	良好	縦ハケ			5%	胴部	3溝 H8	
173	332	3溝	U39	11 世紀前半？	土師器	甕	—	(7.0)	(1.9)	明赤褐色	白色粒子・長石・雲母	良好	縦ハケ			5%	胴部	3溝 H17	
173	333	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	甕	—	—	(2.8)	赤褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	縦ハケ	ナデ		5%	底部	3溝 H47	
173	334	3溝	U39	11 世紀前半？	土師器	甕	—	—	(2.7)	明赤褐色	白色粒子・雲母	良好		ナデ	木葉痕	5%	底部	3溝 H18	
173	335	3溝	U39	10 世紀前半	土師器	置きカマド	—	—	(3.6)	赤褐色	白色粒子・雲母	良好	縦ハケ	ナデ		5%	底部	3溝 H36	
173	336	6溝	T39	平安	灰釉陶器	壺	—	—	(2.6)	灰白色	やや密	良好	ナデ・自然釉	ナデ		5%	頸部～肩部	6溝 P1.3	
173	337	6溝	R40 ～ R41	9 世紀前半？	土師器	坏	(10.6)	—	(2.5)	明赤褐色	白色粒子・黒色粒子	良好				5%	口縁部	8溝 H 1	
173	338	6溝	R40 ～ R41	平安	土師器	甕	—	—	(6.4)	褐色	白色粒子・雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	8溝 P7.12.17	
174	339	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	(11.0)	(7.0)	3.9	橙色	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	ナデ？	ナデ	ヘラ削り	10%	口縁部～底部	12ミゾ H45.46.51	
174	340	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	(11.8)	—	(3.5)	明黄褐色	赤色粒子・長石・石英	良好	ナデ			5%	口縁部～体部	12ミゾ H39	
174	341	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	(12.0)	—	(2.7)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	ナデ	暗文・ナデ		5%	口縁部～体部	12ミゾ H36	
174	342	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	—	—	(3.7)	橙色	赤色粒子・石英	良好	ナデ			5%	口縁部～体部	12ミゾ H60	
174	343	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	(11.0)	—	(1.7)	外面：にぶい橙色 内面：橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	12ミゾ H35	
174	344	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	—	(6.4)	(1.4)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英・角閃石	良好	ナデ	ナデ	ヘラ削り	10%	底部	12ミゾ H34	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
174	345	12溝	K40 ～ K42	Ⅶ期？	土師器	坏	—	(5.0)	(0.9)	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	赤色粒子・黒色粒子	良好	ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	5%	底部	12ミゾ H1	
174	346	12溝	K40 ～ K42	9世紀	土師器	蓋	—	—	(2.3)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	ヘラ削り	ロクロ	つまみ部付け	10%	体部～つまみ部	12ミゾ H54	
174	347	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	(13.6)	—	(4.6)	赤褐色	白色粒子・黒色粒子・輝石・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	口縁部	12ミゾ H44	
174	348	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	赤褐色	黒色粒子・石英・輝石	良好		横ハケ		5%	口縁部	12ミゾ H48	
174	349	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	にぶい赤褐色	黒色粒子・石英・雲母	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	12ミゾ H2	
174	350	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	にぶい赤褐色	黒色粒子・雲母・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	12ミゾ H56	
174	351	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	褐色	白色粒子・石英・輝石	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	12ミゾ H61	
174	352	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	明赤褐色	黒色粒子・雲母・石英	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	12ミゾ H13	
174	353	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	—	—	明赤褐色	黒色粒子・雲母・石英・輝石	良好	縦ハケ	横ハケ		5%	胴部	12ミゾ H17	
174	354	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	(11.0)	(6.5)	明褐色	長石・雲母・石英・輝石	良好	縦ハケ	横ハケ	木葉痕	10%	底部	12ミゾ H28	
174	355	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	甕	—	(8.0)	(1.9)	明赤褐色	黒色粒子・長石・輝石・石英・雲母	良好	削り		木葉痕	5%	底部	12ミゾ H11	
174	356	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	土師器	置きカマド	—	—	(5.2)	明赤褐色	長石・石英・輝石	良好	縦ハケ	横ハケ		10%	口縁部～胴部	12ミゾ H31.32	
174	357	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	須恵器	坏	(12.0)	—	(1.9)	灰色	白色粒子・石英	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	12ミゾ H12	
174	358	12溝	K40 ～ K42	9世紀前半？	須恵器	蓋	(17.0)	—	(1,1)	灰色	白色粒子・石英	良好	ナデ			5%	口縁部～体部	12ミゾ SU2	
174	359	12溝	K40 ～ K42	10世紀前半？	灰釉陶器	壺	—	—	—	灰色	白色粒子	良好	自然釉	ナデ		5%	頸部～胴部	12ミゾ SU1	
174	360	13溝	F45 ～ H47	Ⅲ期	土師器	坏	12.4	8.2	3.6	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ロクロ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	90%	口縁部～底部	13ミゾ H2	
174	361	13溝	F45 ～ H47	Ⅲ期	土師器	坏	(11.8)	(7.4)	3.5	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・長石	良好	ナデ・ヘラ削り		ヘラ削り	40%	口縁部～底部	13ミゾ H8	
174	362	13溝	F45 ～ H47	Ⅲ期	土師器	坏	—	(7.8)	(0.7)	橙色	赤色粒子・石英・角閃石	良好		暗文	ヘラ削り	15%	体部～底部	13ミゾ H7	
174	363	13溝	F45 ～ H47	Ⅲ期	土師器	坏	—	(9.6)	(1.0)	橙色	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・長石	良好			ヘラ削り	15%	底部	13ミゾ H6	
174	364	13溝	F45 ～ H47	9世紀中葉～後半	灰釉陶器	壺	—	(8.6)	(2.8)	灰白色	やや密	良好	自然釉	自然釉	付け高台	15%	体部～底部	13ミゾ SU1	
174	365	14溝	F45 ～ G46	X期	土師器	坏	(11.0)	(4.0)	(3.4)	橙色	赤色粒子・石英・輝石	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ		10%	口縁部～体部	14ミゾ H5	
174	366	14溝	F45 ～ G46	X期	土師器	坏	(11.6)	—	(3.3)	橙色	赤色粒子・石英・輝石	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ		10%	口縁部～体部	14ミゾ H4	
174	367	14溝	F45 ～ G46	X期	土師器	黒色土器	(16.8)	—	(2.9)	外面：橙色 内面：黒褐色	赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	ナデ	暗文・内黒		5%	口縁部～体部	14ミゾ H1	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
174	368	１４溝	F45 ～ G46	X期	土師器	坏	—	(4.2)	(0.7)	橙色	赤色粒子・石英・輝石	良好			糸切り	5%	体部～底部	14 ﾐｿﾞ H6	
174	369	１４溝	F45 ～ G46	X期	土師器	坏	—	(5.0)	(0.7)	橙色	赤色粒子・輝石・石英	良好		ロクロ	糸切り後ヘラ削り	5%	体部～底部	14 ﾐｿﾞ H7	
174	370	１４溝	F45 ～ G46	X期	土師器	甕	(14.0)	—	(2.5)	にぶい黄褐色	石英・輝石	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ・ナデ		5%	口縁部～胴部	14 ﾐｿﾞ一括	
175	371	遺構外	V34G	古墳前期	土師器	器台？	—	—	(1.1)	赤褐色	石英・輝石	良好				5%	底部	3 掘立 5 土 H15	
175	372	遺構外	V34G	古墳前期	土師器	器台	—	—	(3.0)	橙色	赤色粒子・石英	良好	ヘラ削り	ヘラ削り		5%	脚部	3 掘立 7 土 H2	
175	373	遺構外	U34G~V34G	古墳前期	土師器	台付甕	—	—	(2.4)	明赤褐色	石英・輝石・黒雲母	良好	ヘラ削り			5%	底部～脚部	3 掘立 8 土 H7	
175	374	遺構外	V36G	古墳前期	土師器	高坏	—	—	(2.6)	明赤褐色	白色粒子・長石・白雲母	良好				5%	底部～脚部	2 ﾐｿﾞ H1	
175	375	遺構外	V37G	古墳前期	土師器	高坏	—	—	(3.3)	明黄褐色	赤色粒子・石英・長石	良好		ナデ・横ハケ？		5%	底部～脚部	1 掘立ﾋﾟｯﾄ 4H1	
175	376	遺構外	G45G	古墳前期	土師器	高坏	—	—	(5.1)	明赤褐色	白色粒子・黒色粒子・石英	良好	ヘラナデ			25%	底部～脚部	13 ﾐｿﾞ H3	
175	377	遺構外	U34G~V34G	古墳前期	土師器	台付甕	—	—	(4.6)	明赤褐色	石英・輝石	良好		ヘラ削り		10%	脚部	3 掘立 8 土 H2.5	
175	378	遺構外	T39･40G	古墳前期	土師器	高坏	—	—	(4.9)	明赤褐色	黒色粒子・石英・輝石	良好	ヘラ削り			10%	底部～脚部	5 住 H44	
175	379	遺構外	U34G	古墳前期	土師器	台付甕	—	—	(3.3)	明赤褐色	石英・輝石	良好	ナデ	指頭痕あり		20%	底部～脚部	1 掘立 1 土 H1	
175	380	遺構外	W35G	古墳前期	土師器	高坏	—	—	(3.5)	明赤褐色	石英・輝石	良好	ナデ	工具による調整・摩耗		10%	底部～脚部	13 ﾋﾟｯﾄ一括	
175	381	遺構外	L42G	古墳前期	土師器	台付甕	—	(5.4)	(2.4)	にぶい黄褐色	白色粒子・石英・輝石・黒雲母	良好				5%	脚部	L42 ｼｮｳ土一括	
175	382	遺構外	U43G~T43G	古墳前期	土師器	甕	—	—	(2.1)	橙色	赤色粒子・石英・輝石	良好				5%	口縁部	4 掘立 8 土 H5	
175	383	遺構外	T43G	古墳～古代？	土師器	坏	—	—	(2.0)	にぶい褐色	赤色粒子・石英	良好	ヘラ削り			5%	胴部	4 掘立 14 土一括	
175	384	遺構外	V34G	古墳前期	土師器	壺	—	—	(4.5)	明赤褐色	白色粒子・石英・輝石	良好	ナデ			10%	口縁部～胴部	3 掘立 5 土 H2	
175	385	遺構外	L42G	古墳前期	土師器	壺	—	—	(3.3)	褐色	白色粒子・石英・長石・輝石・黒雲母	良好		ナデ		5%	胴部	L-42 ｼｮｳ土 H37	
175	386	遺構外	U34G	古墳前期	土師器	甕	—	(3.8)	(3.2)	赤褐色	石英・長石・角閃石	良好	削り？		摩耗していて整形調整不明	5%	胴部～底部	3 掘立 1 土 H2	
175	387	遺構外	T44G	古墳前期	土師器	S 字状口縁台付甕	—	—	(1.2)	橙色	赤色粒子・石英・長石・輝石・黒雲母	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	2 住一括	
175	388	遺構外	V34G	古墳前期	土師器	S 字状口縁台付甕	—	—	(1.5)	明黄褐色	赤色粒子・石英・長石・黒雲母	良好	ナデ	ナデ		5%	口縁部	3 掘立 7 土一括	
175	389	遺構外	U34G	古墳前期	土師器	S 字状口縁台付甕	(12.6)	—	(2.3)	橙色	赤色粒子・石英・長石・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	ナデ		5%	口縁部	3 掘立 1 土 H1	
175	390	遺構外	T44G	古墳前期	土師器	壺	—	—	(1.5)	褐色	石英・長石・輝石	良好	ナデ	ナデ		5%	頸部～胴部	2 住ｶﾏﾄﾞ P62	
175	391	遺構外	U34G	古墳前期	土師器	S 字状口縁台付甕	—	—	(4.0)	にぶい黄橙色	石英･長石･輝石･黒雲母・白雲母	良好	縦ハケ・ナデ	ナデ		5%	胴部	1 掘立 1 土 H2	
175	392	遺構外	V34G	古墳前期	土師器	甑	—	(5.0)	(4.3)	褐色	赤色粒子・石英・輝石	良好	ハケ目不鮮明	ハケ目不鮮明	削り	5%	胴部～底部	3 掘立 5 土 H10	
175	393	８号掘立柱建物跡	O42	XⅠ・XⅡ期	土師器	黒色土器	(14.4)	(4.5)	5.0	外面：明赤褐色 内面：黒色	白色粒子・黒色粒子・長石	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ・内黒	ヘラ削り	40%	口縁部～底部	H1952	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
175	394	遺構外	38トレンチ	Ⅸ期	土師器	坏	(10.0)	(4.6)	4.2	橙色	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	30%	口縁部～底部	H22 西カン 2 38T 1 土 -1	
175	395	1号焼土跡	L42～43	Ⅹ Ⅰ期	土師器	坏	(12.8)	(3.5)	3.4	にぶい黄橙色	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・石英・長石	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	糸切り後ヘラ削	30%	胴部～底部	H2069	
175	396	遺構外	R45	Ⅹ期	土師器	黒色土器	(14.0)	—	(4.8)	外面：橙色 内面：黒色	赤色粒子・石英	良好	ナデ	内黒		20%	口縁部～胴部	H1071.1074	
175	397	1号焼土跡	L42～43	Ⅹ期	土師器	坏	(11.0)	(3.8)	4.0	橙色	赤色粒子・輝石	良好	ナデ・削り		糸切り	10%	口縁部～底部	H2072.2967	
175	398	遺構外	T45	Ⅹ Ⅲ期	土師器	坏	—	5.0	(1.8)	橙色	赤色粒子・輝石・長石	良好	ナデ	ナデ	糸切り摩耗	40%	胴部～底部	H396	
175	399	遺構外	41トレンチ	Ⅹ Ⅱ期	土師器	坏	—	(4.8)	(1.5)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英・長石	良好	ヘラ削り		削り	10%	胴部～底部	H22 西カン 2 41T 1P	
175	400	遺構外	43トレンチ	Ⅶ期	土師器	坏	—	(6.8)	(2.0)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英・長石	良好	ヘラ削り		ヘラ削り	10%	胴部～底部	H22 西カン 2 43T 5 ゾク一括	
175	401	遺構外	41トレンチ	Ⅹ Ⅰ・Ⅹ Ⅱ期	土師器	皿	—	(6.0)	(1.4)	橙色	赤色粒子・黒色粒子・石英・長石	良好	ヘラ削り		ヘラ削り	10%	胴部～底部	H22 西カン 2 41T 一括	
175	402	遺構外	S40	Ⅸ期	土師器	皿	(14.0)	—	2.2	橙色	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	ナデ・削り	ナデ		20%	口縁部～体部	H1792	
175	403	遺構外	Q40	Ⅸ期？	土師器	皿	13.0	5.0	2.3	橙色	赤色粒子・白色粒子・石英	良好	ナデ・ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	80%	口縁部～底部	H1221	
175	404	5号住居跡	T39・40	9世紀前半～末葉	土師器	蓋	—	—	(1.3)	黄褐色	黒色粒子・石英	良好	ナデ	ナデ	つまみ部付け	10%	胴部～つまみ部	H1769	
175	405	5号住居跡	T39・40	9世紀前半～末葉	土師器	蓋	—	—	(1.7)	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	赤色粒子・石英	良好	ナデ・削り		つまみ部付け	10%	胴部～つまみ部	H1779	
175	406	遺構外	43トレンチ	9世紀前半～末葉	土師器	蓋	—	—	(1.0)	黄橙色	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・石英	良好			つまみ部付け	5%	つまみ部	H22 西カン 2 43T 5 ゾク一括	
175	407	遺構外	31トレンチ	平安	土師器	壺	6.0	6.6	7.5	橙色	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	ナデ		ヘラ切り	95%	口縁部～底部	H22 西カン 2 31T 1 住 2-1	
176	408	7号掘立柱建物跡	R41	8世紀前半～末葉？	土師器	甕	(21.0)	—	(8.1)	にぶい赤褐色	白色粒子・赤色粒子・石英・角閃石・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ・ナデ		10%	口縁部～胴部	H1634.1637	
176	409	遺構外	31トレンチ	9世紀前半～末葉	土師器	甕	(18.0)	—	(10.0)	外面・にぶい赤褐色 内面・赤褐色	石英・角閃石・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ・ナデ		10%	口縁部～胴部	H22 西カン 2 31T 1 住 2-2	
176	410	遺構外	Q45	9世紀前半～末葉	土師器	甕	(24.0)	—	(4.5)	褐色	石英・角閃石・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ・ナデ		5%	口縁部～胴部	H1470	
176	411	8号掘立柱建物跡	O42	9世紀前半～末葉	土師器	甕	(20.0)	—	(2.2)	褐色	白色粒子・黒色粒子・石英・角閃石・黒雲母	良好	ナデ			5%	口縁部	H1958	
176	412	遺構外	Q40	Ⅹ Ⅱ期	土師器	甕	(28.0)	—	(3.8)	明赤褐色	白色粒子・石英・輝石・砂礫	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ・ナデ		10%	口縁部～胴部	H1601	
176	413	遺構外	T44	9世紀前半～末葉	土師器	甕	(14.0)	—	(3.5)	明褐色	白色粒子・黒色粒子・石英・輝石	良好	ナデ			5%	口縁部～胴部	H1320	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
176	414	８６号土坑	O42	ＸⅡ期	土師器	甕	(20.0)	—	(3.8)	明赤褐色	白色粒子・石英・輝石・黒雲母・砂礫	良好	ナデ	ナデ		10％	口縁部～胴部	H1949	
176	415	１溝	Q41	ＸⅡ期？	土師器	甕	—	—	(6.9)	赤褐色	白色粒子・石英・長石・輝石・黒雲母	良好	縦ハケ・ナデ	横ハケ		10％	口縁部～胴部	H1948	
176	416	８６号土坑	O42	9 世紀前半～末葉	土師器	甕	—	(9.6)	(3.0)	明赤褐色	白色粒子・石英・長石・輝石・砂礫	良好	ナデ	ナデ	木葉痕	10％	胴部～底部	H1943	
176	417	５号住居跡	T39･40	平安	土師器	置きカマド	—	—	—	暗褐色	白色粒子・石英・輝石・黒雲母	良好	ナデ	縦ハケ・ナデ		5％	胴部	H1782	
176	418	遺構外	R45	古代	須恵器	坏	—	—	(3.0)	灰黄色	輝石・長石	良好	ロクロ	ロクロ		5％	口縁部～体部	SU285	
176	419	遺構外	R47・O41	古代	須恵器	高台付坏	—	(7.8)	(1.7)	灰白色	白色砂粒	良好	ナデ	ナデ	付け高台	20％	底部	SU261.389	
176	420	遺構外	G47	平安	須恵器	碗？	—	(4.6)	(2.5)	灰白色	白色砂粒	良好	ナデ	ロクロ	付け高台	20％	体部～底部	SU439	
176	421	２２号土坑	Q45・R45	平安	須恵器	碗？	—	(6.4)	(2.2)	灰白色	白色砂粒	良好	ロクロ	ロクロ	付け高台・ナデ	5％	体部～底部	SU302	
176	422	遺構外	P45	古代	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(1.2)	灰色	白色砂粒	良好	ロクロ	ナデ	糸切り・付け高台・ナデ	10％	体部～底部	SU204	
176	423	１溝	Q41	平安末～中世？	灰釉陶器	碗？	—	(7.0)	(1.2)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ	糸切り・ナデ・付け高台	20％	体部～底部	SU367	
176	424	５号住居跡	T39･40	古代	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(1.1)	灰白色	密	良好			ナデ・付け高台	5％	底部	SU341	
176	425	遺構外	T43	古代	須恵器	蓋	—	—	(1.0)	灰色	密	良好	ロクロ	ロクロ		5％	体部～天井部	SU12	
176	426	遺構外	G46	古代	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	灰色	密	良好	ロクロ	ロクロ		5％	口縁部～体部	SU449	
176	427	８５号土坑	O41・42	古代	須恵器	甕	—	—	(13.0)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ		20％	胴部	SU398.399	
176	428	遺構外	W35	古代	須恵器	壺	—	—	(9.5)	灰白色	やや密	良好	ナデ・削り	ロクロ		10％	胴部	SU48	
177	429	遺構外	H47	古代	須恵器	壺	—	—	(3.8)	灰色	白色粒子・密	良好		ロクロ	糸切り・付け高台	10％	体部～底部	SU443	
177	430	５号住居跡	T39･40	古代	須恵器	壺	—	—	(5.0)	灰白色	やや密	良好	ナデ・削り		付け高台	10％	体部～底部	SU346	
177	431	遺構外	T44	古代	須恵器	壺？	—	(7.8)	(3.5)	灰白色	白色粒子	良好	縦ハケ・ナデ	ナデ	糸切り	5％	体部～底部	SU87	
177	432	遺構外	P44	古代	須恵器	壺	—	(18.6)	(4.1)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ	付け高台	5％	体部～底部	SU175	
177	433	遺構外	T44	古代	須恵器	壺？	—	(15.0)	(3.3)	灰色	赤色粒子・黒色粒子・石英	良好	タタキ	ナデ	ハケ？	5％	体部～底部	SU111	
177	434	遺構外	S43	古代	須恵器	甕	—	—	(2.1)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・密	良好	ナデ	ナデ		5％	口縁部	SU121	
177	435	遺構外	O44	古代	須恵器	甕	—	—	(1.7)	灰色	白色粒子・赤色粒子・密	良好	ナデ	ナデ		5％	口縁部	SU213	
177	436	遺構外	R45	古代	須恵器	甕	—	—	(2.0)	灰色	白色粒子・黒色粒子・やや密	良好	ナデ	ナデ		5％	口縁部	SU132	
177	437	遺構外	F46	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	—	—	(2.0)	灰色	白色粒子・黒色粒子・石英・密	良好	ナデ・自然釉	ナデ		5％	口縁部	SU409	
177	438	遺構外	R40	古代	須恵器	甕	—	—	(3.5)	灰白色	白色粒子	良好	ナデ	ナデ		5％	口縁部	SU223	
177	439	遺構外	P45	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	—	—	(3.9)	外面：にぶい黄褐色 内面：灰色	黒色粒子・密	良好	ナデ・自然釉・ス ス付着	ナデ		5％	口縁部	SU207	
177	440	遺構外	S44	古代	須恵器	長頸壺	—	—	(5.7)	灰色	長石・密	良好	ロクロ	ロクロ		5％	胴部	SU119	
177	441	２号住居跡	S44・T44	古代	須恵器	長頸壺	—	—	(5.4)	灰色	白色粒子・石英・小石を含む・密	良好	ロクロ	ロクロ		5％	胴部	SU102	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
177	442	遺構外	S42	古代	須恵器	甕	—	—	(3.7)	灰白色	白色粒子・黒色粒子	良好	ナデ	ナデ		5%	頸部	SU122	
177	443	遺構外	39 トレンチ	古代	須恵器	甕	—	—	(7.6)	灰色	密	良好	ロクロ	ロクロ		10%	胴部	H22 西カン 2 39T 一括	
177	444	7 号掘立柱建物跡	Q41	古代	須恵器	壺	—	—	(4.3)	灰色	白色粒子・密	良好	ナデ・タタキ	ナデ		5%	胴部	SU335	
177	445	8 号掘立柱建物跡	P41	古代	須恵器	甕	—	—	(6.2)	灰色	白色粒子・石英・密	良好	タタキ			5%	胴部	SU382	
177	446	遺構外	Q45	古代	須恵器	甕	—	—	(7.4)	灰色	白色粒子・密	良好	タタキ	工具による調整？		5%	胴部	SU138	
177	447	遺構外	T44	古代	須恵器	甕	—	—	(9.9)	灰色	白色粒子・密	良好	タタキ	タタキ		10%	胴部	SU94	
177	448	遺構外	P42	9 ～ 10 世紀	須恵器	凸帯付四耳壺	—	—	(4.8)	灰色	白色粒子・小石を含む	良好	ナデ・タタキ	ナデ		5%	胴部	SU391	信州塩尻産か？
177	449	遺構外	X35	平安末～中世？	灰釉陶器	坏	—	—	(2.0)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	自然釉		5%	口縁部	SU46	
177	450	遺構外	T44	平安末～中世？	灰釉陶器	坏	—	—	(2.1)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU35	
177	451	遺構外	W35	平安末～中世？	灰釉陶器	坏	—	—	(2.0)	灰白色	密	良好	ナデ	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU49	
177	452	遺構外	U42	平安末～中世？	灰釉陶器	坏	—	—	(2.1)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU43	
177	453	遺構外	S45	平安末～中世？	灰釉陶器	坏	—	—	(1.6)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	自然釉		5%	口縁部	SU297	
177	454	遺構外	S44	平安末～中世？	灰釉陶器	高台付杯	—	—	(6.6)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	自然釉	糸切り・ロクロ・削り・付け高台	5%	体部～底部	SU229	
177	455	遺構外	U43G	平安末～中世？	灰釉陶器	碗？	—	(6.4)	(2.3)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ	糸切り・ロクロ・付け高台・自然釉	10%	体部～底部	SU63	
177	456	遺構外	T42	平安末～中世？	灰釉陶器	高台付杯	—	(6.0)	(1.7)	灰黄色	密	良好	削り	ロクロ・自然釉	糸切り・ロクロ・削り・付け高台・自然釉	5%	体部～底部	SU30	
177	457	遺構外	U43	平安末～中世？	灰釉陶器	高台付杯	—	(6.4)	(1.8)	灰白色	密	良好	ロクロ・自然釉	ナデ（強い）・自然釉	糸切り・ナデ・付け高台	10%	体部～底部	SU65.39	
177	458	遺構外	P45	平安末～中世？	灰釉陶器	高台付杯	—	(7.0)	(1.9)	灰白色	密	良好	ケズリ	ロクロ・自然釉	糸切り・ナデ・付け高台	20%	体部～底部	SU165.170	
177	459	遺構外	T44	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	(17.0)	—	(1.2)	灰色	白色粒子・密	良好	自然釉	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU112	
177	460	7 号掘立柱建物跡	S39	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	(15.0)	—	(2.2)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ		5%	口縁部	SU221.334	
178	461	遺構外	K45	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	—	(1.2)	灰白色	黒色粒子・密	良好	自然釉	ロクロ		5%	口縁部	SU464	
178	462	遺構外	X35	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	—	(0.9)	灰黄色	黒色粒子・密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU47	
178	463	遺構外	O45	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	—	(1.2)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・密	良好	緑釉	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU370	
178	464	遺構外	Q45	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	—	(2.1)	灰白色	密	良好	ロクロ	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU294	
178	465	19 ピット	W36	平安	須恵器	壺	—	—	(2.3)	灰黄色	黒色粒子・密	良好	ロクロ	ロクロ		5%	口縁部	SU239	
178	466	12号掘立柱建物跡	P41	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	—	—	(2.2)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・石英・密	良好	ナデ・自然釉	ロクロ		5%	口縁部	SU368	
178	467	遺構外	O45	平安末～中世？	灰釉陶器	薬壺	—	—	(1.9)	灰白色	黒色粒子・密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ		5%	口縁部	SU373	

図	番号	遺　構	出土地点	時期	種別	器種	法量 cm（）内は推定			色　調	胎　土	焼　成	特　徴			残存率	部　位	注　記	備　考
							口径	底径	器高				外　面	内　面	底　部				
178	468	2号住居跡	S44・T44	平安末～中世？	灰釉陶器	長頸壺	—	—	(3.2)	灰白色	赤色粒子・白色粒子・やや密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ		5%	頸部	SU115	
178	469	遺構外	P45	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	—	—	(2.9)	灰白色	赤色粒子・白色粒子・小石・密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ・自然釉		5%	頸部	SU156	
178	470	遺構外	P45	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	—	(1.2)	灰白色	黒色粒子・白色粒子・赤色粒子	良好	自然釉	ロクロ		5%	頸部	SU210	
178	471	遺構外	P44	平安末～中世？	灰釉陶器	甕	—	—	(4.8)	灰色	黒色粒子・白色粒子・密	良好	ロクロ・自然釉	ロクロ		5%	胴部	SU188	
178	472	8号掘立柱建物跡	P41	平安末～中世？	灰釉陶器	長頸壺	—	—	(5.0)	灰白色	黒色粒子・密	良好	ロクロ・自然釉	自然釉		10%	頸部	SU383	
178	473	5号住居跡	T39･40	平安末～中世？	灰釉陶器	長頸壺	—	—	(4.5)	灰白色	白色粒子・赤色粒子・密	良好	ロクロ・緑釉？	ロクロ		5%	頸部	SU342	
178	474	遺構外	U44	平安末～中世？	灰釉陶器	瓶？	—	(19.1)	(3.5)	灰白色	黒色粒子・小石・砂粒	良好	ナデ・自然釉	自然釉	付け高台	5%	体部～底部	SU78	
178	475	5号住居跡	T39･40	平安	須恵器	壺	—	(6.6)	(3.0)	灰白色	密	良好	ロクロ	ナデ	ナデ・付け高台	10%	体部～底部	SU347	
178	476	遺構外	H76	平安末～中世？	灰釉陶器	壺	—	(4.4)	(1.8)	灰色	やや密	良好	ロクロ・自然釉	ナデ	ナデ・付け高台	10%	体部～底部	SU451	
178	477	遺構外	Q40	平安末～中世？	灰釉陶器	短頸壺	—	—	(2.5)	灰白色	白色粒子・黒色粒子・石英・密	良好	ロクロ	ロクロ・自然釉		5%	口縁部	SU325	
178	478	遺構外	R45	平安末～中世？	灰釉陶器	壺（水注？）	—	—	(5.0)	灰白色	黒色粒子・密	良好	ロクロ・削り・自然釉	ロクロ		10%	胴部	SU396	
178	479	遺構外	R40	近世	陶器	焙烙	(26.6)	(22.8)	(3.9)	灰黄褐色	白色粒子・砂粒子	良好	ハケ？	ロクロ・黒色付着物		5%	口縁部	ﾎｳﾛｸ 1	
178	480	遺構外	W37	古墳	手捏ね土器		2.0	2.8	2.4	明褐色	白色粒子・赤色粒子	良好	指頭痕あり	指頭痕あり		70%	口縁部～底部	4 土 P5	

第２３表　土製品観察表

図	番号	遺構	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	大きさcm（）内は推定				残存率	注記	備考
								最大長	最大幅	最大厚	孔径			
178	481	遺構外	T44	土錘	黒色	白色粒子・砂粒子	良好	(2.5)	(1.8)	(0.7)	0.6	20%	土製品 1	欠損品
178	482	遺構外	R41	土錘	褐色	白色粒子・赤色粒子・砂粒子	良好	4.5	2.1	(1.6)	0.4	85%	土製品 2	孔が貫通していない・欠損品
178	483	42 ピット	U39	土錘	黒色	白色粒子・砂粒子	良好	3.6	1.4	1.4	0.2	100%	ﾋﾟｯﾄ 42 土製品 1	

第２４表　鉄製品観察表

図	番号	遺構	出土地点	種別	器種	法量cm（）内は推定			注記	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
178	484	遺構外	U43	鉄製品	板状（クサビか？）	5.1	2.0	0.7	F-3	
178	485	遺構外	H47	鉄製品	釘	4.4	0.6	0.5	F-5	
178	486	遺構外	R41	鉄製品	棒状（釘か？）	3.7	0.7	0.4	F-4	
178	487	遺構外	U43	鉄製品	曲状（釘か？）	(3.6)	0.8	0.6	F-1	
178	488	遺構外	U43	鉄製品	釘	3.1	0.6	0.5	F-2	

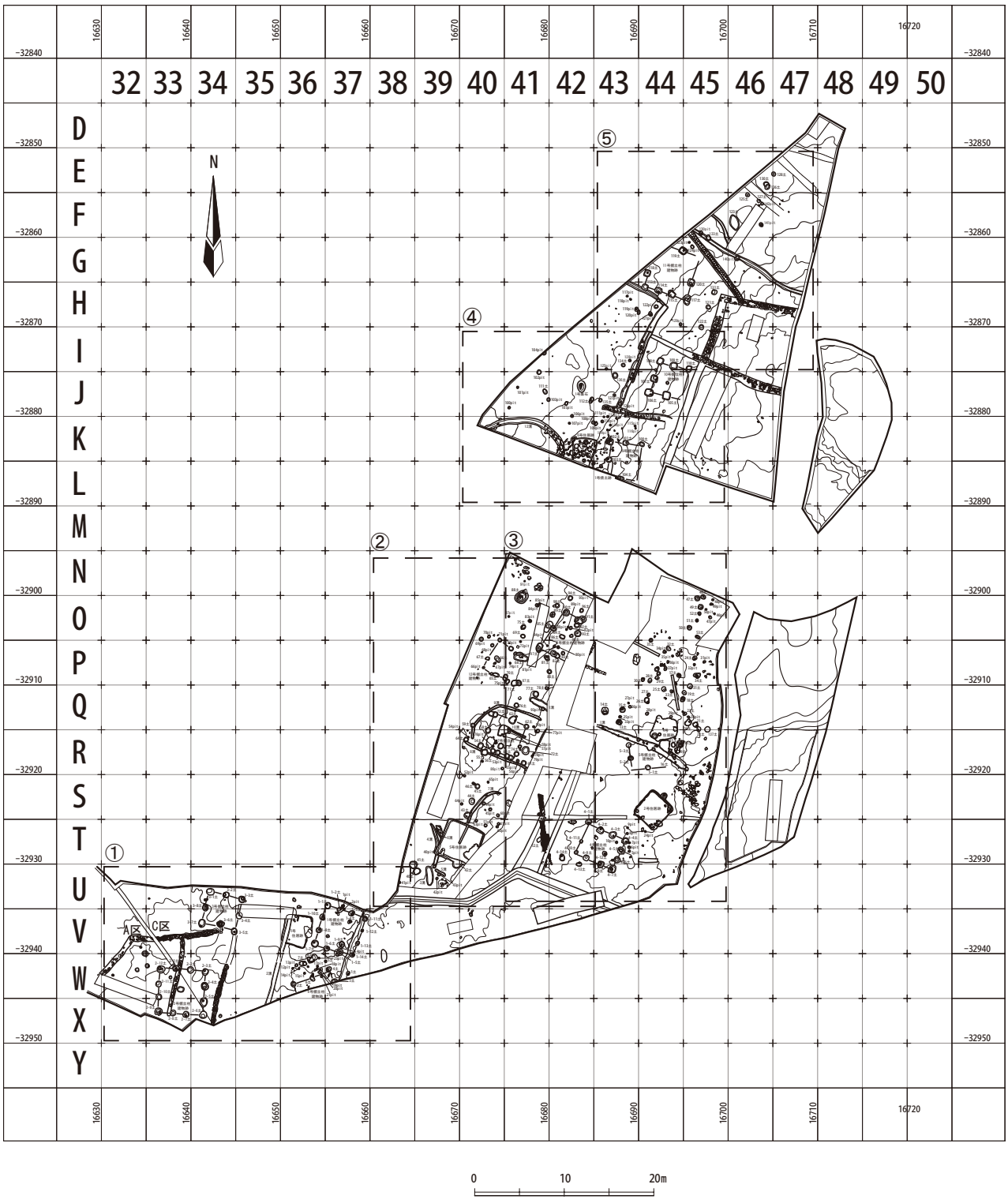
第２５表　銭貨計測表

図	番号	遺構	出土地点	銭種	初鋳年	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内縁外径 (mm)	内縁内径 (mm)	外縁厚 (mm)	重量 (g)	注記	備考
178	489	遺構外	P41	●元●寶または●●元寶		(24)	(20)	(9)	(6)	1	1.4	P41G 一括	
178	490	遺構外	－	熙寧元寶	1064 年（北宋銭）	24	17	9	6	1	3.1	7 ブロック調査区一括	
178	491	遺構外	U39	洪武通寶	1368 年（明銭）	24	19	9	6	1	2.4	No. 1	2011.7.12
178	492	遺構外	W36	元豊通寶	1078 年（北宋銭）	24	19	9	6	1	1.9	No. 2	2011.7.25
178	493	遺構外	R40	熙寧元寶	1064 年（北宋銭）	24	19	9	6	1	1.9	No. 3	2011.8.24

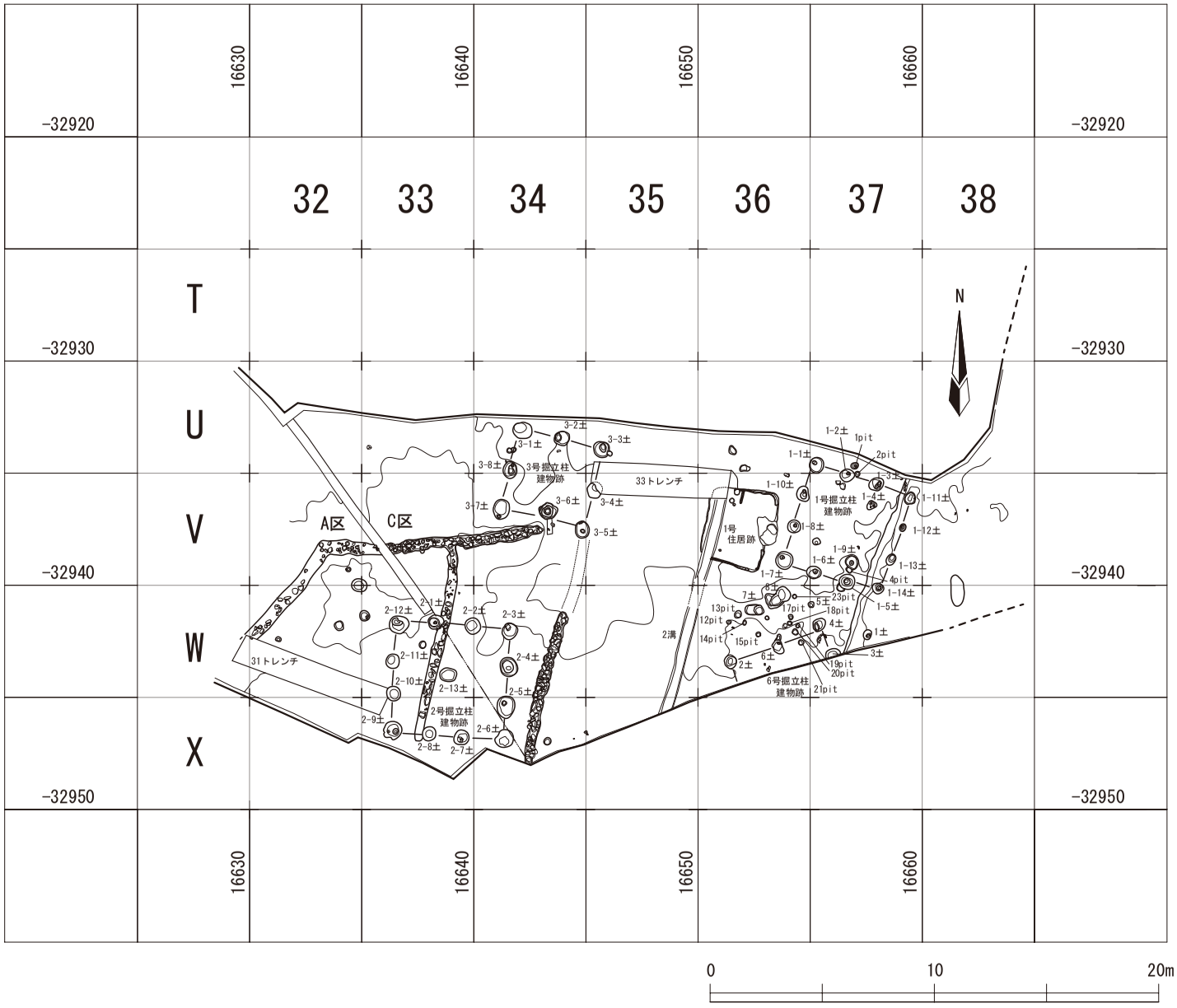
第26表　上コブケＣ区　　石器観察表

図	遺物No.	遺構	出土地点	器　　種	石　材	時　期	法量cm（）内は推定			重量（g）	注　記	備　　考
							最大長	最大幅	最大厚			
178	494	遺構外	W36	ナイフ形石器	黒曜石	旧石器時代	3.48	1.42	0.58	2.3	S-27	実測番号17
179	495	遺構外	S45	打製石斧	ホルンフェルス	縄文時代	9.9	5.1	1.3	73.0	S-31	実測番号11
179	496	遺構外	W35	打製石斧	ホルンフェルス	縄文時代	9.9	4.3	1.5	87.0	S-3	実測番号10
179	497	遺構外	P42	打製石斧	ホルンフェルス	縄文時代	11.9	6.3	1.1	95.0	S-42	実測番号12
179	498	遺構外	－	打製石斧	頁岩	縄文時代	11.4	6.1	2.0	143.0	S-53	実測番号13
179	499	遺構外	T42	打製石斧	頁岩	縄文時代	6.7	3.6	1.0	25.0	4掘立9土	実測番号4（石4）
179	500	遺構外	E47	打製石斧	頁岩	縄文時代	7.1	5.9	1.7	83.0	S-45	実測番号14
179	501	4掘立柱建物跡5号土坑	T43	磨石（砥石？）	花崗岩	縄文時代	14.3	10.6	7.0	1679.0	4掘立5土	石5
179	502	6号住居跡	K42	磨石	安山岩	縄文時代	12.6	8.8	5.1	899.0	6住S-1	石3
180	503	81号土坑	P41	磨石（砥石？）	花崗岩	縄文時代	12.8	10.1	4.8	914.0	81土S-1	石6
180	504	2号住居跡	S44	磨石？	安山岩	縄文時代	7.6	5.7	3.6	211.1	2住S-1	石1
180	505	2号住居跡	S44	磨石（砥石？）	安山岩	縄文時代	6.5	5.1	2.6	129.0	2住S-2	
180	506	遺構外	S40	両面調整体	黒曜石	縄文時代	3.9	1.8	1.1	6.0	S-37	実測番号18
180	507	遺構外	S44	石鏃未製品	黒曜石	縄文時代	2.1	2.0	0.5	1.5	S-10	実測番号15
180	508	遺構外	Q44	サイド・スクレイパー	黒曜石	縄文時代	1.8	0.9	0.4	0.4	S-15	実測番号16
180	509	9号土坑	R44	石鏃	黒曜石	縄文時代	1.4	1.4	0.4	0.3	9土一括	実測番号19
180	510	遺構外	T43	石鏃	黒曜石	縄文時代	1.8	1.4	0.2	0.2	S-1	実測番号7
180	511	遺構外	G45	石鏃	チャート	縄文時代	1.7	1.4	0.3	0.8	G-45G一括	実測番号9
180	512	遺構外	W35	石鏃	黒曜石	縄文時代	1.7	1.4	0.3	0.4	S-6	実測番号8

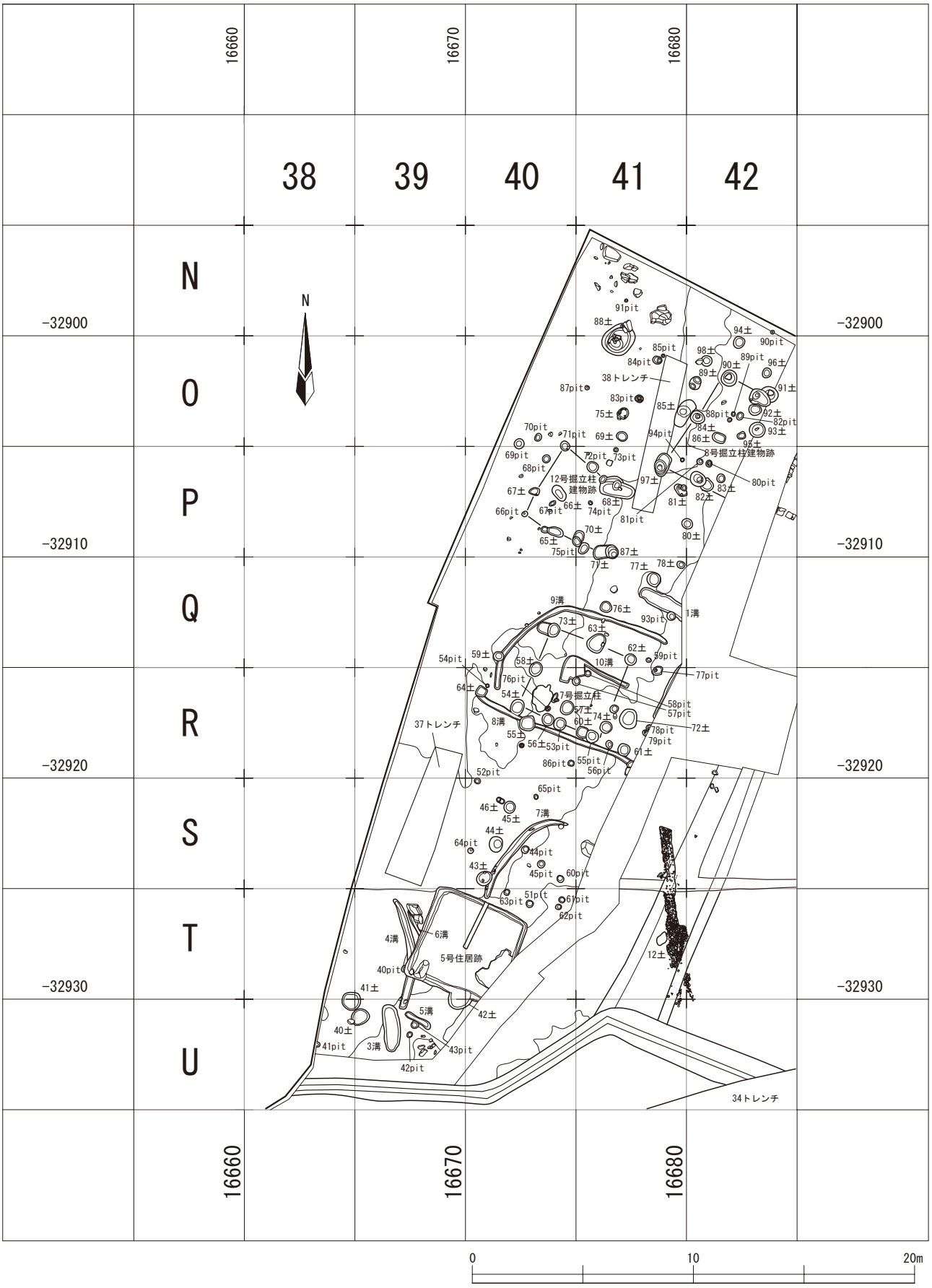
上コブケ遺跡C区全体図



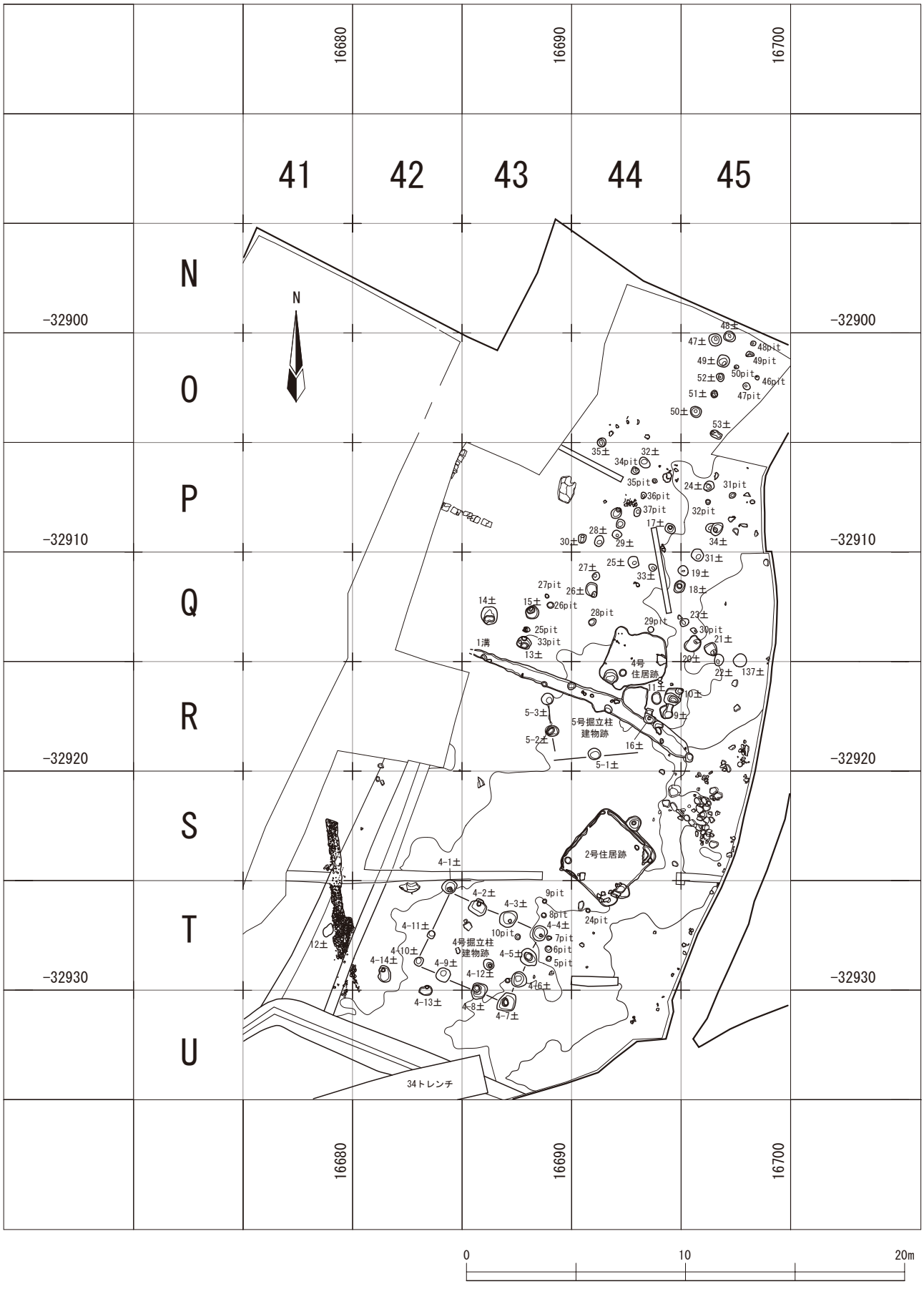
第127図　C区 全体図・グリッド配置図



第128図　C区 全体図①・グリッド配置図

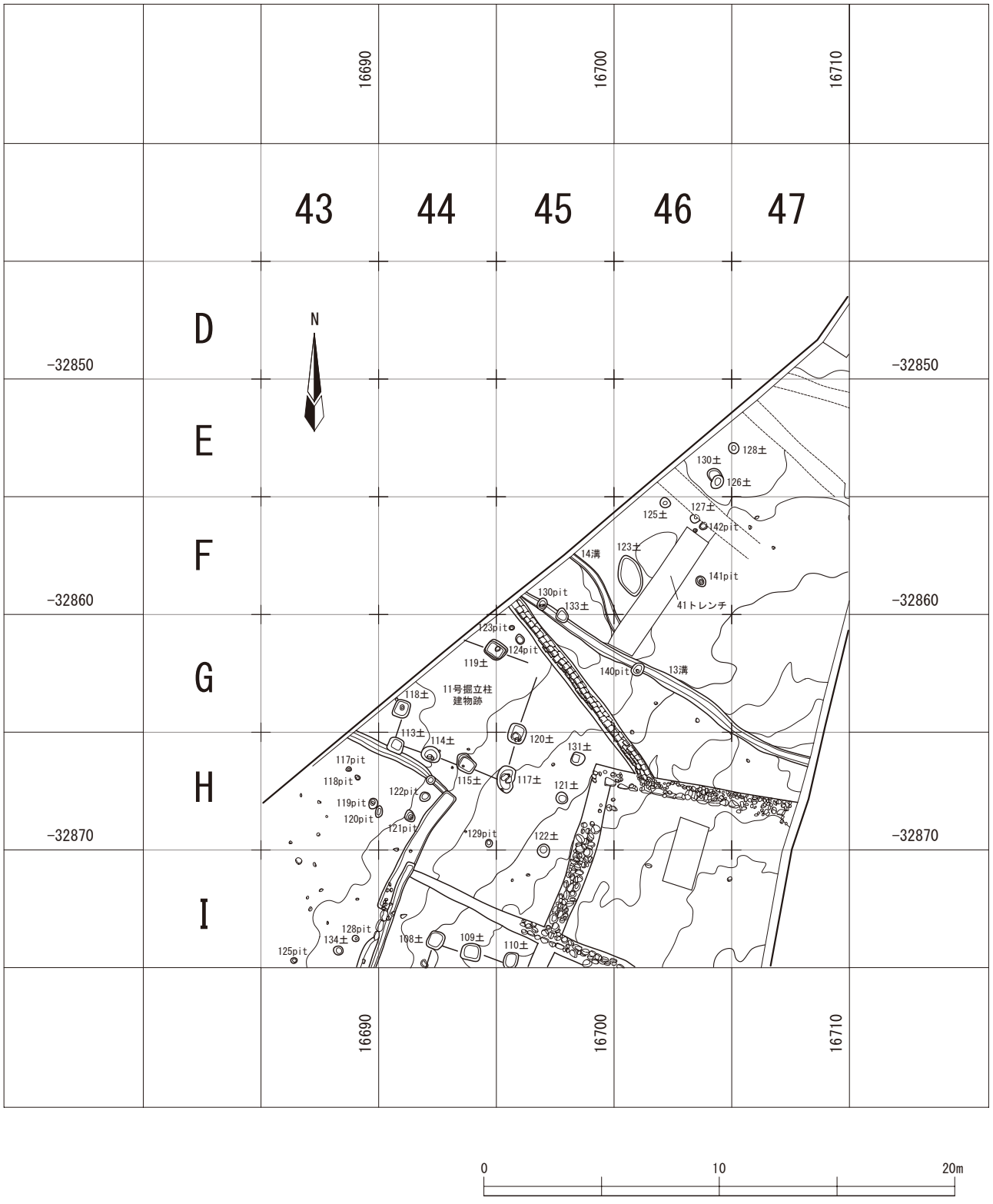


第129図　C区 全体図②・グリッド配置図

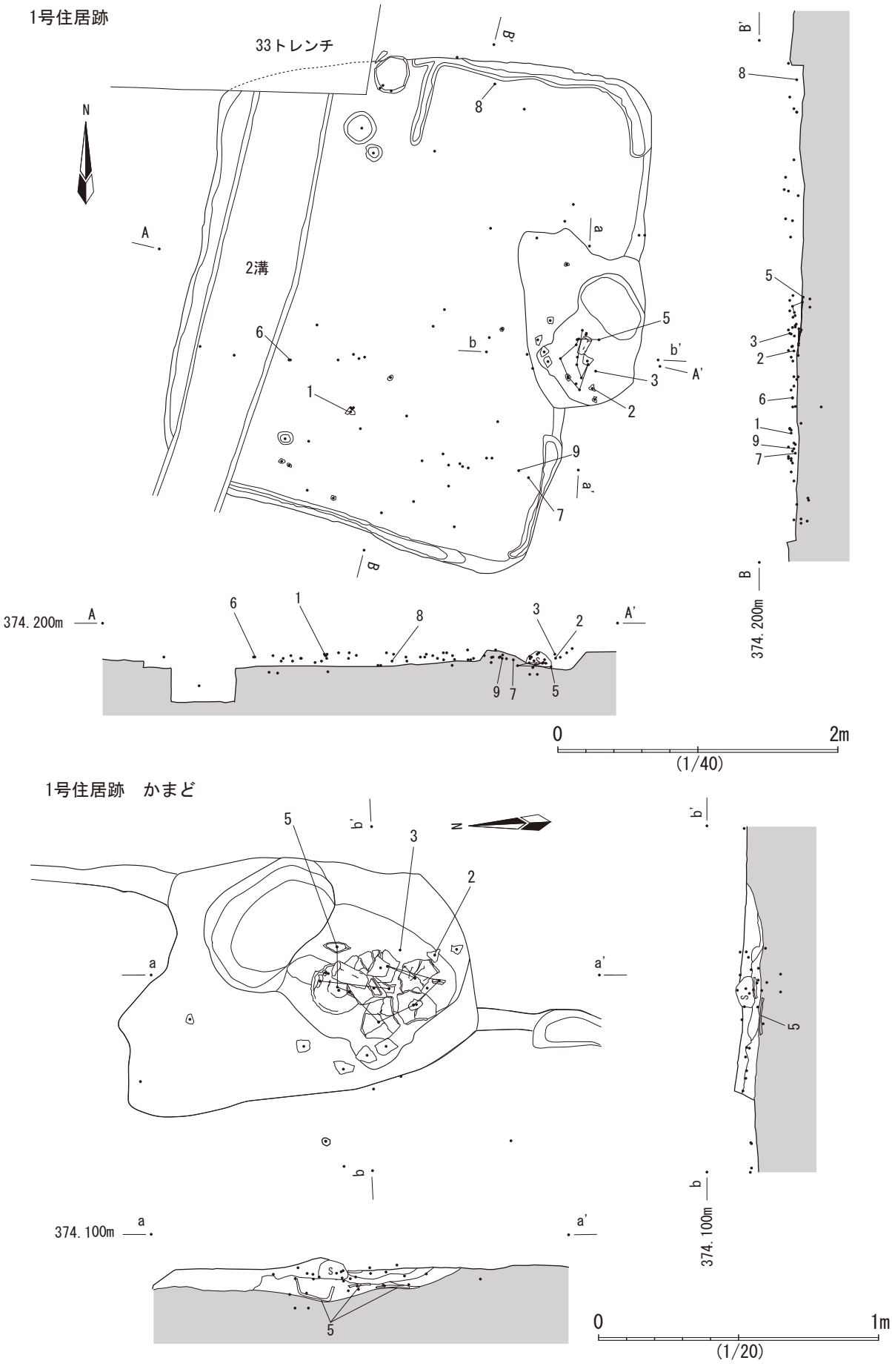


第１３０図　C区 全体図③・グリッド配置図

第131図　C区 全体図④・グリッド配置図

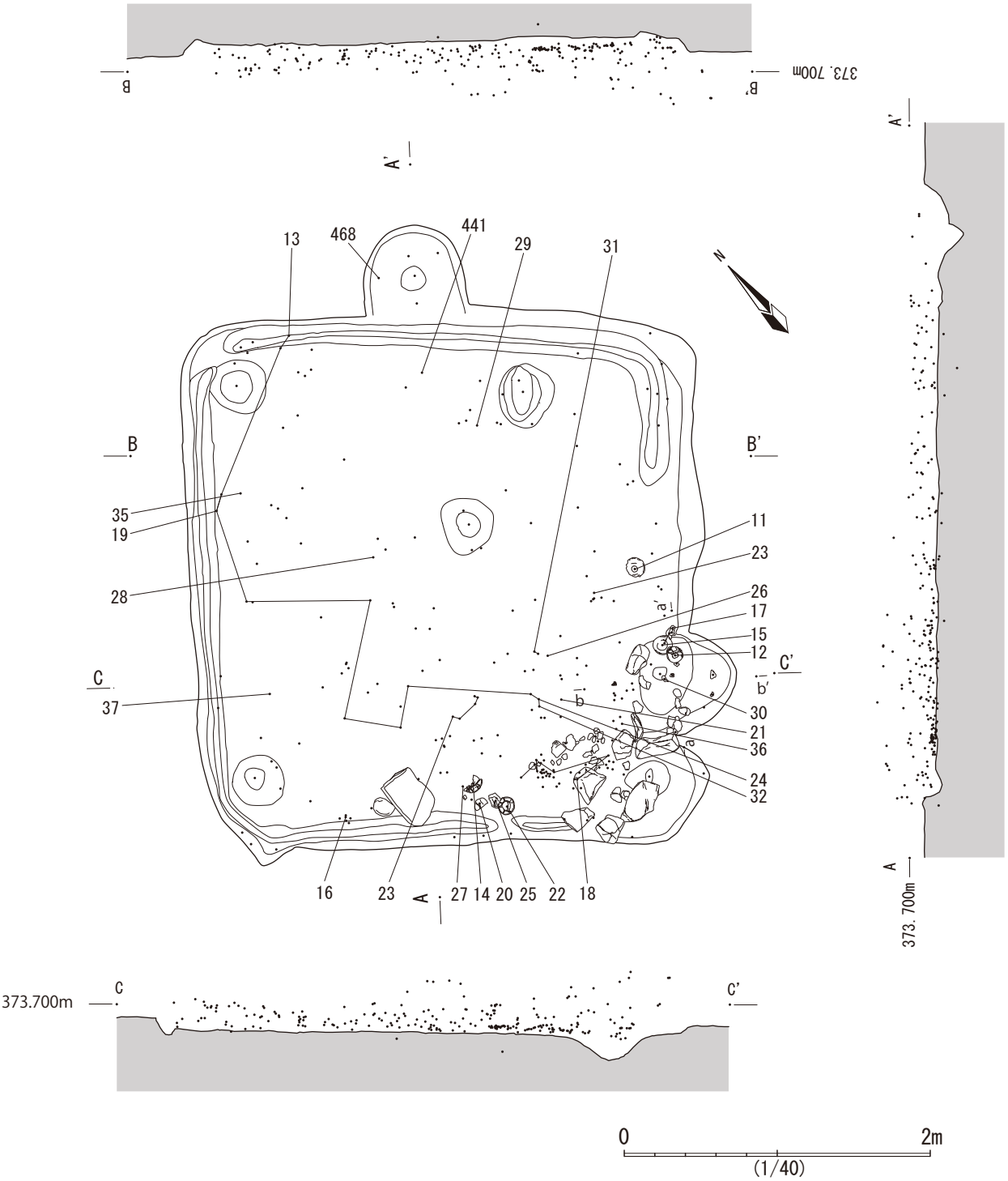


第132図　C区 全体図⑤・グリッド配置図

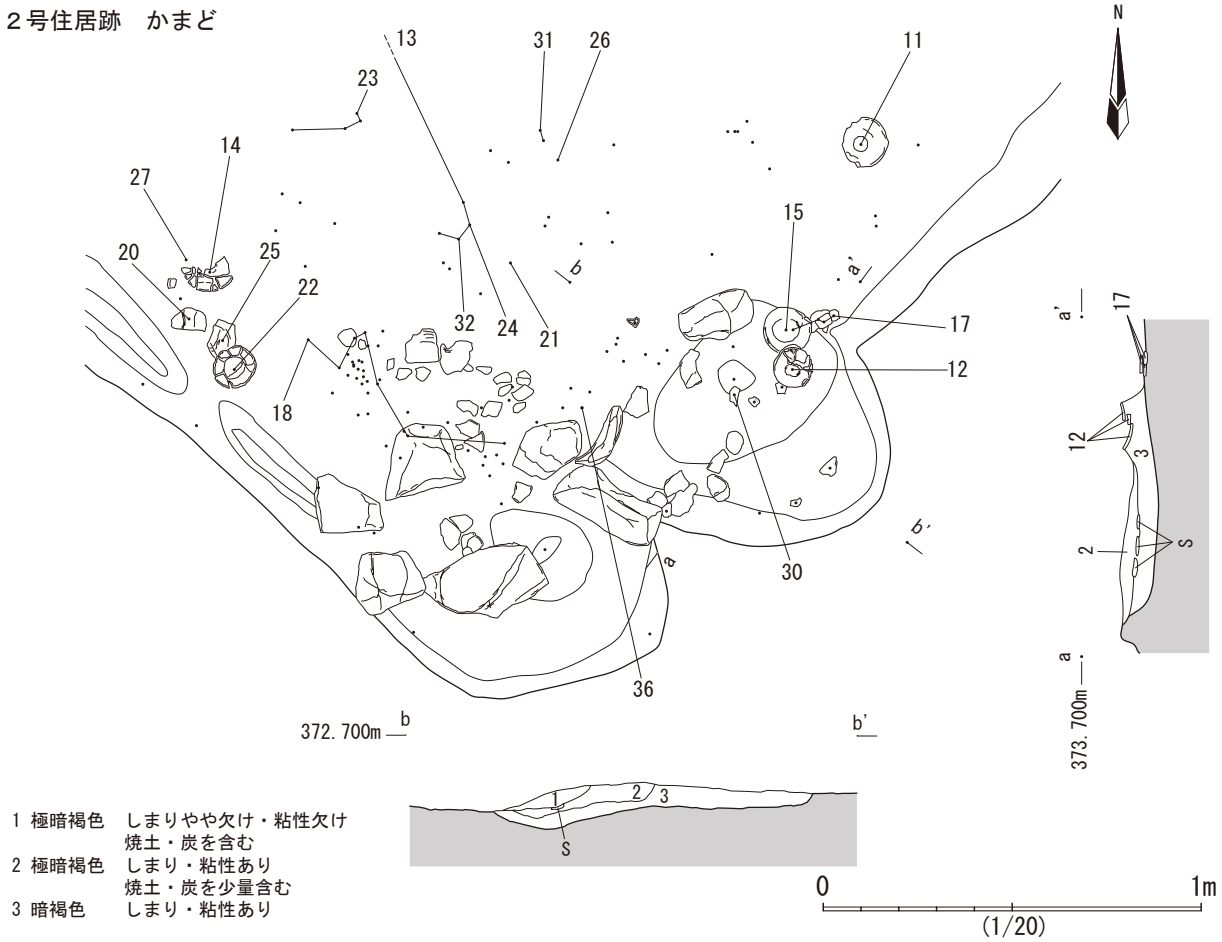


第133図　C区 1号住居跡

2号住居跡



第134図　C区 2号住居跡1

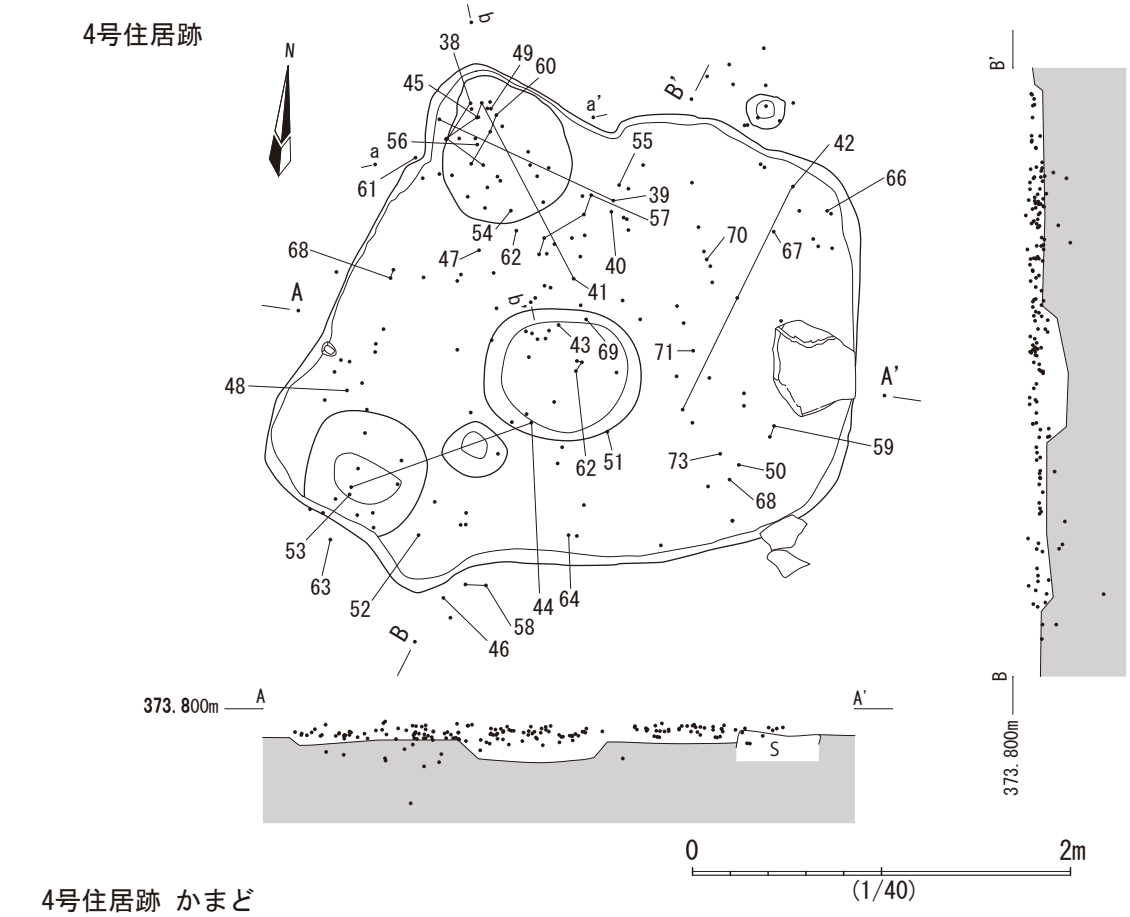


第１３５図　C区 2号住居跡2

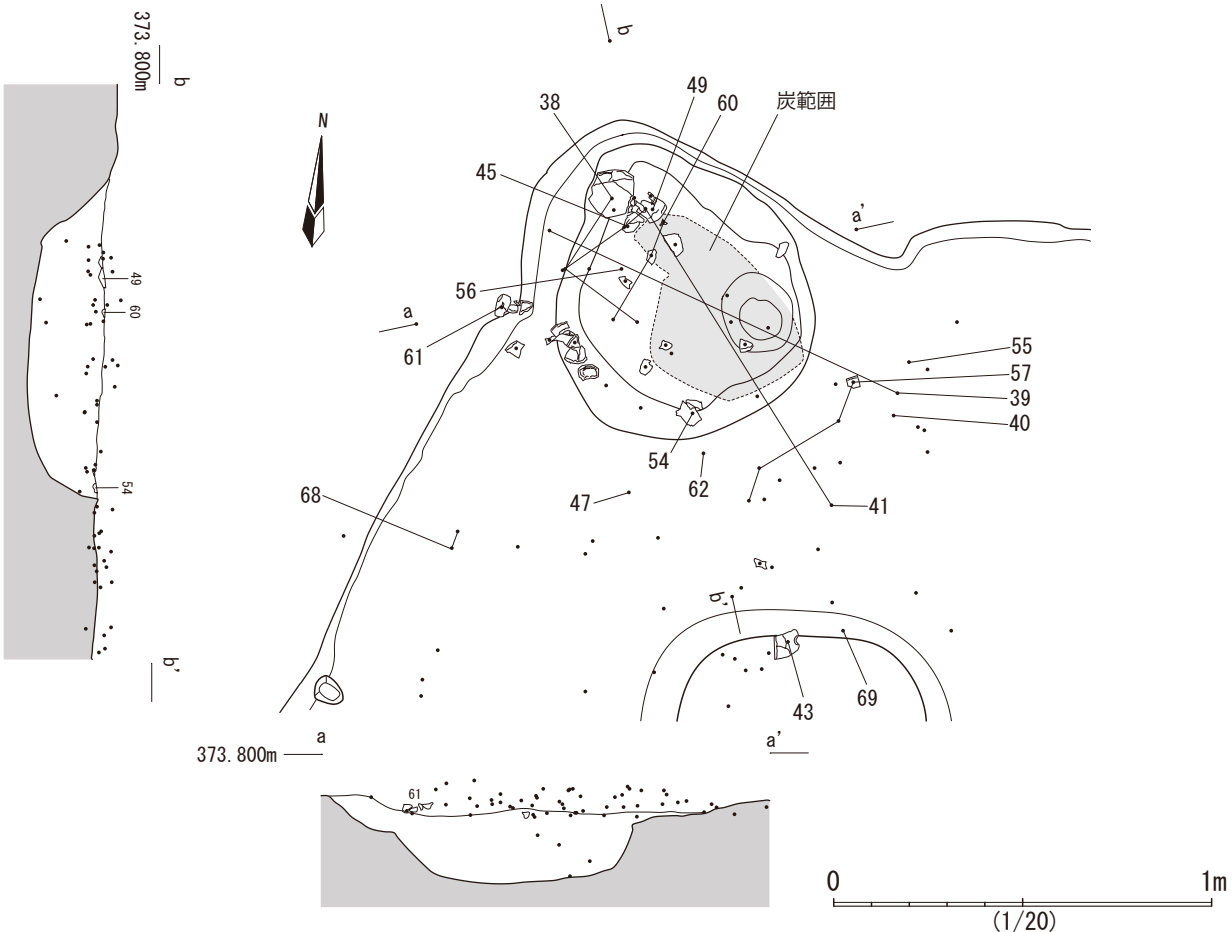
第27表 住居跡一覧

No.	図	位置	形状	主軸方位	カマド	帰属時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
1	133	V-36	隅方形	N－103° －E	東壁	Ⅶ期(9世紀初頭)	3.4	3.0	0.1	一部が2溝・試掘トレンチで失われている。
2	134 135	S-43・44、T44	隅方形	N－43° －E	南東壁南側	Ⅹ Ⅲ期(10世紀後半)	3.4	3.2	0.2	
3	－	－	－	―	－	－	－	－	－	欠番
4	136	Q-44、R-44	不定形	N－8° －W	北コーナー	Ⅹ Ⅱ期(10世紀中葉)	2.8	2.7	0.1	
5	137 138	S-39、T-39・40、U-39・40	隅方形	N－113° －E	東壁か？	Ⅹ期(9世紀後半)	4.4	4.4	0.2	南東側が調査区外となっている。
6	139	K-42・43、L-42	隅方形	―	不明(南東コーナーか？)	Ⅸ期(9世紀中葉)	(3.0)	2.6	0.2	南東コーナーに焼土あり。南側一部が調査区外となっている。

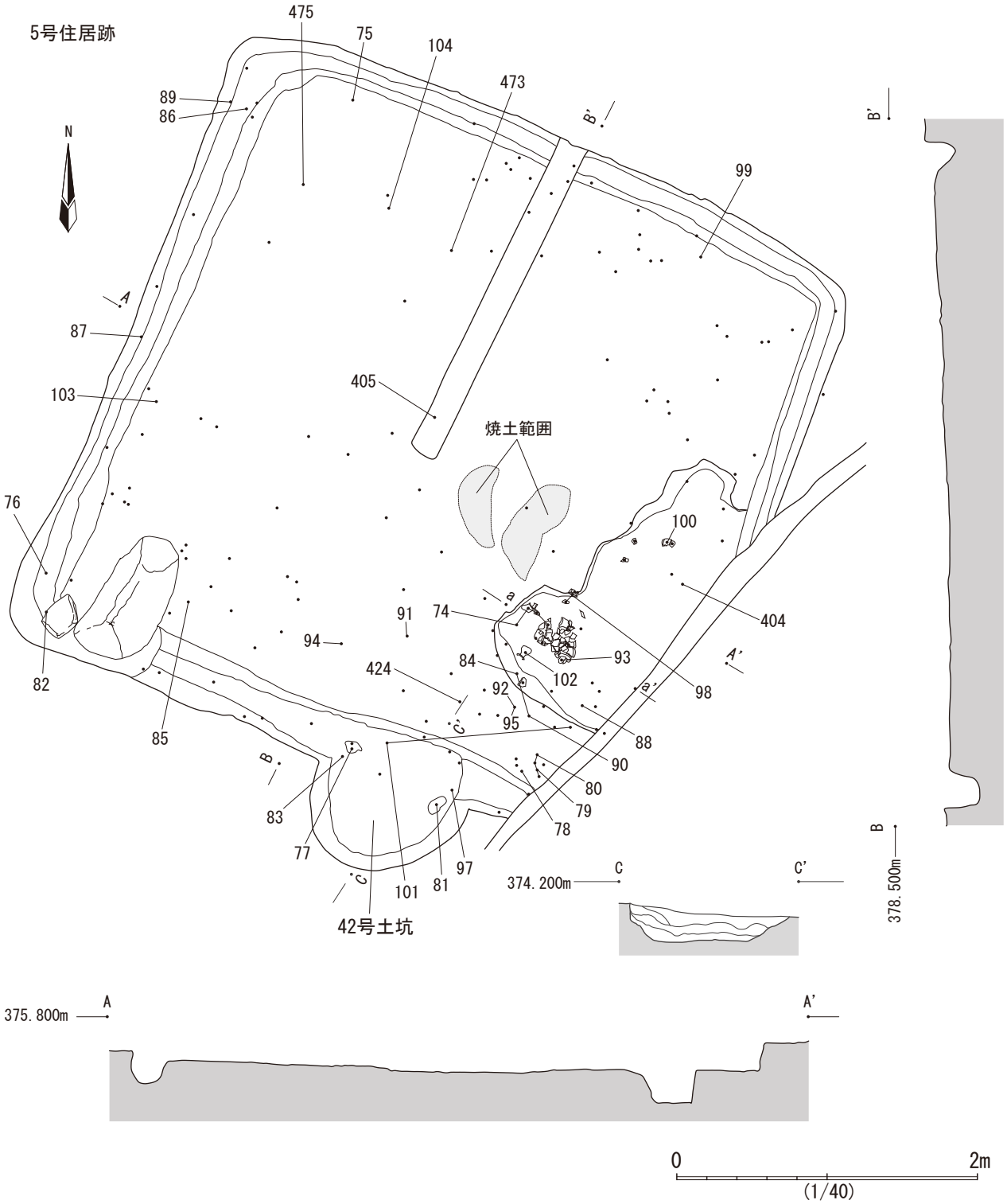
4号住居跡



4号住居跡 かまど

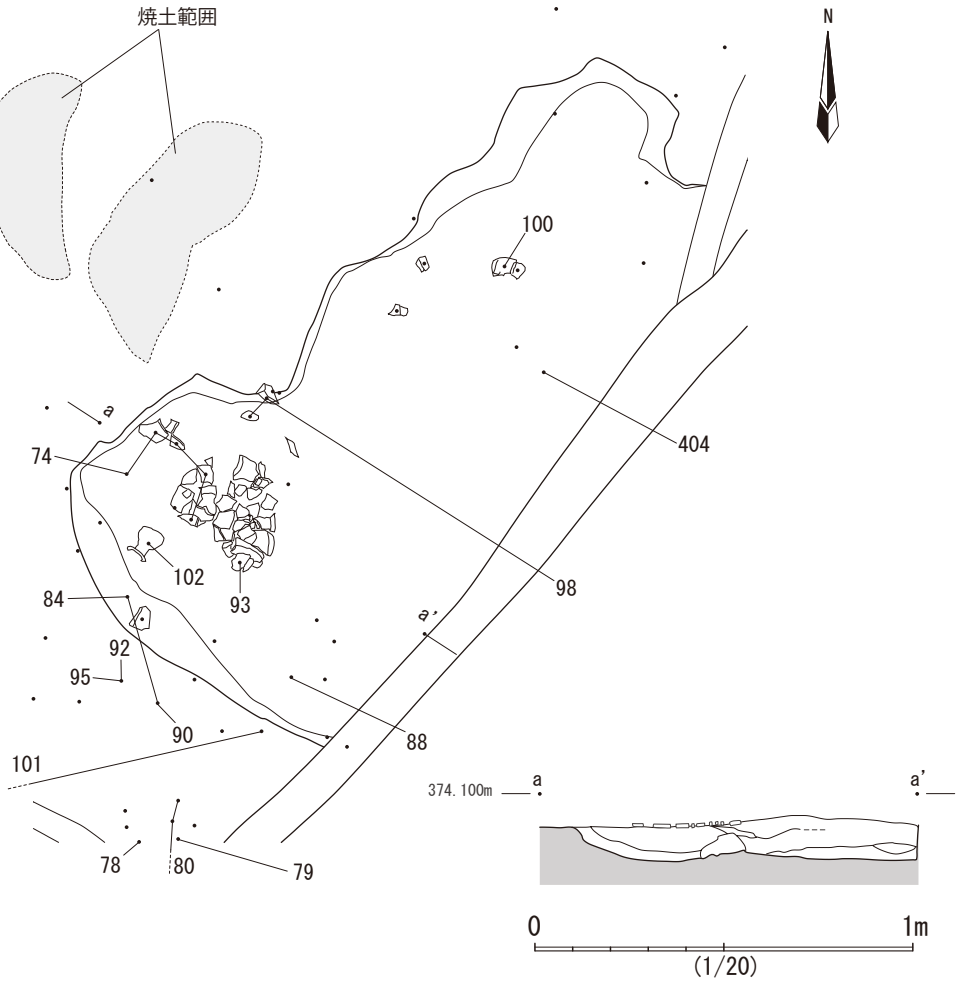


第136図　C区 4号住居跡



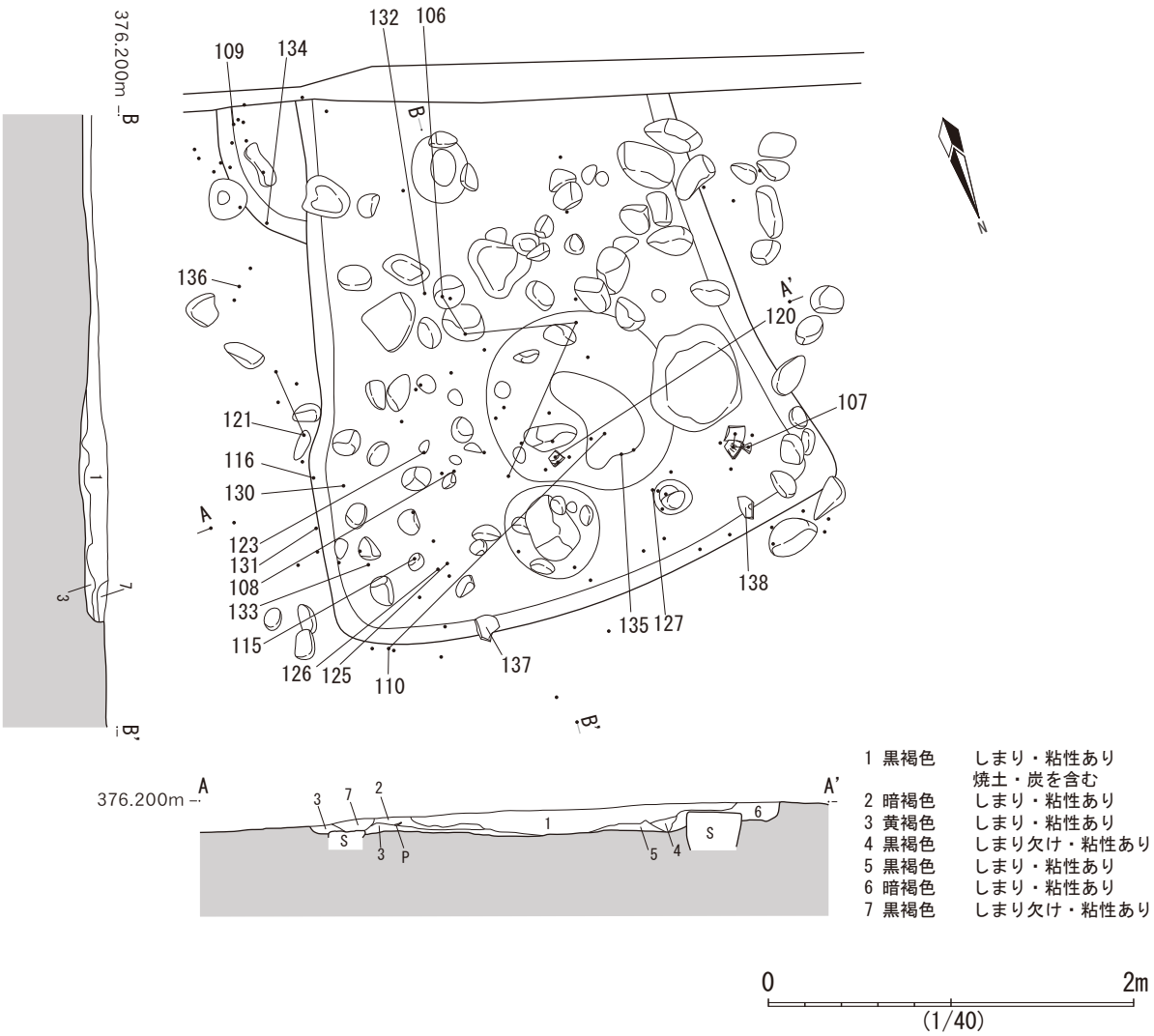
第137図　C区 5号住居跡1・42号土坑

5号住居跡 かまど



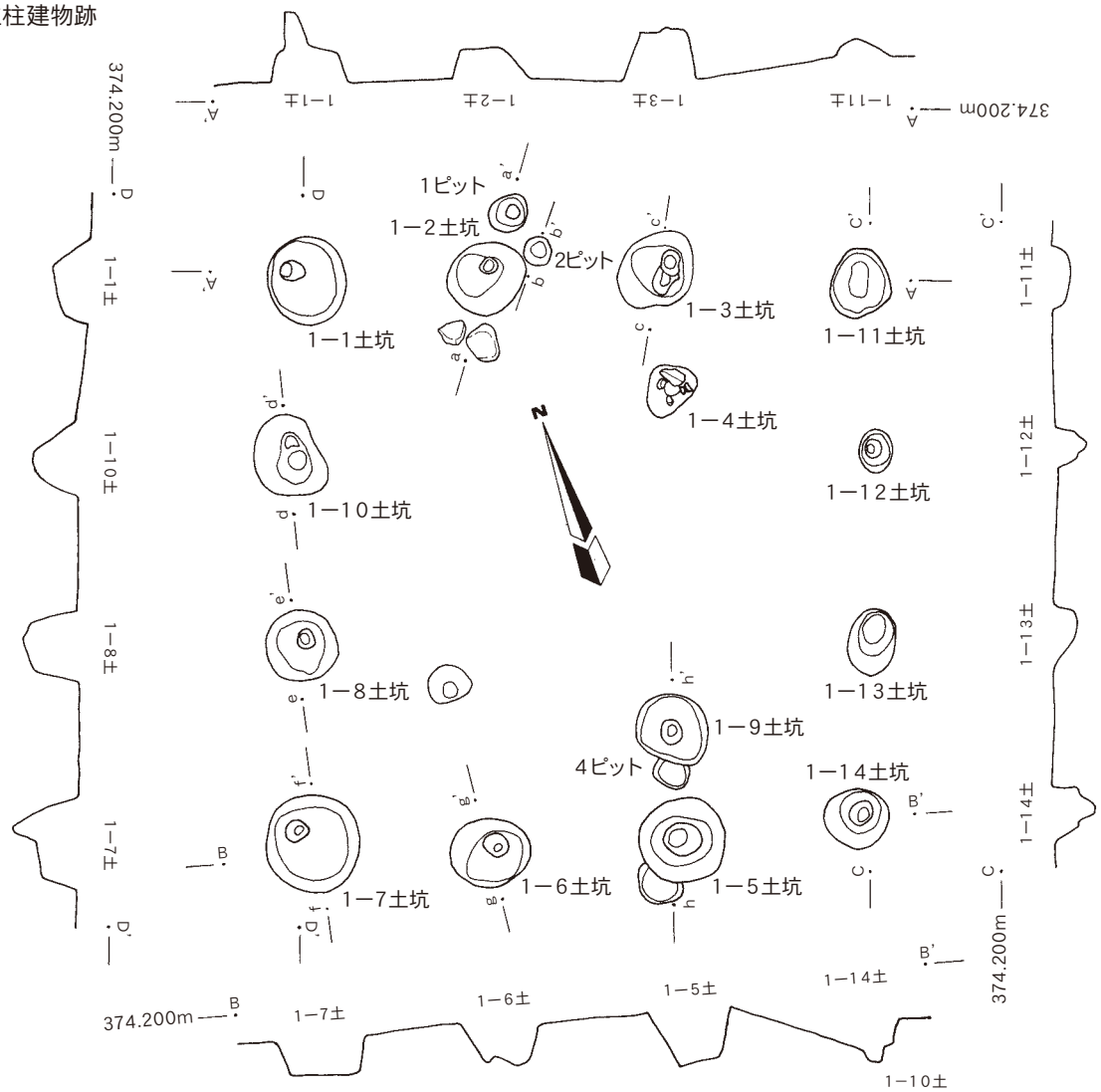
第138図　C区 5号住居跡2

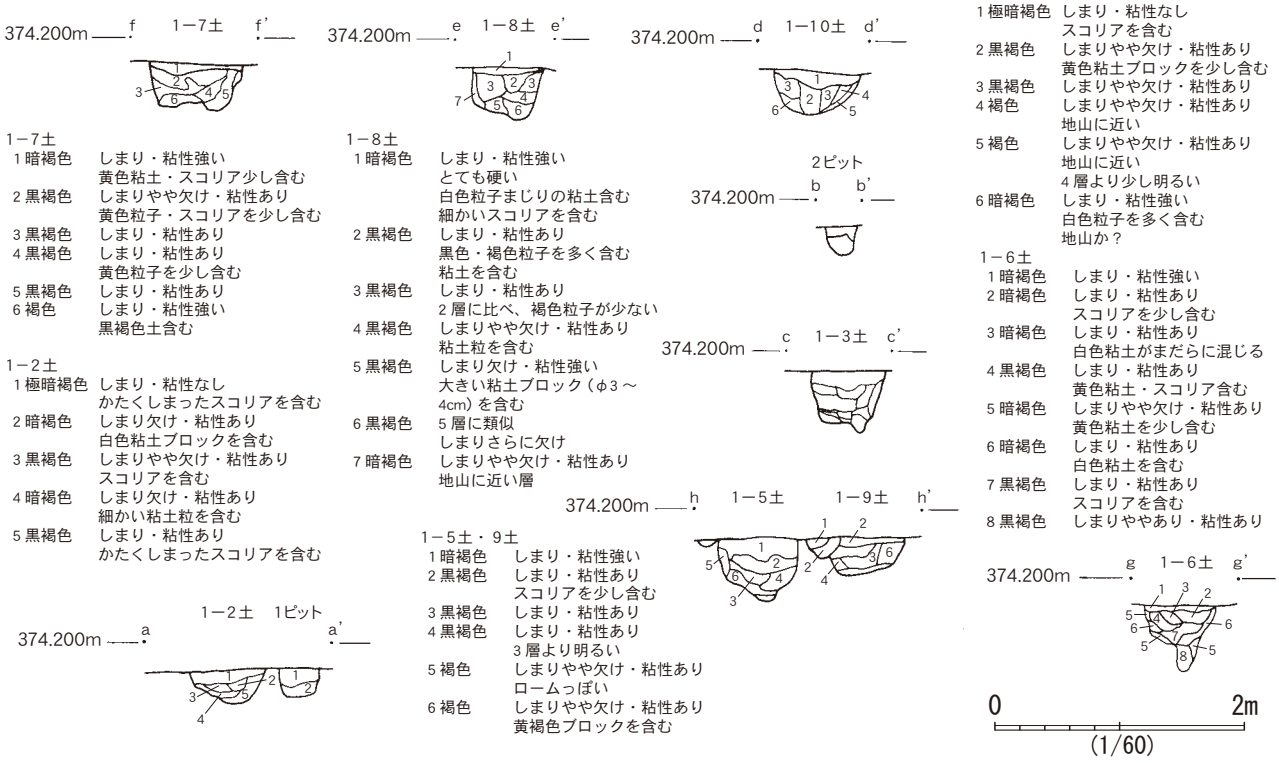
6号住居跡



第139図　C区 6号住居跡

1号堀立柱建物跡





1−7土
1 暗褐色　しまり・粘性強い　黄色粘土・スコリア少し含む
2 黒褐色　しまりやや欠け・粘性あり　黄色粒子・スコリアを少し含む
3 黒褐色　しまり・粘性あり
4 黒褐色　しまり・粘性あり　黄色粒子を少し含む
5 黒褐色　しまり・粘性あり
6 褐色　しまり・粘性強い　黒褐色土含む

1−8土
1 暗褐色　しまり・粘性強い　とても硬い　白色粒子まじりの粘土含む　細かいスコリアを含む
2 黒褐色　しまり・粘性あり　黒色・褐色粒子を多く含む　粘土を含む
3 黒褐色　しまり・粘性あり　2層に比べ、褐色粒子が少ない
4 黒褐色　しまりやや欠け・粘性あり　粘土粒を含む
5 黒褐色　しまり欠け・粘性強い　大きい粘土ブロック（φ3〜4cm）を含む
6 黒褐色　5層に類似　しまりさらに欠け
7 暗褐色　しまりやや欠け・粘性あり　地山に近い層

1−10土
1 極暗褐色　しまり・粘性なし　スコリアを含む
2 黒褐色　しまりやや欠け・粘性あり　黄色粘土ブロックを少し含む
3 黒褐色　しまりやや欠け・粘性あり
4 褐色　しまりやや欠け・粘性あり　地山に近い
5 褐色　しまりやや欠け・粘性あり　地山に近い　4層より少し明るい
6 暗褐色　しまり・粘性強い　白色粒子を多く含む　地山か？

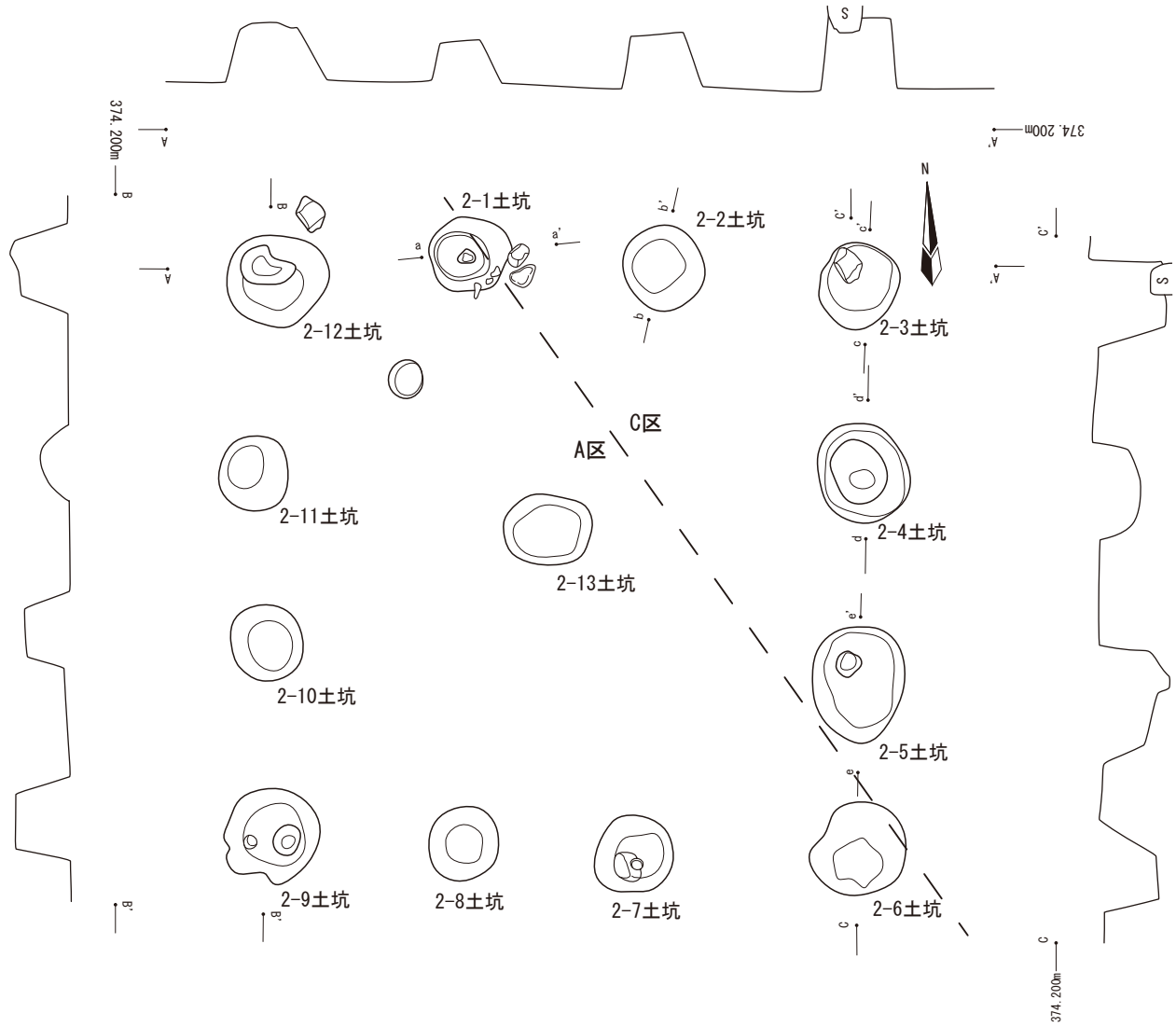
1−2土
1 極暗褐色　しまり・粘性なし　かたくしまったスコリアを含む
2 暗褐色　しまり欠け・粘性あり　白色粘土ブロックを含む
3 黒褐色　しまりやや欠け・粘性あり　スコリアを含む
4 暗褐色　しまり欠け・粘性あり　細かい粘土粒を含む
5 黒褐色　しまり・粘性あり　かたくしまったスコリアを含む

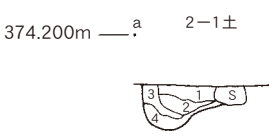
1−5土・9土
1 暗褐色　しまり・粘性強い
2 黒褐色　しまり・粘性あり　スコリアを少し含む
3 黒褐色　しまり・粘性あり
4 黒褐色　しまり・粘性あり　3層より明るい
5 褐色　しまりやや欠け・粘性あり　ロームっぽい
6 褐色　しまりやや欠け・粘性あり　黄褐色ブロックを含む

1−6土
1 暗褐色　しまり・粘性強い
2 暗褐色　しまり・粘性あり　スコリアを少し含む
3 暗褐色　しまり・粘性あり　白色粘土がまだらに混じる
4 黒褐色　しまり・粘性あり　黄色粘土・スコリア含む
5 暗褐色　しまりやや欠け・粘性あり　黄色粘土を少し含む
6 暗褐色　しまり・粘性あり　白色粘土を含む
7 黒褐色　しまり・粘性あり　スコリアを含む
8 黒褐色　しまりややあり・粘性あり

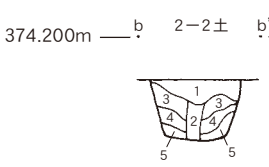
第140図　C区 1号堀立柱建物跡

2号掘立柱建物跡

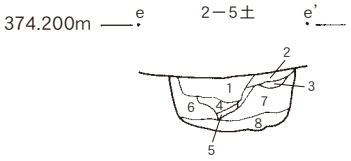




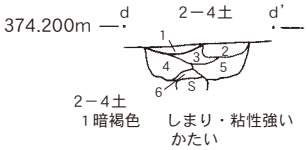
2−1土
1 暗褐色　しまり強い・粘性あり
2 黒褐色　しまりあり・粘性強い
3 褐色　しまりややあり・粘性あり
黄褐色粘土ブロックを含む
4 褐色　しまり欠け・粘性強い
白色粘土・黒色スコリアを含む



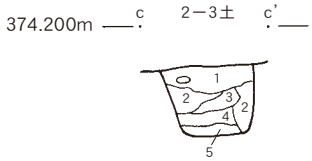
2−2土
1 暗褐色　しまりややあり・粘性あり
黄色ブロック（φ7 ～ 8mm）を含む
2 黒褐色
3 黒褐色　しまり・粘性あり
炭化材を含む
4よりやわらかい
4 黒褐色　しまり・粘性あり
3より硬い
5 黒褐色　しまり・粘性あり
4より硬い



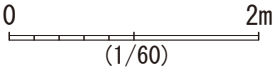
2−5土
1 暗褐色　しまり・粘性強い
白色粘土ブロック・炭を少し含む
2 暗褐色　しまり・粘性強い
かたい
スコリアを含む
3 黒褐色　しまり・粘性あり
白色粘土ブロックを多く含む
4 褐色　しまり欠け・粘性あり
炭化材を少し含む
5 褐色　しまり欠け・粘性あり
黄褐色粒子を多く含む
6 暗褐色　しまり欠け・粘性あり
粘土ブロックを少し含む
7 黒褐色　しまり・粘性あり
炭化材を含む
粘土ブロックを少し含む
8 黒褐色　しまり・粘性強い
粘土ブロックを多く含む
地山との混土



2−4土
1 暗褐色　しまり・粘性強い
かたい
スコリアを含む
2 黒褐色　しまり・粘性あり
炭化材を含む
粘土ブロックを少し含む
3 褐色　しまり欠け・粘性あり
炭化材を少し含む
4 暗褐色　しまり欠け・粘性あり
粘土ブロックを少し含む
5 黒褐色　しまり・粘性強い
粘土ブロックを多く含む
地山との混土
6 黒褐色　しまり欠け・粘性あり
黄褐色粒子を少し含む

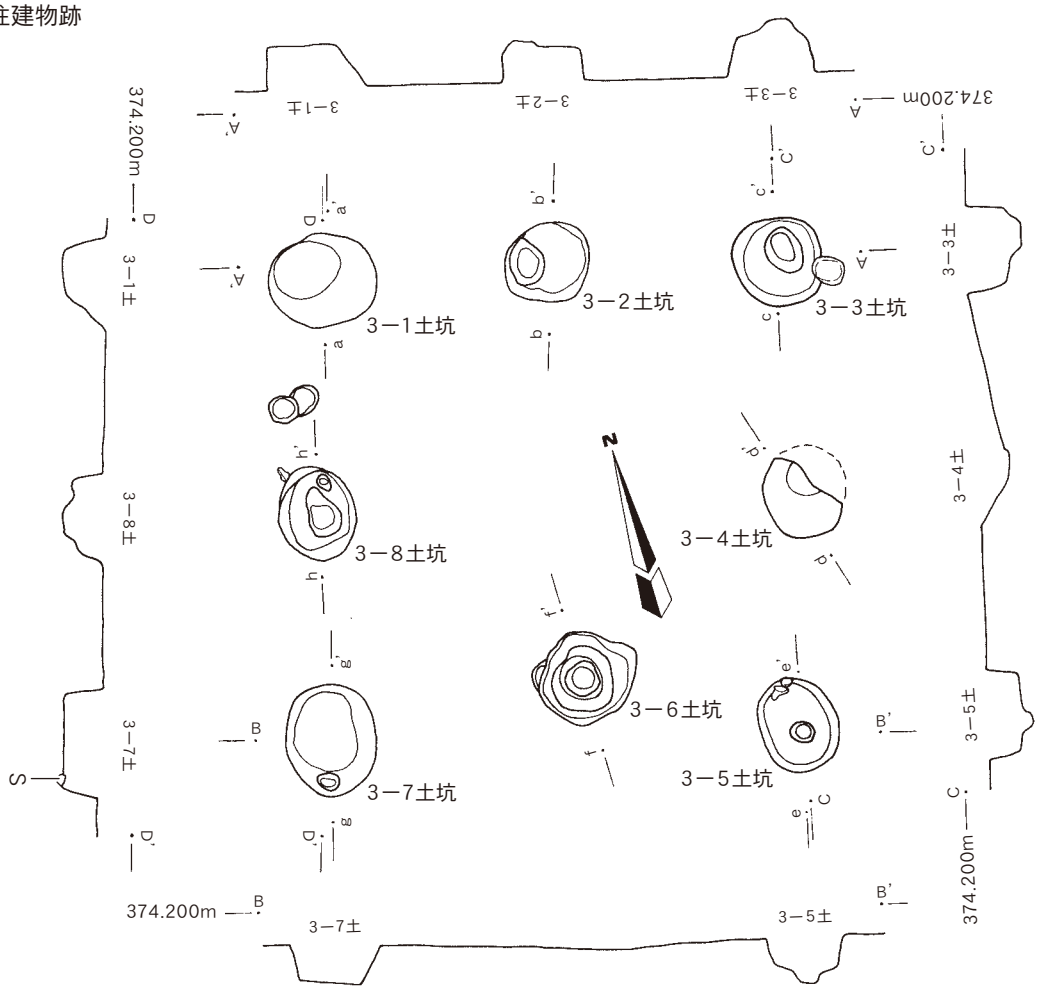


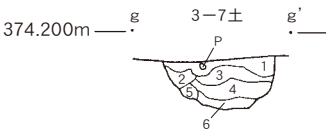
2−3土
1 暗褐色　しまりややあり・粘性あり
黄色ブロック（φ7 ～ 8mm）を含む
2 黒褐色　しまり・粘性あり
3 黒褐色
4 黒褐色　しまり・粘性あり
5 黒褐色　しまり強い・粘性あり



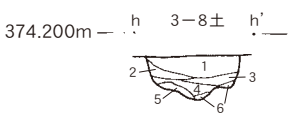
第141図　C区 2号堀立柱建物跡

3号堀立柱建物跡

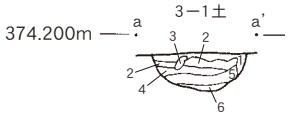




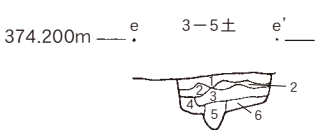
3−7土
1 黒褐色　しまりやや欠け・粘性なし　黄褐色粘土を部分的に含む
2 黄褐色　しまり欠け・粘性あり　黒褐色土との混土層
3 黄灰褐色　しまりやや欠け・粘性あり
4 暗褐色　しまり強く・粘性あり　とてもかたい層　黒褐色土（φ2cm 程のブロック状）と粘土の混土層
5 黄灰褐色　しまりあり・粘性強い　3 層に似ている
6 黄褐色　しまり・粘性あり　白色粘土を少量含む



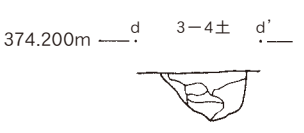
3−8土
1 極暗褐色　しまり強く・粘性ややあり　炭化材を含む　黄褐色粒子を少量含む
2 黒褐色　しまり・粘性あり　炭化材を微量に含む
3 黒褐色　しまりややあり・粘性あり　黄褐色土をブロック状に含む
4 黒褐色　しまり欠け・粘性あり　水分が多く、ジクジクする
5 黒褐色　しまり欠け・粘性あり　黄褐色粒子を少量含む
6 褐色　しまり・粘性強い　地山

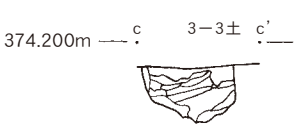


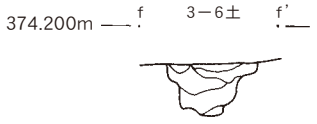
3−1土
1 極暗褐色　しまり強く・粘性ややあり　炭化材を含む　黄褐色粒子を少量含む
2 褐色　しまり強く・粘性あり　1 層に近い極暗褐色土をブロック状に含む　粘性の褐色土をブロック状に含む
3 褐色　しまり・粘性あり　粘質土をブロック状に含む
4 黒褐色　しまり・粘性あり　炭化材を微量に含む
5 黒褐色　しまり・粘性あり　黄褐色粒子を少量含む
6 褐色　しまり・粘性強い　下層より水が湧いてくる　地山

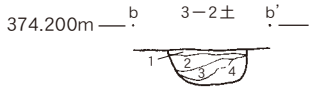


3−5土
1 暗褐色　しまり強い・粘性あり　スコリアを含む
2 黒褐色　しまり・粘性あり　白色粘土ブロックを含む
3 黒褐色　しまり・粘性あり　粘土ブロックは含まない
4 黒褐色　しまり・粘性あり
5 黒褐色　しまり欠け・粘性あり

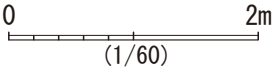






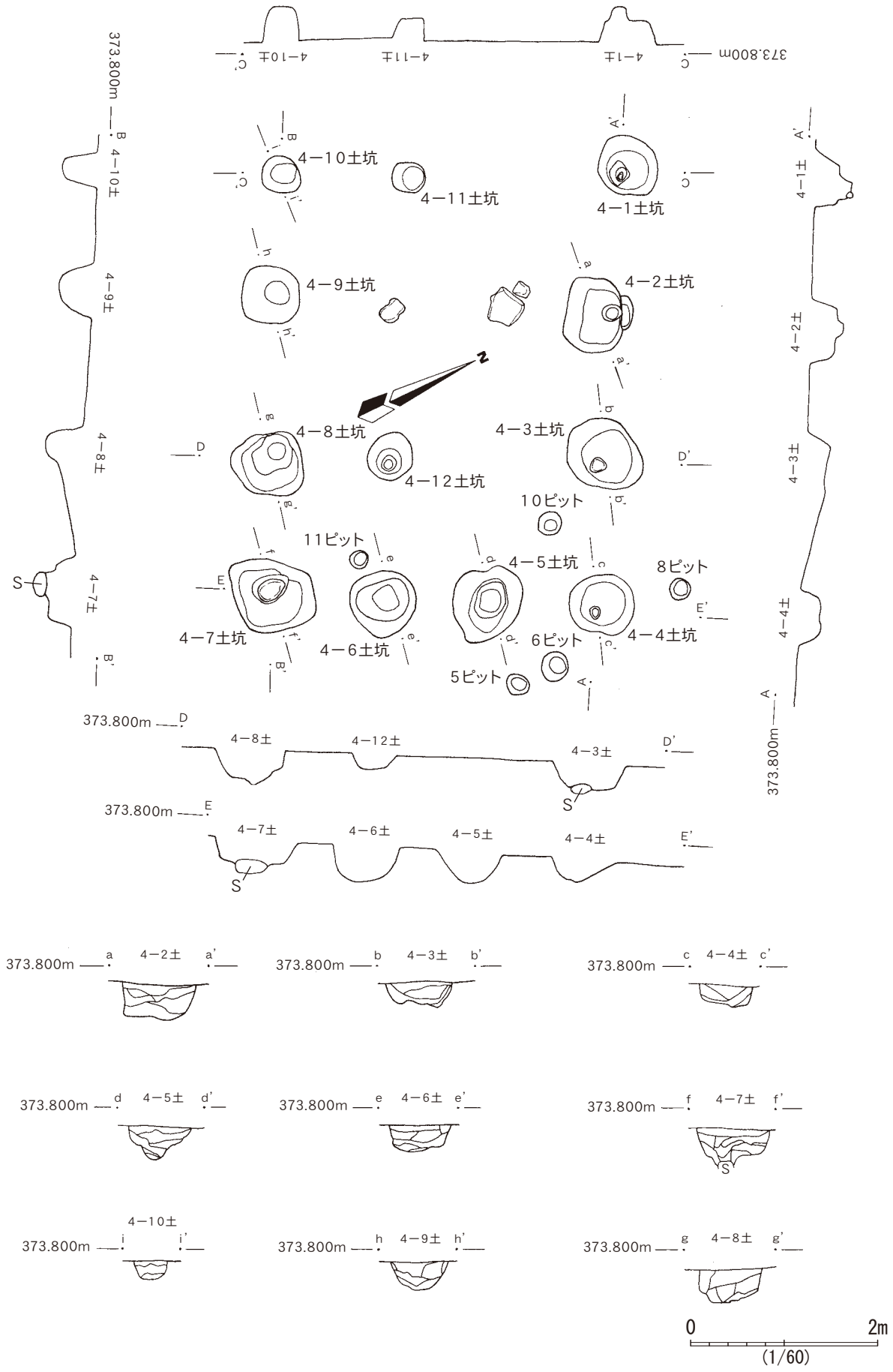


3−2土
1 暗褐色　しまり強い・粘性あり
2 黒褐色　しまり・粘性あり
3 黒褐色　しまり・粘性あり
4 暗褐色　しまり欠け・粘性強い



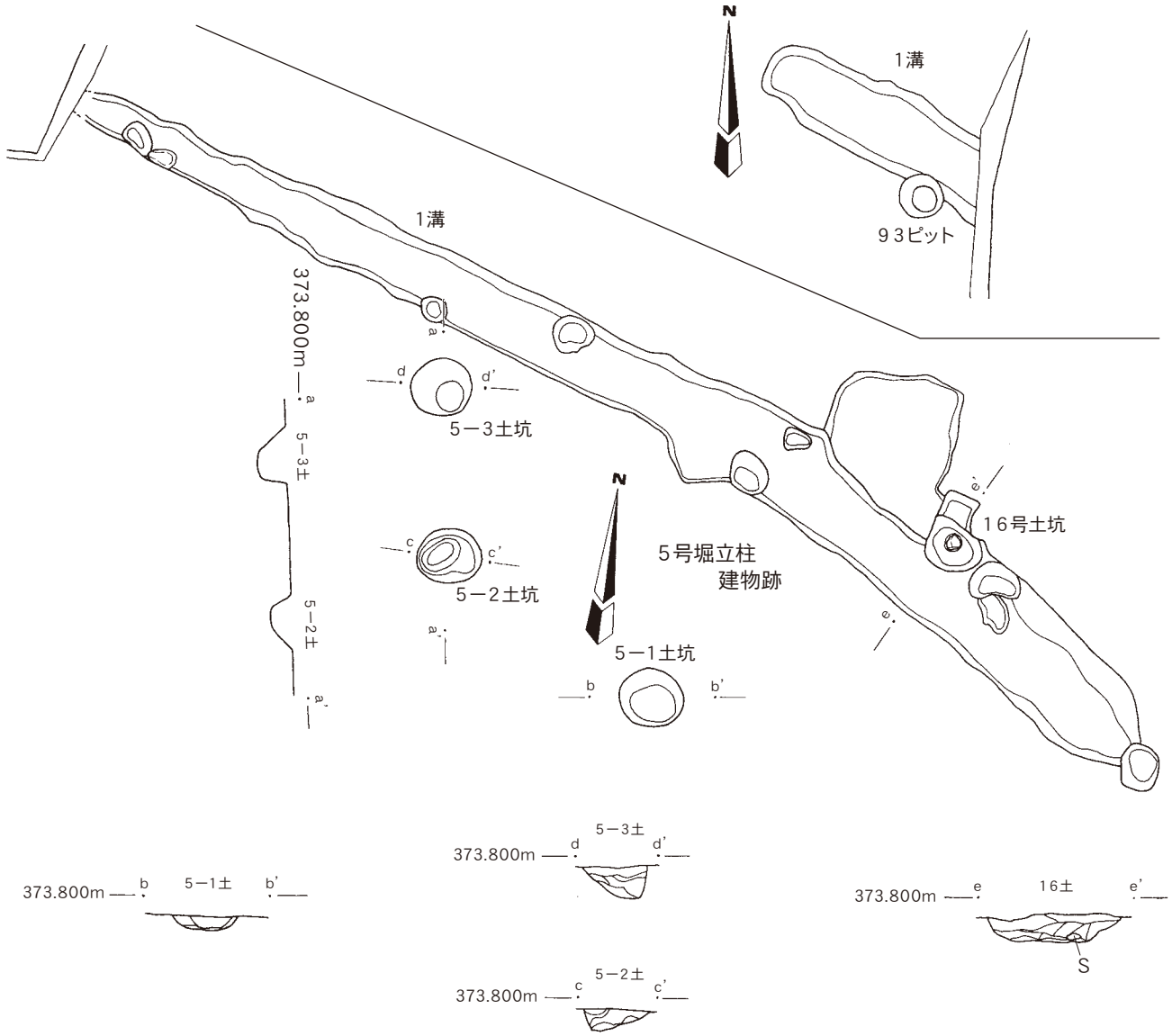
第142図　C区 3号堀立柱建物跡

4号堀立柱建物跡

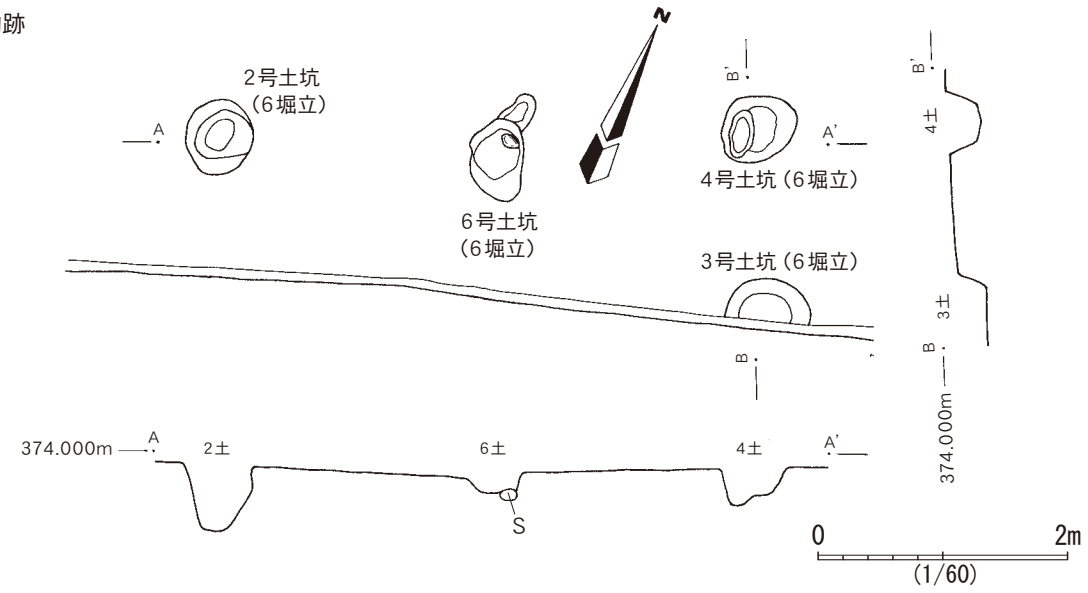


第143図　C区 4号堀立柱建物跡

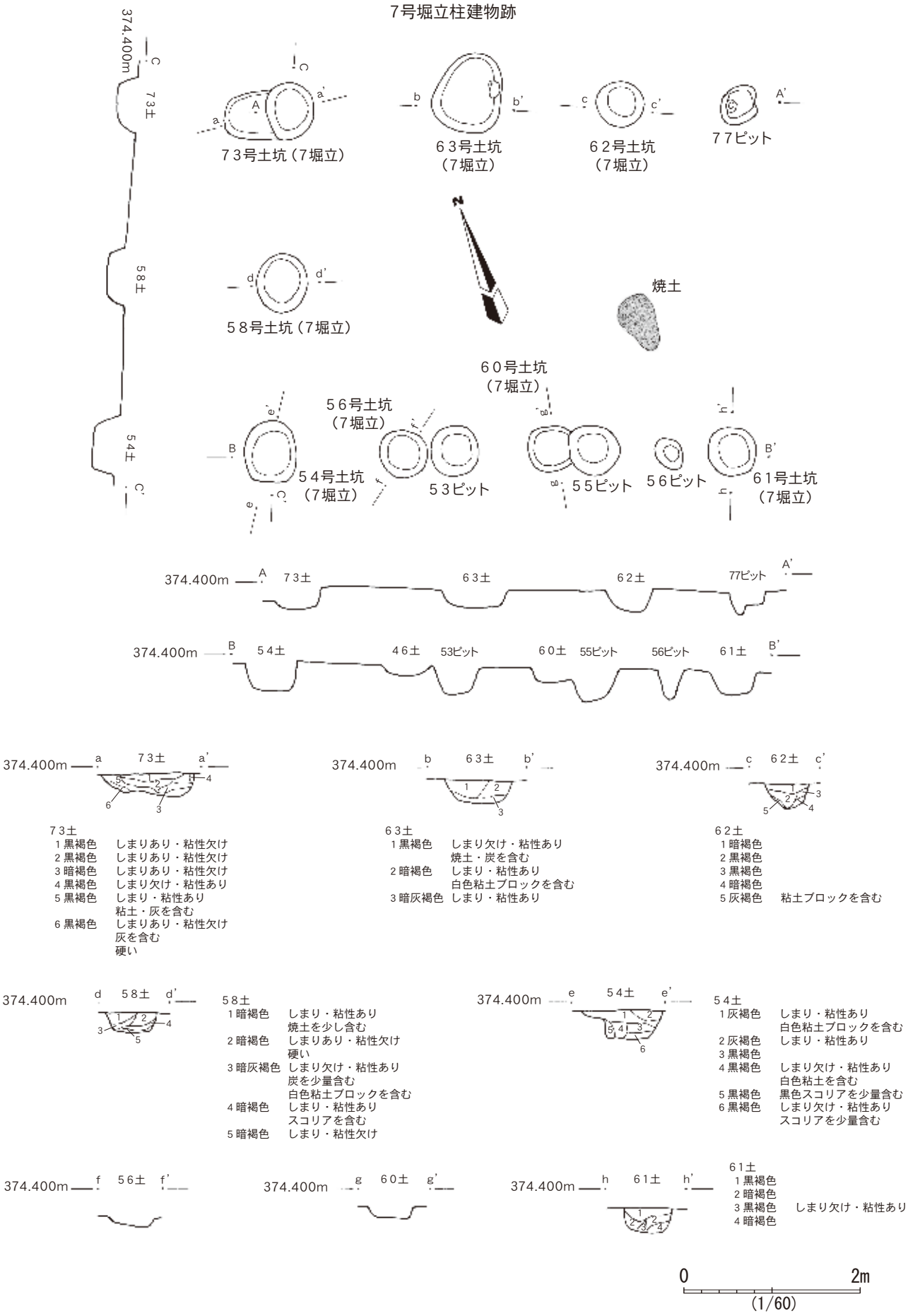
5号堀立柱建物跡・1溝



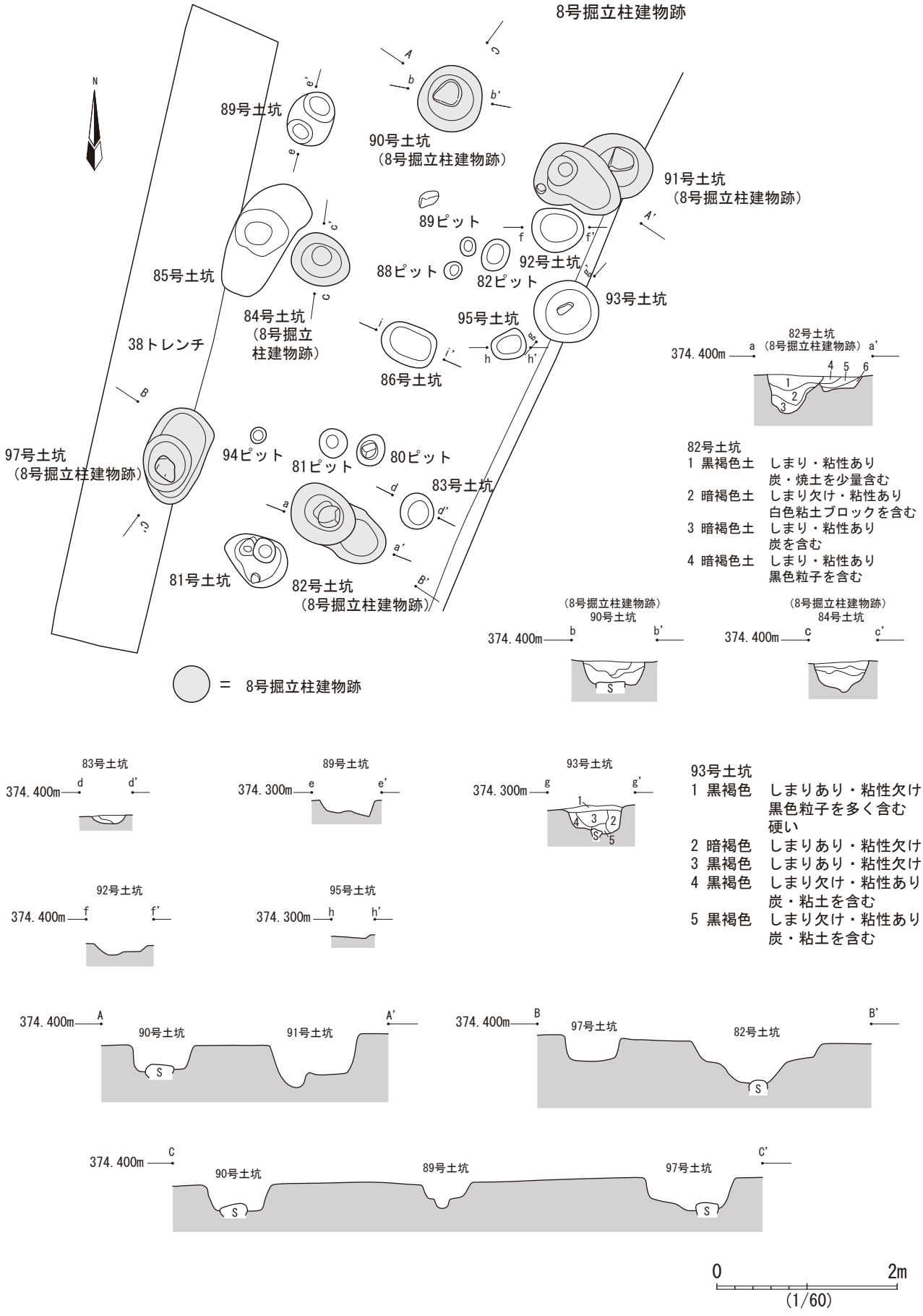
6号堀立柱建物跡



第144図　C区 5・6号堀立柱建物跡・1溝

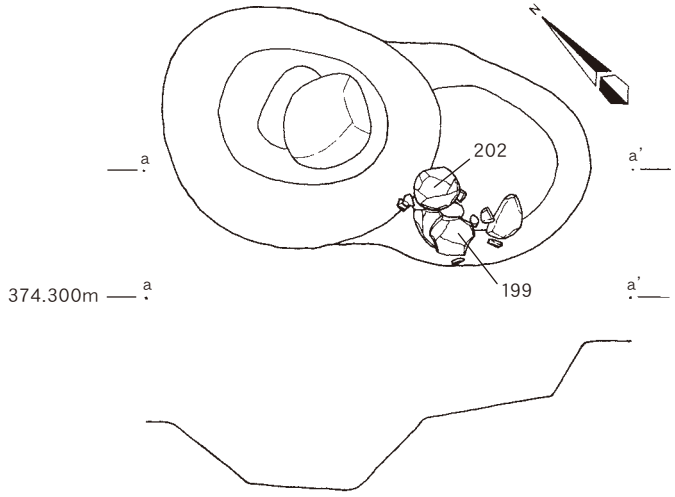


第145図　C区 7号堀立柱建物跡

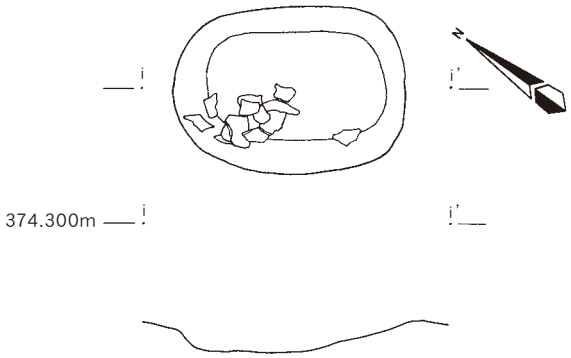


第146図　C区 8号掘立柱建物跡1、81・83・85・86・89・92・93・95・97号土坑、80～82・88・89・94ピット

８２号土坑（8号堀立柱建物跡）

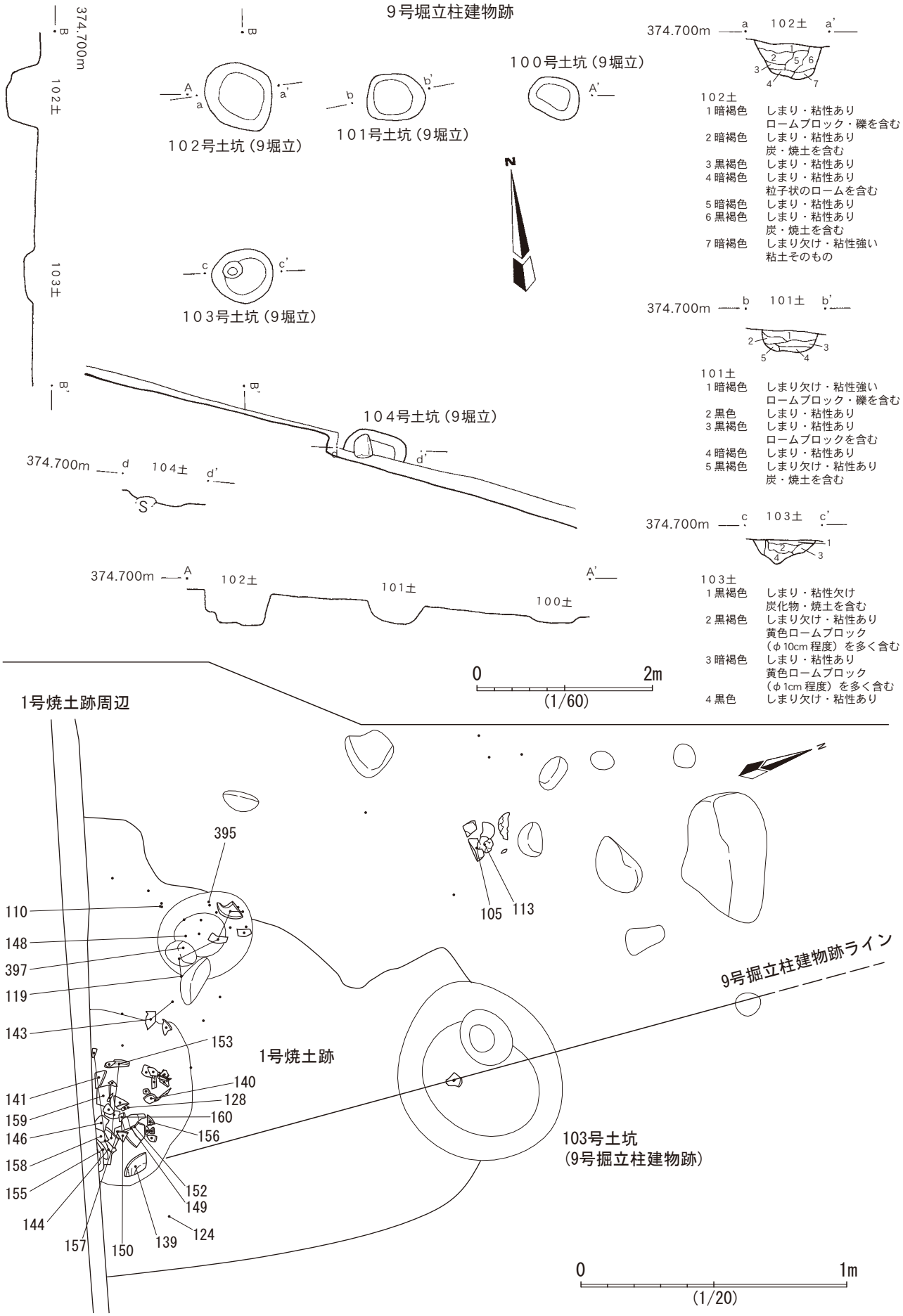


８６号土坑

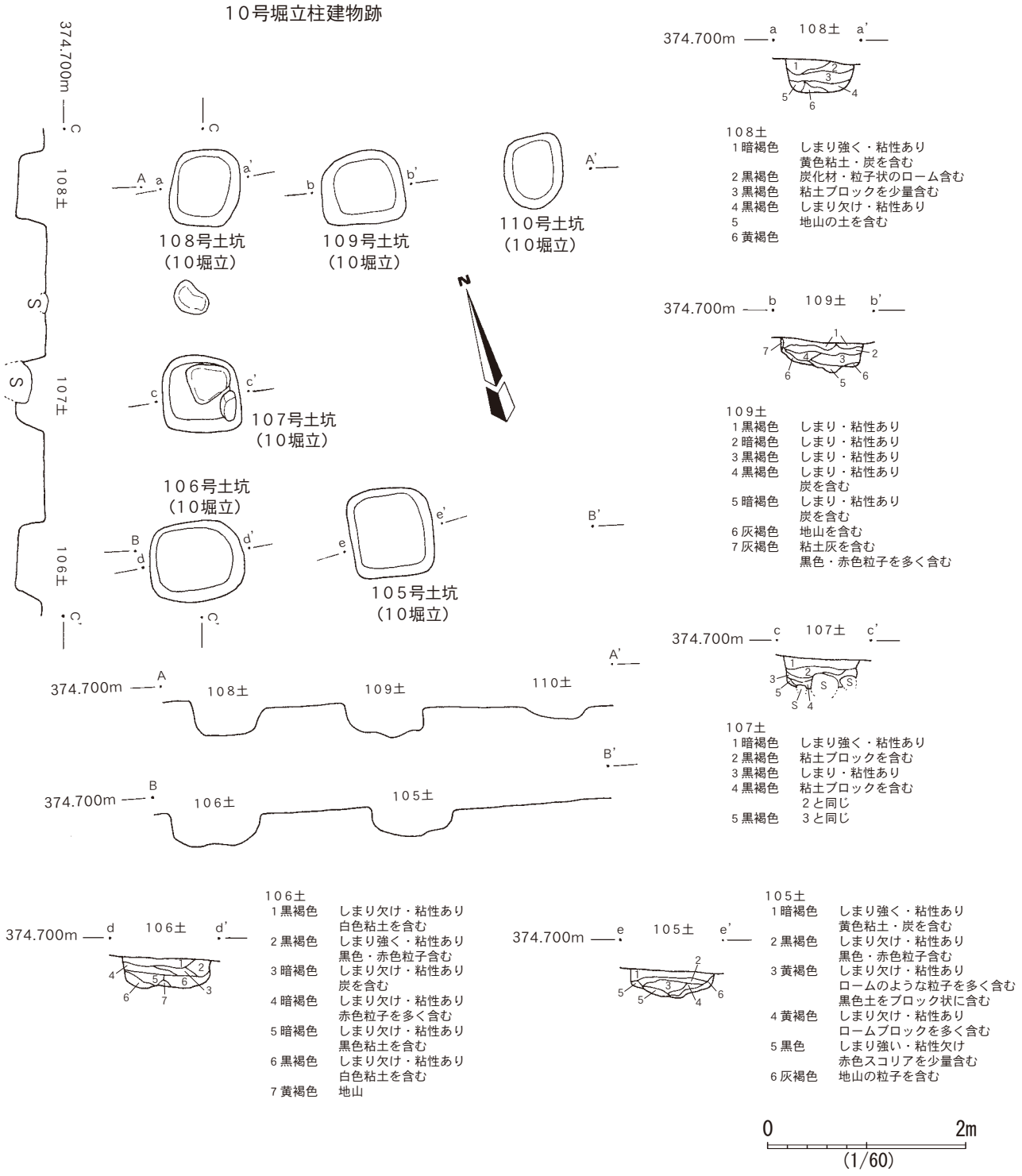


0　1m
(1/30)

第１４７図　C区 8号堀立柱建物跡２

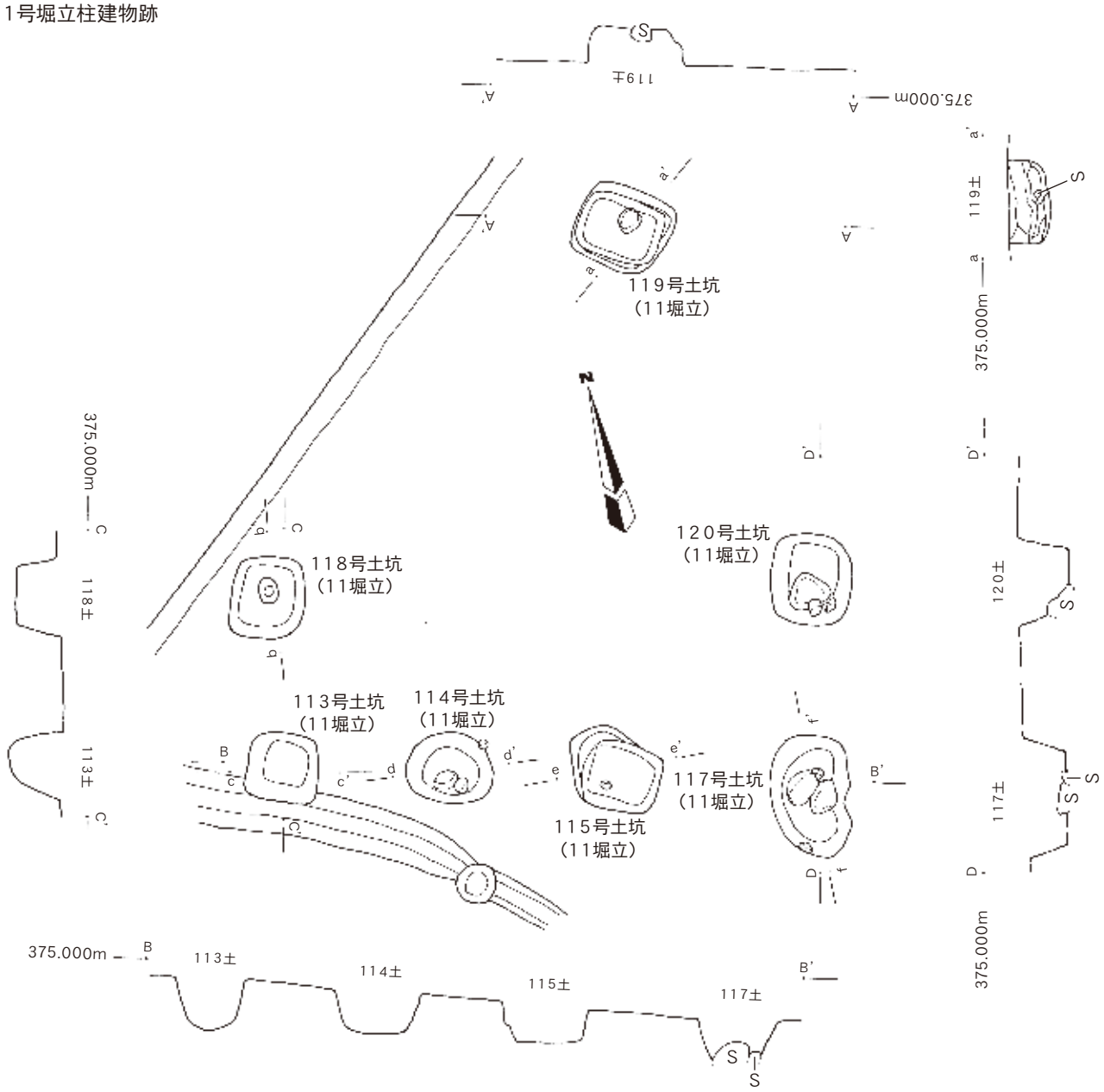


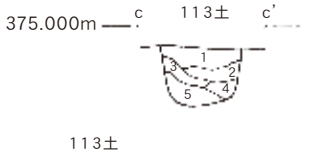
第148図　C区 9号掘立柱建物跡・1号焼土跡周辺



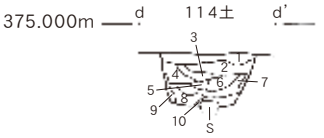
第149図　C区 10号堀立柱建物跡

11号堀立柱建物跡

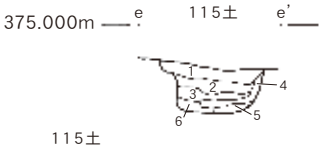




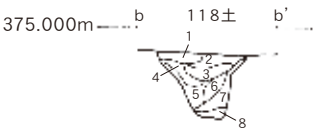
113土
1 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭・焼土を含む
2 暗褐色土　しまり・粘性あり　炭・焼土を含む
3 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭・焼土を含む　白色粘土を含む
4 暗褐色土　しまり・粘性あり　炭・焼土を含む
5 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭・焼土を含む



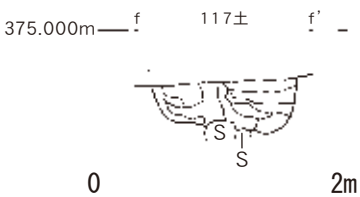
114土
1 黒褐色土　しまり・粘性あり　黄白色粘土を含む
2 灰黄褐色土　しまり・粘性あり
3 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭を含む
4 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭を含む
5 黒褐色土　しまり・粘性あり　炭を含む
6 暗褐色土　しまり・粘性あり　粘土ブロックを含む
7 黒褐色土　しまり・粘性あり
8 黒褐色土　しまり・粘性あり　粘土ブロックを含む
9 黒色土　しまり・粘性あり
10 黒色土　しまり・粘性あり
11 黒色土　しまり・粘性あり



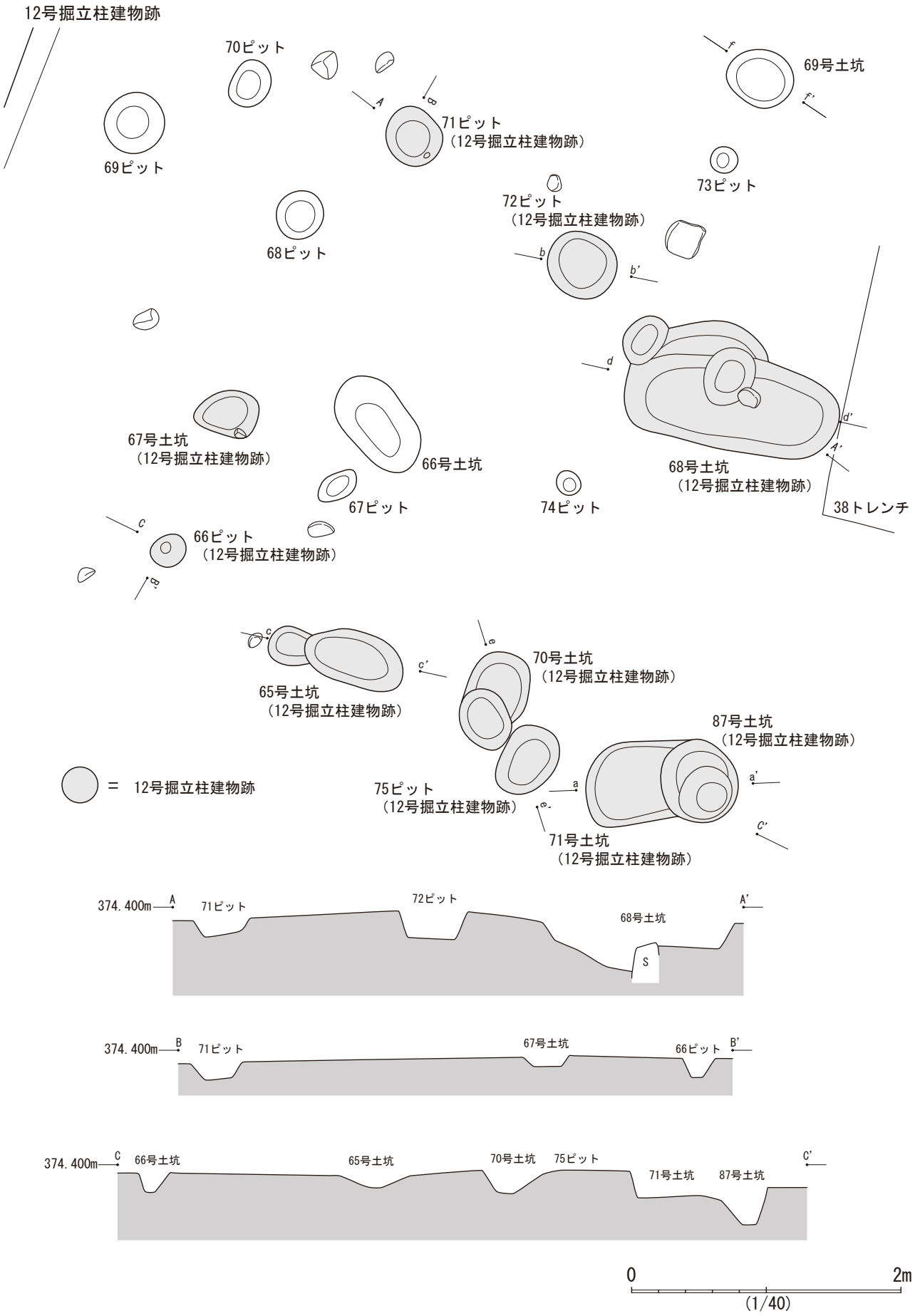
115土
1 黒褐色土　しまり・粘性あり　粒子を多く含む
2 暗褐色土　しまり・粘性あり　粒子を多く含む
3 暗褐色土　黄色粘土ブロックを含む
4 極赤褐色土　鉄分などが入るためか、赤い粒子が多い
5 黒色土　しまりあり



118土
1 黒褐色土　しまり・粘性あり　赤色・黒色粒子を含む
2 暗褐色土　しまり欠け・粘性あり　焼土を含む
3 灰褐色土　しまり欠け・粘性あり　黒色粒子を多く含む
4 暗褐色土　しまり・粘性あり　粘土そのもの
5 暗褐色土　しまり欠け・粘性あり　粘土を含む
6 黒褐色土　しまり欠け・粘性あり　粘土を含む
7 黒色土　しまり欠け・粘性強い　灰を含む
8 黄褐色土　しまり欠け・粘性なし　地山の灰　ザラザラしている

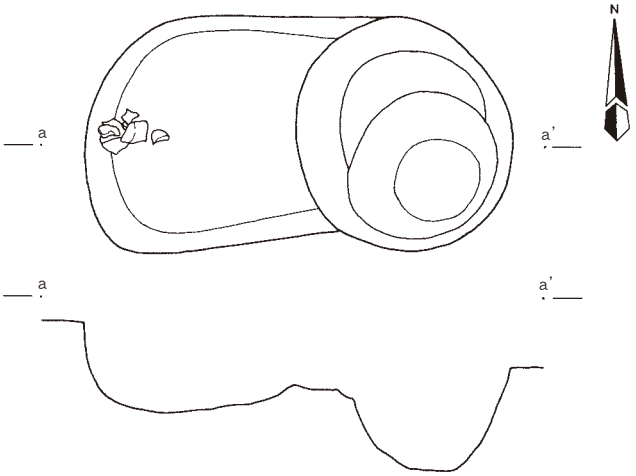


第150図　C区 11号堀立柱建物跡



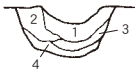
第151図　C区 12号掘立柱建物跡1、69号土坑、67～70・73・74ピット

71号土坑（12堀立）　　87号土坑（12堀立）



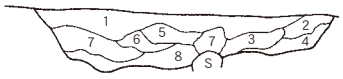
0　1m
(1/20)

72ピット
374.500m　b　（12堀立）　b'



72pit
1極赤褐色　しまり・粘性欠け
焼土灰を多く含む
2暗褐色　しまりあり・粘性欠け
粘土・砂を少量含む
3黒褐色　しまり・粘性あり
4灰褐色　しまり欠け・粘性強い
粘土そのもの

68号土坑
374.500m　d　（12堀立）　d'



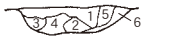
68土
1黒褐色　しまりややあり・粘性あり
炭・焼土を含む
2黒褐色
3黒褐色
4暗褐色
5黒褐色　炭・焼土を含む
6黒褐色　しまり・粘性あり
7黒褐色
8暗褐色

65号土坑
374.400m　c　（12堀立）　c'

70号土坑　75ピット
374.500m　e　（12堀立）　（12堀立）　e'

70土　75pit
1黒褐色　しまり・粘性あり
スコリア多い
2黒褐色　しまり・粘性あり
粘土を含む
3暗褐色　しまり・粘性あり
粘土を多く含む
4暗褐色　しまり・粘性あり
5黒褐色

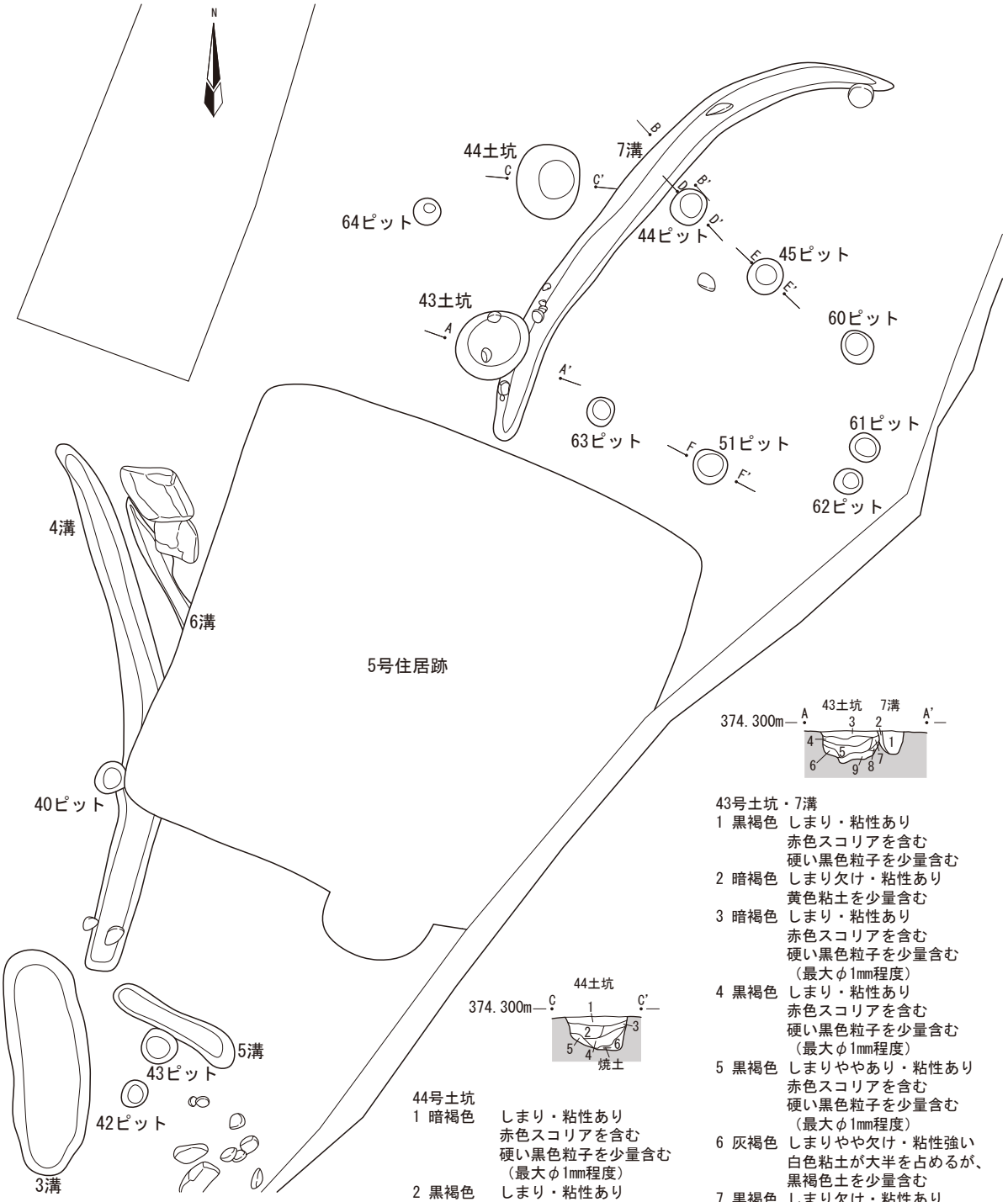
374.400m　f　69号土坑　f'

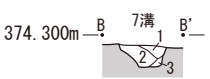


69土
1黒褐色　しまりあり
炭・焼土を含む
2黒褐色　しまり欠け・粘性あり
黄色ブロック（φ5cm程）を含む
3黒褐色　しまり・粘性あり
黒色粒子を多く含む
とても硬い
4暗褐色　しまり・粘性あり
黒色粒子を多く含む
とても硬い
5黒褐色　しまり欠け・粘性あり
粘土を多く含む
6暗褐色　しまり・粘性あり
地山に近い

0　2m
(1/60)

第152図　C区 12号堀立柱建物跡2、69号土坑

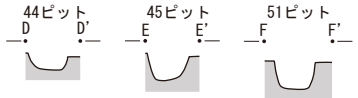


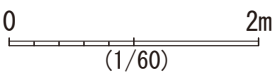


7溝
1 暗褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
2 黒褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
3 灰褐色　粘土層

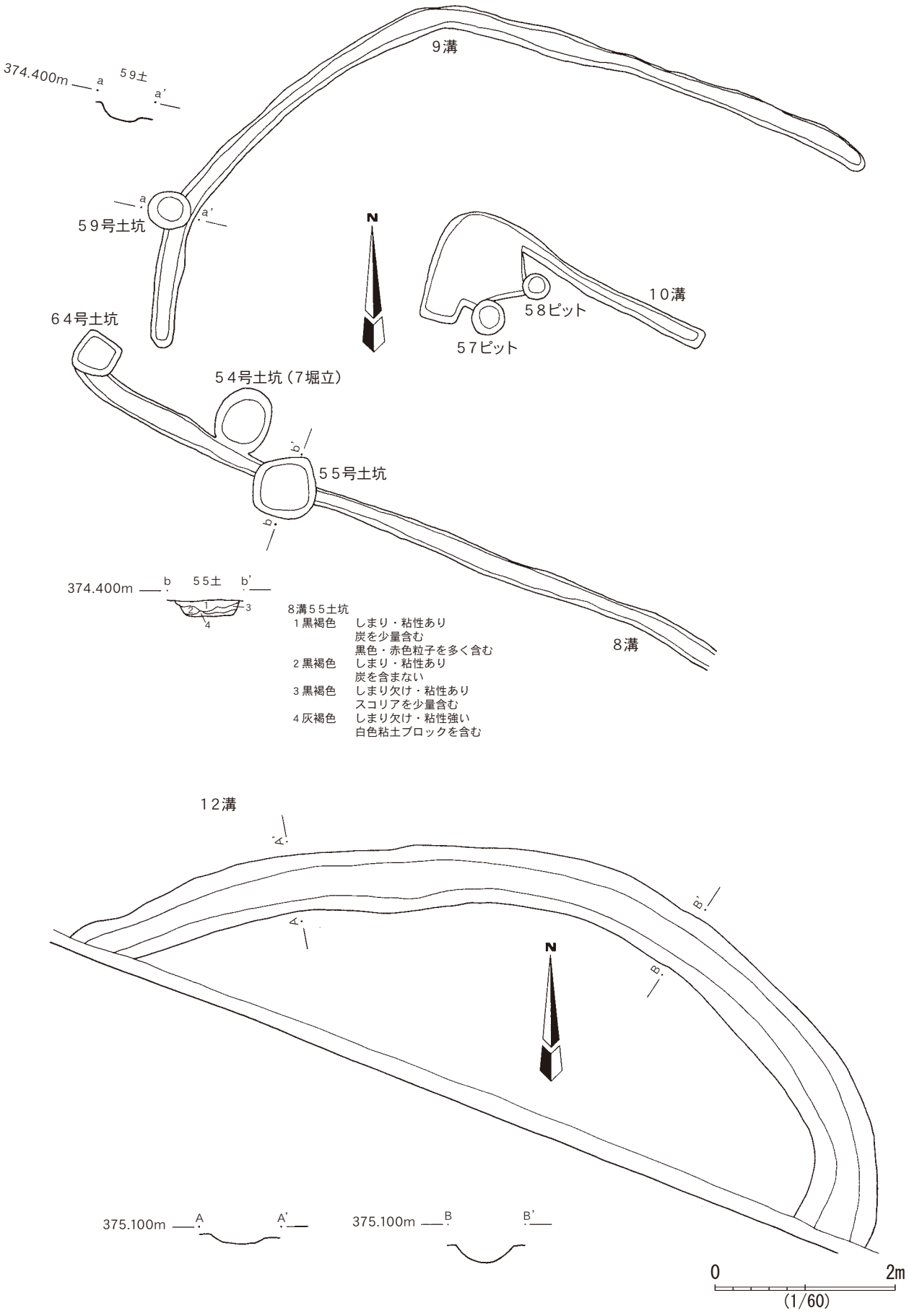
44号土坑
1 暗褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
2 黒褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
3 暗褐色　しまり欠け・粘性あり
炭化材を多く含む
黄色粘土ブロックを含む
4 黒褐色　しまりややあり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
5 灰褐色　しまり欠け・粘性強い
粘土白色層
6 極暗褐色　しまり欠け・粘性あり
焼土・炭を含む
硬くしまった層

43号土坑・7溝
1 黒褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
2 暗褐色　しまり欠け・粘性あり
黄色粘土を少量含む
3 暗褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
4 黒褐色　しまり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
5 黒褐色　しまりややあり・粘性あり
赤色スコリアを含む
硬い黒色粒子を少量含む
（最大φ1mm程度）
6 灰褐色　しまりやや欠け・粘性強い
白色粘土が大半を占めるが、
黒褐色土を少量含む
7 黒褐色　しまり欠け・粘性あり
赤色スコリアを少量含む
8 黒褐色　しまり欠け・粘性あり
黄色粘土を少量含む
9 暗褐色　しまりあり・粘性欠け
白色粘土・硬いスコリアを含む
少しガチガチしている

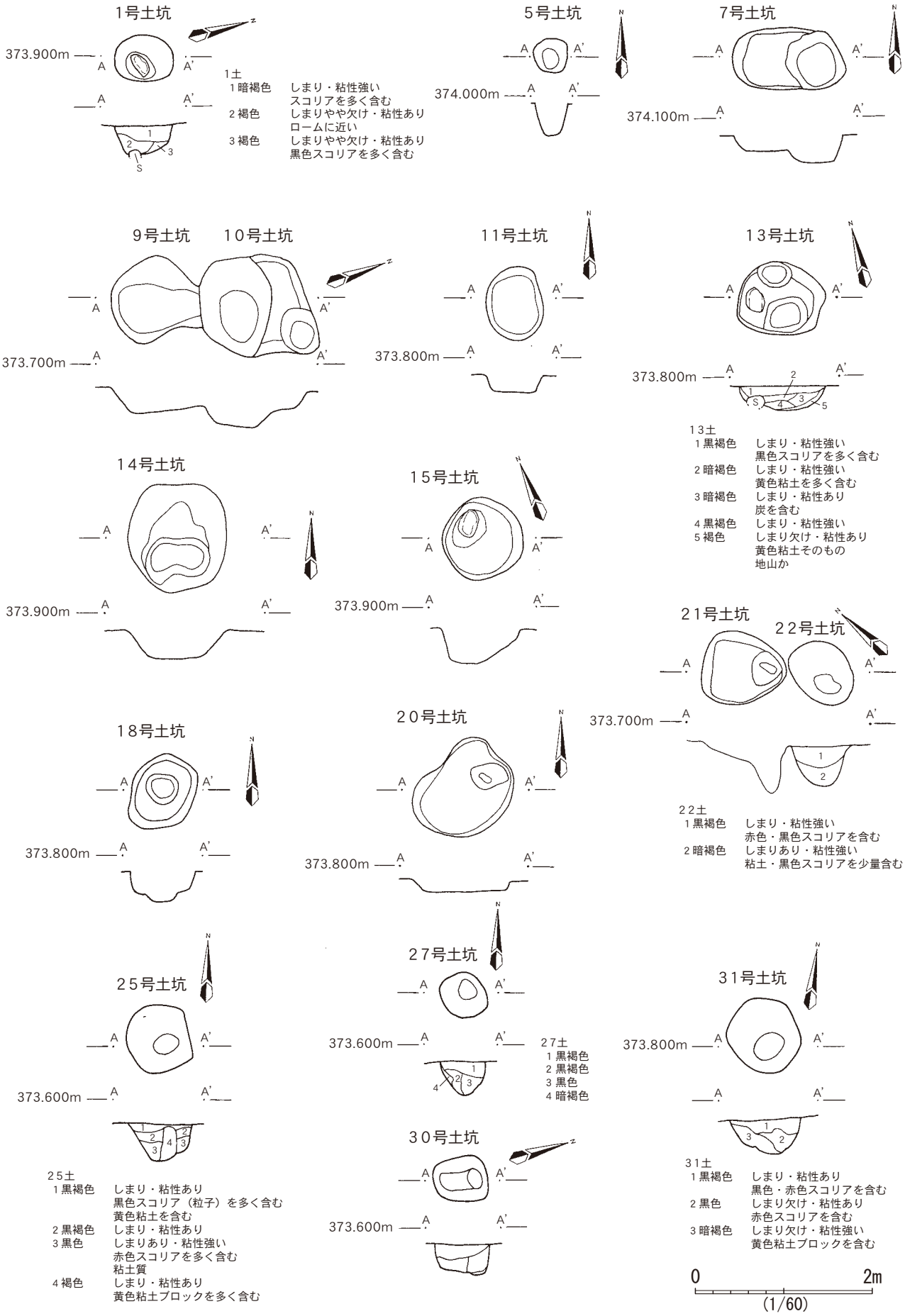




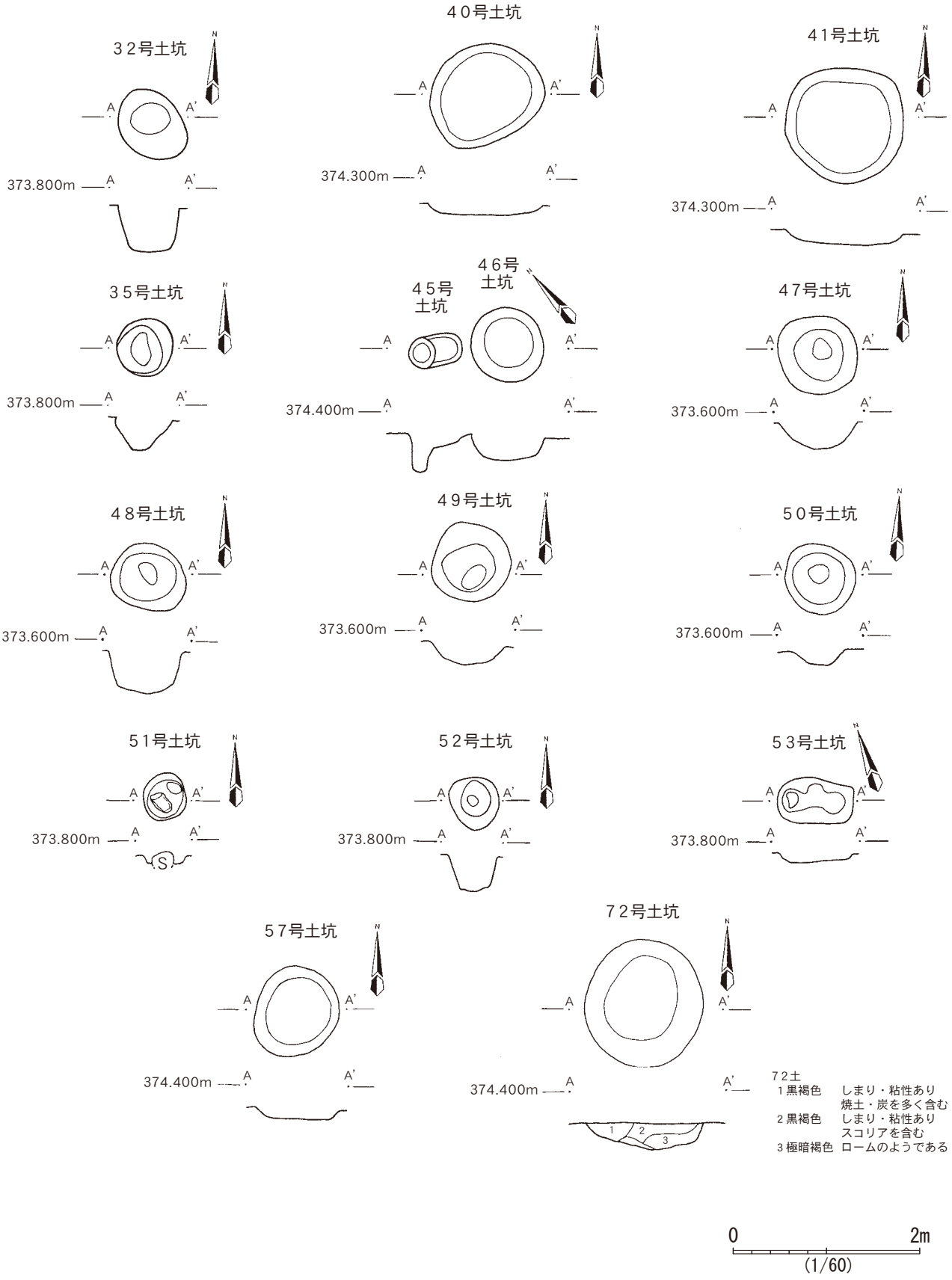
第153図　C区 3～7溝、43・44号土坑、42～45・51・60～64ピット



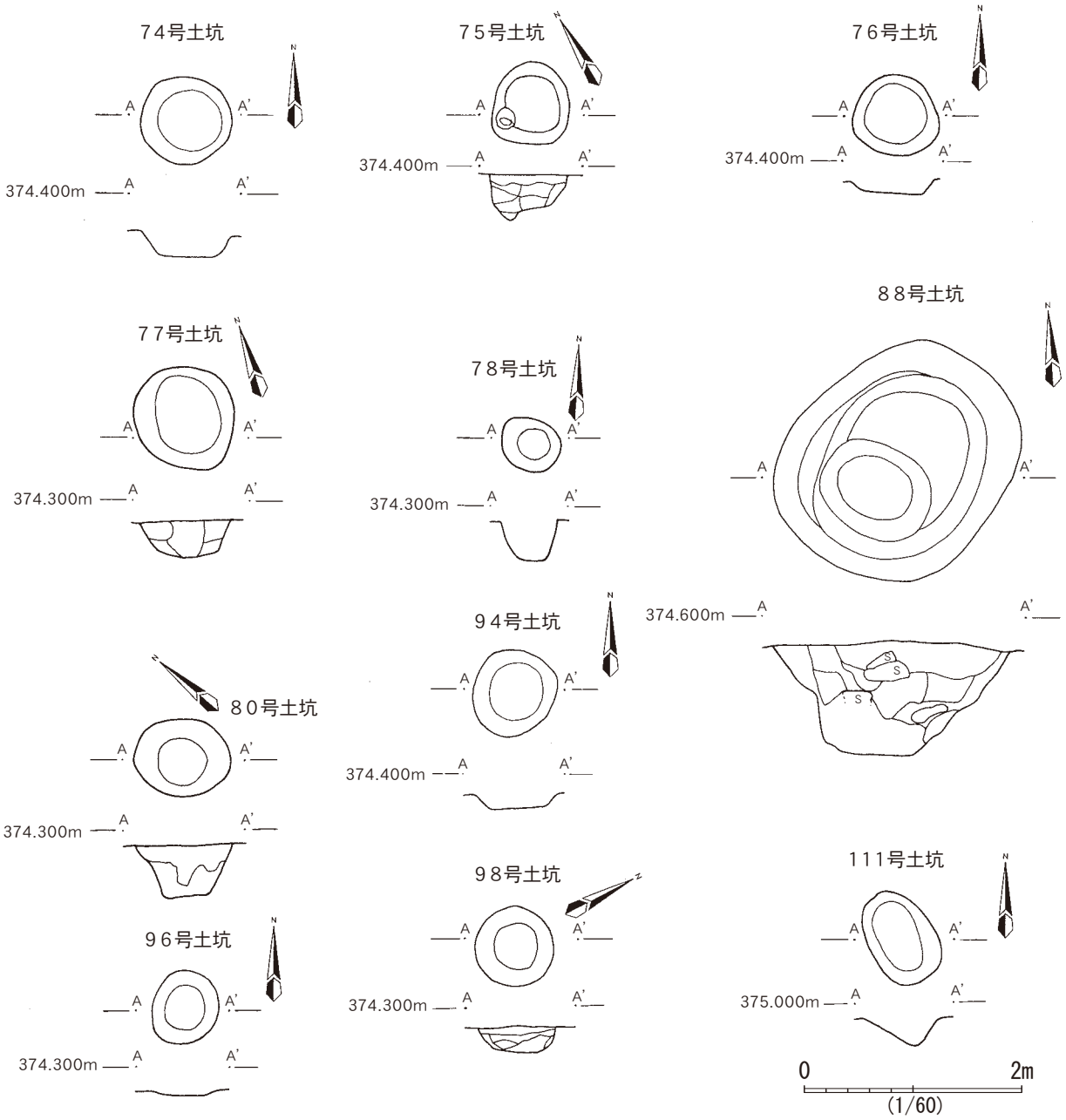
第154図　C区 8～10・12溝、55・59号土坑



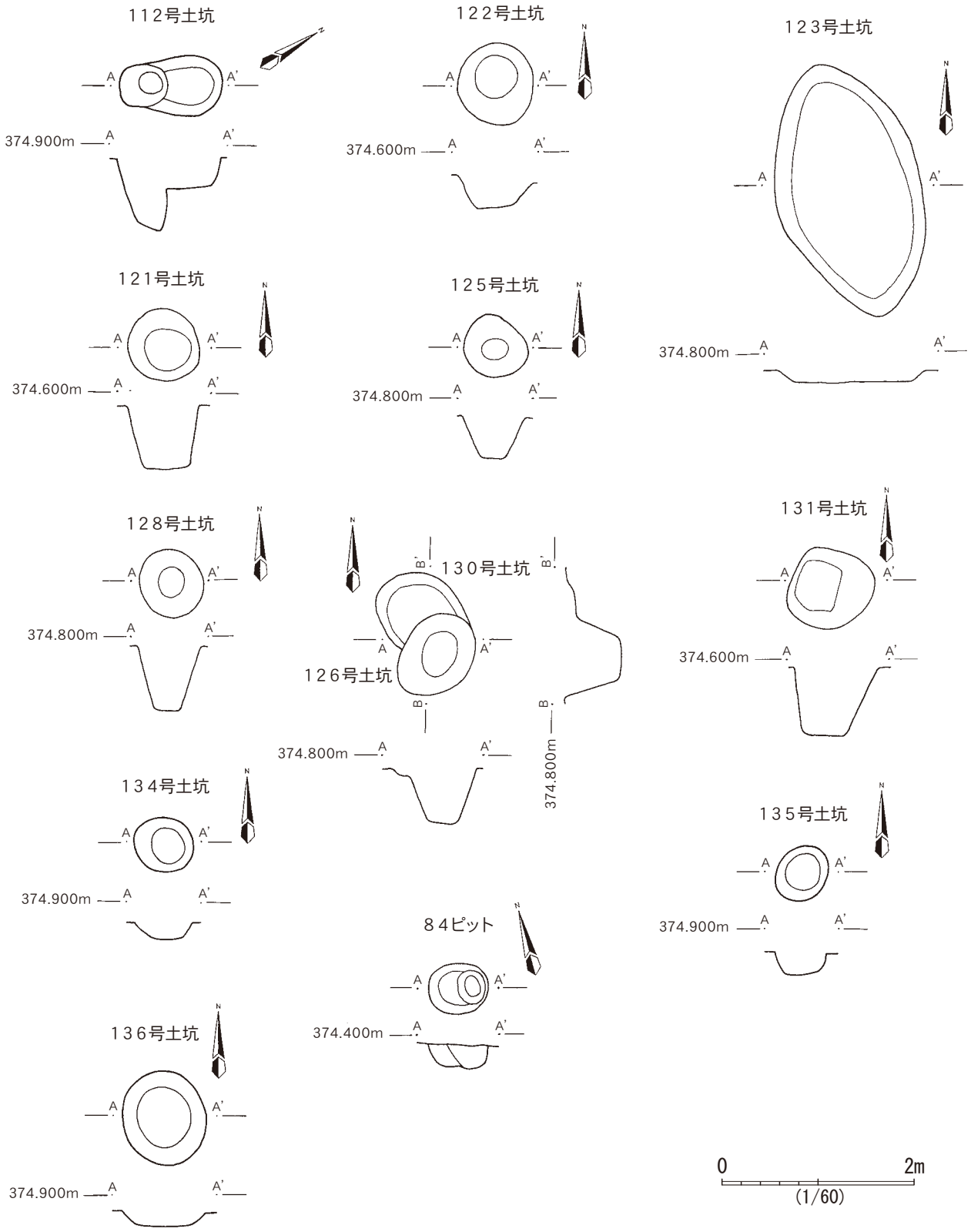
第155図　C区 1～31号土坑



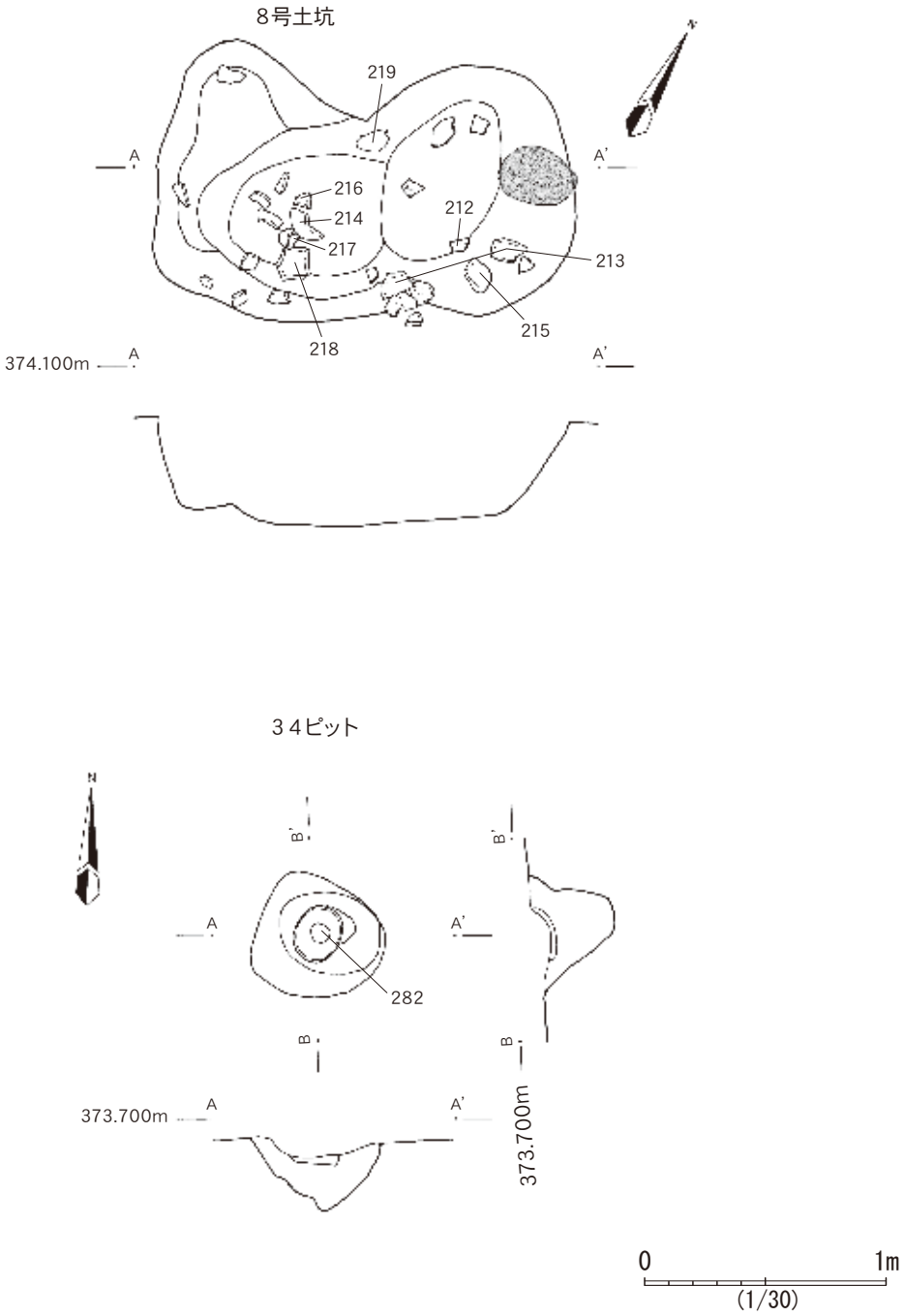
第１５６図　Ｃ区　３２～７２号土坑



第157図　C区 74～111号土坑

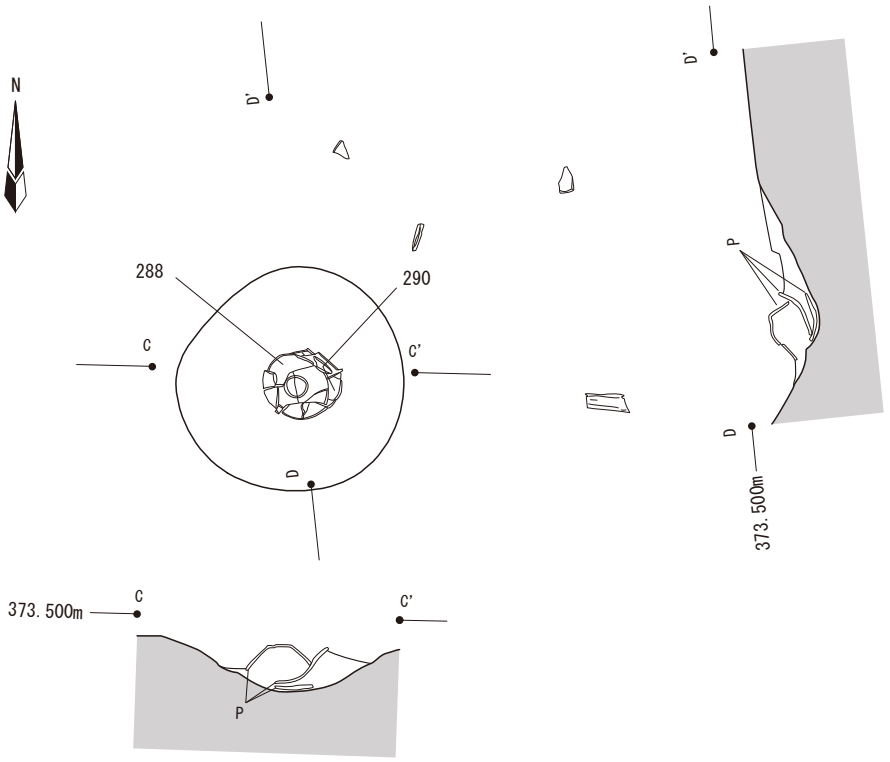


第158図　C区 112～136号土坑、84ピット

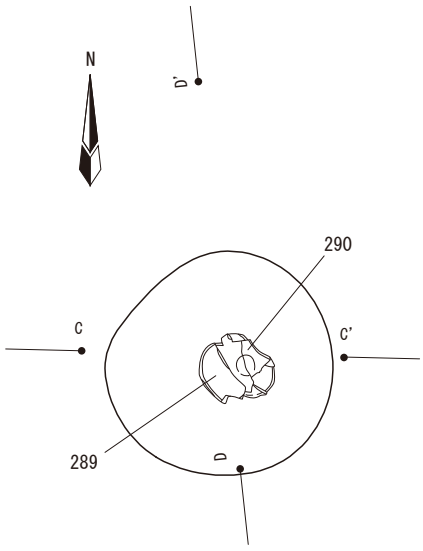


第159図　C区 8号土坑、34ピット

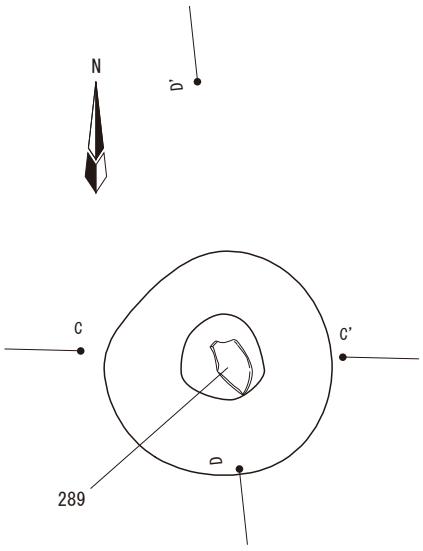
137号土坑（第1面）

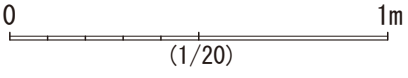


137号土坑（第2面）



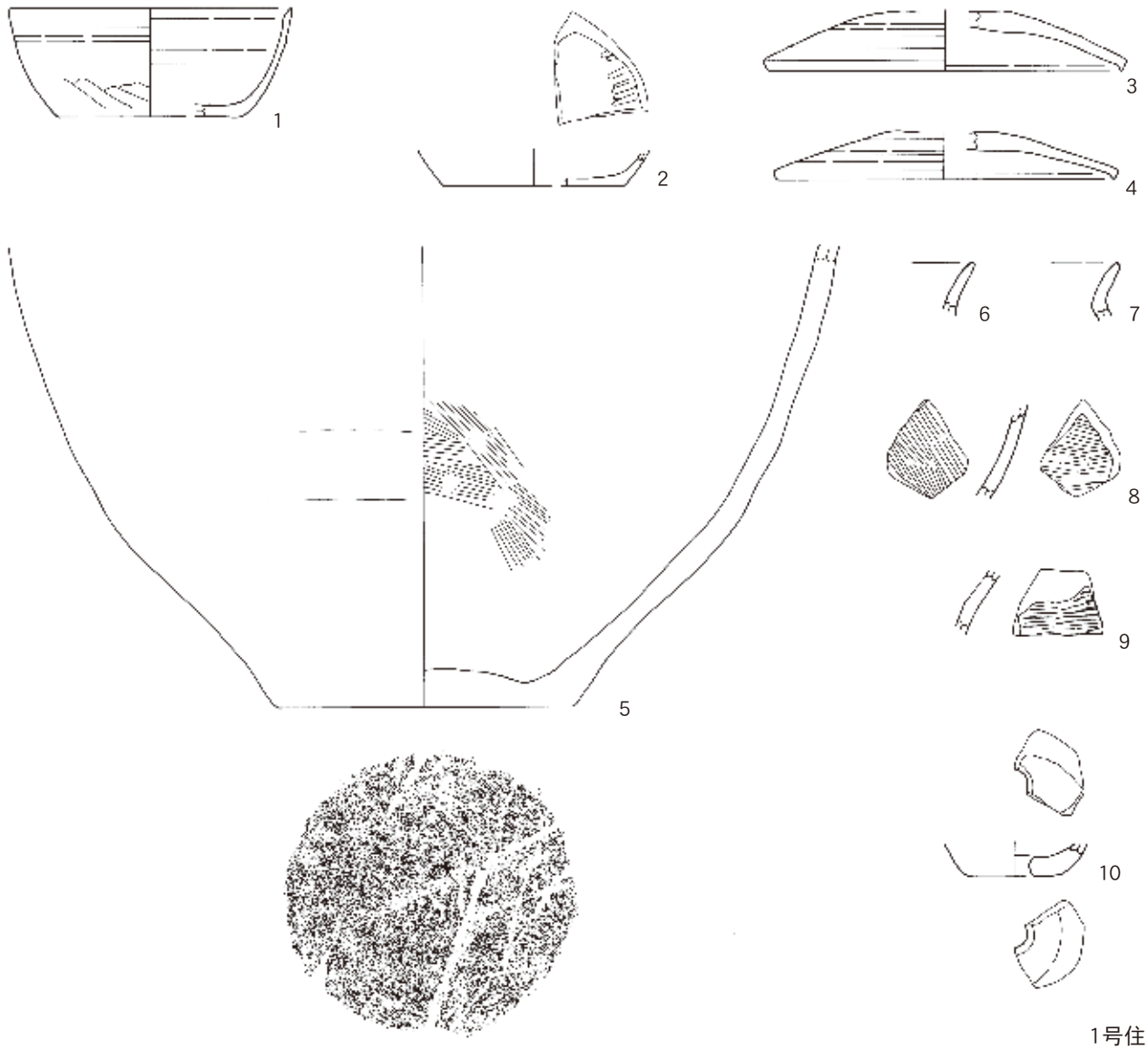
137号土坑（第3面）



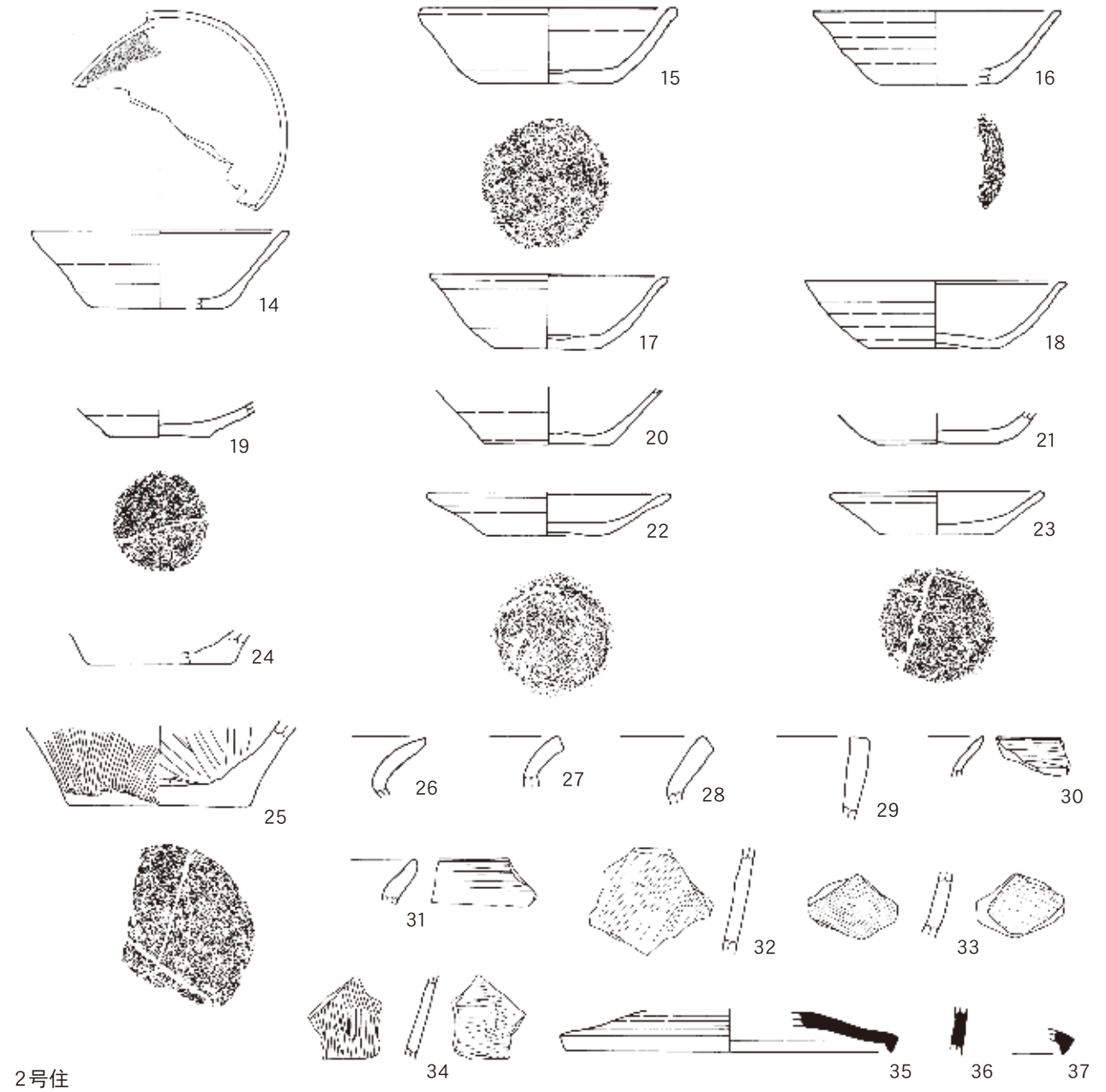


第160図　C区 137号土坑

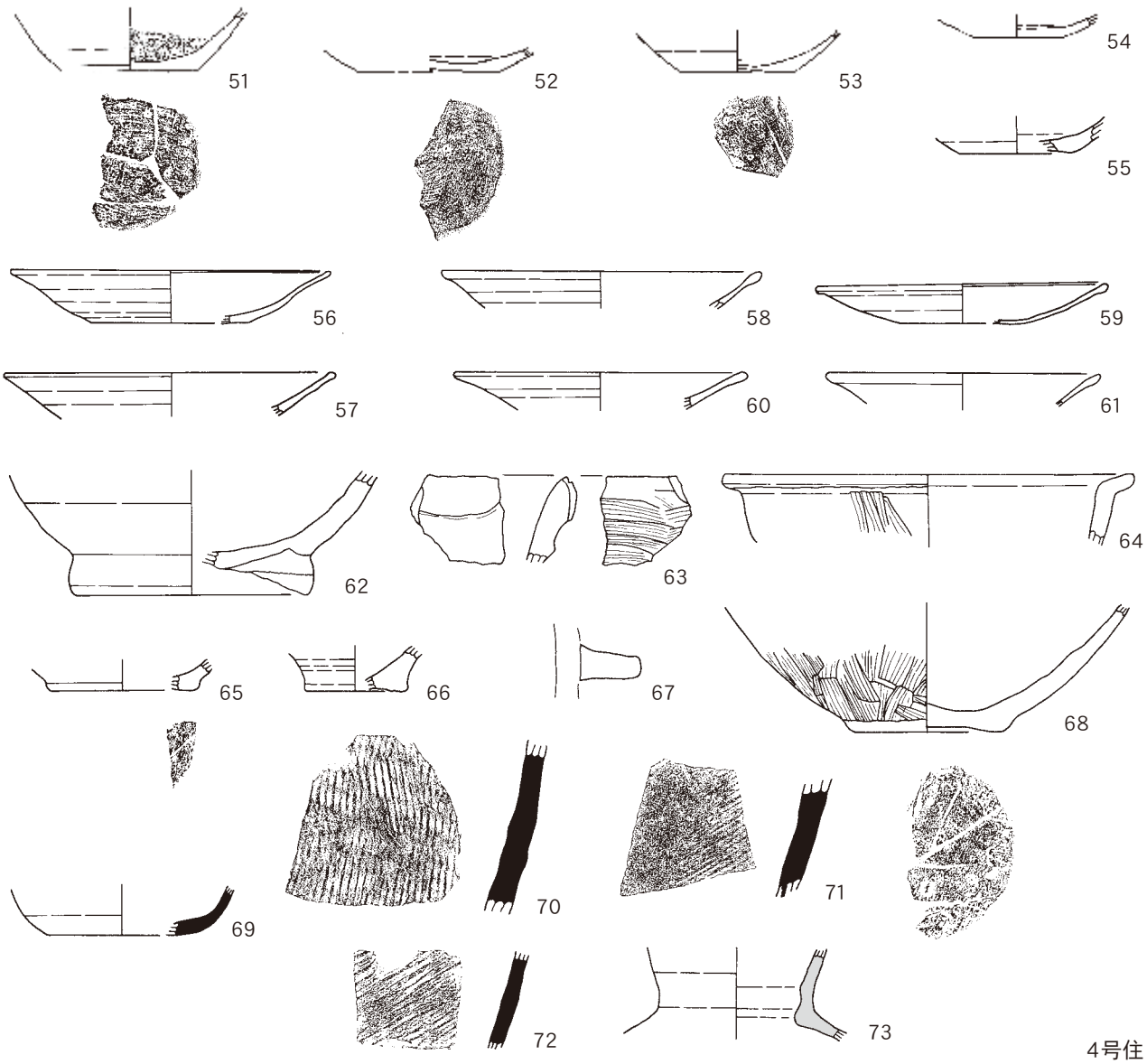
第１６１図　Ｃ区　１号集石



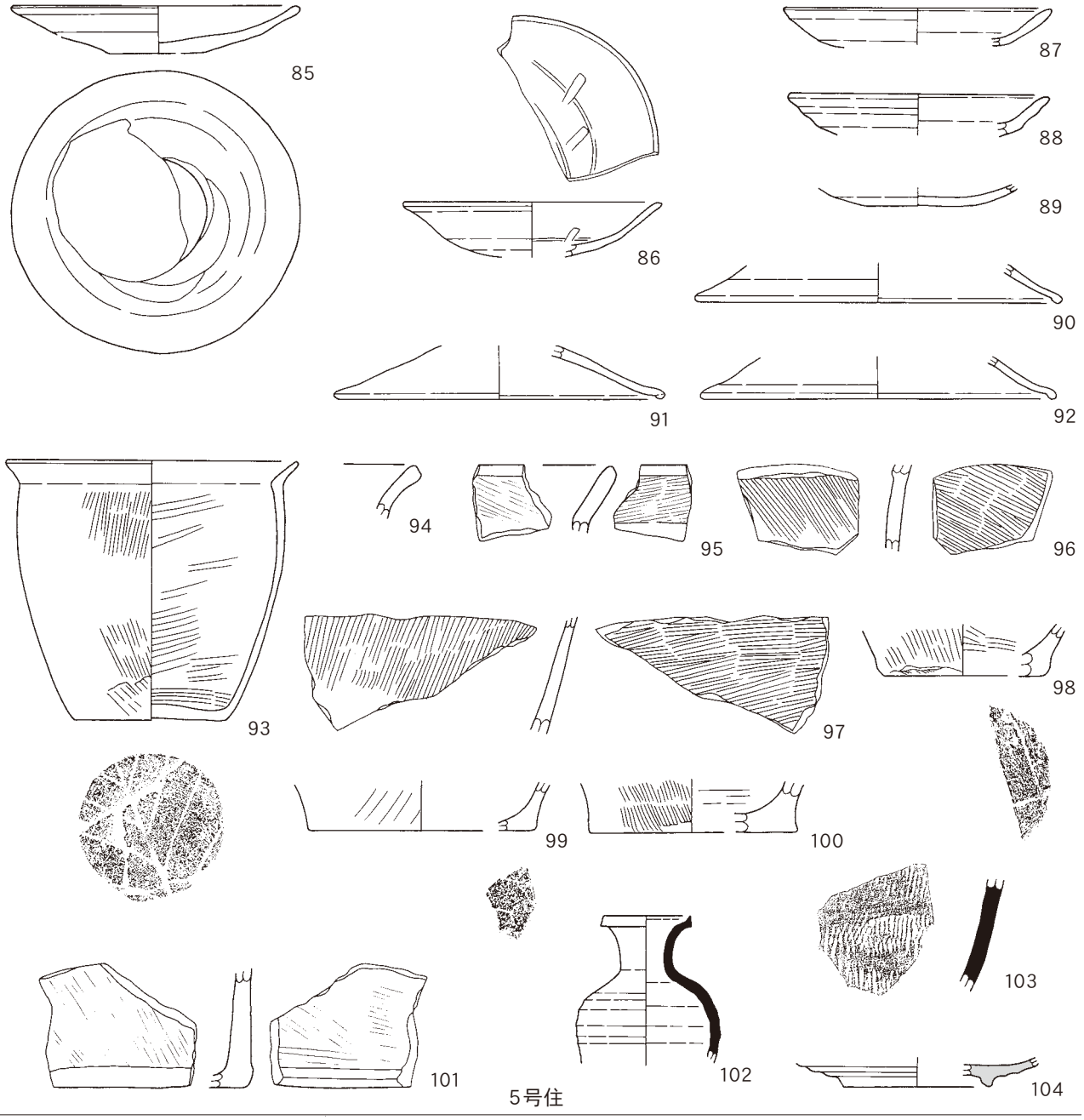
第１６２図　Ｃ区 出土遺物１（１・２号住居跡）



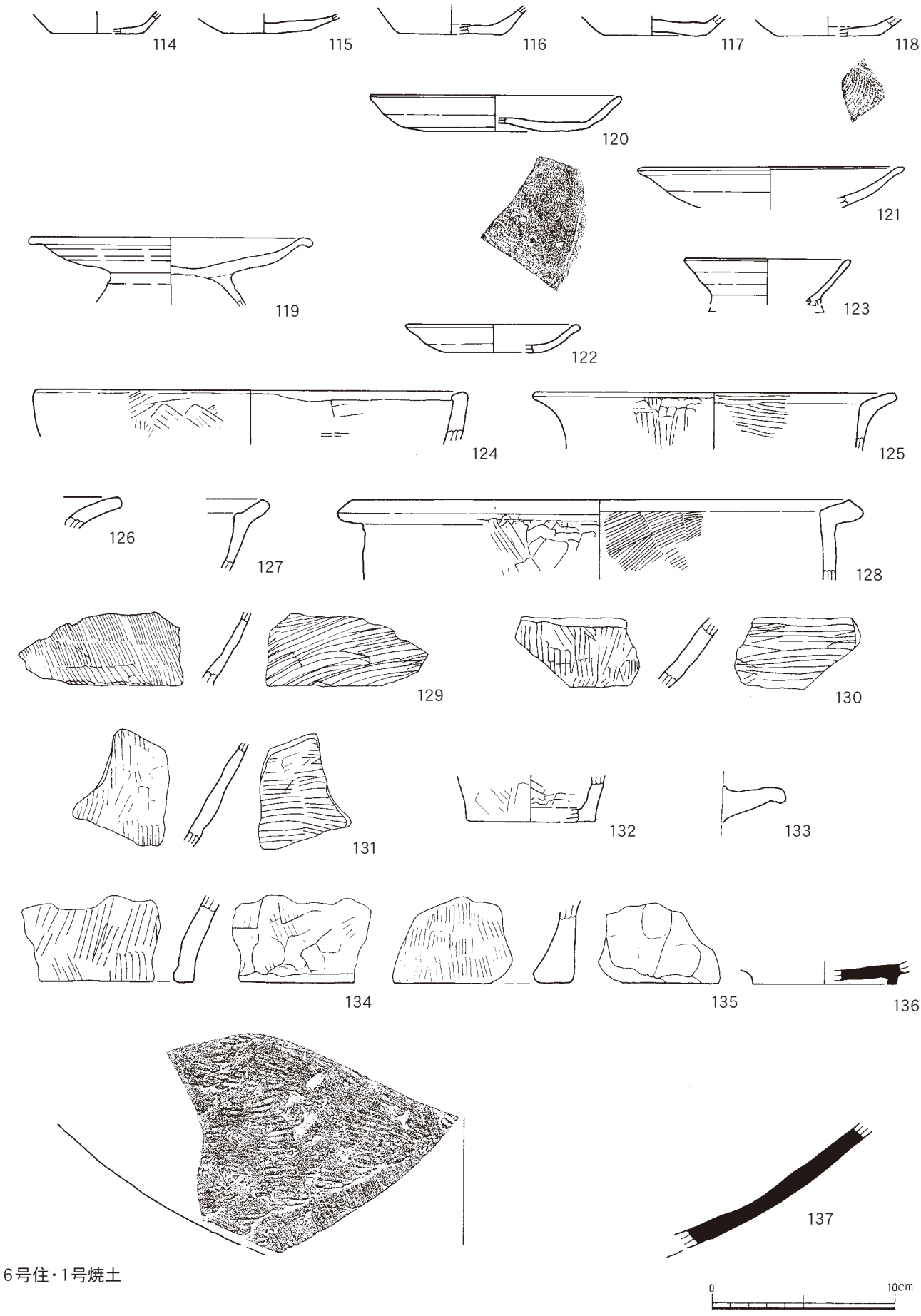
第１６３図　C区 出土遺物２（２・４号住居跡）



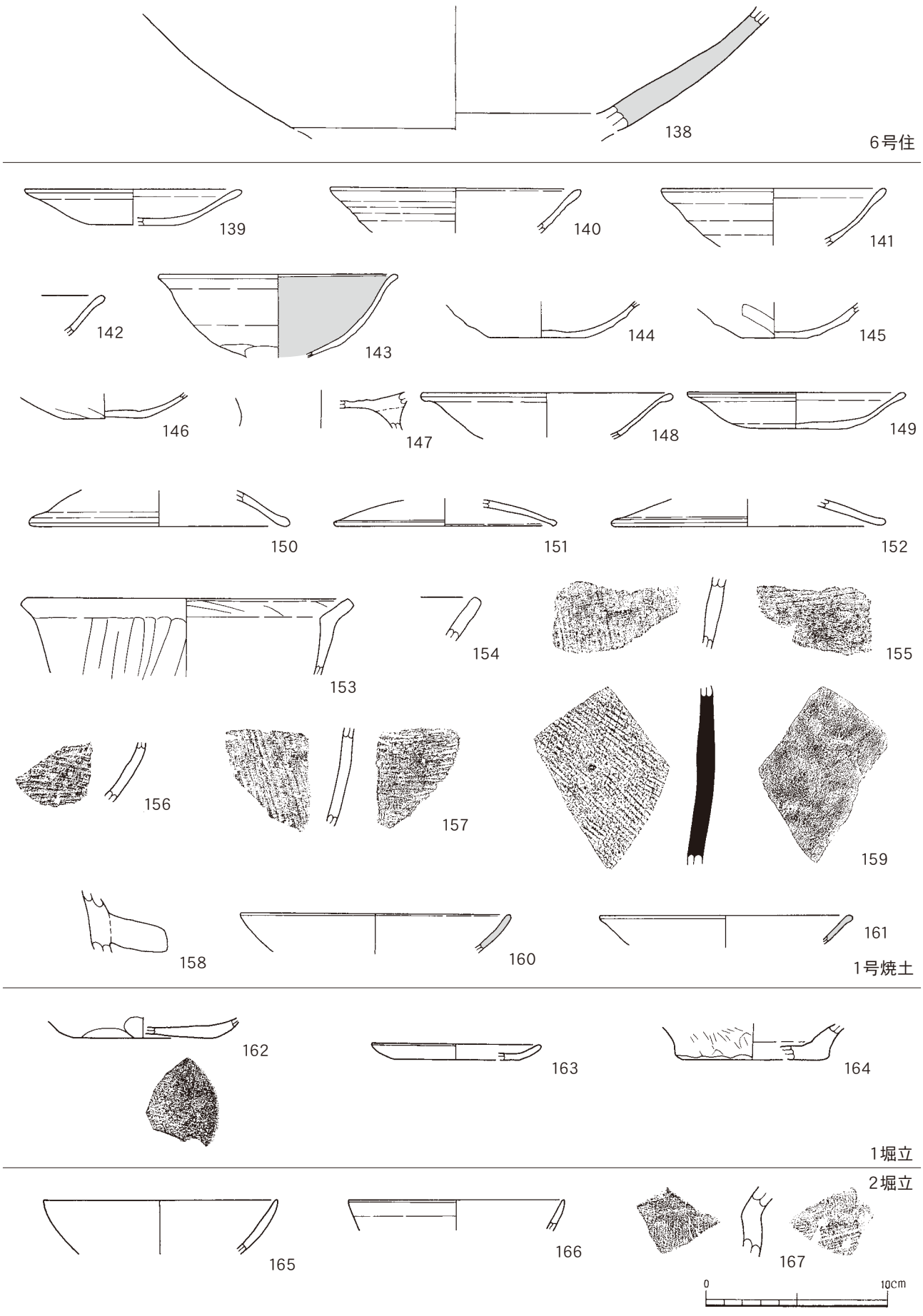
第１６４図　C区 出土遺物3（4・5号住居跡）



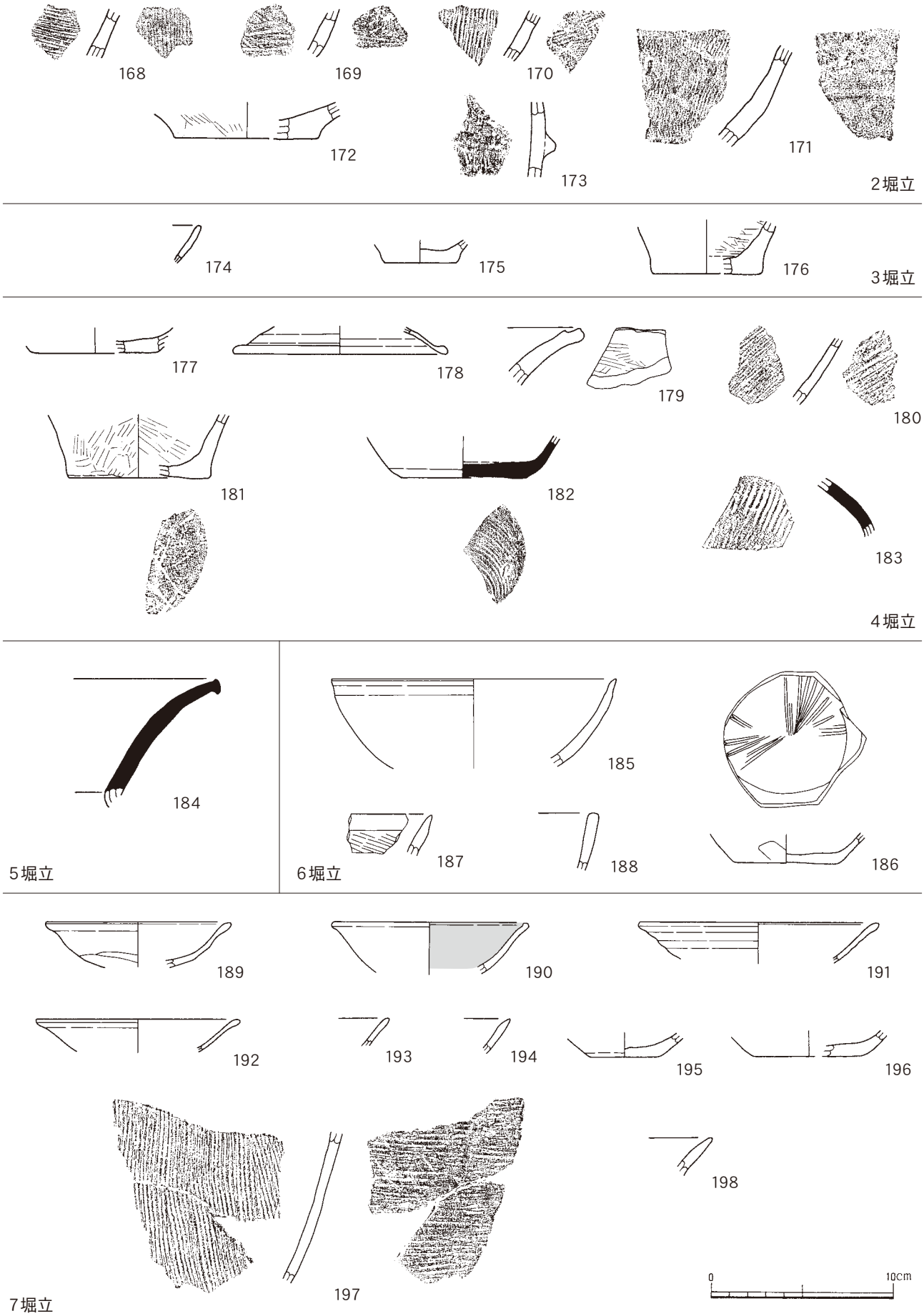
第165図　C区 出土遺物4（5・6号住居跡、1号焼土跡）



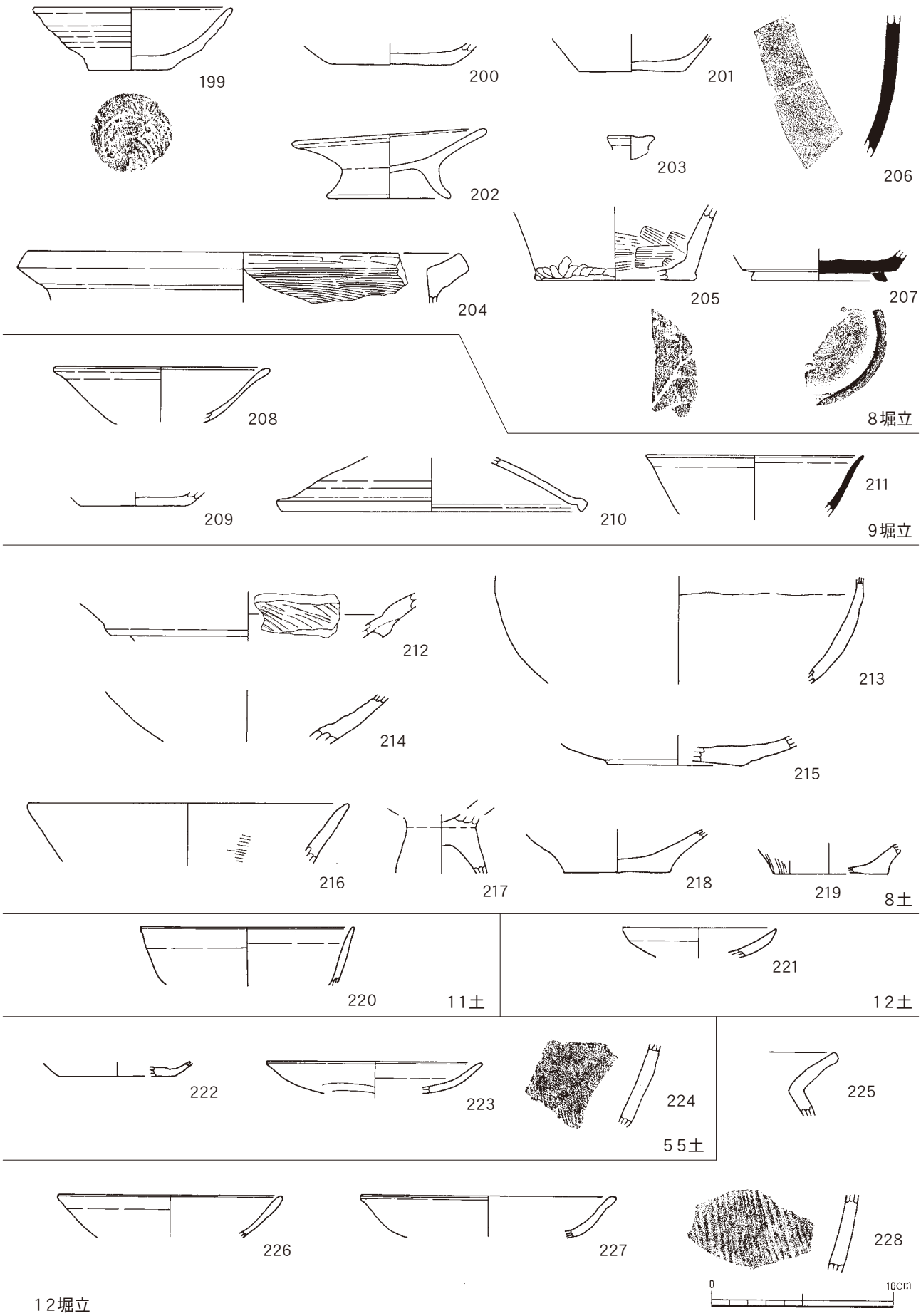
第166図　C区 出土遺物5（6号住居跡、1号焼土跡）



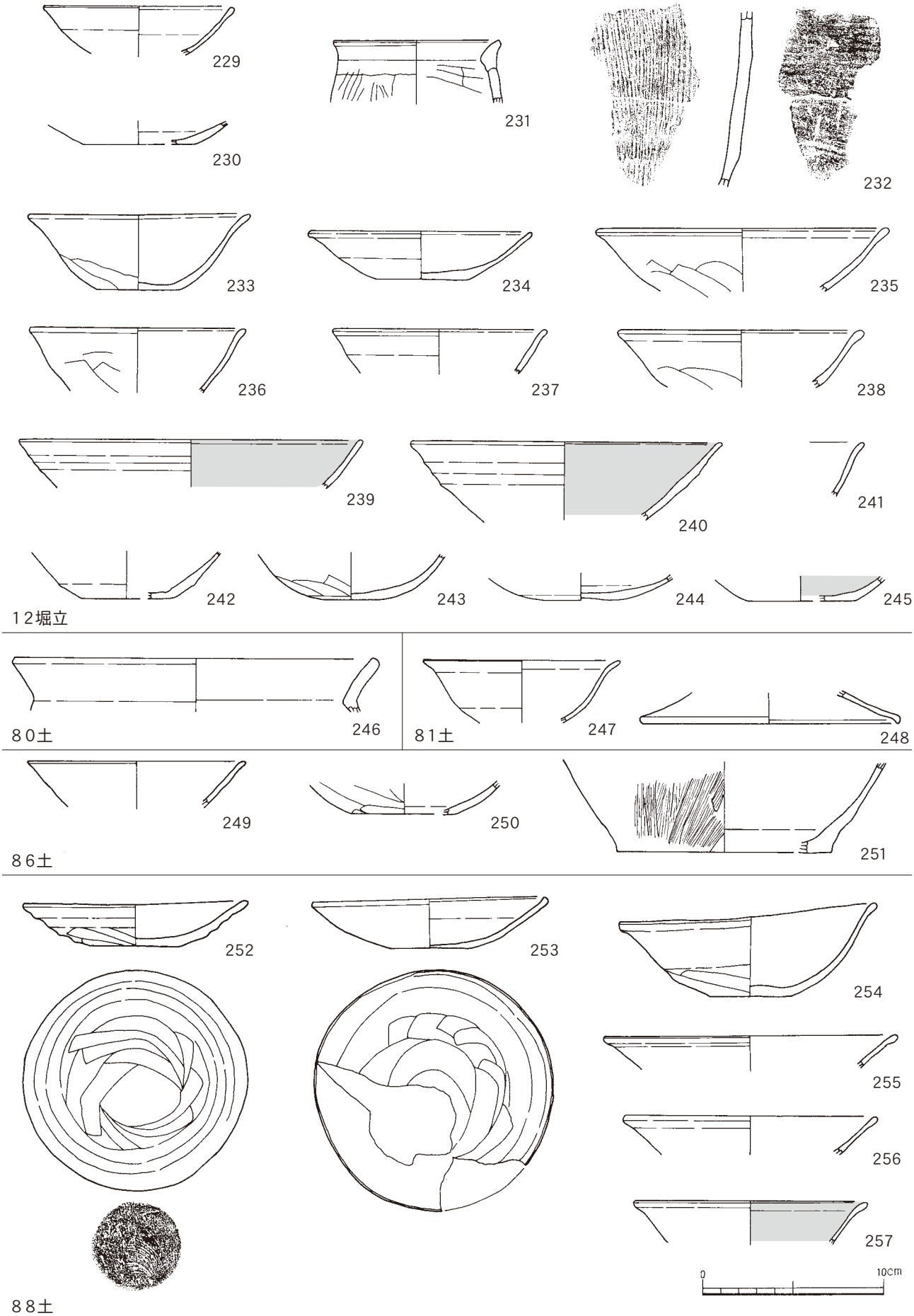
第167図　C区 出土遺物6（6号住居跡、1号焼土跡、1・2号堀立柱建物跡）



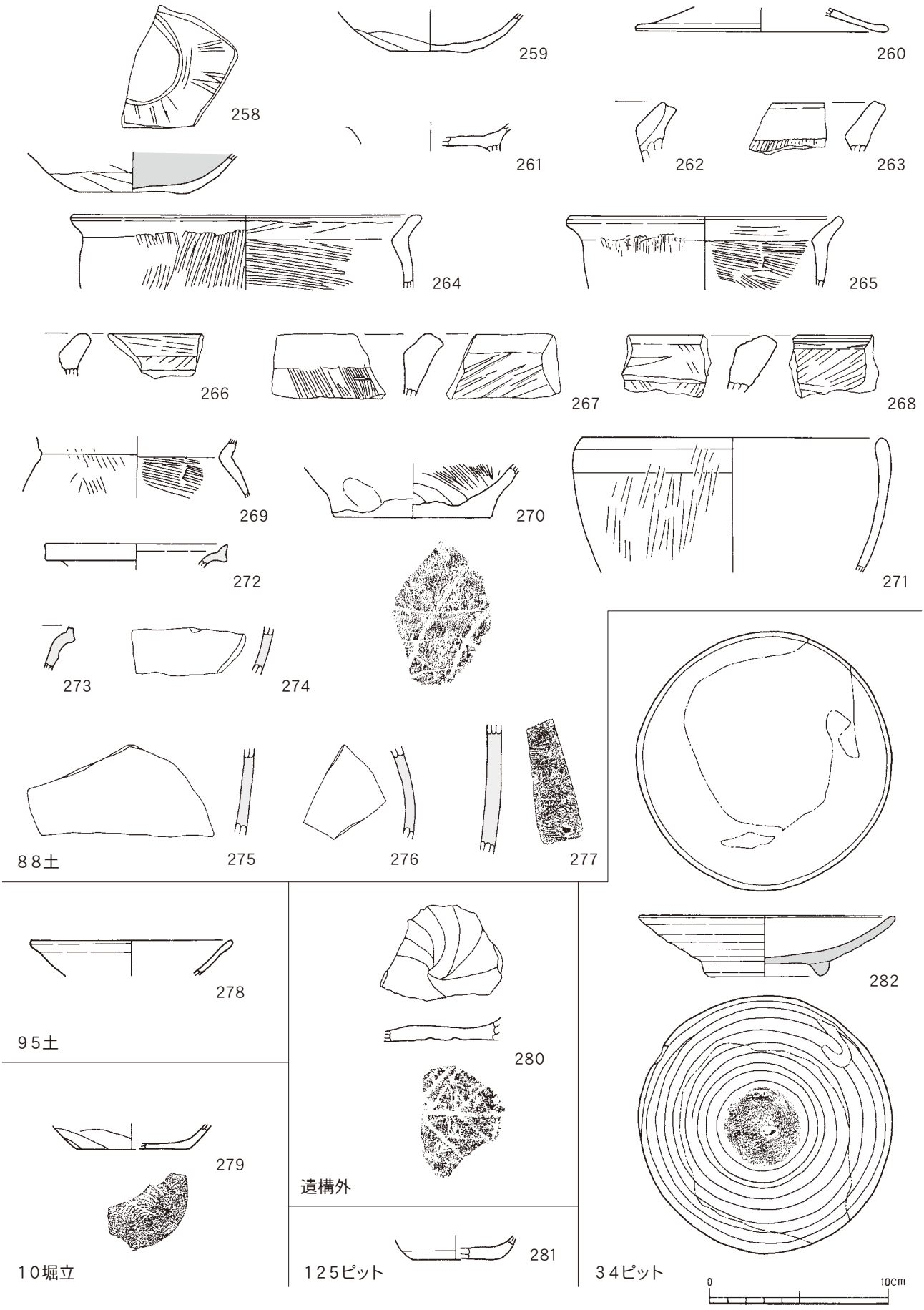
第168図　C区 出土遺物7（2・3・4・5・6・7号堀立柱建物跡）



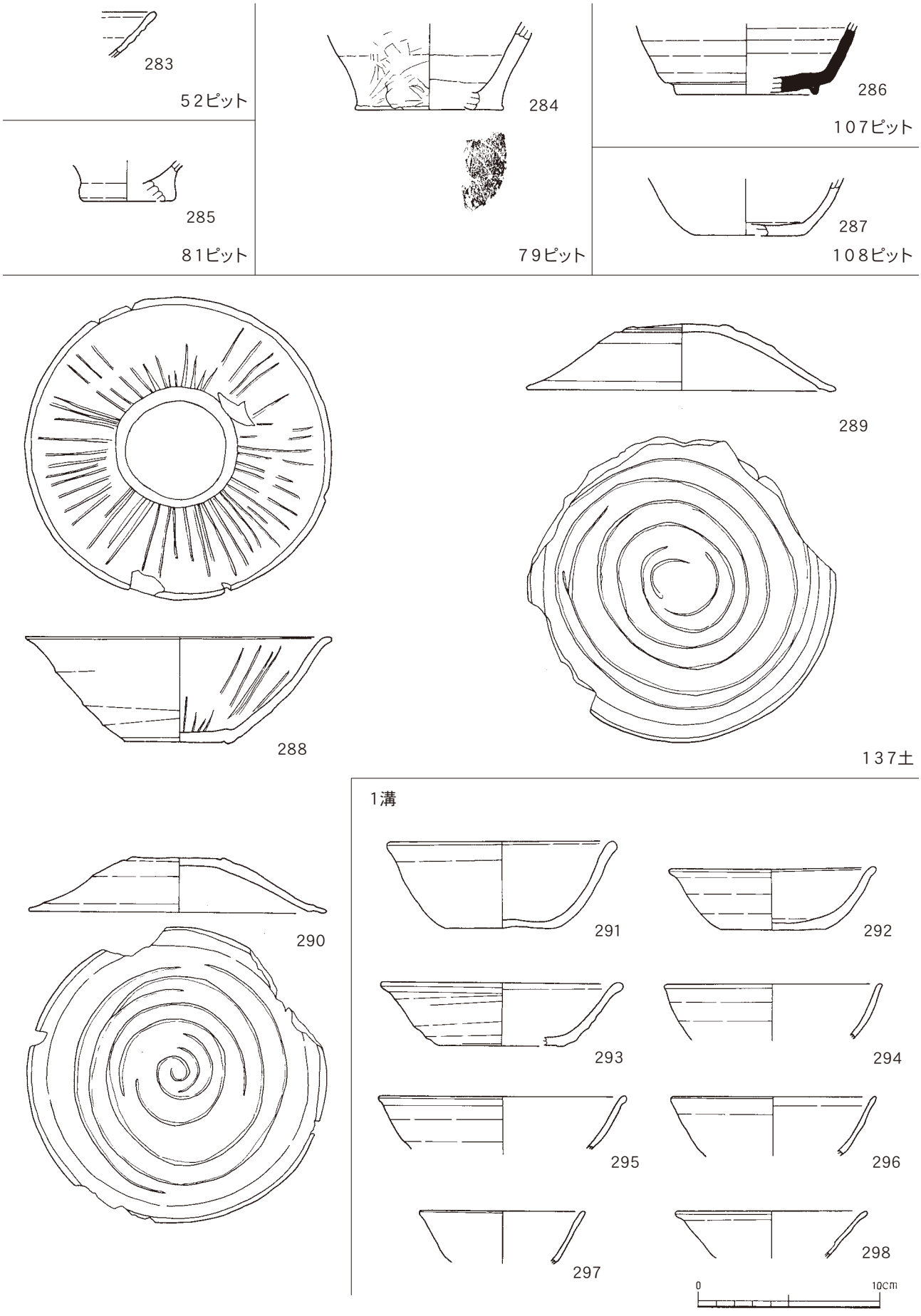
第169図　C区 出土遺物8（8・9・12号堀立柱建物跡、8・11・12・55・65号土坑）



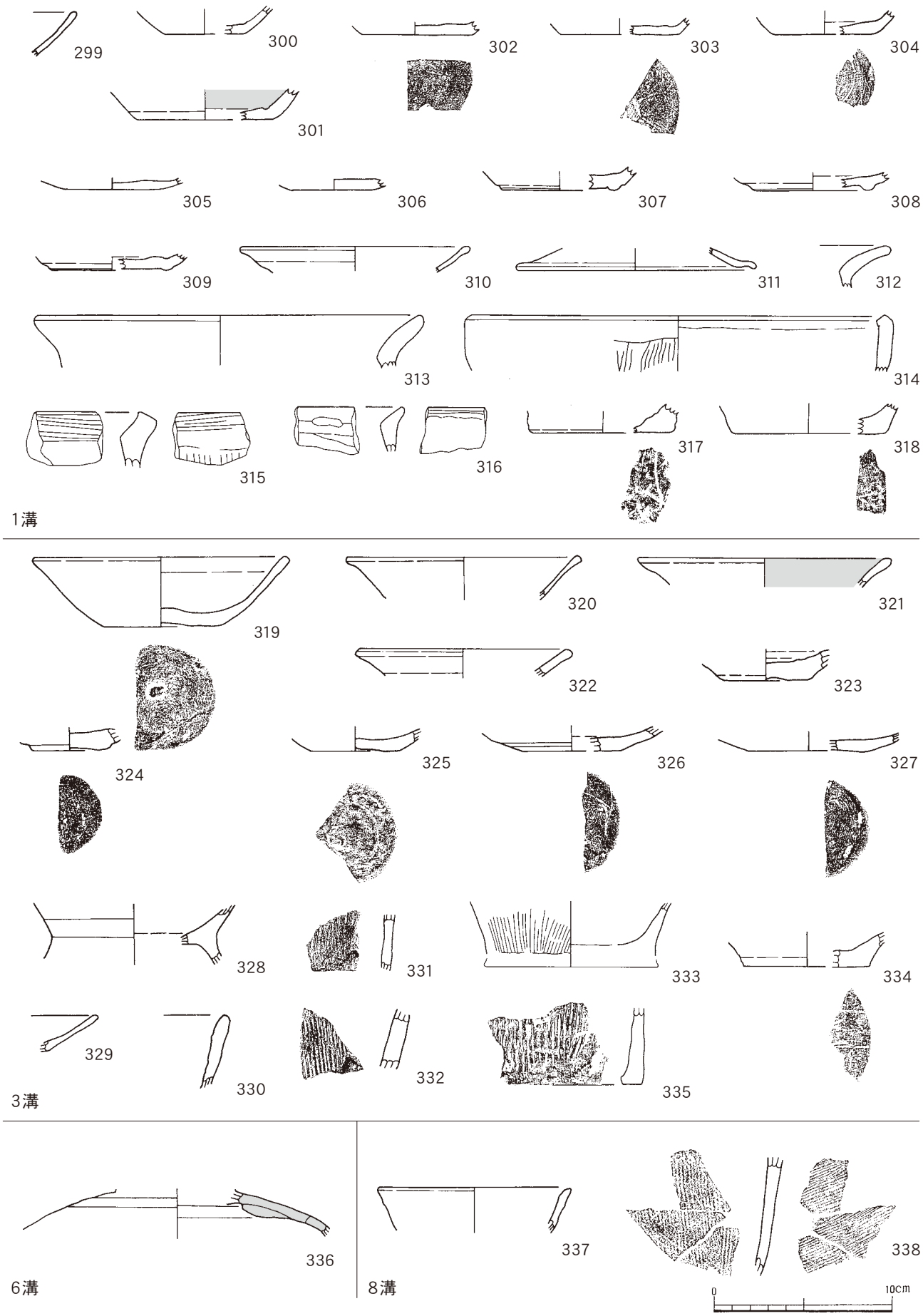
第170図　C区 出土遺物9（12号堀立柱建物跡、80・81・86・88号土坑）



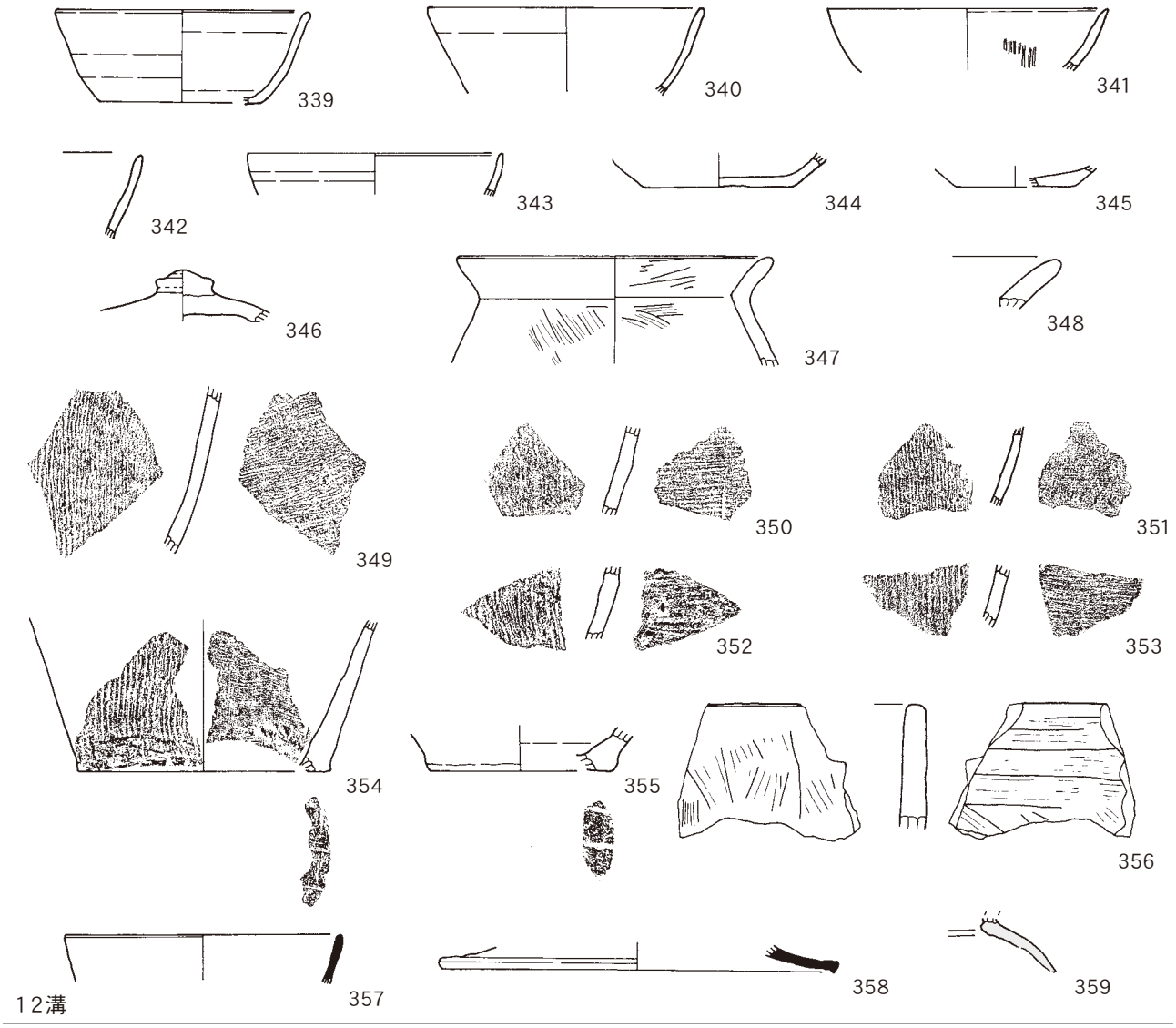
第171図　C区 出土遺物10（88・95・105・129号土坑、25・34ピット）



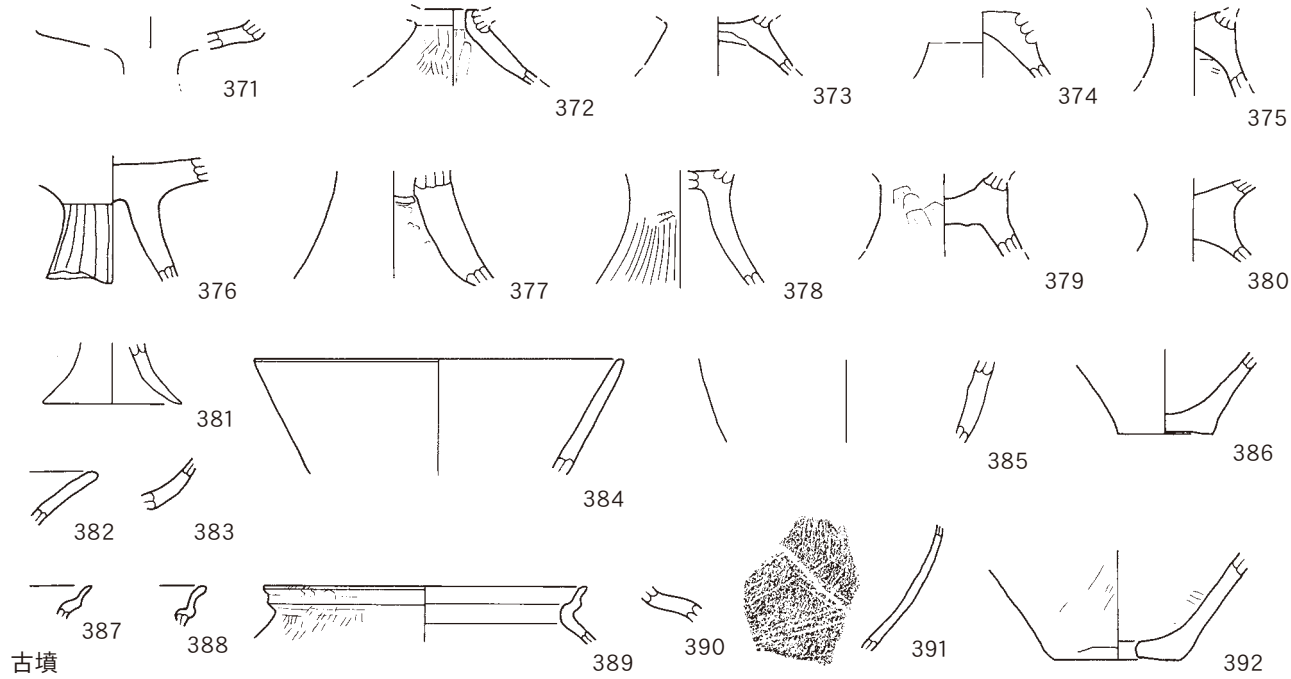
第172図　C区 出土遺物11（52・79・86・107・108ピット、137号土坑、1溝）

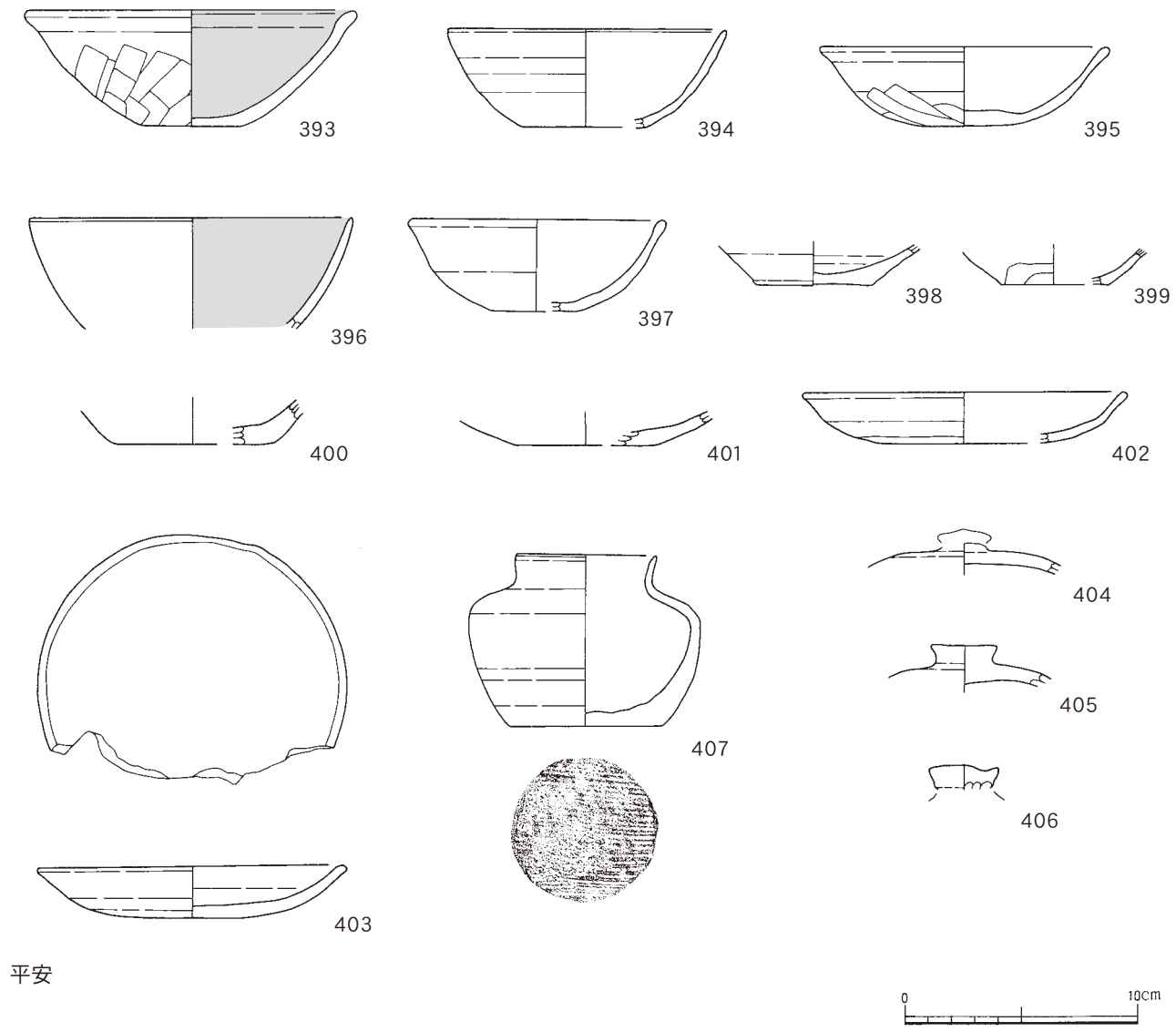


第173図　C区 出土遺物12（1・3・6・8号溝）

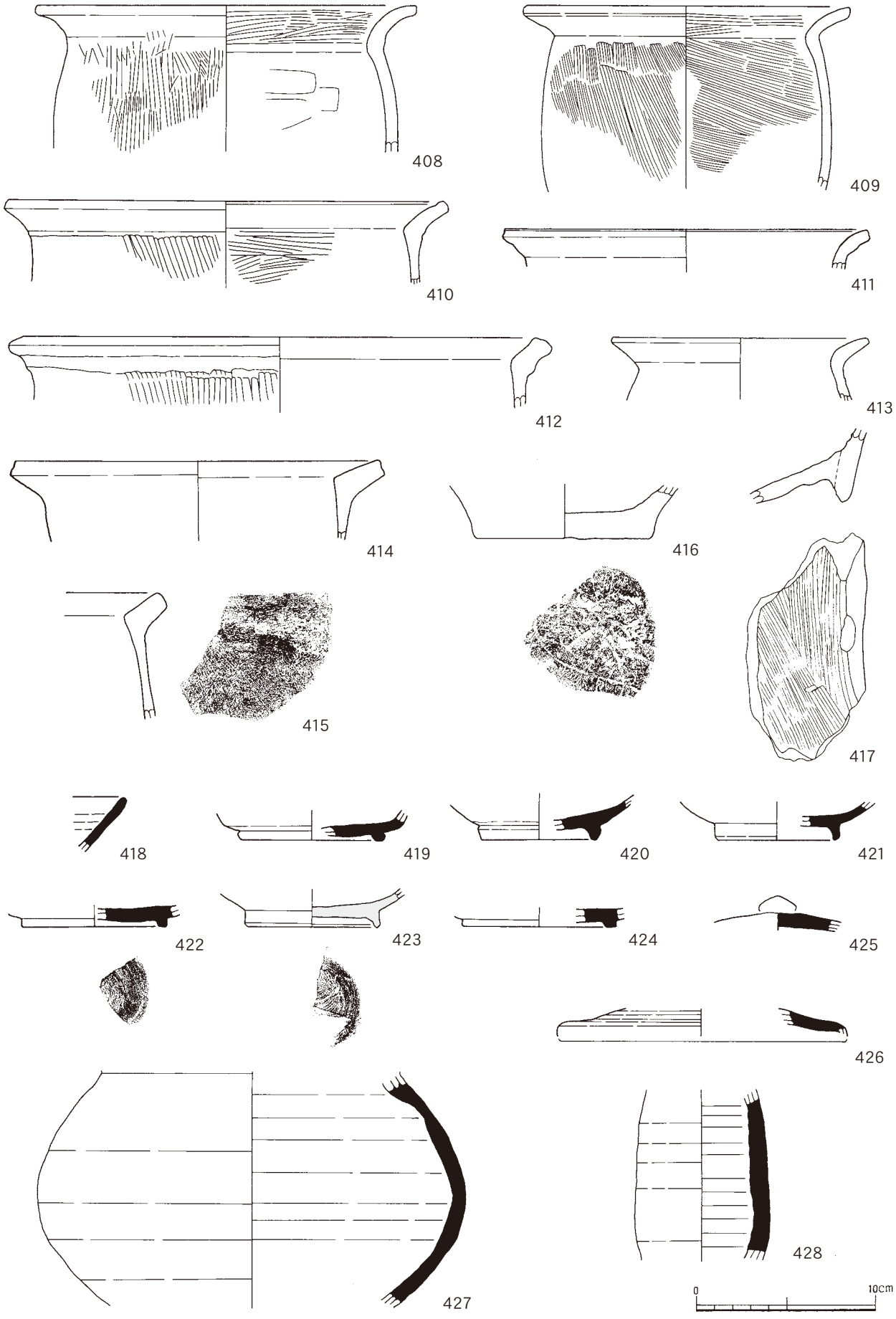


第174図　C区 出土遺物13（12・13・14号溝）

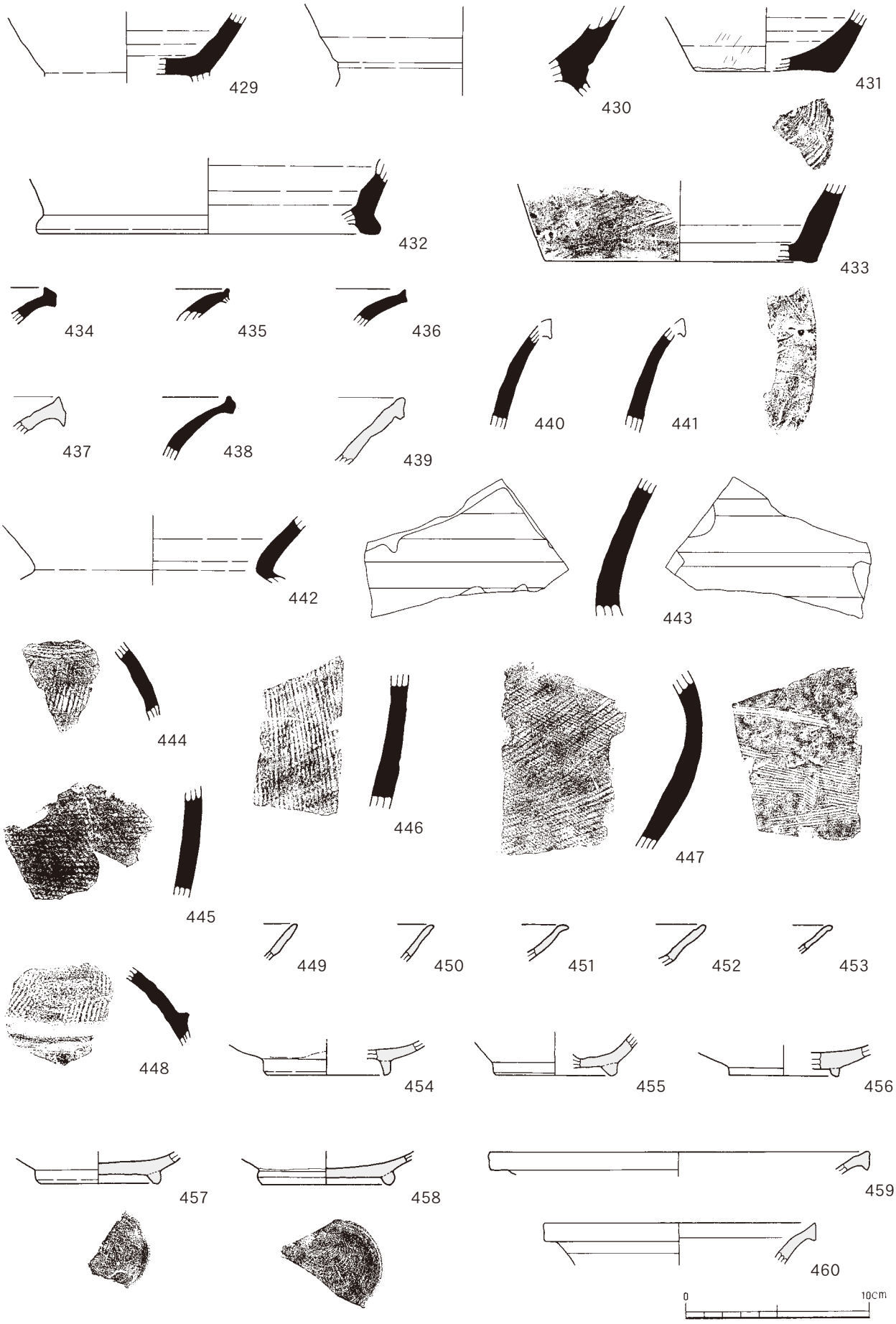




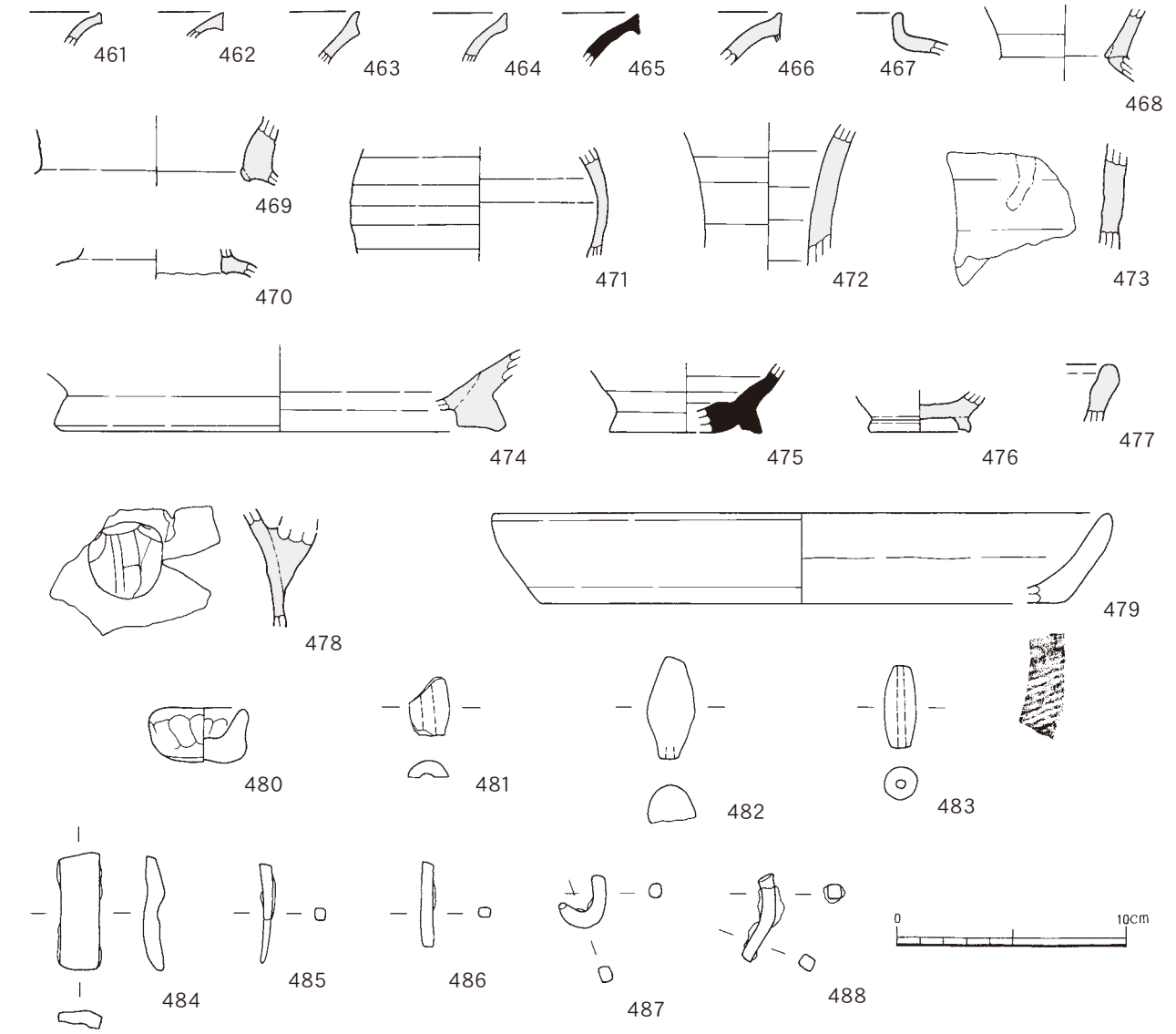
第175図　C区 出土遺物14（遺構外）

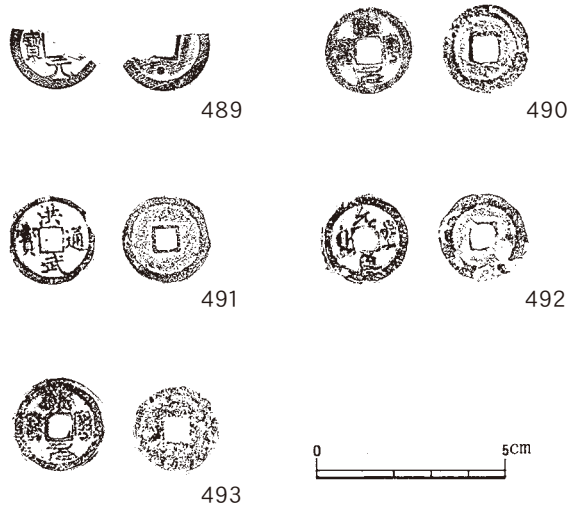


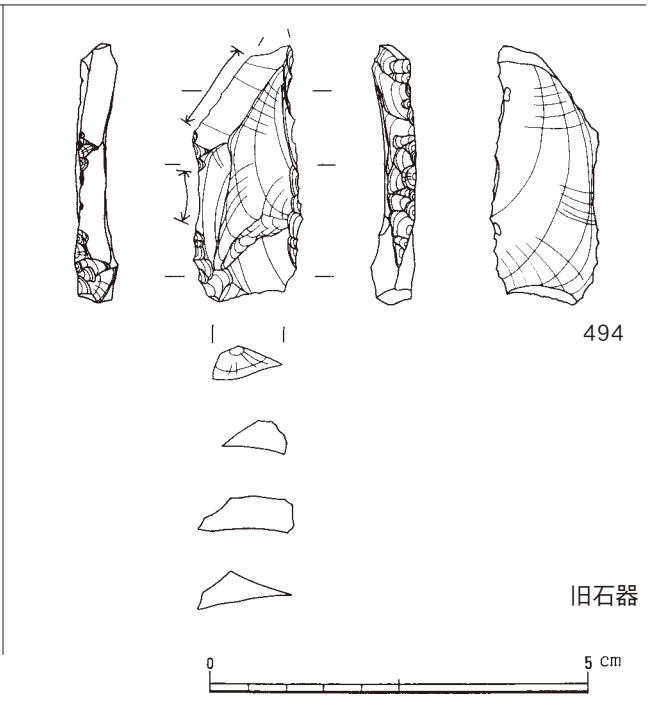
第176図　C区 出土遺物15（遺構外）



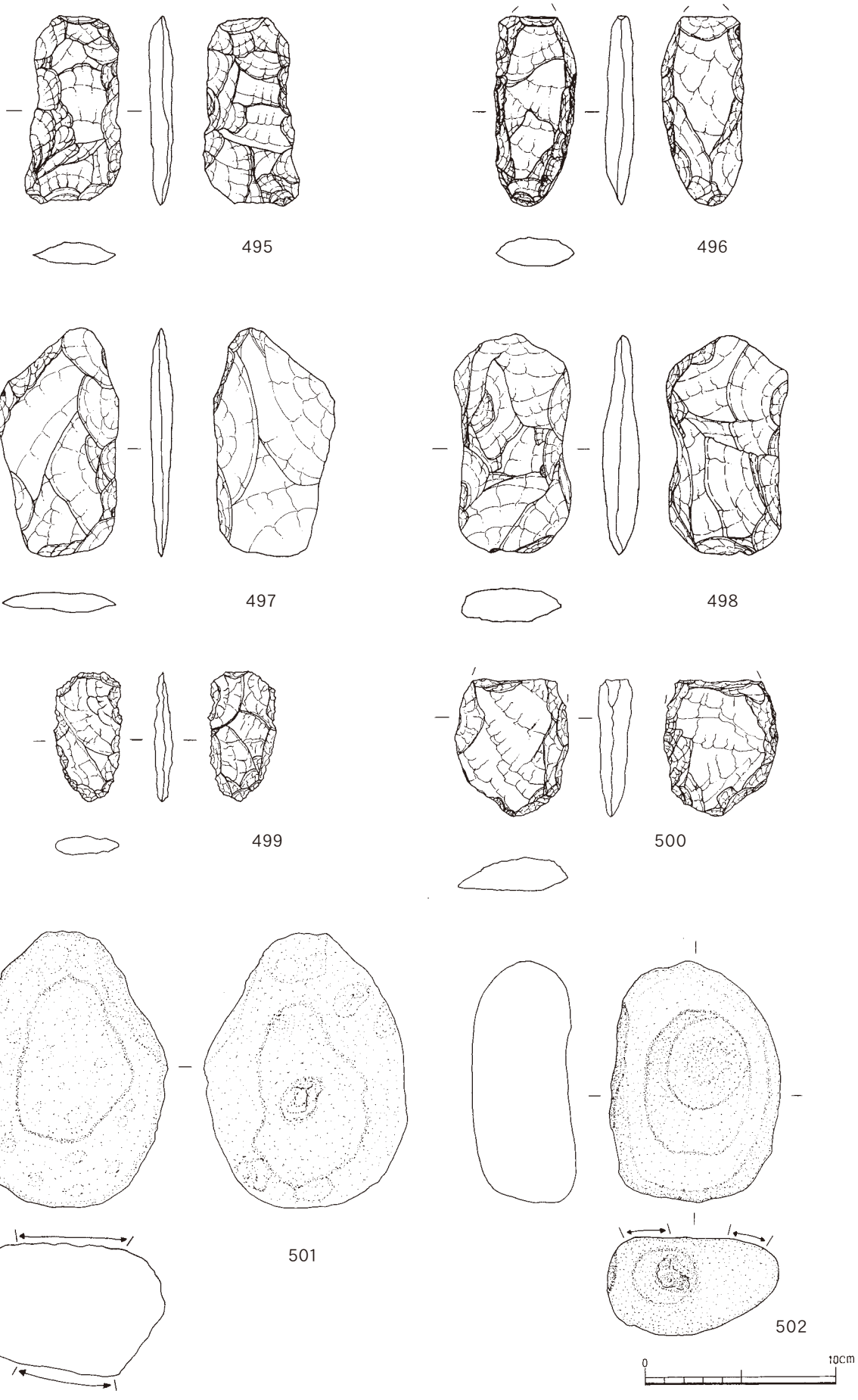
第177図　C区 出土遺物16（遺構外）



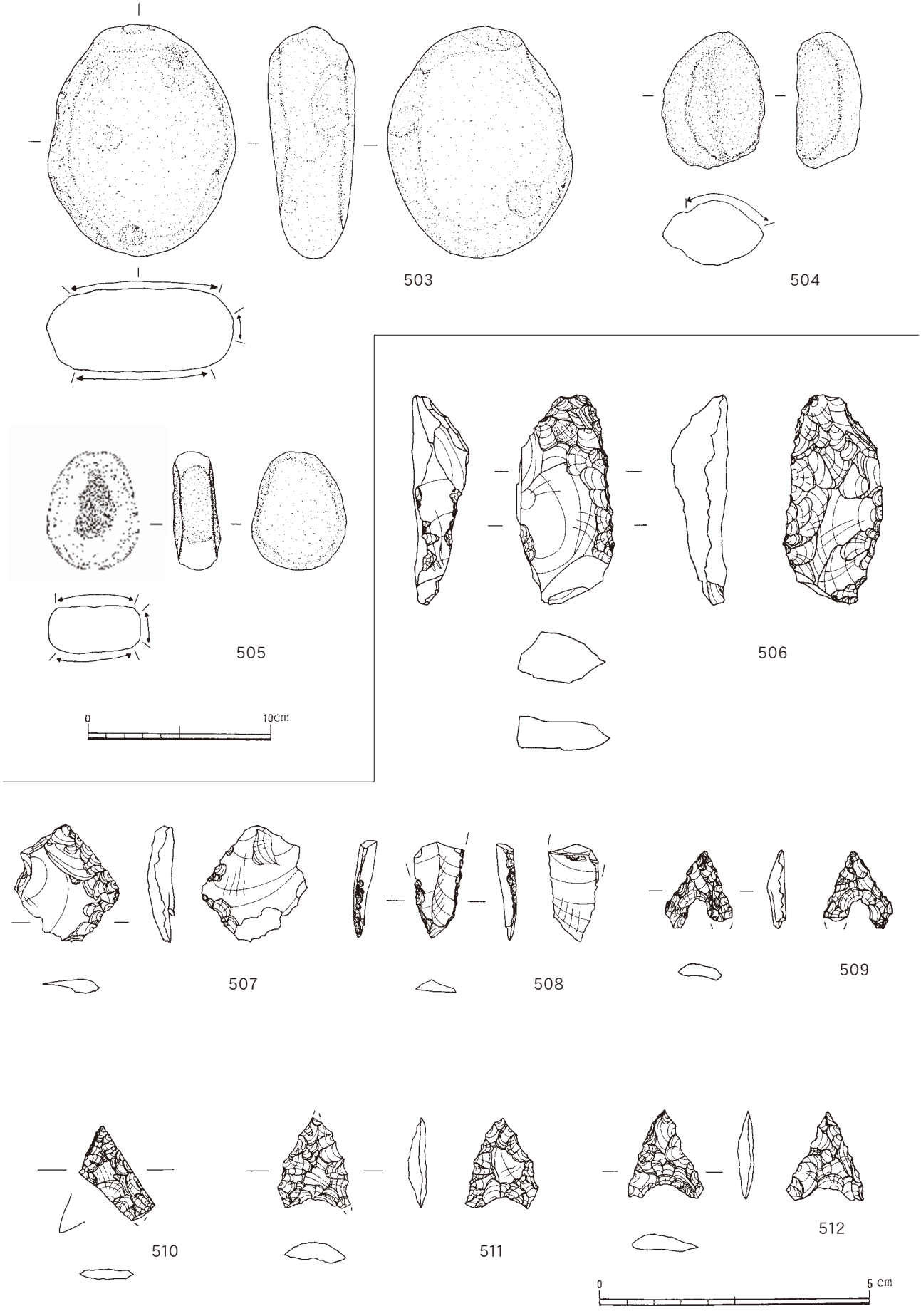




第178図　C区 出土遺物17（遺構外、土製品、鉄製品、石器）



第179図　C区 出土遺物18（石器）



第１８０図　Ｃ区 出土遺物１９（石器）

第4節　D区

（1）遺　構

D区で発見された遺構は、住居跡（竪穴）、掘立柱建物跡、焼土跡、土坑、ピット、溝、暗渠である。以下に各概要を示すが詳細は観察表に記した。

1　住居跡（第 182 ～ 194・222 ～ 234 図、写真図版 20 ～ 23・26 ～ 28、第 27・34 表）

1 ～ 13 号まで番号を付したが、8・11 号は欠番である。5 号住居跡は古墳時代、3・9・12 号住居跡は時期不明で、それ以外は古代に属すると思われる。

2　掘立柱建物跡（第 195 ～ 202・236 図、写真図版 23 ～ 28、第 28・30・31・34 表）

1 ～ 7 号まで番号を付したが、4 号は欠番である。1 号掘立柱建物跡を構成する 51・52 土坑から古墳時代の土師器が出土している。5 号掘立柱建物跡は時期不明である。それ以外は出土遺物から古代に属すると思われる。柱穴となる土坑・ピットの概要は各土坑・ピットの観察表に記した。

3　焼土跡（第 205・235 図、第 29・34 表）

調査時点ではグリッドごとに番号が付されていたが、煩雑なため 1 ～ 10 号まで通し番号とした。古代と思われる 8 号焼土跡以外は時期不明である。

4　土坑（第 206 ～ 211・236・237 図、写真図版 28、第 30・34 表）

土坑とピットの分類は調査時点で大きいものを土坑、小さいものをピットとした。1 ～ 116 号まで番号を付したが、42・60・63・65 ～ 73・78・93・94・109 ～ 114 号は欠番である。23・51・53 号土坑から古墳時代の土師器が出土しているが、それ以外は古代に属すると思われる。

5　ピット（第 212 ～ 216・238 図、第 31・34 表）

1 ～ 135 号まで番号を付したが、38・44・46・54・57・62・65・67・70 ～ 72・78・85・86・93 号は欠番である。7・42・43・116・132・134 号ピットは古代に属すると思われるがそれ以外は時期不明である。98 号ピットから鉄滓 2 点が出土した。

6　溝（第 217 ～ 221・239・240 図、写真図版 29、第 32・34・36 表）

1 ～ 22 号まで番号を付したが 8・11 号は欠番である。1 ～ 6・9・12・13・16 ～ 19・22 号溝は古代と考えられるがそれ以外は時期不明である。

7　暗渠（第 181 図、第 33・34 表）

1 ～ 5 まで番号を付した。暗渠 1・3 はほぼ N-30° -E の方向にのび、暗渠 2・4・5 はそれに対して約 80°東に傾いている。暗渠 1 ～ 4 から古代または古墳時代の土師器が出土しているが年代は不明である。

（2）遺　物（第 222 ～ 245 図、写真図版 27 ～ 29、第 34 ～ 36 表）

本区からは縄文時代の土器・石器、古墳時代・古代の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。詳細は表 D10 ～ 12 に記す。

第28表　住居跡観察表

（m）

遺構名	図番号	写真図版	位　置	重　複	ピット	カマド	規模（長軸×短軸）	平面形	深さ	主　軸	時代	備　考
1号住居跡	182・183	D1・2・7	Q・R－32・33	無	無	北カマド	東西 3.88 ×南北 3.60	隅丸方形	0.20	N-5° -E	奈良	遺構くん下場・ピットなし
2号住居跡	184・185	D2・7	Q・R－38・39	3 住	P 1 : 0.3 × 0.25	東壁カマド	東西（2.7）×南北 2.3	隅丸方形	0.15	N-29° -E	平安	東壁調査区外か　遺構くん上場のみ
3号住居跡	184	D 2	Q・R－38・39	2 住	無	不明	南北（3.5）×東西（2.1）	隅丸方形か	0.15	N-10° -E	不明	東壁調査区外。土坑 1 基（0.9 × 0.75、深さ不明）。遺構くん上場のみ。住居跡ではない可能性有。
4号住居跡	186	D3	R・S－37・38	12 溝	P 1 : 0.4 × 0.35・深さ 0.1、P 2 : 0.35 × 0.35・深さ 0.9	無	南北 4.5 ×東西（3.8）	隅丸方形	0.00	N-16° -E	平安	北・西・南壁・東壁の一部に周溝。東壁際北寄りに焼土。
5号住居跡	187	D3・7・8	S－34・35		無	無	東西 4.1 ×南北 2.8	不整形	0.05	不明	古墳	中央と北壁寄りに焼土
6号住居跡	188・189	D3・4・7・8	T・U－36・37	22 溝	無	北壁東寄り、掘方深さ 0.08	東西 4.5 ×南北 4.4	隅丸方形	0.15	N-21° -E	平安	カマド部分以外に周溝、深さ 0.2。遺構くんなし 炭化材年代測定
7号住居跡	190	D4・9	S・T－37・38	19 溝・Pit134	P 1 : 径 0.3・深さ 0.1、 P 2 : 0.7 × 0.45・深さ 0.2	不明	東西 3.5 ×南北 2.7	方形か	0.10	N-18° -W	平安	
8号住居跡	欠番											
9号住居跡	191		N－34	10 住、1 焼、13・14・15・22 溝	P 1 : 0.25 × 0.2、P 2 : (0.2) × (0.2)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	住居跡ではない可能性有
10号住居跡	191・192	D4・9	N－34・35	9 住、14・15 溝	P1 : 0.3 × 0.25	東壁か。掘方 : 南北 0.9 × 東西 0.75・深さ 0.1	不明	不明	0.00	不明	平安	カマドのみ 炭化材年代測定
11号住居跡	欠番											
12号住居跡	193		N－35	1 溝、暗渠 4	不明	不明	不明	不明	0.05	N-0° -E か	不明	北西端から西壁の一部のみ。住居跡ではない可能性有。
13号住居跡	194	D4・9	T・U－38	無	P 1 : 0.3 × 0.2・深さ 0.04、P 2 : 0.2 × 0.15・深さ 0.04、P 3 : 径 0.1・深さ 0.05	不明	南北 3.25 ×東西 2.75	隅丸方形	0.11	N-1° -E	平安	西壁に周溝 炭化材年代測定

第29表　掘立柱建物跡観察表

（m）

遺構名	図番号	写真図版	位　置	重　複	柱　穴　No.	桁行×貼行	柱間	主　軸	時代	備　　考
1号掘立柱建物跡	195	D４・９	P・Q－37・38		44・45・46・48・49・51・52・53・54・107 土	2間×2間	南北：1.7 ～ 2.1 東西：1.45 ～ 2.1	N-15°　-E	古墳	52・107 土は所属しない可能性有。 委託図番号 SB4
2号掘立柱建物跡	196		N～P－39・40	4 溝	25・26・29・31・32・34・37・40・43 土	3間×2間	南北：1.3 ～ 1.7 東西 1.6 ～ 3.3	N-27°　-E	平安	南側の中央柱穴無。 委託図番号 SB5
3号掘立柱建物跡	197	D5	Q・R－37・38	12 溝	85・87・88・89・99・100・101 土、135 ピット	2間×2間	南北：1.25 ～ 1.75 東西：1.8 ～ 1.9	N-15°　-E	平安	102 土が所属する可能性有。 委託図番号 SB3
4号掘立柱建物跡	欠番									
5号掘立柱建物跡	198	D5	P・Q－33・34	9 溝	61・62・64・74・103・104・105 土、75 ピット	2間×2間	南北：1.9 ～ 2.2 東西：1.75 ～ 1.95	N-5°　-E	不明	委託図番号 SB1
6号掘立柱建物跡	199	D6	R－33・34	9 溝、暗渠 1	73・74・79・80・81・84・117・118 ピット	2間×2間	南北：1.55 ～ 1.85 東西：2.0 ～ 2.2	N- 4°　-E	不明	委託図番号 SB2
7号掘立柱建物跡	200		L－38		2・3・4・17 土	（2間）×（1間）	南北：1.4 東西：1.0 ～ 1.4	N-15°　-E	平安	北側 2 分の 1 以上は調査区外。 委託図番号 SB6

第30表　焼土跡観察表

（m）

遺構名	図番号	写真図版	元遺構名	位　置	重　複	平面形	長軸	短軸	深さ	時代	備　考
1号焼土跡	201		N－34焼土1	N―34	9住、4溝、暗渠4	不整形	0.58	0.48	0.09	不明	
2号焼土跡	201		N－35焼土1	N―35	1溝、暗渠5	長円	0.50	0.32	0.06	不明	
3号焼土跡	201		N－36焼土1	N・O－36		不整形	0.90	0.80	0.12	不明	
4号焼土跡	201		N－36焼土2	N－36		長円	1.06	0.78	0.10	不明	
5号焼土跡	201		Q－37焼土1	Q－37		長円	0.90	0.72	0.21	不明	
6号焼土跡	201		R－35焼土	Q・R－35		長円	1.40	1.00	0.10	不明	
7号焼土跡	201		T－35焼土1	T－35		不整形	0.50	0.40	0.00	不明	
8号焼土跡	201		T－36焼土1	T－36		不整形	2.00	1.12	0.07	平安	
9号焼土跡	201		T－36焼土2	T－36		長円	0.96	0.48	0.05	不明	
10号焼土跡	201		T－36焼土3	T－36		長円	0.76	0.50	0.06	不明	

第31表　土坑観察表

（m）

遺構名	図番号	写真図版	位　置	重　複	掘立柱建物跡	平面形	長軸	短軸	深さ	時代	備　考
1土坑	202		N－36	暗渠1・2・3		不整形	(1.10)	0.88	0.08		約1/4のみ確認
2土坑	200		L－38		7掘立	円形	0.60	0.60	0.46		
3土坑	200		L－38		7掘立	円形	0.68	0.60	0.42		
4土坑	200		L－38		7掘立	長円	0.72	0.60	0.39		古植生
5土坑	202		M－37・38			円形	0.68	0.52	0.31		
6土坑	202		M－38			円形	0.72	0.60	0.37		
7土坑	202		M－38			長円	0.70	0.58	0.51		
8土坑	202		M－39・40			円形	0.82	0.71	0.43		
9土坑	202		M－40			円形	0.72	0.68	0.39		
10土坑	203		M－39・40			長円	1.11	0.72	0.37		
11土坑	203		M－40	19ピット		長円	1.10	0.70	0.38		
12土坑	203		M－39	39・40ピット		長円	0.94	0.74	0.20		
13土坑	203		M－40	14土、5ピット		円形	1.00	0.70	0.33		
14土坑	203		M－40	13土		円形	0.80	0.60	0.29		炭化材年代測定
15土坑	203		N－40	16土		長円	0.90	0.55	0.87		
16土坑	203		M・N－40	15土		円形	(0.60)	0.60	0.35		
17土坑	200		L－38		7掘立	長円	0.76	0.60	0.40		
18土坑	203		N－40	28ピット		長円	1.10	0.80	0.31		
19土坑	203		N―39・40			長円	0.94	0.65	0.10		
20土坑	203		N－40	21土		長円	1.20	0.90	0.26		
21土坑	203		N－40	20土		円形	(0.70)	0.42	0.32		
22土坑	203		N－40			円形	0.65	0.60	0.31		炭化材年代測定
23土坑	204		O－39			長円	1.00	0.70	0.41		
24土坑	204		N－39			円形	0.60	0.45	0.27		
25土坑	204		N－39		2掘立	長円	0.60	0.60	0.26		
26土坑	196		O－39	27土	2掘立	円形	0.82	(0.56)	0.25		
27土坑	196		O－39	26土		円形	0.94	0.86	0.23		
28土坑	204		O－39	59土		円形	0.45	0.45	0.24		
29土坑	204		O－39	30土		長円	0.70	0.52	0.16		
30土坑	204		O－39	29土		円形	0.60	(0.40)	0.47		
31土坑	196		N・O－39	4溝	2掘立	長円	1.30	0.65	0.19		
32土坑	196		O－39・40	4溝	2掘立	長円	1.00	0.68	0.32		
33土坑	211		L・M－40	2溝		長円	(0.54)	(0.70)	0.27		
34土坑	196		O－39・40		2掘立	円形	(0.50)	(0.60)	0.29		
35土坑	204		O－39			円形	0.80	(0.70)	0.24		
36土坑	204		O－39			円形	0.96	0.90	0.31		
37土坑	196		O－39	38土	2掘立	長円	0.76	0.60	0.21		
38土坑	196		O－39	37土		円形	0.74	(0.70)	0.10		
39土坑	204		P－38			円形	0.48	0.40	0.04		
40土坑	196		O－39	41土	2掘立	円形	0.70	(0.56)	0.23		
41土坑	196		O－39	40土		円形	0.64	0.62	0.22		
42土坑	欠番										

遺構名	図番号	写真図版	位　置	重　複	掘立柱建物跡	平面形	長軸	短軸	深さ	時代	備　考
43 土坑	196		O・P－39		2掘立	長円	0.95	0.55	0.28		
44 土坑	195		P－38		1掘立	方形	0.62	0.54	0.23		
45 土坑	195		P－38		1掘立	円形	0.62	0.54	0.14		
46 土坑	195		P－38		1掘立	方形	0.68	0.48	0.19		炭化材年代測定
47 土坑	204		P－39			長円	1.38	0.80	0.43		
48 土坑	195		P－38		1 掘立	円形	0.52	0.50	0.22		
49 土坑	195		P－38		1 掘立	円形	0.70	0.60	0.31		
50 土坑	204		P－37			長円	1.00	0.60	0.22		
51 土坑	195		P－37・38	7 溝	1掘立	円形	0.80	0.68	0.22		
52 土坑	195		P－38	7 溝	1 掘立	不整形	0.86	0.62	0.19		
53 土坑	195		P・Q－38	56 土	1掘立	長円	(0.58)	0.26	0.15		
54 土坑	195		Q－38		1掘立	円形	0.40	0.38	0.18		
55 土坑	204		Q－39			方形	0.84	(0.46)	0.11		
56 土坑	204		Q－38	53 土		長円	0.84	0.50	0.20		
57 土坑	204		P－37			円形	0.70	0.60	0.10		
58 土坑	205		P－39	6 溝		長円	0.60	0.44	0.12		
59 土坑	196		O－39	28 土		不整形	0.70	0.50	0.39		
60 土坑	欠番										
61 土坑	198		P－33・34		5掘立	円形	0.80	0.74	0.14		
62 土坑	198		P－34		5掘立	円形	0.64	0.60	0.19		
63 土坑	欠番										
64 土坑	198		P－34		5掘立	長円	0.88	0.58	0.12		
65 土坑	欠番										
66 土坑	欠番										
67 土坑	欠番										
68 土坑	欠番										
69 土坑	欠番										
70 土坑	欠番										
71 土坑	欠番										
72 土坑	欠番										
73 土坑	欠番										
74 土坑	198		Q－34		5掘立	円形	0.70	0.66	0.32		
75 土坑	205		P－33			円形	0.50	0.42	0.32		
76 土坑	205		Q－33			円形	0.54	0.48	0.11		
77 土坑	205		Q－33			円形	0.50	0.40	0.18		
78 土坑	欠番										
79 土坑	205		Q－33			長円	0.70	0.52	0.25		
80 土坑	205		Q－33			円形	0.60	0.50	0.22		
81 土坑	205		Q－33			円形	0.30	0.26	0.12		
82 土坑	205		Q－33			円形	0.60	0.45	0.18		
83 土坑	205		S－32	84 土		円形	(0.40)	0.42	0.13		
84 土坑	205		S－32	83 土、89 ピット		長円	0.80	0.58	0.17		
85 土坑	205		R－38			円形	0.54	0.50	0.21		
86 土坑	205		R－38			円形	0.58	0.48	0.14		
87 土坑	197		Q－37		3掘立	円形	0.82	0.70	0.32		
88 土坑	197		Q－37		3掘立	長円	0.98	0.70	0.23		
89 土坑	197		R－37		3掘立	長円	0.92	0.64	0.29		
90 土坑	205		Q－37			円形	(0.60)	0.54	0.06		
91 土坑	205		Q－37	18 溝		不整形	0.50	(0.40)	0.13		
92 土坑	205		Q－37	18 溝		不整形	0.68	(0.30)	0.07		
93 土坑	欠番										
94 土坑	欠番										
95 土坑	205		N－36			円形	1.24	1.04	0.10		
96 土坑	205		N－36	暗渠5		不整形	(0.65)	(0.80)	0.08		
97 土坑	205		N－36			円形	0.58	0.48	0.26		
98 土坑	205		S－36・37			不整形	0.60	0.56	0.06		
99 土坑	197		Q－37・38		3掘立	長円	0.90	0.64	0.18		
100 土坑	197		Q－38		3掘立	円形	0.75	0.70	0.28		

遺構名	図番号	写真図版	位　置	重　複	掘立柱建物跡	平面形	長軸	短軸	深さ	時代	備　考
101 土坑	197		R－37		3堀立	円形	0.80	0.70	0.08		
102 土坑	197		Q・R－37			円形	0.42	0.40	0.16		
103 土坑	198		Q－34		5掘立	長円	0.74	0.54	0.27		
104 土坑	205		P・Q－33・34			円形	0.74	0.60	0.35		
105 土坑	198		P・Q－34		5掘立	円形	0.66	0.64	0.17		
106 土坑	205		P－38			長円	0.84	0.68	0.17		
107 土坑	205		P－38			長円	0.70	0.50	0.04		
108 土坑	205		R－34			円形	0.96	0.84	0.21		
109 土坑	欠番										
110 土坑	欠番										
111 土坑	欠番										
112 土坑	欠番										
113 土坑	欠番										
114 土坑	欠番										
115 土坑	205		N－36			円形	(0.52)	0.70	0.12		
116 土坑	205		N－35・36	1 溝、暗渠 5		不整形	1.30	0.60	0.03		

第32表　ピット観察表

(m)

遺構名	図版番号	写真図版	位　置	重　複	掘立柱建物跡	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代	備　考
1 号ピット	206		L－38			円形	0.20	0.20	0.17		
2 号ピット	206		L－38			円形	0.20	0.30	0.21		
3 号ピット	207		L－38	4 ピット		円形	(0.24)	0.20	0.07		
4 号ピット	207		L－38	3 ピット		円形	0.50	0.40	0.06		
5 号ピット	207		M－37・38			円形	0.32	0.28	0.12		
6 号ピット	207		M－38	13 ピット		円形	(0.20)	0.24	0.11		
7 号ピット	207		M－38			円形	0.24	0.22	0.08		
8 号ピット	207		M－38			円形	0.42	0.30	0.30		
9 号ピット	207		M－37			円形	0.38	0.32	0.18		
10 号ピット	207		M－37			円形	0.34	0.26	0.11		
11 号ピット	207		M－38			円形	0.30	0.26	0.14		
12 号ピット	207		M－36			円形	0.42	0.32	0.03		
13 号ピット	207		M－38	6 ピット		円形	0.36	0.32	0.04		
14 号ピット	207		M－38			長円	0.44	0.32	0.10		
15 号ピット	207		L－40			円形	0.20	0.18	0.29		
16 号ピット	207		M－40			円形	0.64	0.60	0.15		
17 号ピット	207		M－40			円形	0.62	0.52	0.21		
18 号ピット	208		M－40	19 ピット		長円	0.31	0.22	0.08		
19 号ピット	208		M－40	11 土、18 ピット		円形	0.58	0.44	0.12		
20 号ピット	208		M－39			円形	0.35	0.32	0.01		
21 号ピット	208		M－39			長円	0.40	0.30	0.22		
22 号ピット	208		M－39			円形	0.36	0.30	0.17		
23 号ピット	208		M－40			長円	0.70	0.48	—		
24 号ピット	207		M－40			円形	0.40	0.38	0.13		
25 号ピット	208		M－40			(円形)	0.42	0.30	0.17		
26 号ピット	208		M－38			長円	0.64	0.22	0.15		
27 号ピット	208		M－39			円形	0.30	0.20	0.14		
28 号ピット	208		N－40			(円形)	0.40	0.28	0.04		
29 号ピット	208		N－39			円形	0.40	0.38	—		
30 号ピット	208		N－39	31 ピット		長円	(0.44)	0.32	0.29		
31 号ピット	208		N－39	30 ピット		円形	(0.42)	0.40	0.15		
32 号ピット	208		O－39			円形	0.32	0.30	0.21		
33 号ピット	208		O－39			円形	0.35	0.35	0.08		
34 号ピット	208		N－39			円形	0.30	0.22	0.12		
35 号ピット	208		N－39			円形	0.30	0.26	0.01		

遺構名	図版番号	写真図版	位 置	重 複	掘立柱建物跡	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	時代	備 考
36 号ピット	208		N－39			長円	0.48	0.30	0.22		
37 号ピット	209		N－39			長円	0.65	0.48	0.17		
38 号ピット	欠番										
39 号ピット	209		M－39			不整形	0.56	(0.30)	0.13		
40 号ピット	209		M－40			不整形	0.52	(0.18)	0.17		
41 号ピット	209		P－39			円形	0.48	0.40	0.15		
42 号ピット	209		O－39			長円	0.42	0.36	0.14		
43 号ピット	209		O－39			長円	0.42	0.32	0.04		
44 号ピット	欠番										
45 号ピット	209		O－38			円形	0.34	0.26	0.23		
46 号ピット	欠番										
47 号ピット	209		P－38			円形	0.40	0.30	0.18		
48 号ピット	209		P－38			長円	0.38	0.22	0.07		
49 号ピット	209		P－38			円形	0.20	0.20	0.07		
50 号ピット	209		P－38			円形	0.24	0.20	0.11		
51 号ピット	209		P－39			円形	0.24	0.24	0.08		
52 号ピット	209		P－39			長円	0.38	0.24	0.21		
53 号ピット	209		P－39			円形	0.28	0.28	0.16		
54 号ピット	欠番										
55 号ピット	209		O－38			円形	0.25	0.20	0.07		
56 号ピット	209		P－37・38			円形	0.30	0.26	0.17		
57 号ピット	欠番										
58 号ピット	209		P－38			円形	0.24	0.22	0.12		
59 号ピット	209		P－38			長円	0.30	0.22	0.12		
60 号ピット	209		Q－38			長円	0.38	0.26	0.17		
61 号ピット	209		Q－38			円形	0.40	0.36	0.04		
62 号ピット	欠番										
63 号ピット	209		Q－38			円形	0.42	0.32	不明		
64 号ピット	209		P－39			円形	0.40	0.32	0.09		
65 号ピット	欠番										
66 号ピット	212		N－39	6 溝		円形	0.30	0.24	0.20		
67 号ピット	欠番										
68 号ピット	209		N－39	4 溝		円形	0.48	0.45	0.09		
69 号ピット	209		P－39	6 溝		円形	0.50	0.40	0.18		
70 号ピット	欠番										
71 号ピット	欠番										
72 号ピット	欠番										
73 号ピット	199		R－34		6掘立	長円	0.42	0.40	0.16		
74 号ピット	199		R－34		6掘立	円形	0.34	0.30	0.06		
75 号ピット	198		Q－33		5掘立	円形	0.42	0.42	0.12		
76 号ピット	209		Q－33			円形	0.40	0.32	0.07		
77 号ピット	209		Q－33			円形	0.48	0.40	0.06		
78 号ピット	欠番										
79 号ピット	199		R－33		6掘立	円形	0.40	0.38	0.22		
80 号ピット	199		R－33		6掘立	円形	0.45	0.40	0.13		
81 号ピット	199		R－33		6掘立	円形	0.32	0.30	0.11		
82 号ピット	209		R－33			円形	0.32	0.32	0.13		
83 号ピット	209		Q－33			円形	0.40	0.32	0.13		
84 号ピット	209		R－34		6掘立か？	長円	0.48	0.32	0.14		
85 号ピット	欠番										
86 号ピット	欠番										
87 号ピット	209		S－32			円形	0.38	0.34	0.24		
88 号ピット	209		S－32			円形	0.28	0.26	0.20		
89 号ピット	206		S－32			不整形	(0.50)	(0.35)	0.36		
90 号ピット	209		S－32			円形	0.22	0.20	0.00		
91 号ピット	209		S－33			円形	0.30	0.24	0.17		
92 号ピット	209		T－32			円形	0.32	0.30	0.12		

遺構名	図版番号	写真図版	位　置	重　複	掘立柱建物跡	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	時代	備　考
93 号ピット	欠番										
94 号ピット	209		R－38			円形	0.30	0.30	0.12		
95 号ピット	209		R－38			円形	0.22	0.20	0.07		
96 号ピット	209		Q－38			円形	0.25	0.20	0.10		
97 号ピット	209		N－36	16 溝		円形	0.40	0.36	0.16		
98 号ピット	209		T－37	6 住		円形	0.38	0.24	不明		
99 号ピット	209		T－36・37	6 住		長円	0.36	0.36	不明		
100 号ピット	209		T－36	6 住		円形	0.52	0.50	不明		
101 号ピット	209		S－37			円形	0.40	0.34	0.29		
102 号ピット	209		S－37			円形	0.46	0.34	0.02		
103 号ピット	209		S－37			円形	0.30	0.30	0.13		
104 号ピット	209		T－38			円形	0.55	0.45	0.17		
105 号ピット	209		T－38			円形	0.40	0.30	0.14		
106 号ピット	209		T－38			円形	0.40	0.36	0.17		
107 号ピット	209		U－38			円形	0.30	0.26	0.27		
108 号ピット	209		T－38			円形	0.20	0.20	0.19		
109 号ピット	210		T－35			円形	0.40	0.34	0.18		
110 号ピット	210		T－35			円形	0.40	0.36	0.24		
111 号ピット	210		T－35			円形	0.22	0.20	0.10		
112 号ピット	210		T－34			円形	0.24	0.20	0.14		
113 号ピット	210		Q－38			円形	0.44	0.40	0.34		
114 号ピット	210		Q－33			円形	0.58	0.50	0.14		
115 号ピット	210		P－38・39	6 溝		円形	0.25	0.25	0.06		
116 号ピット	199		R－34		6掘立	円形	0.50	0.48	0.19		
117 号ピット	199		R－34		6掘立	円形	0.40	0.40	0.34		
118 号ピット	210		R－34			円形	0.38	0.30	0.08		
119 号ピット	210		R－35			円形	0.40	0.40	0.07		
120 号ピット	210		R・S－34			円形	0.42	0.40	0.06		
121 号ピット	210		R－35・36			円形	0.40	0.36	0.22		
122 号ピット	210		R－33			円形	0.28	0.26	0.14		
123 号ピット	210		M－38			円形	0.30	0.30	0.13		
124 号ピット	210		M－38			円形	0.20	0.20	0.05		
125 号ピット	210		M－38			円形	0.32	0.32	0.12		
126 号ピット	210		S－36			円形	0.40	0.38	0.18		
127 号ピット	210		O－39			円形	0.40	0.32	0.18		
128 号ピット	210		O－38			円形	0.30	0.30	0.27		
129 号ピット	210		M－39			円形	0.60	(0.30)	0.22		
130 号ピット	210		P－39			長円	0.86	0.48	0.24		
131 号ピット	210		Q－36・37			長円	0.40	0.34	0.11		
132 号ピット	210		R－34・35			円形	0.64	0.54	0.17		
133 号ピット	210		O・P－39			円形	0.64	0.48	0.27		
134 号ピット	210		S－37			円形	0.40	0.34	0.20		
135 号ピット	197		R－38	12 溝	3掘立	円形	0.30	0.30	不明		遺構くんでは 12 溝 4 でラインを書いている

第33表　溝観察表

（m）

遺構名	図版番号	写真図版	位　置	重　複	長さ	幅	深さ	時代	備　考
1 溝	211		M・N－35・36	2 焼、116 土、暗渠 1・2・3	3.20	0.60	0.10		北端調査区外
2溝	211		L・M－40	33 土	3.70	0.70 ～ 0.90	0.29		北端・東端は調査区外 炭化材年代測定
3溝	212		M－40		32.0	0.40 ～ 0.75	0.20		
4溝	212		N・O－39・40	31・32 土、66・68 ピット	7.50	0.40 ～ 0.90	0.17		遺構くんで炭範囲 1・2 有 炭化材年代測定
5 溝	212	D9	O－38	暗渠 4	3.20	0.40 ～ 0.50	0.15		

遺構名	図版番号	写真図版	位　置	重　　複	長さ	幅	深さ	時代	備　考
6 溝	212	D9	O・P－38・39	47・58 土、41・69・115 ピット	9.10	0.50 ～ 0.80	0.21		
7 溝	213		P・Q－37・38	51・52・53 土	4.80	0.40 ～ 0.70	0.14		
8 溝	欠番								
9 溝	213		Q～T－33・34	暗渠1	18.4	0.50 ～ 0.70	0.18		西端は調査区外
10 溝	214		T－32・33	暗渠1	5.80	0.20 ～ 0.50	0.23		
11 溝	欠番								
12 溝	214		Q・R－37・38	4住、85 土、135 ピット	6.80	0.40 ～ 0.50	0.27		
13 溝	214		N－34	1 焼、20 溝、暗渠 4	1.40	0.20 ～ 0.35	0.03		遺構くん 9 住、西端調査区外
14 溝	214		N－34	1 焼、13・15 溝	1.80	0.30 ～ 0.80	0.09		
15 溝	214		M・N－34・35	9・10 住、14・20 溝	3.98 ～ 5.50	0.40 ～ 1.00	0.10		
16 溝	214		N・O－36・37	97 ピット、暗渠 4・5	5.07	0.50 ～ 0.70	0.10		
17 溝	214		S・T－36・37	98 土	2.90	0.40 ～ 0.60	0.16		
18 溝	215		Q・R－37	91・92 土	3.40	0.50 ～ 0.60	0.12		
19 溝	215		S－38	7 住	2.50	0.50 ～ 1.00	0.28		東端は調査区外
20 溝	214		M・N－34	9住P1、13・14・15 溝	2.98	0.20 ～ 0.40	0.07		遺構くん 9 住で実測　北端調査区外　南端 13 溝にぶつかる
21 溝	215		M－36	12 ピット	2.98	0.35 ～ 0.85	0.05		遺構くんは 1 溝で実測　北端調査区外　南端 2 号暗渠に切られる
22 溝	215		T・U－37	6 住	4.40	0.80 ～ 1.40	0.27		遺構くん 19 溝で実測

第34表　暗渠観察表

（m）

遺構名	図版番号	写真図版	位　置	重　　複	方向	長さ	幅	深さ	時代	備　考
暗渠1	181		O～U 33 ～ 36	116 ピット、9 溝		29.40	0.40 ～ 0.70	不明	不明	遺構くんなし　南端調査区外
暗渠2	181		M・N 35 ～ 38	1 土、暗渠 3・5		12.20	0.40 ～ 0.60	0.27	不明	
暗渠3	181		L～O 36・37	1・96 土、暗渠 2・4		12.04	0.50 ～ 0.70	0.06	不明	
暗渠4	181		N・O 34 ～ 39	12 住、1 焼、5・6・13・14・16・20 溝		25.00	0.60 ～ 2.40	0.17	不明	
暗渠5	181		N 35・36	96・115・116 土、1・16 溝、暗渠 3		5.070	0.50 ～ 0.70	0.34	不明	

第35表　遺物観察表（1）

（cm）

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
216		1	3	1号住	一括	土師器	坏	(11.0)	(3.4)	—	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、	口縁部黒変	破片	奈良		体部下半ヘラケズリ
216		2	4	1号住	一括	土師器	坏	(13.0)	(4.7)	—	内外面橙色	赤粒、雲母		破片	奈良		
216		3	5	1号住	55	土師器	坏	(12.0)	3.1	7.4	内外面橙色	白粒、赤粒、雲母		50%	奈良		底部静止糸切り後周囲ヘラケズリ
216	D7	4	6	1号住	カマド一括	土師器	甕	(28.0)	(13.1)	—	外面橙色 内面明赤褐色	金色粒、雲母		破片	奈良		内外面ハケメ、内面指頭痕
216		5	9	1号住	48・焼土一括	土師器	甕	—	(10.3)	(12.0)	外面明赤褐色 内面赤褐色	白粒、黒粒、石英、雲母	内面一部黒変	破片	奈良		外面ハケメ、内面ヘラナデ
216	D7	6	7	1号住	カマド17	土師器	甕	(24.0)	(8.0)	—	外面橙色 内面明赤褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		破片	奈良		外面頸部ヘラケズリ、内面ハケメ
216		7	8	1号住	42・カマド一括	土師器	甕	(20.0)	(5.4)	—	内外面明赤褐色	白粒、石英、雲母		破片	奈良		外面ハケメ
216		8	319	1号住	F1	鉄製品	棒状	最大長 (8.1)	最大幅 0.8	最大厚 0.7	重量（7.6g）						保存処理№ 39054
217		1	11	2号住	64・カマド一括	土師器	坏	12.8	3.5	(6.0)	外内面明赤褐色	赤粒、白粒、石英		40%	平安		体部下半ヘラケズリ、底部回転糸切り痕、周囲ヘラケズリ
217		2	21	2号住	カマド一括	土師器	坏	(13.0)	(3.4)	—	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、		破片	平安		
217		3	17	2号住	67・68	土師器	坏	—	(2.7)	6.4	外面灰褐色 内面にぶい橙色	白粒、赤粒、石英、雲母		40%	平安		外面下半ヘラケズリ
217		4	12	2号住	74	土師器	坏	—	(2.8)	5	外面にぶい黄橙色 内面にぶい黄褐色	赤粒、白粒、石英		50%	平安		体部下半ヘラケズリ、底部全面ヘラケズリ、
217		5	16	2号住	62・62−1・カマド一括	土師器	坏	(14.0)	2.2	4.6	外面暗赤褐色 内面灰赤色	白粒、赤粒、石英、雲母		30%	平安		外面下半ヘラケズリ
217		6	15	2号住	57・69・カマド一括	土師器	坏	(13.0)	2.5	(3.8)	外面明赤褐色 内面橙色	白粒、赤粒、黒粒、、雲母	外面一部黒変	30%	平安		外面下半ヘラケズリ
217		7	19	2号住	1	土師器	甕	(15.0)	(5.2)	—	内外面にぶい赤褐色	白粒、石英、雲母	内面一部黒変	破片	平安		内外面ハケメ、内面指頭痕
217		8	20	2号住	Q38G565	土師器	甕	—	(3.1)	(8.6)	内外面にぶい赤褐色	白粒、石英、長石、雲母		破片	平安		内面ハケメ、下半ヘラケズリ、底部木葉痕
217	D7	9	22	2号住	17・50・53・60・65・73・Q38G567	土師器	羽釜	(22.0)	(11.0)	—	内外面赤褐色	白粒、石英、雲母		破片	平安		内外面ハケメ
218		10	23	2号住	Q39G536	灰釉陶器	壺？	—	(4.3)	—	外面灰オリーブ色 内面灰白色	白粒、黒粒、		破片	平安		把手部
218	D7	11	24	2号住	54		土錘	—	—	—	内外面にぶい橙色	白粒、黒粒、石英、雲母		完形	平安		
219		1	26	4号住	S37G124−2	土師器	坏	(12.0)	(4.0)	—	外面明赤褐 内面橙色	白粒、赤粒		破片	平安		
219		2	28	4号住	3	土師器	坏	—	(0.9)	(4.5)	外面橙色 内面にぶい橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		破片	平安		底部回転糸切り痕
219		3	29	4号住	10・21・S37G一括	土師器	甕	(42.0)	(5.0)	—	外面明赤褐色 内面橙色	白粒、黒粒、、石英、長石		破片	平安		内外面ハケメ、内面指頭痕
219		4	30	4号住	R37G611	土師器	甑	—	(1.5)	(4.5)	外面黄褐色 内面暗灰黄色	白粒、黒粒、石英		破片	平安		底部穿孔、孔径 0.8 ～ 1.1cm
219		5	32	4号住	一括	須恵器	甕	—	(5.0)	—	外面灰色 内面灰白色	白粒、黒粒		破片	平安		外面タタキ
219		6	31	4号住	708	須恵器	壺	—	(3.5)	(11.0)	内外面灰白色	白粒、赤粒、黒粒		破片	平安		
220	D7	1	37	5号住	1304・1306・S34G1104・1083・1091・一括	土師器	壺	(15.0)	(13.7)	—	内外面褐色	白粒、黒粒、石英		破片	古墳		外面ヘラケズリ、内面指頭痕

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
220		2	36	5号住	Q38G334	土師器	壺	(14.0)	(8.5)	—	内外面明褐色	白粒、石英、長石		破片	古墳		外面上部ハケメ、頸部～胴部ミガキ・内面ハケメ、頸部指頭痕
220		3	35	5号住	S34G909	土師器	壺	(16.0)	(4.8)	—	内外面浅黄色	白粒、赤粒、石英、		破片	古墳		内外面共摩耗のため調整不明
220		4	34	5号住	1065・G34G一括	土師器	壺	(18.0)	(3.5)	—	内外面褐色	白粒、石英	内面一部黒変	破片	古墳		外面ハケメ不明瞭、内面僅かにミガキが残る
220	D7	5	33	5号住	S34G1118・1123	土師器	小型壺	(8.6)	(5.1)	—	内外面明褐色	白粒、黒粒、長石		破片	古墳		内外面ハケメ
220		6	39	5号住	1245・1247・1253・1254・S34G910・911・1036	土師器	壺	—	(16.9)	—	外面明褐色 内面浅黄色	白粒、赤粒、石英	外面一部黒変	胴部破片	古墳		外面ミガキ、内面ヘラナデ
220		7	38	5号住	947・950・952・953・954・S34G820	土師器	壺	—	(9.7)	—	内外面明赤褐色	白粒、石英		破片	古墳		外面ハケメ不明瞭・内面ハケメ
221	D7	8	42	5号住	965	土師器	壺	—	(3.0)	—	外面明黄褐色 内面灰白色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		底部～胴部破片	古墳		外面ミガキ、下部ヘラナデ、内面見込み部ミガキ不明瞭
221		9	43	5号住	S34G1106	土師器	壺	—	(3.7)	(4.2)	内外面明赤褐色	白粒、石英、雲母、長石		底部～胴部破片	古墳		外面ミガキ、僅かにハケメ、内面指頭痕・底部ミガキ調整
221		10	44	5号住	S34G1121	土師器	壺	—	(2.7)	8.2	内外面明褐色	白粒、石英、長石		底部破片	古墳		
221		11	45	5号住	S34G1160	土師器	壺	—	(2.3)	8.2	外面明黄褐色 内面黄褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		底部	古墳		内面ミガキ
221		12	46	5号住	10	土師器	壺	—	(2.4)	10.2	内外面橙色	白粒、赤粒、石英、長石	内面一部黒変	底部	古墳		内面ハケメ
221		13	47	5号住	1298・S34G887	土師器	S字状口縁台付甕	(18.0)	(4.0)	—	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		口縁部破片	古墳		外面ハケメ、内面ハケメが僅かに残る
221	D8	14	49	5号住	34	土師器	S字状口縁台付甕	(18.0)	(3.6)	—	外面黄褐色 内面明黄褐色	白粒、黒粒、石英、雲母	内面口縁部黒変	口縁部～頸部破片	古墳		外面ハケメ、内面指頭痕
221		15	51	5号住	S34G1082・1100	土師器	甕	(17.0)	(5.7)	—	内外面褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	古墳		内外面ハケメ、摩耗により不明瞭
221		16	52	5号住	S34G1097	土師器	甕	(15.8)	(6.8)	—	外面にぶい黄褐色 内面明赤褐色	白粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	古墳		内外面ヘラナデ、摩耗により不明瞭
221		17	53	5号住	1290・S34G1068	土師器	甕	(16.0)	(4.6)	—	内外面明褐色	白粒、赤粒、石英、雲母		口縁部～頸部破片	古墳		内外面ハケメ、内面のハケメ摩耗
221	D7	18	50	5号住	2・一括	土師器	S字状口縁台付甕	(10.0)	(3.0)	—	外面橙色 内面にぶい黄橙色	白粒、赤粒、雲母		口縁部～胴部破片	古墳		外面ハケメ
221	D7	19	54	5号住	166・978・979・981・985・S34G1131	土師器	甕	(30.0)	(10.8)	—	外面明褐色 内面にぶい黄橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	古墳		外面胴部ハケメ
221		20	55	5号住	972・1250・1260・1276・1324・一括	土師器	台付甕	—	(14.0)	(11.0)	外面明黄褐色 内面にぶい橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		胴部～台部破片	古墳		外面ハケメ、内面指頭痕
221		21	58	5号住	11	土師器	台付甕	—	(7.8)	(10.6)	内外面明褐色	白粒、赤粒、黒粒、石英		台部のみ75%	古墳		内面ハケメ・台部内外面調整不明
221		22	57	5号住	969	土師器	台付甕	—	(6.2)	(9.8)	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英		台部破片	古墳		外面摩耗のため不明、内面上部ハケメ、台部内面指頭痕
222		23	56	5号住	12・13・15	土師器	台付甕	—	(6.0)	(9.8)	内外面明褐色	白粒、石英		台部破片	古墳		内外面ハケメ
222		24	59	5号住	1115・1316・一括・S34G1048・1052・G34G一括	土師器	台付甕	—	(6.4)	(10.0)	内外面明褐色	白粒、黒粒、雲母		台部のみ76%	古墳		外面ハケメ、内面指頭痕
222		25	61	5号住	1112・1114・1115	土師器	高坏	(25.0)	(6.8)	—	内外面橙色	赤粒、		坏部破片	古墳		内外面不明瞭だがハケメ

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
222	D8	26	62	5号住	1286	土師器	器台	(9.0)	(6.5)	—	内外面橙色	赤粒、石英		60%	古墳		器受部内面ミガキ、内外面摩耗のため調整不明、脚部穿孔
222	D8	27	63	5号住	992	土師器	器台	(10.0)	(2.7)	—	内外面明黄褐色	赤粒、雲母		器受部 75%	古墳		内面ミガキ
222		28	64	5号住	1059	土師器	器台	—	(1.7)	—	内外面明黄褐色	白粒、赤粒、雲母		器受部 85%	古墳		内面ミガキ不明瞭
222	D8	29	65	5号住	S34G1045	土師器	甑	—	(3.6)	—	外面明褐色 内面にぶい赤褐色	白粒、石英		底部～胴部破片	古墳		内面ミガキ
223	D8	1	70	6号住	88	土師器	坏	13.0	3.8	3.7	内外面橙色	白粒、赤粒、石英、長石、雲母		完形	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
223	D8	2	73	6号住	77	土師器	坏	13.2	4.3	5.2	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、長石、雲母	口縁近く一部黒変	完形	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
223	D8	3	74	6号住	86	土師器	坏	12.2	3.7	4.4	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		80%	平安		外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
223	D8	4	75	6号住	105・覆土一括	土師器	坏	(13.4)	4.6	4.4	内外面橙色	白粒、黒粒、石英		60%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る、坏5
223		5	78	6号住	24・一括	土師器	坏	(15.2)	6.1	(7.2)	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒		30%	平安		外面ロクロナデ、内面僅かに暗文残る、底部ヘラケズリ、削り出し高台
223		6	80	6号住	12・一括	土師器	坏	(11.8)	(4.25)	(4.0)	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		40%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、内面僅かに暗文あり
223		7	81	6号住	20・21・51・52・53	土師器（内面黒色土器）	坏	(14.2)	5.0	5.3	外面橙色 内面黒褐色	白粒、赤粒、黒粒		40%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る
223	D8	8	86	6号住	14	土師器（内面黒色土器）	坏	(13.8)	(3.7)	—	外面にぶい黄橙色 内面黒色	黒粒、石英		口縁部～体部破片	平安		外面下半ヘラケズリ
223	D8	9	90	6号住	89	土師器	皿	12.6	2.5	4.6	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒		完形	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、内面スス付着
223		10	91	6号住	60・63・一括	土師器	皿	13.6	2.9	4.4	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒		70%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
223	D8	11	87	6号住	90	土師器	皿	13.6	2.8	4.0	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、雲母		完形	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
223		12	97	6号住	57・一括	土師器	皿	(12.8)	2.6	4.5	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英		60%	平安		外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
223		13	95	6号住	84	土師器	皿	(13.9)	2.0	(6.0)	内外面橙色	赤粒、雲母		20%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
223	D8	14	88	6号住	85	土師器	皿	12.5	2.9	4.4	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英		ほぼ完形	平安		外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
223		15	96	6号住	覆土一括	土師器	皿	(13.2)	2.3	(7.6)	内外面橙色	赤粒、黒粒		20%	平安		底部ヘラケズリ
223	D8	16	98	6号住	4・58・77・78・80・82・83	土師器	甕	(18.0)	16.9	8.2	内外面明褐色	黒粒、石英、長石、雲母		50%	平安		外面ハケメ・内面ハケメ、指ナデ、輪積痕、底部木葉痕僅かに残る
			85	6号住	54・55	土師器	坏	(12.0)	(4.0)	(5.0)	内外面橙色	赤粒、石英		20%	平安		外面下半ヘラケズリ
224		17	99	6号住	22・32・35	土師器	甕	(19.1)	(7.4)	—	内外面明褐色	白粒、黒粒、長石		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
224		18	100	6号住	一括	土師器	甕	(15.4)	(4.2)	—	内外面明褐色	石英、長石、雲母	内面一部黒変	口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
224		19	101	6号住	94	土師器	甕	—	(10.5)	8.0	内外面赤褐色	白粒、黒粒、石英、長石雲母		胴部～底部破片	平安		外面ハケメ、内面ハケメ、指頭痕、底部木葉痕
224		20	102	6号住	23・一括	土師器	甕	—	(5.5)	(8.0)	外面暗褐色 内面黒褐色	石英、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ、底部僅かに木葉痕

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
224		21	104	6 号住	61	土師器	置きカマド	—	(7.1)	—	内外面明褐色	黒粒、石英、雲母		体部～底部破片	平安		外面ハケメ、内面ヘラナデ
224	D8	22	105	6 号住	67	須恵器	甕	—	(15.3)	—	内外面灰色	白粒、黒粒		胴部破片	平安		外面タタキ、内面おさえ、一部自然釉
224	D8	23	106	6 号住	33・34・49	須恵器	甕	—	(6.0)	—	内外面灰色	白粒		胴部破片	平安		外面タタキ
224	D8	24	107	6 号住	52	須恵器	甕	—	(5.1)	—	外面褐灰色 内面灰黄色	白粒、黒粒		胴部破片	平安		外面タタキ、内面おさえ
224		25	320	6 号住	F1	鉄製品	棒状	最大長 (4.5)	最大幅 1.1	最大厚 0.5	重量 (3・4) g						保存処理№ 39055
224		26	321	6 号住	F2	鉄製品	鎌	最大長 (15.2)	最大幅 (4.7)	最大厚 0.8	重量 (41・1) g						保存処理№ 39056
				6 号住		土師器	坏	(11.0)	(1.9)	—	内外面橙色	赤粒、石英、長石		口縁部破片	平安		内外面不明、実測№ 321 の鉄製品に付着
225	D9	1	109	7 号住	19	土師器	坏	13.0	3.6	4.0	外面明赤褐色 内面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英		完形	平安		外面下半ヘラケズリ
225	D9	2	110	7 号住	18	土師器	坏	13.0	3.7	4.0	外面橙色 内面にぶい橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		60%	平安		外面下半ヘラケズリ、底部全面ヘラケズリ
225		3	112	7 号住	9・20・覆土一括	土師器 (内面黒色土器)	坏	(18.0)	6.3	(6.5)	外面橙色・明赤褐色 内面黒褐色	白粒、赤粒、黒粒		口縁部～底部破片	平安		
225	D9	4	290	7 号住	6住101・103・104	土師器	坏	12.4	3.9	4.5	内外面橙色	黒粒、石英、長石		70%	平安		外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ、坏 4
225		5	111	7 号住	S37G841	土師器	坏	(11.0)	4.0	(4.0)	外面明赤褐色 内面橙色	赤粒、黒粒、長石		口縁部～底部破片	平安		外面下半ヘラケズリ
225		6	114	7 号住	S37G842	土師器	皿	13.0	(2.3)	(5.0)	外面明赤褐色 内面橙色	白粒、赤粒、黒粒		25%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
225		7	117	7 号住	3	灰釉陶器	壺	(8.0)	(2.2)	—	外面灰白色 内面灰オリーブ色	黒粒、石英、長石		口縁部破片	平安		
225	D9	8	115	7 号住	14・15	土師器	置きカマド	—	(5.0)	—	内外面暗赤褐色	黒粒、石英、雲母		破片	平安		内外面ハケメ
225		9	116	7 号住	一括	須恵器	甕	—	(6.3)	—	外面灰色 内面灰黄色	黒粒、石英、長石		破片	平安		外面タタキ
226		1	119	10 号住	カマド一括	土師器	坏	(13.0)	(3.0)	—	内外面明黄褐色	赤粒		口縁部～体部破片	平安		
226		2	120	10 号住	カマド7・9	土師器	坏	—	(2.7)	(5.4)	外面明赤褐色 内面橙色	白粒、赤粒		体部～底部破片	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
226		3	125	10 号住	カマド4・12・13	土師器	甕	(16.4)	(10.8)	—	内外面赤褐色	白粒、黒粒、雲母		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
226		4	122	10 号住	カマド2・3・一括・N35G1171	土師器	甕	(28.0)	(4.5)	—	内外面明褐色	白粒、黒粒、石英、長石、雲母	内面黒変	口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
226		5	121	10 号住	4	土師器	甕	(14.0)	(3.3)	—	内外面明褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ不明瞭
226		6	127	10 号住	カマド1	土師器	甕	—	(3.3)	(9.0)	内外面褐色	白粒、石英、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ不明瞭、底部木葉痕
226		7	129	10 号住	1	土師器	把手	—	(3.2)	—	内外面褐色	白粒、石英、雲母			平安		
226	D9	8	130	10 号住	カマド10	灰釉陶器	碗	(16.0)	(4.3)	—	内外面灰白色	白粒		20%	平安		内外面ロクロナデ、外面口唇部～体部・内面口唇部に施釉
227	D9	1	131	13 号住	257	土師器	坏	(12.9)	4.4	(4.8)	外面褐灰色 内面灰黄色	白粒、赤粒、黒粒		60%	平安		外面体部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ
227		2	134	13 号住	覆土一括	土師器	坏	(12.0)	(3.7)	—	内外面橙色	赤粒、黒粒、長石		口縁部～体部破片	平安		外面体部ヘラケズリ
227		3	138	13 号住	覆土一括	土師器	坏	—	(2.2)	4.2	内外面橙色	赤粒		体部～底部破片	平安		外面下半ヘラケズリ、底部ヘラケズリ
228		4	135	13 号住	覆土一括	土師器	皿	(12.8)	(2.5)	—	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英		20%	平安		外面下半ヘラケズリ

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
228		5	136	13 号住	T38G 一括	土師器	皿	(11.7)	(1.9)	—	内外面明褐色	赤粒、黒粒		口縁部～体部破片	平安		
228		6	140	13 号住	覆土一括	土師器	甕	(29.6)	(2.8)	—	内外面褐色	白粒、黒粒、石英		口縁部破片	平安		内外面僅かにハケメが残る
228		7	141	13 号住	覆土一括	土師器	甕	—	(9.4)	(10.0)	内外面褐色	黒粒、石英、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ
228	D9	8	144	13 号住	覆土一括	土師器	土錘	長軸 (3.4)	短軸 1.85	最大厚 0.5	内外面にぶい黄橙色	石英、長石	外面一部黒変		平安		
228	D9	9	143	13 号住	覆土一括	土師器	蓋つまみ部	—	(2.8)	—	内外面橙色	赤粒、黒粒		つまみ部の破片	平安		
229		1	145	8 号焼土	T36G 焼土1P1	土師器	坏	12.0	4.4	5.4	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		80%	平安		外面下半ヘラケズリ、内面暗文が僅かに残る、底部ヘラケズリ
229		2	146	8 号焼土	T36G 焼土1P2	土師器	皿	(11.8)	2.5	3.8	内外面橙色	赤粒、石英、長石		70%	平安		外面下半回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ
229		3	147	8 号焼土	T36G 焼土1P3	土師器	皿	(13.0)	2.5	3.8	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		30%	平安		外面下半回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ
230		1	151	17 号土坑（7 号掘立柱建物）	2	土師器	坏	(11.8)	4.7	(6.6)	内外面橙色	赤粒		50%	平安		外面下半ヘラケズリ、内面暗文不明瞭
230		2	158	30 号土坑	1・2	土師器	甕	—	(5.7)	(8.6)	内外面褐色	赤粒、長石、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ、内面指頭痕
230		3	163	40 号土坑	4	土師器	坏	—	(2.0)	(6.0)	内外面明黄褐色	赤粒、長石		体部～底部破片	平安		内外面摩耗のため調整不明
230		4	162	40 号土坑	1	土師器	高台付坏	—	(2.7)	—	内外面黄橙色	赤粒、長石		破片	平安		内外面摩耗のため調整不明
230	D9	5	175	53 号土坑（1 号掘立柱建物跡）	1・2	土師器	S 字状口縁台付甕	(17.8)	(2.5)	—	外面橙色 内面浅黄橙色	赤粒、長石、雲母		口縁部破片	古墳		調整不明
230	D9	6	176	53 号土坑（1 号掘立柱建物跡）	3	土師器	壺	—	(4.0)	—	内外面赤褐色	石英、長石		頸部～胴部破片	古墳		内外面ハケメ
230		7	177	55 号土坑	1	土師器	坏	(12.4)	3.7	4.4	内外面橙色	赤粒		口縁部～底部破片	平安		体部下半ヘラケズリ、底部ヘラケズリ
230		8	184	95 号土坑	1234	土師器	甕	(28.4)	(5.0)	—	内外面にぶい褐色	黒粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
230		9	187	95 号土坑	1226	土師器	甕	—	(4.5)	(10.0)	外面黒褐色 内面褐色	石英、長石、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ
230		10	185	95 号土坑	1190	土師器	甕	(26.0)	(2.9)	—	内外面赤褐色	石英、長石、雲母	内面一部黒変	口縁部～頸部破片	平安		内外面ハケメ
230		11	186	95 号土坑	1238	土師器	甕	—	(2.6)	(10.0)	内外面褐色	黒粒、石英、雲母		胴部～底部破片	平安		内外面ハケメ
231		12	189	98 号土坑	2	土師器	坏	—	(1.8)	(4.0)	内外面橙色	赤粒、長石		体部～底部破片	平安		外面ヘラケズリ、内面暗文不明瞭
231		13	190	98 号土坑	1	土師器	皿	(13.0)	2.4	(4.0)	内外面橙色	赤粒、長石		口縁部～底部破片	平安		外面下半回転ヘラケズリ
			148	1 号土坑	一括	土師器（内面黒色土器）	坏	(10.8)	(1.8)	—	外面橙色 内面黒褐色	赤粒		口縁部～体部破片	平安		調整不明
			149	1 号土坑	一括	土師器	坏	—	(1.8)	(6.0)	内外面橙色	赤粒		体部～底部破片	平安		調整不明
			150	2 号土坑（7 号掘立柱建物跡）	1	土師器	坏	—	(1.1)	(8.0)	内外面橙色	赤粒		体部～底部破片	平安		調整不明

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
			152	18 号土坑	1	土師器	坏	(10.0)	(2.6)	—	内外面橙色	赤粒、長石		口縁部～体部破片	平安		
			153	20 号土坑	無	土師器	坏	—	(2.3)	(7.0)	内外面橙色	赤粒、長石		口縁部～体部破片	平安		外面ヘラケズリ、内面暗文
			154	22 号土坑	2	須恵器	蓋	(18.0)	(1.9)	—	内外面灰色	長石		破片	平安		
			155	23 号土坑	2	須恵器	甕	—	—	—	外面灰褐色 内面灰色	長石		胴部破片	古墳		外面タタキ
			156	23 号土坑	3	土師器	壺	—	(1.5)	(4.6)	内外面橙色	赤粒、長石		胴部～底部破片	古墳		調整不明
			157	25 号土坑（2 号掘立柱建物跡）	無	土師器	坏	—	(2.2)	(7.0)	内外面明赤褐色	赤粒		体部～底部破片	平安		外面ヘラケズリ、内面暗文、内面赤色付着物あり
			159	33 号土坑	一括	土師器	坏	—	(2.1)	—	内外面明黄褐色	赤粒		口縁部～体部破片	平安		調整不明
			160	33 号土坑	一括	須恵器	坏	(13.0)	(3.3)	—	内外面灰色	長石		口縁部～体部破片	平安		調整不明
			161	35 号土坑	1	土師器	壺	—	(1.7)	(7.4)	内外面明黄褐色	赤粒、石英、長石		体部～底部破片	古墳		調整不明
			164	41 号土坑	1	土師器	坏	—	(0.9)	(6.0)	内外面明褐色	赤粒、長石		底部破片	平安		調整不明
			165	41 号土坑	3	土師器	甕	—	(2.9)	—	内外面明褐色	黒粒、石英、長石		口縁部破片	平安		調整不明
			166	41 号土坑	2	須恵器	甕	—	—	—	外面灰色 内面灰白色	黒粒、長石		胴部破片	平安		外面タタキ、内面おさえ
			167	42 号土坑	1	土師器	坏	—	(2.4)	—	内外面にぶい黄橙色	赤粒		口縁部破片	平安		調整不明
			168	42 号土坑	3	土師器	高台付坏	—	(1.2)	(8.6)	内外面橙色	赤粒		底部破片	平安		調整不明、削り出し高台
			169	43 号土坑（2 号掘立柱建物跡）	一括	土師器	坏	(13.0)）	(2.3)	—	内外面明黄褐色	赤粒、石英		口縁部破片	平安		調整不明
			170	43 号土坑（2 号掘立柱建物跡）	1	土師器	置きカマド	—	(5.1)	—	外面赤褐色 内面褐色	黒粒、石英、長石、雲母		口縁部破片	平安		内外面ハケメ
			171	50 号土坑	一括	土師器（内面黒色土器）	坏	(12.0 ～ 13.0)	(2.3)	—	外面にぶい黄橙色 内面黒色	赤粒、長石		口縁部破片	平安		内面暗文
			172	51 号土坑（1 号掘立柱建物跡）	9	土師器	壺	(11.0)	(3.1)	—	内外面明赤褐色	石英、長石		口縁部破片	古墳		調整不明
			173	51 号土坑（1 号掘立柱建物跡）	7	土師器	壺	(10.6)	(4.1)	—	内外面明褐色	赤粒、石英、長石		口縁部破片	古墳		調整不明
			174	51 号土坑（1 号掘立柱建物跡）	10	土師器	壺	(14.0)	(3.0)	—	内外面明赤褐色	赤粒、石英、長石		口縁部破片	古墳		調整不明
			178	79 号土坑（6 号掘立柱建物跡）	1	灰釉陶器	壺	(18.0)	(2.0)	—	内外面灰白色	石英、長石		口縁部破片	平安		内外面に釉
			179	86 号土坑	一括	土師器	坏	(16.0)	(0.9)	—	内外面橙色	赤粒		口縁部破片	平安		調整不明

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
			180	86 号土坑	一括	土師器	甕	―	(2.2)	―	内外面明赤褐色	黒粒、石英、長石、雲母		口縁部破片	平安		調整不明
			181	87 号土坑（3 号掘立柱建物跡）	一括	土師器	坏	―	(1.9)	(6.8)	内外面橙色	赤粒		体部～底部破片	平安		外面ヘラケズリ
			182	89 号土坑（3 号掘立柱建物跡）	一括	土師器	坏	―	(1.2)	(6.4)	外面にぶい黄橙色 内面明褐色	赤粒、長石		体部～底部破片	平安		内外面調整不明、底部回転糸切り痕
			183	89 号土坑（3 号掘立柱建物跡）	一括	須恵器	坏	(14.0)	(2.1)	―	外面灰褐色 内面灰色	長石		口縁部破片	平安		体部ロクロナデ
			188	97 号土坑	一括	土師器	坏	(11.5)	(2.1)	―	内外面橙色	赤粒、石英		口縁部破片	平安		調整不明
232		1	191	7 号ピット	1	土師器	坏	(12.0)	3.0	(6.2)	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石、雲母		30%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
232		2	192	43 号ピット	9	土師器	坏	(11.0)	(2.3)	―	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		口縁部～体部破片	平安		内外面摩耗のため不明瞭
232		3	193	43 号ピット	1・2・3・4	土師器	坏	―	(1.8)	5.0	内外面橙色	赤粒、長石、雲母		底部破片	平安		内外面摩耗のため不明瞭、底部回転糸切り痕
232		4	196	134号ピット	S37G1241	土師器	皿	(12.8)	2.9	4.8	内外面明赤褐色	赤粒、黒粒、石英、長石		40%	平安		外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、坏1
232		5	322	98 号ピット		鉄滓		最大長 3.1	最大幅 3.8	最大厚 1.5	重量 17・1g						保存処理№ 39057
232		6	323	98 号ピット		鉄滓		最大長 4.6	最大幅 3.1	最大厚 2.0	重量 23・1g						保存処理№ 39058
			194	116号ピット	一括	土師器	坏	―	(2.0)	(6.0)	内外面橙色	赤粒、石英		体部～底部破片	平安		摩耗のため調整不明
			195	132号ピット	一括	土師器	壺	―	(2.3)	(4.6)	内外面明赤褐色	黒粒、石英、長石		体部～底部破片	古墳		摩耗のため調整不明
233		1	197	1 号溝	N35G1186	土師器	坏	(10.0)	(3.1)	(5.0)	外面橙色 内面赤橙色	白粒、赤粒、黒粒		口縁部～底部破片	平安		
233		2	198	1 号溝	9	土師器	甕	(20.0)	(4.2)	―	外面暗赤褐色 内面にぶい赤褐色	黒粒、石英、長石		口縁部～頸部破片	平安		内外面ハケメ
233		3	199	1 号溝	4	土師器	甕	―	(2.9)	(10.0)	内外面にぶい赤褐色	黒粒、石英、雲母		胴部～底部破片	平安		外面ハケメ、底部木葉痕
233		4	200	1 号溝	6	土師器	置きカマド	―	(10.0)	―	外面にぶい赤褐色 内面暗赤褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		口縁部破片	平安		内外面ハケメ
233		5	202	2 号溝	1―1・30	土師器	坏	(11.0)	4.4	(6.5)	外面明赤褐色 内面橙色	赤粒、黒粒、長石		50%	平安		
233		6	203	2 号溝	1・3	土師器	坏	(11.6)	(4.1)	5.4	内外面明赤褐色	赤粒、黒粒、長石		30%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
233		7	204	2 号溝	21	土師器	坏	(10.0)	(4.0)	(6.0)	外面にぶい黄橙色 内面橙色	赤粒、黒粒、長石		口縁部～底部破片	平安		
233		8	205	2 号溝	14	土師器	坏	(12.0)	(2.5)	―	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		口縁部破片	平安		
233		9	206	2 号溝	17	土師器	坏	―	(4.2)	(8.0)	内外面明赤褐色	赤粒、黒粒、長石		30%	平安		底部ヘラケズリ
233		10	210	3 号溝	4	土師器	蓋	(15.6)	(3.6)	―	内外面橙色	赤粒、石英、長石		破片	平安		
233		11	212	4 号溝	3	土師器	蓋	(13.0)	(1.1)	―	内外面橙色	赤粒、黒粒		破片	平安		
234	D9	12	213	5 号溝	3	土師器	坏	(11.0)	3.0	4.8	内外面にぶい黄褐色	石英、長石、雲母		40%	平安		外面摩耗のため不明瞭、内面煤付着

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
234		13	215	9 号溝	19	土師器	坏	(12.8)	5.9	(8.5)	内外面橙色	赤粒、長石		20%	平安		外面下半回転ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る、底部ヘラケズリ
234	D9	14	214	6 号溝	12	須恵器	甕	—	(7.1)	—	内外面灰白色	長石		頸部破片	古墳？		外面ハケメ
234	D10	15	260	6 号溝	O36GP386－1	須恵器	甕	—	(5.6)	—	内外面灰白色	長石		口縁部破片	古墳？		外面櫛描き波状文
234		16	216	9 号溝	5・6	土師器	坏	(13.0)	5.9	(7.6)	外面橙色 内面浅黄橙色	赤粒、黒粒、 石英、長石		20%	平安		外面下半ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る、底部ヘラケズリ
234		17	217	9 号溝	16	土師器	S 字状口縁 台付甕	(17.6)	(2.8)	—	内外面橙色	白粒、赤粒、 黒粒		口縁部破片	古墳		調整不明
234		18	218	12 号溝	4	土師器	坏	15.6	5.7	5.8	内外面橙色	赤粒、黒粒、 石英、長石		70%	平安		外面下半ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る、底部ヘラケズリ、坏 6
234		19	219	12 号溝	一括	土師器	坏	—	(3.7)	(6.2)	内外面にぶい橙色	赤粒、黒粒、 長石		体部～底部 破片	平安		外面下半ヘラケズリ、内面僅かに暗文残る、底部ヘラケズリ
234		20	220	12 号溝	R38G721	土師器	甕	—	(3.5)	(11.0)	内外面にぶい赤褐色	黒粒、石英、 長石		体部～底部 破片	平安		外面ヘラナデ、内面指頭痕、底部僅かに木葉痕
234		21	221	13 号溝	9住 P5	土師器	坏	(11.0)	4.6	(5.0)	内外面橙色	赤粒		20%	平安		外面下半ヘラケズリ不明瞭
234	D10	22	222	16 号溝	1	土師器	坏	(10.3 ～ 10.5)	3.1	4.8	外面黄褐色 内面にぶい黄橙色			ほぼ完形	平安		底部回転糸切り痕
234		23	223	17 号溝	S37G1244	土師器	坏	11.6	4.4	4.8	内外面黄橙色	赤粒、石英、 長石		90%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、坏 3
234		24	225	17 号溝	T36G837	灰釉陶器	高台付碗	—	(1.7)	(7.0)	内外面灰白色	長石		体部～高台 部破片	平安		
234		25	226	18 号溝	一括	土師器	甕	—	(2.0)	(8.0)	内外面明褐色	石英、長石		底部破片	古墳		内外面摩耗のため不明
234		26	227	18 号溝	一括	土師器	壷？	(18.0)	(2.6)	—	内外面褐色	黒粒、石英、 長石、雲母		口縁部破片	古墳		内外面摩耗のため不明
234		27	77	22 号溝	6住75	土師器	坏	(11.6)	4.1	4.2	内外面橙色	白粒、赤粒、 黒粒		40%	平安	9 世紀後半	外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
234		28	76	22 号溝	6住67・69・73・ 74・75・一括	土師器	坏	(12.2)	4.5	4.9	内外面明褐色	白粒、赤粒、 黒粒		40%	平安	9 世紀後半	外面下半ヘラケズリ、底部ヘラ整形
234		29	93	22 号溝	6住17	土師器	皿	(12.4)	3.3	5.3	内外面橙色	白粒、赤粒、 雲母		30%	平安	9 世紀後半	底部周辺～底部ヘラケズリ
			224	17 号溝	7. 一括	土師器	杯	—	(2．2)	—	内外面褐色	赤粒		口縁部～底 部破片	平安		調整不明
			228	19 号溝	一活	土師器	高台付坏	—	(1．0)	-6.6	外面赤褐色内面橙色	赤粒、黒粒、 長石		体部～底部 破片	平安		調整不明、削り出し高台
			229	19 号溝	一括	土師器	蓋	—	(1．7)	—	内外面橙色	赤粒		口縁部破片	平安		磨耗のため調整不明
			211	4 号溝	5	土師器	羽釜	—	(1.5)	—	内外面褐色	黒粒、石英、 長石		破片	平安		羽部のみ
235		1	299	暗渠 1	一括	土師器	坏	—	(1.0)	(5.0)	内外面橙色	赤粒、黒粒、 長石		体部～底部 破片	平安		外面ヘラケズリ
235		2	300	暗渠 1	一括	土師器	甕	—	(2.0)	(5.0)	内外面明赤褐色	黒粒、石英、 長石、雲母		体部～底部 破片	古墳		外面ハケメ
235		3	301	暗渠 2	一括	土師器	甕	(14.0)	(2.2)	—	外面赤褐色、内面にぶい赤褐色	黒粒、石英、 雲母		口縁部破片	平安		内外面ハケメ
236		4	302	暗渠 3	P2	土師器	甕	(20.0)	(4.1)	—	内外面褐色	石英、長石、 雲母		口縁部～胴 部破片	平安		内外面ハケメ
236		5	303	暗渠 3	P1	土製品	不明	—	(1.8)	—	内外面浅黄橙色	赤粒		破片	平安		内外面調整不明
236		6	304	暗渠 4	P5	土師器	坏	—	(1.7)	(6.2)	外面明赤褐色 内面にぶい褐色	赤粒、黒粒、 石英、長石		体部～底部 破片	平安		内外面摩耗のため不明瞭、底部回転糸切り痕、内面スス付着
237		1	236	M40G	448	土師器	坏	(11.0)	(4.2)	6.4	外面明赤褐色 内面橙色	赤粒、黒粒、 長石		60%	平安		外面下部ヘラケズリ、底部回転糸切痕

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
237		2	240	M40G	430	須恵器	高台付坏	(14.0)	(5.3)	—	外面青灰色 内面灰色	黒粒、長石		口縁部～体部破片	平安		内外面ロクロナデ
237		3	242	N34G	9住 P1	土師器	坏	11.4	3.6	4.5	外面にぶい橙色 内面橙色	赤粒、黒粒、長石		90%	平安		外面底部ヘラケズリ、見込み部黒色物付着
237		4	291	T37G	838	土師器	坏	(12.6)	3.8	4.3	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		60%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
237		5	253	N36G	1219	土師器	坏	11.5	3.4	5.3	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石、雲母		95%	平安		内外面ロクロナデ、スス付着、底部回転糸切り、灯明皿に転用
237		6	284	T35G	T35G 一括	土師器	鉢	(15.0)	(7.0)	4.8	外面赤褐色 内面赤色	黒粒、石英、長石		50%	古墳		外面ヘラケズリ・ミガキ、内面ハケメ
237	D10	7	71	T37G	6住 P100	土師器	坏	12.6	3.6	3.7	内外面橙色	赤粒	焼成時に割れた痕あり	完形	平安		外面下半ヘラケズリ、内面見込み部指ナデ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
237	D10	8	72	T37G	6住 P99	土師器	坏	12.1	3.7	4.3	内外面橙色	白粒、赤粒、長石、雲母		完形	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
237		9	259	O37G	1240	灰釉陶器	碗	—	(4.7)	(7.2)	内外面灰白色	白粒		体部～高台部破片	平安		内外面ヘラナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台
237		10	234	L40G	428	須恵器	高台付坏	—	(1.6)	(8.0)	内外面灰色	黒粒、長石		体部～高台部破片	平安		底部回転糸切り後ヘラケズリ
237		11	287	T36G	一括	土師器	皿	(12.6)	(2.7)	(5.0)	内外面橙色	赤粒、黒粒、長石		口縁部～底部破片	平安		外面ヘラケズリ、底部回転糸切り痕
237		12	238	M40G	423	土師器	皿	(16.0)	(2.5)	(8.0)	内外面橙色	赤粒、黒粒、長石		40%	平安		内外面摩耗のため不明
237		13	89	T37G	6住 P98	土師器	皿	12.8	2.5	4.4	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、		80%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ
237		14	92	T37G	6住 P97	土師器	皿	12.1	2.6	4.2	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、		60%	平安		外面下半・底部ヘラケズリ、底部穿孔あり
237		15	266	R36G	207	土師器	皿	(12.4)	1.8	(3.6～4.0)	内外面橙色	赤粒、長石	内外面一部に黒変	口縁部～底部破片	平安		外面下半ヘラケズリ
237		16	230	P37G	遺物集中 P20	土師器	皿？	(10.8)	2.5	(9.0)	内外面橙色	赤粒、石英、長石、雲母		口縁部～底部破片	平安		底部ヘラケズり
237		17	267	R36G	269	土師器	小型鉢	(5.2)	4.9	2.8	内外面褐色	石英、長石		50%	古墳		外面ヘラナデ、内面ナデ
237		18	261	O40G	461	灰釉陶器	高台付皿	(12.4)	2.3	(6.8)	内外面灰白色	長石		口縁部～高台部破片	平安		底部静止糸切り後削り出し高台、底部以外釉
237		19	252	N35G	1211	土師器	置きカマド	—	(3.4)	—	内外面にぶい褐色	黒粒、石英、長石、雲母		破片	平安		内外面ハケメ
238		20	264	R35G	874	土師器	S 字状口縁台付甕	(11.0)	(3.8)	—	外面黒褐色 内面浅黄色	赤粒、黒粒、石英、長石		口縁部～胴部破片	古墳		外面ハケメ、内面指頭痕、口縁部に押されたような痕がある
238		21	295	T37G	T35G ～ U35G 一括	土師器	壺	(13.8)	(5.5)	—	内外面黄褐色	石英、長石、雲母		口縁部～胴部破片	平安		外面口縁部ヘラナデ、胴部ハケメ、内面摩耗のため不明瞭
238		22	243	N34G	9住 P2	土師器	甕	(2.2)	(4.6)	—	内外面明赤褐色	黒粒、石英、長石、雲母		口縁部～頸部破片	平安		内外面ハケメ
238		23	250	N35G	1173	土師器	甕	(26.5)	(5.4)	—	内外面橙色	石英、長石、雲母	外面一部黒変	口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
238		24	124	N34G	10号住 P12	土師器	甕	(28.0)	(11.3)	—	内外面赤褐色	白粒、黒粒、石英、雲母		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
238		25	258	N36G	1203	須恵器	甕	—	(11.7)	—	内外面黄灰色	長石		胴部破片	平安		外面タタキ、内面指おさえ
238		26	241	M40G	241	須恵器	甕	—	(8.3)	(14.0)	内外面灰色	黒粒、長石		胴部～底部破片	平安		外面タタキ、内面ハケメ
238	D10	27	306	1号住	1	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	—	内外面橙色	石英、長石、雲母		胴部破片	縄文	井戸尻	外面隆帯、縄文
238	D10	28	307	1号住	一括	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	内外面褐色	黒粒、石英、長石、雲母		口縁部破片	縄文	五領ヶ台	外面沈線、刺突、内面沈線

図版番号	写真図版	番号	実測番号	遺構	注記番号	種　類	器　形	口　径	器　高	底　径	色　調	胎　土	焼　成	残　存	時　代	時　期	備　考
238	D10	29	309	R37G	689	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	内外面赤褐色	石英、長石、雲母		口縁部破片	縄文	五領ヶ台	外面集合沈線
238	D10	30	310	N37G	241	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	内外面明赤褐色	石英、長石		破片	縄文	曽利	外面隆帯、円孔
238		31	308	R37G	609	縄文土器	深鉢	—	(2.0)	(12.0)	内外面明赤褐色	黒粒、石英、長石、雲母		底部破片	縄文	縄文中期	
			79	T37G	6住 P95	土師器	坏	(13.8)	3.7	5.2	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英、長石		40%	平安	10 世紀後半	外面下半ヘラケズリ、底部回転糸切り後ヘラケズリ
			94	T37G	6住 P96	土師器	皿	(13.8)	2.3	—	内外面橙色	白粒、赤粒、黒粒、石英、	外面一部黒変	30%	平安	10 世紀前半	外面下半ヘラケズリ、底部ヘラケズリ？
			118	N35G	10号住 P9・N35G1169	土師器	坏	(12.4)	4.7	(7.4)	内外面橙色	白粒、赤粒		25%	平安	8 世紀後半	外面下半、底部ヘラケズリ
			231	P37G	一括	土師器	甕	(23.0 ～ 24.0)	(2.5)	—	内外面橙色	赤粒、黒粒、石英		口縁部破片	平安		内外面摩耗のため不明
			244	N35G	1207・1208	土師器	坏	(10.8)	3.1	5.4	内外面明赤褐色	赤粒、長石		30%	平安	10 世紀後半	内外面摩耗のため不明瞭
			276	S36G	847	土師器	皿	(13.4)	2.5	(5.5)	内外面橙色	赤粒、黒粒		25%	平安	9 世紀後半	外面下半回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、内外面口唇部・体部にスス付着、灯明皿に転用
			277	S37G	T37GP839	土師器	坏	11.4	3.9	(4.6)	内外面橙色	赤粒、石英、長石		30%	平安	10 世紀前半	外面下半・底部ヘラケズリ
			278	S37G	1243・一括	土師器	皿	12.0	3.4	2.5	内外面にぶい黄橙色	赤粒、黒粒、石英、長石	外面体部～底部一部黒変	95%	平安	10 世紀前半	外面下半ヘラケズリ、坏２
			279	S37G	846	土師器	皿	(12.0)	2.2	—	内外面橙色	赤粒、石英、長石		40%	平安	10 世紀前半	底部ヘラケズリ、注口に刺突、注口を作る時の工具痕か
			282	T35G	192	土師器	甕	(24.0)	(4.7)	—	内外面赤褐色	黒粒、石英、長石、雲母		口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
			289	T35G	一括	土師器	甕	(21.0 ～ 22.0)	(4.1)	—	外面褐色 内面にぶい橙色	赤粒、黒粒、石英、雲母	内面一部黒変	口縁部～胴部破片	平安		内外面ハケメ
			281	S38G	一括	灰釉陶器	壺	(10.0)	(2.8)	—	内外面灰白色	黒粒		口縁部破片	平安		
			305	13 号住	覆土一括	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	—	内外面にぶい赤褐色	黒粒、石英、長石		胴部破片	縄文	五領ヶ台	外面隆帯

第36表　遺物観察表（2）

（cm・g）

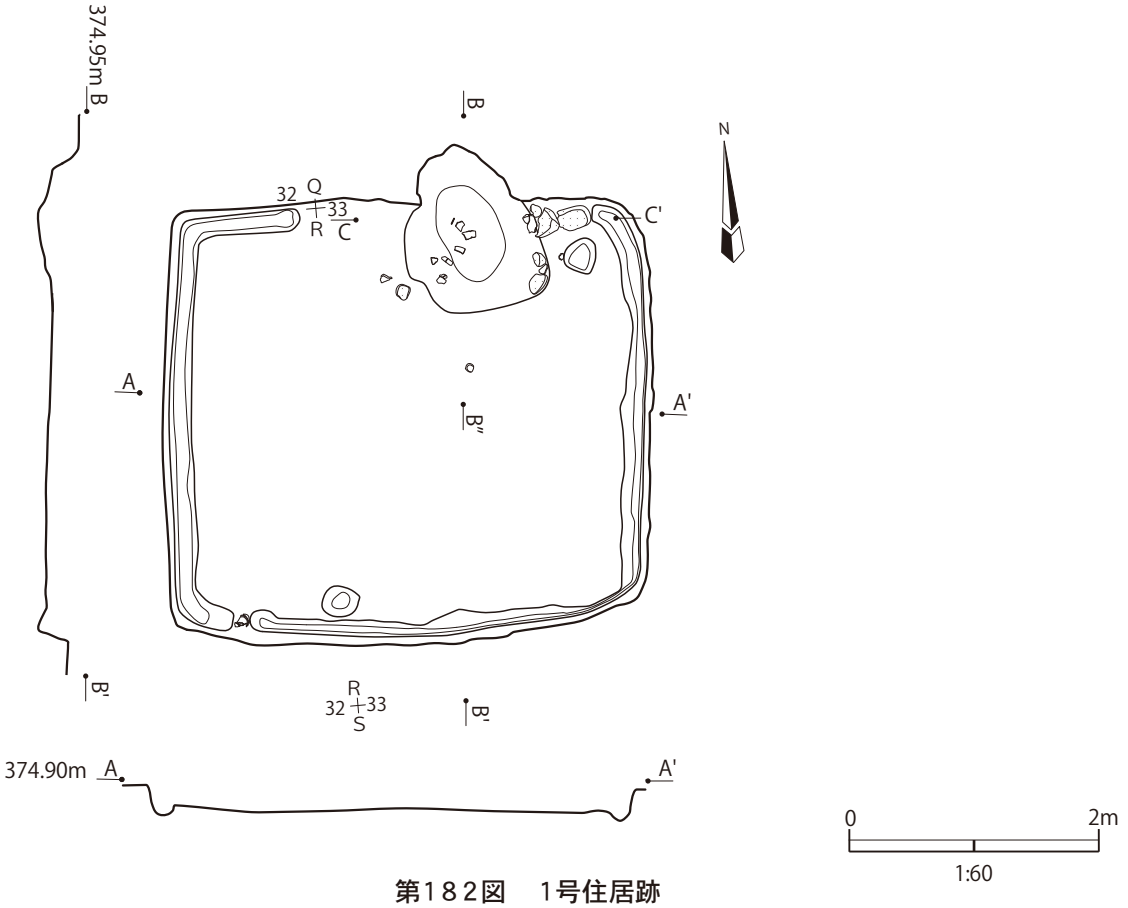
図版番号	写真図版	番号	実測番号	出土位置	注記番号	種類	器形	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存	備考
239		40	324	O 39 G	F1	鉄製品	鎌？	(5.6)	(2.5)	0.3	11.5	破片	保存処理No. 39060
239		41	325	T 38 G	F1	鉄製品	棒状	(6.6)	0.8	0.8	6.8	破片	保存処理No. 39059

第37表　遺物観察表（3）

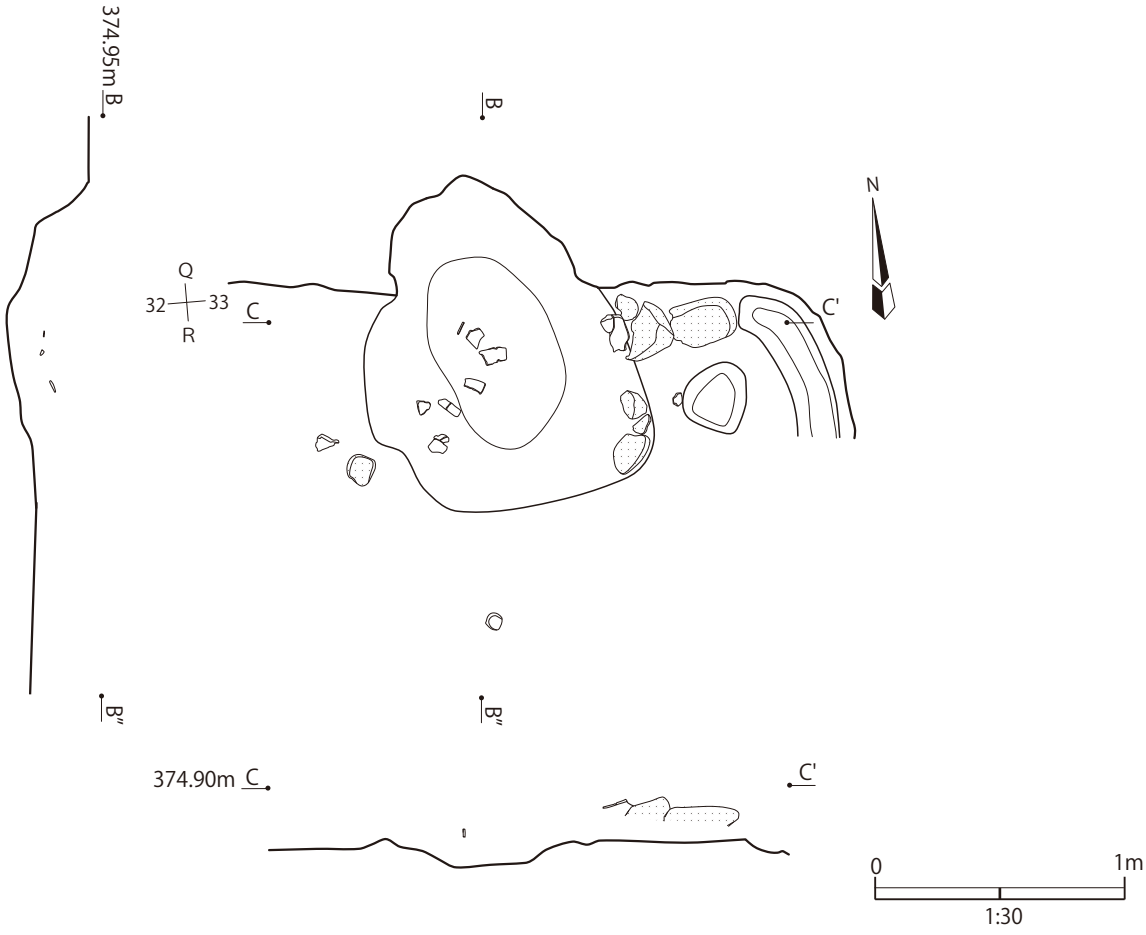
（cm・g）

図版番号	写真図版	番号	実測番号	出土位置	注記番号	種類	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存	備考
239	D 10	32	311	4号住	S-1	磨製石斧	蛇紋岩	5.50	5.50	1.80	92	50%	
239	D 10	33	316	T35G	S-19	打製石斧	粘板岩	12.1	5.80	1.40	132		
239		34	315	S36G	S-18	磨石	花崗岩	8.00	5.20	4.60	298	完形	
239		35	313	6号住	S-1	磨石	花崗岩	10.7	7.00	3.90	460	完形	
239		36	312	5号住	S-6	磨石	花崗岩	14.7	9.40	5.90	1130	90%	
239		37	314	10号住	一括	磨石	花崗岩	10.4	7.80	4.60	550	一部欠損	
239	D 10	38	318	P34G	S-14	楔形石器	水晶	2.13	1.24	0.65	2.1	完形	
239	D 10	39	317	L39G	S-4	石錐	チャート	2.98	1.59	0.59	2.4	先端部	
				2溝	S-1	打製石斧？	結晶片岩	8.3	3.7	1.1	44	一部欠損	
				L39G	S-5	打製石斧？	ホルンヘルス	9.1	4.3	1.3	48		
				T36G	一括	打製石斧？	粘板岩	9.1	5.8	0.9	60		
				北壁（東側）	一括	石核	黒曜石	2.92	2.4	2.06	12.7		
				1号住	一括	二次加工剥片	黒曜石	2.26	0.90	0.52	0.8		
				N39G	一括	二次加工剥片	黒曜石	1.75	1.4	0.5	1.5		
				P34G	S-11	二次加工剥片	黒曜石	2.16	1.45	0.23	0.8		
				P34G	S-15	二次加工剥片	水晶	2.00	1.54	0.76	1.9		
				P36G	一括	二次加工剥片	水晶	1.24	1.04	0.35	0.7		
				R34G	一括	二次加工剥片	黒曜石	1.76	1.37	0.75	2.3		
				T34G	一括	二次加工剥片	水晶	1.74	1.22	0.55	1.1		
				U34G	S-1	二次加工剥片	黒曜石	2.77	2.53	0.57	3.6		
				1号住	P35	剥片	黒曜石	1.73	1.66	1.84	2.1		
				4号住	一括	剥片	黒曜石	2.14	178	0.85	2.9		
				6号住	一括	剥片	黒曜石	1.70	1.40	0.90	0.8		
				6号住	一括	剥片	黒曜石	2.25	1.43	0.34	1.3		
				7号住	一括	剥片	チャート	2.17	1.42	0.56	1.7		
				9号住	一括	剥片	黒曜石	1.78	1.56	0.67	1.9		
				65号土坑	S-1	剥片	水晶	2.14	1.27	1.17	2.3		
				46号ピット	一括	剥片	黒曜石	2.46	1.86	0.95	5.1		
				M39G	一括	剥片	黒曜石	1.77	1.64	0.54	0.8		
				N35G	一括	剥片	黒曜石	2.50	2.40	0.57	3.9		
				N40G	一括	剥片	水晶	1.90	1.20	0.48	1.1		
				P34G	S-12	剥片	水晶	3.10	1.58	0.97	5		
				P34G	S-13	剥片	水晶	1.78	1.54	1.05	3.6		
				P34G	S-16	剥片	水晶	3.00	2.22	1.10	6.5		
				R37G	S-3	剥片	ジャスパー	2.90	2.76	1.15	7.2		
				S34G	S-2	剥片	チャート	2.90	1.71	0.77	5		
				T36G	一括	剥片	チャート	2.50	2.03	0.97	4.5		
				T36G	一括	剥片	黒曜石	1.70	1.68	0.93	2.4		
				表土	一括	剥片	黒曜石	2.20	1.07	0.64	1.8		
				表土	一括	剥片	黒曜石	0.78	0.56	0.34	0.1		
				41号土坑	S-1	破砕原石	水晶	3.13	1.33	1.54	8.7		
				R37G	S-9	破砕原石	水晶	3.02	2.64	1.84	16.1		
				暗渠3	一括	破砕原石	水晶	1.85	1.45	1.28	2.8		

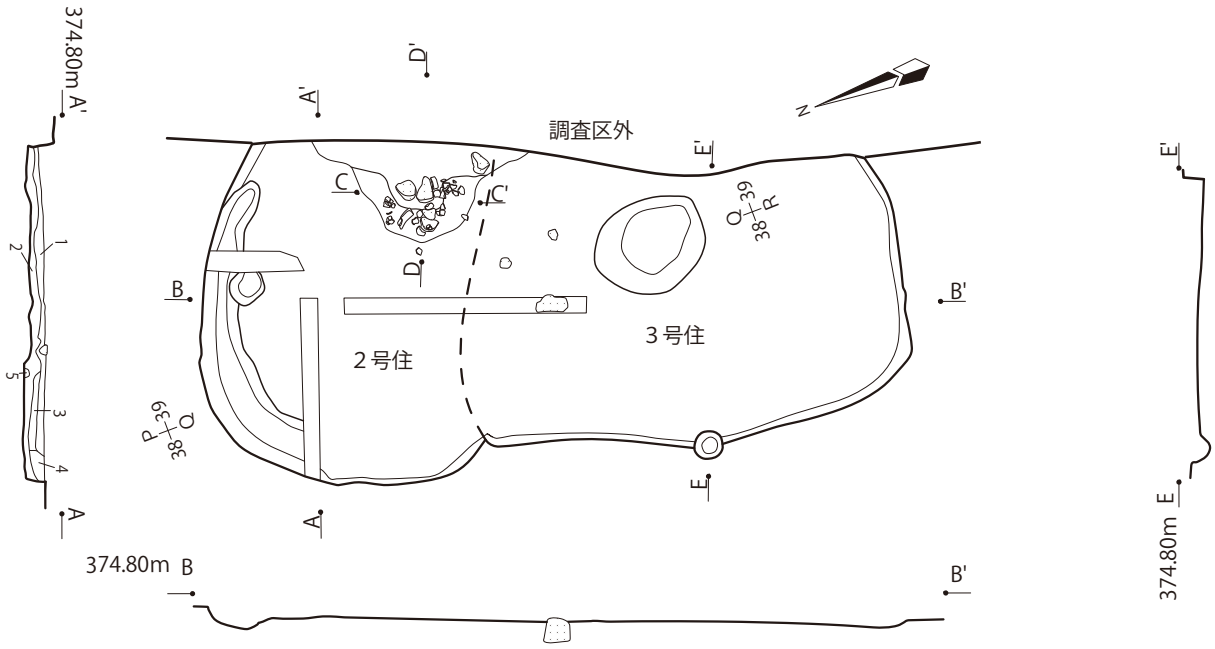
Y＝16630.0
Y＝16635.0
Y＝16640.0
Y＝16645.0
Y＝16650.0
Y＝16655.0
Y＝16660.0
Y＝16665.0
Y＝16670.0
Y＝16675.0
32
33
34
35
36
37
38
39
40
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
X＝－32885.0
X＝－32890.0
X＝－32895.0
X＝－32900.0
X＝－32905.0
X＝－32910.0
X＝－32915.0
X＝－32920.0
X＝－32925.0
X＝－32925.0
X＝－32930.0
X＝－32935.0
N
基本層序SP
1:100
0
5
10m



第１８２図　1号住居跡



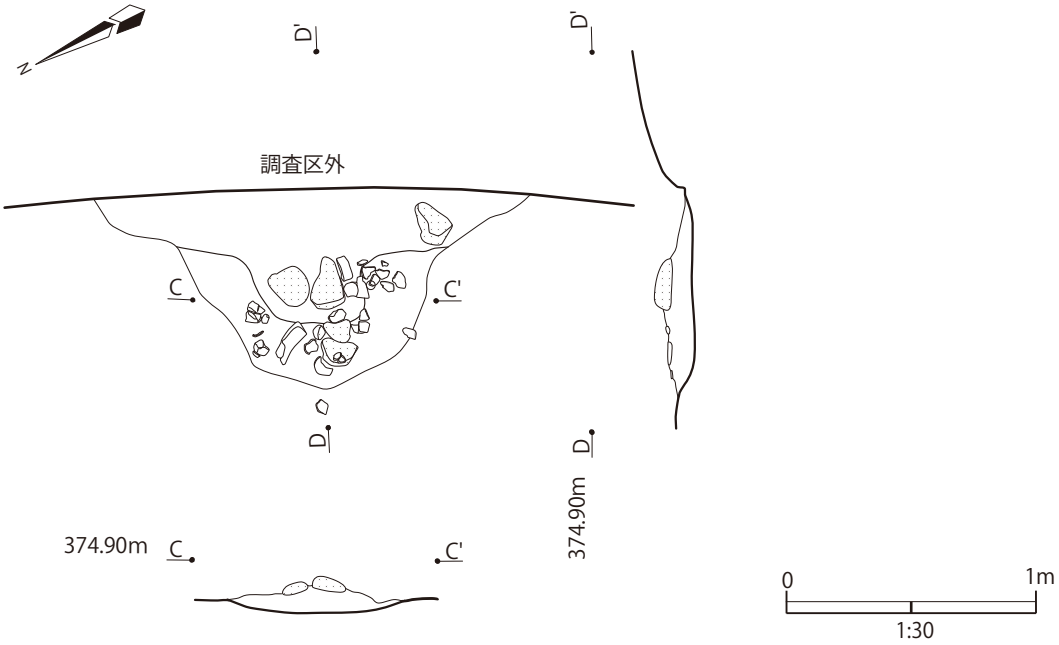
第１８３図　1号住居跡カマド



（2号住居跡）
1.暗褐色砂質土（10YR3/4）　粘性あり、しまり中
2.暗褐色砂質土（7.5YR3/4）　粘性なし、しまり中
3.暗褐色砂質土（7.5YR3/3）　赤色粒微量含む　粘性あり、しまり中
4.極暗褐色砂質土（7.5YR2/3）　粘性あり、しまり中
5.褐色粘土（10YR4/6）　しまり中

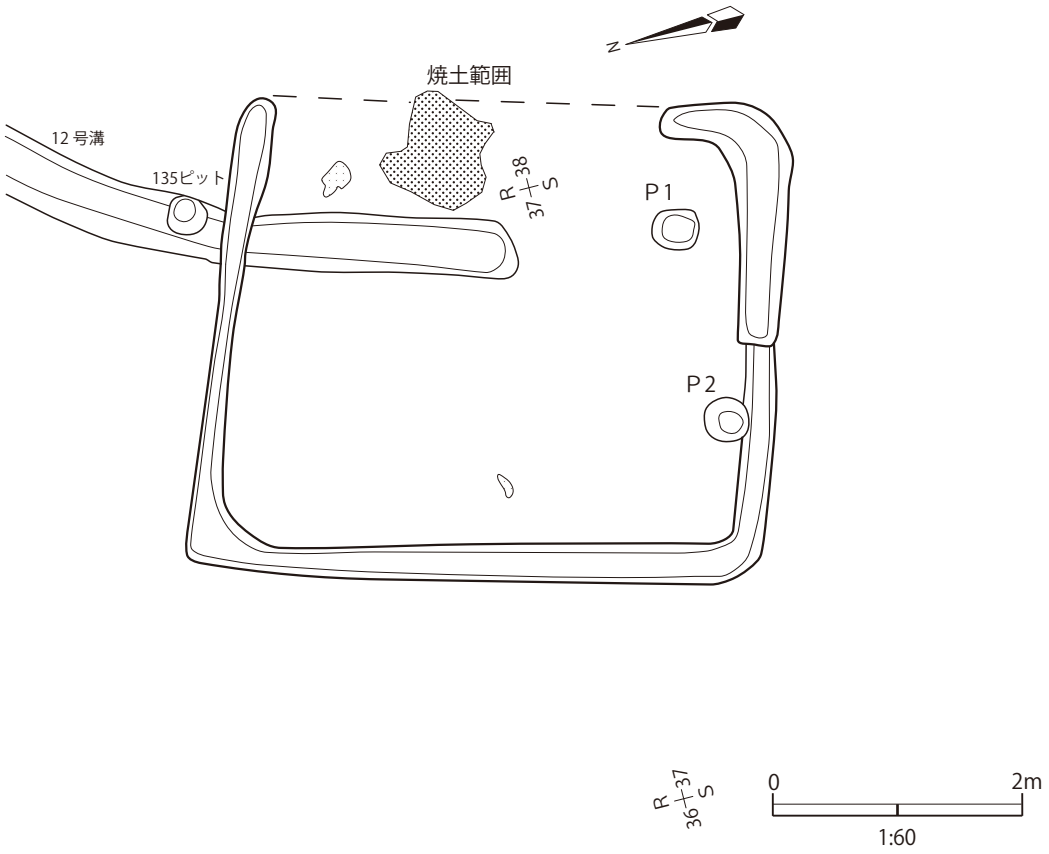
0　2m
1:60

第184図　2号住居跡

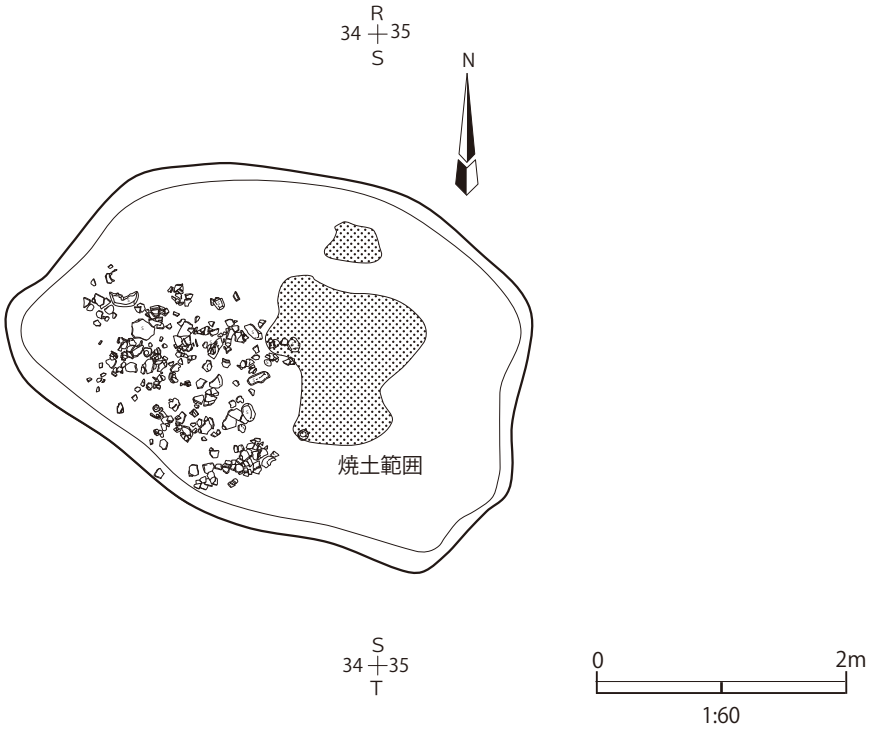


0　1m
1:30

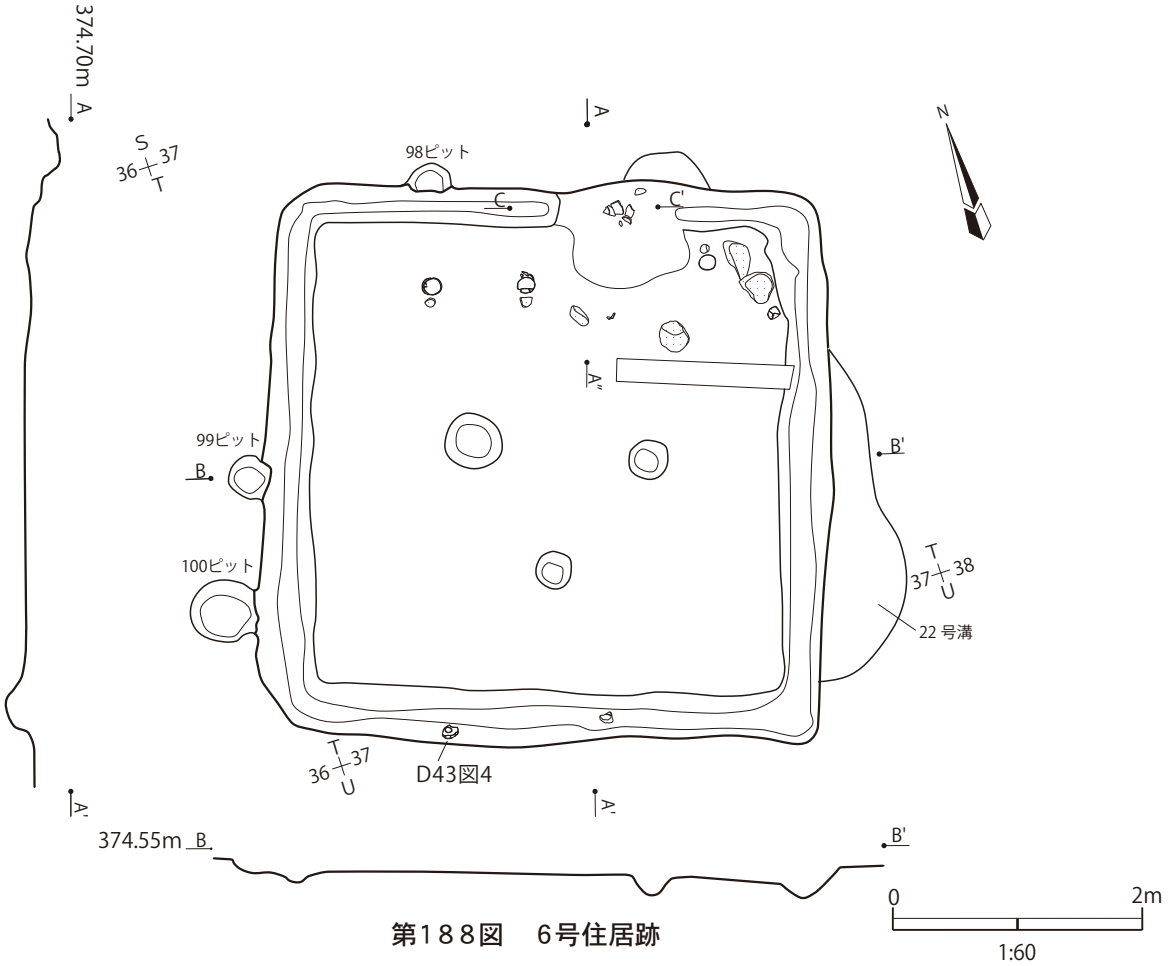
第185図　2号住居跡カマド



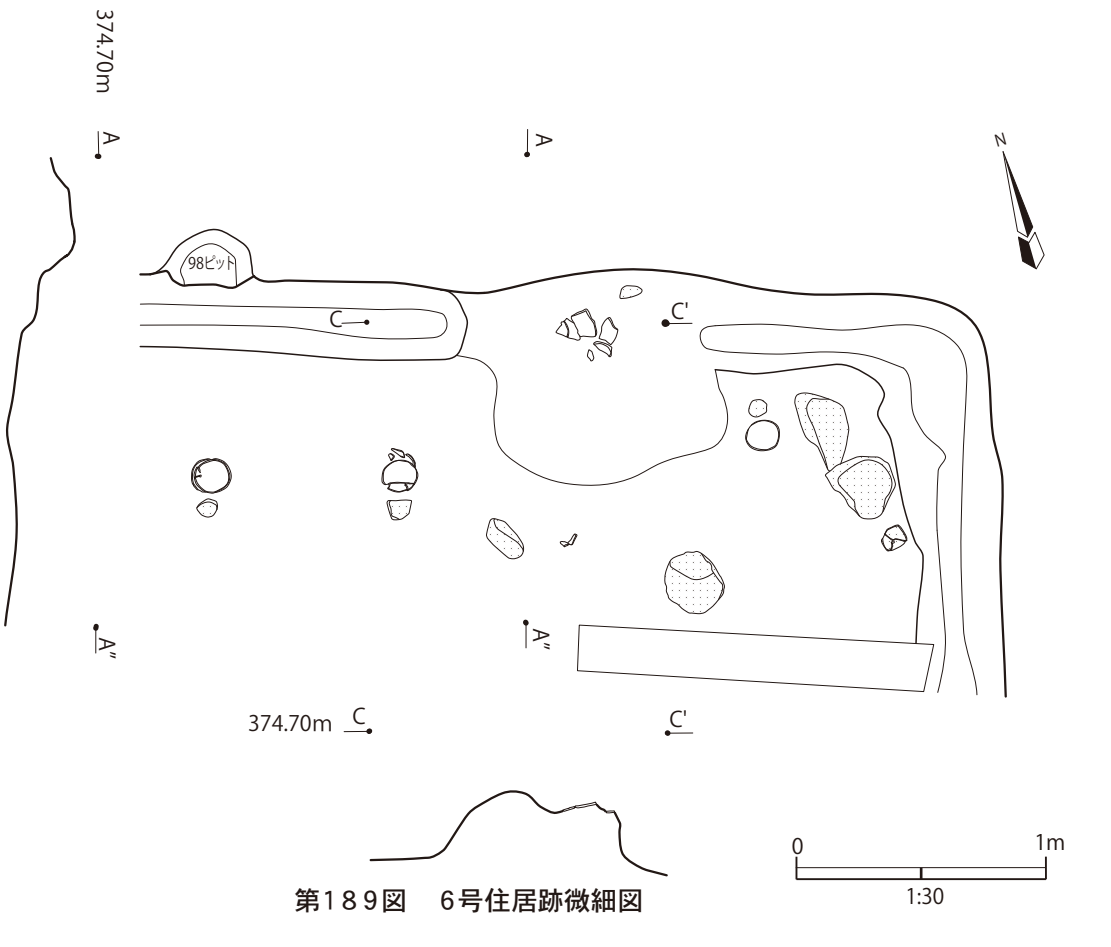
第186図　4号住居跡



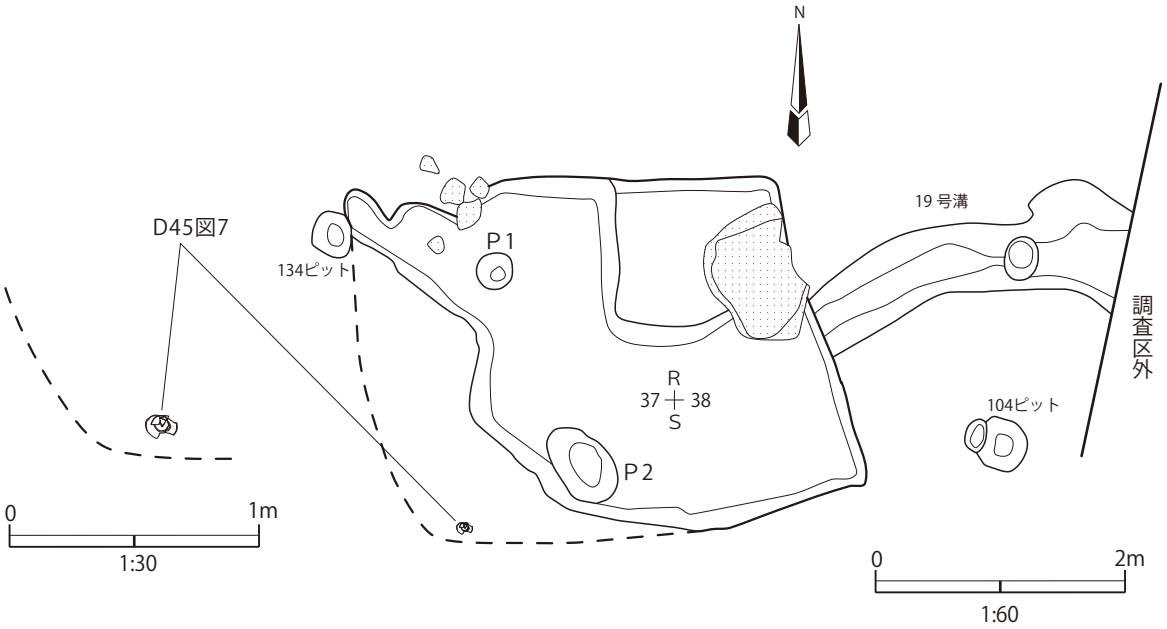
第187図　5号住居跡



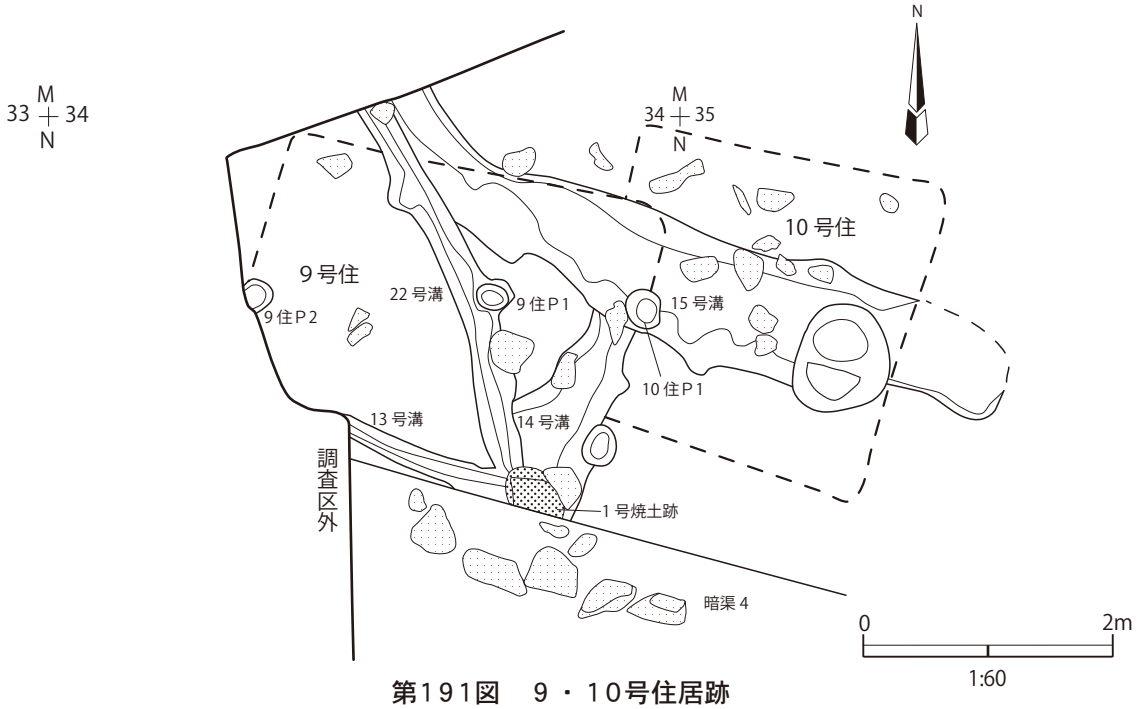
第188図　6号住居跡



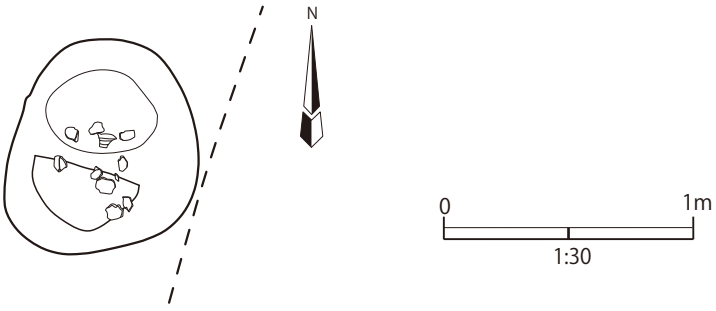
第189図　6号住居跡微細図



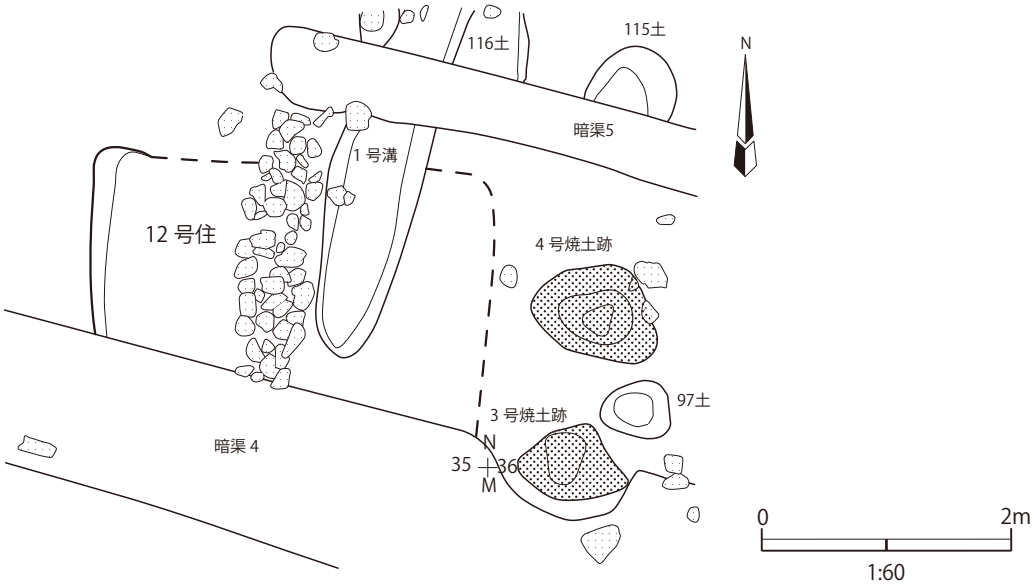
第190図　7号住居跡



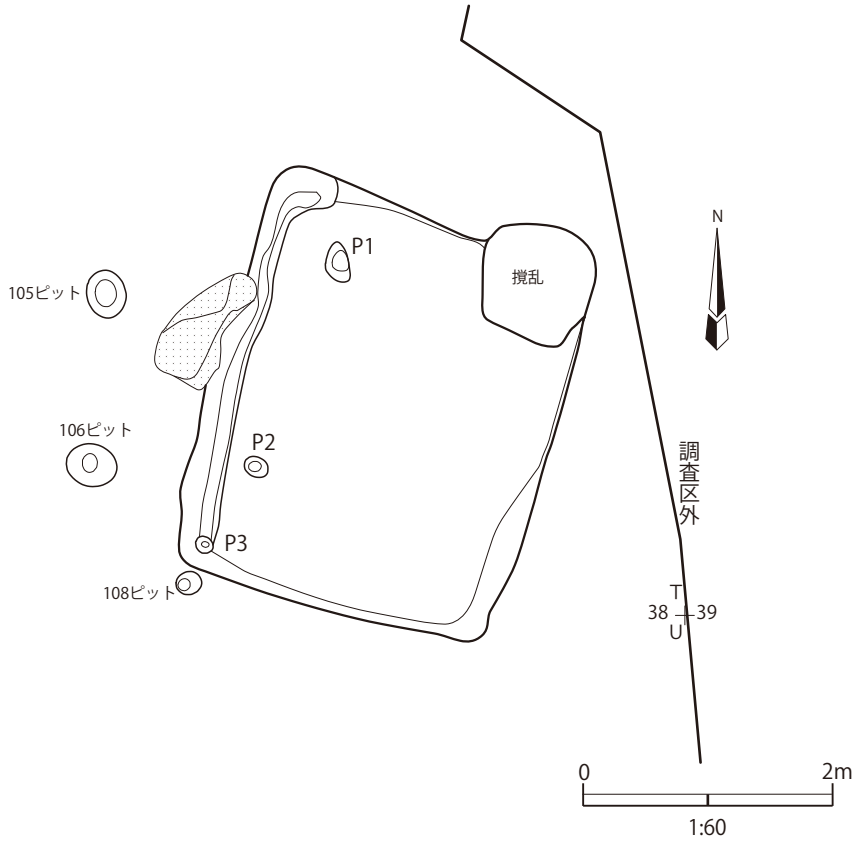
第191図　9・10号住居跡



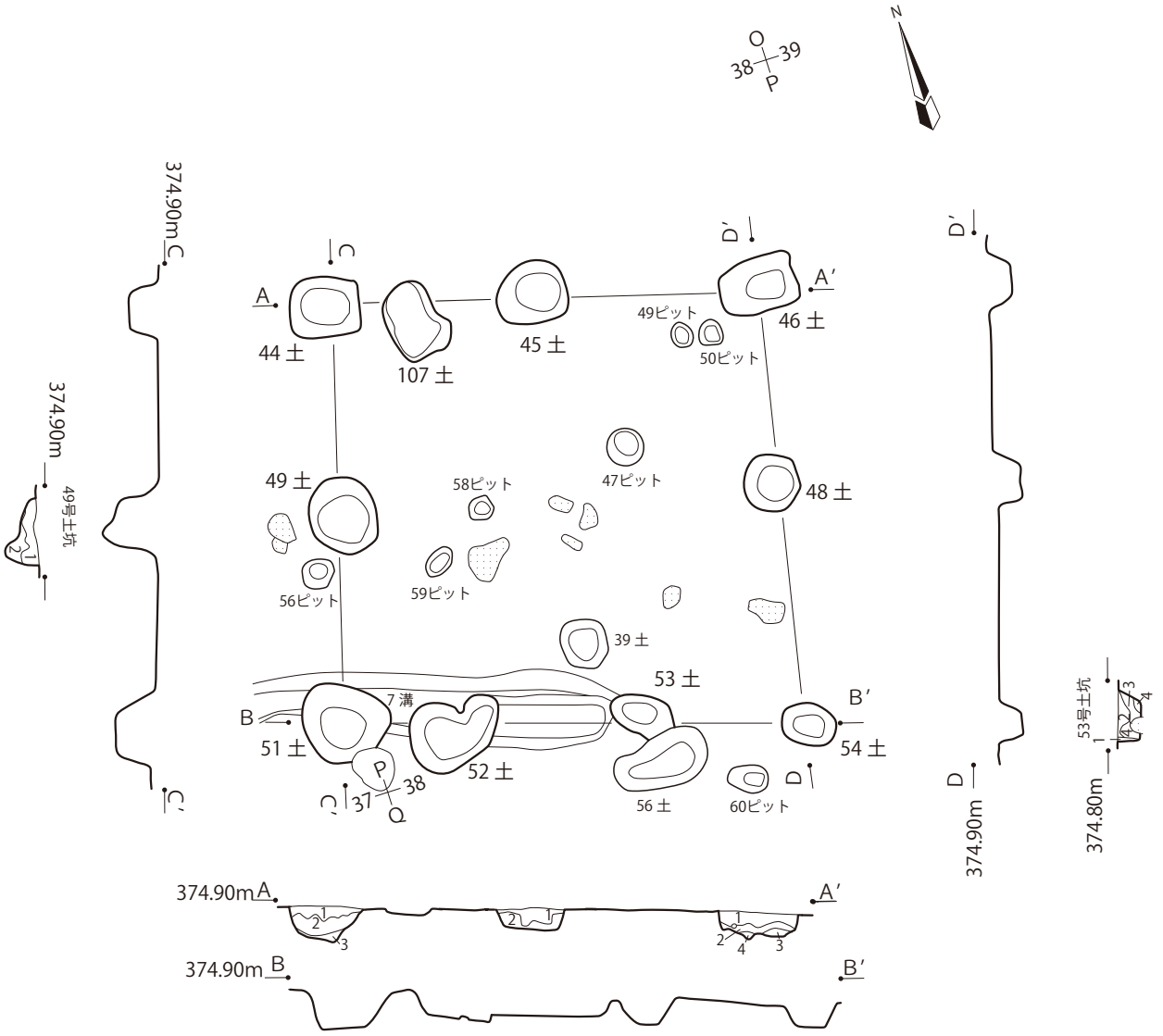
第192図　10号住居跡カマド



第193図　12号住居跡



第194図　13号住居跡



（44号土坑）
1.黒褐色（10YR3/2）　オレンジ色・赤色スコリア多く含む
　粘性やや弱く、しまりややあり
2.黒褐色（10YR3/1）　オレンジ色スコリア少量含む
　粘性やや弱く、しまりあり
3.黒褐色（（10YR3/2）　粘性やや弱く、しまりあり
　地山か

（45号土坑）
1.暗褐色（7.5YR3/3）　オレンジ色スコリア少量含む
　粘性やや弱く、しまりやや弱い
2.暗褐色（10YR3/3）　オレンジ色スコリア少量含む
　1層より粘性・しまり強い

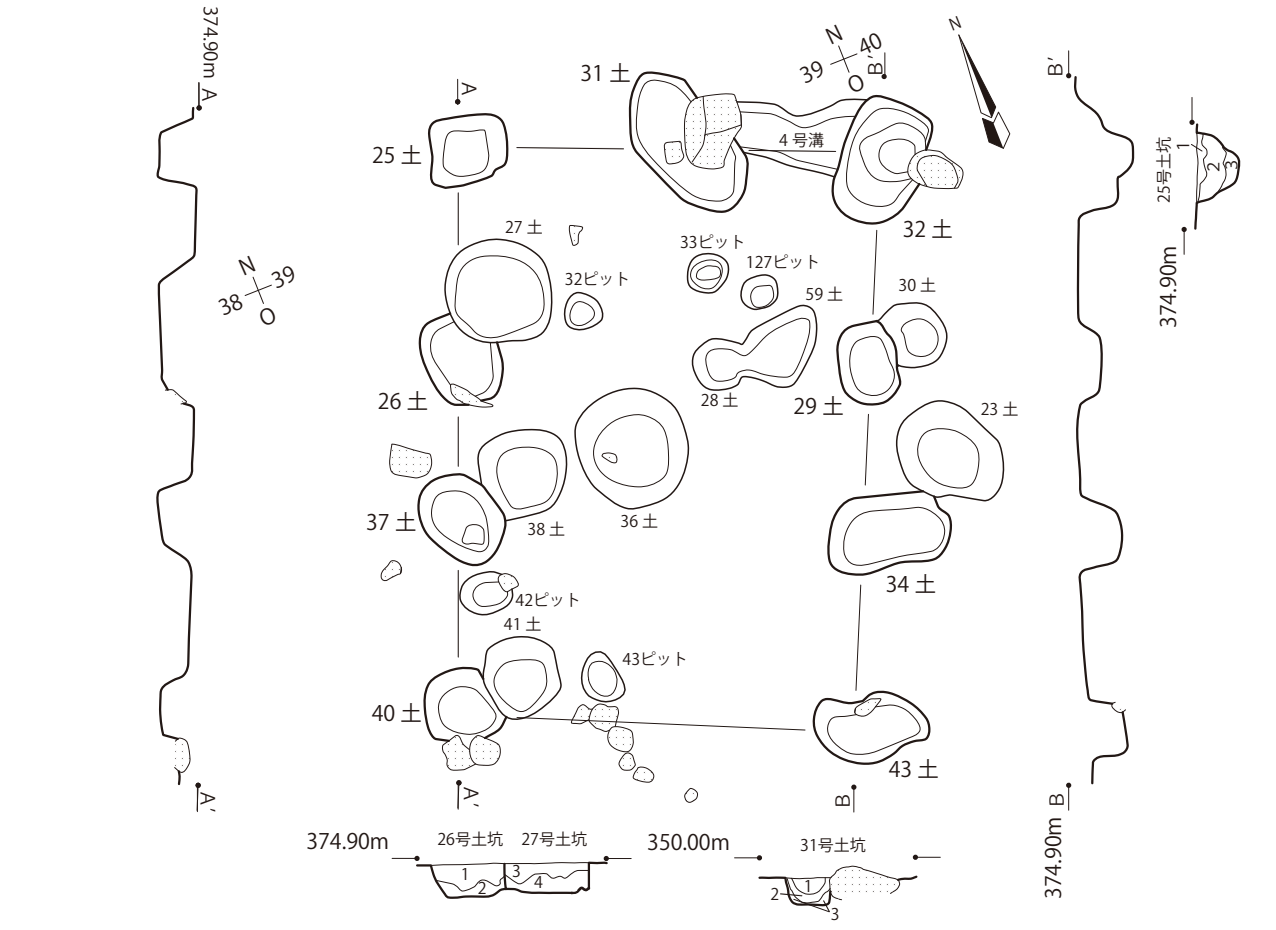
（46号土坑）
1.褐色（7.5YR4/3）　白色スコリア少量含む
　粘性やや弱く、しまり強い
2.暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）
3.黒褐色（7.5YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　1層よりしまり強い
4.黒色（7.5YR1.7/1）　粘性やや強く、しまり弱い

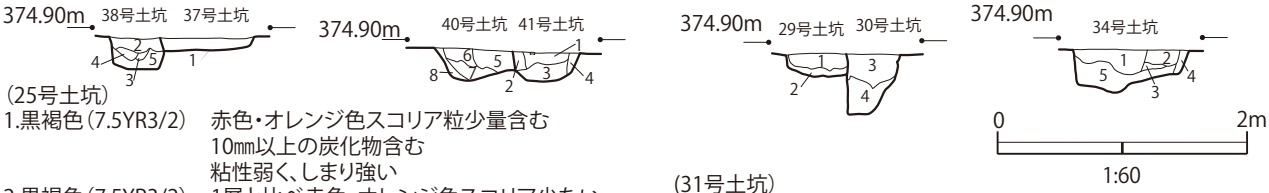
（53号土坑）
1.褐色粘土（10YR4/6）
2.極暗褐色砂質土（7.5YR2/3）
3.暗褐色粘土（7.5YR3/4）　黄褐色ブロック含む
4.にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）

（49号土坑）
1.にぶい黄褐色粘土（10ＹR5/4）　暗褐色ブロック多く含む
2.暗褐色粘土（7.5YR3/4）　褐色ブロック多く含む

（48号土坑）
1.暗褐色（10YR3/3）　灰褐色粘土塊含む
　粘性強く、しまりあり
2.黒褐色（10YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　1層に比べ粘性弱い

第195図　1号掘立柱建物跡





(25号土坑)
1.黒褐色(7.5YR3/2)　赤色・オレンジ色スコリア粒少量含む
10㎜以上の炭化物含む
粘性弱く、しまり強い
2.黒褐色(7.5YR3/2)　1層と比べ赤色・オレンジ色スコリア少ない
3.黒褐色(7.5YR3/1)　赤色スコリア粒少量含む
2層と比べ粘性強い

(26・27号土坑)
1.黒褐色(10YR2/2)　オレンジ色スコリア粒含む
粘性やや強い
2.暗褐色(7.5YR3/3)　オレンジ色スコリア粒含む
灰色粘土塊ブロック状に含む
粘性やや強い
3.黒褐色(10YR2/2)　オレンジ色スコリア粒1層より少ない
粘性やや強い
4.黒褐色(7.5YR2/2)　オレンジ色スコリア粒2層より少ない
灰色粘土塊含む　粘性強い

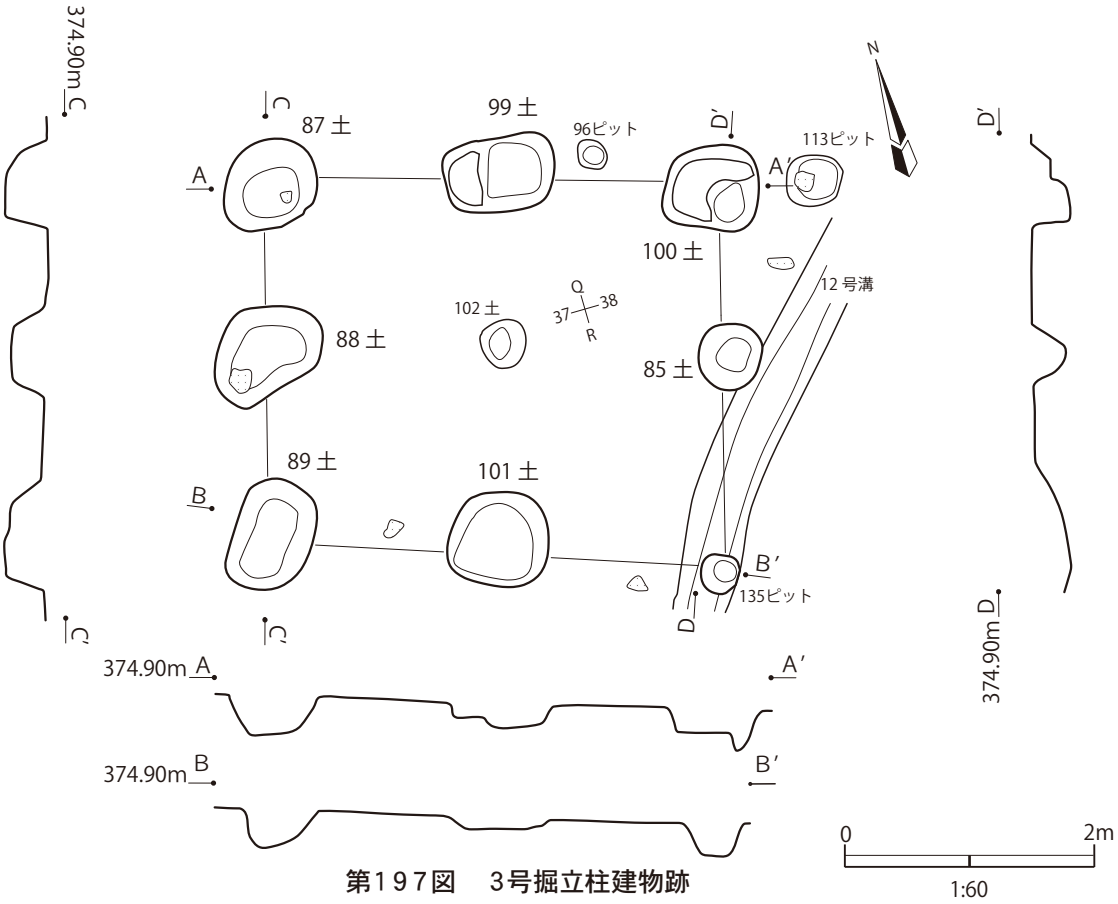
(40・41号土坑)
1.黒褐色(10YR2/3)　オレンジ色スコリア粒含む
10㎜以下の炭化物少量含む
粘性やや強く、しまり強い
2.黒褐色(10YR3/2)　オレンジ色スコリア粒1層より多い
粘性やや強く、しまり強い
3.灰黄褐色(10YR4/2)　地山との混土か
粘性強く、しまり弱い
4.黒褐色(7.5YR2/2)　地山か　粘性やや強く、しまり弱い
5.黒褐色(7.5YR2/2)　オレンジ色スコリア粒を含む
粘性やや弱く、しまり強い
6.黒褐色(7.5YR2/2)　灰色粘土塊多く含む
5層より粘性強い
7.黒褐色(7.5YR3/1)　オレンジ色スコリア粒含む
粘性やや弱く、しまり強い
8.灰黄色粘土(2.5Y6/2)　地山か

(31号土坑)
1.黒褐色(10TR2/3)　オレンジ色スコリア粒含む
粘性弱い、しまりやや強い
2.にぶい黄色(2.5YR6/3)　粘性強い
3.にぶい黄褐色(10YR4/3)　5㎜以下の炭化物少量祝無
粘性やや強く、しまりあり

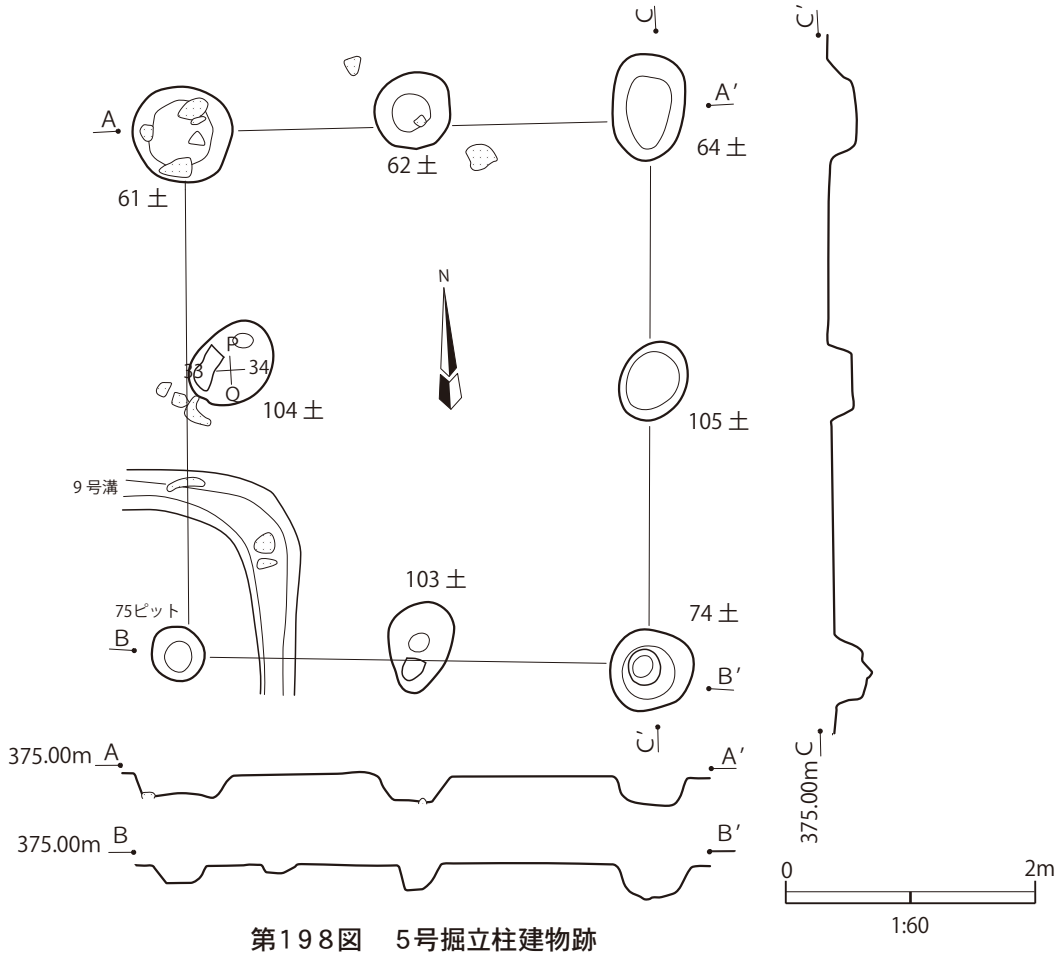
(34号土坑)
1.暗褐色(10YR3/4)　オレンジ色スコリア粒含む
10㎜以下の炭化物含む
粘性やや弱い、しまりやや強い
2.黒褐色(7.5YR2/2)　オレンジ色スコリア粒少量含む
10㎜以下の炭化物含む
粘性やや弱く、しまり強い
3.にぶい黄橙色粘土(10YR6/4)
4.褐色(10YR4/6)　粘性・しまりやや強い　地山か
5.黒褐色(10YR2/2)　粘性・しまりやや強い　地山か

(37・38号土坑)
1.暗褐色(7.5YR3/3)　オレンジ色スコリア粒少量含む
粘性弱い、しまり強い
2.暗褐色(7.5YR3/4)　オレンジ色スコリア粒含む
黒いシミを含む　粘性弱く、しまり強い
3.にぶい黄褐色(10YR4/3)　黄色スコリア粒含む
粘性弱く、しまり弱い
4.黒褐色(7.5YR3/1)　1～3層と比べて粘性強い
5.黒褐色(7.5YR2/2)　4層より粘性強い

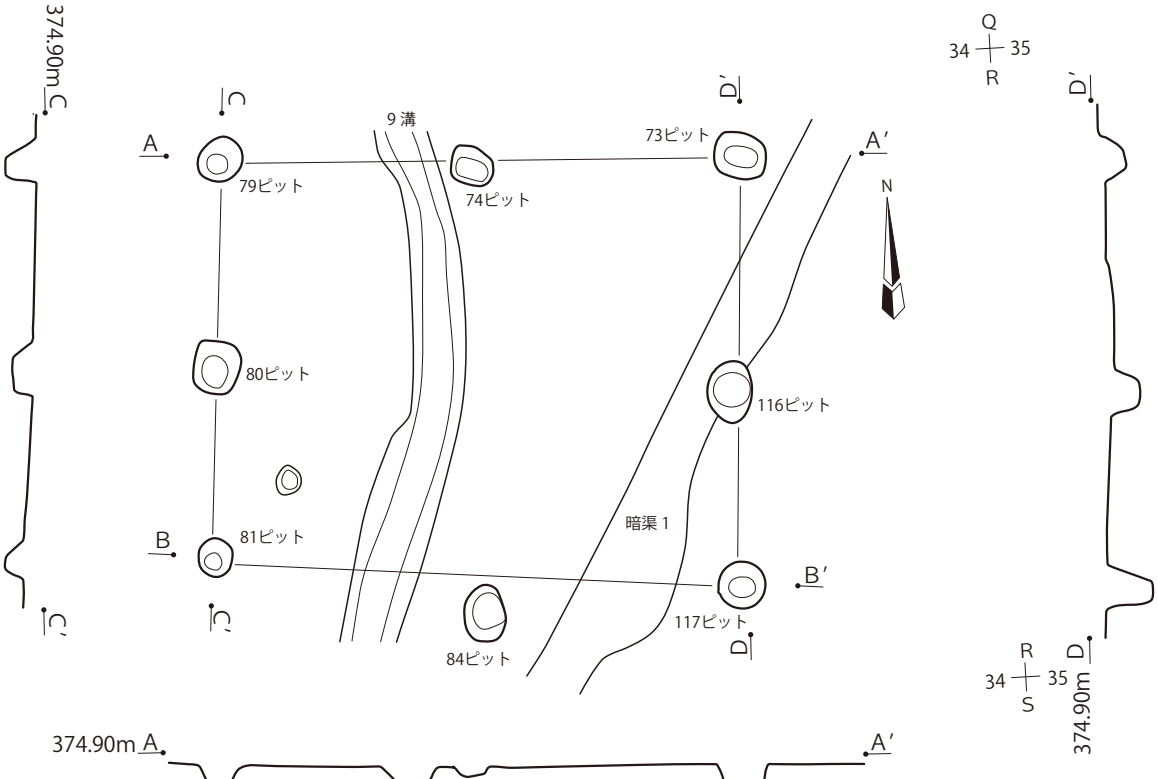
第196図　2号掘立柱建物跡



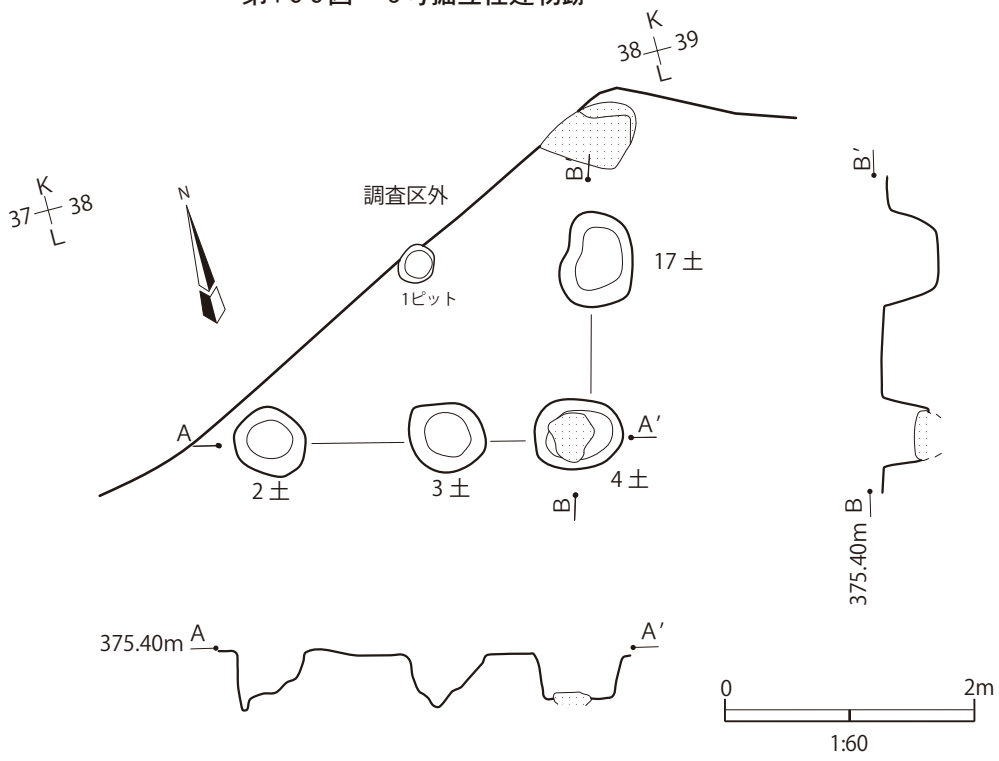
第197図　3号掘立柱建物跡



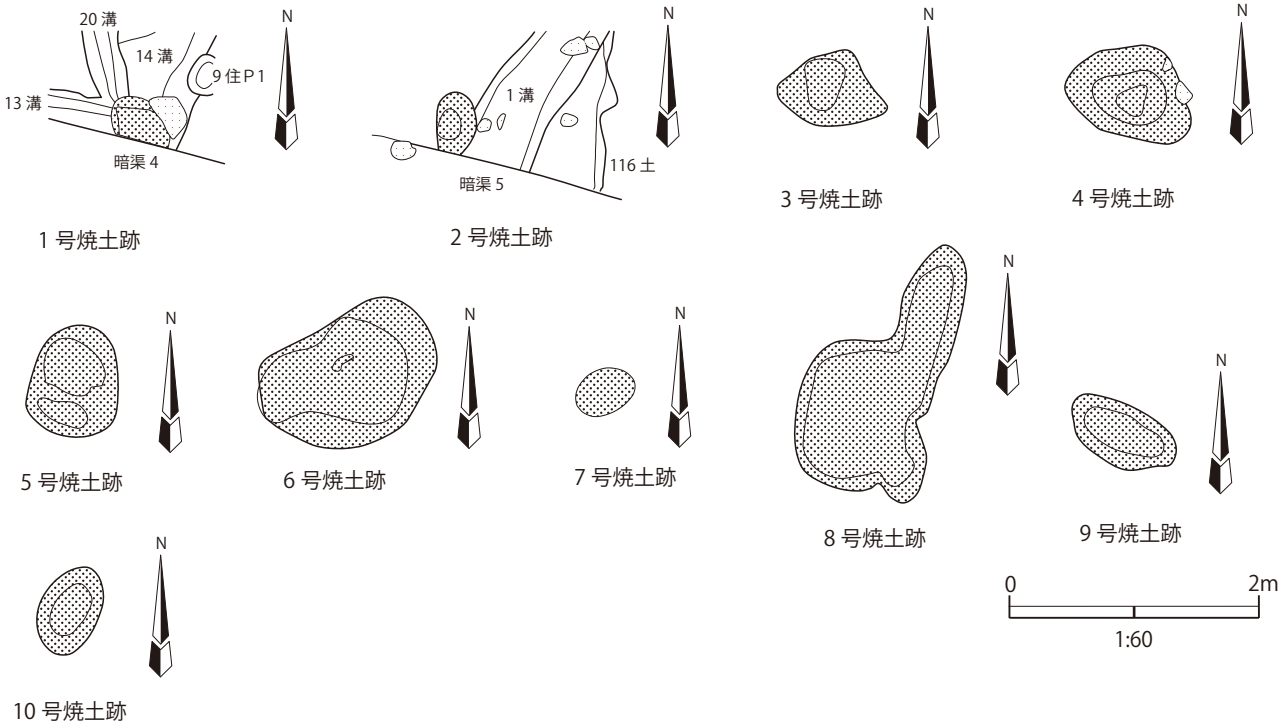
第198図　5号掘立柱建物跡



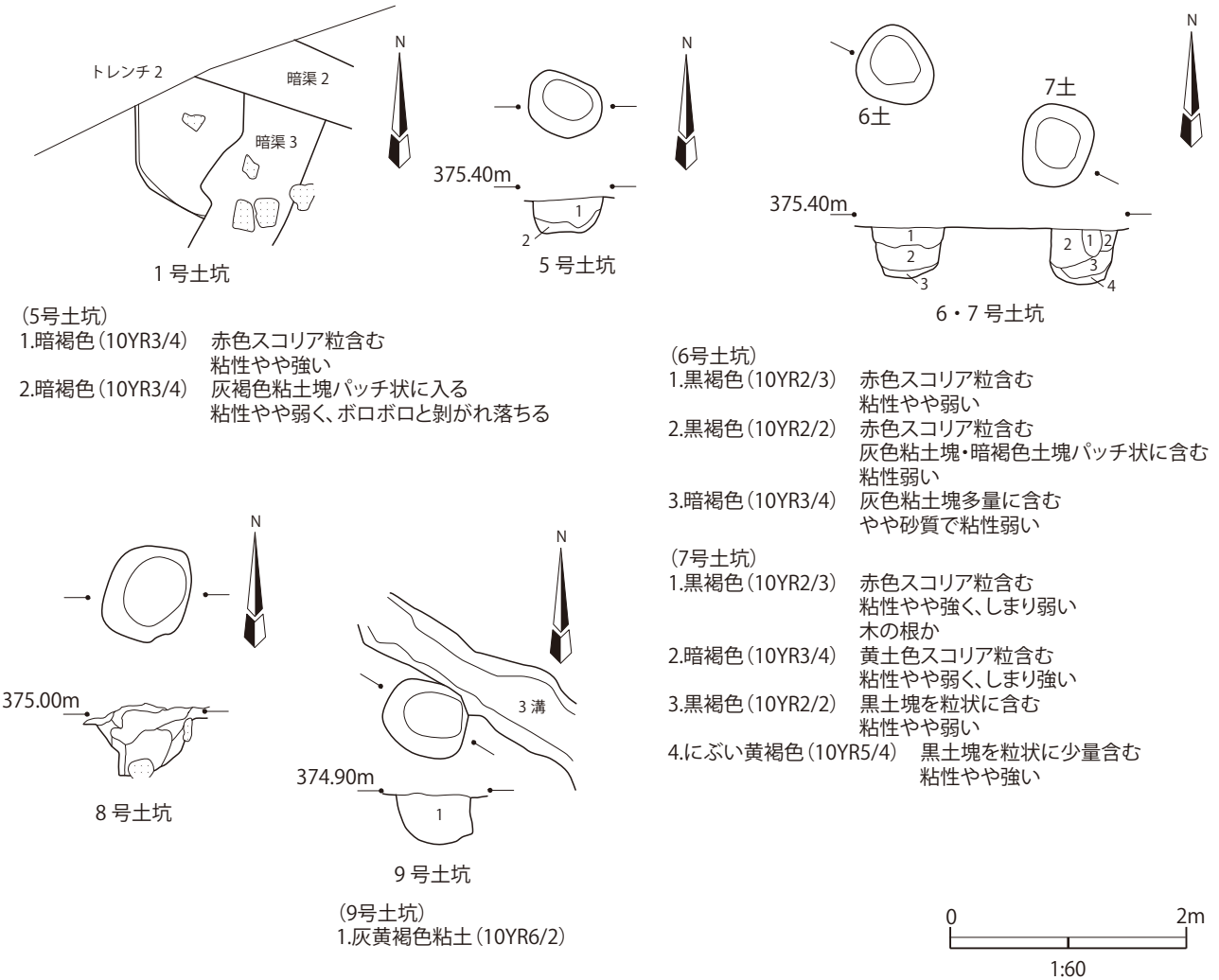
第199図　6号掘立柱建物跡



第200図　7号掘立柱建物跡



第２０１図　焼土跡



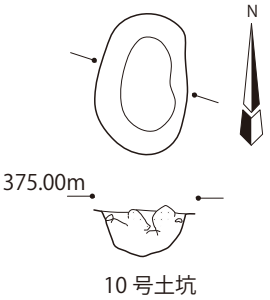
(5号土坑)
1.暗褐色(10YR3/4)　赤色スコリア粒含む
　粘性やや強い
2.暗褐色(10YR3/4)　灰褐色粘土塊パッチ状に入る
　粘性やや弱く、ボロボロと剥がれ落ちる

(6号土坑)
1.黒褐色(10YR2/3)　赤色スコリア粒含む
　粘性やや弱い
2.黒褐色(10YR2/2)　赤色スコリア粒含む
　灰色粘土塊・暗褐色土塊パッチ状に含む
　粘性弱い
3.暗褐色(10YR3/4)　灰色粘土塊多量に含む
　やや砂質で粘性弱い

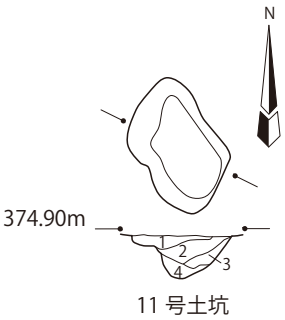
(7号土坑)
1.黒褐色(10YR2/3)　赤色スコリア粒含む
　粘性やや強く、しまり弱い
　木の根か
2.暗褐色(10YR3/4)　黄土色スコリア粒含む
　粘性やや弱く、しまり強い
3.黒褐色(10YR2/2)　黒土塊を粒状に含む
　粘性やや弱い
4.にぶい黄褐色(10YR5/4)　黒土塊を粒状に少量含む
　粘性やや強い

(9号土坑)
1.灰黄褐色粘土(10YR6/2)

第２０２図　土坑（1）

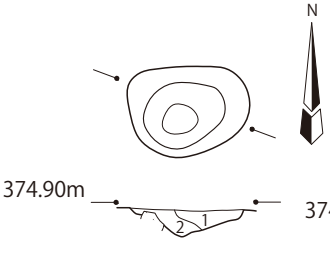


10 号土坑

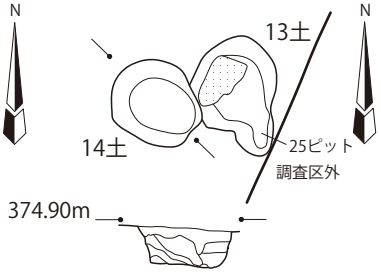


11 号土坑

（11号土坑）
1.褐色（10YR4/6）　1㎜以下の白い砂粒含む
　粘性やや強い
2.褐色(10YR4/4)　1㎜以下の白い砂粒少量含む
　オレンジ色スコリア含む

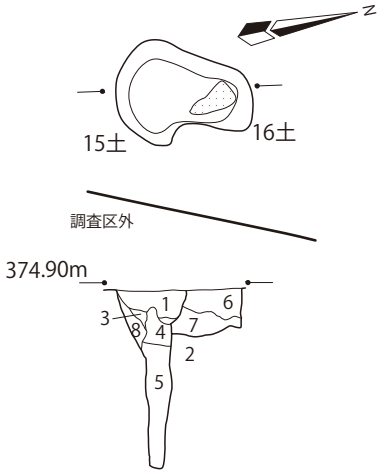


12 号土坑



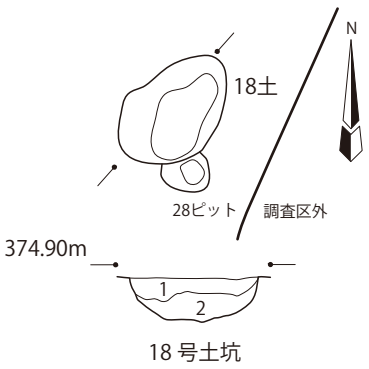
13・14 号土坑

（12号土坑）
1.黒褐色土（10YR2/3）　炭化材（径2～10㎜）少量含む
　赤褐色粒含む　しまりやや欠け、粘性強い
2.暗褐色土（10YR3/3）　灰色粘土ブロック（径約30㎜）少し含む
　炭化材・黄褐色粒含む
　しまりあり、粘性強い

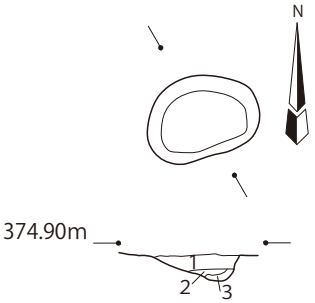


15・16 号土坑

（15・16号土坑）
1.黒褐色（7.5YR3/2）　50㎜以上の炭化物含む
　粘性弱い
2.極暗褐色（7.5YR2/3）　粘性やや弱い
3.明褐色（7.5YR2/3）　赤色スコリア粒含む
　粘性やや強い
4.灰黄褐色（10YR7/3）　やや砂が混じる　粘性強い
5.黒褐色（2.5YR3/1）　細かい砂地の層　しまりややあり
6.暗褐色（7.5YR3/3）　赤色・オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性弱い
7.明黄褐色（10YR6/6）　5㎜程の炭化物少量含む
　粘性やや強い
8.にぶい黄橙色粘土　地山か



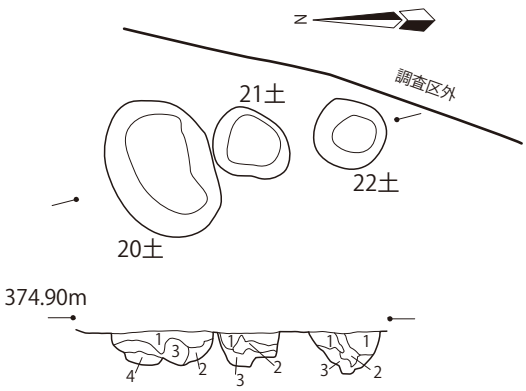
18 号土坑



19 号土坑

（18号土坑）
1.暗褐色（10YR3/3）　赤色スコリア少量含む
　粘性弱く、しまり強い
2.黒褐色（10YR3/2）　赤色スコリア・炭化物（10㎜以上）多く含む
　粘性強い

（19号土坑）
1.暗褐色（7.5YR3/3）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性やや強い
2.黒褐色（7.5YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性強く、しまり弱い
3.暗褐色（7.5YR3/3）　粘性強く、しまり弱い

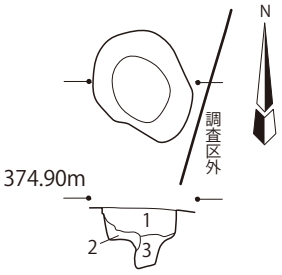


（20・21号土坑）
1.黒褐色（7.5YR3/2）　粘性やや強く、しまりあり
2.黒褐色（7.5YR2/2）　灰黄色粘土塊マーブル状に含む
　粘性強い
3.黒褐色（10YR2/2）　赤色スコリア粒含む
　灰黄色粘土塊含む
　粘性やや強く、しまりあり
4.黒褐色（7.5YR3/2）　2・3層と比べて粘土塊少ない
　粘性強い

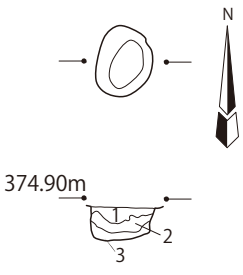
（22号土坑）
1.黒褐色（10YR2/2）　オレンジ色スコリア粒含む
　粘性強く、しまりややあり
2.暗褐色（10YR3/4）　赤色スコリア粒含む
　粘性ややあり、しまりややあり
3.暗褐色（10YR3/3）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性ややあり、しまり弱い

0　2m
1:60

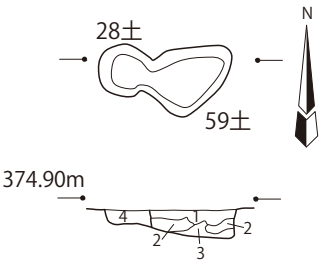
第２０３図　土坑（2）



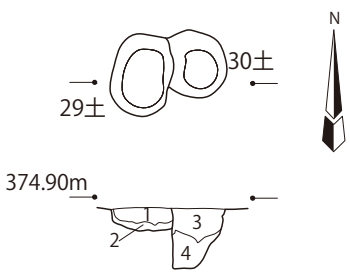
23 号土坑



24 号土坑



28・59 号土坑



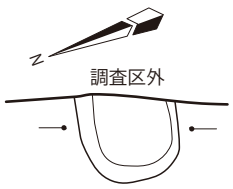
29・30 号土坑

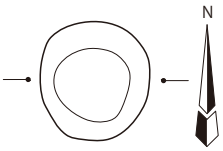
（23号土坑）
1.暗褐色（10YR3/4）　粘性・しまりやや強い
2.褐色（10YR4/6）　粘性・しまりやや強い
3.黒褐色（10YR2/3）　粘性・しまり2層と比べて弱い

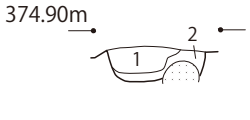
（24号土坑）
1.暗褐色（7.5YR3/3）　オレンジ色スコリア多量含む
粘性弱く、しまり強い
2.極暗褐色（7.5YR2/3）　オレンジ色スコリア含む
粘性弱く、しまりやや強い
3.黒褐色（10YR2/3）　灰色粘土塊含む
粘性ややあり、しまりもやや強い

（28・59号土坑）
1.褐色（7.5YR4/4）　赤色・黒色スコリア粒多く含む
粘性やや弱い
2.黒褐色（7.5YR3/1）　オレンジ色スコリア粒多く含む
粘土塊多く含む　1層より粘性強い
3.褐色（10YR5/1）　2層より粘性強い　2層と地山の混土
4.黒褐色（7.5YR3/2）　赤色スコリア粒含む
粘性やや強い

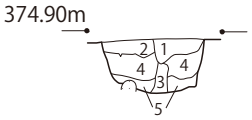
（29・30号土坑）
1.黒褐色（7.5YR3/1）　黒いシミを含む
粘性やや強く、しまりあり
2.黒褐色（10YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
粘性やや強く、しまりあり
3.黒褐色（7.5YR3/1）　オレンジ色スコリア粒含む
粘性やや強く、しまりあり
4.黒褐色（7.5YR3/2）　オレンジ色スコリア粒含む
3層と比べ粘性弱い







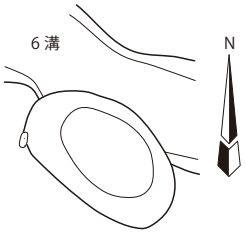
35 号土坑



36 号土坑

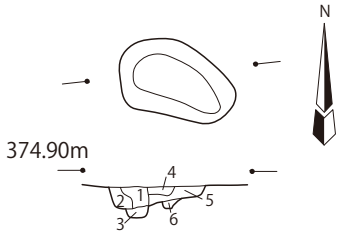
（35号土坑）
1.黒褐色（7.5YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
粘性やや強く、しまりあり
2.にぶい黄褐色（10YR4/3）　1層と比べ粘性強く、しまりあり

39 号土坑



47 号土坑

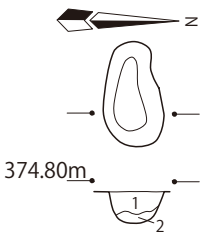
（36号土坑）
1.褐色（7.5YR4/3）　赤色スコリア粒少量含む
オレンジ色スコリア粒含む
粘性弱く、しまり強い
2.灰白色（5Y7/1）　粘土がマーブル状に入る
3.黒褐色（10YR3/2）　下層に粘土塊を多く含む
粘性強く、しまり弱い
4.黒褐色（7.5YR3/2）　オレンジ色スコリア粒含む
1層と比べしまり弱い
5.黒褐色　4層と比べオレンジ色スコリア粒少ない
4層と比べ粘性強い



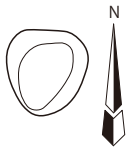
50 号土坑

55 号土坑

（50 号土坑）
1. 黒褐色（10YR2/3）　オレンジスコリア粒含む
粘性強く、しまり強い
2. 暗褐色（10YR3/4）　粘土塊との混土
オレンジスコリア粒含む
粘性強い　しまりやや強い
3. 極暗褐色（7.5YR2/3）　オレンジスコリア粒含む
粘性・しまりややあり
4. にぶい黄褐色（10YR5/3）　オレンジスコリア粒含む
粘性強く、しまりやや弱い
5. 黒褐色（10YR2/3）　オレンジスコリア粒含む
粘性・しまりやや強い
6. 暗褐色（10YR3/3）　地山との混土か
粘性強い、しまりややあり

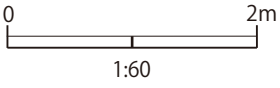


56 号土坑

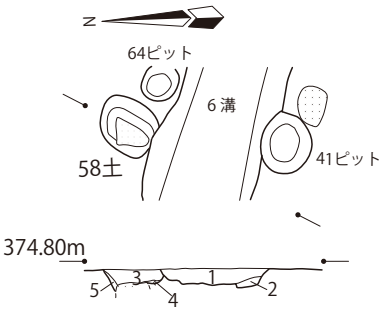


57 号土坑

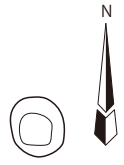
（56号土坑）
1.黒褐色粘土（10YR2/3）　にぶい黄橙ブロック含む
2.暗褐色粘土（10YR3/4）　にぶい黄橙ブロック含む



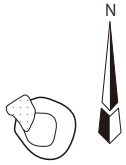
第２０４図　土坑（3）



58 号土坑・6 号溝

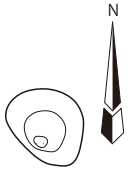


75 号土坑

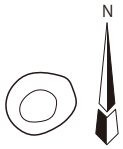


76 号土坑

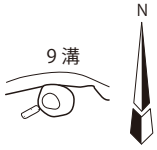
77 号土坑



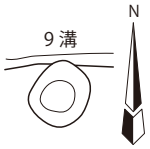
79 号土坑



80 号土坑

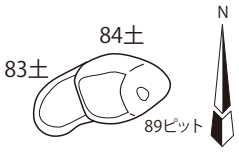


81 号土坑

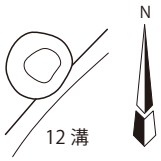


82 号土坑

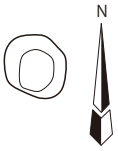
（58号土坑・6号溝）
1.にぶい黄褐色（10YR4/3）　しまり弱く、粘性やや弱い
2.灰黄褐色（10YR4/2）　1層に比べ粘性強い
3.暗褐色（10YR3/3）　粘性やや強く、しまり弱い
4.にぶい黄橙色（10YR7/3）　3層と地山の混土
5.暗褐色（10YR3/4）　3層と地山の混土
　粘性強く、しまり弱い



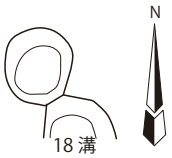
83・84 号土坑・89 号ピット



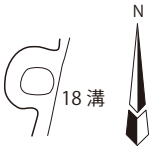
85 号土坑



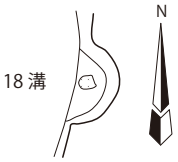
86 号土坑



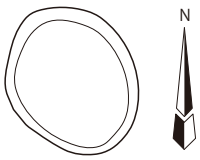
90 号土坑



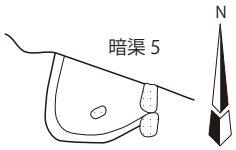
91 号土坑



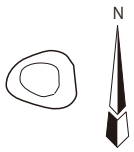
92 号土坑



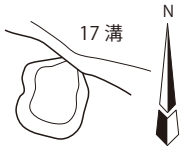
95 号土坑



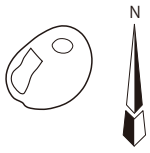
96 号土坑



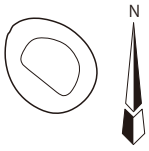
97 号土坑



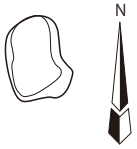
98 号土坑



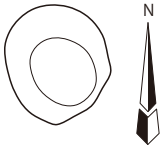
104 号土坑



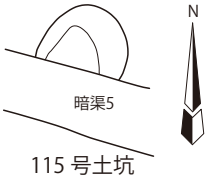
106 号土坑



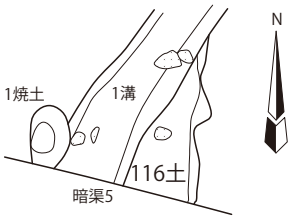
107 号土坑

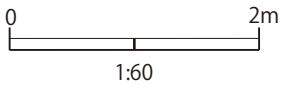


108 号土坑

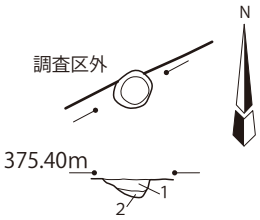


115 号土坑

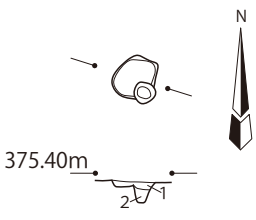




第２０５図　土坑（4）



1 号ピット

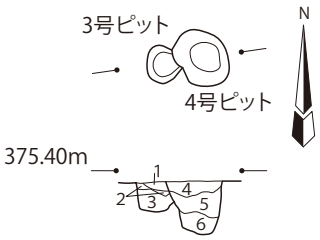


2 号ピット

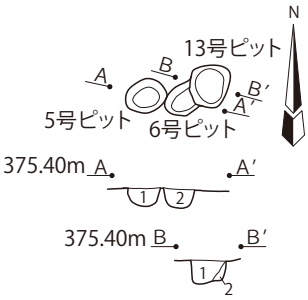
（1号ピット）
1.黒褐色（10ＹＲ2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性強く、やわらかい
2.暗褐色（10ＹＲ3/3）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性弱く、しまりが強い

（2号ピット）
1.暗褐色土（10YR3/3）　オレンジ色スコリア粒含む
　粘性強く柔らかい
2.暗褐色（10YR3/4）　オレンジ色スコリア粒含む
　1層と比べ粘性弱く、しまりがある（硬い）

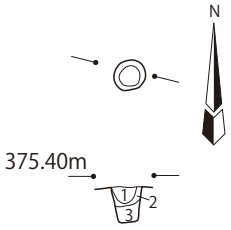
第２０６図　ピット（1）



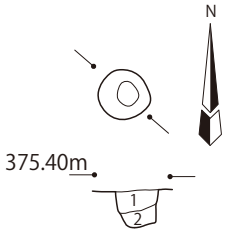
3・4 号ピット



5・6・13 号ピット



7 号ピット



8 号ピット

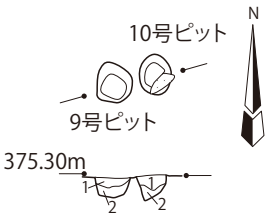
（3号ピット）
1.黒褐色（10YR3/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性ややあり
2.褐色（10YR4/4）　黒土をシミ状に含む
　粘性弱く、しまりがある
3.暗褐色（10YR3/4）　黒土をシミ状に多量含む
　粘性弱く、しまりが強い

（4号ピット）
4.褐色（10YR4/4）　黒土をシミ状に含む
　粘性弱く、しまりがある
5.暗褐色（10YR3/3）　3層と似ているが黒いシミは無い
　粘性弱く、しまりが強い
6.黒褐色（10YR2/3）　粘性弱くボソボソしてる

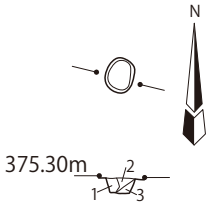
（5・6号ピット）
1.にぶい黄褐色（10YR4/3）　赤色スコリア粒少量含む
　粘性弱く、しまりが強い
2.暗褐色（10YR3/3）　赤色スコリア粒少量含む
　粘性は1層に比べ強く、しまりは弱い

（7号ピット）
1.黒褐色（10YR2/2）　オレンジ色スコリア粒含む
2.暗褐色（10YR3/3）　粘性が強い　地山か
3.黒褐色（10YR3/2）　粘性がとても強い（粘土そのもの）
　地山か

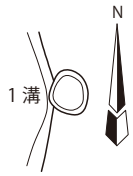
（8号ピット）
1.暗褐色（10YR3/3）　黄土色スコリア粒含む
　粘性ややあり
2.黒褐色（10YR2/2）　1層と比べて粘性弱く、しまりがない



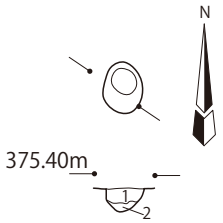
9・10 号ピット



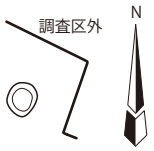
11 号ピット



12 号ピット



14 号ピット

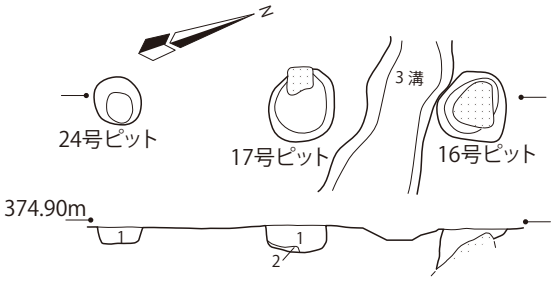


15 号ピット

（9・10号ピット）
1.暗褐色（10YR3/3）　粘性弱く、しまりも弱い
2.灰褐色（10YR4/2）　赤色スコリア粒含む
　粘性強い

（11号ピット）
1.黒褐色（10YR2/2）　粘性あり　木の根による撹乱か
2.黒褐色（10YR2/3）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性あり
3.褐色（10YR4/4）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　2層と比べて粘性弱く、しまり強い

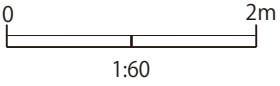
（14号ピット）
1.暗褐色（10YR3/3）　赤色スコリア粒含む
　粘性やや強い
2.暗褐色（10YR3/4）　赤色スコリア粒少量含む
　1層と比べて粘性が弱く、やや砂質



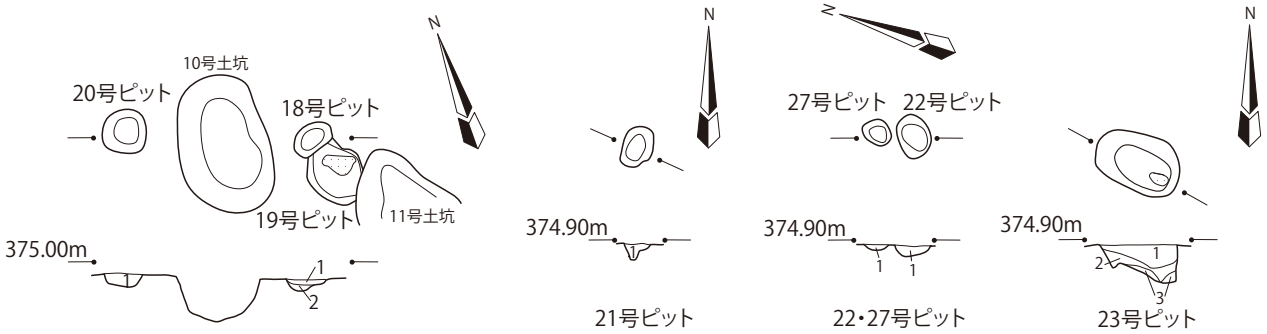
16・17・24 号ピット

（24号ピット）
1.暗褐色（7.5YR3/4）　1㎜以下の白い砂粒・オレンジ色スコリア少量含む
　粘性弱く、砂質

（17号ピット）
1.暗褐色（7.5YR3/4）　1㎜以下の白い砂粒含む
　粘性弱く、やや砂質
2.暗褐色粘土（10YR3/4）　地山か



第207図　ピット（2）



18・19・20 号ピット　　21号ピット　　22・27号ピット　　23号ピット

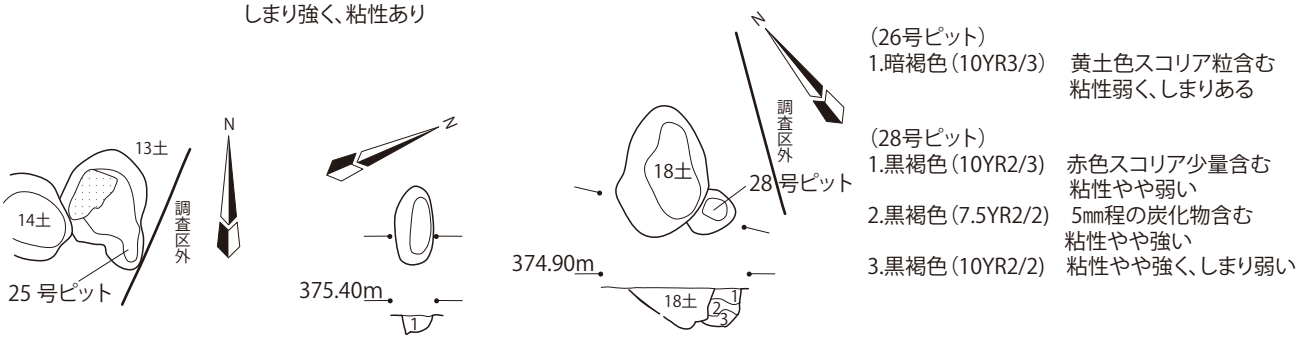
（18号ピット）
1.暗褐色（7.5YR3/3）　1㎜以下の白い砂粒少量含む
　やや粘性あり
2.褐色（7.5YR4/3）　しまりあり

（20号ピット）
1.暗褐色（10YR3/3）　黄褐色スコリア粒少量含む
　上部を中心に1㎜以下の白い砂粒を多く含んだ
　砂質な層がモザイク状に含む

（21号ピット）
1.黒褐色土（10YR2/3）　炭化材（径２～3㎜）少量含む
　黄褐色粘土粒少し含む　赤褐色粒微量含む
　しまり強く、粘性あり

（22・27号ピット）
1.黒褐色土（10YR2/3）　炭化材（径２～3㎜）少量含む
　黄褐色粘土粒少し含む　赤褐色粒微量含む
　しまり強く、粘性あり

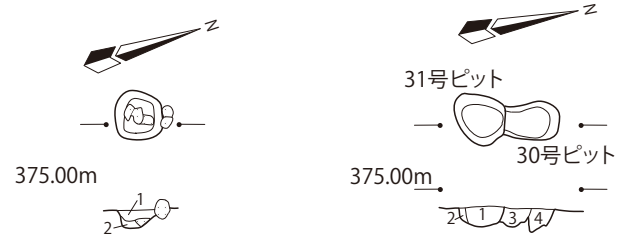
（23号ピット）
1.褐色（7.5YR4/4）　粘性弱く、やや砂質
2.褐色（7.5YR3/4）　１㎜以下の白い砂粒含む
　１層より粘性弱く、砂質度が高い
3.褐色（10YR4/4）　10㎜程の礫を含む　非常に砂質



25 号ピット　　26 号ピット　　28 号ピット

（26号ピット）
1.暗褐色（10YR3/3）　黄土色スコリア粒含む
　粘性弱く、しまりある

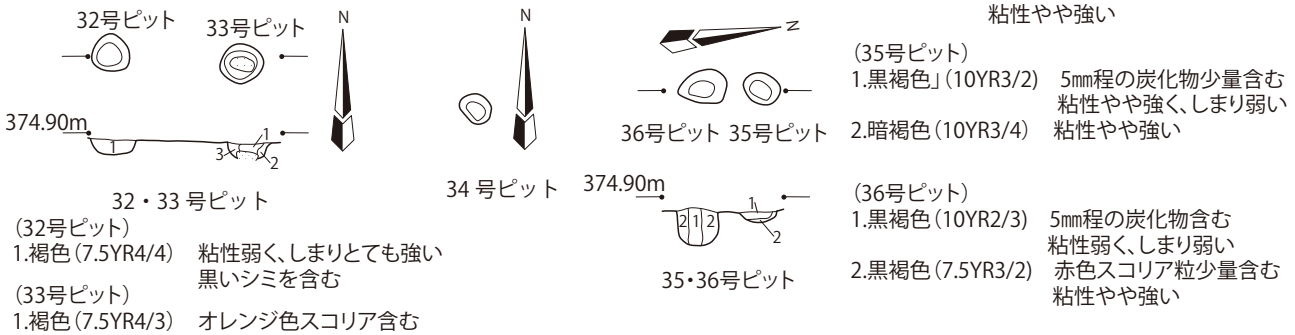
（28号ピット）
1.黒褐色（10YR2/3）　赤色スコリア少量含む
　粘性やや弱い
2.黒褐色（7.5YR2/2）　5㎜程の炭化物含む
　粘性やや強い
3.黒褐色（10YR2/2）　粘性やや強く、しまり弱い



29 号ピット　　30・31 号ピット

（29号ピット）
1. 極暗褐色（7.5YR2/3）　赤色スコリア粒含む
　粘性やや弱い
2. 灰黄褐色（10YR4/2）　地山との混土　粘性やや強い

（30・31号ピット）
1.黒褐色（7.5YR3/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　下部に灰色粘土塊含む
　粘性やや強い
2.黒褐色（7.5YR2/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性やや弱い
3.黒褐色（7.5YR3/2）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性やや強い
4.暗褐色（7.5YR3/3）　オレンジ色スコリア粒少量含む
　粘性やや強い



32・33 号ピット　　34 号ピット　　36号ピット 35号ピット　　35・36号ピット

（35号ピット）
1.黒褐色」（10YR3/2）　5㎜程の炭化物少量含む
　粘性やや強く、しまり弱い
2.暗褐色（10YR3/4）　粘性やや強い

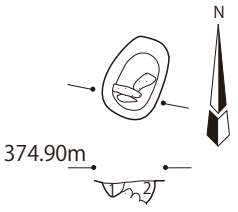
（36号ピット）
1.黒褐色（10YR2/3）　5㎜程の炭化物含む
　粘性弱く、しまり弱い
2.黒褐色（7.5YR3/2）　赤色スコリア粒少量含む
　粘性やや強い

（32号ピット）
1.褐色（7.5YR4/4）　粘性弱く、しまりとても強い
　黒いシミを含む

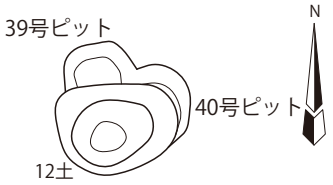
（33号ピット）
1.褐色（7.5YR4/3）　オレンジ色スコリア含む
　粘性やや弱く、しまりあり
2.灰褐色（7.5YR4/2）　1層と比べ粘性強い
　地山との混土か
3.褐色（10YR4/6）　10㎜以下の炭化物含む
　粘性弱く、しまり強い

0　2m
1:60

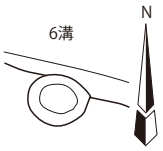
第２０８図　ピット（3）



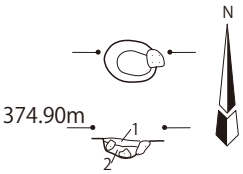
37 号ピット



39・40 号ピット



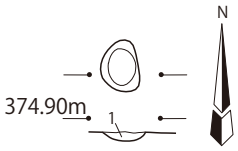
41 号ピット



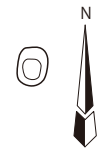
42 号ピット

(37号ピット)
1.黒褐色(7.5YR2/2)　赤色スコリア粒含む
　粘性い弱く、しまりあり
2.黒褐色(7.5YR2/2)　1層と比べしまり弱く、赤色スコリア少量

(42号ピット)
1.暗褐色(7.5YR3/3)　オレンジ色スコリア粒含む
　粘性弱く、しまり強い
2.褐色(7.5YR4/3)　オレンジ色スコリア粒含む
　粘性弱く、しまり強い

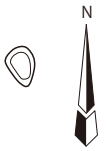


43 号ピット

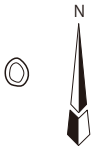


45 号ピット

47 号ピット



48 号ピット



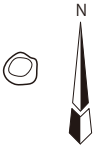
49 号ピット

50 号ピット

(43号ピット)
1.黒褐色土(10YR2/3)　黒色粒子少量含む
　根の影響と礫が入る
　しまり欠け、粘性強い

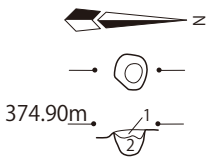
51 号ピット

52 号ピット



53 号ピット

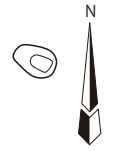
55 号ピット



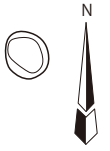
56 号ピット

58 号ピット

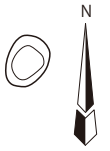
59 号ピット



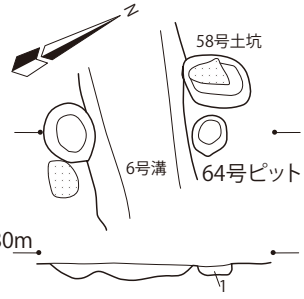
60 号ピット



61 号ピット

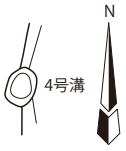


63 号ピット

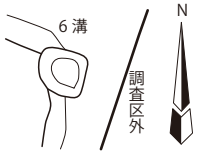


64 号ピット

(64号ピット)
1.にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性強く、しまりやや強い

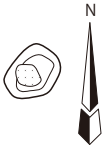


68 号ピット



69 号ピット

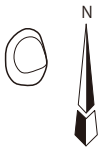
76 号ピット



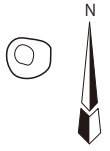
77 号ピット

82 号ピット

83 号ピット



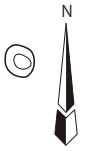
84 号ピット



87 号ピット

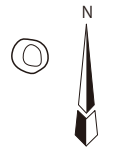
88 号ピット

90 号ピット



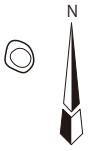
91 号ピット

92 号ピット

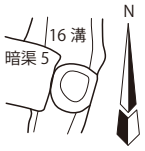


94 号ピット

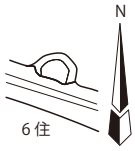
95 号ピット



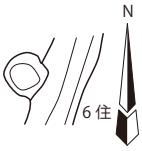
96 号ピット



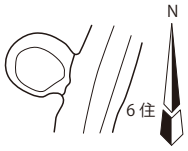
97 号ピット



98 号ピット

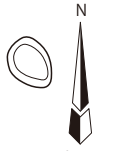


99 号ピット



100 号ピット

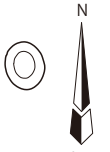
101 号ピット



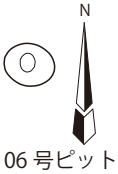
102 号ピット

103 号ピット

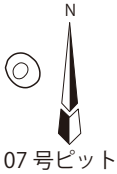
104 号ピット



105 号ピット

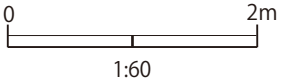


106 号ピット

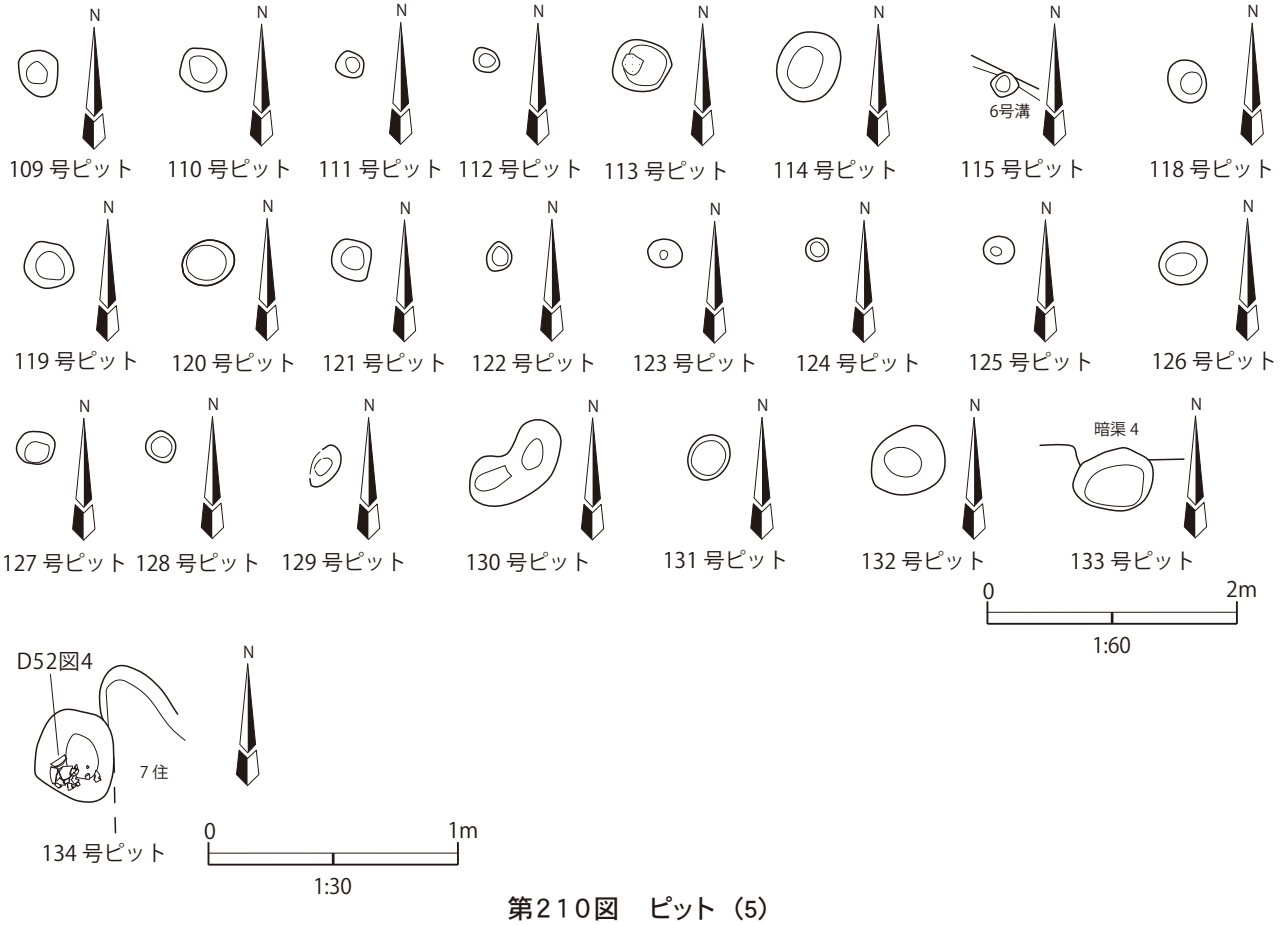


107 号ピット

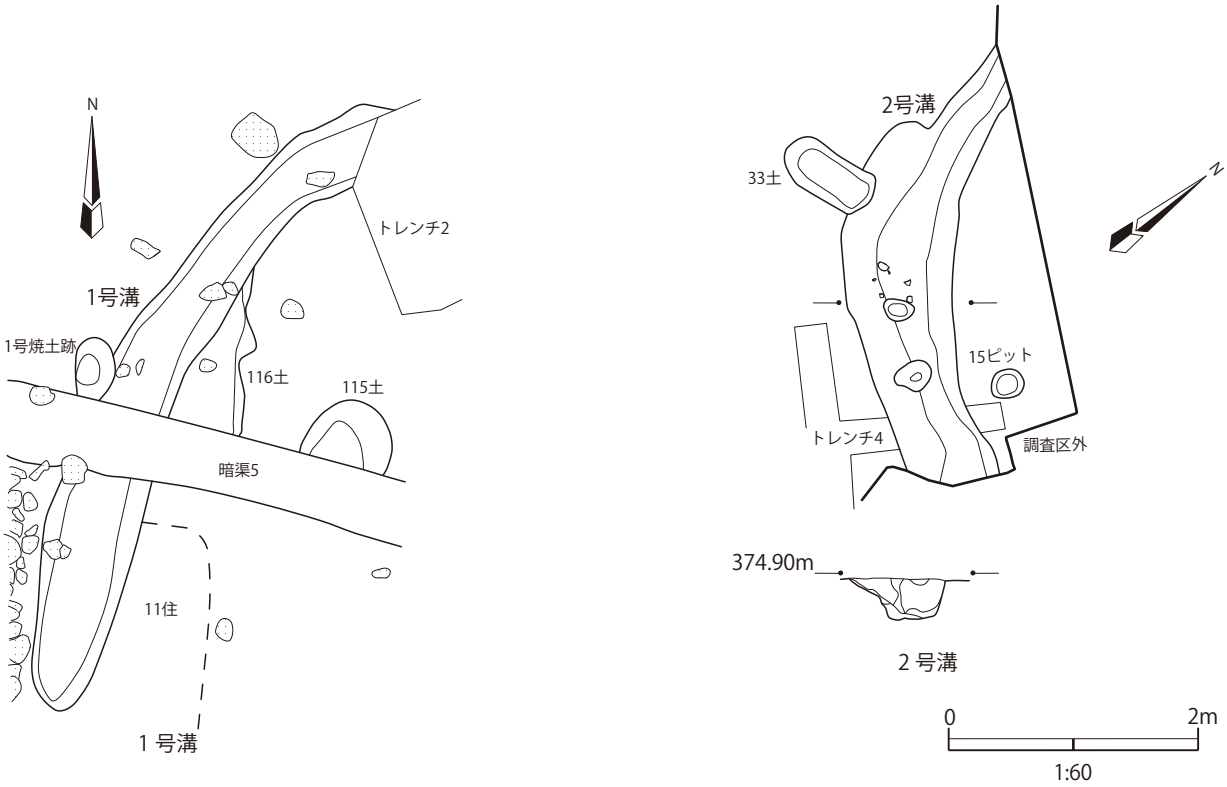
108 号ピット



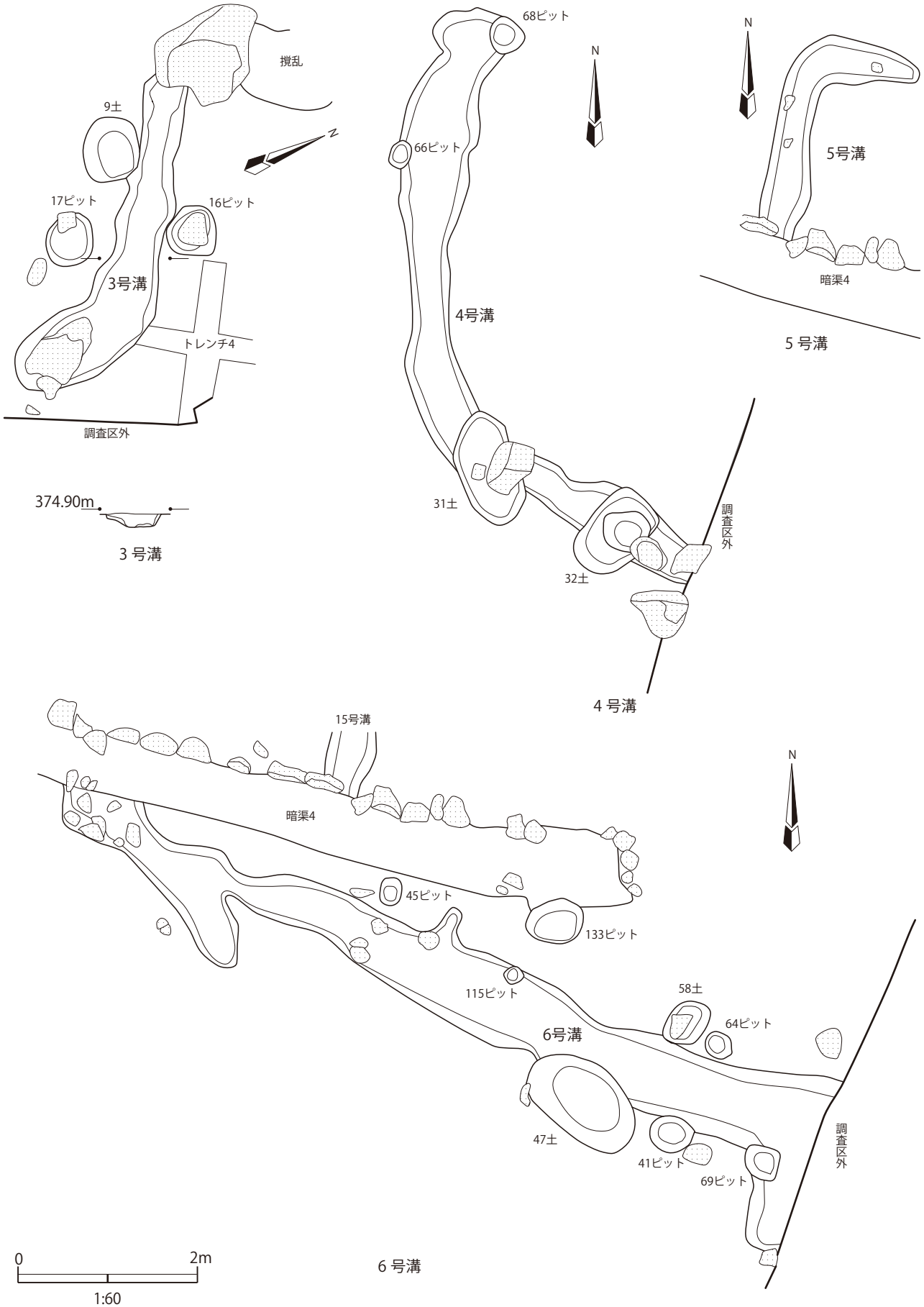
第209図　ピット（4）



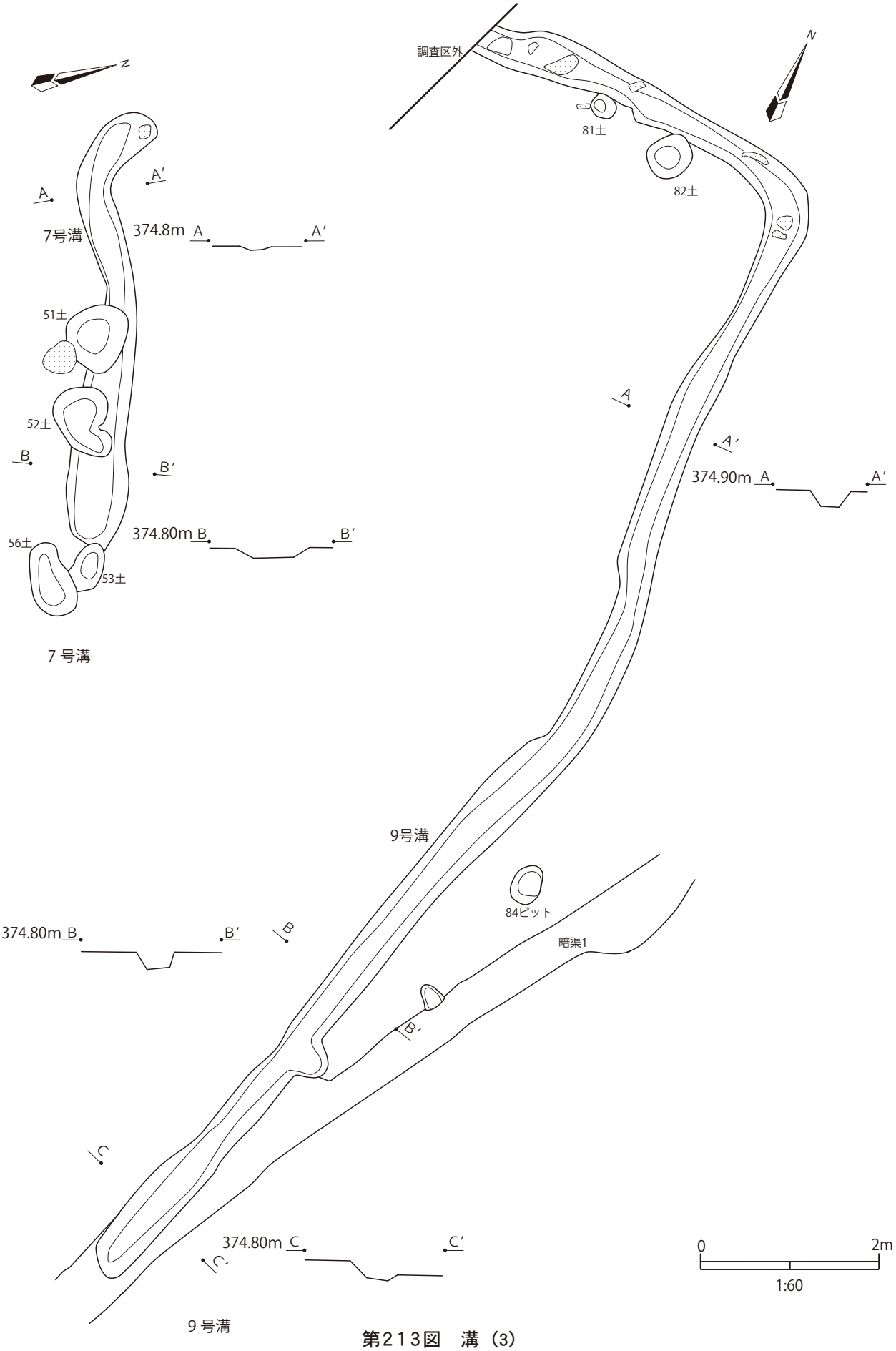
第２１０図　ピット（5）



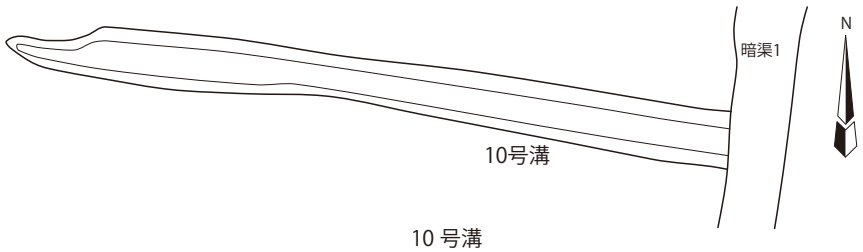
第２１１図　溝（１）


撹乱
9土
17ピット
16ピット
3号溝
トレンチ4
調査区外
374.90m
3 号溝
68ピット
66ピット
4号溝
31土
32土
調査区外
4 号溝
N
5号溝
暗渠4
5 号溝
15号溝
暗渠4
45ピット
133ピット
115ピット
58土
64ピット
6号溝
47土
41ピット
69ピット
調査区外
6 号溝
0
2m
1:60

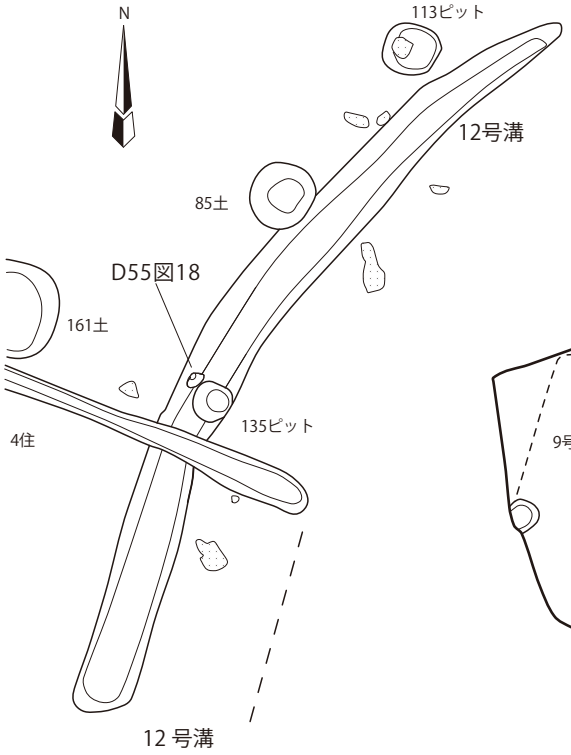
第212図　溝（2）


N
調査区外
81土
82土
A
A′
7号溝
374.8m A A′
51土
52土
B
B′
56土
374.80m B B′
53土
7 号溝
374.90m A A′
9号溝
84ピット
暗渠1
374.80m B B′
C
C′
374.80m C C′
9 号溝
0 2m
1:60

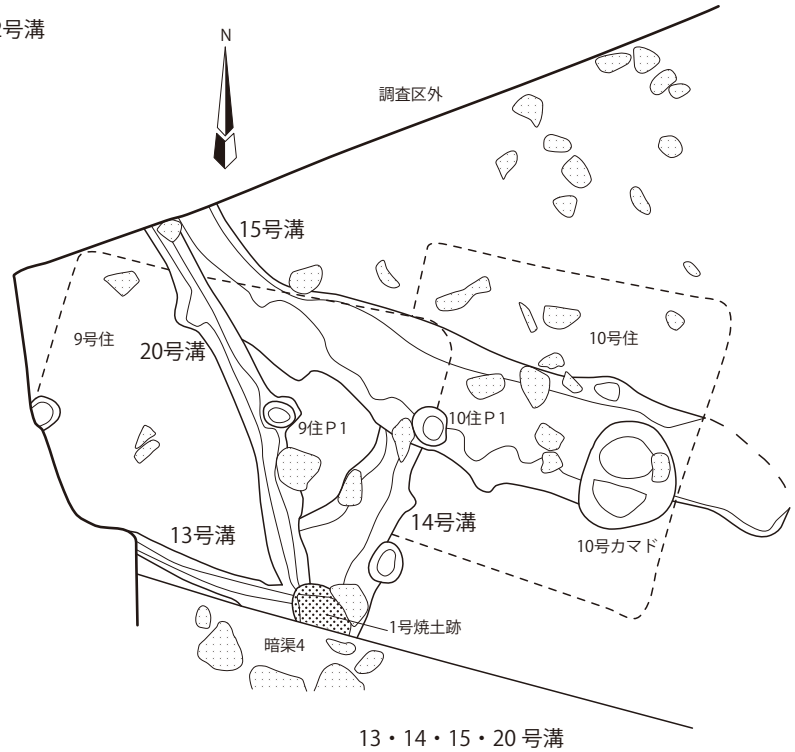
第213図　溝（3）



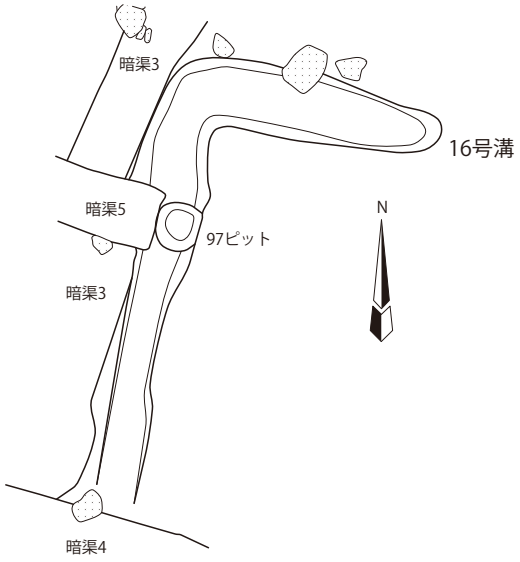
10 号溝



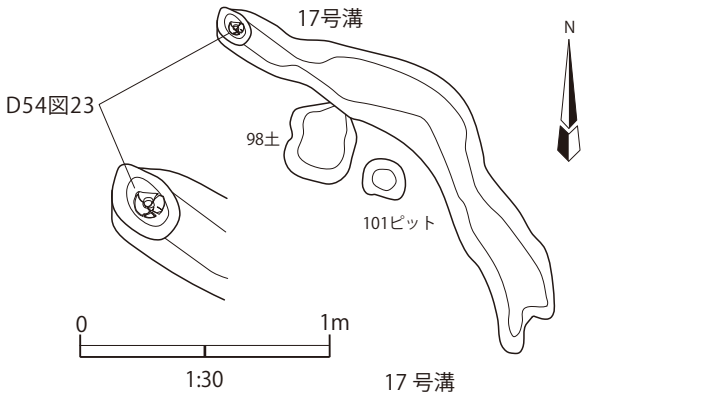
12 号溝



13・14・15・20 号溝



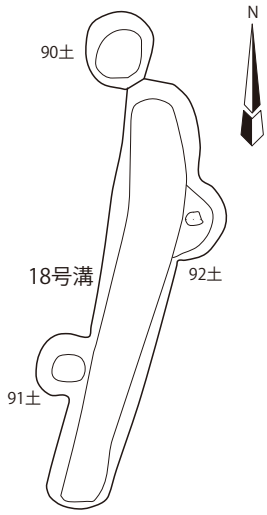
16 号溝



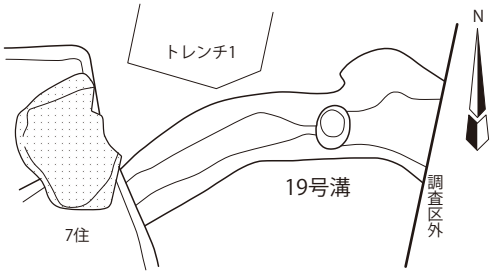
17 号溝

0 2m
1:60

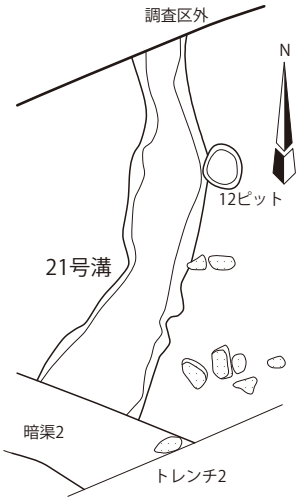
第214図　溝（4）



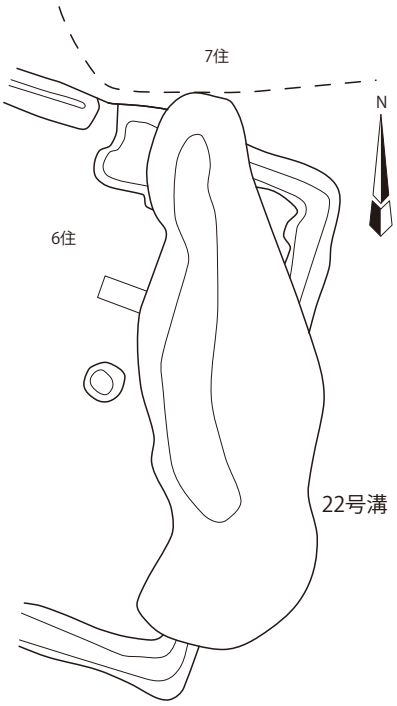
18 号溝



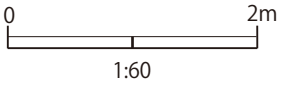
19 号溝



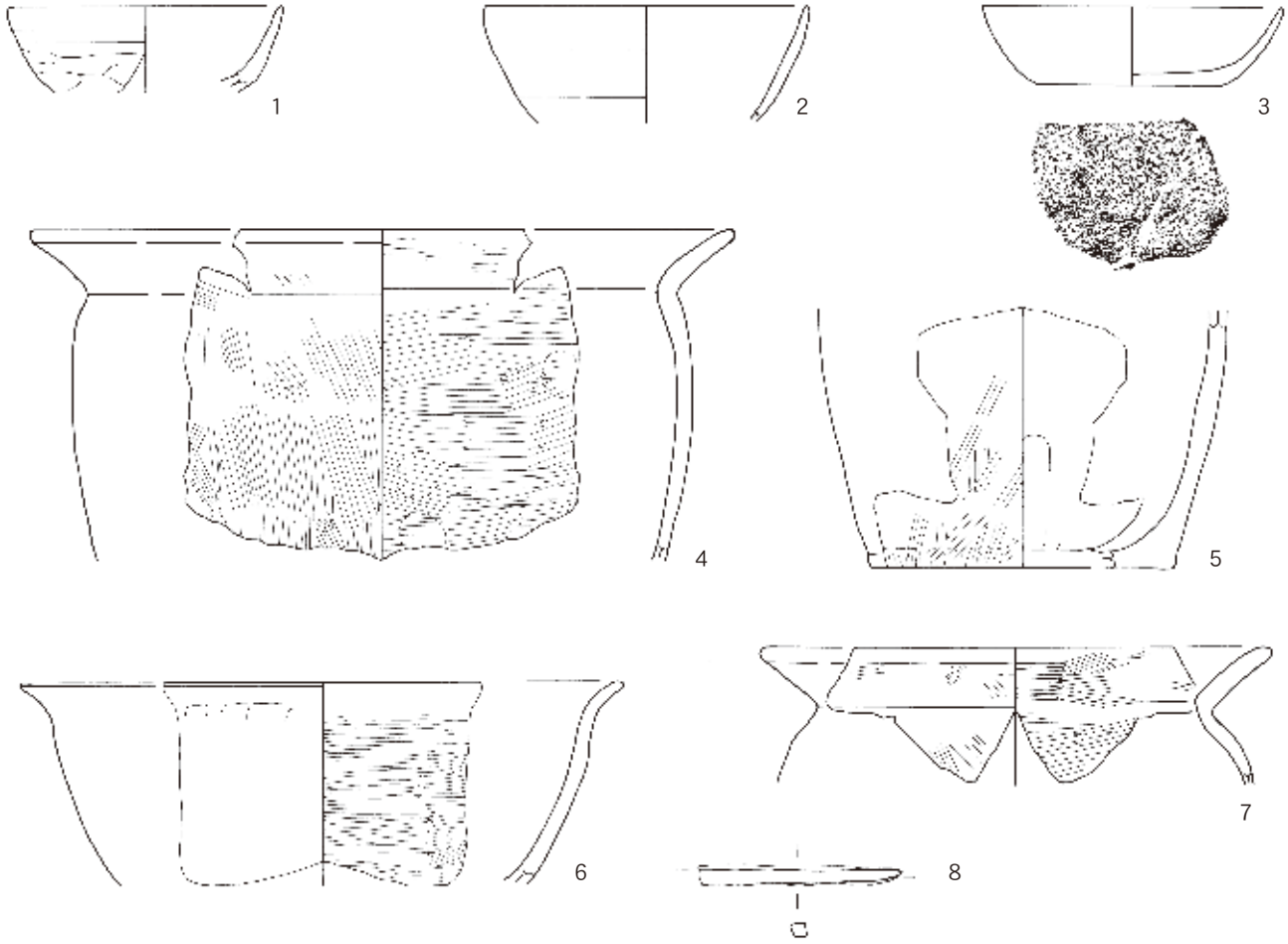
21 号溝



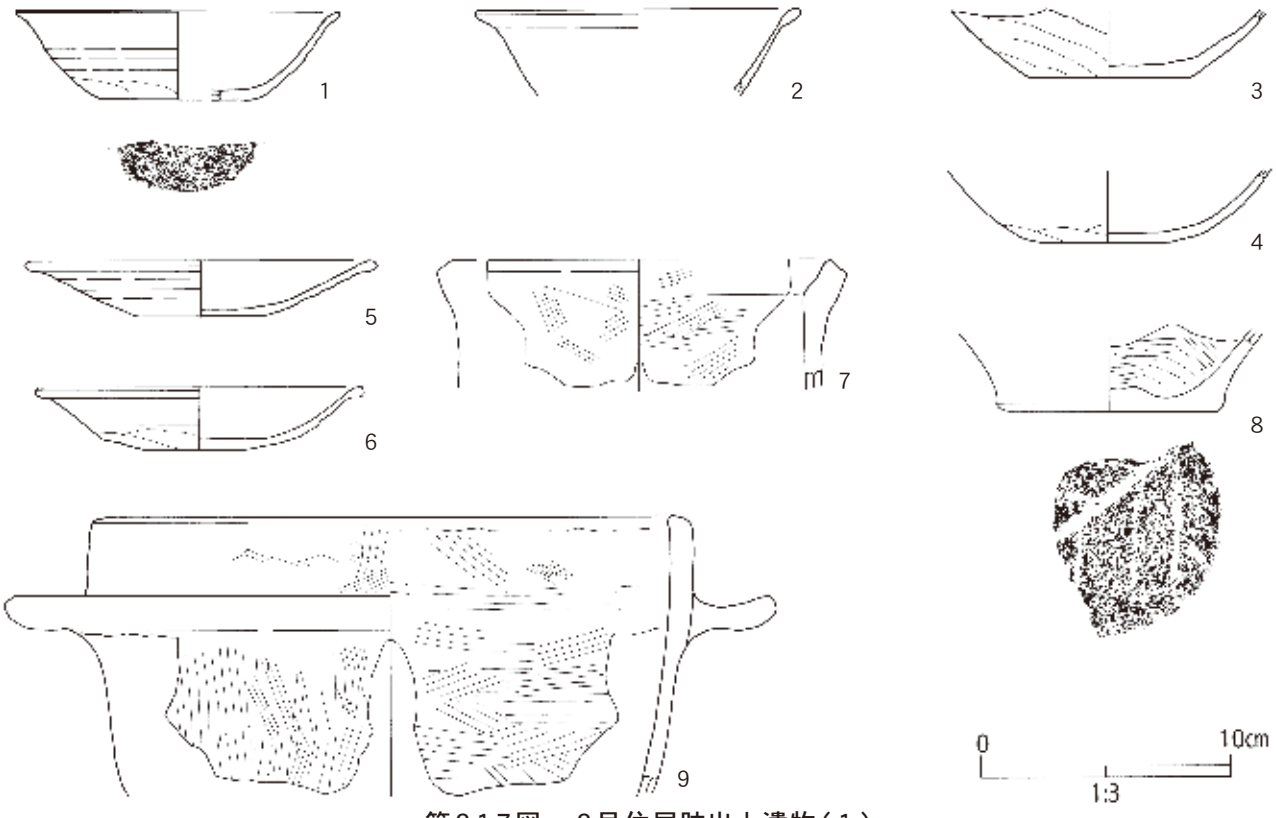
22 号溝



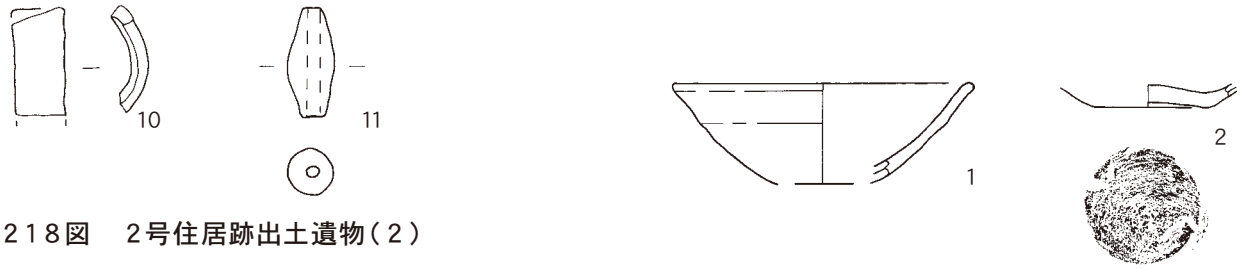
第215図　溝（5）



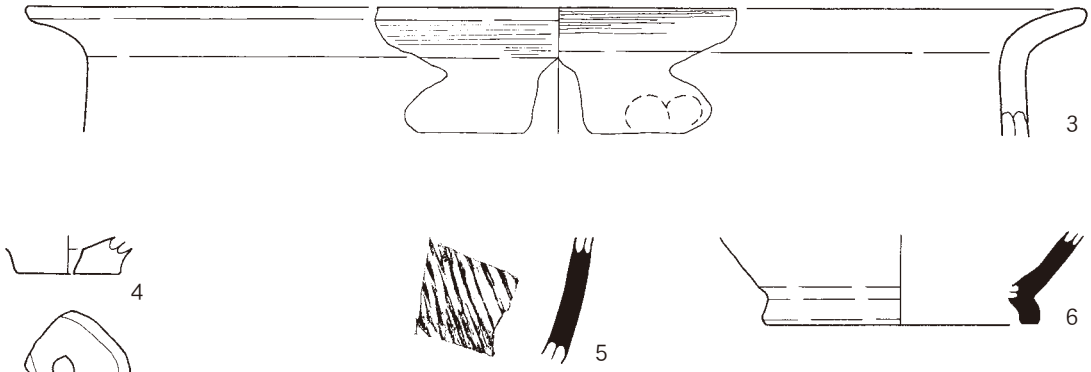
第２１６図　1号住居跡出土遺物



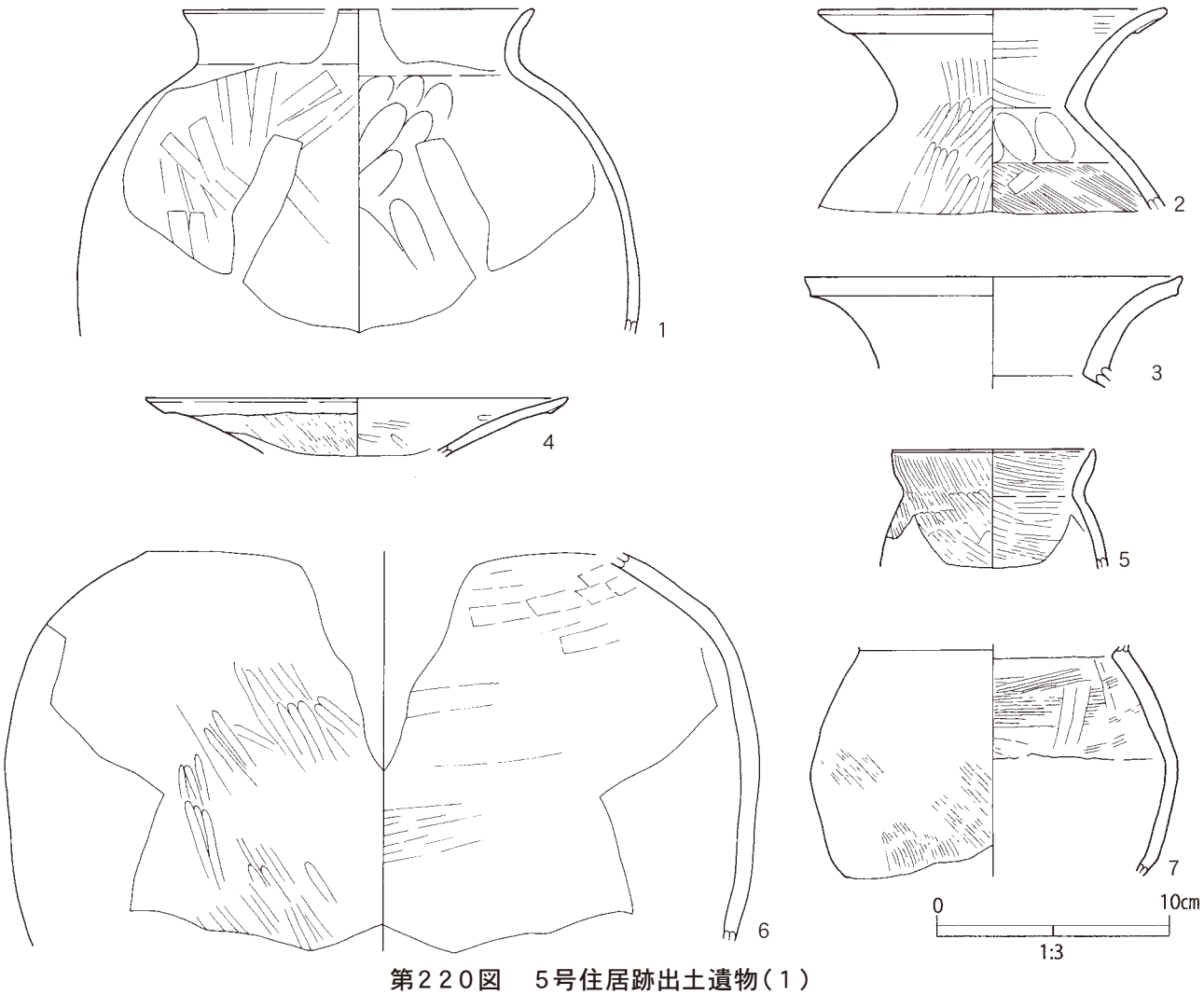
第２１７図　2号住居跡出土遺物（１）



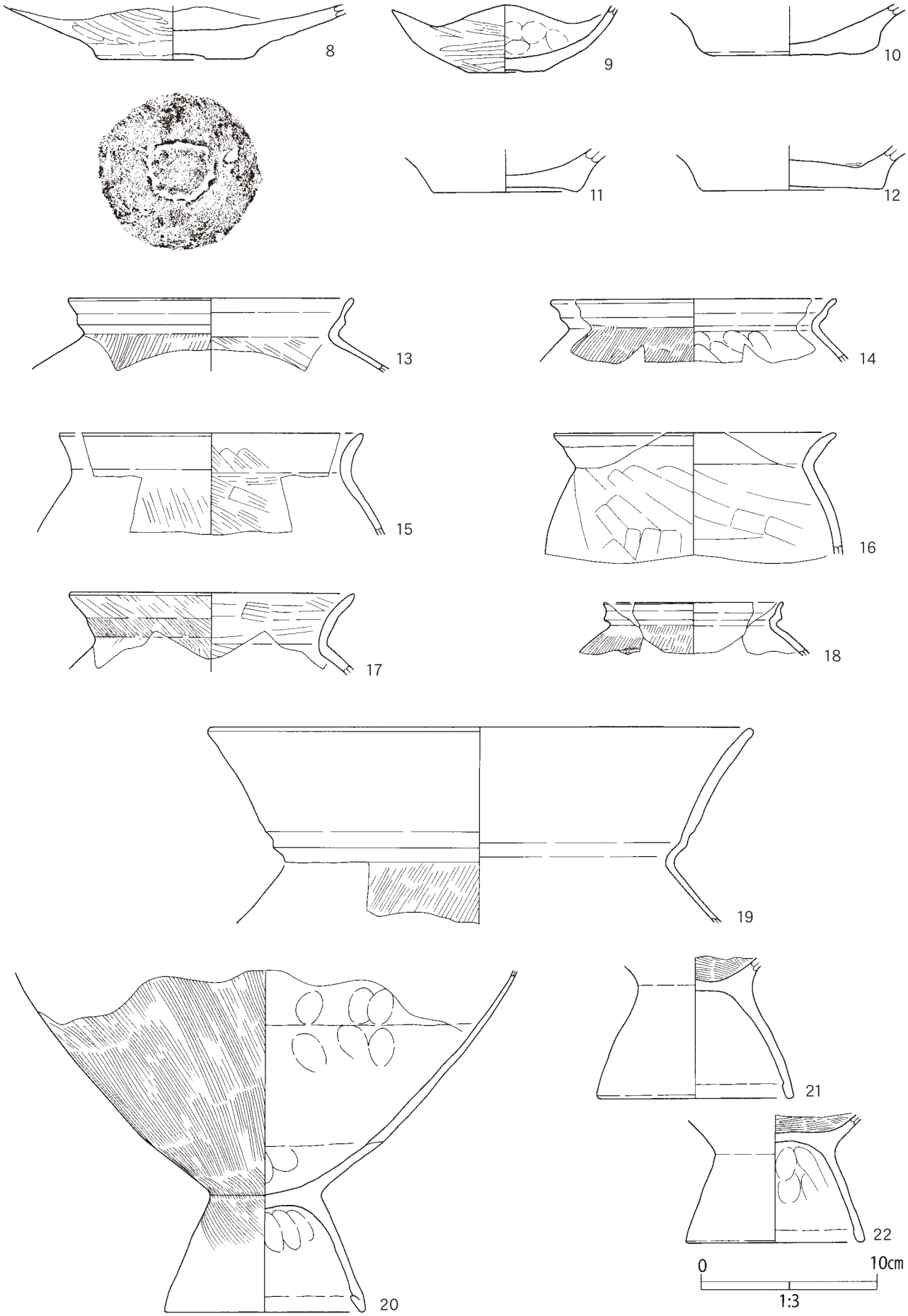
第２１８図　２号住居跡出土遺物（２）



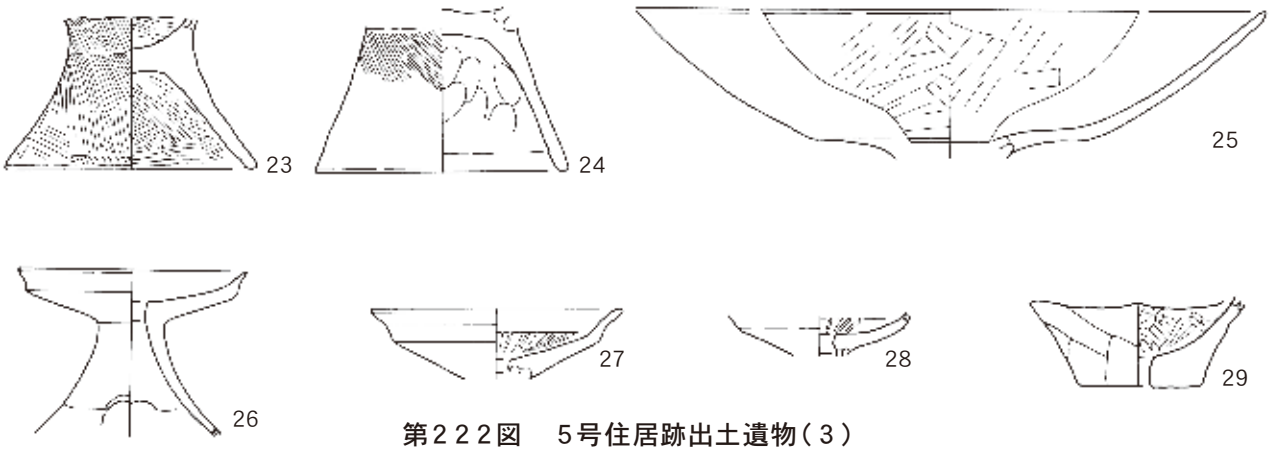
第２１９図　４号住居跡出土遺物



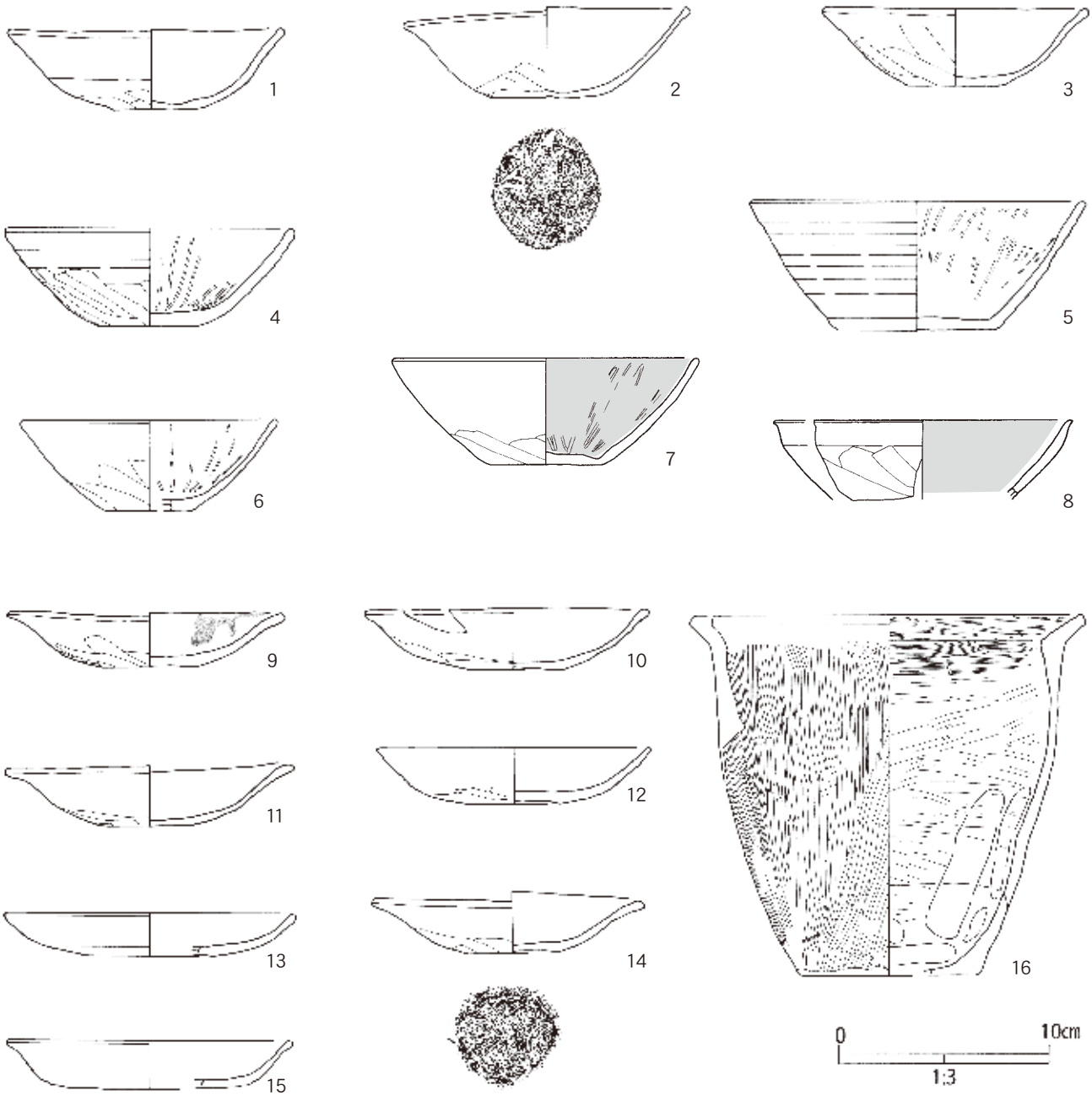
第２２０図　５号住居跡出土遺物（１）



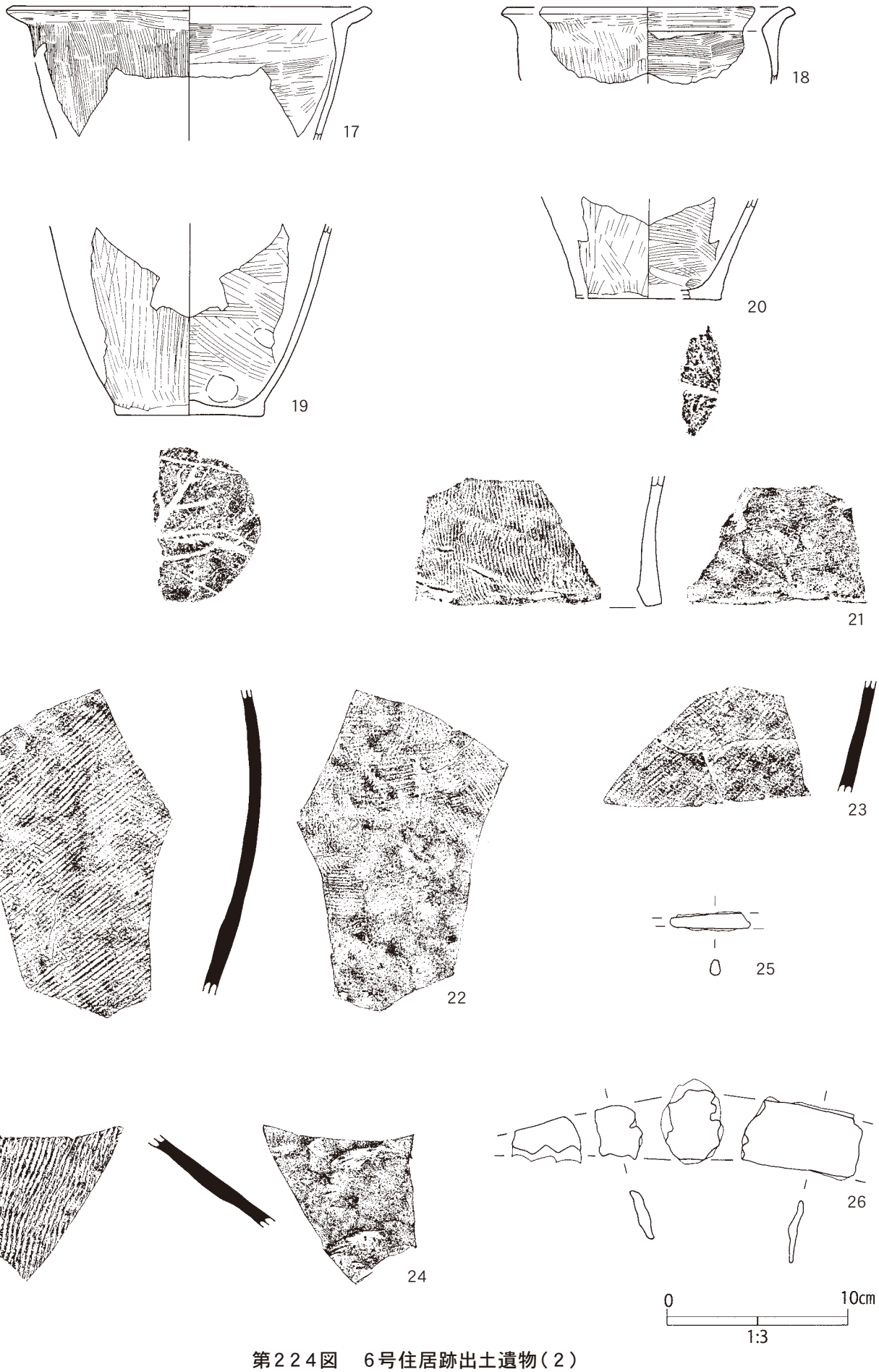
第２２１図　５号住居跡出土遺物（２）



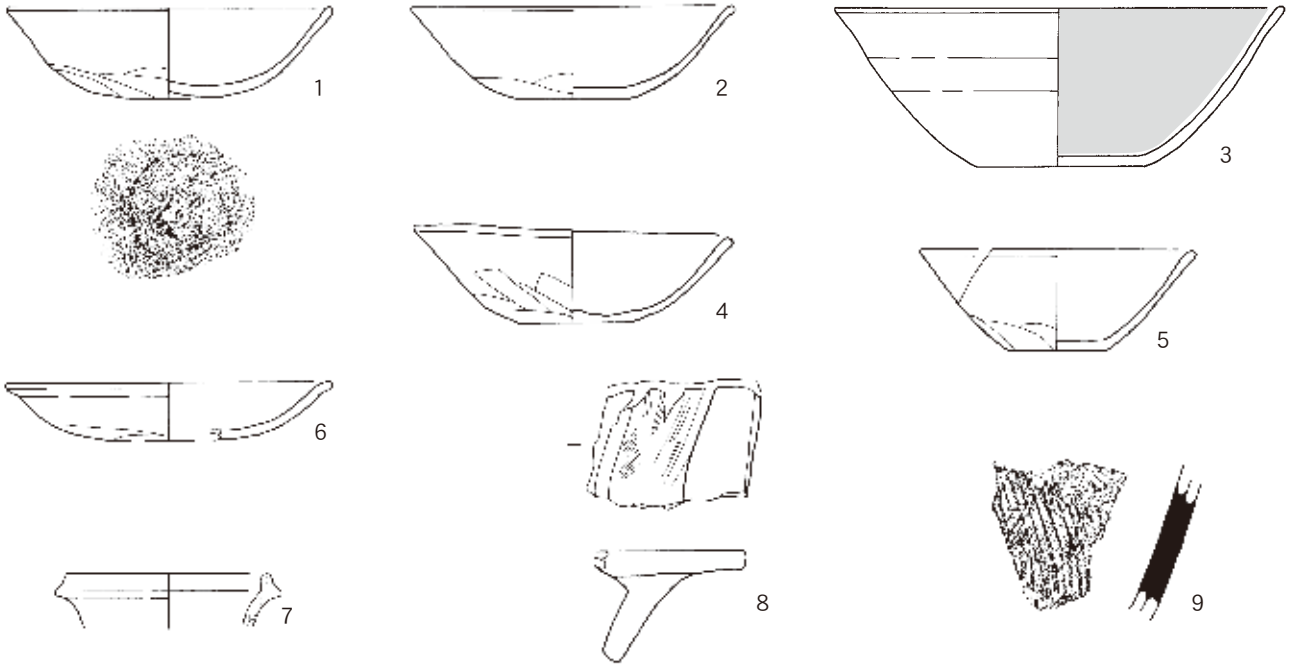
第２２２図　５号住居跡出土遺物（３）



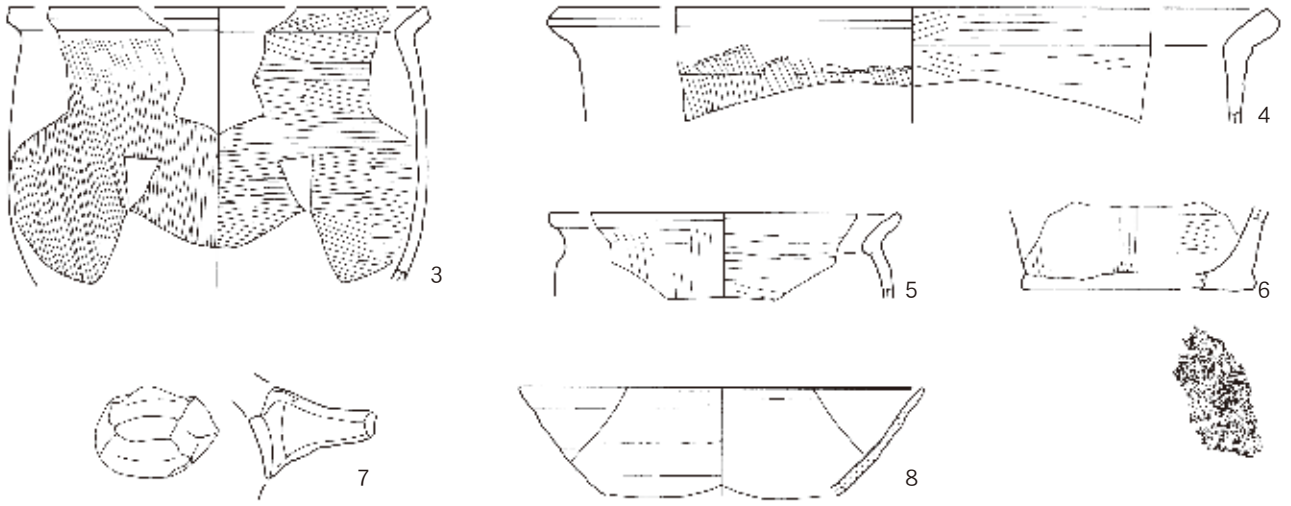
第２２３図　６号住居跡出土遺物（１）



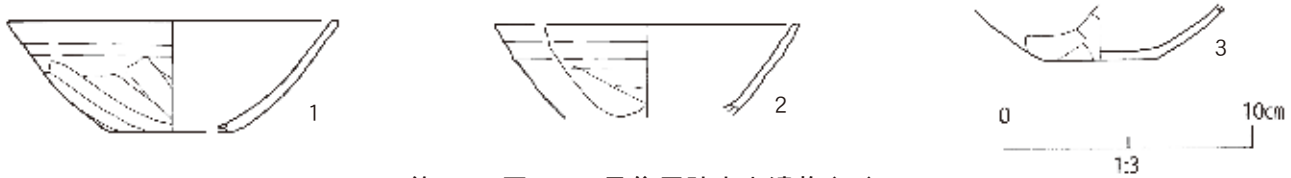
第２２４図　６号住居跡出土遺物（２）



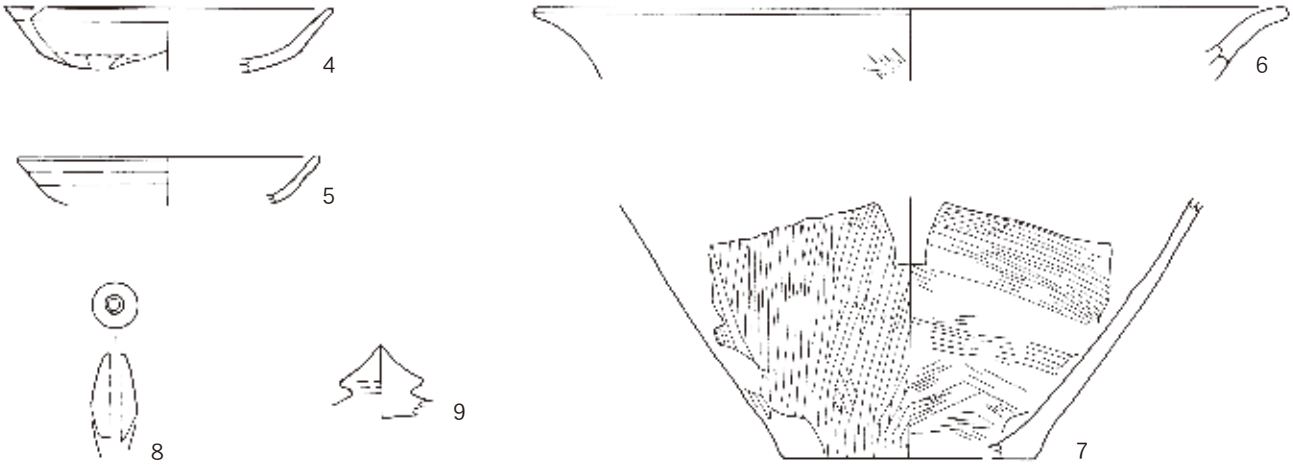
第２２５図　７号住居跡出土遺物



第２２６図　１０号住居跡出土遺物

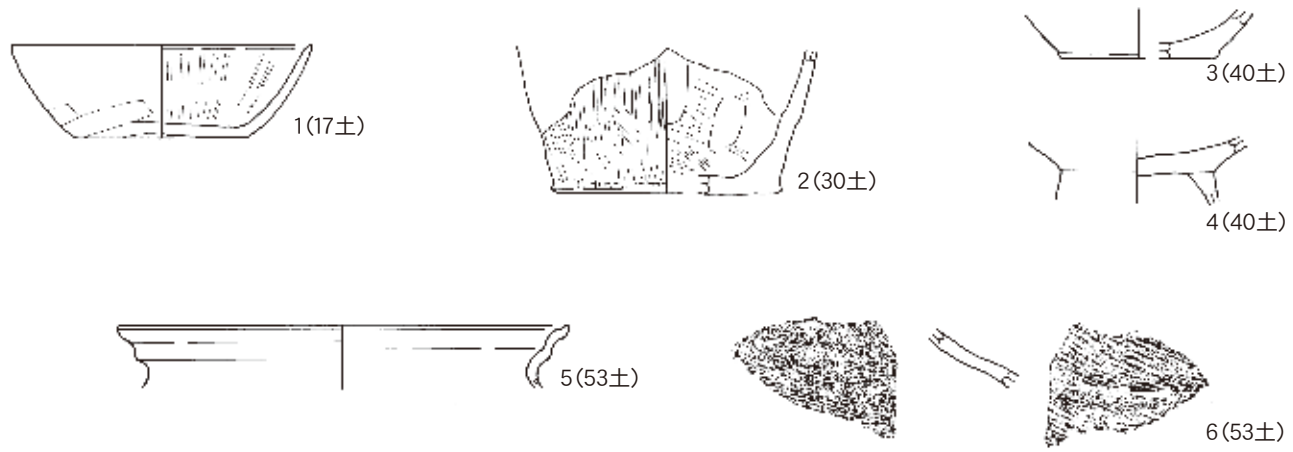


第２２７図　１３号住居跡出土遺物（１）

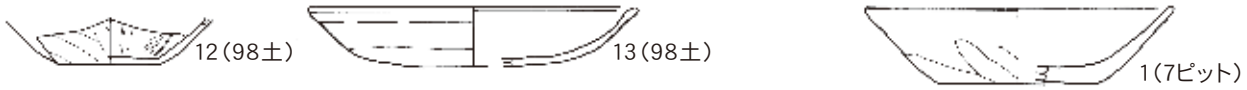


第２２８図　１３号住居跡出土遺物（２）

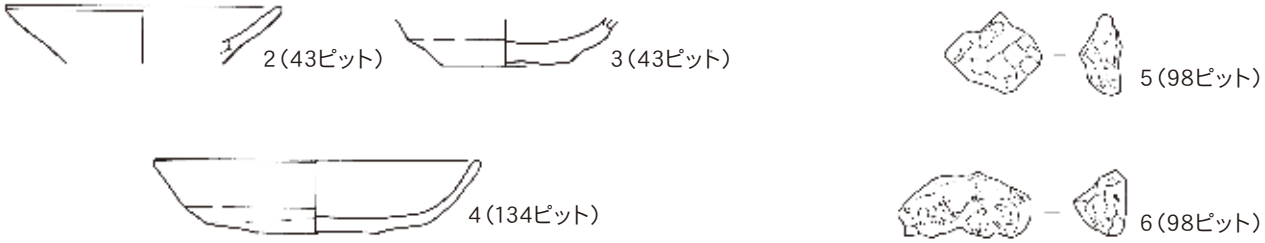
第２２９図　８号焼土跡出土遺物



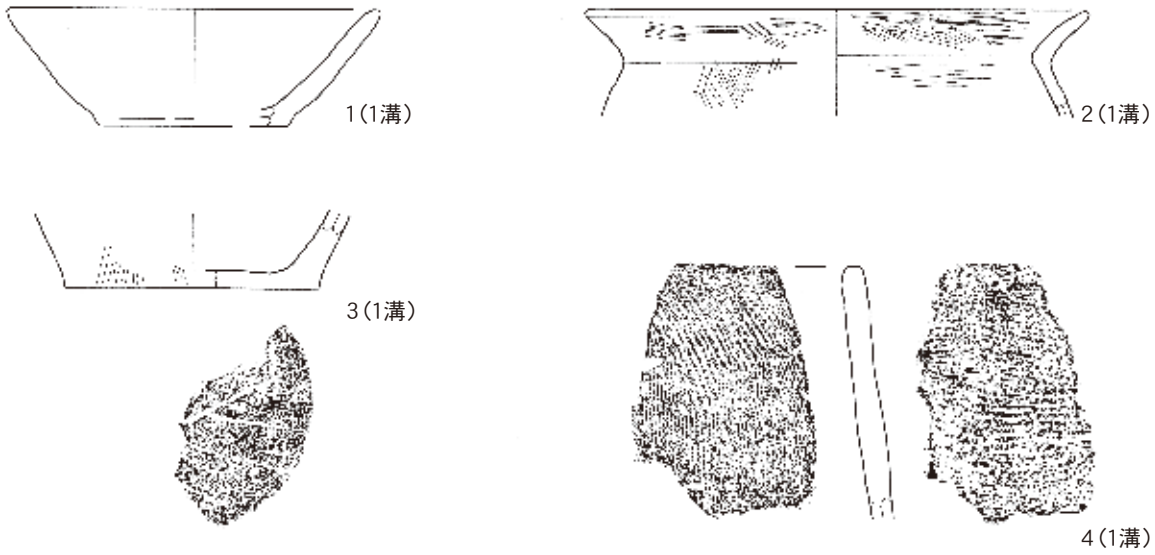
第２３０図　土坑出土遺物（１）

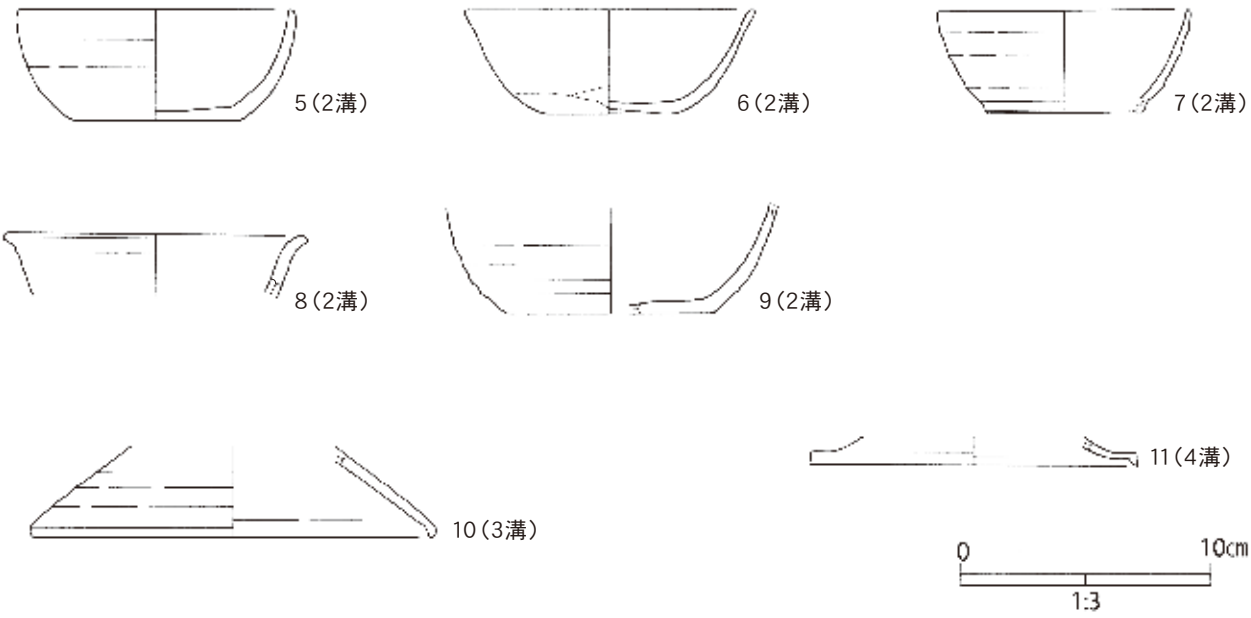


第２３１図　土坑出土遺物（２）

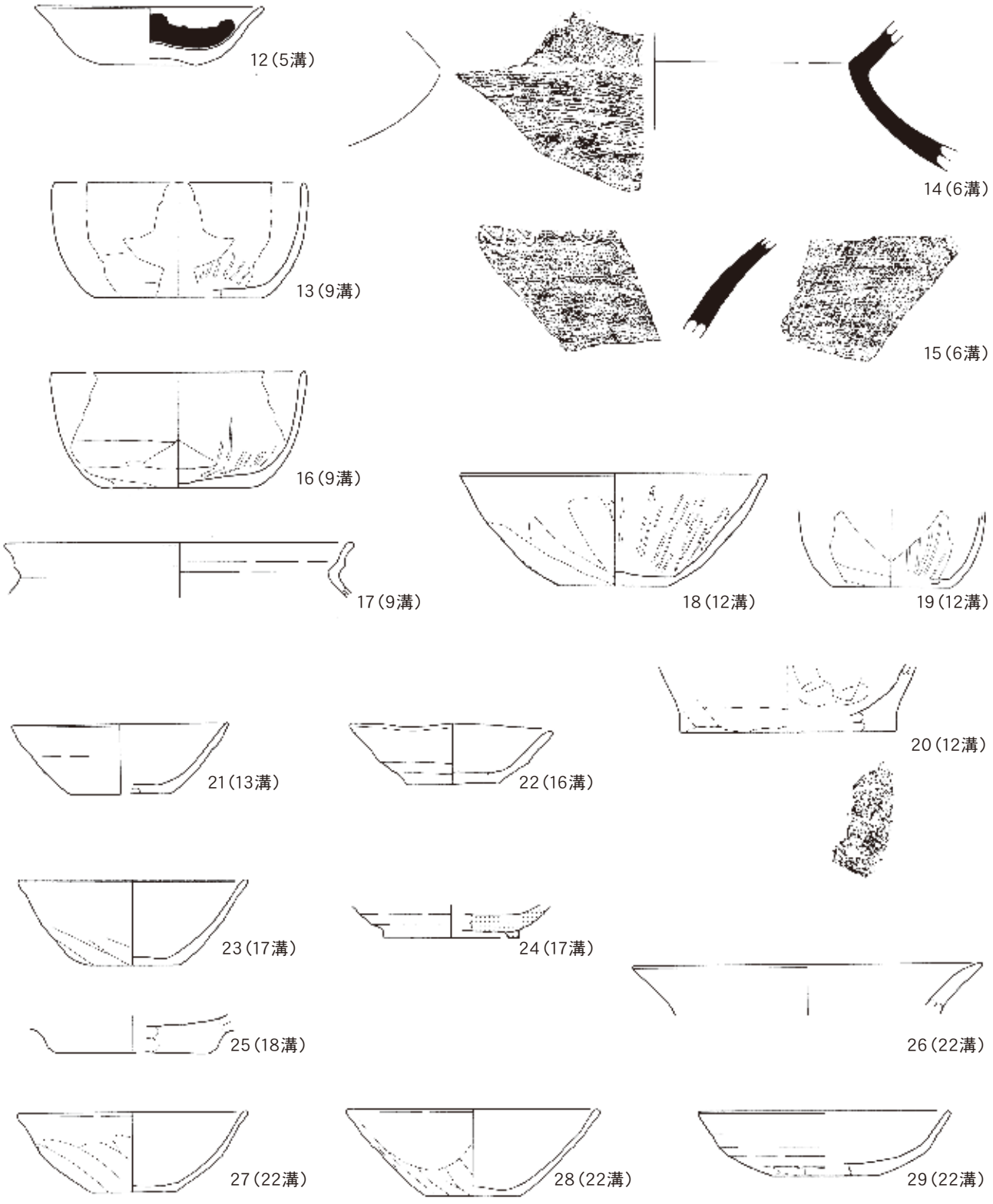


第２３２図　ピット出土遺物



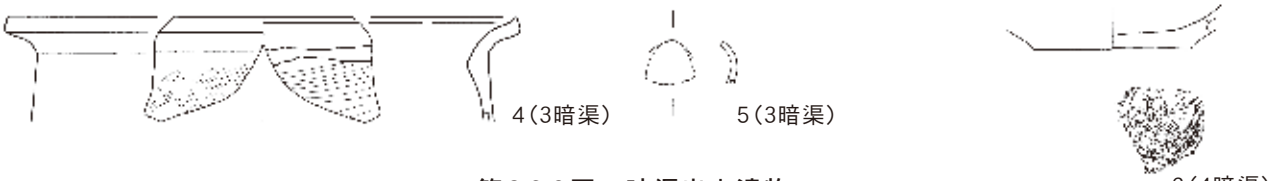


第２３３図　溝出土遺物（１）

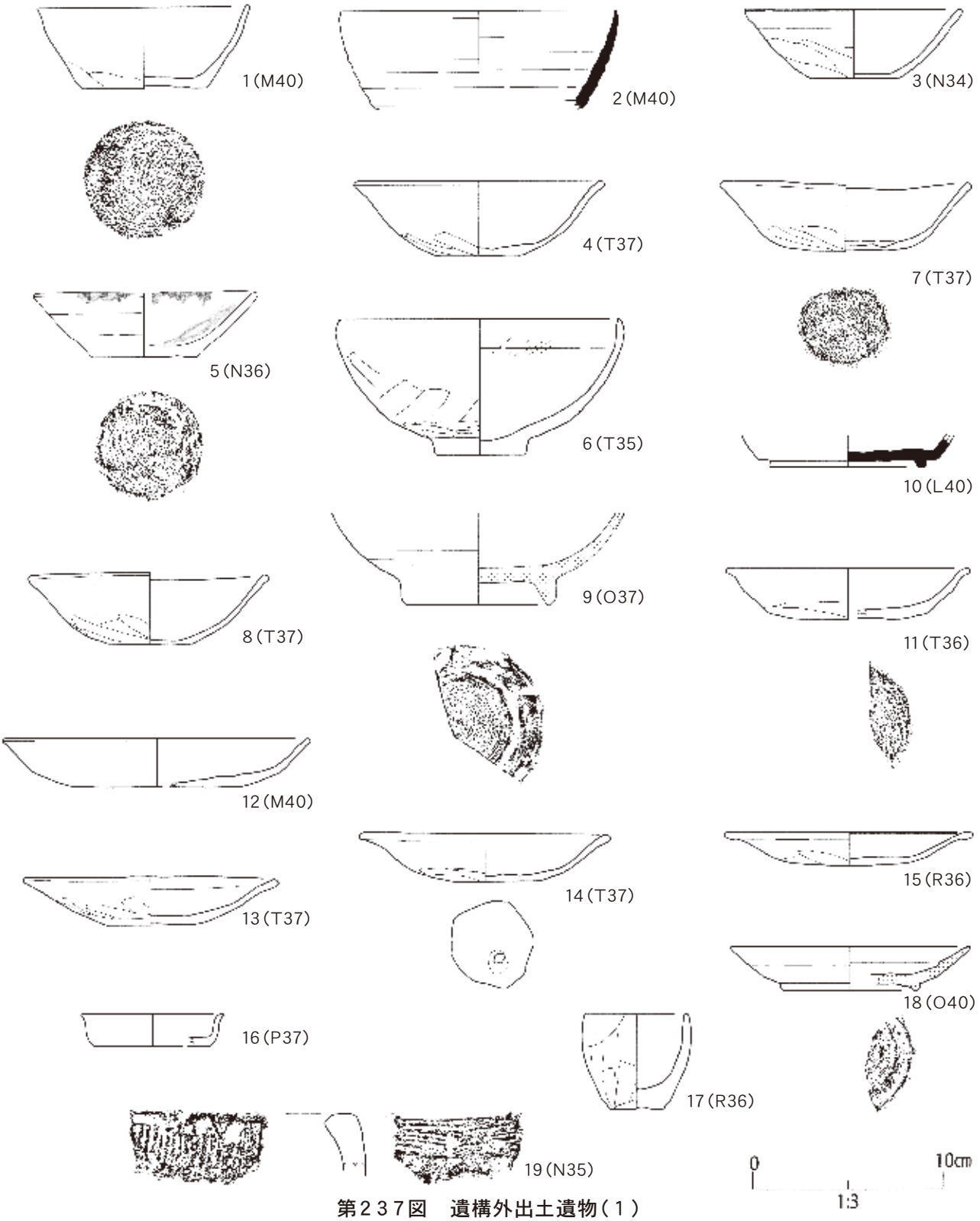


第２３４図　溝出土遺物（２）

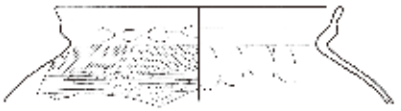
第２３５図　暗渠出土遺物

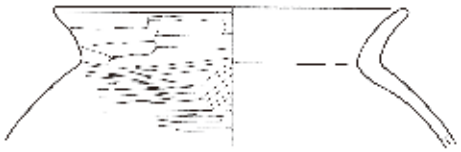


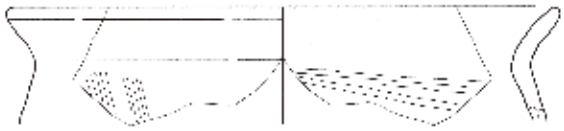
第２３６図　暗渠出土遺物

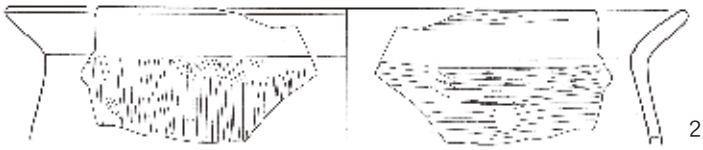


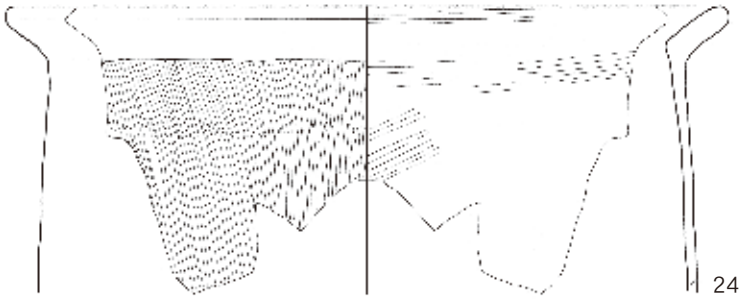
第２３７図　遺構外出土遺物（１）

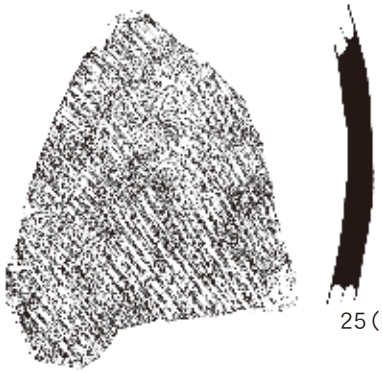

20（R35）

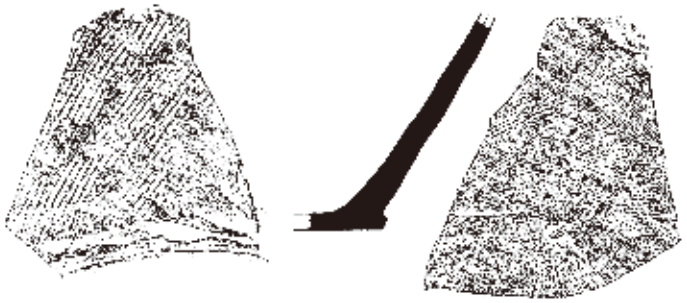

21（T・U35）


22（N34）


23（N35）


24（N34）


25（N36）


26（M40）

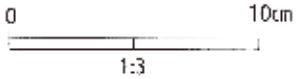
27（1住）

28（1住）

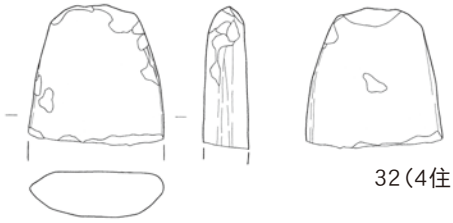
29（R37）

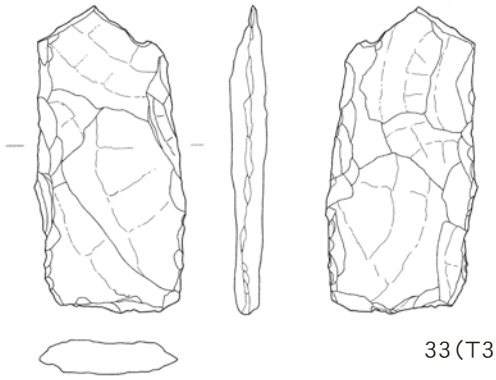
30（N37）

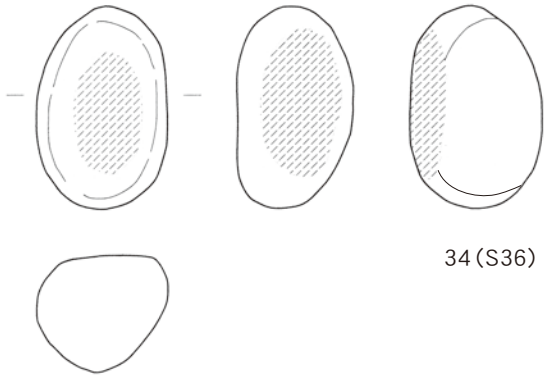
31（R37）

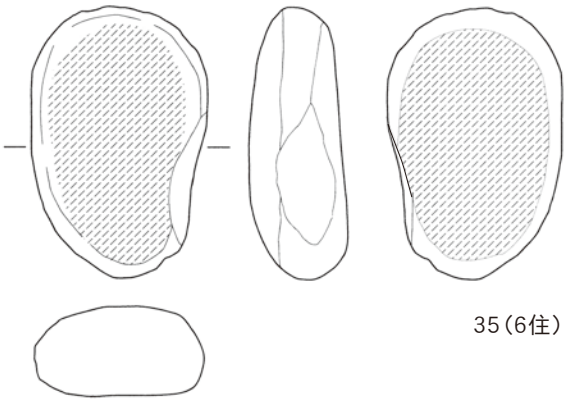


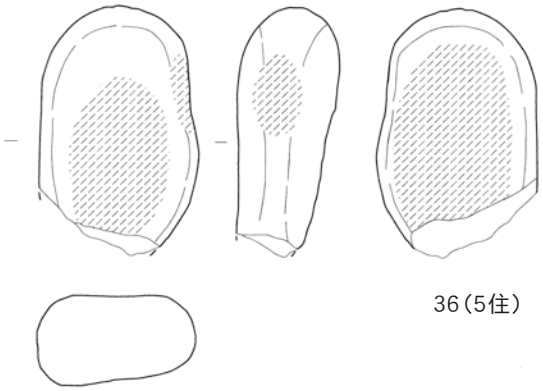
第２３８図　遺構外出土遺物（２）

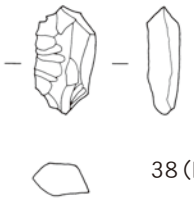


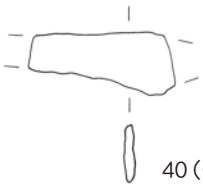


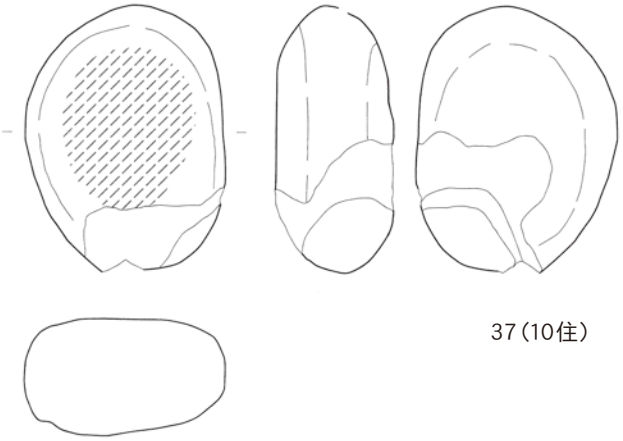


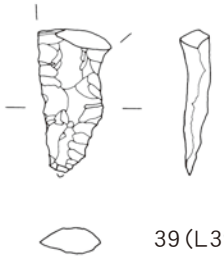


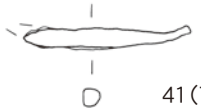


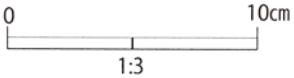


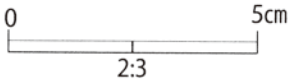


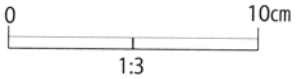












第２３９図　遺構外出土遺物（３）

第５章　自然科学分析

第１節　上コブケ A 遺跡出土炭化材の樹種

はじめに

上コブケ A 遺跡 6 号住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1　試料

試料は、6 号住居跡から出土した炭化材 6 点 (C-1 ～ 6) である。なお、試料 C-2、C-5 については、同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている（年代測定報告参照)。

2　分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3　結果

炭化材は、全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された (第 38 表)。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

第３８表　樹種同定結果

遺　構	試料名	種　　類
６号住居跡	C－１	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	C－２	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	C－３	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	C－４	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	C－５	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	C－６	コナラ属コナラ亜属コナラ節

4　考察

6 号住居跡では、10 世紀前半頃の土器と共に、床面上から建築部材に由来すると考えられる炭化材が出土している。炭化材は、全て広葉樹のコナラ節に同定された。コナラ節は、二次林等を構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。この結果から、二次林等に普通にみられるために入手が容易で、強度が高いコナラ節を選択的に建築部材として利用したことが推定される。

山梨県のデータベース (伊東・山田 ,2012) によれば、峡東地域では、足原田遺跡 (山梨市) で平安時代の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が行われており、クヌギ節を中心に針葉樹のモミ属、タケ亜科が混じる結果が得られている。クヌギ節は、コナラ節と共に二次林を構成する種類である。クヌギ節の木材は、コナラ節によく似ており、重硬で強度が高いことから、今回の結果と同様の木材利用が推定される。クヌギ節は、コナラ節よりも湿った土地によく生育することから、コナラ節とクヌギ節の違いは、遺跡周辺の地形とそれに伴う植生の違いを反映している可能性がある。

なお、山梨県のデータベースを国中地域全体に広げてみると、前田遺跡 (韮崎市)、健康村遺跡 (旧長坂町)、上ノ原遺跡 (旧須玉町) で平安時代の住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材にコナラ節が確認された例がある。

文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東　隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東　隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東　隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東　隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

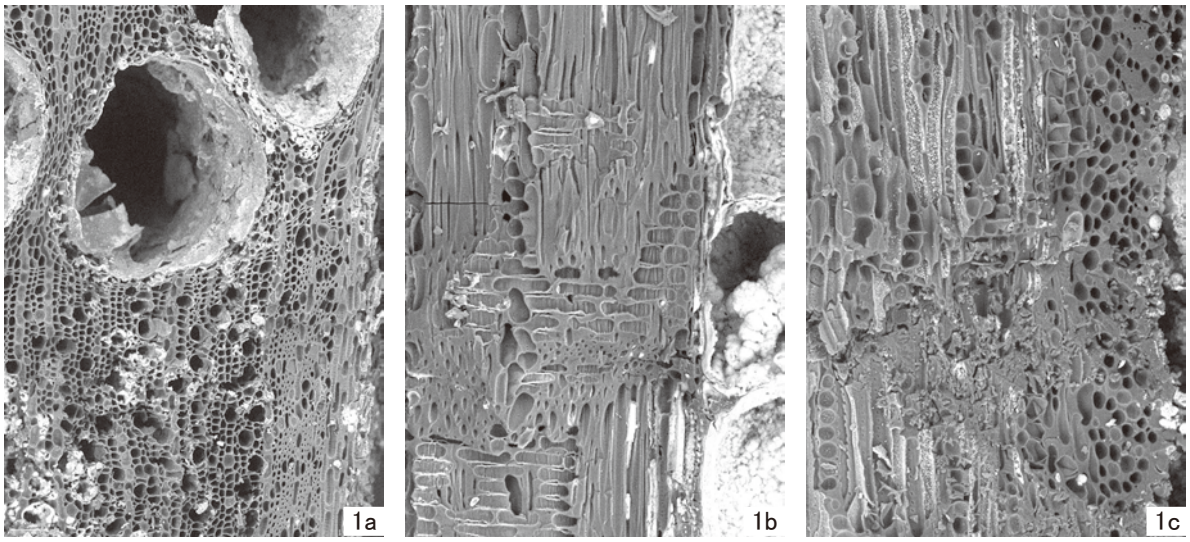
伊東　隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東　隆夫・山田昌久 (編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

島地　謙・伊東　隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p. ［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

※）本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1.コナラ属コナラ亜属コナラ節（6号住居跡;C-4）
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

第２４０図　炭化材

第２節　上コブケ A 遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

上コブケ A 遺跡は、山梨県山梨市北 927 に所在する。測定対象試料は、6 号住居跡出土木炭（C-2：IAAA-122312、C-5：IAAA-122313）2 点である（第 39 表）。これらの試料には、劣化を防ぐために薬剤（パラロイド B72 とアセトンの混合液か）が塗布されているため、通常の化学処理の前に薬剤の成分を除去するための処理を行った。なお、同一試料の樹種同定が行われている（樹種同定報告参照）。

試料は 6 号住居跡の床面直上から採取された。炭化材が住居跡全体から出土したことから、これらの炭化材は住居の構築部材で、焼失住居の可能性がある。この住居跡からは平安時代（10 世紀前半頃）の遺物が出土している。

2　測定の意義

炭化材の年代測定と出土遺物の時期を照らし合わせ、住居跡の時期を検討する。

3　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
⑵　薬剤を除去するため、アセトンで処理を行う（AC）。
⑶　酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
⑷　試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
⑸　真空ラインで二酸化炭素を精製する。
⑹　精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
⑺　グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

⑴　δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
⑵　^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示さ

れる。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

⑶ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として第 40 表に示した。

⑷ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝ 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝ 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

6 号住居跡出土木炭の ^{14}C 年代は、C-2 が 1810 ± 20yrBP、C-5 が 1850 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、C-2 が 140 ～ 241cal AD の間に 3 つの範囲、C-5 が 127 ～ 214cal AD の範囲で示され、いずれも弥生時代後期頃に相当する（小林 2009）。出土遺物から推定される時期より大幅に古い年代値となっており、塗布された薬剤の影響が残った可能性がある。

なお、C-2、C-5 が含まれる 1 ～ 3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など）。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも 60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第39表

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-122312	C-2	6 号住居跡	木炭	AAA	−23.32 ± 0.44	1,810 ± 20	79.83 ± 0.23
IAAA-122313	C-5	6 号住居跡	木炭	AAA	−25.78 ± 0.39	1,850 ± 20	79.38 ± 0.22

[#5461]

第40表

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-122312	1,780 ± 20	80.10 ± 0.22	1,809 ± 23	140calAD − 155calAD (12.1%) 168calAD − 195calAD (23.2%) 209calAD − 241calAD (32.9%)	131calAD − 255calAD (93.3%) 304calAD − 315calAD (2.1%)
IAAA-122313	1,870 ± 20	79.26 ± 0.21	1,854 ± 22	127calAD − 214calAD (68.2%)	85calAD − 231calAD (95.4%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

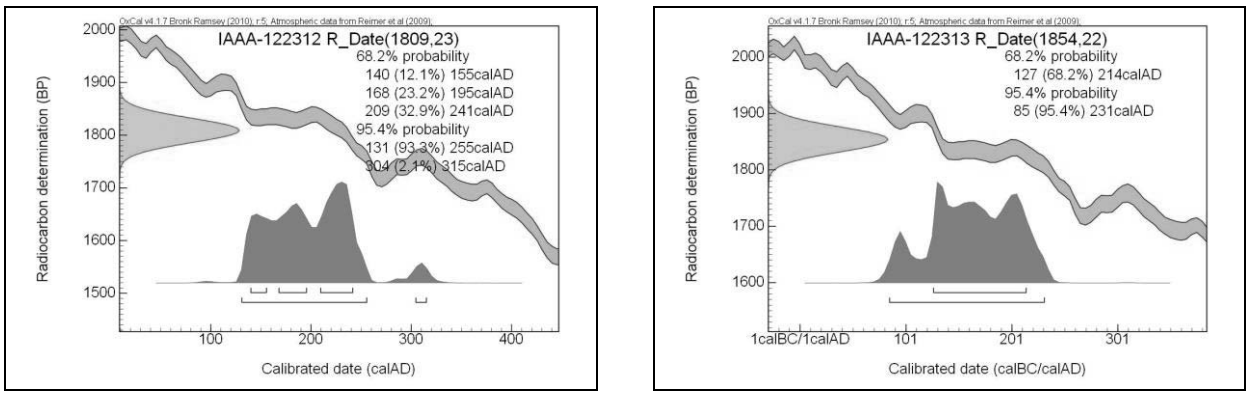
小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散 , 西本豊弘編 , 新弥生時代のはじまり　第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代 , 雄山閣 , 55-82

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代 , 弥生時代の考古学 1　弥生文化の輪郭 , 同成社 , 225-235

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－ , 第 5 回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集 , （株）加速器分析研究所 , 85-90

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



第２４１図　［参考］略年較正年代グラフ

第３節　上コブケ遺跡Ｂ区の自然科学分析（１）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上コブケ遺跡Ｂ区（山梨県山梨市南地内）は、水ヶ森山地より流下する兄川および弟川の開析により形成された谷底平野に位置する。本遺跡の発掘調査の結果、埋甕などの検出状況から縄文時代中期の墓域の可能性が想定されているほか、縄文時代中期後半（曽利式期）の人面装飾付土器やイノシシ型土製品など、山梨県内でも出土例の少ない遺物が確認されている。

本報告では、埋甕や完形の状態で出土した土器の用途や性格の検討（とくに遺体埋納の可能性）を目的として、これらの土器内を充填する土壌の化学性（有機炭素、全リン酸、全カルシウム）に着目し、調査分析を実施した。なお、上コブケ遺跡Ｂ区では、これまでに６号埋甕および９号埋甕を対象に同様の調査が行われている（報告№13562）。そこで、本報告では上記した前報の結果も含め、検討を行った。

1. 試料

試料は、円筒状に掘り込まれた土坑内に逆位に設置された埋甕より採取された土壌１点（№1;1 埋甕 土（埋甕内覆土 下部）、正位の状態で設置された埋甕より採取された土壌３点（№2;7 埋甕 中層（埋甕内覆土 中部）、№３；7 埋甕 下層（埋甕覆土 下部）、№４；7 埋甕 上層（埋甕覆土 上部））、完形の浅鉢内より採取された土壌１点（№５；浅鉢１内土（完形浅鉢覆土）および土器内より採取された土壌（№６；№2813 内土（土器内覆土）１点の、計６点である。

これらの土壌試料の野外土性（ペドロジスト懇談会編 ,1984）は、1 埋甕 土（№1）が LiC（軽埴土）、7 埋甕 中層（№2）が CL（埴壌土）、同下層（№3）が CL、同上層（№4）が LiC、浅鉢１内 土（№5）が CL、№2813 内 土（№6）が LiC であり、ほぼ同様の土性である。また、土色は、7 埋甕 中層（№2）が 10YR2/2（黒褐）であり、この他の５試料は 10YR2/3（黒褐）と、いずれもほぼ同様の土色を示す（表 1）。

2. 分析方法

土壌の化学性については、上記した分析目的を考慮し、腐植含量、リン酸含量、カルシウム含量の３項目の調査を行った。なお、有機炭素はチューリン法、リン酸含量は硝酸･過塩素酸分解‐バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解 ‐ 原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会 ,1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

（1）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）有機炭素

粉砕土試料 0.200 ～ 0.700g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4 Ｎクロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 Ｎ硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土 %）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

（3）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO3）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO4）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。

放冷後、過塩素酸（HClO4）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3. 結果

土壌化学分析結果を第 41 表に示す。腐植含量は、6 号埋甕の上層が 1.67%、中層が 1.91%、下層が 1.95% である。9 号埋甕は上層が 1.59%、下層が 1.84% であり、6 号埋甕及び 9 号埋甕を通してほぼ一定の値である。

リン酸含量は、6 号埋甕上層が 1.71㎎ /g、中層が 1.78㎎ /g、下層が 1.70㎎ /g である。9 号埋甕は、上層が 1.70㎎ /g、下層が 2.00㎎ /g であり、腐植含量と同様にほぼ一定の値である。

カルシウム含量は、6 号埋甕の上層が 6.23㎎ /g、中層が 6.19㎎ /g、下層が 6.65㎎ /g である。9 号埋甕は、上層が 6.00㎎ /g、下層が 6.15㎎ /g であり、腐植含量やリン酸含量の結果と同様にほぼ一定の値である。

第 41 表 土壌化学分析結果

遺構名	層名	土色 *1	土性 *2	有機炭素 (%)	腐植 *3 (%)	全リン酸 P2O5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
V 区 6 号埋甕	上層	10YR2/3　黒褐	LiC	0.97	1.67	1.71	6.23
	中層	10YR2/2　黒褐	LiC	1.11	1.91	1.78	6.19
	下層	10YR2/2　黒褐	LiC	1.13	1.95	1.70	6.65
V 区 9 号埋甕	上層	10YR2/2　黒褐	HC	0.92	1.59	1.70	6.00
	下層	10YR2/2　黒褐	HC	1.07	1.84	2.00	6.15

＊ 1 マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修 ,1967）による。
＊ 2 土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編 ,1984）の野外土性による。
LiC: 軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）
HC: 重埴土（粘土 45 ～ 100%、シルト 0 ～ 55%、砂 0 ～ 55%）
＊ 3 有機炭素量 × 1.724

4. 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物等に比べればリン酸の固定力が高いことから、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効と考えられる。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例（Bowen,1983;Bolt･Bruggenwert,1980; 川崎ほか ,1991; 天野ほか ,1991）がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用等）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか ,1991）という報告例があるほか、当社におけるこれまでの調査事例では骨片等の痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50mg/g（藤貫 ,1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

上コブケ遺跡 B 区 V 区より検出された 6 号埋甕および 9 号埋甕内を充填する土壌の化学性は、9 号埋甕の下層試料においてリン酸含量が高いという結果が得られたものの、他の試料の含量との比較ではその差はそれほど大きくない。また、いずれの試料もリン酸含量と腐植含量との間で相関性が窺える。

次に、上述した天然賦存量との比較では、リン酸含量はその上限とされる約 3.0㎎ /g 以下であり、カルシウム含量も同様に天然賦存量の範囲内であった。リン酸の供給源としては、腐植含量の結果から植物遺体によるものであると考えるのが自然であろう。したがって、埋甕内土壌の化学性の評価では、遺体等の埋納の痕跡を見出すことは難しい。

今回は埋甕内を充填する土壌を対象に調査を行ったが、試料間における含量の比較および天然賦存量との比較では、遺体等の埋納の可能性を示唆することはできなかった。なお、深鉢の埋設状況を見ると、設置面より下位が開放された状態にあるため、遺体成分の流亡等も想定される。そのため、本分析結果については、深鉢内を充填する土壌の由来となった堆積物や深鉢より下位の堆積物の化学性との比較対照も含めた評価・検討が期待される。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信 ,1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,28-36.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980, 土壌の化学 . 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳 , 学会出版センター ,309p.

Bowen,H.J.M.,1983, 環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -. 浅見輝男・茅野充男訳 , 博友社 ,297p.

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

藤貫　正 ,1979, カルシウム . 地質調査所化学分析法 ,52,57-61.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久 ,1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

ペドロジスト懇談会 ,1984, 野外土性の判定 . ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック , 博友社 ,39-40.

第４節　上コブケ遺跡Ｂ区の自然科学分析（２）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上コブケ遺跡Ｂ区（山梨県山梨市南地内）は、水ヶ森山地より流下する兄川および弟川の開析により形成された谷底平野（兄川・弟川平野；吉村・平川,1985）に位置する。この開析された谷内は、旧谷底面が段丘化しており、本遺跡は開析谷南側の緩斜面に立地している。本遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代中期の遺構及び遺物が確認されており、住居に伴わない埋甕が多く検出されている状況から集落の墓域であった可能性が示唆されている。

本報告では、上記した埋甕の用途や性格に関わる資料の作成を目的として、特に埋甕内の土壌の化学性（有機炭素、全リン酸、全カルシウム）に着目し、調査分析を行った。

1. 試料

試料は、上コブケ遺跡Ｂ区Ⅴ区より検出された埋甕２基（6 号埋甕、9 号埋甕）から採取された土壌５点である。以下に、各埋甕から採取された試料の概要を記す。

（1）6 号埋甕

6 号埋甕は、3 号住居の北側、2 号住居の西側に位置する。埋設方法は、掘込内に深鉢が正位の状態で設置されており、深鉢内には深鉢底部が逆位に納められた状態にある。試料は、正位の深鉢を充填する土壌（覆土）の上部と下部（6 号埋甕上層、同中層）、さらに逆位の深鉢底部内の土壌（6 号埋甕下層）の計 3 点が採取されている。

分析に供した土壌の野外土性（ペドロジスト懇談会編,1984）は、いずれも LiC（軽埴土）であり、土色は上層が 10YR3/2（黒褐）、中層と下層は 10YR2/2（黒褐）とやや黒色味が強い。

（2）9 号埋甕

9 号埋甕は、2 号住居南側に隣接する位置より検出されている。埋設方法は、深鉢が逆位の状態で設置されている。深鉢は胴部下半を欠損しているため、試料は深鉢内の胴上半部の土壌（9 号埋甕上層）と胴上部～頸部付近の土壌（9 号埋甕下層）の計 2 点が採取されている。

分析に供した土壌の野外土性は、いずれも HC（重埴土）と粘土質であり、土色は 10YR2/2（黒褐）である。

2. 分析方法

有機炭素はチューリン法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会,1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

（1）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）有機炭素

粉砕土試料 0.100 ～ 0.300g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4 Ｎクロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 Ｎ硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土 %）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

（3）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO3）約 10ml を加えて加熱分解する。

ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3. 結果

結果を第 42 表に示す。なお、第 40 表には、過去に上コブケ遺跡 B 区より検出された 6 号および 9 号埋甕を対象に実施した調査結果を併記した。

今回の分析に供された試料の腐植含量は、1 埋甕 土（No. 1）が 1.14%、7 埋甕 中層（No. 2）が 1.21%、同下層（No. 3）が 1.14%、同上層（No. 4）が 1.26%、浅鉢 1 内土（No. 5）が 2.02%、No. 2813 内土（No. 6）が 2.90% である。土色は同様であるが、浅鉢 1 内土（No. 5）およびNo. 2813 内土（No. 6）において腐植含量が高い値を示す。

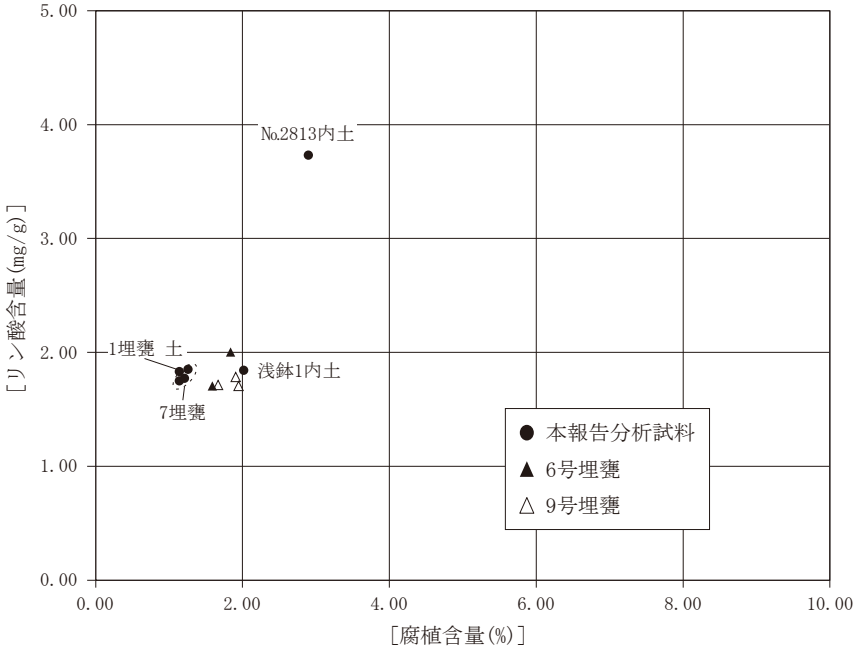
リン酸含量は、1 埋甕 土（No. 1）が 1.83mg/g、7 埋甕 中層（No. 2）が 1.77mg/g、同下層（No. 3）が 1.75mg/g、同上層（No. 4）が 1.85mg/g、浅鉢 1 内土（No. 5）が 1.84mg/g、No. 2813 内土（No. 6）3.73mg/g である。1 埋甕、7 埋甕および浅鉢 1 試料は、ほぼ一定の値を示す一方、No. 2813 内土（No. 6）において特徴的に高い値を示す。

カルシウム含量は、1 埋甕 土（No. 1）が 6.87mg/g、7 埋甕 中層（No. 2）が 6.41mg/g、同下層（No. 3）が 7.14mg/g、同上層（No. 4）が 6.48mg/g、浅鉢 1 内土（No. 5）7.02mg/g、No. 2813 内土（No. 6）が 7.49mg/g である。分析に供された 6 試料は、ほぼ一定の値を示し、リン酸含量が高い値を示したNo. 2813 内土（No. 6）ではカルシウム含量の増加は認められない。

第42表　土壌化学分析結果

試料 No.	試料名（注記No.）		土性 *1	土色 *2	有機炭素 (%)	腐植 *3 (%)	全リン酸 P2O5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
1	1 埋甕	土	LiC	10YR2/3　黒褐	0.66	1.14	1.83	6.87
2	7 埋甕	中層	CL	10YR2/2　黒褐	0.70	1.21	1.77	6.41
3		下層	CL	10YR2/3　黒褐	0.66	1.14	1.75	7.14
4		上層	LiC	10YR2/3　黒褐	0.73	1.26	1.85	6.48
5	浅鉢 1	内土	CL	10YR2/3　黒褐	1.17	2.02	1.84	7.02
6	No. 2813	内土	LiC	10YR2/3　黒褐	1.68	2.90	3.73	7.49
	6 号埋甕	上層	LiC	10YR2/3　黒褐	0.97	1.67	1.71	6.23
		中層	LiC	10YR2/2　黒褐	1.11	1.91	1.78	6.19
		下層	LiC	10YR2/2　黒褐	1.13	1.95	1.70	6.65
	9 号埋甕	上層	HC	10YR2/2　黒褐	0.92	1.59	1.70	6.00
		下層	HC	10YR2/2　黒褐	1.07	1.84	2.00	6.15

＜注＞
*1: 土性　土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編 ,1984）の野外土性による。
CL : 埴壌土 (粘土 15 ～ 25%, シルト 20 ～ 45%, 砂 3 ～ 65%)
LiC: 軽埴土 (粘土 25 ～ 45%, シルト 0 ～ 45%, 砂 10 ～ 55%)
HC : 重埴土 (粘土 45 ～ 100%, シルト 0 ～ 55%, 砂 0 ～ 55%)
*2: 土色　マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修 ,1967) による。
*3: 腐植　有機炭素量 × 1.724



第２４２図　腐植含量とリン酸含量の相関図

4. 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある（Bowen,1983;Bolt･Bruggenwert,1980; 川崎ほか ,1991; 天野ほか ,1991）。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか ,1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50mg/g（藤貫 ,1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。

分析に供された埋甕や浅鉢内などを充填する土壌の化学性は、No. 2813 内土（No. 6）が全試料を通じて腐植含量が最も高く、リン酸含量も天然賦存量の上限である約 3.0mg /g を超える保持量であることが確認された。また、浅鉢 1 内土（No. 5）は、腐植含量がNo. 2813 内土（No. 6）に次いで高い値を示したが、リン酸含量においてはこの他の 4 試料とほぼ同様の値であった。この他の試料は、腐植含量はほぼ一定で少なく、リン酸含量やカルシウム含量ともに天然賦存量の範囲内であった。

また、本遺跡における土壌の化学性の傾向を把握するため、第 41 表に併記した前報の結果も含め腐植含量とリン酸含量の相関図（第 248 図）を作成した。No. 2813 内土（No. 6）を除く試料は、腐植およびリン酸含量は概ね一定の範囲にまとまるという傾向が窺える。詳細にみると、腐植含量は今回の調査試料が全体的に低い傾向にある一方、相対的にリン酸含量やカルシウム含量がやや高い。ただし、リン酸含量やカルシウム含量は、いずれも天然賦存量の範囲内にあり、またその量比も小さいことから、遺体成分の富化を支持することは難しい。

次に、No. 2813 内土（No. 6）についてみると、上記した各試料との比較において明らかな有意差が見出され、

また腐植含量に対してリン酸含量が高いという特徴が示唆される。この結果から、動物遺体由来のリン酸の富化が推定される。ただし、カルシウム含量は、天然賦存量の範囲内にあり、また試料間の比較においても特徴的な富化を認めることができないため、遺体埋納の可能性についての判定については課題が残る。

なお、これまでの調査は遺構（埋甕）や土器内を充填する土壌が対象とされており、各試料の化学性の検討はいわゆる天然賦存量や試料間の相対的な比較による。そのため、分析に供された試料が仮に特異な性状を示していた場合も、その特徴を見出しにくいと考えられる。今後、№2813 内土（№6）を含めた調査結果の評価を行う場合には、土器内を充填する土壌の母材となった堆積物（自然土壌）との比較対照による検討も期待される。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信 ,1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,28-36.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980, 土壌の化学 . 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳 , 学会出版センター ,309p.

Bowen,H.J.M.,1983, 環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -. 浅見輝男・茅野充男訳 , 博友社 ,297p.

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

藤貫　正 ,1979, カルシウム . 地質調査所化学分析法 ,52,57-61.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久 ,1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

ペドロジスト懇談会 ,1984, 野外土性の判定 . ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック , 博友社 ,39-40.

第５節　上コブケ遺跡Ｂ区出土縄文土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上コブケ遺跡は、甲府盆地北東部を流れる笛吹川の支流である兄川が作る小扇状地上に位置している。この扇状地は、高位、中位、低位の各段丘に区分されており（三村ほか,1984）、遺跡の位置は低位段丘上にある。低位段丘はローム層の載っていない侵食段丘面とされていることから、完新世以降に離水したものと考えられる。

本報告では、上コブケ遺跡Ｂ区から出土した縄文土器の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、周辺地質との比較などから、土器の産地に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、上コブケ遺跡Ｂ区から出土した縄文土器２点（№1、№2）である。これらの胎土分析試料の候補とされた土器のうち、№1は1号埋甕に使用された縄文時代中期後半（曽利Ⅰ式期）の深鉢であり、胴部には人面装飾が施される。また、土器の観察所見から、その産地として甲府盆地が推定されている。№2は、完形の小型の浅鉢（P2653）であり、観察所見から異系統の可能性が示唆されている。なお、今回の分析では前処理として試料の一部を採取する必要があるなど破壊を伴うため、完形資料である№2については、担当者との協議により現状保存を優先し、別資料への振替えを行っている。

№2の振替として対象とされた資料は、深鉢（P3395）である。本報告では便宜上№3として扱う。№3は、6号埋甕に使用された縄文土器の深鉢である。

胎土分析は、上記した経緯により№1と№3の縄文土器２資料を対象とし、土器の実測や復元などに影響が少ない箇所に相当する破片をそれぞれ試料としている。各試料の資料名、器種、試料の採取部位および分析前の試料観察結果を一覧として、表1に示す。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は切片による薄片作製が主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。ただし、胎土中に含まれる砂粒の量自体が少なければ、その情報量も少なくなる。一方、蛍光Ｘ線分析は、砂分の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができる。今回の分析では基礎資料の作成という目的から、薄片作製観察と蛍光Ｘ線分析を併用する。以下に各分析方法を述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏

第43表　胎土分析試料一覧

№.	資　料　名	遺構名	器　種	試料採取部位	表面観察所見
1	上コブケＢ　1埋　P1411	1号埋甕	深鉢	胴部	径0.5～2.5mmの白色岩片（花崗岩類）多量、 径0.5～1.0mmの石英粒中量、 径0.5mmの黒色鉱物粒（角閃石）少量、 径0.5mmの黒雲母片極めて微量含まれる。
3	上コブケＢ　6埋　P3395	6号埋甕	深鉢	胴部 （下部）	径0.5～2.0mmの白色岩片（花崗岩類）多量、 径0.5～1.0mmの石英粒中量、 径0.5mmの黒色鉱物粒（角閃石）少量、 径0.5mmの黒雲母片極めて微量含まれる。

光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか（1999）の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析にも有効である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

（2）蛍光 X 線分析

リガク製波長分散型蛍光 X 線分析装置（ZSX Primus Ⅲ +）を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムの FP 定量法を使用し、SiO2、TiO2、Al2O3、Fe2O3、MnO、MgO、CaO、Na2O、K2O、P2O5 の主要 10 元素および Rb、Sr、Y、Zr、Ba の微量 5 元素について定量分析を実施した。

なお、標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JA-1、JA-2、JA-3、JB-1a、JB-2、JB-3、JCh-1、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-2、JG-3、JGb-1、JGb-2、JH-1、JLk-1、JR-1、JR-2、JR-3、JSd-1、JSd-2、JSd-3、JSl-1、JSl-2、JSy-1）を用いた。

第44表　ガラスビード作製条件

溶融装置	自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）
溶剤及び希釈率	融剤（Spectroflux 100B)5.000g: 試料 0.500g
剥離剤	LiI（溶融中 1 回投入）
溶融温度	1200℃（約 7 分）

第45表　蛍光 X 線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧（KV）	50
管電流（mA）	50
試料マスク	30mm φ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mm φ
測定雰囲気	真空

第46表　蛍光 X 線定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1 次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度（deg）			計測時間（s）	
							LL	UL	Peak	+BG	−BG	Peak	BG
SiO_2	Si−K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO_2	Ti−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al_2O_3	Al−K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	−	40	20
Fe_2O_3	Fe−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg−K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00−37.50 (0.10step)	41.50−42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca−K α	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na_2O	Na−K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K_2O	K−K α	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	−	142.00	40	20
P_2O_5	P−K α	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60−25.80 (0.10step)	27.06−27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40−24.70 (0.10step)	25.60−25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04−23.16 (0.06step)	24.30−24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr−K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba−L α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

1）装置

（株）リガク製 走査型蛍光 X 線分析装置 ZSX Primus Ⅲ +（FP 定量法アプリケーション）

2）試料作製

機械乾燥（110℃）した試料を、振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、ガラスビードを表 2 の条件で作製した。

3）測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光 X 線分析装置（（株）リガク製 ZSX Primus Ⅲ +）を用い、表 3、表 4 の条件で測定を実施した。

3. 結果

（1）薄片作製観察

観察結果を第 47 表、第 249・250 図に示す。以下に、鉱物・岩石組成、粒径組成、砕屑物・基質・孔隙の順に各試料の特徴を述べる。

1）鉱物・岩石組成

№ 1 および№ 3 の 2 試料は、ほぼ同様の組成を示す。すなわち、砂粒の主体は、石英、斜長石、角閃石の鉱物片と花崗岩類の岩石片である。これらの中では角閃石がやや少ないが、他は概ね同量程度に多い。これら主体となる鉱物片と岩石片のほかには、少量のカリ長石の鉱物片と少量または微量の黒雲母の鉱物片および微量の多結晶石英などが含まれる。

2）粒径組成

2 試料はともに細粒砂をモードとする組成であり、次いで中粒砂や粗粒砂が多い。

3）砕屑物・基質・孔隙の割合

砕屑物の割合をみると、2 試料はほぼ同量であり、いずれも約 20% を示す。

（2）蛍光 X 線分析

各試料の元素の含有量比を一覧表にして表 6 に示す。№ 1 と№ 3 の 2 試料間には、特に明瞭な組成の違いは認められない。主要な元素は、SiO2 がともに約 54% であり、Al2O3 が 20% 前後、Fe2O3 が 10% 前後を示す。CaO、Na2O、K2O の各元素においても顕著な差は認められない。微量元素では、Sr に若干の差が認められるものの、他の元素では 2 試料の値はほぼ同量である。

4. 考察

№ 1 および№ 3 の縄文土器は、胎土中に含まれる砂粒の鉱物・岩石組成および粒径組成、さらに砕屑物量もほぼ同様であり、基質も含めた胎土全体の化学組成においても顕著な差は認められなかった。これらの分析結果と肉眼観察においてもほぼ同様な砂粒の含有状況であったことも考慮すれば、2 点の縄文土器についてはほぼ同一の地質背景が推定される。

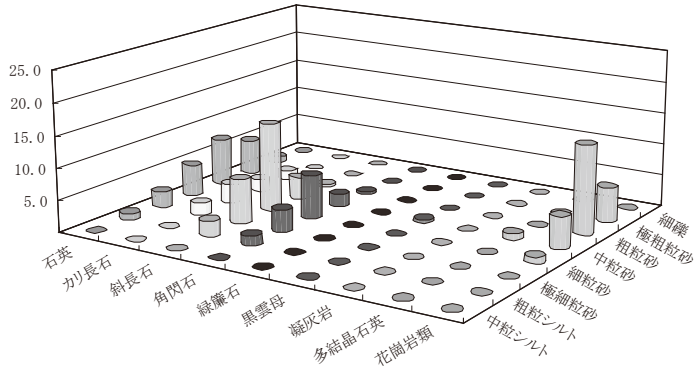
そこで、胎土分析により得られた鉱物・岩石組成により、地質学的背景について検討する。分析に供された縄文土器の胎土の鉱物・岩石組成は、石英と斜長石が多く、カリ長石が少ないことと角閃石が多いことおよび花崗岩類の岩石片が多いという共通する特徴を示す。このことから、角閃石黒雲母花崗閃緑岩が広く分布する地質学的背景が推定される。№ 1 の型式とされている曽利式は、一般には八ヶ岳南西麓から甲府盆地および富士川下流域や伊豆、西関東まで含む広範な地域に分布が認められている。まずはこの広範な地域の中での地質学的背景を考えると、花崗閃緑岩が広く分布する地域として第一に甲府盆地があげられる。

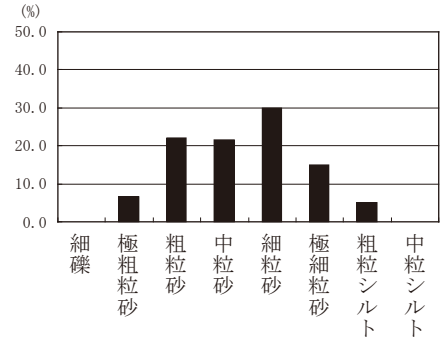
なお、曽利式と同様に広範に分布が認められる縄文時代中期の「蛇体装飾把手土器」について、胎土に含有される岩石片で追跡した調査事例（藤森 ,2012）では、甲府盆地東南部の遺跡から出土した在地とされる型式の縄文土器の多くに花崗岩の岩石片を含有することが確かめられている。№ 1 は、担当者による観察所見から甲府

第47表　薄片観察結果

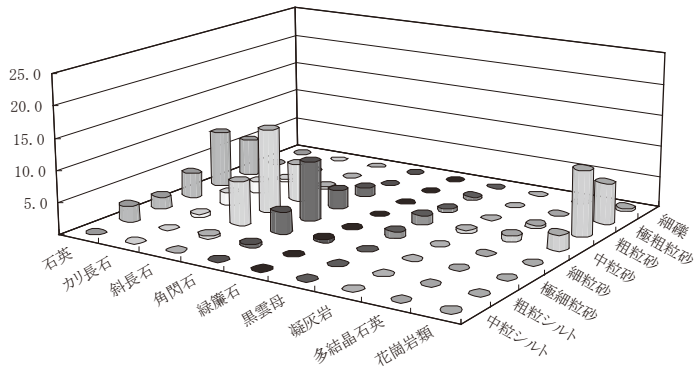
No.	砂粒区分		砂粒の種類構成									合計
			鉱物片									
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	黒雲母	凝灰岩	多結晶石英	花崗岩類	
1	砂	細礫										0
		極粗粒砂	2								11	13
		粗粒砂	11	3	1	1					28	44
		中粒砂	15	4	7	4		1		2	10	43
		細粒砂	10	6	28	14					2	60
		極細粒砂	5	4	14	7						30
		粗粒シルト	2		5	3						10
		中粒シルト										0
		基質										753
		孔隙										35
		備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。									
3	砂	細礫									1	1
		極粗粒砂						1			13	14
		粗粒砂	12	1	1	3		1		1	21	40
		中粒砂	18	4	12	6		3	1	2	5	51
		細粒砂	8	4	27	19		2				60
		極細粒砂	4	1	14	7	1					27
		粗粒シルト	5		1	1						7
		中粒シルト										0
		基質										724
		孔隙										45
		備考	基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色～褐色を示す。角閃石は弱酸化の状態となっている。									

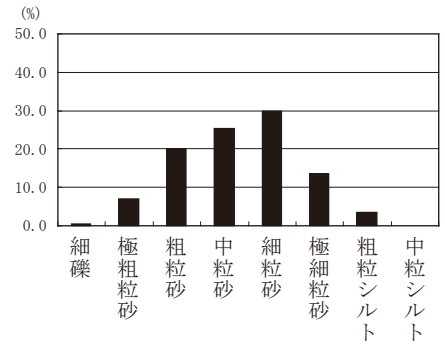
No.1(1埋 P1411 1号埋甕 深鉢 胴部)



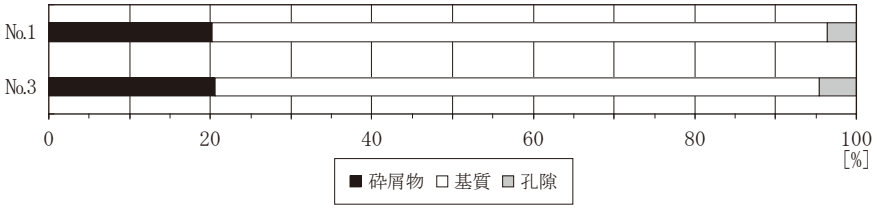


No.3(6埋 P3395 6号埋甕 深鉢 胴部(下部))





第243図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成



№1;1埋 P1411 1号埋甕 深鉢 胴部
№3;6埋 P3395 6号埋甕 深鉢 胴部(下部)

第２４４図　砕屑物・基質・孔隙の割合

第48表　蛍光 X 線分析結果（化学組成）

No.	主要元素										微量元素					Total (%)
	SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na_2O (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	
1	53.69	0.94	19.80	8.12	0.10	1.97	3.03	1.28	1.21	1.37	64	155	22	113	396	91.59
3	53.52	1.04	22.10	10.97	0.13	1.95	2.40	0.98	1.45	0.83	65	124	20	111	383	95.44

盆地産の可能性が示唆されたが、今回の分析で見出された特徴や上述した調査事例から推定される地質学的背景と整合する所見と言える。

より詳細に、上コブケ遺跡周辺の地質学的背景を見てみる。遺跡の位置する兄川の扇状地は、北東側と南西側を山地に挟まれている。北東側の山地は、新第三紀中新世に形成された甲府花崗岩体の中の広瀬花崗閃緑岩により構成されており、南西側の山地は、新第三紀鮮新世の山口軽石凝灰岩と窪平泥流堆積物により構成されている（三村ほか ,1984）。広瀬花崗閃緑岩の岩相は、カミングトン閃石含有緑色角閃石黒雲母トーナル岩 – 花崗閃緑岩と記載されており、上述した地質学的背景とよく一致する。一方の凝灰岩は、№３に微量認められているのみである。ここで砂の由来を扇状地の砂礫層や河川砂であると想定した場合に、花崗岩類と凝灰岩では物理的な強さが異なるため、堆積物中に残存する割合は花崗岩類の岩石片や花崗岩類に由来する鉱物の方が相対的に多くなる。おそらく、兄川の扇状地の扇状地堆積物、あるいはその末端を区切る笛吹川の河川砂では花崗岩類の岩石片の割合が卓越していると考えられる。すなわち、今回の試料とされた土器の材料には、兄川の扇状地やその周辺の堆積物が使用されていることが推定される。

また、微量ながらも凝灰岩が検出されたことは、背後に凝灰岩の分布する兄川の扇状地に由来する胎土であることを示唆しているとも言える。例えば笛吹川を挟んで対岸の旧塩山市や旧勝沼町を流れる重川などの河川砂では、背後に広瀬花崗閃緑岩が分布することは同様であるが、それに接して堆積岩からなる四万十累層群の地質も分布しているため、花崗岩類とともに少量の泥岩や泥岩などが熱変成したホルンフェルスなどの岩石片も微量ではあるが混在する（河西 ,1989）。今回の試料には、このような傾向が認められないことから、少なくとも旧塩山市側の堆積物が材料とはなっていないことが考えられる。

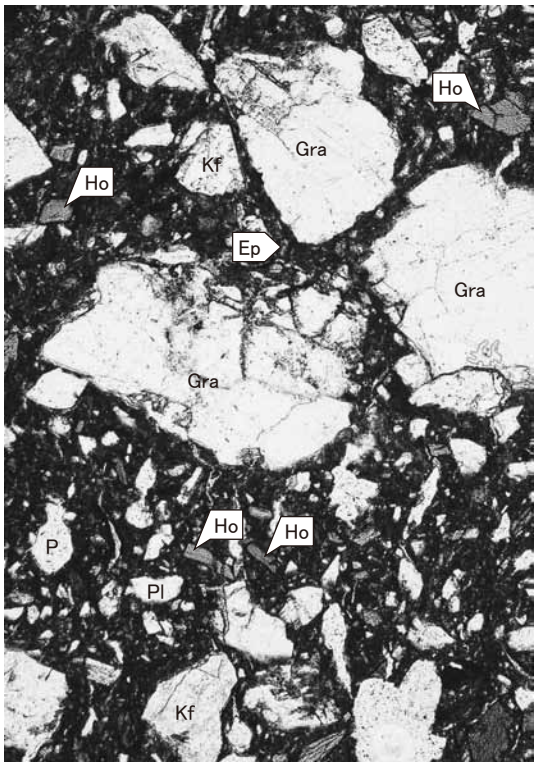
今後は、兄川の扇状地周辺の自然堆積物の分析事例を得るとともに、上コブケ遺跡から出土した土器の分析事例の比較検討が期待される。すなわち、一箇所（遺跡）における土器の材料の様相を把握することにより、上コブケ遺跡における土器製作事情がより明らかになると考えられる。

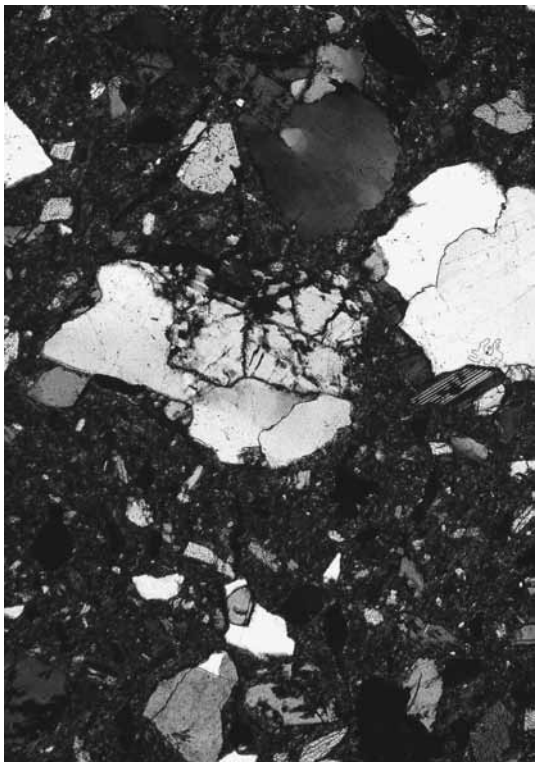
引用文献

藤森英二 ,2012, 鉱物分析を利用した縄文時代中期中葉における同一系統土器の伝播経路 - 尖石遺跡蛇体把手土器の子孫達　その 2-. 長野県考古学会誌 ,140,23-42.

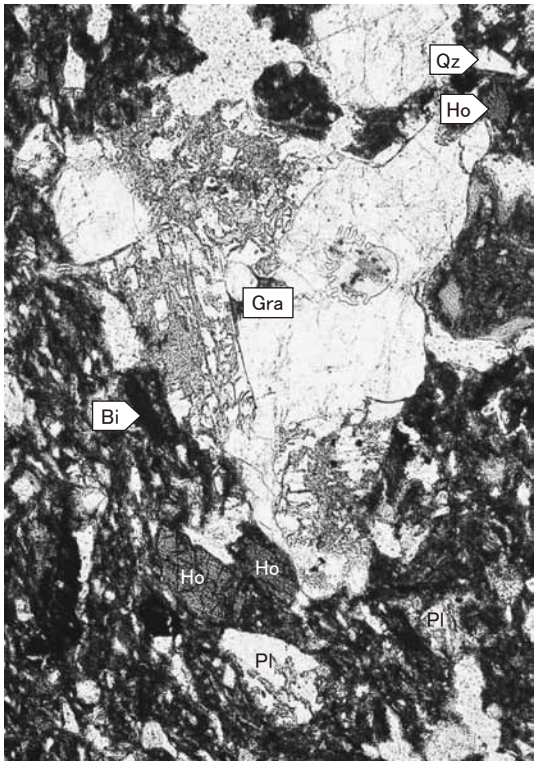
河西　学 ,1989, 甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成 - 土器胎土分析のための基礎データ -. 山梨考古学

論集Ⅱ,505 – 523.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集,120 – 121.
三村弘二・加藤祐三・片田正人,1984,御岳昇仙峡地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,61p.





1.№1(上コブケB 1埋 P1411 1号埋甕 深鉢 胴部)



2.№3(上コブケB 6埋 P3395 6号埋甕 深鉢 胴部(下部))

0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Ep:緑レン石. Bi:黒雲母.
Gra:花崗岩. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第245図　胎土薄片

第６節　上コブケ遺跡Ｃ区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上コブケ遺跡（山梨県山梨市北・南）は、水ヶ森山地より流下する兄川および弟川の開析により形成された谷底平野（兄川・弟川平野 ; 吉村・平川 ,1985）に位置する。この開析された谷内は、兄川と弟川の開析により旧谷底面が段丘化するほか、現在の谷底平野が形成されており（吉村・平川 ,1985）、本遺跡は開析谷南側の緩斜面に立地している。

本報告では、上コブケ遺跡Ｃ区より検出された遺構の年代、および竪穴住居跡のカマド埋積物を対象とした植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

Ⅰ . 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、竪穴住居跡（C 区 1 号住、C 区 2 号住、C 区 4 号住、C 区 6 号住）、集石土坑（C 区集石土坑 1 号）、溝（C 区 12 号溝）および土坑（C 区 88 号土坑）などから出土した炭化材である。なお、C 区 1 号住と C 区 2 号住の炭化材は、測定試料の候補として、それぞれ 2 試料が供されたため、外観観察から状態の良い試料を選択している。

測定に供した炭化材は、C 区 1 号住が長さ約 2.5cm、幅約 1.5cm、厚さ約 0.5mm の板状の破片（スミ 2）、C 区 2 号住が約 2cm 角の破片（炭№ 2）、C 区 4 号住が長さ約 1.5cm、幅および厚さが約 0.5cm の破片（カマド 炭）、C 区 6 号住が約 0.5cm 角の破片（カマド焼土 炭）、C 区集石土坑 1 号 が長さ約 3cm、幅約 2cm、厚さ約 0.5mm の板状の破片（炭）、C 区 12 号溝が径約 2cm の芯持材（炭 1）、C 区 88 号土坑が約 1cm 角の破片（炭）である。なお、本分析では、試料の履歴（樹種）に関わる情報を得るため、測定に供した炭化材の一部を分割し、樹種同定を行った。結果は、放射性炭素年代測定結果と合わせて表 1 に示す。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta\ ^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強

度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が 68%、2σは真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果および考察

各遺構から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、C 区 1 号住 スミ 2 が 1,190 ± 20yrBP、C 区 2 号住 炭№ 2 が 1,160 ± 20yrBP、C 区 4 号住カマド 炭が 1,170 ± 30yrBP、C 区 6 号住カマド焼土 炭が 1,100 ± 30yrBP、C 区集石土坑 1 号 炭が 5,010 ± 30yrBP、C 区 12 号溝 炭 1 が 1,470 ± 20yrBP、C 区 88 号土坑 炭が 1,190 ± 20yrBP を示す。また、較正暦年代（測定誤差σ）は、C 区 1 号住 スミ 2 が calAD 782-calAD 883、C 区 2 号住 炭№ 2 が calAD 783-calAD 939、C 区 4 号住カマド 炭が calAD 782-calAD 892、C 区 6 号住カマド焼土 炭が calAD 898-calAD 985、C 区集石土坑 1 号 炭が calBC 3,913-calBC 3,714、C 区 12 号溝 炭 1 が calAD 570-calAD 619、C 区 88 号土坑 炭が calAD 782-calAD 882 である。

以上の結果を参考とすると、上コブケ遺跡 C 区の住居跡から出土した炭化材は、8 世紀後半～ 9 世紀後半および 10 世紀中頃（1 号住、2 号住、4 号住）と 9 世紀末～ 10 世紀後半中頃（6 号住）に相当する。このことから、いずれも平安時代頃の遺構と推定され、発掘調査所見を支持する。88 号土坑は、8 世紀後半～ 9 世紀後半頃に相当することから、上記した C 区 1 号住などと同時期の遺構の可能性がある。一方、12 号溝は 6 世紀後半～ 7 世紀前半頃と上述した住居跡や土坑よりも若干古い。なお、集石土坑 1 号は、小林（2008）による東日本の縄文土器の年代によれば、縄文時代前期後半に相当する。

また、試料の履歴の確認として実施した炭化材の樹種同定の結果、針葉樹のヒノキ科（Cupressaceae）と、広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）、ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）、サクラ属（*Prunus*）が確認された（表 1）。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどの有用材が含まれ、現在の山梨県内では山地に自生している。クヌギ節やヤマグワは川辺林などの比較的水分条件の良い場所に生育する落葉高木であり、サクラ属は川辺林や二次林、山地や丘陵地の落葉広葉樹林に生育する落葉高木である。本遺跡の立地を考慮すると、確認された分類群は山地および谷底平野などに生育した樹木に由来すると考えられる。また、出土状況が明らかな集石土坑のクヌギ節については、燃料材としての利用が示唆される。

Ⅱ . 種実遺体分析

1. 試料

試料は、平安時代の住居跡のカマドより採取された土壌 4 点である。試料の詳細は、結果とともに表 2 に示す。

2. 分析方法

土壌試料の洗出は、炭化種実を壊さずに回収することを最優先として、以下の方法を実施した。試料 1kg（5 号住カマド 炭は 100g）を常温乾燥後、肉眼観察で確認された種実遺体を抽出する。試料を水を満たした容器に

投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾斜させて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20 ～ 30 回程度）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体や、主に 4mm 以上の炭化材、土器片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）などを参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。炭化材と土器片は、常温乾燥後の重量と最大径を表示する。分析後は、抽出物を種類毎に容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表 2 に示す。各住居跡のカマド試料からは、草本 5 分類群（イネ、ヒエ近似種、コムギ、オヒシバ、キク科）32 個の種実遺体と、炭化材 2.0g、土器片 1 個が検出された。なお、1 号住カマドに確認されたオヒシバの種子 1 個、キク科の果実 1 個は、炭化が認められないことから後代の混入と判断され、解析より除外している。

炭化した種実遺体は、破損や泥の付着などにより極めて保存が不良である。炭化種実は、栽培種のイネの穎の破片が 1 号住カマドから 24 個、胚乳が 5 号住カマドの焼土から 1 個と、ヒエ近似種の穎・胚乳が 4 号住カマドから 1 個、コムギの胚乳が 1 号住カマドから 1 個、4 号住カマドから 3 個の、計 30 個が確認された。

炭化材は全ての試料から確認され、5 号住カマド 炭で最も多い。土器片は 1 号住カマドから 1 個確認された。

以下に、本分析で確認された炭化種実の形態的特徴を記す。

・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

胚乳、穎（果）は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。胚乳は基部を欠損しており、残存長 4.47mm、幅 3.38mm、厚さ 2.82mm を測る。基部の一端に胚が脱落した斜切形の凹部があるが、出土胚乳には確認されない。胚乳表面はやや平滑で、2 ～ 3 本の縦隆条がある。

胚乳を包む穎（果）は、完形ならば長さ 6 ～ 7.5mm、幅 3 ～ 4mm、厚さ 2mm 程度。基部に径 1.0mm 程度の斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く脆く、表面には顆粒状突起が縦列する。破片の大きさは、最大 2.3mm 程度。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）

胚乳は炭化しており黒色、長さ 1.5mm、幅 1.3mm、厚さ 0.8mm 程度のやや偏平な楕円体。背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に、長さ 1.2mm、最大幅 0.7mm 程度の馬蹄形の胚の凹みがある。表面は粗面。実体顕微鏡下観察では、栽培種のヒエと周辺域に生育していた可能性があるイヌビエなどの野生種との厳密な区別は困難であるため、ヒエ近似種としている。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.） イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色、楕円体。1 号住カマドより出土した胚乳は頂部をやや欠損しており、残存長 4.67mm、残存幅 3.96mm、厚さ 2.96mm を測る。腹面は、正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は、基部正中線上に長さ 1mm、幅 1.5mm 程度の胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面は粗面で、微細な粒状模様がある。

4. 考察

平安時代の住居跡のカマド埋積物からは、栽培種のイネ、ヒエ（近似種）、コムギの炭化種実が確認された。これらの炭化穀粒は、いずれも胚乳が食用される植物質食糧であることから、当該期の食利用が示唆される。また、種実の保存状態からカマド内で炭化したことが想定されるほか、1 号住カマドではイネの穎のみが検出されることから、可食できない部位が燃料材として利用された可能性もある。この点については、上述した炭化材の樹種同定やイネ科植物に由来する珪化組織片の産状などと合せた検証が必要である。

なお、本遺跡に隣接する兄川河床遺跡では、植物遺体が包含された堆積層が確認されている。自然科学分析調

査の結果によれば、この堆積層は古代～中世前半頃に相当すると推定され、イネ、コムギ、アワ、エゴマ、ナス属などの種実遺体や、栽培種のイネ属やソバ属の花粉化石が検出されている。この結果から、当該期にはこれらの植物質食料の利用や栽培も想定され、さらに同様の堆積物を対象とした調査による資料の蓄積が期待される。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

小林謙一 ,2008, 縄文土器の年代(東日本). 小林達雄先生古希記念企画　総覧　縄文土器 . 株式会社アム・プロモーション ,896-903.

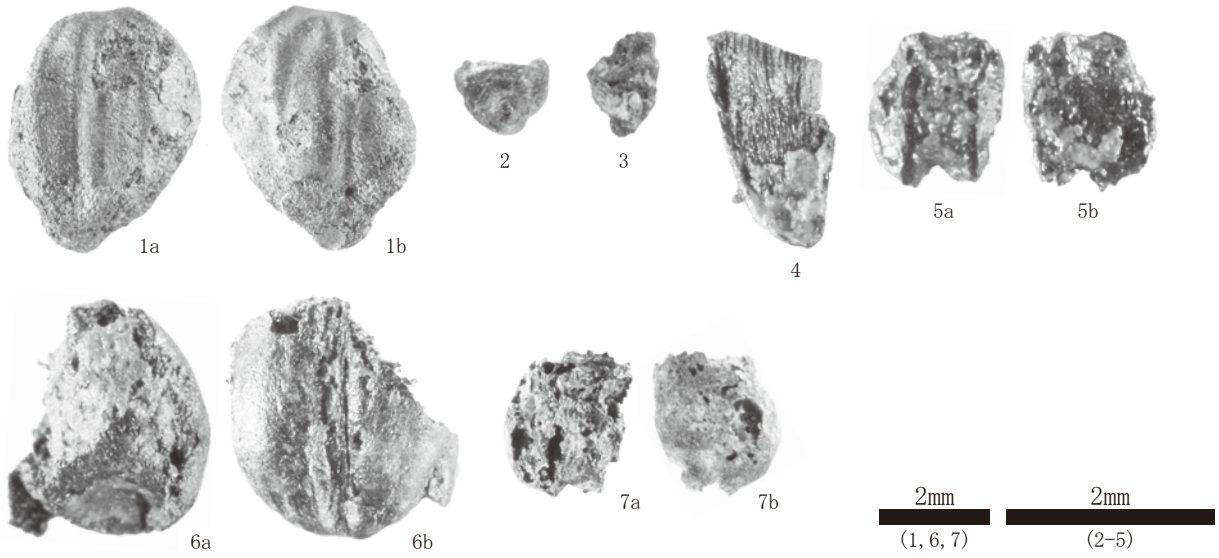
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

吉川　稔・平川一臣 ,1985, Ⅰ　地形分類図 . 土地分類基本調査　御岳昇仙峡 , 山梨県企画管理局土地水対策課 ,15-25.



1. イネ　胚乳(C区5号住;カマド　焼土)
2. イネ　穎(基部)(C区1号住;カマド　炭)
3. イネ　穎(基部)(C区1号住;カマド　炭)
4. イネ　穎(C区1号住;カマド　炭)
5. ヒエ近似種　胚乳(C区4号住;カマド　炭)
6. コムギ　胚乳(C区1号住;カマド　炭)
7. コムギ　胚乳(C区4号住;カマド　炭)

第246図　種実遺体

第４９表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	測定機関 Code No.
C区1号住 スミ2 炭化材(クヌギ節)	1190 ± 20	−24.13 ± 0.49	1187 ± 24	σ	cal	AD	782	−	cal	AD	789	0.103	IAAA−112755
					cal	AD	810	−	cal	AD	849	0.491	
					cal	AD	851	−	cal	AD	883	0.406	
				2 σ	cal	AD	774	−	cal	AD	895	0.985	
					cal	AD	926	−	cal	AD	935	0.015	
C区2号住 炭No.2 炭化材(ヤマグワ)	1160 ± 20	−18.37 ± 0.39	1163 ± 23	σ	cal	AD	783	−	cal	AD	788	0.055	IAAA−112756
					cal	AD	813	−	cal	AD	844	0.293	
					cal	AD	858	−	cal	AD	896	0.502	
					cal	AD	924	−	cal	AD	939	0.150	
				2 σ	cal	AD	779	−	cal	AD	794	0.078	
					cal	AD	799	−	cal	AD	900	0.715	
					cal	AD	918	−	cal	AD	962	0.207	
C区4号住カマド 炭 炭化材(−)	1170 ± 30	−25.98 ± 0.33	1171 ± 25	σ	cal	AD	782	−	cal	AD	789	0.085	IAAA−113357
					cal	AD	810	−	cal	AD	848	0.429	
					cal	AD	854	−	cal	AD	892	0.486	
				2 σ	cal	AD	776	−	cal	AD	899	0.889	
					cal	AD	918	−	cal	AD	950	0.111	
C区6号住カマド 焼土 炭化材(−)	1100 ± 30	−28.41 ± 0.32	1096 ± 26	σ	cal	AD	898	−	cal	AD	920	0.359	IAAA−113358
					cal	AD	945	−	cal	AD	985	0.641	
				2 σ	cal	AD	890	−	cal	AD	995	0.984	
					cal	AD	1,006	−	cal	AD	1,012	0.016	
C区集石土坑1号 炭 炭化材(クヌギ節)	5010 ± 30	−27.93 ± 0.39	5013 ± 29	σ	cal	BC	3,913	−	cal	BC	3,878	0.347	IAAA−112757
					cal	BC	3,804	−	cal	BC	3,760	0.481	
					cal	BC	3,741	−	cal	BC	3,729	0.086	
					cal	BC	3,726	−	cal	BC	3,714	0.086	
				2 σ	cal	BC	3,942	−	cal	BC	3,857	0.395	
					cal	BC	3,819	−	cal	BC	3,707	0.605	
C区12号溝 炭1 炭化材(ヒノキ科)	1470 ± 20	−20.68 ± 0.48	1469 ± 24	σ	cal	AD	570	−	cal	AD	619	1.000	IAAA−112758
				2 σ	cal	AD	554	−	cal	AD	642	1.000	
C区88号土坑 炭 炭化材(サクラ属)	1190 ± 20	−21.73 ± 0.38	1188 ± 23	σ	cal	AD	782	−	cal	AD	789	0.105	IAAA−112759
					cal	AD	810	−	cal	AD	849	0.498	
					cal	AD	851	−	cal	AD	882	0.397	
				2 σ	cal	AD	774	−	cal	AD	894	0.996	
					cal	AD	929	−	cal	AD	932	0.004	

第５０表　種実遺体分析結果

			C区				備考
			1号住	4号住	5号住		
			カマド	カマド	カマド	カマド	
種類名	部位	状態	炭	炭	炭	焼土	
炭化種実							
イネ	穎	基部	5	−	−	−	
		破片	19	−	−	−	
	胚乳	完形	−	−	−	1	
ヒエ近似種	胚乳	完形	−	1	−	−	
コムギ	胚乳	完形	1	1	−	−	
		破片	−	2	−	−	
炭化していない種実							
オヒシバ	種子	完形	1	−	−	−	
キク科	果実	完形	1	−	−	−	
炭化材			0.16	0.73	0.87	0.28	乾燥重量[g]
			10.8	9.4	12.5	9.4	最大径[mm]
土器片			1	−	−	−	
			4.69	−	−	−	乾燥重量[g]
			30.0	−	−	−	最大径[mm]
分析残渣							
植物片			0.92	0.12	−	0.04	乾燥重量[g]
炭化材主体			−	0.78	0.13	0.27	乾燥重量[g]
砂礫主体			37.94	73.06	4.92	79.95	乾燥重量[g]
分析量			1001.96	1007.43	101.01	1001.30	重量[g]

第７節　上コブケ遺跡Ｄ区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上コブケ遺跡Ｄ区（山梨県山梨市南地内）は、笛吹川支流である兄川と弟川に挟まれた段丘上に立地する。本遺跡の発掘調査で、これまでに縄文時代、古墳時代および平安時代の遺跡が確認されており、本調査区からは平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑などが検出されている。

本報告では、上コブケ遺跡Ｄ区より検出された遺構の年代、古植生などの検討を目的として、自然科学分析を実施した。

Ⅰ.遺構の年代

1. 試料

試料は、発掘調査により検出された住居跡や溝、土坑などから出土した炭化材および木材８点である。住居跡は、６号住、10 号住および 13 号住が対象とされ、覆土およびカマド内から出土した炭化材が放射性炭素年代測定試料に供されている。また、溝は２号溝と４号溝、土坑は 14 号土坑、22 号土坑、46 号土坑が対象とされ、それぞれ覆土中から出土した炭化材・木材が供されている。

これらの試料の観察では、６号住（C-1）が長さ約 6cm、幅約 2cm、厚さ約 3cm の炭化材片、10 号住（カマド 遺物直下炭化材）が長さ約 2cm、幅約 1.2cm、厚さ約 0.6cm の炭化材片、13 号住（カマド C-1）が長さ約 1.5cm、幅約 1cm、厚さ約 0.6mm の炭化材片、２号溝が長さ約 2.0cm、幅約 0.5cm、厚さ約 1.3cm の炭化材片、４号溝（C-2）が長さ約 1.8cm、幅約 0.7cm、厚さ約 1.8cm の炭化材片、14 号土坑（C-1）が長さ約 2.0cm、幅・厚さ約 0.7cm の炭化材片、22 号土坑（W-1）が長さ約 1.5cm、幅約 1mm、厚さ約 1.5cm の柾目板状を呈する木片、46 号土坑（C-1）が長さ約 1.2cm、幅 0.8cm、厚さ 1.2cm の炭化材片が確認された。測定には、観察所見を参考に、観察範囲内の最外側年輪を含む部位の数年輪分を試料として供した。なお、小破片の炭化材と 22 号土坑の木片については、全量を測定対象としている。

2. 分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

第５１表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

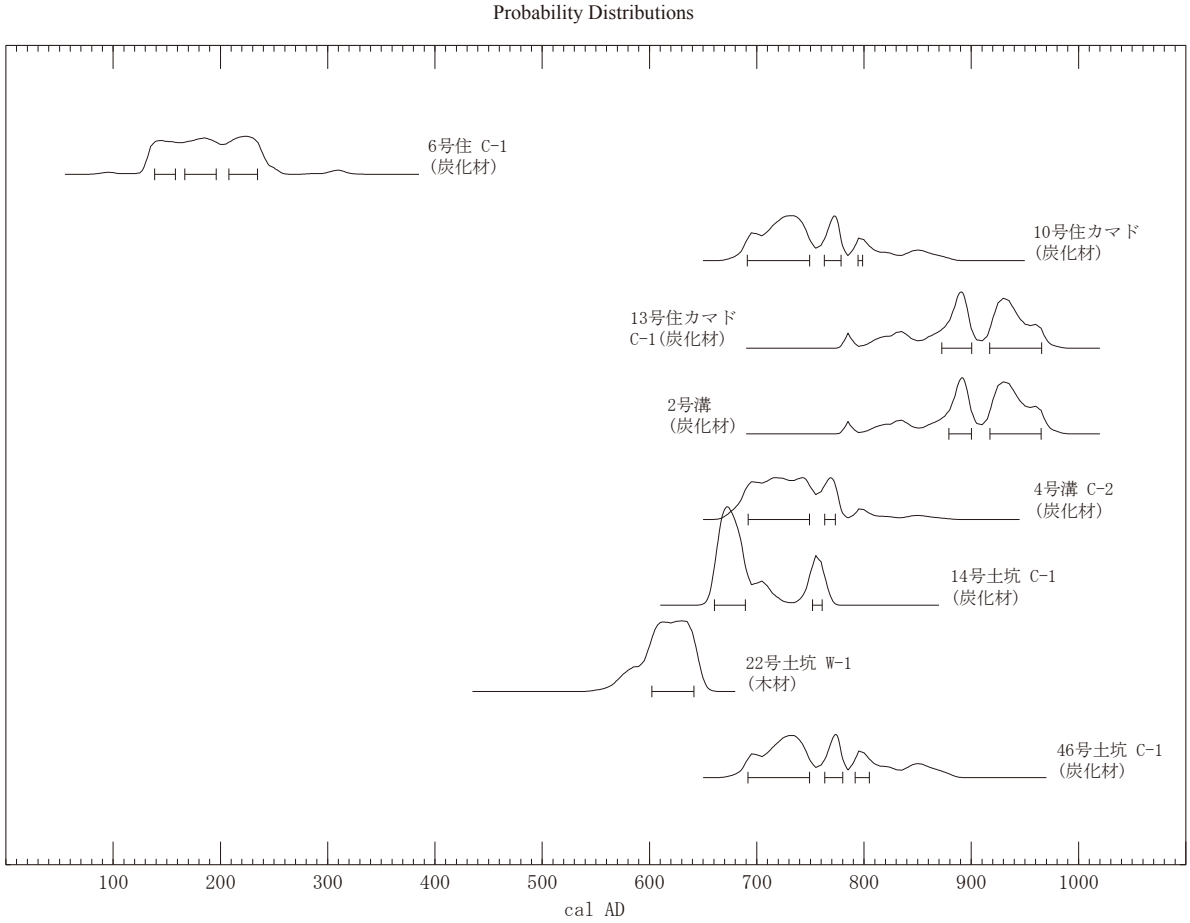
試　料	測定年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	Code.No.
6 号住 C–1 (炭化材)	1,820 ± 20	–24.04 ± 0.38	1,819 ± 24	σ	cal AD 139 – cal AD 158	cal BP 1,811 – 1,792	0.239	IAAA–123594
				σ	cal AD 167 – cal AD 196	cal BP 1,783 – 1,754	0.392	
				σ	cal AD 208 – cal AD 235	cal BP 1,742 – 1,715	0.369	
				2 σ	cal AD 128 – cal AD 249	cal BP 1,822 – 1,701	1.000	
10 号住カマド遺物直下炭化材 (炭化材)	1,250 ± 20	–29.43 ± 0.35	1,246 ± 23	σ	cal AD 691 – cal AD 749	cal BP 1,259 – 1,201	0.759	IAAA–123595
				σ	cal AD 763 – cal AD 779	cal BP 1,187 – 1,171	0.208	
				σ	cal AD 795 – cal AD 799	cal BP 1,155 – 1,151	0.033	
				2 σ	cal AD 683 – cal AD 828	cal BP 1,267 – 1,122	0.936	
				2 σ	cal AD 838 – cal AD 865	cal BP 1,112 – 1,085	0.064	
13 号住カマド C–1 (炭化材)	1,150 ± 20	–22.73 ± 0.30	1,149 ± 22	σ	cal AD 872 – cal AD 900	cal BP 1,078 – 1,050	0.393	IAAA–123596
				σ	cal AD 917 – cal AD 965	cal BP 1,033 – 985	0.607	
				2 σ	cal AD 782 – cal AD 789	cal BP 1,168 – 1,161	0.023	
				2 σ	cal AD 809 – cal AD 849	cal BP 1,141 – 1,101	0.131	
				2 σ	cal AD 853 – cal AD 971	cal BP 1,097 – 979	0.845	
2 号溝 (炭化材)	1,150 ± 20	–23.96 ± 0.28	1,146 ± 22	σ	cal AD 879 – cal AD 900	cal BP 1,071 – 1,050	0.330	IAAA–123597
				σ	cal AD 917 – cal AD 965	cal BP 1,033 – 985	0.670	
				2 σ	cal AD 782 – cal AD 789	cal BP 1,168 – 1,161	0.015	
				2 σ	cal AD 810 – cal AD 847	cal BP 1,140 – 1,103	0.102	
				2 σ	cal AD 856 – cal AD 973	cal BP 1,094 – 977	0.882	
4 号溝 C–2 (炭化材)	1,260 ± 20	–25.19 ± 0.34	1,260 ± 24	σ	cal AD 692 – cal AD 749	cal BP 1,258 – 1,201	0.852	IAAA–123598
				σ	cal AD 763 – cal AD 773	cal BP 1,187 – 1,177	0.148	
				2 σ	cal AD 671 – cal AD 782	cal BP 1,279 – 1,168	0.948	
				2 σ	cal AD 789 – cal AD 811	cal BP 1,161 – 1,139	0.043	
				2 σ	cal AD 846 – cal AD 855	cal BP 1,104 – 1,095	0.009	
14 号土坑 C–1 (炭化材)	1,320 ± 20	–24.41 ± 0.26	1,318 ± 22	σ	cal AD 660 – cal AD 689	cal BP 1,290 – 1,261	0.849	IAAA–123599
				σ	cal AD 752 – cal AD 761	cal BP 1,198 – 1,189	0.151	
				2 σ	cal AD 655 – cal AD 717	cal BP 1,295 – 1,233	0.789	
				2 σ	cal AD 743 – cal AD 768	cal BP 1,207 – 1,182	0.211	
22 号土坑 W–1 (木片)	1,440 ± 20	–24.64 ± 0.43	1,444 ± 24	σ	cal AD 602 – cal AD 641	cal BP 1,348 – 1,309	1.000	IAAA–123600
				2 σ	cal AD 573 – cal AD 650	cal BP 1,377 – 1,300	1.000	
46 号土坑 C–1 (炭化材)	1,240 ± 20	–26.18 ± 0.46	1,242 ± 24	σ	cal AD 692 – cal AD 749	cal BP 1,258 – 1,201	0.683	IAAA–123601
				σ	cal AD 763 – cal AD 780	cal BP 1,187 – 1,170	0.201	
				σ	cal AD 792 – cal AD 805	cal BP 1,158 – 1,145	0.115	
				2 σ	cal AD 686 – cal AD 830	cal BP 1,264 – 1,120	0.902	
				2 σ	cal AD 836 – cal AD 868	cal BP 1,114 – 1,082	0.098	

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差σ、2 σ（σは統計的に真の値が 68%、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果および考察

出土炭化材及び木片の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、6 号住（C-1）が 1,820 ± 20yrBP、10 号住（カマド 遺物直下炭化材）が 1,250 ± 20yrBP、13 号住（カマド C-1）が 1,150 ± 20yrBP、2 号溝が 1,150 ± 20yrBP、4 号溝（C-2）が 1,260 ± 20yrBP、14 号土坑（C-1）が 1,320 ± 20yrBP、22 号土坑（W-1）が 1,440 ± 20yrBP、46 号土坑（C-1）が 1,240 ± 20yrBP を示す（表 1）。



第２４７図　暦年較正結果(1σ)の確率分布

また、暦年較正結果（σ）は、6 号住（C-1）が calAD 139 – calAD 235、10 号住（カマド 遺物直下炭化材）が calAD 691 – calAD 799、13 号住（カマド C-1）が calAD 872 – calAD 965、2 号溝が calAD 879 – calAD 965、4 号溝（C-2）が calAD 692 – calAD 773、14 号土坑（C-1）が calAD 660 – calAD 761、22 号土坑（W-1）が calAD 602 – calAD 641、46 号土坑（C-1）が calAD 692 – calAD 805 である（表 1）。

各試料より得られた 1 σの暦年代範囲を参考とすると、およそ 2 世紀前半から 3 世紀前半頃の暦年代を示す試料（6 号住）、7 世紀前半頃の暦年代を示す試料（22 号土坑）、7 世紀中頃から 9 世紀初頭までの暦年代を示す試料（10 号住、4 号溝、14 号土坑、46 号土坑）、9 世紀後半から 10 世紀中頃までの暦年代を示す試料（13 号住、2 号溝）とに大きく分けられる（図 1）。なお、測定に供した試料は、芯持丸木状あるいは年輪外側が残存する分割材状の試料は含まれないため、実際の使用年代よりも古い年代を示している可能性がある。そのため、今回の測定結果の評価については、出土遺物から推定される年代観との対照などによる検討が必要と考えられる。

Ⅱ . 古植生

1. 試料

試料は、4 号土坑より採取された土壌 7 点（試料番号 1 ～ 7）である。これらの試料の観察では、いずれも層相（岩層）が類似し、暗褐色～暗灰褐色を呈する泥（粘土～シルト）からなる。なお、試料番号 4 および 6 には、亜角～亜円状を呈する暗黄～黄灰色泥の偽礫が混じる。

本分析では、上記した試料のうち土壌 3 点（試料番号 2,4,6）を対象に、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。

2. 分析方法

（1）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛 , 比重 2.3）による有機物の分離、

フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

（2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム , 比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個 /g 未満は「＜ 100」と表示する。合計は各分類群の丸める前の数字を合計した後に 100 単位として表示している。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

（1）花粉分析

結果を第 52 表に示す。4 号土坑の 3 試料（試料番号 2,4,6）は、いずれも花粉化石の産出状況が悪く、わずかに検出された花粉化石の保存状態も悪い。検出された花粉化石は、木本花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科が、それぞれ数個検出される。シダ類胞子も十数個と非常に少ない。

また、分析残渣も少なく、残渣中には微細な炭化植物片（いわゆる微粒炭）が含まれるものの、母植物を推定できる特徴を有するものは認められない。

（2）植物珪酸体分析

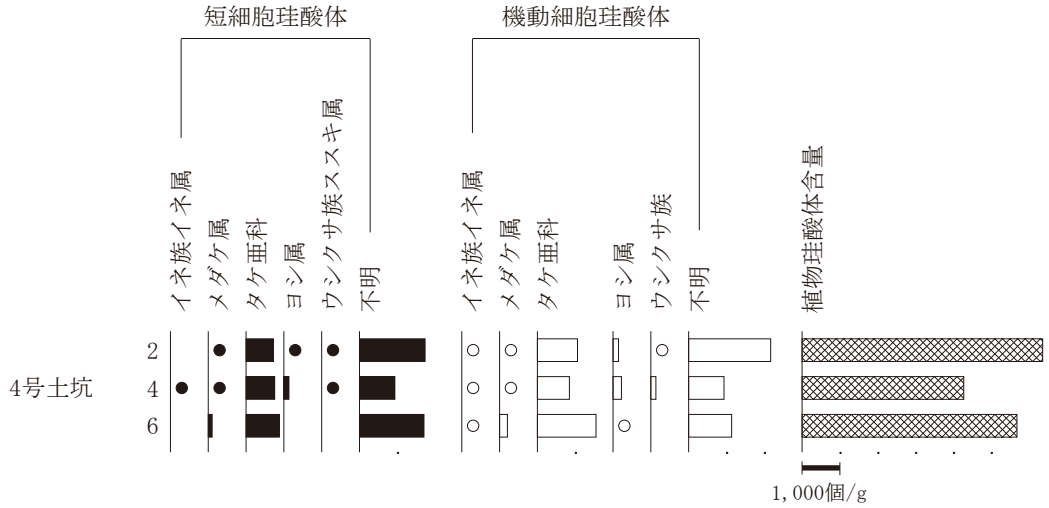
結果を第 53 表、第 259 図に示す。4 号土坑の 3 試料（試料番号 2,4,6）からは、植物珪酸体が検出されるものの、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど、いずれも保存状態が悪い。

第５２表　花粉分析結果

	4 号土坑		
分類群	2	4	6
木本花粉			
ツガ属	2	–	–
コナラ属アカガシ亜属	2	–	–
草本花粉			
イネ科	–	–	2
クワ科	–	1	–
ヨモギ属	–	1	–
キク亜科	–	–	1
シダ類胞子			
イノモトソウ属	–	1	–
他のシダ類胞子	14	6	13
合　計			
木本花粉	4	0	0
草本花粉	0	2	3
シダ類胞子	14	7	13
合計	18	9	16

第５３表　植物珪酸体含量　（個 /g）

	4 号土坑		
分類群	2	4	6
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	–	<100	–
メダケ属	<100	<100	100
タケ亜科	700	800	900
ヨシ属	<100	100	–
ウシクサ族ススキ属	<100	<100	–
不明	1,700	900	1,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	<100	<100	<100
メダケ属	<100	<100	200
タケ亜科	1,100	800	1,600
ヨシ属	100	200	<100
ウシクサ族	<100	100	–
不明	2,200	900	1,100
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,700	2,000	2,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,700	2,300	3,000
植物珪酸体含量	6,400	4,300	5,700



乾土1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

第248図　植物珪酸体含量

植物珪酸体含量は、試料番号 2 が 6,400 個 /g、試料番号 4 が 4,300 個 /g、試料番号 6 が 5,700 個 /g である。植物珪酸体の産状は 3 試料ともに類似し、メダケ属を含むタケ亜科の含量が高い。この他、ヨシ属やススキ属などが検出されるが、その含量は低い。また、栽培植物のイネ属の葉部に由来する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出されるが、いずれも 100 個未満 /g である。

4. 考察

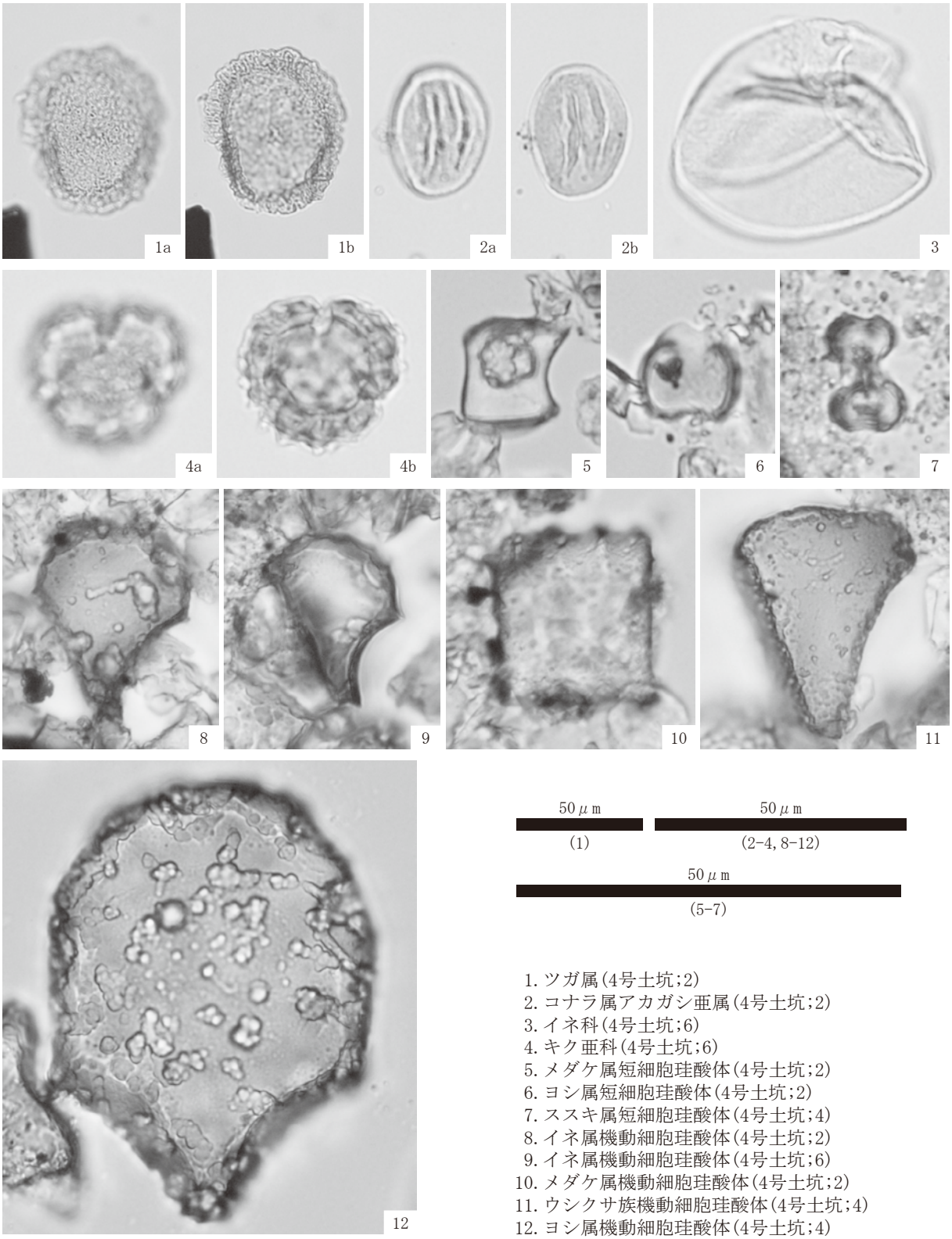
4 号土坑埋積物に相当する 3 試料（試料番号 2,4,6）は、いずれも花粉化石の産出が少なく、定量解析による古植生の推定には至らなかった。花粉化石やシダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という 2 つの可能性があげられる。3 試料より検出された花粉化石は、いずれも花粉外膜が破損・溶解する状況であり、また分解に強い種類や分解の影響を受けても同定可能な種類が多い。このような状況から、土坑の埋積過程で取り込まれた花粉は、経年変化などの影響により分解・消失した可能性がある。

なお、Ⅰ章の放射性炭素年代測定では、古代頃を主体とする年代が得られている。本遺跡周辺では、兄川河床遺跡に確認された腐植質な堆積物を対象とした自然科学分析により、およそ古代～中世末頃に相当すると考えられる花粉化石群集および種実遺体群が得られている。これらの産状から推定された当時の古植生は、周辺の山地には、ナラ類（コナラ亜属）からなる落葉広葉樹林が分布し、モミ属なども生育していた。遺跡周辺には、広葉樹を主体とする川沿いや林縁などに明るい林地を形成する多くの分類群が生育したと推定されている。

また、植物珪酸体分析では、メダケ属を含むタケ亜科をはじめとして、ススキ属やヨシ属が確認された。この結果から、調査地周辺の明るく開けた場所には、タケ亜科やススキ属を含むイネ科をはじめとして、花粉化石に認められたクワ科、ヨモギ属、キク亜科などが生育しており、周辺の湿潤な場所にはヨシ属も生育していたことが推定される。

引用文献

近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.
中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.
島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.



1. ツガ属(4号土坑;2)
2. コナラ属アカガシ亜属(4号土坑;2)
3. イネ科(4号土坑;6)
4. キク亜科(4号土坑;6)
5. メダケ属短細胞珪酸体(4号土坑;2)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(4号土坑;2)
7. ススキ属短細胞珪酸体(4号土坑;4)
8. イネ属機動細胞珪酸体(4号土坑;2)
9. イネ属機動細胞珪酸体(4号土坑;6)
10. メダケ属機動細胞珪酸体(4号土坑;2)
11. ウシクサ族機動細胞珪酸体(4号土坑;4)
12. ヨシ属機動細胞珪酸体(4号土坑;4)

第２４９図　花粉化石･植物珪酸体

第6章　兄川河床遺跡の調査

第1節　国道140号西関東連絡道路建設に伴う兄川河床遺跡の現地調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的

西関東自動車道建設に伴う橋脚設置工事予定地周辺では、過去の調査で後期更新世の堆積層よりナウマンゾウ化石が確認されていることから、今回の工事予定地内においても同様の化石の出土が想定される。今回の業務では、化石の出土が想定される堆積層を含めた露頭（土層断面）の地質記載と、今後計画する科学分析に供するサンプルの採取を目的とする。

2. 日程と調査方法

調査は4回(4日)に分けて実施した。日程ならびに作業内容は以下の通りである。採取した試料の一覧は第54表に、断面図の記載は第256～265図に、断面の写真は第267～270図に示す。

・平成22年（2010年）11月22日

3名にて3地点の北面の調査、スケッチを実施。試料10点を採取。

・平成22年（2010年）12月08日

3名にて4地点の南面、北面、西面の調査、スケッチを実施。ナウマン象化石産出層準とみられる層位が露出する。試料39点を採取。

・平成23年（2011年）02月25日

3名にて1点の西面、南面、東面の調査、スケッチを実施、試料23点を採取。

・平成23年（2010年）03月18日

3名にて2地点の北面　西面調査、スケッチを実施、試料10点を採取。

3. 調査結果と層序

(1)　1地点

西面では、幅10m、高さ5mの断面が見られ、中央部に防空壕の跡がみられる。（第256図）。一部に崖錐堆積物が見られる他は、Ⅳ層とした段丘礫層(上ノ田礫層)が見られる。本層は、全体的には淘汰の悪い砂礫層で、基質は安山岩片、石英、長石、輝石類を含む淘汰の悪い砂層。まれに黒雲母を含む。礫は亜角礫～亜円礫。礫径は様々で、大きなもので50cm程度、礫種で最も多いのは輝石安山岩で新鮮な亜角礫が多い。多孔質な安山岩も若干みられ、やや風化する。凝灰質な安山岩、安山岩質な軽石？も含むが、粘土化が著しい。まれに強度に風化して、くされ礫化した閃緑岩、花崗岩を含む。ところどころに砂の薄層を挟み、弱い流理構造がみられる。層厚10～20cmのレンズ状の砂層として認められる場所もある。葉理は現在の扇状地地形に対してほぼ平行である(若干南に傾く)。全体をⅣ層としたが、対比の際の特に鍵層になると思われる層を、Ⅳ-1層として区別した。Ⅳ-1層は灰褐色の細～中礫まじりのシルト質砂で、上下を軽石層(Pm3)で挟まれる。シルト質砂層内にも軽石を含む。軽石は灰白色で、発泡はやや悪く、含まれる有色鉱物は輝石を主とする。砂層を挟む上下の軽石層は、層厚が厚さ0～10cmと変化し、上下層の区別がつかない場所もあることから一連のものと考えられる。なお、本断面では、軽石層は3層準みられ、Pm1～Pm3とした。Ⅳ-1層に含まれる。最下位のPm3が側方への連続性も良く、最も明瞭である。上位のPm2、Pm1ともに質感がPm3と同質である点、Pm2、Pm1の直上には葉理がみられる砂層があること、砂層の中にも若干の軽石を含むことから、これらはPm3の再堆積の可能性がある。

東面では、幅10m、高さ3mの断面がみられる（第257図）。安山岩質の淘汰の悪い礫層の上に盛土がのる。礫

層の上部が土壌化する。標高からみて 2、3 地点でみられるⅡ層（窪平礫層）に相当すると思われるが、崖錐堆積物と層相が酷似しており、Ⅰ層との境界は不明瞭であることから、漸移的に変化しているとみられる。

南面では、高さ 6m、幅 7m の断面がみられる（第 258 図）。東半分が崖錐堆積物（Ⅰ層とした）に削剥される。西側には西面から続くⅣ層が観察される。層理面は西に 10 度傾き、いくつかの場所で逆級化構造がみられる。西面から続くⅣ-1 層も観察される。最下層は、西面より 1m 低い。下部には基盤である山口軽石層（Ⅴ層）がみられる。

(2) 2 地点

北面は高さ 4m、幅 14m の断面がみられる（第 259 図）。基盤の山口礫層（Ⅴ層）が西端でみられる。青灰色の淘汰の悪い砂礫層である。Ⅴ層は、多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石、基質と同質なくされ礫を含み、角礫～亜角礫が多い。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石などを含み、礫とほぼ同質である。礫には配列の方向性は認められない。

Ⅱ層は、輝石安山岩からなる淘汰の悪い砂礫層（窪平礫層）である。1m 近い巨礫も含む。亜角礫～亜円礫であり、配列の方向性はない。基質は摩耗した安山岩片、長石、石英などにより構成される。上部は土壌化して暗色となり、粘土化しており、Ⅱ-1 層、Ⅱ-3 層に分ける。3 地点の同層と比べると礫の円磨度が良く、粒径も小さい。

0 層は盛土で、タイル、コンクリートなどを含む。図 4 中の 10-14m 付近の砂質シルト層や礫層（0 層？）はコンクリートなどを含まないが、土質からみて盛土であろうと思われる。

西面は、高さ 4m、幅 8m の断面である（第 260 図）。北面の西側と層相はほぼ同じであるが、Ⅱ-1 層とⅡ-3 層との間に弱い葉理がみられ、亜円小礫と粗粒砂を主とする層が認められたため、Ⅱ-2 層として区分した。

(3) 3 地点

北面は、幅 15m、高さ 7m の断面がみられる（第 261 図）。基盤の山口礫層（Ⅴ層）がトレンチ底より高さ約 1m までみられ、これを覆うⅡ層は 1、2 地点でみられる礫層（窪平礫層）に相当する。1、2 地点と比べて長径 1m 以上の巨礫を含むなど、礫が大型で角ばったものが多い特徴がある。0 層は盛土で、タイル、コンクリート、ビニールなどを含む。

(4) 4 地点

4 地点では、ゾウの化石が検出された層準である請地礫層がみられる（Ⅲ層とする）。Ⅲ層は、層相変化が大きく、層界もはっきりしているため、細かく分層する。

南面は幅 14m、高さ 4.5m で、基底には山口軽石層（Ⅴ層）が東側にみられる（第 262 図）。

Ⅲ-7 層は淘汰の悪い砂礫層である。基質には石英、長石、岩片を含み、黒雲母を少量含むのが特徴的である。礫は亜円礫で、礫種は大部分が安山岩であり、閃緑岩、花崗岩も含む。大きな礫は人頭大。花崗岩のくされ礫を含む。Ⅲ-1 層との境界は、西側では不明瞭、西面では層界不明（護岸工事に伴う撹乱の影響か？）となる。礫に配列の方向性は見られない。

Ⅲ-6 層は、黄褐色粗粒砂と黒褐色腐植質砂質シルト層との互層。黄褐色粗粒砂の中にレンズ状の葉理が発達し、その中に腐植層を挟む。最下部は、黄褐色の細礫～層粒砂である。

Ⅲ-5 層は黒褐色腐植質砂質シルトで、細かな植物遺体含む。

Ⅲ-4 は黄褐色～灰褐色の細礫～粗粒砂で、一部に弱い葉理構造がみられる（主に下部）。砂分はⅢ-1 層の基質に類似する。中礫を含み、扇状地側では細礫が多く、無層理である。

Ⅲ-3 層は暗褐色砂質シルト。上部は糸根状の酸化鉄含み、下部は一部グライ化する。砂分はⅢ-1 層の基質に似ており、花崗岩由来の鉱物を含む。細～中礫を含む

Ⅲ-2 層はⅢ-1 層と同質だが、Ⅲ-3 ～Ⅲ-5 層と思われるブロックを含む。上下の境界は不明瞭。

Ⅲ-1 層の上部 50 ～ 60cm は土壌化し、植物根を含む。淘汰の悪い砂礫層である。基質は石英、長石、岩片を含み、

黒雲母を少量含むのが特徴的である。礫は亜円礫で、礫種は大部分は安山岩で、閃緑岩、花崗岩も含む。大きな礫は人頭大。基底に細礫～粗粒砂からなる比較的淘汰の良い層が西側でみられるが、東側では不明瞭である。西側には基底に弱い斜交葉理がみられる。東側では礫の配列に弱い方向性が認められる。表層は漸移的に土壌化し、耕作土となる。

北側は、工事の関係で、連続した観察ができず、西側 10m と東端 1m についてスケッチを行った（第 263･264 図）。試料はⅢ -3 層の発達が良い東端で採取した。Ⅴ層は青灰色の淘汰の悪い砂礫層で、山口礫層にあたる。

Ⅲ -7 層は南壁でみられる淘汰の悪い砂礫層と同質だが、礫配列に弱い方向性が認められる。Ⅲ -3 層は暗褐色砂質シルトで、腐植を若干含む。分析試料は、北面と東面との境界（右端のさらに約 3m 右側）で採取されている。Ⅲ -1 層も南壁とほぼ同質だが、小河道の切り合い関係が南側よりも明瞭にみられる。また、北側ではⅡ層 (窪平礫層) がみられる。上部 30 ～ 40cm は土壌化し、耕作跡を示唆する植物根を含む。細礫～中礫が多く、1 ～ 3 地点でみられるⅡ層に比べ、粒径が細かく、円磨された礫が多く、細粒である。

(5) 模式断面と環境変遷

今回の調査地点の地質は、河西（1995）、桂田・渡辺（1995）、大村・手塚（1988）、中村（1995）などに述べられている。これらをもとに、今回 4 地点の模式断面図（第 266 図）を作成した。

本地域の基盤をなすのは、今回Ⅴ層とした地層は、鮮新世後期とされる山口軽石層といわれる火山性の岩滓堆積物であり、周辺の山々を構成している堆積物である。Ⅳ層は、上ノ田礫層に対比でき、兄川の上流域にある基盤の花崗岩や閃緑岩のくされ礫を含むのが特徴である。上ノ田礫層は、本地域に小規模に分布することが、桂田･渡辺(1995) により指摘されている。

Ⅲ層は請地礫層に対比され、兄川・弟川が構成する扇状地面を作る。年代測定は中村（1995）により行われているが、その年代値は 4 万年前以上と、放射性炭素年代測定の限界値付近の年代となっている。この礫層の年代を推定することが今後の大きな課題の一つといえよう。また、請地礫層は場所により層相変化が大きいとされているが、今回の調査の結果も、淘汰の悪い砂礫からシルト層まで様々な層相を呈している。兄川の上流部に分布する花崗岩や閃緑岩の礫を含む点や、砂分の中に深成岩起源の黒雲母などの鉱物を含むことが特徴である。ナウマンゾウの化石は本層準から検出されている。層相変化に富み、化石を産した層位の付近には植物遺体を含む層もみられるとのことから、寄せ州のような場所に遺体が流れ着いて埋積したものとみられる。

Ⅱ層は窪平礫層に対比され、Ⅲ層の請地礫層の上部を薄く覆うほか、2 地点や 3 地点のように兄川が大きく削り込んだ谷の中を充填するような分布をしている。表層部は土壌化しているが、3 地点のように土壌化の痕跡が明瞭でない場所もある。なお、桂田・渡辺（1995）は、兄川と弟川に挟まれた地域に分布する請地礫層を覆う礫層を窪平礫層とし、兄川と弟川の形成した谷を充填する砂礫層を完新世堆積物として区別している。しかし、大村･手塚（1988）では、両者を区別せず、窪平礫層として一括している。1 地点～ 4 地点の層相変化をみると、場所による層相に変化はあるが、安山岩の亜角礫を含む淘汰の悪い礫層という点で一致しており、請地礫層の上部を覆う礫層と、谷を充填する礫層とを明瞭に区別できない。このことから、大村･手塚(1988)の見解をとって、両者をまとめて窪平礫層(Ⅱ層) とする。また、Ⅰ層とした崖錐堆積物とⅡ層との境界も不明瞭である。Ⅱ層は場所により、完新世の初頭から現在まで、堆積の時期に差があると見られるが、質感が似ていることなどから、今回の調査のみでは細分は難しい。土壌化の状況からみると、4 地点のⅡ層が最も古く、次に 1 地点と 2 地点も土壌化していることからその次に古く、土壌化の痕跡がみられない 3 地点の礫層が最も新しいと推定される。ただし、3 地点は埋土（O 層）の際に削剥されている可能性もあるので、はっきりしない。地形的に見ると 4 地点の地形面が最も古く、その後兄川が 1 ～ 3 地点の部分を基盤層まで削剥したが、山地からの崖錐（Ⅰ層）や兄川による土砂運搬による堆積の結果、山側から次第に土砂で谷が埋まり、現在の兄川の流路まで移動したと考えられる。

4. 採取試料の自然科学分析

今回の調査において採取された試料より、堆積年代、層位、古環境解析と化石の検出を目的とした分析調査について検討し、分析計画案としてまとめた。今回の調査では、ナウマン象化石包含層の他に、その上下の礫層についても観察する機会を得、多くの試料も採取することが出来た。これら上下の礫層も含めて、当地域における環境変遷を考えることが重要であるが、ここでは特に、化石産出層に比される堆積層が検出された4地点において採取された試料について、自然科学分析計画案をまとめ、本報告の巻末に添付した。

引用文献

河西　学,1995, 山梨市兄川のナウマンゾウ化石を包含する地層のテフラ分析,「山梨県埋蔵文化財調査報告書　第108集　山梨県山梨市兄川」, 山梨県教育委員会・山梨県土木部,13-17.

桂田　保・渡辺拓美,1995, 山梨市兄川ナウマンゾウ化石産地付近の地質,「山梨県埋蔵文化財調査報告書　第108集　山梨県山梨市兄川」, 山梨県教育委員会・山梨県土木部,23-26.

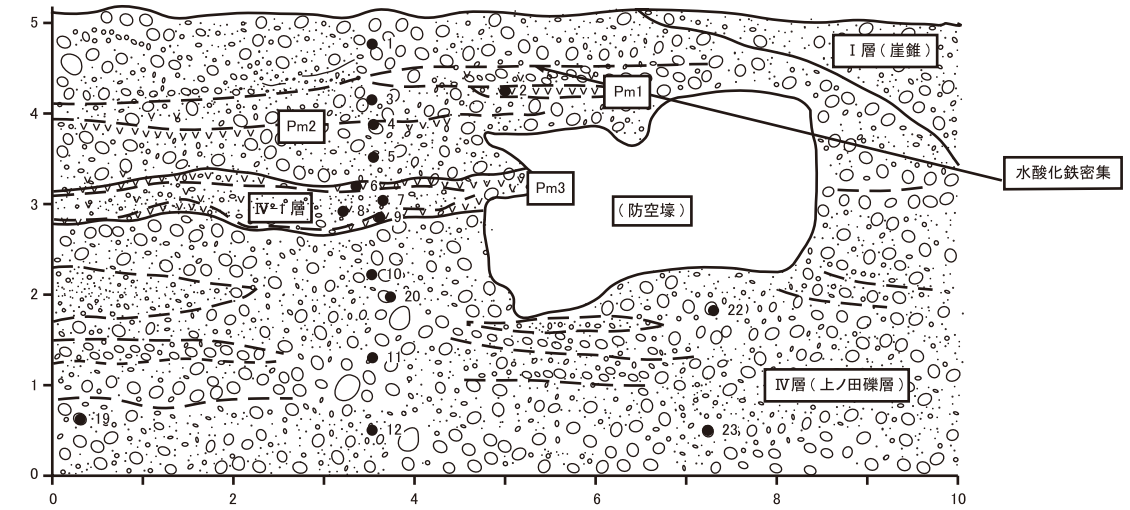
中村俊夫,1995, 山梨市兄川河岸出土したナウマンゾウおよびその出土層の上下層から採取された樹木片の14C年代測定,「山梨県埋蔵文化財調査報告書　第108集　山梨県山梨市兄川」, 山梨県教育委員会•山梨県土木部,18-22.

大村昭三・手塚光彰,1988, 笛吹川流域.「日本の地質4　中部地方I」, 共立出版,173-174.

第５４表　兄川河床遺跡現地調査　採取試料一覧

地点番号	試料番号	質	層　位	備　考
1	1	土壌	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	2	土壌	Ⅳ層	軽石層（Pm1 層）
1	3	土壌	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	4	土壌	Ⅳ層	軽石層（Pm2 層）
1	5	土壌	Ⅳ層	シルト質砂層
1	6	土壌	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	軽石層（Pm3 層）
1	7	土壌	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	砂層
1	8	土壌	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	砂層
1	9	砂礫	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	軽石層（Pm3 層）
1	10	土壌	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	11	土壌	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	12	土壌	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	13	土壌	Ⅳ層	軽石層（Pm2 層）
1	14	土壌	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	礫層基質の砂
1	15	軽石	Ⅳ層（Ⅳ –1 層）	軽石層（Pm3 層）
1	16	材	Ⅰ –1/ Ⅱ –1 層	
1	17	土壌	Ⅰ –1/ Ⅱ –1 層	礫層基質の砂
1	18	土壌	Ⅰ –1/ Ⅱ –1 層	礫層基質の砂
1	19	礫	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	20	礫	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	21	礫	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	22	礫	Ⅳ層	礫層基質の砂
1	23	礫	Ⅳ層	礫層基質の砂
2	1	土壌	0層？	盛り土？砂礫の基質の砂
2	2	土壌	0層？	盛り土？砂礫の基質の砂
2	3	土壌	Ⅱ –1 層	礫層基質の砂
2	4	土壌	0層？	盛り土？砂礫の基質の砂
2	5	材	Ⅱ –1 層	礫層基質の砂
2	6	土壌	0層（盛り土）	盛り土？砂礫の基質の砂
2	7	土壌	Ⅱ –3 層	礫層基質の砂
2	8	土壌	Ⅱ –1 層	礫層基質の砂
2	9	土壌	Ⅱ –3 層	礫層基質の砂
2	10	土壌	0層（盛り土）	盛り土？砂礫の基質の砂
3	1	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂
3	2	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂
3	3	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂
3	4	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂（2 次混入？）
3	5	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂
3	6	土壌	Ⅱ層	礫層基質の砂
3	7	礫	Ⅱ層	
3	8	礫	Ⅱ層	

地点番号	試料番号	質	層　位	備　考
3	9	礫	Ⅴ層	
3	10	礫	Ⅴ層	
4	1	土壌	Ⅲ –3 層	南壁東側の腐植層
4	2	土壌	Ⅲ –4 層	南壁東側の腐植層
4	3	土壌	Ⅲ –6 層	南壁東側の腐植層
4	4	土壌	Ⅲ –6 層	南壁東側の腐植層
4	5	土壌	Ⅲ –3 層	南壁東側の腐植層
4	6	土壌	Ⅲ –4 層	南壁東側の腐植層
4	7	土壌	Ⅲ –6 層	南壁東側の腐植層
4	8	土壌	Ⅲ –6 層	南壁東側の腐植層
4	9	土壌	Ⅲ –3 層	南壁西側の腐植層
4	10	土壌	Ⅲ –4 層	南壁西側の腐植層
4	11	土壌	Ⅲ –5 層	南壁西側の腐植層
4	12	土壌	Ⅲ –6 層	南壁西側の腐植層
4	13	土壌	Ⅲ –6 層	南壁西側の腐植層
4	14	土壌	Ⅲ –3 層	南壁西側の腐植層
4	15	土壌	Ⅲ –4 層	南壁西側の腐植層
4	16	土壌	Ⅲ –5 層	南壁西側の腐植層
4	17	材	Ⅲ –5 層	腐植層中に挟まる木片
4	18	土壌	Ⅲ –5 層	南壁西側の腐植層
4	19	土壌	Ⅲ –6 層	南壁西側の腐植層
4	20	土壌	Ⅲ –3 層	南壁西側の腐植層
4	21	土壌	Ⅲ –4 層	南壁西側の腐植層
4	22	土壌	Ⅲ –5 層	南壁西側の腐植層
4	23	土壌	Ⅲ –1 層	礫層基質の砂
4	24	土壌	Ⅲ –7 層	礫層基質の砂
4	25	土壌	Ⅲ –7 層	礫層基質の砂
4	26	土壌	Ⅲ –7 層	礫層基質の砂（2 次混入？）
4	27	土壌	Ⅲ –3 層	北壁の腐植層
4	28	土壌	Ⅲ –3 層	北壁の腐植層
4	29	土壌	Ⅲ –3 層	北壁の腐植層
4	30	土壌	Ⅲ –3 層	東壁の腐植層
4	31	土壌	Ⅴ層	西壁の礫層（Ⅳ層）中の砂
4	32	礫	Ⅲ層	
4	33	礫	Ⅲ層	
4	34	礫	Ⅲ層	
4	35	礫	Ⅲ層	
4	36	礫	Ⅲ層	
4	37	礫	Ⅲ層	
4	38	礫	Ⅲ層	
4	39	礫	Ⅴ層	



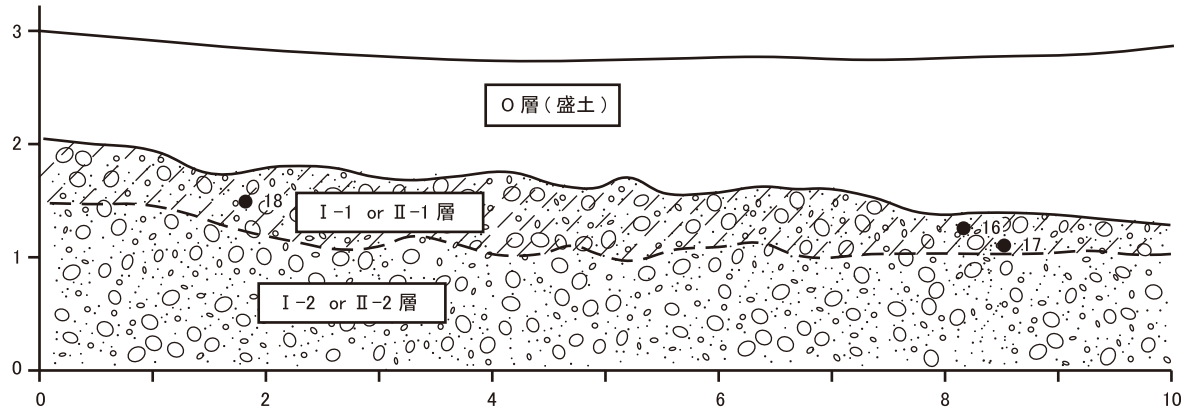
Ⅰ層　：崖錐性堆積物　斜面崩落にともなって堆積した新しい層

Ⅳ層　：全体的には淘汰の悪い砂礫層　基質は安山岩片、石英、長石、輝石類を含む淘汰の悪い砂層。まれに黒雲母を含む。礫は亜角礫～亜円礫。礫径は様々で、大きなもので50cm程度・礫種で最も多いのは輝石安山岩で新鮮な亜角礫が多い。多孔質な安山岩も若干みられやや風化する。凝灰質な安山岩、安山岩質な軽石？を含むが、粘土化が著しい。まれに強度に風化し腐れ礫化した閃緑岩、花崗岩を含む。ところどころに砂の薄層を挟み、弱い流理構造がみられる。層厚10～20cmのレンズ状の砂層として認められる場所もある。葉理は現在の扇状地地形に対してほぼ平行である（若干南に傾く）。対比の際の特に鍵層になると思われる層について、別途特徴を示す。

Ⅳ-1 層：灰褐色の細～中礫まじりのシルト質砂で、上下に軽石層（Pm3）を含む。シルト質砂層内にも軽石を含む。軽石は灰白色で、発泡はやや悪く含まれる有色鉱物は輝石である。砂層上下の軽石層は、層厚が厚さ0～10cmと変化し、上下層の区別がつかない場所もあることから一連のものと考えられる。八ヶ岳起源の軽石層にあたると思われる。

Pm2、Pm1：ともに灰白色の軽石層である。質感がPm3と同質である点、Pm2、Pm1の直上には葉理がみられる砂層があること、砂層の中にも若干の軽石を含むことから、これらはPm3の再堆積の可能性がある。安山岩質の岩片を含むことから、一連の級化作用により、粒径の大きい軽石や多孔質の安山岩片が先に堆積した上に葉理が発達した砂層が堆積した可能性がある。

第２５０図　１地点西面の断面図

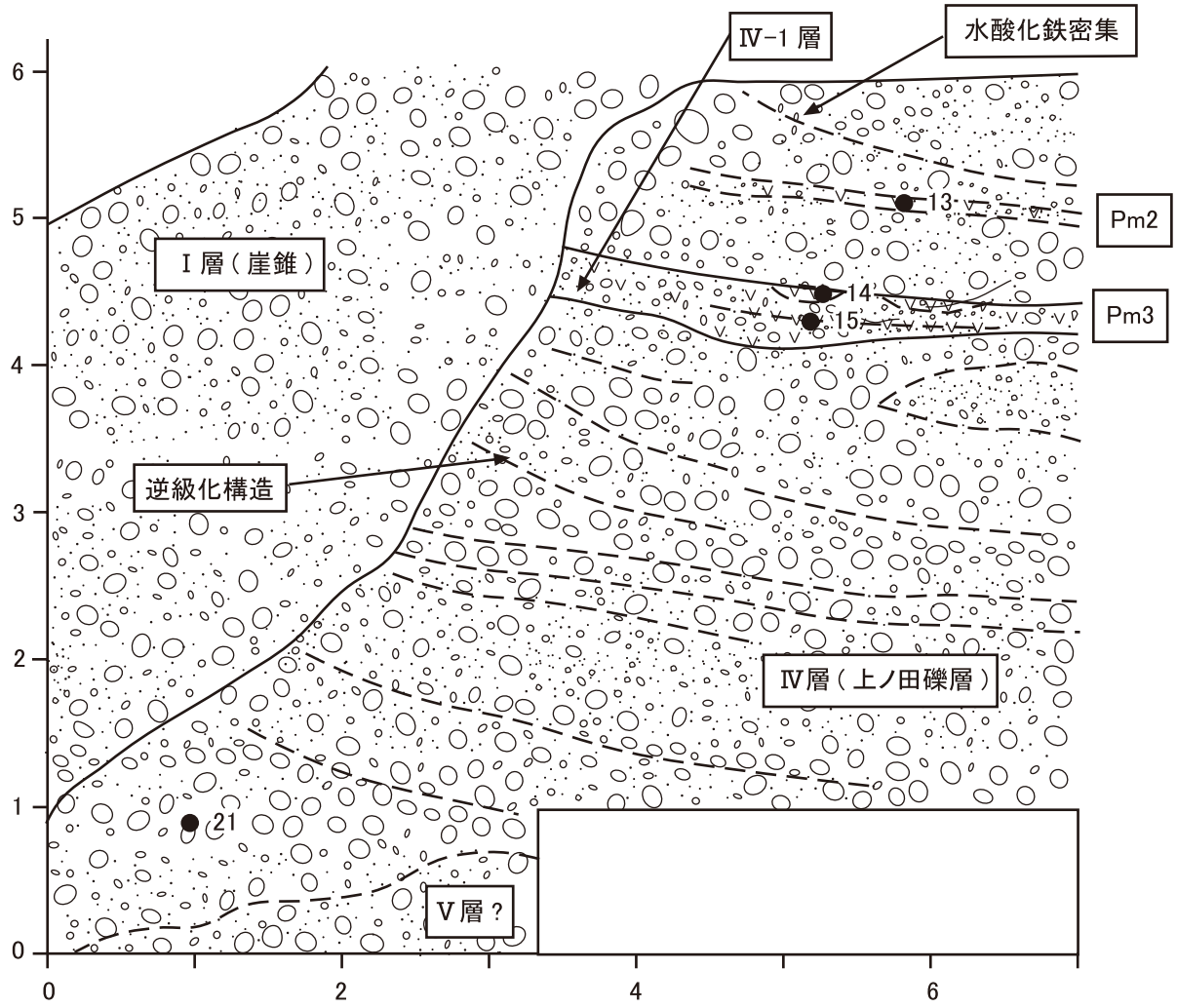


O層　：盛土

Ⅱ-1層：道路を作る前の旧表土
　　ⅠとⅡ層は層相は同質で漸移的に変化している模様

Ⅱ-2層：淘汰の悪い安山岩を主とする砂礫2、3地点でみられるⅡ層とは漸移的に変化

第２５１図　１地点東面の断面図



Ⅰ層　：崖錐性堆積物　斜面崩落にともなって堆積した新しい層

Ⅳ層　：西壁の記載と同様。流理構造がみられ、層理面は西に 10 度ほど落ちる。いくつかの場所で逆級化構造がみられ、扇状地性の洪水堆積物であることがわかる。

Ⅳ-1 層：西壁から続くが、軽石層 Pm3 がレンズ状に分布し、連続性が良くない。また、軽石がⅢ-1 層内に散在して不明瞭な部分も多い。

Pm1 は見られない。Pm2 は砂層中に散在するが、不明瞭である。

Ⅴ層：塊状、無層理の安山岩の巨礫があり、基質が同質の砂礫層であることから、3 地点の基盤層（山口軽石層）に相当すると思われるが、2,3 地点と比べ基質が柔らかい。最上部であるため風化している可能性がある？

基本層序
Ｏ層　盛土

Ⅰ層　山地の斜面崩落土
（崖錐堆積物）

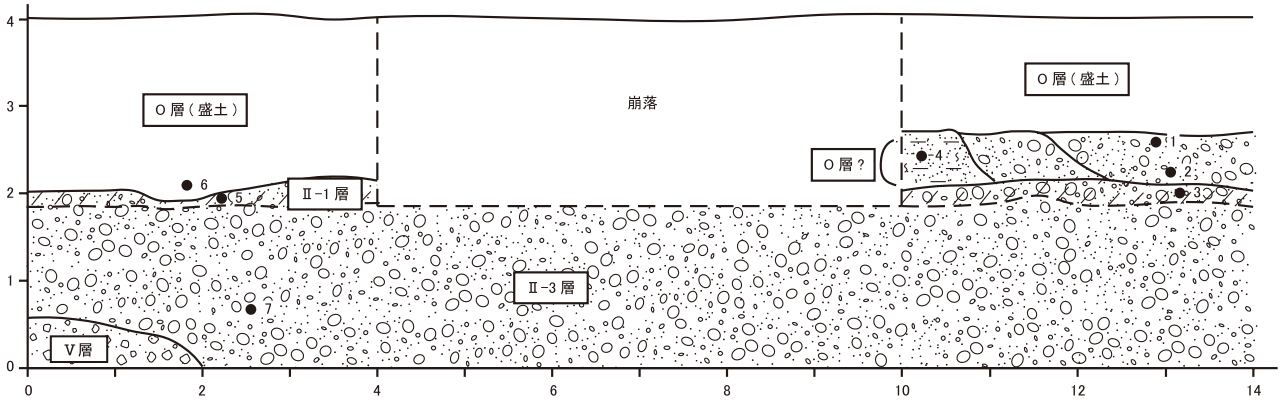
Ⅱ層　淘汰の悪く、基質がルーズな安山岩を主とする礫層
（窪平礫層）

Ⅲ層　淘汰の悪い礫～シルト層
ナウマンゾウ産出層準
（請地礫層）

Ⅳ層　基盤の角礫～亜円礫を含む風化の進んだ礫層
（上ノ田礫層）

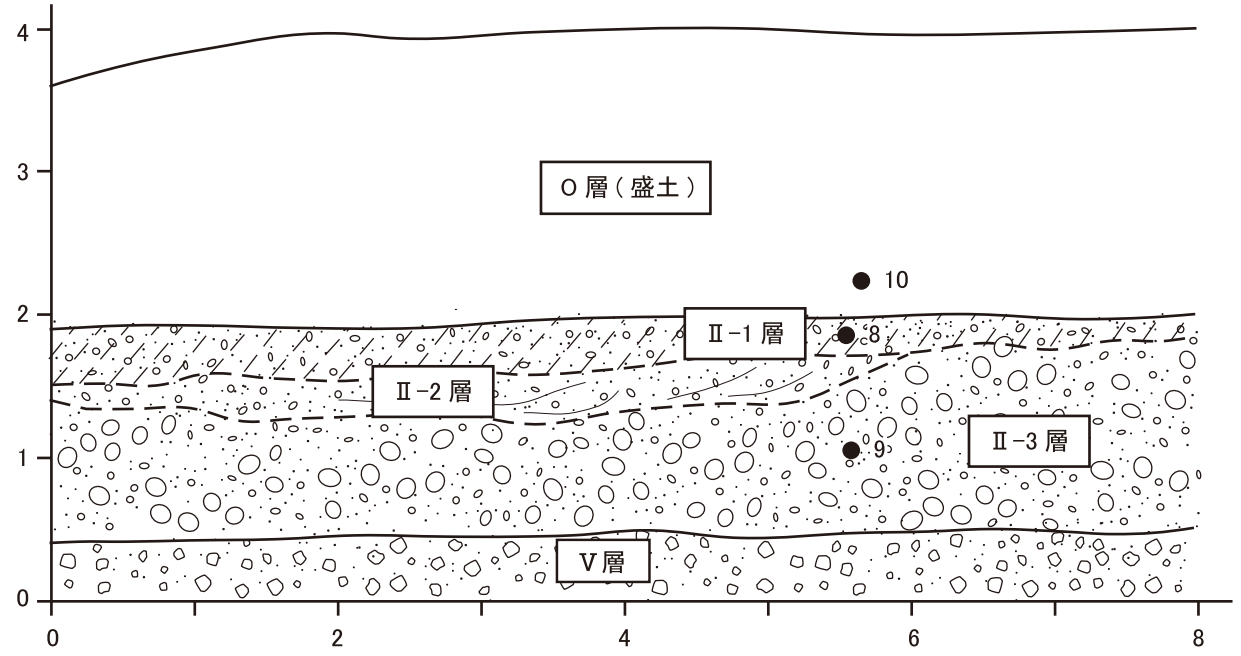
Ⅴ層　安山岩質の凝灰角礫岩
（山口軽石層）

第２５２図　1地点南面の断面図



O層：盛土　タイル、地表面より深度2.7m～2mまでコンクリートなどを含む 10-14m付近の砂質シルト層や礫層はコンクリート等を含まないが、盛土であろうと思われる。
Ⅱ層 ： 褐色の淘汰の悪い砂礫層。 1m 近い巨礫も含む。礫種は輝石安山岩が多い。亜角礫～亜円礫であり、方向性はない。基質は、摩耗した安山岩片、長石、石英など。
上部は土壌化して暗色となり、粘土化するため、Ⅱ-1層、Ⅱ-3層に分ける。3地点と比べると礫の円磨度が良く、粒径も小さい。
Ⅴ層：青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石、基質と同質な腐れ礫を含む。角礫～亜角礫が多い。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。

第２５３図　２地点北面の断面図

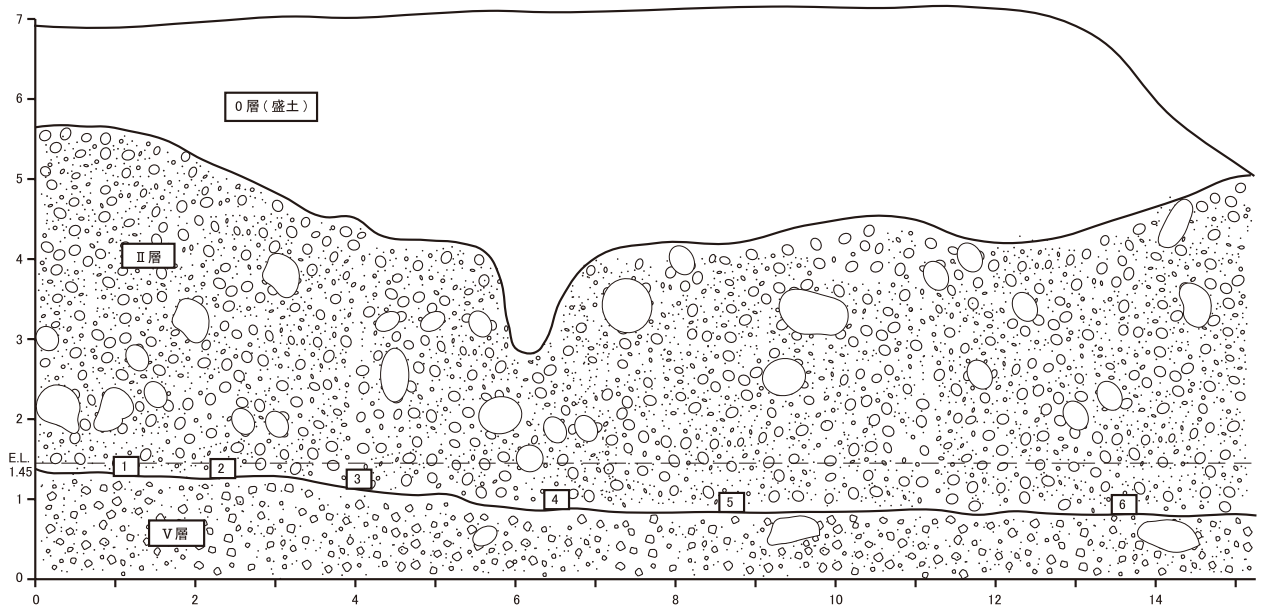


O層：盛土　タイル、コンクリート、アスファルトなどを含む

Ⅱ層 ： 褐色の淘汰の悪い砂礫層。 1m 近い巨礫も含む。礫種は輝石安山岩が多い。亜角礫～亜円礫であるが、3 地点と比べると礫の円磨度が良く、粒径も小さめである。Ⅱ層は、マッシブなⅡ-3 層、弱い葉理がみられ、下位より小さい亜円礫が多いⅡ-2 層、土壌化が進み旧根がみられるⅡ-1 層に細分される。

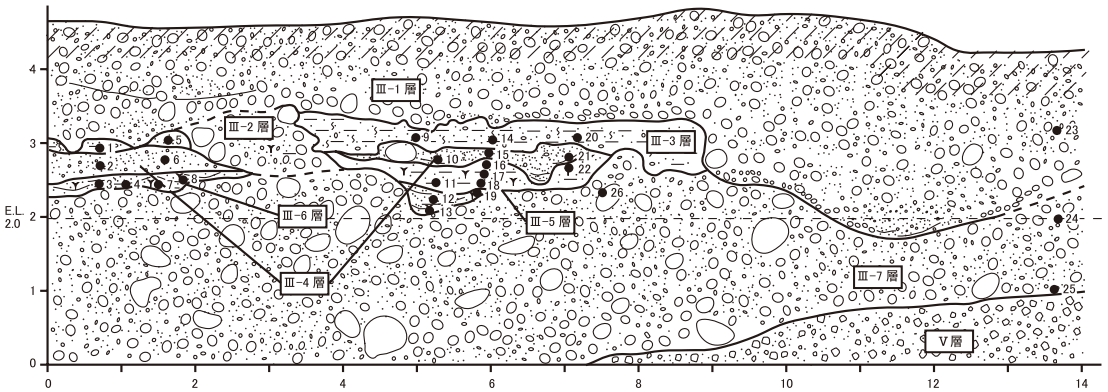
Ⅴ層：青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石，基質と同質なくされ礫を含むの角礫～亜角礫を含む土石流堆積物。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。

第２５４図　２地点西面の断面図



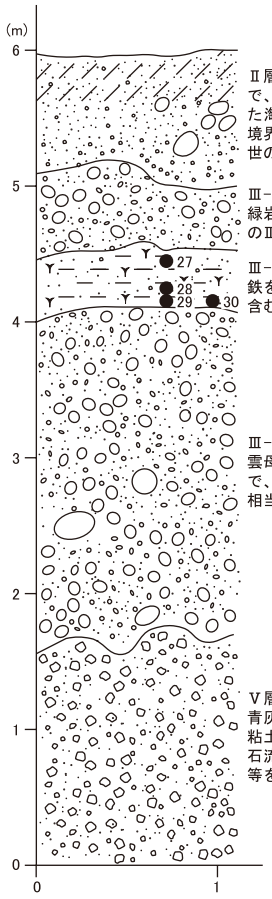
0層：盛土　タイル、コンクリートなどを含む
Ⅱ層 ： 褐色の淘汰の悪い砂礫層。1m 近い巨礫も含む。礫種は輝石安山岩が多いが、デイサイト質な安山岩も含む。亜角礫～亜円礫であり、方向性はなし。基質は、摩耗した安山岩片、長石、石英など。上位に火山灰層がみられず、完新世の扇状地堆積物である。窪平礫層に対比される。
Ⅴ層：青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石、基質と同質なくされ礫を含む。角礫～亜角礫を含む。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。新第三系の山口軽石層に対比される。

第２５５図　３地点北面の断面図



Ⅲ-1 層 ： 上部 50～60cm は土壌化し、根を含む淘汰の悪い砂礫層。基質は石英、長石、岩片を含み、黒雲母を少量含むのが特徴的である。礫は亜円礫で安山岩が大部分で、閃緑岩、花崗岩を含む。大きな礫は人頭大。基底に細礫～粗粒砂からなる比較的淘汰の良い層がみられる（西側）が不明瞭な場所もある（東側）。基底に弱い斜交葉理がみられる（西側）。礫に弱い方向性が認められる箇所もある（扇状地側）。表層は漸移的に土壌化し、耕作土となる
Ⅲ-2 層：Ⅲ-1 層と同質だが、3~5 層と思われるブロックを含む。上下の境界は不明瞭
Ⅲ-3 層：暗褐色砂質シルト。上部は糸根状の酸化鉄含む。下部は一部グライ化する。砂分はⅢ-1 層の基質に似ており、花崗岩由来の鉱物を含む。細～中礫を含む
Ⅲ-4 層：黄褐色～灰褐色の細礫～粗粒砂。一部に弱い葉理構造がみられる（主に下部）。砂分はⅢ-1 層の基質に似る。中礫を含む。扇状地側では細礫が多く、無層理。
Ⅲ-5 層：黒褐色腐植質砂質シルト。細かな植物遺体含む。
Ⅲ-6 層：黄褐色粗粒砂と黒褐色腐植質砂質シルト層との互層。黄褐色粗粒砂の中にレンズ状の葉理が発達し、その中に腐植層を挟む。最下部は、黄褐色の細礫～層粒砂。
Ⅲ-7 層：Ⅲ-1 層とほぼ同質。巨礫（1m 弱）が散在するのが、1 層と異なる。礫種もほぼ同じだが、花崗岩のくされ礫を含む（Ⅲ- 1 層でも花崗岩はみられるが、くされ礫はは確認できなかった）。基質はⅢ-1 層と同じ。Ⅲ-1 層との境界は西側は不明瞭、西面では層界不明（護岸工事に伴う撹乱の影響か ?）。礫の方向性は認められない。
Ⅴ層 ： 青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石の角礫～亜角礫を含む土石流堆積物。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。

第２５６図　４地点南面の断面図



Ⅱ層：上部 30～40cm は土壌化し、耕作跡、根を含む。褐色の砂層で、上方細粒化の構造がみられ、下部では細礫～中礫が多い。また淘汰の悪い扇状地性の土石流堆積物がみられる部分もあるが、境界は不明瞭。基質が下部に比べてルーズであることから、完新世の堆積物（Ⅱ層）と考えられる。

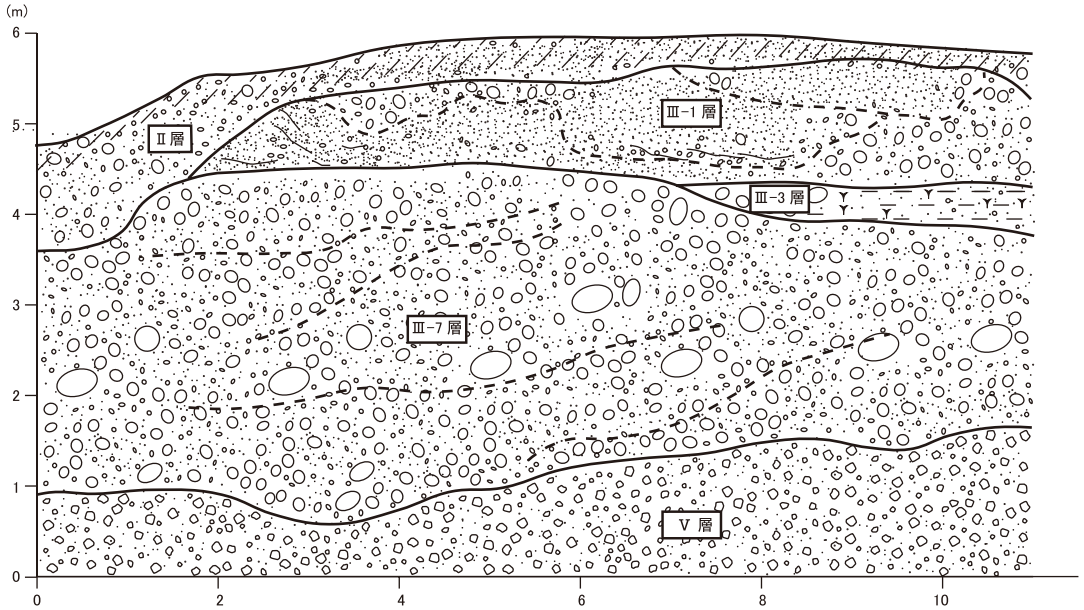
Ⅲ-1 層：淘汰の悪い砂礫層。礫は亜円礫で安山岩が大部分で、閃緑岩等を含む。大きな礫は人頭大。基質が比較的堅いので、北壁のⅢ-1 層に相当する。

Ⅲ-3 層：暗褐色砂質シルト。上部は現在の根および糸根状の酸化鉄を含む。砂分はⅢ-7 層の基質に似ており、酸性岩由来の鉱物を含む。細～中礫を若干含む。

Ⅲ-7 層：淘汰の悪い砂礫層。基質は石英、長石、岩片を含み、黒雲母を少量含むのが特徴的である。礫は亜円礫で安山岩が大部分で、閃緑岩、花崗岩を含む。大きな礫は人頭大。北壁のⅢ-7 層に相当する

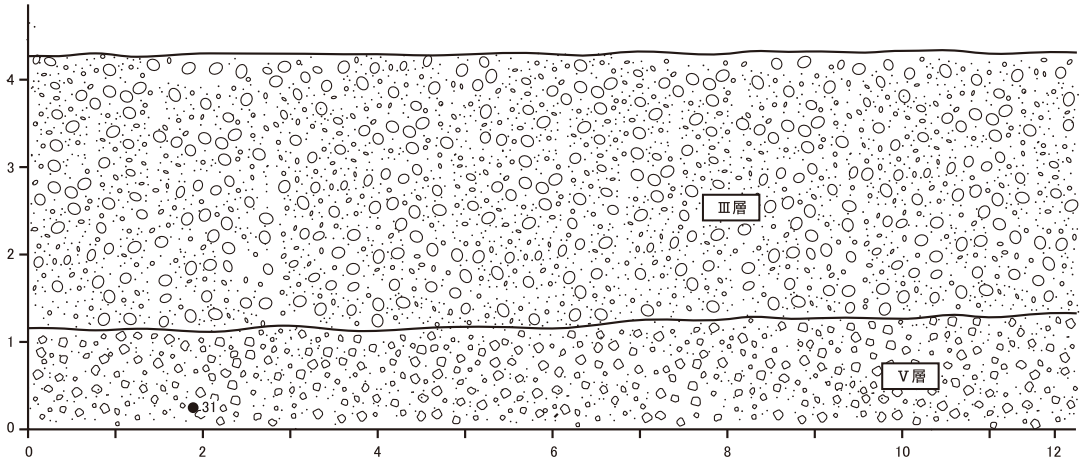
Ⅴ層：青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石、風化した凝灰岩を含む、角礫～亜角礫を含む土石流堆積物。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み、礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。

第２５７図　４地点北面（東端）の断面図



Ⅱ層：上部 30～40cm は土壌化し、耕作跡根を含む。細礫～中礫が多い。基質が下部に比べてルーズである。
Ⅲ-1 層：南壁とほぼ同質だが、小河道の発達がよく、切り合い関係が明瞭にみられる。
Ⅲ-3 層：暗褐色砂質シルト。腐植を若干含む。分析サンプル（C-1 等）は、北面と東面との境界（右端のさらに約 3m 右側）で採取されている。
Ⅲ-7 層：淘汰の悪い砂礫層。南壁と同一だが、礫に弱い方向性が認められる。
Ⅴ層：青灰色の淘汰の悪い砂礫層。

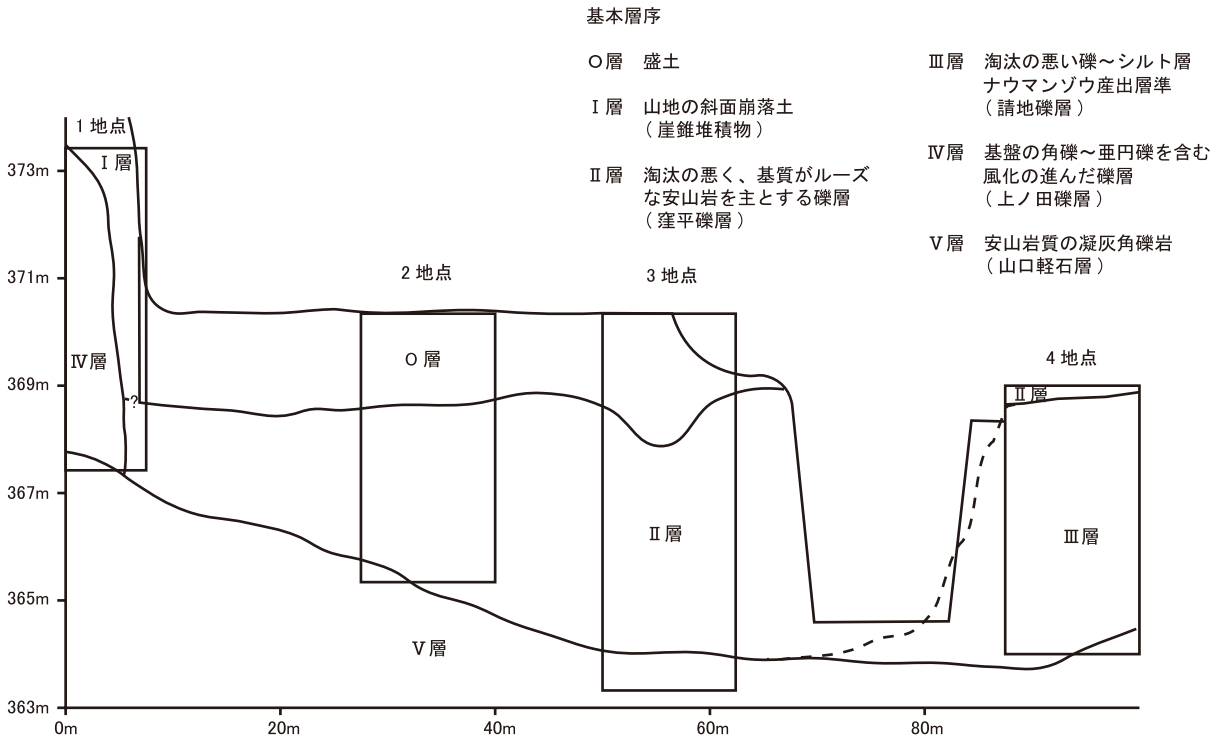
第２５８図　４地点北面（西側）の断面図



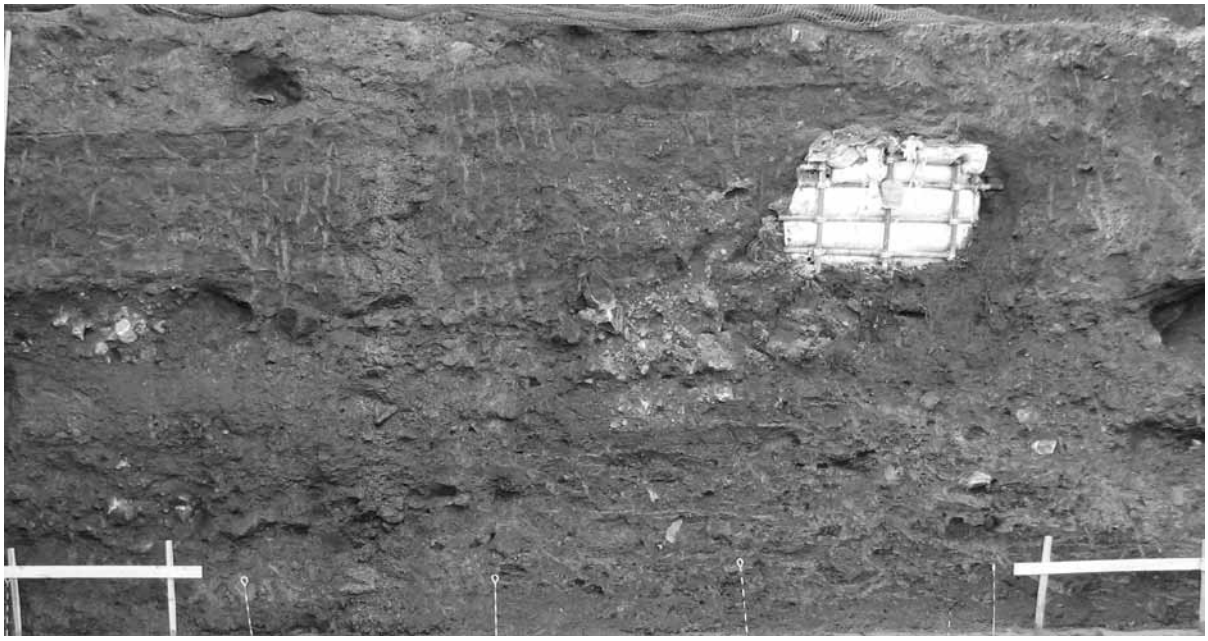
Ⅲ層 ： 淘汰の悪い砂礫層。基質は石英、長石、岩片を含み、黒雲母を少量含むのが特徴的。礫は亜円礫で安山岩が大部分で、閃緑岩、花崗岩を含む。大きな礫は人頭大。南面でみられる砂礫の方向性などの構造や、砂礫層が上下２層に分かれるなどの構造はみられない。護岸工事に伴う撹乱を受けている可能性だ高い。

Ⅴ層 ： 青灰色の淘汰の悪い砂礫層。多孔質で安山岩質な凝灰岩、青灰色で緻密な輝石安山岩、安山岩質のスコリア、風化が著しく粘土化した軽石の角礫～亜角礫を含む土石流堆積物。基質は凝灰岩質でスコリア、安山岩片、輝石、長石等を含み礫とほぼ同質である。礫には方向性は認められない。

第２５９図　４地点西面の断面図



第２６０図　模式断面図



1地点西面

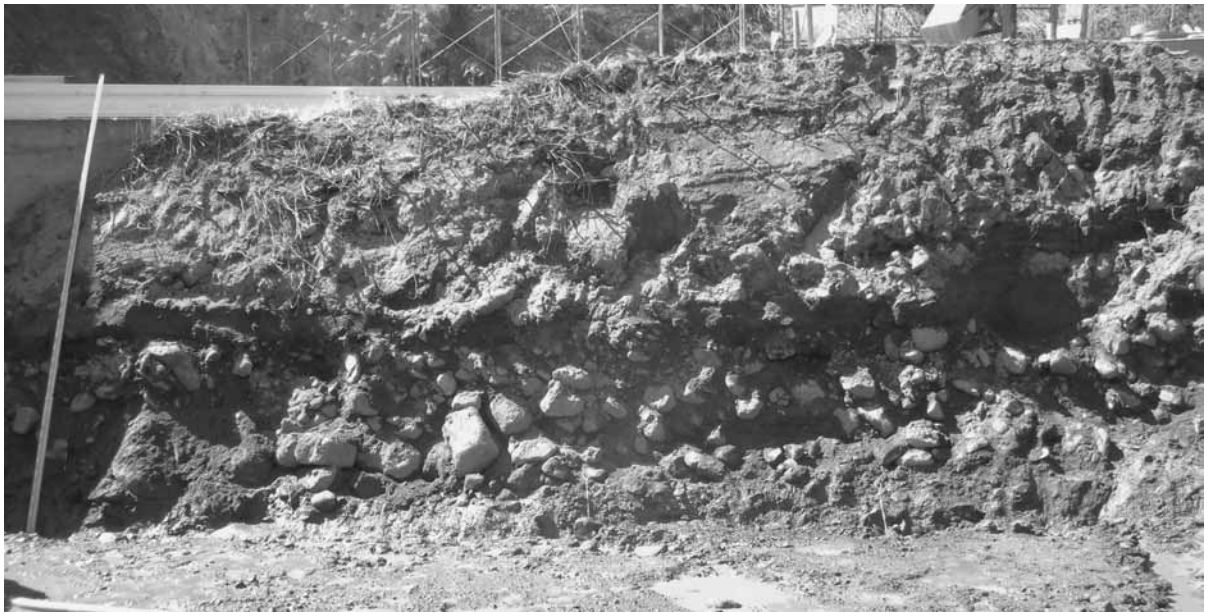
1地点東面

第２６１図　1地点(1)(2)

1地点南面

2地点北面

第２６２図　1地点(3)・2地点(1)



2地点西面

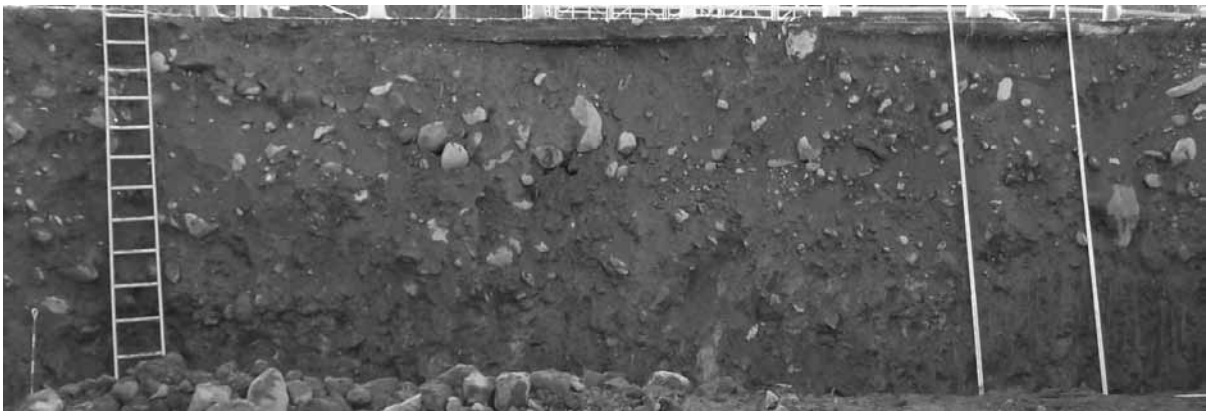
3地点北面

3地点北面(拡大)

第２６３図　２地点(2)・３地点

4地点南面

4地点北面



4地点西面

第２６４図　４地点(1)(2)(3)

第 2 節　兄川河床遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

目的

西関東自動車道建設に伴う橋脚設置工事予定地周辺では、過去の調査で後期更新世の堆積層よりナウマンゾウ化石が確認されていることから、今回の工事予定地内においても同様の化石の出土が想定される。そこで、平成 22 年～ 23 年にかけて現地調査を行い、4 箇所（第 1 ～第 4 地点）の地層断面を観察し、Ⅰ～Ⅴ層に分層した。既存の文献をもとに、Ⅴ層が鮮新世後期とされる山口軽石層、Ⅳ層は中期更新世の上ノ田礫層、Ⅲ層はナウマンゾウ化石が発見された後期更新世に相当する請地礫層、Ⅱ層は完新世の窪平礫層、Ⅰ層は現代の崖錐堆積物に対比されるとした。

今回は、ナウマンゾウ化石が発見された時期に相当すると考えられるⅢ層が露出する第 4 地点の断面より採取した試料について、放射性炭素年代測定、重軽鉱物分析、岩石薄片鑑定を行い、堆積物の由来や年代に関する情報を得る。合わせて、Ⅲ層の化石検出のための洗い出し分類を実施して骨が含まれているか否かを確認するとともに、含まれている種実等の同定を合わせて行う微細物分析実施する。また、珪藻分析、花粉分析、樹種同定を行い、当時の古環境についての情報を得ることを目的とする。

Ⅰ . 層序と年代に関する調査

1. 試料

分析調査地点ならびに層相については、前報の断面図に付した。放射性炭素年代測定試料は、1、3、9、11、13、17、26、27、30 の 8 点である。岩石薄片観察の対象とした試料は、第 4 地点のⅢ層より採取された礫 3 点、Ⅴ層より採取された礫 1 点の計 4 点である。いずれも、64mm 以上の大礫を対象とした。重軽鉱物分析の対象試料は、ⅢⅢ層およびⅤ層の腐植層および砂層の試料 15 点である。表 1 に分析試料一覧を示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料の性状は、試料番号 1、3、9、11、17、27 が草本質の植物遺体、13、30 が炭化物、26 が土壌である。いずれも AMS 法で測定する。土壌以外の試料 8 点は、表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により除去したあと。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する (AAA 処理)。ただし、試料番号 1、11、27、13、30 の 5 試料は、試料が脆弱で定法では必要な炭素量を得られない可能性があるため、水酸化ナトリウムの濃度 (定法では 1N) を薄くしている。試料番号 26 の土壌は、塩酸処理のみを行う。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30 分)850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸 (HOX-Ⅱ) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 重軽鉱物分析

試料を 5 ～ 20g 程度採取し、水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm-1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム (比重約 2.96) により重液分離する。分離された重鉱物と軽鉱物をそれぞれ 250 粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。軽鉱物中においてもこれに同様な性質を有するものを「その他」とする。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものである。

(3) 岩石薄片鑑定

薄片観察は、岩石を 0.03 ｍｍの厚さに研磨した薄片を顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片の作製は、岩石をダイヤモンドカッターにより切断・整形し、薄片用の岩石チップを作製する。次に、チップの片面を# 180 ～ #800 の研磨剤を用いて研磨機上で研磨した後、プレパラートに貼り付ける。プレパラートに貼り付けたチップは、ダイヤモンドカッターにより薄く切断し、# 180 ～ #800 の研磨剤を用い、研磨機上で厚さ 0.05mm 以下になるまで研磨する。さらに、メノウ板上で# 2500 の研磨剤を用いて研磨し、正確に 0.03mm の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の岩石片の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察記載を行う。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果は、試料番号 1(Ⅲ -3 層) は 810 ± 20BP、試料番号 3(Ⅲ -6 層) は 910 ± 20BP、試料番号 9(Ⅲ -3 層) は 890 ± 20BP、試料番号 11(Ⅲ -5 層) は 970 ± 20BP、試料番号 13(Ⅲ -6 層) は 1200 ± 20BP、試料番号 17(Ⅲ -5 層) は 920 ± 20BP、試料番号 26(Ⅲ -7 層) は 2270 ± 20BP、試料番号 27(Ⅲ -3 層) は 870 ± 20BP、試料番号 30(Ⅲ -3 層) は 1020 ± 20BP である。

次に、暦年校正を実施したが、暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2 σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。おおよその暦年較正値は、試料番号 1(Ⅲ -3 層) は約 700 ～ 800 年前、試料番号 3(Ⅲ -6 層) は約 800 ～ 900 年前、試料番号 9(Ⅲ -3 層) は約 700 ～ 900 年前、試料番号 11(Ⅲ -5 層) は約 800 ～ 900 年前、試料番号 13(Ⅲ -6 層) は約 1100 ～ 1200 年前、試料番号 17(Ⅲ -5 層) は約 800 ～ 900 年前、試料番号 26(Ⅲ -7 層) は約 2200 ～ 2300 年前、試料番号 27(Ⅲ -3 層) は約 800 ～ 900 年前、試料番号 30(Ⅲ -3 層) は 900 ～ 1000 年前である。

(2) 重軽鉱物分析

重軽鉱物の同定結果を第 58 表に、これに基づく組成図を第 271 ～ 272 図に示す。重鉱物としては、斜方輝石、

単斜輝石、角閃石、ザクロ石、緑レン石および不透明鉱物が検出された。主要な重鉱物は斜方輝石、単斜輝石、角閃石および不透明鉱物であり、ほとんどの試料に含まれている。輝石類は、V層の試料番号 31 で最も多く、Ⅲ -6 層の試料番号 3、12、13 の試料においても多い傾向が認められる (第 272 図)。角閃石はⅢ -4 層の試料番号 2 に突出して多く含まれているが、Ⅲ -3 層の試料でもやや多い傾向が認められる。不透明鉱物は、Ⅲ -4 層の試料番号 2、10 およびⅢ -7 層の試料番号 24、25 などで卓越する傾向がある。微量に含まれる緑レン石については、Ⅲ -1、4、5、6、7 層の試料に認められ、Ⅲ -3、5 層の試料には検出されていない。

軽鉱物は、いずれの試料も長石類を主として、石英を微量伴う組成となっている。石英は、Ⅲ -7 層の試料番号 25 や、Ⅲ -3 層の試料番号 27、30 の試料においてやや多い傾向が認められる。長石類は、輝石類を多く含有するV層の試料番号 31 において少ない傾向がみられる。火山ガラスはほとんど検出されていないが、Ⅲ -7 層の試料番号 24、26 のそれぞれの試料において、塊状型を呈する火山ガラスが 1 粒のみ同定されている。

(3) 岩石薄片鑑定

偏光顕微鏡下における観察から構成鉱物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量 (＞ 50%)、中量 (20 ～ 50%)、少量 (5 ～ 20%)、微量 (＜ 5%) およびきわめて微量 (＜ 1%) という基準で目視により判定した。構成鉱物の量比は火山岩類について表 4 に、深成岩類については表 5 に示した。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下において代表的な箇所を撮影し、写真図版(第 276･277 図) に示した。以下に鏡下観察結果について述べる。

1) 試料番号 33 Ⅲ層

岩石名：斜方輝石単斜輝石安山岩

岩石の組織：斑状組織 (porphyritic texture)

斑晶

斜長石：中量存在し、粒径 0.3 ～ 3.1mm の半自形～他形で厚板状～不定形板状を呈し、集片双晶および累帯構造が発達する。最大対称消光角は 39° でラブラドライト質な組成を示す。

斜方輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.38mm の半自形～他形で柱状～不定形柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。斜長石、単斜輝石を伴って集斑状組織を形成するものが認められる。

単斜輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.26mm の他形で不定形柱状を呈し、淡緑色を示す。集片双晶を有するものが散見される。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径 0.3 ～ 0.78mm の他形で粒状～不定形状を呈する。輝石類と接する場合が多い。

石基

石基はインターサータル組織～インターグラニュラー組織を示す。

クリストバライト：微量存在し、粒径最大 0.15mm の他形で屋根瓦状～不定形状を呈し、石基の火山ガラスを置換している。

斜長石：中量存在し、粒径最大 0.3mm の半自形～他形で柱状～不定形板状を呈し、集片双晶が発達する。

斜方輝石：微量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。

単斜輝石：少量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で不定形柱状～柱状を呈し、淡緑色を示す。石基斜長石の粒間に散在する。

火山ガラス：少量存在し、無色透光性を示して石基鉱物の粒間を埋める。粘土鉱物化している部分が散見される。

変質鉱物

スメクタイト：きわめて微量存在し、粒径最大 0.05mm の他形で微細板状～不定形状を呈し、緑褐色を示す。斜長石斑晶中の火山ガラスを交代するものや、

水酸化鉄：微量存在し、粒径最大 0.005mm の他形で微細不定形状を呈し、褐色を示す。石基を汚染するものやクラックを充填するものが認められる。

クラック

微量存在し、幅0.05mmで薄片上に５条程度認められ、石基や斑晶を切っており、水酸化鉄によって充填されている。

2) 試料番号 36 III層

岩石名：黒雲母角閃石トーナル岩

岩石の組織：完晶質花崗岩状組織（hollocrystalline granitic texture）

主成分鉱物

石英：少量存在し、粒径最大 2.8mm の他形で不定形状を呈し、粒間充填状をなして点在する。

斜長石：中量存在し、粒径最大 2.7mm の半自形～他形で厚板状～不定形板状を呈し、集片双晶および著しい累帯構造が発達する。一部、ミルメカイト組織を示すものが認められる。

副成分鉱物

カリ長石：微量存在し、粒径最大 0.65mm の他形で不定形状を呈し、石英、斜長石の粒間を埋めて点在する。黒雲母を包有するものが認められる。

黒雲母：きわめて微量存在し、粒径最大 0.78mm の他形で淡褐色～褐色の多色性を示す。緑泥石によって交代されるものや、劈開に沿って緑レン石が生じているものが認められる。

角閃石：微量存在し、粒径最大 1.37mm の他形で不定形板状を呈し、淡褐色～緑褐色の多色性を示す。

燐灰石：きわめて微量存在し、粒径最大 0.19mm の他形で柱状～不定形柱状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大 0.62mm の他形で不定形粒状

変質鉱物

緑泥石：微量存在し、粒径最大 0.15mm の他形で繊維束状を呈し、淡緑色を示して黒雲母を交代する。

アクチノ閃石：微量存在し、粒径最大 0.15mm の他形で針状～不定形板状を呈し、角閃石を交代する。

緑レン石：きわめて微量存在し、粒径最大 0.32mm の他形で不定形状を呈し、淡黄色～淡褐色を示す。

水酸化鉄：微量存在し、粒径最大 0.005mm の他形で微細不定形状を呈し、褐色を示す。クラックを充填して広範に分布する。

クラック

微量存在し、幅 0.1mm で薄片上に 10 条以上認められ、互いに連結して網目状組織を形成している。開口しているが、水酸化鉄によって充填される部分も多く認められる。

3) 試料番号 37 III層

岩石名：かんらん石含有斜方輝石単斜輝石安山岩

岩石の組織：斑状組織（porphyritic texture）

斑晶

斜長石：中量存在し、粒径 0.3 ～ 2.21mm の半自形～他形で厚板状～不定形板状を呈し、集片双晶および累帯構造が発達する。最大対称消光角は 38° でラブラドライト質な組成を示す。

斜方輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.82mm の半自形～他形で柱状～不定形柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。斜長石、単斜輝石を伴って集斑状組織を形成するものが認められる。

単斜輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.70mm の半自形～他形で不定形柱状を呈し、淡緑色を示す。集片双晶を有するものや不透明鉱物を包有するものが散見される。

かんらん石：きわめて微量存在し、粒径 0.3 ～ 0.67mm の他形で不定形粒状～骸晶状を呈し、変質してやや褐色化している。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径 0.3 ～ 0.94mm の他形で粒状～不定形状を呈する。輝石類と接する場合が多い。

石基

石基はインターサータル組織を示す。

クリストバライト：きわめて微量存在し、粒径最大 0.29mm の他形で楔状～不定形板状を呈し、孔隙を充填する。

斜長石：中量存在し、粒径最大 0.3mm の半自形～他形で針状または柱状～不定形板状を呈し、集片双晶が発達する。大部分は粒径 0.1mm 以下と細粒であり、局所的に流理配列を示す。

斜方輝石：微量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。一部、単斜輝石と並行連晶するものが認められる。

単斜輝石:少量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で不定形柱状～柱状を呈し、淡緑色を示す。大分部は粒径 0.05mm 以下と細粒であり、石基斜長石の粒間に散在する。

かんらん石：きわめて微量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で不定形粒状～粒状を呈し、一部、不透明鉱物、単斜輝石による反応縁を有するものが認められる。

火山ガラス:少量存在し、無色透光性を示して石基鉱物の粒間を埋めるものや、斑晶に包有されるものが認められる。

変質鉱物

水酸化鉄：きわめて微量存在し、粒径最大 0.01mm の他形で微細不定形状を呈する。褐色を示して石基や斑晶を汚染する。

孔隙

きわめて微量存在し、孔径最大 0.65mm で不定形球状～不定形状を呈する。クリストバライトによって充填されている。

4) 試料番号 39 V層

岩石名：斜方輝石単斜輝石安山岩

岩石の組織：斑状組織（porphyritic texture）

斑晶

斜長石：中量存在し、粒径 0.3 ～ 1.70mm の半自形～他形で厚板状～不定形板状を呈する。集片双晶および累帯構造が発達し、シーブ状組織を示すものが多く認められる。最大対称消光角は 40° でラブラドライト～バイトウナイト質な組成とみられる。

斜方輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.20mm の半自形～他形で柱状～不定形柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。斜長石、単斜輝石を伴って集斑状組織を形成するものや、単斜輝石と並行連晶するものなどが認められる。

単斜輝石：微量存在し、粒径 0.3 ～ 1.49mm の他形で不定形柱状を呈し、淡緑色を示す。集片双晶を有するものや不透明鉱物を包有するものが散見される。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径 0.3 ～ 0.62mm の他形で粒状～不定形状を呈する。輝石類と接する場合が多い。

石基

石基はインターサータル組織を示す。

斜長石：中量存在し、粒径最大 0.3mm の半自形～他形で柱状～不定形板状を呈し、集片双晶が発達する。無方向性で石基を密に埋めている。

斜方輝石：微量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で柱状を呈し、淡褐色～淡緑色の多色性を示す。単斜輝石と並行連晶するものが認められる。

単斜輝石:少量存在し、粒径最大 0.3mm の他形で不定形柱状～柱状を呈し、淡緑色を示す。大分部は粒径 0.05mm

以下と細粒であり、石基斜長石の粒間に散在する。

かんらん石：きわめて微量存在し、粒径最大 0.28mm の他形で不定形粒状～粒状を呈する。変質によりやや褐色化しているものや、細粒な単斜輝石および不透明鉱物による反応縁を有するもの、斜長石斑晶に接するものなどが認められる。

火山ガラス：少量存在し、淡褐色を示して石基鉱物の粒間を埋めるものや、斑晶に包有されるものが認められる。

変質鉱物

水酸化鉄：きわめて微量存在し、隠微晶質で微細不定形状を呈し、褐色を示す。かんらん石の周囲や孔隙を汚染している。

孔隙

少量存在し、孔径最大 1.10mm で不定形状を呈して散在する。充填鉱物は認められない。

4. 考察

年代測定の結果、ほとんどの試料で 800 ～ 900 年前を示し、当初の予想よりかなり新しい堆積物であることが判明した。Ⅲ -7 層とした礫層中の泥が、約 2300 年前と他よりやや古い年代を示すが、土壌を対象にした分析であることから古いヒューミンなどが混入している可能性がある。Ⅲ -7 層は δ 13C の値が他に比べて高いが、黒ボク土など C4 植物が腐植の形成に関与した土壌では δ 13C の値が高くなることから、旧表土が流れ込んだ可能性もある。断面観察からは、Ⅲ層内部には細かな切り合い関係が存在するものの、土壌化など不整合の痕跡が認められないことから、800 ～ 900 年前がⅢ層の年代を表しているとみて差し支えないと考えられる。

重鉱物組成は、兄川上流域に広範に分布する輝石安山岩などの火山岩類の鉱物組成を反映し、ほとんどの試料で輝石類が主体となっている。各試料に微量～中量程度含まれる角閃石については、徳和深成岩体や、東山梨火山深成複合岩体の小烏花崗閃緑岩などの花崗岩類に由来するものと推測される。輝石類は、比較的自形性の強いものが散見されるのに対し、角閃石は風化変質しているものや、円磨状を呈するものが多く認められている。断面調査では、層相変化の大きいⅢ層が層界もはっきりしているため、Ⅲ -1 ～ 7 の 7 層に分層されており、角閃石は、Ⅲ -1 層、Ⅲ -7 層よりもⅢ -4 層およびⅢ -3 層に多く含まれる傾向が認められる。

Ⅲ層およびⅤ層より採取された礫は、鏡下観察の結果、斜方輝石単斜輝石安山岩 2 点、かんらん石含有斜方輝石単斜輝石安山岩 1 点および黒雲母角閃石トーナル岩 1 点と鑑定された。平成 22 年および平成 23 年に実施された断面観察の際には、Ⅲ層の主要な礫は安山岩とされ、閃緑岩、花崗岩なども観察されている。Ⅴ層 (山口軽石層) では、多孔質な安山岩質凝灰岩、輝石安山岩、安山岩質スコリア、軽石などが認められている。

鑑定された安山岩類は、兄川上流域に分布する後期中新世末から鮮新世の太良ヶ峠火山岩、東山梨火山深成複合岩体の小楢山火山岩、水ヶ森火山岩などを起源する礫とみられる。三村ほか (1994) に示される太良ヶ峠火山岩、水ヶ森火山岩などの岩石記載と比較すると、試料番号 33(Ⅲ層) の斜方輝石単斜輝石安山岩は、新鮮、多斑晶質でインターサータル組織を示す特徴や、鉱物の組合せから、水ヶ森火山岩に由来する可能性が考えられる。試料番号 37(Ⅲ層) および 39(Ⅴ層) の安山岩は、新鮮な岩相を示すが、かんらん石を伴う特徴があり、水ヶ森火山岩の安山岩とは異なっている。一方の試料番号 36(Ⅲ層) の黒雲母角閃石トーナル岩は、石英の含有率は少なく、石英閃緑岩に近い岩相を示し、兄川上流部に分布する中期中新世の徳和深成岩体などに起源する礫とみられる。

検出された砂粒や礫は現在の兄川流域に分布する岩体より供給されたものと言える。ただし、砂ならびに礫の組成は、安山岩を主としながらも深成岩由来の砂礫も含んでおり、完新世の窪平礫層よりも後期更新世の請地礫層に近い組成を示す。また、砂粒の鉱物組成も、河西 (1995) で述べられているナウマンゾウ出土層準の鉱物組成に似る。しかし、年代測定の結果では、完新世 (古代) の年代値を示している。このことから、請地礫層は兄川を挟んで江曽原の集落から下流域に限定的に分布し、兄川の北側から弟川にかけての扇状地には、基盤層の上に直接窪平礫層が堆積するか、基盤層と窪平礫層との間に今回検出されたⅢ層に相当する腐植層を挟む礫層が堆積していると予想される。現在、兄川、弟川ともに両岸はコンクリート護岸壁で覆われ、断面をみることができないため検討することが難

しいが、桂田・渡辺（1995）に記録されている古い弟川壁面の下部の記載が、今回のⅢ層に似ている。特に弟川壁面における炭化物片の産出は、後述するⅢ層の微細物分析結果とも酷似し、有史以降の堆積物であることを暗示している。桂田・渡辺（1995）では、この弟川河床でみられた堆積物を請地礫層に対比しているが、今回分析を実施したⅢ層に相当する可能性が高い。請地礫層がⅢ層に対比されるとすれば、兄川と弟川に挟まれた窪平礫層堆積面にあたる扇状地の地下には、請地礫層は残っていないことになる。この点については、今後、本地域における工事等により地層断面の調査機会があれば、詳細な調査を行うことで、明らかになってくると考える。

Ⅱ. 古環境に関する調査

1. 試料

分析試料は、第 4 地点の断面より採取された試料について、花粉分析と珪藻分析が 11 点、材同定が試料番号 17 の 1 点である。試料の詳細は一覧表に示す。また、試料採取層位の層相等に関しては前報に示したとおりである。化石検出は、哺乳類骨の検出を目的とした洗い出し分類を 25 点について分析する。ただし、上記の分析により、分析対象とした堆積物が、先に本地域でナウマンゾウ化石が出土した層準より新しいことが判明したため、化石の検出する見込みが大変低くなった。このため、化石検出試料について、古環境・古植生にかかる情報を得ることを目的として、当初 10 試料について実施する予定であった種実遺体抽出・同定を 25 点全てにおいて実施する (当初種実遺体分析は 10 点であるため、15 点加算した形になる)。樹種同定用試料は、第 4 地点Ⅲ -5 層の腐植層中に挟まって出土した木片 1 点 (4 地点№ 17) である。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4 ～ 5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985 ～ 1991)、Desikachiary(1987)、Yanagisawa and Akiba(1990) などを参考にする。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952,1957)、Faegri and Iversen(1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基

数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 微細物分析

先に説明したように、時代性が新しいことが判明したため、微細物分析を予定していた 25 点全てで、化石含有を調べる微細物分析と共に、種実遺体分析を実施する。

試料 200cc を秤量し、水につけて軟らかくする。試料自体が 200cc に満たない場合は、再分析に備えて半分残し、残りを分析する。0.5mmの篩を通して水洗したあと、検出された化石を抽出し、種実については種類の同定も実施する。木材、炭化材に関しては 4mm 以上を目安に抽出を実施する。

種実に関しては検出されたもののうち、半分以上残っているものを抽出する。ただし、半分以下であっても、その特徴から種類が特定でき、かつ対象とする試料に半分以上残っている同一の種類が存在しない場合は、これらの破片を抽出し 1 個体とする。イネの頴・胚乳については、元々脆弱であることもあるため、細片であっても同定が可能な限り抽出し、細片であっても 1 個体として計数する。

(4) 樹種同定

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果は、第 61 表および第 273 図に示した。以下、珪藻分析結果について、試料採取箇所毎に述べる。

第 4 地点の南壁東側では、試料番号 4-1(Ⅲ -3 層)、4-2(Ⅲ -4 層) および 4-3(Ⅲ -6 層) の 3 層準の分析が行われた。その結果、3 層には多くの珪藻化石が含まれており、200 個体以上が検出されたものの、4 層および 6 層は、極低率にしか認められず、10 個体未満である。化石殻の保存状態は、3 層は半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡はほとんど認められないことから、状態としては不良である。4 層および 6 層は、すべて半壊しており、殻表面には溶解の痕跡が認められたことから、状態は極々不良である。

検出された分類群は、すべて淡水生種であり、汽水生種あるいは海水生種は検出されない。

多産または優占した種は、3 層についてみると、淡水生種で流水性種の *Cymbella turgidula*、流水不定性種の *Caloneis silicula*、*Cymbella silesiaca*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia rupestris*、*Pinnularia viridis*、止水性種の *Cymbella subaequalis* 等である。

第 4 地点　南壁西側は、5 層準の分析が行われた結果、すべての層準から珪藻化石が検出された。ただし、産出率は層準によって異なり、200 個体が検出された層準は、試料番号 4-9(Ⅲ -3 層) と 4-12(Ⅲ -6 層) のみであり、他 3 層準は 20 個体未満と極低率にしか認められない。珪藻殻の保存状態は、多産した 2 層準は、半壊した殻は認められるものの、溶解の痕跡は認められないため状態は、不良である。一方、希産の 3 層準は、ほとんど破損しているだけでなく、殻の周縁部は溶解していることから、状態としては極々不良である。

検出された分類群は、淡水生種のみであり、他は認められない。

多産または優占した種は、試料番号 4-9(Ⅲ -3 層) と 4-12(Ⅲ -6 層) は近似しており、淡水生種で流水不定性種　の *Amphora ovalis*、*var. affinis*、*Caloneis silicula*、*Cymbella silesiaca*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia rupestris*、*Pinnularia viridis*、止水性種の *Cymbella subaequalis*、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の

Hantzschia amphioxys 等である。

第 4 地点のⅢ -7 層 (4-26) からは、珪藻化石が検出されたものの、僅かに 3 個体である。化石の保存状態は、すべて破損しているだけでなく、溶解の痕跡が認められるため、状態としては極々不良である。

検出された分類群は、淡水生種のみである。認められた種類は、*Pinnularia* spp. 等である。

第 4 地点の北壁のⅢ -3 層 (4-27) には、堆積物中に含まれる量自体は少ないものの、100 個体以上の珪藻化石が検出された。化石殻の保存状態は、半壊した殻が多いことから、状態としては極不良である。検出された分類群は、淡水生種のみであり、他の分類群は認められない。多産または優占した種は、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Caloneis leptosoma*、*Pinnularia borealis* var.*rectangularis*、*Pinnularia schroederii* 等である。

第 4 地点　東壁のⅢ -3 層 (4-30) にはある程度の量の珪藻化石が含まれており、100 個体以上が検出された。化石殻の保存状態は、半壊した殻は認められるものの、溶解の痕跡は、ほとんど認められないことから、状態としては不良である。

検出された分類群は、すべて淡水生種であり、他の分類群は認められない。多産または優占した種は、流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella sinuata*、流水不定性種の *Cocconeis placentula*、*Epithemia turgidula* var.*westermannii*、*Fragilaria ulna*、止水性種の *Achnanthes crenulata*、陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi* 等である。

(2) 花粉分析

結果を第 62 表、第 274 図に示す。花粉化石は、試料番号 2、10、13、26、30 では、花粉化石の保存が悪く、産出量も少ない。花粉化石が検出された 6 試料の保存状態は当該期のものとしては普通である。花粉化石群集はばらつきがみられるものの、大局的な傾向は類似している。更に層位毎に細かくみると、花粉化石が少ないⅢ -4 層を挟んで下位 (Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層) と上位 (Ⅲ -3 層) で多少の変化がみられる。

Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層は、木本花粉が草本花粉より多い。木本花粉は、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属といった針葉樹花粉が多いのが特徴である。他には、トウヒ属やイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科などの針葉樹花粉を伴う。広葉樹では、コナラ亜属の割合が高く、ブナ属、ニレ属―ケヤキ属などを伴う。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科などが検出されるが全体的に低率である。栽培種としては、低率ではあるが、イネ属とソバ属がみられる。

Ⅲ -3 層は、木本花粉と草本花粉の比率がほぼ同じである。木本花粉は、Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層と同様に、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属といった針葉樹花粉が多いのが特徴である。広葉樹もコナラ亜属を中心に検出されるが、Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層に比べると、低率である。草本類はイネ科が多く、栽培種のイネ属も低率ではあるが含まれる。この他カヤツリグサ科、ヨモギ属などを含む。水生植物では、オモダカ属やミズアオイ属などが検出されるが、Ⅲ -3 層、Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層ともに低率である。

(3) 微細物分析

結果を第 63 表、第 275 図に示す。哺乳類等の化石は検出されなかった。種実遺体の産出傾向として、Ⅲ -4 層でほとんど検出されないものの、他の層位では、検出されない試料も混ざるものの、全体の傾向を網羅できる程度の量の種実遺体が検出されている。検出された種実遺体の組成は、花粉化石と同様に、Ⅲ -4 層を境にして分かれる。この他、材、炭化材、虫などを少量含む。検出した種実遺体の産出状況は以下の通りである。

Ⅲ -5 層、Ⅲ -6 層は、木本花粉を中心に化石が摩耗・破損している個体が多い特徴がある。第 281 図・282 図に示したようにシデ類の表面の条線はほとんど消えかかっている。草本花粉は、Ⅲ -3 層に比べてば保存が悪い葉いが、極端にめだつほどではない。木本類では、広葉樹が多くサワシバなどのシデ類をはじめ、ヤマグワ、ウルシ属、カエデ属、マタタビ、ミズキ、ニワトコなどがみられる。草本類では、ホッスモ、オモダカ属、ホタルイ属、イボクサなどの水生植物がみられるほかタデ属、ナデシコ科なども検出される。

Ⅲ -3 層は、草本類が多く、ホッスモ、ホタルイ属など水生植物が多い。

全体的に、イネ、コムギ、アワ、エゴマ、ナス属といった栽培種がみられる。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・モミ属 (*Abies*)　マツ科

葉が検出された。褐色、線形で偏平。長さ 1.1cm、幅 2mm 程度。先端部はは凹頭。基部は楔形に細まり、吸盤状の葉痕がある。葉表面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面の溝の両側に白色の気孔帯が配列する。

・サワシバ (*Carpinus cordata* Blume)　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、卵状長楕円形でやや偏平。長さ 5mm、幅 3mm、程度。果皮両面にはそれぞれ 5-6 個の縦隆条が配列するが、磨耗してほとんど見えない。柱もほとんど欠損する。

・イヌシデ (*Carpinus Tschonoskii* Maxim.)　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは4mm 程度。側面観は亜三角型、上面観は凸レンズ型。表面には、縦方向に数本の筋が存在する。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.)　　カバノキ科アサダ属

果実が検出された。灰褐色、縦に長い滴形。先端は尖り、両面正中線上に稜がある。長さ 6mm、幅 3mm、厚さ程度。果皮両面の縦隆条は磨耗してほとんど見えない。

・カバノキ属 (*Betula*)　カバノキ科

果実が検出された。大きさは 3mm 程度。果体は狭倒卵型で先端部に花柱の跡が2本突出するが磨耗して見えにくい。翼は一部が痕跡程度に残っている程度。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)　ニレ科ケヤキ属

果実の破片が検出され、全体の半分程度である。残存している部分は、基部に相当する円形の臍のまわりのみが残る。

・カジノキ属 (*Broussonetia*)　クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは1mm 程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret)　クワ科クワ属

種子が検出された。褐色。大きさは 2mm 程度。倒卵型、表面は平滑で側面の隅に突起がみられる。

・キイチゴ属 (*Rubus*)　バラ科

種子が検出された。褐色。大きさは、2mm 程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体は荒い不規則な網目模様でおおわれる。

・カエデ属 (*Acer*)　カエデ科

果実が検出された。褐色で大きさは 5m 程度。扁平で、果実が破損した内側に黒色で不規則な顆粒状突起のある種子が除く。分離面、翼ともに不明瞭。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.)　トチノキ科トチノキ属

幼い果実の破片が検出された。果実の大きさは 5mm で、下半部が破損する。いびつな球形で、3裂し先端は尖る。表面は肉厚で黒褐色である。

・ブドウ属 (*Vitis*)　ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm 程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata*(Maxim.)Trautv.)　ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。黒色、ほぼ球形で大きさは4mm 程度。背面には「さじ状」の「へそ」がある。種皮は厚く硬い。

・グミ属 (*Elaeagnus*)　グミ科

種子が検出された。長楕円形で大きさは 6mm 程度。表面は比較的柔らかく弾力がある。表面にはいくつかの深い筋がある。

・サルナシ近似種 (*Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Miq.) マタタビ科マタタビ属

種子が検出された。黒褐色、長さ 2.5mm 程度の両凸レンズ状楕円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円 - 楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

・マタタビ近似種 (*Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.)　マタタビ科マタタビ属

種子が検出された。黒褐色、長さ 1.5mm、程度の両凸レンズ状楕円体。サルナシよりも小型である。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann)　　ウコギ科タラノキ属

核 (内果皮) が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ 2.2mm、幅 1.5mm 程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*)　クマツズラ科

核が検出された。黄褐色、倒卵体で偏平。長さ 2mm、程度。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部は破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley)　ミズキ科ミズキ属

核が検出された。灰褐色、偏球体。径 5mm 程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

・エゴノキ (*Styrax japonica* Siebold & Zucc)　エゴノキ属エゴノキ科

種子が検出された。灰 - 黒褐色、卵体。長さ 1-1.4cm、径 6-7.5mm 程度。頂部はやや尖り、頂部から基部にかけて 3 本程度の太い縦溝が走る。基部は斜切形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は柵状。表面には微細な粒状網目模様があり、ざらつく。

・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara)　スイカズラ科ニワトコ属

核が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形で偏平。基部はやや尖る。長さ 3mm 程度。背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

・ホッスモ (*Najas graminea* Del.)　イバラモ科イバラモ属

種子が検出された。灰褐色、長さ 2.5mm、径 0.5mm 程度の針状長楕円体。両端は細く尖る。種皮は薄く、表面にはやや縦長の粒状網目模様が縦列する。

・オモダカ属 (*Sagittaria*)　オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、径 3mm 程度の偏平で歪な倒卵体。果皮は薄く翼状で、表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。中に入る倒U字状に曲がった円柱状の種子 1 個を欠損する。

・サジオモダカ属 (*Alisma*)　　オモダカ科

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。大きさは 2mm 程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種子のみが検出され、両者の区別がつかないものはオモダカ科とした。

・イネ (*Oryza sativa* L.)　イネ科イネ属

炭化した胚乳、炭化した穎、非炭化の穎が検出された。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ 5mm 程度。表面は磨耗していたり、欠けている個体ばかりである。欠けている個体の中には穎娃の基部が付着しているものもみられる。穎は炭化して黒色のものと、淡褐色で炭化していないものがある。完形に近いもので、長さ 7mm、幅 4mm 程度。基部に特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.)　イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。楕円体でオオムギよりも丸みを帯びている。長さ 4mm 程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝があるが磨耗して見えづらい。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

・アワ (*Setaria . italica* (L.) P.Beauv.)　イネ科エノコログサ属

炭化した穎 (果) が付着した胚乳が検出された。炭化しており黒色、径 1.5mm、厚さ 1mm 程度の半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。胚乳は基部正中

線上に胚の凹みがあり、表面はやや平滑。炭化していない破片もいくつか見られるが、全体の大きさが不明で野生種の可能性もあるのでエノコログサ属とした。

・イネ科 (Gramineae)

果実が検出された。淡 - 灰褐色、炭化個体は黒色。長さ 1.5-2.5mm、径 0.7-1mm 程度の半狭卵体で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑。

・ホタルイ属 (*Scirpus*)　カヤツリグサ科

果実が検出された。灰 - 黒褐色、長さ 2mm 程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・スゲ属 (*Carex*)

果実が検出された。淡褐色。三稜形で、径 2mm 程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

複数形状のものを一括した。長さ 1 ～ 2mm の偏平な広倒卵体のものが多い。頂部の柱頭部分が尖り、基部は切形。

・イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.)　　ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。青みがかった灰褐色で半横長楕円形。径 3mm 程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・カナムグラ (*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.)　　クワ科カラハナソウ属

種子の破片が検出された。灰褐色、側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径 4mm、程度。頂部はやや尖る。基部には淡黄褐色でハート形の臍点がある。

・ミズアオイ属 (*Monochoria*)　　ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、楕円体。長さ 1mm 程度。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には縦に 10 本程度の隆起があり、隆起の間には横方向の密な隆線が配列する。

・タデ属 (*Polygonum*)　　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。最も多い形状は黒褐色、三稜状広卵体で径 3mm 程度。表面はにぶい光沢があり、細かな模様がある個体が多い。中にはサナエタデと思われる円形で偏平な二面体のもの、イヌタデと思われる黒色で丸みのある三稜状卵体のもの、黒褐色で果皮表面には明瞭な網目模様が発達するボントクタデと思われる個体を少量 (1 ～ 2 個) 含む。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径 1mm 程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径 1mm 程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キンポウゲ属 (*Ranunculus*)　キンポウゲ科

種子が検出された。楕円形で扁平。大きさは 3mm 程度。表面は薄くて柔らかく、ざらつく。中心部は楕円形にややへこみ、色が黒っぽくなっている。

・タケニグサ (*Macleaya coedata* (Willd.) R. Br.)　　ケシ科タケニグサ属

種子が検出された。淡黄色、狭倒卵形体で基部は尖る。長さ 2mm、径 1mm 程度。種子表面は、横長楕円形の深い凹みが縦列し網目模様をなす。

・キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 (*Potentilla* ー *Duchesnea* ー *Fragaria*)　　バラ科

核 (内果皮) が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ 1mm 程度。内果皮は厚く硬く、表面はやや平滑～微細な網目模様がありざらつく。表や本文中では、キジムシロ類としている。

・トウダイグサ？ (*Euphorbia Helioscopia* L.)　トウダイグサ科トウダイグサ属

種子が検出された。大きさは2mm 程度。卵型で淡い褐色。表面は粗く不規則な網目模様が存在する。先端には大きな「へそ」が存在する。トウダイグサ？

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.)　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵体。長さ 2 程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。この筋にそって破損している個体もある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しざらつく。

・スミレ属 (*Viola*)　スミレ科

種子が検出された。灰褐色、広倒卵体。径 1mm 程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る 1 本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。黄褐色、半球状で、分離面は平滑。大きさ 3mm 程度。果実表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・メハジキ属 (*Leonurus*.) シソ科

果実が検出された。灰褐色、広倒被針状六稜形。長さ 2mm、径 1mm。背面は丸みがあり、腹面と左右の縁は稜をなす。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*)　シソ科

果実が検出された。茶褐色、倒広卵体。径 1.5mm 程度。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica Hara*)　シソ科シソ属

果実の破片が検出された。茶褐色、倒広卵体。推定される大きさは約 .2mm。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・ナス属 (*Solanum*)　ナス科

種子の破片が見つかった。灰褐色、大きさは 3.5mm 程度で偏平。表面には凹凸が多く星型状網目模様が発達する。

・メナモミ属 (*Siegesbeckia*)　キク科

果実が検出された。灰黒褐色、長さ 3mm 程度の狭三角状菱形体で腹面方向へ湾曲する。頂部には円形の臍がある。果皮表面は海綿状で浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.)L.)　キク科タカサブロウ属

果実が検出された。黒褐色。大きさは 2mm 程度。惰円錐形で、上面観はひし形。中心は褐色で白色の突起があり、周辺は白色である。表面はざらつく。水に浮く。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。茶褐色、狭倒皮針形でやや偏平。長さ 3mm、径 1mm 程度。頂部は尖る。。果皮表面には縦筋が数本入り、ざらつく。

(4) 樹種同定

木片は、広葉樹のトチノキ近似種に同定された。主な解剖学的特徴等を記す。

・トチノキ近似種 (cf. *Aesculus turbinata* Blume)　トチノキ科トチノキ属

木片は、感想によって組織が収縮している。道管はほとんどが潰れて観察できないが、わずかに観察できる道管配列から散孔材と考えられる。道管の穿孔板及び壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高で階層状に配列する。

放射組織が同性、単列で階層状配列をする特徴からトチノキの可能性が高いが、道管配列や穿孔板などの特徴が観察できないため、近似種とした。

4. 考察

(1) 堆積環境

第 4 地点　南壁東側で珪藻化石が多産した試料番号 4-1(Ⅲ -3 層) に特徴的に認められた種の生態性あるいは生育環境についてみると、まず、流水性種の *Cymbella turgidula* は中･下流性河川指標種群（安藤、1990）と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。続いて流水不定性種の *Caloneis silicula* は、貧塩 - 不定、好アルカリ性、流水不定とされ、比較的、広範に認められる種であるが、沼沢湿地において優占して認められることの多い種である。*Cymbella silesiaca* は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。*Gomphonema parvulum* は、流水に対して不定なだけでなく、塩分濃度やｐＨに対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe(1995) は、広域適応種としている。*Pinnularia rupestris* は、貧塩―嫌塩性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範に生育するが、Pinnularia viridis 等と共に認められる場合が多い。*Pinnularia viridis* は、本分析からも検出されているが、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に普通に認められる種である。*Pinnularia rupestris* も経験的には、湿原、湿地あるいは沼沢地などに生育していることの多い種である。さらに止水性種の *Cymbella subaequalis* は、安藤 (1990) によれば沼沢湿地付着生種群の中の一種とされている。一般的には、湿地に普遍的に認められる種である。また、Asai and Watanebe(1995) によると好清水性種とされる。

以上のような多産種の特徴と他の希産種の構成を合わせて解析を行うと、試料番号 4-1(Ⅲ -3 層) の堆積時の環境は、沼沢湿地～湿地の環境下にあったものと推定される。

珪藻が極低率にしか認められなかった試料番号 4-2(Ⅲ -4 層) および 4-3(Ⅲ -6 層) は、産出率が特に低いために、堆積環境を推定することは難しいが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。

まず、産出率が低いことについての考えられる原因としては、①堆積時に珪藻自体が少なかったまたは堆積速度が速いために取り込まれる量が少なかった、②堆積後に大半の殻が分解消失した等である。試料番号 4-2(Ⅲ -4 層) および 4-3(Ⅲ -6 層) の場合、層相と検出された化石の保存状態からみて、②の堆積後に分解消失した可能性が高いと考えられる。堆積後の珪藻殻の分解消失については、堆積後の続成作用による物理・化学的な影響によるが、経験的に陸成層の場合、堆積場が水域 (常時冠水している) ではない場所では、堆積時から堆積後にかけて、大気に曝されているとバクテリア等の影響により、分解が促進されることが知られている。

第 4 地点　南壁西側で多産した試料番号 4-9(Ⅲ -3 層) と試料番号 4-12(Ⅲ -6 層) に特徴的に認められた種の生態性は (前述していない種)、まず、流水不定性種の *Amphora ovalis* var.*affinis* は、環境に対する適応能力が高い種であり、さまざまな環境の水域から認められる。また、殻のシリカに沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい種である。止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky（1968）は最適ｐＨを 6.8 に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。

以上のような多産種の産状と群集を考慮して解析を行うと、4-9 試料 (Ⅲ -3 層) と 4-12 試料 (Ⅲ -6 層) の堆積時は、概ね湿地の環境下にあったものと推定される。

産出率が低かった試料番号 4-10(Ⅲ -4 層)、4-11(Ⅲ -5 層) および 4-13(Ⅲ -6 層) は、その産状は前述の南壁西側の試料番号 4-2 (Ⅲ -4 層) に近似していることから、本地点でも同様に堆積後に大半の個体が分解消失した可能性が高いと考えられる。

Ⅲ -7 層の砂からは、保存不良の個体が、僅かに 3 個体認められたのみである。

本分析試料も産出率が特に低いめ、無理に堆積環境を推定するのは危険と考えられるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。

産出率が低いことについての原因は、①堆積時に珪藻自体が少なかったまたは堆積速度が速いために取り込まれる量が少なかった、②堆積後に大半の殻が分解消失した等が考えられるが、本分析試料の場合は、層相から①の堆積速度ははやいための原因による可能性が示唆される。

第 4 地点　北壁のⅢ -3 層から多産した種は、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Caloneis leptosoma*、*Pinnularia borealis* var.*rectangularis*、*Pinnularia schroederii* 等である。陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70 ～ 80%以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。よって、本分析試料の堆積時は、基本的には湿地の環境にあったと思われるが、地下水位の低下などに伴って、冠水するような場所は少なく、好気的な場所が多かった可能性が高い。

第 4 地点　東壁のⅢ -3 層腐から多産した種の生態性または生育環境 (前述していない種) は、まず、流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata* は、河川等の流水域の基物 (礫等) に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai and Watanebe(1995) は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。*Cymbella sinuata* は安藤 (1990) によれば、河川の中～下流域に特徴的に認められることから、中～下流河川指標種群とされる。流水不定性種の *Cocconeis placentula* は、比較的広範な水域に認められ、広域適応種として認識されている。*Epithemia turgidula var.westermannii* は、基本的に淡水域に生育する種であるが、淡水域ではあまり多産しない。承名変種に伴って随伴する程度のため、産出しても 10%以下である。むしろ、本種は、海岸付近の海草に大量発生することが知られている。止水性種の *Achnanthes crenulata* は、貧塩不定、好アルカリ性および好止水性であるが、貧塩好塩―中塩性とし、淡水層から汽水層に認められるとする報告もある（安藤・南雲 ,1983）。以上の特徴種の産出率と群集の構成から、堆積時の環境は、基本的には、水中の塩類濃度が高い湿地であったものと推定される。なお、塩類濃度が高まるということは、淀んでいるように感じられるが、本地点の場合には、適度に流水が流れ込んできていたものと考えられる。

(2) 古植生

分析の結果、種実遺体、花粉化石ともに少ないⅢ -4 層を境に組成が変化する。Ⅲ -4 層は珪藻化石の保存も悪い。堆積物が粗砂や細礫からなるため、堆積速度が速い等の理由で比重が軽い種実や、粒径が小さい花粉化石は流下してしまい、残りにくかったと考えられる。また、Ⅲ -6 層～Ⅲ -5 層、Ⅲ -4 層～Ⅲ -3 層という組み合わせでみると、上方細粒化を示しているため、それぞれが 1 つの堆積ユニットと判断できる。しかし、年代測定の結果はほぼ近似した年代が出ており、時代差はほとんどないと思われる。このような状況を踏まえ、Ⅲ -6 層～Ⅲ -5 層とⅢ -3 層に分けて古植生について述べる。

Ⅲ -6 層～Ⅲ -5 層は、木本花粉の種実がよく検出されるのが特徴である。これらは磨耗したり破片になったものが多く、河川沿いに生育していた樹木に由来するとみられる。検出される種類は、広葉樹が中心で、サワシバなどのシデ類、カバノキ属、ケヤキ、カジノキ属、ヤマグワ、キイチゴ属、ウルシ属、カエデ属、トチノキ属、ブドウ属、ノブドウ、グミ属、マタタビ、サルナシ、タラノキ、ムラサキシキブ属、ミズキ、エゴノキ、ニワトコである。いずれも川沿い、林縁などに明るい林地を作る種類である。一部の種類は花粉化石においても検出されている。検出された植物種の特徴としては、成長が早かったり、萌芽よる再生がしやすいなど、洪水などで傷害を受けても復元しやすいという性質がある。このため、河川沿いを中心にこれらが生育していたとみられる。一方、木本花粉は針葉樹が多く、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、トウヒ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が検出される。これらは風媒花で花粉生産量が多いことから、より遠くの植生を反映している可能性が高く、実際の周辺植生においては、それほど多くなかったとみられる。ただし、モミ属は葉が種実分析において検出されており、近くに生育していた可能性がある。上記の針葉樹の特徴として、斜面地、谷頭、扇状地面など土地条件の悪い場所でも生育可能な種類が多い。また、寒暖の差に

も強いので、甲府盆地のような場所にも生育可能である。甲府盆地は気温の年較差が大きいため、常緑広葉樹は、夏の気温だけで考えると生育可能な地域であるが、冬の寒さに耐えられない。このため、気温の年較差に強い針葉樹林が谷頭や扇状地、崩壊地など土地悪い場所を中心に針葉樹林(中間温帯林)を形成していたと考えられる。一方、山地の標高の高い場所ではブナやナラ類を主とする落葉広葉樹林が発達していたと考えられる。また、甲府盆地周辺は地形的に降水量が少ないため、湿潤な気候を好む落葉広葉樹林の主要な要素であるブナは生育しにくく、降水量の少ない場所でも生育するミズナラなどナラ類を中心とした植生になることが多い。今回の花粉分析結果では、ブナ属よりコナラ亜属の割合が高いことから、このような気候的要因により、山地の落葉広葉樹林にナラ類が多かった可能性がある。

草本類の花粉化石、種実遺体では、イネ科カヤツリグサ科、タデ属、ナデシコ科、スミレ属、ヨモギ属等の開けた場所を好むものが多い。これらは氾濫や洪水で植生が失われた場所に先駆的に侵入して草地を形成したと考えられる。また、ホッスモ、オモダカ属、サジオモダカ属、イボクサ属等水生植物がみられるが、これらが旧河道内の水湿地や流れの緩やかな川縁などに生育していたと考えられる。

Ⅲ-3層は、木本類種実がほとんどみられないが、これは堆積環境が変化して、流水の影響が少なくなり、現地性の種実が多くなったことに由来すると思われる。珪藻化石の結果でも、Ⅲ-3層は湿地的な環境が復元されており調和的といえる。また、珪藻化石では、Ⅲ-3層も地点によって、環境様相が異なっていたと推測されているが、花粉化石や種実遺体も、同じⅢ-3層でも多量に検出される地点や保存が悪い場所があり、堆積環境は常に一定ではなく、絶えず変化していたことが伺える。

種実をみると、ホッスモとホタルイ属が多く、ミズアオイ属の種実および花粉化石が検出される。このことから、当時なこれらが生育するような浅い沼沢域であったことが伺える。また、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、スミレ属等の花粉化石や種実遺体が検出されることから、氾濫が起きて間もない場所など、植生が破壊され、遷移が進んでいない場所を中心に、これら植物が開けた草地をつくっていたと思われる。一方木本花粉は下位と大きな変化はなく、広域的にみれば、同様な植生が維持されていたと考えられる。

また、種実ならびに花粉化石では、渡来してきた栽培種が検出される。このことからも、Ⅲ層がナウマンゾウの産出層準でないことがわかる。検出された栽培種は、イネ、コムギ、アワ、ソバ属、ナス属、エゴマである。これらが付近で栽培、利用されていたことが伺える。

今回の分析により、調査対象とした堆積物は、ナウマンゾウ化石の産出層準ではなく、より新しい、古代頃の堆積物であることが判明した。従って、今回の分析で得られた古環境に関する情報も、時代の新しい古代の環境を復元する資料となるものである。当初の目的であるナウマンゾウが生息していた時代の情報は得ることが出来なかったが、本地域に於いては、これまでの古代における古環境情報が極めて不足していた。それは、周辺遺跡ではこのような湿地性堆積物が発見されず、当時の古環境を解析できる堆積層が得られなかったためである。この点において、今回の調査、分析で得られた成果は、今後、当地域における人間と自然との関わりや栽培植物の利用を考える上で、重要な結果が得られたと言えるだろう。

引用文献

安藤一男・南雲　保, 1983, 埼玉県, 荒川低地沖積層のケイソウ. 日本歯科大学紀要,1983 (12),241-249.

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42(1990), 73 ～ 88, aNN. Tohoku Geogr. Assoc.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 － 47.

Cholnoky, B. J., 1968, Die Okolgie der Diatomeen in Binnen-Gewassern. Lehre. Desikachiary, T. V., (1987A) Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-10, Plates : 22-400A.

Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示 , 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討　――陸生珪藻の細分―― . 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集 , 17.

伊藤良永・堀内誠示 , 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6, 23-44.

河西　学 ,1995, 山梨市兄川のナウマンゾウ化石を包含する地層のテフラ分析 ,「山梨県埋蔵文化財調査報告書　第 108 集　山梨県山梨市兄川」, 山梨県教育委員会・山梨県土木部 ,13-17.

桂田　保・渡辺拓美 , 1995, 山梨市兄川ナウマンゾウ化石産地付近の地質 . 山梨県埋蔵文化財調査報告書　第 108 集 , 兄川 , 山梨県教育委員会・山梨県土木部 , 23-26.

小杉正人 , 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－ . 植生史研究 , 1, 9-44.

小杉正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 , 27,(1), 1-20

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Yanagisawa, Y. and Akiba, F., 1990, Taxonomy and phylogeny of the three marine diatom genera, *Crucidenticula,Denticulopsis and Neodenticula. Bull.Geol.Surv.Japan,* 41, 197-301.

三村弘二•柴田　賢•内海　茂 , 1994, 黒富士火山と甲府盆地北方に分布する火山岩類の火山活動と K-Ar 年代 , 岩鉱 , 89, 15-20.

第55表　分析試料一覧

地点番号	試料番号	質	層位	備考	分析目的	年代		化石検出	古環境			層位対比資料	
					分析項目	14C年代測定	材同定	洗い出し分類	種実遺体分析（洗い出し分類）（同定）	花粉分析	珪藻分析	重軽鉱物分析	岩石薄片作製・鑑定
4	1	土壌	III −3 層	南壁東側の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	2	土壌	III −4 層	南壁東側の腐植層				○	○	○	○	○	
4	3	土壌	III −6 層	南壁東側の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	4	土壌	III −6 層	南壁東側の腐植層				○					
4	5	土壌	III −3 層	南壁東側の腐植層				○					
4	6	土壌	III −4 層	南壁東側の腐植層				○					
4	7	土壌	III −6 層	南壁東側の腐植層				○					
4	8	土壌	III −6 層	南壁東側の腐植層				○					
4	9	土壌	III −3 層	南壁西側の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	10	土壌	III −4 層	南壁西側の腐植層				○	○	○	○	○	
4	11	土壌	III −5 層	南壁西側の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	12	土壌	III −6 層	南壁西側の腐植層				○	○	○	○	○	
4	13	土壌	III −6 層	南壁西側の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	14	土壌	III −3 層	南壁西側の腐植層				○					
4	15	土壌	III −4 層	南壁西側の腐植層				○					
4	16	土壌	III −5 層	南壁西側の腐植層				○					
4	17	材	III −5 層	腐植層中に挟まる木片		○	○						
4	18	土壌	III −5 層	南壁西側の腐植層				○					
4	19	土壌	III −6 層	南壁西側の腐植層				○					
4	20	土壌	III −3 層	南壁西側の腐植層				○					
4	21	土壌	III −4 層	南壁西側の腐植層				○					
4	22	土壌	III −5 層	南壁西側の腐植層				○					
4	23	土壌	III −1 層	礫層基質の砂								○	
4	24	土壌	III −7 層	礫層基質の砂								○	
4	25	土壌	III −7 層	礫層基質の砂								○	
4	26	土壌	III −7 層	礫層基質の砂（2 次混入？）		○				○	○	○	
4	27	土壌	III −3 層	北壁の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	28	土壌	III −3 層	北壁の腐植層				○					
4	29	土壌	III −3 層	北壁の腐植層				○					
4	30	土壌	III −3 層	東壁の腐植層		○		○	○	○	○	○	
4	31	土壌	V 層	西壁の礫層（IV層）中の砂								○	
4	32	礫	III 層										○：3 試料選択
4	33	礫	III 層										
4	34	礫	III 層										
4	35	礫	III 層										
4	36	礫	III 層										
4	37	礫	III 層										
4	38	礫	III 層										
4	39	礫	V 層										○
					計	9	1	25	10	11	11	15	4

第５６表　放射性炭素年代測定結果

地点	番号	層位	性状	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 (δ 13C 補正なし)	Code No.
4	1	Ⅲ –3 層	植物片 (草本 ?)	810 ± 20	–23.35 ± 0.42	780 ± 20	IAAA–112810
4	3	Ⅲ –6 層	植物片 (草本 ?)	910 ± 20	–20.83 ± 0.43	840 ± 20	IAAA–112811
4	9	Ⅲ –3 層	植物片 (草本 ?)	890 ± 20	–24.57 ± 0.28	880 ± 20	IAAA–112812
4	11	Ⅲ –5 層	植物片 (草本 ?)	970 ± 20	–22.49 ± 0.49	930 ± 20	IAAA–112813
4	13	Ⅲ –6 層	植物片 (炭化物)	1200 ± 20	–21.68 ± 0.53	1150 ± 20	IAAA–112915
4	17	Ⅲ –5 層	植物片 (樹皮)	920 ± 20	–18.38 ± 0.31	810 ± 20	IAAA–112814
4	26	Ⅲ –7 層	土壌	2270 ± 20	–17.27 ± 0.58	2140 ± 20	IAAA–112916
4	27	Ⅲ –3 層	植物片 (草本 ?)	870 ± 20	–18.97 ± 0.44	780 ± 20	IAAA–112815
4	30	Ⅲ –3 層	植物片 (炭化物)	1020 ± 20	–18.09 ± 0.46	910 ± 20	IAAA–112917

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第５７表　暦年較正結果

		較正用 年代値	暦年較正年代（cal）														相対比	Code No.
4	1	810 ± 23	σ	cal	AD	1,219	–	cal	AD	1,255	cal	BP	731	–	695	1.000	IAAA–112810
			2 σ	cal	AD	1,186	–	cal	AD	1,268	cal	BP	764	–	682	1.000	
4	3	908 ± 23	σ	cal	AD	1,046	–	cal	AD	1,091	cal	BP	904	–	859	0.587	IAAA–112811
				cal	AD	1,121	–	cal	AD	1,140	cal	BP	829	–	810	0.222	
				cal	AD	1,148	–	cal	AD	1,164	cal	BP	802	–	786	0.192	
			2 σ	cal	AD	1,038	–	cal	AD	1,186	cal	BP	912	–	764	0.986	
				cal	AD	1,200	–	cal	AD	1,205	cal	BP	750	–	745	0.014	
4	9	891 ± 23	σ	cal	AD	1,052	–	cal	AD	1,081	cal	BP	898	–	869	0.362	IAAA–112812
				cal	AD	1,127	–	cal	AD	1,134	cal	BP	823	–	816	0.058	
				cal	AD	1,152	–	cal	AD	1,188	cal	BP	798	–	762	0.492	
				cal	AD	1,198	–	cal	AD	1,206	cal	BP	752	–	744	0.087	
			2 σ	cal	AD	1,044	–	cal	AD	1,101	cal	BP	906	–	849	0.356	
				cal	AD	1,119	–	cal	AD	1,143	cal	BP	831	–	807	0.118	
				cal	AD	1,146	–	cal	AD	1,215	cal	BP	804	–	735	0.527	
4	11	971 ± 24	σ	cal	AD	1,022	–	cal	AD	1,045	cal	BP	928	–	905	0.496	IAAA–112813
				cal	AD	1,094	–	cal	AD	1,120	cal	BP	856	–	830	0.406	
				cal	AD	1,141	–	cal	AD	1,147	cal	BP	809	–	803	0.098	
			2 σ	cal	AD	1,017	–	cal	AD	1,057	cal	BP	933	–	893	0.420	
				cal	AD	1,076	–	cal	AD	1,154	cal	BP	874	–	796	0.580	
4	13	1204 ± 23	σ	cal	AD	778	–	cal	AD	829	cal	BP	1,172	–	1,121	0.641	IAAA–112915
				cal	AD	838	–	cal	AD	867	cal	BP	1,112	–	1,083	0.359	
			2 σ	cal	AD	725	–	cal	AD	738	cal	BP	1,225	–	1,212	0.025	
				cal	AD	771	–	cal	AD	889	cal	BP	1,179	–	1,061	0.975	
4	17	921 ± 22	σ	cal	AD	1,045	–	cal	AD	1,095	cal	BP	905	–	855	0.614	IAAA–112814
				cal	AD	1,120	–	cal	AD	1,141	cal	BP	830	–	809	0.276	
				cal	AD	1,147	–	cal	AD	1,157	cal	BP	803	–	793	0.110	
			2 σ	cal	AD	1,033	–	cal	AD	1,164	cal	BP	917	–	786	1.000	
4	26	2269 ± 24	σ	cal	BC	392	–	cal	BC	358	cal	BP	2,341	–	2,307	0.712	IAAA–112916
				cal	BC	278	–	cal	BC	258	cal	BP	2,227	–	2,207	0.268	
				cal	BC	241	–	cal	BC	240	cal	BP	2,190	–	2,189	0.020	
			2 σ	cal	BC	397	–	cal	BC	352	cal	BP	2,346	–	2,301	0.551	
				cal	BC	294	–	cal	BC	229	cal	BP	2,243	–	2,178	0.431	
				cal	BC	220	–	cal	BC	212	cal	BP	2,169	–	2,161	0.018	
4	27	874 ± 23	σ	cal	AD	1,159	–	cal	AD	1,211	cal	BP	791	–	739	1.000	IAAA–112815
			2 σ	cal	AD	1,048	–	cal	AD	1,085	cal	BP	902	–	865	0.152	
				cal	AD	1,123	–	cal	AD	1,138	cal	BP	827	–	812	0.038	
				cal	AD	1,150	–	cal	AD	1,220	cal	BP	800	–	730	0.810	
4	30	1023 ± 21	σ	cal	AD	995	–	cal	AD	1,007	cal	BP	955	–	943	0.502	IAAA–112917
				cal	AD	1,011	–	cal	AD	1,022	cal	BP	939	–	928	0.498	
			2 σ	cal	AD	985	–	cal	AD	1,030	cal	BP	965	–	920	1.000	

1) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2) 暦年計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2 σは 95% である
5) 相対比は、σ、2 σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第５８表　重軽鉱物組成

試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	ザクロ石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
試料番号1　Ⅲ –3層	117	46	44	0	0	43	0	250	0	0	0	17	189	44	250
試料番号2　Ⅲ –4層	72	9	87	0	2	76	4	250	0	0	0	18	199	33	250
試料番号3　Ⅲ –6層	151	48	24	0	2	19	6	250	0	0	0	8	178	64	250
試料番号9　Ⅲ –3層	115	31	36	0	0	61	7	250	0	0	0	21	176	53	250
試料番号10　Ⅲ –4層	87	28	23	0	1	105	6	250	0	0	0	23	147	80	250
試料番号11　Ⅲ –5層	133	31	27	0	3	54	2	250	0	0	0	16	130	104	250
試料番号12　Ⅲ –6層	137	49	19	0	2	35	8	250	0	0	0	18	139	93	250
試料番号13　Ⅲ –6層	134	41	19	1	1	37	17	250	0	0	0	16	158	76	250
試料番号23　Ⅲ –1層	91	31	16	0	1	88	23	250	0	0	0	21	118	111	250
試料番号24　Ⅲ –7層	87	30	10	0	1	116	6	250	0	1	0	20	97	132	250
試料番号25　Ⅲ –7層	82	23	16	0	2	126	1	250	0	0	0	35	118	97	250
試料番号26　Ⅲ –7層	140	45	10	0	0	50	5	250	0	1	0	5	123	121	250
試料番号27　Ⅲ –3層	124	30	34	0	0	47	15	250	0	0	0	28	123	99	250
試料番号30　Ⅲ –3層	137	45	31	0	0	37	0	250	0	0	0	32	128	90	250
試料番号31　Ⅴ層	144	85	2	0	0	12	7	250	0	0	0	5	85	160	250

第５９表　火山岩類の構成物量比

試料番号	層位	岩石名	斑晶					石基						変質鉱物		クラック	孔隙
			斜長石	斜方輝石	単斜輝石	かんらん石	不透明鉱物	クリストバライト	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	かんらん石	火山ガラス	スメクタイト	水酸化鉄		
4–33	Ⅲ層	斜方輝石単斜輝石安山岩	○	＋	＋		±	＋	○	＋	△		△	±	＋	＋	
4–37	Ⅲ層	かんらん石含有斜方輝石単斜輝石安山岩	○	＋	＋	±	±	±	○	＋	△	±	△		±		±
4–39	Ⅴ層	斜方輝石単斜輝石安山岩	○	＋	＋		±		○	＋	△	±	△		±		△

量比　◎：多量　○：中量　△：少量　＋：微量　±：きわめて微量

第６０表　深成岩類の構成物量比

試料番号	層位	岩石名	構成物							変質鉱物				クラック
			石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	角閃石	燐灰石	不透明鉱物	緑泥石	アクチノ閃石	緑レン石	水酸化鉄	
4–36	Ⅲ層	黒雲母角閃石トーナル岩	△	＋	○	±	±	±	＋	＋	＋	±	＋	＋

量比　◎：多量　○：中量　△：少量　＋：微量　±：きわめて微量

第61表　珪藻分析結果

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	III –3 4–1	III –4 4–2	III –6 4–3	III –3 4–9	III –4 4–10	III –5 4–11	III –6 4–12	III –6 4–13	III –7 4–26	III –3 4–27	III –3 4–30
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	8
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	5	–	–	1	–	14	2	–	–	–	–
Aulacoseira alpigena (Grun.) Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	M,U	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	6	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Caloneis leptosoma Krammer and Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	–	–	–	–	1	–	–	–	4	–
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	17	1	–	10	–	5	–	–	–	–	–
Caloneis silicula var. intermedia Mayer	Ogh-ind	al-il	ind	O	5	1	–	3	–	3	–	–	–	–	–
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	2	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	6
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	–	–	–	–	3	–	–	–	–	1
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	4
Craticula cuspidata (Kutz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	–	–	4	–	2	–	–	–	1	–
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella heteropleura (Eheenbrg) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		2	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		6	–	–	4	–	–	1	–	–	–	–
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	–	–	–	–	–	4	–	–	–	–	–
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	–	–	–	7	–	5	–	–	–	–	–
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	29	–	–	9	–	12	2	–	–	–	–
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	3
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	23	–	–	34	–	1	–	–	–	–	–
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Ven Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	7	–	–	5	–	3	–	–	–	–	–
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	11	–	–	1	–	4	–	–	–	1	–
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	1	3	1	3	–	–	–	3	–
Diploneis elliptica (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA,T	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	U	–	–	–	–	–	3	2	–	–	–	2
Epithemia turgida var. westermannii (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	1	3	4	1	–	51
Epithemis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	4
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3
Eunotia pectinalis (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	5	–	1	3	–	4	3	–	–	1	12
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	6	–	–	–	–	–
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema parvulum (Kuetzing) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	13	–	–	13	–	18	–	–	–	–	–
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	–	–	7	–	12	–	–	–	69	3
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–
Navicula cryptocephala Kutzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	–	–	–	–	4	–	–	–	2	–
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	–	–	–	3	–	3	–	–	–	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Nitzschia sigmoidea (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Orthoseira roeseana (Rabenhorst.) O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,P	2	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia brevicostata var. sumatrana Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O	6	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	4	–	–	8	–	3	–	–	–	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	5	–	–	13	–	15	–	–	–	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	–	–	2	–	8	–	–	–	8	16
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	13	–	–	18	–	13	1	1	–	2	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		8	2	1	12	1	9	2	1	2	7	–
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lang-Bertalot	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	O,U	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–	–
Sellaphora laevissima (Kutz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Sellaphora pupula (Kutz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	6	–	–	10	–	–	–	–	–	–	–
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					204	4	3	179	2	203	17	6	3	107	120
珪藻化石総数					204	4	3	179	2	203	17	6	3	107	120

凡例

塩分・ｐＨ・流水に対する適応性

H.R.: 塩分濃度に対する適応性
- Euh : 海水生種
- Euh-Meh : 海水生種 - 汽水生種
- Meh : 汽水生種
- Ogh-hil : 貧塩 - 好塩性種
- Ogh-ind : 貧塩 - 不定性種
- Ogh-hob : 貧塩 - 嫌塩性種
- Ogh-unk : 貧塩 - 不明種

pH: 水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
- al-bi : 真ｱﾙｶﾘ性種
- al-li : 好ｱﾙｶﾘ性種
- ind : pH- 不定性種
- ac-il : 好酸性種
- ac-bi : 真酸性種
- unk : pH 不明種

C.R.: 流水に対する適応性
- l-bi : 真止水性種
- l-ph : 好止水性種
- ind : 流水不定性種
- r-ph : 好流水性種
- r-bi : 真流水性種
- unk : 流水不明種

環境指標種

K: 中～下流性河川指標種　M: 湖沼浮遊性種　O: 沼沢湿地付着生種　P: 高層湿原指標種群　（以上は安藤，1990）
S: 好汚濁性種　U: 広適応性種　T: 好清水性種（以上は Asai,K. & Watanabe,T.1995）
RI: 陸生珪藻（RA:A 群 ,RB:B 群、伊藤・堀内，1991）

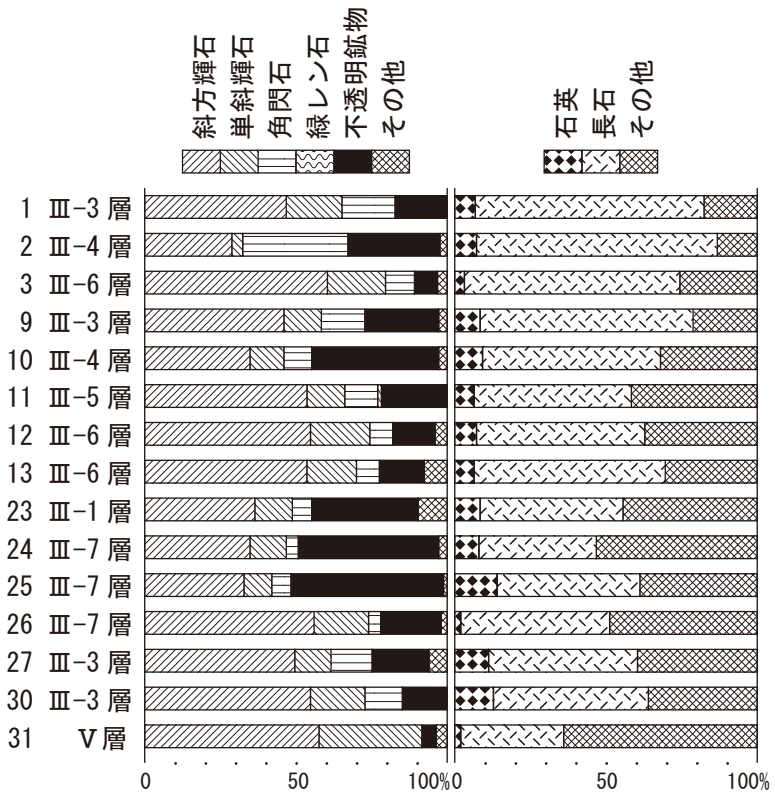
第62表　花粉分析結果

種　類	III –3 4–1	III –4 4–2	III –6 4–3	III –3 4–9	III –4 4–10	III –5 4–11	III –6 4–12	III –6 4–13	III –7 4–26	III –3 4–27	III –3 4–30
木本花粉											
モミ属	20	2	32	30	–	58	13	1	–	36	3
ツガ属	59	–	14	46	1	36	9	–	–	51	2
トウヒ属	14	1	–	17	1	16	4	–	–	6	2
マツ属単維管束亜属	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	6	–	3	18	–	18	4	–	–	5	–
マツ属（不明）	21	2	6	11	–	10	14	–	–	16	2
コウヤマキ属	1	–	2	2	–	–	–	–	–	1	–
スギ属	29	1	7	32	–	35	46	–	–	35	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	14	–	–	13	–	6	6	–	–	6	–
ヤナギ属	–	–	–	–	–	1	2	–	–	–	–
サワグルミ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
クルミ属	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	2	–	–	5	–	2	3	–	–	2	–
カバノキ属	6	–	2	4	1	1	1	–	–	2	–
ハンノキ属	4	–	2	3	1	1	5	–	–	7	–
ブナ属	18	–	2	13	–	5	–	–	–	2	–
コナラ属コナラ亜属	17	–	21	20	–	16	42	–	–	10	1
コナラ属アカガシ亜属	2	–	–	3	–	–	2	–	–	3	1
クリ属	–	–	6	–	–	1	1	–	–	–	–
ニレ属－ケヤキ属	4	–	3	15	1	4	3	–	–	12	–
カツラ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
ウルシ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
カエデ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	2	–
トチノキ属	–	–	2	–	–	–	2	–	–	–	–
シナノキ属	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
イボタノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
スイカズラ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
草本花粉											
ガマ属	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
オモダカ属	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
イネ属	32	–	–	51	–	11	2	–	–	6	–
他のイネ科	91	10	4	100	4	26	18	–	–	36	–
カヤツリグサ科	22	–	7	35	–	9	15	–	–	23	–
ミズアオイ属	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
クワ科	1	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–
サナエタデ節－ウナギツカミ節	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
タデ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	3	–
ソバ属	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
アカザ科	1	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–
ナデシコ科	–	–	–	1	–	2	2	–	–	–	–
キンポウゲ科	2	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
ノアズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
マメ科	1	–	–	–	–	2	–	–	–	1	–
オミナエシ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ゴキヅル属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ヨモギ属	4	1	9	4	6	12	19	–	–	74	–
キク亜科	1	2	1	–	–	1	1	–	–	4	–
タンポポ亜科	2	3	1	3	1	2	6	–	–	1	–
不明花粉											
不明花粉	2	–	2	1	1	2	2	–	–	4	–
シダ類胞子											
イノモトソウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
他のシダ類胞子	56	4	116	94	15	71	85	–	–	125	88
合　計											
木本花粉	218	6	103	235	6	212	161	1	0	196	12
草本花粉	160	16	29	196	11	69	66	0	0	152	0
不明花粉	2	0	2	1	1	2	2	0	0	4	0
シダ類胞子	56	4	116	94	15	71	85	0	0	125	88
合計（不明を除く）	434	26	248	525	32	352	312	1	0	473	100

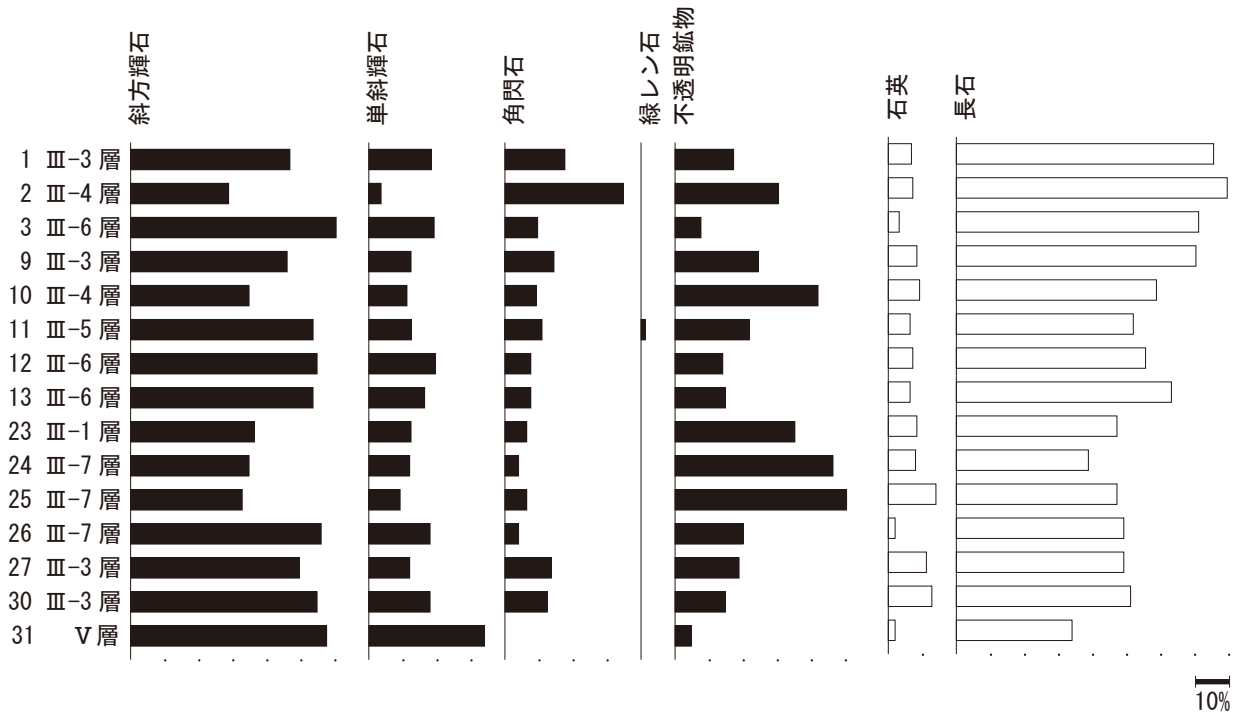
第６３表　微細物分析結果

種類	Ⅲ−3層 4−1	Ⅲ−4層 4−2	Ⅲ−6層 4−3	Ⅲ−6層 4−4	Ⅲ−3層 4−5	Ⅲ−4層 4−6	Ⅲ−6層 4−7	Ⅲ−6層 4−8	Ⅲ−3層 4−9	Ⅲ−4層 4−10	Ⅲ−5層 4−11	Ⅲ−6層 4−12	Ⅲ−6層 4−13	Ⅲ−3層 4−14	Ⅲ−4層 4−15	Ⅲ−5層 4−16	Ⅲ−5層 4−18	Ⅲ−6層 4−19	Ⅲ−3層 4−20	Ⅲ−4層 4−21	Ⅲ−5層 4−22	Ⅲ−3層 4−27	Ⅲ−3層 4−28	Ⅲ−3層 4−29	Ⅲ−3層 4−30
木本類																									
モミ属（葉）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	6	−	−	−	−	−	−	−	−
サワシバ（果実）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イヌシデ（果実）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
アサダ（果実）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
カバノキ属（果実）	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
ケヤキ（果実）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カジノキ属（種子）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ヤマグワ（種子）	1	−	−	−	1	−	−	1	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キイチゴ属（核）	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ウルシ属（核）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カエデ属（果実）	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
トチノキ属（幼果）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ブドウ属（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ノブドウ（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
グミ属（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マタタビ（種子）	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	2	2	1	−	−	−	−	1	−	−
サルナシ（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−
タラノキ（核）	−	−	1	3	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ムラサキシキブ属（核）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−
ミズキ（核）	−	−	−	1	−	−	3	1	−	−	1	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
エゴノキ（核）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ニワトコ（核）	−	−	3	3	−	−	2	1	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	1	−	−
草本類																									
ホッスモ（種子）	12	−	−	−	10	−	−	−	19	1	−	−	−	40	−	7	−	−	36	−	−	−	−	−	−
オモダカ属（果実）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	2	4	−	−	−	2	−	−	−	−
サジオモダカ属（果実）	−	−	−	2	−	−	1	3	−	−	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オモダカ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−
イネ（炭化胚乳）	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イネ（炭化穎）	3	−	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
イネ（非炭化穎）	5	−	−	−	3	−	−	3	1	−	5	2	−	1	−	3	2	−	1	−	−	−	−	−	−
コムギ（胚乳）	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アワ（炭化胚乳）	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
エノコログサ属（穎）	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
イネ科（穎）	5	−	−	−	4	−	1	1	−	−	2	1	−	1	−	5	3	−	−	−	−	−	−	−	−
ホタルイ属（果実）	53	−	−	−	49	−	1	−	117	−	−	1	−	94	−	5	2	−	101	−	3	12	−	−	−
スゲ属（果実）	−	−	1	−	−	−	1	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カヤツリグサ科（果実）	−	−	11	49	2	−	19	6	5	−	9	8	−	4	1	6	3	−	−	−	−	7	1	−	−
イボクサ（種子）	1	−	−	1	−	−	1	−	1	−	11	4	−	4	−	8	3	−	1	−	5	1	−	−	−
ミズアオイ属（種子）	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
カナムグラ（種子）	−	−	1	−	−	−	2	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−
タデ属（果実）	1	−	−	−	−	−	7	12	−	−	4	−	−	−	−	9	1	1	−	−	2	2	1	−	−
アカザ科（種子）	−	−	7	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	19	−	−
ナデシコ科（種子）	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	5	1	−	−	−	5	2	−	−	−	−	−	1	−	−
キンポウゲ属（種子）	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タケニグサ（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キジムシロ類（核）	3	−	−	−	1	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
トウダイグサ ?（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−
エノキグサ（種子）	−	−	−	−	−	−	9	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
スミレ属（種子）	2	−	−	1	6	−	−	−	−	−	1	5	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
セリ科（果実）	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−
メハジキ属（果実）	−	−	3	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
エゴマ（果実）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
イヌコウジュ属（果実）	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ナス属（種子）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
メナモミ属（果実）	−	−	5	1	−	−	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−
タカサブロウ（果実）	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キク科（果実）	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
不明種実	−	−	4	9	3	−	3	4	−	−	4	2	−	−	−	4	3	1	−	−	−	5	8	−	−
合計	89	0	44	77	89	0	57	44	145	1	64	38	0	146	1	71	47	3	143	0	14	32	40	0	0
その他																									
虫	1	−	−	2	4	−	2	5	−	−	1	1	−	1	−	2	−	−	1	−	−	2	−	−	−
木材	4	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	1	−
炭化材	−	−	−	4	1	−	9	5	3	−	3	−	1	−	−	5	3	3	1	−	2	3	5	−	2
分析量（cc）	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	10	50
分析量（g）	371	401	342	309	376	455	332	345	377	389	338	387	399	414	424	389	337	422	433	441	342	406	401	10	71

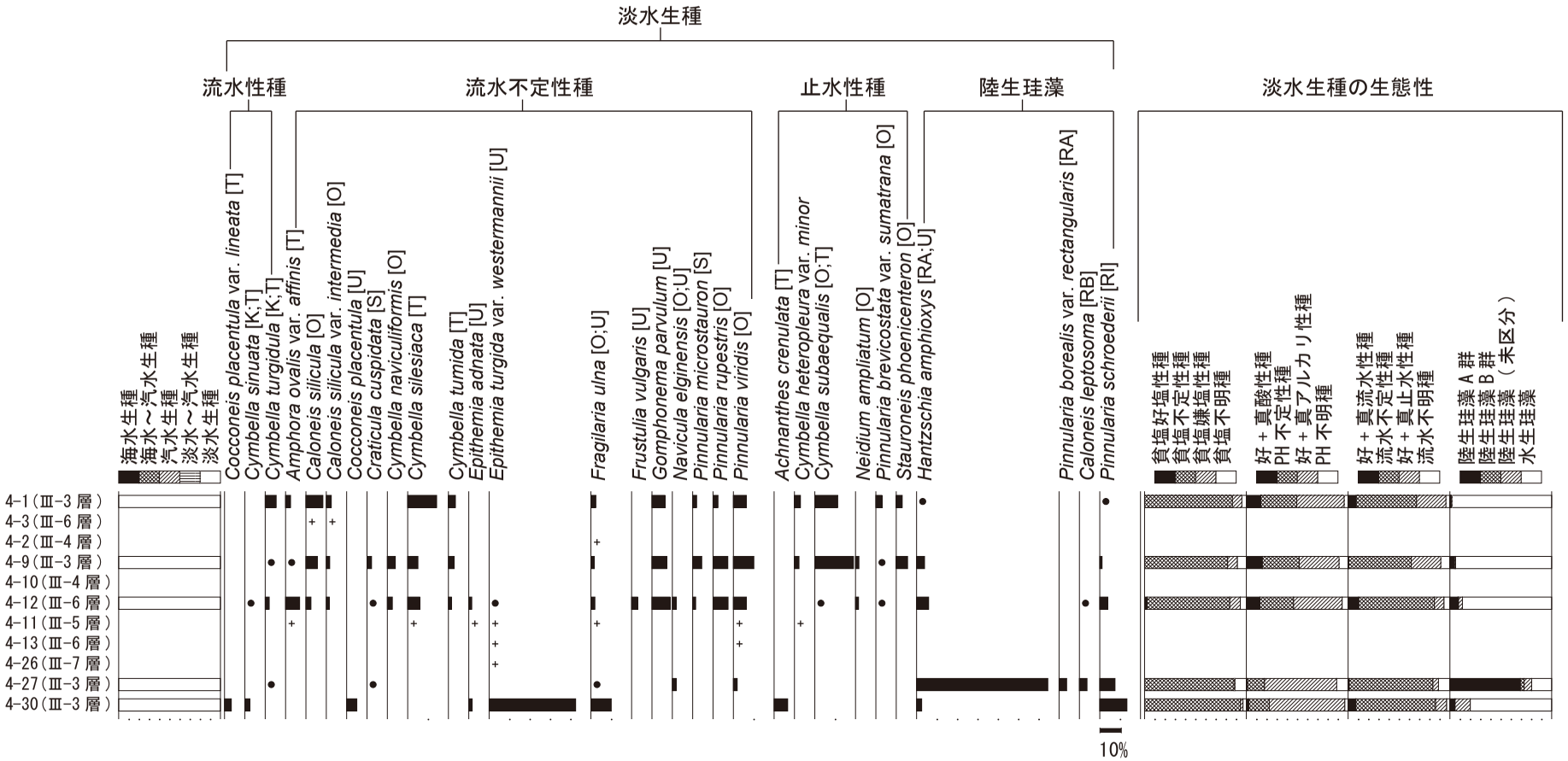
半分以上残っている破片は１つとして数えた。ただし、半分以下の個体は抽出していないが、半分以下の個体で種類が同定でき、かつ半分以上の個体が無い場合に限り、１つとして抽出している
イネの穎は細かくても１片を１個として計数する。



第２６５図　重軽鉱物組成(1)



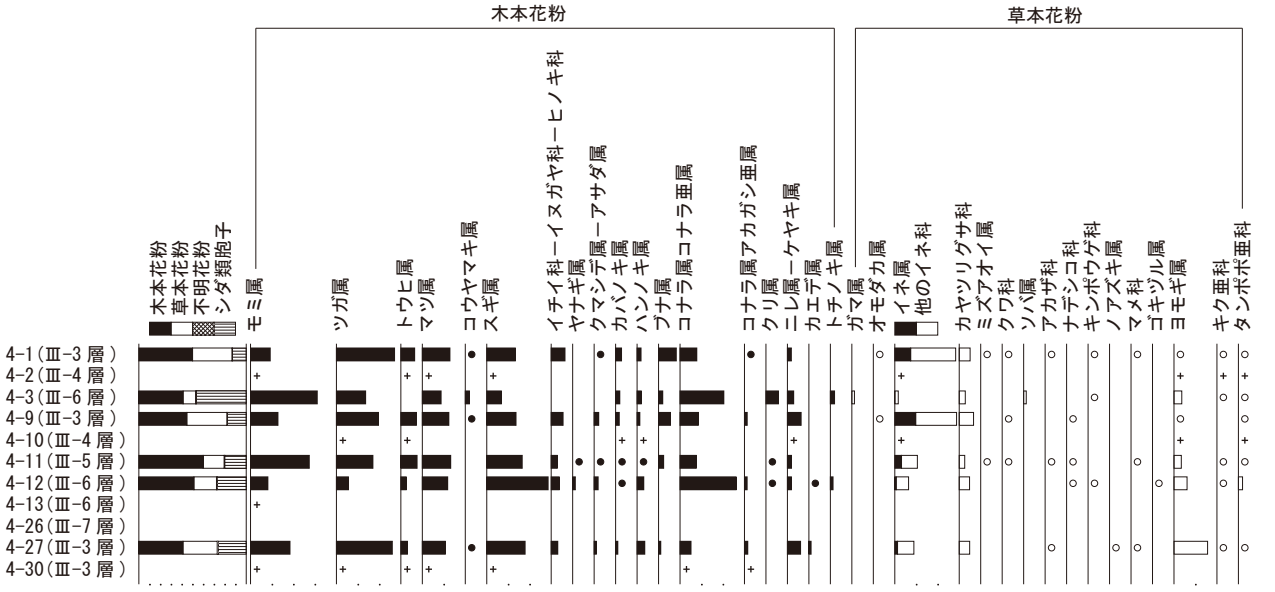
第２６６図　重軽鉱物組成(2)



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種
K:中～下流性河川指標種　O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤、1990)
S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995) RI:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群、伊藤・堀内、1991）

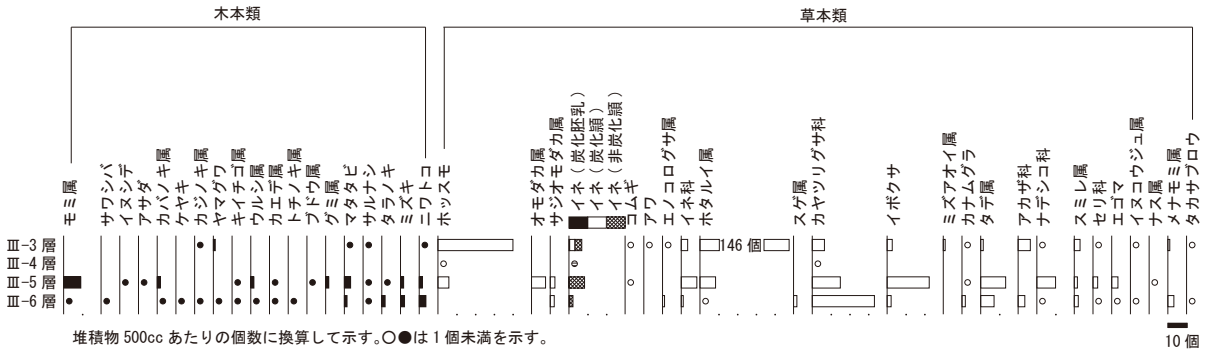
第２６７図　主要珪藻化石群集の層位分布



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。

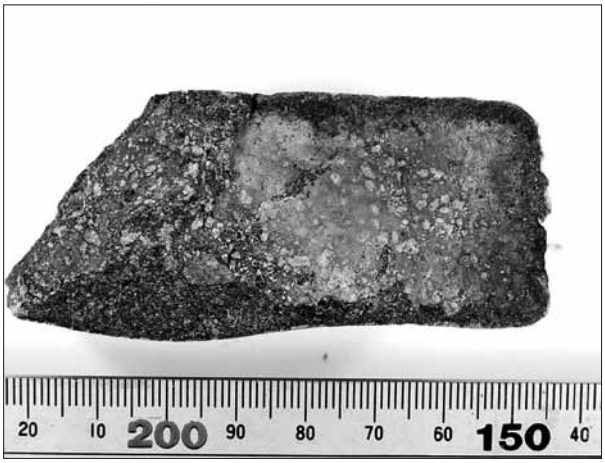
○●は 1% 未満、+ は木本花粉 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

第２６８図　主要花粉化石群集の層位分布

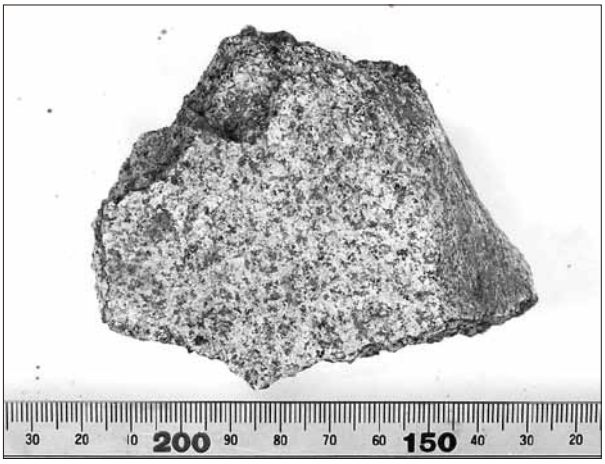


堆積物 500cc あたりの個数に換算して示す。○●は 1 個未満を示す。

第２６９図　主要種実遺体の層位分布

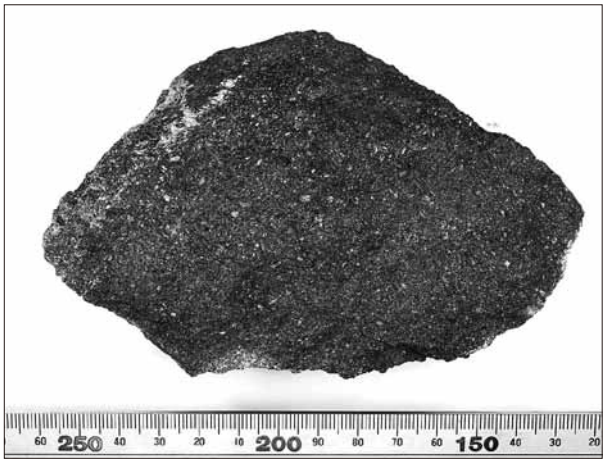


1. 試料番号33 Ⅲ層
斜方輝石単斜輝石安山岩

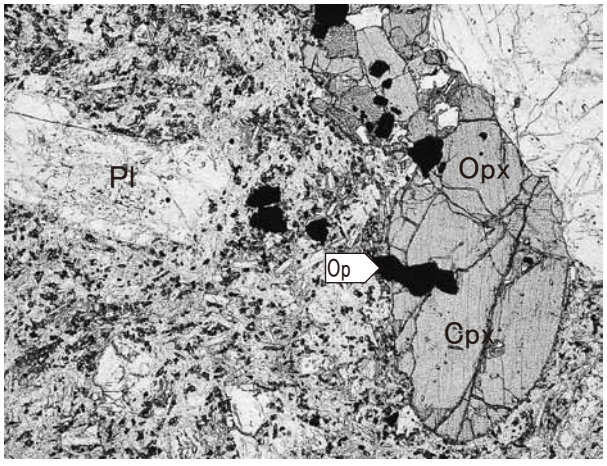


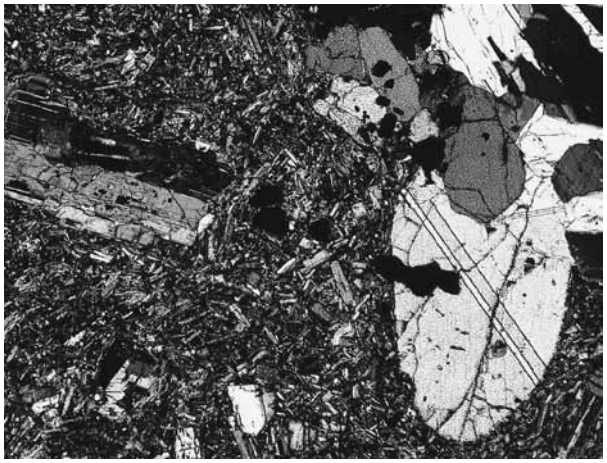
2. 試料番号36 Ⅲ層
黒雲母角閃石トーナル岩

3. 試料番号37 Ⅲ層
かんらん石含有斜方輝石単斜輝石安山岩



4. 試料番号39 Ⅴ層
斜方輝石単斜輝石安山岩



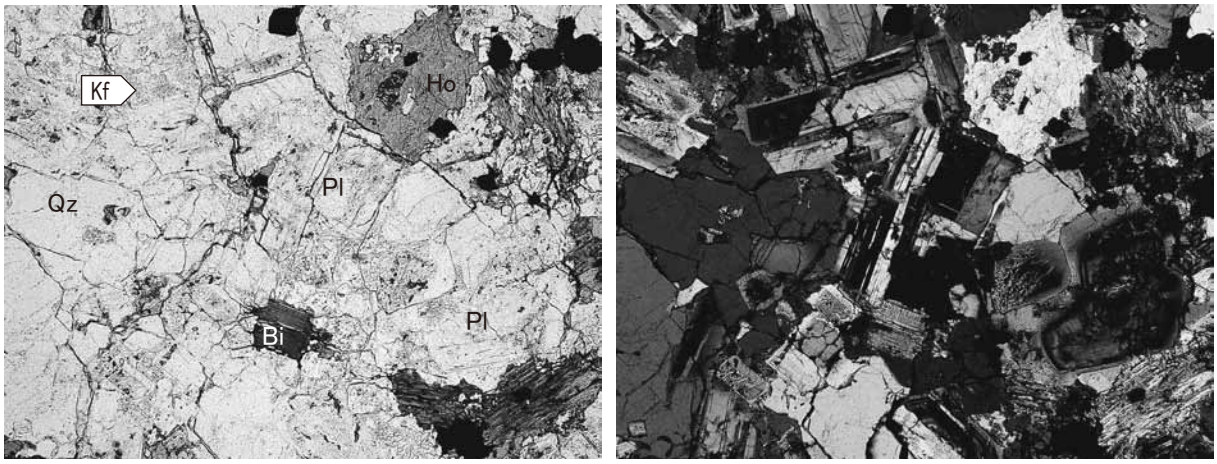


5. 試料番号33 Ⅲ層 斜方輝石単斜輝石安山岩

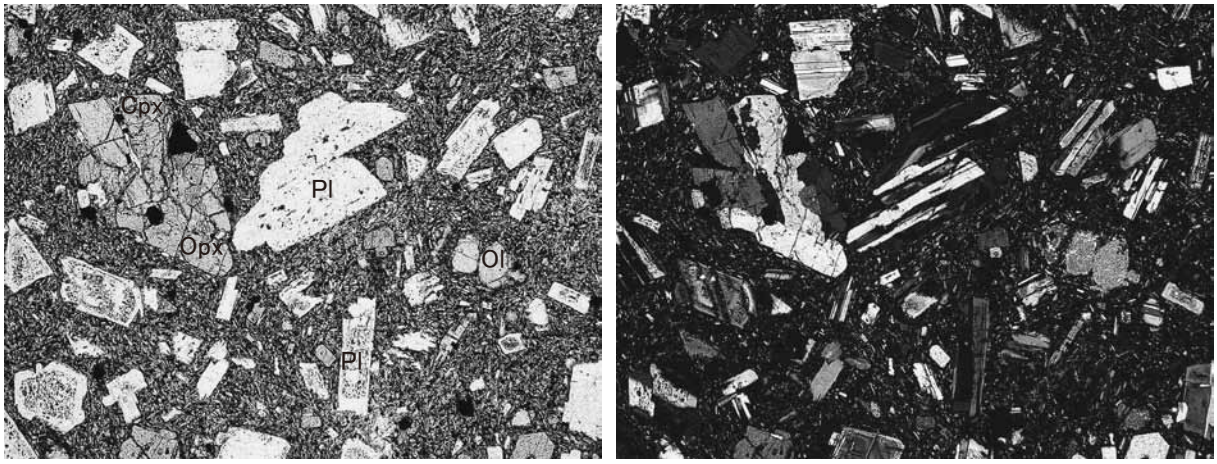
0.5mm

Pl:斜長石　Opx:斜方輝石　Cpx:単斜輝石　Op:不透明鉱物
薄片写真の左は下方ポーラー、右は直交ポーラー下。

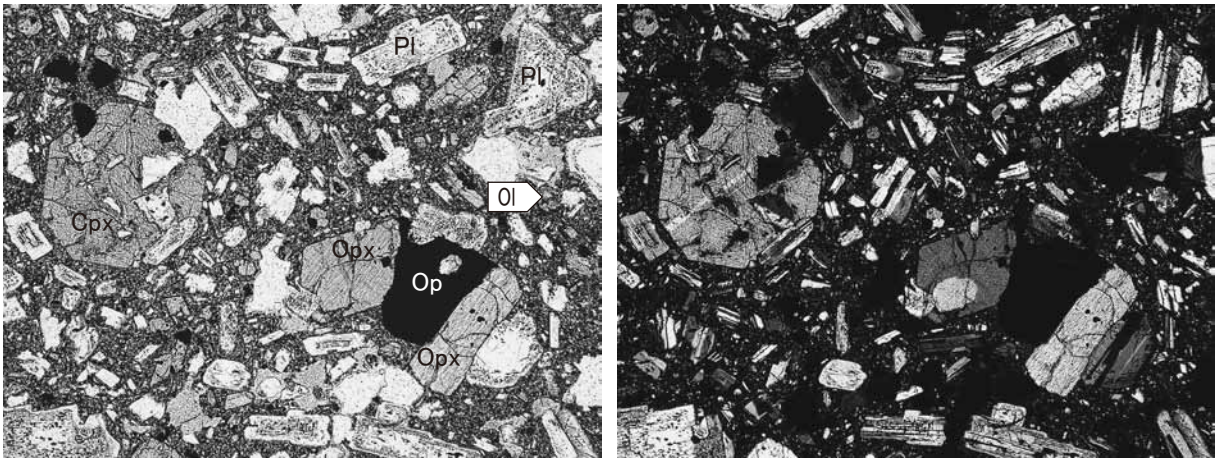
第270図　礫(1)



6. 試料番号36 Ⅲ層　黒雲母角閃石トーナル岩



7. 試料番号37 Ⅲ層　かんらん石含有斜方輝石単斜輝石安山岩

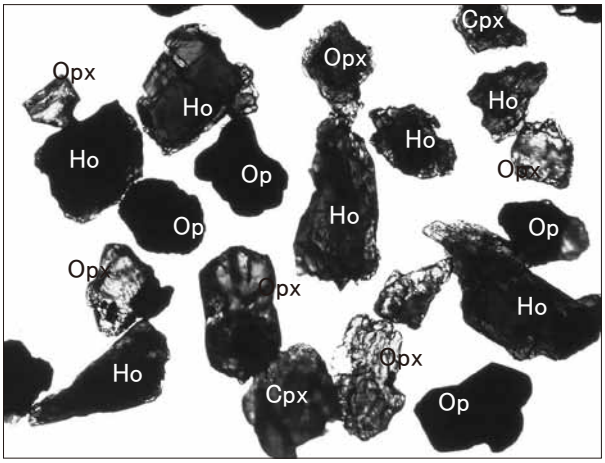


8. 試料番号39 Ⅴ層　斜方輝石単斜輝石安山岩

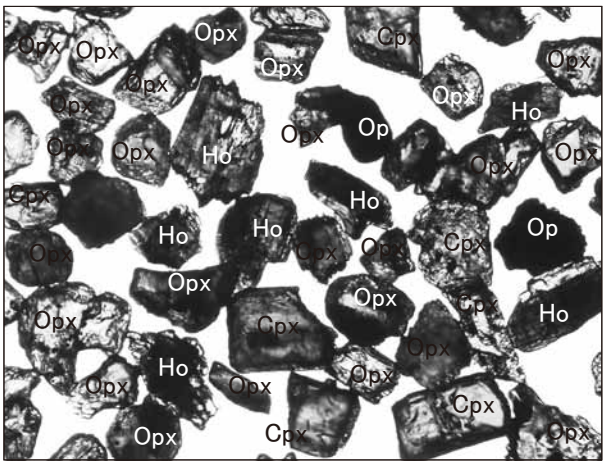
0.5mm

Qz：石英　Kf:カリ長石　Pl：斜長石　Bi:黒雲母　Ho:角閃石　Opx:斜方輝石　Cpx：単斜輝石
Ol：かんらん石　Op：不透明鉱物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

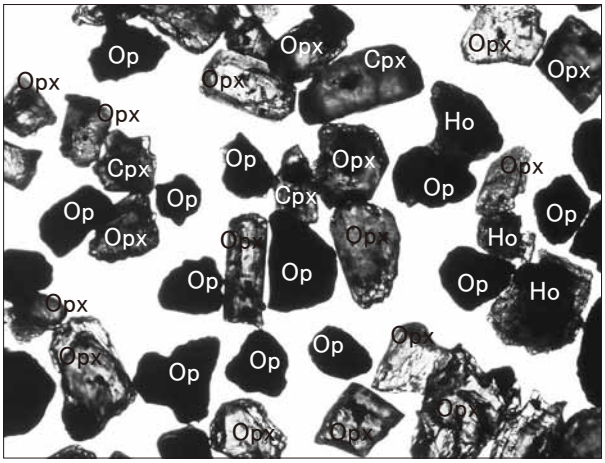
第271図 礫(2)



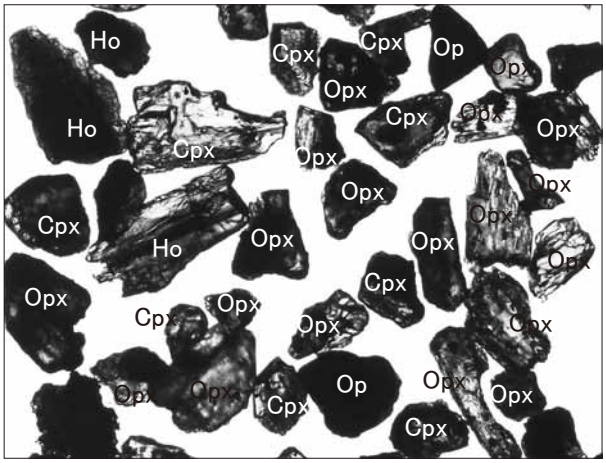
1. 重鉱物　試料番号2 Ⅲ-4層



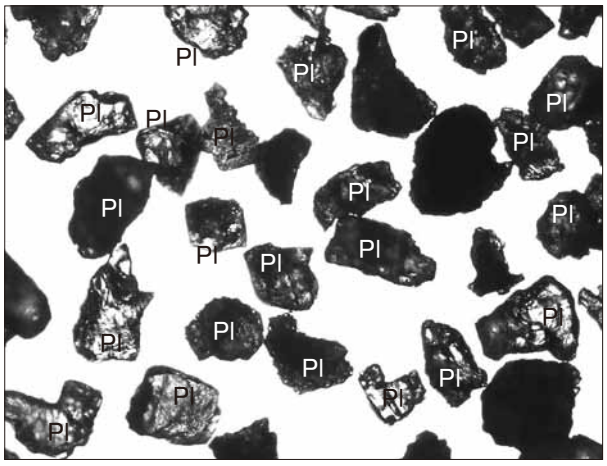
2. 重鉱物　試料番号3 Ⅲ-6層



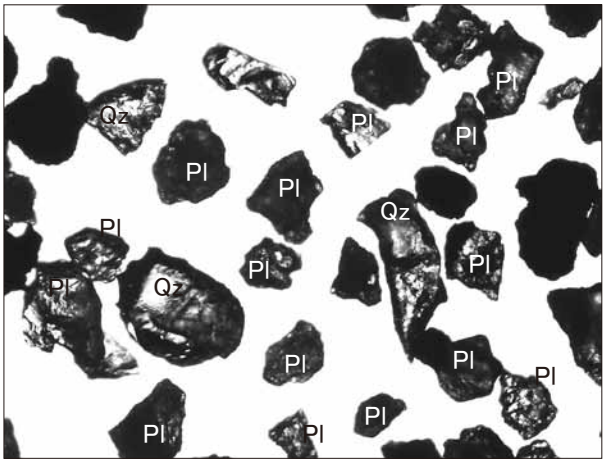
3. 重鉱物　試料番号25 Ⅲ-7層



4. 重鉱物　試料番号31 Ⅴ層



5. 軽鉱物　試料番号2 Ⅲ-4層

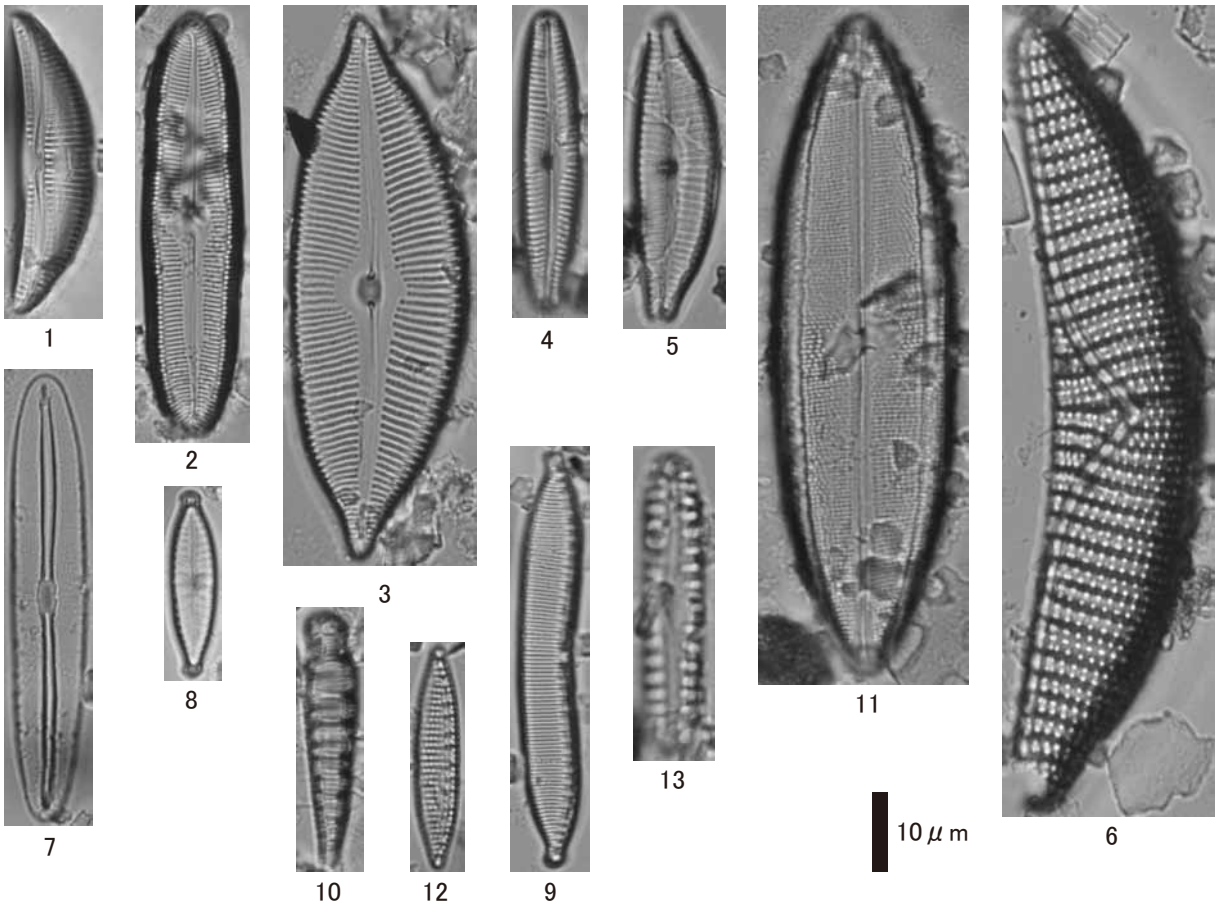


6. 軽鉱物　試料番号25 Ⅲ-7層

0.5mm

Qz:石英　Pl:斜長石　Ho:角閃石　Opx:斜方輝石　Cpx:単斜輝石　Op:不透明鉱物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

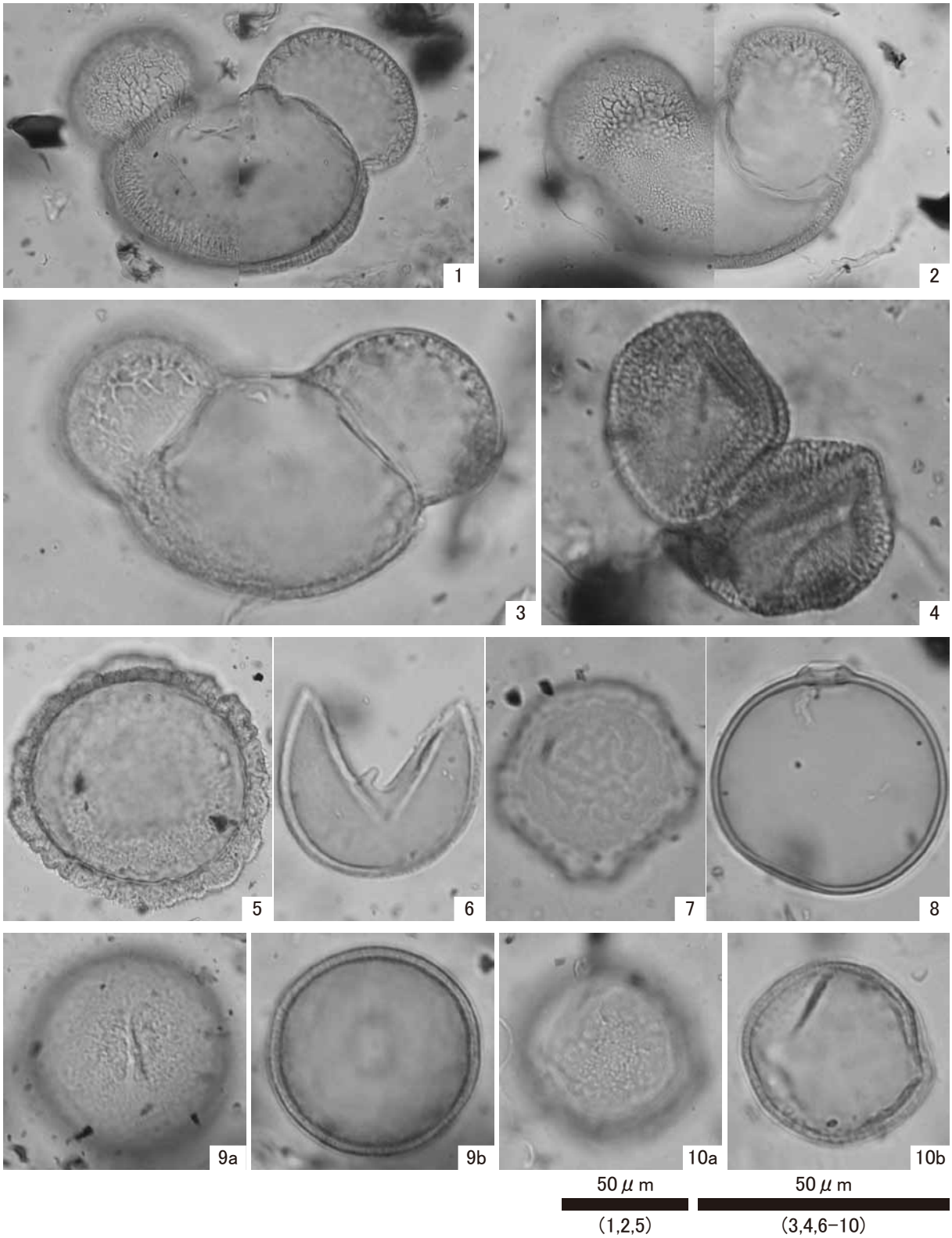
第272図　重軽鉱物



写真番号	種　　名
1	*Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck(試料番号4-11)
2	*Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve(試料番号4-11)
3	*Cymbella heteropleura* var. *minor* Cleve(試料番号4-11)
4	*Cymbella subaequalis* Grunow(試料番号4-1)
5	*Cymbella turgidula* Grunow(試料番号4-1)
6	*Epithemia turgida* var. *westermannii* (Ehr.) Grunow(試料番号4-30)
7	*Frustulia vulgaris* (Thwait.) De Toni(試料番号4-11)
8	*Gomphonema parvulum* (Kuetzing) Kuetzing(試料番号4-1)
9	*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(試料番号4-11)
10	*Meridion circulare* var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck(試料番号4-11)
11	*Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer(試料番号4-11)
12	*Nitzschia amphibia* Grunow(試料番号4-11)
13	*Pinnularia borealis* var. *rectangularis* Carlson(試料番号4-27)
14	*Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg(試料番号4-11)

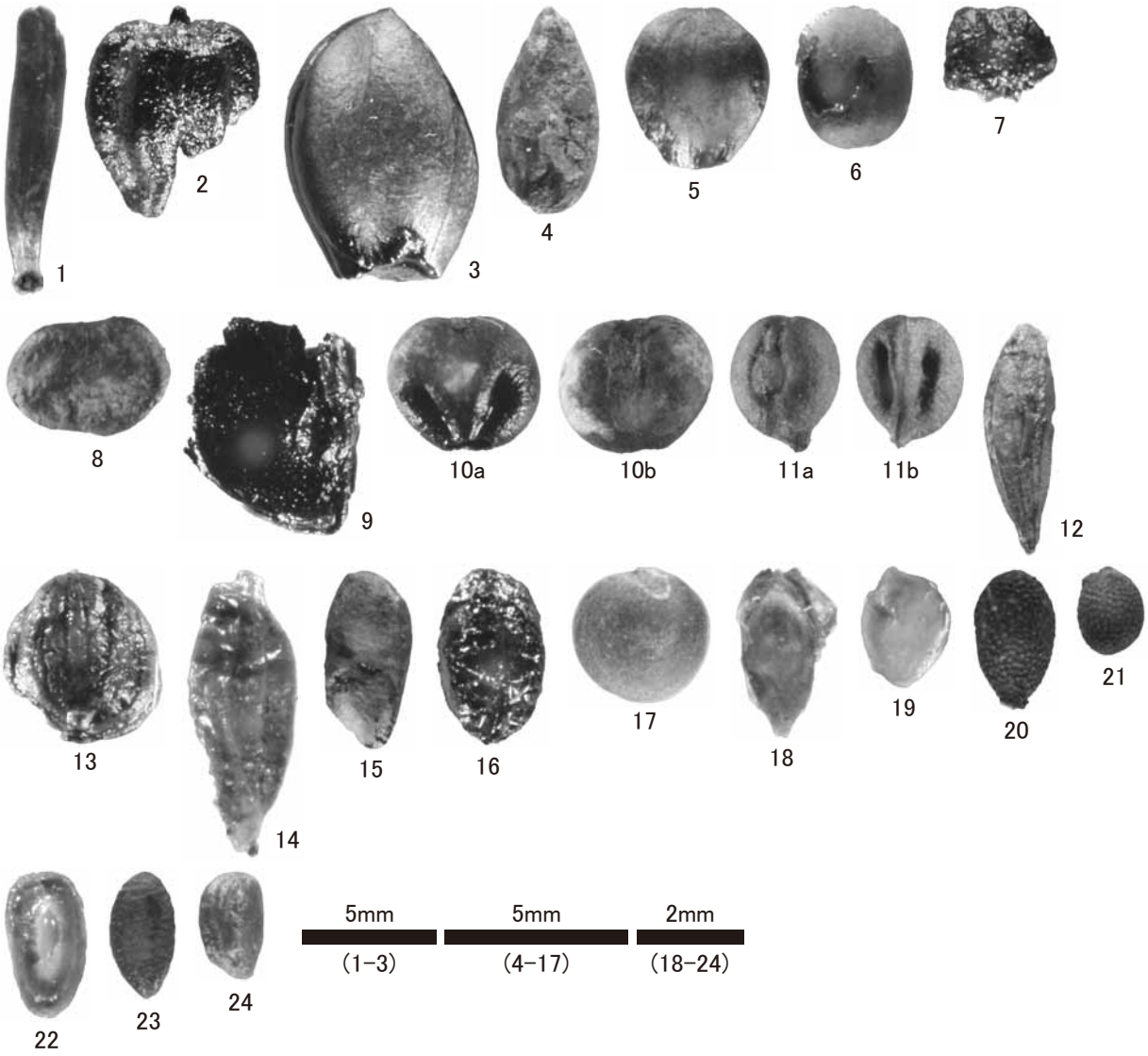
※Scale bar equals 10 μ m for all figures.

第２７３図　珪藻化石



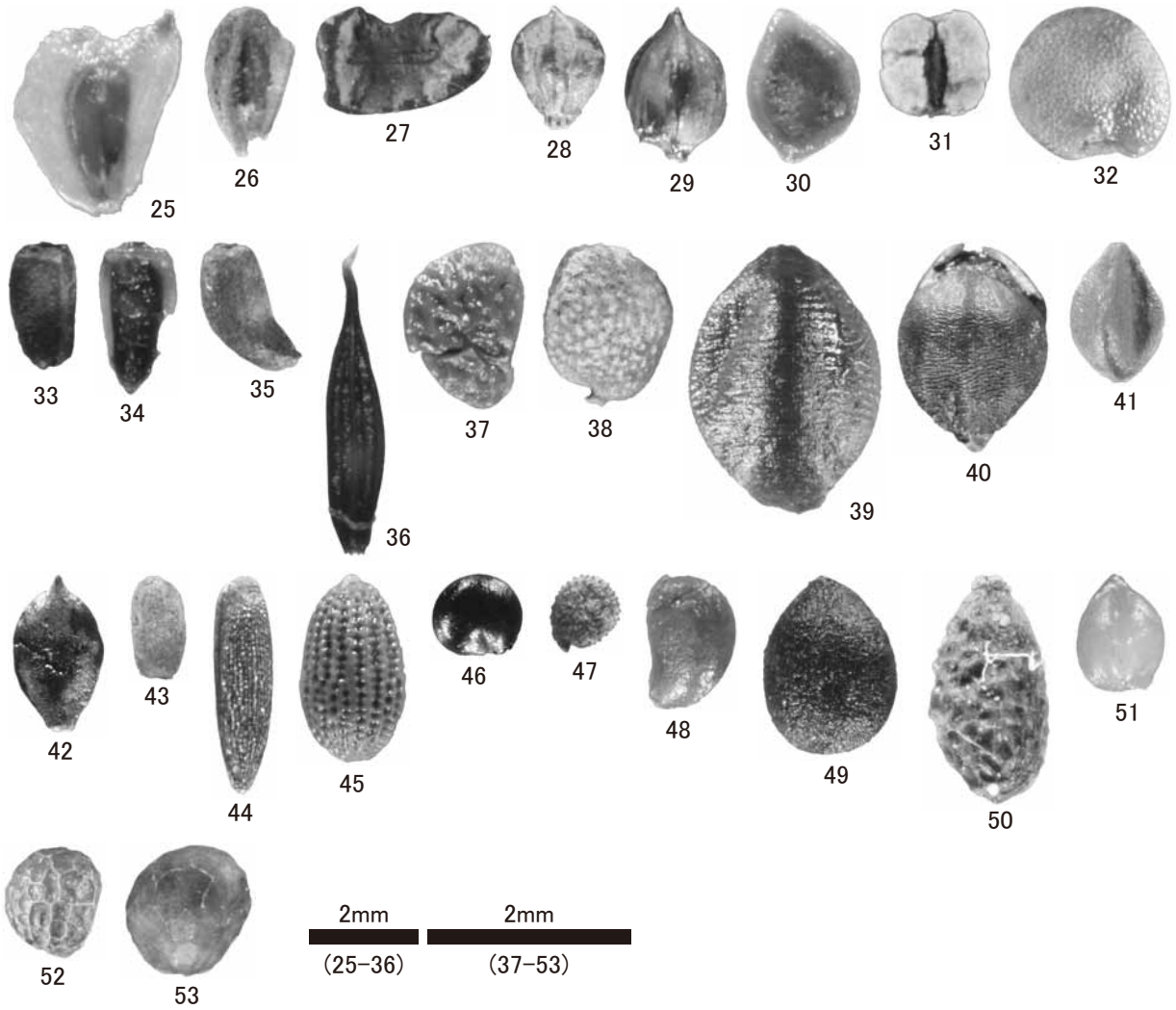
1．モミ属(試料番号4-11)
2．トウヒ属(試料番号4-11)
3．マツ属(試料番号4-1)
4．ソバ属(試料番号4-3)
5．ツガ属(試料番号4-1)
6．スギ属(試料番号4-11)
7．ニレ属―ケヤキ属(試料番号4-1)
8．イネ科(試料番号4-1)
9．ブナ属(試料番号4-1)
10．コナラ亜属(試料番号4-1)

第274図　花粉化石



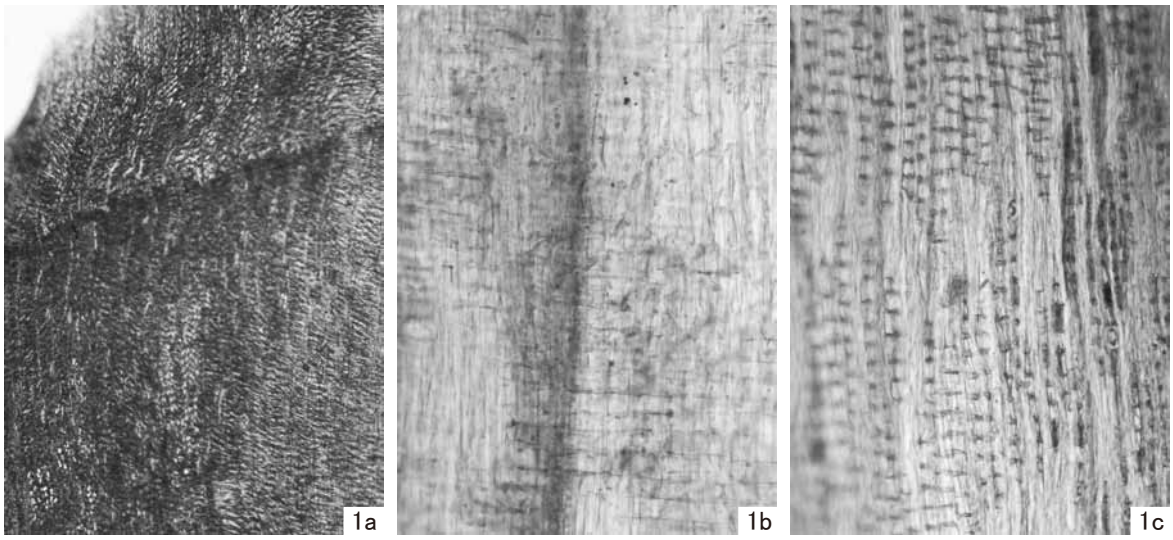
1．モミ属　葉(試料番号4-16)
2．トチノキ属　幼果(試料番号4-3)
3．エゴノキ　核(試料番号4-18)
4．アサダ　果実(試料番号4-22)
5．イヌシデ　果実(試料番号4-18)
6．サワシバ　果実(試料番号4-3)
7．ケヤキ　果実(試料番号4-3)
8．ウルシ属　核(試料番号4-16)
9．カエデ属　果実(試料番号4-18)
10．ノブドウ　種子(試料番号4-12)
11．ブドウ属　種子(試料番号4-18)
12．グミ属　種子(試料番号4-16)
13．ミズキ　核(試料番号4-4)
14．イネ　頴(試料番号4-16)
15．イネ　炭化胚乳(試料番号4-4)
16．コムギ　炭化胚乳(試料番号4-1)
17．カナムグラ　種子(試料番号4-28)
18．カバノキ属　果実(試料番号4-7)
19．ヤマグワ　種子(試料番号4-1)
20．サルナシ　種子(試料番号4-16)
21．マタタビ　種子(試料番号4-16)
22．ムラサキシキブ属　核(試料番号4-28)
23．ニワトコ　核(試料番号4-18)
24．タラノキ　核(試料番号4-4)

第２７５図　種実遺体(1)



25．オモダカ属　果実(試料番号4–18)
26．サジオモダカ属　果実(試料番号4–16)
27．イボクサ　種子(試料番号4–16)
28．ホタルイ属　果実(試料番号4–20)
29．タデ属　果実(試料番号4–16)
30．キンポウゲ属　種子(試料番号4–5)
31．セリ科　果実(試料番号4–18)
32．ナス属　種子(試料番号4–18)
33．メハジキ属　果実(試料番号4–4)
34．タカサブロウ　果実(試料番号4–4)
35．メナモミ属　果実(試料番号4–4)
36．キク科　果実(試料番号4–11)
37．キイチゴ属　核(試料番号4–18)
38．カジノキ属　種子(試料番号4–3)
39．エノコログサ属　頴(試料番号4–4)
40．アワ　果実(試料番号4–5)
41．スゲ属　果実(試料番号4–7)
42．カヤツリグサ科　果実(試料番号4–16)
43．ミズアオイ属　種子(試料番号4–20)
44．ホッスモ　種子(試料番号4–1)
45．タケニグサ　種子(試料番号4–11)
46．アカザ科　種子(試料番号4–28)
47．ナデシコ科　種子(試料番号4–16)
48．キジムシロ類　核(試料番号4–1)
49．エノキグサ　種子(試料番号4–27)
50．トウダイグサ?　種子(試料番号4–28)
51．スミレ属　種子(試料番号4–5)
52．イヌコウジュ属　果実(試料番号4–5)
53．エゴマ　果実(試料番号4–18)

第２７６図　種実遺体(2)



1. トチノキ近似種(試料番号4-17)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:a
100 μm:b,c

第２７７図　　木材

第７章　防空壕３次元測量調査

西関東連絡道路第Ⅱ期建設工事に伴い、兄川を渡る南山橋梁設置に際して、太平洋戦争末期に掘削・構築された兵器貯蔵壕が、工事の影響で壊れる可能性があり、コンクリートを投入して埋めることになった。その工事に先立ち、山梨市教育委員会も含めた協議のなかで、地域にとり重要な文化財との位置づけを行い、埋蔵文化財として記録保存を行うこととなった。

測量方法は、三次元レーザー計測による三次元データの作成と現況平面・横断面図等の作成である。

工事の影響区域には、現在確認できる防空壕跡が２か所ある。北側を防空壕跡Ａ、南側を防空壕跡Ｂとする。両者は、南山の東斜面裾部に並列して開口している。防空壕跡Ｂについては、内部調査の結果、本来もう１口の入口をもっていたことが判明したが、土砂の流入によって開口部が閉鎖状態となったことが確認できた。いずれの防空壕内部でも、壁面にはツルハシなどによる掘削痕が確認できる。しかし、当時の遺物については、確認することはできなかった。

実測調査は、平成22年10月25日から同年12月28日までを工期とし実施した。

第283 ～ 293図に平面・断面図を示す。防空壕跡Ａは、坑口からの奥行きが21mあり、坑口付近の断面形がかまぼこ形で幅1.6m、高さ1.4mである。奥は広くなるが、断面形は基本的にかまぼこ形で、幅３m、高さ1.8mである。鍵の手に交叉する２本の支線が、本線に直行して設定され、坑口から入って右手に伸びる支線は奥行き13m、左手に伸びる支線は５mである。後者は、防空壕跡Ｂ方向へのびており、その図面みると、両者がこの支線により連絡される計画であったことが分かる。

防空壕跡Ｂは、防空壕跡Ａの東側に隣接する。Ａよりも規模が大きく、Ｈ字形に坑道が配置されている。Ｈ字

第２７８図　防空壕調査箇所位置図

第２７９図　調査箇所　全景

第２８０図　調査箇所　全景

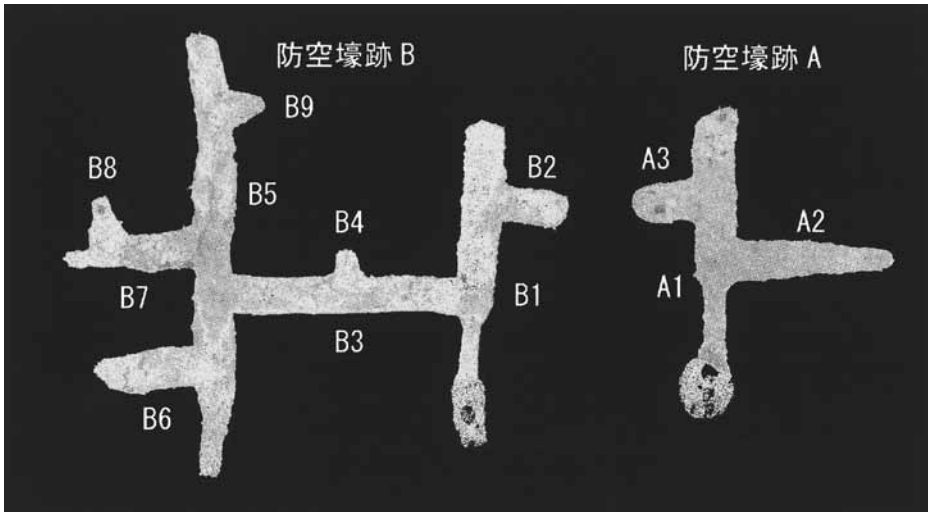
第２８１図　防空壕跡Ａ　坑口

第２８２図　防空壕跡Ｂ　坑口

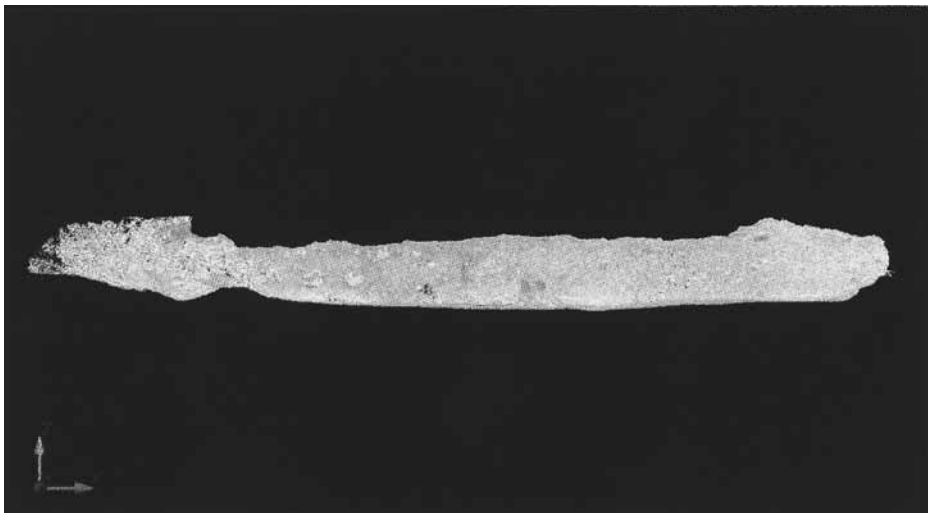
形の東側の坑道の入口が埋まっており、これを認めると、坑口の間隔は10mに設定されている。坑口からの奥行きが22mとＡと同様であり、坑口付近の断面形がかまぼこ形で幅1.5m、高さ1.2mである。坑口から入って右手に伸びる支線は奥行き５mで、防空壕跡Ａと連結すべく掘削されていたと考えられる。左手に伸びる坑道は長く、18mある。断面形はかまぼこ形で、幅2.8m、高さ1.7mである。さらに東側の坑道は長く36mで、幅３m、高さ1.8mである。さらに支線が３本設置されているが、掘削途上で放棄された可能性がある。

この防空壕については、『山梨の戦争遺跡』（山梨県戦争遺跡ネットワーク2000山梨日日新聞社）の中で、鮎沢譲氏が記述されている。それによると、太平洋戦争末期の1944年（昭和19）から1945年初めにかけて、「東京陸軍兵器補給廠山梨分廠」として掘削された兵器貯蔵庫であるとされる。56本の兵器貯蔵庫が掘削されたという記録があるとされ、高射砲などの砲弾・弾薬、ガソリン・軽油などが、終戦時まで保管されていたという。この掘削には、近郷の勤労奉仕の一般人約800人のほか、日川中学校（現日川高校）の生徒約300人、農蚕学校の生徒約150人、山梨高等女学校の生徒などが動員されたとされる。掘削を担当した陸軍部隊は、菊水隊と呼ばれ、20人ほどの兵隊で構成されていたという。掘削作業は、ツルハシやガジを使った手掘り作業で、一つの壕に10人ほどが割り振られ、１日30ｃm程度を掘り進み、掘削廃土はトロッコで坑内より搬出したとされる。

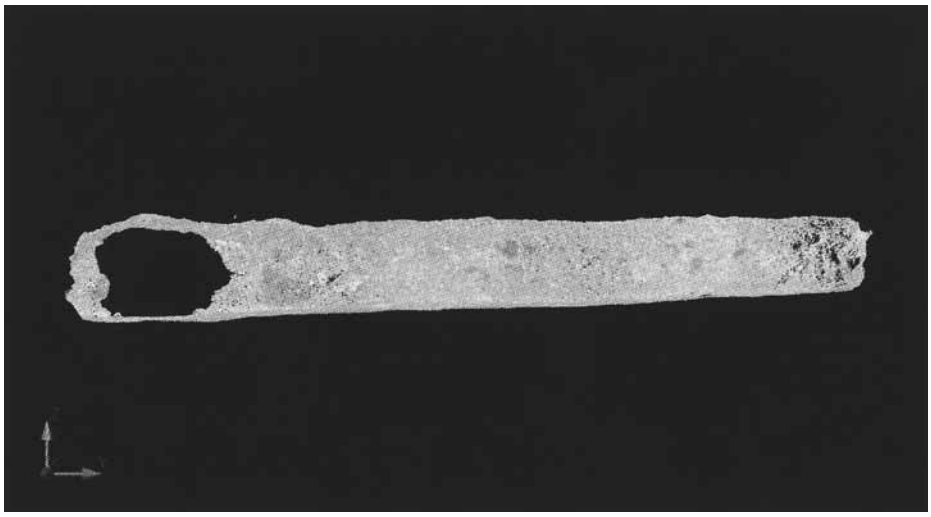
全体（平面）



A1（側面）

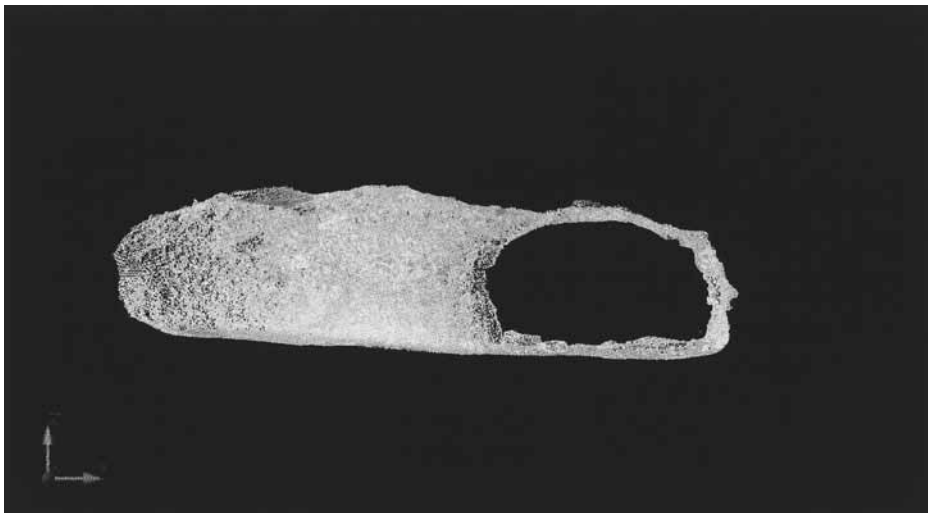


A2（側面）

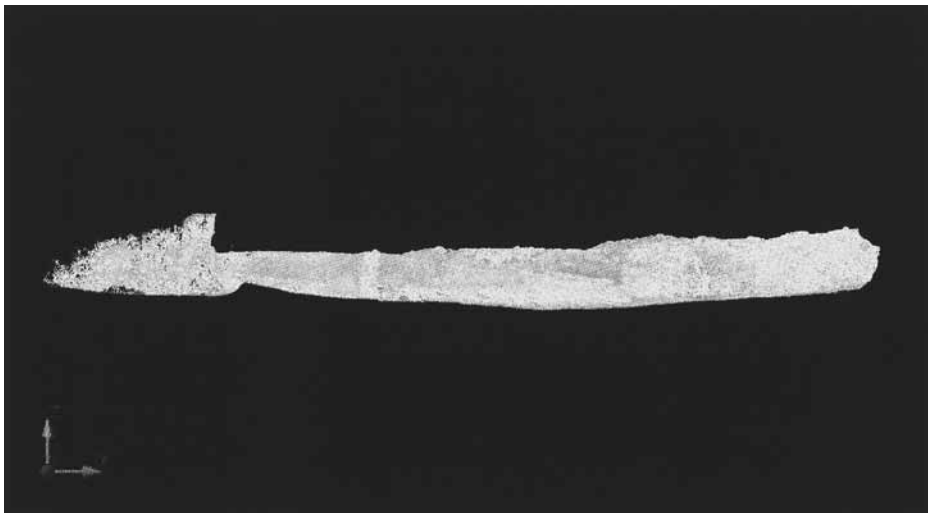


第２８３図　防空壕跡Ａ・Ｂ計測点群データによる平面・側面表示（1）

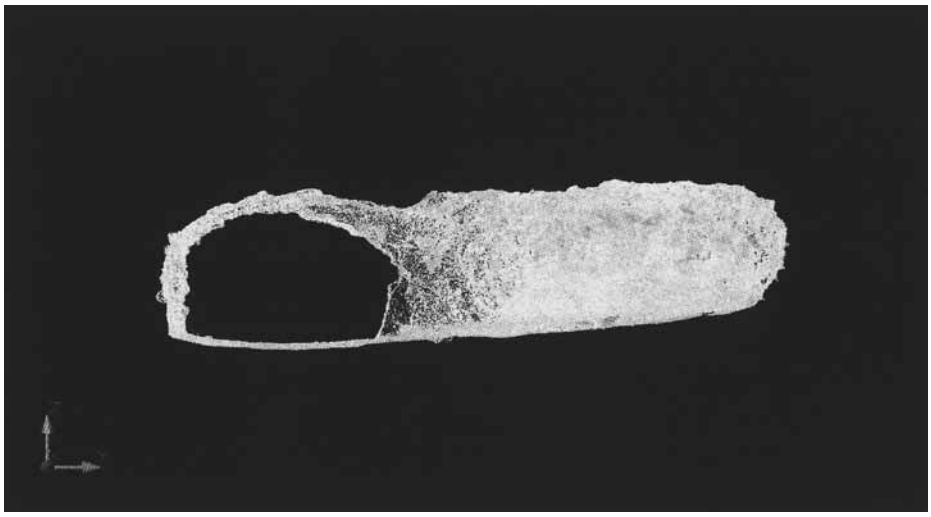
A３（側面）



B１（側面）

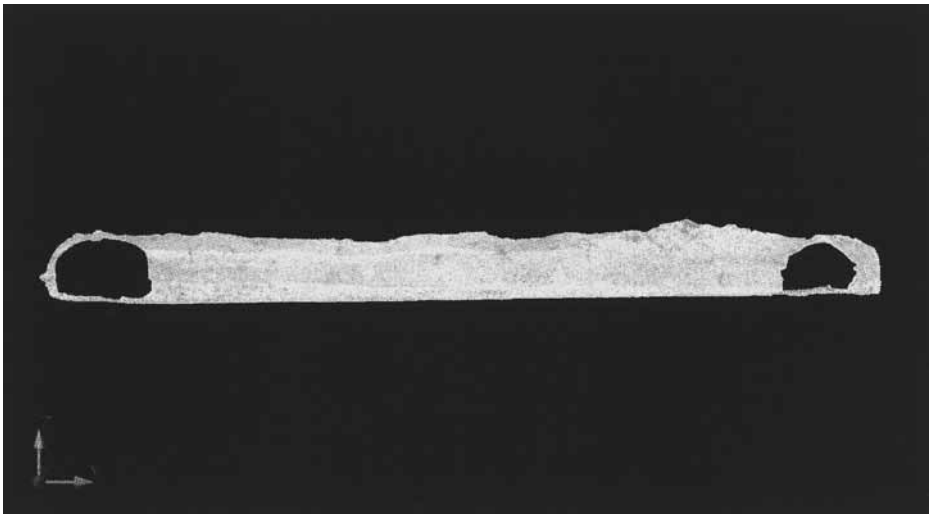


B２（側面）

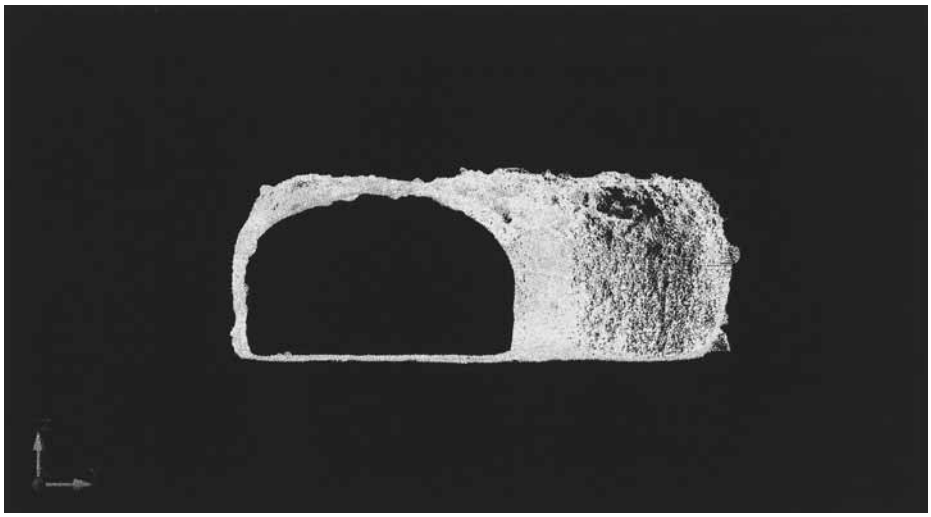


第２８４図　防空壕跡Ａ・Ｂ計測点群データによる側面表示（２）

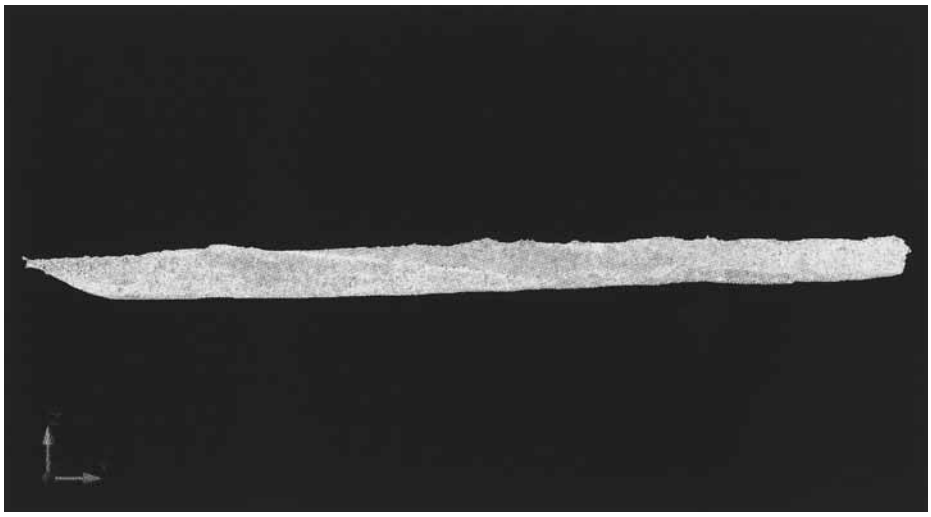
B３（側面）



B４（側面）

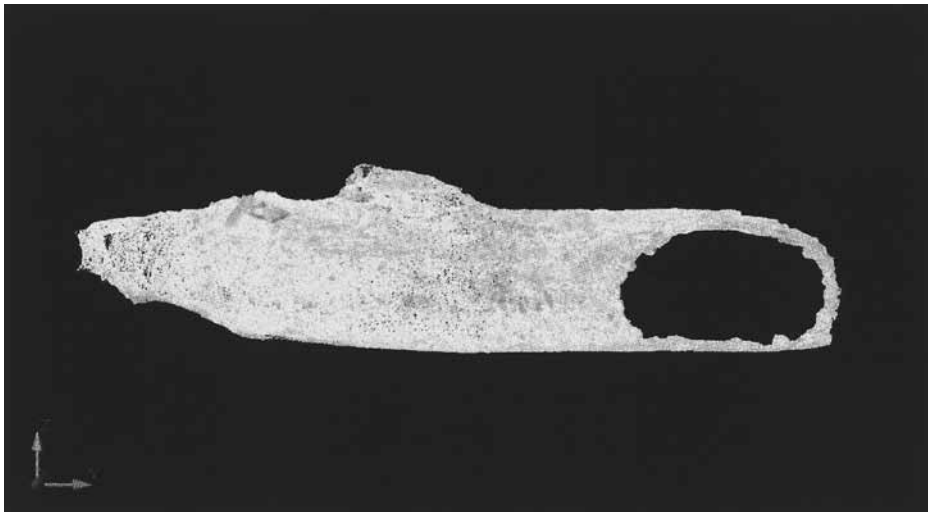


B５（側面）

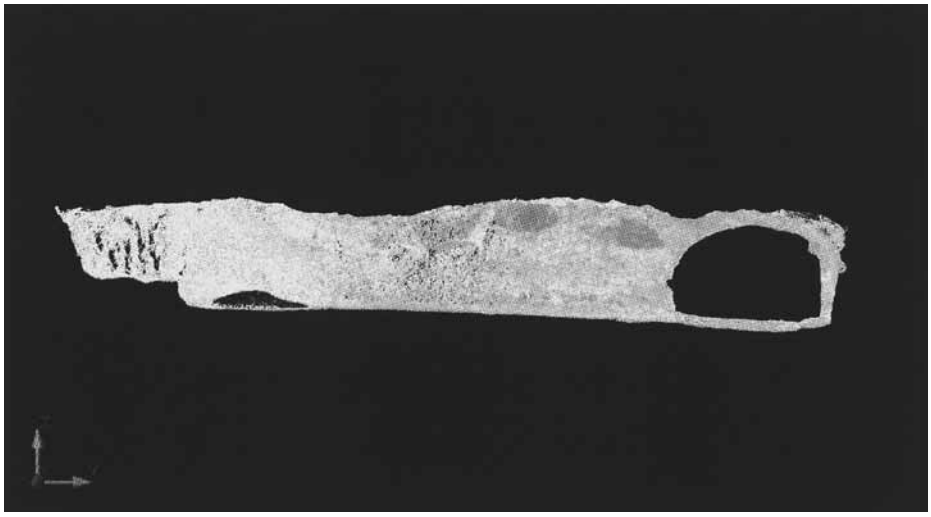


第２８５図　防空壕跡Ａ・Ｂ計測点群データによる側面表示（3）

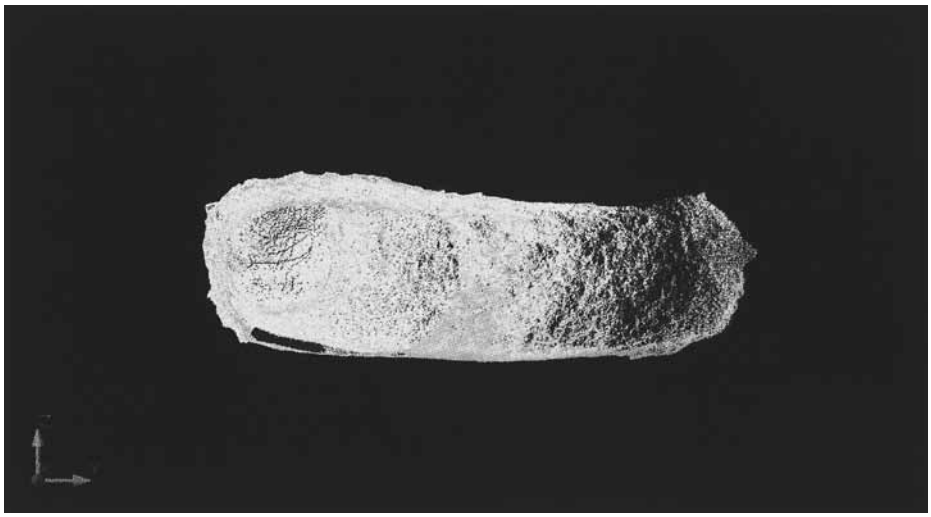
B６（側面）



B７（側面）

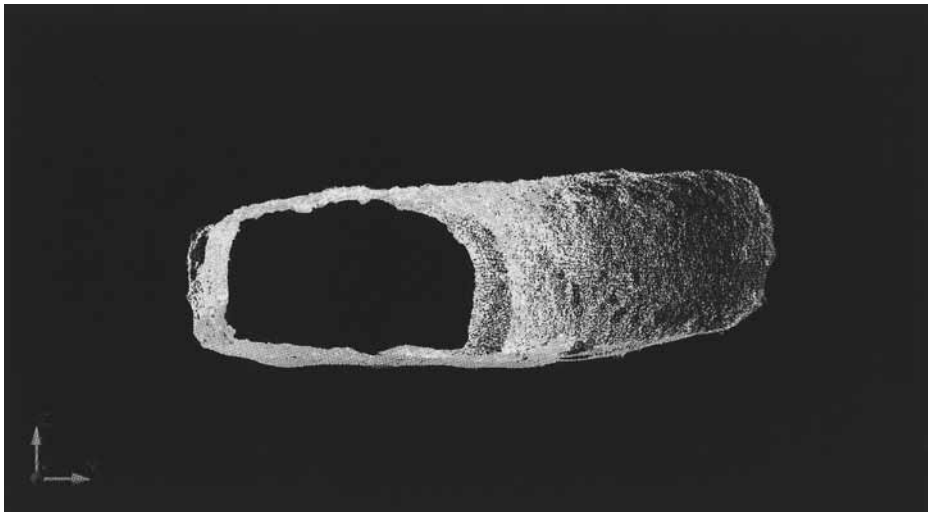


B８（側面）



第２８６図　防空壕跡Ａ・Ｂ計測点群データによる側面表示（4）

B９（側面）



第２８７図　防空壕跡Ａ・Ｂ計測点群データによる側面表示（5）

第８章　上コブケ遺跡総括

本章では、上コブケ遺跡の調査成果をまとめ、さらに出土品や検出遺構の文化財としてのさらなる価値付け作業を行い、現状で見出しうる注目すべき学術的価値について指摘したい。

１．縄文時代について

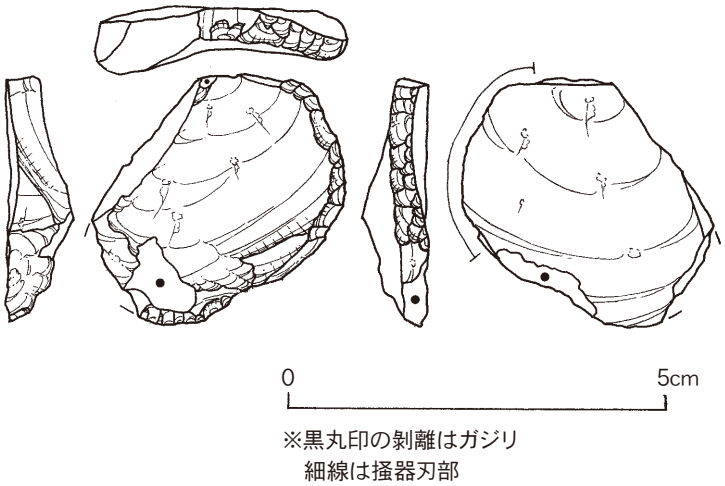
土器片から考えられる居住開始時期は、黒浜式や釈迦堂Z3式の存在から、前期前半であり、集石遺構もこの時期と考えられる。その後の居住痕跡が断絶し、前期後半の諸磯ｂ式期が比較的まとまって確認されている。山梨県内では、一般的に諸磯ｂ式期から急激に遺跡が増加し、集落形成が拡大した状況が確認されており、爆発的ともいえるような人口増加があったと考えられる。上コブケ遺跡でもその片鱗が把握できる。また、一次的な断絶があった後、五領ヶ台式期にまとまった土器の遺存が確認できる。この時期に比較的集中的な土地利用が考えられる。13号埋甕と命名した遺構は、この時期に盛行する埋甕炉とも考えられ、住居の形成も考えられる。その後、狢沢・新道・藤内・井戸尻と中期の土器型式は網羅的に把握できる。

しかし、本格的な集落形成は、曽利Ⅱ式期である。石囲炉を伴う住居跡４軒、埋甕10基が確認されたが、北側にはさらに住居跡が展開し、環状集落を形成していた可能性がある。また、立石と石棒を伴う配石遺構があるが、明確な供伴土器を明示できないものの、住居跡に取り囲まれる状況を認めるならば、本格的集落形成と同時期の曽利Ⅱ式期をその使用の最盛期との位置付けも許されよう。配石は、中央の大形礫の集中部を挟んで、その両側に立石と石棒を配置しているような構造に見える。立石と石棒を結ぶ線は、真北から東方向へ30°傾いている。その線と直行する方向に兄川の源流への谷の入口があり、ランドスケープとの何らかの関連性を検討する必要があろう。また、配石遺構東側に隣接して２・４号竪穴住居跡に挟まれた空間に水晶剥片の集中分布が見られる点が注目される。上コブケ遺跡Ｂ区の出土石鏃37点中９点24％の水晶製石鏃が出土しており、他の県内の縄文時代のなかで、トップクラスの水晶占有率と思われる。水晶製剥片の量も多く、特徴的である。水晶原石の採取、剥片生産、水晶石鏃の製作と一貫して行われていた可能性があり、他の遺跡への供給も目的の一つであったとも考えうる。

水晶産地である金峰山周辺へのアクセスを考えると、上コブケ遺跡から兄川を遡り、甲府市と山梨市との境界である太良ヶ峠に至って尾根に上がり、北に向かって尾根づたいに帯那山、水ヶ森を経て近代の水晶鉱山である乙女鉱山に至る。さらにその北方には荒川源流の谷間を挟んで金峰山があり、山麓の沢などで水晶原石を得ることができただろう。配石遺構と水晶剥片集中区域との位置関係を考えると、立石・石棒ラインの東側に水晶剥片が分布し、水晶原産地へ向かう方向と対峙的である。水晶原石の採取と石器生産をめぐる祭祀的な意図を含んだ配石構築が考えられよう。

集落形成期の曽利Ⅱ期を過ぎると、曽利Ⅲ式１点、曽利Ⅳ式３点、称妙寺式１点と、急激に活動の痕跡はみられなくなり、古墳時代前期まで上コブケ遺跡の土地利用はみられない。

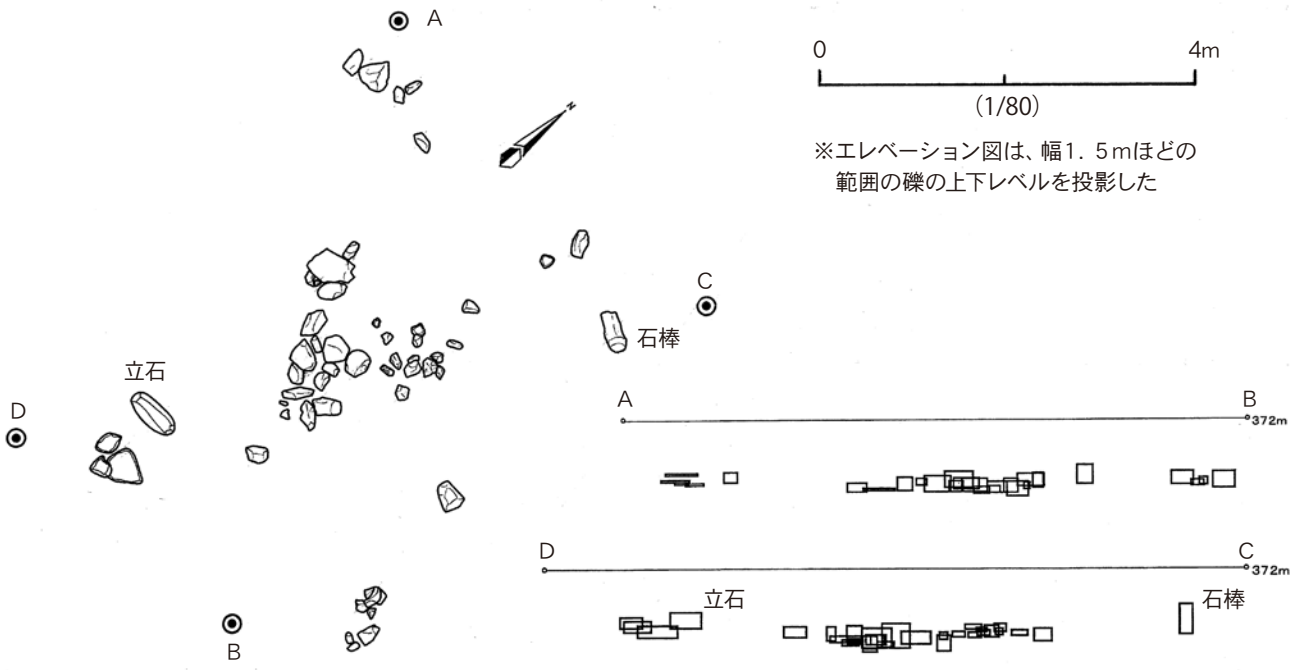
以上の成果のほかに、取り上げるべき特徴を下記に示す。



第２９４図　Ａ－1区出土の柏峠産黒曜石製の掻器

（１）掻器について

上コブケ遺跡Ａ区のＷ－20・21グリッドにおいて、２点の掻器が確認できる。１点は第33図３１でW-20グ



第２９５図　上コブケＢ区配石実測図

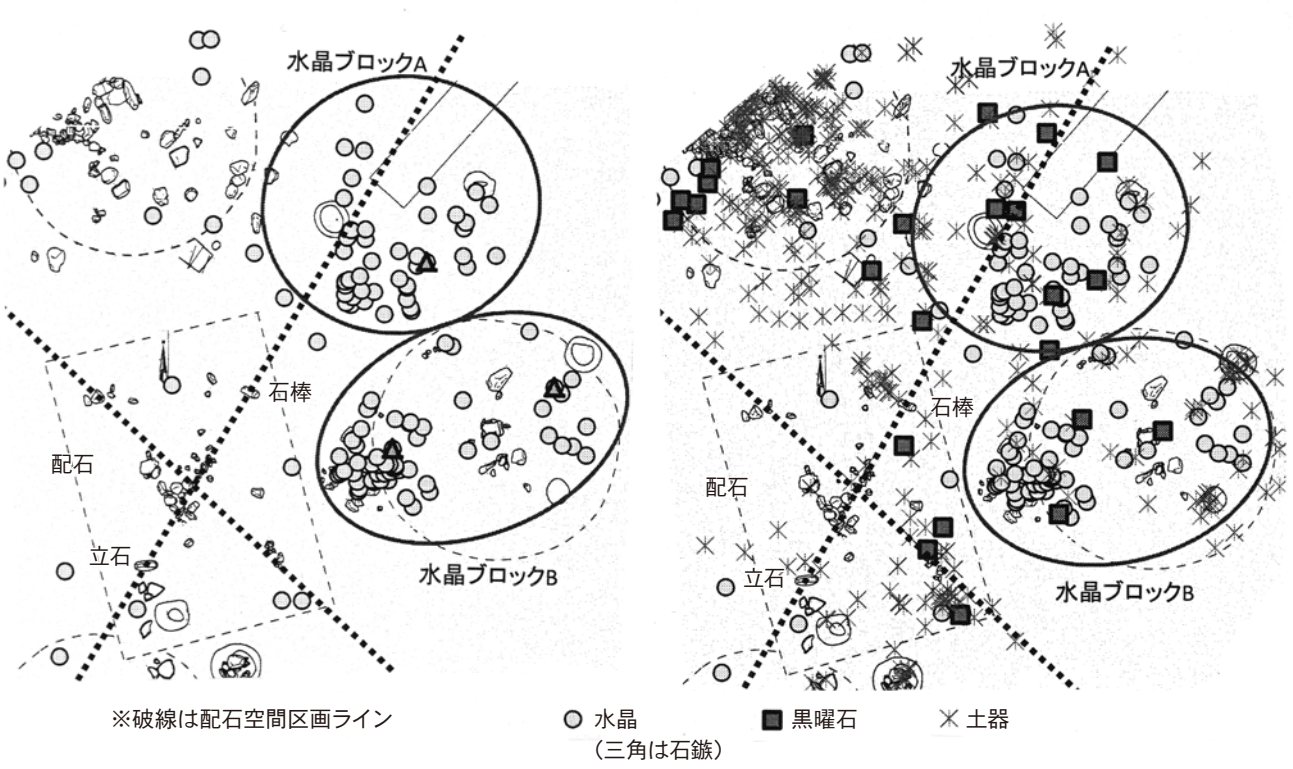
リッド出土であり、信州産黒曜石製である。一方、第295図に提示した掻器は、視覚的に判断して、伊豆天城の柏峠産黒曜石である。掻器２点が近接してあり、しかも、他の縄文時代遺構から離れた位置から出土している点が注目される。この出土地点は、湿地の際に位置し、水を使用しながらの毛皮なめし作業が実施された可能性が指摘できり。時期については、決定要素にかけるが、山梨市内ですでに掻器の出土の知られており、縄文時代草創期か中期初頭の五領ヶ台式期の可能性が指摘されている。上コブケ遺跡では、縄文時代草創期の土器は確認されていないが、五領ヶ台式期の土器はかなりの量が確認されている。分布は重ならないものの、その時期に帰属する可能性がある。

（２）配石について

曽利Ⅱ式期の４軒の住居跡に囲まれるようにして、配石が検出された。6.4m ×5.6m と比較的コンパクトな規模であるが、中央の直径２mの範囲に集中した集石部分を中心に、北側に石棒、南側に立石、さらには西と東とに対峙するかたちで小規模な集石を配する構造を持つ。石棒はデイサイト製で、産地はおそらく茅ヶ岳山麓（八ヶ岳東方に隣接）と思われる。立石は花崗岩の非加工品で、笛吹川河床で採取可能である。この２者を結ぶラインは、中央集石部をとおり、真北から東へ30°の角度をもつ。その線分は、巨視的には兄川流路に直行し、崖線に平行して八幡の砂礫台地を横切りるかたちで設定される。また、東西に配置された数個の礫からなる小集石を結ぶ線分を設定すると、中央集石部の中央を通り、石棒・立石ラインと中央集石部で交叉する。中央集石部は、その線分によって南北に区分されるが、北側集石部の構成礫は南側に比べて半分程度の大きさになっている。小集石ラインは、真北から東へ130°の角度をもつ。その線分は、砂礫台地の奥、兄川の源流の水口集落あたりを指し示している。その奥に進むと山梨市と甲府市の境となる太良ヶ峠に至り、そこから尾根伝いに北へ進むと帯那山、水ヶ森を経て、水晶鉱山である乙女鉱山に至り着く。その、北側の谷を挟んで北方には金峰山が聳え、水晶峠など、水晶を産出する沢筋を望むことができる。

また、石棒・立石ラインの北東側には、後述する水晶石器・剥片のブロックが２か所位置している。すなわち、配石の占拠する空間を、石棒・立石ラインと小集石ラインによって４分割した場合、北東区画に水晶加工空間が位置づけられていることになる。このことをたよりに、この配石の空間構造を想定すると、以下のとおりとなる。

北東区画に水晶加工空間を位置づけると、その西側に位置する北西区画は、水晶原産地から原石を持ち帰り到



第２９６図　配石と水晶･黒曜石･土器の分布

達する空間である。そうすると、その空間は水晶原産地と上コブケ遺跡を結ぶ道程のうち、復路を象徴する空間であり、同時に非加工の水晶原石と、それを人間が確保したことを象徴するものとなる。自然界から贈与を受けた水晶原石は、石棒・立石ラインを通過することで、加工作業へと進むことができたのである。

以上のような想定を行うと、南半の空間についても水晶原産地と上コブケ遺跡を結ぶ道程に関する象徴性を認識可能である。南西区画は、上コブケ遺跡から水晶原産地に向かう道程である往路が象徴され、水晶原石をこれから採取しようとする人間の意思が象徴される。これに対して、南東区画は、水晶原石にかかわらない、まったく一般の集落での生活が象徴されることになる。石棒・立石ラインの内、非加工の石棒は象徴する南側ラインを通過することで、水晶原石採取の意思が公然と表明されることになると考えられる。

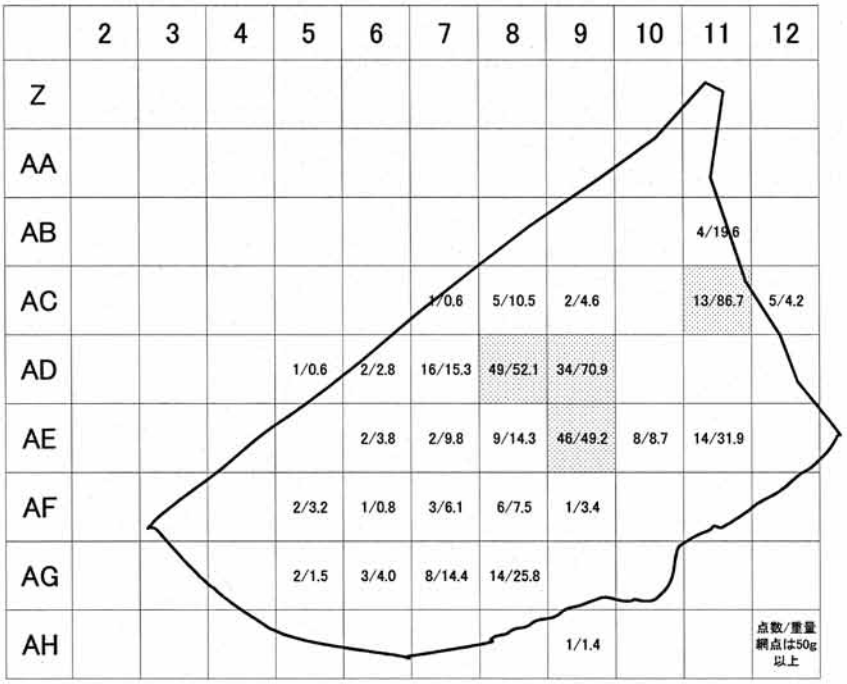
すなわち、水晶原石を自然界（神？）から贈与を受け、それを人間界に持ち込み石器製作を行うための、縄文人の世界観にのっとった変換装置的空間を想定することができるのである。こうした空間において処理されるからこそ、水晶原石を利用可能となり、水晶製石器は製作できることになったと理解できる。

（３）水晶製石器の生産

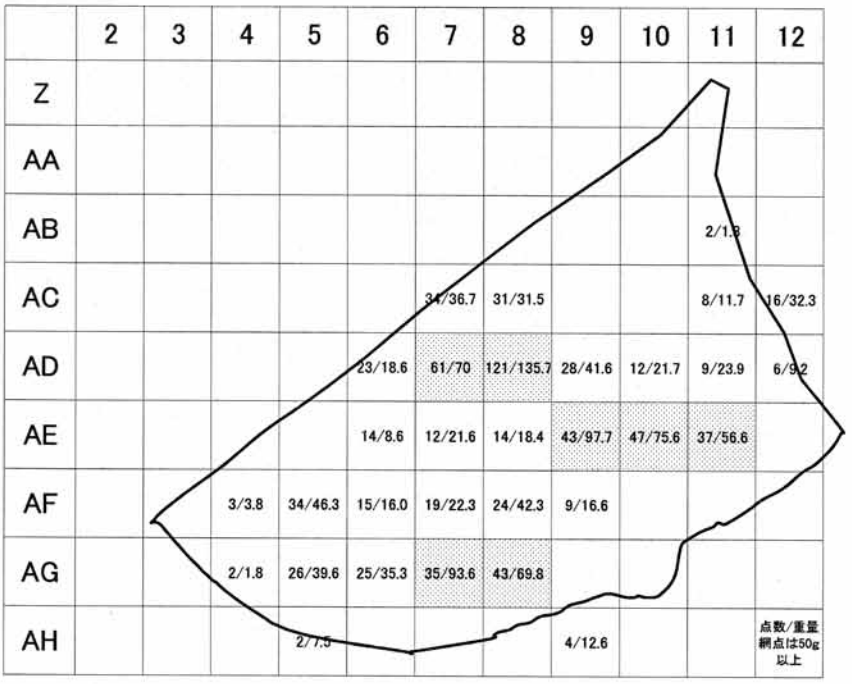
上コブケＢ区の曽利Ⅱ式期の集落内で確認された、水晶製石器群は、石鏃８点を含み、水晶製石鏃の出土量としては、水晶産出県である山梨県内においても、最大級の出土量である。さらに、水晶製石器の総出土量は、点数で562点と石器全体の28％であるが、重量では1363.5ｇと１kgを超える上、33％を占めている。

一方、主体を占める黒曜石製石器は、1455点、2644.1ｇである。この中には、神津島産と目視により認識できる資料が、21点、54g存在している。他の石材には、チャート、石英、珪質頁岩、赤玉石、黄玉石、黄色風化泥岩、頁岩があり、チャートが17点と最も多いが、他は１～３点と少ない。これらのその他の石材は、26点、173.1ｇである。石器総点数は2043点で、総重量が4180.7ｇである。

水晶製石器は、先述のとおり配石の北東区画において２か所の集中分布を示す。北側のブロックＡでは、原石１点、石核15点、石器４点（楔３点、石鏃１点）、剥片58点の総数78点で、総重量173.7ｇ。南側のブロックＢでは、原石１点、石核19点、石器３点（掻器１点、石鏃２点）、剥片24点の総数47点で、点数ではブロックＡ



第２９７図　グリッド別の水晶出土量



第２９８図　グリッド別の黒曜石出土量

より少ないが、総重量201.1ｇと重量では多い。大形の石核が多いと思われる。

集落区域のグリッド出土品は、水晶製石器265点、468.7ｇ、黒曜石製石器735点、1054.9ｇが出土しており、ドットを計測した遺物は、水晶製石器162点、603.3ｇ、黒曜石製石器59点、284.2ｇであり、両者を含めると、水晶製石器427点、1072.0ｇ、黒曜石製石器794点、1339.1ｇとなる。黒曜石とほぼ同様の量の水晶が出土しているのである。(AE9・AD9が水晶ブロック)

曽利式期は、一般に黒曜石製石器の量自体が少なくなると言われる時期であるが、上コブケ遺跡Ｂ区の曽利Ⅱ式期の集落では相当量の黒曜石が確認されていることになる。その上、その量に匹敵する量の水晶製石器群がみられるのである。

水晶製石器の多くを占める石核をみると、黒曜石製石器群と同様な手法がみられる。横に長い板状の素材の正面を剥離するもので、小形のものが多く、石核両端を緊縛保持する特「別な用具の存在を想定する必要がある（保坂康夫2006「縄文時代の剥片剥離手法―酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から―」『研究紀要』22、山梨県埋蔵文化財センター・県立考古博物館)。この手法は、小形原石に適応したものであり、石鏃を中心に、石錐や使用剥片の素材製作に用いられ、石匙の素材製作には用いられていない。水晶もこの手法を応用しており、石鏃を中心とした素材製作を目的としている。

黒曜石は、県内の遺跡で石鏃や剥片・石核のほぼ100％をまかなっている。コリン・レンフリューにより提示された交換メカニズムによれば（常木晃1990「考古学における交換研究のための覚書（１)」『東海大学校地内遺跡調査団報告１』東海大学校地内遺跡調査団ｐ191 ～ 201)、各遺跡における黒曜石の占有率が80％以上である地域は供給ゾーンであり、そのゾーン内では「人々は直接黒曜石の原産地まで原石を採取にいった」とされている。供給ゾーンは黒曜石原産地から実に250 ～ 350ｋｍもの距離がその範囲に入るという。この指摘からす

ると、本遺跡は黒曜石原石の供給ゾーン内にあると言える。

一方、その距離から外側に向かっては、黒曜石の割合が距離を隔てるにしたがって急激に減退してゆく漸減曲線が描かれ、この地域を接触ゾーンと呼んだ。接触ゾーンでは「原産地により近い集落より黒曜石の供給を受け、それを集落内で全て消費せずに残りをより遠い集落へ供給した」と考えられた。水晶製石器は、上コブケ遺跡の近隣集落においても、それほどの量が出土することがなく、周辺に向かって急激に漸減する状況が想定される。

上コブケ遺跡Ｂ区では、相当量の水晶石核が確認されることから、本遺跡の住人が直接水晶産地に赴き、採取した後に、本遺跡に持ち込み、一部を周辺遺跡の分与した可能性が指摘できる。しかし、黒曜石とは違い、他の遺跡の住人が直接原産地に入り込んだ可能性は、本遺跡との比較からすると、少ないとせざるをえない。そして、本遺跡では、石鏃を中心とする石器・剥片の生産がなされ、おそらく周辺遺跡へ贈与品として伴出された可能性は指摘できる。黒曜石原石については供給ゾーン内にあり、潤沢に入手可能な状態にありながら、水晶原石も直接採取し、入手していることに対する説明として、贈与品としての水晶石鏃などの生産を提示したい。

２．古墳時代前期

上コブケ遺跡では、古墳時代前期の遺物が多数出土しているが、明確な遺構は、Ｄ区５住とＡ区１号溝のみであり、Ｄ区５住も地床炉と思われる焼土を根拠としており、柱穴や周溝などの構造が把握されたわけではない。したがって、集落が存在したかは明確にできない。

しかし、遺物の中で注目されるものがある。Ｄ区５住出土の「口縁部が大きく拡張したＳ字甕」（第221図19）の存在である（小林健二1998「山梨県出土の東海系土器―波及と定着と変容―」『山梨県考古学協会誌』第10号）。濃尾平野では、Ｓ字甕Ｃ類段階に「山陰系口縁の融合したものとして一定量を占めて」おり、「大形品に限定される」とされる。北関東西部でも出土が知られ、本県では甲州市の西田遺跡、南アルプス市の村前東遺跡、韮崎市の坂井南遺跡が小林氏によって集成されており、Ｓ字甕の第２次拡張期以降のもので、本県Ｓ字甕の４期の定着期にあたるとする。

上コブケ遺跡出土の「口縁部が大きく拡張したＳ字甕」は、胎土が精選され、硬質で、内面の色調が白褐色を呈し、見るからに搬入品と判断できる。

Ｓ字甕は、西関東自動車道路関連での調査遺跡で相当数が検出されており、本地域にこの時期、かなりの人口流入と集落形成があったものと推定される。そのなかで、こうした搬入品が存在することは大きな意義を有すると考えられる。出土数の少なさから、一定レベルの階層に位置づけられる威信財としての位置づけも視野に入れる必要があろう。

３．奈良・平安時代

Ａ・Ｃ・Ｄ区では、平安時代前半（９・10世紀）の竪穴住居跡が24軒、掘立柱建物跡が21棟検出された。まずは、掘立柱建物跡の検出数の多さが注目される。また、溝25条、土坑206基、ピット412基を検出した。大半が平安時代前半と思われる。Ａ区では焼失住居が確認された点特筆される。Ｃ区ではカマドの下層部分から須恵器の小壷が、四隅から完形の坏が出土するなど、祭祀に関わる資料が確認された。Ｄ区では、主に平安時代の住居が確認され、灰釉陶器や転用硯が出土している。調査区東端部に南北方向に伸びる崖線があり、その肩部に帯状に展開する集落の一部を確認したものと思われる。

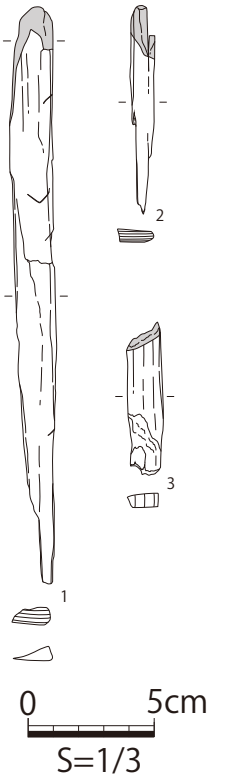
以下では、Ａ－１区の湿地部で出土した「もえさし」について報告し、祭祀的な要素を追加する。次に、集落変遷像を想定する。

（１）「もえさし」について

上コブケ遺跡Ａ－１区では、木質遺物として燃えさしが3点出土している（第299図）。出土地点は湿地帯であり、上コブケ遺跡では建物跡が検出されない空閑地にあたる。

1は長さ22.6cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm の剥ぎ材。2は長さ8.2cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm の剥ぎ材。3は長さ6.0cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm の柾目材である。

1は樹木のあて材を使用したもので、側面には上下2方向からの刃先痕が見られる。3は四側面ともに加工が施されたものであり、角材の先端を燃やしたものである。1 ～ 3はすべて表皮を除去しており、また、1は刃物による加工が確認できることから人工的に棒状に成形して燃やしたものと考えられる。上コブケ遺跡Ａ－１区より出土した燃えさしは遺構に伴うものでなく、用途・機能は不明である。



第２９９図　もえさし

（２）集落構造

上コブケ遺跡の西半部に奈良時代中頃（８世紀中頃）から平安時代中頃（10世紀後半）にかけての竪穴住居跡と掘立柱建物跡が群集している。地形的には、砂礫台地の崖線の肩部に、崖線に沿って帯状に分布している。竪穴住居跡は、カマド周辺出土遺物から時期の特定が可能な遺構が多いが、掘立柱建物跡については伴出遺物がほとんどなく、共伴遺物からの帰属時期決定は困難な状況である。そこで、ここでは遺構の主軸方向を手がかりとする。掘立柱建物跡の主軸方向でグルーピングを行う。次に時期の明確な竪穴住居跡を主軸方位でグルーピングする。あるまとまった時期の竪穴住居跡の主軸方位群を、その時期の基軸方位とし、近似する主軸方位グループの掘立柱建物跡群をその時期に帰属するものとみなし、遺構平面を検討する。結論的には、この方法であるまとまりを持った遺構群の把握が実現できたので、これをもって上コブケ遺跡の集落変遷として提示した。

１）竪穴住居跡の時期と主軸方位

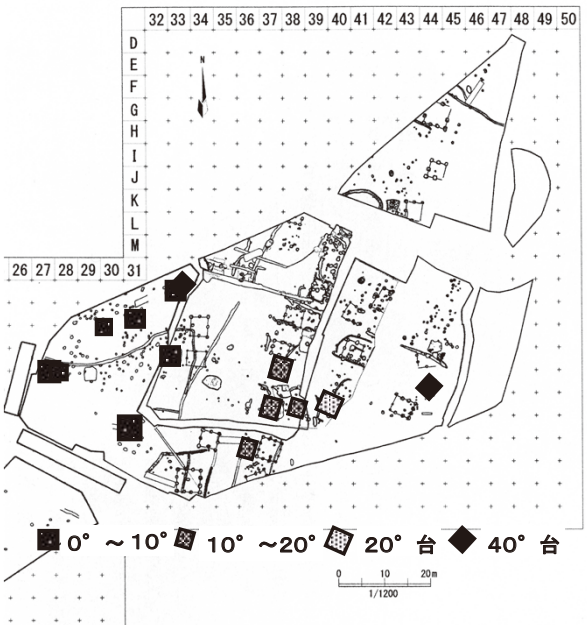
竪穴住居跡の時期については、以下のとおりである。

第６４表　奈良・平安時代竪穴住居跡の主軸方位

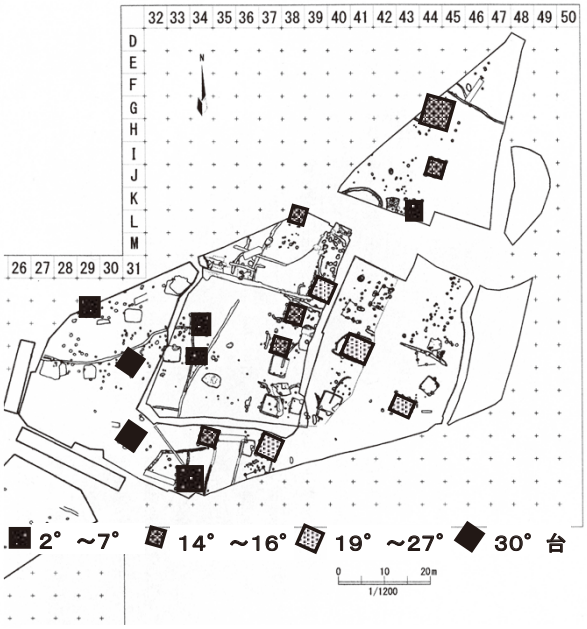
地区	住居跡番号	時　期	方位（N → E°）
A	2	Ⅷ	0
A	5	Ⅷ～Ⅸ	0
A	3	ⅩⅡ	3
A	1	Ⅷ	4
D	1	Ⅴ	5
A	4	Ⅷ～Ⅸ	4～9
A	7	Ⅹ～ⅩⅠ	8～10
C	1	Ⅶ	14～17
D	13	Ⅸ～Ⅹ	14～18
D	4	不明	15～20
D	6	ⅩⅡ	17～18
C	5	Ⅹ	24
A	6	Ⅹ～ⅩⅠ	44
C	2	ⅩⅢ	41～43
D	2	ⅩⅡ～ⅩⅢ	不明
C	3	不明	不明
D	3	不明	不明
C	4	ⅩⅡ～ⅩⅢ	不明
C	6	Ⅸ	不明
D	7	ⅩⅡ	不明
D	8	不明	不明
D	9	不明	不明
D	10	Ⅹ～ⅩⅠ	不明
D	11	不明	不明
D	12	不明	不明

第65表　掘立柱建物跡の主軸方位および面積

地区	番　　号	方位（N → E°）	面積（㎡）	分類
D	6号掘立柱建物跡	2	14	1群
C	2号掘立柱建物跡（A区1号）	3	25	1群
D	5号掘立柱建物跡	3	16	1群
A	4号掘立柱建物跡	5	不明	1群
C	9号掘立柱建物跡	7	不明	1群
D	7号掘立柱建物跡	14	不明	2群
C	3号掘立柱建物跡	15	15	2群
D	1号掘立柱建物跡	15	14	2群
C	10号掘立柱建物跡	16	12	2群
C	11号掘立柱建物跡	16	25	2群
D	3号掘立柱建物跡	16	11	2群
C	1号掘立柱建物跡	19	21	3群
C	7号掘立柱建物跡	21	20	3群
D	2号掘立柱建物跡	24	15	3群
C	4号掘立柱建物跡	27	16	3群
A	2号掘立柱建物跡	34	12	4群
C	8号掘立柱建物跡	36	不明	4群
A	3号掘立柱建物跡	37	13	4群



第300図　上コブケ遺跡の竪穴住居跡主軸方位



第301図　上コブケ遺跡の掘立柱建物跡主軸方位

甲斐編年Ⅳ～Ⅴ期（８世紀中頃）	Ｄ１住
甲斐編年Ⅶ期（９世紀第１四半期頃）	Ｃ１住
甲斐編年Ⅷ期（９世紀第２四半期頃）	Ａ１住・Ａ２住
甲斐編年Ⅷ～Ⅸ期	Ａ５住・Ａ４住
甲斐編年Ⅸ期（９世紀中頃～第３四半期頃）	Ｃ６住
甲斐編年Ⅸ～Ⅹ期	Ｄ13住
甲斐編年Ⅹ期（９世紀第３四半期～第４四半期頃）	Ｃ５住
甲斐編年Ⅹ～ⅩⅠ期（９世紀後半～ 10世紀前半）	Ａ６住・Ａ７住・Ｄ10住
甲斐編年ⅩⅡ期（10世紀中頃）	Ａ３住・Ｄ６住・Ｄ７住
甲斐編年ⅩⅡ～ⅩⅢ期	Ｃ４住・　Ｄ２住
甲斐編年ⅩⅢ期（10世紀後半）	Ｃ２住

このほかのＣ３住・Ｄ３住・Ｄ４住・Ｄ８住・Ｄ９住・Ｄ11住・Ｄ12住は、平安時代と思われるが、図示できる遺物がなく、明確な帰属時期の決定ができない。

次に、竪穴住居跡の主軸方位を示す（第64表）。真北軸から東方向への主軸傾き角度を計測した。壁線の明確な竪穴住居跡を対象とし、複数の辺で壁線が明確なものは、それぞれを計測して、その範囲を表示した。

０°から10°の一群は、帰属時期が甲斐編年Ⅷ期を中心とし、最古のⅣ～Ⅴ期の奈良時代の竪穴住居跡から、ⅩⅡ期のものまである。しかし、分布をみると、すべてがA区とその隣接地に集中する傾向が読み取れる（第300図）。10°から20°の範囲では、Ⅶ期がこれに含まれるものの、Ⅸ～ⅩⅡ期が主体である。分布もＤ区南東部付近に集中する。

20°台は、Ｃ区５住の１軒しかないが、分布はＣ区南西部と、さらに東へと分布中心が移動している。

30°台はなく、40°台が２件ある。Ｃ区２住は最も東に位置する竪穴住居跡であり、主軸方向が東へ傾くほどに東へと分布が変化する傾向が読み取れる。ただし、Ａ区６住のみは40°台にありながえら、０°から10°の一群の分布範囲内に位置する点、イレギュラーな存在である。

以上の検討から、主軸の分布は住居の占地位置により変化する点が指摘できる。帰属時期との関係は、これほどに限定てきではないものの、０°から10°の一群は、帰属時期が甲斐編年Ⅷ期を中心とし、10°から20°の範囲では、Ⅸ～ⅩⅡ期が主体である、といった具合に、緩やかな関係が読み取れる。

第302図　上コブケⅠ期の集落像

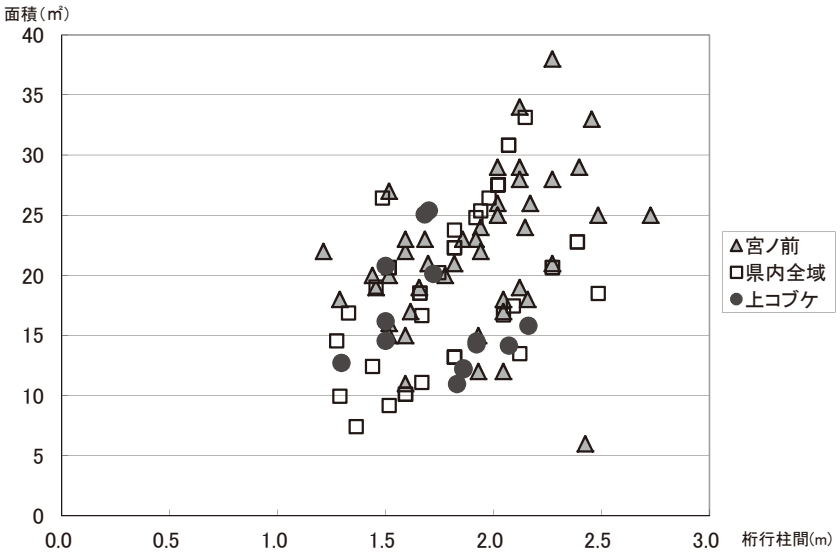
第303図　上コブケⅡ期の集落像

第304図　上コブケⅢ期の集落像

第305図　上コブケⅣ期の集落像

2）掘立柱建物跡の主軸方位とグルーピング

次に、掘立柱建物跡の主軸方向を分類する（第65表）。掘立柱建物跡構成ピットのほぼ中心をとおり建物を構成する間取り線を想定した上で、東辺の線の東方向への主軸傾き角度を計測した。2°から37°の範囲に分布するが、いくつかのまとまりが認識できる。2°から7°の範囲を1群とする。平面分布をみると、C区9号のみがはずれるものの、A区とD区西側に集中する（第301図）。14°から16°を2群とする。C・D区にまたがり分布し、崖線ラインに平行にて線状に分布する特徴が読み取れる。19°から27°の範囲を3群とする。D区東側とC区西南部に集中し、団塊状に分布する。34°から37°を4群とする。角度を増すごとに東へと位置を変化させていた分布が、反転して西端部へと変移し、A区に2棟が分布している。もう1棟はC区中央部である。



第３０６図　県内全体と上コブケ遺跡の掘立柱建物跡の規模

３）竪穴住居跡と掘立柱建物跡との主軸方位群のマッチングによる集落変遷

さらに、竪穴住居跡の掘立柱建物跡の、同じ主軸方位群を組み合わせ、その分布の団塊分布や線状分布などの傾向を読み取り、それを分布の一体性として認識して、その群の帰属時期を竪穴住居跡の示す帰属時期から割り当てることとする。

上コブケⅠ期の集落像は、第302図のように推定される。竪穴住居跡および掘立柱建物跡ともに主軸角度が０°から９°の範囲にあるものを中心とする。竪穴住居跡は。Ⅳ～Ⅴ期、Ⅶ期、Ⅷ～Ⅸ期の古い一群すべてがこの群に帰属する。掘立柱建物跡はＬ字配置をとる。面積25㎡と上コブケ遺跡において最大規模のＣ区２号掘立柱建物跡を最南端に配している。しかし、この掘立柱建物跡のように、８世紀台の遺物を出土しているものもあり、掘立柱建物跡すべてが一時にこの分布をして同時存在していたかは不明とせざるを得ない。Ⅳ～Ⅴ期を初源とし、Ⅸ期を終末とする期間のなかで成立した累積的な集落図であると認識すべきである。

上コブケⅡ期の集落を甲斐編年Ｘ期とする。この時期の竪穴住居跡の主軸方位は19°から27°の範囲にある。そこで、掘立柱建物跡主軸方位群３群をこれにあてると、第303図の集落像となる。団塊状の分布形態をとり、Ｃ区１・７号掘立柱建物跡の２棟の20㎡を超える大規模な掘立柱建物跡がある。

上コブケⅢ期の集落を甲斐編年Ｘ～ＸⅠ期とする。この時期の竪穴住居跡の主軸方位を、Ａ区６住の40°台とし、最もこれに近い方位角度をもつ掘立柱建物跡主軸方位４群をこれにあてることとする。集落構成要素は、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡２棟と少なく、掘立柱建物跡も20㎡を超える大形のものがみられない。集落規模が縮小した時期と評価できる（第304図）。

上コブケⅣ期の集落を甲斐編年ＸⅡ～ＸⅢ期とする。この時期の中心的な竪穴住居跡を主軸方位が17°～ 18°のＤ区６住とし、最もこれに近い方位角度をもつ掘立柱建物跡主軸方位２群をこれにあてることとする。これに帰属することとなる掘立柱建物跡は６棟を数え、掘立柱建物跡が最も多く展開する時期となる（第305図）。その配列は直線的であり、崖線に平行してその肩部に配列することになる。北端に、25㎡と最も大形のＣ区11号掘立柱建物跡が位置し、南側に竪穴住居跡が展開する集落像が復元できる。ただし、10世紀中頃から後半と帰属時期が長く、遺構分布がさらに細分されることになると考えられる。

４）上コブケ奈良・平安時代集落の性格

以上のように変遷が復元できる集落像であるが、いずれの時期においても、数棟の掘立柱建物跡を擁する集落が展開されていることが分かる。その配列は、官衙にみられるようなコの字形などの形態ではなく、地形に応じた直線的ないしは団塊的な配置と考えられる。したがって、公の施設という性格はあてはめることはできないであろう。

さらに、掘立柱建物跡の規模を山梨県下の奈良・平安時代の既存資料（室伏徹2002「甲斐の古代掘立柱建物―基準尺度と設計について―」『山梨県考古学協会誌』第13号）と比較してみると、比較的小規模であることが分かる（第306図）。室伏徹氏と平野修氏のご教授によると、こうした特徴をもつ上コブケ遺跡の掘立柱建物跡

は倉庫としての用途が考えられるという。そうすると、倉庫とそれを管理する竪穴住居跡により構成される集落とすることができよう。

以上の点を踏まえて、あらためて上コブケ遺跡の立地をみると、やはり大井俣窪八幡神社の存在は意識せざるを得ない。「大井俣」とは、兄川・弟川の合流地点、あるいは両者と笛吹川の合流地点を意味するとすると、大井俣の移転を考えたとしても現在所在する地点を大きく変動することはなかったはずである。その近隣において、地形的に高所に位置し、倉庫群という性格から河川氾濫等による災害から逃れるための立地と考えられる。さらに、上コブケ遺跡の北西側背後には広く平坦地が広がり、作物等の生産が可能である。

今回報告した兄川河床遺跡での自然科学分析で、兄川東岸側において確認された平安時代前半の９～10世紀の厚い堆積物の中から検出された種実や花粉化石の分析から、イネ、コムギ、アワ、ソバ属、エゴマの栽培種が確認されたことは注目に値する。量的にはイネが圧倒的に多いものの、こうした内容の食糧生産が、９～10世紀の上コブケ遺跡形成時期にこの地域で実施されていたことが確認できる。

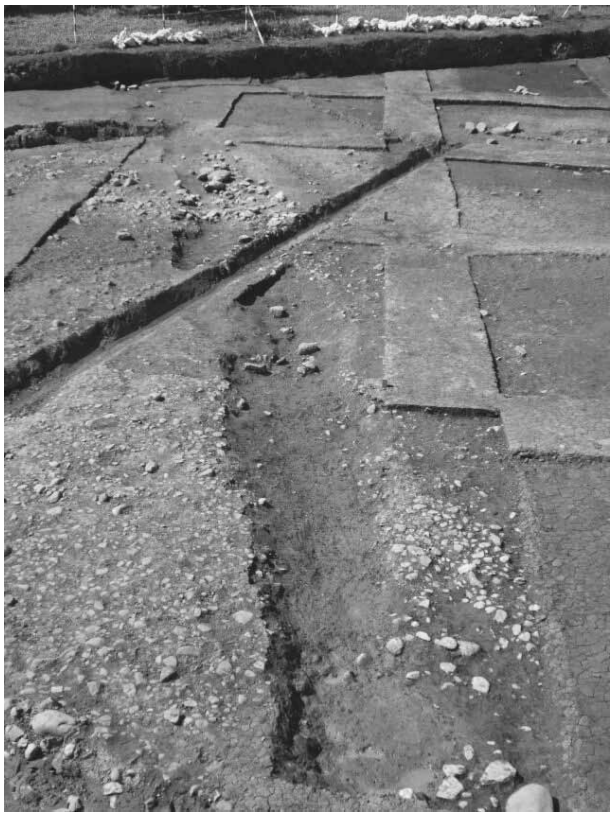
こうした食糧を中心として生産物が倉庫に保管されていたとすると、式内社である大井俣神社を維持・管理する神人に支給されるべきものであったかもしれない。また、中央政権に対してのロビー活動のために送り込む産品を保管していたのかもしれない。こうした想定も踏まえ、大井俣神社経営に関わる人々および彼らが管理する倉庫群としての位置づけを、上コブケ遺跡の奈良・平安時代遺跡に与えることが可能であろう。

写真図版

上コブケA−１区調査全景（湿地部、北東から）

上コブケA−１区調査全景（南西から）

上コブケA−１区１号土坑



上コブケA−１区１号溝

上コブケA−１区土器出土状況

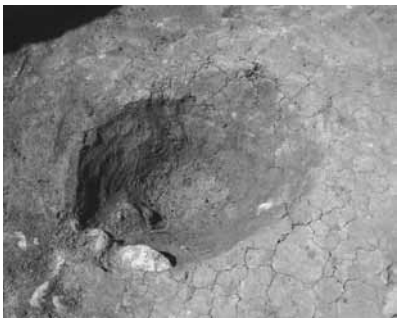
上コブケA−２区調査区北西部（西から）

上コブケA−２区調査状況（西から）

写真図版２

上コブケA−2区2号土坑

上コブケA−2区5号土坑



上コブケA−2区6号土坑

上コブケA−3区調査区北部（西から）

上コブケA−3区調査区南東部（西から）

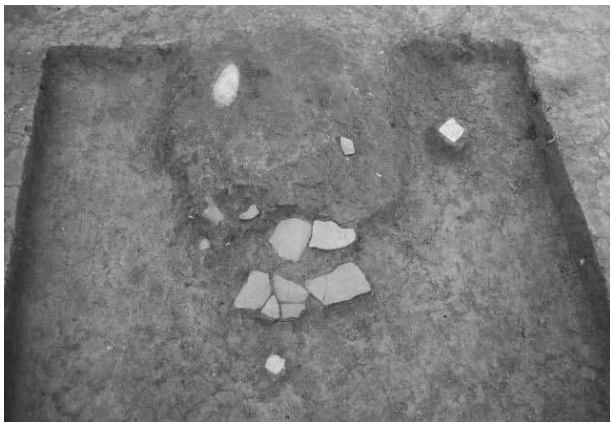
上コブケA−3区1・2号竪穴住居跡

上コブケA−3区1号竪穴住居跡カマド

上コブケA−3区4号竪穴住居跡

上コブケA−3区3号竪穴住居跡

上コブケA−3区4号竪穴住居跡



上コブケA−3区4号竪穴住居跡カマド

上コブケA−3区5号竪穴住居跡

上コブケA−3区6・7号竪穴住居跡

上コブケA−3区6号竪穴住居跡炭化材出土状況全景

上コブケA−3区6号竪穴住居跡炭化材出土状況

上コブケA−3区6号竪穴住居跡炭化材調査状況

上コブケA−1区出土遺物

写真図版４

上コブケA−2区出土遺物

上コブケA−3区1住出土遺物

上コブケA−3区3・4住出土遺物

上コブケA−3区5・6住出土遺物

上コブケA−3区1・3号掘立出土遺物

上コブケA−3区溝・ピット出土遺物

上コブケA−3区古墳時代出土遺物

上コブケA−3区出土遺物

B区Ⅰ区東側とⅢ区（北東から）

B区Ⅲ区（北から）

B区Ⅳ区（北東から）

B区Ⅴ区（東から）

B区1号竪穴住居跡

B区2号竪穴住居跡

3号炉

4号炉

（以上B区）

写真図版６

1号集石

1号埋甕

2号埋甕

3号埋甕

4号埋甕（奥）と5号埋甕（前）

6号埋甕 断ち割り

7号埋甕（左）と9号埋甕（右）

9号埋甕

（以上B区）

10号埋甕

1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡

1号配石遺構

1号集石遺構

（以上B区）

写真図版８

1号埋甕　人面装飾付土器

1号埋甕　人面装飾付土器（人面部拡大）

6号埋甕

（以上B区）

9号埋甕

10号埋甕

10号埋甕（別方向）

（以上B区）

写真図版10

3号埋甕

7号埋甕

8号埋甕

11号埋甕

土偶

イノシシ形土笛

匙状土製品

土製装飾品

（以上B区）

ミニチュア土器

土製円盤

台形土器

土坑・Pit 出土土器

土器集中1

土器集中2

遺構外出土土器

遺構外出土土器

（以上B区）

写真図版12

遺構外出土土器

遺構外出土土器

遺構外出土土器

遺構外出土土器

遺構外出土土器

遺構外出土土器　浅鉢

石器

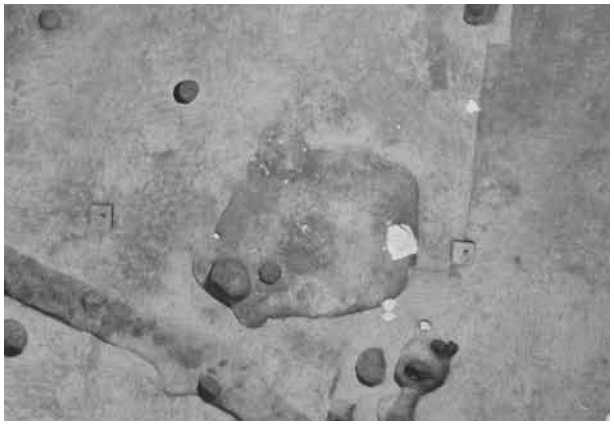
立石（左）と石棒（右）

（以上B区）

C 区　1 号住居跡、1・6 号掘立柱建物跡

C 区　1 号住居跡

C 区　1 号住居跡　かまど周辺遺物出土状況（南より）



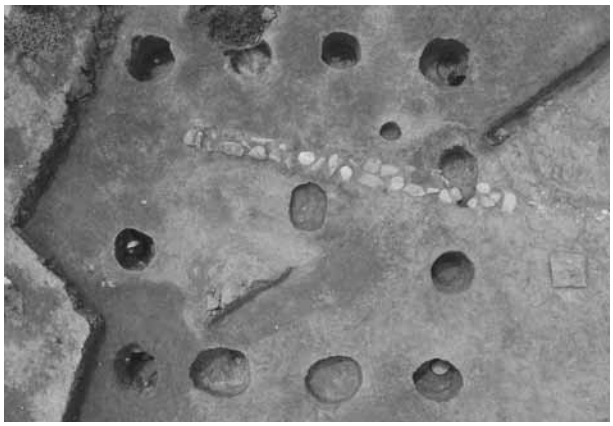
C 区　4 号住居跡

C 区　5 号住居跡（南西より）

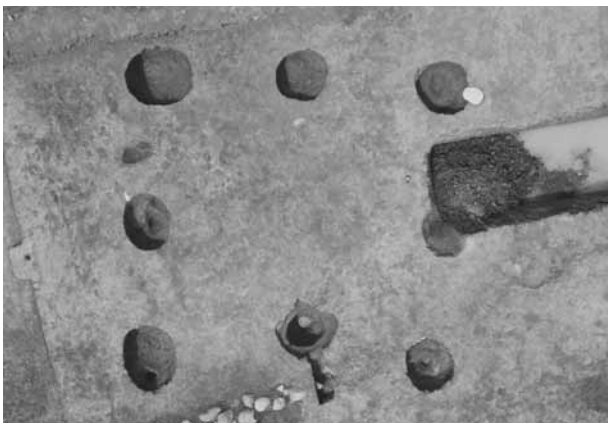
C 区　5 号住居跡　南西角付近遺物出土状況（北より）

C 区　5 号住居跡　かまど直下　小壺出土状況

C 区　6 号住居跡、1 号焼土跡



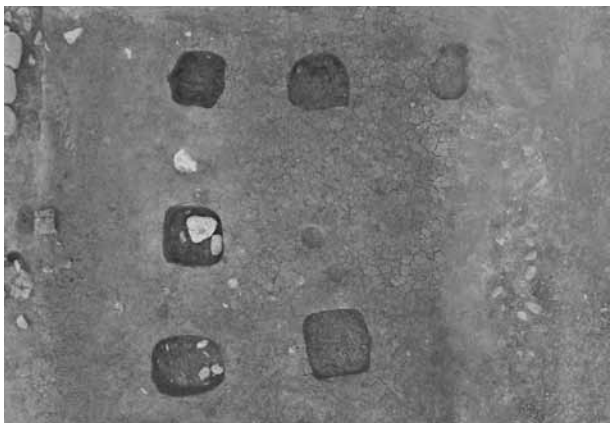
C 区　2 号掘立柱建物跡



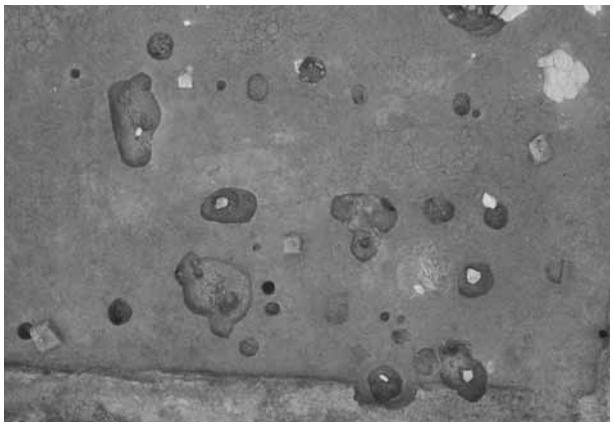
C 区　3 号掘立柱建物跡

C 区　4 号掘立柱建物跡

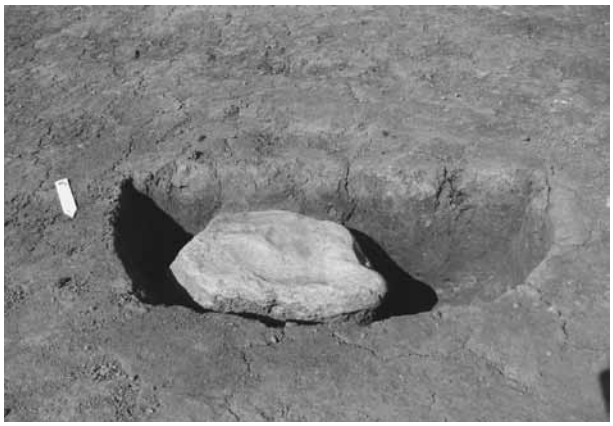
C 区　7 号掘立柱建物跡



C 区　10 号掘立柱建物跡



C 区　8 号掘立柱建物跡



C 区　82 号土坑（8 号掘立柱建物跡）半裁状況

C 区　82 号土坑（8 号掘立柱建物跡）遺物出土状況

C 区　11 号掘立柱建物跡

C 区　137 号土坑　遺物出土状況（第 1 面）

C 区　88 号土坑　半裁状況

C 区　137 号土坑　遺物出土状況（第 2 面）

C 区　1 号集石土坑　検出状況

C 区　出土遺物 1（1 号住居跡）

C 区　出土遺物 2（2 号住居跡）

C 区　出土遺物 3（4 号住居跡）

C 区　出土遺物 4（5 号住居跡 1）

C 区　出土遺物 5（5 号住居跡 2）

C 区　出土遺物 6（5 号住居跡 3）

C 区　出土遺物 7（5 号住居跡 4）

C 区　出土遺物 8（6 号住居跡）

C 区　出土遺物 9（掘立柱建物跡）

C 区　出土遺物 10（88 号土坑）

C 区　出土遺物 11（137 号土坑）

C 区　出土遺物 12（34 ピット）

C 区　出土遺物 13（溝状遺構）

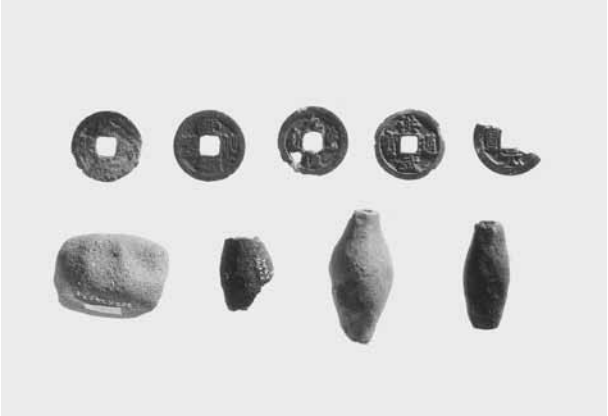
C 区　出土遺物 14（須恵器）

C 区　出土遺物 15（灰釉陶器）

C 区　出土遺物 16（土師器）

C 区　出土遺物 17（古墳時代遺物）

写真図版 18



C 区　出土遺物 18（銭貨、手捏土器、土製品）

C 区　出土遺物 19（石器 1）

C 区　出土遺物 20（石器 2）

C 区　出土遺物 21（鉄製品）

D 区基本層序（南から）

1 号住居跡完掘（南から）

（以上D区）

写真図版２０

1 号住居跡カマド（南から）

1 号住居跡カマド完掘（南から）

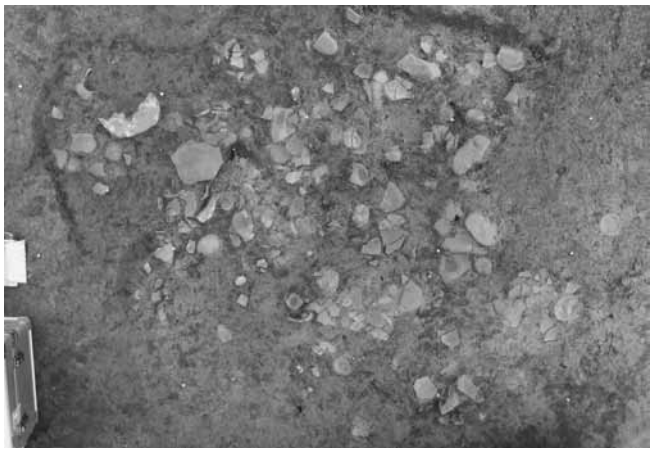
2・3 号住居跡完掘（西から）

2 号住居跡カマド遺物出土状況（西から）

2 号住居跡カマド完掘（西から）

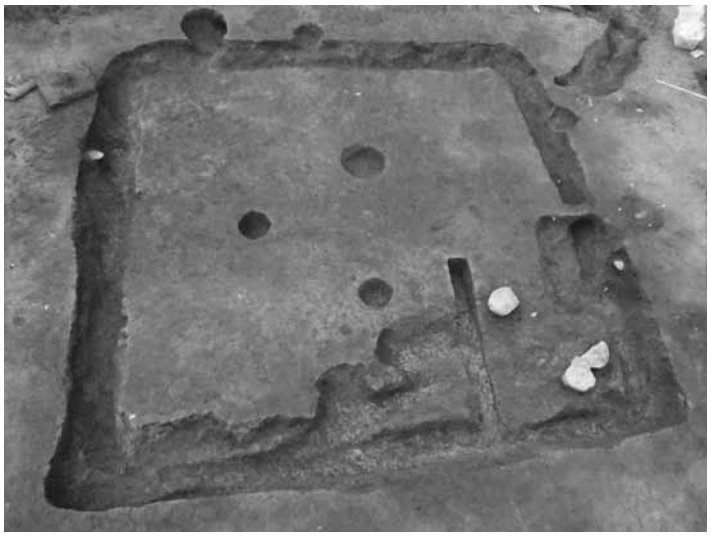
（以上D区）

4号住居跡完掘（東から）



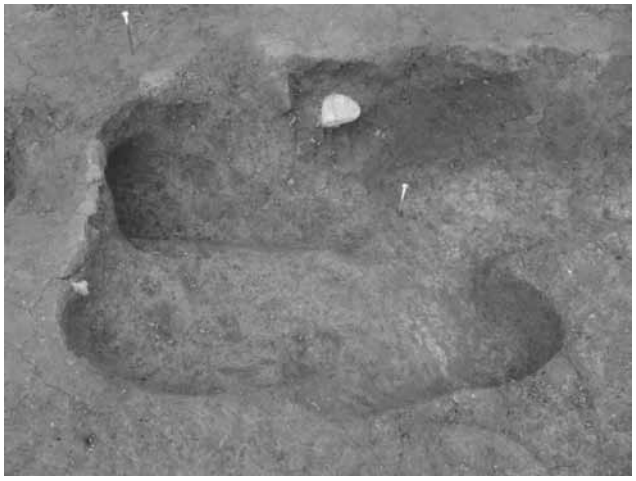
5号住居跡遺物出土状況上面（南から）

5号住居跡遺物出土状況下面



6号住居跡遺物出土状況（東から）

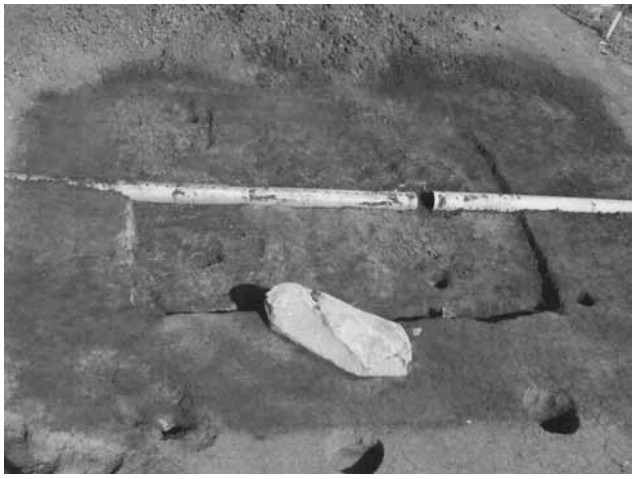
（以上D区）



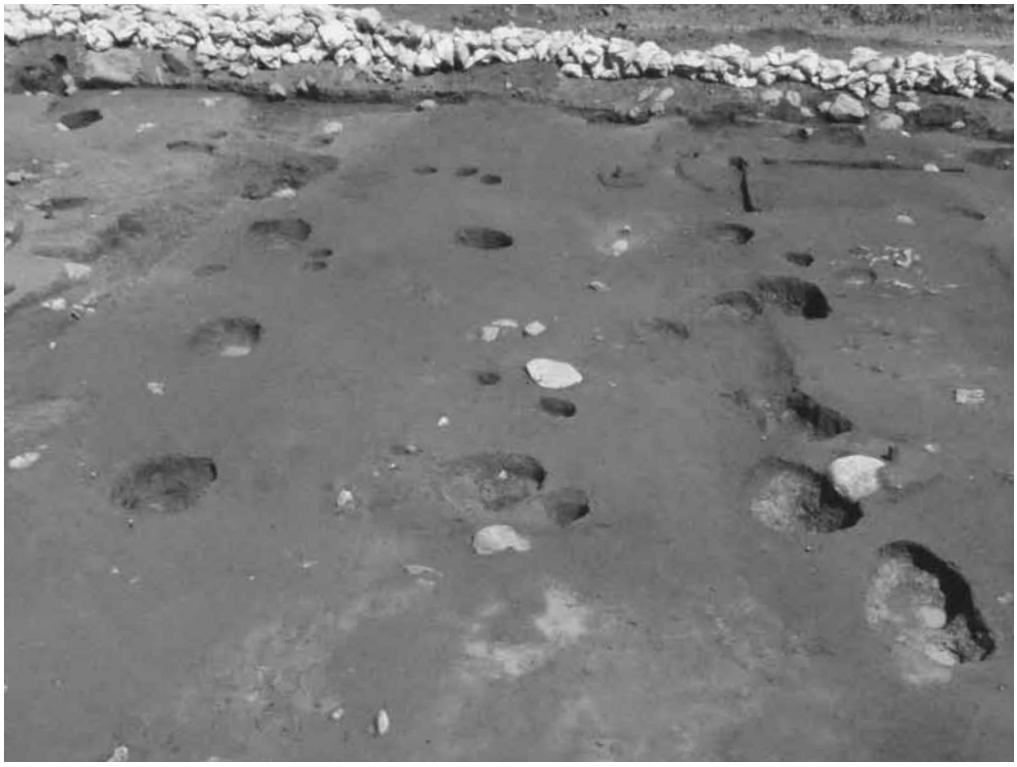
6号住居跡カマド

7号住居跡完掘（北から）

10 号住居跡カマド遺物出土状況（南から）



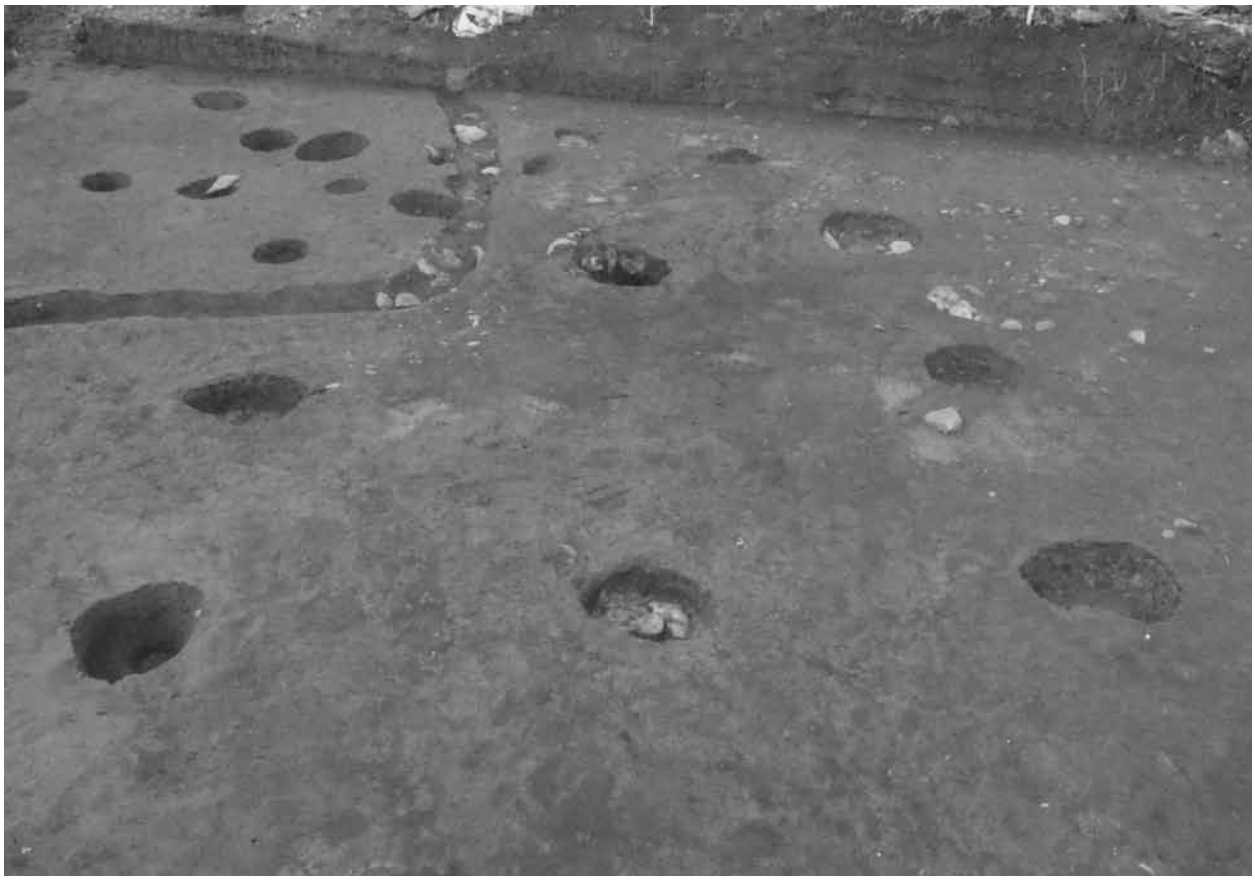
13 号住居跡完掘（西から）



1 号掘立柱建物跡（西から）

（以上D区）

3 号掘立柱建物跡（南から）



5号掘立柱建物跡（東から）

（以上D区）

6号掘立柱建物跡（東から）　（以上D区）

1住4

1住6

2住9

2住 11

5住1

5住5

5住8

5住 18

5住 19

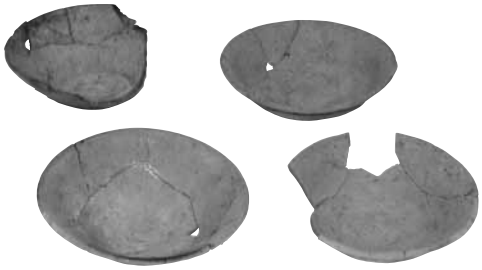
（以上D区）

5住 14

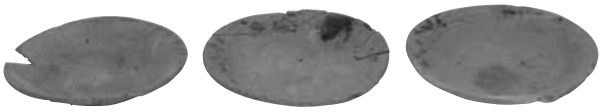
5住 26

5住 27

5住 29

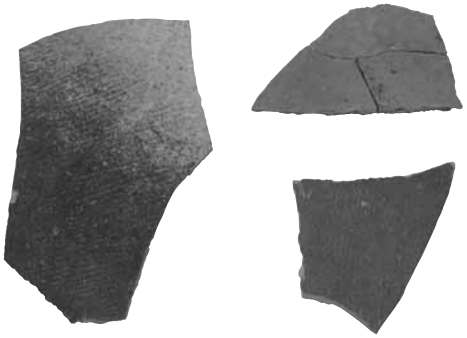


6住1・2・3・4



6住 14・9・11

6住 16



6住 22・23・24（表）

6住 22・23・24（裏）

（以上D区）

7住8

7住1・4・2

10住4

10住3

10住7

10住8

13住1

13住9

13住8

53土5（1号掘立柱建物跡）

53土6（1号掘立柱建物跡）

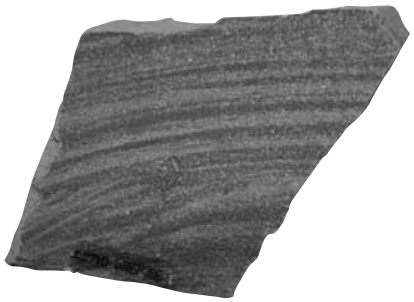
5溝12

6溝14（表）

6溝14（裏）

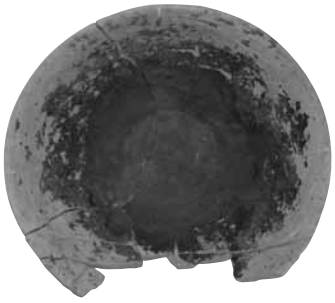
（以上D区）

D 54 図 15（6溝）（表）

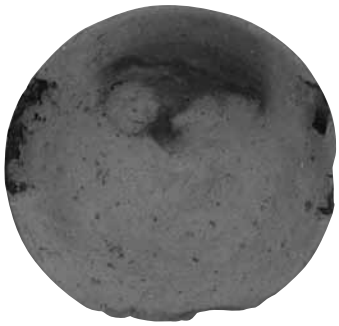


D 54 図 15（6溝）（裏）

D 54 図 22（16 溝）



D 57 図3（N 34）



D 57 図5（N 36）

D 57 図7・8（T 37）

D 58 図 27・28・29・30（縄文土器）

D59 図 32（4住）

D59 図 33（T35）

D 59 図 38（P 34）

D 59 図 39（L 39）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみこぶけいせき
書 名	上コブケ遺跡
副 書 名	西関東連絡道路第Ⅱ期建設工事に伴う発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第296集
編 著 者 名	保坂康夫・田口明子・柴田亮平・塩谷風季・笠原みゆき・須長愛子・青木真一・御山亮済
発 行 者	山梨県教育委員会
編 集 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
所 在 地・電 話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町９２３　　055-266-3016
発 行 日	2014年3月20日
印 刷 所	株式会社　峡南堂印刷所

ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積	調査原因
かみこぶけいせき 上コブケ遺跡	山梨県山梨市北・南地内	19205	山梨市４１	３５°４２′１２″	１３８°４１′０４″	２０１１年5月１８日 ～２０１２年8月8日	13,667㎡	西関東連絡道路第Ⅱ期建設工事
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	集落跡	縄文時代中期	竪穴住居跡４軒、配石１基、水晶石器製作址２基		縄文土器、水晶製石鏃、黒曜石製石器、石棒	配石に石棒、立石が伴い、住居跡に囲まれて所在、その北西側に水晶製石器製作址がある。		
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡21棟		甲斐型土器、鉄器、須恵器、灰釉陶器	掘立柱建物跡が竪穴住居跡とほぼ同数あり、他遺跡と比べ卓越して多い		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 296 集

上コブケ遺跡

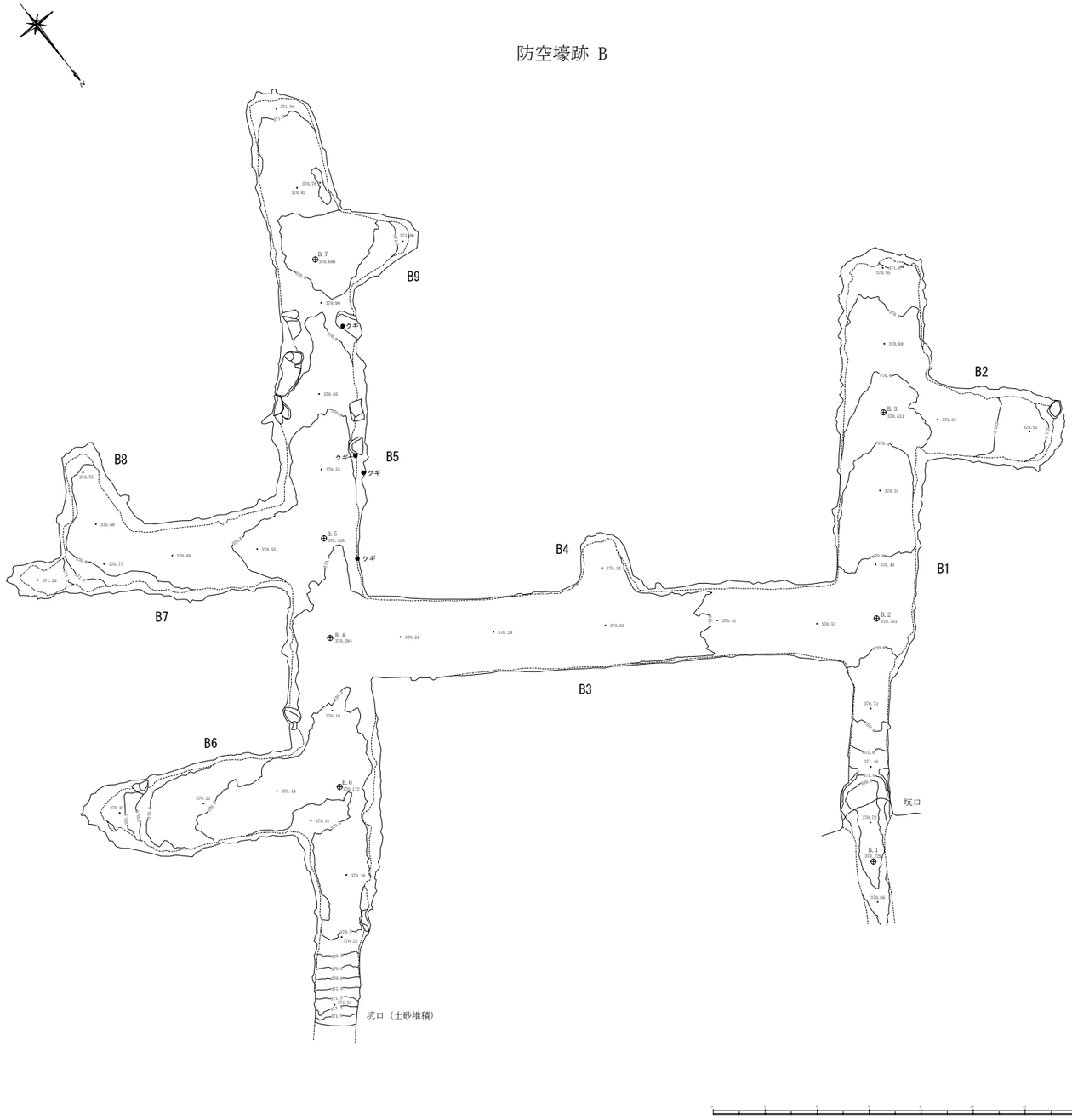
－西関東連絡道路第Ⅱ期建設工事に伴う発掘調査報告書－

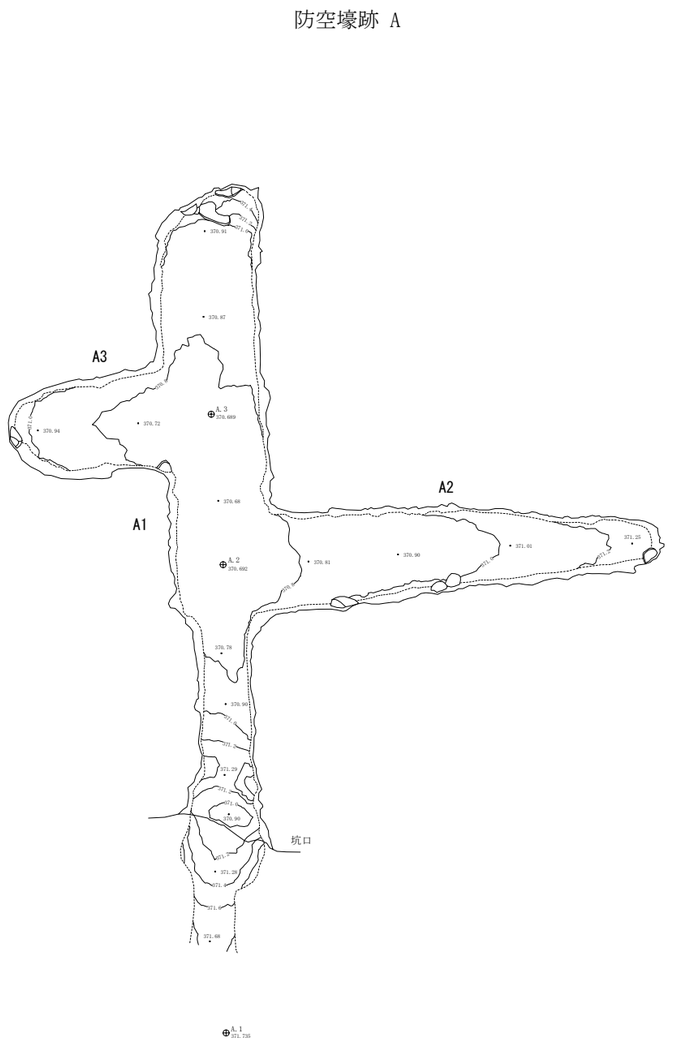
2014 年 3 月 20 日印刷・発行

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曽根町 923
TEL 055-266-3016
maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

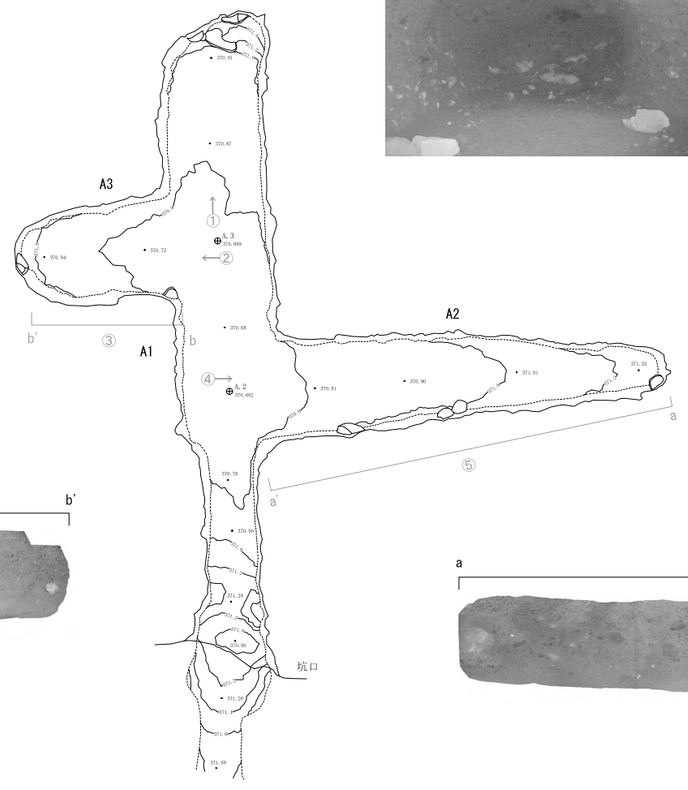
発　行　山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

印　刷　株式会社峡南堂印刷所





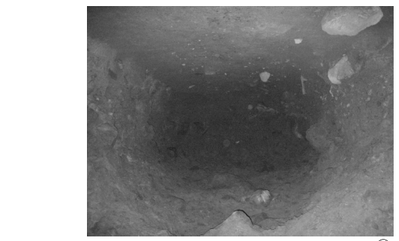
第２８８図　防空壕跡Ａ・Ｂ実測平面図（1／２００）



③ A3 北側壁面 S=1:100

⑤ A2 北側壁面 S=1:100

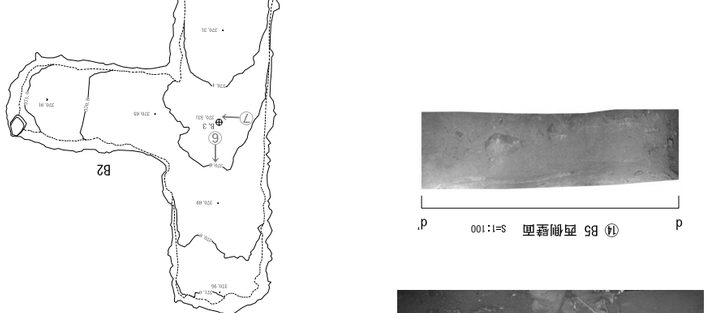
第２８９図　防空壕跡Ａ平面図および内部写真



⑥

⑧

⑦

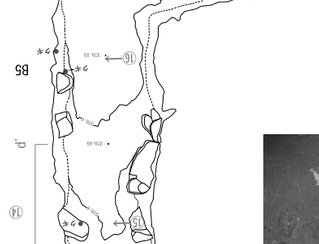


⑪

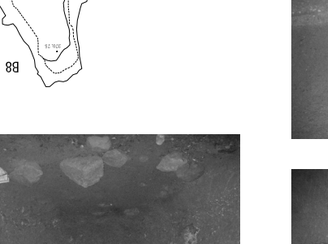
⑭ B5 西側壁面 S=1:100

⑨

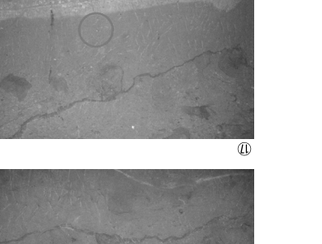
⑩ B3 南側壁面 S=1:100



⑳



㉑

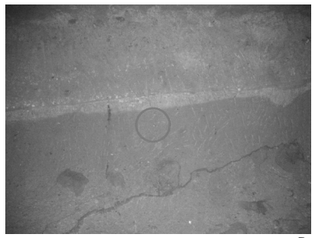


㉒

㉓ B6 北側壁面 S=1:100

⑱

⑲



⑰

⑯

⑮

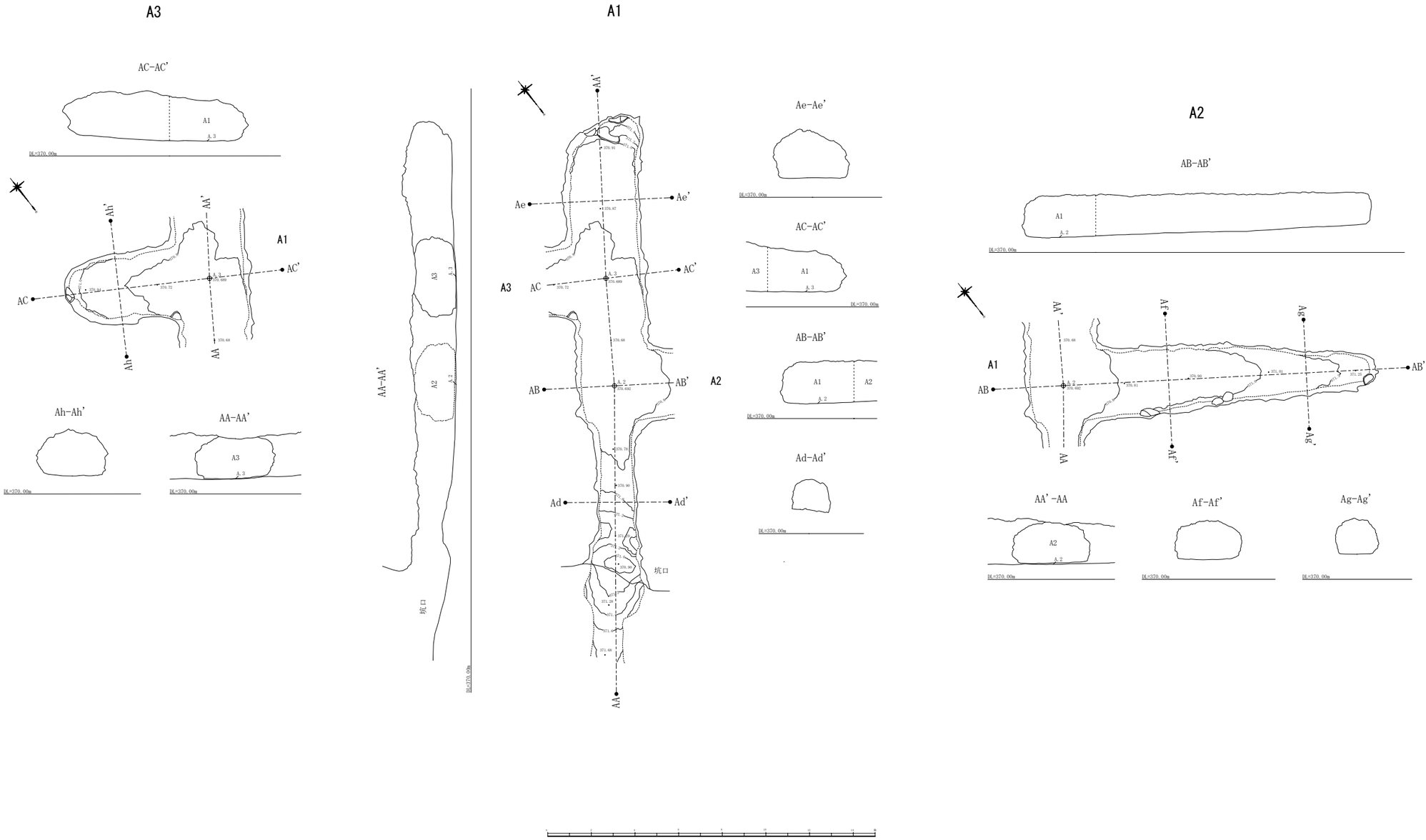
⑫

⑬

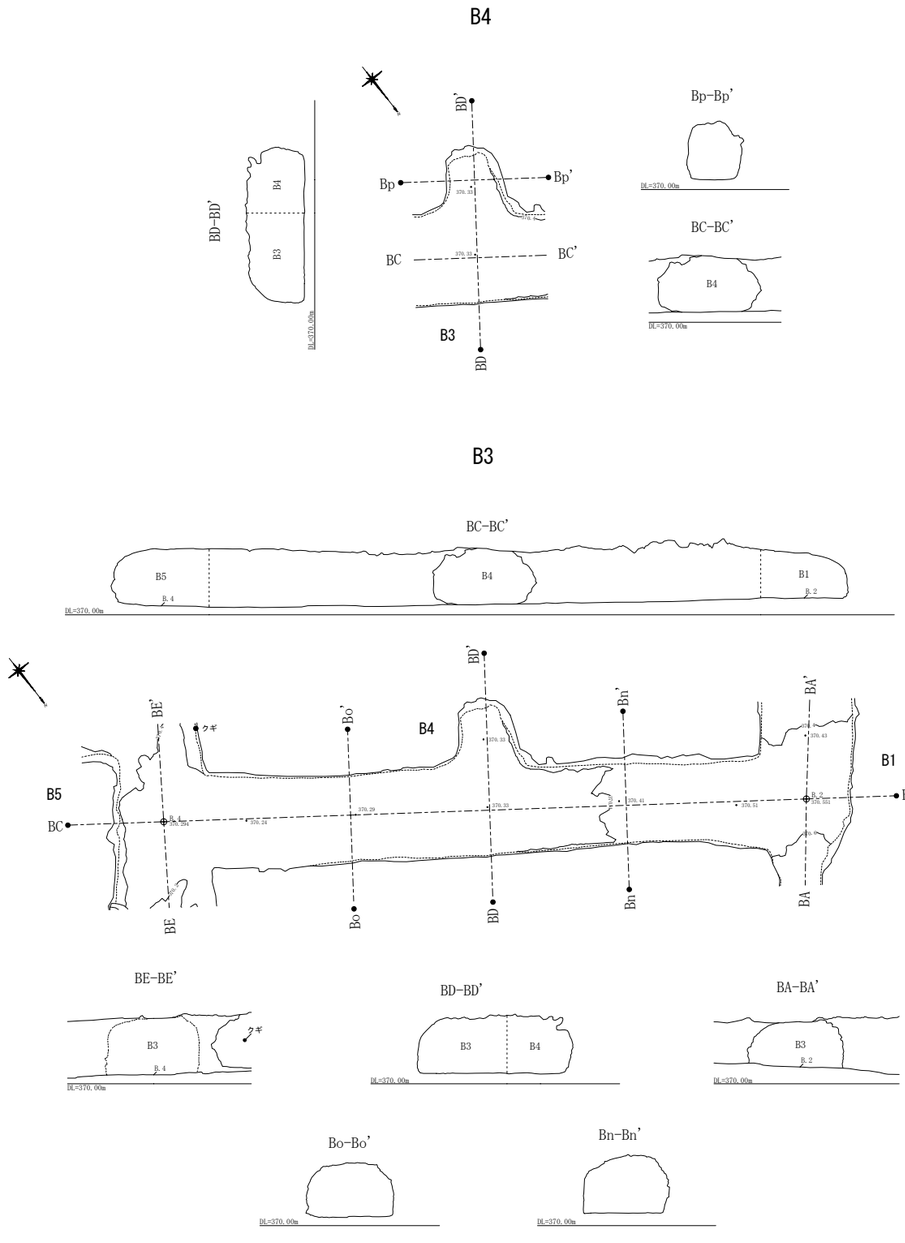
防空壕跡 B

第290図　防空壕跡B平面図および内部写真

付図3

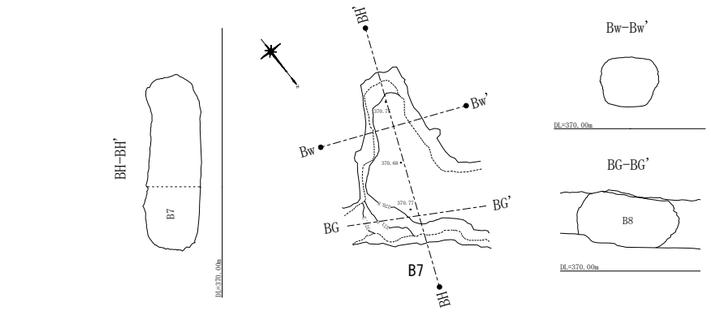


第291図　防空壕跡A断面図（1／200）

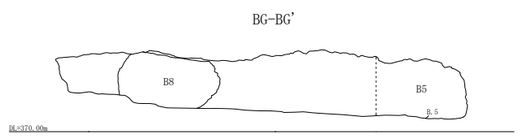


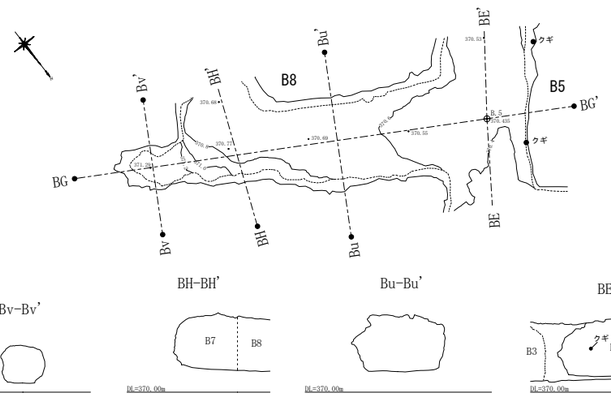
第２９２図　防空壕跡B断面図(1)(１／２００)

B8

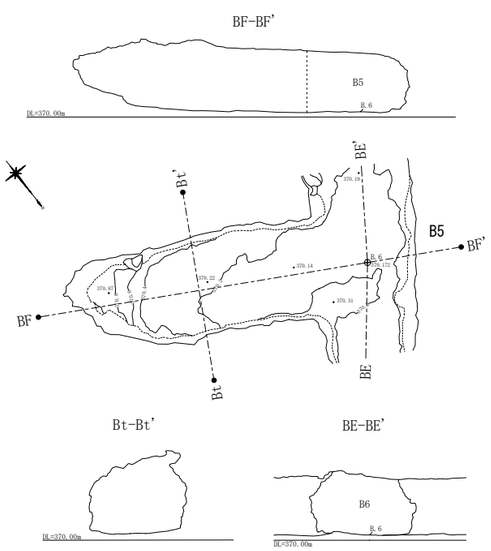


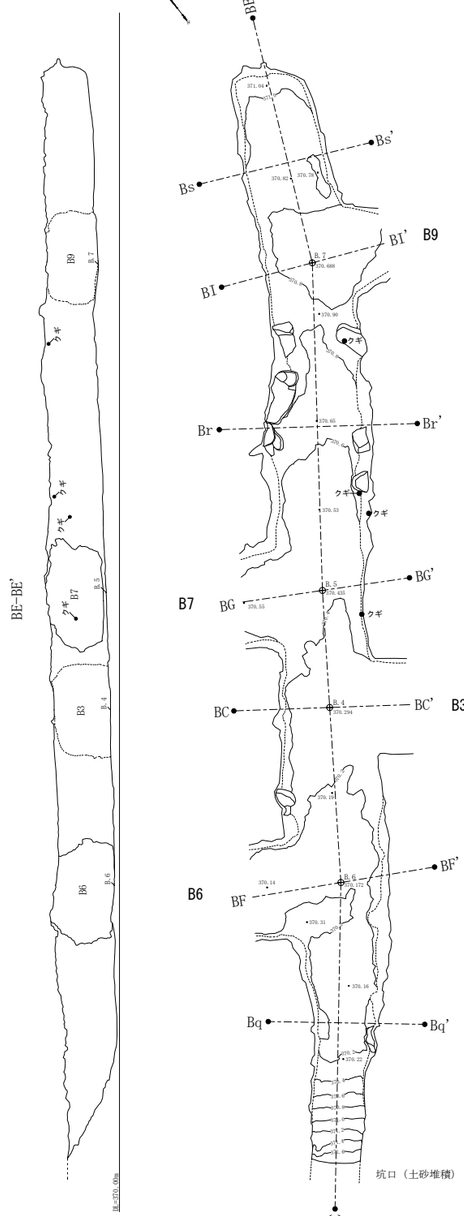
B7



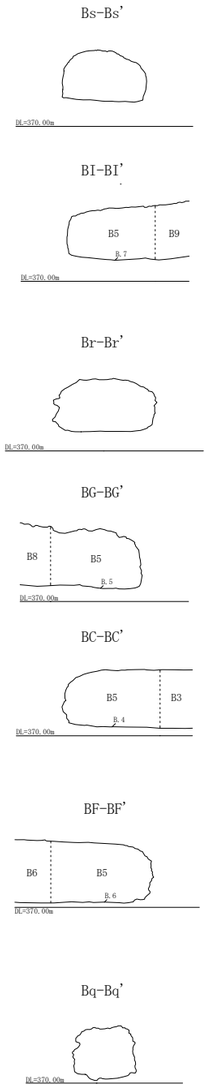


B6

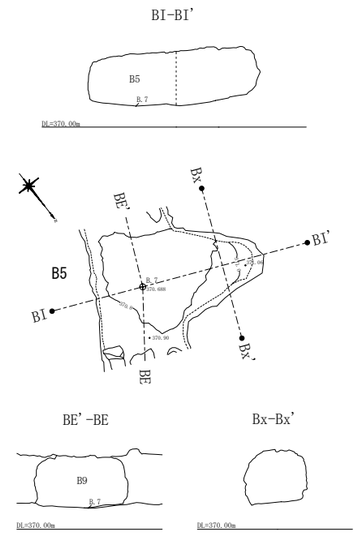




B5



B9



第２９３図　防空壕跡Ｂ断面図（2）（1／２００）